

マリポタシリーズ

椎名@大体pixivにいる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら目の前に子供の頃の自分のドツペルゲンガーがいたよ！しかもある筈のものがなくなってたよ！これには闇の帝王（笑）もビックリ!! そんな二次創作によくあるお話です。

うっかり続けばハリジニ、ドラアス前提ドラハリになるかもしれません。↓続いたのでなります。

主人公がハリーなので原作中の悪役に対しては相応の表現がされていますが、あくまでもこれは語り部がハリーだからです。書き手個人の感情による特定キャラへのアンチヘイトは一切ございません。みんな一生懸命生きてるだけなんだよ…

データ予備保存の為 `pixiv` にて連載しているものを此方へ転載しています。ですので、`pixiv` 側が完結出来次第、こちらはお気に入りユーザ限定公開となります。

5 / 16 なりました。

5 / 19 こちら、勘違いしておりました…お気に入りユーザー限定というのは、お気に入り登録してくださった方のみに見えるのではなく私がお気に入りユーザーとして登録してる人のみ、という意味なのです…

ご要望がございましたので、通常公開へ戻しました。ご丁寧に教えてくださりありがとうございます。

目次

賢者の石とマリア

2	賢者の石【番外編】	208
2	マリア・ポッターと賢者の石【完】	203
7 3		193
7 2		185
7 1		176
6 3		170
6 2		159
6 1		148
5 4		138
5 3		127
5 2		118
5 1		109
5 1		98
4 2		89
4 1		79
4 1		66
3 3		59
3 2		50
3 1		39
2 2		28
2 1		18
1 2		10
1 1		1

2 2	2 1	1 2	1 1	アズカバンの囚人とマリア	3	2	秘密の部屋【番外編】	2	マリア・ポッターと秘密の部屋【完】	5	4 3	4 2	4 1	3 3	3 2	3 1	2 3	2 2	2 1	1 3	1 2	1 1	秘密の部屋とマリア	3
383	376	365	357		352	347	343	334	324	313	307	302	293	282	272	265	256	249	242	235	229	220		213

1	ハリリー・ポッターと胡蝶の夢	776
	炎のゴブレット【番外編】	770
2	マリア・ポッターと炎のゴブレット【完】	763
7	1	743
7	1	737
6	1	733
6	1	723
6	1	716
6	1	708
5	1	695
5	1	684
5	1	675
4	1	666
4	1	659
4	1	650
3	1	644
3	1	634
3	1	627
2	1	620
2	1	613
2	1	606
1	1	597
1	1	589

5 | 5 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1
| | | | | | | | | | | | | | | |
2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1

不死鳥の騎士団とマリア

3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2
| | | | | | | | | |
5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 4 | 3 | 2 | 1

975 965 955 947 940 930 920 912 903 894 884 876 868 859 849 840 831 822 815 807 801 795 789 782

5 1	4 2	4 1	3 2	3 1	2 3	2 2	2 1	1 3	1 2	1 1	謎のプリンスとマリア	3	2	不死鳥の騎士団【番外編】	3	2	マリア・ポッターと不死鳥の騎士団【完】	7 4	7 3	7 2	7 1	6 2	6 1	5 3
1197	1189	1182	1169	1157	1145	1135	1128	1120	1116	1106		1102	1099	1092	1082	1069	1060	1055	1046	1033	1024	1010	999	989

7	6	6	6	5	5	5	4	4	3	3	3	2	2	1	1	1	死の秘宝とマリア	2	謎のプリンス【番外編】	3	2	マリア・ポッターと謎のプリンス【完】	5	5	
1	3	2	1	3	2	1	2	1	3	2	1	2	1	3	2	1						3		3	2
14121406139313821368135913491338132613191307129812891274126512541245																	1241123712311226121912131207								

3
|
3

3
|
2

3
|
1

2
|
3

2
|
2

2
|
1

1

マリア・ポッターと胡蝶の夢

3

2

マリア・ポッターと死の秘宝【完】

8
|
3

8
|
2

8
|
1

7
|
3

7
|
2

1549153415211511150214891484

14771472146314591452144514381427

賢者の石とマリア

1-1-1

目の前で小さなアルバスが泣いていた。

——いや、ちがう。

「マリア、マリア、だいじょうぶ?」

「……………えっと、イツ!」

「マ、マリア、いたい!?! いたいよね、どうしよう! マリア、しんじややだ」

「うるさいぞガキ共!!」

「ひっ」

扉の向こうから随分と品のない声が聞こえた。豚のような。いや、豚のほうがまだ十分に品があるだろう。

ああいやだ。あんなものを懐かしいと思うだなんて。すっかり埃を被っていた記憶だ。

それがどうして、今。

「マ、マリア…………」

まったく情けない顔をして震えている少年のガラクタのような眼鏡の向こう、涙でキラキラとした緑色の瞳の上には特徴的な傷があった。

——確定だ。目の前のこの子供は……………僕だ。

「やーい、マリアのやつが廊下でねてるぞう。パパア! パーパパ!!」

どすんどすんと踊るように階段に現れたミニチュアバージョンの

豚——おおっと、子豚にしか見えない子供は、ニタニタと今にも駆け出しそうに笑っている。頬と脛に潰されて目がシワの向こうに引込んでいる。ああ、君、この頃ってこんなにも脂肪があつたんだっけ。そんな予備動作を始めた豚に、小さな僕は再びヒイと悲鳴を上げると僕を引き起こした。

引き起こした……。どうやら僕は懐かしい廊下に倒れていたらしい。そして足元には段差の最後。状況から推測するに、頭から階段を転げ落ちたようだ。どうりで身体のあちらこちらが痛いわけだ。

酷く打ち付けたのか、小さな腕に引かれ一步を踏みしめるたびにぐわんぐわんと脳ミソが揺れる。けれども、これも条件反射のひとつか。足は思い出深い物置部屋へと迷いなく入っていった。

「マリア……」

どうにもマリアと呼ばれているのは僕らしいのだが、勿論僕がハリーの名を捨てマリア・ポッターであつたことなんて一度も無……無

真つ蒼のリリーが映っていた。

この物置部屋に鏡なんて洒落たものはないから、ちよつとした家具の反射から酷い顔色のままリリーがきよとんと僕を見返していた。

——いいや、いいやちがう。

リリーの顔をした僕が僕を見ていた。

「ええと、つまり、ええと」

「マリア？」

咄嗟に後ずされれば、ボロくさいベッドに膝裏を取られコロリと転がる。たったそれだけの振動で頭が酷く痛む。

——リリーじゃない。不安そうに僕の手を握るこの子は次男のア

ルバスではないし、映っていたあの子は僕の愛娘リリー・ルーナ・ポッターじゃない。

むしろ。むしろ——

「あの、……………ハリー？」

「なあに、マリア。あたまがいたいのか？」

ベッドに寄り添いそつと僕の額を撫でる僕に、嗚呼マーリンの髭と瞳を閉じた。

声だ。今さらだけれど、僕の声はどうしてしまったんだ。女の子の声が出た。

「ねえ、ハリー。……………君、いくつだっけ」

「どうしたの、マリア。ぼくたちいま五才じゃないか。やっぱり、あたまをうってしまったのがいけないの？　すごいおとがしたものだね」

自分に対する表現にはおかしな弁だが、とんでもなく無垢に僕が僕へと告げる。

「……………ハハッ、ウーン、寝よう」

「えっ、マリア!？」

そして僕は、すべてを放棄してヘドロのような頭痛の底に意識を手放した。

それから三日。僕ことマリア・ポッターは高熱を出して寝込んだ。その間に濁流の如く少女の記憶が押し寄せ、常に涙目の小さい僕——双子の弟（兄かもしれない）ハリーに辿々しく看病されながら現状を理解した。

どうやら僕は過去に、ハリーではなくハリー・ポッターの双子の姉（妹かもしれない）マリアという少女へ生まれ直してしまったらしいのだ。

いや、いや、過去に生まれ直すって、どういう……。だがしかし、長年綴られてきたハリー・ポッターの記憶に連続するような少女マリア・ポッターの記憶が、これは真実だと告げている。なにがどうして。よもや呪いの類いか。タイム・ターナーは子供たちが起こしたかの事件によって葬られた筈なのに。だとしても、別の人間として生まれ直すだなんて。それも過去だなんて。

「マリア、もうねつはない？」

「大丈夫だよ、ありがとう。……………ハリー」

子犬のようにくすくすんと鼻を鳴らす小さな僕——弟のハリーにそつと微笑みを返す。

僕つてば、子供の頃はこんな顔してたんだ……。この頃は、時たま放り込まれる風呂と窓掃除以外ろくに自分の顔なぞ見なかったため、新鮮な気持ちでハリーを眺めてしまう。

息子たちによく似ている。いや、息子たちが僕に似たのか。ポッター家の遺伝子、手強すぎる。

そうして、心配そうなハリーの頭を撫でつつ（僕が僕を撫でるだなんて！）僕は考えた。

闇の魔術による呪いか、魔法具か……。ともかく何か原因がある筈で、けれどもこの発育不良の小さな身体では調査のしようもない。

それも、少女だ！ 五歳の女の子に一体何ができようか。筈だつてないし、足で遠くにも行けやしない。

それに、それに——僕は十一歳の誕生日まで魔法の存在を知らなかった。この時代にはダンブルドアやスネイプ先生、シリウスやルーピン先生が生きているけれど——まだ、会えないのだ。

なにより——ヴォルデモート。奴が潜んでいる時代だ。

迂闊なことはできない。ハリー・ポッターとして生きていた記憶を持つ僕はともかく、目の前の小さな僕……小さなハリーは正しく無力な子供なのだから。

今はこの息苦しい家の血の守りに頼るしかない。

それから僕の行動は早かった。まず、ダーズリー家の僕らへの虐待改善をはかる為——通報した。

親類が、近隣が、学校が頼れないなら法を頼ればよいのだ。

結果、僕にそれだけの行動力と知識があることを理解したダーズリー夫妻は、やや虐待の手を緩めるようになった。少なくとも僕の前では。そして僕はハリーの側を決して離れようとはしなかったのだ、必然的にハリーへの当たりも防ぐ形となった。うん、計画通り。

また、ハリーの幼いがゆえの魔力暴走は僕がこっそりフォローして回ったので、ダーズリーたちの前で僕らは限りなく『まとも』だった。物置部屋で小さな魔法を使ってハリーを楽しませていたなんて、グズでカタブツなダーズリーたちは知らないのだ。

さらに、少女という性は便利なもので、ハリーがぶたれるよりも女の子のマリアがぶたれる方が人は注目するらしい。同情の目だって顕著だ。

その上、マリアの容姿はリリー——美しく聡明だった母、リリー・エヴァンズの生き写しだった為——そう、美しかったのだ。目はハリーと交換のように父似のハシバミ色だけれど、母譲りの容姿は幼くとも完璧だった。

腕や顔に痣を作った訳ありっぽい美少女——完全に事案である。

そんなわけで、母の容姿を譲り受けた僕はしたたかに虐待の暴力を避け、ハリーを守り続けた。食事だけはどうにもならなかった為ガリガリチビのままだが、僕が一人で耐えしのいでいた頃とは大違いだ。

そんな僕らもあと少しで十一歳となる。そろそろホグワーツ魔法学校から入学許可証が届く筈だ。僕もハリーも魔法使いであることは間違いないのだから。

幼い身体は、例えば姿現しだとか大きな魔力を要する魔法には耐えられないけれど、年相応の魔法ならば杖無しで問題なく操れる。ちよつとしたズルな気もするが経験値の差と呼んでもらいたい。

「二人とも、さあ起きて！早く！ぐずぐずするんじゃないよ、聞いてるのかい!?!」

「まったく……朝からほんとうるさいよね。ハリー、僕が新聞を取りに行くから、君は朝食を頼むね」

「うん！ 任せて、マリア」

ペチュニア伯母さんの金切り声に耳を塞ぎながら、ハリーへとニコリ笑う。ダドリーお下がりの服の袖を捲ったハリーがダイニングへと駆ける。反対に僕は玄関だ。こここのところ、新聞を取りに行くのはすっかり僕の役割になっていた。

だって、そろそろの筈なんだ。今度こそ伯父さんに取り上げられる前に入学許可証を手に入れておきたい。

「——ビンゴ！」

郵便受けから降り落ちた二通の封筒を服の中にしまつて、僕は一人笑った。

今日ほど一日を長く感じたことはない。おかげで、気もそぞろで何度かペチュニア伯母さんに八つ当たりされた。そりやあ僕だって悪いけれど、あれは伯母さんがただ怒鳴りたかっただけだ。

——けれど、つまらないため息もこれで終わりだ。

僕は畳んだ衣服の下に隠していたとおききハリーの前へと掲げた。

「ハリー、ハリー！ さあこれを見て！」

「え？ マリア、それって——僕ら宛だ！ プリベット通り四番地、階段下の物置内ハリー・ポッター様、マリア・ポッター様——ねえ、僕らの名前だよね!？」

「僕の名前がマリアで、君の名前がハリーならね」

くふくふと笑って、二人でベッドの毛布を頭からかぶる。今回は封を切る前にバーノン伯父さんに取り上げられてしまい、ずいぶん悔しい思いをした。リベンジ成功だ。

「えーと、なにになに……ホグワーツ魔法魔術学校——？」

封を開き中身を検めたハリーは、次にはがっくりと肩を落とした。

「ああ、マリア。これ、イタズラだよ。僕らに手紙を出す人なんていないもの。きつと、ダドリーの仲間のやつらの仕業だ。それも、魔法だなんて」

「なにを言ってるんだい、ハリー。僕たちは正真正銘、魔法使いだよ？」

「ええ!? ウソ! マリアはともかく、僕がなんだって?」

「ウソなもんか。昔に話しただろう? 僕らの父さんと母さんは交通事故で死んだんじゃないんだって。悪い魔法使いに殺されたんだ」

「僕……そいつはてつきり、マリアの作り話だと思ってた。ほんとうなの?」

「本当だよ。まさか作り話だと思ってたの? 弟のくせに姉の言葉を信じないなんて生意気だ」

「僕が兄だよ! アハハハッ」

まんまるに目を開くハリーをお仕置きとばかりにくすぐる。すると、子供のキラキラとした笑い声に同調するように室内のペンや紙がひとりでに浮いた。

「あ——」

「ほら、ごらん。今、ハリーが魔法を使ったんだ」

「……今のが魔法なの?」

「そうだよ。むしろ、今まで何だと思ってたの? 僕とああしてたくさん遊んできたじゃない」

「そういうものだと思ってた……」

どうやら虐待に暴力がなくなった分、軟禁生活だった副作用がこんなところに現れていたようだ。すっかり世間知らずに育ってしまった。ごめん、僕^{ハリー}。

「じゃあ、僕とマリアは魔法使いなんだ……」

「そう。ハリーと僕は、あ、いや、僕は魔女なんだけど。うん、魔法使いなんだ。そしてこれから魔法使いの学校に通えるんだよ。ストーンウォールなんてクソくらえだろう?」

「ほんとうに！ 素敵だね、マリア。マリアと一緒にならなんにもこわくないや!」

興奮に頬を赤くするハリーは我ながら純粹で愛らしい。クシヤクシヤの髪だつて、僕が毎日ブラッシングしているおかげで柔らかくてふわふわだ。(伯母さんがゴミ箱に捨てていた剥げたブラシだけでなく、まだまだ使えるのだ。)

父譲りとはいえ長年コンプレックスだったそれは、目の前の彼にはチャームポイントにすら思える。

性格だつて、子供の僕は癩癩持ちでほんのすこしひねくれていたけれど、目の前の彼にその様子はちっともない。少しずつ、僕とずれている。兄弟がいるって、こんなにもちがう。

「ねえ、ハリー。大好きだよ。僕のたった一人の弟。大切な家族」

「なあに、マリアだったら。そんなの僕も同じに決まってるじゃないか。大切に大好きなたった一人のマリア。僕の家族のマリア。マリアがいなかったら僕、きつと『まとも』になんて生きていられなかったよ。ああ、それから、僕がお兄さんなんだからね」

思わず抱き締めてみれば、僕より小さなハリーに頭を撫でられる。はからずも『まとも』になんて生きていられなかった僕^{ハリー}は、いつそう

彼にすがった。

家族のあたたかさは知っている。ジニーがそれを教えてくれた。親の強さと脆さを知っている。三人の子供たちがそれを教えてくれた。

けれど、兄弟の心強さを教えてくれたのは——このハリーだけだ。優しい弟が幸せである未来をえがいて、僕は、あたたかいもの、やわらかいもの、穏やかなもので押し込めていた久しい熱に再び火を灯した。

——絶対に、ヴォルデモートだけは倒さなくては。

ハリーやみんなが寝付いてから、玄関で行儀よく待機していた特別な鼻に入学の意思はあるが準備が叶いそうにない旨の返信を預けた。結果、前回のような追いかける手紙の狂気は回避され、迎えのハグリッドが小島までオートバイを飛ばすこともなかった。ダドリーは相変わらず豚の尾を生やされてしまったけれど。

最終決戦後にしてようやくそれなりに友好的関係をたもてるようになった僕と従兄弟だけれど、やっぱりこの頃のダドリーはいけすかない。日頃の恨みもあって、何度だって彼の情けない悲鳴に笑ってしまう。これには、僕より穏やかに育ったハリーも忍び笑いを堪えられずにいるようだった。ウーン、やっぱりこの子も根元は『僕』だ。

ハグリッドに連れられ、入学準備を整えるためマリアとしては初めてのダイアゴン横丁へと赴く。なつかしいような。新鮮なような。

手を繋いでいるハリーはやっぱり生き残った男の子として有名で、初めての世界に目を輝かせつつも行く先々での好奇の視線や扱いにうんざりしていた。

なお、共にいる僕のごとは知られていなかった。有名なのは『生き残った男の子』。生き残った女の子の話はどこにもなかった。僕の額に傷はない。

ハグリッドいわく、僕らは運命の夜も双子らしく大きなベビーベッドに並べて寝かされていたそうで、僕だけ呪いを受けることなく何故生き延びられたのか、誰も知らないらしい。……ダンブルドアならこっそり知っていそうな気もするけれど。

ハグリッドが沁々と、ジエームズに、リリーによく似ていると懐かしむ声を聞きながら(ちなみに中身は逆だと笑われた。つまり僕つてば、あの父さん似の性格と言われたのかしら。なんだか納得いかない！)グリーンゴッツの辺りへかかったその時、やはり『奴』は『僕』へと声をかけた。

「ポ、ポ、ポッター君！」

「はい」

ターバンから異臭のかおる『奴』に近付けまいとハリーの手を強く握り締める。ハリーがきよとりと大きな瞳を僕へ向けてくる。

それでいい。あんなの、見なくていいんだ。

「お、お会いできて、ど、どんなに、う、うれしいか」

「ハリー、マリア。クイレル先生だ。ホグワーツで闇の魔術に対する防衛術を教えてくださいさる」

ハグリッドからの紹介を受け、ハリーに握手を求めるクイレルへ先手とばかりにその手を掴む。

「こんにちは、ミスタークイレル。私はマリア・ポッター。ハリーの双子の姉です」

「妹だよ！」

「ハ、ハ、ハ、ハリー・ポッターに、ふ、双子が、い、い、いたのですか」

「ええ。弟共々……よろしくお願ひします」

「兄だつてば」

可愛らしい横やりに和みながらも、一方通行の牽制を見せる。

「……あー。あーんと、だ。マリア。クイレル先生がちいと、その、あれだ。匂うのにはちゃんと理由があるんだ。な？ マリアならわかるだろう？ ええ？」

僕の態度から見当外れを気にして、丸聞こえの小声で囁くポーズをするハグリッドに、クイレルは蒼い顔をさらに蒼くして震えた。

「ああ、いけません。ほ、本を……吸血鬼避けの、あ、あたらしい本を……か、か、買いに、行かねば」

慌ただしく去っていくクイレルのニンニク臭いターバンをきつくきつく睨む。だって、そこには——そんな僕の意識を引き戻したのは、ハリーの体温と僕を引く腕だった。

「マリア」

きつと、この子にはわけがわからなかっただろう。初対面でなんだったってこの片割れは男に刺々しい反応をしたのか。ハグリッドは臭いに不快感を表したのだと思い込んだが（それも事実ではあるのだが。）ハリーには通用しない。

ハリーの緑の瞳は、いつだってマリアのハシバミ色を見抜くのだ。

「行こう、マリア」

ハリーの目は優しかった。

——ああ、母さんの目だ。そして僕の愛する兄弟の目だ。

どうしたと少し先で立ち止まって僕らを呼ぶハグリッドへと、二人同時に駆ける。

僕より身長の低いハリーが、なんだかちよっぴり大きく見えた。

グリーンゴッツにて両親からの思わぬ遺産に驚く一幕を終え、元気薬を引っかけたがるハグリッドと別れた僕たちはマダム・マルキンの洋装店の前にいた。

学生時代の制服から闇祓い制服まで、幾度と世話になっていた場所だ。この世界では僕しか知らないけれど、とても馴染みが深い。

だというのに入店に尻込みをしているのは——僕のほうだっ

た。

「ほら、マリア。入ろうよ」

「うう……」

ずうっと繋いだままの男の子の手を引いて、心の準備ができるまで待ってくれと首を振る。

だって。だって。この先に待ち受けているのは。

—— スカートだ!!

僕が！ スカートを！

このハリー・ポッターが！ スカートだなんて！

ダーズリー家にて僕らへ与えられる衣服は一人息子のダドリー坊やのお下がりばかりだったので、必然的に僕^{マリア}だってズボンになる。

そう、僕はマリアとして生まれてから初めてスカートを穿こうとしているのだ！

「……ズボンじゃだめなのかな」

「心配しなくてもマリアなら似合うに決まってるよ」

「そうじゃないんだよ、ハリー。でもありがとう」

そりや似合うだろうさ。目以外は母さんソツクリの顔だもの！

はあああと一際大きく長いため息をつくと、意を決してドアの取っ手を掴んだ。

どうあっても避けられないんだ。男らしく覚悟を決めろ！

ガチャン。

「「うわっ!?!」」

視界を儂げな白金とブルーグレーがかすめた。

声は三つ。僕と。ハリーと。そして。

「ド……………マルフォイ」

「……………ハリー・ポッター？」

あまりに懐かしい姿の彼が怪訝に僕を見て、それから隣のハリーへと視線を移す。

そうだ。そうだった。ドラコとの初対面って、ここ、マダム・マルキンの洋装店だったんだ！ どんな会話をしたのかまでは覚えてないけれど、すごく鬱陶しかったような……見た目が綺麗なダドリーみたいな奴だなんて……ああいや、それは列車の中にいる時だけ？ それともホグワーツの廊下で遭遇した時？ 魔法薬学の授業——は、毎回嫌だったな。うん。

なにぶん僕にとっては何十年も前の出来事なので、とても記憶から掘り起こせそうにない。

「……………失礼、リトルレディ。意図せず君の道をふさいでしまったようだ」

子供であろうと嫌味な奴であろうと、彼も立派な英国紳士。数歩下がってうやうやしく女性に道を譲るその姿は、キザだと笑うには完璧すぎた。

なんだ、ドラコのやつ。女の子相手ならこんなにも優しいのか。その礼だけ見れば、嫌がらせを生き甲斐にこの先の青春を使い潰す子供にはとても見えない。

とはいっても、互いの子供同士が親友という関係から自分自身が友人になるまで、時間に時間をかけた僕らだ。（ジニーは初恋同士だったそこまでもどかしくないわよと苦笑していた。ハーマイオニーとロンは呆れ返っていた。）

僕が彼の含みなく笑う顔や穏やかな顔を見られるようになったのは随分後になってからで、つまりは子供の頃の彼——延いてはその姿

だけで当時の嫌な感情がありありとよみがえってくるのだった。

「こちらこそ不躰に眺めてごめんなさい。扉、抑えてくれてありがとう。ハリー、行くわよ」

コクツと頷いたハリーが彼の側を通りすぎようとした、その時。

「スコープウス」

「――」

「……という星が、僕は好きなのだけど、知ってるかい？ 夏の星座なんだ」

ドラコは、一見は涼やかに見えるグレーとブルーの狭間の瞳に熱いものを見せて、ハリーを見ていた。一心に。どこかすぎるように。それは、いつかで見た彼が祈る瞳だった。

「……えっと、ごめん、僕、星はくわしくなくて。けれど、君がそんなふうに言うのなら、きっと素敵な星なんだろうね。機会があつたら調べてみるよ」

ハリーの回答ときこちない微笑みに、ドラコはそつと眉を下げると、いや。と首を振った。

「いいんだ。たとえばシリウスだとか、有名で、だれもが知っている名ではないから。急におかしな質問をしてすまなかった。僕はドラコ・マルフォイ。君も今年ホグワーツだろう？ よかったら、友達にならないか？ その……寮が、離れたとしても」

「もちろん！ 寮ってなんのこと？ あっ、僕はハリー……って、もう知ってるんだよね？ さつき、僕の名前を呼んでくれたもの」

「ああ、その……君は有名だから」

「知ってる。ここまで、ずうつと変な気分なんだ。僕、ダーズリー……今住んでる家や周りからは知らないもの扱いされてるのに。知らないところで英雄なんて呼ばれてるんだ。笑っちゃうでしょ？」

「そんなことは……いや、そう、だな。身に覚えのないことで周囲からもてはやされるのは、さぞ気味が悪かったことだろう」

「そう！ そうなんだ！ 君ってばすごい人だね！ こんなに僕の気持ちをわかってくれたひと、マリア以外にいないよ」

「——マリア？」

そこで漸く、彼の目は僕を映した。

彼等がほのぼのと会話するあいだ、僕は胸がいつぱいでとてもじゃないけれど声なんてかけられなかった。

だって。ドラコ。君は。

「そう。マリア・ポッター、僕の双子の妹なんだ」

「姉だよ」

ハリーに咄嗟にお約束の言葉を返して、ドラコを見つめたまま吐き出すようにして笑った。

「よろしく、ドラコ。ねえ、この後の予定は？ よかったら僕らと話さない？ ハリーに、寮のこととかホグワーツの話をしてやってほしいんだ」

突然、口調が軽やかでがさつなものに変わった少女に、ドラコの瞳が大きく開かれていく。

なんて幼くてかわいい顔だろう。うっかりキスでもしてしまいうだ。

絶妙なタイミングでハリーがマダム・マルキンへと捕まる。

ほらね。父親そっくりのイタズラ気な顔をして、少女は美しい少年

の手を取る。

「ハリーが戻ってくるまで、僕と話そう」

待合用の椅子へと隣同士に腰かけて。

「――夏の、蠍座の話なんか、どうかな」

僕らは出会い直した。

——君、なにがどうなってるんだ。

いつだって余裕ぶろうとする彼の飾りっ気なしの一言に、思わず吹き出した。

「さあ？ どうなってるんだと思う？」

「茶化するよ、ハリー。……ハリー、なんだな？ ほんとうに？」

そつと声を潜めて伺うドラコの様子は、幼い顔にまだまだ色素の薄いブロンドが触れているのもあって、ずいぶん夢げに見えて僕もほんの少しと声を落とす。

「元、が付くけどね。そんな君は、僕が知るドラコ・マルフォイで間違いない？」

「君の知るドラコ・マルフォイが、元々は天敵で子供の親友の親という微妙な距離から交流を始めた堅物だつていうならそうだろうな」

「その回りくどくて嫌味っぽい言い方で確信した。君は僕のドラコだ」

「おや、賛辞をありがとう。僕の元ハリー？」

小声ながらも挑戦的な顔を突き合わせる。パズルが完璧にハマったみたいにしつくりと来る。やっぱり、この顔にはこの表情でなくっちゃ。

弱ってるドラコなんて、気持ち悪くて心が痒くなるじゃないか。

「ああいや、ハリー。じゃれるのは後にしよう。今のうちに情報を擦り合わせないと。君は本当はハリー・ポッターで、あちらも間違いないハリーなんだな？ なんだってハリー・ポッターが二人も……」

「ちがうよ、ドラコ」

真面目な顔で考え込もうとしていた彼の頬を持ち上げ、目を合わせる。

——ほら。君の目に映る僕の瞳はハシバミ色だ。

「ハリー・ポッターはただひとりだけだ。僕はマリア・ポッターだよ」

開かれたブルーグレーが一瞬、大きく揺れた。

「そう——そう、だな。すまない……………マリア」

「いいよ。僕自身、僕の知る人からハリーじゃなくマリアって呼ばれるのにまだ慣れてないから。その弟が毎日呼んでくれるおかげで、自分の名前って認識はできるようになったけどね。君は女の子でも別人でも無かったようでありだ。それとも実は双子がいたりする?」

「少なくとも僕は知らないな。マルフォイの跡継ぎにドラコ以外の名前があるなんて」

「あつたら寂しくて泣いちゃう? 一人息子のかわいいドラコ坊っちゃん」

「いいね。良心の呵責に涙しながら母上へ父上を差し出して、当分僕や母上に頭の上がらない状態へと持ち込むだろうさ」

「スリザリンめ」

「逆境は利用してこそだろう? 頭の使い方がちがうのさ。勇猛果敢なグリフィンドール」

真面目な話のつもりだったのに、結局、軽口の応酬を楽しんでしまつて、悟られないよう安堵の息をついた。

——先ほど揺れたブルーグレーの意味は彼にしかわからないけれど、僕にはそれがひどく傷付いたもののように見えたのだ。

「……君こそ、寂しくはないかい？」

「どうして？」

「その……見た目も、性別も、名前すら変わってしまったって、だからつまりは、今の君は——英雄ではなくて」

「前回とちがって、確かに家族と呼べる存在が手の届くところにおいて、おやすみにはおやすみが返ってきて、片手にはいつだって体温があつて、会えなくても大好きな人たちが生きている事実には嘘はなくて、自分を騙す必要はなくて——さびしいに、決まってる」

「……マリア」

「君のせいだよ。君が、僕をハリーなんて呼ぶから」

肩に腕が回って、彼の首元へと頭を埋められた。洗われたシャツの爽やかなにおいと——彼自身のおいがする。

「僕は、今この瞬間から寂しくなくなった。君がいたからだ。やっと君を見つげられた。だから——みんなのマリア。そして僕だけのハリー。その寂しさは、僕にぶつければいい。たぶん、僕は、そのためにここにいる」

「……バカだよ、ドラコって。前から思ってたけど。実は面倒事に自分から飛び込んでいくところない？」

「まさか。むしろあの人生を教訓に、今の僕はこの上なく器用に生きているよ。君に巻き込まれるなんて、今さらに面倒の内に入らないだけだ。僕からすれば君のほうがよっぽど愚かで間抜けだ。——逃げらってことを、考えることすらできないんだから」

おそろおそると僕の赤毛に触れていたドラコを、一際ぎゆうっと抱き締めてから体を離れた。ドラコは、呆れつつもなつかしいものを見るような目で僕を見ていた。

「ハリーの側にいるつもりなんだろう？ その意味を誰よりも君が

知っているだろうに。……今の君なら、『生き残った男の子』じゃない君なら、普通に生きる道だってあるのに」

「もう性分だよ。元英雄サマとしての」

「なら、君が手一杯になるだろうことを見越して、この世界のこと僕が調べよう。——だって、僕ら、死んだかどうかすらわからないんだから。そうだろう？ 君のハリーとしての最後の記憶がどこか、わかるかい？」

「……………そういえば」

五歳で『僕』を自覚してそれから、一度も気付かなかった。悔しいけれど、彼の言うとおりでそこまで突き詰めて考える余裕がなかったのだ。

「きつと本来ならグレンジャーの仕事なんだろうけどね。彼女にハリーと赤毛くんと、その上マリアの面倒まで見させるのは忍びない」
「だから君が僕を見ていてくれるって？ やっぱりバカだ」

小さな顔を合わせてクスクスと笑い合う。キザったらしくてほんと、嫌なやつ。それが当たり前前に似合っちゃうんだから。

「ま、当分はおとなしくしていることをオススメするね。レディ？」
「お言葉ですけど、ミスター？ わたし、自分から面倒に巻き込まれているわけではありませんのよ」

「君こそよく言うよ。今だって、どうやって制服を男性のものにできるか考えているだろう？ そういう小さなことから大騒動へ発展するのが、君たちポッター家なんだ。大体、そう、その姿、なんなんだい？ 君と彼は双子だっていうのに、ずいぶん……その、似合わないわけではないけれど。話し方まで変えちゃって」

「母の姿だよ。リリー・エヴァンズ。ちなみに目は父さん。美人でしよう？ 言葉に関しては伯母さんにしこたま躰られてね。女の子って大変だ。今ならロンよりハーマイオニーの味方ができそうだ」

「へえ。そう。ポッター夫人の……。……………それは……。大丈夫なのかい……。？」

誰に。何が。

みなまで言わずともわかる。きっと僕ら二人の頭の中には大きな蝙蝠のような、世界一勇敢な男の姿が浮かんでいることだろう。

「さあ。なるようにしかならないさ。案外、魔法薬の評価基準が甘くなったりして」

「ないな」

「ないね」

言っておきながら、二人同時に一も二もなく首を振った。

「さあ終わりましたよ。次はお嬢ちゃんね。ボーイフレンドとお楽しみのところ、ごめんなさいね」

「あらあらドラコ。私たち、恋人に見えるらしいわ？」

「ゾツとしないね」

ハリーの採寸を終えたマダム・マルキンから声がかかって、ドラコを置いて立ち上がる。僕の元へ駆け寄ってきたハリーをお疲れ様と抱き締めてからドラコへ譲り渡してみれば、ハリーは僕の服を握りしめたまま困ったような顔をしていた。

「ハリー？」

「僕、その、マリアはたしかに美人でかわいいし、しっかりしてるし、うん。魅力的だと思う。でも、でも、僕の妹だから！僕は、マリアの兄として、僕たちにはそういうの、……。まだ！早いと思うんだ！」

言い切ってやったぞ。そう興奮から顔を真っ赤にしているハリーに、僕とドラコは同時に呻いた。

「ほら見たドラコ!? これが僕の努力の結晶だよ! 自分とは思えないくらい天使でしょう!」

「君から生意気要素を抜くとああなるのか……。大丈夫か、したたかさまで抜けてしまったんじゃないか? 悪い大人についていってしまったりしないか、これ」

「その時は僕もついていくから」

「今からスネイプ先生の心労が思いやられる……」

ここまで、ハリーの耳をふさいだ上での小声である。僕の腕の中できよとんとしているハリーだが、嫌がらない辺りが僕への信頼を示していてさらに堪らなくなる。

もう一度ぎゆうつとハリーを抱き締めてから、ドラコの隣へと小さな彼を座らせる。

「大丈夫だよ、ハリー。君の姉さんは君一筋なんだから。ドラコから学校の話をよく聞いておいでね。ドラコ、わかってるよね」

「わかっているから凄むな。さっさと済ませてこい。マダムをいつまでもお待たせするんじゃない」

「……二人って、初対面だよね?」

「モチロン」

マリアとドラコはね。

きつと寮の話だとかクイディッチの話だとか、前回の僕の無知っぷりを思い出して説明してくれるだろう。ドラコはなんだかんだ律儀なのだ。

意地悪だけ頼りになる親友にハリーを任せて、決戦にでも挑む気持ちで採寸用の踏台へと上がる。

「あの、マダム」

「はい、なにかしら」

口も手も杖も動かしながら採寸していくマダム・マルキンへと、僕はそれを告げた。

「それじゃあ、あなたたち二人は少ししてから制服を取りにいらしてくださいな。きつと他のお買い物をしてる間に済みますよ」

「はい。ありがとうございます、マダム・マルキン」

結局、とある事情から長く調整のかかった僕を待ち続けてくれたドラコと共に店を後にすれば、大きくて黒くてもじやもじやな影がこれまた大きな仕草で手を振っていた。片手にはベリーとチョコの二段アイスが一つずつあった。ちよつと溶けかけだ。

「ハグリッド！」

すっかりハグリッドを気に入ったハリーが途端に笑顔をあふれさせる。

「ねえ見て、マリア！ ハグリッドがアイスを持ってる！」

「だから外で待ってたんだな」

冷静に呟くドラコと今にも走り出しそうなハリー。だが、僕と手を繋いでいるために足踏みしかできずじれったそうだ。ウズウズとした潤む瞳の強さに、わかつてると頷いてから隣のドラコを見上げた。

「それじゃあ、僕はここで」

「えっ、ドラコは一緒じゃないの……？」

「僕も父上と母上が待っているのね。……それに、僕がいたら、きつと彼は気分を害してしまう」

彼、と指されたのは、ドラコを見て不思議そうにしているハグリッドだ。ハグリッドと知り合いだったの？ そう顔に書いて小首を傾げているハリーに苦笑する。

確かにハグリッドは嫌いだ。ドラコが、というよりマルフォイが、ね。

「また、ホグワーツで」

ドラコがそつとマリアへ顔を寄せるのをハリーは目をまんまるにして見ていた。次に同じようにハリーにも頬をほんの少し擦り合わせて、美しく微笑んで彼は去る。マリアはため息と共に、ハリーはその後ろ姿をポカンと見つめていた。

どこまでも美しい所作に惚けていたのでない。——チークキスを受けたのなんて、はじめてだったのだ。ちなみに『マリア』もはじめてだ。

「マリア……ふつう、初対面の人間にチークキスってするもの？」

「ウーン、しないだろうね。……癖が出ちゃったかな」

「くせ？」

「ううん、こっちの話」

肩をすくめてから、ハリーのふわふわの髪をくしゃくしゃと撫でて今度こそハグリッドの元へと歩き出す。

ちなみにこの時、ハリーに、ドラコってばあんなにクールなのに案外スキンシップが激しいんだ、なんて愉快な誤解が生まれていたのだが、それが発覚するのはもう少し後の話である。

「おう、マリア、ハリー。ずいぶん時間がかかったな。俺あ、その間にフローリアン・フォーテスキューのアイスを五つも食らっちゃった。んで、さっきの子は知り合いか？ ん？」

「時間がかかったのはマリアだよ。ドラコとはお店の中で知り合ったんだ。すごく物知りで、ホグワーツのことを色々教えてもらったの。同じ新入生だつて。僕、また彼に会えるのが今から楽しみだよ」

「つまり、ついさつき友達になったばかりだったのか？ それは——それはいかんぞ、ハリー、マリア。そうだ、特にマリア。こりやいかん」

「え？」

かなりでろでろのアイスをつつきつつ、教科書を求めてフローリシユ・アンド・ブロッツ書店へ向かっていた途中で、ハグリッドがグワツともじやもじや毛に埋まった顔に目一杯シワを寄せた。熊だつて逃げ出しそうな形相だ。

「マリア、ハリー。お前さんらはあのコチコチマグル共にひどい扱いをされてきたから知らんかもしれんがな、ありや、ああいう挨拶は親しい仲でするもんだ。初対面で、それも男女で？ それはお前、やりすぎつてもんだ。マリア、お前さんは女の子だ。それもリリー似で、そうだ！ かわいい！——ああ、違うぞ、ハリー。お前さんが別つてわけじゃないぞ。お前さんも勿論かわいい——いいか、ああいう輩にはビンタの一つでも食らわせてすぐ逃げるんだ。お前さんらはもつと警戒を覚えにやならん」

「……………」

あのハグリッドに至極まともな説教をされて、マリアは搦っていたスプーンからアイスを落としてしまった。そしてハリーの中の誤解はさらに深まった。

「ほれ、返事はどうした。ハリー、マリア」

「うん、ちゃんと注意するよ」

この時、双子らしく声も言葉も揃った二人だが、込められた意味合

いはまるで違った。

——注意しよう。僕はともかくこのハリーはふわふわのぽやぽやなんだから、きつと意味がわかってない。僕がちゃんとハリーに注意しておかなくちゃ。

——注意しよう。ドラコに、いくらスキンシップが好きだからって初対面の女の子にキスなんてしちやダメなんだって。ドラコって意外と抜けてるんだ、僕がちゃんと注意しておかなくちゃ。

本物の天然は自身を天然とは思っていない。知らぬは本人ばかりである。

ほんとうにいいの？ そうしきりに振り返るハリーにマリアは勿論と微笑んだ。

ここはイーロップふくろう百貨店。ハグリッドが二人への誕生日プレゼントに梟を贈ろうというのだ。その決定権をハリーへと譲り、代わりに名前を決める決定権をマリアがもらった。

やがて、ハリーは雪のように白くて美しい、気高い梟と共に店を出てきた。

ああ――

咄嗟に唇を噛み締めた。

やっぱり『僕』は彼女を選ぶのだ。どんな世界でも、どんな性格でも、ハリー・ポッターの相棒は彼女だけ。

「――ッヘドウィグ……！」

鳥籠を開け、白いふわふわを腕に抱えて彼女の柔らかな羽に鼻を埋める。

会いたかった。あの日、『僕』を庇って墜ちてしまった彼女。翔べなくなつた君。

こんなにもあたたかかったのだと、今さらになって気付く。

「……いい名前だね、マリア。君が気に入ってくれてよかった。僕も気に入ったよ。ヘドウィグ――なんだかはじめましてとは思えない響きだ」

ヘドウィグごと、ハリーが僕を抱き締める。こういう時だけ、兄弟論争の決着はハリーが兄さんでもいいかな、なんて思ってしまう。

「ありがとう、ハリー。……僕、ずっとこの子に会いたいと思ってたん

だ」

「そう。ならきつと、ヘドウィグも君に会いたかったんだね。僕、一目でこの子だ！ て思ったんだ。それともう、ヘドウィグが僕を呼んだとしか思えないでしょう？」

「アハハ、そうかも。ヘドウィグはとつても賢いから」

ヘドウィグは逃げようともせず静かな瞳で僕らを見つめた。そして笑うようにホウ、と一言鳴くのだった。

「そ、そんなに喜んでくれるたあ……うん……うん……ヘドウィグも嬉しかろうよ」

「なんでハグリッドが泣くのさ……」

「いや、いや、なんて幸せな鼻だつて、なあ」

オイオイと毛むくじやらが涙で濡れていくのに、思わず感傷も涙も引つ込んでしまった。これぞハグリッドである。

「さあ気を取り直して、次は杖だ。魔法使いの杖といったらオリバンダーじいさんのところと決まっとするんだ。お前さんたちに最高の杖を持たせてやらにや」

風呂敷みたいなサイズの水玉のハンカチでチーンツと鼻を噛んだハグリッドは、意気揚々と次の目的地に向かって歩き出した。籠に戻らずいたヘドウィグはクルクル首を回して、少し迷ったすえ僕の耳を甘噛みしてからハリーの肩へと留まった。

そうか——少し寂しいけれど、嬉しい気持ちの方が大きい。ハリーがヘドウィグを選んだように、ヘドウィグもまたハリーを選んでくれるのだ。

「さあ……だ」

ハグリッドが指した店は随分とみすぼらしかった。扉なんてハグリッドが押しただけで外れてしまいそうだし、看板文字の金塗りが剥がれて情けないことになっている。

それでも、ハグリッドはご機嫌に中へと入っていく。ちなみに扉はハグリッドの手で結局傾いた。

「まもなくお目にかかれると思っておりましたよ、ハリー・ポッターさん。それから……」

「マリア・ポッターです」

「ええ、そうでしょうとも。双子のマリア・ポッターさん。瞳でわかりますよ。あなたがたのご両親が杖を買われた日が昨日のことのようじゃ」

中から霧みたいに現れた老人——オリバンダーは、僕とハリーをひとりでつゆつくり眺めると、やがてハリーの傷跡を熱っぽく見つめた。

「——その傷をつけた杖も、わしの店のものじゃった。さて、お二人はもちろん、杖を買いに来られたんだろ？ であればさっそく、ハリー・ポッターさんから。杖腕はどちらかね？」

「えっと、あの、僕、右利きです。マリアも」

「ふむ。腕を伸ばして。そう」

立ち呆けるハリーの周りを、老人にしては俊敏な動きで回りながらあらゆる箇所にもジャーを当てるオリバンダー。やっぱり鼻の穴も測っていた。その情報はほんとうに必要なのだろうか。

「ではポッターさん、こちらをお試してください。ブナの木にドラゴンの心臓の琴線、二十七センチ、良質でしなりがよい。さあ手に取って。——ちがう。ではこれを。楓に不死鳥の羽根、十八センチ、振り応えがある。——これもちがう。黒檀とユニコーンのたてがみ——

ちがう、ちがう」

あの杖を——次はこの杖を——そうして、苛立ちから次々に杖を渡しては引ったくつているのかと思いきや、オリバンダー老人は恍惚と興奮に震えていた。……うーん、やっぱり僕、ちよつとだけこの人苦手だ。

やがて、振り回されるハリーの元へ『あの杖』が届けられる。

「終と不死鳥の羽根、二十八センチ、良質でしなやか。——ブラボー!!」

バチバチと杖先から弾けた花火に老人の歓声と拍手が乗った。僕の隣でハリーの杖選びを見届けたハグリッドも、目一杯手を叩いて喜んだ。その姿に——手のひらが大きいものだから——シンバルを狂ったように叩く猿のオモチャを思い出した。

「素晴らしい……なんと不思議な……ああ、まったくもって……」

「なにが不思議なんですか?」

「わしは自分が売った杖はすべて覚えている。そしてその杖は珍しい兄弟杖じゃった。同じ不死鳥の尾羽根を使った——そう、あなたを傷付けた杖の」

ハッとハリーが息をのむ。そしてまじまじと手元の杖を見つめた。

「魔法使いが杖を選ぶのではない——杖が、持ち主を選ぶのじゃ。さて、お次はマリア・ポッターさん、あなたです。腕を伸ばして」

呆然とするハリーと場を代わり、鼻の穴を測られるのは回避しつつ一通りメジャーに巻かれた後、ハリー同様に試しの杖を取っ替え引っ替えさせられる。幾度も——幾度も——幾々——

「……………あの、オリバンダーさん……………」

「ふむ、ふむ、ふむ。おかしい。これは奇妙な。まさかそんなことが？
いや、いや、しかし。ふうむ」

オリバンダー老人が唸る間も、手の中で入れ替わる杖のスピードは緩まない。最早、握るといよりオリバンダーが差し出す杖へと手のひらを貸してるだけのような状態になっていた。ハリーにかかった時間なんてとつくに越えていた。

「まさか。まさか？ そんなことがあるのか？ なんとも……………兄弟揃ってなんて難しい客じゃ」

「あとう……………」

困惑するマリアの声なぞまるで届いていない。そのうち椅子へ積み上げられた試し済みの杖が百を越えると思われた、その時。

「お手上げじゃ」

「えっ」

諦められてしまった。

うそでしょ。まさか僕、杖なしでホグワーツに入学するの？ そりゃ、闇払いもやってたハリー・ポッター現役時代なら杖なしで無言呪文だとかもやってみせてはいたけれど。

杖を持たない新入生だなんて、悪目立ちどころの話じゃない。

「どれも合わないのですか……………」

さすがにショックが過ぎて、声を震わせる僕にハリーがそつと手を握ってくれた。

ああ、どうしよう、ハリー。僕、入学が叶うかすら危ういよ。

「いいえ」

オリバンダーは一気に老け込んで見える顔で頭を振った。

「どれも合ってしまうのです。だから、選べぬのです」

「——？」

どれも合ってしまう——？

「つまり？」

「魔法使いは、ある程度はどの杖を使っても使えないということはない。しかし自分の杖程の力を出せぬわけです。故に、自分だけの杖を手に入れる。けれども、あなたは——きつと、出せてしまう。だから、選べない。何故ならすべてが同じだから！」

「そんなバカな話があるか！」

ごうごうとハグリッドの声が室内に響いた。音の暴力を受けて、箱の壁から数個、杖のしまわれた箱が落ちた。

「そんな——そんなの、俺聞いたことがない——ダンブルドアだってそんなことは——」

「おお、おお、そうだとも！ だからわしは頭を抱えておる！ ほれ、こうして！ こんなことははじめてじゃ」

魔法界の住人二人の喧騒を前にして、ハリーとマリアは混乱するしかなかった。

それでも。

決して殴り合いをしているわけでもないのに、一歩進み出て小さな背中でマリアを庇おうとするハリーを見て、マリアは——杖を得られなかった少女は、拳を握り締めた。

「ヘドウイグ」

教科書などの大荷物と共に椅子の番をしていたヘドウイグが颯爽と飛ぶ。そして、腕にヘドウイグを留まらせたマリアは微笑んだ。

「ヘドウイグ、君に任せるよ」

ホウ。ヘドウイグが高らかに鳴いた。

「——これにします」

「は?」

「へ?」

あんぐりと口を開ける大人たちの前で、マリアは杖を——ヘドウイグが選んでくれた杖を振ってみせた。杖先から赤と薄い銀と緑の光が弾け、円を作りながら振り落ちる。

「杖を選べないなら、私が選べばいいんです。それだけのことでしよう」

だから醜い争いなんてやめてほしい。これ以上、ハリーに哀れな勇氣など奮わせないで。

「これ、どういう杖ですか?」

「あ、ああ……それは、イトスギにセストラルの尾毛、二十八センチ。しなりにくいが力強い。——しかし、なぜそれが……それは……」

「なるほど。うんうん、確かに。握り心地もいいしデザインも好きです。気に入りました。だからこれにします」

「いや、いや、マリア、そういう問題じゃあ……」

「そういう問題だよ。その程度の問題だ」

再び杖を振って、マリアは杖先を撫でた。ハシバミ色の瞳は、強い意思にきらめきながら二人を見ていた。

「――」

その瞳に、ハグリッドは命を懸けるジエームズを見た気がした。

「……そうか。あなたは選ぶのか。あなたが自ら選ぶのか。その杖を」

「はい」

「そうか……」

すべてに疲れたとばかりにオリバンダーが唯一面積の残っていた椅子へと座り込む。

「ええと、お代は」

「いいや、いりませんよ。ハリーさんのだけでよろしい。その杖の代金はいただかない。元々売る気なかった杖じゃ。それは売り物じゃあなかった」

「でも、それじゃあ」

「だから、譲ると。そういう形にしましょう。セストラルの尾毛を杖芯にするのは、ずいぶん前にやめたのです」

「はあ……それは……どうも、ありがとう」

ぐったりした様子のオリバンダーに戸惑いつつも七ガリオンを握らせ、一行は店を後にする。それを背中だけで送ったオリバンダーは、余命幾ばくかの床の老人のような声で囁いた。

「どうして……あの杖は隠していたのに、どうして……彼女がどうして……どうして……」

杖を手に入れてそれからの時間は、子供達にとってどうにも居心地の悪いものとなった。特に、ハグリッドが良くなかった。

マダム・マルキンから制服を受け取って、電車で帰る準備をしながらハグリッドとハリーと三人でハンバーガーを食べる。

「……あー、マリアア？」

ハグリッドの手に乗せたただけでおままごとのようなサイズになるハンバーガーは、やはりぺろりと平らげられてしまつて（一番大きなサイズだったのに！）ハグリッドは手持ちぶさたに紙にくつついたケチャップまで指で掬っていた。

「まあ、その、なんだ。……気にしなさんな」

「してないよ」

「そ、そうか。なら、ええが。……お前さんも特別だったちゆうことだ。な？ そうだろう？」

「だから気にしてないって」

「ん、ん」

特別は特別でも劣等生の特別？ なんて言葉をハンバーガーの最後の一口と共に飲み込む。

相変わらず余計なことにはかり気を回して、人をイラつかせて——ろくに落ち込むこともできないじゃないか。まったく。

「——ハグリッド！」

「お、おお」

大きな体のくせに縮こまるのが上手なハグリッドに、電車の到着を

知らせるベルの音にかき消されぬよう声を張り上げる。

「今日は楽しかった！ 友達と、はじめて外で遊んだみたいだった！」
「マリア……」

当たり前に繋がれる片手の体温に勇気をもらう。緑色の瞳が背中を押してくれる。

「だから、ありがとう。……僕が言いたいののは、それだけ」

「あ、ああ……ああ！ んなもん、お安いこった！ あっ、これ、チケツト——ホグワーツ行きのチケツトだ。九月一日のキングス・クロス駅。二人で、遅れずに来とくれ。——ホグワーツで待ってる」

大男の手から二枚のチケツトを受け取り確かに頷くと、無理矢理にでも大荷物を電車の中へと押し入れコンパートメントの窓を開く。

「また、ホグワーツで！」

大きなハグリッドの姿がやがて粒になっても、僕らは窓から魔法使いの友達へと手を振り続けた。

「ねえ見て、ハリー。このチケツト、裏にケチャップの指紋がついてる」

「ハグリッドらしいや」

「ね。ふふふ」

「うんうんうんうん」
「うんうん」

マリアあ。情けない声が僕を心細げに呼ぶ。
うん、言いたいことはわかるよ。これはハグリッドが悪い。

「九と四分の三番線って、どこだろうね……」

マグル出身者用のプラットホームへの行き方マニュアルくらい用意しておけてんだ。

九月一日。懐かしの母校が待ち遠しくてたまらない僕と未知への期待に胸をふくらませるハリーを乗せて、バーノン伯父さんの自家用車がキングス・クロス駅へと到着した。渋々で嫌々で不承不承でしかないバーノン伯父さんは、当然、僕らを駅に放り出すと早々にトンボ返りしたし、そうなれば、ちよつと——だいぶ——かなり——奇妙な持ち物をカートに積み上げた僕たちポッター兄弟は、行き交うマグルの群衆の中で浮きに浮いていた。

「大丈夫だよ、ハリー。なんとかなるから」

「でも、あと十分だよ。伯父さんたちは帰ってしまったし、僕たち、お金だって魔法使いのものしか持ってないよ。これ、ホテルに使えるかな」

「……換金しないと無理かな」

「そっか……このままじゃ野宿になっちゃうね。そのまま伯父さんたちが迎えにこなければ、はれて駅のホームレスたちの仲間入りだ。ああ、安心してヘドウィグ。そうだったら君は解放してあげるから、自分で餌を取ってくるんだよ」

ホウ。どことなく呆れたような声色で、可笑しな入学準備物の筆頭——ヘドウィグが鳴いた。力無くヘドウィグとじやれるハリーを横

目に、僕はといえば懸命に『僕』の記憶をたどっていた。

前回は確か、そう、モリー義母さん——ああいや、モリーさんに助けてもらったんだっけ。

あれってどのくらいの時間のことだったかな。かなりギリギリだったのは覚えてるけど、もうウィーズリー一家は向こうのホームへ行ってしまったかな。

チラリと案内板上の時計を確認する。——五分。残り五分になったら、もう、僕がハリーを連れて行ってしまおう。どうしてただの女の子のマリアが魔法界への道を知ってるんだ、て話になるけれど、ま、今さらじゃないか。嘘と隠し事と秘密に敏感なハーマイオニーじゃあるまいし（そしてこれらは主にロンと職場の不正に対して発揮される）。このハリーは僕が不思議なことをしたり知っていてもきよんとするだけで然程気にしない。……ちよつと弟の純粋さが心配だ。

もしくはヘドウィグでも飛ばしてみようか。賢い彼女ならハリーを導いて——その前に周りがパニックになるか。

ううん——ともかく、遅刻には代えられない。すっかり諦めてヘドウィグを籠の隙間から拾った抜け毛でくすぐっている暢気な弟を雑に撫でておく。こういうところ、アルバスっぽいね、お前。遺伝かあ……。

「——ハリー!!」

祈りは届いた。こたびの救世主は赤毛ではなくプラチナブロンドだった。

「なにをしてるんだ、君たちは！ 荷物もまったく積みられてないじゃないか！ コンパートメントは取れているのか？ マグル側のホームでなにをしていたんだ。忘れ物ならもう諦めろ」

「そのマグル側じゃないホームへの行き方がわからなかったんだよ、ドラコ」

「ハア？ 何をねぼけてる、君が知らないわけ——アー……ウン。

なるほど」

諦念のあまりヘドウィグと羽根の引つ張りあいっこに興じていたハリーの様を見て、すべてを察したドラコは苦々しく吐き捨てた。

「うっかりにもほどがあるぞ。ルビウス・ハグリッド」

それには全力で同意だ。

「ドラコ、君——今、どこから出てきたの？」

あんぐりと。ハリーはまさに魔法を見たとばかりに目を丸くして、思わぬ再会となった友達を見つめた。ドラコに気を取られた結果ハリーとヘドウィグの綱引きならぬ羽根引き勝負はヘドウィグに軍配が上がったようで、かわいい僕らの梟は自分の羽根を取り戻せて満足そうに胸を膨らませていた。大いに和んだ。

「説明はあとだ。何も考えずついてこい。いいか、怖がるなよ。マリア、ハリーを挟んでやってくれ。時間がない」

「言われなくとも」

学校生活のための荷物は多いけれど、僕たちポッター兄弟の私物そのものは少ない。どうかハリーのカートに僕の荷物を乗せきって、ハリーの肩を抱いて進む。——九番線と十番線の間の柵へと。

「え——？ えっ——!？」

「ハリー、こわかったら目を瞑ってていいから」

「マリア？ ドラコ？ これ——待ってよ、ぶつかっちゃう！」

「ぶつからない！」

ハリーの背中を思いつき押しつけて駆け抜ける。ぶわつと空気が膨

らんで肺をいっぱいにしたそれは、先ほどまで飲み下していた雑多なコンクリートの臭いではなかった。

「ほら、ハリー、目をあけてごらん」

僕の手の先、緑眼をぎゅつと瞑ったままのハリーの背を優しく撫でる。

「——っわ、あ……！」

次には、ハリーの瞳は際限なく好奇心と期待の輝きにあふれていた。たぶん、蒸気機関車自体見るのは初めてだろう。無意識にフラフラとうろつきたがる弟を心を鬼にして抑える。

「さあ感動してる暇はない。それは中でやってくれ。空いてるコンパートメントを探すぞ」

「君のところは？」

「一人でヒト二人分のウスノロが二体もいるものでね」
「ああ……」

クラッブとゴイル^クか。ドラコがマルフォイ家である限り、そう易々と切れる関係ではないか。——と、いうことは、ルシウス・マルフォイはあの陣営のまま……。

「後ろの方が空いていた筈だ。あと五分もない。僕がカートを押すから、二人は先まで見に行ってくれ」

「うん！」

ハリーと手を繋いで駆け出す。既にくつろいでいる子供たちのコンパートメントの合間をすり抜け（同じ新入生らしきおチビさん達が何事だと目を丸くしていた。）いつの間にもやら最後尾だ。ようやく空

いている席を見付けて、確保を知らせるために窓を開けて大きくドラコを呼んだ。

「ハリーはここにいて。僕があいつから荷物を受け取ってくるよ。ドラコだって、そろそろ自分のところに戻らなくちゃ」

「それなら僕が」

「いいんだ。列車の中にさえ入れちゃえば取り残されることはないんだから。ハリーがここにいてくれないと、僕、せつかく取ったこの席のこと忘れちゃうよ。——待ってて」

「……うん、わかった」

いいこ、と弟の頭を撫でてから駆け出す。

ドラコとは積もる話が多すぎるのだ。そしてそれは、『この世界の人間』の前ではできないものばかりだった。一人ぼっちで残してきたハリーには悪いが、これがようやくとめぐってきたチャンスなのだから。

「——ドラコ！」

「遅いぞ、マリア」

荷物の殆どを運び終えていたドラコは、白い肌を健康的に赤らめさせて喉元のタイとボタンを外していた。

ワオ、プライドダイヤモンド級なアイツのあんな気を抜いた姿を見るの、何年ぶりだろう。少なくとも十一年は前だ。

「君、昔はもつと血色悪くなかった？ 吸血鬼みたいだって思ったもの、僕」

「相変わらず失礼なやつだな」

クスクス笑ってドラコへとハンカチを差し出す。

「お疲れさま。置いておいてくれてもよかったのに」

「いくら中身が君だろうと、外見は立派なレディなんだ。美しい女性を荷物持ちにすることを、この僕が許すと思うのかい？」

「ウーワ、相変わらずマルフォイ家の教育は完璧みたいだね。糞の樽詰ってかんじ」

「お前はその口の悪さを一ミリでいいからどうにかしろ。ホグワーツに入学してからどれだけの男の幻想を壊す気だ。お母上似の美貌が台無しだぞ。特にスネイプ教授の前では控えろ。いいか、絶対にだ」

むいむいと僕の頬をつねりながらお小言を浴びせてくるドラコに、仕返しとばかりに目の前の青い額を突く。

オールバックをやめても僕は覚えてるぞ。その額の突きやすさを。

「わかってるよ。なあに、ドラコともあろう人がずいぶん絶賛するじゃないか。もしかしてこの顔、好みだった？ 人の母親に懸想するのやめてくれる？」

ニタアと意地悪く笑ってやれば、ドラコは頭の血管が切れる三秒前の顔をして舌打ちした。

「……その顔、君の息子にそっくりだ」

「そしてその息子は僕の父さんそっくりなのでした」

ハリー・ポッターの息子は二人いるけれど、どちらのことかだなんてそんな今さらな確認はしない。実際は、例の事件も含め案外大きな事をやらかすのは奥手な次男に多かったのだが、どうにも長男の悪童っぷりが堂に入りすぎて見逃されがちなのだ。

……その辺りも、ハリーとアルバスは似ていると感じる要因の一つだった。

「——汽笛だ。そろそろ出発するね」

ハリーの待つ席へ向かう間に、誰かの荷物が置かれ人の姿はないコンパートメントを見付けてもぐり込む。窓を全開にして大きく身を乗り出してみる。おい、危ないぞ。そうドラコが腰に腕を回してくるので遠慮なく体重を預ける。

——いた。

母親から離れ、走り出す列車を小さな影が追っている。顔は泣き笑いで、懸命に兄たちへと手を振っている。

「ジニー」

呟いてみて、その声の弱さに自分で驚いてしまった。

やっぱりあの子はこの頃からハリーに興味があったのだろうか。それは——うれしいような、くるしいような。

遠ざかっていくその人を焼き付けるように眺め、やがて消えた赤毛にふっと力を抜いた。

「満足か？」

「うん。君のアステリアは再来年入学だっけ？ 二年もお預けされちゃって、まあ」

「ふん。どうせ君に振り回されて焦がれてる場合じゃなくなるさ」
「言ってる」

無意識だろうけど、彼の腕が離れないのでそのまま背もたれに利用してやる。レディの腰を断りなく抱いた罰だ。

「思えば、僕らって贅沢だ。妻たちのかわいい姿を、写真でなくまた直に見られるんだぜ？ 僕、ジニーに構いつぱなしにならない自信がないよ。君だって在学中はアステリアとそれほど関わりがなかったんだろ。甘ずっぱい青春を取り戻すチャンスだぜ」
「言ってる」

僕の軽口にドラコは呆れたふうに肩をすくめているけれど、実際のところはどう思っているかわからない。

彼の妻には深刻な問題があった。——それに、君はこの世界で向き合うのだろうか。

「で？ ハリーを置いてここで時間を潰すのが狙いか？」

「バレたか」

「赤毛くんが最後尾に向かっているのをわかりやすく避けたからな。——君だって、友達になったって構わないだろうに」

ドラコの元へ向かう途中、すれ違ったソバカスの男の子を思い出す。

懐かしのロン。生涯の友となる相棒たち。——ハリーの、相棒だ。

「そのうちにね。今はともかく、ハリーと仲良くなってもほしいんだ。勝手な期待だけど——彼等には『僕』の親友であってほしい。僕らの友情の中に、マリアなんて人間は存在しなかったんだから」

「……本当に勝手だな。どうせこっちのハリーも同じなんだろう。スネイプ先生に傲慢と言われるわけだ」

「彼も僕も同じ人間なもの。僕の方がずっと傲慢で強欲だけど」

うそぶいてみれば、ぐしゃぐしゃと乱雑に髪をかき回された。

……もうポッター家特有のくしゃくしゃや頭じゃないんだけど。母さんほどのストレートでもないけどね。ちよつとしたくせ毛止まりだ。

「強欲といえど——君、未来を変えるのか」

そうぼつんとたずねるドラコは、どことなく緊張した様子だった。これこそが、僕と出会ってからこれまで、本当に交わしたかった話題

なのだとわかった。

僕だって、それを話してきた。

「そもそも『僕ら』の存在が在る時点で僕らの知ってる歴史とは違うだろう。だから、まずは在るべき歴史に寄せていく。そして——今度こそ、守る」

何もかもを起きなかつたことにはできない。救えるものは少ない。なにも救えないかもしれない。それでも——知ってて見殺しになんか、もつとできない。

元々、英雄ハリーは無茶ばかりを要求される人生だったんだ。自分から無茶するくらい、いいじゃないか。

「……やっぱり、君は強欲で傲慢だ」

ドラコは全て知っていたとばかりにあっけらかんと笑った。

「それで？ まさか全部一人でするつもりか？」

「え？」

「ここに、同じくとある未来の記憶を持つ人間がいるのだが？ いい加減、他人を巻き込む欲深さも持ってほしいものだな」

「——」

バカみたいに両目を開いて彼を見つめる。その人は、やっぱり当たり前で当然みたいな顔をしていた。

——僕に協力することを既に決めている。そんな顔を。

「危険だよ」

「だろうな」

「誰にもバレちゃいけない」

「あのダンブルドアを出し抜くのは骨が折れそうだ」

「命の保証はできない」

「生きてる限り命の保証なんてものはない」

『あの人』に楯突く行為だ」

「……これまでだって十分、楯突いてきた」

「君を守りきれるかわからない」

「君に守られるだけの存在になり下がる気はない」

「ドラコ」

「ハリー」

「——本気？」

「——本気だ」

くしやりと目の前の景色が崩れる。そんな中でも薄い金と青っぽい灰色は確かにそこにあつて、どうしようもなく綺麗だと思った。

「君って、僕が思ってた以上にバカだ」

「妻と、息子と、ハリー限定でな」

うそばっかり。君って案外愛情深いんだ。友達になってみればわかる。

「面倒見良すぎだよ。思えばウスノロのクラブやゴイルのことだって、君、一度も見捨てたことはなかった。身内に甘くなっちゃうのって、マルフォイ家の伝統かなにか？」

「ついでに身内以外にはとことん冷徹なのも伝統だな。ところで今、君は僕の身内のうちだと自分で宣言したも同然だけど？ いいのか？」

ドラコはからかうような顔をしたが、僕には何がおかしいのかわからなかった。
だつて。

「実際にそうでしょ？」

「……………これだから傲慢のポッターは」

スカした男のニヤニヤ顔がちよっと照れ臭そうな顔にかわった。
おや、かわいい。

「それじゃあ、さっそく建設的な話をしよう。君はどこの寮に入るつもりだ？ やはりグリフィンドールか？」

「そんな君はやっぱりスリザリン？」

「……で、ないと、これ以上父上との間にすれ違いを起こすわけにはいかない」

その言葉にふと気付く。ホグワーツ特急のホームで僕たちのことを待っていてくれたドラコだけど（本人はきつと、そうは認めないだろうけど。ほんと素直じゃないんだから。）そういえば、愛息子の大切な出立だというのにルシウスとナルシッサの姿を見ていない。『前』はそんなこと有り得なかったのに。

「今日は、君の（ご）両親は……？」

「……少しずつ、僕の考えや希望を伝えているんだがね——中々、スコーピウスのようにはいかないよ」

視線をそらして寄越された、ほんの少し寂しそうな微笑み。——それが答えだった。

「そう……。……ルシウスさん、父親してた頃の君よりさらに頭が固そうだし」

「ちがいない。僕があまりに嫌がるから不信感自体は抱きつつも、まだ『我が君』に夢見てるのさ。父とのことがなければ——グリフィンドールなんかも、面白そうだとは思ってたんだけど。君がいるし」

「僕も、またホグワーツの寮を選べる日がくるなら、次はスリザリンもいいなって思ってたよ。君やスネイプ先生、うちの子のような例もあるんだもの。スリザリンは悪じゃない。手段を選ばないだけで、自分の中のただ一つだけの正義を貫き通す。そういう、いつそ誠実ともい

える人たちが集まる寮だ」

「そしてグリフィンドールは勇気だけが取り柄の能無しのバカ集団ではない。誰よりも成長の可能性を秘めた場所だ。自分の限界を超えられる——ネビル・ロングボトムのようにね」

「レイブンクローだって、ハッフルパフだって、最高の寮にちがいない。どこが優れてるだとか、どこが劣ってるだとか、そんなのはナンセンスではなから存在しやしなかったんだ。——それに気付くのに、ずいぶんかかったけど」

「二回目だからね、僕たちは。ちよつとしたズルさ」

あのドラコと——喧嘩ばかりだった子供のドラコと、まさかこんな話をすることになるなんて。酒も交えずに。

それだけで、この世界は『違う』のだと思い出せる。

「——ねえ。君、やっぱりグリフィンドール、こない？ 僕がスリザリオンに行くのは、ハリーのサポートが難しくなるからできないけど……君と同じ寮で過ごすって、正直すごく魅力的だ」

「熱烈なお誘いをどうも。……僕がマルフォイ家初の血を裏切るものになるのか。ハハッ、昔の僕が知ったら正気を疑うだろうな」

「それじゃあー！」

「——けど、やっぱり僕はスリザリンへ行くよ。……君を守るために」
「え？」

「君は側でハリーを守るんだろう？ なら、僕は遠くから全体を見る役割をしよう。敵を騙すには味方から、てね」

敵を騙すには味方から。それを命を懸けておこなった人を二人、僕は知っている。そしてそれは——どちらもがスリザリンの勇者だった。

「……やっぱり、君はスリザリンだ」

「さて、そろそろ僕は戻るよ。制服を向こうに置きっぱなしなんだ。君だって、城に到着する前に着替えなくてはならないだろう？ 僕が出てからここで着替えればいい。——いいか、マリア。間違っても男の前で脱ぐなよ。君は今レディなんだ、わかってるな？」

「はいはい。わかってるよ、ドラコママ」

「誰がママだ」

「だって、ドラコつてば小言の言い方がモリー義母さんそっくりなんだもの。ほら、早く出てよ。レディの着替えをどうどうと覗く気かい？ ドラコのえっち」

「……………頼むからもつとおしとやかにしてくれ。じゃじゃ馬はグレンジャーひとりで十分だ。なにかあったら連絡は『あの方法』で僕に寄越し——おい！ まだ脱ぐな、僕がいるのが見えないのか！」

さつそくシャツを捲ろうとしたところで、慌てて顔を背けたドラコが変な動きをしながら立ち上がった。耳元と首がほんのり赤い。元々が蒼白い肌なために本当にわかりやすい。

君、未来で子供まで作っておいてなんて反応するんだよ。相手は僕だぞ。

「——ねえ、ドラコ」

秘密の相談をしている間おとなしくしていてくれたヘドウィグを人差し指で撫でてから、コンパートメントを去ろうとしたドラコへと扉越しに問いかけた。

「ホームで君、呼んだよね。ハリーつて。——どっちのことだったの」

返事はなかった。

「ごめん、ハリー。ドラコと話し込んだじゃって——て、おや。もう友達
ができたのかい?」

「おかえり、マリア! 彼、ロン。ロン・ウィーズリー。そしてこつち
がさつき話してた妹のマリア。それで、君は……」

「ハーマイオニー・グレンジャーよ。マグル出身なの。よろしく、マリ
ア。ハリーのことは『近代魔法史』『闇の魔術の興亡』『二十世紀の魔
法大事件』で知っていたけど、双子がいたことは知らなかったわ。そ
れで、マリア。さつそくだけどわたし、あなたにすぐお聞きしたいこ
とがあるの。——その格好、なに?」

ドラコと別れ悠々と戻った先、コンパートメントの中はハリーだけ
でなく男女の子供が二人増えていた。ねずみを手にした赤毛の男の
子に、杖を持つ栗毛の女の子——なにものにも替えがたい、ハリー・
ポッターの最高の親友たちだ。

そのうちの、マリアへと息継ぎなしに捲し立てた方の子供——ハー
マイオニーに、相変わらずだなあ、なんて苦笑する。

「制服だけど。なにかおかしい? あ、君たちもはやく着替えたほう
がいいよ。そろそろホグワーツにつくから。はい、ハリー、これ、君
の制服。荷物ずつと預かってごめんね」

「なにか、おかしい——? なにか、おかしいか、ですって——!? な
にかもよ! あなた、女性でしょ!? かわいい顔をしてるし、胸
だつてあるわ!」

「あら、褒めてくれてありがとう。胸のある男性かもよ?」

「ハリーはあなたを妹と言ったわ!」

「しまった、口止めしておくんだった」

「そんな笑いながらじゃ説得力ないよ、マリア」

ハーマイオニーの癩癩じみた剣幕に、ハリーはハーマイオニーと知り合った時点で彼女の僕への反応に予想がついていたらしく、僕から制服を受け取りながらのほほんとしていた。癒しだ。ロンはめっちゃくちやに引いていた。おいおい、この彼女、今は仲良くないけど君の未来のハニーだぜ。

うーん、わかっただけはいたけど苛烈だ。いいじゃないか——女生徒が男子制服を着るくらい。正確にはズボンだけだ。

「校則違反だわ！ あなた、それじゃあ入学できないわよ!？」

「そんな校則があったの？ 校長先生からの許可があっても無理?」

「え——そ、それは——そうなの……?」

「うん。制服を作る時にマダム・マルキンと話し合ってたね。彼女が掛け合って強制的に領かせ……うゝん。ごほんごほん。失礼、喉の調子がちよつと」

ちなみにこれが、僕の採寸にかかっていた理由だ。粘ってくれてありがとう、マダム。

「そ、そんなの——あなただけ特別扱ってこと……? そんなの、ずるいじゃない。鼻屑よ。それが真実なら、わたし、ダンブルドア校長先生のところに行って直接抗議しますからね。ハリーが言ってたけど、女の子らしい格好が嫌だからって、制服を変えてしまっただなんて……」

「そこに理由があったとしても?」
「え?」

ローブの前を開いて、セーターとシャツをズボンから引つ張りだしめくり上げる。ひゃあ! とロンが悲鳴を上げ顔を手でおおったが、指の隙間からがつつりブルーの瞳が覗いていた。そういうところだぞ、ロン。

また、ハーマイオニーも突然なんてことをするのだと声を荒げかけ

て——やがてコンパートメントに訪れたのは気まずい静寂だった。

「これ、今お世話になつてる家のおばさんにアツアツのお湯をかけられてできたんだ。小さな頃にね。中々、芸術的でしょ？　それは過つてだけど——僕とハリーを見てわからない？　僕たち、虐待されてきたんだ。かわいそうに、ハリーの腕を見て。ガリガリだ。乙女が自分の傷を隠したいと努力するのはおかしいかい？」

「あ——わたし——あの、そんな——」

「ハーマイオニー、君は正しいよ。きつとこれまでも君は正しく、誠実に生きてきたんだと思う。それは誇るべきところで、僕もこれからたくさん君のことを尊敬する。でも、その正しさを発揮するタイミングは相手の事情を把握してからでも遅くはないんじゃないかな。でないと、結果的に傷付けかねない。だろう？」

「……ええ、その通りだわ。わたし——ごめんなさい」

「うん。こちらこそごめんね。偉そうなことを言ってしまった。忘れないで、君はなにも間違つてないよ。君は正しかった。ほんとうは謝る必要なんてないんだ。たぶん、僕も。ただ互いに別の主張があつてぶつかつちやつただけ。だから、ね、謝るより——そうだ、握手をしよう。せつかく友達になつたのに、僕たちまだ名前しか知らないよ。ほら、ロンも」

両手で、惚ける二人の手を片手ずつ取る。

「これからよろしくね。ロン、ハーマイオニー」

それはもう、長くて濃厚な人生の一時をね。

「……っマリアー！」

感極まつたとばかりにハーマイオニーが飛び付いてくる。そのまま、彼女を受け止めた流れを利用して通路へと出た。扉を閉める際ハ

リーと目が合ったので、僕の意図は伝わっただろう。僕の片割れは優秀なのだ。

ああ、懐かしいなあ。ハーマイオニーのこの激しめのスキンシップ。せっかく十一年ぶりの親友たちにキスしたいのを我慢して握手にしたのに。……初対面はダメだって、ハグリッドに怒られちゃうからね。

彼女はまだ幼いのに存外厳しいことを言ってしまったのは、この先にロンとの事があるからだ。本当に、昔のハーマイオニーとロンってばひどかったんだもの。どれだけ二人の壮絶な喧嘩に巻き込まれたか。大人になってからもそれは変わらないけど。

今にして思えば、あれは互いに男女として意識し合ってるからこそだとわかるけどさ。間に挟まれて振り回される僕ハリーの身にもなってるよ。

——と、いうわけで、ハリーの平和な学生生活のために先手を打っておいたのだ。

ちなみに、殊勝なふうにはハーマイオニーへと傷痕のことを語ってみたが、こんな火傷一ミクロンだって気にしてないのが真実だ。五歳になる前に本当に過ってつけられたものだけ——

「ねえ？ マリア。わたし、聞いたことあるわ。ホグワーツにはとっても優秀なお医者さまがいっぱいやるって。そう、えっと……こちらでは癒者、というのだったかしら。きっとその傷もなんとかしてくれるわよ。それが魔法なんだもの」

「ん？ あー……うん。そうだろうね」

ホグワーツに勤める噂の校癒の姿を記憶から掘り起こす。マダム・ポンフリーなら勿論、たとえ寝ぼけていたって完璧に治せるだろう。ハリーの呪いの傷とはちがうのだから。——けれど。

「僕、あの家にいて着けられた傷を一つだって消すつもりはないよ。少なくともあの家を出るまではね」

「え——？」

「綺麗になつちやつたら、自分たちが僕らに何をしてきたのか忘れちゃうかもしれないじゃないか。——そんなのは、許せない。ハリーと僕^{マリア}のことを、なかつたことになんかさせるもんか」

「……………」

ハーマイオニーは奇妙なものを見る目で僕を見ていた。

バーノン伯父さんやダドリーはともかく、ペチユニア伯母さんの僕らに対する感情は複雑だ。特に——リリー^{マリア}似の僕には。

ハリーに対しては見るのも忌々しいなんて態度を取っておきながら、彼女はよくハリーの目を見ている。ハリーに見られている時、自分の中の何かに堪える顔をしている。

けれど、僕^{マリア}には——

——その顔で！ その目をしないで！！

「……………」

あの叫びは本物だった。

「あの、」

再びの沈黙になつてしまい、ハーマイオニーはあたふたとした。何か言葉を返さなきゃ——そう、まだまだ子供の顔に目一杯書かれているのがなんとも微笑ましくて、つい続きを待つてしまう。

娘のリリーも、言葉につまってはよくこの顔をしたものだ。

「あなた、ええと、その——男らしい、のね？」

「ブハッ」

まさか、かの才女がようやく絞り出したのがそれだなんて！ ——

おっと、いけない。咄嗟に口を抑えるも、僕の吹き出した声はしっかりと彼女に届いてしまい、ハーマイオニーは顔をヤカンみたいに赤くした。ふわふわの髪もなんだか湯気と共に広がったように見えた。

「もう！ もう！ わたし心配したのに！ いいわ、そこでバカみたいに笑ってるといいんだわ！ せつかくのお顔が台無しになるまで笑えばいいわ！」

「ごめんって、ハーマイオニー。君があんまりにもかわいくて」

「間抜けで気が利かなくてかわいい？ ええそうね！ あなたとちがってわたしは子供よ！ ——ごきげんよう！」

ブンブン怒った栗毛のお姫さまは、結局、盛大にすねたまま自身のコンパートメントへと戻ってしまった。

うーん、これは僕が悪い。あとでご機嫌取りに尽力するでしょう。

——さて。

「君たち？。そこでいつまでも聞き耳たててないでさっさと着替えなさいね。あと、ちらかしたお菓子の片付けも忘れないこと」

「ハ、ハアイ」

ついに世界最高の学び舎であるホグワーツを前に汽車が停車した。荷物を預けたまま、一年生を大声で召集するハグリッドについて四人乗りのポットへと乗り込む。メンバーはハリーとロンとハーマイオニー、そして僕だ。思えばこのポット、一年生の時にしか使わなかったな。二年生からはセストラルの引く馬車で登校だ。

大広間へ向かう途中の空き教室にて、マクゴナガル先生から寮と点数制度についての説明を受ける。その後、みんながゴーストの登場にかわいい悲鳴を上げたりロンが寮を決める試験はかなり痛いんだとハリー共々怖がったりと、微笑ましい（それはマリアだけだとそこにドラコがいたならば呆れて言っただろう。）時間を過ごした。

やがて大広間へ通されると、かつての学校生活の中で幾度と世話になった組分け帽子が歌うのをぼんやり見ていた。隣のハリーがいよいよ顔色が悪くなっていくので、いつも通りに手を繋いだ。ほっと小さく息をつくのが聞こえた。

一人でこの帽子を前にした僕なんて、それはもう吐く寸前の心地でしたとも。

だから、ひとりじゃないと教えてやらねばならない。——君のことは誰よりも、『僕』が知っている。

ハンナ・アボットから始まり、ハーマイオニーがグリフィンドールを叫ばれる。ネビルも当然グリフィンドールとなり、寮席へとおちちよこちよいに帽子をさらいかけつつ、やがて彼の名が呼ばれた。

「——スリザリン！」

前は帽子を持ったかどうかという早さで叫ばれた彼なので、もしかしたら今回はじめてあの帽子をかぶったのかもしれない。後で感想を聞いてみようか。

「ドラコ、スリザリンに行っちゃったね……」

やけに残念そうに呟くハリーに、君はどこに入るつもり？ と小声で聞いてみる。

「どこでもいいよ……僕が入れるようなところがあれば、どこでも」

「弱気だなあ」

「だって……マリアはもう決めてるの？」

「ハリーと同じところ。僕が呼ばれるの、ハリーの後だもん」

「えー……」

「だから、ちゃんと入りたい寮を選ぶんだよ。選ぶのは君なんだから。……見てるからね」

くしゃつと隣の黒髪を撫でれば、ついにハリーの名がマクゴナガル先生から呼ばれた。シン——かつて味わった、ゾツとするような静けさが広間中に広がった。

「ハリー」

緊張に動けないハリーを促せば、ハリーはなんと僕ごと帽子の元へ向かおうとした。どこかからネビルの時のような微笑ましげな笑い声がこぼれた。

「ご、ごめん、マリア！ ……いってきます」

「いってらっしゃい」

もう一度だけ握る手に力を込めて、そつと放す。

「——グウリフィンドオオオオル!!」

音が爆発した。かすかにウィーズリー双子のポッターを取ったぞ

という歓声が届くが、それ以上に大声があっちへこっちへ大広間内を跳ねて大騒ぎだった。

ちらりとスリザリン席を見てみれば、ドラコが優しい目をして慌てるハリーを見ていた。——本当に、あの頃のマルフォイとは大違いだ。姿形は同じだったというのに。

「ポッター・マリア」

熱が治まる頃合いをみて、続けて僕の名が呼ばれる。案の定、会場は再びざわめいた。

ポッター？ またポッター？ ハリー・ポッターとなにか関係があるのか？ なんでズボンなの？ 女の子だよ？

答えはグリフィンボール席から徐々に明かされていった。ハリーが告げた双子の妹という言葉を伝言ゲームしているらしい。……後で僕が姉だと訂正しておかなくては。

「フーム、なるほど、なるほど……先ほどの子とよく似ている」

「ハリーのこと？」

「いいや、その前だ。その子も、どの寮に入ってもやっていける素質を持っていた。されど、心は決まっていた。——君もだろうか？」

「ああ——」

そして叫ばれる。——グリフィンボール！

誰よりもハリーの拍手が大きかった。待ちきれないと輝いている緑の目に頷いてから、僕によく似ているらしいスリザリンの彼を見る。

——やっぱり落ち着かないや。その姿で、『僕』を優しく見る君なんて。

だからちよつとだけ鼻で笑ってやった。

……あ、スネイプ先生の前で下品な真似をするなって約束、もうやぶっちゃった。

無事にロンをグリフィンホール席で迎えてから、ハリーと共にホグワーツが誇る豪華な食事へとかぶりつく。これだけを求めて、十一年間、腹と背中がくつつきそうなのを我慢してきたといっても過言じゃない。

そうしてデザートにまで夢中でありつけば、突然ハリーが額の傷を押さえて呻いた。

えっ、なんで。まさかヴォルデモートがなにか——ああそうか、クイレルか。

隣席のスネイプ先生と談笑している彼は、当然スネイプ先生へと顔を向けていて、結果ハリーにヴォルデモート憑きの後頭部が向かう形となる。

……やってくれる。

今後も散々弟をいじめ抜いてくれる霞の存在を、僕の持てる限りの敵意でじつと睨んだ。

ダンブルドアの諸注意と誰一人揃わない——ウィーズリーの双子は別だ——校歌斉唱を終えて、パーシー引率のもと寮へ向かおうとすれば、ふとスリザリンから視線を感じた。

「ドラコ」

そつと緑ローブの群れから離れたドラコは、僕の隣へと並んだ。

「夜、『あれ』に連絡を入れる。寝る前に読めよ」

「さっそく？ 疲れて先に寝ても許してよ」

「何のための通信——」

「マリア、なにしてるの！ パーシーがもう行っちゃうわ！」

意図的にグリフィンボール生たちから離れていたというのに、目ざといハーマイオニーに見つかってしまった。未来の彼女に散々悪事をあばかれてきた反動からか、ただそれだけで悪いことをしたような気持ちになる。

「あら、失礼。ええと」

「ドラコ・マルフォイだ。ミス？」

「あつ……ハ、ハーマイオニー・グレンジャーよ。ミスターマルフォイ」

えっ。

乙女らしくドラコへ頬を染めた彼女にぶわっと鳥肌が立つ。

別に乙女っぽいハーマイオニーに文句があるわけじゃない。あの『ハーマイオニー・グレンジャー』が、『ドラコ・マルフォイ』に、意識してます感いっぱい照れる目の前の光景が信じられなさすぎて脳が理解を止めただけだ。

ドラコも同じだったのだろう。ピキリと身を固めると咄嗟にロンを見た。……うん、まあ、君たち大人になってからも微妙に距離感ばかりかねてたものね。ハーマイオニーは早いうちにドラコと友情を結ぶことに吹っ切れてたけど。ロンに関しては——お察しだ。

つまり、ハーマイオニーと仲良くすると自動的にロンに睨まれるという図が僕らの中にはあって、ドラコはそれをすっかりすり込まれていたのである。

「ドラコ、まだ大丈夫だから」

「僕はWWWの品を一生認めないと決めたんだ」

「まだ無いから。どっちも無いから」

灰色にくすんでみえる瞳は虚ろで、さすがに同情を禁じ得なかった。

彼の兄たちの品に相当痛い目見せられてきたんだな……。

「——ドラコー！」

ややこしくなりそうな予感の声が増えた。——ハリーだ。

ハリーは、どうしてか僕とそれからハーマイオニーを背に庇うと、ドラコを、どうにか言葉を探していますといった風に見上げた。

「ド、ドラコ、あの、僕、わかってるよ？ ドラコにはそんなつもりはちつともないって。でもね、みんながみんなドラコが紳士だと知ってるわけじゃないから。やっぱり、それはダメだと思う」

「なんの話だ」

本当になんの話？

「えっと、だから……」

ハリーがドラコの耳へと手で隠した顔を寄せる。

ウワア、ちよつとは慣れたつもりだったけど、やっぱり改めて見ると変な光景だ。目を合わせればいがみ合っていた『僕』とマルフォイが仲良くコシヨコシヨ話だなんて。

そして、ハリーのコシヨコシヨ話は静まり返った廊下ではまるで意味を成していなかった。

「ハーマイオニーや他の人にはすぐキスしちゃダメだよ。僕とマリアで我慢して。君のスキンシップをスキンシップと思わない人もいるかもしれないんだから。……できる？」

「……………」

「……………」

ドラコの目は僕に、お前の弟だろう何とかしろ今すぐにだ。と凄んでいた。ちなみにハーマイオニーはドラコを痴漢でも見るような目

で見ている。ちよつと未来の目に近付いたね、ハーマイオニー。

ノーコメントのままどうにかカオスな現場を解散させて、子供たちを先導しながらパーシーに追いついた頃には、パーシーが太った婦人の前で合言葉を言うところだった。聞き逃さなくてよかった……。

ハリーはともかくハーマイオニーからの物言いたげな視線が大変痛い、尋問はどうか明日にしてほしい。だってもう、物凄く眠いだ。前日も含めて初めての女子寮だっていうのに、観察する気力もない。

ヘドウィグはハリーの元にいるので大して整理するような物もなく、くしゃくしゃの羊皮紙をベッドサイドへ投げ出してから、僕はプリーブット通りの物置部屋とは大違いのふかふかベッドへと沈んだ。

ごめん、ドラコ。やっぱ無理だ——おやすみ。

完全にマリアの意識が落ちた頃、何もなかった羊皮紙の上に文字が浮かんだ。

——おやすみ、マリア・ポッター。

目覚めたその日、僕は見慣れない内装よりも慣れた体温が傍にないことに混乱した。

……あれ。ハリー、先に起きたのかな。もうキッチンに行っちゃったの？ いつも起きる時は一緒なのに。起こしてもくれないなんて。ふわふわした頭でベッドを叩く。やわらかい。二人分どころか一人だけだつてギシギシ文句を言ってくるスプリングが聞こえない。

次第に薄ぼんやりと見えてきた目で天蓋と天井を確認する。ああ……呟く。そうか、ここ——ホグワーツか。しかも女子寮。

一度だけぐるりと室内を見回して、改めてルームメイトを確認する。ラベンダーにパーバティにハーマイオニー……どうやら前回のハーマイオニーのルームメイトたちの中にマリアはいれてもらえたらしい。

あまり少女たちの無防備な寝顔を見てしまうのも悪いと、ふやけた頭のまま制服に着替える。ボロボロだけれど微妙に愛着がわいてしまったブラシを手にして。

「おはよう、ハリー」

「おはよう、マリア」

やっぱりハリーは起きていた。談話室の暖炉の前に、緑の目をとりと溶かしてふわふわの頭をさらにふわふわにしていた。

「なんとなく、マリアが起きた気がして」

「僕もハリーが起きたと思って」

絨毯の上に座り込むハリーを足の間に挟んで、ゆっくりと頑固な癖毛を解かしていく。

「目を開けて、一番にマリアを探したんだ。先に行っちゃったのになつて。それで、ロンのイビキが聞こえて、ここはホグワーツだって気付いたの」

「僕もだよ。真っ先にハリーのこと探しちゃった。ロンのイビキってすごいよね。……アー、えーと、僕の想像の中でだけど」

「その想像で間違いないよ」

「…………ふふっ」

ようやく黒髪が思うとおりの指通りになったところで、兄弟と役割を交代する。ろくに整えたこともない乱雑な赤毛が、ハリーの指にすかれて肩を流れていく。母さんと同じ髪色——僕がマリアとなつてから、ずいぶんこの髪も伸びた。

「昨日までずっと一緒に寝てたもんね。一つのベッドで。せまくつて、だからできる限りぎゅうつてしてさ。……さびしい？」

「ちよつとだけ。慣れるまで起きるたびにマリアのこと探しちやいそうだ。あと、冬がさむそう」

「なら、夏は離れられて嬉しい？」

「ちつとも」

二人で毛布をかぶって秘密の遊びをする時みたいにくふくふ笑い合う。今は杖があるから、指先で簡単な魔法を使って遊ぶやり方はできなくなっちゃったけど。

二人で一つしか与えられてないプリベット通りのポロベッドを恋しく思うわけではないけれど、ハリーと一緒に寝られなくなったことは素直に残念だ。僕も数日は寝ぼけ眼にハリーのことを探してしまいたいそうさ。それで——

「ハーマイオニーに呆れられるんだ」

「ロンに笑われそうさ」

「……………アハハッ」

聞かなくなつたつて同じ事を考えていたとわかる互いの眩きに、今度こそ声を出して笑った。

「おやおや、そちらの双子は朝から仲睦まじいようで」

僕らの笑い声につられたように、チエシヤ猫みたいなニンマリ顔が二つ談話室に飛び込んできた。

「そつちの双子はちがうの？」

「もちろん仲良しき！ 互いの名前を間違えて挨拶するくらい！」

厄介で愉快的なウィーズリー家の双子の登場だ。見た目も中身も声も同じ彼らは、互いの両腕を繋いで輪を作ると、中に僕らを閉じ込めてグルグルと回り出した。

「気になってたんだ」

「僕ら以外に双子が入学すると聞いて」

「パチル姉妹のことかと思つたら」

「あのハリー・ポッターに双子がいたなんて！」

「しかも美少年と美少女ときた！ ズボンだつてかわいいよ、マリア」

「これで気にならなかつたらウソだろ？ スカートもイカすと思つて、ハリー」

「ぜひと双子同士仲良くしようじゃないか！」

僕らと違い、顔も仕草も同じためにどつちに話しかけられてるんだかまるでわからない。きつと、どつちがどつちと説明されたところで結局わからないにちがいない。——それが、『僕』の知る彼等だった。

「紹介がまだだつたな。こつちがフレッド」

「そしてこつちがジョージ」

「いいや待てよ、もしや君がジョージでは?」

「おいおい、まだ寝ぼけてるのかいフレッド。さてはフレッドのフリしたジョージだな?」

「よし、ロンに聞いてみよう!」

弟をオモチャにするためハリー達の寝室へとすっ飛んでいった二つの赤毛に、ハリーとクスクス笑い合う。後ろから、未来の親友の「ウワァ!」なんて情けない悲鳴が聞こえてきて、さらに腹を抱えて笑った。

「あなたたち、早いね。笑い声が部屋まで聞こえていたわ。ねえ、マリア。わたしの髪、とかしてくれる? 毎朝ひどいのよ」

「ウーン、ハリーのほうが上手だよ。僕の髪も、いつもハリーが整えてくれるんだ」

「マリアのほうが上手だよ。僕のこの髪が落ち着いていられるのは、マリアのおかげだよ」

「どっちだっていいわよ。このままじゃ朝食に遅れちゃう。でも、ハリーは着替えなくちゃいけないわ」

才女のごもつともな意見に、ハリーから剥げたブラシを受け取って、ハーマイオニーをハリーと同じくブラッシングの定位置へと座らせて。

「……あー、ハーマイオニー? 君のブラシを使わない?」

「え?」

「ほら、これが僕らの愛用品」

「………わたし、予備のブラシを持つてるから一つあげるわ」

うん、ありがたい。

制服に着替えたハリーと兄に叩き起こされたロン、そして未だ、あんなブラシでこの髪の毛の艶を作り上げるなんてありえないわ、と僕の毛先を捕まえぶつくさ呟くハーマイオニーと共に双子のウィーズリー案内のもと朝食へと向かう。

梟たちが一斉に荷物を運ぶさまをあんぐり見上げているハリーとハーマイオニーを横目に、ローブの懐から一枚の羊皮紙を取り出す。そこには『おやすみ、マリア・ポッター』と誰かの筆跡で書かれている。なんとも神経質そうな字だ。

それを指先で擦ってみれば、文字は羊皮紙の中へと沈むように消えていった。

「シー……とりあえず……オ、ハ、ヨ、ウ——と」

食器の影に隠れながらさっさと書き込んで、再び指で擦ればそれも消える。そして少しすると、じわりじわりと先程の筆跡の文字が紙面に新たに浮かんできた。

『寝るなど言っただろうが』……無茶言うよ、ドラコのやつ』

まるで即席文通のようなこれは、僕が密かに作り上げた僕らだけに伝わる伝達方法なのだ。ダンブルドア軍団時の通信手段としてハーマイオニーが用いたコイン、忍びの地図、そしてリドルの日記から発想を得たものだった。

インク——見えればなんでもよい——を使って書き込めば対になる紙にそのままが浮かび上がり、また浮かんでいる文字(あるいは絵)は指で擦れば消える。我ながら、非常に便利なマジックアイテムであった。

なにせ、大人になれば緊急の連絡といえどもっぱら守護霊を飛ばすこととなりがちだが、ここホグワーツでおいそれと新入生の僕が牡鹿を飛ばすわけにもいかない。梟だつて簡単なメモには向かない。そ

の点、この連絡用羊皮紙——通称『通信紙（マリアの大変テキストウな命名）』は学生の味方であった。

難点としては、コインのように熱を発したりはしないから連絡が来ていても見なければ気付けないこと、書くというアプローチが必要なこと、長話には向かないこと、書き込んだそばから移るので修正は利かないこと、対の紙でないと意味がないこと——そして、双子のウィーズリーのような悪戯好きの生徒に見つかれば一巻の終わりなことくらいだった。

「——わっ！ ヘドウィグ？ ああ、おはよう。これ、食べてくかい？
……ありがとう」

いつの間にやってきたのか。甘く耳を啄んだ愛くるしい彼女に、咄嗟に顔を上げれば、ハーマイオニーが怪訝に僕の手元を覗き込もうとするとそこらだった。ありがとう、ヘドウィグ。君は本当に優秀な相棒だ。

通信紙をポケットに押し込んでから、札を込めて一番綺麗に焼けているトーストを空飛ぶ彼女へと贈呈する。

「マリアってヘドウィグの扱いに慣れてるよね。僕に内緒で梟の友達とかいた？」

「僕よりハリーが妖精なんかの友達を僕に黙ってないかが心配だよ。うっかり仲間と間違えられて連れていかれたりしないですよ？」

「そんなのいないよ……この歳でチェンジリングしてどうするのさ」

隣の弟がファンシーなことを言い出したのでからかい返して見れば、なにやら向かい席のハーマイオニーとウィーズリー双子がココソ囁き合っていた。

「子猫と子犬？」

「わたしは子リスと子うさぎだと思っわ」

……………なんの話？

授業が始まった。勉強が食事よりも睡眠よりも恋人の世間話よりも大好きなハーマイオニーは、それはそれは張り切っていて、授業に必要な本(でも勉強の本だ!)を何冊も持ち歩いていた。彼女の、辞典みたいな本がたくさん詰まったショルダーバッグを振り回したほうが、杖を振るよりもよっぽど殺傷能力が高いんじゃないかと思えた。そのうちに検知不可能拡大呪文だとかを覚えるんだろうけど、それにしてもガッツがある。

そんなハーマイオニーとは対照的に、ハリーとロンは既に七年分の苦勞をした、と言わんばかりの顔でとぼとぼ廊下を歩いていた。——ホグワーツが広すぎるのだ。

まず、階段が百四十二個ある。しかもただの階段じゃあない。動く・消える・足を引っかけると——エトセトラ。そんなもって、行き着く先の扉も一筋縄ではいかないのだ。たとえば、ドアノブが五つもあらくせに真に扉を開く鍵はドアノブカードだったりするし、開いた先が崖だったりする。まずまず、一年生がこのホグワーツ内において、一人で目的地へとたどり着ける可能性はゼロだった。——僕とドラコと記憶力お化けのハーマイオニー以外は。

そこで、ハーマイオニーも行ったことのない教室だとか、ハーマイオニーとはぐれてしまった場合だとかにさりげなく二人を誘導している——案の定バレた。ハーマイオニーに。

「マリア？ やっぱりあなた、ホグワーツに通ってたこと、あるでしょう。パーシーを追いかけた時だって、あなた、まるで迷わなかったわ」「たまたまだよ。迷わないんじゃないかと、ちよつと運と勘がいいだけ」「そんなテキトウでごまかされないわ。白状なさい」

「ほんとうだって。君がとっても頭がいいのと同じだよ。君だって、

入学する前から呪文をそんなに覚えられないはずがない！ なにかトリックがあるんだろう！ さてはホグワーツに通っていたな！ なんて言われたって困るでしょう？ 僕の場合は、方向に関してちよつと人より感覚が鋭かった。それだけの話だよ。……………ホグワーツ限定で」

「……………はあ。もう。そういうことにしておいてあげる。マリアってば、実は秘密主義で頑固者なんだもの。頑固なのはあなたの兄も同じだけど」

「僕が姉だよ」

「あら、やっぱり？ そうだと思ってたの」

ハリーが聞けば拗ねてしまいそうな会話の途中に、天文学の先生へなにやら質問に行っていたハリーと付き添いのロンが戻ってきた。隣から、やっぱり子うさぎだわ……………とかいう不思議な呟きが聞こえてきて、ちよつとそれ詳しく、と思いつつもまずはハリーを抱き留める。

「マリア！ 僕、やつと聞けたんだ！」

「なにを？」

「——スコープウス！」

おや。片眉をピクリと上げて言葉の続きを待つ。

「夏の星座で、さそり座のことなんだって！ ドラコ、もしかして夏生まれなのかな？ それともさそり座だから冬？」

「……………わざわざそれを先生に聞いてきたの？」

「ドラコに機会があれば調べるって、僕、前に約束したもの」

そう無邪気に笑う弟に、たまらなくなつてさらにきつく抱き締めた。廊下でイチャつくなポッターツインズ！ なんて野次がどこかからか飛んできたけれど関係ない。

ああ、ドラコ、聞こえますか。僕の弟は今日も天使です。

同じハリー・ポッターだつていうのに、どうしてここまでちがうだろう。——やっぱり、環境かな。僕も、ロンとロンの兄さんたちのじゃれ合いを眺めては、僕に兄弟さえいればなにかが違ったかもしれない、てずつと思つてたもの。

後で狂つたように通信紙にハリーのことをつらねるだろう自分を想像しつつ、ハーマイオニーに引つpegがされるまで僕はハリーに頬擦りし続けた。

——複雑な何かが心の底で渦巻くには、気付かないふりをして。

「ちなみにドラコは六月生まれだよ」

「えー!？」

さて、問題は変身学の授業で起きた。——杖が反応しないのだ。

内容は至極簡単な——マリアやドラコにとつては、だが——マツチ棒を針に変えるというもの。失敗するわけがない。

だというのに、マツチ棒はいつまで経つても転がるマツチ棒のままだった。

一先ず考えられる要因としては、姿現しの例のように必要魔力に一歳の体が追いついてない場合だが——ありえない。

だつて——たかが——マツチを針にするだけなのに？

現にマリアは、今までもハリーの前で杖なしで小さな魔法を使ったり、ドラコと出会つてからは通信紙なんてデタラメを造り上げている。明らかに理由にならない。

「マリア？　これ、むずかしいよね」

「あ、う、うん。そうだね……」

同じく隣で唸っているハリーに曖昧に頷きながら、杖でぺちぺちとマツチをつついてみる。

「おい、どういふことなんだ。どんな杖でも使えとオリバンダーさんは言っていたのに。」

「……………」

杖を振った際の、魔力が杖芯を通っていく感覚に狂いはない。感覚からして使えない筈がないのだ。しかし、杖はウンともスンとも言わない——

結局、針の提出ができたのはハーマイオニーだけで、僕はヘドウィグが選んでくれた杖を握っては難しい顔をするしかなかった。

「——と、いうわけなんだよ、ドラコ」

「そもそもどの杖でも使えとかいうトンデモな報告を僕は今はじめて聞いたんだが？」

通信紙を使って、巨大イカが住んでいると噂の湖の近くで待ち合わせしていたスリザリンの彼に、むいむいとほっぺを押される。

せめて杖先はやめてくれよ、杖先は。君に色々と話すが多すぎてすっかり忘れてたんだよ……。

「呪文学はどうしたんだ」

「呪文学ではピューン、ヒョイ。しかしてないもの」

「ああ、そうか」

初心者への配慮に素振りからだ。他には、フリットウィック先生がハリーの名前に驚いて台から転げ落ちるところしか授業では見ていなかった。

「魔法が使えなくなったわけではないんだろう？」

「……………」

人差し指を湖へ向けて小さく振る。ヒュン——いくつかの光が水の上で踊って、やがて水面に落ちた。

「やっぱり僕は杖なしで学生生活を送るしかないのか……」

「杖なしで軽々と魔法を使っておきながらほざくな」

僕がわりと本気で落ち込んでいることを察したのか、躊躇いがちに僕の頭を撫でる彼の手は優しくかった。

不器用な慰めに励まされて、もう一度、イトスギの杖を握って湖に向かって振ってみる。

「インセンディオ」

——ゲプ。

間拔けな音と共に、杖の先っぽからちよろりと火が出るだけだった。マグルのライターよりひどい。

「……………」

「……………」

「ポリジューズ薬でマリアに化けてるロングボトム、なんてオチはないだろうな」

「ここで『前の君』の恥ずかしい話をしてやろうか」

「冗談だ」

次に、杖なしで同様に唱えてみる。

「インセンディオ」

——ボウツ！

それなりの勢いで炎が湖をなめていった。イカの触手らしきものが、湖の平穏を荒らす僕たちへと抗議するようにペロンツと水面を叩

いた。

「……………ドラコ、僕、嫌な予感がしてきた」

「奇遇だな。僕もだ」

「……………借りていい？」

「ああ、存分にやれ」

ドラコの懐から出てきた、ある意味で思い出深いサンザシの杖を握る。……………これで、かつてはあのヴォルデモートにも立ち向かったのだ。

「インセンディオ」

——ゴウツ!!

今までで一番の火力——僕が思い描いていた通りの魔法が、杖先より放たれた。そう——まるで、僕が『僕の』杖を使ったみたいだ。

「……………」

「……………オリバンダー氏は間違っていないなかったわけだ。むしろ間違ってたのは杖の方か」

容赦なく現実を突きつけるドラコの言葉に、ぐったりと脱力してしまふ。サンザシの杖をドラコへと返して、僕の——僕の^{マリア}のものになった筈のイトスギの杖を握って。

「君、もしかして——やる気ないだけ……………？」

心做しかほんのりと持ち手に熱がこもった気がした。

「そんなあ……………」

「杖を替えた方がいいんじゃないか。オリバンダー氏だって売る気は

なかつたんだらう。新しいのを買えば、」
「——いや」

ローブの中へと『僕の』杖をしまい直す。

「せっかくヘドウィグが選んでくれたんだもの。なにか意味があるんだ、きつと。僕はこの子を使い続けるよ」

「授業はどうするんだ」

「当分は杖を振って『フリ』だけしながら杖なし魔法ワンドレス・マジックで乗り切るさ。……どうしても時は助けてくれる？ 君の杖で、あの時みたいに」

「……そんなもの、聞くな」

「ありがとう」

彼なりの快諾に、ようやく落ち着いた心持ちで笑みをこぼす。

原因さえわかってしまえば、あとは僕と杖との粘り勝負だ。諦めだけは悪い僕の底力をわからせてやろうじゃないか。蛇は執念深いのだから。

「それにしても、君と同じでおかしな杖だな。素材はなんだ？」

「どういう意味だよ。……えーと、イトスギと——杖芯にセストラルの尻尾、だったかな」

「セストラルの——？ オリバンダー氏はユニコーンの毛とドラコンの心臓の琴線、それから不死鳥の羽根しか杖芯に使わないんじゃないかなかったか？」

「らしいね。だから、売り物じゃないんだろ？」

「……ふうん」

立てた膝に頬杖をついたドラコは、どこか先の見えない瞳で呟いた。

「セストラルの尾——ね」

金曜日。とうとうこの日がやってきた。——スリザリンとの合同魔法薬学の時間だ。

スネイプって奴は鼻肩をするんだ——そうげっそりした顔でぼやくロンと共に、ハグリッドからお茶の誘いの手紙を受け取って最近やっと子供らしい膨らみになってきたほっぺを赤くするハリーを微笑ましく眺める。手紙には『親愛なるハリー、マリア（お前さんのことだから勿論そこにいるな？）』とあったので、手紙はハリー宛だったが僕も遠慮なくお茶会についていくことにした。

「——ハリー・ポッター。我らが新しいスターだね」

放課後に控える約束のおかげでご機嫌だったハリーは、そしてスネイプ先生の一言により極寒へと冷え込んだ。その人の、ハグリッド作・糖蜜ヌガーよりもねっとりとした悪意の声に、小さな弟はすっかり震え上がっていた。ああ、まあ、うん……こればかりはね……。

隣であんまりにも怯えた風にはハリーが硬直するので、ここ何度かと同じように机の下で手を握っておく。ハリーの様子に、教室の中央からきれいに分かれた緑と赤の、スリザリン側の席からクスクスと嫌な笑い声が聞こえたが、誰が主犯というわけではないらしかった。——前はマルフォイが筆頭だったのに。

そのドラコは我関せず顔でそっぽを向いていた。なるほど。さてはあいつめ、これからはどっち付かずのスタイルでやっていくつもりか。

そんなドラコの作戦は効果覿面だったようで、ロンは元から親の影響によりマルフォイと敵対した態度を取っていたが、ハリーもシヨックを隠しきれず困惑の表情でドラコを見ていた。察するに——『どうして止めてくれないんだろう。友達なのに』辺りか。

これでもマシなんだよ、なにも知らない僕^{ハリー}。性悪のマルフォイは

もつとひどかったんだから。

スネイプ先生の聞きようによってはポエミーな演説を、虚無感に浸りながらぼんやり聞き流す。すると、ほんの一瞬——その人と目があつたような気がした。

それは、咄嗟に気のせいだと思ふくらいには一瞬で、既に完璧にそらされてしまったけれど、思えばマリアになつてから初めてのことだつた。

ああ、声だけで、仕草だけであんなにもムカついてしかたなかつたのに——あなたの声を再び聞ける幸福が、痛い。苦しくて、笑つてしまふ。まいそうだ。

「ポッター——」

「はい」

先生からの突然の指名に、兄弟揃つて声を上げる。

「……ミスターポッターの方だ」

「……はい」

この段階のハリーにその人への好印象なんてものが抱けるはずもなく、厄介なのに目をつけられたと実に苦々しそうな弟の声に隣で吹き出すのを堪える。

「すぐくわかるよ、ハリー。僕も通つてきた道だもの。後でその鬱憤、スネイプ・いびられ熟練者の僕が聞いてやろうね。」

それにしても、初っぱなからなんだらう。その顔が気に食わないからグリフィンドール減点！とか？ 冗談じゃなく本当にやつてくるからなあ、この根暗野郎。もしくは不快な声を聞かせたので減点！とか。……それは、ちよつと、かなり、面白いかも。

スネイプ先生がこちらを見ないことを逆手に、口元を頬杖で隠しつつ対峙する二人を見上げる。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか」

「あす……?」

こいつは今何語を話したんだ? そんな顔をしているハリーに、ああー! と、絞り出した記憶と共に項垂れた。

そうだった! スネイプってば、何も知らないってわかってるくせして『僕』に一年生じゃない範囲の問題を出してきて! ずるいったらない!

今ならわかる。机に出していた通信紙——一番近くにあったのだから仕方ない——に答えを書いて、ハリーのローブの袖を引く。

「……い、いけるしかばねの、みずぐすり? です。……あ、眠り薬です!」

カンニングしたことが丸わかりのお問拔けな返答だったが、まあ、答えられただけよしとしよう。次はなんだったつけ……確か、ええと……。

「では、ベゾアール石を見つけてこいと言われたら、どこを探すかね」

「……………山羊の、胃の中です」

「モンクスフードとウルフスベーンのちがいは」

「ありません。どちらもトリカブトです」

「……………よろしい。ミスポッターはよく予習してきたようだ。諸君、なにをしている、さっさとノートに取らんか!」

次にスネイプ先生の不機嫌の矛先にされてはかなわないと慌てて周りがペンを握るのを感じ取りつつ、ハリーとバレバレだったねと小さく笑い合う。ハリーが前を向いたところで、通信紙には『説明が雑だ。ちゃんと覚えておけ』なんて神経質なお叱りが浮かんでいた。

こういうところが君はママなんだと隠れて笑って——

黒々としたトンネルのような瞳が、僕を見ている気がした。

授業はとつても簡単な——例にもれずマリアとドラコと、ひよつとしたらハーマイオニーにとつても——おできを治す薬の調合だった。ハリーとペアを組んで無難に仕上げたところで、隣の席から絶叫と強烈な緑の煙が上がった。こたびもネビルがなにかやらかしたらしい。懐かしいな、このかんじ。あの丸顔のおっちょこちよいがそのうち先生と呼ばれるようになるんだから。ネビルは決してスクイブじゃないんだ。

「マリア！ ほけほけしてちゃダメだよ！」

大惨事の現場だというのに和んでいる片割れに、じれったそうにハリーがその手を取る。しかし、こぼれたネビル失敗作の毒薬がマリアの元へたどり着く前に、スネイプ先生の杖の一振りですれらは消え失せた。

「おおかた、大鍋を火から降ろさぬうちに山嵐の針を入れたのでしような？ ウィーズリー、ロングボトムを医務室へ。——さて、ポッター？」

「はい」

「……兄の方だ」

「私が姉です」

「……弟の方」

「僕が兄です！」

「やかましい！ ポッター姉、ポッター兄！ これでいいかね!？」

「はい」

眠っていてもそこにありそうな怒りジワを深く深く刻んで、スネイプ先生はハリーを睨む。——ハリーだけを睨む。

「何故、ロングボトムを止めなかった？ 彼が失敗すれば自分がよく見えると思っただのかね？ え？」

「ハリーに他を見ている余裕はありませんでした。もちろん、私にも初心者ですもの。おわかりでしょうか？」

「……君は、はじめてにしては迷いなく調査していたようにお見受けしたかね」

「見てたんですか？」

「……………」

ほんとうに？ だって、今だって僕の方なんかチラリともしないで、熱心にハリーを見てるのにな？ ハリーの手元ばかり確認していたのにな？

——本当は、僕のことも見えてくれた？

「……ポッター、君たちの無礼な態度からグリフィンボール二点減点」

それだけ吐き捨てて、スネイプ先生は壇上へと戻ってしまった。僕はその背中を目で追うしかできなかった。

スネイプ先生は振り返らなかった。——決して僕を見^{マリア}なかった。

真つ暗になっていく目の前を繋いだのは、片手に込められたハリーの体温だけだった。

茶会の為ハグリッドの元へ向かおうとするハリーとロンに、用を思い出したからと途中で別れ、道を引き返す。

「——スネイプ先生。よろしいでしょうか」

案の定、ノックに返答がなかったので問答無用で開いてみれば、スネイプ先生は扉に背を向けた状態でなにやら鍋をいじっていた。

「質問かね。ミスポッター」

「人と話す時は相手を見るのがマナーではありませんか」

「……なるほど、まだ減点され足りないに見える」

「先生」

嫌味は健在だというのにそれでも振り返らないスネイプ先生に、ならばとこちらも無礼に切り出す。

「ハリーが嫌いですか」

「授業内容以外の質問は控えていただきたいものだね、ミスポッター。この時間がいかに貴重で、」

「では、私のことは？」

「ミスポッター……我輩は、君は頭に何もつまってない弟とは、ほんの少しくらいは違おうと評価していたのだが？」

「先生、こつちを見てください」

「黙れと言っているのがわからんかね、ミス——」

「僕はマリアです！」

「——貴様の名など知らんツ!!」

べつとりとした髪が大きく振れ、鉤鼻と共に強烈な感情のこもった瞳がマリアに向いた。ようやく正面から見られた色は——真つ黒だ。

「——」

そしてそれは呆気なく逸らされる。ああ、知っている。僕はこの顔を知っている。——どいつもこいつも、後悔に痛む人たちの顔。

「僕は、マリアです。マリア・ポッター。誰がなんと言おうと、誰に似ていようと、ジェームズとリリーの子のマリアだ。………失礼しま

す」

背を向ければ、今度は彼の方から視線を感じた。——ここで振り返ったところで、あなたはまた、目をそらすくせに。

「あなたと同じように僕を見た人を知っています」

扉に手をかける。開いた途端、地下の冷たさが足元から這い上がってくる。

「——ペチユニア・エヴァンズ」

閉める間際のそれが貴方に届いたかどうかなんて、もう、どうだつてよかった。

「玉砕したみたいだな」

「そう見えるならそうなんだろうね」

地下を上がったそこで、壁に背をつきキザったらしく僕を待っていた待ち人へと投げやりに返す。

「今ならまだ昼食に間に合うが？」

「気分じゃない」

「だろうな」

慰めるでもなくただ隣を歩く彼の距離感が心地よかった。

「僕、なんでマリアなんだろうって、考えたことがある。マリア・ポッター……答えは簡単だ。すぐにわかった。考え込む必要すらなかつ

た。——母親がリリーで、娘がマリア。ほら、よくある話だ」
「……………」

「母から連想された名前だ」

百合^{リリー}は聖母マリアを象徴する花。

なんて安直なのだろう。リリーだけを見つめて付けられた名前——
——とつても、『らしい』じゃないか。

「杖を貸してくれる？」

「……それがお前のためになるのか？」

「うん」

ドラコは躊躇うことなくこの手に自身の杖を乗せた。

「——デイフィンド」

「なっ——!?!」

背中の中ほどまで伸びていた赤毛が床へと散らばる。首元に爽やかな風が通った。シルフの祝福のようだ。

「君、なにを——」

「決めたんだ」

杖を振って、地面に咲いていた赤い花を消しさる。

「セブルス・スネイプを——救う」

何も守れなかったと、声もなく嘆くあの人の目を——変えてみせる。

悪夢だった。

少女は、セブルス・スネイプにとって罪を突きつける悪夢そのものだった。

マクゴナガルがその名を呼んだ瞬間、体に流れる血のすべてが凍った心地になった。後ろ姿はおそろしいくらいに彼女そのもので、憎い男の生き写しの兄弟の世話を見ている姿も苦々しいほどにそっくりで。

——マリアと。ハリー・ポッターが呼ぶたびに耳を塞ぎたくなかった。

マリア。

ああ、君は、どうしてその名をつけたのだ。——リリー。

残酷で甘い声が脳裏に刻まれる。罪の人、セブルス・スネイプを切り刻む。

——セブ！ 聞いて！ ご近所さんにね、赤ちゃんが生まれたの！
とつてもかわいくて……こんなに小さいのに、わたしの指を掴んでね、ちつとも放さないの！

——わたしもいつか誰かと結婚して、その人との子どもを生むのかしら。ママって呼ばれるの。チュニーはおばさんよ！ あっ……おばさんはチュニー、嫌がるかしら……。

ねえ、セブ。——あなたなら、どんな名前をつける？

間抜けで夢見がちで愚かな少年は、答えた。

いやだ、わたしのこどもの話じゃないわよ。あなたが我が子に名付けるなら、てこと。

……でも、それって素敵ね。わたし、ママがわたしたちにつけたみたいにお花の名前にしようと思ってたんだけど——素敵。

マリア——素敵な名前だわ——

リリー・エヴァンズとセブルス・スネイプの友情は、最期のその時までついで回復することはなかった。すべて、愚かな男の自業自得だ。——それなのに、何故。

ふと、額の傷を抑えた兄弟を介抱していた少女の目がスネイプへと向けられた。

「——」

ハシバミ色の瞳は、すべての憎しみを込めて男を睨んでいた。

最愛の妻を奪われた男の目が——奪った男を見ていた。

たえられなかった。咄嗟にクイレルへ顔を向けて、ハシバミの瞳から逃れた。

セブルス・スネイプはこの日——彼女に殺される自分を、願った。

快晴の下、持参した自慢の箒を持つ者、あるいは初めて箒を手にする者、またあるいは父母・兄妹のお下がりだったり、十人十色の顔付きで子供たちが飛行場に並ぶ。グリフィンボールとスリザリンの、嬉し恥ずかし合同飛行訓練の日がやってきたのだ。

久々に人目はばかりのことなく空を楽しめるのだから、僕は朝から機嫌が最高潮に良かった。

ぐるり。周囲の顔を見回す。期待しながらもやっぱり不安そうな弟やとにかく本にすがりつきたいハーマイオニーを宥めつつ、ふとドラコのいるスリザリンの列を見る。

前は確か、マルフォイのくそつたれ——この頃のドラコは本当にくそつたれだったんだから許してよ——が、ネビルをからかって窃盗までやらかして——かわいそうな思い出し玉のことだ。ちなみに此度もネビルの元に届いていた——それを僕が取り戻しに行つて……あわや退学つてところで思わぬチャンスを手にしたんだっけ。——クイデイツチ最年少シーカーの座を。

マルフォイの嫌がらせが結果的に契機になってしまったわけだけど、今のドラコにそんな幼稚な真似をする理由はない。ドラコ・マルフォイとハリー・ポッターがライバル関係にある事実がこの世界には存在しないのだから。

……まあ、ハリーのほうは先日のお合同魔法薬学の一件でドラコに対して若干不信気味になり始めてるけどね。心は信じたいけど、本人の態度と周囲の偏見に振り回されてる——といったところか。

それもドラコの計算のうちだろうから、僕としては庇うべきなのか乗ってやるべきなのか、判断がつかなくて今のところは様子見だ。

さてさて、ドラコ・マルフォイという英雄の噛ませ犬役がない今、ハリーのことはどうなるのだろう。

僕としては、最終的にクイデイツチはやってる余裕がなくなつてしまったし、今思えばクイデイツチ狂のオリバーにちよつとした洗脳を

受けつつ睡眠時間も削られて、デメリットの多さが目につく。当時は圧倒的に自分に自信がなかったから、箒乗りの技術くらいしかするものがなかったけれど……。

たかがスポーツ一つを取っても学業における損得を浮かべる辺り、社会に揉まれたなあ、となんとも言えない心地になる。家庭と仕事を持つと、無鉄砲な子供のハリー・ポッターのままではいられなくなるのだ。

そんなわけで、僕はクイディッチ選手になるつもりはないけれど——ハリーはどうするのだろう。

マダム・フーチ号令のもと、上がれと箒を呼び起こす。すんなり手にできた生徒は少数で、やっぱりハーマイオニーの箒は転がるだけでネビルの箒は死んでいた。僕とハリーとドラコは言わずもがなだ。

「いいですか、私が笛を吹いたら上がるのですよ。一、二の——クラ！ 戻ってきなさい！」

「ありやあ……」

「またか……」

そんな気はしていたけれど、やっぱりネビルが笛を切る前に飛び上がってしまった。緊張さえしてなければ、あんなに不器用じゃないんだけどな、彼。本当は本当に出来る子なのに。

案の定箒に振り落とされてしまったネビルが、そこそこの高さから落ちてくる。知ってて彼に怪我をさせるのも悪いと、懐に忍ばせていた杖を取る。……さすがに、人命が懸かっている時くらいは言うことを聞いてくれよ？

「——ネビルッ！」

しかし、僕が彼に浮遊魔法をかける前に、ハリーが箒で飛び上がってしまった。——彼とは違い、完璧なコントロールで。

「ダメよ、ハリー！」

「降りてきなさい、ポッター！」

再度悲鳴が上がる中、どさくさに紛れてドラコの隣へと移動する。

「……『前』ってこんなだったっけ？　ねえ、ドラコ？」

「聞くな。僕もあんまり覚えてない」

「僕は君がネビルに窃盗を働いたことをよく覚えてるけど」

「ぐっ……」

彼いわくの黒歴史をつついてささやかに報復しつつ、慌てふためく周囲と共に二つの影を見守る。ハリー、箒一本でどうするつもりなんだろう。

ハリーのネビル救出劇は非常にアクロバティックだった。

なにも難しいことはない。空中でネビルの腕を取って繋ぎ止めた、それだけだ。——それが、なにより単純でむずかしいことなのだと、本人だけが知らない。

縦に伸びた影がゆっくりと降下するのを、うちの弟はめちやくちやだな、なんてドラコと笑いながら見上げる。僕だってあんな無茶はしないぞ。……いや、前の僕なら^{ハリー}するな。見てる側はこんな気持ちになるのか。散々ハラハラさせてごめん、ロン、ハーマイオニー。ハーマイオニーに関してはどっこいどっこいだと思ってるけど。君はほんとうに度胸のある女性だよ。

騒がしかった地上は、安堵からすっかり終息モードになっていた。そこに。——ポロリ。

「ん？」

ネビルのローブが揺れた。ハリーによって宙に繋がれているネビルとは違い、それは当たり前前に地面に向かって加速していく。

今朝の朝食の席でのネビルの嬉しそうな声を思い出す。——おっ

かないけれど大好きなおばあちゃんからの贈り物……大切、だろうな。

「——ハリー！」

「——！」

一言。名前しかないそれに、ハリーは頷いた。そして——ネビルを手放した。

先程とは比にならない悲鳴が上がる。みんなの注目はネビルへと一直線に向いている。——だから、やれる。

「ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサ」

小声で唱えたそれに杖は応えてくれた。ネビルが泣きべそでぐしゃぐしゃの顔のまま、ローブに吊られる形で再び宙に停止する。浮遊術は物を対象に扱う魔法なので、人間や生き物には通用しないのだ。そのため、標的を彼のローブへと変更したわけだ。

ゆうっくりとネビルの震える足が地上へと戻る。その間、ハリーは高速で降下し、地面に叩き付けられる寸前で轉身させた。手にはネビルの思い出し玉があった。

ごめんよ、ハリー。面倒な方を任せて。さすがにあの速度の中、見えるか見えないかの玉に魔法をかけるのは難しくくて。その点、ネビルが的にしやすいフォルムをしていてよかった。

名前ひとつで完璧な疎通ができる双子の存在に、限りない幸福感を覚える。うちの弟はすごいんだ。……僕なんかより、ずっと。

ヒーローの凱旋に現場が沸く。それをマダム・フーチが厳しく叱咤すると、次にはほんのり微笑んでグリフィンドールに十点、スリザリンに五点をくれた。

何故スリザリンに五点なのか。それは——

「機転を利かせた素晴らしい魔法でした。——ミスターマルフォイ」

僕は杖をさつさどしまつていて、隣のドラコは咄嗟に取り出した杖をネビルに向けて硬直したままだった。……そういうことだ。

僕が素知らぬ顔をして白々しく拍手するのを、ドラコはそれはそれは苦々しく見ていた。いい気分だ。

念の為ネビルを医務室へと送って——魔法薬学の件で先日運ばれてきたネビルが再び医務室送りとなり、校癒のマダム・ポンフリーはさぞや驚いたことだろう——授業が再開される。それから特に問題も起きず、ハリーやロンなどの問題児たちがよく見える位置を陣取ってふよふよのどかに浮いていた。

このあいだ髪を切ったおかげで、首元を風がくすぐって気持ちいい。

「——これ、ハリーが文句を言ったんじゃないか？」

彼の手が優しくうなじを撫でていく。こいつは僕に、お前はレディなんだと口うるさく言うくせして、本当の意味で僕をレディ扱いしようとはしない。いつだって触れてくる手は急だ。……僕も女扱いされても困るだけなので、彼くらいの遠慮のなさが丁度いいのだけだ。

「言われたよ。僕の知らないところで切ってきてきちやうなんて——て、すーつごく拗ねられた。でも、僕が洗うのも解かすのもめんどうなんだってぼやいたら、マリアはそういうやつだよ、て笑われた」

「だろうな」

「姉さんはちよつと遺憾だよ」

ピュアピュアの弟がしたたかになってきている気がする。たぶん、ロンとウィーズリー双子の影響だ。……僕には覚えがあるからね、わかるとも。

「どうして切ったんだ」

「ドラコならわかってると思ったけど」

「……あの人への宣戦布告か？」

「ほら、ちゃんとわかってる」

並んで飛ぶ彼に、肩を軽くぶつける。

「——あんな顔、させるつもりじゃなかったんだ」

「マリア」

「調子に乗ってた。ハリーだった時に、父さんとスネイプ先生の問題を知って。それなら、僕が父さんじゃなくて母さん似だったなら、その通りになって。——あんなの、ハリーの頃より、ひどい」

遠くでハリーが僕へと腕を振っている。その隣で、ロンがハリーの挙げている腕を掴んでなにやら喚いている。片手飛行するなどかその辺りかな。それともドラコに対する威嚇か。——どつちでもいいや。こんなに、平和なんだもの。

「僕は母さんじゃない。あなたの守るべき人じゃない。守れなかった人じゃない。——それを、わからせてやるんだ」

どれほど『僕』があなたに感謝しているか。悔いているか。尊く思っているか。——知らずに死んでいった。ありがとうすら言わせしてくれなかった。……そんなの、ずるいじゃないか。

二人分くらい『僕』の礼を受け取ってもらわなくちゃ、割りに合わない。

「ハリーらしいな」

「どつちのハリー？」

「どつちもだ」

軽くなった髪を遊ばせて、もう一度彼の肩に赤を擦り付けてみる。……あ、ハリーがこつちに来る。ちよつと怒ってるっぽい。ロンは完全に怒ってる。地上近くで悪戦苦闘していたハーマイオニーが易々と飛ぶ二人を恨めしそうに見ている。

「……言い訳は君が考えろよ」

「なんの言い訳？」

「チツ、これだからポッターは」

「え、なんで今ケンカ売られたの？ 僕」

この後、スピード違反したハリーとロン、そして連帯責任として僕とドラコは、マダム・フーチにこつてりしぼられるのだった。解せない……。

「ポッター姉！」

「ハアイ、ハリーの姉ですよ」

今日も今日とて廊下にて名も知らぬ生徒に捕まったので、片手を振ってぞんざいに応える。シンボルカラーはブルー……レイブンクロー生だ。

「聞いたぞ、君の弟のこと」

「ポッター兄のこと？」

「そうそう、ポッター兄のこと」

名前も知らないけど、存外軽口に嗜みがあるらしいレイブンクローの少年とクスツと笑い合う。

ここのところ、なんだか——ハリーだけでなく、無名のマリアまでこのホグワーツにて不思議な認知の仕方をされるようになったのだ。

発端は、スネイプ先生がお茶目にキレた一件から——繰り返すが、スネイプの癩癩をお茶目と思っっているのは全校生徒を探してもマリアだけだ——愉快がった現場のグリフィンドール生により、ポッター双子の呼び名は光の早さで広まった。

マリアはポッター姉、ハリーはポッター兄、まとめる時はポッター Twins。ちなみに片割れに片割れのことを聞くときは弟妹とするらしい。……そりゃ、お互い兄弟だと譲らないけどさ。ちよつとした芸風ってだけなのに。

「もう噂になってるの? ——ハリーがシーカーになったこと」

——そう、一体どこから見ていたのか。ネビルとネビルの思い出し玉の件でマクゴナガル先生から呼び出しを受けたハリーは、晴れて百年ぶりの最年少シーカーとして抜擢されることとなったのだ。これが歴史の修正力ってやつか。

「そりゃあ、『秘密』だからな?」

「うーん、それならしかたない」

ホグワーツで秘密とは——みんなが知っている、の意だ。

「君は選手にならないのかい?」

「私、一年生よ? それにハリーほど上手じゃないもの」

「今年の一年生は優秀だって、フーチ先生が言ってたけどなあ」

「それ、たぶんドラコのことよ」

「ああ、いつも一緒にいるボーイフレンド……ゲツ、噂をすれば。じゃあまたね、マリア」

名無しのレイブンクロー生が慌てた様子で去っていく。入れ替わりに、後ろからやってきたドラコが僕の肩を抱いた。

「ドラコ、さっきの彼、知り合い？」

「君こそ知り合いじゃないのか？ 名前、呼ばれてただろう」

「全然。こっちは向こうの名前も知らないよ」

「……………へえ」

え、なんでちよつと怒ってるの。

「ドラコ？」

「それよりも、だ。ハリーのことだが」

「ああ、うん。君も見てただろ？ 無事にシーカーだよ」

「そうじゃない。そんな当たり前のことじゃなくて——」

……………ドラコ、『僕』がシーカーになるのは当たり前と想ってくれてるのか。それは……………うれしいかもしれない。ほんのちよつとだけだ。

「その様子だと知らないな？ あいつ——というか『君』、また決闘を受けてたぞ。君が抜けたあとの夕食で」

「へ？」

「夜の、トロフィー室で、決闘。介添人にウィーズリー。……………思い出したか？」

……………ええええええ!?

「どうしてそんなことになったんだ……」

「「パーキンソンが悪い」」

無垢で幼い声が三つ揃って返ってくる。寮の談話室でお約束とばかりにコソコソしていたハリーとロンとハーマイオニーだ。すっかり見慣れてしまった幼げな膨れっ面に、さてどうしたものかとこめかみを押さえる。

まさかハーマイオニー、君までだなんて……前回では止める側じゃなかったつけ？ 君。鬱陶しい、て思っちゃった記憶あるもの。

「だって、だって、あの女！ マリアをバカにしたのよ!?!」

「そうなんだ！ 僕らのマリアをハリーの腰巾着とか言ってる！ ハリーのついでだとか、双子のダメな方とか。ハリーがドジするのをフォローしてるのはマリアなのに。アイツ、君が美人だから目の敵にしてるんだよ！」

「そうよ！ 自分がブスだからってひがんでるんだわ、パグ女！ マリアくらい綺麗になってから大口叩きなさいよ！ その下品な口でね！」

「お、おぉ……」

やはり女の敵は女なのか。ハーマイオニーのほうが悪口が苛烈だ。そんなもって、母さんってほんとうに美少女だったんだなあ……。女性の目から見ても、これ程に顔面の評価が高いとは。リリーの血さまさまだ。

そして、ロンが意外に僕の^{マリア}のことも見てくれていた事実が嬉しくて、子供たちに対して呆れなくちやいけない場面なのにうっかり笑い出したくなってしまった。

「ハリー」

「僕も怒ってるよ。止めたって無駄だから」

「うん、ありがとう。僕もハリーがバカにされたら怒るから、それは止めないけど……流れは教えてくれる？」

ハリーの話はこうだった。

まず、パンジー・パーキンソンが「あら、ヒーローのポッター？

いつものでき損ないの腰巾着はどうしたのかしら？」と絡む。「あなたも大変ねえ。できの悪い妹を持って。知ってる？ スリザリンでは彼女のことを双子のダメなほうって呼ぶの」煽る。「そのくせ目立ちたがりだけは一丁前なのよね。どうせあなたのついでなのに」煽る。「女のくせにズボンなんてはいて。そのうちあなたはスカートになるのかしら？」イキイキと煽る。ここで何故かハーマイオニーがぶちギれる。(ほんとうに何故!?)

「マリアの事情も知らないのに、好き勝手言ってるじゃないわよ、ブス！」

そして勃発する女の鬨いと聞くに耐えない罵詈雑言の嵐。なまじハーマイオニーが語彙に溢れる才女だったばかりに、周囲もドン引きするレベルの応酬が繰り広げられたそうだ。これはロン情報。

そして怒り心頭のパーキンソンがハーマイオニーへと決闘を突き付ける。それを受け取ったのがハリー。(再び何故!?)

「それ、僕が受けてもいい？ ——この世の誰であろうと、マリアを侮辱するものは許さない」

なんだかんだ一番キレていたのはハリーというオチだ。「なら、介添人は僕がしよう」とロンが乗って、今に至る。

「……………」

まさか、かつてのマルフォイの役割がパーキンソンに回っていいようとは。これが、歴史の修正力だ。

「あの、うん……気持ちはずごく嬉しいよ、ありがとう。でも
………気をつけて、行つてきなよ」
「「うん！」」

三人の目が、絶対に止めてくれるな、止めたつて行くからな。と
爛々と語っていたので、僕は早々に諦めた。

許してよ、体はいたいけな十一歳の少女なんだもの。元気盛り三人
を相手になんかしてらんないよ……。

夜の十一時を回り、大変複雑な心境のままやんちや三人組を寮から
送り出す。そして通信紙を手にドラコへと書き出した。

『こっちは出たよ。そっちは？』

『フィルチに告げ口してご満悦で部屋へと戻った』

『やつぱり……。なにか思うことはありませんかね、マルフォイ君？』

『贖罪に三人を止めに行きますよ、^{マイレディ}ご主人さま』

『僕も行こうか？』

『人数が増えたつて邪魔なだけだ』

それもそうか、と書き込んだところで、人影にハッと顔を上げた。

「マリア、まだ起きてたの……？」

「——ネビル」

眠たげに目を擦りながらも不思議そうに周囲を見回すネビルに、
『ネビル』『きた』『あとで』と単語だけつらねて通信紙をパジャマのポ
ケットへとしまう。

「ネビルこそ。どうしたの？ こんな時間に」

「なんだか、眠れなくて」

「……僕には眠そうに見えるけど」

「うん。でも、眠れないんだ」

それはでまかせだとかではないようで、ネビルは心底困ったとばかり

りに眉を下げて目をしよげさせていた。

昼におそろしい思いをしたものね。まだ身体のほうの興奮状態が抜けてないのかもしれない。

「……それじゃあ、僕と話でもしてようか。ネビル、隣へおいでよ」

「いいの？」

「いいよ。ココアでもいかが？ 僕の飲みかけになっちやうんだけど」

子供たちが眠れない時、基本は母親のジニーだけど、時たま僕のほうへと逃げ込んでくることがあった。そんな時にもこうして、かわいい子たちに飲み物を持たせて宥めてやっていたのだけれど——彼にも効果があればいいけど。

「えっ、だ、だめだよ！ そんな！」

隣に座ったネビルはふわふわと怒った。

「え？ どうして？ ココア、苦手じゃなかったよね？」

「う、うん、好きだよ。よく知ってるね……じゃないよ。そうじゃないんだよ。僕、女の子の食べ物とか飲み物とかを男が軽々しくもらっちゃいけないって、ちゃんと知ってるんだから」

ネビルがバカにするな、という目をしたので、慌てて首を振る。

「ああ、ごめん、そういうつもりじゃなくて！ ……そっか、そうなるのか。ほんとうにごめん、僕、あの、わかってるとは思うけど、自分が女性だっという意識が薄くて」

今だって、同室の女の子たちの着替えはなるべく見ないよう心がけているし、彼女たちのどの男性が素敵だとかいう話には滅法ついてい

けそうにない。そんな彼女らはどうしてか、特に僕から聞き出そうとしてくるのだけど。女の子ってほんと、いつの時代もマセてる。

……そうだ、そもそも僕の恋愛観は今どうなっているのだろう。元々そういうの、あまり気になる人間じゃなかったから。

身近な女性といえバジニーとハーマイオニーくらいなもので、ジニーは勿論愛していたけど、ハーマイオニーとのスキンシップだって当たり前すぎてなんとも思っていないなかった。ハーマイオニーとなら飲みかけ食べかけのやり取りくらい、僕はしてしまえるだろう。ロンもなにも言わなかった。それが僕らの中で当たり前になっていた。

——でも、ちがうんだ。女の子ってむずかしい。

「——マリアはかわいいよ」

「え？」

ネビルは真っ直ぐに僕を見て言った。

「マリアは、かわいくて、美人で、でもそれを鼻にかけないで、優しくて——僕なんかにも、こうして良くしてくれる。いつも助けてくれる。とても、人として魅力的だよ」

「ネビル……」

「だから、あの、自信を持って、て、僕が言うのも変だけど……」

「……ううん。ありがとう、ネビル。励ますつもりだったのに、むしろ励まされちゃったな」

「え？」

きつと背を丸めるのがくせなのだろう。そうして、小さくなるようにする。なるべく人の目の中に入ってしまったまわらないように。僕に気付かないでと背中語っている。——それがネビルだった。

それでも、今のよう違うと思っただなら声に出して言える。怯えながらも、震えていても、彼はやり遂げる勇気を持っている。——彼こそが、真のグリフィンドール生なのだ。

「ネビル、君はすごい人だよ。君こそ、自信を持っていいんだ。僕は君を、心の底から尊敬してる」

「マリアが……僕を？」

「ああ。今は不器用でも、君は間違いなく偉大になる。僕が保証する」
「でも、だって——僕、スクイブかもしれないけど……」

「まさか。だとしても、こんなに勇気のあるスクイブを誇れない人はいないよ。君はスクイブじゃないけど」

「そう、かな……」

「そうだよ。ずっとハリーを見てきた僕が言うんだ。信じていいよ」

そう冗談めかしてみれば、ネビルはやっと憂いなく笑ってくれた。

「マリアが言うのと、ほんとにそんな気がしちゃうね。マリアってすごいよ」

続けて、ネビルがあふ、と大きくあくびをした。ようやく彼の元に本物の眠気がやってきたようだ。

「ありがとう、マリア。ハリーやロンや、みんながマリアに相談する気持ちかわかったよ。君って、同じ歳と思えないくらい落ち着いてるんだ。……また、話を聞いてくれる？」

「もちろん。いつでも、よろこんで」

「おやすみ、マリア」

「おやすみ、ネビル」

すっかり寝ぼけまなこのネビルが寝室へと戻るのを見届けて、実に有意義な時間だったと満足感と共に通信紙を開いたところで——

「——いつ、犬!!」

「ツシイー！」

命からがらとばかりに談話室に飛び込んできたお騒がせ三人組に、咄嗟に口元へと指を立てた。

「マ、マ、マリア、たいへん、ハア、ゼエ、」

「よしよし、まずは息を整えようか、ハリー」

「マ、マリア、犬が、わなで、ゲホツ」

「ハーマイオニーも。ずいぶんな格好だよ？　いつもはしたないって僕を叱るのはだれ？」

「ゼエ、ゼエ、ハア、」

「……ロンは話すのもむずかしそうだね」

服から髪からボロボロの三人をどうにか暖炉前のソファへと座らせて、僕が飲んでいたココアを一口ずつ回す。

……ウーン、やっぱりこの面々だと『そういう』意識はなくなっちゃうんだよな。

「それで？　犬って？」

僕の問いに、真つ先に回復したハリーが小さく叫んだ。

「僕たち、行っちゃダメだって言われてた四階に、行っちゃったんだ！

そうしたら、大きな犬が！」

「頭は三つ！　すごい牙してた！　あんなのに噛まれちゃったらひとたまりもないよ、この学校は化け物を飼ってるんだ！」

興奮のままにロンが付け加える。

「あなたたち、どこに目をつけてるのよ。あの犬の足元を見なかったの？」

「三つの頭でせいっぱいだったよ！」

「扉よ！ 足元に扉があつたの。きつとなにかを守ってるんだわ……」

「そんなの知るもんか！ 大体、君があそこで悲鳴なんて上げたりするから……」

「わたしのせいだつて言いたいのか!? 呆れた！ 甲冑を倒したのはあなたじゃない！」

「あれはっ——」

「ハイハイ、ストップ。二人とも落ち着いて。もうひとくちココアを飲もう。いいね？」

興奮したヒツポグリフを宥めるみたいに、二人の前に手の平を掲げてゆつくり振る。どうどう。元ハリーのマリアとしては、親友たちの感情に任せた口喧嘩なんてのはとうに慣れたものだが、こちらのハリーはまだ二人の間でオロオロするしかないのだから。かわいそうに。

弟の真つ蒼の顔を胸に抱き込んで、ぶすくれた親友二人の内のまだ会話になりそうなハーマイオニーへと問う。

「結局、パーキンソンは来なかつたんだね？」

「あつ、そう！ そうなの！ あのパグ女、わたしたちをハメたのよ。決闘場所に待ってたのはフィルチだったわ。でも、それをマルフォイが教えてくれたの」

「そのドラコはどうしたの？」

「あ、えつと……グリフィンドール寮の前までは一緒だったんだけど、そこからは……」

「そう」

ということは、なんだかんだ寮の前まで問題児たちを送ってくれたわけだ。ドラコは。パニックになる三人のおもりは大変だったろうな……後でちゃんと労おう。

それにしても。——三頭犬、かあ……。

「マリア？」

自身の頭を抱えるかわりに、ハリーの頭を抱える。

—— すつかり、忘れてた。

四階の謎を解く日が今日だったなんて。ドラコは賢者の石のことは知っていても、仕掛けの内容までは知らなかったはずだ。……いや、話したかな？ まあいいや。どっちにしろ、まさか今日、三頭犬にでくわすとは思わなかったはず。

ああ、明日ドラコに会うのがこわいなあ……聞いてない、割りに合わないってガミガミ言われるんだ。僕だって、ハロウインの日にクレルがトロールを入れることくらいしか覚えてないよ。はつきりした日付は。

「とにかく、疲れたでしょう。もう寝なさい。寝たら頭がすつきりするから。話したいことがあれば明日に聞く。まずは落ち着くことが大事だ。もうこんな時間なんだから。特にハーマイオニーは、自分の中で整理がしたいんじゃないかい？」

「……ええ、そうね。そのとおりよ。考えたいことがあるの。ココア、ありがとう。マリア、ハリー、おやすみなさい」

「……おやすみ」

「おやすみ、ロン、ハーマイオニー。今日は僕のために怒ってくれてありがとう。嬉しかったよ」

心ここに在らずなおやすみを交わして、ハーマイオニーは深刻そうに、ロンは依然釈然としない様子で自室へと戻っていく。それを見送って、なにも言わない腕の中のハリーの背を静かに撫でた。

「ハリー」

「……ドラコが、助けてくれたんだ」

「うん」

「ドラコは……悪いやつなんかじゃ、ないよね？」

「ハリーがそう思うなら、そうだよ」

「……うん」

ようやく彼の中でなにかがほどけたのか、強張っていた小さな体はゆるやかに弛緩した。

「……ね、ハリー。今日は一緒に寝ようか。前みたいに。このソファの狭さ、プリベット通りのベッドを思い出さない？」

「ギシギシ文句は言ってこないけどね」

「ソファの方が寛大だ」

「ふふふっ」

置きっぱなしになっている誰かの毛布を手繰り寄せて、ハリー共々身体に巻き付ける。

「おやすみ、ハリー」

「おやすみ、マリア」

ハリーの眼鏡を取って、額に口づけて。眼鏡をソファ前のローテーブルへ置いたところで、開いたままの通信紙に彼の文字が浮かび上がっていることに気付いた。

『四階』『ケルベロス』『説明』

——『おやすみ、マリア』

「……ははっ」

君は、今も、昔も——真からの悪人なんかじゃなかったんだ。……性悪ではあったけど。

——おやすみ、ドラコ・マルフォイ。

なんてものを飼ってるんだ、この学校は。

見た目は上品な口から開口一番に飛び出した文句に、ケラケラと腹を抱えて笑った。ドラコは笑ってる場合じゃないだろうと凄みつつも、僕につられたのか存外顔付きは穏やかだった。

「秘密の部屋にはバジリスクが住んでるし、禁じられた森にはアラゴグ——種類はなんだったかな、とにかく大きな蜘蛛なんだけど——それがいるし、よくよく考えればとんでもない学校だよね」
「……………」

「あれ、言ってるないっけ。アラゴグ。ハグリッドが飼ってるんだ。二年生の頃に僕とロン、危うく食われかけたんだから」

「……一度あの番人とはじっくり話し合う必要があるな」
「ほどほどにしてあげてね」

ただでさえ君のお父さんがバックビークを殺そうとするんだから。

「で？ あの犬はなんだ？」

「賢者の石を守ってる。賢者の石のことは僕、話してるよね？ 名前はフラッフィー。こちらもハグリッドのペットです」

「あの半巨人……………」

「その言い方はやめてよ」

反射的に、大きな友人の名誉の為に隣の友人を睨み付けた。しかし青い血の友人は、悪びれた様子もなくフンツと小生意気に鼻を鳴らすと、大人げなくそっぽを向くのだ。

まったく、こういうところは性悪のマルフォイのままだ。（同一人物だから当たり前なんだけど。）

さて気を取り直して。すっかり彼との待ち合わせの定番になって

しまった湖の畔にて、相変わらさず言うことをきかない杖を大イカの手先つぽいなにかに向かつて振りつつ、君は——と切り出す。

「——君は、いいの？　クイレルの頭に『アイツ』がくつついてるけど」
「今さらだろう」

「あと、君、ハリーに不審がられてる」

「それに関しては狙い通りだ」

「やっぱり？　友達になろうとか君から誘っておいて、ひどいやつだなあ」

「……あの時は、『ハリー』はハリーだと思ってたから。それでも、やることは変わらなかつたぞ」

「……ふうん」

ハリーを『僕』だと思ったから、あんな不器用な確認をしてきたんだ。……バカだなあ。

「ま、なんだっていいけどさ。今後の話も済んだことだし、あの子達に見付かる前にさっさと中に戻ろう。なんたって、そろそろ僕に^{ハリー}ニンバスが届く頃だからね。見届けてやらなくちゃ」

「……マクゴナガルが平等だなんてウソだ」

「スネイプに比べたらマシさ」

ドラコですら、それはもつともだと頷いていた。

それから一週間程して、予想の通りハリーの食事の席を大荷物が襲った。おかげで、ハリーのベーコンは飛んだし僕のスープも飛んだ。ちなみにベーコンはこの日もご飯をもらいに来ていたヘドウィグの嘴の中へとさらわれていった。

「ご、ごめん、マリア」

「うん……大丈夫だから、ソレ、寮に置いておいで。ロンもついていてあげて」

「うん！」

包み袋の形状からして中身に察しがついているのだろう。やんちや坊主二人は、瞳をキラキラ輝かせるといそいそと席を立った。子供たちと入れ替わりに、通りすがりのスネイプ先生が僕の頭が啜っていたカボチャスープを杖の一振りですくってくれた。……本当に通りすがりか？

「これだから男子つていやなのよ！ マリアに迷惑かけておきながら自分のことばかり」

「ハハハ……」

女の子のお小言つて、僕には耳が痛いや。

程なくして、ハリーのクイディッチ練習の日々が始まった。それはすなわち、運命の夜が近付いていることを指した。

ロンはすっかりハリーに付きつきりで、ハーマイオニーはそんな二人にぼこぼこ怒っていた。なんでも、彼女には僕が自分勝手な二人から放つて置かれているように見えているらしい。実際のところは、それはそれでドラコと秘密の相談をする時間が増えるから僕としてはまったく問題ないのだけど……。やっぱりハーマイオニーは友達想いだ。

しかし、悠長に見守ってもいられない。深夜の三頭犬事件以来、ハーマイオニーとロンの口論が確実に激しさを増していったのだ。

僕とハリーは双子ゆえか周囲からセット扱いされるのが常で、そしてそれは親友二人にも当てはまった。ロンはハリーと共にいたがり、ハーマイオニーは僕と話したがった。ところが僕とハリーはお互いの側を離れないので、必然的に、顔を合わせたロンとハーマイオニーのゴングが理不尽に鳴り響いてしまうのだ。

僕たち兄弟はすっかり親友たちを宥めるのに走らされていた。

「大変だなあ、ポッターツインズは」

いつかのレイブンクロー生と肩を並べて中庭を歩く。ちなみにまだ彼の名前を知らない。

「大変だよ。僕はあんまり気にしてないんだけど、ハリーが気にしちゃって」

「君たち双子が行動を別にすれば済む話じゃないのかい？ 男同士、女同士。ほら、わかりやすい」

「友人の喧嘩に付き合っただけ好きな人の側を離れるの？ それってバカらしくない？」

「……君の性格がわかってきたよ」

「どうだった？」

「実に、男らしい」

カラカラと笑う彼につられて僕も笑う。

「君も大概、変な人だよ。僕と話してて楽しいかい？」

「変人のマリアには言われたくないな。とつても、楽しいとも」

「え、ウソ。僕、変人扱いされてるの？」

「自覚がないあたりが……おっと、こわあいナイトが来る前に僕は退散しておこう」

宣言通り、どこから現れたのかドラコがいつの間にも僕の腰に手を回していた。対して、レイブンクローの彼はとっくに一歩先にいるのだ。この二人はなんというか……いつもそうだった。ネズミとネコというか、鷲と蛇というか。

緑と入れ替わりとばかりに青のローブをひるがえす彼を目だけで見送って、隣のドラコを見上げる。

「君、僕のナイトらしいよ？」

「自分より強いじゃじゃ馬姫を守るのは骨が折れますね」

「お手数お掛けして恐縮ですわ、ミスター」

「マイレディの為とあらばどうとでも」

まったくもって馬鹿げた寸劇を交える彼を悪戯に小突く。ドラコとじゃれ合いストレスを多少なりとも発散してから、ハリーと、親友二人のいざこざが待つ大広間を目指す。

ハロウインは明日に迫っていた。

——ああ、もう！

一瞬の涙を見せて走り去るハーマイオニーに、顔を蒼くしてあたふたするロンへと一言、『言い過ぎ』とだけ残して追いかける。

事は妖精の呪文学から始まった。それまで、二人のペアは僕らの中で交代したりネビルを交えたりと、ロンとハーマイオニーが重ならないよう慎重に避けてきたというのに、運命のイタズラか、この日は違った。

「ちがうわ。ウイン、ガー、ダイヤモンド・レヴィ、オーサ。あなたのはウインガツ、ダイヤモンド・レヴィオーサ。発音を大切につて、フリットウィック先生がおっしゃったでしょう？ 聞いてなかったの？」

「そんなによくご存知なら君がやってみせろよ！」

そして、やっぱりというか当然というか、ハーマイオニーは浮遊魔法のお手本を完璧に成功させた。ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサと。ロンはすっかり拗ねてしまった。

——ここまではいつもの光景だったのだ。ハーマイオニーに呪文や勉強で敵うわけがないし、僕もハリーもそんな彼らの様子に慣れきっていた。油断していたのだ。

けれど、違った。それまでたまりにたまっていたロンの鬱憤が、この日、ついに爆発してしまった——

「君は言い方に問題があるんだ！ 高飛車で！ 高慢的で！ 聞いていてイライラする！ そんなだから僕ら以外に友達がいらないんだ！ 言えるかい？ マリアと、ハリーと、僕と、他に君と友達だって変わり者がいるのかい？ 僕だって君の仲間だなんて思われるのは恥ずかしいよ」

「ロンッ！」

ハリーが鋭くロンをたしなめたところで、ハーマイオニーは唇を噛みしめて走り出してしまった。

ああ、ああ、今回は互いに友人だという意識があるからどうにかなると思ったのに！

ハリーに目配せをして、立ち竦むロンの方を任せる。そして、通信紙に走りながらぐちゃぐちゃと書き込む。

『女子トイレ』『トロールが来たら』『二人をつれてきて』

まるで主語がないが、ドラコならばこれで通じるだろう。

本当なら、ハーマイオニーを連れ出してトロール襲来からさっさとトンズラこきたいところなのだが、この一件で三人の友情が強固に結びついたこともまた事実。回避できないならば、余計な手は加えずその通りに歴史を動かすしかない。

「ハーマイオニー？」

「……マリア。笑いにきたの？」

「君は僕をそんな人間だと思ってたの？」

「思わないわ。あなたってやさしい人よ。……わたしとはちがつて」

ぐす、ぐす、と個室の扉越しにくぐもって聞こえる鼻声に、はばむ扉へと背をつける。

「君だってやさしいよ」

「うそよ」

「うそなもんか。君が怒るときって、いつも誰かのためなんだ。気付いてた？」

「……気づいてなかったわ」

「だろうね」

ちよつと笑ってみる。扉の向こうで、ハーマイオニーも笑ってくれた気がした。

「ロンはただしいの。わたし、ちゃんと知ってるわ。みんなが裏でわたしのことを何て言ってるか。でしゃばりで、知ったかぶりで、口うるさい悪夢みたいな女。そのとおりのよ」

「そしてロンは気が利かなくて、デリカシーがなくて、ロンだって口が悪くて、すぐ調子に乗る」

「それは……」

「ハリーは優柔不断で、いいこぶってるけど自分につらく当たるスネイプのことは嫌いで、悪口だって言うしスネイプがひどい目にあえばロンと一緒に喜ぶ。甘えたのくせに人を信じるのは案外下手くそ」

「……………」

「僕は——」

「優しいけど、それは平等なもので、わたしたち、結構やきもきしてるわ。唯一特別なのはハリーだけで、そんなの、当たり前のことだけど、わたし、さびしいって思ってしまう。今だって、わたしと一緒にロンのことを怒って、一緒に泣いてくれればいいのにつて。一人だけ大人みたいな顔して、遠くから見ている、ずるいわ。……でも、そんなマリアがわたしは好き」

僕の言葉を引き取ったハーマイオニーの声は優しかった。

ハーマイオニーは、優しく、寂しがりやで、傷付きやすい——普通の女の子なんだ。

「僕も、口うるさくてガミガミばかりで、人のために怒れるハーマイ

オニーが大好きだよ」

「ひどいことばかり言うロンだって好き。どうしても放っておけないの。……それを嫌がられるんだけど」

「僕たち、相手の嫌いなどころってたくさんあるよね。でも、好きだ。——ロンも同じだと思わない？」

少しの沈黙。やがて答えたハーマイオニーの声は震えていた。

「……そうかしら」

「そうだよ。だってあいつ——君の友達である気、満々なんだもの」

「あいつ、こう言ったんだよ？ 君の友達はマリアと、ハリーと、僕——て。ちやつかり自分のこと入れてるんだ。笑っちゃうでしょ。ずいぶんなことを言うくせに、君と友達だと思ってる。当たり前前にね」

ロンの悪いところをずっと見てきた。時には憎んだ。三校対抗試合の時なんて、初めて、彼との友情はもう無理なんだと覚悟した。そのくらい、僕を信じてくれない彼に傷付いた。

ハーマイオニーの正しさが鬱陶しかった。気持ちを汲もうともしないで、正しさを武器に上から叩きのめして、ほらごらんさいと勝ち気に笑う顔が憎たらしかった。彼女が間違った時には喜んだことすらあった。

——それでも、大好きだ。二人とも、死ぬまで永遠の友だと思ってる。

シリウスが言っていた通り、友を裏切るくらいなら死ぬと——『僕』は二人に向かって言える。

「怒っていいんだよ、ハーマイオニー。ロンの横っ面をグーで殴ってやれ。……あいつの友達として、ね」

「ふふっ、いいわね、それ」

「……こ、開けてくれる？」

答えは開いた扉の向こうにあった。ハーマイオニーの顔は涙でぐしゃぐしゃで、ハンカチも間に合わなかったようでローブの袖がよれよれになっていた。鼻は真っ赤で、ロンのそばかすとお揃いに見えた。

「やだ、あなた——」

笑いながら、再びぽろりとしずくが落ちていく。

「どうしてあなたまで泣いてるのよ——マリア。わたしが、一緒に泣いてほしいって言ったから？」

「そうかも」

ハーマイオニーを抱き締める。小さな体だ。ハーマイオニーとのハグなんて会うたびして、仕事で疲れていても彼女は飛び付いてくるから、すっかりくせになっていて、学生時代からのくせで、そのはずで、なつかしいだとも思うわけがなくて——

「マリア、マリア、泣かないで。大丈夫よ、マリア——」

——ああ、『僕』の親友は、ここにはいないんだ。

「変な気分。あなたが泣き虫だったなんて、知らなかったわ」
「僕も知らなかったよ」

二人でぐすぐすと鼻を鳴らす。ひどい顔だ。目と鼻が痛くてたまらない。きつとどちらも真っ赤だ。

せつかくハーマイオニーのトイレ籠城をつたない説得でこじ開けられたっていうのに、結局また泣き出したハーマイオニーと女子トイレの個室でマートルも真っ青の時間を過ごしてしまった。一生分泣きはらした気分だ。

「わたし、はじめて授業をサボったわ。それがトイレでだなんて！」

「クサイ記念日になっちゃったね」

「もう！」

クスクス笑った彼女は、洗面所でハンカチを濡らすと僕の目元へと当ててくれた。

「放ってちゃダメよ。せつかく綺麗な顔をしてるのに……あなたってこういうところ、無頓着なのよね。髪だって、どうして切っちゃったの？」

「気分」

「……はああ。わたし、あなたのこと、姉のように思ってたんだけど……今はすごくおく、妹を見てる気分」

「……僕はずっと、ハーマイオニーを姉さんのように思ってたよ」

「まあ、そうなの？」

それは君のことではないけれど。でも、同じ『君』だ。

「なら、姉さんらしくしちやおうかしら。さ、立って、マリア。顔を洗ってシャキツとさせましょ」

蓋のされた便座に座っていた状態から、彼女の手を取り腰を上げたところで――

「――ツ伏せて、ハーマイオニー!!」

――ガシャアアアンツ。

咄嗟に手を引き彼女を引き倒せば、その上を巨大な影が個室の壁ごとなぎ払っていった。――トロールの棍棒だ。

しまった。みつともなく泣いていたせいで、鼻が詰まってトロールの悪臭に気付かなかったんだ――!

「ハーマイオニー!」

「あ、え……なに……?」

ハーマイオニーはすっかり腰が抜けていた。当然だ。ハーマイオニーは――小さなハーマイオニーは、優しいだけの女の子だ。まだ戦える力なんか持ってないのに。

「ハーマイオニー、掴まって」

「え、――きやあ!?!」

ハーマイオニーを横に抱き上げ、とにかく立地が最悪な個室の残骸を抜ける。出入口へ向かいたいが――駄目だ。トロールが醜い凶体でふさいでいる。グズのトロールのくせになんて悪運だ。

「ハーマイオニー、なるべく刺激しないよう声を上げないで。こわかったら僕に抱きついていて。見なくていい。――大丈夫、絶対に守るから。信じて」

」

ハーマイオニーの後頭部に手を添えて、僕の胸へと押し付ける。片手で、困惑してるんだか惚けてるんだかわからないトロールへと静かに杖を構える。

たとえばこれが『現役の僕』であつたなら、小さなハーマイオニーの一人くらい抱えて戦闘するのはわけない。ロンやハリーを抱えていても奴に勝つ自信はあるだろう。大きなハーマイオニーだったとしても、一人くらいなら抱えたまま戦える。

——けれど、僕は MARIA だ。十一歳の女の子の MARIA。誰かを庇いながらの戦闘経験なんて、ないのだ。

「……MARIA」

「大丈夫」

トロールと睨み合い、呪文を唱えようと口を開いた——その時。

「——ステューピファイ！」

赤い閃光がトロールの後頭部に直進し、当たっては弾けて拡散した。

「MARIA！」

「ハーマイオニー！」

扉に重なるように三つの頭が飛び出す。金と、黒と、赤毛だ。

「こつちに引き付けろ！」

「やーい、ウスノロ！」

「MARIA！」

「ドラコ！ ハーマイオニーを！」

頭に何か当たったか——？ 五感まで鈍いのか、ようやく気付いたといった風にトロールが出入口側へと振り返る。それすらじれったくどろくさい。

その隙をぬって、ドラコが僕からハーマイオニーを受け取った。手足さえフリーになればこちらのものだ。

「アレスト・モメンタム！」

ぼひよん。

「……………」

「……………」

杖が。なんか。ええと。

「…………えー…………ペトリフィカス・トタルス！」

ぺひゆん。

「…………ドラコヘルプ杖貸して！」

「今は無理だ！」

ハーマイオニーを抱えることによつて両手をふさがれたドラコの心からの拒否は至極当然だった。

魔法の効果はないものの、トロールにだってなにか煩わしいものが足元にあると気づく程度の知能はあつたらしい。振り落ちてきた棍棒を転がって避ければ、ロンの側でなにかを叫ぶハーマイオニー、杖を向けるドラコとロン、そしてトロールを今にも殺さん形相で睨むハリーの顔があつた。

——ドロリと、こめかみを何かが伝っていた。

「インカーセラス！」

「プロテゴ！」

「——ウインガーダイヤモンド・レヴィオーサー！」

拘束魔法でトロールの足にロープを巻き付け転がしたドラコ、咄嗟に盾を張った僕、そして完璧な発音で棍棒を操ったロンの魔法が重なる。

魔法そのものは通じにくくとも、棍棒という物理攻撃はトロールに的確だった。ドラコの縄だけでは次の瞬間には引きちぎられていただろう。僕の杖なし魔法で張った盾が防げるのは一撃が精々だっただろう。——ロンの魔法が、間違いなくトロールを倒した決定打といえた。

シン……と、気絶したトロールを前に誰もなにも言えず、子供の荒い息だけがそこに残された。ずるりと、引き摺るようにして一番に立ち上がったのはドラコだ。そして僕へ向かって杖を振ると、エピスキーを唱えた。

ああ、そういえばかすった棍棒でどこか切ったんだっけ。

「……マリア……」

ドラコの手は震えていた。あのドラコが。気丈で、人一倍プライドが高くて、その誇りに恥じない自分であろうとするドラコが。

震えた手で僕を抱き締めた。頬を、おそらく怪我をしたらしいこめかみを、目元を、首を、耳を——自身に血がつくことなんて気にも留めないで、懸命に、確かめるように触れていく。

「マリア、よかった……マリア……」

「うん、大丈夫だよ、ドラコ」

「そうか……」

「ありがとう。ロンも……ハリー、君も。ハーマイオニーも、僕の指示

を聞いてくれてありがとう。心強かったよ」

「二——っマリア!!」

次に強く強く抱きしめてきたのはハリーだ。ハリーごと抱きしめるのがハーマイオニーで、全員にどうにか腕と肩を回そうとするのがロン。

倒れたトロールの傍で、子供たちは抱きしめあつてわんわんと泣いた。

やがて飛び込んできた教師三人によって、五人の子供たちは保護された。避難指示を無視した生徒への怒りに震えるマクゴナガル先生から、嘘八百で僕らを庇ったのはなんとロンだった。

ちがうんです、トイレにこもったのはわたしなんです——そう、真実を告げようとするハーマイオニーを残る三人で止める。わかつてやって、ハーマイオニー、これが彼なりの謝罪と漢気なんだから。

ロンから五点を減点して、他の子たちに五点を与えて、僕以外目立った怪我はなさそうな子供たちをマクゴナガル先生が引き取る。各寮ではトロール事件によって打ち切られた大広間でのパーティーの続きをしているらしい。

僕は、実際のところはドラコが応急処置をしてくれていたのだが、一見は大怪我に見える姿だったのでスネイプ先生付き添いのもと医务室へと向かう流れとなった。

背中についてこいと命ずるスネイプ先生を追おうと立ち上がる。

「——マリア」

「ハーマイオニー?」

ふと、ハーマイオニーが僕を背中から精一杯——けれども、普段の彼女を知る身からすれば、怪我を気遣ってくれているのだとわかる加減でもう一度抱きしめてくる。そのさらに後ろでは、マクゴナガル先生がイライラしつつも寛大にハーマイオニーを待っていた。スネイプ先生は待たなかった。

「マリア、ほんとうにありがとう。……あの、前にも言ったけれど、あなたは覚えてないかもしれないけれど……あなたって、見かけに反してすごく男らしいわ」

「あはは、褒められたと思うっておくね」

「それはちよつと微妙なところよ。それで……ねえ、マリア。わたし、うそを言ったわ。あなたの特別はハリーだけだって。けれど、もう一人いるのよね。——ドラコ・マルフォイ。……そうよね？」

普段、僕とドラコは通信紙を使って待ち合わせ、人目を避けて接触している。この時ばかりはハリーも連れていかない。当然、ロンやハーマイオニーにも彼とのことは話していない。

先ほどの熱烈な抱擁から、互いに憎からず思う仲だというのはバレただろうけれど——きつとそれだけじゃない。

「ハーマイオニーって、よく見てるよね」

「乙女秘密は乙女があばくものよ。……わたし、応援してるわ。あなたが大好きなもの」

そうして、不可解な一言を残し僕の頬に軽くキスしたハーマイオニーは、今度こそマクゴナガル先生の元へと駆けていった。

「……………」

ええと。つまり。

応援———なんの？

「なんだと思うっ?」

結局、ここまでひとつだつて呪文通りに応えてくれなかった杖を振ってみる。

やっぱり杖はウンともスンともいわなかった。

頭から乾きかけの血を流す少女の姿に、医務室の女主マダム・ポンフリーは憤慨した。大袈裟な血は止められているが擦り傷なんかはそのままで、女の子がなんたること！ といった具合だ。これがもしも、ハーマイオニーのように僕も常スカート姿であったなら、頭だけでなく足までおそろしいことになっていたに違いない。やっぱりスカートって防御面において全く良くないよ、ウン。

マダムの小言を聞きつつ、丁寧に施される治療に不思議な心地になる。この程度の怪我は、はつきりいって僕としては怪我のうちになかった。前の『ハリー』なら痛みとも認識していなかったかもしれない。学生という庇護の立場は実に贅沢だ。

——さて、庇護の立場を自ら投げ捨てた愚か者にもこの慈愛の手を分けてやるとしよう。

ぷりぷり怒って薬を塗りたくるマダムにそつと耳打ちをする。

「……それでは、我輩はこれで」

「セブルス？ なにを言っているのです、あなたも私の患者です」

「——は？」

がっしりと、スネイプ先生の腕をマダムが掴み上げる。いや、掴み上げるどころか、女性だというのに表現を『捻り上げる』にしたくなるあの迫力はなんだ。

「今、とある、勇気ある生徒が、密告してくださいました。——あなた、足を怪我しているそうね」

「……………」

「生徒を睨むんじゃありません！」

斜め横からあつうい視線を感じたので、ご要望通り目を向けてみればやっぱり即座にそらされた。こ、こいつ……。

今にも倒れそうな顔色だつていうのに、そんなに蒼白くなるまでなにを痩せ我慢しているのか。

「さあ見せてごらんなさい。——まあ！　これを放置しようとしていただなんて！　セブルス、あなたつて人は本当に……昔から……」

「マダム・ポンフリー……我輩のことはスネイプ教授と、」

「おだまり！　医務室をこわがるような大人なんて、子供とかわりありませんわ！　まだ彼女の方が度胸があります！」

不健康に曲がった背をグイグイと僕の隣へ押しやって、抉るような『噛み痕』の治療を始めるマダム。それを横目で見守っていれば、スネイプ先生が随分と思ひ詰めた顔をしていたのでそつと声をかけた。

「……せんせい？」

ビクリと、微かに肩が震えた。……ああ、もしかして、これ——僕^{マリア}のせいか。

声もなく、彼を見るのもやめて、ただ手を重ねた。手は振り払われなかった。

わかつてほしい。ちゃんと気付いて。——僕の手は、生きているでしょう？

マダム・ポンフリーの包帯を巻く音だけがそこにある。

勘違いかもしれない。相変わらず彼は僕をかたくなに見ないし、僕は昔から都合のいい思い込みだけは得意なのだから。

けれど。それでも。

——僕には、その人がほんの少しだけ握り返してくれたような気がしたのだ。

クイディッチシーズンがやってきた。

「ハーマイオニーは天才だよ……」

「それ、みんな知ってるぜ」

僕のしみじみとした呟きにウィーズリーの双子が揃って相槌を入れる。その手には炎を入れたジャム瓶がある。そして僕の手にも。ハーマイオニーが寒さに凍える僕らのために作ってくれたものだ。

僕は昔からこの手の細かな魔法が苦手だった。あなたは派手にやらかすのが専門だから、とは、ハーマイオニーとジニーとルーナの弁だ。ルーナにまで言われるなんて……。

今にして思えば、一年生でこんな暖房具を作り出すハーマイオニーって、ほんとう、とんでもない。僕、彼女の友人でよかった。何か問題が起きて、それに彼女が解決策を見出すたび思ってることだ。

「いつもの仲良し三人組はどうしたんだい？」

「置いてかれちゃったのかい？ 姫さま」

「それ、やめてよ……。三人は中庭だよ。こんな寒さのなか外に出るなんて、正気じゃない」

「言ってる。こんな寒さのなかクイディッチをするなんてまったく正気じゃない。オリバーは狂ってる」

オリバーのちよつとしたクイディッチ狂いっぷりをハリーの頃から知っている僕は、双子の軽口に額を合わせてクスクス笑うしかなかった。庇えなくてごめん、オリバー。

「ねえ、いつからその珍妙なあだ名、僕についたの？」

——グリフィンドールの姫さま。誰が言い出したのかさっぱりわからない呼び名は、僕がマリアのことなのだと思いついた頃には否定も追いつかないぐらいにホグワーツ内に浸透していた。

その前にも、名前から聖母さまだのマリアさまだのバカげたものが裏で呼ばれていることはあったが、これらはすぐに気付けたために払拭することができた。姫さまだけは突拍子もなさすぎて発覚が遅れたのだ。

上級生にまで呼ばれるそれがまさか僕のことだなんて、誰が思うんだ。

「それが聞いてくれ。誰かがこんな話を聞いたんだ。昔、グリフィンドールにいたとある白百合の生徒の話さ」

「彼女は美しく、気高く、聡明で、マグルの出の身でありながらついには監督生にまで登り詰めた。そして華々しく首席を飾った。その姿は輝かんばかりでありあまりに神々しかったそう。ああ、彼女はまさしくグリフィンドールの百合の姫君！」

「崇めよ我らが姫君を！ グリフィンドールに相応しき燃える髪を持つその人を！ 知的なエメラルドの瞳のその人を！」

「おお、グリフィンドールの姫よ！」

「——と、とある女子生徒をシェイクスピアも真つ青なポエムで追いかけて回す男の存在もあったそうだね？」

「なんとこの件の二人にそっくりの生徒が今ここにいらっしゃるらしい！ それも！ 悲劇か喜劇か、双子として！」

「いやあ、誰が聞いてしまったのか、どこから広まったのか……おそろしく情報通な美男子が約二名ほどこのグリフィンドール内にいるのかもしれないなあ。くわばらくわばら」

「——つまり、君たちが犯人ってことだね」

「ワオ！ 姫さま、君ってハーマイオニーに負けなくらい天才だよ！」

「今度はグリフィンドールのホームズって呼ぼうか」

「よしてよ……もう」

そうだとは思ってたけど、やっぱりこの二代目悪戯仕掛人共の仕業だったか。そして、完全に父さんのせいじゃないか……父さん似でも母さん似でもとぼっちりを食らわせてくるんだから。

情報提供者はマクゴナガル先生かな。スネイプ先生を除いて、このホグワーツで誰よりも僕らを見て懐かしむ人だもの。

「君が美しいから、つてのも事実だぜ？ でないと噂にならないさ」

「そりゃあ、その美しく聡明な母さん似だもの。僕自身をどうこうと言われるのは困るけど、母さんが美しかったのは事実だからね。そんな人の生き写しだと言われたら、そういうものなんだろうとは思うよ」

「……………」

「なあに、その顔」

フレッドとジョージは、さも難事件を目の当たりにした名探偵のごとく神妙に頷き合った。

「マリアの無自覚の根源がわかった」

「これは王子にがんばってもらわねば」「は?」

謎の決意をかためている双子になんだ何の話だと小首を傾げていると、ふとドタバタな足音が階段を駆け上がってきて、ああ、と聖母マリアの気持ちになる。

「——ほんつと嫌なやつ!」

談話室に飛び込んできた足音の正体は、案の定、お騒がせ三人組だった。彼等の動きを足音だけでわかるようになってしまった自分に、姿が見えずとも的確に息子たちを当てて叱るモリーのさまを思い

出した。

「今度はどうしたんだい、ハリー」

「聞いてよマリアア！ スネイプのやつ、でっちあげで僕からクイディッチの本を取り上げたんだ！ 試合は明日だっていうのに」

「まったく、ムカつくついたらないぜ。あれ、もしハーマイオニーが持ってたならきつとなにも言わないんだ。ハリーだからさ。もう今度からほんとに君が持ってたら？」

「斬新な案ね。それで、私が寝る前にでもあなた方に読み聞かせをして差し上げればいいのかしら？ マリア、火、弱くなってない？ 大きくしましうか」

「ありがとう、ハーマイオニー。君は凍える人の救世主だ」

「マリアア、ちゃんと話を聞いてよ！ 君は僕の味方だろう!!」

「もちろんだよ。どうせ夕食後にでも取り返しに行くんだろう？」

「甘ったれなハリー坊やは、先生のところまで姉さんについてきてほしいの？」

「妹の手を借りるなんてごめんだ！」

口ではぶんすこ怒りつつも僕を抱き締めたまま放さない辺り、弟つてのはまったくかわいい。ハリー以外の全員はやれやれって顔付きだけ。

「姫さまは弟をあしらうのもお上手だ」

「兄だよ！」

「では、姫さまの兄殿下の憂いは家臣たるオリバーが払ってしんぜましょう。実地でね」

暗に本なんか読むよりクイディッチやろうぜ！ と誘う赤毛の二人をいなしつ、そうだと呟く。

「ねえ、三人も僕のバカらしいあだ名のことは知ってるでしょう？」

王子って誰のことだと思う？」

「「マルフォイ」」

「……………」

この場で吹き出してゲラゲラ笑うのを懸命にたえた僕のこと、褒めてくれてもいいんだぜ、ドラコ。

「やあ、スリザリンの若き王子」

「ご機嫌麗しいようで、グリフィンドールの姫君」

やっぱり知ってやがったのか。途端にナメクジの呪いでも食らったみたいな顔をした僕に、ドラコはこれ見よがしにせせら笑った。

本日は、ついに来たるやハリーのクイディッチ初試合の日だ。

飛行競技場にて待機する観衆は試合が始まる前からすっかり大盛り上がりで、グリフィンドールの赤いローブとマフラーばかりのこの席にドラコのシンボルカラーの緑は実に目立っていた。君、最近隠れる気なくなつたよね。

最上段で『ポッターを大統領に』段幕を掲げるのはハリーの愉快な仲間たちとルームメイトたちか。近くで見ると……中々だな……あの、光るライオンがユーモラスで。誰が描いたんだろう、あれ。魔法はハーマイオニーかな。

「知らないはずないだろう。なんのために僕がスリザリンにいると思ってるんだ。君に見えない情報を軒並み掴むためさ」

「そして報告はしないってね。……これって、もしかして僕らセット扱いされてる？ ロンやハーマイオニーですら、君なら仕方ないって反応をするんだ。よりによって君だぞ、君。ロンは君の名前が出るたびにゴキブリゴソゴソ豆板が寝起きに口の中にも入ってたみたいなの顔をするけどね。それでも、認めてる」

「マリア・ポッターのナイトは二人いるらしいな。双子のハリー・ポッターと寮の垣根を越えたドラコ・マルフォイ。そして赤毛くんは僕がマリアに近付くよりハリーに近付くときの方がうるさい」
「ええ……悪夢だ……」

レイブンクローの彼が言ってたソレがまさか周知のものだったなんて。

僕のうんざり気分なんてそっちのけで、周囲からワツと歓声が上が。選手入場だ。初陣のハリーを交えたメンバーが浮かび上がり、リー・ジョーダンの愉快で痛快、そして的確にマクゴナガル先生を怒らせる実況が始まる。なにせ今年初のグリフィンドール対スリザリン戦なのだ。熱の入れ用がちがう。

見てろ、あれでもそのうちルーナよりはマシだと思う日がくるんだ。僕はルーナの試合そっちのけで雲の形とかを紹介する実況、わりと好きだったけどね。

試合におけるハリーの箒さばきは、入学してからはじめて箒に乗ったというのに少しだって危なげなくて素晴らしかった。ジエームズの血の恩恵である。ちなみに『初めて』というのは、まあ、ウソなんだけど。実は赤ん坊の頃に気の急いた大人たち——言わずもがな、ジエームズとシリウスだ——から子供用の箒を与えられていたなんて、このハリーは知る由もないのでまあ彼にとっては初めてで問題ないだろう。

それにしても、観客席から見る『僕』ってあんななんだ……うわあ、見にくい。なにやってるんだかわからないや。そりゃあ、双眼鏡も用意したくなる。リーの実況のありがたみがよくわかる。

そして、そのリーがスニッチの発見を叫んだ。途端、所在なげにしていたハリーが急降下した。我ながらよくあんなものを見付けられると思う。端から見ていると顕著だ。

懐古の記憶にしみじみ頷き、そこで、そういえばこいつもシーカーだったなとチラリと横を見てみれば、ドラコは真剣な眼差しでハリーの動きを追っていた。

「スニツチ、見える？」

「いいや、さつぱり」

「でも、ハリーには見えてるんだ」

「あの中にいた僕たちって、実はすごかったんだな」

「だね」

互いにすっかり他人事で、涼やかな顔を見合わせてニヤリと笑ってしまう。

「どっちを応援してる？」

「勿論、ハリーだとも。でないと、そもそもこの席にはいない」

「そりやそうだ。……変わったよなあ、マルフォイ」

「身内には甘いスリザリンだからね」

「ああ」

僕と彼のくだらないじゃれ合いは、スリザリン選手マークス・フリントのハリーへの暴力的な妨害行為が目の前で行われたことよって打ち切られた。思わず怒りと共に杖を取り出すが——まあ、まあ、落ち着こう僕^{ハリー}。スリザリンからの反則スレスレ……反則まがい……反則そのものな妨害なんて、試合関係なしによくあることじゃないか。隣の彼なんて、それはもう身に覚えがあるはず。

「ほんとうに、手段を選ばないよね。スリザリンの君たちって」

「……目的に貪欲だと言ってくれ」

「ものは言いようですこと」

スリザリン側にペナルティを与えた後、試合再開のホイッスルが鳴る。グリフィンドール最良全開で荒々しくなるリーの解説と、そんなリーに対するマクゴナガル先生の叱咤が響く中——突如、ハリーが妙な動きをした。

いや、ちがう——ハリーの箒がおかしいのだ。

「あれ、今日だった!」

思わず腰を上げれば、ドラコが何事だところちらを見ていた。

「ドラコ、ハリーを見て。様子がおかしいだろう? あれ、箒に呪いをかけられてるんだ。犯人はクイレル。何の呪いがかかっているか、君、わかる?」

なにせ、呪いだとか禁術だとか闇の魔術に関する知識や対処については、闇祓い局局長時代においてもドラコの方が得意だった。ハーマイオニーとだっていい勝負をしていた。

それらの経験は、きつと彼を裏切らない。

ジイと数秒、箒に振り回されるハリーを見つめた後、ドラコは応えた。

「錯乱と妨害。それから箒に対する目眩ましか」
「流石だ。ありがとう」

すぐさま反対呪文へと取りかかる。瞬き一つせずブツブツと唱え続ける。隣ではドラコも補うように呪文を繰り返している。

そんな僕らの様子に気が付いた逆隣の生徒が不気味なものを見る目をして逃げたが、そんなことよりハリーの命の方がずっと大事だ。

確か、誰かがクイレルの妨害をしたんだ。スネイプ先生は僕らのように反対呪文を唱えていてくれて……でもそれを勘違いした——
ハーマイオニーだ!

誰も彼もが思い思いに抗った甲斐あって、ハリーはどうか体勢を持ち直した。その後、多少のトラブルはあったものの、ハリーがスニッチを口で捕まえたことよって試合は終了した。

ほつと胸を撫で下ろす。ほんとう、見てる側はなんて気持ちにさせられるのだろう。ハリー・ポッターの不運と悪運と強運には。

「……『君』って、いつも散々だな」

「僕もそう思うよ」

どうやらお騒がせの三人組は、三頭犬の一件からヴォルデモートが狙うホグワーツ城内に隠された秘宝——『賢者の石』について、ニコラス・フラメルとダンブルドアが関わる事実まで無事にたどり着いたらしい。クリスマス休暇を前に、ニコラス・フラメルの正体——つまりは『賢者の石』の製作者である事についてだけ——を突き止めるため、忙しなく図書館通いをしている子供たちを今日も談話室から見守る。

と、いうのも、僕がドラコと懇意にしているからか、彼等は僕に詳しい話をしてくれないのだ。無敵の幼さでスネイプ先生を疑って掛かっている彼等は、僕からドラコ——そしてスリザリン生のドラコから寮監たるスネイプ先生へと秘密の情報がもれる可能性を危惧しているようだった。マリアとしてはちよっぴりさびしいところだ。

とはいえ、僕は僕で休暇中にやることがあるし、それこそ子供たちに首を突っ込まれては困る事情ばかりを抱えているので、自然と、互いの内緒事に関しては無不可侵という暗黙のルールがここ数日のうちに築かれつつあった。

別にドラコはスネイプに告げ口とか……クソガキのマルフォイだった頃なら間違いなくしただろうけど、今はしないのに。この頃の僕達はスリザリンと見ればとりあえず敵とみなしていたので、それも致し方ないのかもしれない。

「あんまり根つめるのもよくないよ」

図書館から持ち出してきたのだろう、『魔法界における最近の進歩に関する研究』だとかいうビックリするくらい面白くなさそうなタイトルの本へ突っ伏してウーウー唸っているハーマイオニーの肩を撫でる。そのまま、彼女から少し離れた位置にあたためたカボチャジュース入りのマグカップを置いた。

ちなみにこいつはラベンダーから貰ったちよつと早めのクリスマスプレゼントで、動く黒猫の柄をしていて持ち手が尻尾になっているのだがこれがまた気まぐれなせいで猫を宥めてからでないと思わせてくれないのだ。けど。まあ。ハーマイオニーもジニーに負けず劣らずの猫好きだし。彼女ならきつと大丈夫だろう。

「でも、休みに入る前に見つけないと——絶対、ニコラス・フラメルのことなんて忘れて遊んじゃうわ、あの二人——釘は指すけど——間違いないわ——」

実のところまったくその通りなのでなにも言えなかった。初めてダーズリー家から離れて過ごしたクリスマスだったんだものはしやぎ回るくらい許してよ。

「——え、あら？ マリア？ わたし、あの、いまのは」

「うん？ ハーマイオニー、今ちよつと寝てたんじゃないかい？ 僕は寝言しか聞いてないよ。クリスマスプディングとチキンが待ち遠しいって言ってた」

「言ってないわ!？」

からかえば実によい反応をする。そして顔を真っ赤にしたハーマイオニーは、我に返るとどこか気まぎれに呟いた。

「……時々、マリアってすべて知っているんじゃないかと思うわ」
「まさか」

わからないことだらけさ。『僕』が生きる世界はいつだって魔法の
ように奇妙だ。

「やんちゃ坊主たちが心配なんでしょう？ 大丈夫、僕がちゃんと見
ておくから。ハーマイオニーは家族との時間を楽しんできて。ね？」
「……ええ、マリアなら安心ね」

ほころぶように微笑んだハーマイオニーは、そうしてようやくカボ
チヤジュースに浸って微睡む猫の尻尾を掴んだ。思いきり。遠慮な
く。むんずと。

あ。

「——もう二度と使わないわ、このカップ！」

絵の猫に威嚇され熱々のカボチヤジュースを顔にかけられた少女
は、尻尾を雑に扱われた未来の飼^{クルックシャンクス}い猫とまったく同じ顔をしていた。

一部の生徒を寮に残してホグワーツは休暇に入った。案の定、待つてましたとばかりに使命を遠く放り投げて雪遊びやチェスに興じ始めたロンとハリーを通信紙片手に眺める。帰省中のハーマイオニーのためにも、ニコラス・フラメルの件はどうしたと子供たちをつつき回してやりたいところなのだが……僕は『秘密』^{マリア}を知らないことになつてゐるしね。

仕方がないので、そのまま手元に視線を落とす。通信紙の伝達先は無論ドラコであり——なんと彼は現在スリザリン寮にいた。

両親に溺愛され愛にたらふく心を肥やしていたマルフォイが、この世界では自身の信念ゆえに腫れ物のように扱われている。——そんな事実が、僕には奇妙でならなかった。

彼の在り方に僕ばかりが罪悪感を覚えてしまう、というのは……彼に言わせれば傲慢なんだろうな。

「僕、ちょっと出てくるよ。二人はここにいる？」
「いる」

求めていた返事が紙面に浮かんだことを確認して、立ち上がる。真剣勝負を邪魔してくれるなど仲良くチェス盤を睨む少年たちに苦笑して、しっかりと防寒着を着込んでから寮を出る。目指すは——ホグワーツ城の八階だ。

「ハイ、ドラコ。なつかしいだろう、ここ」
「まっただ」

通路の先、寒さだけが理由でない青白い肌のドラコがぽつんと佇むのに、してやったりと笑った。

彼との何も無い石壁を前にした待ち合わせは、たった一言で済ん

だ。——『必要の部屋』を探すと。

心に強く念じて三往復。そうすれば、誰かが本当に必要だと望んでいるとき——その部屋は姿を現す。

「出たね」

「もう二度と見たくなかった」

すっかり苦虫を食らった顔のドラコに、そりやあそうだと肩をすくめる。ドラコからすれば苦い思い出しかない部屋だろう。死喰い人を引き入れたり、悪霊の火に子分をさらわれたり。

扉を開いてみれば、ドラコの顔は苦虫十匹から苦虫百匹を噛みちぎった顔へと変わった。

「相変わらずガラクタだらけだ。クラブの炎で焼くくらいがちやうどよかったのかも」

書きかけで放置されたレポートに、とつくに型落ちの古めかしいドレスローブ。穴の空いた靴下に、マーリンの顔が刻まれた何らかの記念コイン。空の香水瓶。封の切られていないペットフーズ。未返却の図書。折れた杖——歴代の生徒たちが隠し物を置いていった部屋。

ゴタゴタしていて、けれどどこか寂しさを感じさせる部屋だった。置き去りにしていったものの名残が唯一息をする場所。

「……ここをなにするんだ？」

積み重ねた宝物を大きく見回し一秒だって長居したくない様子で僕へ問うドラコに、とことん意地悪な気持ちのまま笑う。

「——分、霊、箱、探、し」

耳元で一匂ずつ切って囁いてやれば、ドラコはいつそう顔を蒼くした。

わかるよ。お互い、あの蛇顔にとんだトラウマを植え付けられたものだ。その魂の欠片を今から探すっていうんだから、蒼白にもなるだろうさ。

「もうか？　もう少し様子見でも……帝王は復活だっしてしてないのに」

「授業が始まったら思うように時間が取れなくなるだろ。残れるとわかっているクリスマス休暇の間に済ませようって、ずっと決めてたんだ。……君まで残るとは思ってたけど」

「……さっさと終わらせるぞ」

「さっさと終わればいいけど」

ぶつくさ文句は言うものの、やらないと言わない辺り、ドラコのプライドの高さを示している。身内には向かう誠実さも。

「探すのはレイブンクローの髪飾り。かたち、君も覚えてるよね？」

——ああ、もちろん、今、破壊するわけじゃない。というかできない。あれを破壊するには強大な魔力がいるんだ。今のところそれが可能だと確認できているのは、バジリスクの牙、悪霊の火、そしてバジリスクの毒を吸ったゴブリン製の武器。偶然の産物だけど、前回ではグリフィンドールの剣がこれだった」

二手に分かれて、記憶を掘り返しながらガラクタたちをひっくり返していく。分霊箱はアクションできないのが難点なのだ。地道な手探りしか方法がない。

「それなのに今、探すのか？」

「とにかく手元に置いておきたいんだ。ハリーたちが分霊箱のことを知ってから、偶然を装って渡そうと思ってる。知らない生徒が見付け

てしまうのだけは避けないと。——人を殺してできた道具は、何度だって人を殺すんだ」

スリザリンのロケットの恐ろしさを知っている。マールヴオロの指輪はあのダンブルドアでさえ誘惑し蝕んだ。それは死の秘宝であることが大きいけど……分霊箱がもたらす呪いは計り知れない。

「クリスマス休暇はこの作業に当てるつもりだよ。レイブンクローの髪飾りが今のところ一番手に入りやすい。二番目はリドルの日記だけど……」

「それには及ばないな」

ふと、ドラコお得意の自信にあふれた嫌味な声が返ってきて、おや、と振り返る。

——その手には美しくも禍々しいティアラがあった。

「君……」

「僕ならここに隠すだろうと当たりをつけたら、案の定だった。闇の帝王つてのは案外単純なんじゃないか？」

「ナルホド。類は友を呼ぶって?」

「あんなのと類にしてくれるな——つと、おい!」

思わぬ収穫に、喜びのあまりドラコに勢いをつけてハグしてしまう。ドラコの手に取りられた髪飾りの宝石が青く鈍く光る。

だって、まさか初日で見つかるなんて。この作業のために、僕に休暇なんてものはないとばかり思っていたのに。

「最高だよ、ドラコ。あとは、できるならリドルの日記も手に入れておきたいところなんだけど……今回も君の家にあるのかい?」

「ないな」

「そうか……」

それもそうだろうと頷く。ルシウス・マルフォイはヴォルデモートに忠誠を誓っているのだとしても、その息子のドラコが反抗的な態度だ。反旗の可能性のある人物がいる家に、どうして命を預けられよう。

それも、ただの実験だったとはいえ自身の魂そのものを。

「僕がここに持ち込んでるからな」

「そうだね、リドルの日記の在処を探し出すのも今後の課題に——
——なんだって？」

あんぐりと、口を開いていた。父そっくりの勝気な目だって、きつと今ばかりはルーナののように飛び出しているにちがいない。

ドラコは長年の成果がやっと表れたとでもいうようにニンマリと笑った。

「リドルの日記が、今、どこにあるって？」

「スリザリン寮の、ドラコ・マルフォイが与えられた寮室の、家から持ち込んだ鍵付きキャビネットの三段目——その奥に隠された、さらに鍵がかけられた箱の中だ」

「……………」

言葉が出なかった。だから声なく、断言しよう。今ほどの友人の狡猾さに感謝したことはない。この先もずっとそう言えるだろう。

「なんだってそんなことに…………？」

「まだ僕が従順さを演じていた頃に父上へとねだってね。ほら、あの人は主から渡された日記の真意なんて知らなかっただろう？　だからあっさり譲ってくださった。大切な人がくれたものだから大切にしないさい、なんて滑稽なことを言いながらね。もちろん大切にしたいとも。——いつか壊してやるものなんだから」

皮肉ぶった男のわざとらしい言い分に、興奮から全身へと震えが走る。なんてゾクゾクする男なんだ——ドラコ・マルフォイ。

沸き上がる気持ちにたえられず、再びドラコへと飛び付いた。

「——ドラコ！ 君って本当に最高だよ！」

「当然だろう。グリフィンボールが誇る麗しの姫のナイトが最高でなくってどうする」

二度目だからか軽々と僕を受け止めたドラコは、そして僕の旋毛にキスするフリをした。

寝ぼけ眼で談話室へ顔を出した瞬間、弟こと自分の浮いた生首を見た姉こと僕の気持ちを述べよ。

——ああ、もうそんな時期ですか。

「メリークリスマス、マリア！ びっくりした？ びっくりしたでしょ？ さすがのマリアだってビックリ仰天？」

「マリアのやつ、かたまってるぜ。休暇が明けたらハイマイオニーに教えてやらないと。マリアだって兄弟の生首には普通の顔してられなかったってね！」

イエーイ！ と生首とロンが無い手にハイタッチするのを見て、ウウンと唸る。

「君たち……姉をからかうものじゃないよ」

「僕が兄だよ！」

「僕たち同い年だよ！」

おっと。うつかりうつかり。

「ええと、そう。それで。ハリー、どうしたんだい、それ。フレッドとジョージから変なお菓子でももらったの？ 体が消えるジョークグッズとか？」

もしもここにドラコがいたならば、僕の言いざまになんて白々しいと吐き捨てたことだろう。しかし現実には、クリスマスに浮かれ散らすイタズラ小僧が二人だ。

「ちがうんだ！ 見て、このカード。誰からかはわからないんだけど……父さんの知り合いだよ、きつと！」

鏡じみた空気を脱ぎ捨て懐からクリスマスカードを取り出したハリーから、それをうやうやしく受け取る。独特の筆跡で書かれた透明マントの説明に、ああ、と目を細める。

此度でも、ダンブルドアはハリーを見守ってくれている。……そこにどんな思惑があるろうと。

「すつごいや、これでどこへだつて行けちゃうんだよ！ マリア」

「たまには貸してね、ハリー」

「なにを言ってるの？ 僕らの父さんのものなんだから、当然マリアのものでもあるんだよ。このマントを使うのに、君が僕に断りなんてする必要ないよ」

ああ、そうか――

純に小首を傾げるハリーにゆつくりと頷く。

こんなにも当たり前前に、簡単に、君は宝を分けてくれるのか。

家族だから。僕と君は、兄弟だから。

つくづく思う。兄弟って、ほんとうにすばらしいものだ。――『僕』にもいたなら、よかったのに。

「お、もうお揃いだな？ おチビちゃんたち、メリークリスマスス！」
「やっぱりハリーにも届いたか、ウィーズリー家特製セーター。マリアは？」

「素敵な赤色のをもらったよ。着てくるね」

ウィーズリーの双子の来襲からさりげなく透明マントを隠すハリーにこつそり笑いながら、寝室へと引き返す。

マリアとしては初めて Hogwartz で迎えたクリスマスマの今日この日、ミセスウィーズリーブランドのイニシャルセーターに続きベッドに並んだプレゼントの数々を眺めてくふりと幸せな息をこぼす。

ハーマイオニーからは今朝に届いた爆発ボンボン。キツチンにはラベンダーが休暇前にくれた猫マグカップが今日も気まぐれに微睡んでいるだろうし、ハグリッドは昨夜に手作りの木彫り小型ツリーをくれた。後で窓辺にでも飾っておこう。それから、あのダーズリー夫妻からは五十ペンス硬貨がフクロウ便にて届いていた——フレッドとジョージにあげた。きつとそのままマグオタクのアーサー氏の元へと渡るだろう——最後に、ドラコから宝石の中に炎を閉じ込めたネックレスをもらった。

嫌味なベロア生地の小箱を開いて、赤い炎が灯るネックレスを光にかざしてみる。説明によれば、持ち主の体温に合わせ冬は赤くあたたかく、夏は反対に青くつめたくなる代物なのだとか。まったく、奴らしいなんとも洒落た道具である。デザインもシンプルで、女性らしさを求められることに慣れていない僕でも違和感なく使えそうだった。ちなみに僕は、ハリーと共に作った本物の雪を閉じ込めたスノードームを贈った。

ウィーズリー兄弟に囲まれて、揃いのウィーズリーブランドセーターで向かった大広間では、既に教員達による盛大なクリスマスパーティーが行われていた。ハリーの頃から、何度見たって心躍る料理と飾り付けだ。クラッカーのお楽しみだつて忘れてはいけない。

学校に残っている生徒自体が少ないこともあり、寮関係なく一つの

長机に集まる。そこにはドラコの姿もあった。キザにノンアルコールシャンパンを煽る彼に、フレッドとジョージがこれまたノンアルコールのワインをぶっかけた。髪の毛の先まで酒浸しになったドラコにロンが笑い転げ、ハリーは食べるのに必死で気づかなかったが、僕はハリーの横でクラッカーから飛び出したハツカネズミと遊んでるフリをしながら笑っていた。ら、どうしてだかバレた。地獄耳め。

散々遊び倒せば、夜にはすべてが眠る静けさに包まれた。ハリーだった頃は、同室のロンのおかげで（イビキには悩まされたけど）夜でも温もりがあるような気持ちでいられた。けれど、この部屋は——ハーマイオニーが帰ってしまった女子寮の主は、僕ひとりだ。

認めたくはないけれど、どうにも寂しくて誰もいない談話室へと降りる。

——ふと、空気に肩を叩かれた。

「マリアも眠れない？」

「……ハリー」

なにもなかった空間からひよっこりハリーが現れる。——いいや、ハリーはそこにおいて、僕があとから来たのだ。ただ、透明マントをかぶっていた。それだけ。

「パーティー、楽しかったね。マリアと過ごす二人だけのクリスマスだって僕は好きだけど。覚えてる？ マリアが毛布を光る星柄に変えて、二人で頭からかぶって夜空を作ったんだ」

「うん」

「あれ、どうやったの？ あの頃は杖もなかったのに」

「さあ、どうやったんだろ」

「他にも、マリアってば楽しいことばかり」

「おじさんたちに見付からないようにするスリルがたまらなかったね」

「そういうところ、マリアっていい性格してる。……今日、楽しかった」

た。でも、やっぱりマリアと二人で話したりして過ごすクリスマスが、僕は好きだよ。きつと今日のパーティーだって、マリアがいないと楽しくなんてないんだ」

「そんなこと……」

——そんなこと、ない。

だって『僕』は、ひとりでだって笑えたんだ。ひとりで、友と生きたんだ。

「……ね、このまま冒険、行っちゃおうか」

肩を並べて、小さくなって。二人でかぶっていた透明マントのまま、そしてハリーに引かれるままに一步を踏み出す。

ハリーからこんな提案が出るのは珍しかった。どうしてだか僕のくせに僕よりも控えめな性格に育った彼を連れ出すのは、いつだって僕の役割だったのに。——この子は今この時にも、成長している。

「行こうよ、マリア」

「……うんー」

きつと君は知らないだろう。

無条件に差し出される家族の手の愛しさを。絶対にひとりになんかならないという狂おしい程の安堵を。自分の名前を一番に呼んでくれる存在を。——それを持たない現実があることを。

それでいい。持たぬ者のむなしさなんて、この先も君は知らなくていい。

君には——マリア・ポッターがいるのだから。

ハリーと手を繋いで夜中の廊下を駆ける。一拍置いて、後ろから『奴』の憎たらしい声が冷たい廊下にこだました。

「生徒が廊下にいるぞーう！ こおーんな時間に！ 生徒が！ 廊下に！ 透明だ！」

——ピーブスだ。最悪だ。そしてさらに最悪なのは、僕達が透明マントをかぶっているにも関わらず、ピーブスは慣れてるみたいにマントを掴もうと邪魔してくることだった。

いいや、みなまで言わずともわかる。かつて父さんたちも透明マントをかぶったまま散々ピーブスと遭遇してきたにちがいない。だから奴は透明人間に慣れてるんだ！

「ハリーー！ ここ、入れそう」

小声で囁いて、背中扉を押し滑り込む。ピーブスの、ファイルチをからかいながらも呼び出す声が遠ざかっていく。

そこは空き教室だった。ずいぶんと使われていない様子で、机や椅子は隅に積み上がっていて——中央に、場違いな鏡がひとつだけ立っていた。

あ、これ。は。

「すつうを、みぞの、のろここ……っ？」

ハリーが鏡の前へと立つ。鏡枠に指をなぞらせ唱える。——『すつう、をみぞの、のろここ』

そんな小さな男の子に、僕は呼吸を抑えるようにして寄り添った。

「——父さん？——母さん？」

やはり、ハリーはポッター家の人々の姿を鏡の中に見たようだった。

緑の目をパチパチとまたたかせて、自分の肩を触ってみて、振り返って、そこにはなにもないことを確認してからもう一度鏡を覗き込んで。そして僕を見た。

「ほんとうに、そっくりだ」

「……そうだね」

「ハグリッドも、マクゴナガル先生も、僕たちは両親の生き写しだってよく言ってた。その通りだ。僕たち、こんなに似てる」

ハリーの手が鏡面に触れる。同じように、その手に自分の手を重ねた。

ああ——アルバス。ジェームズ。リリー。

『僕』に抱かれたアルバスが頬へとすり寄る。ジェームズは真ん中で『僕』とリリーと手を繋ぎ、リリーはジェームズとジニーと手を繋いでいた。ジニーが幸せそうに『僕』を見つめて微笑む。

『僕』の後ろには大きなロンとハーマイオニーがいて、ヒューゴとローズがその手に繋がれていた。ジニーの後ろにはどれだけ歳を食っても悪ガキ顔のままのジョージと——二十歳のフレッド。『あの日』のフレッドだ。

フレッドを囲むような形でビルやチャーリー、パーシーが立ち、そんな息子たちを嬉しそうにウィーズリー夫妻が見ている。時おり『僕』へ視線を向けては、あなたも息子よと今にも語りそうな顔で笑う。フラーやアンジェリーナも揃い、その子供たちが和気あいあいとじやれている。

親友夫妻の後ろにはシリウスとルーピン先生。ルーピン先生はテ

デイと手を繋いで、テデイはトンクスへと繋がっていた。そしてトンクスの隣にはマッドアイが義足で器用に立ち、さらに後ろに機嫌が悪くてたまらないスネイプ先生とほけほけと笑うダンブルドアが仲良く話していた。

スネイプ先生の隣のセドリックはあの日のユニホーム姿で誇らしげに笑ってみせて、ルーナやネビル、いつまでも友情の色褪せない仲間たちがいた。ドビーやクリーチャーの上にはヘドウィグが小さな彼等を見守るようにして飛んでいた。

——そして、その先。なにか障害でもあるかのように間をあけて、父さんと母さん、あいだにハリーが両親と手を繋いでニコニコと笑っていた。

ハリーの後ろには大きなドラコが、小さなハリーを守るようにして立っていた。

「たくさん、いるね」

「うん」

ハリーと僕が見ているものはまるで違う。わかっている。——それでも、このとき共にした想いは同じだ。

愛しくて、くるしい。——あなたたちに、会いたい。

「……帰ろうか、マリア」

「……うん」

すっかり冷えてしまった子供の手を握り返して、マントをかぶる。先導するのはハリーで、ふと誰かに呼ばれた気がして振り返った。

鏡の中から、黒くて憎たらしくて愛を知らない寂しい君が、誰の手も握れずにいるひとりぼっちの君が、今にも消え入りそうに『僕』を見ている。——気がした。

少女は地下へと続く大口の開いた道の前でぼんやりと月を見ていた。月明かりしかないそこに、たった一つだけカンテラの光が灯る。

「——マリア」

「こんばんは、ドラコ」

赤い髪を微かに揺らせて振り返った少女は、月に照らされ青く光るように見えた。——まるで作り物めいた美しさだった。

「ドラコが起きてるなんて、思わなかったんだ」

「お目付け役のいない休暇に夜更かししないで、いつするんだ？ あ

あ、夜の散歩が趣味だったポッターには理解できない話か」

「……きみ、なんかちよつと怒ってる？」

カンテラ灯を頼りにずいずい進むドラコについて、底冷えにひんやりとしたスリザリン寮の談話室を抜ける。そしてドラコの自室へと滑り込む。

どうやらドラコは運良く一人部屋を与えられたようで、室内は彼が好きそうな悪趣味な内装にすっかり染まっていた。いや、運ではないかな……マルフォイだからかも。

「君な……スリザリン寮に残っているのは僕だけなんだぞ。他の、誰一人だっていないんだ。この意味がわかってるのか？」

「勿論。だからこそじゃないか。こんなところ、他のスリザリン生に見付かったら大騒ぎだよ。グリフィンドールの生徒がスリザリン寮に侵入してるだなんて」

黒を基調としたやたら滑りの良いベッドに腰掛け、無遠慮に自寮の

ベッドとの違いを確かめている僕にドラコのため息は一向に尽きなかった。なんならわざとらしいくらいだ。というか、絶対わざとだ。なので、ムツとくちびるを尖らせてベッドから奴を睨み上げる。

「なんだよ」

「いいえ、姫君にご理解いただこうとした我々が間違いだつたと反省したまでです」

「それやめろってば」

ただでさえ寒いのにさらに鳥肌を立たせてくれるな。

「それで？ なんなんだ、これは？」

僕の前に仁王立ちし、やたら芝居がかった仕草で彼が懐から取り出したのは古びた羊皮紙——僕の持つ通信紙の片割れだ。その紙面には僕の字で一言、『会いたい』と浮かんでいた。

「……そのままだよ。別に、朝とかに会えればそれでよかったのに」

「嘘だな。おやすみと交わした後これが来たんだ。それも、こんな時間に。——なにがあつた？」

隣にドラコが腰掛ける。余裕たつぷりに人間二人分の重さを受け止めたベッドに、やっぱりお貴族様が集う寮の家具は質が違うのかと頭の片隅で呟く。

「……分霊箱の、確認をしようかと」

「……………」

我ながらなんとも情けない、歯切れの悪い主張だつた。十分に言い訳してみた。それに対し、彼は無言のままキャビネットの三段目の鍵を開けると、奥から大きな飾り箱を取り出した。杖を振って幾つか

の呪文を解き、さらに三つの鍵を開けた。

厳重な封印解除の末ひらかれた中には、見覚えしかないノートとティアラが収まっていた。——リドルの日記とレイブンクロウの髪飾りだ。必要の部屋から回収した髪飾りは、ドラコの希望により彼預かりとなっていたのだ。

というのも、僕は当然、日記も含め僕が保管するつもりでいたのだが、どうにもドラコが譲らなかつたもので。

事実、呪いや呪具の類いに関して僕よりドラコの方が詳しいし、扱いても長けている。封じるのだから得意で、今解いた魔法の殆どが空間ごと干渉を遮断するものだった。彼に対する分霊箱の精神的な影響を心配する必要は然程ないだろう。確実ではないけれど。なんたつてあのヴォルデモートの魂がこびりついているのだから。

横繋がりを大切にスリザリンの生徒に、マルフォイの一人息子の私物を漁るような輩もまずいと考えられるし——実のところ、いわゆるものを任せるには最適の人物だったのだ、ドラコは。

……それでも、僕としてはドラコに万が一があつては嫌だから、引き取れるならさっさと引き取ってしまいたいんだけど。

「満足か？」

彼の嫌味っぽい確認に渋々うなずく。逆さの手順で再び分霊箱が封じられていく。そうなる。

「さて、君の目的は済んでしまったが？」

「……………」

その通りだ。だから、僕はここを出なくてはいけない。早急に。立ち上がった、ドラコにおやすみの挨拶をもう一度して。

わかつてる。わかっているのに——動けない。彼のそばを、離れたくなかつた。

「いい加減、白状してしまえ。——ハリー」

「あんまりなタイミングで『僕』を呼ばれて、くっ——と喉から悲鳴じみた声が漏れた。

白状か。ああ、もう、ほんとう——まったくもって、その通りだ。

「みぞの鏡を、見たんだ」

「ああ……君から聞いたことがあるな。望みを写す鏡、だったか」

「みんなが、うつってた」

「……そうか」

「シリウスが笑ってた——ルーピン先生が息子と手を繋いでた。フレッドがジョージの弟のようになっていた。セドリックが手を振った。ダンブルドアがスネイプ先生の肩を抱いて、スネイプ先生は睨んでた。みんながそこにいた」

「……………」

「こんなに、重い」

彼のベッドの上で、膝を丸めて小さくなる。今この時だけでいいから、世界から僕を消してほしかった。

「こわくなったんだ。絶対に取り戻せない父さんと母さんもいて、僕、ほんとうにみんなを——」

「ハリー」

ゆるりと、低い体温の指が耳をくすぐりながら項へと流れていく。ハリーと呼ぶ彼の声が麻薬のように心地よい。

「みぞの鏡は、取り戻せないものを写す鏡じゃない。望みを写す鏡だ。そうだろうか?」

「うん」

「君は自分の望みを確認した。ただそれだけのことじゃないか。——
こわいのなんか当たり前だ。僕らは未来を知ったつもりで、その実な
に一つだつてわかっちゃいない。周りと同じだ。なにも変わらない。
ちよつと特殊な記憶と悲劇を覚えているだけだ」

「……ドラコ」

「こわくていいんだ、ハリー。怯えていいんだ。……こうして、僕が手
を繋ぐから」

上から重なるドラコの手は小さい。『僕』が覚えているより、ずつ
と。小さくてやわい手だ。子供の手だ。

けれど、僕にとってはなによりも大きなものを感じた。この世界で
ただひとりの——『僕』の仲間の手なのだ。

「ドラコ、僕の名前を呼んでみて」

「マリア」

「うん」

「そして、僕だけのハリー」

「……うん」

隣にある肩にそつと頭を置いてみる。僕をハリーと呼ぶドラコの
声は、寂しい彼が呼んだものとはまるでちがうように聞こえた。

「……さあ、落ち着いたならそろそろ戻れ、マリア」

「え、泊まつちやダメなの？」

「駄、目、だ」

「誰もいないのに」

「誰もいないからだろうが！」

寒さと温もりの塩梅が絶妙な為にすっかりうつらうつらしていた

僕の脳を、声変わり前の少年のヒステリックな声が引っぱたく。彼のベッドで眠る気満々でいた僕を、カンテラを引つ掴んだドラコが地上への石階段前まで引つ張り上げていく。

「君は僕に何度この言葉を言わせるんだ？　マリア・ポッター。自分の現在の性別を思い出せ」

「君と僕の仲には関係ない話じゃないか。ここにアンブリッジがいるわけでもなし」

「……………よろしい。その言葉、明日にでも君の弟君に報告させていただくとしよう」

「えっ」

「休暇明けにはグレンジャーからの説教も覚悟しておくんだな」
「ひえっ」

そうこうしてる間に、実は面倒見のいい吸血鬼によって太った婦人の前までトントントン拍子に連行されてしまった。なんてこった。こいつ、やけに手慣れてやがるぞ。

「まったく……………ちゃんと寝ろよ、マリア。姫君に限なんて作れば、赤い親衛隊たちがうるさいだろうからね」

「君こそ。嘘丸わかりな夜更かしなんてやめて自由なクリスマスを謳歌しなよ。ああ、ワインをかぶるのはもうオススメしないけど」

挨拶のような軽さで皮肉を言い合って、ほんの少し頬を擦り合わせる。

「おやすみ、マリア」

「おやすみ、ドラコ」

くあり、すっかり緩んでしまった気のまま欠伸を噛み締めた。カンテラ一つで階段を降りていくドラコをそのまま見えなくなるまで見

送る。そして、ようやく寝間着姿の夫人と向き合おうと、彼女に「十一歳でも立派なレディなのねえ」だとかしみじみ呟かれた。どういう意味だ。

合言葉を告げ扉をくぐった先、スリザリン寮とは違ってグリフィン・ドールの談話室の暖炉は未だ緩火に燃えていた。それを黒いくしゃくしゃ頭がぼう、と見ていた。

「ハリー……?」

「おかえり、マリア」

眠たげなハリーが瞳に炎の赤を映し揺らめかせながらふにやりと笑う。

「どうしたの、ハリー。こんなところで。もしかしてロンのイビキがうるさすぎた?」

「それもあるけど、……ンン、せつかくだから、マリアと寝たいなって」
言葉もおぼつかない程にふにやふにやのくにやくにやなハリーの隣に座る。すると、いつの間にかいつかのよう二人で毛布にくるまってソファへと寝転ぶ形になっていた。おおつと?」

「ずっと待ってたの? ここで、僕を?」

「んー……」

「……僕のこと、気にしてくれてた?」

「いつだって気にしてるよ。妹だもの」

「そっか……」

よし、よし、とハリーが僕を抱きしめて撫でる。いつもと真逆だ。ハリーは気付いていたのだ。みぞの鏡に狂わされた僕に。

……やっぱり、この世界のハリーは『僕』なんかより、ずっと、ずっと、すごいや。

「……ありがとう、ハリー。おやすみなさい」

「おやすみ、かわいいマリア」

旋毛にキスが落ちてくる。無条件に安心する。

ふと、少し前にもこんなことがあったな、なんてどこぞのキザな金髪を思い出しながら、僕は愛しい家族を抱きしめて眠った。

グリフィンドール寮の談話室の床の硬さを知るものがホグワーツにどれだけいるだろうか。——少なくともここに、一人いる。

「わたし、何度も言ってるわね？ マリア。あなたってかわいいの。女性としてとても魅力的な外見をしているわ。中身があまり伴わないところも、好き人にとってはたまらないでしょうね。……それで？ 深夜に男子寮へ向かったあげく二人きりで泊まろうとしたんですって？ 聞いてみればお互いお付き合いをしてるわけでもないのだとか。弁解はあるかしら」

「アリマセン」

いい加減足が痺れてきた上にウィーズリーの双子が愉快的な見世物だとばかりに腹立たしくはやし立ててくるので、そろそろ解放願いたいのだがそうは問屋が卸さない。

ハーマイオニーはそれはそれは見慣れた仁王立ちのポーズで僕をジロリと見下ろした。

「マルフォイが紳士だったからよかったものの、あなた——あなた——いえ、これってもしかしてマルフォイにも責任があったりするんじゃないかしら……。ハリーもよ。どうしてこうなるまで放っておいたの」

「あとう、ハーマイオニー？」

「いいわ、これに関する調査は後程します。とにかくマリア、まずはあなたよ。あなたが自分の性に対して無頓着なのは知ってるわ。ジェンダー問題がどれほど難しいかも、わたしは勉強してるつもりです。だからあなたに女の子らしくしろだとかそんなことは言わないわ。けれど少なくとも、その身体が女性なんだってことくらいは自覚してもらわないと。世の中の男がみんな、マルフォイやハリーのように優

しくなんてないことを、知るべきよ」

「例えばフレッドとかな」

「ジョージもいい例えだ」

「黙ってなさい、問題を起こす方の双子」

ピシヤリと返された二つの赤毛は、これ見よがしに肩をすくめた。

「マリアって普段は同じ年と思えないくらいしつかりしてるのに……
どうしてこういうところはとことんダメなのかしら……」

休暇明けそうそう頭を抱えるハーマイオニーに、とぼっちりを受け
そうな気配を察したハリーとロンが完璧な目配せをして逃げた。ず
るいぞ、僕もつれてつてくれ。

——しかし、まだまだ続きそうだったハーマイオニーの説教は、
まったく思わぬところから打ち切られた。

「——ニコラス・フラメル！」

先ほど談話室を抜け出したはずの二人がとんぼ返りしてきたのだ。
その手にはひし形のカードが握られていた。

……ようやくダンブルドアカードに当たったか。蛙チョコレート
をハリーと食べまくった甲斐があった。ちなみに僕はニユート・ス
キヤマンダーがやたらと当たった。

「ニコラス・フラメル？ 今、その話はしてないの。また図書室にでも
行くわよ。それよりもハリー、あなたにだってわたし、言いたいこと
が……」

「そうじゃないんだよ、ハーマイオニー！ これ、これを見て！」

胡乱にハリーからカードを受け取ったハーマイオニーは、そして次
の瞬間にはカツと目を開いて、二人を引っ付かみ談話室の隅へと移動

した。隣れマリアはすっかり放置だ。……君たち、僕に対してなにか企んでるつもりでもう隠す気がないよね。

「マリア」

こそこそと形だけ忍んでやってきた赤毛の双子が、ハーマイオニーによってかけられていた緩やかな魔法の拘束を解除する。

あまりに手慣れている。いつもこうしてフィルチだとかから逃げ出してるんだな、この二人。

「君たちまで悪巧み？ フレッド、ジョージ」

「俺たちが企んでなかったことなんてあるか？」

「それは失礼」

双子の力を借りてハーマイオニーの目から逃げ出す。ジャパニーズはどここの家庭でも悪さをした子供にこんな拷問をおこなうって、ほんとうかしら。足がまだジンジンしている。

さて、おぼつかない感覚のまま双子にガツチリとホールドされて連れ出された先は、クイディッチ用の練習場だった。

「マリア、君はスネイプに気に入られている。そうだね？」

パーシーの真似をして気取ったジョージに、ううん？ と首をかしげた。

「いや、まったくそんなことはないけど」

「いや、そんなはずはない。ロンがいつも言っている。アイツはハリーには難癖つけるくせに、マリアにはなにもないんだ！ 犯罪だ！」

今度はフレッドがロンの真似をして甲高く訴えた。

「オーケー、オーケー、仮にそういうことにしよう」

実際は徹底的に無視されてるだけなのだが、これに関しては言葉での説明が追い付かないほど複雑に事情が絡み合っているので、この場では流す他ない。

「——で、僕になにしてほしいんだい？」

例えばそのスネイプ教授が今ここに通りかかったならば、人生をかけて憎む男にそっくりな悪巧みの笑みに、反射的にマリアへと減点を叫んでいただろう。

ハシバミの瞳に自分たちと同じものを見出だした双子は、行き道を見つけたチェシヤ猫のようにニインマリと笑った。

「「そうこなくつちゃ！」」

双子の相談内容は至極単純だった。次の試合の審判を、なんの気まぐれかスネイプが受け持つと言い出したために、マリアに止めてほしい、というものだ。ここに、できれば面白い手段だとなおよし、が副声でついてくる。

なるほどね……と、しもべ妖精たちが次々に献上するクッキーやマフィンをむさぼりながら頬杖をつく。心ここにあらずの状態でもすばらしく美味しい。いい仕事っぷりだ。

「お嬢様！ おかわりはいただきにおなりになりますか！」

「お嬢様！ お紅茶はお飲みにおなりになりますか！」

「お嬢様！ お味はおいしくお食べになりますか！」

絶妙にめちやくちやな敬語でいじらしく奉仕に駆け回ってくれるしもべ妖精たちに癒される。このキーキー声も慣れてしまえばかわいいものだ。

「マリア、またここにいたんだ。すっかり馴染んでるね。君のローブがそのうちイエローに見えそうだ」

ふと、知る人ぞ知る厨房で馴染みの彼に会った。ハツフルパフの上級生、セドリツク・デイゴリーだ。以前にこの厨房で相席して以来、見かければ挨拶をする仲だった。

誠実で穏やかな彼は、『前回』も含めマリアの知る人々の中で最も人格のできた少年だ。初対面から好印象しかない。

「おかげさまで肉付きがよくなってきたよ」

「嬉しい報告だ。君は少しスリムすぎるくらいだから」

颯爽と彼用の椅子を用意することができるしもべ妖精たちに礼と共に微笑んだ彼は、厨房で出会えばお約束となっていた相席を始めた。断りなんて必要ない程度にはすっかり親しい仲なのだ。

「次の試合、ハツフルパフとグリフィンドルだよね」

「ああ。君の噂の弟君と戦わせてもらうことになるね。彼は天才と呼ばれているし、それが誇張なき事実だと同じシーカーの目から見ても思うよ。とても楽しみだ」

「……ふあー、やっぱりセドリツクだなあ……」

「どういう感想だい、それ」

のんびり脱力すれば、すぐさま椅子の背もたれヘクッションが仕込まれた。どれだけ至れり尽くせりなんだ……うっかりここに住みたくなるじゃないか。

セドリツクだってリラックスした表情で僕に微笑みかけてくれる

し(とつてもハンサムだ!)この場には癒ししかない。

「前から思っていたけど、マリアはその、なんというか……人懐っこいね?」

「そう?」

「そうだよ。僕に兄弟はいないけど、なんだか妹を見てるような気持ちになっちゃおう。君は甘え上手だ」

「うーん、それは……セドリックだからだよ」

「え?」

「セドリックだから安心するんだ。まったくの他人にはここまで無防備にしないさ。でもセドリックは……うん、セドリックはセドリックだから」

きよとんとしたセドリックは、そして次にはとても嬉しそうにくしやくしやと笑った。

まだ幼さの残る優しい顔つきだ。僕は、君のことがほんとうに好きだよ、セドリック。……君を喪ったあの日の傷が、永遠にふさがるところはないくらい。

「マリアはかわいくていい子だ。そんなマリアが自慢する弟も、きつと素敵な子なんだろうね。ますます楽しみになってきた」

打算だとかそんなものは皆無の純度百パーセントの評価に、むずむずしつつもヘラリと笑い返す。——そしてふと、思う。

「フェアプレー、したいよね。セドリック」

「……? もちろん」

「ちなみに審判がスネイプだったりするんだけど」

「……………それは……いや、確かに好みの分かれる人ではあるけれど……………」

「フェアプレー、したいよね?」

「……マリア？」

「僕の共犯者になつてくれる？」

きれいな目をパチパチとまたたかせたセドリツクは、やがて、やっぱり朗らかに笑った。

「いいよ。——マリアが楽しそうだからね」

……善のかたまりすぎるぞ、セドリツク・デイゴリー。

試合当日、生きて帰れないかもしれないと悲壮感に打ちひしがれている弟を送り出しつつ、セドリツクへ頼んだとウインクを飛ばした。それにセドリツクも茶目つぶりにウインクで返してくれたので、安心してグリフィンドール席へと向かおうとすれば、どこから見ていたのか依頼人の双子に問答無用でさらわれた。まだユニホームには着替えていないようだ。

「マリア、我らが姫君、グリフィンドールの美しい人」

「今のはなんだ？」

「あのセドリツク・デイゴリーが」

「ウインクだつて？」

「嘆かわしや——獅子の姫は穴熊の貴公子に引っかけられちまったのか！ まだあのいけすかない蛇王子の方がマシだぜ！」

やいのやいのと交互に騒ぎ立てる二人に、ハーマイオニーリスベクトのもと物理で黙らせる。かつてのハーマイオニーがこれで何度ドラコを黙らせてきたか。さすがハーマイオニーだ。

「セドリツクは協力者」

「協力者あ？」

「見てなよ。スネイプ先生が審判をすることは止められなかったけど……フエアプレーは確実だ」

なんたつてこの試合、スネイプ先生が名乗り出てくれたのには訳がある。それもこれも、ひとえにハリーを守るためなのだから。止めるわけにはいかない。

——けど、それとこれとは、別だよな？

客席へ戻る間も、僕は今にも始まらないかとウズウズしていた。あ——僕には間違いなく、あなたの血が流れていますよ、父さん。

試合開始のホイッスルが鳴る。ハリーはダンブルドアの姿を見つけて安心したようだ。飛び方に迷いが無い。

この頃の僕、^{ハリー}油断すればスネイプに殺されると思ってたからね。ダンブルドアさえいればどうにかなると盲目的に信じていた。

件のスネイプ先生はハリーの命さえ守ればいい試合なので、当然試合そのものに対する情熱はない。さっそくグリフィンドール選手へと難癖つけてハツフルパフへペナルティ・スローを与えたところ——事件は起きた。

「「？」」

ザワツと。会場の空気が困惑に揺れた。みんなの視線は矢のように真っ直ぐに伸びていた。——セブルス・スネイプの頭部へと。

選手すらも動揺に動けないそれに、スネイプ先生が眉をひそめる。そうすれば、連動して不機嫌そうに動く、『ソレ』。

「……………耳だ」

隣の名も知らぬグリフィンドール生（おそらく上級生だ。）が呟いたのに、僕は大きくうなずいた。

——そう、ハツフルパフへ正当な理由のないペナルティ・スローを

与えた途端、スネイプ先生の頭部に奇妙なものが生えたのだ。——黒猫の耳が。

愛らしい耳は——くつついている本体はちつとも愛らしくない——数秒ほどで消え、幻でも見たのだろうかとのろのろと動き出すハツフルパフの選手に、静まり返っていた会場もどうにか声を取り戻す。唯一、僕とセドリツク、そしてダンブルドアだけは訳知り顔でニンマリするのだった。

二度目はすぐにやってきた。

これまた理由のないペナルティ・スローがハツフルパフに与えられて——ピヨコン。

「ン、ッ!？」

とうとうスネイプ先生の近くにいたハツフルパフのキャプテンが吹き出した。スネイプ先生の頭部に——黒いうさぎ耳が生えていたのだから。

ハツとした顔でウィーズリーの二人が僕のいる付近へと振り返る。それに僕はしっかりとサムズアップした。——ええ、お察しの通り、僕の仕業ですとも。

厨房でもりもりとクツキーをご馳走になっている時に思い付いてしまったのだ。スネイプ先生がフェアに審判をする気がないのなら、せざるを得ない状況にすればいいのだと。そして、しもべ妖精たちに仕込んでもらったのである。

——特定の人物の意に反することをすれば耳が生えてしまう呪い入りのクツキーを。

スネイプ先生といえど、人間とは法がちがう妖精の魔法には敵うまい。

そしてもう一点。協力者——否、共犯者セドリツク・デイゴリーの存在も忘れてはならない。

スネイプ先生にクツキーを食べさせたのはセドリツクだし（優等生のセドリツクなら疑われないだろうという目論見だ。完璧すぎる。）

耳を生やしているのも実はセドリックなのだ。フェアプレーを信条に持つセドリックが、あ、今の公平じゃなかったな。と感じると耳が生える仕様になっていたのである。

耳はまた数秒で消えたが、スネイプ先生も何かがおかしいと勘づいたらしい。

選手たちの悩めばいいのか笑えばいいのかわからないもごもごとした顔。全力で笑い涙を流しながら肩を叩き合っているウィーズリーツインズ。再び静けさに包まれる会場。ニコニコのダンブルドア。——怪しさしかない。特に最後。

三度目の耳——ご丁寧につノつきの鹿耳だった——が生えたところで先生はカラクリに気付いた。そして激しく睨んだ。——ハリーを。憎い人を前に視線だけで人を殺せると聞かされた人間がいたならば、きつとこんな目をするにちがいない。

ハリーが、なんで僕!? といった顔をしたがそれすらも面白すぎる。黒い鹿角を生やし耳をピルピルさせたセブルス・スネイプが齒軋りしているのだ。笑わずにいられるか。

今回はしっかりと用意した双眼鏡を覗きながら、僕の心は晴れ晴れとしていた。父さん、シリウス——どうせイタズラするなら、やっぱり痛くない楽しいものじゃないと、ね?

スネイプ先生に睨まれるままハリーが最高記録の早さでスニッチを獲る。この時ばかりは、試合がさっさと終わってスネイプ先生もハリーに感謝したことだろう。……冗談だ。

肩車されてお祭り騒ぎのハリーに祝いの言葉とハイタッチを送つてから、悔しそうだけれどすつきりした表情のセドリックの元へと駆け寄る。

「セドリックー!」

「マリア」

セドリックとも大きくハイタッチ。そこには作戦成功への感謝を込めていた。セドリックのことだ、きつと伝わっただろう。

「おめでとう、グリフィンドル。やっぱりハリーは強かった。それから……君のおかげで、とてもワクワクしたよ。こんなのははじめてだ」

二人だけに通じる言葉でくふくふと笑う。あのセドリックをイタズラの道に引き込んでしまったのだ——こんなに楽しいことがあるか。

「公衆の面前でおあついねえ、お二人さん」

セドリックと僕と、均等に肩へ重みがかかった。依頼人の二人だ。

「君って、中々話がわかるやつじゃないか。ハツフルパフの貴公子殿？」

「最高だろう？　うちの姫さま。王子と貴公子の間で取り合いが勃発しちやったりしない？」

「フレッド……ジョージ……」

すっかり新しいオモチヤを見つけた顔の二代目悪戯仕掛人たちに、再びハーマイオニー流・物理拳を叩き込んでおいた。

何か企んでいることくらいは、三人の顔つきからわかった。そもそも、この三人に——悪戯好きのウィーズリー双子とはちがった意味で——企んでいない時なんてなかっただろう。それで散々スネイプ先生に迷惑をかけたのだから。身に覚えがありすぎる。(この身ではないけれど。)

だがしかし。しかしだ。だからといって——

「——さあ、よく見ちよれ……孵化るぞ！」

「「わあ……!」」

まさか『これ』に巻き込んでくれようとは。

パキパキと黒くて大きな卵が割れ、中から骨っぽい——コウモリっぽい——いや、トカゲっぽい——とにかく、ハグリッドいわくの「かわいくてすばらしく美しい」とはお世辞にも表現できない生き物が顔を出した。——ドラゴンだ。

部屋は狂ったように暑くて、小屋の外から窓も扉も何もかもが閉めきられた状態を見たその時からかなり嫌な予感はしていたが——
——ああ、『これ』があったか。

前は、……ちよつと理由は忘れたけど、ともかくマルフォイがドラゴンの存在をどうにかして知って、チャーリーへ届けるためにお馴染みの深夜徘徊しているところをマクゴナガル先生へとチクられたんだっけ。そしてあのトラウマ第一号の罰則へと繋がるのだ。

ああ……わかつてはいたけど、この様子だとフラッフィーの宥め方だとかも酒の席でクィレルに話してきちやってるんだらうな、ハグリッド。

生まれたばかりでゲップみたいに火を吹くベビードラゴン——
——やっぱり名前はノーバートだった。あとでわかるがこの子はメスだ——
——にハグリッドが感動して、ゾツとするような猫なで声であやして

いる。それを、ドラゴンの孵化まではワクワク顔で見ていた三人（主に男の子二人）が、今は悩むような顔にかえて目だけでどうしようとして囁き合っていた。

魔法動物のこととなると、ニユート・スキヤマンダーもびつくりの頑固さを見せるハグリッドだ。さて、彼は説得に応じてくれるだろうか。——ドラゴンの飼育は違法だから手放せという説得に。

この日はメロメロのママちゃん節を炸裂させる気味の悪いハグリッドに戦略的撤退をし、後日、気を取り直して何度か足を運んでみるも、ハグリッドがうなずく気配は欠片もなかった。

途中から僕はなるようにしかならないと諦めてしまったけども、友情に厚い三人は懸命に説得を続けているようだった。蒸され汗びっしりになって帰ってくるのだからわかりやすい。

そして、とうとうやってきた。——危機一髪、ドラゴンとの深夜徘徊の案が。

チャーリーからの手紙を見せながら土曜日の深夜に天文台へ連れていくのだと語る三人に、無理矢理記憶を絞り出す。

はてさて、なんで失敗したんだったかな……マルフォイはその身で告げ口しに行ったらそのまましよっぱかれて、僕らは聞いている限り透明マントを使ったはずだし……あ、どこかでマントが剥がれたのかしら。

子供ながらに慎重に動こうと頭を働かせている三人（主にハーマイオニー）を見守りつつ、通信紙を取り出す。……ともかく、裏の協力者どのへの報告は済ませておきましょうか。

決行当日、ドラゴン運送に当たるのはいつもの三人——だったところにトラブルが起きた。ロンがノーバートに噛まれてしまったのだ。当然、医務室行きになったロンを見舞えば、さらに事態が深刻化する発言が待っていた。

「手紙……置いてきちゃった……」

ノーバートに噛まれた手をなんとか医務室へ行かずに済ませられ

ないか（「だってどこからドラゴンのことがバレるか！」）ドラゴンについて図書室で本を探していたのだという。結果、ノーバートことノルウェー・リツジバック種の牙に毒があることが判明して速やかに治療となったのだが。

その際に、気が動転してチャーリーからの手紙を本に挟んだままにできてしまったというのだ。

慌ててハーマイオニーが図書室へと確認に行けば、手紙はきれいさっぱりなくなっていた。

マダム・ピンスはなにも言わなかった。——誰か、生徒が拾ってしまったのだ。

絶望に打ちひしがれる子供たちをなだめ、ロンからどうにか付近にいた人のローブの色を聞き出す。——緑色だった。ああ、どこまでも相性が悪すぎるぞ！ スリザリン！

めちやくちやな無茶振りだとは理解しつつも、ドラコにそれらしい手紙を持っていたものがないか搜索を任せる。

期待はしていなかった。スリザリンの何年生かわからないし、そもそもスリザリン生ではないかもしれない。正直、無駄な足掻きだろうと高をくくっていた、そこに——見つかってしまった。

恋文でも持つかのように手紙を抱きしめ、意地悪そうにニツタリと笑ったパンジー・パーキンソンが。

前回といい今回といい、此度の嘸ませ犬キーパーソンは君なのかい！？ パーキンソン！

何故だかドラコにはよく情報を落としてくれるパーキンソンは、今回もご機嫌に『計画』を話してくれた。

深夜にドラゴンを運ぶだろう三人の存在はフィルチへ通告済み。手紙は今後も脅しに使いそうなのでフィルチには知らせず自分だけで保管するとのこと。そしてその手紙はドラコがあつさり盗み出し燃やしてしまったというオチ付きだ。出来る男すぎる……ドラコ・マルフォイ……過去のヘタレ空回りっぷりはどうしてしまったんだ。

さて、現実逃避をしてもやることは変わらない。ドラコができる限りのバックアップをしてくれたのだ。フィルチが待ち構えているよう

と——今日、ノーバートを運び出さなければ。

時間がやってきた。ノーバートと感動の別れをする毛むくじやらのママちゃんからしらつとノーバートを取り上げ、三人と箱に入った一匹へと透明マントをかぶせる。かなりギリギリだ。だが、隠れなくはない。

そこからは会話なんてなかった。とにかくこの怪物を手放して平穩を取り戻したい一心で三人は足を動かした。——頂上だ。数刻して四本の筥と乗り手が現れた。チャーリーの仲間たちだった。ノーバートが譲り渡されていく。その光景は三人の心は晴らした。

ようやくつらい任務を終えたと声なく喜びをあげて、ノーバート分の余裕ができた透明マントで悠々と帰ろうとしたところで——

「探しているのはこれかあい？　かーわいい一年生ちゃああん」
「……………ピー、ブス」

ピーブスが、プカプカ浮きながら透明マントを掴んでいた。

「ピーブス！　それを返せ！」

「んんー？　ものを頼む態度じゃないぞう、ポッターちゃあん？　あ

おいお顔の二人のポツティ！」

「ピーブス、頼むから、それを返して。この通りだよ」

「お願いよ、ピーブス」

三人揃ってはた迷惑なポルターガイストへと懇願する。必死だった。今ならピーブスの間抜け面を世界一の宝石のように褒め散らせそうだ。現に、ハーマイオニーは懸命にピーブスをよいしよした。

それに満足げにうなずいたピーブスは——透明マントを窓から投げた。くそつたれ！

ハーマイオニーから悲鳴が上がる。慌てて抑えたところで——遅かった。

「おや、おや、これは困ったことですねえ……」

フィルチが、目を爛々と輝かせて扉の先に立っていた。

一晩でグリフィンボール寮点がマイナス百五十点。これがどれほどの事件か、ハリーとハーマイオニーは思い知らされた。

特にハリー……そしてマリアはひどかった。なまじ有名だったばかりに、完璧な針のむしろだった。

同じ寮生には責め立てる目で見られ——レイブンクロー生には今世紀最大のバカを見る目で見られ——ハツフルパフ生からは関わってはならないものとして見られ——

スリザリンなんかは最悪の最悪だった。特にパンジー・パーキンソンが、マリアに、すべてあなたのおかげよ、と鼻穴をめいっばい膨らませて微笑んだのだ。あのハーマイオニーですら反論することはできなかつた。

もう、ロンとその兄弟たち、そしてドラコ以外話しかけてくるものはいないだろう——そう思われた。

だが、意外なことに、『彼』もハリーたちをいまだに仲間と想ってくれる一人だった。

「気を落とさないで。ハリー、マリア」

ネビルだ。

ネビルは、遠くを見るマリアと特に落ち込むハリーの肩を叩いた。

「みんなすぐに忘れちゃうよ。むしろ僕は許せない。みんなハリーを持ち上げて、マリアに頼ってばかりしていたのに、こんな手のひら返しだなんて」

「ネビル……」

双子がくすんと鼻を鳴らす。

なんていい子なんだ、ネビル。僕としては『前回』で散々期待やら失望やらを押し付けられてきたから、この程度は今さらと思つているところもあるけれど——むしろこれから……そう、たとえば三校対抗試合だとかに待ち構えているものを思つて憂鬱だつたりするところもあるけれど、彼の優しさはほんとうに沁みる。君はすばらしい人だ、ネビル。

そして廊下で時たま同伴するレイブンクローの彼や、セドリツクなんかも実はマリアを避けずにいてくれた。それだけで心強かつた。なんだかんだ落ち込んでいた僕の心を掬い上げてくれた。

さて、試験が近付いてきた。三人は試験勉強に没頭することで周囲の目から消え入ろうとしているようで、僕は三人へ教えつつも——基本的な先生はハーマイオニー、時々ハーマイオニーが僕に聞いてくる形だ——憂鬱になるばかりだつた。

いつあの罰則がやってくるか——答えは試験一週間前に与えられた。

届けられた三通の手紙に、二人の顔は真つ蒼だつた。

フィルチが待つ玄関ホールへ向かう間、ハリーとハーマイオニーの二人は沈痛としていた。僕はといえば、出くわすかもしれない存在に向けて、杖に、頼むから言うことをきいてくれよと聞かせるのに必死だった。

霞の存在とはいえ、とうとう顔を合わせることになるかもしれないのだから。——クイレルに寄生するヴォルデモートと。

罰則前にか会えたドラコが自分の杖を持っていけと気遣ってくれたが、それはさすがに……と一人の魔法使いとして断った。マグル暮らしに慣れている僕と違って、今も『前』も生粋の魔法使いであるドラコにとって、杖を長時間手放すということがどれほど恐ろしいか。わからないほど無神経なつもりはない。無神経な人間の自覚はあるけれど。

実際、『前』ではマルフォイの杖を奪って持ち歩いてたわけだし。あの時は敵同士だったんだもん、情けはいらないよ。

フィルチがぶつぶつと嗜虐心たっぷり二人を脅かすのを、和解前のクリーチャーみたいだなあ、なんて頭の中だけで呟いていけば、小屋からファングをつれたハグリッドがやってきた。若干の武装をしている。やっぱり罰則は禁じられた森の中へと入ることのようだ。

フィルチが最後まで皮肉たっぷり城へ戻ったところで、バアツとハグリッドが頭を下げた。勢いがよすぎて新手の攻撃かと思った。

「すまねえ！ マルフォイの坊主から聞いたんだ！ 俺が……俺がああ、悪かった……こんな罰則まで受けさせちまって……俺が……」

オイオイと泣くハグリッドをハリーとハーマイオニーが慰める。けれども、嘘でもあなたのせいではないよ、とは言えなかった。

「さつさと済ませちゃおうよ、ハグリッド。それで、あつたかいミルクでも飲ませてくれたなら嬉しいな」

「そうよ、ハグリッド。ノーバートは無事にチャリーの元へいけたわ。警戒がわたしたちにも足りなかったの。ただ……その……ドラゴンを飼う計画はもうやめてほしいけど」

「もちろんだ！」

ハグリッドが吠えて、フアングがうなずいた。

ハグリッド一人がどれだけ反省しようと罰則はなくならない。おそらくどこかの窓からフィルチが監視していることだろう。森へ入るところまでは見せておかなくては。

罰則内容は前回と同じだった。憐れなユニコーンを見つけ出すこと。しかし今回はミイラ取りがミイラなマルフォイがないので、二手に分かれることなく皆で固まって進んだ。

途中でケンタウロスに会った。ロナンとベインだ。ユニコーンを見なかったかと問うハグリッドに、明確な答えこそ無いものの、ロナンは火星が明るいと彼等なりの忠告を寄越して——ベインが僕を脇に抱えた。

「えっ？」

「お、おっ？」

はじめて同じ高さになった顔をハグリッドと見合わせる。

「あの……っ？」

「お前はなんです」

「はっ！」

ベインが荒々しく駆け出した。——僕を抱えたまま。

ロナンが困ったような顔をして追いかけてくる。ベインを止めようとしてるんじゃないなくて、本当に困惑してるかんじの顔だ。その後ろ

をハリーが尻尾に飛び付くようにしてついてくる。置いていかれたハグリッドとハーマイオニーが粒になっていくのが見える。

「あ、あの、はなして、ングツ！ は、はなして、くれませんか」

「お前はなんです。惑星はお前を示していない」

「僕、ちよつと、ケンタウロス語は、わかんないです！」

「マリア！」

「ハリー！」

ハリーが転んだのを、ロナンが気にして振り返った。でも足は止めない。ハリーはクイディッチ練習でつちかった脚力をめいっぱい酷使して僕らを追いかけていた。

ハリーを守るつもりだったのに、なんでこんなことになってるんだ。

「ひえっ」

「マリア！」

ポイツと雑に放り出されて、滑り込んだハリーにキャッチされた。ハリーはすっかり泥だらけだ。ベインは冷たい顔をしていて、ロナンはそんなベインにどう言葉をかけたものかと悩んでいた。

「さあ、ユニコーンです」

「え？」

僕らが倒れ込んでいた場所から木を二本ほど向こうにした所に、美しく儂い真珠の死体が横たわっていた。

ハリーも僕も言葉なくそれを見た――
ずる。ずるり。

全身を地面に引きずるみたいな、みすぼらしいローブがユニコーンへと近づく。急にガタガタと体が震えて、僕の震えなのかハリーの震

えなのかわからなかった。

ケンタウロスたちもなにも言わずただ見ていた。ローブの中にあるなにかが——ユニコーンの血をすすめるのを。

残酷な光景だった。罪深いものに、無垢な体が犯されている。肉を裂かれ、血をすすられている。死んでなお、辱められている。なんて——ひどくて——おそろしくて——哀れなのだろう。

恐怖よりも、泣きたい気持ちが大きかった。

そうまでして——君は生きたいのか。

愛することも愛されることも知らないで……生きたいと叫ぶ心ばかりが生きている。それだけが純粹だ。

「マリア……」

「ハリー……」

互いに手を繋いで囁き合うしかなかったそこに、ハリーの苦しむ声が響いた。呪いの傷が彼を蝕んだのだ。

ローブの中が僕らに気付く。ケンタウロスたちは少し離れた場所において、見ていた。ただただ、観察する目で僕たちを見ていた。

「マ、リ……逃げて」

「いやだ！ ステューピファイ！」

どうにか杖は応えてくれたが——弱い。赤い閃光はあつさりと弾かれる。

ハリーは動けそうにない。ああ、こんなことならドラコに甘えて杖を借りてくればよかった……！

唇を噛みしめ、思い出す。取り憑かれたようにハリーのローブをまさぐる。

そうだ——ハリーの杖がある！

だがしかし、杖を探し当てる前にローブの影がおどろおどろと迫っていた。

「ツエクスペクト——」

まともな判断でなかったが、反射のように自身の杖でパトローナスを呼ぼうとした。——声は続かなかった。

影がもうひとつ、影へとぶつかったのだ。ケンタウロスだ。ロナンでも、ベインでもない。遠くで見ている二人よりも若いケンタウロスだった。

ローブの男は弾かれ、地面へ沈むように消えた。それを勇ましいケンタウロスの男はジツと見ていた。そして次には、ベインとロナンへと唸り立てた。

「なぜ、手を貸さないので！ この子がだれか、わかりませんか！ ポッターの子だ！ この子はポッターの子です！」

「ケンタウロスは天に逆らわない。我々が関心を持つべきは予言だ。君こそ、なぜ見届けなかった」

ベインが冷たく返す。

「あなたには、この森に忍び寄るものの禍々しさがわかりますか？

あの憐れなユニコーンが、あなたには見えていないのですか？

ベイン、私は立ち向かう。必要とあらば人間とも手を組みます。さあ、

ポッターの子、ハリー・ポッター。背中へ乗りなさい。君は……」

「フィレンツェ！」

とうとうベインは前脚を怒りに上げていなないた。治まった痛みと突然の展開に目を白黒とさせていたハリーを背中へ乗せ、僕は彼の首にしがみついて、不安定なままフィレンツェは走り出した。ベインとロナンは追ってはこなかった。

やがて並足になったフィレンツェは立ち止まった。そつと二人で支えあいながら彼から降りる。ハリーがおそるおそると尋ねる。な

ぜ、自分たちを助けてくれたのかと。

ベインの剣幕から、ファイレンツェはなにかケンタウロスの法に反することをしてしまったのではないかとハリーは不安だったのだ。……自分たちのせいで、ファイレンツェがひどい目にあったりしたら、ファイレンツェはハリーの問いには答えなかつた。むしろ問いかけた。ユニコーンの血の意味を。ユニコーンを殺すことがどういふことかを。——呪われてまで、生きたいものの存在を。

賢者の石を求める本当の意味に気付いて、ハリーは今にも倒れそうに白くなつた。それを抱きしめることしか、僕にはできなかつた。

「マリア……今のは……今のは……」

「ハリー。大丈夫、君は一人じゃないよ」

この世界のハリー・ポッターは、ひとりなんかじゃないんだ。

「君は……」

再び、ファイレンツェが僕を不可解そうに見た。ベインとロナンも同じ目をしていた。惑星を読み予言を解くケンタウロスが、不可解そうに。

「君は、なんですか？ 君は……」

「マリア・ポッターです」

「マリア。ポッターの子ですか？ 君が？」

いやに含んだ言葉だ。ハリーと見合つて、ファイレンツェは何を言いたいのかと続きを待つ。

「マリア……なぜ君は……なぜそうまでして——呪われているのです？」

「——え？」

「君はこんなにも無垢なのに、罪がないのに、なぜ呪われているのです」

「え、僕、」

「マリアは呪われてなんか!」

ハリーが食ってかかった時、バウバウと犬の鳴き声が響いた。フアングだ。後ろからハグリッドと息も絶え絶えなハーマイオニーが続いた。

「ハリー! マリア! 大丈夫なの? いったいなにが……」

「ハグリッド、今、この森は危険です。ユニコーンならば向こうにいました。もう息はありません。ハリー・ポッター、彼をつれてお帰りなさい」

ハグリッドへファイレンツエが忠告を送る。ロナンやベインよりもよっぽど親切だ。少なくとも言葉になっている。

「幸運を祈りますよ、ハリー・ポッター。ケンタウロスでさえも惑星を読みまちがえたことがある。今回もそうなりますように。そして、マリア・ポッター……」

ファイレンツエは続く言葉を呑み込んだ。なにも言わず、去っていった。

その場に残されたのは、手を繋ぎあい、互いの存在を確かめるように震える二人だけだった。

翌日、マリアはドラコにすっかりみっちり叱られていた。

「だから、杖を、持っていけど、言ったんだ!」

「返す言葉もない……」

いつかのように彼の杖でむいむいと頬を押される。あんなわけわかんないことになるとは思わなかったんだよう。

「自分の杖が駄目だと思ったならさっさとその辺の杖を取れ。今回の場合はハリーの杖だ。何故すぐ思い付かないんだ。まったく……闇祓い局局长だった頃のご自慢の判断力はどうした」

「うーん……」

これに関しては、僕にも少し思うところがある。

「なんだろう、ハリーの杖は駄目な気がしたんだよ」

「ハア？」

「説明が難しいんだけど……触れちゃいけないと思ったんだ」

「……『君』の杖だろう？」

「だからじゃないかな。『ハリー』の杖だから、僕が触っちゃいけないと思ってしまう」

「……………」

ドラコは考え込んでいた。これは、きつと僕にしかわからない感覚だろう。ドラコは今も昔も同じ杖を相棒にできたのだから。

「……わかった。それに関しては不問にする」

幾分かはすつきりしたのか、杖を持ったまま両腕を組んだドラコは呟いた。

「ところで君、呪われてるのか？」

「僕がききたいよ」

あまりにもあっけらかんとするものだから、こちらまで気が抜けてしまった。

「どの範囲のどの部分かまで言っていけというんだ。これだからケンタウロスは」

「まだ親切な方だよ、フィレンツェは。会話になる」

僕の皮肉にちよつとだけ笑って、ドラコのそんな様子に僕も小さく息をつく。

茶化した風にしていたけれど、ドラコは非常に緊張していた。僕の報告のひとつひとつに引っ掛かっているようだった。……よかった、やつと笑ってくれた。

「――残すは賢者の石だよ、ドラコ」

「ああ」

ハリーたちは犯人という致命的な一点において以外、ほぼ答えを探し当てたと見ていいだろう。

ダンブルドアがホグワーツを離れるその時――宿命との戦いが幕を上げる。

マリア・ポッターと賢者の石【完】

試験が終了した。ハリーとロンは解放感からぐったりとしていて、ハーマイオニーは「案外やさしいものだったわ」なんて言葉で二人を恐怖に陥れていた。今回も学年トップを飾るのはハーマイオニーだろう。僕とドラコは存在自体がズルなのだから、さらに子供たちの可能性を上から潰すなんて大人げない真似はしないと決めたのだ。

それに、試験が簡単なのは今だけだ。元々が並みだった僕なんて、五年生辺りから実力の上でハーマイオニーに抜かされるだろう。

暖かな日射しに駆け出す三人組を見守っていれば、ポンツと肩を叩かれた。最近では、肩を叩く仕草ひとつで誰かわかるようになってしまった。

やわらかく手を置くのがセドリック。腕を回す勢いなのがレイブンクローの彼。ハリーは羽根でもそこにあるのか、みたいな軽さだし、ロンはちよつと乱暴。ハーマイオニーは肩を叩く前に飛び付いてくる。授業中とかで気を向けさせたい時には指でつついてくる。いじらしいものだ。

そして、心の底から気軽で、彼にしては女扱いを感じさせないこの叩き方は、

「ドラコ」

スリザリンの狡猾な王子さま一択だ。

「試験はいかがでした、グリフィンドールの姫君」

「あなたのご想像通りかと存じますわ、スリザリンのプリンス」

嫌われものになった今ではほとんど呼ばれないバカげたあだ名で、日課のようになっていく皮肉を交えながら木陰に寝転ぶ三人を眺める。

少しの沈黙。互いの思考は一致している。

「今夜だな」

「今夜だよ」

試験も終わったというのに、これからが決戦だとばかりに僕らの緊張は高まっていた。

試験までの間、ハリーと僕は毎日談話室で同じ毛布にくるまって寝ていた。——ハリーの傷が、じくじくと痛み続けるのだ。呪いに苦しむ弟を、どうして放っておけよう。

僕が側にいるからといって、何ができるわけでもない。あの日の夜、何が起きたのかいまだ真相はわからずじまいだけど——おそらく僕はこの身に死の呪いを受けていない。そんな僕に、ハリーの痛みの肩代わりはできない。

けれど、それでも——『僕』はその痛みを知っているから。

今夜だ。今夜、奴の魔の手を払いきれれば、ハリーの寝顔にも安らかさが戻る。

「頼むね、ドラコ」

「ああ」

事も無げに返すドラコに小さく笑む。

ドラコには、以前から三人への付き添いを頼んでいた。——賢者の石を守りに行く彼らの。

過度な庇護は必要ない。きっとハリーなら守りきれぬ。僕にすらできたことだ。『僕』なんかよりも、よっぽど優秀で心優しいハリーを信じられないわけがない。

でも、だからといって、心配しないのとは話は別だろう。保険はいくらかけたって損にはならない。

負担の大きい役割を押し付けられたドラコは、そんなことは些事だとばかりにあっさり頷いた。——ハリーと共にいて、『あの人』の目

に触れない可能性はないというのに。

……ほんとう、これだから実力のともなった見栄っ張りには頼りになって困る。

さて、現場をドラコに任せた僕はというと、解放感に浮かれる生徒たちから離れ、暴れ柳の近くへと来ていた。

「――ダンブルドア先生」

「やあ、マリア。この子は……非常に賢い子じやのう。思わずフォークスの餌皿から餌をいくつかやつてしまおうた。フォークスが拗ねておらねばよいが」

「では、こちらをフォークスに。きつと気に入ると思います」

ヘドウィグお気に入りのオヤツを一袋ダンブルドアへと手渡せば、ダンブルドアの腕に留まっていたヘドウィグが不満げに僕の指をつついた。

「イタツ、イタタ！ ごめんって、ヘドウィグ。この後ちゃんと君にもあげるから」

ホー。やつぱり不満げながらも、ヘドウィグはダンブルドアの元から腕伝いに僕の肩へと戻ってきた。あ、ちよつと毛並みがよくなってるな？ どうやら本当にかわいがってくれたらしい。

「面倒を見ていただいてありがとうございます。ダンブルドア先生」
「いいや、いや、礼には及ばんよ。校長室の外で、わしが出てくるまで根気よく待ち続けてくれた子じや。わしは健気な動物は一等甘やかしたくなるのじや。……さて、マリア。そうまでして『これ』を届けた理由を、話してくれるかの？」

ダンブルドアのシワだらけで優しげな指には簡素な白封筒が挟まれている。この相見への誘いの手紙だ。ヘドウィグには苦勞をかけ

だが、今日どうしても話しておかなければならなかった。

「まず、透明マントのこと、ありがとうございます」
「…………ふむ」

ピースに投げ捨てられたというのに、いつの間にか戻ってきていた透明マント。そして、『必要な時のために』と残されたメモ。

ハリーは誰が届けてくれたのだろう、と不思議そうにしていたが、僕は知っている。

「——なぜ、わしじやと?」

「死の秘宝ですから」

はじめて、ダンブルドアから笑みが消えた。青い瞳が好々爺の顔を捨てて僕を見る。

「…………君は…………」

「今日、先生はホグワーツを出られますよね? ……そして、帰ってくる。私、先生にお願いしにきたんです」

「…………ふむ、聞こうかの」

「ハリーの元へ行くとき、私も一緒につれていってください」

ダンブルドアは、長く長く僕を見つめていた。

「今夜、なにが起こるか、君は知っているか?」

「ええ」

「ならば、君は…………ハリーと共には、行ってやらんのかね?」

「みぞの鏡の元までたどり着けるのは一人だけです。スネイプ先生の罠が、そう作られているでしょう?」

ダンブルドアは答えなかった。ジイ、と、どこまでも僕を見ていた。

「確かめる必要があるんです。そして、やらなくちゃいけない。……
ハリーでなく、僕が」

「……では、わしも今ここで、確かめてよいかの？」
「はい」

キラキラとした青の瞳は、ともすれば断罪を与える刃のきらめきの
ようにも見えた。

「君は、ハリーの味方かね？」

「世界中の、誰よりも」

迷いなんてなかった。この世のなによりも、——僕の味方は、僕に
決まってる。

「——今夜は、談話室で起きていなさい」

それだけ告げて、ダンブルドアはニツコリ笑うと、ヘドウィグを撫
でてから去っていった。

「……ヘドウィグ」

ホウ。頬へ頭をすり付けて慰めてくれるヘドウィグの毛並みは、
やっぱりつやつやで気持ちよかった。

「——ネビル、もう寝たら？」

ハーマイオニーの声がする。夕食後、覚悟と思い詰めた顔でだんま
りを決め込んでいた三人は、誰もいなくなった談話室で今にも行動を

起こそうとしていた。そこへネビルが現れたのだ。僕はそれを、誰かが積み上げた本の裏から見ていた。

ああ、ネビル。君はいつだって勇氣に溢れているんだ。この時の僕は君のことを融通の利かない邪魔者のように思ってしまったけれど、君の正義はいつだって正しい。

「僕、僕——君たちと戦う！」

「ネビル、バカはよせ」

「これ以上、規則は破つちやならない！」

「ネビル……僕らが減点されたとき、君は慰めてくれたじゃないか。僕と、マリアを。お願いだからそこを退いて。僕たちはやらなければいけないんだ」

ハリーが困り果てた顔でいきり立つネビルを宥める。それにネビルはカッと目を開いた。ぶるぶると震えていても、瞳には誰よりも強い意志がともっていた。

「僕だってやらなくちゃならない！ マリアが——そのマリアが言ったんだ！ 僕のこと、尊敬してるって！ 僕には勇氣があるって！ マリアが信じてくれた僕を、僕は信じる！ 僕を信じてくれるマリアを裏切らない！」

「……………」

咄嗟に口をおおった。そうしなければ、叫んでしまうと思った。

ネビル、ネビル、君は、なんて——

「ネビル……ほんとうに、ごめんなさい」

ハーマイオニーの杖から光が走る。ネビルは硬直し、バタリと倒れた。全身金縛りの魔法だ。

ハリーたちの三人はもう一度だけネビルへ謝って、透明マントをか

ぶつて出ていった。通信紙にグリフィンホール寮の下で待機中と浮かんでいた。じきにドラコと三人は合流するだろう。

「……ネビル」

歯を食い縛った状態の彼から、かすかに涙が見えた。

「——フィニート・インカンターテム」

杖は応えた。ネビルの見えない拘束が消える。

「マ、マリア、三人が——あ、ありがとう、でも、三人が！」

混乱しているネビルの目尻を撫でて涙を払う。

「ネビル。かつこよかったよ。君の正義はいつだってまぶしい。——そんな君を、僕は尊敬してる」

「マリア……」

「どうか、今夜の君を誇ってくれ。……おやすみ」

ネビルの体から力が抜けていく。寝息が聞こえる。どうにかソファへ転がし、毛布をかける。

なんだ。こんな時ばかり、言うことをきくんじやないか、君。

杖を振って、ネビルへと悪夢払いをかける。そうして、彼の眠りを見届けたところで、ふと、連れ帰っていたヘドウィグが目の前で足を差し出すのに気付いた。——手紙を掴んでいる。

否、手紙なんて大袈裟なものではない。便箋一枚のメモだ。ハリーの字だった。

『親愛なるマリア

君が起きた時、朝だったならいいと思っています。

けれど、もしも夜中に起きたなら（君って、僕が起きると起きるん

だもの！)

どうか僕とロン、ハーマイオニーをさがさないでください。

僕たちは賢者の石を守りにいきます。(マリアのことだから、賢者の石の説明をしなくても、なにが起きてるか知ってるんだよね？君っていつもそう。)

もしかしたら、僕は生きて帰れないかもしれない。生きて帰れても、きつと退学だ。

そのときは、マリア、君はホグワーツに残って。それで、手紙で君のこと、魔法のこと、教えてください。

黙っていた僕を、どうか許して。あなたの元へ帰れるように祈っていてくれる？ 愛してる。

君のただ一人の兄、ハリー』

「……ほんとうに、もう」

手紙を大切にたたんで、ヘドウィグを撫でる。

「君のご主人さまは、愛情深いね」

ヘドウィグは当たり前だろうと言わんばかりに大きく鳴いた。

ハリー。たった一人の兄弟。

一度目も二度目もない、本当にただ一人だけの兄弟。

僕は、この先になにがあったとしても——君を守り抜いて見せるよ。

やることもなく、けれども気持ちばかりが逸ってしまうので、手慰みにネビルを撫でていた。柱時計の針はすっかり零時を回っていた。

「マリアや」

いつの間にか魔法使いらしい老人が暖炉の前に立っていた。いかにもな好好爺で——狸爺だ。

「ネビルはわしが運んでおこう」

スイ、としわくちやの手が杖を振れば、それだけでネビルの体が浮き、寝室の扉は開き、毛布はたたまれ、ネビルが吸い込まれていく。きつとベッドの上掛けは勝手に捲れるし、枕は優しくネビルを受け入れる。

それをなにも言わず見守っていれば、静かに寝室の扉は閉まり直した。そして魔法使いの老人、ダンブルドアはニツコリと笑った。

「それでは、行こうかの」

「——ハリーツ!!」

クイレルと揉み合い絶叫を上げるハリーの元へと駆け出す。クイレルは火傷だらけのボロボロで、ハリーもまた脂汗を滝のように流しながら気絶していた。クイレルの後頭部からヴォルデモートの頭はなくなっていた。

「ハリー、ハリー……」

そっと抱えれば、力の入ってない身体はマリアの十一歳の手にはひどく重いものだった。けれど——なんて軽いのだろうと、僕は泣きたくてたまらなかった。

「ハリーは大丈夫じゃよ、命に別状はない」

「ええ、そうでしょうね。間に合うギリギリのところを、あなたは選んだんだ」

「マリア……」

ダンブルドアはなにも言わなかった。僕だって、それ以上はなにも言えなかった。

——僕とダンブルドアは同じだ。

目的が違うだけで、知っていること、気付いていることを自分の中だけで隠し、試すように周囲を動かす。時には知った上で見捨てる。ダンブルドアは最終的な正義の為に動いていて、僕は喪つたものとハリーの為だけに動いている。目的へ近づくのに、躊躇いなく他を切り捨てる残酷さを持っている。

僕はかつてスリザリンに向いていると組分け帽子から囁かれたが、そしてそれは今となっては真実以外のなものでもないが——きつとそれは、この人も同じだ。

知れば知るほど、ダンブルドアはグリフィンボールの正義を持ったスリザリンだ。

僕たちの望むものが結果的に重なっているから、共に動いているに過ぎないのだ。

そしてそんなダンブルドアを——僕は、なんて人間らしい人なのだと、愛しく思う。

勿論、彼の狡猾さにゾツとし、かつて彼の駒として何から何まで、心すらも動かされていたのには思うものがある。

けれども、彼は神に定められた機械ではなかった。心があった。苦

悩した。彼だって間違えた。後悔に苛まれていた。——それだけで、僕は許せてしまった。

彼はすべてを見通す神様みたいな魔法使いなんかじゃなく、彼も僕と同じ人間なのだと、知ったから。

僕にはあなたは恨めない。

「ハリーをお願いします」

ハリーを強く抱いて、額の傷にキスを落として、心做しか安堵したような顔のハリーをダンブルドアへと預ける。あなたの手を——信賴します。

「……クイリナス、クイレル」

息も絶え絶えで、先には死しかないその人に触れる。——触れられる。……やはり、僕に母の愛の呪いはない。

これが、僕の確かめたことだった。そして、もうひとつ。どうしてもこの場に居合わせたかった理由は。

「エピスキー」

「マリア……」

せいぜいが火傷の炎症を治める程度のものだ。一年生の身で振る魔法なのだから。……それでも、安らかであってほしい。

クイレルの息がなくなるまで、僕は死にゆく人の手を握り続けた。

——『僕』がはじめてこころした人。母の愛の呪いを受けた人。

どうか、死にむかえられる光が、闇でありませぬように。

「マリア……君は……憐れむのか。闇すらも」

「いいえ」

冷たくなった手をそつと放す。クイレルはいなくなった。

「僕は僕のためにこうしたまでです。すべて、僕のためです。クイレルは最後まで、僕に利用されたんです」

だつて、そうだろう。

『僕はクイレルを忘れなかった。それは、彼をこの手で殺したのかもしれないという罪の意識からだ。とても苦しいものだった。』

だから——僕から取り除きたかっただけなんだ。

僕が憐れんでいるのは、僕だ。

「……マリア、ここから離れるとしよう。ずいぶん、冷えてしもうたじやろう」

ハリーを抱え、僕の肩を抱いてダンブルドアが立ち上がる。

小さな声だった。傷付いた子供をいたわる、心ある人の声だった。

「君は、優しい子じゃよ。マリア」

廊下でハグリッドに捕獲された。捕獲という表現が的確な姿をしていた。——泣きべそのハグリッドの脇に片手で丸太みたいに抱えられているのだから。そろそろ胃から朝食が戻ってきそうだ。人は重力には勝てないのだ。

そんな僕らを微笑ましげにすれ違う人たちが見ている。……三日と少し前とは大違いだ。

ハリーが回収されてから実に四日経っていた。ハリーの意識そのものが戻ったのは三日目だ。どうにかマダム・ポンフリーを説き伏せて、ハリーを見舞う。自分のせいだとおんおんと泣くハグリッドの隣で、ハリーと困ったねえ、なんて笑い合う。——次に胸をつまらせ

るのは僕たちの方だった。

「ご両親の学友たちに梟を送って、写真を集めたんだ。——やっぱり、よう似とる」

つたなくてあたたかいアルバムを二人で一枚一枚めくっていく。ハリーによく似たくしゃくしゃ頭の男の人が楽しくてたまらないと手を振ってくる。マリアによく似た美しい女の人が嬉しくてたまらないと微笑む。

少しだけズルをして人より長い人生の記憶を持つ僕は、両親についてはハリーの頃に気持ちに整理をつけていた。けれど、このハリーにはまだまだ必要なものだろう。僕だってもちろん——また会えてうれしいよ。父さん、母さん。

なにも語ることでできない僕たちに、ハグリッドは頭を掴むように撫でてから医務室を後にした。残された僕たちは、改めて会話することもなく、父さんと母さんの姿を眺め続けた。

ページを最後までめくり終えて、ハリーがアルバムを閉じる。彼から、ほう、と、やわらかな息がこぼれた。

「僕たち、家族だね。マリア」

「そうだね。ハリー」

アルバムを中心に、額を突き合わせる。クスクスと笑う。

ここはホグワーツの医務室だっていうのに、まるでプリベット通りの階段下の物置部屋にいるような心地だった。——ハリーとずっと二人きりでいられた場所だ。

「……ねえ、マリア」

「うん」

「マリアにだけは、言っておきたいんだ」

「なあに、ハリー」

額から肩へ移動した彼の頭を撫でる。

「あの時、マリアの声があったんだ」

「そう」

「それで、安心した。気を失っちゃった。……だから、僕は知らないんだけど」

「うん」

「……僕、クイレルをころしてしまったのかもしれない」
「……………」

優しい子だ。やっぱり。僕よりも、ずっと。

「ハリー」

「うん」

「ちつとも慰めにならない、ほんとうの話をしてあげる」

相変わらず肩に押し付けられたままの頭を撫で続ける。この数日でちよつとだけごわごわしてきたかもしれない。……また、僕直々にブラツシングしなくちゃ。

「ユニコーンの血を飲んだのはクイレルだ」

「……………」

「たとえばヴォルデモートの意志がそこにあつたのだとしても、肉体はまちがいなくクイレルだったんだよ」

「……………」

「ユニコーンの血を飲んだものがどうなるか、フィレンツェが教えてくれたよね？」

「……………」

「君は、永遠に呪われるくらいなら死んだ方がマシだ、て、そう言った」
「……………」

「クイレルは、どうにもならなかったんだ」

ハリーは、ゆつくりと顔を上げた。

「ほんとうに、ちっとも慰めにならないや」

くしゃくしゃと、鼻声になりながら笑った。

「僕が、殺したんだね」

——そう、僕が、ころしたんだ。

それから、マダム・ポンフリーに学年度末パーティーへの出席を懇願し退院させてもらえるまで、僕らは寄り添い続けた。

大広間はすっかり人で埋まっていて、ハリーとマリアが入ると奇妙な沈黙が降りたけども、ロンとハーマイオニーが席を取ってくれてくれたおかげで不自由はしなかった。

ハリーはスリザリンカラー一色の装飾を眺めては複雑そうだった。……彼よりも、『これから起こること』を思ってもっと複雑そうな生徒がスリザリンの席にいるのだけでも。

こればかりは……グリフィンドール鼻肩だよな、ダンブルドアって。

「また一年が過ぎた!」

ダンブルドアの演説が始まる。グリフィンドールは二九二点、スリザリンは四二二点。圧倒的差にスリザリンから大きな歓声上がる。——そして、ダンブルドアから続いた「最近の出来事も勘定せねばならない」の言葉に不本意に騒ぎは静まった。

「かけ込み点を与えよう。まずはロナルド・ウィーズリー君」

ロンがパチパチとブルーの瞳を驚かせた。チェスの腕前から——五十点。そばかすもわからなくなるくらい顔が真っ赤になった。

次に、ハーマイオニーの冷静さ、論理への完璧な対処に五十点が与えられた。ハーマイオニーは机に伏して喜びの涙を流していた。——そして。

「ドラコ・マルフォイ君」

まったくの不意打ちで、ドラコがはじめて演技もなしに年相応の顔をした。あんぐりとしたそれに堪えきれず小さく笑う。

「寮の垣根を越え、友のため、真の友情を示してくれたことを称え、スリザリンに五十点を与える」

再びスリザリンから喜びの声が上がった。ここまで、グリフィンドールは三九二点、スリザリンは四七二点だ。

すっかり結果が見えなくなって、生徒たちは興奮状態にあった。

ハリーへ五十点が与えられる。これで、グリフィンドールは四四二点。ネビルの勇気が称えられる。四六二点。

ダンブルドアは最後に、——僕を見て微笑んだ。

「正義を持って立ち向かう勇気。友と共にたたかう勇気。そして友を止める勇気。どれも素晴らしいものじゃ。じゃが、この勇気も称えねばならんな。——マリア・ポッター嬢。不安を一身に抱え、友を信じ待ち続けたその精神力を称え、グリフィンドールに十点を与える」

ワァ——！ 声が爆発する。真っ先に隣のハリーが抱きついて、負けじとハーマイオニーが後ろから飛び付いてくる。ロンが飛び上がる。ネビルがほろほろと泣いている。

寮杯は引き分けだったが、誰も文句なんて言わなかった。赤と緑で

分けられた装飾は華やかで美しかった。

ハリーもロンもハーマイオニーも、そしてドラコもマリアも、この日は決して忘れられない思い出となったのだ。

「お疲れさま、ドラコ。本当に助かったよ」

ホグワーツ特急にて、ハリーに断つた僕は行き時のようにドラコと二人でコンパートメントを取っていた。

「まったくだ」

ドラコが窓枠に肘をつきながら器用に頭を振る。

「君から事前に仕掛けだとかの話は聞いていたが……君、いや、君たち、あんなものを当時、ノーヒントで切り抜けたのか」

「そうそう。十一歳で、右も左もわからない状態だね。いつだって命懸けさ」

「……英雄殿はずいぶんと、荒々しい神に愛されているようで」

顔を合わせて同時に吹き出す。

同じマルフォイの皮肉だっていうのに、こんなにも優しく聞こえるだなんて、おかしくってたまらない。

「……ダンブルドアは知っていたのか」

「もちろん」

「でも、ハリーたちを助けなかった」

「あの人の掌の上で転がされてるくらいがちょうどいいんだよ」

少しだけさまよった彼の手が僕の頭へとたどり着く。そのまま、ゆ

るゆると髪をすいていく。

「お疲れさま、マリア」

「……うん」

キングス・クロス駅へ到着するまで、僕らは言葉を必要としない優しい時間を過ごした。——来年も、彼の手が隣にあればいいと祈りながら。

賢者の石【番外編】

ドラコのおもりの話【三頭犬編】

トロフィー室にて決闘相手を待つ三人は、杖を手にピリピリと神経を尖らせていた。

マリアを口汚に侮辱したパンジー・パーキンソン。許せるわけがない。マリアがハリーを猫可愛がりする姿が有名すぎてあまり知られていないが、ハリーだって相当にマリアが好きなのだ。たったひとりの家族を守らない人間がどこにいる。

意気込んで憎たらしいパグ顔が現れるのを待つ。待つ——待つ——待つ——

「……あの女、怖じ気づいたのか？」

うつすらと嫌な予感がしてきたところに、ロンの呟きに答えたのは第三者だった。

「——ハメられたんだとそろそろ気付いてもいい頃なんじゃないか？」

「うひっ」

「ひゃっ」

「ひえっ」

仲良く三人は飛び上がった。暗闇から浮かび上がる顔は肌の白さからまるで吸血鬼のようで、いつそう三人は縮み上がりがちりと固まった。普通に失礼である。

「な、な………なんでお前がここにいるんだよ、マルフォイ！」

本人としては勇ましく啖呵を切ったつもりのロンが、声を震わせな

がらドラコを指差す。絶妙のタイミングで月明かりが射し、ドラコのプラチナブロンドをこの世のものでないような輝きに浮き立たせた。え、ほんとに生きてんの？ こいつ。——ロンはこっそり思った。

「今言っただろう。君たちはパーキンソンにハメられたんだ。今にフィルチが来る。さっさと寮へ戻れ」

「ドラコ、教えにきてくれたの？」

「うちの寮の人間が迷惑をかけているようだからな」

話は終わりだとばかりに背を向けるドラコへ、ロンが噛み付いた。

「——お、お前がグルじゃないって証拠がない！」

「……は？」

「だってスリザリンだ！ これでおとなしく帰ったら、明日には僕たちは逃げ出したんだって言いふらす気だろう！ 魂胆はわかってるんだ！」

「ちよつと、ロン」

ハリーとハーマイオニーが大声を出すロンを止めるが、遅かった。

「生徒の声だ！ こっちか！」

フィルチだ。

「チツ……お前たち、走れ。バラバラにならないで、固まってフィルチをまくんだ」

「なんでお前なんかに命令、グエツ」

「今は喧嘩してる場合じゃないでしょ！」

ロンのパジャマの襟を掴んでハーマイオニーが駆け出す。ハリーがそれに続く。最後尾はドラコだ。

「ねえ、ドラコ、このままじゃ迷子になってしまうよ。僕たち、まだ城に慣れてないんだ」

走りながらも、息継ぎの合間にハリーはドラコへと訴えた。

まだ立ち止まれない。フィルチはしつこく追ってくる。

「僕が覚えてる。どこに行き着いてもグリフィンドール寮まで送ってやる」

「ドラコ……」

ハリーは少し前までドラコのことからなくなっていた。紳士的で、ちよつとスキンシップは突飛なきらいがあるけれど、右も左もわからないハリーに声をかけ丁寧に魔法界のこと学校のことを説明してくれた最初の友達。（最初の友達はハグリッドだけど、子供の友達は彼だ。）

寮が離れても仲良くしようと言ってくれたのに。魔法薬学の授業で彼は、笑われているハリーを庇ってはくれなかった。聞こえてないみたいな顔をしていた。なんとなく、冷たいように感じてしまった。けれど、今はこうして助けに来てくれた。……やっぱり、いいやつなのかな。

「キヤアツ」

「おい、そんなでかい声を——ウワツ」

ハーマイオニーがなにかに驚いてとび跳ね、それに驚いたロンがなんと甲冑を倒してしまった。ありえないほど大きな音が廊下に響き渡る。

「そこか！」

フィルチの怒り狂う声と足踏みが角の向こうから聞こえた。最悪だ。

「どこか入れる教室を探せ！」

「だ、だめ、鍵が……ええい！ アロホモーラ！」

鍵を開けてしまうという大胆なハーマイオニーの行動に呆然としつつも、四人で扉の向こうへ飛び込む。フィルチはすっかりこの教室には鍵がかかっていると思いついでいるようで、彼の雑な足音は扉の前を素通りしていった。

ほう、と四人で息をつく。

「さすがだよ、グレンジャー。君の機転はいつだってすばらしい」

「そ、そんなこと……マルフォイが冷静でいてくれたからだわ」

「……ケツ」

ちよつといい雰囲気な二人にロンがキザのマルフォイめと悪態をつく。この二人はすっかり犬猿の仲だった。主にロンがスカしている（と、ロンは感じる。）ドラコへ突っかかるからだが、ドラコの皮肉げな物言いも問題だとハリーは考えていた。

「僕が先に廊下を確認してフィルチがいないか見よう。もう一度ここを開いた時に君たちも——ハリー？」

ハリーは非常に後悔していた。

なにか音がした気がした。だから振り返った。そして、振り返ったことに後悔した。

答えないハリーの視線の先を追った三人も同様に後悔した。——見なければよかった。

グルルル……。

非常識なサイズと非常識な頭の数と非常識な牙を持った犬が、六つ

の目でこちらを見ていた。

「……作戦、変更だ。先頭はハリー、決してバラけないで、僕が合図したらここを出ろ。僕が最後だ。いいな？」

「ド、ドラコ……」

「——行け！」

ドラコが声を張り上げたと同時に、牙を唸らせた三頭犬へドラコの杖から閃光が走った。なんの呪文かはわからなかった。とにかく必死に転がるように三人は廊下へと飛び出した。

まさか。まさか。ここが四階だったなんて。

「ドラコッ！」

三人を庇うようにして犬の前に立ち続けたドラコの手をハリーが引つ張る。走る。走る。どこまでも三頭犬が後ろにいるような気がして走る。

いつの間にか覚えのある道に出ていた。走る。グリフィンドール寮への入り口が見えた。走る。

叫ぶようにして太った婦人へと合言葉を告げる。マリアの姿が見えた。——やっと、現実に戻ってきた心地だった。

息をついて、マリアを前にして。

「あ……」

ようやく、スルリと抜けてしまっていた友達の手ハリーは気付いたのだった。

後程された調査の話

「ハリー、あなたにとっても大切な話があるの。マリアについてよ」

オブラートを使った表現でいうならばふわふわな髪を動きに揺らせて、友人想いの少女は凄んだ。

「マリアがなに？」

「正確にはマリアの自身に対する意識の問題よ。あの子はあまりに無防備すぎるわ」

談話室にてマリアから分けられたカップケーキを仲良く分け合っていたハリーとロンは、リスのように頬を膨らませながら小首をかしげた。（ところでマリアはいつもどこからお菓子を調達してくるのだろうか。）

話題のマリアはここにはおらず、気が付いた頃にはふと消えていた。よくあることなのでロンやハーマイオニーは気にしていないが、実はハリーは知っている。——ドラコに会いに行っているのだと。双子をなめないでほしい。

「意識って……」

「たとえばマルフォイに易々と触らせたり、二人きりで泊まろうとしたりすることよ。フレッドやジョージにだってよく肩を組まれてるし、自分がどう見られているかの自覚が足りなさすぎるわ！」

とうとう両手を机に叩きつけた少女は、湯気の立つ勢いで捲し立てた。ふわふわ……いや、ぼさぼさ……ともかく、豊かな髪も感情に合わせてふわっと広がったように見えた。

「自覚って言ってもなあ……ドラコのは本人のスキンシップ好きもあるし」

「そもそもね、あんなにかわいくてどうしてそれを自覚せずに育つていうの？ チヤホヤされてきたでしょう？ わたしたちはマリアの外見に反したズボラっぷりとかぼんやりを散々見てるから、彼女が自分の容姿を本心からなんとも思っていないんだってわかるわ。でも、他人から見れば美少女のくせにすつとぼけてるあざとい女よ！ あざとい……いえ、あざといにしてはがさつすぎるけど」

「それ、庇えてないよ。ハーマイオニー」

ロンが小声でツツコむが小声すぎて荒ぶるハーマイオニーにはまったく届いていなかった。

「チヤホヤされてないからだと思うけど」

「でしょう？ あのパーキンソンなんて裏でマリアのことをとんだ悪女………へ？」

ロンとハーマイオニーが同時にハリーを見る。

ハリーは事も無げにカップケーキを食べながら続けた。

「マリア、チヤホヤなんてされてこなかったもの。知ってるでしょう？ 僕たちが虐待されてきたの。そんな家がないものみたいに扱ってる子供のこと、褒めると思う？」

「それは……」

「ホグワーツに来るまで鏡だつてまともに見てこなかったよ、僕たち。マリアは女の子の服も着たことないよ。ぜんぶ従兄弟のお下がりだもん。横にばかりブクブクでかい従兄弟のね」

ハーマイオニーは黙り込む。ロンもカップケーキをかじりかけた状態のまま困惑の表情で固まっていた。

「そもそもマリア、別に無防備じゃないよ？」

「そうなの……？」

「うん。君たちが特別なんだ。マリア、あれで結構、人はしつかり選んでるし、触られるのとかも好きじゃない。全然知らない人に絡まれそうになつたらすぐく上手に避けるよ。むしろどうしてドラコや君たちには初対面からあんなに打ち解けたのか、僕は不思議なもの。あのマリアが」

「……………」

あの、とつくほど、マリアが警戒心の高い人間だったことに驚きを隠せない二人は、ハリーの言葉に聞き入るしかない。

「マリアなりに基準があるんだと思う。他にも、フレッドやジョージはもちろん、ハッフルパフのセドリックだとか、ハグリッドもだよ。とにかくあの子の中で大丈夫と大丈夫じゃないの線引きははっきりして、大丈夫な人にはまったく警戒しないってだけなんだ。君たちは大丈夫な人だから、マリアの大丈夫じゃない人に対する姿を知らないだけ」

双子のさすがの説得力に、二人は神妙にうなずいた。

「だから、それだけ信頼されてるんだって思ってたよ。……ドラコにはちよつとかわいそうな話だけど」

「マルフォイがなんだよ」

「ロンにはまだわからないと思うよ」

「どういう意味だよ、ハリー！」

じゃれる男の子たちを無視して、ハーマイオニーは考えていた。

おそらくハリーいわくの線引き云々は、女性の意識からくるものではない。人として線引きしているものだ。……結局、女性としての警戒心は未発達なままだろう。

やっぱり、わたしがあの無自覚ちゃんを守らなきゃいけないんだわ。

結局、ハーマイオニーの心配は核心に触れても増すばかりなのだった。

「それにしても、こうして改めて聞くとハリーが兄だって言われてもうなずける気がするわね」

「兄だもの」

「……ほんとうに?」

「実際は知らないし、別に調べようとも思わないけど、僕が兄だって決めたから。二人で」

「そう、なの? あの、でも、マリアは」

「うん。マリアったらちっとも覚えてないんだよね。……それで、構わないけどね。三つか四つくらいの頃の話だし」

でも。と、ハリーは続ける。——それは、愛しい兄弟を想う兄の顔だった。

「僕がマリアの兄になるって、そう約束したんだ。マリアに。もうマリアが覚えていなくても、僕は一生約束を守るよ」

ロンとハーマイオニーは切なげにハリーを見つめた。

ハーマイオニーは一人っ子だから、どこか憧憬を含ませながら。ロンは自分たちの兄と、そして妹のことを思い出したにちがいない。

「……やっぱり、ハリーがお兄さんなのかもね」

「そう言ってるでしょ?」

「ハリーはいい兄貴だよ」

「ふふふ、もっと言っていよいよ」

ふわふわ笑って自慢げにする姿はやっぱり子供っぽいけれど。

「それに、マリアって昔はもつと気弱で泣き虫だったんだよ？ 僕の後ろによく隠れてた」

「ええ!？」

「あのマリアが？」

「うん。でもいつの間にか変わってたんだよな。何歳くらいからだっただかな……。まあ、なんであれ、どんなマリアだって問題なく愛してるけどね」

ニツコリと、聞きようによつては恋人への睦言のような台詞を恥ずかしげもなく口にするハリーに、親友二人はそつと目を遠くした。

マリアだつてたいがいだけど、ハリーも重度のシスコン……。なのよね。

ドラコのおもりの話【賢者の石編】

透明マントをかぶる三人は、グリフィンドール塔を降りきつたところで思わぬものに激突した。

「前方不注意だぞ」

「マルフォイ！」

「ドラコ！」

杖を手に腕を組む彼が呆れた風にハリーたちを見ていた。ぶつかった衝撃でマントが捲れてしまったのだ。

「そこを退けよ、マルフォイ」

「お願い、通して。どうしても必要なことなの」

「ドラコ……」

ネビルに続き、ネビルよりも厄介だろう障害に焦る気持ちのまま懇願する。

ドラコは悪いやつじゃない。でも、我関せず顔をするところがあるんだ。このまま先生のところへ駆け込みでもされたら……。

「通すのはやぶさかじゃない」

「ドラコ……！」

「ただ、僕もついていくぞ」

誰よりも早く声を上げたのはロンだった。

「なんだってお前が来るんだよ！ 僕らがなにしようとしてるか知らないくせに！」

「賢者の石、だろうか？」

ハツと三人は黙りこむ。

「なに、足手まといにはならないさ。さあ時間がない。スペースを開ける、ウィーズリー」

物言わせぬ勢いでマントの中へと侵入したドラコに——ロンが物凄く、物凄く、嫌そうな顔をした——ハリーはポツリと呟いた。

「……マリアだね？」

ドラコはそれに、ニヒルな笑いで返した。

ピーブス撃退によってハリーの思わぬ特技が知れたところで、待ち受ける三頭犬にハリーは小声で囁いた。仕掛け扉はすでに開かれていた。

「ロン、ハーマイオニー、ドラコ——戻りたかったら、戻っていい。恨んだりしないから。マントも持って行ってくれ。ここからは——」
「四人で行くんだものね。もう誰にも見られないから確かにマントは必要ないわ。……わたしたちにも」

ハーマイオニーがそうでしょう？ と残す二人へ微笑みかける。彼らはなんの迷いもなくうなずいた。

「行こう、ハリー」

「……うん」

繋いだロンの手は、いつだつて一緒のマリアの手とはまるで違ったけれど、同じくらい心強かった。

「あのハープで突破したんだな」

三頭犬の足元にあるハープを見てドラコが呟く。

「僕、笛を持ってきたんだ。見ていて」

クリスマスプレゼントにもらったハグリッド作の横笛に、ハリーが薄く唇を当てた。メロディーというより梟の鳴き声みたいな不思議な音が犬の唸り声と混じる。やがて、三頭犬はスコンと眠りに落ちてしまった。

「よし、ハリー、そのまま吹いていてくれ」

「マルフォイ？」

ドラコが仕掛け扉の中を覗き込む。ずいぶんと深いようで、底はまったく見えなかった。

ドラコはマリアの言葉を思い出していた。確か、二番目の罫は――

「僕が先に降りる。問題なさそうなら光を打ち上げるから、君たちもついてきてくれ。ハリー、悪いが君は最後だ。笛を吹き続けて」

ハリーは笛へ唇を当てたままコクリとうなずいた。

「そんな、危険よ。マルフォイ」

「今さら危険じゃないことなんてないさ」

お得意の自信ありげで涼やかな笑みを浮かべたドラコは、そして落ちていった。

最中で杖を取り出し、自身に速度緩和の魔法をかける。ふわり。軟着陸だ。踏みしめた感覚で、マリアの情報通りなことを悟る。

「マリアからは過保護にする必要はないと言われていた。ならば――杖から直上に光を飛ばす。次に落ちてきたのはロンだ。彼にも着陸直前に魔法をかけて減速させる。ハーマイオニーが続き、ハリーも落ちてくる。ハリーのことはさりげなく自身で受け止めたドラコである。鼻屑がわかりやすい。」

「あ、ありがとう、ドラコ。これ、植物かな……………ハーマイオニー?」「あなたたち、なにぼさつとしてるのよ! ああほら、遅かった!」

いつの間にか壁へ貼り付いていたハーマイオニーをハリーが不思議そうに見ていれば、ハーマイオニーはとんだ間抜けを見る顔で指さした。――ツルが巻き付く彼らの足元を。

「う、うわ、なんだこれ!」

「動かないで!」

ハリーはその一言でビクリと停止したが、殊更大きく身をよじってしまったロンは胴までツルに締め上げられていた。ドラコは初めから動いていなかった。

「これ……………そう、そうよ、『悪魔の罠』だわ」

「名前がわかって大いに結構! そのまま対処法まで出てきたら完璧なんだけどね」

「黙ってて! 今思い出してるのよ!」

相変わらずの減らず口に、あの赤毛はいくつでも変わらないんだなと達観した目でドラコは三人……………おもに痴話喧嘩の絶えない未来の夫婦を見守っていた。

「スプラウト先生はなんて言ったかしら……暗闇と湿気を好み……」
「だったら火だ！ ハーマイオニー！」

ロンよりは低速だが、確実にツルの回っていたハリーが叫ぶ。それにハーマイオニーは信じられない言葉で返した。

「でも、薪がないわ！」

「君はそれでも魔女か!!」

こればかりはドラコもプフツと失笑せずにはいらなかった。……そうだな。マグルが火を起こそうと思うと薪が必要なものな。

ちよつと恥ずかしそうにしながらもハーマイオニーが火を杖の先へと灯す。ドラコも同じようにしてハリーの方から救出した。やっぱり鼻屑のわかりやすいドラコであった。

次の部屋ではおびただしい数の鍵が飛んでいた。羽が生えているのだ。付近には鍵のかかった扉と何本かの箒があった。これだけでおのずと要求内容が見えてくる。

四人は箒にまたがり、ハリーの指示のもと鍵を追いかけた。取っ手と同じ銀製で、羽が傷ついた鍵を。

ハリーは知らないが、ドラコだってシーカーを何年かやっていた経験がある。実は少しだけ、ハリーと勝負しているような気持ちになれて気分が上がっていた。結局はハリーが正解の鍵を掴み取るのだが、ドラコは三人から見えないところで満足げにしていた。

次の部屋には大きなチェス盤があった。ドラコはマリアの言葉と、そして表情を思い出していた。——唯一、怪我人を出してしまった試験。

ロンの指示に従って、駒が動き出す。一人増えようと、やっぱり誰かが犠牲にならねば相手のキングは取れないようだ。

この場合、防御しても判定上は取られたことには変わりはないのだろうか。ならば、ウィーズリーへプロテゴをかけるのは間に合うか——

ドラコはゲームを見守りながら一人考え込んでいた。とうとう、ロンが自身が取られることを宣言して、ハリーとハーマイオニーから悲痛に止められていた。けれどもロンの意志は固かった。ドラコは、少しばかりロンを見直した。

彼は向こう見ずの考えなしなことが多いけど、そこには立派な騎士道の精神が存在するのだ。

「いいかい。僕が前進してクイーンに取られたら、ハリー、君がキングにチェックをかけるんだ」

「ロン……」

「勝ったら、ここでぐずぐずしてちやダメだぞ」

恐怖に、今にも倒れそうな蒼い顔をしているくせに強がりですら笑った彼に、クイーンの腕が振り落ちる。ハーマイオニーが声にならない悲鳴を上げる。ハリーが泣きそうな顔で歯を食いしばる。

「——プロテゴ！」

腕がロンの頭を吹き飛ばす寸前で盾は張られた。しかし一年生の身でかけた魔法では衝撃までもを庇うことはできず、ロンは床に叩き付けられて気絶した。すかさずハリーがゲームへとチェックをかけ、引きずられていくロンを追おうとする。

「ウィーズリーの言葉を聞いてなかったのか！」

ドラコの怒声に二人は立ち止まった。

「ウィーズリーなら僕が看る。君たちは先を急げ」

「でも……」

「僕の魔法の腕前を知っているだろう？ ……気になる女の子の前でがんばった男に恥をかかせてやるな、グレンジャー」

ハーマイオニーはぐつと目に力を込めて涙が落ちるのを堪えた。そしてハリーの手を引つ掴むと扉を蹴破る勢いで進んだ。

ドラコは念のためロンへエピスキーをかけながら、ほころんでしま
う顔のまま呟いた。

「……いい男だな、ウィーズリー」

秘密の部屋とマリア

111

僕は非常に警戒していた。二年生時のラスボスといえればバジリスクと思われがちだが、ちがうのだ。真にやつかいなのは——ドビーなのだ。

誕生日だというのに友人からカードの一つももらえずしよんもりするハリーに、僕は新しく与えられた小さな部屋で寄り添っていた。元はダドリーのオモチャ入れだった部屋だ。階段下の物置部屋は用途通りの部屋となった。——ハリーとマリアのホグワーツ用の荷物。

二人も一応は成長する人間なので、そろそろスペース的にも無理があると感じたのかもしれない。その程度の脳はあったようであるよりだ。

朝に、大物商談客を迎える準備と確認とかいう動物面一家のコントを眺めて、役割を求められた際には双子揃って「部屋にいていないふりをする」と気のない声で答えながら、現在、件の双子は二人部屋（スペースは一人未満）に軟禁されていた。外に放り出されないだけマシだが、繰り返すが誕生日だつてのにむなしものである。

「なんで誰もなにもくれないんだろう……プレゼントだなんて贅沢は言わないよ。カードや手紙でいいんだ。去年はハグリッドですらつぶれたケーキをくれたのに……期待しすぎだったのかな。誰も僕らの誕生日なんて覚えてないんだ」

僕は落ち込むハリーにかける言葉を見つげられずにいた。

原因はわかっているのだ。しかし説明のしようがない。——と、いうか。原因はわかっているがどうしてこうなったのか僕にもわから

なかった。

だって、手紙を止めているドビーはマルフォイ家のしもべ妖精で、しもべ妖精としての禁を破ってまで警告という名のありがた迷惑行為をおこなってくれたのはリドルの日記の件があったからで——けれどその日記はとくにドラコへと渡っている。なんだって今さらな警告が必要なのか。

答えは豚の餌みたいな夕食後にやってきた。——向こうから。

「ひえっ」

ハリーは単純な驚愕から、マリアは来てしまったという絶望からそつくりの声を上げた。ベッドの上になつかしくて馴染み深いしもべ妖精の姿があつたのだから。

しもべ妖精——ドビーは深々とお辞儀をした。そして特有のキー声でまくし立てた。

「ハリー・ポッター！・ドビーめはずっとあなた様にお目にかかりたかった……」

ハリーはとりあえずコンバンハとは言ってみたものの目の前の生き物について混乱しっぱなしだったし、僕はといえばそれでもちゃんと挨拶できるうちの弟は偉いなど現実逃避をしていた。

ハリーが「君はだーれ？」と続ける。たぶん頭が回ってない。証拠にずいぶん舌つ足らずだ。かわいい。うちの弟はすばらしく素直だ。僕も間違いなく頭が回ってない。

「ドビーめにごいいます。屋敷しもべ妖精のドビーです」

ハリーはそもそも屋敷しもべ妖精を知らなかったが、とにかく疑問はすべて置いておくことに決めたらしい。おそろおそろと下手に出ながらお引き取りを願っている。

ああ、ハリー——それ、逆効果。

「す、座ってだなんて！ このドビーに、魔法使いが、まるで対等みたいに！」

感涙してキーキーと騒ぎ立てるドビーに双子から渾身の静かにジェスチャーが送られる。タイミングも仕草もまるきり同じ辺り、僕らってほんとう、運命だ。

客人を招いて夕食へ入っているだろう階下から、一瞬困惑の沈黙がただよってきた気がして僕もハリーも生きた心地がしなかった。魔法さえ使えればシレンシオするのに！

「ドビー、お願いだから、静かに——静かに、お願いできる？ 話なら聞くから」

「ああ、ハリー・ポッター……マリア・ポッター……ドビーは、ドビーは、こんなにもお優しい魔法使いと魔女には出会ったことがあります。ドビーの仕える魔法使いといえは……」

そこでドビーは蒼白になると——元が土色なのでかなりわかりにくい——突然、窓ガラスに頭を打ち付けようとした。

『ドビーは悪い子』は禁止!!』

咄嗟に手を差し入れれば、一度の激突で彼の発作は収まった。すつごく痛いけど、これでドビーがおとなしくなるなら安いものだ。だから泣きそうにならなくていいんだよ、ハリー。そしてドビー、君、とても頭が硬いんだね……。

ほんとうに——君って、変わらないよ。

僕の手を両手で包みつつ、ドビーからマルフォイ家——仕える屋敷でのあんまりな境遇を聞いて力になれないかと問うハリー。ドビーはやっぱり感激に泣いている。

……ドラコに、ドビーになるべく優しくしてあげてほしいって言うてあつただけだな。この様子だと、ドビーと関わらないことが彼のりの優しさだったか。

「ハリー・ポッターは勇猛果敢！ 闇の帝王と二度も対決された……そして生き延びた……でも、ドビーめは言わねばなりません。——ハリー・ポッターはhogwartsに戻ってはならない」

ハリーは僕の手を取ったまま数秒黙っていた。理解が追い付いていないのだ。そしてか細い声でなぜ？ と訊ねた。

「僕——ダメだよ、こんな家よりもhogwartsの方がよっぽど居心地がいいんだ。君ほどじゃないけど、でも、わかるでしょう？ ここはひどい場所さ。それに——マリアから友達を奪えないよ」
「ハリー……」

前回の『僕』は一人きりだったからそんなこと思いもしなかった。優しい子だ、ハリーは。

「マリア・ポッターはかまいません」
「かまわないんだ!」

ちよつとだけ拍子抜けして、ハリーと一緒に笑ってしまった。しかしそうすると、ますますわからなくなってくる。

ドビーの警告は、ルシウスが日記を使い秘密の部屋事件を画策して、ゆくゆくはワイーズリー家とダンブルドアを貶めるために張った罠だと知るところから始まる。前回、ルシウスはまちがいで日記の利用法を知っていた。

しかし、ドラコは言った。父は日記の本質を知らない。知る前にドラコが口八丁で取り上げてしまったのだから。

ならば、ドビーは何を——何から知って、ハリーの元までやってき

たのだろう。

ハリーとドビーが問答を続ける。そしてとうとう、ドビーは言ってしまった。

「誕生日だというのに、夏休みに入ってから一度も手紙もくれない友達のもとへ戻るといいますか？」

この時、ハリーは今日一番、頭が働いたと思った。なぜドビーがそれを知っているのか。まさか——まさか——

ハリーの絶句と共に緑の目へ宿っていく怒りに、ああ、と僕はうなだれた。

ドビー、ドビー、君は愉快で楽しい友人だよ。僕は君のことが大好きだ。けれどこの頃の君は、ちよーつとだけ厄介なんだ。

「君が、僕たちの手紙を、止めてたの？」

「ハリー・ポッターはドビーを怒ってはダメでございます……ドビーはよかれと思って……」

「ああ、ドビー……それは、それはダメだ。僕、それはちよつと、許せそうにない。だって君は、マリアの手紙まで止めた。マリアはとぼつちりじゃないか。マリアにまで寂しい思いをさせたんだ。それは、兄として許せない」

「ハリー、そんなに怒らないで。僕はかまわないから」

「僕がかまうんだ！」

珍しくハリーの癩癩玉が爆発しそうになったので、抱きしめてなだめる。大丈夫だよ、ハリー。——僕はすべて知っていたんだから。むしろ、黙っていた僕に君は怒るべきなんだ。ほんとうなら。

「ドビー、手紙を返して」

「ホグワーツに戻らないと約束してくださいますか？」

「それはできない。だとしても、マリアの手紙は返して。きつとマリ

アにはプレゼントだってあるだろう。それもだ」

ハリーにだってあるに決まってる！ と口を出したかったが、ハリーの剣幕がそれを許さない。

「ハリー・ポッター……約束してください……約束してください……」
「できないと言ってるじゃないか！ 今はそんな話はしてない！ マリアの手紙を——」

「なにを、騒いで、いるんだ？」

ドビーに出会い、今日起こるハプニングのうちで最もおそろしいのは、ペチュニア伯母さん作のケーキが宙を飛ぶことだろうと僕は決めつけていた。——今この瞬間に、それは塗り替えられた。

「——それは、なんだ？」

「あの……おじさん……」

「人形だろう？ え？ そうだろう？ ——そう言うんだ！」

「ドビーめは、屋敷しもべ——」

「ドビーは黙って！」

「——人形は喋らんツ!!」

『まとも』でないものの中でも一等『まとも』でない形をしたしもべ妖精を目にして、バーノン伯父さんは怒りだか恐れだかで顔を赤くしたり白くしたりした。そんな伯父さんの絶叫に、ペチュニア伯母さんまでもが二階へ上がってきてしまい、ドビーを見た。殺人現場にでも遭遇したかのような悲鳴が上がった。

「そんな——そんな——そんなものを飼うために、きさまらはあの忌々しい学校へ行ったのか？ ええ？ そんな、汚ならしい、ありえない、おぞましい——」

「ドビーをそんな風に言わないで！」

「だまれ!! こんなものを連れ帰って来るくらいなら——もう、学校には行かせん」

肉につぶれた瞳を最大限に開いて、バーノン伯父さんは声低く宣言した。本気の目だった。ペチュニア伯母さんも、心底嫌悪しているとばかりに僕らを睨んで階段を降りるバーノン伯父さんへと続いた。

これまで『まとも』でないものを秘密裏に防いできたのが裏目に出たのだ。それはそれはとんでもない衝撃だったにちがいない。

ドビーも、「これでハリー・ポッターはホグワーツに戻れない！」とだけ嬉しそうに叫ぶと、手紙や小荷物をポイポイツと投げ捨てて妖精の姿眩ましで消えてしまった。

残されたのは、互いにすがり合って呆然とするしかない十二歳の子供たちだけだった。

扉に外鍵を取り付けられた日から早三日。そろそろ餓死する——と、会話する気力もないハリーと僕は毛布にくるまっていた。ここまです持ちこたえられたのは、誕生日プレゼントとしてハーマイオニーがくれたクツキーがあったからだだった。それも、本命——飛行術に関する本と魔法の流行りのコーディネートを紹介した本だ。ハリーは喜んでだがマリアは一度目を通したらもう開かなかつた——に添えられたほんのちよつとのクツキーだった。

夏休み期間中、一度も鳥かごから出してもらえず、挙げ句餌すらもまともにももらえなくなってしまうたへドウィグだって、すっかり毛並みが見すばらしくなっていた。付き合わせてしまって申し訳ない限りだ。

ハリーを撫でながらしきりに窓を見上げる。きつと、きつと、そろそろロンたちが助けに来てくれるはず——

果たして明日までこの腹はもつだろうか、今なら制服だってぶかぶかだろうハリーを抱きしめていれば——ブオン、ブオオン。

「ハリー、ハリー！」

ハリーの頬を軽く叩いて窓を指す。窓の向こうで、夜の月をバックにロンが窓ガラスへとペったりとおでこをくつつけていた。

「なあに、マリ……ア………夢？」

「夢じゃないよ、ハリー！ 僕たち、助かったんだ！」

ロンの後ろから、ひよつこりと顔を出したフレッドかジョージかが窓を開けるとジェスチャーする。

「ダメなんだ。窓、開かないようにされてて」

ダーズリー夫妻の僕たちへの監禁態勢は完璧だった。それこそ、トイレくらいでしか家の中すらも歩けないようにされたのだから。

どっちがどっちだかはわからないが、フレッドとジョージは意味深にうなずき合うと、次は離れているとジェスチャーした。まだぼんやりしているハリーの腕を掴んでできる限り窓から後退する。……ほんとうに、細くなっちゃったな、ハリーの手首。そろそろ食料問題の対策も考えないと。

フレッドかジョージかが杖の持ち手を窓に当てる。……まさか。

——カシャンッ！

ほんのささやかに壊したそこから、ヒビを広げるようにして窓を壊していく。手慣れたる。君たち、拘束抜けの技術といい、スパイにもなるつもりなの？

「ハリー！ マリア！ 無事かい!？」

夜中であることを考慮したロンが小声で問いかけてくる。ダーズリー一家は誰も音に気付いていないようだ。そのうちに泥棒に入られても気付かなさそうだと、ようやく僕は笑える気持ちになった。

「君たち、どうして手紙に返事をくれなかったんだい？ 僕が贈った
バスデーカード、ちゃんと開いた？ そこに、『これに返事がなければ
迎えにいきます』て僕、書いたんだ」

「うん。だから待ってたんだよ。——君たちが連れ出してくれるの
を」

ウィーズリー兄弟は顔を見合わせると、痩せ細ったハリーと僕と可
哀想なヘドウィグを見て、ひどく同情した風に首を振った。わかる
よ、こんな野蛮なマグルがいるなんて！ てところだろ？

「……僕んち、くるかい？」

「ぜひ！」

今ある限りの元気を振りしぼってうなずく。じゃあ乗れよ、と車が
窓辺へ近付いたことで、ようやくハリーはロンたちがとんでもないも
ので二階にいることに気付いた。

「待って、荷物が無いんだ……取りに行かなくちゃいけないんだけど、
鍵が」

「それなら、俺たちに任せな」

赤毛の双子がピンを使って鍵をこじ開けてしまう。鮮やかなお手
並みだ。……二人の興味が泥棒じやなく商売の方にあつてよかつた
よ。

かごから解放されたヘドウィグへ、ずっと窮屈させてごめんねとキ
スをしてから夜空へと放つ。ヘドウィグはそれは美しく大きくはば
いた。

双子とハリーが大荷物を次々に車のトランクへと積んでいく。そ
れを先に車へ乗り込んでいた僕とロンで整理してスペースを作る。

そして、すべてが詰め込まれハリーもマリアも回収しきれば——夜
の空中ドライブの始まりだった。

夏休み中の話（主にドビーとその妨害のこと）をしていれば、なつかしい愉快な家が見えてきた。

オツタリー・セント・キャッチポール村の隠れ穴——何十年ぶりだろうか。思わず目頭だつて熱くなる。

……それは、ウィーズリー夫人の剣幕による涙と誤解されたが。

「ベッドは空っぽ！ メモも置いてない！ 車は消えてる！ 母さんがどんなに心配したか……」

母より背の大きい息子たちが揃いも揃って縮こまっている。ハリーはたじろいでいる。

ああ、ほんとうになつかしいや。このかんじ。そのうち『僕』もこんな風に叱られるようになるんだ——息子として。

ひとしきり怒鳴り散らすと、モリーさんはふくよかな頬に愛想よくえくぼを浮かべて僕らを見た。

「よく来てくださったわねえ。ハリー、それから……あなたがマリアね？ その問題見たちから聞いてるわ」

「僕のこと話してくれてたの？」

「モチのロンさ」

三人息びつたりの返答にクスクス笑ってしまう。

ハリーだけでなくマリアのことまで……ああ、これはうれしい。

ダイニングへと案内されて、朝食をご馳走になる。僕らの細すぎる腕を見てモリーさんが次々とソーセージや目玉焼きを皿へ入れてくれるので、僕らは久々に満腹というものを味わった。大好きなモリー義母さんのご飯をまた食べられた事実には、またまた涙腺が緩みかける。

「ああ、あなたたちのことは怒っていませんよ。マリア、怖がらせてしまったかしら」

「いえ、いえ、こんな食事、久しぶりで……とつてもおいしくて、嬉しかったです」

「まあ……」

瞳を潤ませたモリーさんは、ひしつと僕らをやわらかな腕に包んでくれる。

「こんなに……ロンと同じ歳だっていうのにこんなになるまでひどい目にあつて……ここでは自由にしているのよ。ご飯もたくさん食べて。私のことは……ええ、そう、あなたたちさえよければだけど——もう一人の母と違ってちようだい」

ハリーははじめての母性に触れて困惑していたけれど、僕はたまらず呼んでいた。モリー義母さんと。

「そう、そうよ、モリー母さんよ。かわいい子たち」

母を取られてしまったというのに、ロンもジョージもフレッドも、嬉しそうに瞳を細めていた。あたたかい場所だ——この、隠れ穴は。

そこに小さな女の子が現れたことで、空気はガラリと変わった。顔を真っ赤にして飛び上がったしまったネグリジェの女の子——ジニーだ。

すぐさま消えてしまったジニーに、ロンが君のファンなんだ、とハリーへ付け加える。

ジニー……やっぱりハリーが、好きなんだろうね。とても嬉しい、嬉しいけれど——

その場のみんなに断つて、お利口に外で羽休めしていたヘドウィグの元へと向かう。ヘドウィグは、たらふく餌を食べ満足そうに胸を膨

らませている。

休んでいたところに邪魔してしまった僕へ、ホーと鳴く。

「……君がハリーを選んでくれた時は、さびしいけど、嬉しい気持ちの方が大きかったのよね」

僕は、わがままだ。

ヘドウィグの羽に鼻を埋めれば、ヘドウィグはもう一度ホーと鳴いた。

ウィーズリー三兄弟とハリーが庭小人を投げ回しているのをぼんやり眺めていると、目の前に立つ足があった。かわいらしい小さな女の子の足だ。

「あの、あなた——マリア・ポッター？ ハリーの……」

「姉だよ」

「そう、姉の」

小さなジニーがもじもじしながらも、はっきりした声で、隣、いいかしら、と伺う。先ほどハリーを見て、顔を真っ赤にして逃げ出してしまった女の子とは大違いだ。

僕はといえば、幼い——かつての妻の姿に、抱きしめて頬にキスしてしまいたくてたまらなかった。

いくつであってもジニーへの愛情はなくなるならない。少女だって、老婆だって、ジニーならば僕は愛し続けられるだろう。

「あたし、ジニーよ。ジネブラ・ウィーズリー。あなたの一つ下で、だから今年ホグワーツなの。もう入学許可証が届いたわ。飛び上がるくらい嬉しかった。去年、兄たちがみんな汽車に乗っちゃって——」

番上と二番目の兄はちがうけど——あたし、とつても悔しかったわ。あたし、ホームにいたの」

知ってるよ。君を見るために、見送りもないのに皆みたい窓から身を乗り出したんだ——とは、言えなかった。言えないから、そつと頭を撫でてみた。

「おめでどう、ジニー。これからよろしくね。ホグワーツでも仲良くしてくれる？」

「もちろんよ！ あたし、あなたのこと、ロンから聞いてるわ。しつかりもので、みんなの憧れで、ハリーと仲良しで——そしてとつてもかわいい！ でも、女の子らしくないの」

ふふふつと細められた明るい茶色の瞳に、きゆうつと胸が締め付けられる。

勝ち気だけど、ハーマイオニーとはちがってイタズラっぽいあなたのその笑い方が好きなんだ。

「ママが喜んでたわ。うち、男兄弟ばかりで女の子はあたし一人なんだけど、兄さんたちの中で誰か一人くらい女の子でもよかったのにつて、ずつと思ってたんですつて。だから娘が増えて嬉しいのよ。ママだったら、どれだけ子供を増やすつもりなのかしら」

楽しそうに話しながらクスクス笑うジニーに相槌を打つ。

表情のひとつひとつがかわいくてたまらない。そしてこの時間が愛しくてならない。

「でも、ほんと——あなたも赤毛だから——あなたの方が赤みがつよいけど——でも、だから——つまり——」

「お姉さんみたい？」

「……そう」

照れくさそうなジニーに、今度こそやわらかく抱きしめた。

「君が——君がそう思ってくれるなら、僕は君の姉さんになりたいよ」
「ほんとに？」

「うん。ハリーとジニーが、僕のかわいい弟と妹」

一瞬不思議そうにして、それから意味を理解したジニーは、再び顔を真っ赤にして、そんなんじゃないのよ！ と叫んだ。それにロンとハリーが庭小人を投げながらきよとんと振り向くものだから、ジニーはもうたまらなくなつて僕の背に隠れてしまった。

そこでからかった本人を頼つてしまうところが、ジニーのかわいいところだ。そしてそれは愛娘リリーにまで受け継がれるのだ。

「ジニー」

林檎みたいな頬を膨らませているジニーに謝りながら腕を広げてみれば、ジニーはしかたないわね、なんて顔で飛び込んできてくれる。かわいいジニー。『僕』の愛した人。今だつて愛してる、『僕』だけのジニー。

ハリー・ポッターの妻の、ジニー・ポッター。

そして僕は——マリア・ポッターだ。

きっとハリーはジニーに恋をするだろう。ジニーを愛するだろう。僕のことなんだもの、わかるよ。

そしてジニーも、ハリーを一途に見つめ続けてくれるだろう。わかつていた。わかつてるはずのことだった。

僕が女の子だからじゃない。——僕は、『ハリー』じゃないから。ハリーじゃない僕に、ハリーを想ってくれているジニーとの未来はない。

ならば、愛そう。ハリーを愛してくれるジニーを。

ハリーとジニーを見守ろう。二人から生まれてくるだろう子供たちを我が子のように慈しもう。たとえば彼——シリウスのように。

誰かを想うのに——立場なんて関係ないんだ。

あなたの『夫』でなくても、あなたたちの『父』でなくても——僕は僕の守りたいものを、愛したいものを見つめるから。

「一生独り身か」

「え？」

「ううん、ジニーはかわいいなって」

「ロンからあなたの話を聞いていなかったら、嫌味かと思うところだったわ」

「ええ？」

アーサー氏の帰宅を知らせるモリー母さんの声に二人とも立ち上がる。手を繋いで、ふふふつと笑い合う。

この小さな手が悲しみに濡れないように——僕はこの世界を愛そう。

隠れ穴での生活は実に快適で、時々教えられてもいない場所や物を当たり前のように取ってしまう僕に不思議そうにしながらも、みんな非常に親切だった。ハリーだけじゃなく僕にまで優しくしてくれるマリア・ウィーズリー家のあたたかさが僕は大好きだ。

家庭というものから優しく扱われることを知らないハリーは、戸惑い僕の側を離れたがらなかったが、それも三日も経てば慣れてくる。なにより、ホグワーツと同じで気が置けない親友が常に傍にいたことが大きいだろう。

僕も、身は女の子なためジニーと同室になったことが幸いして、思っていた以上に親しくなれた。同じベッドで寝させてくれるのだから。ジニーはまったく、世界一優しくてすばらしい人だ。

ホグワーツから手紙が届いた。新学期用の教科書リストだ。それに僕は、耳くそ味のビーンズをかじったような気分になった。

ロックハート、ロックハート、ロックハート……並ぶ文字だけで頭がクラクラする。フレッドの、新しいDADAの先生は魔女だ、という声に、そうだったらどれだけよかつたらうね、と心の中だけで返した。

本は悪くないんだよ、本は。ちゃんと経験を積んだ、いずれ著名になっただろう人の研究結果がそこに示されているんだからね——ロックハートの名前で。

人の手柄を横取るクズ男の名前が使われてるだけで、中身は正しいものだ。だから無駄だとはいわないけれど——

ジョージが呟いた「これは安くない」の一言に、まともな授業にならないことを知っている僕は、思い付いた。そして隣のハリーへと囁く。

「ね、僕たちどうせ授業も一緒なんだから、二人で一冊を見ようよ。わざわざ二冊買うなんて無駄だよ。高いらしいし」

「そうだね。それ、いいかも」

ハリーの曇りなき瞳に、これから散々絡まれるだろう近い未来を思つてそつと頭を撫でた。突然のことに目をパチパチさせながらも、ふにやつと笑つたハリーに愛しさとやるせなさは募るばかりだった。

どうせダンブルドアはロックハートの正体、知ってたんだろうな……次の先生を見つける一年の繋ぎのためだけに雇われたロックハートもとことんどうしようもない。

ああ、憂鬱だ。

ハーマイオニー指定の元、ダイアゴン横丁へ向かう今日、初めて見るフルーパウダーにハリーは激しく緊張していた。大丈夫だ簡単だとハリーの肩を叩くウィーズリー一家に僕は思い出す。——ちつとも大丈夫じゃなかったよ。

よりによつてノクターン横丁なんかに出ちやうんだもの。ダイアゴンがノクターンだなんて、きつと横丁しかまともに発音できなかったにちがいない。

「さあ、ハリー。どうぞ」

モリー母さんに促されて一步を踏み出すハリーを見守る。

「——ン横丁！」

ふつと消えてしまったハリーに、ああ、やっぱり、とうなだれた。あわよくばドラコが保護してくれたりとか……ルシウスの手前、無理か。

どうしようかなあ、ハグリッド、ちゃんとハリーのこと見つけてくれるかな、なんてうだうだ考えつつフルーパウダーを取る。

「ダイアゴン横丁」

——ヒュウン。

付き添い姿現しをゴム管に無理矢理詰められる感覚とするならば、煙突飛行は狭い土管の中を延々と滑るかんじだ。やがて見えた光に、若干着地は失敗したが、フレッドとジョージに受け止められて無事ダイアゴン横丁へと出た。

「マリア！」

「マリアが先に来たのか」

「ハリーはきつと派手に転ぶぜ」

「ここで待機しよう」

合流していたハーマイオニーに抱きつかれつつ、ハリーをからかう準備をしているイタズラ好きの双子に乾いた笑みを浮かべる。目が死んでる？ 死にたくもなるさ。

二人が次に受け止めたのはジニーだった。

「ハリーは？」

「マリアより先に行ったわ」

なんでそんなことを聞くんだとばかりに小首をかしげたジニーに、その場をアチャア……となんともいえない空気が包んだ。

「ハリー、やっちゃまったか」

「マリアは上手くいったのに」

「なあに、ハ……ハリーがなんなの？」

想い人の名前を呼ぶことすら恥ずかしげなジニーを撫でつつ、ウム、と唸る。事態を理解したハーマイオニーも同様に頭を抱えてい

た。

ロンにパーシーにウィーズリー夫妻——次々やって来てはハリー不在に阿鼻叫喚する赤毛一家を、僕は苦笑いで見ているしかなかった。

「——マリアー！」

「ハリー！」

駆けてきた愛しの片割れをひしつと抱きしめる。かわいそうに、ふわふわの黒髪に砂が混じってしまったている。

その後ろからは、保護者同然の顔をしてキザったらしい金髪がハリーの再会を見守っていた。まさか——本当にドラコがハリーを保護してくれるなんて。

「ありがとう、ドラコ」

「礼には及ばない。……ただ、ひとつ聞かせてもらおう」

「なあに？」

「……………前もか？」

——『前』。今ここでその意味を正確に理解できる人間は『僕』とドラコの二人だけだろう。

「そうだよ」

ニマツと笑った僕に、ドラコは上品な顔を崩して舌打ちした。ふふん、あのキャビネットを君よりも先に使ったのは僕^{ハリー}だったのさ。

「君は……」

僕が抱きしめるハリーと、そしてその先にいるドラコに、グレンジャー夫妻のマグル話に夢中になっていたアーサー氏が気付いた。

「アー……マルフォイ君、だね？ ハリーを保護してくれたのか。ハリーは今までどこに……」

「ノクターン横丁ですよ、ミスターウィーズリー」

「ノクターン横丁！」

夫の側で様子をうかがっていたモリー母さんが悲鳴を上げた。そして強く強くハリーを抱きしめた。フレッドとジョージは羨ましげにヒュウツと口笛を鳴らしていた。

「なんてところに……」

「それは、その……ありがとう、マルフォイ君。ハリーを見つけてくれて」

「いえ。……ハリーがいるべき場所ではありませんから」

モリー母さんの腕に埋まりながらも、ハリーはドラコへと物言いたげに呻いていた。

「それでは、僕はこれで。父が待っていますので。マリア、ハリー。それからグレンジャーにウィーズリー、また新学期に」

後ろ姿すらも貴族の品を感じさせる彼を見送って、ご苦労様だなあ、なんてモリー母さんからハリーを返してもらいながら思う。

アーサーさんに情報を流すためにずいぶん回りくどいことをして。そういうところ、君って器用と思わせて不器用なんだから。

「あなた、あの子は……」

「マルフォイんとこの小倅さ。あの純血に凝り固まった一族の中では柔軟な方らしくてね——ま、よくある突然変異の変わり者だ。マル

フオイにとっては、だが」

うんうんと、ドラコと交流のあるウィーズリー三兄弟がうなずく。前回はまるでちがうドラコ・マルフオイへの世評に、僕は笑いを噛みしめていた。

ハリーはげっそりとしていた。無遠慮にたかれるフラッシュ、肉壁となる人混み、——そして、馴れ馴れしく肩を組んでくるチャーミングなんたら賞の男。

耳元で有頂天に喚かれ、唯一聞き取れた「ホグワーツ魔法魔術学校にて、『闇の魔術に対する防衛術』担当教授職をお引き受けすることになりました」の言葉に、気分はどん底のさらにどん底だった。最悪の一年になることがこれで確定してしまった。

どうにかマリアとロンに引っ張り出されて、有頂天男——ロックハートから押し付けられたご自慢の著書全集をロンへと譲る。

「君のにしなよ。僕ら、もう買ったし」

「じゃあジニーにあげる」

「どうせあんなの一年しかもたないから意味ないよ。ジニーは使わないかい」

マリアの弁に、なるほどとうなずいたロンはおとなしく自分の大鍋へと邪魔なだけのそれを入れた。

「ねえ、マリア……」

ハリーの視線は、すっかりロックハートに心奪われているモリー母さんと、まさかまさかのハーマイオニーへと注がれている。

言いたいことはわかる、わかるとも。だからロン、正気を疑う顔を

するんじゃない。

「ハーマイオニーはロックハートが好きなんじゃなくて、ロックハートのスバラシイ本に恋してるんだよ」

「ああ……」

気のない声で二人はうなずいた。理解した上で、ロンは正気を疑う顔をしていた。

九月一日。前日にすべて準備を終えたとウィーズリー一家は揃って満足げにしていたというのに、やっぱり朝から隠れ穴は大騒ぎだった。階段を駆け上がり、下り、右へ、左へ。ジョージがロンに、ロンがフレッドに、フレッドがジニーに入れ替わる。

僕、これ知ってる。子供たち（いや、孫だったかな？）にせがまれて、クリスマス旅行に手違いで家族みんなから置いていかれたアローンな子供が、様々な意味で泥棒と最高のクリスマスを過ごす映画を何度か観たんだ。クリスマスに。その映画の朝の風景だ。

あれはもうマグルが使う魔法といっても差し支えないほど見事な仕掛けだった。……今回置いていかれるのはケビンじゃなくてハリーだけだね。ハハハ、笑えない。

バタバタのまま車へ乗り込めば、案の定子供たちが次々に忘れ物を叫ぶ。アーサー氏は行っては引き返し行っては引き返しをくり返させられた。不憫な人だ。

けれども、ジニーが日記を忘れたと叫ぶことはなくて僕は一人安堵していた。

……日記、持ってないよね？ 今度こそ、脳がどこにあるかもわからないのに一人で考えたりする怪しいものと、魂をかけて遊んだりしてないね？

「マリア？」

「酔っちゃった？」

きつと顔が蒼いだらう僕を片手ずつ握って心配してくれる未来の弟夫婦に、愛しさが爆発してぎゅうぎゅうと抱きしめてしまった。

どうかそのままできてくれよ、僕の天使たち。

キングス・クロス駅の例の柵を前にした時、残す時間は五分に迫っ

ていた。パーシーから始まり、ウィーズリー一家が順々に柵の向こうへと消えていく。

「ロン、先に行つて。僕とハリーは一緒に行くから」
「オーケー」

今回も彼を盛大な遅刻の旅へと付き合わせてしまうのは申し訳ないので、さりげなく被害が僕らの中だけで収まるよう誘導する。

ドビーは『これ』を百パーセントの善意でやってるからややこしいのだ。……これだけ家にこだわるって、もしかしてドビーったらハリーの血の守りのこと、知ってたのかしら。

「行こう、マリア」
「うん……」

前回の反省を活かし、二人分の荷物をまとめた一つのカートを二人で押していく。

——ガシャーンツ!

ひっくり返ってしまったヘドウィグを咄嗟にキャッチして、よろけたハリーもどうにか受け止める。荷物はしかたがない。壊れるようなものは入ってない。

呆然とするハリーと何事かと駆け寄ってくる駅員の姿を確かめながら、僕は肩を落とした。時刻は十一時を過ぎていた。

ドビーの善意は……ちよつと命懸けなんだ。

カートに再び荷物を積み直して、人混みから離れた駐車場にてハリーと腰を下ろす。アーサー氏のフォード・アングリアはなくなっていた。

「僕、どうしたらいいんだろう……」

「ヘドウィグに手紙を持っていつてもらおうよ」

「それだ！」

ハリーが膝の上でせつせと羊皮紙を広げるのを見守る。届ける先はハグリッドかダンブルドアか——マクゴナガル先生は新入生の組分け補助に忙しいだろう。校長が歓迎会を抜けるわけにはいかないだろうし、ハグリッドは——外見が、マグル界にはちよつとだけ、適さないかも。フリットウィック先生も同様だ。となると——となると——？

「頼んだよ、ヘドウィグ」

ハリーの指と僕の耳を甘噛みして、ハリーが預けた救助要請と共に美しい雪橇は飛び立っていった。夜が更けきる前に誰かが迎えに来てくれるといいんだけど。でないと、大荷物を持った子供二人なんて家出と間違われて補導されてしまう。

保険としてドラコへも通信紙に事情説明を頼んでおけば、現状でできることがなくなった僕らはすっかり手持ちぶさたになってしまった。

「ねえ、ハリー？」

「なあに、マリア」

トンツと軽い重みが肩に落ちる。ハリーのふわふわの頭が首筋をくすぐった。

「ジニー、どう思う？」

「ジニー？」

くりくりした緑の瞳が長いまつげを押し上げた。宝石みたく綺麗だ。——『僕』の、自慢だった瞳だ。

「うーん、よくわかんないよ。僕、まともに話せてないもの」
「ああ、そっか」

「でも……………ちよつとだけ、さびしい」
「さびしい？」

質問の回答には適さない返答に、はて、と首をかしげる。

「……………マリア、彼女を妹みたいにかわいがるんだもの」
「……………」

パチパチと瞳をまたたかせて。ぐうつと胸からなにかのかたまりが込み上げてきて、脳みその中で暴れる。

「ああ——ハリー、ハリー、ハリー！ 君、もしかして——僕の弟はなんてかわいいんだ！ 愛してるよ、ハリー！」

「わっ、苦しいよマリア……………僕が兄だよ！」

「ジニーだって愛してるけど——僕の兄弟は君だけだとも！」

「もう、マリアったら。そんなの当たり前のことじゃないか」

「ふふ、ふふふっ」

……………当たり前じゃない。当たり前じゃないんだよ、ハリー。

君がひとりぼっちの世界だって、あるんだ。

額をコツリと合わせて、ふにやふにや笑い合う。ただ座っているだけの退屈な時間になると思っていたのに——兄弟がいるだけで、いつだってどこだって幸せな気持ちになれるのだ。

「大好きだよ、たったひとりのマリア」

「大好きだよ、たったひとりのハリー」

大好きだよ——僕の愛する人たち。

夜だった。トランクを椅子にして、カートは駅へ返してしまっただけで、膝にはハリーの頭があつて、気持ち良さそうに寝息をこぼしていた。ふわふわな髪の完璧な指通りを楽しむ。

街明かりに殺された星はなんだかみすぼらしくて、本物でなくてもキラキラ魔法で輝く大広間の夜空が恋しかった。今度こそジニーの組分けだつて見たかつたし、胃がしもべ妖精たちの傑作のご馳走を求めていた。

「ハリー……」

星の明かりを諦めて、体温を分けてくれるいとけない寝顔を見つめる。ちよつと頬をくすぐつてみる。モリー母さんのおかげで膨らみを取り戻しつつあるそこはやわらかくて気持ちいい。唇にも悪戯に触れてみる。弾力があつてふわふわだ。まだまだ子供だ。

「気持ち良さそうな顔しちゃつて。……僕まで、眠くなつちやうな」「——それは困つたものですな。十二歳の少年少女が抱えきれぬ荷物を持つて野宿とは。いかにも、危機管理がなつてないと見える」

ハリーに触れていた指が体ごとかたまつた。——いや、いや、そんな気はしてたんだ。消去法で。そうなるんじゃないかなつて。

でも——まさか——ほんとうに——

「スネイプ……せんせい……」

「姉も、……兄も、 Hogwーツの名誉ある教授を送迎に使うなどと、大胆かつ大それた要求をご所望されたわけだが——そのご本人がたは、随分と有意義な時間を過ごされたようだ。結構、結構。我輩も、わざ

わざいロンドンの街をこの身一つで歩き回された甲斐があったというもの。……さつきとその傲慢な間抜けを叩き起こして立ちたまえ」

「は、はい！ ハリー、ハリー起きて！ 先生が来てくれたよ！」

冷え冷えとした銃口の瞳に慌ててハリーを揺する。おそろしいくらいに機嫌が悪い。減点をたんまりと言いたげな顔だ。誰かグリフィンボール生がすでに問題を起こしたのだろうか。このままだと寝ぼけたハリーを蹴り上げるくらいはしてしまいそうだ。

「ハリー……ねえ……」

「……ん、うん？ マリア？ おはよう」

マリアとなつてからは多少は改善されたが、ハリーは低血圧だ。すぐに覚醒できない。僕はそれを知っている。だから朝は、同時に目覚めたとしてもハリーが動き出せるようになるまで、僕らはじやれ合うのが常だった。

くり返そう。——ハリーは寝ぼけていたのだ。

ちゅっ。

まずは鼻に。次は額に。瞼に。そして頬にキスが贈られる。僕らにとつては慣れたスキンシップで——

バキツ。と。前方から聞こえた音の発生源が誰からだなんて、考えたくなかった。

「ハリー！ 起きて！ いつもならいいけど今日はダメ！ 先生が見てる——スネイプ先生だぞ！」

「ほう……いつもと。麗しき兄弟愛での目覚めは日常のひとつである。はてさて、ホグワーツはいつから乳幼児預かりも可能となったのか。我輩にはとんと覚えがないのですがねえ。——ああ、ミスポッター？ そう焦らずともかまわんよ。乳離れのできぬ子供はぐずるものだ。ミスポッターも勉学に加え子守りの日々にさぞお困りでしょうな？ 本日は僭越ながら我輩が起床の手伝いをさせていただ

こう」

「ひえっ……け、けっこうです」

「遠慮はいらぬとも。我輩とて、生徒が困っているとなれば杖を振るおう」

反射的にウソつけ！ と叫びかけて——飛び起きたハリーに僕とスネイプ先生は揃って口をつぐんだ。

「あの、アー……おはようございます、スネイプ。……先生」

「……さつきと貴様の精神に通ずるひねくれ曲がった頭を整え汚ならしい面をまともにしたまえ。ホグワーツに戻ったら罰則だ」

「……ハイ」

今回ばかりは、理不尽だとは叫べなかった。

ホグワーツ城付近までスネイプ先生の付き添い姿現しでやってきたポッターツインスを、グリフィンドール生は勇者の生還とばかりに持てはやした。本人の意志に関わらず、また嬉しくもないヒーローになってしまったのだ。ハリーは辟易としていたし、マリアはこれ以上バカげたあだ名を広めてくれるなどハーマイオニーに泣きついていた。

なにより――

「やあやあやあ！ ポッター君、ポッターさん！」

「ウツゲエ……」

新学期早々話題をかつさらっていった二人に能無しナルシストが黙っているわけはなかった。

「いけない子たちだ。君たちは度胸試しをしたつもりなのかもしれない。だがしかし、しかしだ。この私がある限り――」

「ロックハート教授？ 先ほど、向こうの通りで先生とお話したいという生徒が先生を探していましたよ。先生の本を抱えてううつとりしてましたから、きつと貴著についてなにか感想を伝えたかったのかもしれないね。優しい先生のことですから、もちろん探し出して聞いて差し上げるのでしょうか？」

「ええ、もちろんですとも！ さあ、どの女子生徒かな」

「ええと……黒髪の……スリザリン寮生の方でしたわ」

「そうですか、そうですか。黒髪の、スリザリンの女の子！」

ウキウキと歩き出したロックハートに、ハリーとハーマイオニーの手を取って競歩で距離を取る。うつとうしいターコイズ色のローブが見えなくなるところまで歩いて、手を離れた僕はハリーと深く深く

ため息をついた。

「君の女の子のフリ、完璧だったよ。マリア」

「ありがとう、ロン。僕も、実は僕って女の子なんじゃないかと思ってたところなんだ」

「バカなこと言っていないで！ マリア、さっきの態度、あれはよくなかったわ。先生がせっかく話しかけてくださったのに失礼よ。ロックハート先生……気を悪くされてないかしら……」

「失礼されたのは僕らだよ」

「気を悪くされたのも僕らだね」

「今頃存在してるかもわからないブルネットのマドンナを追いかけて鼻の下を伸ばしてるさ」

「伸びきつちまえ」

「まあー！」

存分に悪態をつく僕らにハーマイオニーは憤慨していたが、ロンは、フレッドとジョージを見てるみたいだ……君たちって双子だったんだ……とすつとぼけていた。君のそういうところが好きだよ、ロン。

「あの——」

ふと声をかけてきたのは、薄茶色の髪の毛の小柄な少年——次は君か！

コリン・クリービーー！

コリンは顔くらいあるいかついカメラを両手で抱えて、目をキラキラさせて、頬は真っ赤に塗りたくってハリーを見上げていた。……ロックハートを見るハーマイオニーと同じ顔だ。

コリンの控え目に見えて物凄く押し強い写真の催促に、ハリーがたじたじする。どうにかして恥ずかしい要求から逃げようとして——

——なぜ厄介ごとというのは得てして重なるのか。

「ああら、目立ちたがりのポッターにおこぼれのポッター姉じゃない」

お呼びじゃないぞ——スリザリンのブルネットめ！

「ご機嫌いかが、パンジー？」

「ええ、おかげさまで最高よ。ドラコと朝から崇高ですばらしい会話をしてきたの、わたし。いつだってお祭り騒ぎしてるグリフィンドルのあなたとちがって優雅な朝だったわ。でも、今この瞬間から最悪に変わったわ。顔だけの尻軽姫がおーんなどころでサイン会を開いてるんですもの。おいくら？ 暖炉の火付け用紙程度の価値はあるのかしら？」

「顔は認めてるのよね」

「いつの間にマリアがサインすることになったんだよ」

シー！ さりげなく火種を投下しようとするんじゃない、ハーマイオニー、ロン。

「そうね、あなたが写っていた方がきつとより燃えると思うわよ。一緒にいかが？」

「なっ……どういう意味——」

「おや、おや？ なんの騒ぎかな？ サイン入り写真を配っているというの誰かな？」

「……………」

途端に僕とハリーの目が死ぬ。ついでにロンも死ぬ。対比してハーマイオニーは輝く。ちよつと僕らにはその輝きは眩しいや。

わかっていたとも、騒ぎあらば湧くのが野次馬とこの男だ。せつかく見ず知らずのマドンナに足止めしていただいていたというのに——

あ。

「まあ先生、よくお気付きになりましたね。実はこちらが先ほど

言っていた先生の、大ファンの、先生の著書をこよなく愛する、勉強熱心な、ミスパンジー・パーキンソンです。すれ違いにならなくて安心しました。それでは」

「は？　ちよ、ちよつと、あんた、え？」

「やあパンジー！　聞いたよ、君はずいぶんと私のことを……」

パーキンソンの困惑と能無しの間抜けを置いて再びハーマイオニーとハリーを掴んで走る。ロンは勝手についてくるのだからうっかり留まつてしまいそうなハーマイオニー優先だ。注意されようが減点されようがかまわない。それ以上僕の視界にうるさすぎるターコイズブルーを映してくれるな！

「逃げきったか、今度こそ逃げきったよね。ねえ、ハリー」

「マリア、お忘れのようだから教えておいてあげるよ」

ロンが肩をすくめる。ハリーにそつと肩を抱かれる。ハーマイオニーはやつぱりぶんぶん怒っていた。

「次の授業は『闇の魔術に対する防衛術』さ」

——バジリスクに吞まれちまえ！

「それでグリフィンドールのお姫さまはご機嫌ななめなわけだ」

「今なら僕、君の口だって縫うよ」

最悪のDADA授業を乗り越えて現在、いつもの湖付近にて僕はふてくされていた。

ほんとうに、ほんとうに、無能が背伸びをするなっていうんだ。ピクシーすら扱えないくせに。收拾もつけられないくせに。無言呪文

で、そのうえ杖を振るフリだけの杖なし魔法で！ ハリーを守るのに手一杯だった。

腹いせにテストのQ32、ギルデロイ・ロックハートの得意な呪文は何？ には『忘却術』と書いておいた。

「わるかった。ほら、存分に寝転べ」

憤懣やるかたない僕にドラコが自身の膝を叩く。言葉通りに寝転べば、散らばった前髪を払って額に手を置かれた。

ひんやりしていて気持ちいい。ハリーはあんなにも子供体温なのに。それはそれで気持ちよかった。どちらの体温も僕は好きだ。

「ドラコ……………君って、白いね」

「なんだ、突然」

色白を通り越して蒼白い彼の頬へと手を添える。やつぱりひんやりとしている。そしてスベスベだ。確かドラコの両親も不健康に見えるくらい白い人たちだったから、もしかして純血特有だったりするのだろうか。シリウスは……………やつれてたからよくわかんないな。

「吸血鬼のようだろうか？」

「根に持ってたか」

くすぐるような軽さで頬をつままれクスクスと笑う。そのまま、金糸の髪をヴェールのようにして見下ろしながら、ドラコは僕の赤毛を撫でた。時々指に巻き付けて遊んでいる。

「……………ハーマイオニーに見られたらうるさそうだ」

「ああ、グレンジャー嬢の淑女教育か」

「君がチクったからだぞ。おかげさまで毎日ガミガミ小言さ」

「お前が軽々と男の部屋に泊まろうとするからだ」

「君だからなのに」

「……………」

無言でむにっつと唇を指で押された。ハイハイ、『黙れ』、ね。

「……思えば、変だよ。僕たちって」

「なんだ、藪から棒に。今日の君は唐突だな」

「そういう気分。ミスター無能のせいで頭が回ってないのさ」

「そういうことにしておこう」

笑いながら目元をくすぐられた。そしてやっぱり指は髪と肌の間に戻るのだ。

「僕たち、いつからこんな風に触るようになったんだっけ？」

「……………」

「考えてもごらんよ。僕、君と握手すらしなかったんだぜ」

スコープピウスとアルバスのことがなければ、口だつてろくに利いたかどうかもわからない。

ドラコをここまで変えたのはスコープピウスだし、アルバスがいなければ僕のスリザリンへの偏見はしこりになったままだったかもしれない。つくづく、親つてのは子供に振り回されるものだ。

「まずは挨拶から始めて……食事に行ったんだっけ？」

「子供の付き添いとしてな」

「そうしたら次は二人で会うようになった」

「そのうち家族ぐるみだ」

「ジニーは君のこと苦手だったみたいだけどね」

「学生時代に散々いじめてしまったからな」

「軽く死にかけるくらいいじめた僕とはこんなにも仲良しなのに」

「君のタフさに負けたのさ」

額をコツンと合わせて笑う。どこまで近付いても綺麗な顔だ。

——ああ、いつから。この距離の君が当たり前になったのだろう。

「僕たち——いつからこんな風に触れ合うようになったんだろう」

「……さあ、覚えてないな」

「そうだよね。……僕も、覚えてないや」

君に最後にさよならを言ったのは——

いつも通りに目が覚めて、着替えてブラシを手に談話室へ下りると、そこにハリーの姿はなかった。

「あれ、ハリーは？」

「クイディッチの練習だって。ほら」

ロンが寄越したメモには、ただでさえ上手といえない字が眠りながら書きましたと言わんばかりにのたくっていた。

我ながらひどい悪筆だ。僕だって、未来のハーマイオニーから悪筆矯正レッスンを受けていなければどうなっていたか。なお、強制だ。

「まだこんな時間なの？」

「方針が変わったんじゃないの。ビーター二人も寝ながら出ていったよ」

「て、ことはハリーはあの頭で……練習後なんてもっとすごいぞ……」

ただでさえ毎日のブラッシングを怠ればたちまち絡まってしまう呪いレベルのポッター遺伝子なのに、寝癖に暴風がプラスされるだなんて考えるのもおそろしい。

「僕、ハリーのところに行ってくる」

ブラシを持ったままローブを羽織ってグリフィンボール塔を駆け降りる。向かうはクイディッチ競技場の練習用ピッチだ。

なぜだか最中にドラコとでくわし（彼もクイディッチ競技場へ向かっていた。）君、なんて頭をしているんだ！ と首根っこを引っ掴まれて持っていたブラシで解かれた。そういえば僕も寝起きだった。ハリーほどじゃないけど、そこそこ毛先が踊っていたことだろう。そ

のまま、なにやら弄くられたためにかなりの時間を食ってしまった。ようやくたどり着いたかと思えば練習はまだ始まっておらず、そつとドラコと二人で窺えばなにやら選手たちが口論しているようだった。なんだなんだ、とうとうオリバーにみんなが反旗をひるがえしたか？

「……おい。これ」

「え？ あ。アア……」

見えたのは、グリフィンドールの赤いユニフォームと——緑色。

もしかして——今日か。

案の定「少なくとも、グリフィンドールの選手は誰一人とお金で選ばれたりしてないわ！」というハーマイオニーの反論が聞こえてきて、二人で頭を抱えた。特にドラコなんて、黒歴史の再来に胃がシクシクしてきた頃だろう。

——と、いうか。ドラコはここにいるのだ。一体誰がスリザリンのシーカーになったというのか。

「——セオドールか」

ドラコが呟いた。セオドール？ ……ああ、セオドール・ノットか。

……え、セオドールが？

細身で茶色い髪の少年がハーマイオニーを鼻で笑う。そして。

「生憎と、君の意見は聞いてないんだ。生まれぞこないの穢れた——」

「——その言葉は、あまり品があるとはいえないね」

颯爽とドラコが人の波を切る。華奢で儂げな背中が毅然としていて、どの口が、なんて茶化す気をなくすくらいには——まあ、かっこよかった。

「やあ、セオドル」

「……やあ、ドラコ」

なんとも冷え冷えとした空気ですリザリンの二人が挨拶を交わす。ドラコが一度だけ、横目で僕を見た。……今のうちに、てことね。

「ハリー、ロン、ハーマイオニー」

いつもの三人を小声で呼び寄せて、場をドラコに任せて離れる。たぶん、この三人がいる方がややこしくなる。

「ハグリッドのところにも行こう。ハリー、その頭で授業なんて僕が受けさせないからね」

「そんなにひどい？」

「鳥の巣でも乗せてるのか、てくらい」

「そっかあ……。マリアは……。……とっても女の子らしいね？」

「え？ そうなの？ どんな風になってるのか、僕、知らないんだ」

手を後頭部へと回してみれば、三つ編みらしきものに触れた。これは……。ええと……。編み込みってやつ……。？

ハーマイオニーがふうん、と目を細める。からかいたくてたまらな
いって顔だ。

「器用なのね——マルフォイって。それに、マリアに似合うものをよくわかってる。……とってもかわいいわ」

「……ありがとう」

なんだか気恥ずかしくてぶつきらぼうに返せば、ハーマイオニーはさらに笑みを深めた。……なんだっていうんだ。

ハグリッドの小屋が見えてきた。扉を叩けば、ハグリッドはずいぶ

んと不機嫌な顔をしていた。なんでも、さつきまでロックハートが押し掛けていたのだとか。本当に行く先々で湧きやがる。アブラムシのような男だ。

ハリーの頭を整えている間、三人はハグリッドへハーマイオニーが受けかけた侮辱の話をしていた。——それを止めたドラコの話も。

「俺あ、あんまし関わったことねえけどよ。変わりもんだなあ、マルフォイの坊主は」

「あら、それなりに常識的じゃないかしら。スリザリンにしては」
「そうだ。スリザリンの中の、変わり者だ。そんなもって、マルフォイの中でも……ウーム。現にアイツの親父ときたら……」

ハリーは思い出していた。ボージン・アンド・バークスで見た冷たい相貌の男を。凍ったような眼差しを。——あんな男からどうやってドラコみたいないやつが生まれるんだろう。

「よし、おわり！ 今日もかわいいよ、ハリー」

「マリアだってかわいいよ」

目の前の旋毛にキスをすれば、ハーマイオニーとロンが、なにかとんでもなくどうしようもないものを見る目で僕たちを見ていた。ハグリッドまで生あたたかい目をしていた。

「そうねえ。今日は特にかわいいわよ、マリア。プリンスに飾られたプリンセスはちがうわね」

「ハーマイオニー……」

……ダメだ、諦めよう。今日のハーマイオニーは僕をからかい倒すと決めたようだ。

「さて、そんじゃあ、お前さんたちは授業の準備をせんとな。ハリーは

ユニフォームも着替えにやららん」

ワイワイとハグリッドの小屋を後にする。ハリーが更衣室へ向かうのに付き添っていれば、箒置き場の付近でマクゴナガル先生に捕まった。すっかり忘れていた罰則の話だった。

「ミスポッターはフィルチさんとトロフィー磨き、ミスターポッターはロックハート先生のファンレター処理の手伝いをするように」

「フィルチと!? 最悪!」

「ロックハートだって!? 最悪!」

「呼び捨てとは何事ですか! グリフィンドール五点減点!」

朝からしつかりと減点されて、ついだとマクゴナガル先生とハーマイオニーのタッグに説教されつつ城へと戻る。途中、別れる際にマクゴナガル先生が微笑んだので何事かと首をかしげれば。

「よく似合っていますよ、ミスポッター。ミスターマルフォイは器用なのですわね」

……………なんなんだ、一体!

廊下のあちらこちらで煙が上がっている。——否、両耳から煙を立てた人間が何人も歩いていった。風邪の季節だ。

ジニーがそれにぐったりしていて僕は非常に心配した。——『前回』ではジニーの体調の悪さは風邪ではなく日記に奪われた魂——この場合は生気だろうか——からだっただから。

思わず、ハロウインの今日まで、ドラコに再三、日記は君のキャビネットに間違いなくあるのかと確認していた。……………医務室で。

「こんな日に限って君——そりゃ、最近さらに蒼白くなった気はしてたけど。体調が悪いならもつとわかりやすく態度に表してくれよ。なんだって痩せ我慢するんだ」

僕の髪を弄っているドラコは答えなかった。耳から煙を立てている姿を絶対に見られたくないと言われ、背を向かされた結果だ。例の一件で彼はヘアアレンジに目覚めたらしい。日に日に僕の赤毛が芸術的になっていく。

「ただでさえ健康的とはいえない見た目なのに……君、ずいぶん儂げになつちやつてるじゃないか」

「ぐっ……君ならそう言うと思ったから隠してたんだ」

「今さらだろう」

「今さらだが男の矜持くらいある」

「僕にだってあるよ」

「あるなよ」

ポンポンと交わされる軽口に吹き出せば、マダム・ボンフリーに目をつけられてしまった。（「元気になったならさっさとハロウィンパーティーにでも向かいなさい！ あとがつつかえているのですよ、ああ忙しい！」）

医務室を追い出されて、絶対に振り向かせない強い意志を持ったドラコを背に歩き出す。でも心配は心配なので手は繋いでおく。

「ハロウィンパーティーか……気分じゃないな。一度だってまともに出席できたことはないけど」

ハロウィンの日気分が乗らないのは、もはや反射のようなものだった。毎年毎年問題が起こるのだ。ホグワーツのハロウィン自体に楽しい印象が持てない。

「……僕の寮にでもくるか？」
「え？」

振り向きかけた首を、繋いだ手に力を込められたことよって前へと戻す。

「今ならパーティーに夢中で誰もいないだろう。……君の目で、日記の確認ができる」

「ナルホド。——いいね、僕らしいハロウィンだ」

僕とドラコの足音は大広間への廊下から逸れていった。——向かうは冷たい地下寮だ。

相変わらず鮮やかな呪い解除の腕を眺めて、差し出された飾り箱の中を覗く。——ティアラと、日記。

手に取って、偽物にすり替えられていないかを確認する。

「……うん、間違いないね」

「だろう？」

再び封印が戻っていく。作業のような動きになっている辺り、本当に毎日確認してくれているのだろう。僕が見てるわけでもないのに律儀だ。

「今年は『秘密の部屋』事件は起きないとみていいかな。……それはそれで、バジリスクの牙が手に入らなくて困るんだけど」

「どうするんだ」

「うーん、クリスマスにでもハリーを唆して部屋を開けさせるか……バジリスク自体は僕がなんとかするとして」

「弟を唆すなよ……僕もついていくからな」

「当然だよ？」

煙はすっかり消えていて、はじめからこうだったとばかりに涼しい顔をしているドラコへと悪戯っぽく笑う。ドラコはちよつとだけ面食らっていた。

—去年手伝ってもらったんだもの。今年だつて手伝ってもらうさ—
—相棒。

「よしつ。憂いは晴れたし、ハリーたちを回収して厨房にでも行こうかな。ねだればしもべたちがご馳走の残りくらいは分けてくれるさ」

「君たち三人は……アー……ゴーストの、なんだ」

「絶命日パーティー」

「そう。それでまったく食事に取りつけなかったんだっただか？」

「……毎年さ」

スリザリン寮を抜けててこてこ歩く。今度は横並びだということに、やっぱり手は繋がれていた。

「一応、確認しておくか？ ミセスノリスが石になってないか」

「慎重だね」

「……君、自分から三階に向かっているのに気付いてるか？」

「……僕も存外、慎重だったらしい」

無意識だった。相当トラウマだったんだな、なんて他人事にケラケラ笑つて、三階の窓と窓の間の壁を見回して。

「——え？」

松明灯を反射する水溜まりの床。おぞましく光る文字の羅列。—
—ぶら下がる、死んでしまったような猫。

——秘密の部屋は開かれたり

継承者の敵よ、気をつけよ――

『僕』は再び、第一発見者となってしまった。

第一発見者の僕たち、そしてずれて到着したハリーたちを連れて、半狂乱のフィルチをなだめながら、ダンブルドア、マクゴナガル先生、スネイプ先生はロックハートの部屋へと移動した。——当然、もつとも疑われているのは僕とドラコだ。スネイプ先生ですら、自寮の優等生ドラコ・マルフォイへと複雑な眼差しを隠せずにいた。

ダンブルドアによりミセスノリスが死んだのではなく石になったのだと診断されて、現場にいた僕たちへの事情聴取が始まる。

「なぜ、ハロウィンパーティーに出席せず三階の廊下をうろついていたのかね」

「あの、僕たち、絶命日パーティーに出ていたんです。ゴーストたちが証明してくれます」

「しかし、その後に時間があつたはずだ。わざわざ三階へ行く理由に一体何があつたのか……」

「——僕らを探してくれていたんですよ。それで、ホグワーツ中をくまなく、ね」

スネイプ先生から粘着質に尋問されていたハリーへと、助け船を出したのはドラコだった。——けれど、その言い様では。

「……なるほど。では、君たち二人は一体、どこで、なにを？ よもや他のゴーストの絶命日パーティーに参加していたとは、言うまい？」

スネイプ先生は激しく複雑そうだった。僕はともかく、自寮の生徒たるドラコのこととは庇いたいだろう。だが、状況がそれを許さない。

——それほどに、深刻なのだ。

「マリアがあまり——『十月三十一日』を好きでなくて。パーティーで

騒ぐ気分じゃないと言ったので——なら、僕と二人で過ごそうと誘いました。……ええ、二人きりで」

ハーマイオニーがちよつとだけ耳をぽつと赤らめた。ドラコは十二歳と思えないほど挑発的に笑んでいた。

「……それで、三階の廊下を？」

「とにかく二人きりになれる場所を探していたものですから。……男女の逢瀬の意味を、今さらお聞きになったりはしないでしよう？」

スルツと意味深に指を絡められた。そのまま、ねえ？ とアイズグレーが熱を持って僕へと細まる。

まったく、十二歳の顔じゃないぞ。もっと色気を隠せ、色気を。ハリーやロンまで真っ赤じゃないか。

「……それを、証明するものは」

「まさか。僕たちはずうっと——二人だけでしたから。その三人とちがってアリバイはありません」

ガタンツ——大きく椅子が震えた。フィルチだ。泣き腫らした目を憎悪に燃えあがらせてドラコをねめ付けていた。

「お前だ！ お前が犯人だ！ スリザリンめ！ お前が継承者なんだ！ お前は知っていたんだ——私が『スクイブ』だと！ お前はハリー・ポッターと仲が良い、ハリー・ポッターから聞いていたんだ、そうだろう!？」

突然名指しされたハリーはなにがなんだか、といった様子だったが、どうやら心当たりがないわけでもないらしくかった。……ということは、やっぱりこのハリーもフィルチ宛の手紙、勝手に読んじやつたか。僕もやらかしたことだけど、後でプライバシーについてのお話を

しなくちや。

「僕、そんなこと……」

「あれは秘密の部屋だろう！ ええ？ そしてお前はスリザリン！ スリザリンの中でもかしこい部類だ！ お前が継承者なんだ!!」

とうとうドラコへ掴みかかろうとしたフィールチをダンブルドアが止める。ダンブルドアは、「疑わしきは罰せずじゃよ」と杖を取りかけていた僕へも微笑んだ。

ハリーもロンもハーマイオニーも、不気味に落ち着いた態度で静観するドラコを見て真っ青だった。ドラコは、まるで王者のような貫禄を持つて微笑んでいた。

ほんとうに、君って……もう。

ため息をこらえ、ドラコが絡め取った手を僕から握り返す。

——かくして、容疑者最大候補はドラコ・マルフォイとなつてしまった。

「猿芝居」

「そう拗ねるなよ」

寮へ戻る道の最中で僕はチクチクと嫌味をこぼしていた。

「僕に監視の目が向いていれば君もハリーも動きやすい。ベストな選択だろう？ さいいい、前回でも同じように疑われていたわけだしな。今回は自分から名乗っただけだ」

「……君のそういうところが嫌いだ」

「聞き飽きた」

ニヒルに笑うドラコの肩を軽く殴り付ける。

バカな真似をして。そんな打算なんて二の次に——ハリーを庇うためだったくせに。

自分本位な生粋のスリザリンのくせに、両親のために命を懸ける。妻のためならお家断絶を覚悟する。子供のために過去すらも駆け抜ける。身内のためなら、誰よりも自己犠牲つてやつを厭わないんだ。ドラコ・マルフォイは。

そういうところ、ほんとうに、きらいだ。

「……戻ったら、もう一度日記を確認する」

「……ん。頼んだ。僕はジニーを探りを入れてみる。……大丈夫だと、思ってたんだけど」

「僕だって思ってたさ。……気に病むなよ。君の奥方はつよい。闇は孤独に付け入るが、ジニー・ウィーズリーは孤独なんかじゃなかった。そうだろうか?」

「——僕の奥さんじゃないよ」

僕は立ち止まった。

「ハリーの妻だ」

ドラコも立ち止まった。振り返る姿が、やけに緩慢に見えた。

「君——」

「ドラコ・マルフォイ。君は、ちゃんと手を握めよ。——アステリアをはなすなよ」

自分勝手に自己犠牲を厭わない君。どこまでも僕に付き合おうとする君。——同情なんかで、道連れになんてついてこさせるもんか。

「君……それでいいのか。君は、」

「ジニーを愛してるよ。それは、どんな形だったかまわらない。——決して届かない愛を一途に抱き続けた人を、僕らは誰よりも知ってるはずだけど？」

愛の言葉も懺悔も届かない。相手は微笑みも怒りもしない。記憶と、残り香と、忘れ形見だけの為に生き抜いた人。

そんな人の後ろ姿を、『僕』は見つめ続けたんだ。たとえばそれが憎悪だったとしても——僕は確かに、あなたを見ていた。「僕を見て」と、泣いたあなたを。

「遠慮なんてクソな真似はするなよ。君はかつて『僕』に、アルバスにはスコーピウスと僕が必要だって説教した。なら、僕だって言わせてもらう。——これから生まれるスコーピウスには、絶対に、君が必要なんだ」

少しの距離をあけて、少しの時間が僕らに与えられて——ドラコはうなずいた。

「ああ。同情も遠慮もしない。——ちゃんと、選ぶよ」

無意味なネオンの光が存在しない夜空に、彼のブロンドは、まるでひとつの絵みたいに目映く見えた。

翌日から、『秘密の部屋』という単語を聞かない日はなくなった。そもそも、秘密なんて名前がついている時点で秘密ではないのだ。このホグワーツでは。

そしてドラコは徹底的に避けられた。スリザリン生以外から。スリザリンからは英雄のように讃えられていた。魔法界の王族、ブラック家が衰退した今、マルフォイの名はあまりに大きかった。

ハーマイオニーやロンですら気まずげで——本来なら、その位置を為したのはハリーだった。

ドラコと近しい僕もマグル出身生徒からは若干避けられたが、こんなものは痛くも痒くもなかった。……もつと激しいむなしさを、『僕』は知っている。

ドラコは否定もせず肯定もしなかった。ただただ静観の姿勢を取った。それがさらに真実味を増させていた。

「やあ、スリザリンのプリンス。それとも今は継承者どのつて呼んだ方がいい？」

「やあ、とぼっちりを受けているグリフィンドールのプリンセス。君が継承者と呼んでくれたなら、噂は確定するだろうね」

「……とぼっちりはどっちさ。減らず口」
「君こそ」

ベンチにひとりぼっちでいる彼の隣へと腰を下ろす。少し前までは、通信紙を活用してようやく人目を避けられるか、といった具合だったのに、今は彼がそこにいるだけで皆いなくなるのだから楽なものだ。……まったくもって、バカげてる。

「さびしいって言いなよ、ドラコ」

「なんだい、突然。君、忘れたのか？ 前回の僕がどれほどスリザリンの継承者であることに焦がれたか」

「ああ。僕らも絶対マルフォイだと思った。だからポリジューズ薬を飲んでクラブとゴイルに化け……………あ。」

「は？ ……………あれ、君たちだったのか!? 通りで様子がおかしいと……………やってくれたな！」

「時効ってことしておくれよ」

啞然と身を乗り出すドラコにケラケラ笑う。まさか本気で気が付いてなかったとは。僕らの演技力も捨てたものじゃない。……………ねえ、

『僕』のロン。

「ほんとうに、お前は……ウィーズリーもウィーズリーだ」

「ちなみに発案者はハーマイオニー」

「……………」

案外、大きなことを言い出すのは彼女なんだぜ？ なまじ、知識があるだけにね。

「ねえ、ドラコ」

「……………なんだ」

「さびしいって口にしなよ」

「またそれか。さつきも言っただろう、僕は現状に——」

「それは過去のドラコ・マルフォイだ。——今のドラコ・マルフォイはちがう。だろう？」

ドラコはそつと口をつぐんだ。

僕はめげなかった。だって——『僕』は知っている。

「君は痛みがわかる人間になったはずだ。……痛いだろう？」

「……………マリア」

『僕』は痛かったよ。かなしかった。……慰めさせてよ。『僕』を」

腕を広げる。やがて、夢いブロンドがコトン、と胸に落ちた。

「……………ずるい存在だな、マリアは」

「まっただね」

収まった華奢な体を抱きしめて、髪に頬を寄せた。

——『僕』にも、マリアがいたなら、よかったのに。

クイディッチの試合がやってきた。相手はスリザリンド。以前にはドラコが収まっていたポジションに、セオドールの茶色い髪が見えた。

「ひと雨きそうだね」

すっかりお馴染みとなった隣の緑ローブへと囁く。赤の集団の中に緑はやっぱ目立つ。だというのにドラコはどこ吹く風だった。

……君、周囲の不躰な視線にはつよくなったよね。

「君に敗けた記念すべき初試合さ」

「今回はセオドールだからわからないかもよ?」

「……あいつより僕が劣ってるって?」

おっと、久々に彼のプライドに火をつけてしまったようだ。

じっくり見てやろうじゃないか、と双眼鏡を握りしめるドラコにこっそり苦笑いする。ごめん、セオドール。余計なこと言っちゃった。

試合開始のホイッスルが響く。空の雲行きがどんどんと怪しくなっていく。ああ、ハリーの眼鏡に防水魔法をかけてあげればよかった。

先制点はスリザリンド。ブラッジャーにアンジェリーナが妨害され、ブラッジャーを防ぐためのビーター二人はなぜだかハリーに付きつきりで――

「んん?」

ハリーがまたもおかしな動きをしていた。いい加減、クイディッチ

では毎度といえるほどトラブルが起こったため、どの年のどの試合になにがあったのかなんて把握しきれていない。

今回はなんだ？ デイメンターは来年だから………あ！

「ドビーー！」

「はっ。」

突然、実家のしもべ妖精の名を叫ばれてドラコは呆けた。

「言っただろう？ 今年はドビーがめちやくちやに妨害してくるって！ あれもその一つなんだ。ブラッジャーがおかしいの、わからない？ あれ、ドビーが操ってるんだよ！ ハリーを殺す気だ！ あ、いや、本人はちよつとのつもりなんだけど、少なくとも『僕』は殺されると思った！」

慌ててドラコが確認した双眼鏡の先には、めちやくちやに旋回するハリーがいた。

この後には、ついだとばかりにロックハートのバカに文字通り骨抜きにされる未来が待ってるんだ！ あのでしゃばりのトンチキの無能め！

「君……そんなことになってたのか……それでよくスニツチなんて取れたな」

「感心してくれるのはけっこうだけど、ともかくドビーを呼んで！ 君、マルフォイだろ!？」

「あ、ああ」

パチンツとドラコが指を鳴らせば、おどおどした様子のしもべ妖精が姿を現した。

本当に、皮肉だけどドラコが今、生徒たちから避けられている状態でよかった。おかげさまで、こんなところにもしもべ妖精を引き出して

も誰にも咎められない。

「ドビー、ブラッジャーを操ってるのは君だろうか？　今すぐ止めて！
君はハリーを殺す気かい!?」

「めっそももごさいません！　ドビーめは……ドビーめはハリー・
ポッターをお救いしようと……」

「ドビー」

ドラコのひんやりとした声に、ドビーはテニスボール大の瞳を極限
までひん剥いた。

「ドラコ坊つちやま！　これは、ドビーは……ドビーは……」
「命令だ。今すぐお前が行っている魔法をやめろ」

哀れっぽくうなずいたドビーが指を鳴らす。ひたすらハリーを追
跡していたブラッジャーは、次にはあつさりと標的を替えていた。
しかし時遅かった。僕が見たのは、骨折こそしていないもののス
ニッチを掴んだハリーが箒から落ちていくところだった。

「ハリーッ！」

立ち上がって、人波を強引にかき分けながら下りる。ドビーのこ
はドラコがどうかしてくるだろう。それよりも今は――

「この私が完璧に治して差し上げましょう」

あの救いようなないバカを止めなければ！

「ぼ、僕、いいです。このままにしてください」

「ハリー、心配めされるな。私はこの魔法を何十回と――」

「あなたの応急処置よりマダム・ポンフリーという本職者がいるので

けっこうです！」

グラウンドに突然現れた怒り狂う赤毛に場が困惑する。オリバー・ウツドの「ポッター姉か？」という呟きに返答するよりも早く——少女は自身の最愛の弟を抱き上げた。お姫様だつこで。

去年のトロール事件時にハーマイオニーひとり担げなかったのが悔しくて、ひそかに筋トレしていた甲斐があった。

「家族の面倒は家族が見ます。失礼します」

石のように動けない選手たちをかき分けながら、男前すぎる少女は医務室へと向かう。誰かが呟いた、普通逆だろう……という言葉に、その場にいた誰もがうなずいた。

コリン・クリービーが石にされた——その情報は瞬く間に拡散されていった。なんだかんだと交流のあったハリーは落ち込み、またまたアリバイがなかったドラコはさらに疑われた。仕向けているとはいえ、ドラコにアリバイがないこと自体は偶然だ。君、時々ものすごく運がないよな……。

生徒たちの疑心暗鬼は加速し、スリザリンはドラコを勝手に王と祭り上げて有頂天だった。ホグワーツ中に不穏な空気が蔓延していた。——そんな最中。

此度も『決闘クラブ』が開催される。

「なんの価値があるんだ。あの茶番に」

「それには同意だけど、とりあえずハリーを守りに行かなくちゃ。ここでハリーのパーセルマウスがバレたら、君の努力が水の泡だよ。一瞬で空気が冷えてすごかったんだから。とっても刺激的」

夕食後に貼り紙を見てすぐ、僕とドラコは一直線に大広間へと戻っていた。

鼻で笑った僕に、ドラコが肩をすくめる。……まあ、蛇を出したのはコイツだし。

「それに、どこに真犯人が潜んでるかわからない。ジニーの時みたい
に、本人には犯行に及んでる自覚がないんだ。ジニーのことは僕が見
てるつもりだけど、ジニーは日記に触れてもいない」

「……単純に考えれば、スリザリン生が有力か」

「あんなガチガチの封を解除できる生徒がいるならね。そいつ、きつ
と天才だよ」

なんとって、ドラコは現状自分に使える能力と、長く生きた未来の
知識を持って分霊箱を管理している。大人ですらプロフェツシヨナ
ルを連れてこない限り無理だと僕には思える。今のホグワーツでド
ラコ作の封印を解除できるのは、ダンブルドアと闇の魔術に詳しいス
ネイプ先生くらいだろう。

それを、生徒がだなんて——七年生の首席だって無謀だ。

だが、現に秘密の部屋の扉は開かれている——

扉を開く条件に日記とリドルとの交流は必要不可欠のはず。ヴォ
ルデモートの魂でも引っかけてない限り、普通の人間がパーセルマウ
スを使える可能性はまず無いのだから。

けれど、日記が飾り箱の中から動いていないことはドラコが毎日確
認している。

ドラコがいない間に行動してるとでもいうのか。それとも——

「……日記の他に、鍵があるのか」

ドラコも同じ考えへ至っていたようで、僕らはとても十二歳がする
眼差しでない目で見合っていた。

「ともかく、今できるのは怪しい人間の観察だけだ。焦ると未来が書き替わってそのうちに死人が出る」

「みんなの認識では君が一番あやしいんだけどね」

「僕は除け」

冗談を交えてクスクス笑う。大広間は長机が撤去されて既に人で満杯だった。三人組を見つけ、やあ、と肩を叩く。ロンとハーマイオニーはドラコを見てビクリと肩を震わせたが、ハリーはふんわり笑っていた。ハリーはドラコのことを欠片も疑っていないのだ。ロンとハーマイオニーも本気でドラコを犯人とは思っていないだろう。

ふふ、どうだどうだ。信頼されるって、くすぐったいだろう？

「誰が教えるのかしら？」

「誰だっていいよ、アイツでなけりや……ゲエツ」

ハーマイオニー以外がロンとまったく同じ反応をした。喋らなくても輝く歯がうるさいロックハートと天敵のスネイプのご登場だ。さて、ハリーの中で現在、印象最下位なのはどちらだろう。

ロックハートお得意の自己陶醉演説が始まり、ドラコと嫌味に笑い合う。

スネイプ先生の決闘の知識がごくわずかだって？ 最前線に立つ男がごくわずかならお前の知識は赤子にだって劣るだろうよ。

散々の美辞麗句を経て、ようやく決闘台へとスネイプ先生とロックハートが立つ。僕とドラコの心はひとつだった。

——こてんぱんにしてやれ！ セブルス・スネイプ！

「エクスペリアームス！」

勝負は一瞬だった。スネイプ先生は欠片も本気じゃない。そんなのにあっさりと吹き飛ばされて、どうして自信過剰のフリをしているのだろう。そうするしかないのかな。

「さあ、二組になつて」

気まづげなロックハートが、自身をチャホヤしてくれる女子生徒の集まりの中へと飛び込む。ハーマイオニーもフラフラ寄せられかけていたので、咄嗟にリードを引くみたいにローブのフードを掴んでしまった。わざとじゃないんだって、睨むなよ。

「僕とドラコ、ハリーはロンと、ハーマイオニーはパーバティとがいいんじゃないか？」

各自、実力が近いものだと合わせた結果だ。周りでは見事に乱闘が起きていたが、僕らのチームは比較的穏やかだった。

「ドラコ、僕は魔法、使わないからね」

「杖なし魔法もか？」

「だって——間違いなくバレルよ」

僕らの視線の先はロックハートでなくスネイプ先生だ。

「……バレルだろうな」

「でしよう？」

ポンコツの目は欺けても、欺き続けてる人の目は誤魔化せない。

「アー……コホン、エクスペリアームス」

「ハイ、降参です」

ヒョイツと奪われていった杖に両手を上げて降参のポーズを取る。ドラコは僕の杖を捕らえて、複雑そうに笑った。

「この呪文で君に勝ったのははじめてだ」

「あれ、そうだっけ？ ダンブルドアからも奪えたのに」
「言うな。胃が痛くなる」

そつと腹を押さえた十二歳の彼に、子供に振り回されていた頃の大人
のドラコを見た気がしてなんともいえない気持ちになった。……
お互い、苦労したな。

乱闘をスネイプ先生がフィニートで終わらせ、見本模擬戦の時間が
やってくる。やっぱり指名されたのはハリーとドラコだった。ハ
リーと交流のあるドラコを知っていてあてがってくれる辺り、スネ
イプ先生なりの恩情なのかもしれない。

今のドラコなら蛇を呼び出すなんて真似はしないだろう。けれど
も。——念には念だ。

「先生、よろしいですか？」

手を挙げた僕にロックハートの目が向いた。——よし、ロックハ
トならチョロい。

「ハリー、実は夕食後から具合が悪いんです」

「え？ マリ……ングツ!？」

僕の肘打ちがきれいにハリーの脇腹へと入ったのを見て、壇上のド
ラコと隣のロンが通り魔を見る目で僕を見た。

「実は立っているのも精一杯で……ああつ、ハリー、しつかりして！
かわいそうなハリー……私は休んだら？ て言ったんです。でも、決
闘クラブを先生が……ええ、尊敬するロックハート先生が行われると
お聞きして、こうして無理を押しに来ていたんです。でも、もう限界
です。ほら、こんなにもつらそう……。まさか、まさか先生は、先生
を尊敬するあわれな生徒に無理やり壇上へあがれだなんて……そん

なことはおっしやいませんよね？ ロックハート先生はとつてもお優しいですもの。そうでしょう？」

ドラコとロンが真犯人を見る目で見ていた。あとハリーは本気で涙目だった。

「ええ、ええー！ そういった事情ならばいたしかたありません。しかし、だとすると……」

「ですから、私が姉として代わります」

ハリーをロンに預けて、ロックハートがうなずく前にドラコの前へと立つ。ドラコは呆れ果てていた。周囲のざわめきは最高潮だった。

おいおい、姫と王子が決闘だつて！？ 王子が姫に呪文なんてかけられるのか？ 姫こそ王子に杖を向け……向けられそうだな、グリフィンドールの姫なら。でも、大丈夫かしら……だって、彼って……ほら。様々に飛び交う声を見無視してドラコと握手を交わす。その際に小声で「使うのか？」と問われたので、瞳だけで笑い返した。

……ま、杖が聞いてくれるかは別としてね。お前、もしかしてセストラルの尾じゃなくて杖が気まぐれになるとかいうヴィーラの髪が杖芯なんじゃないか？

十分に距離を取り、お辞儀をする。……あ、ちよつとお辞儀をするのだのトラウマがよみがえりそう。

静まり返った場にロックハートのカウントが響く。一——二——

三——

「二エクスペリアームズ！」

同時に杖を差し向けた。そして飛んだ——僕の杖が。軽やかにドラコの手へと収まって、思わず吹き出す。

「あははっ、やっぱりダメか」

「わかつてたくせに」

杖を返してもらおう際、再び囁かれた。——「満足か？」

……ああ、満足だ。たぶん、これで正解のはずだ。この杖の本質は、そういうこと。

それから、まかり間違っても蛇が現れるなんてハプニングが起こることはなく、決闘クラブは平穩に終わった。

杖を振る。手応えはない。そうだ、気付いたんだ。君が応えてくれたのは三度だけ。

一度目は、落下するネビルを救うとき。二度目は、森でハリーを庇うとき。三度目は、ネビルの拘束を解くため。

君は。

「僕を守らない杖なんだね」

もう一度振ってから、大切にローブの中へとしまい直す。

ヘドウィグの判断は確かだった。これは、間違いなく僕の杖だ。

——なんて、マリアらしい杖だろう。

決闘クラブの翌日。ジャスティン・フィンチ・フレッチリーとほとんど首なしニックが石にされた。最早生徒たちの恐怖は疑心暗鬼に収まらず、パニックといつてよかった。我先にとクリスマス休暇に向けて帰省の準備を始める中、ハリーはずっと悩みを抱えているようだった。

ドラコの堂々たる噂の影に隠れてはいるが——ハリーにだって、今までアリバイがないのだ。

ドラコはしかたない。だって元々、皆が避けるせいで何をしていたなくとも一人にならざるを得ないのだから。けれど——ハリーは——

「ハリー？」

暖炉前のソファへ、ハリーにもたれるような形で腰かける。

「……マリア」

「……それは、僕に話せないこと？」

ハリーは緑の瞳をぐらぐら揺らせて——そして唇を噛みしめた。

「……話せる、と、思う」

「それなら、」

「でも、嫌なんだ。たぶん、巻き込むから」

「そんなの今さらじゃないか」

「そう、今さらなんだ。だから——だから、きつと、僕は君に話すよ。でも、まだ決心がつかない。……待っていてくれる？」

今にも不安に押し潰されそうだと、つぐまれる唇の代わりに瞳が饒

舌に語っている不器用な弟を、僕はつよくつよく抱きしめた。

「当たり前だ。僕を誰だと思ってるのさ。君の片割れだよ？ 見くびるな。——たとえば君が、今ここで『実は僕が闇の帝王だったんだ』なんて言い出しても、僕は変わらず抱きしめるよ」

「…………ふっ、ふふ、なあに、それ。マリアって時々冗談が過激だ」

…………あながち、間違いってわけでもないんだけどね。

やつと笑顔を思い出したハリーに、僕はちよつとだけ気まずく思いながらも背をなで続けた。

日に日に憔悴していくハリーを置いて、ホグワーツはクリスマス休暇へと入った。僕はこのところハリーに付ききりで、この休暇中を狙ってハリーの変化の話をドラコに相談しようと考えていた。それまで、ドラコとまともに会うことも考えられないくらい、ハリーが心配でたまらなかったのだ。

だから、休みに入ってハリーが早起きをする必要なくのんびりしているうちにドラコの元へ忍んでしまおうと——

悠長に、かまえてなどいられない事態が起きた。

「ドラコ」

「……………は？ マリア？」

透明マントを使い、さいわいハロウィンから変わっていない合った合言葉でドラコの寝室へと侵入する。ドラコは滅多に見ないパジャマ姿のまま、見るからに寝起きだとわかった。僕だって寝起きだ。パジャマだ。でも、目ははっきりと覚めていた。——覚めざるを得なかった。

「き、君、なにしてるんだ、そんな姿で。いくらなんでも礼儀つてものが」

「今すぐ僕を男にしてくれ」

「……………ハア？」

クールな相貌がすつとんきように崩れる。今日のドラコは珍しい尽くしだ。おっと、さつそく脳が現実逃避を始めている。

「……………あー、いや、無いとは思うが、一応確認しよう。……………女にしてくれ、ではなく？」

「これ以上女になりたくないから言ってるんだよ！ ねえ、あるでしょう？ こう、性転換薬とかさ。ここ、魔法の世界だよ？ ポリジューズ薬があるなら性転換薬くらい楽勝だろ？ 君なら作れる、頼むよこの通りだ！」

僕のあまりの剣幕にドラコは心の底から引いていた。

こっちは深刻なんだよ！ 引いても逃げてもいいから性転換薬は差し出してくれ！

「落ち着け。とにかく、落ち着け。まずは事実確認と現状理解から入るとしようじゃないか。いいか、性転換薬はないことにはないが一生ものじゃあない……………おい、絶望するのが早すぎるだろう。君の事情はどうなってるんだ」

パジャマのまま僕の肩を叩いてなだめるドラコに、僕はひどくひどくかすれた声で呟いた。

「……………んだ」

「なんだって？」

「……………生理が、きたんだ」

「……………」

シン、と、名状しがたい空気が流れた。

「わかるか？ 今朝起きたら、ベッドが血まみれで。殺人現場かと思つたよ。もしくはスキヤバーズが僕のベッドの上で死んだのかと思つた。太ももにべつとりとした感触があつて、僕、はじめはベッドの血がついたんだと思つた。でも、ちがった——僕の股から、血が流れていたんだ。意味がわからない」

「……それは、アー……」

「わかつてたき。女性である限り一生つきまとうものなんだろう？ ジニーもリリーもそれで苦しんでいたし、ジエームズやアルバスにも妹の繊細な時期には気を遣えと教育した。主にジニーがだけど。知識としてはわかつていたんだ——けど——」

混乱でフラフラの僕をドラコがベッドへと導く。とにかく立っていることすらつらかったので素直にありがたかった。

「僕、産めるのか？ これ、僕が——産むってことだよな？ そういう、準備なんだろう？ 僕が？ 赤ちゃんを？ ——この僕が？」

「マリア、落ち着け」

「そりゃ——そりゃ——我が子に会いたくないわけがない。ジニーだって、どれだけつらくとも苦しくともしあわせなんだって言った。出産はすばらしいものだって——でも——だって——僕、男なのに——？」

「——ハリーッ!!」

彼の張りつめた声に、ハッと顔を上げた。彼の氷っぽい瞳を見て、ほんの少し頭が冷えた気がした。

「ドラコ……」

「落ち着け、ハリー。君がどうであろうともその体は女性なんだ。わか

るなっ。」

「……うん」

「そして、僕以外はみんな君を女性と見る。そう見られているんだ。ここまでは受け止められるか？」

「うん……」

「よし、じゃあそこからはゆっくり理解していこう。焦らなくていい、全部受け止めようとしなくていい。君が君のまま、女の子のマリアと共存しよう。——もしも、もしもどうしてもこの先は無理だとはつきりしたら、その時は——」

ドラコの胸へと包まれる。落ち着く体温だ。子供をあやすみたい
に一定のリズムで背を叩いてくれる。

——ああ、彼を一番に頼ってよかった。

「その時は、僕が禁術でもなんでも使ってどうにかしてやる」

「……はは、それは、すごいな」

「本気だぞ？ 僕は君に何度か命を救われた借りがあるからな。癪なことに。——君が自暴自棄になるくらいなら、禁術くらい軽いものさ。校則違反より軽いとも」

まるでハーマイオニーのような言葉に、とうとう吹き出した。そんな僕にドラコは、一緒に笑いながら抱きしめ続けてくれる。

「……落ち着いたか？」

「うん。ありがとう、ドラコ」

『『ハリー』の悩みを聞けるのは、この世で僕だけだからな』

いつもの憎たらしい顔でニヒルに笑ったドラコに、お礼も込めて鼻をつまんでおいた。

「はあ、落ち着いたらお腹が痛くなってきた。毎月これだなんて……」

もつとジニーやリリーに優しくしておけばよかった」

「それは今からでもできるだろう。……重いのか？」

遠慮がちに腹を撫でるドラコのたどたどしさに小さく笑う。アステリアにこうしてやってたのかな。

「わからないけど……歩けないほどじゃないかな。ここまで走ってきたし」

「意外と大丈夫そうだな」

「メンタルは久々にボロボロだけどね。……これからどうしよう。いつまでもトイレットペーパーでどうにかできるとは思えないし。ええと、大体一週間だっけ？」

「ああ、基本はそう………待て」

「うん？」

「……君、今、その——例のを、どう処理してる……？」

ドラコが再び稀な動揺を見せるので、ううん？ と首をかしげた。

「とりあえずトイレットペーパーをつめてきた」

「……ハ、ハアアア!？」

今度は目がかっ開いた。ワア、珍しい。

「なんだトイレットペーパーって！ こう……あるだろう！ 専用の、あれが！」

「ないよ！ 持つてるわけないだろ！ 思いもしなかったんだから！」

「想定しているよ！」

「してたらこんなことになってないよ！」

互いの叫び声と荒い息が爽やかな朝の空気にこだまする。スリザ

リン寮は地下なので爽やかもなにもないが。

心底、今この寮にドラコ以外に残っている生徒がいない事実感謝した。

「とにかくグレンジャーだ。そういうのはすべてグレンジャーに相談するんだ。僕に聞いたって無駄だ。僕が詳しくかつたらそれはそれで審議ものだろう。いいか、虐待されてきたからろくな知識を与えられてないと言え——というか、本当に与えられてないんだな」

「ペチユニアおばさんは、女の子はその辺の草花みたいに勝手に育つと思ってるのさ」

脳内に浮かぶ金髪の馬面に向かって吐き捨てた。きつとペチユニアだつて、勝手に芽生えて勝手に咲いてるんだ。

「ううん、それにしても——ハーマイオニーか……こういう、女の子なことを相談するのは、気後れするんだよね。下着選ぴからレッスンさそうだ。僕にはまだ早いつて言ってるのに」

「我が校きつての才女どのに下着から選んでもら、え………いやだ。この流れはもういやだ。うんざりだ。だが聞かなくちやいけないんだろう、僕はいつだつてこういう役割なんだ！」

「え、なにドラコ。こわ」

突然、頭を振りだしたドラコからさりげなく距離を取る——と。ガツツと、両肩を力任せに押さえられた。

「……………君、今、下着、はいてるか？」

「…………ドラコ、それはさすがにセクハラだと思うよ。間違つてもハーマイオニーやジニーにはしないでよ」

「お前だから聞いてるんだ、バカ！」

耳元で叫ばれて頭がキンキンした。こんなにテンション高いドラ

コ、久しぶりだなあ。元気でけっこうなことだ。

「一応、血だらけはまずいから新しいのに替えてきたよ？ パジャマのズボンだって、ほら」

「……そうじゃない。君、わかっててやってるんじゃないだろうな……」

「うん？ ちゃんと口にしてくれよ」

「口にしたらマズイからこうしてるんじゃないか……」

そして何かに葛藤していたドラコは、荒んだ目で僕の胸を掴んだ。
——胸を、ワシツと、掴んだ。

「……やっぱり」

「さすがに訴えるよ？」

十二歳とはいえ、そこはそれなりに成長してるんだが？

「いいか、ハリー。いや、マリア。ここで誓え。——グレンジャーと一緒に、下着一式、上下もろとも、買ってこい。そして絶対につける。いいな？」

「ええ……セーターもローブもしてるんだからバレやしな……」

「い、い、な!？」

「ハイ」

かつ開くグレーの目の迫力に負けた。だってドラコってば、今にも憤死しますって顔するんだもの……。

「つかれた……勘弁してくれ……そんな状態で僕に抱きついていたなんて……いや僕はいい。僕以外が問題だ。ハリーだって兄と言いつけるならその辺りの教育もしておけ」

「ハリーには無理だろ。『僕』、そういうのまったくわかんなかったも

ん。ロンの方がまだ知識があったよ。ジニーがいたし」

女兄弟のはずの MARIA は『こう』だし……ねえ？

ぐったりとベッドに突っ伏してしまったドラコを指でつつく。

「ドラコ。ついでに分霊箱の確認をしていきたいんだけどー？」

「……チツ。じゃじゃ馬め」

「君はあれかい？ 僕をおとしめないと思いができないのかい？」

「今、誰よりも心痛を慰められるべきは僕だ」

だとかなんとか。ぶつくさ文句を言いつつも片手間で封を解いてくれる辺り、面倒見がいいんだ、ドラコ・マルフォイは。

「ほら、日記の確認だろう？ 相変わらず消えやしてないさ。中身だって、最初のページに T・M・リドルのまま——」

ふと、ドラコが日記を見つめて停止した。

「……ドラコ？」

次は僕を凝視する。ただならぬ雰囲気にコクリと唾を飲む。先程までの陽気な空気が、一瞬にしてかき消えてしまったみたいだ。

「ドラコ？ どうしたの？」

「……MARIA」

ベッドに乗り上げる姿が、なんだか蛇みたいだった。スルリと頬を撫でられる。いつものような、親愛に包まれたそれじゃなくて——なんだか——まるで——

「なん、だよ……ちよつと君、こわいよ？」

「ああ、すまない。……確認、しておこうかと」

確認？ そう聞き返す声は声にならず奪われた。

「ん、う!？」

にゆるつと。もうずいぶんと久しい、生々しい体温と感触が口腔いっぱい押し込まれる。肩をベッドに押しさえられ、かたむいた頭から大きく開いた口に、蛇みたいな舌が喉奥まで侵入しようとする。冷たい体温の指がパジャマの裾を巻くつて、腹と肋骨を撫でて中心をたどつていく。アイスグレーが、冷たい炎のような熱を灯して僕を見ていた。
ふざけるな。

「——ツ、ウ……ツ」

「……これは、悪ふざけじゃすまされないよ」

噛まれた舌を己の唾内へと戻したドラコは、どこか観察じみた目で僕を見ていた。

「……この程度か」

「へえ。この程度、ねえ。僕がどんなに乙女な反応できるかの確認かい？ 生憎だけど、そこまでウブじゃあないんだ。君は知ってると思つてたけど？」

「そうだな。思い違いだった。……ふうん、なるほど」

まるで研究してるだけみたいな態度にカツと血がのぼる。

人に断りもなくキスしておいて、しかもこんな、舌を入れるような——それなのに、なんだその態度は。確かに君は研究者気質なところがあるけれど、だからといって——ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！

「……そろそろ退いてもらえる？ 杖は使えずとも体術にはそれなりに覚えがあつてね。その辺りも『持ち越し』だ。ビンタの一つも入れさせてくれるんだろうね？」

「そう怒るなよ、マリア。僕たちはそういう関係じゃないだろう？」

「ないさ！ ないのに君がッ——もういい！」

彼を力任せに蹴飛ばし——軽々と避けられた。ああもう気にくわない！——透明マントを拾って扉へと向かった。閉める間際、僕を見つめるドラコへと、怒りのままに吐き捨てた。

「来年アステリアを見て、自分がどれほど恥知らずなことをしたのか考えろ！」

なにもかも！ 気にくわない！

それから僕はぜひんどドラコを無視した。通信紙にだって応答しなかった。ロックハート案のバカげたバレンタインカードが届いたって、絶対に受け取らなかった。

バジリスクによる襲撃事件が止み、今のうちに犯人を突き止めたいという考えもあったが———なにより、彼のあの日の眼差しを許せそうになかった。

そうして、何か月も口を利かずにいれば、とうとう三人揃って仲直りしてくれと懇願された。

「マルフォイ、ほんとうにひどいのよ。あんまりにも顔色が悪くて」

「あいつの顔色が悪いのは生まれつきだよ」

「なにがあつたかは知らないけど、アイツだつてきつと悪気はないよ。

あのキザ男がマリアにわざと意地悪なんかするもんか」

「お言葉ですけど、昔のあいつは性悪も性悪だったよ」

「マリア……ドラコ、ほんとうに反省してるよ。どう謝ったらいいかわからないって、この前、僕にそう言ったんだ」

「僕が甘いつてわかつてるハリーを使うスリザリンらしい根性が気に食わない」

「マリアあ……」

情けない声をあげる三人にツーンと顔をそらす。

子供っぽい？ 子供なんだからしかたないだろう。『僕』はハリーよりもずっと癩癩持ちで子供っぽかったさ。

けれども、そんな僕の態度も長くは続かなかつた。廊下でふと見かけたドラコの顔色が、ほんとうに信じられないほどに蒼かったのだ。それに、隈まで作ってひどい有り様だった。憔悴している、という表現がぴったりだった。

「ドラコ……?」

「マリア……」

フラついた彼を咄嗟に駆け寄って抱き留める。まるで——ダンブルドアの殺害を命じられたあの頃の彼みたいだった。

「ドラコ……なんて顔色をしてるんだ」

「君と、ずっと話したかった」

「……僕、意地を張りすぎた。ごめん」

「君の意地っ張りは今に始まったことじゃないし、僕らが意地を張り合うのも慣れたことだ。だろう?」

弱々しくも挑発的な笑みを忘れない彼に、しようがないな、なんて肩の力が抜けてしまう。あーあ、もう……許す気なんてなかったのに。

「ドラコ、どのくらい眠れてないの?」

「ん……ちよつと」

「オーケー、君のちよつとはすぐくだ。ハリー、僕たち……」

「言い訳は任せてちようだい、マリア」

「アリバイ工作もね!」

「お昼、取っておくね」

「……頼りになるよ、僕の親友たちと弟は」

お先に、と変身学の授業へ向かう三人を見送って、久々に湖付近へと腰を下ろした。湖から流れてくる風はほどよく冷めていて、日射しとの対比に春を感じさせた。

「君と話せないのは、思った以上にこたえた」

ポツリと、覇気なく声は落とされた。

「ん、僕も大人げなかった。ごめん」

「……もう怒ってないのか？」

「ついさつきまでは怒ってたけど——君の顔を見たら忘れちゃった」

コツ、と額を突き合わせる。頬を両手で包んでみれば、子供らしいやわらかさが失われていて、罪悪感がシクシクと刺激された。

こんなになるまで……バカだな、もう。

「喧嘩と呼ぶには一方的だったけど……仲直り、だ」

「ああ」

うつらとブルーグレーに睫毛の影がかかったところで、彼の頭を僕の膝へと誘導した。ドラコは抵抗しなかった。

「おやすみ、ドラコ」

「おやすみ、マリア」

春の風にあおられて、ようやく、雪が解けた心地だった。

ハグリッドが魔法省に連行されたという情報が入った。その上、ルシウス・マルフォイの謀略によってダブルドアの停職が決まった。ペネロピー・クリアウオーターが石になってすぐのことだった。

これらは、透明マントを使ってその場にいた三人から聞いた話だ。

「確かに、ハグリッドは大きな——ちよつとデンジャラスな生き物を飼いたがるところがあるわ。でも、だからって……」

「五十年前——五十年前になにがあったんだろう。トイレで死んだ女の子、水溜まり、おかしい動きをしていた蜘蛛……」

「ハグリッドが犯人なわけないさ。秘密の部屋を作ったのはサラザール・スリザリン。スリザリンだぜ？　ハグリッドがスリザリンなもんか！」

リドルの日記からハグリッドが追放された日の光景を得ていない三人は、どうにも行き詰まっていた。けれど、今回はハーマイオニーが無事だ。ハーマイオニーがいれば必ず真実へたどり着く。前回でも、彼女はバジリスクを突き止めていたのだから。

ダンブルドア不在で生徒たちどころか不安感が教師陣へも伝染する中、二度目のクイディッチ試合がやってきた。相手はハッフルパフだ。朝に厨房で会えた（こんな日に限って寝坊したのだ。朝食を食いつぶぐれた。）セドリックを激励した僕は、次にグリフィンドールの控え室まで来ていた。

「あれ？　ハリーは？」

「それがまだなんだ」

「寝坊かしら」

「オリバーはもうおかんむりよ」

すでに揃っている選手陣から口々に答えられる。

どうしたんだろう、ハリー。僕も寝坊したし、彼もそうなのか。

「僕が探しに行こう」

扉の向こうで話を聞いていたドラコが声を上げる。選手たちが彼を見て目を剥いた。

「マリアはそこにいればいい。ハリーが来た時にすれ違いになる」

「ああ、うん。ありがとう、ドラコ。それじゃあお願いするよ」

ドラコが去るのを息を殺して見守っていたグリフィンドールの選

手たちは、緑のローブが消えた瞬間にワツと僕へと詰め寄った。

「やだ、あなた、まだ付き合いがあつたなんて……それにどうするの？

ハリーにもしものことがあれば……」

「ドラコは犯人じゃないよ、アリシア」

「それは……あなたはそう思うのかもしれないけど……」

ウィーズリーの双子を除いて、皆が渋面だ。ウィーズリーの双子は、三人組につられてなんだかんだとドラコとも交流があつたので、この場ではハリーを除いてもっともドラコの性格を知っていた。ドラコは犯人じゃないと、迷いなくうなずいてくれた。それはそれとして「これはこれは継承者様！」だなんてからかい倒してはいたけれど。

「ハリーはすぐ来るさ。どうせ寝坊だ。それよりいつもの演説は——」

いいのかい、オリバー？ ——フレッドの言葉は続かなかつた。

おそろしく緊張した様子のマクゴナガル先生が、クイディッチの中止を呼びかけたのだから。

「「ハリーだ！」」

着替えるのも忘れて皆が飛び出す。僕もそれに続いて、マクゴナガル先生の元へと駆けた。

「せ、先生、いったい……」

「ああ……ミスポッター……ついていらっしやい。それから、ミスターウィーズリーも」

観客席からこちらへ向かっていたロンが真っ青で僕を見る。この二人が揃えられるってことは——まさか。

「また襲われました。——今度は二人です」

喉はすっかりからからだった。

僕とロンとマクゴナガル先生は、神妙な面持ちで医務室へと向かっていた。マダム・ポンフリーが僕らを通す。沈痛としている。——ああ、やっぱり。

「ハーマイオニー！」

ロンが声をつまらせて冷たい彼女の手に触れる。あれだけ——あれだけ一人になるなど言ったのに——！

しかし、ロンの絶望はハーマイオニーのみにとどまらなかった。

「……ジニー？」

ずっと見守っていたはずの彼女が——前回で犯人だった彼女が、ハーマイオニーと同じ顔で石になっていた。

「どうして……」

「二人は図書室の近くで見つかりました。心当たりは？」

マクゴナガル先生の声に、痛ましく動揺するロンが答える。

「僕たち、ハリーの応援に行くはずだったんです。でも、ハーマイオニーが突然、調べたいことがあるって。図書室に行きたいって——それで、一人はまずいから後にしようって言ったなら、それならわたしがついてくわって、ジニーが……」

ああ、なんてことだ。一人行動を避けろと言ったのが仇になるなんて。

「そうですか……私はこれから先生方への報告に行きます。二人はここで待っていてください。寮まで送りましょう」

厳格な彼女は存外、人情事に弱い。いつも厳しく引き締められている目元には、少しの涙が浮かんでいた。

マクゴナガル先生が去り、マダム・ポンフリーも席を外したところで、僕はじつくりと二人を観察した。

「ロン」

「ハーマイオニー……ジニー……」

「ロン、気持ちはわかるけど聞いて。ハーマイオニーはなにを握っている？」

「え？ なにって……なんだこれ」

ロンがハーマイオニーの手をパツと放す。そして、固く握りしめられたそこから破られたページを捻り取り出した。

「バジリスク……？ こ、これって——！」

バジリスクの説明が載ったページと、ハーマイオニーによって付け加えられたパイプの文字。

「バジリスク——バジリスクなんだ！ 秘密の部屋の化物は！ ハリーに知らせなくちゃ」

「」

ハリー、は。

大きな声を上げるロンへ、マダムが来てしまうから静かに——と注意をする前に、もっと大きな声によって僕らの会話は遮られた。

——クイディッチ中止の報せよりも、より大きな警告に。

「生徒は全員、寮に戻りなさい。教師は至急職員室へとお集まりください」

——うそ。

「え、どういうことだ？ マクゴナガル、迎えに来るって……」

「ロン、寮に戻ろう」

「マリア？ でも、」

「いいから！ すぐ！」

ロンの腕をとって走り出す。廊下を走るなど注意する教師のいない廊下は、パニックの生徒で溢れかえっていた。

なんとたって、純血のジニー・ウィーズリーが被害にあったのだから。もう、純血だとか、混血だとか、そんなのは関係ないのだ。

どうしよう。どうしよう。

走っているだけが理由でない心臓は、痛いくらいうるさかった。

犯人は——そして連れさらわれた生徒は——ハリーだ。

ずっと考えていたことだった。ハリーが、なにかを僕に伝えようとしてくれたあの日から。

アリバイがないハリー。なにかに怯えるようにしきりに周囲を見回していたハリー。思い詰めていたハリー。ジニーのように、勇気を振り絞ってくれたハリー。

秘密の部屋の鍵がリドルの日記なのは、日記に魂を注ぎ込み、リドルに操られることで蛇語を話せるようになる必要があるからだ。蛇

語こそが真の鍵で——日記を利用せずとも、蛇語を扱える人間はここ
ホグワーツにはひとりだけ。

人混みを割きながらグリフィンドール塔を駆け上がる。こんな時
に限って通信紙を部屋に忘れてくるだなんて——僕の大間拔け！

鍵となるハリー本人がさらわれたとなると、どうやって扉を開けば
いいのか。

ハーマイオニーには聞けない。僕だけじゃ思い付かない。ドラコ
に、相談しないと——

「——マリア！」

「……………へ？」

談話室へ飛び込んだ僕を、ハリーが受け止めた。

「……ハ、リイ……？」

「マリア、マリア、無事だったんだね。よかった、ほんとうに……」
「ハリー！ 君、どこでなにしてたんだよ！」

「僕、寝坊しちゃって。そうしたらチームのみんなが談話室に戻ってくるし、僕のことを本物かどうか確かめたりしてくるし……次にはこの放送で、マリアもロンもいなくて、もう、なにがなんだか」

まだジニーとハーマイオニーのことを知らないハリーへとロンが詰め入るのを止めて、シエーマスやディーンやネビルなどのハリーの同室者たちに断って寝室を貸し切らせてもらう。マフリアートを唱えてから、ハリー、と騒ぐ心臓を押さえつけて声を絞り出す。

「まず、今回の被害者は二人。ジニーとハーマイオニーだ」

「そんな……」

「そして、ハーマイオニーがこれを握っていた」

ロンからハーマイオニーの命懸けの手がかりがハリーへと渡る。

「バジリスク……だから、雄鶏が殺されて、だから、マートルが……だから、だから——つまり、これって！」

「化物の正体はバジリスクだ」

ハリーの顔が輝く。そして次には、ここ数ヶ月に渡って見せていた怯え顔へと戻ってしまった。

「……マリア。——僕、話すよ」

「……うん、わかった。ロン、席を外してくれる？」

「どうしてさ。今回の被害者は、親友と、僕の妹だぞ？ 僕だけ除け者

にされるいわれはない」

「まったくその通りだ。後で説明する。誓うよ。だから今はお願い」
「ロン」

僕とハリーとを見比べたロンは、小さく、絶対だぞ、と口にする
と渋々部屋を出てくれた。

ありがとう、ロン。ちゃんと話すから。——すべて終わった後に。

「ハリー」

ハリーのベッドへ腰かけて、蒼い顔で睫毛を震わせているハリーの
手を取る。冷たい手だ。どれほど緊張しているだろう。

「ちゃんと、信じるから。それで、抱きしめるよ」

「……ありがとう、マリア」

ハリーはポツリポツリと語った。

ロックハートの元で罰則を受けた日から妙な声が聞こえること。
それが聞こえると被害者が出ること。他には誰も聞こえていないこ
と。被害者がことごとく自分の知り合いであること——

「ロンが言ったんだ。誰にも聞こえない声が聞こえるのは、狂気の始
まりだって——僕、僕、自分が狂ったんじゃないかと思って」

「ハリー……」

「殺してやる、殺してやる——て。恐ろしい声が僕だけに聞こえるん
だ。そのうち、僕がみんなを——僕が、やったような気がして」

「ハリー、それはちがうよ」

恐怖に顔を歪めるハリーを、正面から見つめる。

「ハリー、もうわかったはずだ。君が聞いた声はバジリスクだ。君は

声に操られてたんじやない。パイプで移動するバジリスクの声を聞いていただけなんだ」

「……………どうして?」

目をこぼれ落とさんばかりに開いたハリーから、戸惑いはなくな
ない。

「どうして、僕にバジリスクの言葉がわかるの?」

「どうしてって……」

それは、君がパーセルタングだから……………ああ!

そこでようやく僕は自身の失態に気付いた。

——ハリー、自分がパーセルタングだって知らないんだ!

そうだ。ハグリッドが現れるまで、ダーズリー家に魔法を欠片も気取らせなかった僕たちは、ダドリーの誕生日だっておとなしく留守番をさせてもらえた。二人で家を自由に使えることは楽しくて、それだけで満足していたから——このハリーは動物園に行つてない! あの愉快なニシキヘビと話してないのだ!

そして決闘クラブでは僕がパーセルタングを知る機会を防いでしまった——ハリーは自分が蛇と話せることを知らないままだ。

「ハリー、ハリー、落ち着いて聞いて。そしてどうか信じて」

「わかった。信じるよ」

あまりにもあっさりとうなずかれて、続ける言葉も忘れて惚けてしまった。

「……………僕、まだなにも言っていないよ? これから信じられないことを言うんだよ?」

「うん。『実はお前が闇の帝王だったんだ』って言われても僕は信じるよ。マリアは嘘をつかないもの。……………ううん、つくけど、それは僕を

傷付けるためのものじゃない。意味のある嘘だ。だから、僕は嘘ごと、マリアの言葉を信じるよ」

「――」

ハリーのどこまでも澄んだ瞳に、僕は声を喉の奥底へと置いてきてしまっていた。

無条件の――無防備な信頼がこんなにも心地いいなんて。……くすぐったいや。

「マリア、こわがらないでいいよ。話して」

僕がしたように、今度はハリーに手を包まれる。

ああ――マリアにハリーがいて、ほんとうによかった。

「ハリー、君は――蛇と話せる」
「うん」

「それは魔法使いでも滅多にある能力じゃない。今までに確認されているのは、サラザール・スリザリン、その子孫、そして――ヴォルデモート」

「ヴォルデモート……」

「蛇と話せるとわかったら、まず、サラザール・スリザリンの子孫と思われる。……もしも君が――蛇語を話せる人をパーセルタングというのだけど――パーセルタングだとみんなが知ったなら、君は一番にスリザリンの継承者だと疑われていたよ」

「……そう、だね」

「ハリー」

瞳を伏せてうつむいてしまった弟を抱きしめる。……こんな気持ちだったのだろうか。彼も。

「今、たくさん考えてるよね。どうして自分がパーセルタングなのか、

スリザリンと関係があるのか、……ヴォルデモートと自分はなんなのか。いっぱいいっぱいになってしまっうね。……ゆっくりでいいんだ。ゆっくり理解しよう。焦らなくていい、全部受け止めようとしなくていい。君は君のままでもいいんだ。——もしも、もしもすべてが嫌になっってしまったなら」

トン、トン——背を一定のリズムで叩く。

「その時は、僕がなんとかしてあげる。……禁術でも使ってね」

大好きなハリー。たったひとりのハリー。僕の唯一無二の兄弟。君のためなら——僕は僕を捨てられる。

「……あ、はは。やっぱり、マリアって過激だ」

くすん、と鼻を鳴らしたハリーは、そして晴れ晴れと笑った。

「ハリー、秘密の部屋を開くには君の『言葉』が必要だ。——力を貸してくれる?」

「——もちろん!」

透明マントをかぶり廊下を駆ける。まずは腰抜けの捕獲からだ。

「――よろしいでしょうか、ロックハート先生」

ガタン、ゴソゴソ。と、物を雑に移動させる音がもれる扉にノックをすれば、息を止めたかのような沈黙に迎えられた。

「よろしいでしょうか、ロックハート先生。マリア・ポッターです」

「……あ、ああ、ポッターさん。なにかな、私は少々、忙しくしているね」

「マクゴナガル先生より、預かり物を届けにまいりました」

隣のハリーから胡乱な視線をいただいでしまった。ちゃんと意味のあるウソだから許してよ。

「そ、そうですか……それはけっこう」

扉が顔を出せる程度に開き、ひきつった顔の似非ハンサムが姿を表した瞬間、僕はそれにグーを叩き付けていた。そのまま拳を振り下ろして杖腕へと当てる。ロックハートの手からこぼれ落ちた杖を宙で受け取って、本人へと突きつける。

「ステューピファイ！」

「あひゃんツ！」

なんかちよつと艶かしい悲鳴を残してロックハートは気絶した。ハリー時代から含めて、一番まともに入った気がする。

「ウワア……」

「ブラキアビンド……いや、わかりやすくインカーセラスかな」

ハリーの引いた顔なんて見えてない、見えてない。

室内へと入り、案の定まとめられようとしていたトランクを蹴りつ
けながら、羽根が邪魔なだけのロックハートいわくサイン用ペンを
取ってメモを残す。

「えー……この男は詐欺師で……忘却術で……また、逃走をはかり
……真実薬使用推奨、と」

「ようしやないね……マリア」

「犯罪者だもの」

元闇祓いとしては、ね？

簀巻きにされ目を回しているロックハートの顔にメモをバツチン
と貼り付ける。

「よし、ロックハートの処理は終わり。さ、マートルのトイレに行く
よ。ハリー」

「……ハアイ」

トイレはひどく水浸しだった。またマートルが痙攣を起こしてい
るのだろう。透明マントを一番目のトイレの便座に置いて、マートル
へと声をかける。

「マートル、顔を出してくれない？ 君が死んだときの話が聞きたい
んだ」

「あら、あんた——ウウ、いいわよ。あたしはね、ここで死んだの」

生き生きとした——死んでるけど——マートルが死に際の様子を語りながら、バジリスクの目が見えた付近を指す。例の蛇口だ。

「ハリー、開けっけって言うてみて。蛇語で言うんだ」

「蛇語……」

「蛇口を蛇と思い込んで」

ハリーが呟く。「開け」——人間の言葉だ。

「もう一度。この辺り、蛇の彫り物があるだろう？　そこを見て言ってみればいい」

「うん……」

——『開け』

ハリーには人の言葉に——そしてマリアにはシューと喉から息だけを吐き出すような音に聞こえた。

ただの人間からはこんな風に聞こえるのか……そりゃ、気味悪くも思うだろうな。

蛇口が回り始め、手洗い台が沈んだ。大きな洞穴がそこに現れていた。何度見ても不気味だ。

「……ねえ、マリア」

穴に足をかけていた僕を、ハリーのひっそりした声が止めた。

「ドラコに、言っていかなくてよかったのかい？　ほら、いつも一緒だから……きつと心配すると思うんだ」

「ああ、それなら——メモを残しておいたから」

通信紙にだけど。

いつドラコが見てくれるかはわからないけれど、気付き次第追いかけてきてくれるだろう。穴は一応、一定の間は開いたままになるはずだ。

思えば、リドルの日記で大騒動が起きてるっていうのに、恩恵ばかりを受けている通信紙のモデルがその日記だなんて、痛烈な皮肉だ。ハリーが犯人でなかった今、さらわれた生徒が日記も使わずどうやって部屋を開けたのかもわからない——し——

「……マリア？」

パチリと。急速に線が繋がっていく。

日記を使わずに扉を開くなんて可能か？ 無理だ。無理なんだ。日記は確実に使用された。

では日記はどこに誰に渡った？ ——
どこの誰にも渡っちゃいない。

日記はどこにも移動していない。ずっとずっと——
そこにあつたんだ！

「……ああ……」

そうだ。確認してたじゃないか。何度も何度も——僕と『彼』は確認したじゃないか！

前回、ジニーが予兆を見せたのは風邪が流行した時だ。ジニーの体調の悪さは別にあつて——今回もジニーは調子を崩していて——
——そして、『彼』も崩した。

その前から顔色はどうなっていた？ 去年再会した時、彼は健康そうに見えた。けれど、今年は？ 吸血鬼に見えた頃の蒼白さに戻っていた。

この時、僕はもっと疑問を覚えるべきだった。下がっていく体温に気付くべきだったんだ——！

「……ハリー、行こう」

「マリア……？」

穴を滑り落ちる。頭がガンガンと警鐘を鳴らしていた。ハリーがルーモスで光を灯し、全身どろどろのままトンネルを歩く。蛇の脱け殻を抜け、二匹の蛇の彫刻が絡み合った壁へとたどり着く。

ハリーが囁く。「『開け』」

「マリア……ねえ、君、ひどい顔色だ」

「ハリー、立ち止まれないんだ」

足を進める。喉がひきつる。

僕は何度も、自分の口で言っていた。——本人には、自覚がない。だって、そうだ。——その人は操られているのだから。

自覚がない。——書き込んだ、自覚すらないんだ。

柱の間を進む。指先が冷えていた。感覚がない。ハリーがそつと握ってくれる。

日記はどこにもいっていない。

日記には嚴重な封印がされていた。とても他人に解ける代物ではなかった。

巨大な石像の下に子供が死んだように眠っている。

なら——本人しか、いないじゃないか。

彼は、日記を抱いて眠っていた。

「——ドラコ」

「ドラコ!!」

ハリーが眠る彼の元へと駆け出す。拍子に、こぼれ落ちていった杖を代わりに拾った。

「ハリー、杖はなくしちゃダメだ。君は魔法使いだろう?」

「あ、ご、ごめん、マリア。ねえ、ドラコが……僕たちだけで運べるかな。誰かを呼んだ方が……? でも、その間にもしもバジリスクが来たら……」

「——バジリスクは来ないよ。呼ばれない限りね」

ひんやりとした声だった。そのくせ、声は言葉の裏で笑っていた。

遠くに立つ、輪郭がかげろうのように揺らめいて見える美しい少年。黒い髪に黒い瞳、こんな状況でさえなければ、なんてハンサムな人だろうと感嘆の一つでもこぼしていたかもしれない。

ゴーストともちがう、ポルターガイスト^{ポルター}ともちがう、実態のない悪意。——ひどく、なつかしい人。

「……君は?」

「トム・リドル」

ハリーの問いに答えた僕に、リドルはうつそりと笑った。

「やっぱり、僕を知っていたか。僕は君のことを警戒していた。マリア・ポッター? ここへの招待状はハリーにしか渡していないはずだけど」

「ハリーに関わりのあつた人間ばかりを襲うのが、招待の証?」

「……ずいぶん、頭が回るね。そんなところまで、その彼とお似合いとは」

彼——とドラコをせせら笑ったリドルに、拳を握りしめる。

「マリア……トム・リドルって……T・M・リドル——？ 特別功労賞を取った——？」

「おや、ハリー。君は僕のトロフィーを見てくれたのか。感心だ」

好青年の皮をかぶって微笑んだリドルに、ハリーが安堵の息をついたのがわかった。

相変わらず人の心の隙間に入り込むのが上手い。特に、ハリーとは一蓮托生であるがゆえに。

時間を——時間を稼がなくちゃ——

「僕を警戒していたから、十二月からバジリスクをけしかけるのをやめたのかい？」

「ああ、そうだよ。一目でわかった。——君は厄介だ」

「……あの日の『確認』にはなんの意味があった」

「うん？ ……ああ！ あれか。だって君、パジャマで彼のベッドの上になんているんだもの。そういうことかなって。……そこまでの関係には至ってなかったようだけど」

「——そして、僕がドラコの中の君に気付いてるかどうかも確認した」
「……………ほんとうに、無駄に回る頭だ」

ほんの少し余裕が崩れたのにたたみかける。

「聞かせてくれる？ ——いつから、ドラコに巢食っていたの」

リドルは加虐的に残酷に笑った。心の底から、人の絶望を、怒りを愉しむ顔だ。

「いつから——いつからだったかなあ？ ととてもとても、昔から——彼がルシウスから日記を渡された日からだ。彼は七歳だとか、そのくらいだったんじゃないか？」

「——」

そんなに、前から——？

「彼はすごいよ。僕をもつてして、油断ならないと思わせた。わかるかい？ 彼つてば……七歳そこらでこの僕と化かし合いの駆け引きをしようとしたんだ。僕から何かの情報を得ようとしていた。決して心を開かなかつた——だから、こんなにも時間をかけることになってしまった」

「……七歳から、ずっと、やり取りを？」

「ああいや、それはちがう。七歳で開かれ、数回やり取りをした後に彼は僕を封じた。退屈だったさ。もう永遠に日記を開くことはないだろうと思った。——けれど、封は再び解かれた。去年のクリスマスにね」

「——！」

……ティアラだ。ティアラを入れるために、封印を解いたのがきっかけになってしまったんだ——！

「日記^{ぼく}って、魅力的だろう？ 見れば触れなくなる。開きたくなる。だって、こんなにも秘密が詰まっているんだもの！ 人は僕を読み解きたくてたまらない！ 七歳の頃に仕込んだ僕の欠片がうずいたのがわかったよ。その上、彼つてば『僕』を持ち帰ってきた！ ——だろう？ あのティアラ、見付けたのは彼なんじゃないかい？」

「拳だけでなく、唇も噛みしめる。

ああ、ああ——こんな空回りが、あるものか。

「それから彼はハロウィンが近付くにつれ毎日封印を解いた。そこからは簡単さ。触れてしまえば、数年かけて馴染んだ僕の欠片が彼に日記を開かせる。残念ながら、心までは完全には開いてくれなかったからね、彼自身から情報を得ることはできなかつたけど——君たちは、とても有名だった。彼の体で歩けばそれだけで君たちの噂が得られた」

そこで、リドルはハリーを見た。ハリーは静観する中、その視線を確かな目で受け止めた。

「ハリー・ポッター、僕は君に会いたかつた」

「……なぜ？」

ドラコへ添えていた手を放して、ハリーが立ち上がる。

「聞きたかつたんだ——ちっぽけで何の力もない君が、どうやって『未来の僕』を打ち砕いたのか！」

文字が浮かぶ。

T O M M A R V O L O R I D D L E — I A M L O
R D V O L D E M O R T

リドルの目が真紅に変わった。

「ハリー……僕と君はよく似ている。境遇、才能——なんだかほら、容姿まで」

リドルとハリーの問答が続く。トム・リドルの過去、ハグリッドの冤罪、そして——ヴォルデモートの呪いを破ったのは母の愛であること。

それを固唾を飲んで見守りながらも、僕は気が気じゃなかつた。

まだか——まだなのか——フォークス！

「——ダンブルドアは、君の思っているほど遠くには行っていないぞ！」

ハリーの辛々の叫びに応えたのは——歌声だった。

美しい鳥だ。炎のように赤くて、金色の嘴と澄み渡るような黒い瞳の鳥だった。

トム・リドルが——ヴォルデモートが焦がれた不死の象徴。

フォークスはハリーの肩に留まると、ボロボロの古帽子を足元へと落とした。そして静かな瞳で僕を見た。

——うん。それで正しいよ。僕には——忠誠の剣は抜けないだろうから。

「組分け帽子……」

ハリーの呆然とした眩きに、リドルの理性的で狂気的な笑い声が部屋中にこだました。弾かれたように彼は笑っていた。

「ダンブルドアが送ってきたのはそんなものか！ ああ——さぞ心強いだろうな、ハリー・ポッター？ さあ、その武器でお手合わせ願おうじゃないか」

彼の口からシュルシュルとおぞましい音が吐き出される。きつとハリーには明確な言葉として届いているだろう。

石像の口が大きく開いていく。ずるりと、巨体が這い出る。

千年を生きた蛇。孤独に眠り続けた蛇。取り残されてしまった可哀な蛇の王——バジリスクのおでまじだ。

ハッと顔を上げかけたハリーの前にフォークスが羽を広げ、皆の注目がバジリスクへ向かっている間にドラコのローブを開く。

僕は知っている——彼はいつだって、ここに杖をしまっていることを。

「もう一度、『僕』と闘ってくれるかい？」

——君の力で、ヴォルデモートに立ち向かわせてくれ。サンザシの杖よ。

「ハリー！ 目を見ずに下がるんだ！ 距離を取れ！」

「でも、ドラコが……！」

「——モビリコーパス！」

ハリーの腕を取って後退しながらドラコを浮かせる。ドラコの体を壁の凹凸の隙間へ滑り込ませる。不幸中の幸いだが、今のドラコは死人同然だ。体温を知覚して獲物を狩る蛇に悟られる心配はないだろう。

「おや、君は杖が使えないんじゃないかな」

「……自分の杖はね」

フォークスが再びハリーの手へと組分け帽子を差し出す。

「受け取って、ハリー」

「使い方がわからない」

「大丈夫。君ならできるよ。ダンブルドアが、君にならって託したんだ。——蛇を任せる。フォークス、お願い！」

フォークスが大きく鳴いてバジリスクの頭上へ旋回したのを見届けてから、高みの見物とばかりに佇立するリドルの前へと立つ。

「ご指名のハリー・ポッターは見ての通り忙しくしていてね、差し支えなければ僕がお相手させてもらっても？ ついこの間、決闘を習ったばかりなんだ。習ってすぐのものって、試してみたくなるでしょう

？」

「決闘！ これはこれは……僕は杖を持っていないのに？ フェアじゃないんじゃないかい？」

「ハンデってことにしてよ。僕、二年生だよ？」

「なるほど、ハンデか。寮違いの後輩がこんなにも勉強熱心で、先輩として実に誇らしいよ。これでも教師を目指していたこともあってね。……よろしい。君が今、誰を前にしているのか——跪かせてわからせてやろうじゃないか」

ギラギラ光る血の色をした瞳に、なつかしく苦々しい死の緊張を思い出す。

深々と礼をする。杖を剣のようにしてかまえる。彼は後ろ手に手を組んだまま微笑んでいる。

一——二——三——

「クルーシオ！」

「インペディメンター！」

躊躇いなく飛んできた拷問の呪文を避けながら弾く。たったそれだけで体が重くなる。走り出す。急速な疲労感に襲われる。

力も杖のコントロールも十分だというのに——体が追い付かない。

「インセンディオ！」

「アグアメンティ」

「デューロ——レダクト！」

炎を掻き消した津波のごとき水の怪物を固めて砕く。駄目だ、遅い。目眩が襲う。頭は次の呪文へ回っているのに体から引き出される魔力量がまったく追い付いていない。

連続で魔法をくり出すのは無理だ。体が持たない。

「……ッ、あ！」

軽々と飛び越えたつもりの瓦礫に躓いて転がる。その上を閃光が抜けていく。ローブやズボンが擦りきれていく。

ああ——頭の中の展開予想と身体能力が噛み合っていない！

「ずいぶん不様じゃないか！『体術には覚えがある』んじゃあなかったかい!? マリアア？」

「うるっさいなあ……ッ！ フリペンド！」

憎たらしいことに、リドルはその場から一歩たりとも動いていなかった。駆け回るのは僕ばかりだ。向こうは杖なしだっていうのに——能力の差が圧倒的すぎる。

「コンフ、リングゴ……！ ツディセンド！」

頭がクラクラする。既に魔力の底が見えていた。もはや絞り出しているに近かった。

柱を砕いてリドルの上へ落とすも、割って回避された破片が飛ぶのを避ける力すらない。

もう少し——もう少しだけ——耐えてくれ、サンザシの杖！

「——マリアア！」

「なんだ、まだ生きて——ッ!？」

ようやく、ここにきてリドルの嘲笑が剥がれ落ちた。反対に、僕は緩む口角を抑えることができなかった。

さすがだ——ハリー。

ハリーの持つグリフィンドールの剣が、バジリスクの首を深々と刺していた。

「……時間稼ぎか」

「思いの外……夢中になってくれて助かったよ。リドル」

ハリーがそのまま、誰に教えられるでもなくフォークスが運んできた日記へと剣を突き立てる。バジリスクの毒を含んだ剣は、間違いなくリドルを殺した。

リドルは、前回とは違って日記からドクドクと血のインクを吐き出しながら笑っていた。——僕を見て嗤った。

「マリア、最後に教えてあげよう。本当に大切なら——人質から意識を離すべきではない」

「——」

リドルの口からシューと音が囁かれたと同時に僕は駆け出した。ハリーは気付いていない。

バジリスクは盲目のまま——最期の命を使って牙を喰らせた。

「——プロテゴ」

ぐちゃり。

「……………マリア？」

手からイトスギの杖が落ちる。もう魔力はなかった。きっと——プロテゴは僕の命から引き出された。

やっと君が理解できたよ。——僕の杖。

「バジ……リスク……」

なんとなく、腹が熱いような、冷たいような、不思議な感覚だった。すぐそこにある、目を喪ったバジリスクを指先で撫でる。

きつと君の目を見られたのは僕らがはじめてだ。——なんだか、それってちよつと、サラザールに申し訳ないな。

「サラザールは、もういないんだ。……おやすみ、バジリスク」

たった一人の友を待ち続けたさびしい蛇は、ようやく、瞳を閉じることができた。

バジリスクが倒れたと同時にドラコへかけたプロテゴは割れ、バジリスクの牙が腹から抜けた僕は、あいだに挟まれ宙吊りだった状態から地面へ崩れ落ちた。どちゃつと、果物が潰れるような音がした。

「——ツマリア!! マリア——マリアあ!」

ハリーの叫ぶ声が聞こえる。そんなに大声を出したら喉が切れてしまうじゃないか。かすんだ視界に炎がちらつく。フォークスかな。泣いてくれるのか。傷はふさがっても、毒は消え失せても、たぶんこれ、血が足りない。出血多量つてやつだ。ハリー、泣いてるな。ごめん、こわがらせた。こわいよね、僕もとってもこわかった。

やっぱり、泣かれるのは苦手だ。

君ってば、案外僕より泣き虫なんだもの。そのくせ、死にかけの僕を見つけるのって、いつも君だ。

君って時々、ものすごく運がない。

僕よりよっぽど死にそうな顔してるくせに、僕よりずっと泣くんだもの。目がとつても熱いんだ。

いつもは冷たい色をしてるくせに。こんな時は氷が溶けるみたい。

ああ、やっぱり——君に泣かれるのは苦手だ。

「ハリー、君、死ぬのか」

マリア・ポッターと秘密の部屋【完】

目覚めた時、僕が一番に思ったのは——生きている、だった。

よく知る体温に手を繋がれて、その本人は僕が寝かされているベッドにうつ伏せに頭をおいて眠っているようだが、たったそれだけで生きている実感が湧いてくる。

くしやくしやの黒髪がごわついている気がして、安堵と共に頭を撫でようと腕を上げて——全身へ走った激痛に体を跳ねさせた。さらに痛む。特に腹が。悪循環だ。

「——マリア？」

パツと跳ね起きたのは片割れも同じだった。痛みに声も出せない僕に大慌てでマダム・ポンフリーを呼んで、そのマダム・ポンフリーが見るからにイイ味のしそうな薬片手にやってくるのを、僕は処刑台の上の気分で待つしかなかった。

おそらく鎮痛薬なんだろうけど……わかつてはいるんだけど……これがすでに拷問だ。

どうにか飲みほし（飲みほすまでマダムは絶対にその場から動かなかった。）背を起こして、また泣いてしまいそうな彼へ腕を広げる。

「ハリー」

「マリア」

「——おいで」

ハリーの手はおそろおそろだった。とても怯えていた。なので、こちらから精一杯力を込めて抱きしめることにした。

「マリア……マリア……」

「うん。君のマリアだよ。心配かけたね、ハリー」

「僕——こんなに、こんなに——こわいと思ったこと、ない。君——真つ赤で——ち、血だらけで——腹に穴があいていて——池みたいになつて」

「うん」

「生きてるように、見えなかった」

「でも、生きてるよ。ゴーストはこんなにあたたかくないでしょう?」

「うん——うん——!」

震えている小さな体を受け止めて背を撫でる。腕が上がりにくいだとか体がだるいだとか、そんなことよりもハリーの心がボロボロであることの方がたえられなかった。

死ぬ気なんてなかった——けれど、死にかけてしまったのも事実だ。

「ごめん。ごめんね、ハリー」

「もう無茶しないで。僕をひとりにならないで。僕たち、一人ずつしかないんだから」

「……うん」

ほんとうにごめんなさい。——今後も、その約束は守れないだろう。

君はきつと、この嘘は許さないだろうな。

「ねえ、ハリー? 僕、どのくらい寝てた?」

「今日で八日目だよ」

「ワーオ、寝坊新記録だ」

八日ぶりの飲食がああの飲み物と称しがたいゲロみみたいな薬だったとは。

抱きしめたまま、僕が昏睡していた間の八日間のことをハリーから聞く。

日記を剣で破つてすぐ、ドラコは目覚めたこと。僕の体を運んだのはドラコの魔法であること。ダンブルドアとハグリッドは無事に帰ってきて、ダンブルドアへの説明はすべてハリーが担ってくれたこと。(リドルと僕の会話を聞いていただけなのに理解できるなんて、やっぱりうちの弟はすごい。)パーセルマウスはヴォルデモートの力のものであること。特別功労賞が僕らに授与されること。明日にはマンドレイク薬も完成すること。

「マリアの傷は、残ってしまう——で。毒は残ってないけど……バジリスクの毒が広範囲に広がりがりすぎてしまつて。だから、肌が溶けたようになっていて——もう、呪いのようなものになつてるらしいんだ……」

「また呪いか。僕たち、呪いに縁があるね？ さすが魔法使いだ」
「笑い事じゃないよ！」

腹をさすりながら茶化せば、ぷんぷんと怒られた。

位置的に、ペチュニア伯母さんと不幸な衝突があつた火傷痕のところか。ということとは、バジリスクの毒に上書きされちゃったのか。……それは、ちよつと残念。

「みんな、お見舞いに来たがつてたよ。寮問わずだ！ マリア、人気者だね」

「ハリーには負けるけど？」

「僕は人気なんじゃなくて有名なんだよ」

それはちよつとあるかもしれない。

咄嗟にうなずいてしまつて、少しだけ気まづくなつた。

「……あの、ドラコなんだけど」

「うん」

「リドルが消えてすぐ、目覚めたつて言つたでしょう？ 血溜まりの

中にいるマリアのことを見て——すごく——その——つまりは——
「取り乱した？」

「……………」

ハリーは、それもなんだかちがう気がする、と曖昧に首を振った。
取り乱すなんてものじゃなかった。もっと——まるで——

「…………ごめん、やっぱり僕の口から言うことじゃないよ。ドラコにも、
マリアが目覚めたって伝えておくね」

「ん、頼んだ」

不確かなものは語らないことに決めたらしいハリーを撫でる。通
信紙も寮に置いてきちやつたし。

『僕』よりも無鉄砲さがないハリーは、『僕』よりもよっぽど懸命で信
頼できる存在だ。

「マリア、覚えていてね。——君は、とても大切な人だよ」

「……………」

ロンが夕食の時間にハリーを呼びにくるまで、ハリーはずっと僕の
手を握り続けた。生きていることを確認するように。

面会者の長居を禁ずるマダム・ポンフリーですら、ハリーを追い出
すことはできなかった。

翌日。僕が深く眠っている間に、石にされた生徒たちは無事に蘇生
したらしい。生徒でないもの、生きていなかったものも蘇生された。
(それは蘇生なのだろうか?)

同じ医務室にいたため、軽く囲まれながら礼を言われる。監督生の
ペネロピー・クリアウォーターからは寮点十五点をいただき、ジニー
からは大泣きされ、つられたハーマイオニーにも頬をつねられながら
泣かれ、ミセスノリスには手首を甘噛みされ、ほとんど首なしニツク
からは深々と頭を下げられた。傾いた首から断面図が見えて色々と

勘弁してほしかった。コリンはカメラに手をかけようとして、バジリスクに溶かされなくなつた事実にしよんぼりしていた。僕らとしては散々無許可撮影された写真のデータが永遠に失われたようであるよりだ。

「それじゃあ、改めて聞かせてもらおうじゃないか？ 抜け駆けツイズめ。双子つてのは二人いるから抜け目がないんだ」

「もうハリーが話したんじゃないの」

「君からも聞かなきゃ。それに、当事者のハーマイオニーが知らないなんて、そりゃないだろ？ 親友」

石にされていた生徒たちが医務室を出てすぐ、ハーマイオニーの見舞いにやって来ていたロンに押しきられて（押しきられたのはマダム・ポンフリーだ。）面会者管理のごとく僕の側に居続けるハリーと共にハーマイオニーへと顛末を語って聞かせた。ハーマイオニーは時折息をのんだり、瞳を潤ませたりしながら聞き入っていた。

「それじゃあ、サラザール・スリザリンの怪物は間違いなく倒されたのね？ ああ、あなたつて勇敢だわ、ハリー。マリアはあの——『あの人』の過去と一騎討ちするなんて！ 普段、ちつとも上手に杖を扱えていないのに。無謀だけど——生きようとしたあなたを尊敬するわ。ほんとうは、とつてもとつても怒りたいけど」

「マリア、今、君の思つてることを当てるやろうか。——ハーマイオニーの説教は長くて勘弁」

「ああら、お望みなら一日中だつてお説教してさしあげますとも。ロン・ウィーズリー」

余計な口をついたロンを肘で小突く。そんなやり取りすら、ずいぶんハーマイオニーを失っていたロンは喜びを隠せずにいるようだった。微笑ましくつけてけっこうなことだ。

「それにしても……こんなことがあるなんて、マーリンの髭だ」

「マーリン？ 大魔法使いマーリンがなんなの？」

「え、君たち言わないの？ 驚いた時にマーリンの髭！ とか、マーリンのパンツ！ とか」

「マーリンのパンツがどうかしたの？」

マグル育ち二人には伝わらない慣用句をあたふたと説明しているロンに笑っていれば、ふと、茶目っ気あふれるブルーの瞳がキラキラと僕たちを見ていることに気が付いた。

「ダンブルドア先生」

戯れる孫を覗くように微笑んでいたダンブルドアは、ぎよつと振り返る子供たちを眺めて髭を撫でた。

「わしとしては、ダンブルドアの髭！ も中々にイカすと思うんじやがのう。おお、ダンブルドアの鼻！ なんかもどうじや？ この見事に折られた鼻が活躍する時じや」

相変わらずな人だ。まったく、いつからそこにいたのか。

「ご用件はなんでしょうか、ダンブルドア先生？」

「マリアはジジイの冗談に笑ってくれん……さびしいのう」
「先生」

よいよいと泣き真似をしてから、穏やかな瞳がゆるりと子供たちの顔を見回す。

「マリア、君に客人がお見えじや。席を外してくれるかのう？
ウィーズリー君、グレンジャー嬢——ハリー」

三人は一様に目を丸くしていた。
ハリーまでだなんて。ハリーはずっとマリアに付きつきりだったのに。

「僕、ここにいちやダメですか？」

「ハリー」

星みたいにキラキラしているのに、どこか物静かな瞳が聞き分けろと訴える。

「ハリー、大丈夫だよ。そろそろ固形物が食べたいから、サンドウィッチとか持ってきてくれると嬉しいんだけど」

「マリア、でも」

「ダンブルドアの目の前で悪さできるやつなんて、この魔法界に存在するかい？」

「……いないかも」

拗ねたようなハリーを手招きして、額にキスを落とす。

大丈夫、大丈夫だよ。目を離れた隙に死んだりしないから。……
やっぱり、トラウマになっちゃったかな。わかりやすく過保護だ。

「わかった。なら、これ、渡しておくね」

そう、ハリーが僕へ握らせたのは、四つ折りされた羊皮紙だった。
——通信紙だ。

「……ハリー？」

「僕、ちゃんとマリアのこと見てるんだからね」

してやったり。ニンマリ笑う顔は——『僕』にそっくりだった。

三人組が仲良く退室するのをダンブルドアと共に見届けて、微笑み

を絶やさぬその人を見上げる。

「先生、お願いします」

「うむ、あまり拘束してはマダム・ポンフリーに恨まれてしまうからの。では紹介しよう。——ルシウス・マルフォイ氏だ。君たちが救ったドラコ君のことで、礼が言いたいそうじゃ」

医務室の扉が再び開いて、シルバーブロンドの凍った美しさを持つ男が入室した。

ドラコによく似ている。——あの、敵を見る時の心を切り捨てた眼差しなんて、特に。そして選択を迫られている時の、ほのかな揺らぎ方も。ドラコが彼に似たのだ。

「はじめまして、ミスターマルフォイ」

「……はじめまして、ミスポッター」

ルシウスはぶつきらぼうに返すと、先程までハリーが座っていた椅子へと腰かけた。医務室がなんて似合わない人だろう。

「では、わしはこれで失礼するでしょう」

「え——先生、ここにいてはくださらないんですか？」

「ルシウスは君と内緒話がしたいようだな」

パチンツ。星々の目からウインクが飛んだ。

ダンブルドアの姿が扉の向こうへと消えて、仲介役を失った僕ら二人の間に気まずい空気が流れる。

「——まず、礼を言おう。息子を救ってくれたこと、心から感謝している」

不遜にルシウスが切り出した。本当に昔のドラコ——マルフォイ

と呼んで喧嘩ばかりしていた頃のドラコにそっくりで、感動すらしてしまいそうになる。なんて似た者親子なんだ。

「かまいません。元々、こんな巻き込み方をするつもりじゃなかった——今回、誰が裏にいたのか、ご存知ですか」
「……………」

ルシウスが沈黙する。薄っぺらそうな瞳に少しの動揺が見える。
——やっぱり、これが本題か。

「なぜ、あなたは死喰い人になったのです」

長い髪が踊るほど勢いをつけて、ルシウスは顔を上げた。

「なぜ……………」

「——家族を、守るためでしょう」

ルシウスのもつともな疑問には答えず続ける。

「後ろ指を指されようとも、面従腹背とそしられようとも、スリザリンらしい狡猾さであなたは選んだ。——もつとも家族を守れる方を。常に優勢の影を」

誹謗中傷は当たり前だっただろう。それこそ、仲間内からも。いつだって引き返せる場所に居続けた彼は、卑怯ものの臆病者に見えただちがいない。——こんなにも、勇敢で愛情深い人なのに。

「しかし、現実はどうです。あなたの息子は危機にさらされた——殺されかけた。死を突き付けられた。あなたの主によって」

あなたの判断が、あなたの失敗が——あの日のマルフォイを追い詰

めたんだ。

「あなたの主は——ヴォルデモートはあなたの家族を、守ってはくれませんよ。あなたの守りたいものを、慈しんではくれません。彼は愛を知らない」

ルシウスの手を取る。長袖の上品な服の下にある、証へと手を置く。

「これは、あなたの守りたいものを捨ててまで刻む価値のあるものですか。——あなたが本当に守りたいのは、誰ですか」

ルシウスは答えなかった。

彼だってまた——ただひとつの為に悩んで、悔やんで、苦悩して、間違えたりしてもがいている、普通の人間だ。父であり夫であるだけなんだ。

「あなたが本当に守りたいもののために、闘ってください」

ルシウスは一つたりとも答えてはくれなかったけど——グレーの瞳の揺らぎは、なくなっていた。

ねえ、ドビー。ベッドの上で呟いてみれば、パチンツという音と共にしもべ妖精の友が現れた。

「マリア・ポッター！　生きています！　マリア・ポッターは勝った！　『名前を呼んではいけないあの人』にマリア・ポッターは勝った！」

キーキー声で涙しながら小躍りするドビーに、落ち着いて、と肩を叩く。そして、マルフォイ邸にルシウスと共に帰らなくていいのか尋ねてみる。

「マリア・ポッター……ドビーは自由な妖精です。もうドビーは縛られないのです。ハリー・ポッターが解放してくださった！　ハリー・ポッターの靴下はドビーの宝物になりました」

「どうやら、今回も同じ手段をもってドビーの解雇に至れたらしい。……やっぱり泥だらけのソックスが宝物ってどうかと思うよ。」

「それなら、ドビー——もう、話せるかい？」

ドビーにかけて、と言えば、ドビーはあの日のように感動に震えたりはせずベッドへ腰かけてくれた。

「ドビー、君は、なにを知っていたの？」

「ドビーは、ドラコ坊ちやまの持つ日記がよくないものだと思っていました。日記はともおそろしかった……しかし坊ちやまは手放さなかった。そして今年の夏に、『名前を呼んではいけないあの人』がご主人様と——いいえ、いいえ！　もうご主人様ではないのです！——お屋敷でお話をされた……」

『名前を呼んではいけないあの人は尋ねた。日記はまだ息子が持っているのかと。ご主人様——いいえ、ルシウス！ ルシウスはもちろんと答えた。その時、ドビーは見てしまったのです。ドビーは給仕をしていましたから、見えてしまったのです。——『名前を呼んではいけないあの人は笑った！ おそろしく！ 残忍に！ そしてこう言った！ 同時に始末できそうだ——と。ドビーにだけ聞こえていた……』」

ドビーはベッドの上で立ち上がり憤慨した。蝙蝠の羽のような耳がパタパタと振られた。

『名前を呼んではいけないあの人の敵はハリー・ポッター！ 我々の希望、ハリー・ポッター！ ドビーはこのままではいけないと思いました。ドラコ坊ちやまがホグワーツに戻れば、恐ろしいことが起る……』

「ドビー」

僕はそつと呟いた。

「君は——ドラコのごときは、どうでもよかつたんだね」

「？ いいえ、どうしてもよくなつてありません。ドラコ坊ちやまがいてハリー・ポッターが危険。ですがドビーはマルフォイ家の屋敷しもべ妖精でしたから、ハリー・ポッターを止めるしかなかつたのです」

語り終えたドビーに、僕はなにも言えず沈黙した。

たとえばここで、ドビーを人でなしと罵つたつてどうしようもないのだ。だってドビーは人でなしだ。

ホグワーツ内への姿現しを無効にする法が妖精には効かないように、人間の法は当てはまらない。

「ドビー……君たちって——残酷だね」

大好きな友達を抱きしめる。大好きな——人でない僕の友達。

ドビーは、魔女がドビーを抱きしめた！ と飛び上がると、そして不思議そうに目をまたたかせた。

「ドビーは人間以上に残酷な生き物を知りません」

ほんとうに、正直で残酷だ。

それから二日してようやく、マダム・ポンフリーから退院の許可を得た。マダム・ポンフリーは渋っていたが、これ以上勉強の遅れを取らせるわけにはいかないとマクゴナガル先生が説得してくれた。ハーマイオニーもまったく同意見で、その分彼女は普段の生活で十分に僕を気遣ってくれた。

もう腹の傷も引きつったりはしないんだけどな。心優しい彼女にいつだって僕は甘えてばかりだ。

待ち合わせへ向かう際、スネイプ先生とすれ違った。彼は、もはや僕の後ろ姿を見ることがすらなくなっていた。僕らの溝は、あまりに深くなっていた。

きつと、僕が怪我をするたび——僕が死を予感させる姿をさらすたび、あの人の心はこれからもどんどんと離れていくだろう。

僕という存在は、セブルス・スネイプに過去の傷を開かせる猛毒なのだ。

わかっているのに——無謀を止めない僕は、あなたの言うとおり、傲慢だ。

待ち合わせ場所に彼はすでに座っていた。ハリーから目立った怪我はないと聞いていたけれど、薄く見える背中はやっぱり心配にな

る。

「見舞いにもきてくれないなんて薄情じゃないか」

「医務室を破壊しない自信がなかったからな」

「ワーオ」

隣へと腰を下ろす。湖を眺める横顔はやっぱり蒼白かったけど、もう死人の色ではなかった。

「……もう、大丈夫なのか」

「三日前から大丈夫だったさ。マダム・ポンフリーが大げさなんだ」

「大げさにもなる。君——ほんとうにひどかった」

声はかすれていた。あと少しで、彼は泣き出してしまっただけじゃないかと思った。

君に泣かれるのは苦手なんだ。——だから。

「ドラコ、喧嘩しよう。冗談とかじゃれ合いじゃない、真っ向からの勝負だ。あ、魔法や殴り合いはなしで。さすがに今は僕が負ける未来しか見えない。それはフェアじゃないだろ？」

「……………君、秘密の部屋に脳みそでも置いてきたのか」

「へえ？ 言えるじゃないか。ああ、そういえば狡猾で目的のためなら手段を選ばないスリザリンはフェアプレーは大の苦手なんだっけ？ 情けないなあ？ スリザリンのマルフォイ？」

ドラコが立ち上がる。ほんと、プライドだけは高いお坊っちゃんは挑発に弱い。

「言ってくれるな、ポッター。守るだの助けるだの救うだの——口ばかりが達者でまともに実力も追い付いてない無謀のグリフィンドールが」

「その無謀に救われたのは誰だよ。日記に書き込みなんかしやがって。自分なら大丈夫だと思った？　かしこいドラコお坊っちゃんはヴォルデモートの記憶くらいなら掌握できるって？　思い上がりもはなはだしい」

「ああ、ああ、そうだよ！　どうにかできると思った！　僕がどうにかしなくちゃ——君に会うまでに少しでも手柄を立てていなくてはならないと思ったんだ！　君に記憶があるかどうかもわからない、いざとなれば一人で立ち向かうしかない——予防を張るのがそんなに悪いか?！」

「悪いね、最悪だ！　マルフォイがこんなにバカだなんて知らなかったよ。君、弱いくせになに一人で抗おうとしてるんだ。闇に惹かれてしまうくせに——ヴォルデモートがこわいくせに!」

「もう克服できたと思った！　いやちがう、しなくちゃならないんだ。君の隣に立つのに——いつまでもこんなもの抱えていられない!」

「それが思い上がりだって言ってるんだ!!」

とうとう喧嘩は掴み合いへと発展した。胸ぐらを引き合って、額をぶつけて睨み合う。

ほら、また、熱い。

「僕だって——ずっと怖いのに!」

「——は?」

「僕だって怖いさ！　何度も何度も死にかけて、あいつの記憶に触れて、あいつとの共通点ばかり見せられて——強烈に誰かを憎んで、殺してやりたいほど憎んで、そんなときにいつもあいつがチラつく!」

同じなんだって言われてるみたいで——僕だって、闇に惹かれてた」
「お前が……?」

「そうだよ。お前たちの英雄さまは、一歩間違えれば第二のヴォルデモートだったさ。ダンブルドアにだってそれを疑われた。僕たちは——双子みたいだった」

「……………」

「君なんかが、一人で勝てるわけないだろ。弱虫の意気地無しのマルフォイのくせに。僕らの情報なんかさつきと渡してしまえばよかったんだ。死にかけるくらいなら、逃げればよかったんだ。あの時だつて——わかつてたくせに『ハリー・ポッター』かわからないなんて言つて、あんなに怯えていたくせにあいつに嘘なんてついて。親子揃つて、君たちはバカだ……………」

「…………父上を侮辱するな」

「母親もだよ」

目の前の肩へ顔を押し付ける。

いやだ、泣きたくない。僕が泣いたら——君が泣けなくなる。

「僕たちは弱いんだよ。…………ひとりで、めちやくちやするなよ」

「…………無謀を騎士道だとか履き違えて美徳化するグリフィンボールにそんなことを言われるなんて」

「確証がないと絶対に動かない伶俐狡猾のスリザリンがこんなことをするなんて」

皮肉にやわらかさが戻る。背に彼の腕が回っていた。

「君の向こう見ずなところがきらいだ」

「うん」

「君はできないとわかっているのにやるんだ。できると思つて失敗するならいい、それはただの馬鹿だ。でも、君は——ハリー・ポッターは、いつだってできなくてもやるんだ。できないと思つているのに、やらされるんだ。そして——できてしまうんだ。そんなの、おかしいだろ」

「そうかな」

「そうだよ。君のそういう、英雄性がきらいだ。——英雄は、遠すぎる」

首に彼の髪が当たった気がして、ゆっくりと座り込む。顔を上げて、彼の頭をかき抱く。

「遠くないよ。ここにいるだろ。——ちゃんと、ここにいる」

痛いくらいに腕は僕の体を締め上げていたけれど、それが心地よかった。

「泣くなよ」

「泣いてない」

「君に泣かれるの、僕、苦手なんだ」

「泣いてない」

「じゃあこれ、鼻水かい？」

「……………」

「イタイイタイ！ ごめんって、背中つねらないで」

ふはっと大きく肺から息が吐き出されて、なんだか久々に呼吸を思い出した気分だった。

「とりあえず、わからず屋のマルフォイに教えておいてあげる。君をうしなったら、僕、もう立てないからね。僕の命を握ってるのは君だぞ、ドラコ」

「そっくりそのまま返してやる。あんなとんでもない怪我しやがって」

「君なんて死体だったよ」

「目覚めた時のショック度がちがう」

「それは反論できないな」

クスクス笑って、僕の髪より軽い金髪を撫でる。いつもなら軽やかでいいな、なんて思うところだけど——今はひどく、儂い。

「……命を大切にしろ」

「うん」

「ハリーだって、ひどかったぞ」

「ハリーからは君が大変なことになってた、て聞いたけど?」

「ハリーの方がすごかった」

「愛されてるなあ」

「当たり前だ」

ベシツと背を叩かれて、それが談話室へ戻った時に手紙を持って待機していたヘドウィグの羽ビンタに似ていて、ますます大きく笑った。僕もおかえしとばかりに数回叩く。

「——うん、よし、喧嘩終わり! クリスマスから長かったね。学生時代の七年間よりはマシだけど」

「……結局、君、なにを怒ってたんだ?」

「あ、やっぱり記憶ない? ……ビンタとかしなくてよかった」

「は? ビンタ?」

ドラコを解放しながら、ふと思う。

あれって、マリアとしてはどっちのカウントなんだろう。体はドラコだから——ドラコ? いやあ、でも、意思になかったわけだしなあ。……やっぱりリドルか。

「マリアのファーストキスがヴォルデモートになっちゃった、ただけの話だよ。超濃厚なあね」

「……………はっ!」

「あーお腹すいた。ほら、立ってよドラコ。厨房でも覗きに行こう」
「待て。おい待て、説明しろ。——おい! マリア!」

また激動の一年が過ぎた。僕が寝込んでからハリーがすっかり過保護になったり、ロックハートの件で先生方が魔法省へ駆り出されたり、分霊箱の管理法について一悶着あったりと厄介事は絶えなかったが、おおむねそれからのホグワーツは平和だった。免除されることのないなかった期末試験に追われる生徒たちの阿鼻叫喚は長く響いていたけど。

コンパートメントの窓から、マグル社会という名の現実へ戻る景色を眺めながら、僕は肩に乗る重みに頬をほころばせていた。

寝顔はほんと、天使だ。

彼にとってはひどい一年だったかもしれない。それでも、僕は言うだろう。

「今年も、楽しかった」

「……そうか」

小さく返されて、この狸寝入りめ。と手の甲をつまむ。

どうか、来年も——最後には楽しいと笑える日々になりますように。

秘密の部屋【番外編】

ドラコのおもりの話【ノクターン横丁編】

ハリーはすっかり参っていた。ダイアゴン横丁を何度か歩いたことのあるハリーだ。すぐに間違えた^{まちが}と気付いた。

冷たい石の暖炉から立ち上がり、店らしいそこを見回す。マグルが想像する黒魔術道具がまさに！ といった様子で並んでいた。

邪悪な仮面、呪われた手、触れたものを殺すネックレス――

薄気味悪く思いつつも、ここを出なくちやと出入口へ目を向けたところで、ハリーは咄嗟に後ろにあつた黒いキャビネットへと隠れていた。ほとんど反射だった。

――血の冷たそうな男だ。

蒼白い肌、灰色の瞳、ハリーの知る彼よりも薄いブロンドの髪――ハリーはすぐに気付いた。……ドラコのパパだ。

「ドラコ、店のものには触れぬように」

「承知しております、父上」

思っていた彼もいた。なんだか嫌な予感がしてならなかった。

ドラコはこんな、闇の魔術になんて手を出すような人じゃない。マリアをあんなに優しい目で見る人が、非道なものか。

ドラコはここにいるべきじゃない――そう思うのに、不気味で恐ろしいなものに囲まれたドラコの姿は、どこかしっくりきていた。――似合っている、そう納得しそうになる自分をハリーは恥じた。

胡散臭い店主が奥から現れて、マルフォイ氏へと懸命にへつらう。会話から察するに、マルフォイ氏は家に置いては都合が悪いものをここへ売りに来たようだ。

その間、ドラコはいくつかの品を嫌そうな顔で見ている。なんだか、こう――もう二度と見たくなかった……そんな顔だ。

そのもつとも足るのが――なんとハリーの隠れるキャビネット

だったのだ。

ドラコが近付いてくる。キャビネットの全体を眺め、ちよつと裏側を覗いたりしている。そして――

「……………ハリー?」

「ハ、ハアイ、ドラコ」

あつさり見つかった。片手を挙げた間抜けなハリーの姿にドラコは呆然としていた。そしてなにかに気付いた風に、まさか…………と呟いた。

「…………君、どうしてそんなことになつてる?」

「あの、僕、ダイアゴン横丁に行くはずだったんだけど…………煙突飛行、はじめてで…………」

「失敗したか」

「たぶん…………」

はあ、と眉間を押さえたドラコは、そしてハリーを中から引き出した。

「僕がつれていこう」

「あ、ありがとう。でも、君、パパは?」

「…………ああ」

煤だらけのハリーの顔を袖で拭ってやりながら、ついでにヒビが入っている眼鏡に気付いたドラコは――着地に失敗した際に壊したのだ――それを取ってハリーと共に父の元へと向かった。

「父上」

「ドラコ、見ての通り私は商談中で――彼は?」

「ハリー・ポッターです」

「……………なぜ、彼はここにいるのかね？」

「煙突飛行に失敗したそうです。ポッター君の希望していた場所まで送って差し上げようかと思うのですが、席を外してもかまいませんか」

マルフォイ氏の顔は見るからに引きつっていた。親子揃って嫌そうな顔はわかりやすいな、とハリーはのんきに考えていた。

「アー……………そうしてやりたまえ」

「はい。それから父上、ポッター君の眼鏡が壊れてしまったようなので、よければ父上の魔法で直してやってはもらえませんか。僕は一応、未成年ですから」

「ド、ドラコ、そんな」

悪いよ、とハリーが遠慮する前に、眼鏡はマルフォイ氏の杖の一振りですぐ新品同然へと変わっていた。

「あ、ありがとうございます……………ミスターマルフォイ」

「……………いや。うちのドラコが世話になっているようだからね。これからも……………仲良く、してやってほしい」

ずいぶん歯切れの悪い様子だったが、気にせずハリーはニッコリと笑った。

「はい！ ドラコ、すっごくいい人ですから」

「……………」

「行くぞ、ハリー」

「あ、うん。失礼します、ミスター。眼鏡、直してくださいありがとうございます」

名状しがたい表情のマルフォイ氏を置いて店を後にする。――

ボージン・アンド・ボックス、というのが店の名前らしかった。

気味の悪い店だと思っていたが、周りも同じようなものばかりだ。通りそのものが薄気味悪い。

「二応、説明しておく。ここはノクターン横丁だ」

「ノクターン横丁……」

「少なくとも、君たちが来るような場所ではない」

スイスイと路地らしき道を曲がりくねってドラコが先を行く。手を繋いでもらっていないければ迷子間違いなしのわかりづらさだ。

「……ドラコは？」

「うん？」

「——ドラコは、あそこに行くようなことがあるの？」

ハリーの静かな問いに、足を止めることなく——そして振り返ることもなく、ドラコは答えた。

「——必要があれば、な」

サラザール・スリザリンについての話

ハーマイオニーが何かしらの本を読んでいるのはいつものことだが、ここ最近ではジャンルが統一されていた。——歴史書だ。

「サラザール・スリザリンの残した化物が潜む部屋。——やっぱり、本から得られる情報はこの程度ね」

疲れ目を押さえるハーマイオニーの後ろから、ロンがオーバーにリアクションする。

「まったく、このサラザール・スリザリンってやつは狂ってるよ。だから他の創立者から追い出されるんだ」

「——それは、ちがうと思うな」

ハッと、ハリーとロンとハーマイオニー——いつもの三人組の目がひとつに集まった。ソファへ寝転びぼんやりしている赤毛の美少女——マリアだ。

いつもならハーマイオニーが、はしたない！ と叱るところだが、彼らは彼女の雰囲気はどこがちがうことに気付いていた。特に、ハリーは。

「嫌われもので誰とも意見を交えない奴だったなら、寮としていつまでも名前を残したりしない。千年経った今でもスリザリン寮が一つの思想として尊ばれるのは、そこにサラザール・スリザリンへの敬意があるからだ。誰かに尊敬される人間が、君の言うクズなだけだったとは、僕には思えない」

齡十二の少年少女は、彼女の語る言葉がなんだかひどく難しいもののように思えて困惑した。三人——否、十二歳の同級生たちの中でもっともかしこいハーマイオニーはどうかマリアの言葉を噛み砕こうとしたが、残す少年二人はすっかりお手上げだった。

「でも、サラザール・スリザリンは純血主義で、だから他を追い出そうとして……」

「うん。そこからたぶん、『伝言ゲーム』になっちゃったんじゃないかな」

「伝言ゲーム？」

ロンが首をかしげる。

「人へ伝えていくごとに少しずつ間違えて、結局一番はじめに伝えられた意図がまるつきり変わっちゃうこと」

あれか。とハリーはプライマリースクールでの嫌がらせの一つを思い出した。

「これは、あくまで僕の推測にすぎないけど……純血が貴族に多い点から見るに、サラザールはノブレス・オブリージを伝えたかったんだと思う。純血はその血ゆえに元々魔力が強い。操れる操れないは別にして、単純に、ね。だから、特に教育して弱きを導けるものにしたかったんじゃないかな。それが、いつしか湾曲して今の純血思想に落ち着いてしまった——」

子供たちはすっかり聞き入っていた。同い年であるはずの少女の演説に。素直に、とても説得力がある気がした。

なにより、マリアの言葉である、というのが大きかった。——この少女は同級生たちに比べずいぶんと大人びているのだ。

「——なんてね。全部、僕の想像の話だ。だから、まあ、うん——僕はわりとスリザリン、嫌いじゃないよ。ドラコみたいな生徒もいるわけだし?。」

ドラコの名前を出されて、三人は唸らざるを得なかった。

うーん、確かに。ドラコ・マルフォイは性格はスリザリンらしいけど……そんなに、嫌なやつではない。ロンですら、そこは認めている。眉間にシワを寄せ懸命に考える子供三人へとマリアは微笑んだ。彼らは、かしこくて、思いやりがあつて、勇気がある。今は難しくとも、きつといつか、本質を見ようと努力してくれる。

子供の身の内に大人の傲慢な真心を持つ少女は、一分一秒だって成長している子供たちを今日もまぶしく思うのだった。

[new page]

[chapter：ドラコとドビーの話]

「それで? お前はなにを思つてハリーに害を為しているんだ?。」

なるべく関わらないようにしていた我が家のしもべ妖精に、ドラコは感情を抑えて問いたでした。

ドビーはめっそうもない、めっそうもない、と耳をパタパタ振り回しながらくり返していた。

「ハリー・ポッターは危険なのです。ホグワーツについてはならないです。ハリー・ポッターは帰らねばならない」

「お前のせいで十分、危険な目に遭つてるといえるか?。」

「さらに恐ろしい災いがふりかかるのです!。」

ドビーはキーキー喚きながら懸命に訴えた。ドビーだって、ただただ必死なだけなのだ。

「なにがどう危険なんだ。命令だ、答えろ」

「ご主人様の命がごぎいます。ドビーは余計な口を利いてはならない！ ……しかし、ご主人様もお知りではない」

「……父上が？」

「ご主人様はお知りでない！ 利用されてごぎいます！ ですがドビーはそれをお教えできない！」

ほろほろと涙を流すドビーに、ドラコは面食らっていた。……しもべ妖精が泣くだなんて。

前回から見ても、こんなに感情豊かだったなんて、知らなかった。

「ご主人様は利用され、ハリー・ポッターは狙われている」

「……それは、秘密の部屋に関することか？」

ドビーが驚いてぎゆうつと目を瞑ったのが答えだった。

「……それなら、とつくに開いてる。中で何が起こっているかも把握して、」

「いいえー！」

ドビーは大きく遮った。

「坊っちゃんはお知りでない！」

「ドビー……日記のことなら僕たちは、」

「いいえ、いいえ！ 坊っちゃんはお知りでない！ ハリー・ポッターは危険です！ ——坊っちゃんがお側にいらっしやるのだから！」

「——は？」

ドラコが聞き返す前に、ドビーはいっそう怯えた顔で姿眩ましをしてしまった。きつと屋敷へ自分を罰しに行ったのだろう。

取り残されたドラコはその場で考えるしかなかった。

ドラコ・マルフォイが側にいるから危険——その意味を知るのは、

あと少し先の話だ。

マリアとハーマイオニーが女の子する話【下着編】

ハーマイオニーはカンカンだった。

確かに、彼女の着替える姿を見たことはなかった。パジャマに着替えてしまえば夜更かしもしないで寝ることが多かったし、彼女はベストやセーターを愛用していた。まだ兆しを見せるだけの幼い膨らみは、それだけで隠せてしまえる程度のものだっただろう。

——けれど、だからといって。

「ブラジャーをしていないなんて——！」

案の定、カミナリを落とされたマリアはちんまりとジャパニーズ正座をしていた。

「生理用品は持ってない、ブラジャーもしてない。前代未聞よ」

「前代未聞ですか」

「未曾有の重大事件よ」

意味は一緒だがなんだか深刻さが増した。

「とにかく、あなたの家庭環境が想像をはるかに超えて劣悪だということはよくわかりました。年頃の娘にまともな下着すら与えないなんて……持ってもないんでしょう？」

「持つてもないですね」

「……わたしのをあげるわ。もちろん新品よ。そうね……マリアなら暖色系かしら」

ハーマイオニーのトランクから真新しい、封すら開けられていない淡いオレンジ色の下着を取り出されて、マリアはたいそう慌てた。

「ま、待って、受け取れないよ」

「受け取るのよ。無論タダじゃないわ。代金はしつかりいただきませす。わたしは、手に入れる機会のないあなたに代わって提供するだけ。……これなら気後れしないでしよう?」

フリルの愛らしい布を手に押し付けられて、さあ、と笑顔で凄まれたマリアは、光によって宝石みたいにキラキラする瞳をまたたかせた。

「それは……とても助かるけど。さあ、って?」

「あなた、着け方だって知らないでしょう。脱ぐのよ」

「……………」

「さっさと上だけ裸になりなさい」

ここだけ聞けば誤解を生む会話間違いなしだ。心底この場に他の同室者がいなくてよかったとマリアは冷や汗をかいた。

「つ、着け方くらいわかるよ。あの、後ろ手でホックをかけるんだろう……………」

「それ、口で言うのは簡単だけじゃってこうむずかしいわよ。やってごらんなさいよ」

「実践!?!」

「ちゃんと見なくちゃ安心できないわ。この手のことに関してはあなたの信用はゼロなんだということをよーくに肝に銘じておくことね」

ハーマイオニーの厳しい目にたじろぎつつ、しかしマリアは動き出せない。マリアは普通の女の子ではないのだ。女性の前で裸体をさらすなど……どちらかといえば自分が露出系の犯罪者になった気分になるのだ。

「恥ずかしいならわたしだって脱ぐわよ。見本はあった方がわかりやすいのね」

「もつと悪いよ!?!」

「なにがよ」

目を剥いたマリアにハーマイオニーは首をかしげるしかない。ハーマイオニーはマリアとは逆に普通の女の子のために、女同士でここまで恥ずかしがる意味がわからないのだ。

「わかった、脱ぐ、脱ぐから——君が脱ぐのはやめてくれ」

「ご両親とロンに申し訳なくなる。」

今にも羞恥で死んでしまいそうなマリアは、懸命に床だけを睨みながらセーターとシャツを脱いだ。

「……あなた、着やせするのね」

「あんまり見ないでよ……」

耳まで真っ赤にして胸の前へと腕を持ってくるマリアに、ハーマイオニーは無性にいけないことをしている気分になった。なんだこの、いたいけな生き物に無理強いしてるみたいなお気は。

「……ウウン、コホン。それじゃ、着けてみて。サイズ、もしかしたら小さいかもしれないし」

「う、うん……んん?」

思った以上にマリアの初・下着着用は難航していた。——ホツクの位置がまったくわからない。引っかけようとしても布が邪魔だ。

「ね? むずかしいでしょ?」

「ほんとだ……女性は毎日これを留めてるのか。すごいな」

「他人事じゃないのよ。今日からあなたもするの」
「アツハイ」

ハーマイオニーの茶色い瞳が鋭く光ったので、マリアは反射的にうなずいていた。ハーマイオニーには逆らってはならないと彼女は魂レベルで刻まれている。

「はじめは前で留めてクルッと背中へ回すのをオススメするわ」
「前で留めて……？ ——ってワアア！ なにするのさ！」

ブラジャーを取り上げられ、咄嗟に身を抱きしめた。そんなマリアにハーマイオニーは呆れ返っていた。

「まるでわたしが痴漢みたいな反応ね？ ほら、シヤンと立って！」
「は、はい」

羞恥を懸命に殺して背を伸ばす。ハーマイオニーによってテキパキと着付けられる。

ホックを胸の下で留めて、クルリ。最後にストラップへ腕を通せば完成だ。

「ナルホド……」

「うーん、やっぱりわたしのサイズだと少し小さいわね。憎たらしい」

マリアを上から下まで眺め回したハーマイオニーは——そして突っ込んだ。手を。ブラジャーとマリアの胸の間に。

「ツひゃわあ!？」

すつとんきような悲鳴を上げて逃げようとするマリアを押さえ付ける。マリアはもうこの上なくゆでダコであった。

「ちよつと、暴れないで」

「な——な——な——」

「これが大事な行程なのよ。いい？ 女性の下着は保護だけじゃないの。形を美しく整える意味があるのよ。こうやって、ちゃんと下からすくいあげて、収まるようにしなきゃ。……聞いてる？」

「ひゃい」

最早マリアの羞恥は限界だった。

今すぐロンに土下座したい。人様の（未来の）奥さんに何をさせるんだ。

「ん、やっぱりオレンジ、似合うわよ。今日は一日これを着けてなさい。まずは慣れないとね。わたしはふくろう通販のカタログを探してくるわ」

「ハイ……アリガトウゴザイマシタ……」

上半身が下着姿のままぐったりとベッドへ突っ伏したマリアは、心から思っていた。

女の子って、大変だ。

アズカバンの囚人とマリア

1—1

ポッター兄弟は、車も通らない夜中のマグノリア・クレセント通りにて、大荷物——ほとんどが学用品だ——を手に座り込んでいた。つい先程の騒ぎがうそのようだ。

今回も僕たちは家出をしたのだ。

子供にとって夏休みとは世間一般的に心踊るものだそうだが——現に僕の我が子たちはそうだった——僕たちポッター兄弟には当てはまらない。ドビーの件で不信感を持たれ、挙げ句窓を破って逃走してしまった僕たちは、これまたひもじく惨めな軟禁生活を送っていた。ロンがやかしかした電話の件もある。ハリーが番号をロンに渡していただなんて知らなかったんだ。

去年の衝撃が強すぎたダーズリー家は、学用品をすべて物置へ放り込み『まとも』でないものに触れることを僕ら二人へと禁じた。すなわち、宿題をする手段を奪われたのだ。

これはゆゆしき問題であった。世間一般的な夏休みの歓楽は与えられないというのに、世間一般的夏休み同様に宿題はたんまり課されている。地道に処理しなければ新学期早々待ち受けているのは罰則生活だ。

困り果てた僕はピンを取り出した。——フレッドとジョージより直々に仕込まれたピッキング技術が唸った瞬間であった。

さいわいなことに、前回窓を台無しにされたことがよほど堪えたのか、今回はヘッドウィグも解放され窓も通常通り。家からは出られなかったが部屋にまで外鍵を取り付けられることはなかった。ハリーは辟易としていたが、それ以上の拘束生活を知る僕としては上々の出来だった。

食料対策に両親の遺産で保存の利くお菓子や食品も買い込んでい

たし、バースデーカードやプレゼントもヘドウィグが運んできてくれた。中々素晴らしい出だしだ。

そして——今回も嵐の到来を予告された。

その日、僕はロンのエジプト旅行の切り抜きを、ハリーはホグズミードへの許可証を眺めていた。

「おい、ガキ共」

バーノン伯父さんが忌々しそうに目を部屋の隅へと逃がしながら告げる。マージお婆さんの来訪を。ハリーは真つ青だった。ハリーはダーズリー一家よりもさらにマージお婆さんが苦手なのだ。マージお婆さんがやってくるたび酷い目に遭わされていた。……もちろん、僕も。

ペチュニア伯母さんは多少なりとも実妹リリーへの感情を持っていたが、バーノン伯父さんの妹のマージお婆さんには関係ない。僕を見るたびダッダーちゃんに色目を使うんじゃないよ！ と喚いていた。意味がわからない。本当にわからない。

僕はこの時、マージお婆さん風船事件回避のためにさっさと家出してしまおうと考えていた。けれども——ハリーが、あんまりにもホグズミードの許可証を見つめるものだから、考えを改めた。

……たぶん、ダメだと思うけど——ハリーの気のすむまで、やるだけやってみようか。

マージお婆さんがいる間『まとも』なフリを徹底することで許可証へのサインの約束を取り付ける。

結果——今回もマージお婆さんは見事な風船に変身した。

ぶくぶく膨らんでいくさまはマクゴナガル先生も十点をくれるだろう出来だった。罰則とセットで。

怒れるハリーと共にひそかにまとめていた荷物を持って夜の街へと飛び出す。こうなる予想と準備はしていたが、唯一の誤算があった。ハリーが癩癩を起こした原因が、両親への侮辱ではなく僕への罵倒だったのだ。

やはり女同士、目につくものは多いらしい。僕としてはどんな卑劣な言葉をかけられようが女心というものがないのでどうとも思わないのだが、ハリーはちがった。家族のために怒れるハリーはやっぱり父さんと母さんの子だ、なんて他人事に思った。なお、僕だってあの豚風船が使った言葉をジニーやリリーに向けられたなら、容赦なく杖を振り回していたらどうだろうけどね。

非常にくすぐったい気持ちのまま、いまだ爛々と猫のように瞳を怒らせている弟を抱き寄せる。

「許せない、マリアにあんな——あんな言葉を——」

「男を誘ういやらしい雌ハイエナだっけ？ あと、ファック・カ——」
「マリア！」

小声ながらもしっかかり叱られて、反省のポーズを取る。いつだってハリーが僕の方も傷つくから、自分で怒ることを忘れちゃうんだよ。ハリーへの攻撃は僕が怒るけど。

「……これから、どうしようか」

「どうしようね」

夜風に当たり頭が冷えたらしいハリーが心細げに囁く。僕としては最終的にナイトバス一択なわけだが、その前にやりたいことがあった。

——いるだろうか。

「マリア？」

手持ちぶさたにハリーを抱きしめながら、周囲を見渡す。闇に向かって特に目を凝らす。

……見つからないなら、それでいい。会いたいけど、今すぐにだつて抱きしめたいけど、緊張もあつて心臓がいたい。会いたいけど、会

いたくない。

焦がれているくせに見付からなければいいなんて同時に思っている自分に、情けなくて笑えてくる。

「マリア……?」

ハリーが不安げに僕の顔を覗き込んだその時。——クウン。

窺うような鳴き声で、闇が分裂した。それは大きな犬の形をしていた。

ああ——シリウス。

「マ、マリア、野良犬だ！ 立って」

「大丈夫だよ、ハリー。急に動き出した方が警戒される。……お腹がすいてるんだ、きつと」

ほんとうに、空いているんだ。こんな、骨と皮になつてしまうくらいに。

威嚇どころか怯えているようにすら見える黒犬は、のそりのそりと時間をかけて近寄ってきた。むしろ、僕たちに逃げる時間を与えてくれているかのようにだった。……きつと、そうなんだろうな。

「こんばんは。あなたも迷子ですか?」

「マリア……犬に話しかけてもしかたないよ」

「ハリーがヘビと話せるなら、僕だって犬と話せてもおかしくないでしょう?」

「もしそうなら、まずはマージおぼさんのリッパーに噛み付けと命令するだろうか? 君なら」

「それもそうだ」

クスクス笑い合う。ハリーも、見た目に反しておとなしい犬に気を許したようだ。……ほんとうに野良犬だった時はそんな簡単に油断

しちやダメだぞ、弟よ。

「ねえ、こつちにおいでよ。チキンがあるんだ。君にあげる」

「え、それってもしかしてペチユニアおぼさんの夕食の？ いつのまに？」

「ダドリーの皿から騒ぎにまぎれてこつそり。ダイエットの手伝いさ」

「マリアってほんと……」

呆れたハリーが続ける言葉は抜け目ない、だろう。

ずつとあげたかったんだもの。それこそ、生まれる前から——なんて。

「こつ、置いておくれ。……ねえ、撫でていい？」

三本ほど地面に置いたチキンを勢いよく貪る犬に、そつと伺つてみる。ピタリと動きを止めた黒犬は、ずいぶん人間くさい動きと表情で僕を見上げた。

……正気か？ て顔だね。

そしてパチパチとまばたきをすると、再び頭を下げた。

「撫でていいって！ ハリー」

「僕には食べるのに集中し直したように見えるけど……やめなよ、マリア。ヘドウィグもそうだけど、動物って食事の邪魔されたら怒る——こら、マリア！」

ハリーの制止もなんのそのと犬の毛をかき混ぜ始めた僕に、ハリーがメツと叱る。そんなハリーに黒犬はビビツと耳を立てて驚いていた。……シリウス、今、自分が犬だって自覚ある？ 感情がわかりやすすぎないかい？

「ハリーが大声出すからびっくりしちやつてるじゃないか」

反射で顔を上げてくれたシリウスの首へと抱きつきながらからかってみれば、黒犬はどことなくオロオロしているように見えた。わかりやすすぎる。

「マリア……噛まれたってしらないからね。……魔法界に狂犬病の理解はあるのかな」

「ドラゴンに噛まれた手をどうにかできるくらいなんだから、犬くらいなんともないんじゃない？」

「そうかなあ」

ハリーもおずおずと手を伸ばす。ごわごわで泥がこびりついた毛を指でかき分けて、地肌に触れてハッと息をのむ。

「マリア、この子……」

「……ね？ お腹がすいてるんだ」

「うん……」

獣の皮膚から肉を挟まず骨へ行き着いてしまったことに驚いたのだろう。美しい緑の瞳は痛ましげに歪められていた。

大きな体格と伸び放題の毛に誤魔化されてはいるけれど——ほんとうに、酷い。

ハリーと僕にもみくちやにされて、戸惑いつつもおとなしく身を任せている黒犬をもう一度抱きしめる。

シリウスが犬の姿でよかった。もしも人の状態だったら、脇目も振らず泣きわめいていたにちがいない。今ですら——ただ触れているだけでこんなにも苦しいのに。

ごめんね、シリウス。もつとはやく、あなたを地獄から連れ出させていけばよかった。

僕は——ずっと逃げていた。

気の済むまで体温を分けて、夏休み期間用に買い込んでいた非常食を袋ごとすべて彼の側へと置く。

「君のご飯にするんだよ。僕らなら大丈夫。……両親がびっくりするくらいお金を残してくれたんだ。二人でも使いきれるか分からないよ」

ハリーもうなずいて、動揺しきりの犬を撫でる。牙を覗かせまいとする優しい彼の頬を包んで、瞳を合わせて鼻先にキスを送った。

「また、ね」

また会えるよ。——僕の名付け親。

ナイトバスのえげつない運転で夜を越え、漏れ鍋前へと降りた。やはりコーネリウス・ファツジが待ちかまえていた。ファツジは、ハリーの肩を撫で背を撫で労ると、漏れ鍋の宿泊室へと案内した。僕のこととはついでだ。ほんとうに、変わらない人だ。

簡単な紹介を終え、ハリーが怖々とマージおばさんのことを告白する前に僕から切り出す。

「実は私が親戚のおばさんを膨らませてしまったんですが、処分はどうなるのでしょうか」

「マリア!？」

「ハリー、やっぱり正直に言わないと。私のことを庇おうとしなくていいのよ」

「なに言って……」

「ハリー！ 君はなんて優しい子なんだ！ だがしかし、家族のためとはいえど事実を隠すのはよくない。そうか、そうか、君なのか。ハ

リー・ポッターでなく君が……」

ファッジがひと安心とばかりに目を細めてうなずく。腹芸のできない人だ。

事実を隠すのはよくない——どの口が。

「マリア、確かに君はやってはならないことをした。だが、法律というのは案外抜け穴があつてね。一回目なら警告ですむ。処分はないんだよ、ハリー。安心なさい」

こわい顔で唇を噛んでいるハリーへとファッジが軽快に笑う。彼としてはハリー・ポッターというブランドに傷がつかなくてなによりだろう。

機嫌よさげに紅茶を飲み干したファッジは、行動範囲をダイアゴン横丁内だけにと僕らに約束させて出ていった。

さて、厄介事はすべて払われたし——

「……マ、リ、ア？」

まずはぶすくれる兄弟のご機嫌取りから始めようか。

「ほしい？」

「え？」

とあるショーウィンドウの向こうへ視線を奪われているハリーへと問い掛けてみる。僕だつてなんだか頬が熱かった。

——ファイアボルトだ。ニンバス2000に続く相棒が、ガラス窓の光でつやつやと輝きながら誇らしげに飾られていた。

「……うん。素敵だなつて思うよ。でも、今はいいかな。そんなお金ないよ」

「あるじゃないか、金庫に」

「父さんと母さんのお金は、僕たちが生きるためのものだ。僕のほしいものだけで空っぽにするつもりかい？」

「僕はそれでもかまわないけど」

「マリアは時々すつごくバカだ」

小突かれてクスクスと笑い合う。……あ。

「ハリー」

「うん？」

「君、背、伸びたね」

「……ああ、ほんとだ」

ショーウィンドウに並んで写った僕たちに、身長差はなくなっていた。一年だか二年だか前は僕の方が拳ひとつ分ほど高かったのに。

「男の子はズルいな。そのうち抜かされちゃうのか。姉さんは悔しいよ」

「なんたって兄だからね」

いつもの冗談を交えて、名残惜しいショーウィンドウから離れる。
……きつと、また会えることを祈ってるよ。ファイアボルト。

ハリーのつんつるてんな制服を直して、次に新しい教科書を買いに
フローリシユ・アンド・ブロッツ書店へと向かった。ハグリッドが誕
生日プレゼントにと贈ってくれた『怪物的な怪物の本』が檻の中で壯
絶なバトルをくり広げていたので、店主に、背表紙を撫でるといいで
すよ、と会計時に添えておいた。帰りにはアイスクリームを味違いで
買って、宿題をしながら半分こしたりした。

漏れ鍋での生活は実に充実していた。

新学期が近付くと、ダイアゴン横丁にホグワーツ生の姿がぐんと増
えた。ハリーはロンやハーマイオニーと合流できたし、バカンスを楽
しんだ二人からの土産話に聞き入っていた。ロンなんかは、パパが当
てた賞金でお下がりでない自分だけの杖を手に入れられて、珍しく授
業が待ちきれないようだった。

ふと、見慣れた金髪が遠くにかすめたので、雑談に花を咲かせる子
供たちに断って追ってみる。——ああ、やっぱり。

「ドラコ」

「マリア」

ひとりでいた彼は少し驚いた風に振り返った。

「こんなところで奇遇だな」

「そっちこそ。……やっぱり、一人？」

僕の中では、小さな彼にはクラブとゴイル、外では両親がいつ
だててくっついていた印象が色濃く残っている。なので、一人の姿を
見るとどうにも落ち着かないのだ。お坊っちゃんだっていうのに、お
付きの人もいないのか。

「揃えるべきものはすべて済ませたからね。今は自由時間だ」

「……なら、残りの時間は僕とデートなんてどう？」

「……喜んで」

下手くそな誤魔化しに乗って隣を歩く。きつとルシウスもナルシツサも、彼を愛しているのに変わりはない。あの日のルシウスは間違いなく親の顔をしていた。

こんなにも、愛の深い人たちだ。——きつと、ここから少しずつだって変われる。

「——デートってのは、このボロくさいパブで茶を飲むことか？」

「味があるって言ってるよ」

漏れ鍋の店主トムにただいまの挨拶をして、宿泊室へと上がっていく。

「……おい、マリア」

「素敵なカフェでのデートなんて、お坊っちゃんのマルフオイには飽き飽きだろ？——室内デートなんて、いかが？」

後ろ手に鍵を閉めて、ニンマリと笑った。

「レデイのお誘いにしては、大胆かつ強引だな」

「僕たちの話は人に聞かれていいようなものじゃないだろう？」

「……シリウス・ブラックか」

「ご名答。——会ったんだ、シリウスに」

彼に椅子へ座るよう促し、僕はベッドへと腰を下ろす。出掛けている間にトムが補充してくれていた茶葉で簡単に紅茶を淹れる。

「まだあの鼠はウィーズリーの元にいるのか」

「もちろん。僕が逃がさないよ」

出来る限りの監視はしているさ。

「——そもそも、なぜ捕まえないんだ？ チャンスなんていくらでもあつたらう」

もつともな問いに、紅茶で喉を潤しながら答える。……ああ、ちつとも味がわからない。

「ロンはあれでスキヤバーズを大切にしてるからね。いきなり奪いあげたら、築きあげた信頼がたちまちにパーだ。……それに、時期じゃない」

「……ふうん？ 時期、ね」

「今、あの鼠を捕まえて魔法省につきだしたところで——シリウスは解放されないよ」

僕のつたない紅茶をティースプーンでひと混ぜしていたドラコは、片眉を上げて僕を見た。

「……なぜ、そう思った？ シリウス・ブラックは冤罪なんだろう？」「そうだよ。冤罪も冤罪、ひどいもんさ。調査はずさん、状況証拠すらあやふや、真実薬による取り調べ・尋問もせず、直前呪文の確認だつてなかった。こんなの、子供だっておかしいと気付く。——はじめから、魔法省は『シリウス・ブラック』を捕まえる気だったんだ。彼が犯人でなければならなかった」

目だけで続きを促すアイスグレーに目で返す。何度紅茶を飲んで喉の渇きはなくならなかった。

「考えてもごらんよ。当時の魔法省は闇の陣営にずいぶんしてやられてた。ここいらで成果の一つでもあげて評判を持ち直したいところだったろうさ。そこにシリウス・ブラックのスキヤンダルだ。これを利用しない手はないだろう？ ヴォルデモートの配下の一人——まるで右腕とまででつちあげて——を捕まえた栄誉、友を裏切った魔法界の王族という話題性、最後のブラック本家当主の犯罪露見によつて得られる財産押収の旨味……メリットしかない」

肩をすくめて、脳内に浮かんだファッジの顔へと唾を吐き捨てる。僕はあいつが嫌いだ。もつと嫌いなのはアンブリッジだけだ。

「真犯人なんてどうでもよかった。シリウスを犯人とできればそれでよかった——そこにこのこ真犯人という完璧な証拠をつきだしてもみる。存在ごと揉み消されるのがオチだ」

「だから——時期を見ていた？」

「そう。ようは魔法省が揉み消せないくらい的事件が起こればいい——例えば、ホグワーツ教師のような信頼のおける大人や、過去の事件に一切関与のない生徒からピーター・ペティグリューを見たという証言が上がった。……だとかね」

息をついて、何度目かの紅茶を口に含む。ドラコは、どことなく満足げに瞳を細めていた。

「……どう？ 君の考えと一緒だった？」

「おおむね」

なんともない顔で返されて、やっぱり試されてたか——なんて皮肉に笑った。性悪め。

「ここまでが表向き理由」

「うん？」

今度こそ、真から不思議そうにドラコは顔を上げた。

「ほんとうは——こわかっただけ」

触れただけで骨の形がわかる彼の体の感触を思い出す。毛は泥にかたまり、まさしく死を匂わせた死神のような相貌だった。

「ずっと、考えないようにしてた。スキヤバースのことも、監視はしていたけれど、それ以上は目に入れないようにした。……シリウスを、思い出すのが苦しかった」

中身のなくなったティーカップを手放して、膝の上で拳を作る。

「彼の存在は生々しくて、彼のことを考えてしまったら——それだけで動けなくなりそう。『僕』が死なせてしまったみんなが——」
「マリア」

固い声が僕の告解をさえぎった。

「君は、なにを勘違いしているんだ？」
「え？」

勘違い——？

「誰も君のせいなんて死んでない」
「は……？」

ドラコもまた、ティーカップを置いて冷たそうな色の目で僕を真っ直ぐに見すえた。

「あの時代に死んだ君の身近な人間といえば、シリウス・ブラックにリーマス・ルーピン、それから、アルバス・ダンブルドア、あとは——セブルス・スネイプか」

「……そう、だよ……僕が——僕のせいで、みんな、」

「わからないのか？ ——みんな大人だ」

「……………」

怪訝なさまを隠しもせず眉を寄せてしまう。……なにが、言いたいんだ？

「はあ……これだから英雄さまは。当時の君はいくつだ？ 成人すらしていなかった。最終決戦時ですら、成人そこそこ。君の言う『犠牲者』たちは君より年上の大人ばかりだ。——全員、自己判断で君と共に闘い、君を守った」

「……………」

「本来君は前線に立つ必要なんてない、守られるべき子供だ。それを……あー、予言だったか？ そんなもので無理やり英雄なんぞに仕立てあげられ矢面に立たされたんだ。むしろ怒ってしかるべきだろう。君を命をとって守った大人たちは、自分の判断で、自分の意思でそこに立ったんだ。つまり死んだのだから、自業自得だ。自己責任。彼ら自身が負う責任だ。それを——君はなにを勝手に奪ってるんだ。傲慢め」

吐き捨てられて、頭が真っ白になった。

そんな——そんな都合のいい言い訳があるものか。

「責任というのは義務と選択の上に発生する。大人には子供を守る義務がある。だから君は守られて当然だった。それがなんだ？ 英雄ならば子供であろうともすべてを守らねばならないと君は言いたいのか？ 叶わなければ君のせいか？ それこそ——思い上がりもはなはだしいぞ、ポッター」

かつてのマルフォイの顔で——まさしく軽蔑の眼差しで嘲笑され、カツと血がのぼる。

「——ッでも！ シリウスが死んだのは僕の判断ミスのせいだ！ 僕が騙されたからだ！ 周りの忠告を聞かなかったからだ！ フレツドだって——セドリックは完全に巻き込まれただけだった——！」
「そうだ。君が判断を過ち——それにシリウスが乗ったんだ。だろう？ 僕はグレンジャーからそう聞いているが？ フレッド・ウィーズリーだって、戦うと決めたのは本人だろう。あの戦争の中、強制だった人間がいるのか？ 僕らのように——逃げていいとあらかじめ道は与えられていたのに。残ったならば、残った人間に覚悟はあったはずだ。なかったとしても、それは残った人間自身の責任だ」

「セドリック・デイゴリーに関しては巻き込んだというのは正しいのだろう。だとしても、少なくとも本人には全校生徒の代表として選ばれるだけの実力があり——命懸けの実践経験はなかった点を置いたとしても——君に守られる立場ではなかった。大体、巻き込んだそれは君の意思によるものか？」
「……………」

細まるアイスグレーと薄い唇から静かに吐き出される言葉は、決して慰めなんかではなかった。

心から——ドラコ・マルフォイは自惚れるなど僕を責めていた。

「もう一度言わせていただこう。——思い上がるなよ、ポッター。守れなかったという言葉はな、相手を守るだけの力を持っていなながら足掻ききれなかった人間だけが口にしていい言葉なんだ。守られるべきだった君にそれを言う資格も権利もないぞ。自分のせいで死んだ？ ——ちがう。誰もが自分の意思で死をもって君を守ったんだ。その言葉は君を想って戦った大人たちへの侮辱になる。英雄でありたくないくせに英雄を気取るな。自分から英雄になろうとするな。

……僕は、君に心まで英雄でいてほしくない」
「ドラ」……」

目の前の唇は引き締められ、頬に低い体温の指が滑る。

「言っただろう。……君の英雄性が嫌いだと」
「……うん」

指は僕の目尻を撫でていた。

「こわいんだらう?」

「うん」

「君は、弱いんだらう?」

「うん」

「英雄なんかには、なりたくなかったんだらう?」

「うん……っ」

いつの間にか目の前は白ばかりで、清潔なおおいがした。トクトクと彼の心臓の音がした。

「君は確かにすごい。並みの魔法使いじゃ叶わない。バジリスクなんて化物を倒して、誰もが恐れる相手と闘い何度も生き延びて——でも、それは『当然』なんかじゃない。英雄のハリー・ポッターなら当たり前、なんかじゃない。……僕は君に追い付きたくて必死なのに、これ以上遠くへいくな」

あの、祈る瞳を向けられて、時が停まったような感覚に落ちた。
氷のようなのに、あつい。

「マリアは——英雄なんかになるなよ」

「——」

……ああ、なんだ。君——また、泣きそうなのか。

「……僕、死なせたくないよ」

「ああ」

「誰も、死なせたくない」

「それが叶えば、奇跡だろうな」

「だって、僕らは『知ってる』のに——止められるのに——！　もしも、もしも判断ミスで前回生きていたはずの人を死なせてしまったら——？　ロンや、ハーマイオニーが死んでしまったら——？　それは間違いない僕らの責任だ！　だって、知ってる僕らはそれだけ選択の余地があるのに！」

「ちがう」

彼の否定の言葉は、なんだかさびしげに聞こえた。

「僕たちの責任だ」

「あ……」

「君が言ったんだぞ。僕たちは弱いって。……ひとりで、めちゃくちゃするなよ。僕の責任を、勝手に奪うな。……僕はスリザリンだからね。権力と権利を横からかすめ取られるのは我慢ならないんだ」

鼻を突き合わせて憎たらしく笑う彼に、ようやく喉の渇きが癒えた心地だった。

「……君って、そういうところばかり大人なんだね」

「庶民とはちがう教育を受けてきたものでね」

「そのわりに嫌がらせは幼稚だったぞ、マルフォイ」

「……ちゃんと最後は我が身に返ってくるってわかってたさ。現に一生トラウマもののしっぺ返しを食らったろう」

「ウソだね。あの頃の君にそんな脳があったなんて思えない」

「ぐっ……お前は本当にポッターだな！」
「なんだい、そのわけのわからない悪口」

カラカラ笑うたび、胸の淀みが流れていく気がする。

おそらく、シリウスに会えばまた僕は思考と後悔の深みにはまっていくだろう。僕は傲慢で、癩癩持ちで、頑固だ。一度で理解も納得もできるほどかしくこないし、素直でもない。

そしてドラコは——そのたびに同じ言葉を言ってくれるのだろう。思い上がるなど。——ひとりで、背負うなど。

「……君がいてよかった」

小さく呟いた声に、彼は答えなかった。

ハーマイオニーとウィーズリー一家も共に漏れ鍋にて一泊した翌日。魔法省の車で送迎された僕らはホグワーツ特急に乗っていた。出発ギリギリまでアーサーおじさんに捕まっていたハリーを迎えて、ロン、ハーマイオニー、ハリー、そして僕ともう一人でコンパートメントはいっぱいだった。

「誰？」

眠りこける男をロンが不躰に眺め回す。

「ルーピン先生よ」

「どうして知ってるんだい？」

「鞆に書いてあるじゃない」

「……マリア？」

ロンとハーマイオニーの会話はすっかり耳の中を通り抜けてしまっていて、ハリーがいぶかしげに僕を覗き込んだことであろうやく僕は子供たちへと意識を向けられた。三人はそれぞれに不思議そうにしていた。

「ううん、なんでもないんだ」

……ちよつと、彼を見つめていたくなっただけなんだ。

「ほんとうに？ 大丈夫？」

「マリアがぼうつとしてるなんていつものことですよ」

「やっぱりあのキザ男のところに行きたいとか思ってるのかい？」

「ロン！」

ロンが、ハリーを見つめるジニーをからかう時とまったく同じ顔をするものだから、ハーマイオニーはするどく声をあげた。

どうしてかハリーだった頃よりもハーマイオニーは優しい。マリヤに対しての方が面倒見がいい気がする。女の子同士だからかな。

「ごめん、マリヤ。いつもドラコと約束してるのに。でも、君にも聞いてほしくて」

「かまわないよ、ハリー。どうせドラコは他の子と一緒にだろうし」

「あら、それって女の子？」

「ええ？ マリヤを放ってかい？ マルフオイなんか？」

「スリザリンのマルフォイを毛嫌いしてらっしやるあなたはご存知ないでしょうけどね、マルフォイったらあれで人気なのよ。落ち着いていてクールでたまらない！ なんてラベンダーも言ってたわ。マリヤだってうかうかしてられないんだから」

ハーマイオニーの言葉に、吹き出すのを咄嗟のところ耐えた。あのドラコが——マルフォイが落ち着いてる？ クールだって？ なんて愉快なんだ。

それに、だ。どうやら僕の同室者たちは揃いも揃って勘違いしているくらいがあるが、僕とドラコはそんな関係じゃあない。そりゃ、互いに男女と見てないからこそその近さはあるかもしれないけど——

—あれ。ダメなんじゃないか、これ。

普段ドラコと関わりのない人間すら誤解する僕らの近きって——アステリアにだって誤解されてしまうんじゃない。

「……うん、そうだね。気を付けるよ」

しつかりとうなずいた僕に、ロンとハーマイオニーは呆気に取られていた。

「 MARIAがこの手の話を理解するなんて」

「おつどろきー」

どういう意味だ。そのしかたない子を見る目をやめなさい。

「悪いけど MARIAの話はあと。僕の話を見せてもらっていいかい」

仕切ったハリーに慌てて二人は居住まいを正した。

「——シリウス・ブラックのことなんだけど」

ハリーは報道の件やナイトバスでのスタンリーの話、ウィーズリー夫妻から盗み聞いた上辺だけの真相を重く語った。

ちがうんだ！ ——そう叫びたい気持ちを、拳を握ることで食い込んだ爪の痛みに誤魔化した。そんな僕の肩をそっと抱いてくれるハリーの優しさがよりつらかった。

僕は今も昔もグリフィンドールに選ばれたことを誇りに思っている。けれども——大切なものを打算で押し込んでしまえるこの狡猾さは、間違いなくスリザリン向きといえるだろう。組分け帽子はどこまでも正しかった。

ダンブルドアもこんな気持ちだったのだろうか。

最後までハリーに告げられなかったダンブルドア。自身の命すら次に繋げるための駒とした偉大で残酷な人——

僕には、シリウスを庇うことはできない。

勝手はできない。欲望で動いて、予測不能の事態になった時、それを好転させる賢さは僕にはない。秘密の部屋の二の舞になるわけにはいかない。ダンブルドアのように引いて見ているくせに——彼のように心を殺しきる器用さなんてない。

僕にできるのは——僕が知る未来をたどって、ほんの少し手を加えて、かつて取りこぼしたものを一つだっというから防ぐこと。あれもこれもと欲張れば失敗する。それが僕だ。

忘れるなよ、傲慢なハリー・ポッター。……僕は、未来を知る全能の神なんかじゃないんだ。

「何の音？」

マリアをシリウス・ブラックの話で怖がらせてしまったと気まずげにしていたハリーとロンがふと顔を上げた。——スニーコスコープだ。ロンから誕生日プレゼントにもらったそれがけたたましく騒いでいた。

なんで——ああ、そうか。スキヤバーズか。

ハリーが慌ててローブやらお下がりの靴下やらで包んでトランクの奥へとしまい込む。三人が気にする彼は変わらず死んだように眠っていた。

話題はホグズミードへと移った。しょんぼりするハリーを次は僕が慰める番だった。ハーマイオニーが解放してしまったクルツクシヤックスをスキヤバーズに飛びかかられる前に抱き止めたりしながら、魔女鍋スポンジケーキをつまむ四人は和やかに過ごしていた。タタン……タタン……暗くなった空と共に速度が落ちていく。夕食に想いを馳せるロンと、ハーマイオニーの怪訝な声が重なる。

光が消えた。——来た。

「静かに」

パニックから騒いでいた子供たちを目覚めたルーピン先生が制した。状況がわからない中、唯一杖を使える大人の存在は大きい。誰もが彼の挙動に注目していた。

「動かないで」

くたびれた様子だというのに目だけは鋭く警戒しているルーピン先生に、戦う彼のさまを思い出す。恐怖への立ち向かい方を教えてく

れた——『僕』の先生。

冷気が流れ込む。咄嗟にハリーを抱きしめた。最早どちらがすがっているのかわからなかった。ハリーを庇おうとしたのか、ただ体温を求めたのか。

暗闇だというのに、頭巾をかぶったさらに黒い影が入り口に立っていた。反射的に杖をかまえた。ガラガラと奇妙な音が呼吸をしていた。吸い上げていく。幸福を——思い出を——希望を——

——ハリー……ポッター……。

——セドリック！ セドリック！ 私の子だ！ 私の息子だ！

——セブルス……頼む。

——死んだ死んだ！ シリウス・ブラックが死んだア——！

——僕を、見てくれ。

——いいぞ、ジェームズ！

「マリアツ!!」

目の前に僕がいた。弱くて、ちっぽけな頃の僕だ。真っ白な顔で目に涙をためていた。だって泣くしかなかったんだ。僕の頬を包んで体温を分けようとしてくれた。こんな小さな手でなにごできただろう。僕は……ああ、そうか。——君はハリーだ。

「僕、君たちがひきつけを起こしたのかと思った」

恐々とロンが僕たちへと手を差し伸べる。ハリーと、そして僕はデイメンターの影響を受けて気を失っていたらしい。側に杖が転がっているのが見えた。油断しすぎた。

「さあ、これを。食べるといい、気分がよくなる。私は他の子たちの様

子を見てこなければ」

チョコレートを僕たちに渡して、ルーピン先生は通路へと消えた。力の抜けた体でどうにか支え合いながら席へと座り直せば、ハーマイオニーとロンが待ちきれないとばかりに交互に語った。

『シリウス・ブラックを匿っているものはいない』——どんな気持ちで、ルーピン先生はそう言ったのだろう。

永遠だと思っていた親友たちのうち二人は死んで、その原因がもう一人の親友の裏切りとされていて——たったひとり取り残されてしまったリーマス・ルーピン。

僕らに置き換えれば、ハーマイオニーやロンが裏切り、闇の陣営に堕ちたと言われているようなものだ。——そんなの、僕には想像すらできない。……ルーピン先生やシリウスだって、そうだったろうに。

「マリアも聞こえたの？ ああの叫び声……」
「う、ん」

ハリーは母さんの声を指している。それに僕は曖昧にうなずいた。叫んでいた。泣いていた。懇願していた。——笑ってた。

ルーピン先生がコンパートメントへと戻ってきて、僕らの手に残るチョコレートをを見て苦笑した。慌ててハリーにも促しつつチョコレートを食べた。それだけで胸があたりかくなって苦しかった。

「ありがとうございます」

二人でルーピン先生へと顔を向ければ、ルーピン先生はハッと息をのんでいた。

「いや……大丈夫かい？ ハリー、マリア」

頭をおそるおそると撫でられて、大人から愛情を受けるのに慣れて

いないハリーと一緒にへにやへにやに笑った。

車を降りる際に別れたルーピン先生の背を目で追っていたハリーは、マイオニーは呟いた。

「ハリーはともかく、マリアの名前も知ってるなんてめずらしいのね」

……ほんとうにね。

履修登録をハリーとまったく一緒にした僕は、今、彼女を前にしてなんとも言えない気持ちで苛立つハーマイオニーをなだめていた。

「あなたはグリムに取り憑かれています」

トレローニー教授だ。牛乳瓶みたいな大きくて厚い眼鏡越しに、ハリーを憐れんでいた。ウウウウ、と彼女いわくの世にもおそろしい未来を垣間見て声を震わせている。

彼女が予言者だっていうのは……ウン、間違いではないんだけどね。

「わたしにはそうは見えないわ」

ハリーのティーカップに残った茶葉を眺めて、ハーマイオニーはうさなくさげに吐き捨てた。トレローニーがひっそりと眉をひそめた。

トレローニーとハーマイオニーの確執が始まった瞬間だった。

「ねえ、君、ほんとうにグリムを見てないの？」

変身学にて、死の宣告をされたハリーに、マクゴナガル先生が実際にブラックなジョークを交えてくれたことよって話題は流れたかと思いきや、ハリーよりもよっぽどロンの方が気にしているようだった。

ハリーと僕は顔を見合わせた。

「見たよ」

「エーッ!？」

「とつてもかしこくしておとなしいグリムだったよ」

「グリムがあんなに人懐っこいなんて、僕、しらなかつたよ」

「ちなみにグリムの好物は骨付きチキンさ」

「そして毛は真っ黒。きれいにすれば触り心地ばつぐんだと思うよ」

クスクス笑い合う。本気で取り合ってもらえないロンはいかにグリムがおそろしいかを、被害に遭った（とロンは考えている。）親戚の名を出して諭すも、効果はなかった。

昼食後はスリザリンとの混合授業の魔法生物飼育学だ。どうやら僕たち以降に怪物の本を求めた生徒は、本のなだめ方を店主より聞いたらしく、ちらほらとおとなしい本が見受けられた。

「こんな本を生徒に持たせるなんて、気が狂ってるよ」

緑ローブの中から冷ややかな声がこれ見よがしにハグリッドへと向けられた。セオドル・ノットだ。彼の手にはベルトで締め上げられてなお暴れ狂う本があった。

おや、彼はかつてのマルフォイよりは大人だと思ってたんだけど。まだ冷静っぽく話せる辺り、バカではないだろう。

まったく、この頃のマルフォイときたらほんとうに手当たり次第で——いや、水に流すと決めたじゃないか。落ち着け、僕。

「ぶきげんよう、ミスターノット。私たちは本のなだめ方を書店の店主から教えてもらえたんだけど……君は聞かなかったのかい？」

ハグリッドが初っぱなからつまずいてしまわないよう嫌味を持って返す。暗に店主に選り好みされたのかと笑った僕にセオドルは実に忌々しげに顔をしかめた。

「やあ、双子の出来損ない。バカの混血がかしこぶらないでもらえるかな。男の真似をいくらしたところで君はただの女だ」

セオドールの言い草に、グリフィンドール勢（特に女性陣）は非難ごうごうだった。なんて時代遅れな差別意識なんだ。

「お言葉ね、ノット。ところで、お供を引き連れていないと女の子ひとりへの文句もままならないどころの誰かの女々しさに比べれば、あなたいわく女なマリアの方がよほど男前だと思っただけど？」

痛烈に返したのはハーマイオニーだ。クスクスと笑いが上がる。

このままでは授業にならないと察したハグリッドは、下手くそな咳払いで無理に注目を戻した。

「ウン、そんじやあ、授業だ。すんげえのを見せてやるぞ。ちいと待つとれ。ええか、喧嘩せずに待つてるんだぞ」

しかと釘を刺したハグリッドが森へと入っていく。相性最悪の赤と緑に無茶を言う——とは思いますが、彼としても初授業で乱闘を起こされるなんて堪ったものではないだろう。

比較的ハグリッドに友好的なグリフィンドールの生徒たちは、スリザリンを無視することに決めた。

セオドール・ノットか……おそらくハグリッドが連れてくるのはヒップグリフだ。あの頃のマルフォイみたいなバカはしらないと思いたいけど——注意はしておくか。

ちらりとスリザリン側を横目で見れば、ドラコと目が合った。そしてあつさりそらされる。涼しそうな顔をしているけれど、僕にはわかる。あれは昔を思い出してうんざりしている顔だ。

ちなみに、先程の小競り合いにドラコは初めから首を突っ込まない体勢でいて、ハリー含む三人組は大変不満げだった。

「こんな時に好きなのを守れないなんて男じゃないね」

「マルフォイってこういうところ、冷たいわ。ええ、ええ、スリザリンらしくてけっこうよ」

「僕のこととはともかく、マリアのことは庇ってくれたっていいのに……ドラコのやつ」

ぶつくさ文句を言う三人にウーンと困った顔で笑ってしまう。

ドラコにはドラコの立場があるし……グリフィンボールに下手な味方をしないことは僕らの中では了承済みなんだけど——三人にはまだわからない話だろうね。

ドラコがわざとそうしてる限りは、僕が彼を庇いだてしないことも暗黙の了解の内にあるので、自分、誤解は解けそうにない。

ままならないな、と子供たちを眺めていると、ヒッポグリフを何頭か連れたハグリッドが戻ってきた。見惚れるもの、おののくもの、距離を取るもの——生徒たちの反応は様々だ。ハグリッドはご機嫌にヒッポグリフとの交流の仕方を説明すると、今回も一番乗りハリーを指名した。

「よーし、よーし、さあそこで礼だ……そんでええ……」

戸惑いながらも頭を下げたハリーに、ヒッポグリフのバックビークが目をくるりとさせて前脚を折る。成功だ。バックビークの背中に乗せてもらえたハリーは、空高く舞い上がった。

「すっげえや、ハリー」

青空に浮かぶシルエットを眺めて羨ましげにするロンに心の中だけで返す。——ちつとも、優雅な空の旅なんかじゃなかったよ。

ハリーが戻ってきて、その後もバックビークになつかれている様子に勇気づけられた生徒たちが、次々にヒッポグリフの前へと立つ。僕も白い羽が美しい——通りすがったハグリッドが雌だと教えてくれた。どこで判別するのかさっぱりわからない——レデイのお相手をつかまつり、存分に嘴や艶やかな毛並みを堪能させてもらった。ところどころから感嘆の息や楽しげな声が上がっていて、おおむね成功な

授業なんじゃないかと胸を撫で下ろしたところで――

「簡単じゃない。こんな醜い怪物に触らされるなんて、どうなることかと思っただけど」

「――マリア！」

「マルフォイ！」

やらかしてくれたのはセオドル・ノットではなくパンジー・パークinsonだった。ドラコが咄嗟にパークinsonのローブを引き、僕が間に体を滑り込ませる。パークinsonを引いてくれたおかげでできた隙間は、僕の腕だけを犠牲にパークinsonとヒップグリフの命運を救った。……念のためスリザリン生の近くにおいてよかった。今回はどうにか間に合った。

「マリア！　なんてことを……医務室にはやく！」

「このくらいはかすり傷だよ」

「バカを言うな！」

ハグリッドは殺気立つヒップグリフをなだめていて、ハリーは僕の腕を取って今にも倒れそうな顔だ。バジリスクの件以来、ハリーは僕の怪我に敏感なのだ。

「ドラコ、ありがとう。わたし……わたし……」

「パークinson、あなたが礼を言うべき人はもう一人いるんじゃないの」

「誰もグリフィンドールに助けくれなんて言っていないわ。そいつは勝手に蹴られたのよ」

「あなた……！」

「いいよ、ハーマイオニー。……ハグリッドのこと、お願い。――もう少しおとなしい動物から始めた方がいいかもって、言っておいて」

小声で加えて、急かすハリーに従って医務室へと向かう。だくだくと落ちていく血に、廊下が汚れるなあ、なんてぼんやり思う。

「マリアは……どうしてもっと自分を大切にしてくれないの」

「してるつもりなんだけど」

「してないよ！ あんなやつ、庇う必要なかったんだ。見たかい？

命の恩人に感謝すらできないんだ」

ドラコにしなだれかかりつつ器用に僕を睨んでいたパーキンソンを思い出す。

なんだろう、それなりに厄介者たちと生きてきたハリーとしての意識があるからか、あのくらいはかわいいものと思ってしまうだろうか——むしろ潔いというか。……ドラコのがほんとうに好きなんだろうな。残念ながら彼にはアステリアがいるけど。

「僕、時々マリアが——」

続く言葉はなく、医務室の主人に回収された僕は、なんだか小さく見えるハリーの背を見送るしかなかった。

「医務室通いが趣味の姫君、お加減はいかがか？」

目の前にサンドウィッチを置かれて、野菜が足りない気分だった僕はモツシャモツシャとそれを三口でたいらげてしまった。ハーマイオニーがここにいたなら、一日三回はお約束のはしたない節が炸裂するだろう有り様だ。

夕食をハリーとロンが持ってきてくれたはいいものの……彼らつてば、見事に肉ばかりなんだもの。さすがに胸焼けだ。そのうえ、部

屋中に充満した臭いのせいでマダム・ポンフリーに睨まれてしまった。

「もうとっくに良いよ。……ヒップグリフの鉤爪の具合なら君の方がよく知ってるだろう?」

「なんの話だか」

すつとぼけられて、無事な方の手で頬をつねっておいた。

「パーキンソンはどうだい? なんともなかった?」

「無傷も無傷さ。ありもしない傷ですり寄ろうと必死だ。まったく、たくましいものだな」

「スリザリンだね」

三角巾に吊られた腕を振ってみてクスクス笑う。恋する乙女が行動力をなめてはならない。ハーマイオニーとジニーとそれからトックスから僕は学んだんだ。

「気を付けなよ? どこで愛しのアステリアに見られるか——もう顔合わせは済んでるの?」

「ああ。純血貴族にはパーティーだの会食だの、面倒な横の繋がりが必須だからな。歳の近い子供は大体が顔見知りだ」

「あ、そうなんだ。じゃあちゃんと汽車も二人で来れたかい?」

ニンマリする僕に、ドラコはどこかくたびれた風に視線をそらした。

「そこまでの仲じゃあない。大体、ダフネと一緒にただだろう」

「ダフネ?」

「ダフネ・グリーングラス。スリザリンの同級生だ」

「つまりアステリアの姉、と」

なら、ドラコは——クラブとゴイルからも距離を取っているドラコは、『あの時』ひとりだったのだろうか。

「……君、大丈夫だった？ その——」

「デイメンターか？」

「……うん」

「まあ、いい心地ではなかったな。君こそ——ア、散々からかった僕がきくことじゃないのはわかってるが、」

「大丈夫だったよ。……ルーピン先生がいてくれたもの」

小さく微笑む。先生のパトローナスはきつと、美しくてあたたかかっただろう。気絶してしまったのが残念だ。

「そうか」

うなずいたドラコに撫でられて、ハツとした。——そうだ、これがいけないんだ！

「ドラコ」

頭上の手を掴んだ僕に、ドラコはきよとりとしていた。徐々に頬や顎がシャープになってきて、僕の知るドラコに近付いているというのに、そんな顔をすればやっぱり幼い。

「君、誤解されるようなことはしちやダメだ。僕はアブラクサンに蹴られたくなんてないからね。これからは僕だって注意するから」
「……………」

再び無防備に呆けたドラコは、やがて意味を理解して大きいため息をついた。

「ああそうか。そうだろうとも。君ってそういうやつだ」

……うん？　なんで僕が怒られてる風なんだ？

「——遠慮はしないって言ったからな。君が言ったんだ」

次は僕がきよとりとする番だった。ズウツと顔を近付けたドラコは、アイスグレーに熱をチラチラと覗かせて僕を睨んだ。いけすかない頃のマルフォイを思い出させる、挑発的で負けん気に溢れた目だった。

「覚悟してろよ」

………エ、なにを？

今この瞬間、ここホグワーツでもっとも授業を心待ちにしている生徒は、自分だとはつきりいえるだろう。

——ルーピン先生による闇の魔術に対する防衛術がやってきたのだ。

人当たりのいい笑顔を浮かべて、みすばらしいローブをどうにかまといながら先生が告げた「教科書をしまつて」の言葉に、昨年の惨事を思い出した生徒たちは不安げだった。格好もあいまって、ポンコツが続いてしまったのかと落胆の色がありありと表れていた。

僕はほくそ笑む。さあ刮目するがいい。——ルーピン先生の授業は、僕が知る七年間で一番、最高だったんだ！

「ワデイワジ」

悪戯をしていたピーブスの鼻の穴にチューインガムがヒットする。実に愉快的な光景だった。胡乱気味だった空気は期待へと変わり、即座に、ルーピン先生を見るみんなの目が輝いた。

職員室まで引率されて、途中、スネイプ先生の嫌味をかわしながら、古い洋タンスの前へといざなわれる。タンスはなにかを訴えるようにガタガタと揺れていた。

「これの中に今——真似^ボ妖怪^{ガート}が入っている」

コツン、とタンスを叩いた先生は、ボガートの説明にハーマイオニーを指名した。ハーマイオニーは相変わらず教科書そのもののように答えた。

そういえば、ずいぶん前にドラコがハーマイオニーのことを歩く辞典だとか殴ってくる叡智だとか呼んでたな……酒を引っかけつつ。そして有言実行されていた。おもに殴るの部分を。

なんて、過去の思い出に意識を飛ばしている間に、ネビルがタンスの前へと立たされていた。誰もがこれから起こることにワクワクしていた。……実践に指名されたネビル以外は。

「ネビル——大丈夫、できるよ。だってネビルだもの」

「マリア……」

退りかけていたネビルの背をルーピン先生に向けて押し出す。ルーピン先生は勇気を褒めるように微笑んでいて、ネビルもそれに震えながらもすっかりとうなずいて返した。

こわいものはなにか——スネイプ先生。

おばあさんの格好はなにか——緑のドレスに、赤いハンドバッグに……。

問答が続き、ボガート・スネイプ先生がどのように変身するかを想像した生徒たちから既に笑いが上がっている。こんな軽快な空気の中——失敗なんておそれるに足りない。

「リデイクラス！」

ボガート・スネイプ先生が滑稽なドレス姿へと変わる。今度こそ、どっと笑いが溢れた。

「リデイクラス！」

ミイラ男が自身の包帯につんのめった。

「リデイクラス！」

バンシーから自慢の歌声が奪われた。

「リデイクラス！」

手首だけのなにかがネズミ捕りに捕らえられた。

「リデイクラス！」

ロンが想像した大蜘蛛は脚を失って転がった。

ハリーの前に蜘蛛の残骸がやってくる。——あ、だめだ。

「ハリー！」

ハリーの前へと飛び出す。ディメンターに変身しようとしていたボガートはみるみるうちに縮んだ。——縮んだ？

——え？

陽気な空気は冬の夜のように凍てついて、辺りを困惑が包んだ。

「なに……あれ……？」

誰の声だっただろう。

みにくい赤子だった。懸命に身を小さくして、光から逃れたがっていた。まるで皮膚を剥がしたかのような痛々しい姿で——哀れで——ちっぽけで——

死に向かう駅で置き去りにしてしまった、かわいそうな子供。

ハリーが傷を押さえて呻いたと同時に、ルーピン先生が前へと飛び出す。僕を押し退けると、哀れな赤子が満月へと変化していく。

「リデイクラス！」

最後はネビルが仕上げた。再びスネイプ先生が現れて、ドレスに変わったスネイプ先生へと大きな笑いが向けられて——リデイクラス！ ばかばかしい！

興奮冷めやらぬ中、授業は終了した。皆、奇妙な赤子のことなんて忘れて思い思いに最高の授業のことを語った。ネビルはいつまでも顔を真っ赤にしていた。

「見たかよ——あの蜘蛛！ こうだ！ リデイクラス！」

ロンもハーマイオニーもご機嫌だった。なにも言えないのは——僕たち双子だけだった。

どこにいるのかと尋ねた通信紙には一言、図書室と浮かんでいた。なので、特に予定のなかった僕はまっすぐに図書室へと向かった。

ハリーは僕になにも聞かなかった。僕もハリーになにも言わなかった。言えるはずがなかった。——僕の恐怖の象徴として突き付けられた赤子の正体なんて。

傷が痛んだ時点で、もしかしたらハリーには察しがついてしまったかもしれないけれど。

言えるわけない。この世界の誰にも。——『僕』の言葉は、『彼』にしかわからない。

「ドラ——コ——」

揚々と上げた片手は、一瞬で迷子になってしまった。——彼の隣に座る、美しい少女によって。

黒にも見える深い茶色の髪をしていた。瞳は茶色だった。顔は細長で、上品に整っていた。貴族らしい少女だった。

彼女が——アステリア・グリーングラス。

『僕』がアステリアを——アステリア・マルフォイを直に見たのは十にも満たない数で、そのうちに彼女は写真だけの存在になってしまった。残されたものたちの苦悩は、父子両方から聞かされていた。

スコーピウスが——ドラコが生涯に渡って乞い求め続けた女性。

ドラコはどうやら彼女のレポートだかを手伝っているようで、同じ本を覗き込みながら、愛しくてたまらないと瞳を溶かして彼女に微笑みかけていた。彼女もまた、ドラコを慕っていると全身で表しながら寄り添っていた。

邪魔、できるわけがない。

あんなに——あんなにも、しあわせそうなのに。

「マリア？」

ふと、彼が顔を上げてしまった。ぽつりと立って、きつと迷子そのものみたいな顔をしている僕は、どれほど間抜けだろう。滑稽だろう。

笑えばいいのに。そんな——心配そうになんてしなくていいのに。せつかく、君が焦がれていたアステリアが隣にいるのに——どうして僕を見つけたんだ。

「すまない、アステリア。ここまでにしよう。彼女とは約束をしていて」

「いや、いいよ、ドラコ。たいした用じゃないんだ」

「マリア？　だが、君——」

「いいんだ！」

声が大きくなってしまって、慌てて口をふさいだ。近くのレイブンクロー生には睨まれ、マダム・ピンスからするどい視線をいただいた。けれどもなによりも、目を丸くした彼と見つめる少女の瞳にいたたまれなかった。

アステリアの目は真っ直ぐだった。好奇も嫌悪も——嫉妬すらも浮かべず、僕を見ていた。ハーマイオニーが真実を見極める時の目に似ていると思った。

「……ごめん、僕——」

「——マリアはあたしと約束があるの」

凜とした声が僕の腕を取りながら彼らへと——そして僕へと向けられた。ね？　そう悪戯げに微笑む少女は世界で一番愛くるしいと僕には思えた。

「ジニー」

赤毛の最愛の人は、勝ち気に口角を上げてドラコへと凄んだ。

「ごめんあそばせ、スリザリンの王子さま。マリアとの約束は今度にしてもらえる？　あたし、今、とつても姉さんに甘えたい気分なの。どうぞあなたは後輩への指導をお続けになって」

僕の腕を取ったまま、ジニーがそっけなく礼をして図書室を後にする。僕はすっかりなすがままだった。ジニーはある程度のところまで歩くと、足を止めて僕を見上げた。

「マリアが、つらそうに見えたから。……いけなかった？」

愛が底を知らない少女の気遣いに、ゆるゆると首を振る。

「ううん。ありがとう、ジニー。……ほんとうに、ありがとう」

僕の顎ほどまでしかない身長を彼女を抱きしめる。ジニーは、腕を伸ばして全身全霊で抱きしめ返してくれた。

「いいの。あたし、マリアの味方だもの。ドラコ・マルフォイはスリザリンにしてはいいやつだって聞いているけど……マリアがかなしむなら話は別よ。あたしの姉さんをかなしませるやつは、マリアがゆるしたってあたしがゆるさないのよ。知らなかった?」

コロコロと彼女は笑う。強気な言葉には溢れんばかりの愛情が込められている。

すきま風にさらされていた心にほんのりと熱がともった。

「ジニー、愛してる」

「あたしだって愛してるわ。あたしの姉さん!」

やわらかい体温に包まれてなお——すきま風を通す穴は埋まらなかった。

追いかけてなくてよろしいのですか？

少女は隣の儂げな少年を見上げて囁いた。少年は立ち上がりかけ

た姿勢のまま、瞳を揺らして決めかねていた。

「……いや、ジニー・ウィーズリーが傍にいるんだ。僕は邪魔だろう。勝算のない勝負はしないタチでね」

「あら」

黒のような髪と共にコテリと頭を倒した少女は笑む。計算され尽くした——淑女としての教育の確かさを思わせる清廉な笑みだ。

「意気地無しですね、ドラコお兄様ったら」

「アステリア……」

「ドラコお兄様がよろしいのであれば、アステリアが申し上げることはありません。課題の続きを見てくださいますか？」

アステリアは微笑む。先程に邂逅してしまった赤毛の少女を脳裏に焼き付けながら。ただただ、微笑む——

「あれが、マリア・ポッター」

今年もクイディッチシーズンがやって来た。七年生のオリバーが悲壮感ただよわせながら優勝杯への決意を固めるものだから、チームメンバーも必死に練習に明け暮れていた。当然、花形シーカーであるハリーも雨風に当たりながら奮闘していた。我ながら……端から見ればめっちゃくちゃなペースだ。

だがしかし、今年はデイメンター乱入事件がある。こればかりは強烈すぎて、ハリー・ポッタークイディッチトラブル史上一番に覚えていた。なんとたつて相棒を粉碎されたのだから。

今日も朝からせつせと励むハリーへの見送りに頬へとキスをする。隣で「姫、俺たちには？」とユニゾンしてきたビーターツインスは無視——したら、ブツチュと両頬に唇を押し付けて逃げられた。……今のは防御のしようがないよ、ハーマイオニー。だから睨まないでくれ。

「ハリー、風邪、引かないですよ。元氣爆發薬でけむり出してるハリーもかわいいだろうけど」

「マリアってさあ……」

ロンにどこまでも突き抜けた変人を見るような目で見られた。だつて『僕』とちがつてこつちのハリーは素直でいいこなんでももの。弟をかわいがりたい兄心、君ならわかつてくれると思つたのに。え？程度の問題？

ふにやふにや笑つてキスを返してくれたハリーを送り出せば、土曜日の本日の予定は終了だ。とりあえず、勉強してから勉強をし、仕上げに勉強しているハーマイオニーを刺激しない程度にソファにだらける。足元でブラシみたい尻尾がふさふさ揺れた。

「おはよう、クルックシャンクス。ごきげんいかが？」

かなり貫禄のある胴を持ち上げて膝の上へと乗せる。レンガに顔をぶつけたみたいなの、実に特徴的な顔立ちをした賢い猫は、僕を見つめるとゴロゴロ喉を鳴らした。慣れると味のある顔も愛嬌へと変わる。中々かわいいじゃないか、お前。

「マリア、そのケダモノを放すなよ。スキヤバーズが僕の鞆で休んでるんだから」

ロンが今にもクルックシャンクスを引っぱたきそうな顔で迷惑がるものだから、ハーマイオニーはぶすくれた。いつの時代でもロンは口から失敗するのだ。

そんな一番の親友に苦笑いしていれば、ギラリとクルックシャンクスの瞳が光った。咄嗟に太ももまで使って抱き止める。気持ちよさげな喉音は警戒の音に変わっていた。

「クルックシャンクス。わかってる、わかってるから落ち着いて」

ふさふさの耳へと囁く。至近距離にある髭がピクピク動いた。

うーん、さて、どうしようか。クルックシャンクスはちゃんと意味があつてスキヤバーズを狙ってるわけで……あれ、そういえばもうこの頃にはシリウスと接触してるんだっけ？

「ねえ、クルックシャンクス。僕とお話ししない？」

「マリア……」

「ハーマイオニー、クルックシャンクスを借りてもいいかい？ 彼と話がしたいんだ」

「ええ、どうぞ、お好きに。わたしの猫が人の言葉をしゃべるだなんて、わたしは知りませんでしたけど」

投げやりに手を振られる。わかりやすく呆れられている。ちなみ

にロンは「ハリーがヘビと話せるなら、マリアが猫と話せてもおかし
くはない……？」なんてどこかで聞いたようなことを呟いていた。

女子寮の寝室は休日の朝だというのに空っぽだった。同室者の
パーパデイとラベンダーが、すっかり信奉者となってトレローニーの
自室へと入り浸っているからだ。大変都合がいい。

腕の中ででろーんと後ろ足をぶら下げていたクルックシャンクス
をベッドへと下ろす。そして隣に腰かけた。

「ねえ、クルックシャンクス。僕は君がご主人さまと同じくらいかし
こいことを知ってるよ。だからどうか教えてほしいんだ。——ここ
最近で、黒犬と会ってるかい？」

ブラシみたい尻尾が揺れた。僕はそれを肯定と受け取った。

「彼からなにか頼まれてる？ 君は、彼に協力してるよね」

チロリ。慣れれば愛嬌があるが、初対面ではお世辞にも愛らしいと
はいえない、瞼に半分隠された目が僕を覗いた。

「その犬も、あの鼠も——『アニメーガス』だつてことに、君は気付い
てる。僕だつて理解してる。そして君が、黒犬からなにを頼まれてい
るかも予想はついてる」

体を起こしたクルックシャンクスは、タシリと僕の手の甲を肉球で
叩いた。なら、なぜ捕まえないんだ——そう抗議しているように見え
た。元々、不満を常に抱えているみたいな顔立ちではあるんだけど。

「時期があるんだ。今、シリウス——彼の元へ連れていくと、彼はきつ
と鼠を殺してしまう。それは困るんだ。——ああ、僕がじゃない。こ
れは、シリウスを解放するために必要なことなんだよ」

利発な目——彼の賢さを知らなければ、やっぱりただ睨んでるだけにしか見えない——でクルックシャンクスは僕を見上げていた。ふわりふわりと吟味するように尻尾が揺れた。

「きつと悪いようにはしないから——僕にも協力してくれないかい？
クルックシャンクス」

再び、胴を両手で掴み目線と同じ高さまで彼の顔を持ち上げる。フンスツと猫は鼻をヒクつかせた。

「ひとまずはスキヤバーズを狙うのをやめてくれると嬉しいんだけど。僕がちゃんと見てるからさ。君のご主人さまとロン——そう、赤毛の彼ね——彼との仲がこのままだとこじれにこじれちゃうんだ。そんなの僕の胃がもたないよ。ね？」

猫は言葉を発しないが、フンスフンスと鳴らされる鼻と世のすべてに不満を持っていそうな半目は、しかたないな、なんて言っているようにも見えた。

シリウスは元が人間だから当然だけど——この子も中々に目が饒舌だ。

「ありがとう、クルックシャンクス」

都合のいいようにばかり捉えて、物言わぬ猫の肉球をぷにぷにしながら笑う。クルックシャンクスは、やっぱりしかたないな、とでも言いたげな顔でなすがままだった。

「あ、それからね、もうひとつ——お願いがあるんだけど」

そして僕の膝から降りた聡明な猫は、尻尾をピンと張ってナーオと鳴いた。

わかりやすいなあ——どうにも、表情が豊かすぎる犬を前に苦笑する。

相変わらず泥の中を駆けずり回ったみたいなごわごわの毛は今や驚愕に逆立っていて、尻尾をビーンツと張って彼は困惑していた。

「こんにちは、迷子の黒犬さん。——チキン、持ってきたんだけど、食べるよね？」

厨房から拝借した皿ごと、人間用のメニューを地面へと置く。玉ねぎとか入ってるけど、シリウスは人間なんだから大丈夫だよね？

……まあ、大丈夫じゃなくとも本人が判断するだろう。

マグノリア・クレセント通りで会った頃よりも腹に余裕があったのか、シリウスは皿へ飛び付くことなく僕を窺っていた。警戒というより、ほんとうにどうしていいかわからないようだった。

そんなシリウスの隣に座り込む。膝にクルックシャンクスを乗せて、サンドウィッチへとかぶりつく。禁じられた森付近のためにろくに舗装されていない地面は、ちよっぴりお尻がいたかった。

「大丈夫だよ、君のことは誰も知らない。……僕とクルックシャンクス以外はね。あ、クルックシャンクスってこの子のことだよ。かしこくてすばらしい猫でしょう？ 僕の親友なんだけど、飼い主もとんでもなく頭のいい魔女なんだ。……食べないの？」

シリウスは、グウ、と鳴いて皿へ鼻を寄せた。チラリチラリと僕を覗き見ながら。

「ああ、この子のことを怒らないでね。僕が無理に聞き出したんだ。最近会ってるお友だちを紹介して、て。ねえ、これからも会いに来て

いいかな？ ……僕、君のことが大好きなんだ」

耳をくすぐる。ピルピル振るったシリウスは、困ったような目をしていた。

「ハリーはここどころクイディッチの練習に忙しくてね。あ、知ってる？ ハリーってば、一年生で最年少シーカーに選ばれたんだよ。百年ぶりだって。父さんの才能さまさまだよね」

嘘のつけない尻尾がブオンツと振れた。歓喜のさまが全身から表れているシリウスを背中まで大きく撫でる。ほんと……何年経とうが父さんが大好きなんだもんな、シリウス。僕の周りの大人たちは愛情深すぎるよ。スネイプ先生だって——

——ああ、そうか。シリウスは僕の顔じゃなくて——『目』を見てるのか。

「だから、ええと、なんだったかな。……ああ、そう。話し相手がいなくてさびしいんだ。ロンはハリーに付き添ってるし、ハーマイオニーは勉強に忙しいし、セドリックは他寮で狙ったようには会えないし、ドラコは——」

続きを飲み込んだ僕に、なんだかんだと食事を始めていたシリウスが僕の手のひらへと鼻を押し付けた。マツシユポテトが鼻の横を汚して、おそろしげな獣の抜けた姿にクスクス笑った。

「君に、会いたいんだ」

杖を振るフリだけしてスコージファイを唱える。拭われるマツシユポテトはもちろんのこと、毛並みに艶が戻った。

さすがにふわふわにまでするのは、今の僕じゃ無理か。ほんとうならこの手でシャンプーしたいところなんだけど。

「……ねえ、抱きしめていい?」

シリウスは、ジィ、と僕の目を見つめると、当たり前みたいに脇の間へと体を滑り込ませて、膝へ頭を置いた。その横にクルツクシヤンクスが体を丸めて、ほかほかと優しい温もりを一匹と一人から分けられた。一匹と一人を両手を使って撫でる。

この日一番、やさしくてしあわせな日だまりだった。

こんなにも憂鬱なハロウインはない、とばかりにハリーは落ち込んでいた。ポッター兄弟はホグズミードへ向かうみんなからすり置いていかれてしまったのだ。

ハリーは責任を感じていた。マージおばさんに癩癩さえ起こさなければ、マリアにだってこんな不自由な思いをさせずに済んだのに……。だからといってあの暴言は絶対に許さないけど。

「ハリー？ 僕は気にしてないから、パンプキンパイでも食べに行こうよ」

「でも……マリア……」

「チャンスならいくらでもあるさ」

イタズラ好き双子と忍びの地図を頭に浮かべながらハリーの手を取る。ハロウイン一色の談話室や廊下には、三年生の姿はほとんどなかった。

「ハリー？」

中庭への通路で声をかけてきたのはルーピン先生だ。繋いだ手のまま、ハリーと同時に振り返る。

「こんにちはは、ルーピン先生」

「あ、ああ……こんにちはは」

少し面食らって、それからルーピン先生は穏やかに笑った。どうしてここにいるんだい？ みんなホグズミードに行っちゃって。それならお茶でもどうかな——トントントン拍子でルーピン先生の部屋へとお邪魔する流れになり、前回同様、落ち着かない様子のグリーンデロー

に迎えられた。

「紅茶でいいかい？ ティーバッグしかないんだけど。でも、お茶の葉はうんざりだろう？」

茶目っ気を見せるルーピン先生にクスクスと笑う。

「二人は——ほんとうに、仲が良いんだね」

「ハリーの姉ですから」

「マリアの兄ですのよ」

「二兄弟の面倒を見るのは当然です」

双子のユニゾン芸を見せれば、ルーピン先生はカラカラと笑ってくれた。笑い涙を指で拭って、結局どっちが上かな？ と尋ねる顔は、とっくに正解を知ってるのだと僕にはわかった。

「さあ。やっぱり僕が姉なんじゃない？ 弟よ」

「僕が兄だよ。妹よ」

「僕の兄さんは強情だ」

「まったく同じ言葉を返すよ、姉さん」

冗談を投げ合って、そんな僕らにルーピン先生は笑みを困惑に変えた。

「……もしかして、ほんとうに知らないのかい？」

「知らないです。ペチュニアおばさんは教えてくれませんでしたから」

「でも、それでいいんです」

「どっちが上だって、僕らが兄弟だということに変わりはありません」

「だから、答えは今のところいらなかな」

「ね、マリア」

「ね、ハリー」

まっすぐうなずく僕らに、ルーピン先生はまぶしそうに瞳を細めた。

「そう。……いい、在り方だね」

一介の教師にしては深い慈愛に、ハリーは不思議そうに首をかしげるのだった。

「——あの、先生。お聞きしても？」

ふと、切り出したのはハリーだ。ハリーは躊躇いながらも、ボガートの授業について尋ねた。

「あの時マリアが止めなければ、きっと先生が止められたのでしょうか？ どうして——」

「君がボガートに立ち向かえば、ヴォルデモート卿になると思ったんだ」

そこで、ハリーは心配そうに僕を見た。——ああ、やっぱり。ハリーはわかっていた。

「でも、僕——」

「ハリーの恐怖は、デイメンターだったね」

言いづらそうなハリーの言葉を引き継ぐ。ルーピン先生は感慨深げに目を開いた。

「ハリー、君の恐怖は——恐怖そのものなのか」

コンコン。ノックの音で会話は切られた。脱狼薬を手にしたスネイプ先生だ。

スネイプ先生は、ハリーとルーピン先生が揃う姿に不快感に眉を寄せると（年がら年中寄ってはいるけれど、さらにだ！）ハリーがいるからには僕もいるという事実^{マリア}に気付いて、瞬時に目をそらした。

うーん、そうか。スネイプ先生からしたら母さんに父さんに父さんの悪友が揃ってる光景だもんな……そりや目をそらしたくもなる。わかつてはいても沸々とした怒りは湧き上がってくるのだが。

同様に思い至ったのだろうルーピン先生も、スネイプ先生に礼を言いつつ苦笑していた。ハリーが興味津々に、見るからに毒物な脱狼薬を飲むルーピン先生を見るので、あまり触れられたくはないだろうとハリーを連れていとまを告げる。

「ああ、待って。マリア、君と話がしたいんだ。君の妹を借りてもいいかい？ ハリー」

「……僕だけですか？」

「僕がいてはいけませんか？」

同時に立ち止まった僕らに、ルーピン先生は眉を下げてきつぱりと言いつ切った。

「マリアだけだ」

「……ハリー、先に行つてて」

「マリア」

「君に、おつかいをお願いしたいんだ。あのね、広間のご馳走をいくつか包んで、クルックシャンクスに持たせてあげてくれないかな。できればチキンを、いっっぱい。ああ、クルックシャンクスが食べるんじゃないよ。クルックシャンクスってば、最近秘密のお友だちがいるんだ。彼がお腹を空かせてるだろうから。クルックシャンクスなら大丈夫だよ、あの子、実は力持ちなの」

「……その、秘密のお友だちは、マリアの友達でもあるの？」

「……うん」

「そう」

ハリーはふんわり笑うと、僕の頬に手を添えてコツリと額を当てた。

「また、ちゃんと紹介してね。マリアの友達は僕の友達なんだから」
「うん。ハリーも大好きになるよ、ぜったいに」

詳しく聞き出そうとはしないハリーの優しさに感謝しながらハリーを送り出す。扉を閉めて、振り返った先——ルーピン先生は哀愁に瞳を揺らしていた。

「……ハリーは、母親似なんだね。そして君は——」
「父親似？」

ルーピン先生は微笑むばかりだった。

「ハリーが大切かい？」

「当然です。たった二人残された家族を大切にしないとしますか？」

「ああ——そう、そうだね。そうだろう」

「……なにをおっしゃりたいんですか？ ルーピン先生」

懸命に言葉を選んでいるらしいルーピン先生は、そしてゆっくりと息をはいた。

「——君たちの在り方が、危ういと思ったんだ」

——危うい？

「ボガートの授業の時、君はハリーをかばったね？ 聞けば、これまでも度々そういったことがあったらしいじゃないか。……君は、ハリーのためならば自己犠牲を厭わない」

「そんなことは」

「君にとつては当たり前のことなのかもしれない。たった一人だけの家族を守りたい——それだけだろう。けれど」

ルーピン先生は確かな意志を持って僕を——僕の瞳を見た。

「君の献身は——とても危ういよ」

言葉が出なかった。

献身？ 自己犠牲？ ちがう。そんな——上っ面だけがうつくしいものじゃない。

もつとドロドロした——ただの自己満足なのに。

「……肝に、銘じておきます」

形だけの礼を残して退室する。膨らんでいく淀みが爆発しそうな気がして——『彼』に会いたいのには、少女の影が彼の隣にあるのだと躊躇ってしまう。

これまでは彼と二人きりになるだなんて、欠片も気にしていなかったのに。周りからどう見えようがどうだってよかったのに。

僕たちは、僕たち自身が友であろうと——『男女』として見られるのだと思い知らされた。

「ドラコ……」

「なんだ？」

返ってくるとは思わなかった声が背中からかけられて、大袈裟に振り返ってしまった。ドラコは、通信紙を振りながら呆れた顔をしてい

た。

「君が言ったんだらう。これを見るくせをつけろと」

ローブのポケットから四つ折りの羊皮紙を取り出してみれば、『どこにいる?』と浮かんでいた。

「なんで……」

「ハリーが珍しく一人で歩いていたら。お前の妹はどうしたと聞いてみれば、リーマス・ルーピンと二人きりで話してるだとか言うじゃないか」

「……それで、わざわざ探しに来てくれた?」

「……今年に入ってから君は不安定だ。原因だつてわかってる。……原因のひとつと茶をしてるなんて聞かされれば、心配もする」

ぶつきらぼうに言い捨てたドラコに、助走をつけて抱きついた。軽々と受け止められて、元々あった身長差がハリー同様さらに開いてしまったのだと気付いて悔しかった。悔しくて——愉快だ。

ごめん、アステリア。君たちの邪魔は決してしないと誓うから——
今だけは許してくれ。

「君、なんでホグズミードに行つてないんだよ」

「今さら行く必要があるか?」

「ハリーが聞いたら悔しがりそうだ」

「会った時に正気を疑う目で見られたよ。なつかしかったね」

外に出て、ベンチに座つてケラケラと笑う。寒さなんて気にもならなかった。

「君こそ、ルーピンとなんともなかったのか」

「なんとも……ウーン、なんとも、あつたかもしれない」

髪と同じ色のきれいな眉がひそめられたので、慌てて続ける。

「先生とどうこうってわけじゃないんだ。そうじゃなくて——僕って、ハリーに甘い？」

「なんだ突然。あれだけ溺愛しておいて」

「溺愛かあ……」

ウーン、と腕を組む。ドラコにまでそう見えるのか。

「じゃあ、ハリーにやさしい？」

「——いや」

ドラコは眉を寄せてはつきりと否定した。

「優しいとはちがうだろう」

「——」

思わず彼の顔を凝視していた。ドラコは、だからなんだ、とでも言いたげに涼しい顔をしていた。渴いた気のある喉を唾を嚥下して潤す。

「そう——そうだ、その通りだ。僕はハリーに優しくなんてない。——自分に、やさしくしたいだけなんだ」

彼から視線をそらして、背を丸める。

『僕』がしてほしかったことをしてるだけなんだ。小さい僕はおはようもおやすみもなかった。挨拶のキスだってなかった。風邪を引けば隔離され、しんどい体を誰かに抱きしめてもらえるなんて想像もできなかった。——愛していると、言われた記憶がなかった」

丸めた身のまま、腕を抱える。ひどく自分が小さな存在に思えた。

「かばってほしかった。ダドリーなんかよりハリーが大切だと言っただけだった。ダドリーよりもたくさんプレゼントがほしかった。無条件に愛してほしかった。なにも不安に思う必要のない絶対がほしかった。——でも、いなかったんだ。『僕』にマリアはいないんだ」「かわいそうだろう？ 哀れだろう？ 僕は、ハリーを通して小さい僕を慰めただけなんだ。何て言うんだったかな、ハーマイオニーが——『僕』のハーマイオニーが教えてくれたんだけど……マグルのなにかの学問で、こういう心理をインナーチャイルドケアとか言うそうだ。ハリーは、僕の亡霊ハリーに利用されてるだけなんだ。……ほんとうに、かわいそう」

自嘲のまま吐き捨てる。なんて——ハリーほくはかわいそうなんだ。

「だから、グレンジャーやウィーズリーでなく僕の元に来るのか」「——だって！ 彼等は『ハリー』の親友なもの！ 僕らの友情にマリアなんていなかったもの！ ロンが、ハーマイオニーが——『僕』以外を一番の友にするなんて見たくない。そんなのは僕が許せない！ 三人の中に、『マリア』を入れてほしくない」

ぶくぶくと膨れ上がった淀みを吐き出すつもりだったのに、それは喉元でくすぶって消えてはくれない。

ドラコは、痲癩を起こす子供みたいな僕に小さくため息をついた。

「まったく……マリアはバカだな」

「……そうだね」

力なく肯定した。僕はとてつもなく愚かだ。

「ルーピンになにを言われたかは知らないが——君がハリーになにを思っているように、君がハリーを愛しているのに変わりはないだろう。そして、それはハリーに確かに伝わっている。……それでいいと、僕は思うけどね」

「……そうかな」

「ああ。自己満足でも偽善でも、現にこの世界のハリーは家族の愛情を知っている。それは君のおかげだ。……父親を知らないからいい父親になれないと、悩む必要はなくなるかもな？」

かつての親子喧嘩を揶揄されて、抜けた力のまま吹き出した。

「君がハリーを愛することに罪悪感があるうと、ハリーには関係のない話だ。そんなこと本人は考えもしてない。悔やみ損だ」

「なんだ、それ。アハハ、損得で考えられたら苦労しないよ」

「疲れたら損得で考えてしまえばいいんだ」

損得の世界で生き、苦しみ続けてきた『ドラコ・マルフォイ』らしい言葉に、ようやく、大きく息をした。

「そつか。うん、そうかもね。……すつきりした」

「なによりだ」

伸びた背をドラコが叩く。なんとなく、彼なりの励ましと照れ隠しなんだとわかった。

「……避けるなよ」

「うん？」

「君は僕にアステリアのことで遠慮するなと言った。……なら、君だって僕に遠慮するな。都合が悪ければ断るし、アステリアを優先するかどうかだって、自分で選ぶ。君は余計なこと考えずに今まで通り僕を振り回せばいいんだ。自分勝手のくせに今さら見当違いの気遣

いなんて、似合わないぞ。失敗するのがオチだ。それがお前だろう、ポッター」

下手くそな喧嘩を売られて、ニンマリと笑ってしまう。

『ポッター』の話ができるのなんて、君だけだもんね。——お望み通り、君がうんざりしたって手放さないさ」

「お忘れのようだが、『マルフォイ』の話ができるのも君だけだからな。僕から逃げられると思うなよ。蛇のしつこさはよくご存知だろう？

英雄のポッター？」

軽く小突き合って、それからバカっぽく大笑いする。

やっぱり僕には——君が必要だよ。『僕』のドラコ。

「お好きなフレイバーはございますか？ ミスポッター。——あら、そう。でしたら、ドラコお兄様が好んでいらっしやる茶葉を使いましょう。きつとお気に召しますわ」

——なんだろう。この状況。

柔らかくて繊細そうな髪を揺らして微笑む目の前の小さな淑女に、中身のないティーカップへと視線を逃がす。そして思い返す。

ドラコと別れて——ハリーを探してひとまず大広間へ行こうとして——そうしたら目の前に彼女が現れて——

「お初にお目にかかります、ミスポッター。わたくしはアステリア・グリーングラスと申します。ご同輩のドラコ・マルフォイ様についてお話したいことがございますので、ミスポッターのお時間をいただきます。よろしいでしょうか？」

とまったくよろしくないうちにあれよあれよとさらわれて——現在に至る。

そもそもここはどこだ。お貴族さま専用サロンか？ ……え、ほんとうに？

「あの——ミスグリーングラス？」

「どうぞアステリアと。ミスポッター」

「あ、じゃあわたしのこともマリアで」

「いえ、それには及びません。わたくしとミスポッターは今後敵となるでしょうから、このままミスポッターと呼ばせていただきます」

「敵になるの……」

きつぱりと線引きしたアステリアに頬が引きつる。

……こんな人だったか？ ほとんど覚えてないけど……直接会った印象やドラコやスコピウスからの話では、繊細な優しい人のイメージ

ジだったんだけど。少なくとも病弱には見えない。すごくしつかりしたご令嬢だ。

「ええと——じゃあ、アステリア。ドラコのこと話して？」

「はい。ドラコお兄様との距離のはかり方について、今一度お考えいただきたいのです」

ものすごく真つ向からの牽制に呆気に取られてしまった。その間にも、アステリアは慣れた手つきで茶を互いのティーカップに注いでいた。お嬢様でも自分でお茶とかいれるんだ……。そしてドラコ、君、自分の未来の嫁にお兄様とか呼ばせてるの？ 相棒のそんな趣味、知りたくなかったよ。

「えーと、つまり、距離が近すぎると？」

「物分かりのよろしい方で安心いたしました」

微笑んだアステリアは、優雅にティーカップを傾けた。

なんだか彼女は——彼女からは、パンジー・パーキンソンのような、恋する乙女の情熱とでもいうのか——過激さを感じない。どこまでも落ち着いていて、いつそ事務的にすら思える。言葉は厳しいが雰囲気は涼しげだ。

「……あの、アステリア？ おそらくあなたは誤解してると思うんだけど、わたしとドラコはそんな——」

「普段通りの口調でけっこうですよ。ミスポッターはボーイツシユに振る舞われるとお聞きしておりますので」

「……僕とドラコは、そんな関係じゃあないんだよ。これまでがこれまでだったから信用ならないかもしれないけど、これからはちゃんと君のことを考えて気を付けるし」

「なぜそこでわたくしの名が出るのでしょうか」

「なぜって……」

僕はすっかりまいっていた。たしかに、彼女自身からドラコへの気持を聞いたわけではない。けれど、あんなにも——あんな目でドラコを見ていたのに。

「わたくしがドラコお兄様をお慕いしているからですか？」

「そ、そう——そう、なんだけど……」

「でしたら、それは不要なお気遣いです。——わたくしは、ドラコお兄様とこれ以上の関係は望んでおりませんから」

「えっ」

紅茶へ手をつけることも忘れて呆ける。彼女は——アステリアはドラコと恋仲になる気がないのか……？

ああもう！ ドラコ、君、アステリアとのなれそめをもっと詳しく話しておいてくれればよかったのに！ ここからどうやって結婚にこぎつけたというんだ!?

「なら、どうして僕に？」

「——あなたが純血でないからです」

思わず閉口した僕に、アステリアは実直な眼差しで続けた。

「ドラコお兄様がどのようなお立場でいらっしゃるか——マグルで育ったあなたにすべてを理解しろなどと無理は言いません。しかし、純血貴族の——それも、ブラック家が実質没した今、マルフォイの跡取りという肩書きはあまりに大きく重いものです。貴いものです。ただ一人の彼は、いずれ、名のある純血貴族の令嬢いただきマルフォイ家当主となられるでしょう。……たとえば、ドラコお兄様ご自身がどう思われようとも」

アステリアは元々美しかった姿勢をより張りつめて正すと、少女ら

しい感情をおくびにも出さず告げた。

「率直に申し上げましょう。——あなたは分不相応です」

空間すべてに、いやに響いて聞こえた。それだけ彼女の声だけに集中していた。

「……その、名のあるご令嬢は君ではないのかい？」

「いいえ。ありえません」

アステリアは迷う素振りすらない。最初から、彼女は堅い意志を持って対話の席についている。

「たしかに、グリーングラスの名は聖28一族にも与される、揺るがぬものです。恐縮な話ではございますが、マルフォイ家に嫁ぐ娘としては申し分ない家柄でしょう。——姉であるならば」

アステリアが一呼吸入れるあいだに名を絞り出す。……ダフネ、だったか。

「——わたくしは、出来損ないです」

あんまりな言葉に、思わず腰を浮かせれば彼女は楚々とした宝石を思わせる笑みで首を振った。

「客観的事実ですので、お気遣いなく。わたくしは生まれつき欠陥を持っております。……その様子ですと、ドラコお兄様からお聞きおよびでいらっしゃるのでしょうかね。わたくしのような訳ありをもらってくれる方など——それこそ、良くしてくださいるドラコお兄様くらいのものでしょう」

「それなら」

「だからこそ——たとえドラコお兄様が望んでくださったとしても、両家が承諾したとしても、わたくしはうなずきません。わたくしだけは許しません。——ドラコお兄様の重荷になるくらいならば、わたくしは潔くこの呪いと共に果てるでしょう」

それはかなしい言葉だと僕にすらわかった。だというのに彼女は——透き通るほど気高かった。

「君は……ドラコが好きなんだね。それに、ドラコだつて」
「ええ。わたくしを愛してくださっています。そしてわたくしは——あの方に『恋』をしています」

苛烈さはない。なにがなんでも奪うという荒々しさもない。——それでも、少女は恋をする乙女の顔をしていた。

「だからこそ、わたくしは己を——そしてあなたを許しません。たとえばあなたを選んだドラコお兄様の重責は、限りなく重いものとなるでしょう。おやさしいあの方はきつと苦しまれるでしょう。わたくしは、ドラコお兄様のしあわせのためならばいくらだつて憎まれるのです。恨まれるのです。この押し付けがましい愛を突き通します。——それが、一族のはじかれものであったわたくしを見てくださつた——ドラコお兄様へのわたくしにできる唯一の恩返しなのです」

たおやかに凜と宣言した彼女には、誠実さしかなかった。
……こんなにも、敵意のない愛に溢れた敵対宣言があるだなんて。

「ですから、わたくし、アステリア・グリーングラスはあなたとドラコお兄様の邪魔をさせていただきます。この席をもって宣戦布告いたします」

ニツコリ笑った彼女には、それまでの完璧な笑みではなくようやく

子供らしさが見えた。初めて見せたあどけないさまに、安堵すら覚えた。

「……君は、つよいな」

まだ十一歳だというのに、自分の立場を理解しきっている。

どれだけの子が彼女と同じようにできるだろう。十一歳の幼さで。

「ええ、そうでしょう。こんな体ですから——その分、わたくしは心を強く持ったのです。わたくしは、誰よりも心が強いのです」

得意気に胸をそらす少女があんまりにもかわいくて笑ってしまった。彼女も、敵だと言うくせにまるで態度と表情がともなっていないで、素直な子供なのだここにきて思わされた。なんてずるい女の子だ。

「でもね、アステリア。——ひとつ、間違えているよ」

ようやく口に含めた紅茶を楽しんでから、ニンマリと笑う。

「僕とドラコ、ほんとうにそんなんじゃないから」

「……………」

「共有してる秘密が大きすぎるだけで、関係としては悪友とか、戦友とか——たぶんその辺り。男女として見ることはないんだよ」

「……………」

「つまり——君の取り越し苦労だ」

茶色の瞳をパチパチとまたたかせたアステリアは、まあ……と呆けた。

「あら——つまり——これって——ドラコお兄様の——」

そして少しのあいだ口をつぐむと。

「やっぱりわたくしの敵ですわ」

「あれ!？」

なんでそうなった!？」

「ずるいったら——もう」

「なにがどうずるいのかわからないよ……」

ティーカップの向こうでむくれてしまった少女に脱力する。薄々
気付いてたけど——この子、けっこうお茶目だな？

「——ねえ？ アステリア」

「はい、ミスポッター」

「やっぱりその……ミスポッターっていうのはやめない？」

「ミスターの方がよろしいですか？」

「察しがよすぎる……いや、そうじゃないんだ。そうじゃなくて——
僕は、君と友達になりたいと思ったんだけど」

アステリアはまたもや幼げにまばたきをした。

「……あなた、変わってるって言われませんか？」

「心外だけどよく言われるよ」

レイブンクローの彼やセドリックを思い出してなんとも言えない
気持ちになった。僕のどこが変わってるというんだ。

「恋敵宣言をした女に友達になろうと返すなんて」

アステリアはレディの仮面をすっかり剥ぎ取ってしまうと、頬杖を
ついて悪戯っぽく笑った。

「マリアって変な人」

「——ドラコ、アステリアを泣かせたら僕が許さないから」

「……君は唐突でないとしゃべれないのか？」

夕食も兼ねたハロウィンパーティーの途中、大広間を出ようとして
いたドラコを偶然発見した僕は、瞬時にやつを捕まえた。そして廊下
の隅の死角まで連行しマフリアートをかけたところで——冒頭に戻
る。

「ついさっきアステリアと友達になってね」

「まずそこから説明がほしいんだが？ なにをどうすればそうなる」

まったくもってごもつともな疑問だったので、アステリアにさらわ
れ唐突に開催された茶会について詳しく語った。どうやらアステリ
アは恋心云々を本人にだって隠してはいないようで、ドラコは頭がい
たい様子だった。

「なにをしているんだ、アステリア……」

「彼女、君や君の息子から聞いてたかんじとかなりちがったんだけど、
昔はこうだったの？」

「いや」

ドラコは神妙に首を振った。

「そもそも僕らが互いを認識したのは第二次魔法戦争後だ。どちらも

純血主義に疑問を持ったことをきっかけにしてな。だからこの歳の彼女のことは——はつきりいつて僕は詳しくない。だが——間違はなくズレは起きている」

廊下にお行儀悪く座り込む。宴はまだまだ盛り上がりを見せているようで、廊下に人気はなかった。扉の向こうの喧騒がまったく別の世界のものようだった。

「まず、アステリアの呪いが判明したのは僕と結婚してからだ。けれど、ここでは彼女は生まれた瞬間から虚弱体質となっていた。——つまり、家の対応もかなり変化している」

「家の対応……」

「僕が知ってるアステリアは大切に育てられた次女で……愛情をたっぷり受けた子供特有の甘さを持っていた。けれど——彼女と話したならわかるだろう。こちらのアステリアは——おそらく良い扱いを受けていない。それが、貴族の子供に生まれるということなんだ」

僕はなにも答えられなかった。僕には、その苦悩は決してわかり得ない。

「ちつとも子供らしくなかっただろう。あれが、彼女なりの防衛法なんだと僕は思う。——隙を見せず完璧な淑女でなければ周りを黙らせられなかったんだ」

だから——だから、あんなにも笑顔がうつくしい。完成品の無機質さだ。

「僕はアステリアを決して見捨てたりはしない。僕が知っている彼女でなかったとしても——彼女が望まなくても」

「うん」

ドラコの手を取って強くうなずく。

「それでこそ、スコーが誇ったドラコ・マルフォイだよ」

結局、最後まで再婚しないで——両親からどれだけ催促されようとも生涯の妻をアステリアただひとりとしたドラコ・マルフォイ。彼の愛情の深さをもっとも知るのは、この世界ではきつと僕だろう。

アステリアがいたからスコーピウスが生まれ、アステリアとスコーピウスを得たからマルフォイは変わった。

「彼女は手強いよ、ドラコ。だけど、君だって同じくらいしつこくて厄介で執念深いもの。きつと折れてくれるさ」

「言ってくれるな」

苦々しげにするドラコにクツクツと喉で笑う。

そのしつこさで在学中は散々な思いをさせられたんだ。意趣返しできるタイミングがあれば逃さないとも。いくつになってもいじり倒してやる。

「と、いうかだ。——僕、君にすごく聞きたいんだけど」

両手で彼の手を掴んだまま、誰にも聞こえないのに声を潜めた。

「……自分の未来の奥さんにお兄様呼びさせてるのって、どうかと思う」

「——つち、ちがう、そんなんじゃない！ その変態を見る目をやめろ！ あれはアステリアが何度言ってもやめな——おい、聞いているのか！」

いつの間にか宴会も終了したようで、にわか騒がしくなった廊下にマフリアートを解く。防音効果がなくなってしまうえば、ドラコだっ

て下手には騒げない。様々な言葉を飲み込んだドラコは、反射のように顔が真っ赤だった。

「ほら、監督生に見つかる前に寮に戻——騒がしいな」

和気あいあいだったはずがどこから悲鳴が聞こえて、生徒たちの様子はカオスと化していた。先生方が大広間を飛び出していく。どこに向かつて——？

「あ。」

ハロウィン——クイティツチ同様、毎年恒例のごとくトラブルが起きていた鬼門の日。

三年生のハロウィンではなにがあったか。

「——シリウスだ」

ブラック奇襲事件により、その日は大広間で嬉し恥ずかしな全校生徒お泊まり会となった。嬉し恥ずかしだとか茶化せているのはマリアのみだが。

紫の寝袋に包まれて、三人組はコソコソと話し合う。そのうちに近くのグリフィンホール生も参加して内緒話は大きくなっていく。寝かしつける仕事を任されたパーシーが大張りきりで各々に注意して回っている。

「今夜を奇襲に選ぶなんて、ブラックも間抜けさ。ハロウィンパーティーで寮はもぬけの殻だつてのに」

だからこそだよ。生徒がない今ならスキヤバーズを秘密裏に仕留められると思つたのさ。

目を閉じたまま心の中だけで答える。

「どうやって侵入したんだと思う？」

「きつと変装したんだ」

「ディメンターに見付からないでいられる変装があるのなら、ぜひ拝見してみたいものね。秘密の抜け道だつてファイルチがゼーンぶ知ってるつていうのに」

ハーマイオニーの反論にさらに心の中で反論する。

変装というのは惜しかったね。変装じゃなくて『変身』だ。そして初代悪戯仕掛人の彼等はファイルチなんかよりもずっとずっと抜け道を知ってるのさ。

口角が上がってしまいそうになるのを堪えていれば、ふと頭を撫でられた。それだけでわかるのだ。——ハリーの手だ。

「みんな、マリアが眠れなさそうだから……までにしよう」

「マリアなら眠ってるわ？」

「ううん、目を閉じてるだけだよ」

当然のようにハリーが答えるので、おかしくなって目を開いた。

「ハリー、気にしなくてもいいよ」

わあ、ほんとうに起きてた。ロンが目を丸くして言った。

「僕が気にするんだ。パーシーにだって目をつけられるよ」

子供を寝かしつけるみたいに片手は頭を撫でながら、ハリーに寝袋ごと抱きしめられる。

昔は僕の方が大きくて彼を腕の中にすっぽり収められていたというのに、今ではすっかり逆だ。男の子って成長が早い。男だったからわかるとも。来年辺りには成長痛で泣きを見ることになるぞ。

「あなたたちを見てると、性差なんてどうでもよくなっちゃうわね」

「セーサ？」

ロンのとぼけた声と、その後ろから聞こえる、ハーマイオニーいわく問題を起こす方の双子の「これは負けてられないぞ。俺たちも愛を示そうじゃないか、兄弟！」と騒いではパーシーに叱られている声を聞きながら、僕たちは身を寄せ合って笑った。

「楽しいね」

「不謹慎だけどね」

互いの額に唇を落とし合う。

「おやすみ、ハリー」

「おやすみ、マリア」

おやすみ——シリウス。

翌日から強化された見回りとハリー個人への監視体制に、ハリーは
ずいぶんと悩まされていた。どこへ行くにもパーシーや先生方がつ
いてこようとするのでから。

——当然だ。僕とドラコ以外はシリウス・ブラックの狙いはハリー
だと思い込んでいる。今、希望の象徴たるハリーを失うわけにはいか
ない。

可能性が限りなくゼロだったホグズミードへの許可もさらに遠退
いて、鬱憤がたまるハリーの心を表すように天気も崩れていく。そし
て、最悪の嵐の中グリフィンボールはクイディッチの試合日を迎え
た。

対戦相手はスリザリン——だったところに、黄色のユニフォームが
見えて、今回もそうなるのか、と脱力する。

「セドリック」

「やあ、マリア。ひどい天気だね。風邪を引かないようにするんだよ」

「それはセドリックの方でしょ」

「じゃあハリーに伝えておいてくれ」

くしゃやくしゃと髪を混ぜられる。指が気持ちよくてクスクス笑っ
ていれば、乱れた髪は本人によって整え直された。アフターケアまで
バッチリだ。

僕はすっかりセドリックの妹分のような扱いを受けていた。心倣
しかセドリックの恋人、チョウウからの視線が痛い。淡い憧れだったと
はいえ、一度は恋した女性から嫉視されるというのはなんとも気まず
いものだ。僕が男の子のハリーのままならこんなことはなかっただ
ろうに。……ハリーだったなら、セドリックとこれほど親しくなるこ

ともなかつたけど。

「どうしてスリザリンと交代したんだい？」

今回はシーカーの腕だって無事だ。魔法薬学で見かけたセオドルはなんともなさげだった。

「突然、みーんなが体調を崩したそうだ」

ちつとも信じてない顔でセドリックは肩をすくめた。それに、僕もまったく同じ顔で呆れてしまった。ちよつと見つめ合って、いつかでイタズラを成功させた時のようにくふくふ笑う。

セドリックは寡黙とされているが、親しくなってみればこんなにもユーモラスな人だ。ハツフルパプらしい。

「僕、応援してるよ。もちろん一番に応援してるのはハリーなんだけど。君のことだって」

「ああ、ありがとう。天気にならず、全力を尽くしてくるよ」

激励の握手を交わしてグラウンドへと送り出す。ハリーには朝に応援のキスもハグもついでに眼鏡への防水魔法も済ませている。あとはドラコが取ってくれているだろう客席に向かうだけだ。赤の中に埋もれる緑のローブは、まったくわかりやすい。

ローブの中から隠し持っていた透明マントを取り出して。

「さて、迎えに行こうか」

もはやクイディッチのグリフィンボールチームの対戦日に、グリフィンボール席で緑のローブが見えるのは恒例になってしまったの

か、彼も周囲も当たり前の顔で席は埋まっていた。だがしかし彼の周りに申し訳程度に距離がつけられるそれも恒例化しているらしく、いそいそと隣に収まる。余分な空間が今日ばかりはありがたい。

一人だけグリフィンドールを応援したりして、スリザリンの寮生たちにはバッシングを受けたりはしないのだろうか。……仲間内の波を泳ぐのは上手いドラコのことだ。僕が心配することでもないか。

「双眼鏡、まるで役に立たなさそうだね」

「翌日には去年の風邪大流行が再来するだろうさ」

叩き付けてくる雨の弾丸をフードと防水魔法で弾く。防げるのは雨だけなので、体温を奪うような寒さが目立つ。しかし、杖なし魔法で防寒までかけるのは、三年生の身ではコントロールに不安があるので我慢するしかない。

「昨日、ルーピン先生がDADAを休んだんだよ。それで、スネイプ先生が臨時講師になったんだけど」

ピクリ。彼が身じろぐ。——ドラコではない。

「スネイプ先生ってば、ルーピン先生の授業進行を完全に無視して人狼の項目をやり始めてね、ハーマイオニーがカンカンだったよ。人狼と普通の狼の違いについて聞かれたとき、いつも通り手を挙げるんだけど、やっぱり無視されちゃって。だから僕も手を挙げてやれば、観念してハーマイオニーを指したよ。……毛嫌いしてるでしやばりなハーマイオニーを指名しちゃうくらい、僕と会話するのはお気に召さないらしい」

グルツと小さく唸り声が出た気がして、隣のなにもない空間を叩く。

ダメだよ。約束したよね、吠えない・騒がない・動かない、て。――

—シリウス。

「ルーピン先生、どんなご病気でいらっしやるんだろうね」

彼に伝えたかった情報は済んだので、ドラコに向かつてニッコリ笑う。僕が置く手の位置に、そこにいる透明のなにかを理解したドラコは、胡乱な目で僕を見ていた。

ここにはリーマス・ルーピンもセブルス・スネイプもいるんだ。だからもつと慎重になってくれよ——シリウス。

ゴロゴロと一際大きく雷鳴がとどろいて稲妻が暗雲を裂いた瞬間、赤と黄色の点が飛び立った。雨が視界をずいぶんと邪魔して、リーの実況がなければなにが起こっているのかわからなかったにちがいない。その実況も、油断すれば風と雷に遮られるのだから、まったくもって最悪の試合環境だった。

何度かのタイムアウトを挟みつつ、両者とも箒にしがみついていたその時。——天候のものでない冷気がただよった。

ハツと息をついて、身を抱える。杖を握りしめる。誰かの腕が僕の肩を抱いてくれる。いつだって低い彼の体温が、唯一熱に感じられるほど体が冷えきっていく。

パトローナス……パトローナスを喚ばなくては——いいや落ち着け、だめだ、三年生が喚べるようなものではないんだ。僕が使ってはまずい——まずいのだけど——

グラウンドにひしめくおぞましい影が、箒から落ちたハリーへと天からの恵みであるかのように手を伸ばすのを見て、僕はなにかが頭の中で弾けたのを感じた。

——絶望に、ハリーを触らせてなるものか。

「エクスペクト・パトローナム」

イトスギの杖から銀の光がほとばしり、牡鹿を模していく。牡鹿がハリーの元へと駆けていく。その下では、ダンブルドアが同じく銀の

光を振りかざしてデイメンターを払っていた。

落ちるハリーが減速する。ハリーを背に乗せるようにして牡鹿が寄り添う。それをシリウスは見ていた。——ただただ、見ていた。

ハリーを地面へ届けて、気遣わしげに顔へ鼻を数度すり付けた牡鹿は、そして霧のように消えた。

セドリックがスニッチを捕り、試合終了のホイッスルが雷に負けじと響く。ハリーが、ダンブルドアが出したひとりで動く担架によって運ばれていく。ダンブルドアは猛烈に怒っていた。そして——僕も。

「マリア」

背を撫でる彼に、魔力をこっそり奪われた身を預ける。

「……これ、君がやったってことにしない？」

「バカ言うな」

「だって、君は優秀と見られているだろう？　呪文学が苦手な僕よりも君の方が説得力があるじゃないか」

正確には苦手と思われている、けども。

「……だとしても、先生方の目はごまかせないぞ」

「うん。……うん、それでいいや——今は」

ハリーが凍えなかったなら、それで。

そこにあるだろう伏せた姿勢の彼に触れる。彼は伏せてはいなかった。首を大きく伸ばしていた。

だから、首から背までマント越しに撫でた。

「どうか、内緒にしているね。黒犬さん」

あなたが泣いたことは、秘密にするから。

医務室は今や冷えきっていた。ニンバスの残骸を握ってうつむくハリーを抱きしめる。ハリーが気絶してからのことを語っていたロンドンとハーマイオニーは、僕らに気を遣って退室した。医務室には、控え室のマダム・ポンフリーと僕たちだけが残された。

結局、牡鹿のパトローナスはダンブルドアが出したものと生徒たちは認識したらしい。みな、落ちゆくハリーとグラウンドに注目していたのが幸いした。ハーマイオニーのような鋭い生徒なんかは、観客席から走ってきたように見えたのだけど……と怪訝そうにしていたが。

「マリア」

「なあに、ハリー」

背を撫でながら耳をかたむける。

「母さんの、声が、聞こえるんだ」

「……うん」

「子供たちだけは、て——自分じゃなくて、僕らの命乞いをするんだ」
「うん」

「僕………いやだ」

肩に擦り付けられる重みを甘受して、いつそう強く抱いた。

僕は、その声を直接聞いたことがある。

父が逃げると叫ぶ。母がくり返す。——ハリーだけは……ハリーだけは……。

きつと、あの瞬間にアルバスが手を繋いでいてくれなければ——側にロンとハーマイオニー、そしてジニーがいてくれなければ、僕はたえられなかった。

大人になったって、あんな気持ちにさせられるのだ。子供のハリー

にとつて、どれほど恐ろしいか。

どれほど——悔しかったか。

「ハリー。——大人を頼ろうか」

「え？」

目を赤くしたハリーの両頬を包んで額に額を当てる。

「聞いたでしょう？ ホグワーツ特急で、ルーピン先生がダンブルドアと同じ光を出したって」

「あ……うん。そうだった」

「頼んでみようよ、僕たちにもできるか。君の恐怖に立ち向かおう」

呆気に取られていたハリーは、やがて強くうなずいた。——母さんの瞳がとても綺麗だった。

それから丸一週間療養したハリーは闇の魔術に対する防衛術の授業に出ていた。先日スネイプ先生が人狼について先走って講義したのを非難されたルーピン先生が課題を取り消したり、それにハーマイオニーが残念そうに声を上げたり、ガラスの中のヒンキーパンクと見つめあったりと、今日も笑いに溢れた授業だった。終業のベルが鳴り、僕たちは自主的に教室に居残った。

「やあ、ハリーにマリア。今日の授業はわかりにくかったかな？」

「いえ、今日も最高でした」

「わかりやすかったし、楽しかったです。ルーピン先生」

「嬉しい言葉だ。それじゃあ——授業の質問以外のご用かな？」

ハリーと僕は顔を見合わせうなずいた。

「「ディメンターの払い方を教えてほしいんです」」

ルーピン先生は、はた、と教材をしまっていた腕を止めた。

「それを——私に聞くのかい?」

ルーピン先生ははつきりと僕を見ていた。……やっぱり、教師の間ではバレてるか。そのうちマクゴナガル先生から呼び出しがあるかもしれない。

「先生は、汽車の中でディメンターを払われたと聞きました。……この間のクイディッチの試合の件は、ご存知で?」

「ああ……箒のこと、気の毒だった。暴れ柳に当たったんだってね。あれは——」

整理の手を完全に止めて、ルーピン先生は語る姿勢へと入った。僕らは課外授業に挑むように聞き入った。

「——先生、ディメンターのおそろしきはわかりました。そんなやつらから逃げきったブラックが、まったくの気狂いだってことも。……でも、僕はやつらと戦えるようにならなければいけない。気絶ばかりしては、」

「しかし、ハリー、それは——それは、とても、三年生にできる術では——」

そこで、ルーピン先生はハツと僕を——僕の瞳を見つめた。

思い出しているのかもしれない。ありえないことを、ありえない年齢でやり遂げたかつての親友たちを。

自分のために——アニメーガスを取得した天才と秀才と努力家を。

——この瞳に。

「……わかった。ただし、来学期からだ。休暇に入る前にやらなければならぬことが山ほどあってね。待てるかい?」

ハリーは瞳を輝かせてうなずいた。そんなハリーに、僕まで嬉しくなって頭を撫でた。

「マリア」

退室の際に、以前の再現のように声をかけられた。ハリーは、ちよつとだけ眉を寄せて拗ねた顔で振り向いた。

「また、マリアですか？ 僕をのけ者にするんですか？」

「いや、いや、ハリー。そんなつもりはないんだ。君から妹御を取り上げたりはしないよ。……ただ、ひとつだけ、聞かせてほしい」

ルーピン先生は切なげに瞳を細めて僕へ尋ねた。

「それは……誰から——？」

瞳を閉じる。——あなたは、僕の記憶の中にしか存在しないのだから。

「臆病で、ふわふわした小さな問題を抱えていた——恐怖との闘い方を誰よりも知る勇敢な人でした。……それから、チョコレートが大好きでした」

「——」

ルーピン先生は困惑に目を見開いていた。通じただろうか——通じて、しまっただろう。この報告はまちがいなくダブルルドアへと伝えられる。

それでもいい。……永遠に礼を言えなくなってしまうより、ずっといい。

今度こそハリーと共に退室する。

ハリーはなにもきかない。僕だったなら、どうして話してくれないのかと癩癩を起こしていただろうに。——僕が、この小さな男の子を、こうしてしまったのか。

「ねえ、ハリー」

僕らの歩みは自然とゆっくりになっていった。

「君は……シリウス・ブラックが、こわいかい？」

頭の中の冷静な部分が、今すぐに黙れと僕を睨んでいた。けれど、それは頭のすみっこにまで追いやられて、とてもじゃないが熱くなつた思考を止める力にはならなかった。

「こわい……こわいのか、よくわからないよ。だって、会ったこともない人だもの」

「でも、気狂いって言った」

「……もう言わないよ」

ハリーは立ち止まった。手を繋いでいた僕も必然と立ち止まった。

「君が傷付くなら、もう言わない」

決断をする時の彼の瞳って——ほんとうに、綺麗だ。

「……僕、傷付いてる？」

「僕にはそう見えるよ」

「ハリーに見えるなら、そうなんだろうね」

再び歩き出す。絶対に隣を歩いてくれる彼の足取りは、僕とまったく同じなんだ。——僕らは、同じだった。

「もう、わからないや」

僕はいつたい、なにがしたいんだろう。

クリスマス休暇前に、二度目のホグズミード解放日がやってきた。ハリーはすっかり諦めて『賢い箒の選び方』の本を読んでいた。そんなハリーをロンとハーマイオニーは気の毒そうにしている、幼い親友二人がハリーをどうにか構おうとする姿に、今の彼にはよくないと察した僕は二人の肩を取ってさっさと談話室を出た。

「マリア、ねえ、ハリーにわたし、なんて声をかけたらいいか」

「かけなくていいんだよ、ハーマイオニー。今はそっとしておいて」
「でも、かわいそうだわ。だからとって、城を抜け出していいわけではないけど——でも、悪いのはシリウス・ブラックであって、ハリーじゃないのよ。なのに、彼が罰を受けてるみたいな顔をするの」

「オー、我らが親愛なるハーマイオニー、わからないかい？ マリアはお節介だつて言いたいのさ。かわいそうより、これで抜け出せるわよって君お得意の作戦で話しかけてやった方が百倍は喜ぶだろうね」
「的確な助言をどうも、親愛なるロン・ウィーズリー。お礼にわたしからも助言を差し上げるわ。そのハーマイオニー・グレンジャーからはきつとポリジューズ薬の臭いがするでしょうね」

僕を挟んで痴話喧嘩が始まってしまったので、ホグズミードへ向かう生徒たちの中にそっと置き去りにする。仲良く喧嘩してくれ。

さて、ハリーの機嫌はいかほどになっただろうかと踵を返したところ——なんだかデジャヴな腕に捕らわれた。

「俺たちの弟は時々いいことを言うと思わないかい？」

双子のシンパシーを強烈に感じさせる二代目悪戯仕掛人たちだ。そのまま、宇宙人の捕獲スタイルでズルズルと連行される。

「マリア、君を次代の悪戯仕掛人と見込んで、我々二代目悪戯仕掛人からとある品を贈呈しよう」

「すこーし早めのクリスマスプレゼントさ」

「見込まないでおくれよ……」

ずいぶん久しくずいぶん見慣れた羊皮紙がフレッドだかジョージだかのローブから取り出される。

「見てろよ、こう使うんだ」

『われ、ここに誓う。われ、よからぬことをたくらむ者なり』

四つの名前が浮かび上がる。ムーニー——ワームテール——パツドフット——プロングズ。

彼らの友情の証だった名だ。ひとつを指でなぞってみる。——プロングズ。もう、決して足跡が浮かび上がることはない人。

そんな僕の様子を、驚きのあまり声が出ないのだと受け取った双子のイタズラっ子たちは、嬉々と入手口や使用法について説明した。

「さあこれでおいてけぼりはなしだ」

「素敵なクリスマススを、マリア」

「もちろん、ハリーへのクリスマスプレゼントでもあるわけだよね？」

「モチのロンさー！」

ハイタッチを交わして、今まさに地図が示している隻眼の魔女像の抜け穴からホグズミードへ向かう二人を見送ってから、グリフィンドール塔へと直行する。そして太った婦人の肖像画が見えたところで、ふと立ち止まった。

——これをハリーに渡して、どうなる？

きつとハリーはシリウスのひどい冤罪について聞いてしまうだろう。——ひどく、憎むだろう。僕がそうだった。

僕とハリーは確かに性格に違いはあるが——ハリーの方がずっとずつと穏やかだ——根本は一緒だ。どれほど、心のうちに荒れ狂った憎悪を飼うことになるか。

……あの子が知らなくなっただって、支障はないんじゃないか？
たたまれた地図を見る。

だって、そうだ。ルーピン先生に渡して、生きているワームテールを見つけてもらって、シリウスの真実に確信を持たせて——

「……だめだ」

くしゃりと、手の中で地図が歪んだ。

だめだ、それは、エゴだ。勝手をしちや駄目だ。目的をひとつに絞って——そのひとつのために、余分なものは切り捨てなきや。

思い出せ、マリア・ポッター。去年の惨事を。死人の顔をしたドラコを。引き金が誰だったかを。

「お前は、英雄じゃないんだぞ」

深呼吸する。

声の震えは、合言葉を叫ぶ裏に隠した。

アステリアは紅茶をいれるのが上手い。そして——実はかなりのお菓子好きである。たぶん、ルーピン先生に負けず劣らず。

「マリアの好みを把握しておりませんので、一通りはと」

一通り、と示されたテーブルには本当に一通りの種類のケーキが置かれていた。生クリームにいちごのケーキ、チョコレートケーキ、チーズケーキ、シフォンケーキ、魔女鍋ケーキ……アフタヌーンティーにしては片寄りすぎているし豪華だ。

「……前回はお茶だけだったよね？」

「これから敵対する予定でしたので」

「ああ、ウン」

「それは変わりませんが……マリアとわたくしは、お友達ですから」

彼女なりに僕との付き合い方を考えてくれたのだろう。アステリアは、失敗しただろうかと不安げにケーキの上へ視線をさ迷わせた。

ひとまず、近くにあったチョコレートのケーキを取る。

「僕、基本的に好き嫌いはないよ。飢えを防ぐ方が重要だし。でも、うん、そうだな。チョコレートは好きだよ」

「チョコレートには栄養がたっぷりあります。軽い治癒にも最適です。飢えをしのぐにはぴったりでしょう。実に合理的です」

「……詳しいね？」

フォークを入れて口に運ぶ。しつとりした生地とチョコのコーティングがまるやかに溶けて美味だ。まさしくお貴族さまのお菓

子ってかんじだ。

「うん、おいしい。——それで、なんでケーキ？」

アステリアは数秒あぐねていたが、小さな声で答えた。

「……ドラコお兄様が、昔、アステリアにおっしゃってくださいました。『スイーツがあれば友達になれる』——と」

——それって。

愛息子のちよつと変わった親友と、さらに変わった剽軽な歌を思い出した。彼が時たま歌ったのだ。調子外れに、アルバスを巻き込みながら。

スイーツがあればきつと友達になれる——

彼は、母から教わったと言っていた。ああ——これが——

「もちろん、ドラコお兄様からマリアの好みをうかがうことも考えました。けれど、それってなんだか悔しくて。だから、自分で調べることにいたしました。……友達として、正しいでしょうか」

スコープウスは見た目はミニチュアドラコ——奇しくもまさに今のドラコだ——だったが、性格は疑いようもなく母似なのだと確信した。つまりは——かなり、変わってる。

「友達に不正解はないんだよ、アステリア」

あんまりにもかわいい質問をするので、笑いがたえられなかった。

「……それは、むずかしいですね」

「今まで友達、いなかったの？」

「はい」

そこは胸を張って答えるところじゃないぞ、アステリア。僕だって人のことは言えないけど。

「いずれにせよ、わたくしが生きる時間は短いので必要性を感じておりませんでした」

「……今は？」

「……ちよつと、たのしい」

堅苦しい言葉の壁が崩される。その瞬間がこんなにも愛しい。……これは、ドラコだって放っておけなくなる。

「ドラコは友達じゃなかったんだ？」

「おそれ多いことです。ドラコお兄様は——」

ちよつと考えて、落ち着かない指でティーカップを撫ぞりながらアステリアは告げる。

「ドラコお兄様は、わたくしにとつて光です。彼は孤独な人でしたが——その孤独の中にわたくしのようなはじかれものを入れてくださる、ずるい人です」

「……うん、わかるよ」

僕らって、どうしようもなく惹かれるところがある。たとえば孤独とか、闇とか——

ジニーだってそうだったんだ。ロンは、ジニーはスリザリンに入るものだと思ってたって、そう言った。

「……わかってしまうのは、悔しいです。わたくしだけのドラコお兄様でしたのに。やっぱり、マリアはずるいです」

「アステリア……まだそんな誤解を」

「マリア」

アステリアはきっぱりした声で僕の言葉を切った。

「マリアは、ずるい。……憎ませてくれない。——あなたたちって、とつてもずるい。それって、ちよつとお似合いみたい」

僕は立ち上がっていた。少しずつ表れる彼女の少女の姿がたまらなかつた。十一歳の——こんなにも普通の、女の子なのに。

間を挟んでいたテーブルを抜けて、座る彼女の側に立つ。抱きしめたい気持ちでいっぱいだったけれど、それはドラコに申し訳ないのでそつと頭を撫でるとどめる。柔らかい髪だ。外見だけ見れば、どれほど大切にされているかと思うのに。

「君だつてずるくなればいいよ。望んだつていいんだよ、アステリア——命を理由に、諦めないでよ。彼の孤独を癒せるのは君だけだ」

「わたくしは、あなたを責めることもできないのね」

「責めていいさ」

「できないわ。あなたつて——ひどい人だもの。いい人なんだもの。ひどいわ。憎ませてほしかった」

「アステリア……」

「でも、いいの。マリアがわたくしをこれ以上いやな子にさせてくれない人でよかつた。……どれだけほだされてもわたくしはあなたの敵ですけど、わたくしがドラコお兄様を想う限りそれは変わりませんけれど——ドラコお兄様以外になら……一番の味方になつて差し上げて、かまいませんわ。お友達ですもの。わたくし、お友達つてはじめてなんですもの。鼻負いたします」

精一杯不遜ぶるアステリアに、顔を合わせられる位置までかがんでニツコリ笑う。きれいに笑つたつもりだけれど、やっぱり頬が緩んでしまう。

「君って——かわいいなあ」

「外見には気を遣っております」

「もちろん、外見も含めてさ。僕、話せば話すほど君が好きになるよ。君は？」

「……………次は、美味しいチョコレートのお菓子を用意しておきます」

そっぽを向いたアステリアに、とうとう僕は腹を抱えて笑った。

「——ということが、つい先ほどあったんだけど」

「待ってくれ、思わぬ伏兵に混乱している」

いつもの湖付近でドラコは頭を抱えていた。ハリーはさつそくお忍びでホグズミードだろうし、きっと三年生でホグワーツに残っているのは僕たちくらいだ。

もしかしてだけど、僕とハリーのことを気遣って残ってくれてるだとか……………それはないか。

「君とアステリアを会わせることが不安になってきた……………」

「突然なんだい」

「…………君、ジニーが好きなんだよな？」

「当然だろ？」

ドラコは沈黙すると、次には言葉もなく頭を振った。

「——いや、信用ならない」

「ハア？」

「君ってそういうところがある。アステリアのことをどう思ってるんだ。吐け」

「は——き、君、まさか『そういうこと』を疑ってるのか!? バカか!? 彼女は確かに、君なんかにはもったいないくらいいい子だけ——」

」

「そうだ。彼女は素晴らしい人なんだ。だからおかしくないだろう!？」

「おかしいことしかないよ！」

叫び合って、ゼーゼーと息をつく。喉が冷たい空気に痛んだ。ドラコはまったく納得していない顔だった。

「わかった。よくわかった。君はアステリアのこととなると途端にバカになる。よく理解したとも。わかるよ、僕だって家族のことになると頭が回らなくなったものさ」

「ああそうだ。愛する人にはとことん愚かになるのがマルフォイ家なんだ」

「安心してくれ。僕はジニーひとすじだ。何度だって言つてやる」

「それはそれで癪に障るからやめろ」

「君、言ってることがめっちゃくちゃだぞ……」

次は僕が頭を抱える番だった。まさかそんなすつとんきような勘違いをされるだなんて——いや、わかるとも。最愛の人のこととなると人は狭量になる。気持ちはわかる。

「彼女は素晴らしい人だ。僕はずっと救われてきた。ただ隣に存在してくれるだけでよかった。……それだけで、よかったんだ」

「……そうだろうね」

「僕がこの世界で誰よりも彼女の美しさを知っている。そんなの——敵わないじゃないか」

まるで弱気なドラコに、背中がむずむずしてしまつて思わず彼の背を叩いた。

「君らしくないぞ！　どんな手段を使つても目的遂げる狡猾さがスリ

ザリンだろうか？　そうして、正念場でもくじける気かい？　だからドラコのプライドは外側だけなんてハーマイオニーに言われるんだ」
「その言葉は耳に痛いからやめてくれ」
「ならまず君がその顔をやめるんだな。意気地なしめ」

白い頬を思いっきり引つ張る。その手をドラコにつねられる。叩き落とせば、すぐさま手首を取られる。この調子でいけば互いに杖を取り出すのも時間の問題だろう。

「君はすぐに手が出る。はしたないとグレンジャーに教わらなかったか？」

「マルフォイとは殴る蹴るの仲だったものでね」

手を繋ぎあつたまま睨み合つて——ぶっ！　どちらともなく吹き出した。

「まったくその通りだ」

「おかしかったら」

笑つて腹を抱えて、そうすれば足がもつれて共に冷たい地面の上へと転がった。雪がなくて助かった。

「……君はアステリアのこと、どう思ってるんだい？」

ドラコに迷いはなかった。

「愛してるよ。彼女は僕に——光を見出ださせてくれた」

冬の澄んだ空のまぶしさに、僕は瞳を細めた。

「僕が保証するよ。——君たちつて、とつても似た者同士だ」

翌日からホグワーツはクリスマス休暇に入った。さつそく休みを存分に活かして昼までの寝坊を決め込んでいた僕は、ハッと目を覚ました。

「——ハリー？」

螺旋階段を降りて談話室へと飛び込む。

「——父さんと母さんが何を望んだかなんて、一生知ることはないんだ！ 一度も話したことだつてないのに！」

ハリーの声だった。ハーマイオニーは目に涙をためていた。ロンが蒼褪めていた。——ハリーが怒^{いか}っていた。

「ハリー？ ねえ、ハリー」

「君たちにはわかりやしない。だつて君たちは聞こえないんだろう？ 母親が死ぬときの悲鳴なんて。子供の命乞いをする声なんて。記憶だけで気絶するほど恐ろしい目になんて、遭ったことないだろう」

「ハリー、落ち着いて」

「もうたくさんだ。憎しみすら持つなつて？ 復讐を父さんと母さんは望まないって？ 君たちは僕を聖人だとも思ってるのかい？」

ヴォルデモートを破ったスパーヒーローだつて？ つまり——人間じゃないって？」

「ハリー!!」

とうとうハーマイオニーが泣き出してしまったので、ハリーの顔を掴んで無理に僕へと向けた。

「ハリー、ちゃんと話をしよう。二人きりで——」

「シリウス・ブラックの話を聞いた」

ハリーは低く唸った。

「マリアは知っていたんだ。そうでしょう？ シリウス・ブラックがどんなやつか——僕らの両親に、どんな仕打ちをしたのか」

「ハリー……」

「君っていつもそうだ。僕と一緒にいるのに、僕が知らないことを知ってる。いつも黙ってる。知らんぷりばかりだ。——ねえ、君はなにがしたいの」

「——」

君はなにがしたいの。——その言葉は、僕の心に深く深く刺さった。

「ブラックの話をすればマリアは悲しい顔をする。でも、それって変だ。悲しいだけなんだ。僕はこんなにも——こんなに——」

「ハリー、ちがうんだ。僕だって昔は、」

「——ッ昔っていつの話?!」

初めて見る剣幕に、ヒュツと喉が鳴った。僕の後ろにはロンとハーマイオニーがいるっていうのに、崖かなにかにでも追い詰められた気分だった。

「ずっと一緒にいただろう?! 僕たちは！ 生まれてから、ずっと——」

「ずっとずっと手を繋いできた！ 互いが一番の理解者だった！」

それなのに君は——ドラコに会ってから、君の一番は僕じゃなくなっただ。僕のマリアじゃないんだ。秘密ばっかりだ。ブラックのとどって、本当はもっと知ってるくせに！ どうせ秘密だ！ だって——聞いたって君は話しやしないだろう?!」

「あ……」

緑の瞳が憎悪に燃えていた。

僕は、こんな目をしていたのか。こんな目で——シリウスを——スネイクを——睨んできたのか。

「ずっと一緒にいたのに……どうして君ばかり大人になってしまうの。僕は今、苦しくてしかたないのに——なんでとっくに乗り越えた顔をしてるの。……もう、おなじではないの？」

「ハリー」

「僕——僕、今——マリアを傷付けたくてしかたない。マリアに泣いてほしい。マリアにだって苦しんでほしい。——僕と同じでいてくれよ」

「お、おい、ハリー、落ち着けよ。君——マリアだぞ？ 君の大好きなマリアになに言ってるんだよ」

僕を庇うようにしてロンが前へと出るが、ハリーの目にはまるで入っていないかった。ハリーはひたすらに僕だけを見ていた。

「いいかい、マリア、よく聞くんた。僕はブラックを知らない。会ったこともないのに、こわいかどうかなんてわからない。でもね、これだけはわかった。——シリウス・ブラックは、狂ってるんだ」

心底から軽蔑する目で吐き捨てて、ハリーは談話室を去った。誰も動けない——そう思っていたのに、ノツポの赤毛は呪縛を振りほどくみたいに大きな身ぶりで振り返った。

「ほら、こういうのってさ、男同士の方が単純っていうか。ウン。つまりは——ハリーはブラックが嫌い、マリアが好きってだけの話なんだよ。ちよっと、アイツ寝不足なんだ。だから余計な情報が入っちゃっただけで。そういうのって、あるだろ？ 僕はしよっちゅうあ

る」

「ロン」

「そんなわけでここは僕に任せてよ。僕、何度もジニーと喧嘩してきたからね。兄弟喧嘩に関してはプロさ。わかるんだ、複雑な兄心っていうの？」

「……僕が姉だよ」

ロンがピエロ役を買って出てくれたおかげで、ようやく僕は笑えた。覇気なんてまったくない情けない声だけれど。

コートを着込んで、ハリーの分の防寒具を手にロンが走り出す。談話室に残されたのは、薪のはぜる音と、ぼんやりする僕と、鼻をすするハーマイオニーだけだった。

「マ、マリア——わたし——」

ハーマイオニーが僕の肩にすがってクスンと鼻を鳴らす。

「わ、わたしが——わたしが、悪いの——わたし——余計なことを、言ってしまったの」

「ハーマイオニー」

「ご、ご両親は——復讐なんて、お——お望みにはならないわ——だなんて。ハリーの気持ちを、考えてなかったわ。マリアが——気を付けろと、言ってくれたのに。はじめて会ったときに、叱ってくれたのに。わたし——ちつともだめだわ」

しゃっくりをあげるハーマイオニーの背を撫でる。

「わかってる。君に悪気がないのはわかってるよ。僕の言葉を覚えていてくれてありがとう、ハーマイオニー。それに——間違っていないよ。……父さんと母さんは、望まなかったよ」

言葉は交わせなくても、僕は確かに、二人を見たのだから。ハリー・ポッターとして——その目で。

もしも『僕』の子供たちが——ジエームズが、アルバスが、リリーが、僕とジニーのために復讐に身を費やすなんてことがあれば、僕らは地獄からだって這い戻って叱るだろう。食い止めるだろう。やめてくれと泣きつくかもしれない。

子を愛したなら、親が望むのは——そのしあわせだけなのだから。

「さあ座って、ハーマイオニー。なにか飲もう。ミルクたっぷりの紅茶？ それともココア？」

「いらないわ。わたし、図書室で頭を冷やしてくる」

微笑んで、ハーマイオニーは僕の頬にキスをした。

——あなたも、あなたが泣ける人のもとに。

ハーマイオニーは広げていた宿題をまとめて、さびしそうに談話室を降りた。

残されたのは、とうとう、僕ひとりとなってしまうた。

すっかり雪景色だ。ホグワーツは石の古城なので、雪が積もればいつそう美しく映える。そんな冷たさが心地好かった。

積雪を払ったベンチの上で膝を抱える。

シリウスは大丈夫だろうか。ご飯を運び続けたのでなんとか身に肉は戻ってきていたけれど、あの毛皮はしっかり寒さから守ってくれているだろうか。寒くなってから何枚かの毛布を失敬して彼に渡したけれど……あれだけで足りたとは思えない。

様子を見に行きたいけど——こんな顔じゃ、だめだ。

「やむく」

鼻を鳴らして、いつそう身を丸めた。

「当然であろう。貴様は防寒という言葉を知らんのか。ミスポツター」

常に不愉快そうで苦々しげな声が返ってきて、全身金縛りの術でもかけられたみたいに固まった。

「スネイプ、先生……」

「いかにも」

のっそり立っていたスネイプ先生こそ、いつもの蝙蝠みたいなロ―ブ姿だけで、だというのにまるで寒さを感じさせない顔色だった。元がとてつもなく不健康そうだからか。

「……四六時中張り付いている番犬はどうした」

「だれのことですか？」

悲しいことに候補が数名いる。言葉通りならばシリウスなのだが。

「親離れのできぬ弟のことだ」

「ハリーの親はジェームズ父さんとリリー母さんだけですよ」

刺々しく返して、そっぽを向く。そのうちに名付け親や義理の両親ができるけれど、やっぱり僕の親はこの二人だけだ。……よくもまあ、親のことに口を出せるものだ。自分を罰するのに僕らを使わないでほしい。この人の自虐はまったく厄介だ。

「喧嘩、したんです」

ふと、口をついていた。

少し頭を冷やして、それからドラコの元にでも向かおうと思つていたのに。結局、こんなところで動けずにいたのは、なにをしてもハリーへの当て付けになつてしまう気がしたからだ。

けれど、この人になら——

だつて彼は、^{マリヤ}僕を見ていない。僕を通して母だけを見ている。それつて——残酷で、でも、今の僕にはちよつどいい。

「ちよつとした言い合いなんですけど。……目が、怒つていて」

スネイプ先生はその場から動かなかつた。彼に存在を無視されるようになって以来の視線を感じた。

「ハリーの目、綺麗ですよ。僕、好きです。……好きでした」

ずっと誇りだつた。唯一譲り受けた母さんの瞳。アルバスへだつて渡つて嬉しかつた。父の所業を知つてしまつてからは、特に。

『僕』の中の母さんの部分が、僕に愛を思い出させてくれる気がした。

「……我輩は、子供が嫌いだ」

子供を前にして言い切るスネイプ先生に、らしくて笑つてしまう。

「喧しい。小賢しい。大人の苦労の上に胡座をかき、それに気付く努力もしない。無邪気を笠に踏みつける。薬もない暴力の天才だ。できることなら永遠に関わりたくない存在よ」

「教師の言葉とは思えませぬね」

「さて、このホグワーツでどれだけの生徒が我輩を心から師と呼んでいるでしょうな」

「僕は呼びます」

スネイプ先生が目を見開いた気がした。あなたつて、案外視線がわ

かりやすいというか。態度も目もまるで感情を見せないのに、変なところからサインを出すんだ。

「僕と、それから、ドラコと——いつか、ハリーも、ロンも、ハーマイオニーも、みんなが、あなたを先生と心から呼ぶ時がくるでしょう」
「……予言の真似事か？」

「まさか。予言って、馬鹿げてると思いませんか？」
「……………」

顔を向ければ、先生は目線こそ逃がせど、顔を背けはしなかった。

「我輩は、子供が嫌いだ」

「はい」

「突然にわけのわからないことを言い出す。思考がまったく明瞭でない。我輩に理解を諦めさせる。不快この上ない」

「ふふっ……………はい」

ひどい言い様だ。僕のせいかな。それとも——この瞳のせいかな。

「だがしかし、今この場においては——貴様の情けない背を見ることがの方が、不愉快だ」

「……………」

「さっさと顔を洗うなりしろ。それとも減点がお望みかね？ マダム・ポンフリーと実に楽しいクリスマスとなるでしょうな」

今度こそ、スネイプ先生は体ごと僕に背を向けた。

「せんせいって」

「なんだ」

「慰めるのが下手くそですね」

心も顔もふにやふにやになってしまった。

背を向けた。なのに、動き出さない——だなんて。不器用にもほどがある。今は休暇中だっていうのに。言うに事欠いて減点だなんて。……それしか、思い付かないなんて。

「ならば教師らしく教えてしんぜよう。泣きつく相手を間違えているぞ、ポッター」

「たとえばっ？」

「……ドラコ・マルフォイがいるだろう」

きよとんと、間抜けに呆けてしまった。だって、なんて、声をして——ああ、そうか。僕とドラコが——グリフィンドールとスリザリンが仲良くする姿も、彼の『思い出』に触れてしまうのか。歩き出した背中に声をかける。

「母さんのことも、こんな風に慰めたんですか？」

彼はもう、立ち止まることはなかった。

「彼女は、誰かの胸で泣ける人だった」

クリスマスがやってきた。今年もモリー母さんからのあたたかいセーターやハグリッドの木彫りシリーズ、ハーマイオニーはホグワーツに残っているのので後でカードを交換するとして、ドラコからはイヤリングをもらった。なんでも、月明かりに当てると宝石が自ら輝くらしい。ちなみに去年のプレゼントはサテンを使った緑の髪飾りだった。とても普段使いできそうなデザインではなかったため、すっかりアクセサリーケースの主となっている。(アクセサリーケースは、散らかってしまう僕に見かねたラベンダーがお下がりしてくれたのだ。)残念ながら、このイヤリングもアクセサリーケース行きとなりそうだ。着飾る習慣のない僕には、使い道なんてさっぱりなのに。

喜ぶべきなのかな、これ。そりゃ、単純に綺麗だとは思うけどさ。……もしかして、女らしくできない僕への当て付けだったりする？あの性悪め。

「メリークリスマス、マリア」

「メリークリスマス、ハーマイオニー」

寝起きのハリーに負けず劣らず髪を爆発させているハーマイオニーに苦笑する。彼女のため、すぐさまブラシを取ってしまう辺り、ハーマイオニーの淑女教育はほんの少しくらいは成功してると言えるかもしれない。僕としては、いつか会えるリリーを甘やかすための練習、くらいの気持ちでいるのだが。

「これ、クリスマスカードよ」

「ありがとう。それじゃあ、僕からも」

「うれしいわ。……あなたって、字まで男らしいというか、テキパキした字よね」

「そうかな?」

「書類ばかり書いてるくたびれた公務員の字ってかんじだわ」

「……ハハハ」

するどい。

ティンセルのリボンを結んだクルックシャンクスと共に談話室へと降りれば、無人の談話室にまで男の子たちの興奮の声が届いていた。小首をかしげたハーマイオニーが臆することなく男子寮への扉を開く。今は僕だつて女の子だけど、当時は当然のように入ってくる女の子のハーマイオニーにはどきまぎしたものだ。

「なに笑ってるの?」

ロンはクルックシャンクスを目にすると、ぐつと顔をしかめたが、僕の腕の中に収まっているのを確認して衝動を抑えたようだった。そのクルックシャンクスはひたすらスキヤバーズを黄色い目で追っていたが。

「マリア、メリークリスマス! これをみて!」

ここ数日ギクシヤクしていたハリーが、それすらも忘れて満面の笑みで箒をかかげる。——ファイアボルトだ。

やっぱり心躍ってしまう。この艶、このフォルム、完璧な尾。あの乗り心地が今にも浮かんできそうさだ。

言葉はなくとも僕も喜んでることが伝わったのだろう。ハーマイオニーを除いて、箒を中心に僕らは感動に包まれていた。

「待ってよ、おかしいわ。これって、つまりは——すごいものなんですよ?」

「すごいなんてもんじやないさ! 国際試合級の箒だぞ」

「それを、ハリーに? 誰が?」

「わからない」

「カードは？」

「なかった」

「一言も？」

「ない」

ハーマイオニーは信じられないと言いたげな顔だ。

そう、ハーマイオニーは正しいんだ。僕だってわかる。でも——今の彼らに、その正しさはナイフになる。

「相談しましょう」

「なにを？」

「その筈のことをよ！ マクゴナガル先生にご報告するの」

「ああ、うん。こんなに素晴らしい筈を手に入れたってね」

「ちがうわ！ 調べてもらうの。呪いがかかってないか、罨はないか——」

「君はなにを言ってるんだい？」

ハーマイオニーとロンがヒートアップしていく。ハリーは、なんだかずいぶんと静かな瞳で僕を見ていた。

「だって、おかしいわ！ こんなにも明らかに——罨よ！ それ——シリウス・ブラックが送ってきたのよ！」

カツとなったロンがハーマイオニーへ詰め寄ろうとするのを止めたのはハリーだった。

「——マリアは、どう思うの」

「え……」

「マリアの意見が聞きたい」

ハリーは奇妙なくらい冷静だった。

「……僕も、同意見だよ。ハーマイオニーと」

「マリア……！」

「だって、考えてもごらんよ。ここで隠したところでハリーが練習にファイアボルトを持つていけば、まちがいにククゴナガルからハーマイオニーと同じことを疑われるよ。そのときに取り上げられたって遅いんだ。それなら、今、調べてもらった方が筈はやく手元に戻ってくる」

「戻ってこないかもしれない！」

「戻ってくるよ。——絶対に」

ロンは僕にも不満を爆発させようとしていたが、ふと、ハリーを見て怒りを呑み込んだ。——ハリーは冷徹ともいえるくらいに無表情だった。

「マリアが言うなら、そうなんだろうね」

「ハリー」

「わかった。その通りにしよう」

もうハリーは僕を見ていなかった。ファイアボルトを持って、談話室を降りてしまった。

僕らは再び、彼の怒りに取り残された。

「……あの、マリア？ ハリーも色々考えてるんだよ。マリアを嫌いになったとかじゃないからさ、ゼツタイ」

「マリア、わたしもそう思うわ。ちよつと——その——男女の兄弟つてむずかしいのよ、きつと。そうよね、ロン」

「ウ、ウン、そう！ 僕とジニーを見るといい。アイツ、僕のことを兄なんてちつとも思っちゃんないんだ」

「……僕が姉だよ」

懸命に慰めてくれる親友たちにどうにかいつもの答えを返して、僕は寢室へと戻った。通信紙と、それから『箱』を持って――

「兄弟って、こんなにむずかしいんだ」

冷々とした廊下が足先から僕を凍らせる。

魔法薬のにおいを染み着かせる彼に、無性に会いたくなかった。

分霊箱の管理について、僕らは非常にもめた。ドラコがなにがなんでもと譲らないのだ。分霊箱のせいで死にかけてたというのに、手放したがるらない――と、いうより、僕の元に置いておきたくないというのが彼の言い分だった。

そんなのは僕も同じだ。いいやむしろ、被害を出してしまった身として彼よりも想いは大きかっただろう。だというのに――

「やっぱり、この妥協案はどうかと思うよ」

僕とドラコのみが入れる必要の部屋にて、僕らは禍々しいテイアラを前に頭を悩ませていた。互いの元ではなく第三の場所――それが、両者譲らない僕らがかどうにか絞り出した案だった。

だがしかし、必要の部屋だって絶対ではない。ダンブルドア軍団時の苦い思い出が脳裏をよぎる。……犯人、隣にいますだけだね。

この部屋自体、僕とドラコのみ、という設定で開かれてはいるもの――はたしてどこまで信用なるものか。

けれども、僕が持てばハリーに影響がありそうで危険。ドラコの元はドラコ自身と、家にうっかりヴォルデモート（正確にはヴォルデモートが憑依した下僕か被害者）がやってきてしまう可能性があるのが危険。となると、ホグワーツで保管するのが無難に落ち着いてしまふのだ。ホグワーツ城そのものにかけられた結界もある。

ドラコ案のグリンゴッツは……僕らが破れると証明しちゃったからね。

「しかたないか。——はい、ドラコ」

僕は持ち出した『箱』をドラコへと手渡した。ハリーにはファイアボルトが——そして僕は、シリウスに『強力な封印専用の秘密箱』をねだっていた。

分霊箱の封印をドラコだけに頼らず、物から徹底しようと考えただ。

ドラコはそれをしみじみと眺めて、そして呆れた顔で僕に返した。

「もはや箱自体が兵器だ。ブラックの財は底無しか？」

「没収されてなおファイアボルトとか『これ』とか買えるんだから、底無しなんだろうね」

僕まで嘆息してしまう。前でもシリウスは金銭感覚に関しては何根っからのお坊っちゃんだったのだから。

僕好みのソファに身をうずめて——僕らのための部屋なので、互いの好みが混ざりあつた内装となっているのだ——装飾の美しい、仕掛けを解かねば決して開かない秘密箱を眺める。

説明によれば、火も水も通さず、蓋をした瞬間に空間は遮断され、どんな衝撃にも負けないのだとか。一体こんなものまで使って世の富豪たちはなにを保管するのだろうか。

「さっさと壊してしまいたい」

バジリスクの牙を手に、ドラコは憎々しげに呟いた。

バジリスクの牙——そう、ドラコはなんと秘密の部屋にて非常に混乱した状況にありながら、ちゃっかりバジリスクの牙も収集していたのである。転んでもただでは起きないとはこのことだ。しかも、二

本。僕らが一本ずつ持てるように二本だ。完璧だ。用意周到すぎて僕は実はちよつと引いた。

「まだダメだよ。一つくらいなら問題ないかもしれないけど——いや、やっぱりダメだ。まだ危険は犯せない。アイツ、分霊箱を壊しすぎるとわかつちやうんだもの。ナギニ以外を集めてギリギリで一気に入るのが最適解だ。……それは、理想論だけどき」

牙とティアアラを箱の中へとしまつてみる。蓋をした瞬間、箱はただの箱となつた。もはや綺麗なだけの飾り箱にしか見えない。ドラコも驚いていたので、呪いに敏感なドラコの目をも欺ける擬態っぷりなのだろう。

仕上げにドラコが箱の外側へと封印の術を施して、黒いキャビネット——これはドラコの趣味だ——へと隠す。分霊箱の処理は以上だ。……今度こそ、無事に最後まで保管できるといいんだけど。

「時々、確認に来なくちやね」

「怪しまれない程度にな。特にダンブルドアだ」

彼好みのリクライニングチェアへと彼が腰を下ろしたところで、あ。と僕は声をあげた。

「そういえば僕、スネイプ先生に探られちゃつた」

「は？」

「このあいだスネイプ先生に慰められたんだけど」

「……うん？」

「まあわかつてはいたんだけど、お前は予言ができるのかつて。たぶん、というか確実にだね。ダンブルドアの差し金だ」

「……………」

「ドラコ？」

ドラコはさっそく椅子を贅沢に使って全体で顔を押しさえていた。リクライニングなんだからもたれないと意味ないんじゃないの。

「……………それで、君は」

「もちろん常に心は閉じてるさ。試してみる？」

「……………いや、いい」

長い長い息をつかれる。そんな全身全霊で呆れてますアピールしなくても。

どうせダンブルドアはそのうちに僕の正体へとたどり着く。すでに、ハリー・ポッターとまではわからずとも、『二度目』辺りは推測の一つに入れているかもしれない。そのために、予言ができるかどうかなんてスネイプ先生に探らせたわけだし。

……………大丈夫だ。知られたところで、僕とダンブルドアの目的は同じだ。僕は——あの人が手を差し伸べなかった人たちを出来る限り拾いたいだけなんだから。

「さて、そろそろ出よう。居心地がいいのはわかるけど、クリスマスパーティーが待ってるよ」

「ハリーと行くのか」

わかりやすく目をそらしてしまった。……………わかっていて聞くのだから、いやなやつだ。

「早めに仲直りしろよ。ハリーの側にいられないのはまずいんだらう？」

「そんなの、僕が一番わかってるよ。……………自分と喧嘩だなんて、笑える」

ドラコは笑わなかった。

新学期が始まって僕とハリーはギクシャクしたままだった。それは周囲へも伝染して、ハーマイオニーとロンも僕らに付き合っただけで終わった。ロンはハリーに付き添い、ハーマイオニーは僕の面倒を見てくれた。せっかくクルックシャンクスとスキヤバーズの問題を上流しできたというのに。

「ハリーの気持ちかわからないなんてはじめでだ」

膝の上に顎を乗せたシリウスを手慰みに撫でる。毛布をさらに足し、シリウスはそれにすっかり包まれている。ハリーが読み終わったクイディッチ雑誌や日刊予言者新聞なども時折彼へ差し入れているので、それなりに暇潰し道具は揃ってきたと思われる。

犬に与えるべきものじゃないけど、シリウスが喜んでるからいいんだ。クルックシャンクスは相変わらずバカを見るような目で見てくるけど。(元々の顔立ちだ。と言いたげに肉球パンチが飛んできた。)

うつ伏せだった状態から顔だけを僕へ向けて、灰色の瞳が心配そうに見上げてくる。完全に人間の動きだ。シリウスったら。

けれど、その気遣いが嬉しい。彼としても、名付け子(おそらく名付けたのはハリーだけなんだけど。)たちが仲違いをしているというのは心苦しい状況なのだろう。ただでさえ仲が良すぎると言われた僕たちだ。

「ハリーは今、ルーピン先生にパトローナス・チャーム守護霊の呪文を習ってるんだ。ついていきたかったんだけど……」

シリウスが立ち上がった。かぶせていた毛布がもこもこ起き上がって、それがなんだかコミカルで笑ってしまった。そんな僕の頬をペロペロと舐めてくれる。

「うん。うん。ありがとう………黒犬さん」

比較的やわらかい首回りの毛に顔をうずめる。会うたびスコージファイを唱えて綺麗にしていった毛並みは実に美しい。そしてモフモフだ。冬は彼で暖を取りたいくらいだ。

やさしくて子供っぽくて義理堅い僕らの後見人。僕の目的はあなたの解放だ。もうあなたを閉じ込めたくはない。あんな惨めな生活の末の——かなしい最期を、僕は見たくない。

だというのに、遠回りばかりで。僕はすっかり臆病になってしまった。ダンブルドアの、確信がなければ動かなかった気持ちだが、今になって痛いほどわかった。

当時はなぜ教えてくれないのか、わかっていたならなぜもつと早く行動に起こしてくれなかったのかとヤキモキしたものだ——こんなおそろしいこと、憶測だけで動かせるわけがない。

ダンブルドアも、僕も、同じ人間なのだから。あの人も、僕に負けないくらい臆病だった。

「ハリーの守護霊はなんだろうね。やっぱり牡鹿かな」

シリウスの尻尾が嬉しげに振れるのを見ながら、僕はさびしさを殺して笑った。

試合が近付くにつれ、ハリーはますますピリピリしていった。そしてこちらでは、ハーマイオニーも。

ハーマイオニーはタイムターナーを使った重複授業に限界を迎えていた。毎日毎日膨大な量の宿題を談話室の隅で誰とも話さずこなしているのだ。今回はバックビークの件がないにしても、やっぱりあの量は異常だ。

そうならば、僕にだって話し相手がいなくなる——とはならず、問題を起こす方の双子やジニーが僕をかまってくれた。ほんとう、赤毛一家は人情にあつい。

そんな胃痛を感じさせる日々の中、冬越えの春のような一筋の風が舞い込んできた。ファイアボルトがハリーの元へと返されたのだ。これには、談話室に集まったグリフィンドル生のほとんどが歓声に湧いた。

「すごいや、ハリー。ねえ、触らせて。触るだけだから」

「ファイアボルトと一緒に写真をちようだい！ ハリー」

「これでレイブンクローの勝利はなくなっただな。なんたってファイアボルトだもの。けちよんけちよんさー！」

「ウワア、すごいや……僕、僕、パパとママに本物のファイアボルトに触ったって自慢するんだ」

ワイワイと箒を囲む面々から抜けて、ハリーが僕の元へとやってくる。毎日顔を見ているというのに、髪だつてとかしているのに、ずいぶん久々な気分だった。

「マリアの言ったとおりだ」

「でしよ?」

「うん。……あのね、マリア——」

ハリーの言葉は続かなかつた。ファイアボルトをうやうやしく寝室へ置きに行ったロンが鬼の形相でベッドシートを持って戻ってきたからだ。ロンは一直線に勉強で忙しいハーマイオニーの元へと向かった。

「これを見ろ!!」

シートには赤い染みが見えた。ああ、アイツ——とうとう気付いた

な。

「わからないか、これが！——血だ！ スキャバーズが消えて、この血がシーツに残ってた！　これがどういうことか、ご自慢の頭で推理してみろよ！」

シーツをハーマイオニーが書いていたレポートの上へと叩きつける。ハーマイオニーはそれに憤慨することもできず狼狽していた。

「で、でも、クルックシャンクスはずっとお利口になっていたわ」

「マリアが止めてたからね！　マリアがいたからスキャバーズの寿命が伸びただけなんだ。マリアがかまえなくなったらこれだ！　わかるかい!?　君があのかケダモノを躰なかつたから僕のスキャバーズが犠牲になったんだ！」

これにはハーマイオニーも臨戦態勢を取った。ロンの言葉は、彼女にとつて彼女がもつとも嫌う偏見とこじつけに等しかった。

「どうあつてもクルックシャンクスを悪者にしたいうね。ではお聞きしますけど、猫が鼠を追いかけるつてそんなにおかしいことかしら。それに、圧倒的に証拠が足りてないわ！　それがスキャバーズの血だと証明できる？　スキャバーズをクルックシャンクスが食べる瞬間を誰が見たの？」

「君の屁理屈はうんざりだ！」

「わたしだってあなたの偏見はうんざりよ！」

ファイアボルトで浮かれていた空気はたちまち冬の極寒へと戻ってしまった。久々に僕らポッター兄弟は、手を繋ぎ合って同じ顔と同じ仕草のため息をついた。

ああ、もう、次から次へと！

誰もが寝静まった談話室にて、パチパチと弾ける炎を僕はぼんやり見ていた。寝室でハーマイオニーの逆鱗に触れたくはないし、スキヤバーズをどこでどのタイミングで捕らえようか誰もいないところで考えたかったのだ。

「マリア」

トンツと。隣に座った彼は僕の肩へともたれかかるように力を抜いた。ふわふわの黒髪がくすぐったくて気持ちよかった。

「……ルーピン先生と、パトローナスを喚ぶ呪文の特訓を始めたんだ」
「うん」

じわりとあたたかさが浸透していく。

「ボガートを使って、デイメンターになってもらうんだ」
「うん」

「母さんだけじゃなくて、父さんの声も聞いた。父さん、母さんと僕らを庇ったんだよ」

「……うん」

「この前には映像も見た。——マリアがバジリスクの牙で死にかけてる時の記憶だった」

ハツと隣の彼を見た。ハリーも、僕と同じように暖炉の火をぼんやりした目で見ていた。

「僕、時々、マリアが——マリアは、生き急いでるように見える。マリアって、死にたがってるみたいだ」

「そんなわけ」

「ないよ。わかってる。……でも、こわいんだ」

声はあまりにか細くて、ハリーを力いっぱい抱きしめた。
なんてことだ。デイメンターが見せる絶望のうちに入ってしまう
くらい——あの日の僕はこの子を傷つけたのか。

「マリアは秘密ばかりだ。僕を不安にさせて——ひどいやつだ」
「ほんとうに」

「でも、それって、君が大好きだからなんだ」

「……うん。僕も大好きだ。愛してる」

背にハリーの腕が回って、僕らは子供の頃と同じようにすがり合っ
た。

「——それは、僕に話せないこと？」

「……話せるよ。でも、まだ決心がつかない。……待っていてくれる
？」

ハリーはやわらかく笑った。雪解けの微笑みだった。

周囲まで巻き込んだ兄弟喧嘩は、ようやく終わりを迎えた。

ファイアボルトのお披露目試合がやってきた。相手のシーカーはレイブンクローが誇る美少女、チョウ・チャンだ。双眼鏡から覗いて、やはりエキゾチックで愛らしい顔立ちに目が惹かれてしまう。

「そういえば、ここで僕、チョウに一目惚れしたんだっけ」

隣のドラコがギョツと僕に向かって目を剥いた。

「ジニーはどうした!」

「もちろん今はジニーひとすじだとも。というか、僕らって中身が中身だから同年代も年上もそういう対象で見るのはむずかしいと思うんだ。ちがう?」

ジニーのことだって、愛しているのにちがいはないが、たとえば僕がハリーのままだったとしてもまさかこの年齢のジニーに手を出したりはしなかっただろう。そもそも僕、この手の欲求は薄かったからね。常に命懸けで余裕がなかったもので。

「僕としては君の方が心配だよ。君ってば、ほんとへビみたいに距離をつめるのが上手いというか……昔はあれだけ空回ってたのに」

「……相手が悪かったんだ」

「ふーん? アステリアを泣かせたら僕が仇討ちに行くからね。君の杖で」

「完璧に勝算がなくなるからやめろ」

心底から嫌そうな顔をされて笑っていれば、リーのファイアボルトの宣伝にしか聞こえない解説と共に両チームが飛び上がった。やはりファイアボルトの性能は圧倒的だ。圧巻の飛びっぷりを見せてい

る。ハリーの顔には自信が溢れている。

しかしチョウだつて負けてない。レイブンクローの頭脳をもつてすぐさま対応してくる。レイブンクローの強みは速さではないのだ。

「……ま、だからといってファイアボルトの敵ではないけどね」

呟けば、性格が悪いぞ、なんてドラコにたしなめられた。よりによつてドラコにだ。どの口が——とはまあ、ひねくれてる自覚のある僕にだつて言えることではないのだけど。

「でも、事実、ファイアボルトは素晴らしいだろう？ どこかでハリーから借りられないかなあ。あの乗り心地はまさに夢のようなんだ。君だつて乗りたいって思うだろう？」

「……まあ、この時代のプロが乗り回す筈だからな」

ずいぶん素直にうなづくようになったドラコに、くつくと形だけ笑いをこらえる。そしてふと思う。

「——君、クイディッチはもうしないのかい？」

いつだったかは忘れたが、彼は語ったはずだ。クイディッチだけが——心休まらない学校生活において唯一のよすがだったと。

「ああ。……もう、必要ない」

ドラコはやわらかく目を細めて僕を見ていた。

「そ、そう……ウン、それなら、いいんだ」

カツと頬が熱くなった気がして、双眼鏡へと視線を逃がした。……あの頃よりは、充実した学生生活を送れてるってわけだ。僕のおか

げ、だとか——目がそう言いたがってる気がしたけど、意地でも反応してやるもんか。

「ところで今日は……あー、伯従父上はどうなさったんだ。ファイアポルトはあの方からだろう？　僕はてつきり、前回同様に観に来られるんだと」

「うん、僕もそう思って透明マントを用意しておいたんだけど……申し訳なさそうに首を振られちゃった。シリ……君の伯従父さんって、僕相手だとすっかり犬のフリを忘れちゃうんだよ。どう思う？　まあ、元から犬っぽいからいいんだけど」

「かの美形一族を捕まえてそれか……」

念のためともいうように周囲を見渡したドラコは、そして立ち上がった。

「ドラコ？」

「野暮用だ」

観客席からドラコが離れていく。その背をぼうつと見ていけば、グリフィンホール席から歓声が上がった。アンジェリーナが得点したらしい。ハツと双眼鏡をかまえ直して試合を追う。

ハリーとチョウがスニッチ目掛けてせめぎ合う。降下して——上昇。ほぼ直角のそれについていけなかったチョウのコメット260号が置き去りにされていく。

——ホイッスルが響いた。スニッチはハリーの手の中に収まっていた。

「ハリーイ!!」

チームメイトたちにもみくちやにされているハリーの元へと飛び込む。ジョージやフレッドも巻き込んでハリーを全身で抱きしめる。

「最高だったよ！ あの動き！ あの速さ！ さすが僕の弟だ！」
「兄だよ！」

いつもの茶番に盛大に笑いが上がる。次々とハリーは囲まれ、胴上げされ、騒ぎは拡大していく。

ふと競技場口を見れば、コソ泥のように数名のスリザリン生が縄へとかけられていた。スリザリンのクイディッチチーム選手たちだ。黒い檻褌をかぶっている。……ああ、そうか、ドラコはデイメンターのフリをするだろうバカたちを捕らえるために抜けたのか。よく覚えてたな。……前では自分だったものな。このバカ共の中にセオドールがいなかったことだけが救いだ。

案の定怒り心頭のマクゴナガル先生が盛大にスリザリンを減点しつつ、けれどもドラコへの温情にその後五点をドラコへと与えていた。

「今は近付けそうにないからな。ハリーに代わりにおめでと言っておいてくれ」

「それなら僕からも」

ニヒルに笑ったドラコの横から現れたのはセドリックだった。嫌味なんてひとつもない穏やかな微笑みで、良い筈だね、と心からの賛辞をくれる。善性がまぶしい。ひねくれものの僕と性悪のドラコにはまぶしい男だ。

「ほら、マリア。また髪が乱れてる。せっかく綺麗な赤毛なのに」

「ああ、ありがとう。セドリック」

いつものように手櫛を入れようとしてくれたセドリックの腕を掴んだのはドラコだった。

「ドラゴ？」

「マリアの面倒なら僕が見ますので、ミスターデイゴリーはどうぞレイブンクローの彼女のところへ慰めにいかれては？ ……物凄い目で見ていますよ」

「ウワア」

「マリアはそんなんじゃないって言ってるんだけどね……。ごめんね、マリア。頼んだよ、ミスターマルフォイ」

セドリックがチョウの元へと走っていく。モテる男は大変だ。

「ほら、マリア。背を向けろ」

「また弄くり回す気かい？ 君に整えられるとハーマイオニーがからかってくるからいやなんだよな……」

あとハリーがちょっと拗ねる。

「それならアレンジの仕方くらい覚えろ」

「他人のはそれなりにできるようになったさ。知ってる？ 時々ハーマイオニーの髪を結ってやってるのは僕なんだよ」

お祭り騒ぎのグリフィンボール生をよそに、もみくちゃにされたまままだった髪がハーフアップへとまとめられていく。早業だ。小さく、ここに母上のバレッタがあれば……。なんて眩きが聞こえた気がして、無心で聞こえないフリをした。

去年もらった髪飾りで十分だよ。お貴族さまが身に付ける装飾なんて、触れるのもおそろしい。

そのまま、なにやら複雑に捻ったりされているらしい髪型で談話室へと戻れば、大祝宴の真っ最中だった。ハニーデュークスの品が机中に広げられ、そこかしこでバタービールの乾杯の音頭が交わされている。ロンと喧嘩中のハーマイオニーも、今ばかりは宿題の山から離れて宴会に参加しているようだった。

「姫のおかえりだ！」

「ハリー大閣下のもとまでお通ししろ！」

「救世主の姉御どのへバタービールを献上せよ！」

赤毛の双子を中心にやんややんやと持ち上げられる。ハリーと並ばされ、バタービールのジョッキを持たされてハリーと苦笑いで見合う。当初の目的なんてみんな頭からすっぽ抜けているにちがいない。とにかく彼らは騒いで騒いで騒ぎ抜きたいのだ。

青少年たちのらんちき騒ぎは、マクゴナガル先生にナイトガウン姿で怒鳴り込まれるまで続いた。

「ねえ、マリア」

ラベンダーとパーバティの寝息に包まれる中、隣のベッドのハーマイオニーが囁く。

「なあに、ハーマイオニー」

「今日の髪型もかわいかったわ」

「なんで気付いちやうかなあ」

「気付くわ。あなたをよく見てますもの」

クスクスと軽やかな笑い声が重なる。

優しい夜だった。ここ数日とない平穏だった。このままおやすみを告げてしまえば終わる夜だった。

——彼の絶叫がグリフィンドール塔内を突き抜けるまでは。

「ちよつと、何事なの？」

「おっ、再開か？」

「バカ言わないで。今のはロン？」

バタバタと声に起こされた面々が談話室へと集まる。パーティーの残骸が散らばる中で、呆然としたハリーと震えるロンを中心にハリーのルームメイトたちが辺りを見回していた。

「いい加減にしないか！ まったく……さあベッドへ戻るんだ」

ごく丁寧に監督生バッジをパジャマに着けたパーシーが現れたところで、ロンは真っ青の顔のままパーシーへと訴えた。

「ち、ちがうんだ、パース。今——」

「これは何事ですか！」

再びマクゴナガル先生が肩を怒らせてやってきた。次は頭にヘアネットがされていた。

「揃いも揃って……パーシー、あなたがいながら」

「せ、先生——ブラックなんです」

たとえばハリーがヴォルデモートの名を不用意に呼んでしまった時のような——凍りつきそうな沈黙だった。

「……ミスターウィーズリー、今、なんと？」

「ブラックが——シリウス・ブラックが、僕を襲ったんです！ ハリーも見てました！」

沈黙に困惑が混ざった。誰もが真実を探すように近くの人間と目を合せていた。

「……事実ですか？ ポッター」

「……はい」

「よろしい。みなさん、動かないように」

毅然とした態度でマクゴナガル先生が肖像画の向こうへと消える。カドガン卿へと問いかけている。――男を一人通したかと。

「おお、通しましたぞ。ご婦人！」

今度こそ、与えられた沈黙はマクゴナガル先生すらも呑み込んだ。

「あ……合言葉は……」

「持つておりましたぞ！ 紙切れを読み上げておりました」

動けもしない。声も出せない。

息すらも殺してしまうような重い空気をまとって、マクゴナガル先生が再び生徒らの前に立つ。

「……誰ですか」

声は怒りに震えていた。

「――合言葉のメモをその辺に放っておいた底抜けの愚か者は、誰です」

「私です」

視線がいつせいに動いた。蒼白のネビルを押し退け進み出た――赤毛の少女へ。

「先生、私です」

誰もが嘘だとわかっていた。マクゴナガルだってわかっていた。それでも、少女はゆずらなかった。

「私が——メモをなくして、シリウス・ブラックを招き入れました」

ネビルは丸顔をくしゃくしゃにさせて泣いていた。ちよつと怒つてもいた。どうして僕を庇つたんだ——と。

「庇つてなんかないよ。僕だってほんとうにメモをなくしたんだ。だからよかつたら、これからはネビルが僕と一緒に肖像画を抜けてくれないかい？ ほら——マクゴナガル先生に、僕が合言葉を書き留めるのは禁止されちゃっただろう？」

えぐえぐと鼻水を垂らす男の子に、困つたな、と笑う。

実際のところ、シリウスがネビルのメモでグリフィンホール寮内に侵入できたことは事実だ。けれども、ネビルは悪くないのだ。——ネビルのメモを持ち出したのは、我らが勇敢なる協力者、クルツクシヤンクスなのだから。

落ち度のないネビルに罰則を課させてしまうのは、僕の良心が許さなかつた。それだけのことだ。

シリウスつたら、なぜ今になつてこんな強攻を……もしやクルツクシヤンクスがスキヤバースの脱走を教えたのか？ それで、焦つてしまったのだろうか。

「マリア、マリア、やっぱり僕、マクゴナガル先生に言うよ。マクゴナガル先生だって、マリアがそんなミスするわけないってわかつてるんだ。だって、あのおとき僕を見たよ」

「思い込みだよ。それに、ネビルは僕を過大評価しすぎだ。ハーマイオニーからはもつぱら、ぼんやりだって叱られる僕だよ？ それに、こういうのは言つたもの勝ちなのさ」

「勝ちじゃないよー」

「それもそうか」

声に出して笑った僕に、ネビルは救いを求めるようにハリーをかぶり見た。一方のハリーは、達観した顔で首を振っていた。

そのどうしようもないものを見る目をやめたまえ。姉さんはかなしいぞ。

「諦めて、ネビル。マリアってこういうやつなんだ。僕の気持ちが変わるだろう？ マリアがこうだから、僕はいつだってやきもきさせられるんだ」

「ハリー……」

僕をよそに……いや、僕を餌にしてハリーとネビルの友情が深まった。ワーオ、釈然としない。

「そんな些細なことは流してさ」

「些細じゃないよ……」

「ロンはまた名も知らぬ生徒に捕まってるのかい？ すっかりヒーローだね」

いつだってハリーの側を離れない赤毛のノツポが見えないことを、ハリーへと問う。

ロンは一夜にして有名人だった。まるで自分がシリウスを撃退でもしたかのように鼻高々に振る舞っていた。例の夜のことを尋ねられれば、誰にだって快く語ってみせた。それはもう、詳細に。

語るたびに詳しくなっていく辺り、思い出しているからなのか、大袈裟に付け足しているのか。……追及すると誰も幸せにならないのでやめておこう。

「ロン、ちょっと楽しそうだ」

不謹慎だと言いたげなハリーにクスクス笑う。

「ロンってば、僕になんて言ったと思う？ 悪いなマリア、脇役仲間はいち抜けた。だつてさ」

「ロンったら……」

「彼らしいよね」

ネビルもハリーも呆れてる風だが、そこがロンの面白いところなのだ。彼の子供っぽさが、良くも悪くも停滞した空気を壊してくれる。

「……あのさ、マリア」

ふと、思案顔のハリーが僕と、それからネビルを見た。

「ネビル、また君たちの寝室を借りてもいいかい？」

「秘密の相談だね。かまわないよ、マリア、ハリー」

ネビルは訳知り顔でうなずいてくれた。それに礼を言つて、ハリーと共に男子寮へとももる。

「僕、ブラックを見たつて言つただろう？」

言い淀みつつも、真剣な瞳でハリーは切り出した。

「ロンの上でナイフを持って立ってた。絶対にロンが殺されちゃうつて思った。杖なんか間に合わないつて」

「でも、ちがった」

「……うん。ブラックは、ロンなんて見てなかったんだ」

懸命に記憶を絞り出すように、ハリーは自身のベッドへと座つて隣のロンのベッドを見つめた。

「キョロキョロしてたんだ。地面を見ていた気がする。はじめは僕を

探してるんだと思った。でも……僕と目があって——新聞の写真よりもずっと小綺麗だったよ——そいつ、言ったんだ。ハリーって」
「……………」

「見つけてやったぞって顔じゃなかった。すごく驚いてた。……このまま、彼は泣き出すんだと思った」

そこでハリーは組んだ指に額を置いた。自分の中の情報と現実の解離に混乱しているようだった。

「変だよな？　相手は自分を狙う殺人鬼だっていうのに」

「そうかな」

隣の丸まった背をトントンと叩く。

「他人から与えられる情報よりも、自分の目で見て自分で調べたもののほうが信頼できると僕は思うよ。色んな角度から試してね。先入観って、いつだって真実を曇らせるんだから、一番おそろしいよ。これ、姉さんの経験論」

ハリーは数秒沈黙すると、確かにうなずいた。

「僕、シリウス・ブラックを調べてみようと思う。マリアは、きっと手伝ってはくれないんだよね？」

「……答えを知ってるからね」

バツの悪さからほんの少し目をそらした。

君ならたどり着くよ。——愚かな『僕』よりも、ずっとずっと優秀な君だもの。

「それに、誰よりも頼れる頭脳が君の親友にいたと思うけど？」

イタズラっぽく目を細めれば、ハリーも応えるようにニンマリと笑った。

「ハアィ。仲直りのお手伝い、させていただきますよ」

週末のホグズミード許可日がやってきた。相変わらずハリーとロンは忍びの地図を使った抜け穴を企んでいるようで、なんとも味方しがたい心地にさせられていた。

わかるんだ、自分がそうだったから。ホグズミードなんて素晴らしい場所を一人だけお預けにされるなんて堪ったもんじやない。そう思う気持ちはわかるのだ。

けれども、子まで持った大人としてはその幼い浅慮さに情けなくもなってしまうのだ。周りの大人たちがあれほど気を張りつめて君を守っているというのに、当の本人はスルリと守りの手から逃れてしまう。それも、自ら！これをどうして憎たらしく思わずにいられよう。

「マリアも行こうよ！今回は透明マントを使うんだ。二人なら問題なく隠れられる。マリアはまだハニーデュークスもゾンコも知らないんだから！」

瞳を輝かせて、躊躇いがまるで見えないハリーとロンに頭を抱えたくなる。

十三歳……彼らはまだ十三歳だ。子供を心配するのは大人の役目。大人に心配をかけるのは子供の特権。子供の無知は罪じゃない。けれど————おや、いいところに。

曲がり角の向こうに隠れきれないふわふわの茶髪を見つけて、悪どく笑った。

「いいね、ハリー。今日は僕もお邪魔しようかな。絶対バレないんだもんね？」

「そうこなくっちゃ！」

「マリアが気に入りそうなお菓子があるんだ。でも、まずはバタービール！」

ロンが僕の肩を組み、ハリーが地図を広げてニッコリ笑ったところで、彼女は憤怒に顔を赤くして飛び出してきた。

「信じられない——見損なっちゃったわ、マリア。あなたならぜったいに止めてくれると思ったのに！」

「ゲエ……盗み聞きしてたのかよ」

「た、たまたま聞こえただけよ！ いいこと？ もしも、もしもですけど——マリアまでそんな愚かなことをするのなら……わたし、マクゴナガル先生にその地図のことをお話しするわ」

バチリとロンとハーマイオニーの間に火花が散る。ハリーもお節介め、と言いたげな顔だ。

「どうしてハーマイオニーが怒るの？ ハーマイオニーに実害はないよね？ 見つからなきゃいいんだから」

「——マリア、本気で言ってるの？」

僕の挑発にしつかり乗り上げてくれたハーマイオニーは、わなわなと体を震わせて爆発した。

「信じられない——信じられない！ マリア、あなた、今、正気じゃないんだわ！ ハリーが心配じゃないの!?! こ、ころ——殺されてしまいかも、知れないのよ？ ブラックはハリーを狙ってるのよ？ 寮にまで侵入できて——口、ロンが——ロンが、殺されかけたのに」

ボロツとハーマイオニーの茶色い瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。これには僕もロンもハリーも、みんながぎよつと目を剥いた。

「ロンもロンよ！ 調子に乗っちゃって——あなた、あなた、一步間違えればここにはいなかった！ わ、わたしたちは——寮であなたの死体を見ていたかもしれないわ。それが——それがどんなに、おそろしいことか——」

とうとう顔をおおって泣き出したハーマイオニーに、一番に駆けつけたのはロンだった。

「お、おい——やめろよ、こんなところで……」

「……マリア」

「……ハアイ、これは僕が悪いね」

ロンにならってハーマイオニーの背を撫でる。

「ごめん。ウソだよ、ハーマイオニー。君がどれだけ二人のことを想ってるか——二人に知ってほしかったんだ。言っただろう？ 君が怒るときって、いつだって誰かのためなんだって。さて、ロン。ここまで聞いてなんとも思わないのなら、僕は君を軽蔑せざるを得ないよ」

ロンはハーマイオニーに触れていた手をあたふたと離してうつむいた。

「ハリーも。周囲がどれだけ君に心を砕いてるか——わからないほど僕の弟は子供じゃないって、僕は思いたいんだけど？」

「……兄だよ」

「こんな情けない兄さんはいらないよ」

「……ごめん」

ハリーに続いて、ロンも小さく謝罪した。それにハーマイオニーは潤んだ瞳を開いてロンへと飛び付いた。

「ああ——ロン！ スキャバーズのこと、ほんとうにごめんなさい。ペットをうしなって悲しむあなたに、わたしは寄り添うべきだった」
「ウ、ウン……まあ、アイツは、年寄りだったし。ちよつと役立たずだったしな」

不器用にハーマイオニーを撫でるロンに、僕とハリーはニヤリとしてしまった。

「おや、時間だ。それじゃあ、お二人は仲良くホグズミードを楽しんできてくれたまえ」

「僕らは僕らで仲良くするからさ。任せたよ、ロン」

ハリーと手を繋いで、なんだか助けてほしげに見てくるロンを置き去りにする。君たちの痴話喧嘩は犬も食わないってやつなんだから。

「ねえ、マリア。——マリアも、心配してくれた？」

彼の準備室へ向かう途中、そうつと窺ったハリーに僕は破顔した。

「しないと思うのかい？ 僕の愛しい片割れ」

世界中の誰よりも——僕は君を見ているよ。

忍びの地図を持って、以前お邪魔したルーピン先生の部屋の前へと立つ。

「僕、行ってくるよ。ルーピン先生なら、マクゴナガルよりもマシだと思うんだ。——もちろん、罰則の話。マリアはここで待っていて」

「一緒じゃなくていいの？」

「マリアは使っていないもの。マリアが待っていてくれないと、勇気が出ないや」

いじらしいことを言ってくれるハリーに、首を上へかたむけなければ届かなくなってしまった額へと唇を押し付ける。

「僕は、君は勇気に満ちてると思うよ。無謀と言う人もいるけどね。そうだな——ネビルと同じくらい」

それってよろこんでいいのかな。へんにやり笑ったハリーは、僕をきつく抱きしめてからルーピン先生の部屋の中へと入っていった。

イースター休暇を挟んだ最初の土曜日。とうとうスリザリンとのクイディッチ決勝戦がやってきた。シーカーのハリーだけでなくグリフィンドールチーム全体が緊張に包まれ、朝食もまともに喉を通らない様子だった。

今回ばかりはドラコもグリフィンドール席に座るわけにはいかず、無愛想に緑ローブたちの中へと紛れていた。かなりはしっこだったが。

目ざとく発見したパンジーがぴったりと腕に引っ付き、なんとその逆隣にはアステリアの姿があった。アステリアとパンジーという両手の花（片方はハーマイオニーいわく品のないパグだが。）にもっと嬉しそうな顔をすればいいのに、と思わずドラコを見つめてしまう。そのドラコはといえば、アステリアをかいがいしく世話していた。ドラコの世話はパンジーがしていた。相関図がわかりやすい。

「隣、いい？ マリア」

「ジニー！」

かけられた声にパアツと顔が輝いてしまう。太陽の光に照らされる赤毛のなんと美しいことか。ロンが「アイツはいつもマリアに一番に話しかけに行くんだ。兄をないがしろにしてる」なんてハーマイオニーへと不平をたらしめていることなど気にも留まらなかった。

「もちろんだよ、さあ座って。日射しは強くない？ その位置からグラウンドはしっかり見えてるかい？」

ご機嫌なジニーに僕まで頬が緩んでしまう。次はドラコが僕を呆れた風に見ていた。……僕らつて、どこまでいっても妻に甘いよね。

ジニーとハーマイオニーを隣に、ドラコに負けず劣らず両手に花を

揃えて、グラウンドに並ぶ十四人を見下ろす。キャプテン同士が握手を交わす。(手を握りつぶさんばかりだ。ここからすでに戦いは始まっていた。) フーチ先生がホイッスルをかまえる。

音が晴天を割いた。――試合開始だ。

八年ぶりに優勝杯がスリザリン以外に渡る可能性に、会場の生徒たちは大いに湧き上がっていた。リーの実況にも熱が入る。入りすぎている。その都度マクゴナガル先生に叱咤されている。

しかし無理もないのだ。なぜって――

「ああっ！　またフリントの野郎がウッドに体当たりをかましやがった！　やれ、アンジェリーナ！　叩き落とせ！」

スリザリンの違反行為が多すぎるのだ。そのうえ露骨だ。なんでこいつらは出場停止にならないんだ。

隣のジニーやハーマイオニーの応援も白熱している。

「卑怯ものー！　ファウルに頼らなきゃ勝てないならさっさと負けちまえ、この、腰抜けー！」

「そこよー！　やってやりなさいフレッド！　目には目、歯には歯よー！」

もはや立ち上がる勢いの二人の隙間から、そっとロンと顔を見合せた。ロンの頬は引きつっていた。たぶん、僕も。僕らの愛しい人たちはたくましいね……。

試合はおそれていた泥仕合へと突入した。――五十点。五十点の差をつけてからスニッチを取らねばグリフィンドールに優勝はない。

ハリーにも焦りが見られる。ジニーも手汗を握ってハリーを追っている。

「ああ……ハリー」

「……大丈夫だよ」

握りしめられたジニーの手を開いて代わりに握る。そんなに力を入れたら爪が食い込んでしまう。傷付けるならせめて僕の手にしてくれ。

スニッチを発見したセオドルへとハリーが迫る。ニンバスでは届かなかった距離だ。けれど、彼のファイアボールなら——！

セオドルと揉み合い飛び跳ねるようにして転がったハリーは、空へ真っ直ぐに腕を伸ばした。手の中で金色の命運が輝いていた。

「ハリーっ!!」

割れるような歓声が響いて、彼へと赤いローブが詰め寄る。中には黄色や青もある。皆の胸元には真紅の薔薇が挿されていた。

「ハリー、ハリー、ハリー！ 彼ってほんとうに素晴らしいわ！」

ジニーが半泣きで僕を力いっぱい抱きしめた。ハーマイオニーは泣いていた。

先日の勝ち抜けなんて比でないくらい祝福の声をあびて、トロフィーをかかげたハリーに、僕とロンもちよつとだけ泣いた。

ブラック侵入事件の鬱々としたムードを一気に晴らした昼下がりがだった。

優勝杯の余韻は心だけに残り、迫りくる地獄にホグワーツの時間は無慈悲に流れていった。——試験である。

ハリーやロンは勿論のこと、パーシーやあの双子のウィーズリーですらピリピリと勉強に勤しんでいて、だがしかし誰よりも導火線のギリギリをたもっているのはハーマイオニーであった。

目の下にくまを作り、元からまとまることを知らなかった髪は常に寝起きかのようにボサボサだった。実際のところ、時間がおしくてブ

ラシを入れていないのかもしれない。

「アレ、見たかよ。マリア」

「アレ？」

「ハーマイオニーの試験予定表だよ。なんだつて同じ時間に別教科の試験があるんだ？ どうやって受けるっていうのさ。君、聞いてないかい？ ハーマイオニーが分身する魔法を覚えたとか」

「ウーン、分身する魔法は聞いてないね」

「じゃあハーマイオニーは二人いるわけだ。グリフィンドールには双子が六人と一人いるんだな」

ロンの小粋なジョークに声を出して笑えば、ハーマイオニーに、よそでして！ と癩癩を起こされた。ウウ、オソロシイ。

試験当日、すでに三年生を一度経験している僕はおおむね問題なくこなしていた。けれども——闇の魔術に対する防衛術の試験だけは、クリアできなかった。

グリンデローのプールを渡り、レッドキャップの穴を抜け、ヒンキーパンクをかわして沼地を通り——最後、あの『赤子』と化したポガートの前に、僕は頭が真っ白になった。震えて、杖を向けることさえできなかった。

どうにかポガートと対決するトランクから抜け出して、先で満点を取って待っていたハリーに抱かれてようやく呼吸を思い出せた。ルーピン先生はよくがんばったと肩を叩いてくれた。

僕は、どうしてこんなにも『彼』を——

「やあ、ハリー。試験かね？ 調子はどうかね？ ——ああ、マリアも」

野外で行われた闇の魔術に対する防衛術の試験から城へ戻る途中、コーネリウス・ファッジに会った。ファッジは相変わらず下心満々にハリーへと笑いかけ、僕に対する挨拶はなんともぞんざいなものだった。

た。

そのハリーとはいえば、ファッジの僕への対応が気に入らないように、胡散臭げに相槌のみを返していたが。

「大臣はなぜホグワーツに？」

窺えば、ファッジはチラチラと周囲を目だけで見回して声をひそめた。

「その——ブラックが城内に侵入したというだろうか？ それも、ハリー！ 君を襲った」

「ハリーでなく僕です！」

「ウム——エー、ミスターウィーズリー？ その通りだ。しかし、ブラックが狙ったのはハリーなんだ。つまりは——誰が一番危険なのか、わかるね？」

「ロンなら間違いで襲われてもよいとおっしゃるんですか!？」

「いや、いや、君——アー、」

「ハーマイオニー・グレンジャーです」

「ウム、グレンジャー君。それはちがう。当然ちがう。けども——」

話があらぬ方向へとそれてしまいそうになったので、憤慨するハーマイオニーを抑えてファッジへと問い直す。

「ああ、うん。なぜここにいるかだね。そのブラックの件で、まあ、なんだ。ダンブルドアと話さねばならないのだ。ハリーの安全を守るために」

再びハーマイオニーが、気にするのはハリーだけなのかと噛み付きかけたので、さっさと会話を切り上げる。

「今夜のみですか？」

「いや、数日滞在することになるだろう。大人の会議というのは、得てして時間を取るものだ」

ファッジがハーマイオニーの目から逃げるようにして去る。それを見届けてから、ロンがハーマイオニーに、どうして君がそんなふうになるんだよ、なんて野暮なことを聞いていた。

「大臣なら、ロン、あなたのお父さまの最高の上司よ。そんな人にあなただが歯向かうのは、かしこいとは言えないわ。ハリーは身柄を監視されてる身。マリアはハリーの身内。なら、マグル出身の私が怒るのが適任じゃない！ あんな鼻真、許しぢやならないのよ！」

ロンはハーマイオニーに感銘を受けていた。ハーマイオニーはいつだって真つ直ぐなのだ。……ことさら、ロナルド・ウィーズリーに關しては。

「ほらね？ ハーマイオニーが怒る時って、こんなにも誰かのためなんだ」

ハリーもロンも、くしゃくしゃに笑ってうなずいた。

試験最終日だ。先に受けた占い学の教室の下で、僕はハリーを待っていた。

きつと予言はある。前回、ペティグリューに関する予言はここでされた。——内容を、ハリーから聞き出さねば。

ハリーが茫然自失の様子で梯子を下りてきた。僕はすぐに駆け寄った。

「ハリー、どうだった？」

「どうだったんだらう……」

ハリーはすっかり腑抜けていた。どうにか意識を引いて、やはり試験後にされた予言の内容を聞き出す。

——闇の帝王が召使いの手を借り、再び立ち上がるだろう。

——真夜中に召使いが馳せ参ずるだろう。

前回同様、寸分も変わらない予言だった。つまりは——今夜、動き出すのだ。

「スキヤバーズを見付けなくちゃ」

「え？」

ハリーの手を取ってグリフィンホール塔へと駆け出す。

予言通りになど進ませるものか。

ペティグリューは捕まらなければならない。闇の帝王の復活なんてどうでもいい。

シリウスを、今度こそ解放するんだ。

デルフィーニの予言を壊したあの日のように——ペティグリューの予言を、僕が防いでみせる。

試験を終えてすぐ、ハリーたちと別れた僕はドラコと落ち合っていた。今宵の協力を仰ぐためだ。しかし——ドラコは首を横に振った。

「すまない、マリア。今夜は協力できそうにない」

「え……」

厚顔はなはだしいが、まさか断られると思っていなかった僕は啞然とした。

「アステリアの熱が引かないんだ。クイディッチの試合があつただろう？ 普段、彼女がああいった場に顔を出すのは珍しいことだね……無理が祟つたらしい」

「……そうか。それで」

あれほどに甲斐甲斐しく面倒を見ていたのには、ちゃんと理由があつたのだ。

「高熱はすぎたが、まだ微熱が残っている。油断すればぶり返すのが彼女なんだ。だから、」

「うん——うん、わかった。側にいてあげて」

「ほんとうにすまない」

「いいや、こつちこそ。当たり前前に君に甘えようとした。……恥ずかしいや」

背の後ろで手を握りしめる。

——恥ずかしい。彼はなにもものからも僕を優先してくれると思ひ込んでいた。傲慢だ。アステリアを選ぶと、彼はいつかできつかりと宣言していたじゃないか。

恥ずかしい。

「マリア、待ってくれ。君に頼られるのは嬉しいんだ、ただ――」
「わかってる。わかってるから」

なおも言い募ろうとするドラコに突っぱねるようにして腕を突き出す。

「アステリアは医務室？」

「いや、寮でダフネが看ている。ただ、もしもの時に彼女だけではアステリアを運ぶことはできない。だから」

「わかってるったら。君もたいがいしつこいな」

正面の肩を拳で叩く。ドラコはとんでもなく情けない顔をしていった。

「僕なら大丈夫。大体、君なんてただの保険なんだから。たかだか鼠一匹を追うだけだ。変に氣遣うなよ」

「マリア」

「明日には大広間で大臣から一大ニュースが聞けるだろうさ」

このままでは僕まで奇妙な顔をしてしまいかねなかったので、さつさと切り上げてきびすを返した。そうすれば、ドラコの焦ったような声が追う。

「マリア、僕が君への協力を惜しむことは決してない。これまでも、これからもだ。それだけは信じてくれ」

彼の真摯な言葉に、僕は腕をチラとだけ振って答えた。

情けない。こうも思い上がり突きつけられる。なまじ、中身がそれなりに自分の短所と付き合ってきた『僕』なせいで自己分析を氣

取ってしまう。

……こんな気持ちにさせられるなんて、思ってもみなかった。

「切り替えよう」

パシッと頬を叩く。まずはペティグリュウを見つけ出さなくては。予言がある限り——誰かが予言を壊そうと意図的に動かない限り、ペティグリュウがこのまま、ハリーと接触する前にホグワーツを離れるということはないはずだ。

奴を逃がしたのは僕の落ち度だ。完全に油断していた。僕だけは——常に状況を把握しておかなくては。

前回では確か、ハグリッドの小屋に隠れていたんだっただか。

今回も同じとは限らない。確認が必要だ。そのためには——

「もしもし？——ルーピン先生？」

戸をノックして部屋の主へと呼びかける。返事はない。——中はいない。

「……アロホモーラ」

杖で戸口を叩く。やはり反応はない。これは僕の杖の問題なのか、それともルーピン先生の防犯が完璧なのか。

「困ったな」

開かずの扉——ルーピン先生の準備室を前に腕を組んで唸る。

このまま先生を待つべきだろうか。しかし、ハリーが自ら差し出したというのに、せいっぱい教師らしくあろうとするあの人が僕にそれを預けてくれるものか。

ふと、鍵口になにやら緑の小枝のようなものがうつった。

——カチツ。

「……………え」

ボウトラックルだ。本日の魔法生物飼育学試験にて、試験対象として扱ったボウトラックルがくるくると瞳を回して鍵穴から顔を覗かせていた。

「な、なんで…………？」

ボウトラックルはまるで答えるようにキーキーと鳴いた。さつぱりわからない。わからない——けど。

わかることが一つだけある。——これはチャンスだ。

誰もいないとわかっていても、心持ち音を立てずに扉を開く。視界の端に、一仕事終えたとばかりに廊下を駆け抜けていく生きた緑の小枝があったが、礼を言っている余裕はなかった。

どこだ——どこに——

「——あつた！」

備え付けの棚付きデスクの二段目——そこに『忍びの地図』は保管されていた。

よし、これでワームテールを確認して……地図はルーピン先生に見てもらわなくちゃいけないから、秘密を開いた状態で——

「——なにを、発見あそばせたのかね。ミスポッター？」

「——」

ねつとりとした猫なで声だ。——大きな蝙蝠のようなその人が、黒々しい瞳に剣呑な光を乗せて戸口に立っていた。

「スネイプ、先生」

「嘆かわしいことよ。まさかまさか、マクゴナガル教授とて誇り高き自察から——コソ泥を輩出することになろうとは。夢にも思わなかつたでしような。さぞ、偉業を成し遂げて鼻が高いであろう」

切れ味抜群の嫌味で逃げ場を奪われていく。普段は、チラとて寄越しはしない視線がナイフのように僕を刺していく。

「あの、誤解です、スネイプ先生」

「さて、この場合、我輩が問うべきはいち生徒ごときに侵入される防犯の甘さか、校則も常識もかえりみないとある生徒の意識か。どう思われますかな、ミスポッター」

「……っ」

元来の負けん気から彼に食ってかかろうとするのを、寸で押しとどめる。

現在、不利なのは間違いなく僕だ。落ち着け——抑えろ——ただでさえ元闇祓いが聞いて呆れる失態だというのに、これ以上馬鹿はしでかすな。

「ポケットにあるものを見せたまえ」

「え？」

「ポケットを裏返せと言っている」

目前まで迫ったスネイプ先生に杖を突きつけられる。——僕が何を目的に忍んだかまでは気付かれていないようだ。

僕は差し出した——通信紙を。

「これは？」

「余った羊皮紙の切れ端です」

「ほう、余った羊皮紙の切れ端を大切に取っておくとは……ミスポツターは大層な節約家と見える」

「孤児同然ですから。余裕なんてないんです」

どこかの誰かが両親を殺してくれたおかげでね——そんな皮肉を交えれば、スネイプ先生はゾツとするほど瞳を暗く落とした。

……ハリーだった頃はこの程度の皮肉が彼に響くことはなかったのに。——少なくとも、僕ハリーに対して隠し通せるくらいには感情を殺しきっていたのに。

マリアリリーだと——こうなるのか。

「それを寄越せ」

通信紙を引ったくらわれる。杖を当て、彼は唱える。

「汝の秘密を顕せ」

羊皮紙はただの羊皮紙のままだった。

「正体を現せ」

杖先で紙を突かれるが、ウンともスンともいわない。

「ホグワーツ校教師、セブルス・スネイプ教授が汝に命ず。汝の隠せし情報を差し出すべし！」

通信紙は応えなかった。当然だ。——この紙に秘密なんてものはない。

ただ書き込まれたものを伝えるだけ。終われば消えるだけ。それだけなのだから。なにも隠されてはいないのだ。

たとえば両面鏡に同じことをしたとしても、鏡がしゃべり出すわけ

ではないのと同じだ。

「……フン、大いに結構。これは我輩が預かるとしよう」
「ええー！」

「なにか問題でも？　ただの、余った羊皮紙の切れ端なのであろう？」

器用に目も合わせず嘲笑される。クリスマス休暇の一件で開心術は効かないと完全にバレてしまったようだ。だからこんなにも警戒されているのか。

あーあ、それ、けっこう作るのに苦労したんだけど。僕が通信紙を没収された事実を伝える前に、ドラコが書き込んでしまわないよう、祈るばかりだ。

「さらに。夕食後、我輩の研究室へと来るように」
「は？」

「教授の教科準備室に不在侵入しておいて、なんの咎もないと君は本気で思っていたのかね？　頭がめでたいのは試験中だけにしろ」

通信紙をローブに突っ込んで、話は終わりだとばかり退室を促される。

そ、そんなことって——ああ、どうしよう。

落ち着かない気持ちのままシエパードパイをつつく夕食。大広間は試験からの解放により、ここ数日となかった談笑で溢れ返っていた。みんなシリウス・ブラックのことなんてすっかり忘れて様子だった。

この中でいまだ気を張り続けているのなんて僕くらいだろう。もしくはドラコ——いや、わからないな。どうやら夕食の席にもいないようだ。……通信紙を利用したりしてなければいいんだけど。

「ああ、やっぱりDADAの失敗が痛手だった気がするわ。首席が遠退いてしまったらどうしよう」

おや、それからここにも気の緩まない勉強家が——あっ!?
僕は思わず身を乗り出していた。

「ハ、ハーマイオニー、その子……」

「え？ なに？ 今、試験中にどう解答を書いたか思い出してるところなの」

「いや、そうじゃないんだ。君の——髪に」

「髪？ ——ああ、この子ね」

ようやくとかす余裕が出てきたらしい彼女の髪から——それでもボサボサだというのは、口にはしてはならない暗黙の了解だ——鮮やかな緑の小枝が見え隠れしていた。ボウトラックルだ。……まさか、さっきの？

「実は魔法生物飼育学の試験からついてきちやってみたいで。ハグリッドのところへ行く余裕もなかったから、それからずっと一緒に」

「君の髪を巣だと思ってるんじゃないか」

ロンが横から余計な口出しをする。次には目を飛び出さんばかりにひん剥いていたので、机の下で隣の彼女に足を踏みつけられたにちがいない。

「そういうえば、ここにはあなたにあげられるご飯がないわ。だってこの子たちが食べるものって、昆虫よ?」

優しく髪から掬い出し、ボウトラックルを手のひらの上に乗せたハーマイオニーは困った顔をした。手の中のボウトラックルはいとけなくハーマイオニーを見上げていた。……リータ・スキーターでもやれば喜ぶんじゃないだろうか。

「このあとにでもハグリッドの小屋へ行こう」

「ついてきてくれるの?」

「もちろんだよ」

ハリーが微笑み、ロンが当然とうなずく。僕は生憎だ。

クルルル。ボウトラックルは軽やかに鳴いた。

「ハーマイオニー、君、いつからボウトラックルを飼い始めたんだい?」

後ろから、愉快げなユニゾンが降って落ちた。フレッド・ウィーズリーとジョージ・ウィーズリーの双子だ。ふくろう試験は無事に終わったらしい。否、無事なのかどうかは僕の知るところではないが。

「ちがうのよ、ついてきちゃったの」

ジョージ・ウィーズリーがボウトラックルをよく見ようと割り込

む。その隙とばかりに、フレッドに肩を組まれて机の下を覗かされた。

ニンマリ笑うフレッドの手には、糞爆弾と爆竹花火のセットがあった。

「二度もホグズミードに来なかったつれないお姫さまにゾンコのお裾分けだ。使い方は——君次第」

パチン。ウインクを飛ばされる。ジョージからも飛ばされたので共犯だと悟る。(よりによってこの二人なのだから当然といえば当然だ。)

思いもよらなかつた土産を僕に握らせて、主犯たちは何食わぬ顔で大広間を後にした。

……使い道がまったく見えないよ、悪戯仕掛人たちめ。

夕食が済めば楽しい楽しい罰則の時間だ。スネイプ先生は隣の部屋でなにやら作業に没頭していたので、僕はその間ひたすら鍋洗いに準じた。だれだ、こんなにも底にヒルの皮をこびりつかせたのは！

空が闇色に染まっていく度に焦りが襲う。間に合うだろうか。ハリーたちはペティグリューを発見できただろうか。

「ミスポッター」

ものすごい悪臭を放つゴブレットを手にスネイプ先生が戻ってきた。鼻がひん曲がりそうだ。そんなものと共に部屋にこもるだとか……この人の嗅覚は訓練されすぎだ。

「そこまででよろしい。我輩はこれから出る。君はさつさと寮へ戻りたまえ。——いいかね、寮にだ。愚かしい弟のように徘徊なぞして我輩の手を煩わせてくれるなよ」

鼻の上にシワを寄せて、ローブを引きずるようにして年中不機嫌な

育ちすぎた蝙蝠は教室を出た。慌てて追えば、杖の一振りでも背後の教室を施錠された。スマートだ。

そのまま、ふり返りもせずどこかへ向かうスネイプ先生のあとをひっそりと追う。僕の予想が正しければ——あれは脱狼薬だ。うっかり飲み忘れたルーピン先生に渡しに行くのだ。そして——地図を発見する。

予想の通りルーピン先生の準備室を訪れ、容赦なく鍵を解除しようとしたスネイプ先生は、ふと杖腕を止めた。杖ではなく手で押せば、扉はあつけなく開いてしまった。鍵がされていなかったのだ。

曲がり角に隠れて様子を見る。数秒後、スネイプ先生はゴブレットもなにもかも置いて飛び出していった。きつとルーピン先生もこんな風に急いだから、鍵まで頭が回らなかったのだろう。

二人とも、案外抜けている。——なににもかも、置いていってしまうなんて。

「なんで忘れちゃうかな」

地図とゴブレットを手に、僕も暴れ柳の元へと向かった。

スネイプ先生が透明マントをはおる。彼の姿が完全に消えてしまったので、慎重に叫びの屋敷へと続く抜け穴に忍び寄る。ゆっくり

——ゆっくり——焦るな——

声が聞こえる。——ハリーのものだ。

「——シリウス・ブラックと、手を組んでいたんですか」

声だけでわかった。——ハリー、ギリギリだ。感情が爆発してしま
いそうなのを、ギリギリで抑え込んでいる。

「それはちがう、ハリー。私も、今、知った。今、気付いた。ようやく、親友を取り戻した」

「そして僕とマリアを騙っていた」

「騙してなどいないとも！ ほんとうに——私は、ずっとシリウスを——」

「その答え合わせは、アズカバンでしていただく」

スネイプ先生が透明マントを放り捨てる。——エクスペリアームス！

四本もの杖がスネイプ先生のもとへと飛んだ。——ので。

「えいつ」

間に割り込んで誰かの杖をかすめ取った。そして向けた。——スネイプ先生へと。

「エクスペリアームス！ ブラキアビンド、シレンシオ！」

先生の杖が僕の手には収まる。彼の腕は背の後ろへと拘束され、怒鳴る声すらも奪う。足も腕と同様だ。

このまま、誤解し続けたまま『前回』のように邪魔されるのだけは回避せねば。——本当に誤解だったのか、今となってはわからずじまいだが。

すっかり捕らわれた強盗のような姿になってしまったスネイプ先生に、上っ面だけでごめんなさいと謝る。

スネイプ先生は無言呪文を習得している。だが——杖なし魔法となればどうだろう。人より戦闘経験の記憶が多い僕だって、アクシオだとか簡単なものでしか杖なし魔法は扱えないというのに。

床に散らばった杖を拾って、一人一人へと返していく。そして最後に、僕のイトスギの杖をシリウスへと渡した。

「マリア……」

不安げに呼んだハリーへ、ニツコリ笑いながらふり返る。

「大丈夫だよ、ハリー。さて、手荒な真似をしてすみませんでした、スネイプ先生。罰則ならまた明日にでも受けますので。——さすがに、教師に杖を向けたのは、鍋洗いでは済みませんね」

「……………」

「でも——答え合わせは今すべきなんです」

奪われた声の代わりに、ガラガラした銃口の瞳を開くその人に、ほんの少し、胸が苦しくなった。

……こんなときばかり、僕の瞳を見るんだから。——今は、『どっち』を見ているんですか、先生。

「まず、ルーピン先生。命に関わるうっかりは、どうかと思いますよ」

スネイプ先生が押し入った扉の裏に置いておいたゴブレットをルーピン先生へと手渡す。ルーピン先生は、アツ、と声を裏返らせる、窓の外を見た。

月はまだ昇りきっていない。きつと間に合うだろう。

「やっぱり、そうなのね」

ハーマイオニーが呟いた。

「……………いつから気付いていたんだい？ ハーマイオニー」

「スネイプ先生が臨時講師をなさって、人狼の項目を選ばれた時からよ。あなたのボガートが満月に変化したのを覚えていたの」

ルーピン先生がまいったな、と眉を下げて笑う。スネイプ先生が
ちよつと得意気に口角を上げていた。

まったく理解できていない子供二人——特にロンは、なんの話なん
だと子供らしく癩癩を起こして、足の怪我にうめいていた。

「ロン、動かないで。応急処置しかできないから、あとでちゃんとマダ
ム・ポンフリーに診てもらうんだよ。——エピスキー。フェルーラ」

痛みを取り除き、適当な添え木を包帯で巻いていく。家具はボロボ
ロ、床だつてえぐれ放題なので、添え木には困らなかった。……ドラ
コなら、もつと上手く処置してやれただろうに。

ジツとどこかおそろしいものを見るように、薬を飲み干したルーピ
ン先生は僕を見ていた。ロンはポカンと呆けて、ハーマイオニーは
薄々察していたのか、やつぱり、なんて肩をすくめていた。

「僕の話はあとです。——答え合わせ、だよ。ハリー、ハーマイオ
ニー」

さりげなくクルツクシャンクスの側へ寄つていつでも鼠に杖を突
きつけられるようかまえる。そんな僕にクルツクシャンクス以外は
気付かず、ハーマイオニーは迷いながらも話を続けた。

「……そのひと、人狼よ」

「エーッ!？」

やはり一番に反応したのはロンだ。立ち上がることでこそできない
が、メンタル面はかなり元気を取り戻している。改めてロンのタフさ
には驚かされる。

「それが、今、どう関係するの？ ルーピン先生が人狼だろうがどうで
もいい。そんなのは些細な問題だ」

苛々するハリーの吐き捨てるような言葉に、ルーピン先生と、そしてシリウスの目が大きく開かれていった。きつと彼らの目には今、ハリーがジエームズに見えていることだろう。堪え性がなさそうな辺りも助長しているかもしれない。……『僕』なんかより、ずっと我慢強いけどね、ハリーは。

「それがそうでもないんだ、ハリー。ルーピン先生の問題は、君の味方だった『地図』の製作にも関わっている。——そうですよね、ルーピン先生。そして——シリウス」

クルックシャンクスを挟んだその向こう、隣立つシリウスはおそろおそろと僕を見た。

「——つまり、プロングズ、ムーニー、パッドフット、ワームテールのうちの二人が——あなたたちについてことだね」

ハリーが懸命に答え合わせのため頭を働かせる。

「私がムーニーだよ。ハリー」

「そして俺が……いや、私が、パッドフットだ」

シリウスにはどこか観念したような雰囲気すらあった。

『前回』では骸が動いているかのごとき悲壮さだったが、今は毎日の食事とたびたびかけてきた洗浄魔法によって元の美貌がわかる程度には身だしなみが回復している。——それが、彼の感情をわかりやすくさせた。

「ハリー——もう一人いるんだ」

ルーピン先生とシリウス——そして僕が、クルックシャンクスの前

脚に捕らわれている鼠を捉える。

「そいつはワームテール——ピーター・ペティグリュードだ」

ルーピン先生の言葉に、もつとも大きな動揺を見せたのはロンだった。

だって、彼はスキヤバーズをとてもかわいがっていた。家族として。役立たずなんて口は言いながらも、決して手放したりはしなかった。

「おいおい、人狼ってのはジョークセンスも最悪なのかよ」

親友をけなされたと感じたシリウスが犬のように唸る。それに対し、それこそ犬の頃のように頭をはたいてしまった。シリウスは目を白黒とさせて、なぜかハーマイオニーが悲鳴を上げた。おっと、つい。

「よく考えて、この三人には共通点がある。——わかるかい？ ハリー」

「——アニメーガス」

僕の問いに、ハリーは鼠をしつかりと見つめて答えた。

「な、なんだよ……それじゃあ、スキヤバーズは——僕の鼠は、人間だったっていうのか？ だって、ペティグリューは死んだのに？ そうだ、シリウス・ブラックが殺して——」

「それこそが、間違いなのかもしれない」

次に否を唱えたのはルーピン先生だった。

「私も、忍びの地図に浮かんだ、死んだはずのピーターの名前を見つけなければ——そして、今、まさに目の前にいる変身したピーターを見なければ、シリウスを誤解し憎み続けたままだったかもしれない

……」

「それはおかしいです、先生」

声を震わせながらも、ハーマイオニーが授業と同じように挙手をした。

「アニメーガスは何者も例外なく魔法省へ届けを出さねばなりません。それは法で決まっています。何に変身するか——どんな特徴があるか——それを記録した登録簿があります。わたし、マクゴナガル先生からの宿題で登録簿を調べました。そこには、ピーター・ペティグリューの名前は——シリウス・ブラックだって」

「その通りだ。君は非常に正しい、ハーマイオニー。こんな状況でなければ、グリフィンボールに五十点をあげてもいい。——そうだね、そこから話そう。私たちの——愚かで、未熟で、思い上がっていた友情の話を。……ハリー、君の——お父さんの話を」

リーマス・ルーピンは語った。ホグワーツ入学にあたっての『病』の問題と、その解決策として使われた叫びの屋敷と暴れ柳のことを。賢く愚かで誇りだった友人たちのことを。シリウスの、とある生徒の命をも危機にさらした『悪戯』のこと。それを救ったジェームズ・ポッターのこと……

父の話になった時、スネイプ先生は身をよじって不満を訴えた。貴様らの『悪戯』とやらがその程度のものか——そう、言いたげだった。やっぱり、ルーピン先生は臆病だ。ジェームズ・ポッターがどれほどの悪行を為したか——そこには、決して触れまいとするのだから。

「さあ、私の話は終わりだ。——シリウス、君が語るときだ。——あの日の真実を」

場の主導権はシリウス・ブラックへと移った。シリウスはロンやハリー、そしてひとつひとつを吟味するハーマイオニーの質問に丁寧

答えていった。

ハリーがかるうじて冷静だからだろうか、『前回』よりも誰もが正常で理性的だった。

……あのときは、僕、誰を信じていいかわからなかったんだ。ぜつたいに殺してやるって、それだけで頭がいっぱいだった。——やっぱり、こっちのハリーは優秀だ。

「つまり——つまり、クルックシャンクスはずっとあなたの味方をしていたのね。ああ、クルックシャンクス……あなたって」

脱獄してからのホグワーツでの成り行きを聞いたハーマイオニーがクルックシャンクスを抱きしめようとして、その下に捕らわれる鼠に一步引いた。懸命な判断だ。

そして、こちらはこちらで、別件に感情を昂らせる子供がいた。——
——我らが過保護な弟君だ。

「マリア！ やっぱり君——ネビルをかばってたんじゃないか！ ほらもう、君ってすぐこれだ！ 僕がどれだけ——」

「ハリー、ハリー、今その話はいいんだよ。お説教ならあとで聞くから」

「あとでだってどうせ聞かないだろ！」

キャンキャン喚くハリーと逃げ腰の僕に、それまで陰鬱としていたシリウスやルーピン先生が顔を見合わせて実に複雑な表情を作った。戸惑いとか、笑いとか、寂しさとか——だろうか。

「いや、その——なつかしいなと」

「性別と見た目は逆だがね」

「そんなに父さんに似てる？」

「そんなに母さんに似てる？」

同じ顔をして声を揃える。大人三人全員が息を呑んでいた。……やりにくいと思ったら。

「……話を戻そう。なぜピーターが鼠としてペットに成り下がってまで行方をくらましたのか——」

真実が明かされていく。理性を残したまま、シリウスの瞳に憎しみが宿る。そして——この人にも。

「スネイプ先生、それ以上はくちびるが切れますよ」

きつくきつく唇を引き結んでいたその人にそつと声をかける。

きつと、スネイプ先生はシリウスが犯人でないことを知っていた。けれど——真犯人の特定まではできていなかった。

シリウスに負けないくらい、目を限界まで開いて鼠を眼力で殺さんばかりに凝視しているスネイプ先生に、声は届かなさそうだと早々に諦める。……僕の両親は、まったく愛されている。

「これは、君の杖だね？　マリア。すまないが、今、君が持っているスニベリー……」

「シリウス！」

「……スネイプの杖と取り替えよう。——君の杖を、私は穢したくない」

シリウスが僕へとイトスギの杖を差し出す。僕は、それを受け取れずにいた。シリウスが不思議そうに瞳をまたたかせる。

「なにを——するつもりなの……？」

尋ねたのはハーマイオニーだった。彼女はいつだって察しがいい。よすぎて——こういう時には誰よりも先に傷付くのだ。

「殺すんだ」

シリウスに容赦はなかった。声そのものが殺意を持ったナイフのようだった。

「だ、だめ、だめよ——そんな——」

「そいつはすべてを裏切った。信頼も、信用も——友情も。結果、友が死んだ」

「そ、それは——先生、ルーピン先生、なにかおっしゃってください……彼を止めてください……」

「止める必要があるのかい？」

ハーマイオニーは絶句した。とうとう、普段、頼るなんて思いもしないスネイプ先生にまで目を向けるが、彼こそが誰よりも、鼠——ペティグリューを殺したがっている形相だった。

「さあ、マリア——杖を替えよう。どうせスニベルスの杖なんざ闇の魔術に染まりきった——」

「無責任だ」

僕の声は思っていた以上に抑揚なく響いた。

「ここでこいつを殺せば、シリウスは今度こそアスカバン行きだ。冤罪じゃない、正真正銘の犯罪者だ」

「ああ、その通りだ。それでもいい——」

「——僕はよくない!!」

シリウスもルーピン先生もスネイプ先生も、皆が啞然としていた。

「あなたは後見人でしょう!? 父さんが——自分に何かあったとき、ハリーを守るようにって——そう願ってあなたを選んだんだ! 名付け親にしたんだ! それなのに——あなたは——ちつとも『僕』と生きようとしてくれない!」

シリウスの手からイトスギの杖を叩き落とす。それは床を滑ってどこかへ消えたが、目で追っている余裕なんてなかった。

「あなたはあのハロウィンの夜に駆け付けた。そして屋敷の惨状を見た。僕たちが生きているかの確認より——復讐を選んだ! 僕らを捨てた!」

「マリア、待て」

「その結果がこれだ。悔っていた腰巾着にしてやられて、アズカバンに十二年も入れられて——とんだ大間抜けだ」

最期には勝手にヴェールの向こうになんていつてしまつて——ちつとも、一緒に生きる努力なんてしてくれない。

僕ばかりが、あなたを恋しがるんだ。一方的に愛するしかないんだ。あなたは——ジエームズしか見ていないのに。

「僕は、そんなものより——『僕』と生きてほしかった」

足元の木床がぽつりぽつりと色を変える。そのうちに木目すらわからなくなる。視界はすっかり滲んでいた。

「——僕も、マリアと同じです」

柔らかく、顔を目の前の肩に押し付けられた。ああ、ほんとうに——ずいぶんとしつかりした体になった。

「ピーター・ペティグリューを殺してはならない。生きて償わせるん

だ。——あなたにだって、ちゃんと責任を果たしてもらおう。マリアを泣かせたんだ。僕にとつては、これ以上の理由はない」

数秒の沈黙が場を支配して——情けなくも、僕の嗚咽だけがやたらに耳についた。ハリーは僕を抱いたまま決して放さなかった。

「……わかった。この中で、もつともピーターの処遇を決める権利があるのは君たち二人だ。その通りにしよう。城まで運んで——」
「待ってくれよ」

ロンだった。折れたままの足をどうにか奮い立たせて、ペティグリュ——彼にとつてのスキヤバーズを悲痛に見た。

「確認、させてほしい。——わかっている。ここまで聞かされて、そいつはスキヤバーズなんかじゃなくて、ずっとペティグリュだったんだって。それでも——友達なんだ」

ロンの哀願は切なさに満ちていた。彼が受けたショックは計り知れないのだと、改めて思わされた。

「ずっと——友達だと思ってたんだ。スキヤバーズを。だから、確認させて。おねがい」

ルーピン先生とシリウスは、ロンへと確かにうなずいた。シリウスが、転がっていった僕の杖を探して床へと目を滑らせて——

「ならば、我輩も協力させていただこう」

イトスギの杖を持ったスネイプ先生が、呪文のすべてを解除して悠々と立っていた。

「スネイプ先生……」

「情けない面を見せるな、ポッター」

相変わらず優しさの欠片もない声と口調に、どうしてか安堵してしまふ。

「どっちのポッターですか？」

「どっちもだ」

これには、ハリーまでクスクスと笑っていた。

「いいね、セブルス。同時といこうじゃないか。なんだかこれって、同僚同士の仕事らしいと思わないかい？」

「おい、リーマス！」

「貴様の頭にはチョコレートしか詰まっていないうるだな」

「テメエ……スニベリー！」

「まったく……騾のなっていない駄犬はところかまわず噛みつく。貴様の吠え汚さには虫酸が走るわ。不愉快すぎて——多少、手元が狂ったとしても、文句はあるまいな？」

似合いすぎる悪どい笑みを浮かばせたスネイプ先生に、ルーピン先生が苦笑する。シリウスは悔しげに拳を握りしめて、ギラギラとスネイプ先生を睨んでいた。

二人が同時に杖を振った。青白い光が鼠へとほとばしった。

——木が、育つのを早送りで見ているようだった。頭が起きて、手足が伸びて、腹がずんぐりとして——

貧相で小汚ない男がそこに現れていた。

きよどきよどする男に、朗らかにルーピン先生が笑う。

「やあ、ピーター」

まるで久々に会えた旧友とでも接するかのような気楽さだった。
——ゆえに、おそろしい。

「シ、シリウス——リーマス——」

男は震えながら自身を囲む面々の顔を見て回った。ハーマイオニーの腕の中へと避難していたクルックシャンクスが、シャーッと激しく威嚇した。

「し、信じないでくれ。すべてうそだ、デタラメだ。わかるだろう？
この男は狂っている！」

「マリアの前でその言葉を口にするな」

ハリーの声は冷たかった。

「リーマス、リーマス、まさか君は——信じたりしないだろう？ やさしい友達。君は一等、優しかった」

「ピーター……私は——君のことを、ずっと守ってきたつもりだよ。
もちろん、シリウスも——ジェームズも。けれど君は——」

「——なら、今度も守っておくれよ!!」

それは、媚びだとか情けだとかをかなぐり捨てた哀れな姿だった。
——これこそが本音なのだ、悟った。

「僕ひとりでなにができるっていうんだ！ 臆病者のピーター！ 腰巾着のピーター！ その通りだ——私は君たちのように強くなならない。だから、しかたがなかったんだ」

そしてピーターは——次に続けた言葉によってみんなから怒りや恐怖の感情を奪いさった。

「だって——ジェームズが死ぬなんて思わなかった！」

「……………は？」

誰だっただろう。誰もがかもしれない。心の底から理解できないと——困惑が場に満ちた。

「あのジェームズだ！ 僕らのヒーロー、ジェームズ・ポッター！ 天才で、秀才で、誰もが憧れたジェームズ！ 『あの方』から二度も逃げ延びた英雄ジェームズ！ そんな男が——殺されるなんて、思わないじゃないか」

「お前は……お前は……なにを言ってるんだ……？」

「ジェームズなら死なないと思ったから、だから、だから——僕が死ぬような目に遭うくらいなら、ジェームズなら——」

「でも、ジェームズは死んだ。あつけなく殺された。それって——つまり、それほど恐ろしい方なんだ。あのジェームズをあつさり殺してしまうほど強い力を持つお方なんだ。そんなの……劣等生のピーター・ペティグリューが立ち向かえるわけないだろう？」

シリウスは理解が欠片もできないと怒りに不健康な肌を染め上げ——ルーピン先生とスネイプ先生は、呆然としながらも彼の心からの叫びを噛み締めるようにして瞳を揺らしていた。

「気が狂っているのはお前だ、ピーター。ジェームズだって人間なんだぞ——人間である限り、人は死ぬんだ！　それが——それがわからなかっただと——？」

「——僕、わかるよ。それ」

シリウスの唸りに答えたのは、ピーターでも残す大人たちでもなく——ロンだった。

「だって僕、ハリーが死ぬなんて思えない。ハリーって、一年生の頃からかなりデンジャラスな問題に巻き込まれてるけど——それこそ、生まれた頃からなんだろうけど——ホグワーツで二度も『あの人』と対決したのに、こうして生きてる。大怪我をしても僕たちの元へ帰ってきてくれる。だから、次も——て、思ってる」

「——わかるわ」

ロンの独白を、ハーマイオニーが引き継いだ。

「わたしも——ハリーなら大丈夫だって、心のどこかで思ってる気がする。でも、そこに理由なんてないの。いいえ、ハリーこそが理由なんだわ。ハリーだから大丈夫だって——ああ、これってものすごくおそろしい思考だわ」

ハリーへと一心に視線が集まる。そのハリーは——

「わかるよ」

ハリーまでもが、ペティグリューの危うさを肯定した。

「僕も——去年のことがあるまで、マリアは死んだりしないって思ってた」

「え——」

出てくると思わなかった名前に、隣の片割れを見上げた。

「でも、マリアは死にかけた。死んだっておかしくなかった。マリアが冷たくなっていくのを、この手で感じた。マリアの血はあたたかかった。それで、気付いたんだ。——マリアだって、死ぬんだって。だってマリアは——生きているから」

シン——重苦しい沈黙だった。

……僕にだって覚えがある。僕も——ダンブルドアは死んだりなんてしないと、信じきっていた。

危うい。誰かを英雄視するというのは——時として相手を死にまで至らしめる。

『僕』は——ずっとそんなものを——

「ピーター」

ハリーがペティグリユの元へと膝をつき、彼とまっすぐに視線を合わせた。

「——ジェームズは死んだ。ジェームズ・ポッターは——君の英雄は死んだんだ」

「あ——」

ジェームズの顔が、リリーの目が語る『死』に、ペティグリユははじめて聞いたとばかりに虚ろな目を開いた。

「あ……ああ……死んだ……死んだのか、君……ジェームズ……ああ……」

ボロボロと涙がこぼれ落ちる。お世辞にも彼の外見は見られたものとは言えなかったが、その姿ばかりは、汚ならしいと罵倒する気持ちにはなれなかった。

友達だったんだ。父さんとピーターは——まちがいなく、友達だった。

「……お城へ行きましょう。ちょうど、魔法省からの役人が来てるわ。直接引き渡すのよ」

毅然とハーマイオニーが立ち上がった。ペティグリュウに集まっていた視線は気遣わしげにロンへと移動し、そしてそのロンこそが一番にペティグリュウの腕をひねり上げた。

「行こう」

「ロン……ええ、行きましょう」

不自由な足でペティグリュウを繋ぐロンをハーマイオニーが支える。ルーピン先生がペティグリュウの反対の腕を捕らえる。僕はスネイプ先生へと杖を返して、そしてイトスギの杖を取り戻してからトンネルを進む彼らへとついていった。

ようやく光が見えたところで、手を繋いでいたハリーが振り返った。

「——その、マリア？ 君は……」

しんがりを務めていたシリウスが、とつとつと切り出す。

「私が——つまりは——」

聞きたいことなんて山ほどあるだろう。もしも僕がシリウスなら、ルーピンなら、スネイプなら——ハリーだったなら、こんな怪しい人

物を信用しやしない。

シリウスは数秒考えあぐねると、おそろおそろと尋ねた。

「……犬に玉ねぎをやってはならないと、君は知っているか？」

思わず吹き出してしまった。なんて——なんて不器用な確認の仕方をするんだ、この人は！ 隣のハリーまできよとんとしていた。

ほんとうに——あなたって人は——

「——当然でしょ、黒犬さん！」

トンネル内に、僕のおかしな笑い声が反響した。

城は目前だ。しかしそこで事件は起きた。——ディメンターが待ち構えていたのだ。

「なぜ——！」

混乱は最悪を生んだ。とんでもないタイミングで月が現れ、理性を持つとはいえ身体は変化してしまうルーピン先生が恐ろしい狼の姿で暴れ柳の元へと取って返してしまい、パニックになったペティグリューがロンをなぎ倒して鼠に変わって逃走したのだ。

きつとペティグリューはディメンターさえ現れなければ完全に観念していただろう。彼が逃走する際の言葉は「死にたくない」だった。不運が重なりすぎた。

「だめだ、あいつを逃がしたら——」

「マリア、離れないで！」

「魔法省に突き出さないと——シリウスが！」

「シリウスの冤罪証言なら僕らだってするから」
「それじゃ駄目なんだ！」

ロンの腕を振りほどく。

かつての僕とハーマイオニーの証言は、子供だからと聞く耳すら持たれなかった。ファッジは——目の前で事を起こさねば、不都合を認められない腐った男なのだから！

「マリア——」

ハリーが僕の手を握った。——震えていた。

「おねがい——そばにいて」

「——」

ハリーが杖をデイメンターへと伸ばす。その数は百を超えていた。城の外を警備と称し徘徊していたデイメンターのすべてが集まったようだった。

「エクスペクト——」

杖が三本、闇に向かって輝いた。

「「エクスペクト・パトローナム」」

それは幻想的な光景だった。雌鹿が二匹、牡鹿が二匹——睦まじく寄り添いあうようにして二組の番が駆け抜けた。闇を銀の輝きで割いて、死の温度をやわらかく溶かした。

「きれい……」

ハーマイオニーが思わずと呟いて、それに同意を込めてうなずいて——
——待て。牡鹿が二匹？

僕はハーマイオニーの手を掴んで駆け出していた。二組の番鹿に夢中になっている面々は離脱する僕らに気付いていない。——今だ。今しかない。

彼らから完全に死角の場所へとハーマイオニーを引き入れて——
僕は懇願した。

「ハーマイオニー——君のタイムターナーを使わせてくれ」

マリア・ポッターとアズカバンの囚人【完】

透明マントのありがたみを今日ほど思った日はない。

時間を巻き戻してから真っ先に僕が起こした行動は、察にある透明マントの確保であった。

「マリア……マリア……これって——とんでもないことよ」

マントの中に二人。ぴったりと寄り添う彼女は状況を理解するにつれ真っ青になった。

「禁忌なのよ。いい？ 校則破りなんてものじゃない、魔法界の規則を破る行為なの。時間を変えるなんて——絶対にやってはならないこと」

透明マントをかぶってなお、人に見られている心地で落ち着かない彼女——ハーマイオニーは、僕の腕を抱きながら諭すように言った。いつそ僕にというより自分に忠言しているようだった。

「わかってる」

そんなのは——きつとこの世界で僕とドラコが一番よくわかっている。僕も二番目の息子とその親友にどれだけ説いたことか。

そして、今——僕は未来の『僕』の決意を破る。

「もしも……もしも誰かに……ああ、マクゴナガル先生とお約束したのに」

「そのときは僕が君を無理に従わせたと証言するよ。うん、それがいい」

すると、それまで規則を破るといふ事実には愕然としていたハーマイオニーの目に勝ち気な光が戻った。

「見くびらないでちょうだい、マリア。わたし、今まで一人で規則を破ったことはないの。——誰かと一緒に破ってきたのよ。同じことよ。これから——あなたと破るの」

すぐるために握られていた腕は、今や頼もしいものでしかなかった。やっぱり、三人組の中で一番、度胸があるのは彼女だ。

「……ありがとう、ハーマイオニー」

マントの中で微笑んで、彼女を連れながら移動する。いつの間にか彼女の足取りはしっかりしていた。

「さて、まずは僕を見つけないと」

この時間に、僕はどこで何をしていただろうか。

察にはいなかった。となれば、ルーピン先生の部屋へ向かってる途中か？ 忍びの地図を目的に——あ。

立ち止まって、懐を探る。動く僕の肘に合わせて、ハーマイオニーがマントを押さええてくれていた。

——ああ、やっぱり。あった。

「マリア？ それ……どうして——も、持ってきちゃったの？」

横から覗き込んだハーマイオニーが、数名の名前を見つけて呆けた。

そうだ、僕、ゴブレットと一緒に持ち出したじゃないか——『忍びの地図』を。

目まぐるしく変化する状況に振り回されて、持っていること自体を

すっかり忘れていた。

奇妙なことに、今、この時間枠には忍びの地図が二枚存在することになってしまったのだ。

廊下の端に寄り、ハーマイオニーと地図を眺める。

どうやら、時間をさかのぼったイレギュラーな存在までは地図も認知できないらしい。それに安堵して、三つ集まるハリーとロンとハーマイオニーの名前、そして中庭付近を歩く僕を見つけた。

中庭……寮まで通信紙を取りに戻ったその後くらいか？ ということは、これはドラコとの待ち合わせに向かっている僕か。

「このあと、ルーピン先生のところへ行って、君のボウトラックルに助けられるんだ」

移動するマリアの名前を追って眩く。あのときはろくに礼も言えなかった。もしも捕まえられそうなら、今度こそ礼がしたいものだ。無理でも、無事にミッションをこなしてくれるかくらいは見届けないと。

「わたしのボウトラックル？」

ハーマイオニーがきよとんとする。

「そう。君の髪に住んでたボウトラックルだよ。あの子がルーピン先生の部屋の鍵を開ける手伝いをしてくれたんだ」

「……………それ、違法よ」

ハーマイオニーの目はジトツとしていた。

「それから、もうひとつ。——それはわたしが一緒にいたボウトラックルではないわ」

「えっ？」

歩き始めていた足を止める。ハーマイオニーは確信を持って続けた。

「言ったでしょう？ わたしたち、ずっと一緒にいたの。あの子が離れたところをわたしは見てないわ。ほら、これ」

ハーマイオニーの指が自身の名を指す。

「この時間のあなたがいる場所と真逆に進んでる。とてもじゃないけど、これじゃ間に合いもしないわね」

僕はその場に立ち尽くして黙考した。

だとすれば、あれは野良ボウトラックだったと——？ そんなことがありえるのか？ そんな、都合よく——

「……………僕だ」

ハーマイオニーの手を掴んで踵を返す。

「マリア？ どこへ行くの？」

ハーマイオニーは戸惑いながらも僕の歩みを止めることはしなかった。

都合よくボウトラックが現れたんじゃない。——僕が、都合を合わせたんだ。

何学年生かの最後の試験を行っている——こちらはサラマンダーが試験対象だった——ハグリッドに、見えないと理解しつつも忍び足で小屋の裏へと潜む。

「マ、マリア、いいのかしら、ほんとうに」

「よくないに決まってる」

でも、やらなくちゃ。

ハーマイオニーのアロホモラで鍵を開け、侵入する。この試験の一つか二つ前が僕らの学年の試験だったはずだ。ならば、まだその辺りに潜んでいるかもしれない。森への解放には早いだろう。

透明マントを使用しているため、二手に分かれることもできず戸棚を漁る。なにか、手がかりになるような——あ。

「……生きてるのね」

ハーマイオニーがいかにも触れなくなさげに瓶を振った。中には新鮮な昆虫が数匹捕らえられていた。……君、リータ・スキーターの正体を知った時、同じことをするからね。

ハーマイオニーから瓶を受け取って、蓋を開ける。二、三匹をコロコロと棚に転がし出す。

——キキキーイ！

棚の後ろなんか隠れていたらしい一匹のボウトラックルが、嬉々と昆虫を掴まえた。……アツ、食事シーンは案外グロテクスだ。

なんとも微妙な気持ちのまま、彼女だか彼だかの食事が終わるのを待つ。そして、透明マントから顔を出して手のひらを差し出してみれば、ボウトラックルはそっと乗り上げてくれた。

「協力してほしいことがあるんだ。一緒に来てくれる？」

ボウトラックルは頭の二葉部分をふわふわと上下に振った。

地図でこの時間の僕を確認しながら、ルーピン先生の準備室が見える位置にて待機する。——僕が歩いてきた。客観的に自分を見ると

いうのは、何度体験しても慣れないものだ。

ルーピン先生の不在を確認して、僕が杖を取り出している。——今だ！

「頼んだよ」

そつとボウトラックルを地面へと置く。ボウトラックルは透明マントから身をさらけ出して駆けた。

「わたし、今日で犯罪を二つ犯したわ」

「バレなきや犯罪じゃないのさ」

「マリアって実はスリザリン向きなんじゃないかしら」

「実は組分け帽子は僕をスリザリンに入れようとしてたよ」

ボウトラックルがキュルキュル鳴きながら誇らしげに戻ってくる。透明マントから手だけを出して迎え入れる。慣れると実にかわいらしい生き物だ。危険を感じると相手の目玉をくりぬく獯猛性も持ち合わせているけれど。

この時間の僕が首を傾げながらも入室する。この場での仕事はこれで終わりだ。さて——『彼』に没収されるまでどう過ごすそうか。

「……ねえ、マリア」

ハーマイオニーはまだ僕が中へと消えた扉を見ていた。

「あなた——ほんとうはちゃんと、魔法が使えるのよね。普段はできないフリをしているの？ それとも——できないの？」

「……………」

「どうしてあの瞬間に叫びの屋敷に入れたの？ どこから？ シリウス・ブラックとはいつから——友達だったの？ クルックシャンクスのことも知っていた？ わたしがタイムターナーを使っているとい

「気付いたの？」

「……ハーマイオニー」

「ひとつでも答えられるものはある？」

僕はうつむいて首を振った。まだ、まだだめだ。でも——いつかは

「……僕を裏切り者と見るかい？」

「裏切っていたの？」

「……そんな、つもりは」

「なら、ちがうんでしょ。あなたって隠し事が多すぎるけど、それに意味があるんだってことくらいはわかるわ。わたしも、ハリーも。ロンは………わたしがなんとかするわ」

やはりロンは僕の秘密が気になっていたらしい。仲間外れだとか、きらいだもんな、あいつ。

「信じてるわ、マリア」

微笑んでくれるハーマイオニーに僕も感謝を込めて笑いを返せば、廊下の先からぬつと現れた黒男に、次には互いに上がりかけた悲鳴を手に押さえ合っていた。ポウトラックルまで自分の口を押さえていた。ちよつと和んだ。

冷や汗を流すハーマイオニーとアイコンタクトを交わして、そろりそろりと壁に背をつけて移動する。スネイプ先生がノックのためかかげた拳のまま、鍵が開いている様子におそろしく怪訝な顔をしている。

——アツ、もしかして、これってルーピン先生が薬をちゃんと飲んでるかの確認のために来てたのか。そうしたら、中に以前から怪しんでいた生徒がコソコソ侵入しているのだから……そりゃ、疑いたくもなる。

どうにか部屋が見えない位置まで離れて、生きた心地のしない競歩で現場から離れる。

「あ、あれ、大丈夫なの？ あなた、中にまだ」

「まったく大丈夫じゃなかったから罰則なんて受けたんじゃないか」

「ああ……わたしたちがボウトラックルを返しにハグリッドのところへ行ってる間のことね」

「そうそう」

「その時にスキヤバーズ……いえ、ペティグリュウを襲うクルツクシヤンクスにあつたのよね。ここにマリアがいれば、て思ったからよく覚えてるわ」

「えっ」

立ち止まる。そうだ、僕が罰則を受けている間のことを——どのようにしてペティグリュウを発見したかを、僕は知らない。

「——詳しく聞かせて」

端に寄って、ハーマイオニーからそれからのことを聞き出した。

ボウトラックルを無事にハグリッドへ届け、小屋から城へ戻る最中に疾走する鼠を見たこと。それを唐突に現れたクルツクシヤンクスが追ったこと。さらにロンが二匹を追い、ロンをハリーとハーマイオニーが追い、三人と二匹は暴れ柳の元までたどり着いたこと。黒い犬がスキヤバーズを捕まえたロンを襲ったこと。（今となっては、襲ったのではなく鼠を奪おうとしたのだろう、とハーマイオニーは付け足した。）

「つまり、夕食が終わるまでに透明マントを手放さなくちゃいけないってことか」

僕が考え込みながら呟けば、ハーマイオニーは不思議そうに首をか

しげた。

「どうして?」

「君たちが透明マントを使うだろうか?」

「使つてないわ?」

「でも、スネイプ先生が——」

それに、この警戒網の中、透明マントなしにハリーを外出させるなんて——いや、そうか。思えば、前回より事が動くのは早かった。前回は暗くなってからの外出なんて確実に止められるとわかっていだから透明マントを使ったわけで——今回、三人がハグリッドの小屋へ向かった時間帯はまだ明るかった。警戒の度合いが違ったから、ハリーに余計な目が行くこともなかったのか。

難しい顔で黙り込む僕に、思うところがあつたのか、ハーマイオニーはそつと声を落とした。

「……そうよね、ごめんなさい」

「ハーマイオニー?」

「まだ明るいからって、透明マントもなしに——もちろん、あるからいいという訳ではないわ——ハリーを連れていくべきではなかったわ。テストが終わって、わたし、浮かれてたのね。実際のシリウス・ブラックは殺人鬼なんかではなかったけど——もしも『そう』だったなら……危うく、ハリーを危険にさらすところだった」

「ハーマイオニー……」

唇を悔しげに噛んだ彼女に、適切な言葉が浮かばず気まずい沈黙となつてしまった。

「わたし、ちゃんと意識を変えるわ。ハリーだから大丈夫なんて、そんなことを考えないように。——ペティグリユーのようになって、泣きたくないもの。あんなさびしい涙は、いや」

どこまでも心の在り方が強く美しい彼女に——決して届かないけれど、『僕』のハーマイオニーへ向けて、感謝を述べた。

「そうしてあげて。君たちだけは——ハリーをハリーとして見てやっ
てくれ」

いずれ英雄となってしまう——ほく彼だから。

隅に寄せていた身を起こして、改めて地図を開く。切り替えた僕に、ハーマイオニーも意識の先を替えたようだ。理知的な瞳で地図の名前を追っている。

スネイプ先生が拾った透明マントは僕の仕業だとわかった。あのマントがなければルーピン先生かシリウスにスネイプ先生は即座に見つかっていただろうから、あそこで抜け穴前のマントを拾ってもらうことは必須だ。

となると、次に起こるのはスキヤバーズを追い詰めるクルックシャンクス是件か。それまで透明マントで身を隠し、三人と二匹が叫びの屋敷へと引き入れられてからマントを置いていく、という流れが無難そうだ。

「クルックシャンクスはどこから現れたの？」

ホグワーツ城からハグリッドの小屋までの道のりを、地図上からも確かめつつ伺う。

「それがわからないのよ。試験期間だから特に、寮で留守番させていたはずなのに。ほんとうに突然——」

はた、と。何度目になるかわからない曖昧な表情で僕とハーマイオニーは顔を見合わせた。

「……まさか」

「……まさかでしょ」

——これも、僕の仕業だったりしますか。

クルックシャンクスを抱えて、透明マントを押しやる役割はハーマイオニーに任せて走る。ハーマイオニーが急かす。地図の上ではすでに三人がハグリッドの小屋を出て城へ向かおうとしているところらしい。

まずい、間に合わないなんてそんなこと——あってはならない。

「——見えたわ！ わたしたちと——スキヤバーズよ！」

小声でハーマイオニーが前方を指す。あまりに小さな影だけれど、はつきり見えた。

「頼むよ——クルックシャンクス！」

腕から放り出せば、クルックシャンクスは颯爽と駆けた。なるほど。これは、クルックシャンクスが突然現れたようにしか見えないだろう。言葉通り、透明だったのだから。

ロンがスキヤバーズの名を叫びながら追う。ロンに捕らえられる前にとクルックシャンクスが奮闘している。着々と混乱した一行が暴れ柳へと近付いていく。——黒犬が、暴れ柳の根元からロンへと飛びかかった。この時間のハーマイオニーが悲鳴を上げた。ハリーは困惑していた。見覚えのある姿に、どうしていいかわからないようだった。

ロンが、抵抗むなしく服の襟首を啜えられて穴へと引きずり込まれていく。

「あれは……ひどいよね」

「どうあっても食べられると思ったわ」

見えないのをいいことに、現場の混乱っぷりを客観的に眺めて頬が

ひきつった。

とうとう、三匹と三人が穴の中へと消えた。——さて、ここからだ。まず、透明マントを穴の前に脱ぎ捨てて死角へと隠れる。——スネイプ先生がやってきてからでない、ややこしくなる。

走ってきたスネイプ先生がマントを拾った。姿が完全に見えなくなってしまうのでここからは憶測でしかないが、おそらく穴の中へと入っていっただろう。その後をこの時間の僕が続く。

「あなた、このタイミングで来たのね」

「スネイプ先生のストーキングをされていてね」

肩をすくめて、僕らに関わる面々の姿が一人もなくなるところで、ハーマイオニーを連れて城へと戻った。

「なにをするつもりなの？」

透明マントがない心細さに、不安そうにしているハーマイオニーに悪戯っぽく笑う。

「——保険を、頼ろうかと」

たどり着いた先は魔法薬学教室とその準備室だった。隣り合う扉を見比べて、杖を取り出す。……可能性があるとすれば準備室の方だろう。

「アロホモーラ」

戸は開かない。

「わたしがやるわ」

完璧な発音と素振りでハーマイオニーが施錠解除を唱えるが、やはり効果はない。予想はしていたが、アロホモラ無効の魔法がかけられているらしい。

それもそうだろう。魔法薬はもちろん、その素材にだって劇薬はあるのだから。……そう考えると、一年生のアロホモラ程度で開いてしまった例の四階は、開けてもらうことを前提にしていたとしか思えない。あの狸爺め。

さて、どうしよう。二人で鍵を睨んでいると、胸元から名状しづらい鳴き声が出た。

「……………」

すっかり僕のベストとカッターシャツの間に住み着いていたボウトラックルだった。

「……………」これも、手伝おうって言うてくれるの?」

ボウトラックルは元気に鳴いた。

「……………」僕、いつか魔法生物を飼う機会があったらボウトラックルにするよ」

「奇遇ね。わたしもそれを考えていたところよ」

気の抜けた冗談を言い合っている間に、カチリと余裕綽々で鍵が開けられた。ボウトラックルが得意気に鍵穴から顔を出していた。

今回のMVPはまちがいなく君だ——ボウトラックル。

魔法薬学準備室にて本命を済ませ、最後の仕上げに夕食時にももらった悪戯仕掛人たちからの土産を城の玄関先で爆発させた。そう——

あの傍迷惑な糞爆弾と爆竹火花だ。

これで間違いなく教師の誰かがやってくるだろう。希望としてはマクゴナガルだが、この際、教師ならば誰でもいい。それこそトレローニーだっつかまうものか。——ダンブルドアとファッジさえ呼び出せるなら。

時間が迫ってきている。僕とハーマイオニーはひたすら走った。

——タイムターナーを回した場所まで。

「わたしたちが見えてきたわ」

「デイメンターはまだだね」

「ええ……」

タイムターナー発動時から少し離れた場所で、ハーマイオニーは真っ直ぐに見ていた。すべてから逃げ出した男——ペティグリューを。

「……今なら、間に合うわね」

「でも、そうすれば『この時間の僕たち』に姿を見られるのは確実だろうね」

「ペティグリューをこのまま見逃すの?」

僕は目を丸くして、そしてうつそりと笑った。ハーマイオニーが僕の笑みに目を見開いた。

「——まさか」

逃がすわけない。——僕は、信じてるからね。君が、信じろと言っただんだ。

「ハーマイオニー、あいつが変身してどの方向へ走っていったか、覚えてる?」

「……ええ、あのときのわたしたちから見ても左だったわ」

「左には何がある？」

「クイディッチの競技場？」

「その前には？」

「……寮があるわ」

——そう、寮があるんだ。

スリザリンの寮が。

たとえば、彼がもしも医務室にいたならば、間に合わなかった。僕と共にいたならば、追えなかった。

彼が今、寮にいと確信できるから——この作戦は成立する。

「僕らにできないことなら——この時間の人間にやってもらえばいい」

信じてるよ——ドラコ。

ディメンターの影がこの時間の僕らに向かって集まる。おどろおどろしく囲んでいる。狼と鼠が走り出す。僕の錯乱した声とロンのうめき声が悲壮感をただよわせている。そして——四つの光が銀に輝いた。

「エクスペクト・パトローナム」

イトスギの杖から霧のように放出された銀は、牡鹿を模して駆けだ。やはり、夢心地な幻想のような光景だった。

「あなただったのね、マリア。試合のときだって」

「秘密にしてくれるかい？」

ハーマイオニーはちよつと変なものを見る目をしてから、クスクス笑った。夜空の星でも見るように、牡鹿と雌鹿の行方を見守っている。

た。

「仕方ないんだから。……こんなところまで、あなたたちって双子なんだわ。——牡鹿と、雌鹿だなんて」

二匹の僕の牡鹿と——スネイプ先生の雌鹿、そしてハリーの『雌鹿』が寄り添い合う。きつと誰が見たって美しいとため息をつける光景だった。

この時間の僕とハーマイオニーが死角までやってきて、ハーマイオニーのタイムターナーが回り出す。二人が消えるのを見届けてから、すっきりデイメンターの払われた面々たちの元へと駆け戻った。

「あれ？ マリア？ ハーマイオニー？ 今、君たちどこから——」

「ただいま、ハリー！」「ロン！」

「へ？ お、おかえり……？」

「君、なんでそんなに元気なんだ？ デイメンターがいたっていうのに」

ハーマイオニーにならない、ハリーに飛び付いて、もうすっかりよめくことのなくなった彼の体を抱きしめる。

ずいぶんと気力を奪われる一日だった。けれども、ぐったりしながらも僕は笑いがこらえきれなかった。だって——

「これは——これは何事ですか！」

最高のタイミングで、そして最高の布陣で教師陣が駆けつける。マクゴナガル先生にフィルチ——きつと糞爆弾の苦情を受けて——ダンブルドアにファッジ……この上なく必要な人物が揃っていた。

「あなたたち、なんて姿で——シリウス・ブラック——!? ああ、セブルス、あなた——あなたが——？」

マクゴナガル先生がシリウスの姿を捉えて息をのむ。ファツジが狼狽しながらもディメンターを呼び戻そうとして——『彼』がそれをさえぎった。

「ええ、そうです。マクゴナガル教授。——『真犯人』を、捕まえたのです」

闇の空に負けない、輝かんばかりのブロンドをなびかせて、動かぬ鼠を捕らえた少年は美しく微笑んだ。

「ドラコ！」

「マルフォイ！」

ハリーとロンが驚愕の声をあげる。僕は言葉にならなかった。信じてた。信じたつもりだった。けれど、ほんとうに——

「——ふむ、ずいぶんと、事情が絡む様子じゃのう？　ここはひとつ、わしの部屋でなつかしい友と茶とでも洒落こまんかね？」

「ア、アルバス？　なにをおっしゃるのです？」

「そ、そうだ、ダンブルドア！　すぐさま、刑を執行せねば——」

「今宵の子供たちの勇気を、わしは無下にしようないのじゃ」

わけがわからないといった顔でなおファツジは言い募るが、ダンブルドアの傍若無人っぷりを知る面々は即座に諦めて従った。この老人とまともに付き合おうと思うと、柔軟にならざるを得ないのだ。ダンブルドアは打算的なお人好しなのだから。

鼠を、瞳孔が開いていて実に恐ろしい形相のスネイプ先生へと手渡したドラコが僕の隣に並ぶ。手を繋がれて、意図を悟った僕は静かにハリーたちから離れた。

「……アステリアは？」

「寝てる。と言いたいところだが——起きて待っているだろうな」

「アステリアらしいね」

「心配していたからな。——君を」

立ち止まりかけて、ドラコの手にいざなわれるように引かれて再び力なく足を進める。

「君に振り回されることは、慣れたものとはいえ——今回ばかりは肝が冷えたぞ。なんだこのめちゃくちなやな要求は」

ドラコがポケットから取り出した通信紙には、『鼠逃走』『スリザリン寮の前』『捕まえて』『返信はしないで』とあった。

急いでいたとはいえ、我ながらひどいものだ。今だって、レポートに関してはまだめ方の点で先生方に注意をされる僕だ。もう根っこから論点をまとめるという行為が苦手なのだと思うしかない。

改めて、ドラコと分かれてからの一連の騒動を語る。ドラコは、聞けば聞くほど眉間のシワを深く刻んでいった。

「つまり、通信紙はまだスネイプ先生の机の中で——」

「勝手に消えてたら面倒なことになるだろ」

「君は、結局、タイムターナーを使って——」

「それしか方法がなかったんだ。未来の僕がなにかしたってわかったんだから、なぞるしかないじゃないか」

「君は——ハアア……」

これ見よがしにため息をつかれる。

わかっているさ。僕だって——まさかあれほど自戒したタイムターナーに頼ることになるうとは。

「僕らは親子でタイムターナーと縁があるのか」

「良縁でないことは確かだね」

軽口を叩いて、調子を取り戻す。前方では、ハーマイオニーも同じように教師陣から離れて先ほどの大冒険を語っているようだった。

「……正直、君が来てくれるかは五分五分だったんだ」

独白する。

信じていた。けれど——来なかったとしても、僕は、うなずいていた。

「……ほんとうは、迷った」

ドラコが遠いものを見るように瞳を細めて呟いた。

「迷っていたんだ、僕は。それを——アステリアが、叩き出してくれた」

「……………」

「マリアは友達だから、鼻肩するんだそうだ」

頬はほころんでいた。優しすぎる少女が、この結末に導いてくれた。

「お礼、しないかね」

「お礼などされるいわれはありません。——なんて、言われるのがオチだろうな」

「ウーン、容易に想像がつく」

校長室を前に、ハリーに手招かれる。ドラコが手をほどいて背中を押してくれる。シリウスが僕を見ている。優しい目だ。

ぐらぐらと頭が揺れるのを感じた。背にある手がなければ、立って

いられない気がした。

——あ。

どうしよう。

「——それで、デイメンターがやってきて、僕たちを囲んで」

「そうしたら、パトローナスが四体……そう！ 四体も現れたんです。どこからともなく。牡鹿が二匹と、雌鹿が二匹。雌鹿の一匹は僕だとわかっています。他は……あの牡鹿はダンブルドア先生ですか？」

ハリーとロンが興奮のままにまくし立てる。それに時折ハーマイオニーが付け足したり訂正したりする形で報告は進む。なお、タイムターナーに関しては触れない方向で、子供たちの意見は固まっていた。

「ふむ、はてさて——どう思うかね？ マリア」

パトローナスのことで思うところしかないダンブルドアが、半月眼鏡を逆さにするようにして瞳を笑わせた。

デイメンターに手一杯だった子供たちには、誰がどの守護霊を放ったのかがわからなかったようだ。

スネイプ先生だって、雌鹿の守護霊の意味を僕たちに——特にハリーには知られたくないだろうし、ハーマイオニーはしっかりと秘密の約束を守ってくれたので、僕も口をつぐむつもりで微笑む。

「——私は、ダンブルドア先生がお助けくださったのかと。バジリスクの時だって、不死鳥を寄越してくださいましたから」

スネイプ先生からの視線がいたい。シリウスからの視線もいたい。最早これは答えのない化かし合いであった。

「マリアがそう思うなら、そうじゃろうて」

ダンブルドアは人の良さそうな顔をして楽しそうに笑った。

「さて、コーネリウス。子供たちの話は以上のようじゃ。ここに、動かぬ証拠を勇敢な生徒らが証明してくれたわけじゃのう。……ディメンター共々、ホグワーツから引き上げてくれるのであろうな？」

目を覚まさない鼠のピーターを撫でて、ファッジに視線を流したブルームフィールドは、僕には断罪の刃の輝きに見えた。……きつと、この人だつて、シリウスの冤罪を知った上で動かなかつた一人だろうに。

「しかし——しかしだ、ダンブルドア。冤罪の件は——なるほど、それは認めよう。シリウス・ブラック氏に不当な判決をしてしまった。魔法省の過失だ。——だがしかし！　すべてが不当であつたとは言わせないぞ。現に——アニメーガスの未登録は法に反する！」

「おうとも、その通りじゃ。さて、ここでお伺いしたいのじゃがな、大臣や。アニメーガスであることを申請せずにいるのは——はたして、アズカバンに十二年も容れられねばならぬほどの大罪であつたかう？」

ダンブルドアの目の輝きが増す。あれを真つ直ぐに向けられるファッジは、まったく生きた心地がしないだろう。

「なるほど、アズカバンを脱獄したことも罪のひとつに数えるとしよう。——だとしても、わしには、アズカバンに十二年……若く貴重な男の時間を十二年、無為に奪えるほどの罪だとは——到底、思えぬのだ」

ダンブルドアはやわらかく微笑んでいた。きつとそれをうすら寒く感じる人間は、ここには、僕とドラコ、そしてスネイプ先生とファッジくらいだろう。どれほど、子供たちの目に慈悲深くうつるか。

結果、ダンブルドアの微笑みの圧に屈したファッジは、再調査と再

審を約束して、鼻息荒くペティグリュを連れて校長室を後にした。それにマクゴナガル先生が続き、スネイプ先生がシリウスを目一杯の憎しみで睨んでから退室する。ドラコがロンとハーマイオニーを連れて僕へのアイコンタクトを残し、ダブルドアは「そら、餌の時間じゃ」なんてフオークスと別室へと引っ込んでしまう。

先ほどまで人にあふれていた部屋に残されたのは、後見人とポッター兄弟のみとなっていた。

「……アー……ファッジはこのあともごちやごちや言うだろうが……実質、私は無罪放免だ。君たちのおかげだ。感謝している」

「うん」

「自由の身となったわけだ。当然、権利も戻ってくるし——住居も、だ」

「うん」

「だから——その——私の勘違いでなければ——君たちはよい環境にいない。……そうだな？ マリア」

「かわいがってた黒犬にそんな話もしたかもね」

「……で、だ。私は君たちの後見人なんだ。はつきりいって、地位も金もある。子供二人を養うなんてわけない。……これが、どういうことか、」

「シリウス」

ハリーと片手ずつ、シリウスの手を取る。生きてる人間の手だ。それが、どれほど得難いことか。

「はつきり言っつてよ」

シリウスは、ハツと息をつまらせると——どこか震える唇でその言葉をくれた。

「私と、一緒に、暮らさないか？」

僕とハリーは同時にシリウスへと飛び付いた。シリウスは加減なんてすっかり忘れたように僕らを強く抱きしめた。

「シリウス、シリウス、大好きだよ。僕の——ハリーの、名付け親」
「そうか、僕の名付け親なんだ……」

スンツと鼻を鳴らしたハリーがシリウスを見上げる。シリウスも、不器用に父そっくりの髪を撫でていた。

「……ねえ、シリウス。僕にも、名付け親がいたりするの？」

ふと、僕は尋ねていた。この問題に——明確な答えはいらないと思っていたのに。

「……いや、君の名前をつけたのはリリーだよ」
「え……」

「君の髪を見て——願掛けなのだ、そう言っていた。君を通して——いつか、仲直りできるように、と。ジエームズは複雑そうだったがね。——マリア、君の名は……希望と祈りの名前なんだ」

シリウスの腕に重なる形で、ハリーの手が肩に乗る。二つの家族の手に包まれる。

ああ、そうだったのか——母さん。僕の名は、願われたのか。ならば——いつまでも逃げていては、あなたに顔向けできないじゃないか。

「ありがとう、シリウス。それが知られただけで——僕はマリアを愛せそうだ」

「うん？ マリアは時々妙な言い回しをするな」

「これがマリアだよ。変わってるんだ。かわいいでしょ？」

「生意気だぞ、弟よ」

「あーにーだーろー？」

シリウスを巻き込んでじゃれ合う。十三歳の子供二人なんて『前回』よりも筋肉が戻っているシリウスには訳ないようで、二人まとめて抱き上げられた。まるで父の腕に抱かれる幼子のようで、心の底から子供に戻って笑い声をあげた。

「ね、マリア」

そつと耳にハリーの唇が当てられる。シリウスが、ナイシヨ話か？なんて子供っぽく歯を見せた。

「マリア、シリウスが大好きなんだね。僕も好きになったよ。——ひどいことを言っつて、ごめんね。シリウスは——狂ってなんかいないよ」

「……うん」

頬に添えられたハリーの手にすり寄る。とつくに伸直りしたはずのひび割れが——今、ようやく、埋まった気がした。

シリウスとハリーと共に校長室から出ると、廊下にはドラコと親友の二人が待っていた。ロンとハーマイオニーはハリーへと駆け寄り——痛みがないためすっかり忘れていたが、ロンは足を折っているのに、だ——ドラコが僕の手を取る。

「——大丈夫か？」

僕はうなずいた。

「……わかった」

そのまま、ドラコがいわゆるお姫様抱っこ状態で僕を抱き上げた。さりげなく浮遊の魔法で負荷をなくしている辺り、策士だ。——
て、いやいや、待て。お前はなにをしている。

「ドラコ？」

「おい、なにしてるんだ。ルシウスのせがれ」

「正式なご挨拶もなく席を外す無礼をお許してください、シリウス伯従父上」

「マルフォイ？ —— マリアをどこへ連れて行くつもりなの？」

「マリアが限界なんぞでな。ハリーのことは君たちに任せるよ。ウィーズリー、さっさと医務室へ行け。感謝を、ミスタークルックシャンクス。シリウス伯従父上、ファッジ大臣が校長と応接室にてあなたをお待ちするとのことでしたよ。 —— それでは」

引き留める声のすべてを無視してドラコは階段を上がった。僕は、力なくその腕に身を任せた。

「……僕、君の『大丈夫？』にうなずいたつもりだったんだけど」

「そんな顔してよく言う。あと三步で倒れる顔色だぞ」

ドラコは吐き捨てた。僕らに会話はなくなった。

やがて、とある通りを三往復した。壁に扉が現れる。 —— 必要の部屋だ。いつかの分霊箱をしまった部屋だった。

ソファに甲斐甲斐しく下ろされて、ドラコがその前に立つ。

「さあ、さっさと吐け。 —— ハリー」

僕は咄嗟にうつむいた。

「……なんで、わかっちゃうかな」

「そのために僕はいるからだ」

「……ずるいなあ」

「アステリアにも言われた」

赤毛ごと、ぐしやぐしやに顔をつかむ。

「……僕、やつちやつたんだ」

「ああ」

「シリウスは、自由だ」

「そうだな」

「僕が、そうした。——今度こそ、未来は変わる」

「そうだろうな」

「もう——もう——後戻りはできない！」

胸が苦しくて、いいや頭が痛くて、ちがう目頭が熱くて——全身がめちやくちやな気がして震える腕で抱きしめる。

「アルバスに、スコープウスに、やってはならないと、僕は言ったのに！ あの日の父さんを、母さんを、見殺しにしたのに！ できたのに！ ——その僕が、書き換えた！ エゴで！ 自己満足で！」

「ハリー」

「ああ、軽蔑してくれ。僕は愚かだ。それでもいいと思っていたんだ。それなのに——今さらになって、おそろしくてたまらない」

「ハリー、息を」

「シリウスが笑ったんだ。暗い笑い方じゃなかったんだ。彼は解放された。僕の知らない未来へと進む。僕の知らないシリウスがいる。

——もう、誰もそれを知らない」

「ハリー」

「僕らは——逃げられない」

ふと、身を包む自分のものでない体温に気付いた。ドラコが——過剰に貴族らしくあろうとしていたあのマルフォイが、跪いてまで僕の背を撫でていた。僕のために衣服を汚していた。

「その通りだ。最初から——マリア、君がいるこの世界の未来なんて、誰も知らないんだ。それだけのことだ。ここは、タイムターナーを使った過去なんかではないのだから」

「ドラコ」

「みんなと同じ場所に立っただけだ」

「……そう、か」

「だから——マリア」

ブルーとグレーの狭間の瞳は、氷で火傷してしまいそうなほどあつかった。

「君が、未来を作るんだ」

僕はアイスグレーに見守られる中、うつらと落ちかける瞼の裏で、思った。

ああ、それって——おそろしいや。

少年は少女を抱えて扉ほどの肖像画へと話しかけていた。少女は死んだように眠っていた。元々、健康的ではあるがミルク色の肌は、呼吸を感じさせぬだけで途端に人形然とする。顔の造形が秀逸であることがそれに拍車をかけている。

「レディ。すまないが、談話室に誰かグリフィンドール生が残っていれば——」

「——マルフォイ？」

少年、ドラコ・マルフォイが相談しきる前に肖像画の扉は開いた。グリフィンドールが誇る才女、そして、眠る少女の同室者兼親友——ハーマイオニー・グレンジャーが顔を覗かせていた。

「起きていたのか」

「マリアを待ってたのよ。……朝帰りなんかされたら、どうしようかと思っただわ」

杖を振って、眠る少女の身を談話室の奥まで運ぶ。ソファなんかには寝かされたのだろう、とドラコは踏んだ。

「ごくろうさまね、マルフォイ。マリアがここまで気を抜くのって、あなたとハリーの前だけだものね」

「……そんなことはないさ」

「あるわ。マリアってほんとうに、マルフォイを信頼してる」

ハーマイオニーはほんの少し寂しさに痛む胸を誤魔化して微笑んだ。そして次には——ドラコが浮かべた表情に息をのんだ。

「僕はただの代わりだ。——君たちの」

感情を見せず瞳を細めるその様は——作り物のように美しかった。

「ごまあみろ」

この世界では——君たちには手出しさえできやしないんだ。

「new page」

翌日、忍びの地図と透明マントはハリーに、そして通信紙は僕へと戻ってきた。スネイプ先生が持ちうる限りの方法で闇の魔術がかかっていないかを調べたらしいが、使用してないものが出るはずもない。これは、脳がどこにあるかもわからないのに勝手に考える代物ではないからね。

試験を乗り越え、陰鬱なディメンターの警備も解かれた生徒たちは夏休みに向けて浮かれていた。殺人鬼シリウス・ブラックは捕まったのだと誰もが信じていた。まさか捕まったの意味がまったくの真逆だとは——思いもしまい。

しかし、周囲の陽気に反して僕はハーマイオニーに日に五回も注意を受けるほどぼんやりとしていた。世話になったポウトラックルを森へ放つたのち、没収品を受け取るためルーピン先生の部屋へ伺った際に彼が荷物を隅々までまとめているのに気付いたのだ。やはり、ルーピン先生はこの一年で辞めてしまうらしい。ヴォルデモートの厄介な逆恨みめ。

さらに、シリウスの再審がはつきりするまで、僕らの新生活はお預けされてしまった。つまりは、また、ダーズリー家で過ごす夏休みがやってくるのだ。これにはハリーもうんざりな様子だった。

三学年生活の最終日、ホグワーツ特急にてハリーの隣に座っていた僕は、外にチラチラと見える毛玉へと窓を開いた。毛玉は転がるよう

に飛び込んできた。——のちのピッグウィジョンだ。

チビふくろうが啜えていた手紙を受け取って、ハリーは中を見て満面の笑みを浮かべた。そこには、前回同様ファイアボルトのこと、さりげなく付け足されている封印箱のこと——もつと女の子らしいものを贈らせてくれ、と追伸されていた——チビふくろうをロンに譲りたい旨のこと、そして——

「マリア、来年から僕たち、どうどうとホグズミードに行けるんだ！」

後見人としてされたホグズミード許可証のサインを掲げて、ハリーは飛び上がらんばかりに喜んだ。

ハリーにとって、シリウスからののはじめての手紙は、最高のプレゼントとなったのだった。

はしやぎ回る弟と、チビふくろうと、すね気味なヘドウィグを眺めながら、共にいないプラチナブロンドの彼を想う。

どうか、この世界の結末が——僕らがこれから作る未来が、より良いものでありますように。

アズカバンの囚人【番外編】

ハリーと黒犬の話

——あなたは、マリアの友達でしょう？

そう、真っ直ぐにうかがう親友の生き写しに、男は動揺した。目当ての鼠を捕らえるため、やむを得ず怪我をさせてしまった赤毛の男の子は確かに叫んだはずだ。変身をやめた男を指して——シリウス・ブラックだと。

彼は己の酷い噂を聞いただろう。間違った真実を刷り込まれただろう。だというのに——

「あなたが——いや、あなたじゃなくて犬のあなたなだけ——クルックシャンクスといるのを見たんだ。僕、一度クルックシャンクスに食べ物を持たせたことがあった。それって、あなたに恵むためだったんだ。でしょう？ それを頼んだのはマリアだった。——マリアが言ったんだ。クルックシャンクスがご飯を届けている友達は、マリアの友達でもあるんだって」

男は子供たち三人分の杖を持っているというのに——子供たちはすっかり丸腰だというのに、動くことすらできなかった。かつての親友とそっくりな少年——ハリーは続ける。

「そのときは、マグルの街で会った犬がなんでここにいるんだらうって不思議なだけだった。——けれど、それがシリウス・ブラックだったっていうのなら、話は別だ」

声色が変わる。冷静に。冷徹に。姿形は亡き親友ジームズのものだというのに、男は彼に母親リリーを見た気がした。——彼の瞳が、そうさせるのか。

「もしも僕を殺すつもりだったなら、あの時に喉元を食い破ってしまえば済んだ話だ。けれど、あなたはなにもしなかった。こんなにも近くにいたのに。唯一、ロンを襲いはしたけど——」

「ちがう！ この子を襲おうとしたわけではないのだ！」

「——うん」

ロンが信じられないとばかりにハリーを仰ぐ。ハリーはそれすらも受け止めてシリウスを目で捕らえ続ける。

「あなたは呼んだんだ。僕を。——僕、それを聞いていたよ」

ハーマイオニーがなにがなんだかと言った顔でハリーとロン、そしてシリウスを見比べている。この中でもっとも、件に関わっていないかったのは彼女だろう。勉強で手一杯だったのだから。

それでも、パニックに陥ったりしない辺り、ハーマイオニーという少女の聡明さを知らしめていた。

「あなたのことを調べ直そうと思った。それはマリアのためだったけど——マリアがシリウス・ブラックと友達だったというのなら、それだけで、僕にとっては認識を改めるくらい価値がある。それは、あなたを信用したからじゃない。僕はマリアを信じてるんだ。マリアは意味もなく犯罪者と友達になったりなんかしない」

そして言葉を切ったハリーは、己を落ち着かせるように静かに息を吸うと——緑の瞳に鋭い光を射した。

「けれど、これだけは言わせてもらおう。もしも——もしも、あなたがマリアを騙っていたのだとしたら……そのときは——僕が、お前を殺してやる」

ハリーの友であるロンやハーマイオニーですらも絶句していた。それほどに——ハリーの目は容赦を捨てていた。

「——ほんとうに、君は母親似だね」

第三者の声だ。姿を確かめて、ハーマイオニーが悲鳴を上げるように呼んだ。——ルーピン先生、と。

「これがジエームズだったなら、それこそ、激情のままにシリウスを殺めていたかもしれない。君の、その、物事を平等に見極めようとする姿勢は、まさしくリリーのものだ」

まるで生徒の授業での態度を褒めるみたいに、場にそぐわず穏やかにルーピンは微笑んだ。ロンとハーマイオニー、そしてシリウスはすっかり参っていた。

「いったい、なにがどうなってるんだ。」

「シリウス。——やつはどこだ」

ルーピンから、ハリー同様に殺伐とした問いがされる。シリウスは驚きの連続にぼうっとしてしまっただけで上手く答えられずにいたが、代わりに答えたものがいた。——ナーオ。

クルックシャンクスが、得意気に足に鼠を挟んでいた。

「ああ——その姿、ほんとうに……しかし、それなら、なぜ——いや、そういうことなのか？ 君たちは——入れ替わっていたのか？」

シリウスは錆び付いたブリキ人形のようにゆっくりとうなずいた。

「そうか——君は——」

ルーピンがシリウスをあつく抱きしめた。ハーマイオニーがそんな！ と叫ぶ。ロンがハリーを痛ましげに見る。ハリーは――

「――シリウス・ブラックと、手を組んでいたんですか」

爆発してしまいそうな痲癩玉をちぎれかけの理性で抑えて、緑をギリギリとさせて二人を見ていた。

「それはちがう、ハリー。私も、今、知った。今、気付いた。ようやく

――親友を取り戻した」

「そして僕とマリアを騙っていた」

「騙してなどいないとも！ ほんとうに――私は、ずっとシリウスを――」

「その答え合わせは、アズカバンでしていただくこう」

エクスペリアームス。

シリウスの手から、三本の杖が。そしてルーピンから一本の杖が憎しみをたぎらせる男の元へと飛んだ。

ドラコと少女と黒犬の話

なんの気もなく古ぼけた羊皮紙を開いた少年は、はた、と固まった。強気に己一人でやり遂げると背を向けた彼女——否、この場合は彼だろうか。

彼から助けを求める言葉がそこにあつた。

「ドラコお兄様？」

少年の駆け出しかけた身を止めたのは、少女の鈴のような声だった。暖炉に近い横長のソファ、そこに慎ましやかに座する少女は、少年——ドラコ・マルフォイにとって、最愛といって差し支えない存在であつた。

大広間ではなく、ここ、談話室でもべ妖精の運んだ食事を終え、彼女の姉ダフネが所用で席を外している今、具合の悪い彼女を放つて一人にしてしまうなどドラコには思い付きもしない愚行だ。そのはずだつた。——だがしかし。

彼女に見えない位置で再び用紙を見る。殴り書きのような筆跡だ。事は急を要するのだとありありと文面が伝えている。

せめて——せめて、そう——ダフネが戻ってくるまでは——

「マリアに何かありましたか」

ドラコはハッと少女へと振り返つた。

「ドラコお兄様が顔色を変えざる事案など……わたくしにはマルフォイ家のこと、そしてマリア・ポッター関連の他に思い付くものがありません。もしくは双子のハリー・ポッターでしょうか。ドラコお兄様はポッター家のお二人鼻根でいらっしやいますもの。……困つた方」

見透かすように清淑に笑まれて、ドラコはどことなく気が抜けて再び腰を落ち着けていた。——彼女の隣はいつだってドラコの為に空けられている。

「マリアは、なんと?」

「……手伝ってほしいことが、あるみたいだ。ダフネが戻ってきたら、」

「ドラコお兄様」

少女の両手が、膝の上で拳を作っていたドラコの片手を包んだ。

「——アステリアが、このままわたくしの側に居てくださいいましてお願いしましたなら——ドラコお兄様はきいてくださるかしら?」

「アステリア……」

「マリアではなくアステリアを選んでくださるかしら?」

それは懇願ではなかった。ちよつとした謎かけをするような——この世界ではよりかたくなに育ってしまった彼女の、親しい者だけに見せる悪戯な部分だった。

ドラコを想うアステリアだからこそ、決して口にはしない類いの願いだった。

「——行くよ」

アステリアのほつそりとした手を包み返して、ドラコは立ち上がった。

「あら、ざんねん。わたくしを放っていかれるのですね」

「ああ。ここであなづいたりしたら——君、怒るだろう」

「——」

アステリアは茶の瞳をパチパチと幼げにまたたかせた。そして次には——くしゃつとさらに幼く子供らしく笑った。

「ほんとうに——あなたたちつて、ずるいわ。二人そろつて、ひどいんだから。……わたくしのお友達をお願いしますね、ドラコお兄様」

杖をたずさえ談話室を抜ける階段へと差しかかるドラコに、アステリアは嫉視こそ呑み込んだものの、寂しさを隠しきれない瞳で背中を追っていた。

彼女にだつて、好きな人を独り占めしてしまいたい欲は当然ある。十一歳だ。わがまま放題に喚いたつて許される歳だ。——しかし、それをよしとしないのがアステリア・グリーングラスだった。かなしいほどに、彼女は高潔だった。

「君もたいがい、マリアに甘い」

ドラコは振り返らなかった。

「あの人、ずるいんですもの。わたくし、まんまと策略にはまっています。……友達とは、助け合うものなのだそうですわ。ですから、お友達として、当然のことをしたまです」

「特に鼻負するんだろう？」

「……一番のお友達ですから」

アステリアの声は照れくさそうだった。ますます、振り返られないな、とドラコは苦笑した。

「わかった。君がこんなにも心を砕いていたと君のお友達に伝えてこよう。グリフィンドールのお転婆姫にいいように使われてくるよ。いいかい、アステリア。君はベッドに入るんだ。僕を待っていたりする

るなよ」

「……………」

こんな時ばかり、アステリアの良い子のお返事はない。ドラコはこれ見よがしに肩をすくめた。……まったく、頑固者め。

地下への階段を出てすぐ、ドラコは街灯なんてある筈もない道を懸命に見渡していた。目を皿のようにして、とはまさしく彼の状態だった。

場所の指定はない。時間の指定もない。すでに辺りは真っ暗だ。頼れるのは、消灯まで燃え盛る出入り口左右の松明灯だけだ。

呼吸を整えて、いつでも呪文を飛ばせるよう杖を持ち直す。

……きつと、鼠を逃がしてしまつてもマリアは怒らない。かつてのハリー・ポッターならば痲癩の一つくらいは起こしていたかもしれないが、さすがにそこは互いに大人になった。……大人になった彼はスリザリン向きの冷酷さも手に入れて——なお、本人は元々持ち合わせていたと語る——さらに一筋縄ではいかない厄介なモンスターへと育ってしまったが。

だが、結果シリウスの解放が叶わなければ、彼は極端に落ち込むだろう。シリウス・ブラックの救済は、彼が人生をかけて掲げる切願の一つだったのだから。

シリウス・ブラックは——それほどに、ハリー・ポッターの『特別』だった。

セブルス・スネイプと、セドリック・ディゴリー、そしてシリウス・ブラック——

ハリー・ポッターに並々ならぬ執着を持っていたドラコ・マルフォイにとつて、この三つ名は彼同様に忘れられぬものだった。

例の戦争において死した彼の身内は多かつたが——特に彼を縛つたのはこの三人だとドラコは踏んでいた。それは、ハリー・ポッターを様々な視点から見続けたドラコ・マルフォイだからこそ発見せしめた歪みだった。

死人には勝てない。ゆえに——生かさねばならない。今度こそ。

死なんて遠いところに心を持っていかれれば、追い付くことも狡猾らしくかすめ取ることも不可能なのだから。

——自身の心に、生涯アステリアが住みついたように。今も、彼女の影を手放せずにいるように。

再び深呼吸をする。その時を待つ。

失敗はできない。マリアのためではない。ハリー・ポッターのためでもない。——自分のために。

そして。

「——ステューピファイター！」

赤い閃光がまばゆく闇を切り裂いた。

黒犬が少女を見つけた話

——一目だけでも。

肋も脚骨も浮き出た黒犬は、気力のみで立ち上がり歩いてきた。時折マグル——人間たちにひどく汚いゴミでも見るように避けられながら、麻痺こそしようが、衰えはしていなかった頭脳と記憶を引っ張り出してその家を探す。

確か——プリベット通り、とリリーは言っていた筈だ。リリーの姉が嫁いだマグルの家があるのは。ジエームズの宝物たちはそこに預けられている。

きつと溢れんばかりに可愛がられていることだろう。ハリーもマリアも、赤ん坊の頃から光るように愛らしい子供だった。きつと——きつと——愛に身も心も肥やして——

黒犬は目の前の光景を信じられずにいた。なんだあの手首は。瘦けた頬は。子供らしからぬ荒んだ瞳は。

リリー譲りの緑目は怒りに爛々としていた。ジエームズ譲りのハシバミの瞳は疲れきっていた。あんなものを——十三の子供がするのか。

愛されていたのではなかったのか。身も心も守るために魔法界から遠ざけたのではないのか。

愛されるべき子供たちであるのに。なにものからも守られるべき宝物であるのに。——それをもっとも与えてやれるジエームズとリリーは、もういないのに。

なぜだどうしてだと黒犬は立ちすくんだ。

なんのために、おれは。

「マリア？」

まったく似てない双子の男の子のほうがかうかのように片割れを

呼んだことで、黒犬は少女が自身を見ていることに気が付いた。

黒犬は尻尾を丸めて、耳だつてへたり込ませて情けなくしり込みしていた。少女の瞳がたまらなく懐かしい記憶を思い起こさせて、ディメンターに貪られ続けた心をかき混ぜた。

——なんだい、パッドフット。捨てられた犬みたいな目をしちやつてき。ああ、君は犬になれるんだから間違つてはないのか。暇ならハリーの相手でもしてくれるかい？ 君の名付け子だろう？ 君だつてあの日からこの子たちの父親なんだからね。

笑うのだ。声が。冗談を交えて。君は親になつたのだと。そのくせ、ハリーが俺に特になついているとわかれば大人げなく実親の権限を振るってくる。そんな、ありふれた日常。——幸せの象徴だった。

少女の瞳は——なるほど、残酷だ。こんなにも心を生き返らせようする。これ以上凍つてしまわないようにと捨てたあたたかさを呼び起こしてしまう。

——許されるだろうか。少し、ほんの少しだけ、近付いても。

あと少し、側で子供たちを——息子を、娘を、見つめても。

君は、なにも守れなかった俺が君の宝物に触れることを許してくれるか——ジエームズ。

黒犬は恐々と姿を現した。緑の瞳は驚愕と恐れに開き、ハシバミの瞳は——懐かしく愛しいものでも見るように細められた。

そっくりだと、黒犬は思わずにはいられなかった。

「こんばんは。——あなたも迷子ですか？」

少女のままごとみたいな問いに、黒犬はふと、すべてが腑に落ちた心地になった。

そうか——俺はずっと、迷子だったのか。

ハリーがへびと話せるなんてとんでもない情報に度肝を抜きつつ、頭上で軽快にされる双子の会話に体温が戻っていくのを感じる。久々に人間用の味付けがされたチキンにありつけたのも大きいだろう。

子供たちの会話から察するに、どうやら特にお転婆でジェームズ似なのは娘のマリアのほうらしく、途中マリアを叱りつけたハリーの迫力がジェームズを叱るリリーそのもので黒犬は思わず耳を立てて驚いてしまった。

なんてことだ。完全に性別を逆転させたミニチュアポッター夫妻じゃないか。娘は父に、息子は母に似ると聞くが、これほどとは。遠慮のないマリアと思慮深そうなハリーに撫でられながら、黒犬はつかの間の幸福を噛み締めていた。チキンごと。

「君のご飯にするんだよ。僕らなら大丈夫。両親がびつくりするくらいお金を残してくれたんだ。二人でも使いきれぬかわからないよ」

袋に詰められた食料らしきものを置いて、男の子のハリーよりも男らしいマリアの哀れな野良犬への慈悲に再びじわりと目頭が熱くなる。

そうだろう、そうだろうとも。ジェームズもリリーも、君たちに残せるものはすべて残してきたのだ。君たちの幸福だけを祈って。……だというのに。ああ。

黒犬へと別れのキスを済ませた少女がナイトバスを呼び出す。子供二人で乗り込む様子を黒犬は見守っていた。

ほんの少しだったはずの欲は心地よい愛に際限なく膨らみ、今や成長した——十三歳にしては男の子のハリーですら小柄すぎるが。まったく、信じられない！——子供たちへの愛しさに、再びの別れが身を切られるようにつらかった。

復讐を果たすため、死を覚悟してホグワーツへ忍び込む計画はあるけれど——その時、己は二度とこの子たちの前には現れないだろう。

黒犬の決意はどこまでも独り善がりで痛々しかった。まさかそれを当のマリアに「そんなことより側にいろ」と泣いて乞われてしまうなどと、この時の黒犬は思いもしなかった。

日持ちのよい缶詰や干物、青春の証であったハニーデュークスのお菓子を貪りながら、黒犬は少しだけ泣いた。

ああ、我が友、兄弟、プロングズ——君が目標にしていた娘からのキスは俺がもらってしまったが、どうか恨んでくれるなよ。

親愛なる協力者——もとい、協力猫と共に現れた少女に黒犬は愕然とした。

「こんにちは、迷子の黒犬さん。チキン、持ってきたんだけど食べるよね？」

少女はまるで警戒を知らず、大広間からくすねてきたらしい皿と料理を黒犬の側へと置いた。興味深そうに潰れた鼻をひくつかせる猫を優しく抱き上げて、君は食べちゃダメだよ。なんて諭していた。

黒犬はわけがわからなかった。この猫が連れてきてしまったのだろうか。己の存在は内密にと聞かせていたはずなのに。

「大丈夫だよ、君のことは誰も知らない」

黒犬の混乱に答えるように、少女はサンドウィッチを頬張りながら告げた。

「僕とクルックシャンクス以外はね。あ、クルックシャンクスってこの子のことだよ。かしこくてすばらしい猫でしよう？」

自慢げにクルックシャンクスを撫でながら、黒犬へと食べないのかと促す少女に、黒犬は戸惑いつつも皿へと鼻を押し付けた。……玉ねぎがあるじゃないか。犬猫に玉ねぎは危険だとこの子は知らないらしい。

少女は返事などなくとも楽しげに話を続けた。まるで黒犬が言葉を理解していることを知っているようだった。クルックシャンクス

から聞き出したと笑う様が悪戯盛りだったジェームズにそっくりで、黒犬は心が浮き立つと共にジェームズの遺伝子に頭を抱えなくなった。その心境は完全に悪戯小僧を持つ親のものだった。

瞳だけならまだしも、なんてものを娘に譲ってしまったんだ、プロングズ。この様子じゃあ、夜中に城を抜け出して徘徊なんて、すでにたんまりやらかしてる顔だぞ。ホグズミードに許可なくお忍びで行ったり、こここそ怪しい親友の後をつけて秘密を暴いてしまったり

黒犬は緩む口をマッシュポテトに突っ込むことによって抑えた。親友の名残を少女の中に見つけるたび、飛び上がって喜んでしまいうだった。ハリーがシーカーを勝ち取った話では、とうとう髭がそわついた。

「だから、ええと、なんだったかな。……ああ、そう。話し相手がいなくてさびしいんだ。ロンはハリーに付き添ってるし、ハーマイオニーは勉強に忙しいし、セドリックは他寮で狙ったようには会えないし、ドラコは——」

少女の口から飛び出す男の名前の多さに、ここはモテにモテていた（そしてジェームズが牽制しまくっていた）リリーに似たのだなど安堵と共に複雑になった黒犬は、犬らしく鼻を少女の手へと擦り付けた。

お前を寂しがらせる男なんぞお前から捨ててしまえ。リリーの容姿をもつてすれば選り取りみどりだろう。黒犬の心境は、娘に手を出す不埒な輩を選定したがる父親そのものだった。

——まさか、『寂しがらせる男』筆頭が自分だとは露にも思わず、黒犬は不器用に少女を慰めた。

「君に、会いたいんだ」

洗淨魔法によって清められた毛をゆるりと撫でられる。

「……ねえ、抱きしめていい?」

黒犬は自ら少女の腕の下へと潜り込んだ。膝に顎を乗せて、その先で丸くなっていた共犯の猫を見る。

首元を抱かれたり、耳をかかれたりしながら、黒犬はぬるい日射しと少女の体温に触れて思った。

この瞳が泣くところは——この子が悲しむのは、見たくないな。

少女は翌日もその翌日も食事を持ってやって来た。ほとんど毎日であった。天候の悪化や用事なんかで来られない日には、クルツクシヤンクスがおつかいよろしく食料の入った袋を啜えて、瓶ブラシの尻尾を振って黒犬を構いに来た。おかげさまで、黒犬は地獄を抜けて以来の快適さを覚えていた。——人間に戻れないことを除いて。人間に戻ったが最後、徘徊する『奴ら』に黒犬の自我は喰われてしまうだろう。

今日も少女は朗らかにランチタイムを黒犬と共にする。少女の話題はもっぱら双子の兄弟のことで、いかに少女が弟——彼女いわく、どちらが上でも構わないのだが面白いので姉と主張している、とのこと。まったく、つくづくジェームズの子だ——を愛しているのかがわかった。たった二人残された家族だ。互いがもつとも大切な存在となるのは必然的だった。

しかし。

黒犬——実質、子供たちの親となるべきだった男は危惧していた。

この子たちは危うい。

初めは、少女の弟への愛情に依存傾向を見ていた。だがしかし、認識はやがて改められた。——ハリーだ。ハリーのほうが、きつとギリギリのバランスにいる。

ほんの少し、なにかのきつかけがあれば脆く崩れてしまうもので彼らは成り立っている。おそろしく——いびつで完璧だ。

皮肉にもそれは、教師として在籍するかつての親友リーマスが少女

に覚えたものと同じだった。

彼女は、彼は、似すぎている。両親に。——大切なもののためなら命だつて差し出してしまえる、ジエームズとリリーに。

この子たちは——互いのために死ねてしまう。

黒犬として見守ることを知った男は——今になって後悔した。あの日、子供たちを無理にでも連れ出さなかつた自分に。

俺は今までなにをしていたんだ。十二年——十二年の時間で愛する子供たちはこんなにも歪んでしまった。十二年もあれば——与えてやれるものは山ほどあつたのに。

黒犬は明日だつて向けてくれるだろう少女の無邪気な笑みが切なくてならなかつた。

黒犬は激しく興奮していた。心地のよい高揚感であつた。この歓声！ この声援！ 雨風なんて興奮しきりの野性の前にはまつたく関係なかつた。

まさか因縁の相手がホグワーツで教鞭を取っているだとか、同僚にかつての親友の一人までいるだとか、先ほど少女より与えられた情報は今だけはまるきり頭から消え失せていた。ついでに、少女の隣を当たり前の顔で陣取るいけすかない男そっくりの子供のことも意図的に忘れた。

なんとたつて自慢の名付け子の晴れ舞台だ。実際の天気は稀に見る大嵐だが。

名付け子の飛行センスに心の中だけでとびきりの賛辞を送り、妨害するスリザリン選手には心からのブーイングを送り、黒犬は一言も声に出さず大忙しだった。ほんとうなら雷にだって負けない遠吠えがしたいところだ。その瞬間に、遠慮なんて存在しない少女の手が飛んでくることは請け合のだが。

そして、試合が泥仕合へと差し掛かつた時——黒犬は、シリウスは、親友を見た。

プロングズ。

我が子に寄り添って銀の牡鹿が闇を払う。気絶してしまった我が子を気遣わしげに見ている。

すべてが慈愛に包まれていた。絵画のように美しい光景だった。

あれはプロングズだ——

シリウスは銀の輝きから目をそらせなかった。喪った親友がそこにいた。——彼の娘が、彼を喚び戻したのだ。

ジエームズはマリアの中に生きていた。

炎のゴブレットとマリア

1—1

その日、僕はうなされる片割れの声によつて目覚めた。

十四歳にもなつて同じベッドに縮こまつて眠る僕たちポッター兄弟だが——なぜつてベッドは部屋にひとつしかないのだ——それゆゑに片割れの変化には敏感になれる。普段、寝相だつて悪くはないハリーだ。その彼が、額を押さええてうめいていた。——きつとヴォルデモートの夢だ。

「ハリー、ハリー」

まかり間違つてもダーズリーたちを起こしたりしないよう、しかめっ面のハリーの耳元で名前を呼ぶ。頬を軽く叩き、肩を揺さぶる。

「ハリー、起きて」

それが合図にでもなつたかのようになりハリーは大きく目を開いた。覗き込む僕に一瞬声にならない悲鳴を上げて、共に寝ていた兄弟だど気が付いてからおぼつかない手で眼鏡を探した。就寝の間はサイドテーブルに鎮座しているそれを取つてハリーへと手渡す。ハリーは視界をクリアにすると、額の傷を押さえながら窓へと寄つた。寝汗すら気に留めない切羽詰まつた様子だつた。

「ハリー？」

「傷が痛んだんだ。あいつが——あいつが近くにいる」

「ハリー、それは」

「夢を見たんだ！ あいつが出てきた——それから——」

血の気のない頬と震える唇に、そつとハリーの背を撫ぜる。それにハリーは、ようやくと自分がどこにいて誰と話しているのかを思い出せたようだった。

「マリア……」

「落ち着いて、ハリー。どんな夢を見たの？」

まだ日の出も見えない窓から誘導して、共にベッドへと腰かける。手は、彼の冷や汗にしめつた背へと添えたままにした。

傷に障ったのだから十中八九ヴォルデモート関連だろう。そのくらいはわかる。だが——どれだ？

「……わからない——よく、わからないんだ。どこかの屋敷だったと思う。どの視点からそれを見ていたのか……。——でも、確かに僕は見た。あいつと、マグルのおじいさん、そして……」

ハリーは自分で自分の言葉を疑うような口調でそれを口にした。

「ワームテール」

「——」

ハリーの背を撫でていた手が止まった。もうハリーの意識はそこにはなく、ハリーは夢という曖昧な情報を懸命に絞り出していた。

「ヴォルデモートが、側の男をワームテールと呼んだ。ワームテールは、ヴォルデモートをご主人様と呼んでた。ねえ——ねえ、これって——？」

ワームテールは捕まったはずだ。あの日に魔法省へと連行された。今度こそ確かだ。

例の事件においての真相究明が約束通り進められていることは、

ハーマイオニーが届けてくれた日刊予言者新聞にて確認している。時代によりひどいゴシップにもなる日刊予言者新聞だが、今はまだまだともに扱われているはず……

いいやしかし、上に立つのがあのファッジだ。なにかごまかしている可能性がある。

「ハリー、手紙を書こう。シリウスに聞くんだ」

現在もつともペティグリユの件で魔法省に近いのはシリウスだ。もちろん癒着なんて意味ではない。最重要証言者としてシリウスは何度も魔法省の召喚を受けていた。手紙にはうんざりとあったが、なにか魔法省での異変を嗅ぎつけているかもしれない。

「ヘドウィグには悪いけど、今からでも——ハリー？」

立ち上がろうとした僕の腰にはハリーの腕が回っていた。背中にぴったりとハリーの額がくつつき、まったく甘えた仕草だった。けれど、加減ができていない腕の強さからそれだけではないのだと悟った。

「ハリー……？」

「あいつ、誰かを殺した。そんな話をした。あのおじいさんも、きつと殺された。もしも——もしも、今、ここにあいつが来てしまったら」

「ハリー、ヴォルデモートは来ないよ。ここには入れない」

「どうしてそう言えるの？ 忠誠の術で守ってた家にだってあいつは侵入できたんだ。こんな、丸腰で——」

「ハリー」

「こんなんじゃない——マリアを守れない」

背中にあつた彼の頭を、向き合う形にして正面から抱きしめる。

思春期の中核に入ろうとしているハリーには、すべてがより恐ろし

く映ってしまうことだろう。こういつた姿は、もう一人の自分であるよりも自己の確立まで苦しんだアルバスを思い出す。決して良い父ではなかった僕だけれど——愛する子が苦しんでいる時、側にいてやりたいと思う心くらいはある。

「大丈夫だ、ハリー。ダンブルドアがなにもしてないと思うかい？

きつと僕らには思い付きもしない方法でこの家を守ってるよ」

「ほんとう？」

「君の姉さんの言葉が信じられないの？」

「僕が兄だよ」

お約束のやり取りをして、ちよつと笑い合つてから、眼鏡を取つた手で額の傷を撫でる。そこに触れるだけのキスを送る。

手紙はあとでいい。今は、運命に振り回されるこの子に寄り添ってほしい。

再びベッドに横になつて、大きくなつても背を丸めて寝るくせは変わらないハリーを抱き込む。

ヴォルデモートは君には触れられないよ。母さんの愛は、最悪の死をもくつがえす魔法なのだから。

だから、どうか、安らかに。——今は、まだ。

暖炉に打ち付けられた板を眺めて、僕はこれから起こるだろう惨事から目をそらすためになんとなくダドリーを観察していた。ダドリーは、一家総出ダイエットもむなしくムチムチの尻を両手で押さえていた。哀れだ。すばらしく間抜けで実に観察のしがいがある豚だ。ダドリーが僕の視線に気付いて化け物でも見るみたいに青ざめた。おっと、無意識に笑っていたらしい。

日曜の午後五時——今日はウィーズリー一家がここ、ダーズリー家にやって来る日だ。アーサーおじさんが、ツテで手に入れたチケツト

でクイディッチ・ワールドカップへと連れて行ってくれる約束なのだ。その迎えというわけである。

前回では、(マグルからすれば)愉快に暖炉から登場してくれたウィーズリーご一行だが、はたして今回はどうだろうか。……暖炉だろうな。ハリーのロンへの返信に、車で来てくださいつて添えてもらうの忘れたんだもの。

「やつらは遅れとる！」

威嚇のために着こんだ一張羅でリビング内を落ち着きなく歩き回っていたバーノン伯父さんが(気が立ったサイみみたいだ。もしくは発情したエルンペント。)五時を半分回った時計を見上げた、その時。ドーンツ！ 閉じられた暖炉の向こうで、大きな荷物でも落としたかのような音が響いた。続けて、明らかに人の声の中から飛び出した。

「イタツ！ だめだ、フレッド。戻って——戻って……アイタツ！ きつとなにか手違いがあった。場所がないんだ、戻りなさい——」

ああ——僕とハリーは同時に頭を抱えた。何度経験したつてこのウィーズリー家の来襲は——愉快痛快だ。こっそり笑ったのをまたまたダドリーに見られてしまった。怯えるなよ、もう尻から豚の尻尾が生えたりはしないさ。……豚の尻尾はね。

「ハリー？ マリア？ いるかい？」

「あの、アーサーおじさん。ごめんなさい。その——この家で暖炉は使えないんです。ふさいでいるんです」

「暖炉をふさいでるだつて!? 正気か？」

「アーサーおじさん、マグルは煙突飛行で移動しないんだよ」

マグル界で育ったハリーがフルーパウダー初心者だったことを

すっかり忘れているらしい。

暖炉をふさぐ板をノックしてみればノックが返ってきたので、わなわなと怒りなんだか恐怖なんだかで震えるのに忙しいバーノン伯父さんへと振り返る。

「おじさん、こちらを外しても？」

「な、なにをバカな——なにを——」

「でないよ、そう——おじさんのきらいな『アレ』で家をめちやくちやにされますよ。ペチユニアおばさんだってそんなのはかなわないでしょう？」

魔法使いはどうも、レパロなんて便利魔法があるために行動が大胆な傾向にあるというか——物を壊すことに躊躇いがない。カチコチのマグルから見れば正気の沙汰じゃないだろう。

僕らは魔法使いだから、そのうちに直してくれると安心して見られるけれど——このダーズリー家はカチコチマグルの代表格だ。これは、なるべく穏便に済ませようと思いました、のアピールだ。

伯父さんはともかく、伯母さんがさっさとしろと親のカタキでも見るように暖炉と僕らを睨んでいたのも、ハリーにボールを取ってもらい、さっそく板の撤去に入った。

一枚取り除けば足が、二枚取り除けば腰が、三枚で手が、やがてすべてを取り払うと、アーサーおじさんとフレッドジョージ、ロンが窮屈そうに転がり出てきた。

「やあ、ハリー、マリア。助かったよ……ああ、失礼。二人のおじさん、おばさんでしような！」

善意一色の笑顔で握手を求めるアーサーおじさんから逃げるダーズリー夫妻は、大きな図体をしていながら、さながらゴキブリの横歩きであった。フレッドとジョージが僕らのトランクを取りに二階へと上がり、その間どうにか会話をもたせようと（ダーズリーのほうは

一言だつて返事はしていない。ダドリーに猫なで声で話しかけたりするアーサーおじさんを、ハリーと僕、そしてロンはちよつと顔を背けて懸命に堪えた。……だつて、そんなの見てたら大声でゲラゲラと笑つてしまいそうなんですもの。

「パパ、終わったよ」

ウィーズリーの双子が僕らのトランクを抱えて戻ってくる。二人は、父親の背に隠れようとしている——もちろん隠れきれてなどいない。もうすっかり縦より横に大きいのだ——ダドリーを発見すると、新しい商品の開発をした時みたいにしたたり顔で笑つた。ダドリーの命運はここで尽きた。

ただ一人が喋るアーサーおじさんいわくの会話を切り上げ、双子がトランクを抱えて先に、次にロンが隠れ穴へと煙突飛行を使って消えた。フレッドが落としていったヌガーをチラとだけ眺めて、ハリーに先に行くよううながす。

「甥御さんが今さよならと言つたんですよ？　もちろん、さよならと返すのでしょね？」

「いいんだよ、アーサーおじさん」

「しかしだ、マリア。これは礼儀の話であつて——」

「実はさつきお別れの挨拶を済ませちゃつたんだ。ね？　おじさん、おばさん、そうでしょう？　さ、ハリー、行つて」

伯父さんと伯母さんは僕の助け船に乗るのは癪だというふうな口をもごもごさせていたが、やがて緩慢にうなずいた。アーサーおじさんの持つ杖がいつ自分へ向かうか、気が気じゃないのだ。さつきと暖炉でも煙突でもどこからだつていいから消えてほしかつたにちがいない。

——そして、おまちかねの事件は起きた。

「ダドリー!!」

ペチュニア伯母さんの悲鳴によってダドリーの異変が知れ渡る。側にヌガーの包み紙が落ちていて、誰が見てもダドリーの拾い食いが呼び込んだ惨事だと察せた。これで、豚みたいになんでも口にするのは良くないと愛しの従兄弟どのも学んだことだろう。たぶん。きつと。おそろく。

「大丈夫、大丈夫ですから、私がどうかしますから……ああもう、話
が通じないったら! マリア、先に行きなさい」
「ハァイ」

誰ひとり暖炉なんて見ちやいないダズリー家に手を振って、僕は
意気揚々と告げた。

「——隠れ穴!」

ヒュンヒュンと穴を滑り飛び込んだ先で、真っ先に僕を抱き留めたのはハリーだった。その後ろに犯人の双子がワクワクを隠せぬ顔で待っていたので、ハリーの背を叩きながら余った手で親指を立てておいた。まぶしい笑顔と二本のサムズアップが返ってきた。

「まあまあ！ いらっしやい、ハリー、マリア」

台所から顔を出したモリー母さんから熱い抱擁を受ける。溢れんばかりの愛情に胸がくすぐったくなる。それを見ていたウィーズリー家の長男次男が、ハリーとマリアへ初めましての挨拶を済ませる。奥からジニーとハーマイオニーもやってきて、途端に賑やかになった暖炉前にカンカンのアーサーおじさんが戻ってきた。

「フレッド！ あれは冗談じゃすまな——ア、いや、えーと」

「……フレッドがなにか？」

真っ先にフレッドを名指ししたアーサーおじさんは、次に奥さんの姿を目に入れて口ごもった。

「モリー、なんでもないんだ。ウン、そう——なんでも」

「フレッドがなんとおっしゃりたかったの？ アーサー」

「まあ、まあ……モリーや……」

「アーサー」

勃発しそうな夫婦喧嘩の気配に、サッと目配せを回して二階のロンの部屋へと避難する。マリアに特になついてくれてるジニーが腕にぴつとりと引つつくので、僕は幸せでならなかった。僕の元嫁がこんなにもかわいい。

「フレッドとジョージはなにをしてるの？」

ハリーからの疑問にはハーマイオニーとロンが答えた。W・W・Wの計画の話だ。二人の商売への才覚は本物だった。

……やっぱり、WWWの店主はあの二人でないかね。

階下の論争が終われば夕食だ。庭に作られた大きな簡易テーブルにモリー母さん自慢のご馳走が並ぶ。ハリーが初めて経験するガーデンパーティーだった。

ダドリーのダイエツトに付き合わされ、昨年同様ため込んだ非常食と、友人たちの、そして後見人からの小包の料理で飢えをしのいでいた僕らにはまさしく天国であった。だってアツアツだ！もう、匂いに誘われた郵便フクロウにつまみ食いをされたり、雨風の旅ですっかり冷たくなった鍋スープを大切に取っておく必要はないのだ。

料理を囲んで、各々が自由に好きな話題で会話をする中、とある単語が耳に飛び込んできた。

——バーサ・ジョーキンス。バーサ・ジョーキンスが行方不明という話だ。

途端に、バーサ・ジョーキンスについて話し合う二人以外の声が僕の耳の中から消えた。

今回も、バーサ・ジョーキンスはおそらく……ということとは、ハリーが夢で見た殺された人間というのは——

「マリア？　きらいなものでも入ってた？」

隣に座って楽しくおしゃべりしていたジニーが不思議そうに小首をかしげた。

「うん？　いや。僕ら、好き嫌いってほとんどないよ。無事に食にありつくのに必死さ」

「そう。ならいいんだけど。……今、すつごくむずかしそうな顔をし

てたわ。あたしがベックおじさんの豆ペーストを食べた時みたい。おじさんが作る豆ペーストってゲロの味がするの。あつ、ママには内緒よ？ でもママもぜったいそう思ってる」

顔も知らないベックおじさんへの酷評に笑ってしまう。それにジニーはほっとしたようだった。

「あたしの話がつまらないのかと思ったわ」

「まさか！ ジニーと話せるならベックおじさんの悪口だって延々と聞けるとも」

「あらお上手。マリアってあたしのことが大好きね」

「そんなジニーは僕が大好きだよね」

「よくご存知ですこと」

クスクスと顔を寄せ合って笑っていれば、正面の双子の兄さんたちに「お二人さん、のちの魔法大臣パーシー閣下に今のうちにゴマすっておかないと同性婚できないぜ。おっと、パースとクラウチ氏の婚約が先か！」なんて野次を飛ばされてしまった。突然巻き込まれたパーシーが目を白黒とさせていた。

夕食もデザートへと差し掛かり、モリー母さんお手製のストロベリーアイスを平らげると、追い立てられるように子供たちは就寝を言い渡された。マグルから隠れてクイディッチ・ワールドカップ会場へ向かうのだから、早起きは必須だ。

「ねえ、マリア」

ジニーを挟んで、ハーマイオニーとジニー、そして僕でベッドへと寝転がる。ハーマイオニーは、寮でもそうだが、大変寝付きがいい。もう夢の中だ。

ジニーが僕の側へと寝返りをうって、少し見つめ合ってからふうわりと笑う。

「あたし、マリアがいてくれてほんとうに良かったって思うの」
「どうして?」

「だって——ねえ? 三人つてちよつとずるいと思わない? もちろん、ロンとハーマイオニーと……ハリーのことよ。もう三人つて決まっちゃってるの。だあーれもその中には入れっこないんだわ。……うらやましい」

「ジニー……」

「でも、いいの。寂しいときにはマリアが側にいてくれるんだもの。あたしにはマリアがいる。こんなに素敵な姉さんがいるのよ。それって——すつごく贅沢! そうでしよう?」

声を抑えながらもキラキラした目ではしやぐジニーに、ハリーにするように額を撫でてみた。ジニーは、猫がまどろむみたいにくつくりと瞳を細めた。

「大好きよ。あたしのマリア姉さん」

「僕も大好きだよ。……僕のかわいい妹」

『僕』のジニーとは、もう、言えないけれど。——愛してるよ、ジネブラ。

翌日といえるほど眠れてもいなかったが、翌日。姿現しのできない未成年組は、アーサーおじさんに連れられて明け方からの出発となった。ポトキーを指して小山を登り、その辺りの目立たないガラクタを探せというあやふやな指示のもと地面を見渡す。やがて、少し先でアーサーおじさんと呼ぶ男の声があった。

僕はふと、あるはずのない傷が痛む気がした。

——「生き残った男の子のために何人が死んだ」

彼から突きつけられた言葉を『僕』が忘れることはなかった。セドリック・デイゴリーの最期と共に。

彼は苦手だ。自分は被害者だと声高々に叫ぶ彼は、攻撃的なほど正しくて、正義の刃を振りかざす。

「彼はエイモス・デイゴリー。魔法生物規制管理部にお勤めだ。息子さんのセドリックを知っているだろうか？ マリアは特に仲が良いと聞いたよ。エイモス、息子のフレッドとジョージ、ロン、一人娘のジニーだ。こちらの女の子はロンの友達のパイオニー、うちの子じゃないけど赤毛がマリア、そして彼が——ハリー・ポッター」

「ハリー・ポッター！」

わかりやすく声が跳ねたエイモスに、ハリーは居心地悪そうに身じろいだ。彼の視線が無遠慮に稲妻の傷へと走るのがわかった。

「セドから聞いているよ。君と対戦した日のことを話してくれた……ハリー・ポッターにセドが勝った日のことを！」

「父さん、それはもういいでしょう。あれは事故だった」

「なにを謙虚ぶるんだね！　うちのセドリックはこの通りジェントルマンでね、ええ？　あのハリー・ポッターに勝ったというのに！　そうは思わんかね？　マリア」

「父さん！」

「お前がさつさとガールフレンドを紹介してくれないからじゃないか。こんな美人ならセドにぴったりだ！」

「マリアはそんなんじゃないって……」

チヨウを差し置いてなにやら盛大な誤解があるらしいデイゴリー親子事情に、なんとも言えずセドリックへと同情の眼差しを向けてしまった。「穴熊の貴公子も大変だな」「面白そうだから誰か蛇王子を連れてこいよ」とはウィーズリーの悪戯双子の言葉だ。まったく、期待を裏切らない。

「エイモス、そろそろ時間だ。さあほら、みんな集まって。ポートキーに触れるんだよ。指一本でいい」

今回のポートキーは古ぼけた長靴だった。それにみなぎ輪になって触れ、一秒二秒と待つ。

「悪かったね、マリア」

隣のセドリックが囁く。

「かまわないさ。美人なガールフレンドというのは——ほら、間違いないだろう？」

意味を察したセドリックの耳がポツと赤くなった。……なるほど、親に紹介なんてできやしないわけである。賭けてもいい、チョウがエイモスと会える日が結婚報告日だ。

ポートキーの移動は一瞬だった。慣れない子供たちは地面に放り出され重なっていた。なんでマリアは立っていられるんだよ、とハリーはロンを起こしながらぶりぶりしていた。

お疲れな役員二人に使用済みポートキーを渡し、ウィーズリー一行はデイゴリー親子と別れて指定キャンプ地へと向かった。——そこには。

「シリウス！」

なんとポッター兄弟の親愛なる後見人、シリウス・ブラックが待っていたのだ。取り戻した自宅に身の安全が保証されるまで缶詰だのマグルの家だから会いに行けないなんて魔法省は頭が固いだのと手紙であれほど愚痴……いいや、嘆いていたというのに！

マグルの格好に失敗している魔女や魔法使いに囲まれる中、彼は一

等輝いていた。整えられた真つ黒の長髪にシンプルなベストスタイルの出で立ちはスマートで、ただ立っているだけでファッション雑誌の表紙を思わせた。ロックハートなんて目じゃない。ハンサムにミーハーな気質のあるハーマイオニーだって目をこぼれ落とさんばかりにシリウスを凝視していた。——ああ！ ジニーまで！

「シリウス、どうしてここに？」

「クイディッチ・ワールドカップだぞ？ 逃す手があるか？」

「でも、身の安全が保証されないと家から出られないんじゃない？」

「こんなに役人がうじゃうじゃいてなにが起こるっていうんだ」

ああ、こうして口八丁にボディガードとは名ばかりの監視を振りきってきたんだな、と僕とハリーは察した。

アーサーおじさんがぎこちなく握手を交わし——冤罪発覚まで、友人を裏切った血も涙もない男だと思いついていたのだ——子供たちも我先にと挨拶をする。特に赤毛の双子とは本能的に通じるものがあったらしく、後でじっくり話そう、なんてアーサーおじさんに冷や汗をかかせていた。

「さあテントを組み立てるぞ。マグル式だ！ シリウス、ここに来たからには君にだって手伝ってもらおうからな」

「ああ、もちろん」

マグル出身のハーマイオニーとポッター兄弟を中心に、手探りでテントを張っていく。途中、二代に渡る悪戯仕掛人たちが遊びだしてシリウスごとアーサーおじさんに叱られているさまは、まるきり学生にしか見えなかった。顔が良くなければ許されてないぞ、三十代。

「こんなものか。いやあ、すばらしい！ どこから見てもマグルのテントだ！ どうだね、ハリー？ そう思うだろう？ さて、次は薪で火を……っと、そうだシリウス、それからハリーにマリア。君たちで

これに水を汲んできてくれないか」

ヤカンを一つ、ソース鍋を二つ渡され、一応監督者としての指名だろうシリウスを連れて水汲み場へと向かう。アーサーおじさんからの気遣いなのだとすぐに理解した。シリウスとは積もる話がありすぎるのだ。

途中、パパの杖を振り回し母親に叱られている女の子を見てはマリアもあだだった、ジェームズがそのたびにリリーに叱られていたと笑い、子供用箒を乗り回す男の子を見てはハリーも小さな頃から箒に乗るのが上手かったと語るシリウスに、僕もハリーも幸せでいっぱいだった。ダーズリー家では決して聞けない両親の思い出話にこうも簡単に触れられるなんて。

「ねえ、シリウス。手紙は受け取ってくれた？」

キャンプ場の端まで差し掛かったところで、ハリーは本命を切り出した。

「ああ……それについては、私の方からも探りを入れてみた。ブラツクの名は便利だね。今は悪名のほうが名高いが、それなりにコネには使える。さいわい、私は『被害者』であるわけだし？ ……魔法省はまだ発表していないが——間違いなく、ピーターは逃げ出してる」

ハツと空気が張りつめた。森に元々充満していた霧が、今になって不気味なものに思えた。

「……どうしてそんなことに?」

「……あー、なんだ、私がアニメーガスを利用して脱獄できると証明してしまっただろう? ピーターはよりによって小回りの利く鼠だ。その対策を考えてる間にワールドカップ。そのうえホグワーツでは……と、これはまだ止そう。楽しみは取っておくものだ。つまり、魔法省が大変忙しくなってピーターどころじゃなくなった。そうして、取調室に監禁されていたピーターを——誰かが連れ出した」

三人共が黙りこんだ。僕は元々この時代の魔法省を信用していないし、シリウスだって陥れられた口だ。ハリーはシリウスの件を調べるところにそのずさんさに気付いたのだろう。無能どもめが。

「つまり、僕が見た夢は——」

「夢、ではないのかもしれない」

浮かない顔をするハリーに、シリウスはせつかく僕が整えたハリートの髪をくしゃくしゃにしてニッコリ笑った。

「ま、そのあたりはこのシリウスおじさんが調べておいてやるから。君は学業と、それから青春と、悪戯なんかに専念しておきなさい。学

校が始まればダンブルドアだっている。今年のホグワーツは楽しいぞ?。」

「ホグワーツはいつだって楽しいよ。それから、悪戯なんて勧めて、フレッドやジョージの罰則にモリー母さんが呼び出されるみたいに学校から呼び出しをくらつても知らないから」

なぜそこで姉さんを見るんだい、弟よ。

「望むところだな」

だからなんで僕を見るのさ、シリウス。ニヤニヤしないでよ。そんな顔も男前だけど。

「アーサーおじさんはこのことを知ってるのかな」

「知らないだろう。ひとえに魔法省といっても管轄がちがう。そんな素振りはないだろうか? 知っていたらさすがに、あの人の判断で君たちには伝えるだろうからね。君たちだって『被害者』だ」

たどり着いた水道に他の利用者の姿はなく(だって魔法使いだもの!) 声を潜めながら座り込んで内緒話を続ける。ヤカンの底に跳ね返る水の音が間抜けだった。

「魔法省はいつまでこの件を隠してるつもりなんだろう」

「少なくともワールドカップのあいだ……それから、その後には大きな催しがある。それまでは他の件に人も頭も回せる状態じゃないな。それこそ俺のことだって後回しだ。ファッジなんぞを頭に据えているからだ。ダンブルドアが大臣だったならと常々思うよ」

「そうやってダンブルドアを引き合いに出すからファッジが意固地になるんでしょ」

「……よく知ってるな」

ヤカンから僕へと視線を替えたシリウスの目は真ん丸だった。ちよつとね……とハリーと共に苦笑すれば、去年での一件を思い出して納得してくれたようだった。

「でも、ダンブルドアが大臣をすればいいっていうのは僕も同意。あの人が、指導者にはぴったりだけど教師は向いてないもの」

「……マリアは、そう思うのか？　ダンブルドアほどすばらしい教師はいないだろう？」

怪訝にひそめられたシリウスの眉に、しまったと舌打ちをしてしまひそうになった。

シリウスはダンブルドアを心底から信頼している。ルーピン先生のことがあつてからはなおさらだ。ハリーはたぶん、中間。かつての僕ほど心酔はしていないが、ダンブルドアの善性に全面的な肯定感を持っている。

僕だって、ダンブルドアの判断に対する信頼はあるとも。切り捨てることのできる冷酷さも含めて——指揮者として、申し分ない。……信用はむずかしいけどね。たまにとんでもなく間違えるし。

「ほら、教師って、生徒として受け入れたなら一人も見捨てず導かなくちゃいけないじゃないか。ダンブルドアはそのあたり、取捨選択で生きてるからリアリストな軍人向きだなんて」

——彼が、その手に権力を持つことはないけれど。

権力という化け物を自分では制御しきれないことを、彼は過去の過ちから理解している。

「……ごめん、僕、変なこと言ってる？」

ハリーとシリウスがあまりにも熱心に僕を見つめるものだから、声は自信なさげにすぼんでしまった。もうとつくに水が溢れているヤ

カンの存在なんて二人の頭の中には残っていないだろう。

「——いや、なるほど。理解できるよ。マリアは賢いな。もちろん、ハリーだって賢い。私は君たちが誇らしいよ」

ヤカンを手放して、シリウスはハリーと僕と両方を撫でてくれた。首筋を触る髪と心がくすぐったくて、ハリーと顔を合わせながらくつくふ笑った。

「ねえ、シリウス。このまま僕たち、新学期までウィーズリーさんのところに泊まる予定だけど……シリウスの家へ行つてはいけない？」

ヤカンと交代に次はハリーの鍋を満たしていく。シリウスが水を溜めたヤカンは僕の手に移った。なんてさりげないレディファーストだ。

「そうしてやりたいのは山々なんだが……まだ、ダメだな。ババアの肖像画は外せないし、クリーチャーは反抗的だし……ピーターの件もあつて監視が厳しい。まったく、どちらを殺人犯扱いしてるんだか。——だがな、マリア、ハリー。来年には必ず、一緒に住めるようになるぞ。ダンブルドアととっておきを考えてあるんだ！ もう君たちの部屋だつて用意してる」

「ええ！ それって一人部屋？」
「当然だ」

初めて与えられるかもしれない一人部屋の魅力に、瞳を輝かせた僕とハリーは、次にはちよつと考え込んでまたまた顔を見合わせた。

ダンブルドアが協力しているということは、母さんの血の守りの血族縛りに、やはりマリアは含まれるのだ。

僕がなにがなんでもとハリーの側を離れたがらなかった理由の一

つがこれだ。今まで術の範囲があやふやだったために、念のためにとペチユニア伯母さんから離れられずにいたけれど、シリウスという保護者を得た今なら——ああでも、やっぱりハリーと別々になるのは不安だ。

「夜、さびしくなっちゃうね」

「夜だけどっちかの部屋で寝るってのはどう？　ファイアボルトなんて買えちゃう資産家ブラツク家だもの。きつとベッドだって三人で寝たって余るサイズさ」

「なら部屋も一緒にいいか。きつと今の部屋の二倍だ」

「三倍かも」

「部屋の中で箒に乗れちゃったりするかも？」

「最高だ！」

勝手に盛り上がる僕たちに、呆けていたシリウスが慌てて待ったをかけた。いつのまにか鍋も水で溢れそうになっていた。

「待て。待ってくれ。——聞いていいか？　マリア、ハリー」

「なあに？」

シリウスはもごもごと声なく唇を動かして言葉を探していた。

「……君たちは同じ部屋で過ごしてるんだな？」

「だってあのダースリーだもの。部屋があるだけマシだよ」

先ほどとは別の意味の沈黙がシリウスとの間に落ちた。

「……………その件はまた別で話そう。だがしかし、ベッドは別だな？」

「いいえ」

「……………別、だろう？」

「一緒に寝てるよ」

「一つしかないのに」

「兄弟を床に寝かせろっていうの？」

「ありえない！」

ありえないと言いたいののはこつちだ！　そう、シリウスの顔は語っていた。声に出さなくてもわかる。

犬の頃から思っていたが、シリウスは感情表現が豊かすぎる。なんて若々しい三十路なんだ。

「君、君たち——兄弟とはいえ男女だぞ？　マリアだってその……女の子らしい体型になってきた。ハリーだって困るだろう」

「全然」

「……………」

シリウスはどうとう頭を抱えた。男としての意識が強い僕としては、シリウスの主張だってわからないでもないが……今さらだ。ハリーの体温にも抱き心地にもすっかり慣れきってしまったんだもの。

「わかった、その話もまたゆっくり時間を取ってしよう。ともかく、部屋は別だ。ベッドだって別だ。うちに来るならこれは絶対だ。いいね？」

なんとか立ち直ったシリウスは、ジェームズとリリーになんと伝えろ……と小さく懺悔しながら鍋とヤカンを浮かせた。最初から僕らに持たせる気はなかったらしい。

「ダーズリーの家を出られるのか」

「夢みたいだ」

「これまでの養育費を置いていかなくちやね……」

「養育費？」

端まで来ていた道を引き返ししながら、シリウスという親代わりを挟んで歩ける現状にほけほけするハリーをたしなめる。

脳裏に浮かぶのは、毎日が惨劇だった初めての育児、ジエームズ編だ。もちろん、アルバス編、リリー編もある。

「あのね、ハリー。魔法使いの子供を育てるって大変なんだよ。泣けば窓が割れ、笑えば物理的に花が咲き、腹が空けば家具が宙に浮いて、寝起きには家中の音という音が爆発する。魔法使いなら杖の一振りですぐに黙らせることができる。杖の魔力が強いから、杖の振りで対処できるありがちな魔力暴走だけど、マグルには到底無理な話だ。確かに僕たちは虐待を受けてきたしそれを肯定することはこれから先も誓ってないけれど、なんだったら隙あらば仕返しだってしてやるけど——正直、あれは魔法使いの子供を育てる過酷さからきたノイローゼなんだと僕は思ってるよ。よく孤児院に放り出さなかったものだよ。養育費もなしに自分の子供を抱えた上で魔法使いの子供二人もだなんて、正気の沙汰じゃない。そのあたりは、ペチュニアおばさんのこと、僕、尊敬してる」

「……………」

あの大パニックな日々を魔法なしで過ごすだなんて、考えただけでもゾツとする。レパロは偉大だと僕がもつとも感じた瞬間の一つだ。割れた皿と家具と窓ガラスの数だけでも被害総額はおそろしいことになっていだろう。資産がある今、そのくらいは返さないと。

どうしてだか、突然変異の珍獣でも見るような目で僕を同時に見つめたハリーとシリウスは、やがて諦めるみたいのため息をついた。

「マリアが時々、僕にはモリーさん並の大人に見えるよ」

……そこはせめてアーサーおじさんがいいかな。

ヤカンと鍋を運び終えれば、シリウスは別件に呼び出されているのだと一時別れることとなった。激しく惜しんだのは言うまでもない。僕とハリーと二人で抱きついて甘えたてれば、半泣きで感動された。それを見ていたアーサーおじさんまで鼻をすすっていた。

「子供ってのはいいものだな、アーサー！」

「そうだろう、そうだろう」

「こんなにかわいいなんて……それも、息子と娘、いつぺんにだ！」

ジエームズとリリーに夢の中まで追い立てられそうだ」

僕らから抱きついていたはずの腕は苦しいくらいにシリウスの胸の中へとまとめられてしまつて、すぐそこにあるハリーの顔もちよつぱり泣きそうで、まるで今世の別れのごとくであった。試合後にはまた会えるというのに。ああ、でも——幸せだ。

「さあ、さあ、シリウス、もう行きなさい」

「愛してるよ、ハリー、マリア。なんて離れがたいんだ……私のかわいい子たち」

「シリウス……」

「行きなさいったら」

鼻をすすっていたアーサーおじさんにまで呆れた目で見られてしまった。

シリウスと別れてすぐ、姿現し組とも合流し、ルード・バグマンとウィーズリー双子の賭けを見届けていれば、バーティ・クラウチがバグマンを引き取りにやってきた。クラウチを確認したパーシーの尻尾の振りようつたら。

魔法省勤めの大人たちがそのまま仕事の話に入ってしまったので、大人のつまらない話に飽きた三人組は行商人の販売カートへと移動し、思い思いに土産を物色した。僕はといえば、ドラコへの今年のクリスマスプレゼントをここで間に合わせてしまおうなんて小ずるい

ことを考えていた。毎年律儀にプレゼントを贈ってくれる彼だが、同じだけを返そうと思うと財布がバカを見る。彼とシリウスの金銭感覚は特に見習ってはならないのだ。

適当に珍しいものを身繕い、ハリーが奮発してくれた万眼鏡に感動しているうちに、空はすっかり暮れて競技場へのランタンが灯り始めた。周囲の興奮も高まり、試合開始が迫っているのだと魔法使いたちの熱気が知らせていた。

興奮しきりのアーサーおじさんに連れられて、瞳をキラキラさせた子供たちに囲まれて競技場へのランタンを追う。

待ちに待ったクイディッチ・ワールドカップが開催された。

試合が終わってからのロンとハリーは魂が抜けたようだった。それほどに壮絶な試合だったのだ。これまでだつて腕を折ったり箒から落ちたりと、ハリーも中々に危ないプレイに見舞われてきたが、プロたちがぶつかり合う試合は比べ物にならなかった。

なにより——クラム！ ビクトール・クラムが所属するブルガリアチームは結果的に点数差でアイルランドチームに敗北はしたが、スニッチを獲ったのはクラムでありその勇姿は讃えられるべきものだった。満身創痍でスニッチを追う姿には壮絶な命の躍動があった。ハーマイオニーですら、彼つてすごいわ……なんて瞳をポウ、とさせていた。咄嗟にロンのほうを見てみればロンのほうがポー……となっていたのでもうどうでもよくなった。

僕はいえ『前回』で観戦しているはずの試合だが、当然、試合内容だとか結果だとかまで覚えているはずもなく、まったく新鮮な気持ちで改められた。選手が怪我をするたび、プロとして活躍していたかつての妻を思い出して——そして同じ少女が隣で拳を握りしめていた——僕まで殴られた気分になっていたが。

「僕、まだ信じられないよ。クラムってまだ学生だつて聞いたことがある。……かつこいいなあ」

テントへ向かう途中、いまだ余韻でフラフラするハリーを僕が、そしてロンをハーマイオニーが支えていた。ジニーは双子の兄たちに興奮のままもみくちゃにされては父の元へと避難していた。

「ええ、そうね……て、ロンったらいつまで惚けてるのよ。クラムはヴィーラじゃないのよ」

「あ、当たり前だろ！」

屈強な男が男を虜にする魔性生物なんか例えられて、ロンは顔を真つ赤にして噛み付いた。

「ヴィーラ、ヴィーラか……ロンはヴィーラに特に弱いもんな。ハリーだつて人並みに気を持っていかれてたし……と、いうか。――実は僕もだった。ヴィーラの魅了は男性にしか効かないはずなので生物学上女の僕には関係ないと油断していたら、このざまである。ハーマイオニーとジニーに魅了された男性陣の中の一人にくくられじつとりと睨まれてしまった。誤解だよ、お嬢さんたち。」

テントへたどり着いても、興奮さめやらぬ人々の歓談は盛り上がり続けた。誰一人と僕に注目していないことを確認してから、そつとテントを抜け出す。

「――マリア、こつちだ」

彼の声が囁く。ウィーズリー家と同じく、特等席にて家族と観戦していたマルフォイ家のキザなお坊っちゃん、キザに木の幹へともたれかかっていた。

「……バレてないな？」

「うん。でも、早めに戻りたい。こんなところをハリーに見つかったら……」

「相変わらず姉離れのできない弟だな」

「かわいいだろう？」

慣れた軽口を交わして共に森の影へと潜む。ドラコの金髪が目立つんじゃないかと思つたが、光を完全になくしてしまえば、存外、彼は闇に溶け込めてしまうようだった。

「君こそ、お父上は？」

「ファッジ大臣のお相手をされている。母上共々だ」

「なるほどね」

どうりで、案外抜けている父親はともかく息子を溺愛する母の目ま
で掻い潜れたわけだ。……いや、溺愛していたのは『前』の話か。

「——君、わかってるな？」

ドラコの『確認』に僕はしつかつたうなずいた。うなずいてから、こ
の暗闇じゃ見えないかと口に直した。

「もちろん、寝ずに備えるつもりだ。……君は？ その、ルシウスは——」

「……わからない」

ドラコの声は頼りなげに細かった。

「父上は——以前にも増して、僕を避けておられる。屋敷でその手の
情報は回ってこないんだ。おそらく、父上が止めている。……すまな
い。ただ、母上の側にいらとだけ」

「謝らないですよ。それは君にどうこうできる問題じゃないだろ。……
そうか」

気まずい沈黙となる。やはり、僕の言葉は届かなかつたのだろう
か。たかだか、怪しい小娘の忠言など——

けれど、彼の家族への愛情は確かだと——あの日のルシウスを見た
僕には思えたのに。

「どつちにしろ、奇襲があるのは間違いない。何人が怪しい動きをし
ている輩を見かけた。……阻止は、できないんだな？」

「マッドアイの目でもなければ無理だよ。相手は透明人間だからね。
……正直、この辺りは僕も記憶があやふやなんだ。なんたって興奮し
きりの観戦あつたから」

ドラコが防音魔法をかけてくれてはいるものの、念のためにとぼかしながら伝えれば、ドラコはたぶん、悪夢を振り切るように首を振って、それから僕と同じように声に直した。

「ともかく、今回ばかりはハリーの安全優先だ。死喰い人なんて面倒きわまりない」

「えっ、それ君が言う？」

「だからこそだ」

「経験者は語るか」

ぼやぼやと中身のない会話で気が緩んだところで、さて解散だどばかりに立ち上がった僕の肩に——ポンッと、手が置かれた。

「——逢い引きは終わりか？ マリア」

「ひえっ」

咄嗟に防音魔法を解除したポーズのまま杖をその人へ向けたドラコも、ガツチリと固まっていた。

「シ——シリウス……」

どこかのテントからもれる明かりを背に受けてニツコリ微笑むシリウスは、顔面の美しさもあって怒れる夜の魔物にしか見えなかった。頭からバリバリ食われそうだ。……めちゃくちや怒ってる。

「マリア、女の子がこんな暗闇に年頃の男の子と一緒にというのは……感心しないな？」

「いや、あの、ちがうんだ、シリウス。そんなんじや、」

「さて……あー、ドラコ君？ ——誰に向かって杖を向けている」

僕へのものとはまったくちがう敵意の声に、ドラコは電気ショックでも受けたかのように杖を振り下ろした。

「ツも、申し訳ありません、シリウス伯従父上」

「ちよつと、シリウス！ ドラコをいじめないでよ」

シリウスに誘導されるままに森を出れば、マグル対策なんて頭からすっぽ抜けた魔法使いたちがいまだ宴会を開いていた。どこもかしこも賑やかで笑いに溢れているというのに——ここだけがまるで氷河期だ。

「前々から気になっていたんだが……君は、うちの愛娘と一体どんな関係にあるんだ？」

「シ、シリウス……」

どうしよう、喜んでる場合じゃないのはわかってるけど……愛娘の言葉にときめいてしまう。

「僕は……」

何を言う気だとドラコをおそろおそろの窺い見れば——あ、ダメだこれ、ビビり倒してる。

そりやそうだよな、貴族たちのアレコレなんて魔法大臣ハーマイオニー閣下に任せつきりだった僕ですらわかる。王族とまで言わしめたブラック家の、それも本家の長男とかマルフォイのお坊っちゃんからすればとんだ爆弾だよな。

でも安心してくれ、ドラコ。……この人、そこまで考えてない。基本的に本能で生きる人だから。

「いいか、ドラコ……よく聞け——俺の目が黒いうちは、娘はやらん！」

「シーリーウースー！」

言ってやったとホクホク顔で恥ずかしい宣言をしているシリウスに、バツと顔をおおう。そもそもあなたの目の色は灰色でしょうが！

「あ、あと娘がほしければ俺を倒してからにしろ！……も、一度言ってみたい台詞だったんだ。ハツハ、天国でジェームズのやつが悔し涙流してら！」

「バカ……もう、バカ……」

「娘を持った父親なんてのはどいつもこいつもバカになるもんなんだ。ジェームズが赤ん坊のお前にどれだけメロメロだったか、聞かせてやろうか？」

「知ってるからやめて」

いたたまれない気持ちのままシリウスの肩を軽く殴り付ける。

よく知ってるとも！ 僕だって愛娘リリーにはことさら弱かったからね！ リリーのおねだりに負けてどれだけジニーに叱られたか。リリーがボーイフレンドを紹介してきた時なんて、僕も「私と決闘して傷を一つでも付けられたら考えよう」なんてバカなことを言ったよ！ そしてリリーの「パパおとなげない」の一言に撃沈したよ！

「ごめん、ドラコ……僕が責任持って回収するから……ほんとごめん」

呆けているドラコに謝り倒せば——ドラコはまるで、これこそがこの世の幸福だともいうように、やわらかく笑った。

「……よかったな、マリア」

「」

きつと、この場にシリウスがいなければ——ハリーと、彼は呼んでくれただろう。

ドラコは『僕』がどれほど——こんなバカをシリウスとできる日を
どれほど望んだか、知っている。

泣いてしまいそうだ。

「……フン、あいつらの子供にしてはいい顔をするじゃないか。——
ドラコ。ナルシツサとルシウスが探していた。早く戻ってやれ。心
配してたからな」

「お気遣い痛み入ります。シリウス伯従父上」

ドラコが丁寧に礼をして去る。それをなにも言えず見送った僕に、
シリウスは加減なしにぐしやぐしやと頭を撫でてくれた。彼なりの
スキンシップと、実は照れ隠しなのだとわかった。……そんなことも
わかるようになった。——幸せだ。

「……ま、アイツならお前の婿に考えてやらんでもない」

「そんなんじゃないってば。……シリウスおじさんの親バカ」

あなたが生きて笑っている。それだけで、幸せだ。

暗闇を走っていた。森の中だ。途中、遭遇したボーバトンの生徒や小鬼、ヴィーラとその取り巻きたち、そして、「悪い魔法使いがいる！」と密告してくれたクラウチ家の勇敢なしもべ妖精ウィンキー。そのすべてを振り切って僕たちは走った。

「——この辺りにしよう」

暴動の声も聞こえなくなったところで、三人を引き留めて立ち止まった。誰の頭の中にも先程見た醜悪な光景が焼き付いていた。

火をつけられたテント。絶叫と悲鳴。マグルの一家を愚弄し、翻弄し、抵抗することもできない弱者をなぶり嘲笑った仮面の集団。渦巻く悪意の連鎖。——どうか、あの中にルシウス・マルフォイがいますように。逃げの一手しか打てない僕には祈ることしかできない。

「みんな、杖を出して。ここでアーサーおじさんを待とう。何があってもいいように——」

「どうしよう、マリア」

ハーマイオニーのルーモスによって照らされたハリーの顔は蒼白だった。

「杖がない。僕の杖が」

「なんだって？ 君、落としたのかい？」

「テントの中に置いてきてしまった？」

「わからない。でも、かなり前からだと思う」

「三人とも落ち着いて。しずかに」

混乱につられて声が大きくなる三人をたしなめる。

……と、いうことは、ハリーの杖はすでに『アイツ』の手にあるのか。どのタイミングで奪われたのだからわからないけれど——あの杖で悪さをされるのは、やっぱり気に入くない。『僕』にとっても思い入れの深い相棒なのだから。

「ハリー、僕の杖を持っていて」

「でも」

「いいから。身の安全を第一に考えるんだ」

「それならわたしの杖をマリアが持つべきだわ」

「え、え？ どういうこと？」

ハリーに無理やりイトスギの杖を握らせて、そうすればハーマイオニーが僕に自身の杖を渡そうとするのでそれを止める。おいてけぼりのロンが目を白黒とさせて——彼の後ろへと、ハリーが杖先を突きつけた。

「だれ？」

ハリー以外の三人の目がいつせいに^く空を見た。

「誰か、そこにいる？」

目には見えない。杖の先にあるのは不気味な木の影ばかりだ。けれど、僕にはわかった。ハリーにもわかってしまった。

僕らが今もつとも警戒すべき『透明人間』がそこにいた。

「誰かいるなら——」

「モースモールドル」

男の声と緑の光が闇を垂直に切り裂いた。三人は糸で引かれるみたいに光を追って顔を上げた。その間に透明の男は姿眩ましをし、捨

て置かれたハリーの杖と強制的に喚び出されたウインキーだけ
ここにいた。呆けるウインキーが杖を拾った。――僕だけが、そのす
べてを見ていた。

爆発的な悲鳴がテントの群れの方向から上がる。空に打ち上げら
れた髑髏。それはかつての闇の時代を記憶するすべての人の恐怖を
煽った。先程のマグルへの残虐行為の比でなかった。

ハリーやロンがそれにポカンとして、すぐさま意味を理解したハ
ーマイオニーが二人の腕を取った。僕へは信頼のアイコンタクトをく
れた。

「ハリー、離れましょう。今すぐによ」

「ハーマイオニー？」

「ここを離れるの。だめよ、あれはだめ――」

「あの髑髏がなんだっていうのさ」

「わからないの!? あれは――」

ハーマイオニーの判断は正しくも、遅かった。次々と姿現しをした
役人たちに四人の子供は囲まれた。そして。

「ステューピファイ！」

「――プロテゴ！」

杖を持ちながらも構えることすらできなかつた三人と丸腰の一人
へと走った閃光は、鋭く放たれた透明の壁によつて弾かれた。二十人
ほどの役人たちのその後ろ――年齢にしては落ち着きのない彼が、常
ならばクルクルと変わる表情をこっそりと落として立っていた。
整っているがゆえに彼の無表情は、人間であるかを疑わせるほどに恐
ろしかった。

「シリウス……」

「――私の子供たちに杖を向けたのは、誰だ」

態度だけで役人たちをしりぞかせ、僕らの前に立ったシリウスの声は冷々としていた。人を従わせる方法を本能で知っている声だ。

シリウスは繰り返した。

「誰が、ハリー・ポッターとマリア・ポッターに——私の代子たちに攻撃呪文を放った」

「シリウス・ブラック——貴様——」

「——待ってくれ、やめてくれ！」

シリウスの隣に、円になっていた役人たちをかき分け駆け付けたアーサーおじさんが並ぶ。アーサーおじさんは、呆然としながらも傷一つない子供たちを見てほっと胸を撫で下ろした。

「これはなんのつもりだい、クラウチ」

「現行犯。——そうだろう？ アーサー」

「誰が現行犯だって？」

役人たちの中から一步進み出たクラウチ・シニアの杖は、今や僕らではなくシリウスを指していた。——こいつ、シリウスを疑ってるのか！

「闇の印が上がった場所にシリウス・ブラックがいた。そして闇の印は到底、子供に放てる魔法ではない。となれば……みなまで言う必要はあるまい」

「バーティ、落ち着きなさい。いくらなんでもそれは」

「そうですよ、クラウチ。ブラック氏の『例の件』は冤罪と認められたではありませんか」

さすがにこじつけが過ぎると周囲すらも止める中、クラウチはそれこそシリウスを憎んでいるのだとばかりに目に殺意を滾らせていた。

……シリウスが、というより、彼は闇の魔術やその勢力そのものが憎いのだろうか。

シリウスは、今にも攻撃魔法を放たんとしている苛烈な視線を身一つで受け止めて、決して僕らの前から退こうとはしなかった。頼もしすぎる彼の背中が、僕にははがゆくてならなかった。

「クラウチ、君らしくもない。シリウスを疑うのは子供たちの話を聞いてからでも遅くはないだろう。さあ、マリア、ハーマイオニー、なにがあつたのか教えてくれ」

アーサーおじさんの穏やかに努めた催促に、ハーマイオニーは震えながらも毅然と男の声を話した。それに時折、僕が付け足す——たとえばハリーの杖紛失の件だとか——形で事情聴取は進んだ。そしてすぐさま、自分のご主人様の登場により動けなくなっていたしもべ妖精のウインキーが発見された。

「これは……これは、どういうことだ？ まさかしもべが——？ それも——クラウチさん、あなたのところの」

クラウチ・シニアは啞然としていた。ウインキーはひたすら哀れに主人へと無実を訴えていた。

「しもべは杖を扱えない。誰かがしもべに杖を与え、闇の印を上げる魔法を教えた……はて、そんなことができるのは」

「エイモス、やめてくれ」

「そして杖はハリー・ポッターのものだ。それは、つまり——」

「——つまり、誰かがハリーの杖を奪うだか拾うだかして闇の印を上げ、さっさと姿眩ましして逃げたところに運悪く騒動から避難していたウインキーが鉢合わせて杖を拾った。……ということではないでしょうか」

その場にいたすべての人間の目が僕へと集まった。これ以上、疑われて真っ青になるハリーも、悲痛に涙を流すウインキーも、そして僕らを庇うために気を張りつめて立ちふさがり続けるシリウスも見ていられなかったのだ。……いい加減にしてくれよ。

「そうだね、マリアの仮説がもつとも現実的だ。さあ、ここからは大人の話だ。子供たちを引き取らせてもらっても？ シリウスも一緒に来るといい」

「アーサー！」

「エイモス、ここは魔法省じゃない。召喚状もなしにプライベートを拘束というのは——いくらなんでも横暴だ。また日を改めるべきだ」

ウインキーをクラウチへと引き渡し、アーサーおじさんが有無を言わず僕らを連れて歩く。僕の片手はハリーにしかと握られ、逆隣にはシリウスが固い表情で付き添っていた。森を抜ける道中、ほとんど子供たちに会話はなかった。

「……シリウス」

「わかってるさ。ハリーが疑われるくらいなら、俺の監視が厳しくなるうがまた軟禁生活を強いられようがかまうものか。いくらでも呼び出せばいい」

「すまないね、まったく……不祥事に続く不祥事で魔法省もピリピリしているんだ。だからといって許される話ではないが」

「今さらだ」

テントへたどり着いて、アーサーおじさんはロンとハーマイオニーを先に中へと招くと、僕らとシリウスに向かって訳知り顔で微笑んだ。シリウスとの時間を少しでも作ろうとしてくれる彼の気遣いが嬉しかった。素直に甘えて、ハリーと僕とシリウスとで改めて顔を合わせる。

「シリウス……」

「すまない。私の軽率な行動のせいでまた少し、一緒に暮らす約束が遠退いてしまったかもしれない」

「そんなこと！」

「けれど、必ず——君たちのことを迎えに行く。今度こそ務めを果たそう。私は君たちの後見人なのだから。……信じて、待っていてくれるか？」

「そんなの、当たり前だ！」

僕らは同時にうなずいて同時に飛び付いた。軽々と受け止めたシリウスは、僕とハリーとまとめて、きつくきつく抱きしめてくれた。

「ありがとう。たくさん待たせてしまった。寂しい思いをさせた。――もう、させない。愛してる。ハリー、マリア」

「僕も好きだよ、シリウスおじさん」

たとえ実の父でなくとも。

——僕とハリーを誰かと重ねて見ているのだとしても、この時の僕たちは正真正銘、『家族』だった。

ワールドカップの件は、アーサーおじさんが危惧していた通りにシリウス・ブラックの十二年に渡る冤罪投獄に続く不祥事となった。魔法省——延いては、魔法大臣ファッジの慌てっぷりは凄まじく、ここにペティグリューの脱走まで加わってしまえば果たして魔法省の威信はどうなるのやら、と僕とハリーは胡乱に新聞を眺めていた。心做しか、アーサーおじさんのただでさえ薄い髪がさらに薄くなったような気がした。

さらに——バーサ・ジョーキンス。ヴォルデモート復活のキーウーマンとなる彼女の行方不明も、リータ・スキーターによって浮き彫りにされてしまった。もう魔法省内部はてんでこまいだ。やつぱりアーサーおじさんがげっそりとしていた。

ホグワーツへと戻る九月一日の朝。エイモス・デイゴリーからアーサーおじさんへと、マッドアイが自宅で何者かによる奇襲を受けた事件が知らされた。二人はマッドアイの過剰反応による過剰防衛と見ていたが……確か、この時からマッドアイは——

ダメだ。わかっていても、防いじゃダメだ。ヴォルデモートにはハリーの血を使って復活してもらわなくてはならないのだから。非常に——心底——まったくもって——ハリーをみすみすと差し出すのは氣にくわないけれど。

ヴォルデモートの中に母リリーの血と護りを混じらせることが重要なのだ。

キングス・クロス駅の九と四分の三番線ホームにてハリーたちと別れた僕は、通信紙に書かれた番号のコンパートメントを探していた。今回ばかりはドラコとの情報交換ランデブーが優先だ。

失敗はできない。——罪なき青年の命がかかっているのだから。

そして、マルフォイ家の事情だって気になるうちのひとつだった。例の晩、ドラコはルシウスはともかくナルシッサとは共にいたはずだ。尊愛する父の命に彼はまず逆らわない。——マルフォイ家の内情を、

もつと深く探らなければ。

……もう、ドラコが心身共に追い詰められゆく様は見たくない。犬猿の仲だったマルフォイだけど、あの時ばかりは酷くて見ていられなかった。そして今は——僕の親愛なる相棒なのだから。

「ハイ、ミスター？」

「ごきげんよう、レディ。過保護な弟はシッターに預けられたのかい？」

「頼りになる友人たちに任せてきたよ」

「グレンジャーか」

「ロンだって頼りになります。その通りだけど」

荷物を適当な空きスペースへと置いて、キザつたらしく足を組む彼の向かい側へと座る。

「元気そうでなによりだ」

「こっちのセリフだよ」

「なに、愛しの後見人との夢の三人暮らしがまたお預けされて拗ねてるんじゃないかと思ってね」

「拗ねてるあいだに死んじゃったなんて洒落にならないことが起きる世の中ですのよ」

クツクと喉で笑い合う。ご挨拶の言葉遊びで互いにリラックスすれば——話題は本題へと移った。

「今回ははっきりいって、ハリーの手助けは無用だよ」

「……そうなのか」

「ハリーを鼻負して、絶対に決勝まで導かなくちゃいけない役割を持った男がいるからね。奴の周りで好き勝手動いて、目を付けられるほうが問題だ。彼の『目』は——ご存知の通り厄介だから」

頭に浮かんだ男の相貌に、ドラコがウツ……と小さく唸ったのが聞こえた。

すでにマッドアイの正体についてはドラコにも知らせてある。が、いつかでケナガイタチにされた苦い思い出が消えないのだろう。実際のところ、アレは指導というよりただの八つ当たりだったわけだが。

ケナガイタチのドラコは、ちょっとだけあやしてやろうかと思える程度にはかわいかった。……いや、やっぱりいい気味だった。

「だから、僕たちが全力で当たるべきは」

「——セドリック・デイゴリーの決勝争い阻止、か」

なんともいえない沈黙がコンパートメント内に満ちた。

わかっていた。僕もドラコも——それがいかに難しいことであるかを。何故なら——失敗した先で恐ろしい未来が待ち受けることを、息子たちがほんの少し垣間見てきていたのだから。

「セドリック・デイゴリーに屈辱を与えてはならない……」

「変な話だよな。僕には、セドリックがそれほどプライドが高いようには見えないのに。一年生の頃から接触して様子を見てきたけど、やっぱりただ善い人なんだ、彼」

厨房にて出会った穏やかな少年を思い出す。知れば知るほどハツフルパフらしい心根の子供だった。今になっても、僕にはとても、選択次第で死喰い人になるひとは思えないのだ。

すべてが打算だったわけではない。けれど、僕はこのために彼に近付いた。セドリックの闇を見極めるために。

「……本人に意固地なプライドはなくとも、親の期待という名の重圧は時に想像を絶するものだ。人格くらい変えるだろうさ」

「——」

僕はハツとドラコを見つめた。ドラコは、冷たく見える灰青の瞳を窓へと向けて、頬に睫毛の影を落としていた。

「……それは、親のいない僕にはわからなくて当然か。君が接触した方がよかったかもね」

「バカ言うな。僕はああいった、根っからの善人とかいうのは苦手なんだ。寒気がする。君くらいがちょうどいいのさ」

「どういう意味だよ」

暗に僕はひねくれてると揶揄する奴にちよつと唇を尖らせたりして、目の前の涼やかな口元が笑ったのを見て小さく息をついた。

エイモス・デイゴリー……彼の息子にかける情熱と期待は、確かに、セドリツクにとってすべてがプラスであったとは言いがたいのかもしれない。ルシウス・マルフォイとは真逆の父親だけれど……つくづく、親になるというのはむずかしい。

「ともかく、外野なりに動くしかないよ。あの子たちとちがって、僕らは今この時間に生きる人間なんだから。——今度こそ、よけい者になんかしない」

固く拳を握りしめる。ドラコは口を引き結んで、決意する僕を見ていた。

「目立つのは厳禁——か。……ハツ、今さらだな」

「ア、ハハ。……だよね」

彼の言葉にほどよく気が抜けた。そつと拳をほどく。

「教師のあいだで、ドラコはともかく僕はかなり問題になってるだろうし。第二のトム・リドルとか思われてたらいやだなあ。……いや、

それはそれでハリーに向かう懐疑の目をそらせるならアリか？」

「ナシだ」

「アイテツ」

わざわざ身を乗り出してまでドラコにぺちりと額を叩かれてしまった。君、僕にすぐ手が出るって文句を言うけれど、君だって他人のこと言えないぞ。

「まあ、まあ、ダンブルドアは確信を持たなければ動かない人だから大丈夫さ。スネイプ先生はダンブルドアの命でもなきや僕と関わるのは嫌……だろうし」

「自分で言って落ち込むなよ」

「落ち込みもするよ。僕の名前の由来、話しただろう？ これってつまりは、母さんの遺言みたいなものじゃないか。だってのに……あの嫌いっぷり、ハリーよりひどいんだぜ？ 憎い男そっくりの子供より目にしたくないって」

「君が無茶を控えればスネイプ教授も多少は安心するんじゃないか」

「無理だね」

「無理だろうな」

一拍おいて、同時に吹き出した。はなからおとなしくする選択肢なんてないのだ。否応なしに目立つハリーを隠れ蓑に好き放題、それがマリア・ポッターだった。

「大体、君、セドリック・ディゴリーの件は別にしても——まだまだ悩むべきことがあるだろう」

ドラコは意地悪にたつぷりと皮肉を含んで口だけで笑った。

「ダンスパーティー、どうするんだ」

はた、と、固まった。どうするか——どうするかだつて？——そんなの決まってる！

「参加しないよ。するわけないだろ。僕にドレスを着ろっていうのかい？ ピエロより滑稽だ！」

ルーナが雲を見てただの雲だと言うよりもおかしな話だ。確認なんて必要なく当然に決まりきっている。

そう、わめく僕をドラコはずいぶんと楽しげに眺めていた。含み笑いが似合いすぎる憎たらしい顔だった。

「……なんだよ」

「いいや？ 徒労にならずに済んで気分がいいだけだ」

「なに企んでるの」

「なにを企んでると思う？」

肘置きに頬杖をついて、流し目を送ってくるドラコには妙な色気があった。なんの色仕掛けだ。引っかける相手を間違えてるぞ、僕はマリアであつてアステリアじゃあないんだぞ。

「……僕、ドレスなんて着ないからね。ぜったいに、ぜったいに着ないから！ シリウスから贈られたつて知るもんか！」
「そうか」

ドラコはやっぱり不気味なくらいニッコリとしていた。

ホグワーツ特急を降りた先はバケツをひっくり返したような豪雨だった。雨に打ち叩かれるセストラルが不憫で、それを眩げばドラコが奇妙そうに僕を見た。

「……君、見えるのか」

「え？ セストラルを？ そりゃあ——まあ？」

今さらなにを聞くのだろう。一年生の頃から馬車引くセストラルを見てきたというのに。そう、きつと顔に書かれている僕の疑問を読んで、ドラコは囁いた。

「君、両親の死に際の記憶があるだとか、そんな話はなかったな？」

「僕が『僕』であることを思い出したのは五歳の頃だよ。それ以前の記憶はみんなと同じであやふやさ。当然、覚えてない」

「ハリーもだな？ そしてハリーはセストラルが見えてない——そうだな？」

そこでようやくと、ドラコが何に戸惑っているのかに気付いた。

——そうだ、僕、なんでセストラルが見えていたんだろう。

マリアはまだ誰の死も見えていなかったのに。

ドラコはどことなく遠くを見るようにして再び囁いた。

「やはり君は——『ハリー』なんだな」

嬉しげだったのか、悲しげだったのか——雨音に邪魔された彼の声色は、僕には判別できそうになかった。

ハーマイオニーが食事をボイコットした。あまあい匂いをただよわせ誘惑するデザートには見向きもしないで、こぶしをぎゅつとにぎって空皿を睨んでいる。ロンがあの手この手で抵抗を諦めさせようとしているが、まったくの逆効果であった。

ああ……そういえばそんな時期か。ハーマイオニーの同意を求めするような視線を無視して糖蜜パイをつまむ。とりあえず、例の無差別編み物トラップだけは阻止しておかないと。あれは悲劇しか生まない。

三つ目の糖蜜パイに手を出し——ふと、アステリアに好物を聞かれた際、糖蜜パイと答えればよかったか。と今さら思い付いた——ダンブルドアの合図を待つ。四つ目の糖蜜パイへ伸ばした指をハリーにそれ以上はいけませんと絡め取られたところで、机上からご馳走の残りが消えた。

「みなよく食べ、よく飲んだことじやろう。ちと、爺の話に耳を傾けてはくれんかの？　いくつか知らせねばならんことがある。まずは……」

新学期恒例の挨拶に緩んでいた生徒たちの気は、やがて告げられたダンブルドアの『報せ』によっていつせいに引き締められた。

「今年の寮対抗クイディッチ試合は取り止めじや」
「エーッ!!」

クイディッチ好きの生徒たちから盛大に非難の声があがった。特に納得ならないのは選手たちだ。当然、グリフィンドールチームの花形シーカー、ハリーだって、マーリンの髭！　と叫び出しそんな勢いだった。

「だが、それに替わる一大イベントがある。わしはみながこの行事を大いに楽しむだろうことを確信しておる。先生方も己のすべてを費やして尽力してくださいることじやろう……それでは、ここに大いなる喜びをもつて発表する。今年、このホグワーツにて——」

ダンツ。大広間の扉が雷鳴と共に開いた。ルーピン先生の傷だらけの顔が可愛く思えてしまうほどの強面と『魔法の目』を持つ男——アラスター・マッドアイ・ムーデイがそこに立っていた。……少なくとも、見た目はマッドアイ・ムーデイであった。

生徒たちの不躰な視線なんでものともせず——しかし魔法の目はギョロギョロと生徒たちを見回していた——マッドアイがダンブルドアの元へと向かう。数言話せば、彼は毎年この時期に空席となる教員席へと着いた。それが意味する事実には、生徒たちの困惑のざわめきがささやかに広がった。

「紹介しようかの。今年から闇の魔術に対する防衛術の担当教授に就いてくださる、ムーデイ先生じや」

拍手をしたのはダンブルドアとハグリッドだけだった。コホン。気を取り直してダンブルドアは続ける。

「先ほど言いかけたことじやが、これから数ヶ月にわたり我が校は二校の選ばれし生徒たちを受け入れる。ポーバトンにダームストラングじや。うむ、チラホラと名前を知っている生徒もおるようじやのう。さて、なぜならば——まこと光栄なことに、本校にてトライウィザード・トーナメント三大魔法学校対抗試合を開催する名誉に預かれたからじや」

聞きなれない名前に、生徒たちのざわめきは大きくなった。ダンブルドアは微笑ましげに子供たちを眺めながら概要の説明へと入った。柔軟な生徒から徐々に喜色の声が伝染し、大広間はやがて興奮に包

まれた。誰もがホグワーツの代表として輝く自分を想像した。そして、年齢制限の規約にがつくりと肩を落とした。——ことさら、野望秘めたる未来のやり手商人たちは、諦めてすらいなかった。彼らにとって、ふつてわいた一千ガリオンという大金は喉から手が出るほどに欲しいものだったのだ。

寮に戻ってから、稀に見る真剣さで相談し合う双子の兄たちに、ロンはどことなく感化されているように見えた。……どうか、今回はハリーと拗れに拗れたりしなければいいけど。

翌日から四年生の授業が始まった。ハグリッドはやっぱり、あのおぞましい化け物・尻尾爆発スクリュートを繁殖させてしまったし（今回ばかりはセオドールの「正気を疑う」に同意せざるを得なかった。）トレローニーは惑星を語って趣味のハリー死亡予言をインチキするし（ところで僕に予言をしないのはなぜだろう。）

初日から散々だった。極めつけは——木曜日の『闇の魔術に対する防衛術』だ。

「インペリオ」

ロンが答えた許されざる呪文の一つ、服従の呪文が蜘蛛へとかけられる。蜘蛛がタップダンスをする。みんな笑っている。——胸くそ悪い光景だった。

蜘蛛へと杖を振ったこのマッドアイ・ムーディが偽者であることを知る僕からすれば、呪文を見せつけて気を付けろだなんて言っておままごでもして嗤っているようにしか見えないのだ。

けれど、この授業が——マッドアイに扮する奴の授業が、ハリーや親友たちにとって今後重要になることも事実であった。それも気に食わないうちの一つだ。

「クルーシオ」

ネビルの答えた磔の呪文が肥大化した二匹目の蜘蛛を襲う。蜘蛛

は声すらなく苦しみ、悶え、痙攣して皆に明確な苦痛の恐怖を突きつけた。

「先生」

僕は手を挙げた。

「先生——もう、よろしいでしょう」

ハーマイオニーはネビルの手を握っていた。ネビルは——蜘蛛を一心に見つめていた。食い込んだ爪も、噛み切りかけている唇も、力みすぎて震える全身も——なにも感じないくらい、真っ直ぐに。

三匹目の蜘蛛が取り出された。マッドアイの目がはつきりとハリーへ動くのを見て、僕は再び手を挙げた。

「……ふむ、お前はマリア・ポッターだな？ ——いいぞ、答えてみる」

「マリア……」

クラス中が、三匹目の蜘蛛はどうなってしまうのかと不安そうにする中、やはり誰よりも一番に悟ってしまう聡明な魔女は僕を見て泣きそうな顔をした。

大丈夫だよ、ハーマイオニー。君にも、ハリーにも——これは答えさせない。

「アバダ・ケダブラ」

蜘蛛は絶命した。ハリーの目の前で。最悪の緑の光を受けて、コロリとあっけなく死んだ。教室の隅まで不気味な静寂が子供たちを包んだ。それから誰一人と無駄話をする者はなく、授業は終わった。

ワツと廊下へ飛び出したクラスメイトたちは、まるでショーかなにかでも見ていたかのような興奮っぷりだった。沈痛としているのは、

僕と、ハリーと、ハーマイオニーと——そしてネビルだけだった。

「ネビル」

「あ、ああ、マリア、おもしろい、授業だったね？ 刺激的で、ぼく、おなががすいちやった——夕食、なんだろう、おもしろい夕食だね、あ、ちがう、夕食は、」

「ネビル、深呼吸して。笑わなくていい」

丸まった背中を撫でれば、ローブ越しても脂汗でしめっているのがわかった。ネビルは唇を青ざめさせて、そっと僕のローブを握り返した。

「ネビル……」

「——ロングボトム」

やさしい声だった。——ゾツとするくらい。

「大丈夫だぞ、ロングボトム。わしの部屋において。茶でも飲もう。お前が好きそうな本があるんだ。……お前たちは大丈夫だな？ ポッター」

「はい」

僕と——そしてハリーははつきりと答えた。ちよつとだけ驚いてしまった。覚悟していた僕はともかく、ハリーまでこんなにしつかりした顔をするなんて。……拳をきつく握り続けたままなのに。

「ネビル、行っておいで」

「マリア……」

「ちよつとお茶で体を温めて、それから夕食を食べにおいでよ。君の席、取っておいてあげるからさ」

「……うん」

ネビルの背を数回叩いて送り出す。大丈夫、マッドアイに扮する奴はハリー以外に手を出して警戒されるような、そんなへまをやる男じゃない。打算的で、理性的だ。——バーテミウス・クラウチ・ジュニアは。

軽く目礼して、ハリーの手を取って離れる。——自然に。演じろ、マリア。

「あの、ハリー？ マリア？」

「ハーマイオニー。少しだけ、僕たち、寄り道してもかまわないかな」
「ええ……ええ、それは、もちろん」

チラリとロンを横目で見たハーマイオニーは、それから任せろという風にしつかりとうなずいてくれた。

夕食へ向かう親友たちと別れて、どこか二人きりになれる場所を探す。自然と、ドラコと落ち合うことの多い湖付近にたどり着いていた。慣れというのはこんなところに出る。

繋ぎっぱなしの手を引いて、ハリー共々芝生の上に腰を下ろす。

「父さんと母さんは……あんな風にして、死んだんだね」

やっと、ハリーの手から力が抜けた。手のひらに残された四つの爪痕が、赤々しく痛々しかった。

「そうだね」

そつけないくらい簡単に答えて、ハリーの頭を肩に迎える。

「……痛かったかな」

「眠るより早いよ、きつと」

僕の知る『彼』の言葉を借りて小さく笑えば、ハリーはぐずるみたいに鼻を鳴らした。

「ハリー」

「マリア」

ハリーはほとんど乗しかかるような形で僕を抱きしめていた。まるで子供だった。……そうだ、この子は子供だ。

「君が——マリアが、生きていてくれてよかった。僕、もしかしたら——ひとりぼっちだったんだ。ひとりぼっちで、生きなくちやいけなかったんだ」

「……ハリー」

僕が丹精を込めてふわふわにしている黒髪を撫でる。

その通りだよ、ハリー。君は——ひとりぼっちだったんだ。

ボーバトンとダームストラング生の来校日がやってきた。それまでの授業で特筆すべき出来事といえばハリーの強制インペリオ忍耐訓練くらいのもので（当然、ハリーは抵抗に成功した。）おおむね平和な日々といえた。今日この日から全てが動き出すのだと、大広間に集まったみんなが期待していた。

それから——そう、ハーマイオニーの活動も避けては通れない。字を見るのもうんざりなあの『S・P・E・W』だ。

「しもべたちは働いているのが幸せなんだ」

「それは彼らが教育も受けさせてもらえず洗脳されてるからだわ！」

机に叩き付けられた拳の反動でベーコンが飛び上がる。エビみたいだ。そんなのには目もくれないでジョージに噛み付いていたハーマイオニーは、ジロリと周囲を睨み回すととうとう僕を名指しした。ああ、これだからずっとだんまりでいたというのに！

「マリア、あなたは当然、わたしに賛成でしょう？　だってあなたはドビーと友達だわ！　自由なしもべ妖精、ドビーと」

「あのね、ハーマイオニー」

レディにあるまじき（決して僕が言えることではないけれど。）鼻息の荒らさで詰め寄ってくるハーマイオニーに、とりあえずサラダあたりを皿へと乗せてやってカボチャジュースを手元から避難させる。

「そろそろふくろうたちの配達時間だね？」

「……ええ、そうね。ご存知の通り？」

話の腰を折られたと感じたハーマイオニーは、わかりやすく不満を

見せた。

「ふくろうたちが手紙を運んでくる——それを君は奴隷労働と呼ぶかい?」

「……それは」

「こんなものは不当だ。自由にすべきだとふくろうたちを解放するかい? そうしてふくろうたちは自由に感謝して飛び立っていくと思ukai?」

「それとこれとは、」

「ちがわないさ。君が言ってるのはそういうこと。断言するね。まず、うちのヘドウィグは怒る。誇りを汚された。他の子たちもそうである子が多いように思う」

いつの間にか、ハリーもロンも、なんだかフレッドにジョージまで黙りこんでいた。ハーマイオニーはヒステリックに叫びたがる唇を固く結んでいた。

「当然、喜んで自由になるふくろうもいるだろう。たとえば、そう、飼い主から不当な扱いを受けているふくろうだとかね。これが、僕たちでいうドビーに当てはまる。でも、こちらの方が珍しいんだ。ねえ、聞きたいんだけど、ジョージ? 厨房で働くしもべ妖精たちは叩かれたり、蹴られたり、非道な扱いは受けているかい?」

「俺が知る限りではないな。マリアもご存知の通り」

「……なんでそれを知ってるのかは後で聞くとして——さて、ハーマイオニー。仕事に誇りを持ち満足している者からそれを君が可哀想に思うというだけで奪いあげるってのは……傲慢とは言わないかな?」

ハーマイオニーはまるでバカげたサイズの鉛でも飲み込んだみたいな顔をして、ゆつくりと口を開いた。

「つまり、マリアは——あなたも、わたしが間違ってるって言いたいのね」

「いいや?」

再び周囲の目が僕へと集まった。……いやだな、こういうの、僕の柄じゃないのに。傲慢だとか、どの口が——と、僕はなじられる側だっというのに。

でも、『彼女』の言葉を今の彼女に伝えることは、きっと無駄じゃない。大きな意味に繋がると信じた。

「君のお好きな正当な権利と道徳的には正しいと思うよ。ドビーの例があるわけだし。お給料とか制度の見直しを訴えるのも、感心する人は多いと思う。ここだけの話……君の活動は、ウン、そのうち成功するんじゃないかな。ただ、今やってるのは強引だと思うけど」

だって、ほら、君は間違えたって——正解にたどり着く。それが『僕』の親友ハーマイオニー・グレンジャーだ。

「こんなことは、よりによって君に言うのは失礼だって、それはもちろんわかってるんだけど、まあでも、言わせてもらおうよ。——ハーマイオニー、君なら、もっと賢いやり方でやれるんじゃないかな」

ハーマイオニーは三秒ほど瞳を伏せると、そう……と呟いて、乗り出していた身を落ち着かせた。もう、彼女からヒステリーの気配はなかった。次に開かれるその目は理性的だ。

「賢いやり方って?」

「それはわからない。だって僕、君のようにかしこくないもの」

「でも、わたしならできる?」

「できる」

僕の断言に、ハーマイオニーは口端をひくつかせた。笑うのを我慢している時の顔だと、それをよく知るハリーとロンまでニンマリしていた。

「僕は、君ほど冴えた魔女は、きつとこの先だつて知らないよ」

「お得意の予言かしら」

「さすが、お頭のよろしい方々は高度なブラックジョークをなさる」

ロンの茶々で戻ってきた和やかな空気に笑い合う。

実のところ、御大層に講釈垂れたこれらはすべて未来の彼女による言葉だ。いずれ魔法大臣となるハーマイオニーは、しもべ妖精の待遇改善だつてきつちり成功させてみせる。僕のはただの受け売りに過ぎないし、はつきりいつて僕自身が理解しきれたわけでもない。けれど、彼女の言葉が彼女自身に届かないだなんて——そんな道理はないだろう？

「ありがとう、マリア。おかげで明確なヴィジョンが見えてきたわ……そう、ともかく説得力。まずは説得力なのよ。これは知能戦なんだわ……」

「おいおい、マリア。これ、やる気がまるで萎えてないじゃないか」

「萎えさせる気はなかったもの。僕は、ちよつと強引だから方法を変えたら？　て言ったただだよ」

「マリアがかしこくないなんてウソだ……」

「かしこくないよ。僕のはズル。そしてハーマイオニーは本物。それだけ。ほうら、単純明快」

「さっぱりわからない」

ハリーとロンが同時に頭を振るものだから、思わず吹き出してしまった。ハーマイオニーからいつものはしたないわよ節をもらった。さつきまでジョージに乙女にあるまじき迫力で迫っていた女の子の言葉とは思えない。僕はちよつとだけ拗ねた。

さて、そんな怒濤の朝から始まった十月三十日だが、二校の生徒が到着する夕方にはほとんどの生徒が浮わついていた。玄関ホールに集められた生徒の誰もが、自身の身だしなみのチェックに、周りの観察に、と落ち着きをなくしていた。先生方だつて見栄を張るのに忙しくなく生徒らを指導していた。

「わしの目に狂いがなければ、ボーバトンの代表団が近付いてくるぞ！」

声をあげたのはダンブルドアだ。見上げた先で、大きな馬車が天馬に引かれて空を我が物にしていた。何度見ても美しい登場だ。

第一にマダム・マクシークが馬車を降りてダンブルドアへと親交の挨拶をする。その後ろにボーバトンの生徒らが十数名控えていた。水色の薄っぺらな制服で寒そうに震えていた。

次にやってくるのがダームストラングだ。湖から船が水面を割つて湧き上がる。またまた派手な登場に圧倒されているホグワーツ生を置いて、校長カルカロフが挨拶、そしてそれに続く青年の姿に、隣にいたハリーとロンが互いの脇腹を小突きあっているのが見えた。

——「クラムだ！」

大広間にすべての生徒が揃い（ボーバトンはレイブンクローの席に、ダームストラングはスリザリンの席に収まった。）歓迎の宴が開催された。様々な国の料理が机上に溢れ、ホグワーツ生やダームストラングの生徒らは感嘆の声をあげた。ボーバトンの生徒は気に入らないようだった。こればかりは……英国とフランスのプライドのぶつかり合いみたいなものだからね。のちの『僕』のハーマイオニー論である。

「それ、なに？」

「グイヤベース。おいしいよ」

ハリーが興味深そうに僕のスープを見るので、スプーンで掬い上げ

て口元へと運ぶ。パクリと食いついたハリーは、それから、美味しいと頬をほころばせた。

「あなたたちねえ……」

「ハリー、そのとおり。ブイヤベース、おいしいです」

なんだか声までもがキラキラと輝いて降り落ちるようだった。ロンがその人を見上げてぽっかりと口を開けた。ヴィーラの血を引く完璧な美少女、フラー・デラクールだ。

「あなたたち、仲良し。恋人ですか？」

「まさか！」

ブイヤベースを物欲しそうに見ながら（そしてロンが献上品だとばかりにスープ皿を彼女へと寄せていた。まだ僕が食べてるぞ！）僕の隣に割り込んだ彼女は、ニツコリ笑った。またまたロンが締まらない口をさらに開いた。ロニー坊や、ヨダレは垂らしてくれるなよ。

「兄弟だよ。僕はマリア・ポッター、そしてこっちが……ハリー・ポッター」

「オー・モンデューー！ アリー・ポッター？ わたし、聞いたことありません」

腰まであるシルバードロンドを仕草と共に流して、美しさを振り撒きながら手を差し出すフラーに、ハリーはどきまぎしながらも握手を返していた。

「でも、わたし、アリーよりあなたに聞きたいがありません。マリーア」

「言いにくいならマリーでいいよ。フランス語はそう発音するんだよね、……えっと、ハーマイオニー？」

「その通りよ」

ロンの手をつねりながらツーンツとそっぽを向くハーマイオニーだが、それでも律儀に答えるあたり憎めなくて笑ってしまう。

「ウイ、マリー。あなた——」

そして宮廷の美しき花は麗しい笑顔で爆弾を落とした。

「男の子でーすか？」

カボチャジュースを、スープを、シチューを飲んでいた近くの何人が吹き出した。ハーマイオニーがカンカンになりながら素早くテルジオを唱えた。

「あなた——あなた——！　いくらなんでも失礼だわ！」

「わたし、あなたに聞いてませーん。わたし、マリーに聞きました」

「そのマリーがこういうことで怒らないのを知ってるからわたしが怒るのよ！」

「ええと、ありがとう？　ハーマイオニー？」

「ああ、もう！　あなたって、ほんとうにぼんやりなんだから！」

キイキイと癩癩を起こすハーマイオニーをロンとハリーがなだめる。ついでに双子の悪戯っ子たちがなだめると見せ掛けて煽っていたが、そちらは頼れる親友たちに任せるとしよう。

「フラー？　あ、フルールが正しいんだっけ？」

「フラーです、かまいません」

「うん、じゃあ、フラー。一応、僕は身体的には女の子だよ。これ、偽物に見えるかい？」

ローブの前をチラとだけ開いて胸のふくらみを指す。フラァが容赦なく触ってきたので二度目の噴水があちこちで吹き上がった。またまたハーマイオニーがテルジオを唱えるはめになった。

胸って服の上からなら触られても案外平気なものなんだな……下着のおかげかな。ハーマイオニーの下着着用徹底指導がこんなところで活きるとは。

「ハイ、おんものでーすね」

「でしよう?」

「でも、わたしの血があなたを男の子、言いました。マリー、わたし、好きでしよう?」

「いい加減にして!」

次に爆発したのはジニーだった。僕の向かいにいたハーマイオニーの隣——つまり、机を挟んで僕とフラァの間が正面に来る席へと割り込むと、むんずとフラァの腕を掴んだ。

「信じられないわ! 鼻の下伸ばしっぱなしのロンならともかく、マリアにまで! マリアはあたしの姉さんよ!」

「ジニー……」

「感動してる場合じゃないからね、マリア」

ハリーの冷静な声に、ロンの双子の兄貴たちがゲラゲラと笑った。

「マリー、妹、一緒にーす! わたし、妹いまーす! ガブリエーラ、とってもかわいい」

「聞きなさいよ!」

もはや收拾がつかなくなってきたので、おそらく当初の目的だろうブイヤベースをフラァへと渡して、レイブンクロー席へ戻るよううながした。フラァは僕とハリーとひとりずつハグをすると、ご機嫌で水

色の集団へと戻っていった。名残惜しそうなロン（ついでにハグを受け入れる姿勢はバツチリだった。）をハーマイオニーとジニーがギラギラと睨んでいた。まるで嵐のような時間だった。

「——時は来た」

デザートもすっかりたいらげ金の皿がピカピカになると、ダンブルドアは立ち上がった。いつの間にか迎えていたルード・バグマンとクラウチ・シニアが、まったく対照的な顔をして生徒たちを眺めていた。一方は笑顔、一方は仏頂面だ。

ダンブルドアの説明が一区切りつくと共に、選定のゴブレットが姿を現す。青い炎があやしげに揺らめいていた。

「明日、ハロウィーンの夜にゴブレットは各校のもつともふさわしい代表の名を返してよこすだろう。年齢に満たない生徒は年齢線によつて近付くことすら叶わぬ。よいかね、軽々しく名乗りは上げぬことじゃ。ゴブレットに名前を入れるということは、すなわち魔法契約による拘束を指す。代表選手に選ばれたからには、心変わりには許されぬ。十七歳以上の諸君——ようく、考えるように」

宴は解散された。生徒たちの興奮は学校学年関係なく翌日の夕食まで続いた。ハロウィンパーティーなんてほとんどが眼中になかった。ゴブレットが代表選手の名前を選出する——この時こそが興奮と緊張の最高潮であった。

青い炎のゴブレットが赤い炎をあげる。ヒラヒラと一枚の紙が吐き出された。

「ダームストラングの代表選手は——ビクトール・クラム！」

ワツと声がわいた。拍手の嵐が巻き起こった。クラムはむっつりした顔のまま、選手のために空けられた控え室へと入っていった。

「ボーバトンの代表選手は——フラー・デラクール！」

次の歓声は心做しか男のものが多くように感じた。フラーは優雅に髪をなびかせて、一瞬マリアを見るとニッコリ笑ってクラムに続いた。僕の後ろにいたロンが「僕に笑った……」とうっとりしていた。ハーマイオニーがしらつとした目でロンを睨んでいた。

「ホグワーツの代表選手は——」

フラーが消えてから張り詰められた緊張は、そして爆発した。

「セドリック・デイゴリー！」

ワアアア！ ハツフルパフ生は総立ちだった。セドリックと交流があるために双子のウィーズリーたちが悪態をつくなんてこともなく、どの席からおおよその拍手がセドリックを祝福していた。セドリックは微笑んで、最後の代表選手として控え室へと消えた。これで、今宵の一大イベントは終わりだと誰もが満足の息をついていた。——僕と、ドラコと、そして『奴』以外は。

ボウツ——もう変わるはずのない炎が赤く燃える。情けないほどペラペラの紙が宙を舞う。ダンブルドアが締めスピーチを止めて啞然と名前を呼ぶ。

「ハリー・ポッター」

悪夢の始まりだった。

僕、入れてない。

ハリーは凍えているのかと思うほど弱々しくか細い声で訴えた。ハリーの気持ちを置いてけぼりにして騒ぎ倒す談話室から、僕をつれて寢室へと移動した時のことだった。

「信じてくれるよね、マリア」

「当たり前だよ」

ハリーのベッドに二人で腰掛けて、そつと抱きしめる。他の同年代の男の子たちに比べ、ハリーは慢性の栄養不良にあるために小柄だ。けれど、骨格上男女の違いが表れる僕と並べば立派に男の子で——そして、まだ、十四歳の子供なのだ。それがどうして、十七歳の青年たちに混ざって命懸けの試練なんぞに立ち向かえると思うのか。それも、自ら、だなんて。

いつだって『僕』は——自分から苦行を望んだわけじゃない。ヒーローも英雄も嫌いだったんだ。

「セドリックは信じてくれた」

「セドリックが……」

なんだか意外で、呆然としてしまった。だって、『僕』の時は信じてくれなかった。これが交流の有無の差か。

「でも、他の人は………みんな、僕をなんだと思ってるんだ」

苦々しく吐き捨てられたそれに答えたのは、隣のベッドの彼だった。

「でも、応援されてる。だったらいいじゃないか」
「——ロン」

ハリーよりもよっぽど苦々しそうに、ロンはベッドに寝転んでふてくされていた。

「で？ どうやったんだい、ハリー。親友の僕にくらい教えてくれたっていいだろう？」

「僕、やってない！」

「ロン、僕らの話を聞いていたならわかるだろう。ハリーは名前を入れてないよ」

「ああ、そうだね。マリアはハリーの絶対の味方だ。ハリーが赤つて言えば青だろうが黄色だろうが君は赤と言うんだろうさ。美しい兄弟愛でけっこう。うちのフレッドやジョージだってこうはならない」

どうにも刺を感じる物言いに、僕まで顔をしかめてしまう。

「……何が言いたいんだい、ロン」

「なに？ なにだって？ かまととぶるなよ。君だって思ってるだろう？ 実際にハリーは入れてないんだとしても——また、ハリーだ。いつもハリーだ。君、わかってる？ 周りになんて言われてるか。腰巾着だぜ。ハリー・ポッターの腰巾着でお付き添いのマリア・ポッター！」

「ロンー！」

「悔しいだろ？ 当然だよな、兄弟だったのに片や『生き残った男の子』で、マリア・ポッターはついでだ。そんなのって、」

「ちつとも」

「ほうら、ごらん——なんだって？」

焦っている時ほどよく回るロンの舌が怪訝に止まった。僕はもう一度、はつきりと繰り返し返した。

「ちつとも——悔しいなんて思わないよ。ハリーのついで？ 十分さ。それ以上なんて望まない。——僕は英雄じゃない」

ロンは呆けて、それから口をもごもごとさせていかに嫌な態度を取れるかを考えているようだった。

「……フーン、あつそう。そりやいいな。だってマリアはほんとうは魔法もちやんと使えるしハーマイオニーとも話が合う。かしこいんだ。そうだよな、わざわざ目立つなんてバカらしいことは、お頭のよろしい方々はしないんだ。で？ そのすまし顔の下で僕らをバカにしてるんだろ？」

「ロン、いい加減に……」

「いいよ、ハリー。今、喧嘩を売られてるのは僕だ。——その通りだよ、バカらしい。子供っぽくてうんざりするよ。君の思い通りの『脇役仲間』なんかじゃあなくて残念だったね」

いつかの彼の言葉を引つ張り出して皮肉れば、ロンはカツと顔を赤くして枕を取り上げた。ハリーが力強く僕を腕の中へと引き寄せた。

「ロン——いいかい、それをマリアに投げてみる。僕はぜったいに君を許さないぞ」

「そんなのは、ハリー、君だって同じだ。僕が許さない」

「君たち、変だよ。兄弟だからって……ベタベタしすぎだ。——気持ち悪いよ」

ロンは枕をベッドへ叩き付けると、頭まで毛布をかぶって僕らを拒絶した。ハリーもまた、ロンに背を向けて徹底対抗の姿勢を取っていた。

『前回』よりも面倒そうな気配に、僕はまた頭と胃がいたくなる思いでいっぱいだった。

「——と、いうことがあります」

「君が事態をややこしくしてどうするんだ」

「ごもつともです」

いつもの湖付近にて、ドラコは全身で呆れを示していた。なんてジト目が似合うんだ。パーフェクトだよ。

……だって、しかたないじゃないか。僕は元々沸点は低いほうだ。

「まあ、あの赤毛の気持ちだってわからなくはないが」

「へえ？」

「前回では嫉妬の対象はハリーひとりで済んだ。今回はマリアまでいて二人だ。許容量に限界が来たのさ。アレは君たち三人の中でも特に子供なんだから、そりや慮ってやらないとすねる」

「まずロンをアレとか言うな」

相変わらずウィーズリーに手厳しいマルフォイのお坊ちゃんに、叩きやすい額を叩いておいた。前回よりはよっぽどマシだけどさ。ハーマイオニーに対しては噛みつかなくなったし。なんとたつて魔法大臣にまで大出世した才女様だからね。

「とにかく様子見か……僕が口を出したらこじれそうだもんね」

「間違いなくな」

「うう、頼りない姉さんでごめんよ、ハリー」

僕のオーバーな泣き真似に、ドラコはバカバカしいと鼻で笑いつつも頭を撫でてくれた。君ってば、実はノリがいいんだから。

「……気持ち悪い、か」

『僕』の親友ではないけれど、親友の咄嗟の言葉を思い出してため息をつく。

気持ち悪い……ずっとそう思っていたのだろうか。『僕』が共に歩んできたロンじゃないのはわかっているけど、それでも、ロンにそんなふうに使われていたと知るのは……落ち込む。

「ねえ、ドラコ、僕とハリーの関係って——気持ち悪い？」

撫でていたと思っただら手慰みに僕の髪を編み込んだりし始めていたドラコに、どんよりした声のまま尋ねる。ドラコは手使いを止めることもなく、僕との会話のほうがついでみたいな軽さで答えた。

「男女の兄弟にしては距離が近すぎるようには見えるな。はつきりいって、邪推している輩だって少なくはない」

「邪推？」

「わからないならいい」

動くな、なんて首を固定されて、振り向くことすら叶わない。今度はどうな髪型に仕上げられてしまうんだか。僕の髪を弄るたびに技術力が上がっている気がする。そのうちアステリアに披露してやるのだろうか。

「だが——君たちがそれで満足してるなら、外野の声なんてどうでもいいんじゃないか。少なくとも僕は君たちをわかっているつもりだ。……こちらのウィーズリーとグレンジャーよりもな」

振り向けない。だから、ほんとうのところはわからないけれど——なんとなく、ドラコは笑っている気がした。

そりゃあ……そうだろう。友人の距離でなく敵の距離からも僕らは意識し合ってきたのだから。『僕』を一番よく知るのは当然『僕』の

ロンとハーマイオニーだけど、二人がいない限り、この世界での僕の最高の理解者はドラコだ。ハリーの親友である二人よりも、ずっと近い。

「この僕がいるんだ。十分だろうか？」

「ドラコ、今すつごく自信満々な顔してるでしょ。ドヤ顔ってやつ」

「おや、さすが元英雄どのは察するのもお上手でいらっしやる。いつの間にマッドアイの目を手に入れたんだい」

「おあいにくさま。声だけで君がいかに腹の立つ顔してるか、わかるようになったちゃってね。なんたって、ほら、こんなにも付き合いが長いわけだから？」

「それはそれは……光栄の至りに存じます」

「君は嫌味での世渡り術しか知らないのかい？」

あつさりと鬱々しい気分は吹き飛んだ。たぶん、心の奥に引っ込んだだけだ。

けれど、十分だ。——僕が立ち上がるには、このくらいがちょうどいい。

「せいぜい励むがいいさ。兄弟初心者」

完成の合図に肩を叩いて、散々弄り倒した髪を崩さない程度にドラコは旋毛へと軽いキスを落とす。……そういうところがキザだった、ロンにけむたがられるんだぞ。マルフォイめ。

翌日からハリーは針のむしろもいところなバッシングを受けていた。特にハツフルパフ生からの声なき非難は顕著で、セドリツクはかろうじてハリーを庇うふうに動いてくれていたが、それがなおさら、彼の株を上げこそすれセドリツクの優しさを利用する目立ちたがりで恥知らずなハリー・ポッター像を助長させていた。心做しか教師からの目も冷たいと感じてしまうハリーの心の逃げどころは、ハーマイオニーと MARIA の元しかなかった。僕もハーマイオニーもできうる限りハリーを庇ったが、それすらもハリーへの嘲笑の的になっていた。(「女の子の背中に隠れる上手さを競う種目があれば一番間違いないね! さすが代表だわ」とパーキンソンが下品に笑った。)

ただでさえこれまでにない居心地の悪さ(こちらのハリーは二年生時のスケープゴートを経験していないのだ。)に辟易としているというのに、ロンとの悶着がさらにハリーを追いつめた。

「ハーマイオニーが医務室に行っただって聞いたぞ。スリザリンの歯呪いを受けたんだ。君の代わりに。君のせいだろ」

「ああ、そうかい。そうだね、ゼーンぶ僕のせいさ。目立ちたがりで身のほど知らずのハリー・ポッターがあの日、死なずに生き残ってしまったせいだろうさ。それで? 君、もう僕と話さないんじゃないかなかったの。ハーマイオニーのためなら別って? 大した友情だね」

「ハリー、ロン、いい加減にしろってば」

今にも杖を突き付け合いそうな二人の間に割り込む。が、中立をたもつハーマイオニーとちがって僕はロンにハリーの味方ばかりする敵と認識されているため、睨まれるばかりだ。そうすればまたまたハリーがロンに対して怒るのだから、悪循環でしかなかった。

止めてもダメ、放つてもダメ——どうすればいいんだ。

「ハリー、ロンはすねてるだけなんだよ。だから……アー、つまり？」
「僕に我慢しろって？ 僕から謝ればいいわけ？ 僕は名前を入れてないけど、君を差し置いて選ばれてしまっごめんねって？」
「ハリー……」

怒りで雑になるハリーの魔法薬の調合を手伝いながら、上手く言葉が見つからずに結局言いくるめられてしまう。

ロンが子供っぽいのはわかりきってたことだ。けれど、ハリーだって真正銘子供で、そんなハリーにばかり譲歩を期待するのは確かに不公平だ。だがしかし、だからといってロンのほうを説教なんてしようものなら、ますます意固地になるのは目に見えていた。十四歳は複雑なお年頃なのだ。

ハリーが杖調べに向かっているあいだ、僕とハーマイオニーは談話室にて定例相談会議を開いていた。ロンはシエーマスやデインらと行動しているのでどこにいるやらわからなかった。

「どっちも子供なのよ」

「事実、子供だからね」

「精神が未熟ってことよー」

「子供で成熟してたら……それは化け物だろう？ ああ、いや、ハーマイオニー、君のことじゃない。そんな顔をしないでくれ」

慌てて手を振れば、じゃあ誰のことよ、なんて答えづらい反論にあう。しまった、墓穴を掘った。

「シンツ、とにかく。ロンのことはもうハーマイオニーに任せるしかないと思うんだ。僕はハリーともども目の敵にされてるしね」

「マリアに八つ当たりするなんて！ 我が兄ながら情けないわ」

いつの間にか混ざっていたジニーがプンプンと不満をもらす。どうやらジニーはハリーは入れてない派の一人のようだ。よかった、味

方は着実に増えている。ハリーに教えてやらなくちゃ。

「スリザリンはドラコがなんとかがんばってるみたいだし、ハッフルパフはセドリックがストツパー。レイブンクローは……」

ルーナ、と言いたいところだがまだ交流がない。前回と違いあの憎たらしいポッターバツジがないだけ、僕はマシだと思えるけれど……そんなことは知るよしもないハリーには、今この時が地獄なのだ。

……ちよつとあの頃のムカつきがよみがえってきたな。あとでこの件でドラコのやつをからかってやろう。

「大体、ハ……ハリーはそんな人じゃないって、ロンが一番よく知ってることじゃない！」

僕の腕をぎゅつと掴んで（信じられないくらいかわいい！）勝ち気に訴えるジニーに、ハーマイオニーもまったく何度もうなずき返していた。

「そうよ。ロンはね、ちゃんと知ってるのよ。だから、あれは、すねてるの。喧嘩した手前、引き返せなくなってるだけ。これだから男の子って……」

「子供っぽいんだから！」

「ハハハ……」

女の子の代表みたいな顔をしているお嬢さん二人の討論に、明らかに男の子側な僕は空笑うしかなかった。女の子ってほんと……おませだ。

さて翌日、リータ・スキーターの出任せしかないハリー・ポッター特集が出た頃には、状況は悪化する一方になっていた。記事の中で勝手にハリーのガールフレンドにされてしまったハーマイオニーにまで辛辣な目が向けられ、それがなおさらロンにとって面白くない現状

を生んでいた。親友たちの板挟みに中傷にと、ハーマイオニーのストレスも限界にきていた。

「ああら、我らがヒーロー、ハリー・ポッターの素敵でかわいいガールフレンドさんじゃない。ごきげんいいが？ ボツサボサ頭が今日もチャーミングね」

「うせなさい」

「ヒツ!? な、なによ……あんたがオバケみたいな顔してるから……」
「同じ顔にされたくなくばうせなさい」

幽鬼もかくやといったハーマイオニーの迫力に、なにかと僕ら（特にマリアとハーマイオニーだ。女の子のプライドなのかもしれない。）に突っかかってくるパンジー・パーキンソンだつてこの通りだ。仔猫でもあしらうみたいだにハーマイオニーの睨みで黙らされていた。

ハーマイオニーは今にも禁じられた森でひと狩り行こうとか言い出しかねない不穏なオーラを常にまとっていた。狩るのは虫一匹だが。

「リータ・スキーター……覚えてたわよ……」

定期購買している日刊予言者新聞を握りしめ、まだ十四歳だつていうのにすでに『僕』の知ってる敵と見なしたらなにがなんでも追い詰め追い込む恐妻家ミセスウィーズリーの片鱗を見せている少女に、「あれ、ハーマイオニーってば前歯を短くした？ 当ててみせようか、このあいだの歯呪いの時だろう」なんて茶化すことはできなかつた。背中から歴戦の戦士を幻視させるありさまだった。

ハーマイオニーとリータ・スキーターの確執についてはひとまず置いておこう。

着々と第一課題の日が近付いている。ハグリッドからドラゴンの課題をカンニングさせてもらい、それをセドリックに伝えたりもしたハリーは、シリウスからの返事の手紙によって何者かが己に危害を加

えたがっているのだとはつきり認識できたようだった。ハーマイオニーとのアクシオ習得訓練も進んでいるし……目下の悩みは（ドラゴンは当然として）やはりロンとのことであった。

はつきりさせよう。ハリーはロンが大好きだ。ハーマイオニーよりも好きだ。異性の友達よりはじめて得た同性の親友のほうが距離が近くなるのは当然の心理だろう。ハーマイオニーからはたしなめられるようなくだらないことで笑い合える友達は、つまりはロンなのだ。ゆえに――

「意地っ張りも大概にしなよ」

さびしくて拗ねてしまうのだ。

ふくれっ面で僕をどこかの教室に連れ込んだハリーは、それから数分、ひたすら僕を拘束していた。全身で。しっかと首と肩に回した腕で。言葉なく鬱憤をぶつけてくる弟の抱き枕に僕はさされていた。

仕方ないな、とその辺の机に腰かけてハリーを抱きしめ返す。もう十四歳だつていうのに、五歳や六歳のハリーをベッドを椅子にして抱え込んでいた頃のように膝に乗せる。……きつと、こんなのもロンにとつては気持ち悪い僕たちのひとつなんだろうけど。……ああ、いやだな。僕まで落ち込んだら誰がハリーを見守ってやれるんだ。

「大丈夫、そのうち仲直りできるよ。ハリーから謝る必要もない。ロンだつてわかつてるよ」

「……でも、喧嘩しちゃうんだ。マリアはそう言うけど、あいつはわかrazuやだ」

「二人とも意地っ張りだからね。ロンが話しかけようとしたら、今度ハリー、君のほうから逃げちゃうんだろう？」

「……………」

「そんな顔したつて姉さんにはお見通しだ」

だつて――僕だもの。

ふくれっ面がさらにふくらんだハリーの頭を撫でる。たとえば、この時の『僕』はいつそドラゴンにロンの目の前で食われてしまえば彼だって後悔するだろうに、だとか過激なことばかり考えていた気がする。このハリーがどこまで意固地に育っているかはわからないけれど——ひとりで空回るしかなかった僕よりはマシに決まってるけど——要はロンが大好きだからそれだけ傷付いているだけなのだ。そしてそれは、ロンも同じなのだ——信じたい。

「大丈夫さ、姉さんが保証する。君たちは仲直りできる。だから今は目の前のことだけ考えていなさい。ドラゴンを出し抜くんだろうか？」
「うん……」

「ハーマイオニーがいて、僕だっついて、……一応、ドラコなんかもいて、それからセドリック。君を信じてる人がこれだけいるのに、その悩みは贅沢だ。……誰一人と、ロンには代えられないけどね」
「ほんとうに」

巻き付く腕が強くなった。ちよつとだけ体勢がしんどい気もするけど、しかたない。甘ったれな弟を持った宿命だと思おう。眠れない夜にベッドへ潜り込んでくるアルバスだっってこんなものだった。

「かわいいね、甘えん坊のハリー坊や」

「……兄だっって言ってる」

「あ、ちよつと。ハリー、それはいたい。イタイイタイ首絞めないでごめんってばヘッドロックはやめて」

第一課題の日がやってきた。ハリーはすっかり血の気を失っていた、今自分がどこにいて何をしているのだからさっぱりわからないようだった。

セドリックにフラァ、クラム、そしてハリーが大広間から呼び出さ

れる。ハーマイオニーが小声でエールを送ったが、ハリーの脳にまで届いたかは定かではなかった。耳の穴の途中で緊張にかき消えてしまったかもしれない。

ロンはチラとだけハリーを見て、一度口を開いて、それから拳を握った。皮肉だったのか応援だったのか、結局言葉はなかった。

午後の授業は取り止めとなり、誰もが観戦のために飛び出している。僕は会場には向かわず彼の後を追った。

「——ロン」

談話室で沈黙していた僕らの親友は、ひどく憔悴した目で僕を見た。

「なんだよ、僕がいたらハリーの気が散るだろう」

「関係ないよ。どうせ客席なんか見えてない。目の前にドラゴンがいるんだぜ?」

ドラゴン。その言葉に、ロンはハッと瞳を開いた。

ああ、よかった——ロンはハリーを心配している。ハリーを想って不安になっている。……ようやく、安心できた。あの日の『僕』の痛みは無駄じゃなかった。——『僕』は救われた。

「ロン、協力してくれないか。ハリーのために」

「今さら僕の協力なんて必要ないだろ。ハーマイオニーがいて、君がいる。十分じゃないか」

「そうかもね。でも、足りないよ。——君がいなくちゃハリーは立ち上がれない」

「ああそうかよ、マリアはまったく大人でけっこうなことだね! 綺麗事を言えばバカな子供は信じるって、大人はみんなそう思ってる」

「その通りだ。大人は傲慢だ。けれど、これは綺麗事じゃない。ただの事実だ」

自分の存在意義に悩んで、劣等感に苦しんで。そんな君が。

「ハリーには、ロンがいなくちゃだめなんだ」

二人きりの談話室に、僕の声はずいぶんと澄んで聞こえた。

僕が生に足掻き続けられたのは、ロンとハーマイオニー——『僕』の親友たちがいたからだ。たったひとりで命運を背負えと戦場に立たされた僕に、君たちが隣に立ち続けてくれたからだ。一緒に生き抜こうとしてくれたからだ。

英雄ハリー・ポッターは、友を得てはじめて英雄になった。

「バカみたいだ。ハーマイオニーのように賢くなってる。マリアみたいにしっかりしてない。ハリーはいつだって危険な場所にいるのに——ただの足手まといがなんの役に立ってるって?」

「ハリーに逃げ道をくれる」

ロンはわけがわからないと頭を振った。

「ハーマイオニーは逃げちゃダメって言うんだ。それは正しいんだ。でも、ほら、わかるだろう? 正しいだけって、それってすごく苦しい。ハーマイオニーの正しさって、時々とっても残酷だ。でも、そんな時に君は——ハリーと一緒に、正しさから逃げようとするハリーに寄り添おうとしてくれる」

勝利への手がかりをハーマイオニーが探し出し、そして立ち上がるための勇気をロンがくれる。どっちが欠けたって、僕は動けなくなる。

「いいかい。ハリーにはそんな存在が必要なんだ。正しいだけじゃだめなんだ。損得じゃない。一緒に失敗してくれる人がいないと——」

それで、一緒に笑ってくれる人がいないと、ほんとうにひとりぼっちになってしまう」

「何度だって言うよ。ハリーには君が必要だよ、ロン。ハーマイオニーだって必要だ。どっちかがいれればいいだなんて、ハリーがこれから向かわされる現実は甘くはないんだ。そんなのじゃ間に合わない。君たち二人ともがいないと、戦えやしない」

言葉なく立ち尽くすロンの手を取る。この手はマリアの手だ。僕
の言葉はマリアの言葉だ。それでも、どうか——僕^{ハリー}を信じて。

「ロン——ハリーを助けてやってくれないか。それで、ちゃんとその目で見るといい。この世でもっとも——死に近いのが誰かを」

ハリーが立ち向かおうとしている、強大な悪意の存在を。

走る。歓声が聞こえる。熱狂が包んでいる。金の卵を手にしたクラムが仏頂面で立っている。——間に合った。

ハリーの名が呼ばれる。ハリーが凶暴なドラゴン、ハンガリー・ホーンテールの前に立つ。真っ青だ。震えている。ひどい顔だ。戦士の顔なんかじゃない。運命と希望を盾に無理やり戦わされる子供の顔だ。

ハリーが杖を振りかぶる。——「アクシオ！　ファイアボルト！」

ロンの手からファイアボルトが颯爽と飛んだ。

「結局、弟と親友の喧嘩に手一杯で対策どころじゃなかった——というわけだ」

「ぐうの音もごういせん」

代表選手四人が無事課題を突破したことを祝う宴会から抜け、僕はドラコのそれはそれは冷たい眼差しの下にいた。——そう、突破したのだ。四人とも。フラーも、クラムも、ハリーも、そしてセドリックも、前回と同じ方法で代表選手として立ち続けた。僕はといえば、意気込みむなしく喧嘩の仲裁をしていただけだ。大間抜けだ。

「うん、でも、もう大丈夫——だと、思う」

「むしろ以前にもましてべったりに見えるが？ 調子のいい」

「そこがロンのかわいいところさ。そもそも君が言える立場かい？

いつだって調子のいいマルフォイ君」

すっかり仲良し三人組に戻った子供たちの後ろ姿を思い出して、安堵に笑う。きつと今頃、祝宴騒ぎの談話室で例の卵を開いては頭を抱えていることだろう。そして三人で知恵をふりしぼり、三人で進むのだ。

「——いいのか」

ドラコは意地っ張りな子供を見るように僕を見た。

「いいんだよ。ハリーの味方でさえいてくれれば。——マリアのことはきらいだって」

「強がりめ」

「強がりじゃない。……こともないけど、すべてがウソってわけでも

ない。ハリーとしての僕はロンに選んでもらえて喜んでるもの」

ほの暗い独占欲だ。ロンはマリアよりもハリーを選ぶ。それに
マリア
僕は傷付き、僕は喜んでる。

「それに、ほら——僕には君がいてくれるんでしょ？」

悪戯っぽく目を細めれば、お得意の嫌味つたらしい表情でご機嫌に笑われた。

「当然だ。『君』のグレンジャーとウィーズリーには敵わないが、こちらの取り巻きにマリアまでは譲らないさ」

ずいぶんな言いぐさに、大人げないな、なんて苦く笑ってしまう。
……ほんとうに大人げないのは、僕のほうだろうに。

「話を戻そうか。セドリックをどうするか、だよ。この様子なら第二課題も『前回』と同じと見ていいだろうし……はつきりいって、僕にはどう妨害すべきか見当もつかないよ」

チラリと隣を盗み見れば、ドラコもまったく思い付いてない顔をしていた。なんとも頼りない沈黙だった。

出場者ならまだしも、外野になにができるというのか。なんとたつて、ただ妨害するだけではダメなのだ。セドリックは健闘したと周囲に思わせ、本人と、そしてなによりエイモス・デイゴリーを納得させねばならない。

彼の息子への期待がどれほどにセドリックを歪ませてしまうか……それはアルバスとスコープピウスの時間旅行を口頭で聞くしかできなかつた僕たちにはわからない未来なのだから。

「行き詰まったな。今日はここまでにしよう。あと三ヶ月あるんだ。

それだけあれば一つくらいは良案も思い付くだろうさ」

ふう、と息をはいて、先に立ち上がったドラコにつられて冷え込む湖の風から逃げる。中途半端な体勢の僕の手を取ったドラコがすっかり僕を引き上げて——そしてゾツとするくらいきれいに笑った。

「なにより——君には、第二課題の前に試練があるからな？」
「……………ゲエ」

ニンマリ顔の続きをなにがなんでも聞きたくなかった僕は、咄嗟にドラコへと膝蹴りをかましていた。

あの悪夢を思い出させるなんて——まったく憎たらしい！

囲まれた。前にハーマイオニー、右にハリー、左にドラコ、後ろにロンだ。爛々と目を光らせる親友たちと兄弟と相棒に僕は囲まれていた。——と、というか。捕らえられていた。

「ぜったいにいやだ」

「ぜったいに行くのよ」

仁王立ちのハーマイオニーが腕を組んでニッコリ笑う。

「ぜったいに着ない」

「ぜったいに着るはめになるね」

ロンが五人の中でもっとも高い身長からニンマリ見下ろしてくる。

「ぜったいに踊らない！」

「僕が強制なんだからマリアも強制だよ」

ハリーがうつろな目でじつとり睨んでくる。

そしてトドメは。

「マクゴナガル教授から直々に釘を刺されたんだものな？」

小憎たらしく小首をかしげて、ドラコは勝ち誇った微笑みを浮かべていた。

——ああ、この涼しい顔に糞爆弾を投げつけてやりたい！

事は変身学の授業後に起きた。前回とたがわぬ説明をマクゴナガル先生が坦々と聞かせるのを、僕はぼんやり聞いていた。だって僕には関係ない。——少なくとも、この時点では関係なかった。

そして——マクゴナガル先生はハリーと僕を捕らえた。

「マリア・ポッター。自分はまるで関係ないと顔に書いていますが、貴女も参加確定ですよ」

「……………へ？」

爆弾は落とされた。

「な、なぜですか？ 僕、今回は選手じゃないでしょう？」

「あなたが前回何の選手だったかは知りませんが、ハリー・ポッターが代表として踊るのに双子のあなたが注目されないとでも？」

動揺はピシヤリと叩き返された。 Hogワーツへの愛と誇りに生きるマクゴナガル先生の辞書に妥協の文字はない。 ようは Hogワーツの威厳にかけて他校関係者の前で隙を見せたくないのだ。

マクゴナガル先生は四角い眼鏡の向こうで瞳をキラリと光らせると、繰り返しした。

「マリア・ポッター。あなたの参加は決定されています」

開いた口がふさがらなかつた。

それから、ハリーと親友たち、そしてどこでどのようにつらえられたのかハーマイオニーに連行されてきたドラコを交えて、マリア対愉快な仲間たちの戦いはここに幕を切つて落とされたのである。

「ありえないだろ。ドレスだなんて……信じられない。僕がドレス？
この僕が？　なんのために制服をこのスタイルにしたと思つてるんだ」

「それだってわたしはいまだにいろーんなことを思つてるわ。ええ。でも、置いておきましょう。もっと大切な話があるもの」

「ドレスが？　たいせつだつて？」

「当然よ」

「マーリンの髭！」

ハーマイオニーの言いざまにワツと顔をおおう。制服を回避したのにこんなところで特大のトラップにかかるだなんて！

「どうしてもいやなの？　マリア」

「どうしてもいやだ」

「もしも僕が、踊るなら君と踊りたいと言つても？」

ピクリ。右肩が震えた。

「アステリアが君のドレスアップを、それは楽しみにしていたんだがな」

ピクリピクリ。左肩が上がった。

「ジニーだつてがっかりするだろうなあ。だーい好きな君のドレス姿、見たがるに決まつてる」

背中にビリリと電流が走った。正面のハーマイオニーから追い打ちがないことが、かえってじわじわと罪悪感を僕に与えた。なんてことだ。弱味を完全に握られている。僕が誰に弱いか、完璧に把握されている。逃げ場なんてはじめからないんじゃないか。

「……………わかった」

顔をあげた。心做しかほつとしたように見えるハーマイオニーを出来る限りうらめしげに見る。——これしかない。

「僕、男として参加する」

「……………ハア？」

四人の声がきれいに重なった。

「マリア？ あなた、ちょっと冷静じゃないわ。あなたはまちがいく女の子よ」

「君、前から性別がよくわからなかったけど、少なくとも外見はレディーだぜ」

「マリア、僕の兄弟は妹だよ」

なんだかまるで気でも触れたみたいに扱ってくる親友たちと弟を無視して、僕の左横を陣取る男に体ごと向き合う。

「——性転換薬」

ピタリと。やいのやいの騒いでいた三人が止まった。

「ドラコ、君——性転換薬はあるって言ったよね」

僕は覚えている。二年前のあの日——はじめて『女』に直面してパニックになった僕に君がくれた言葉を。……その後さらに強烈な出来事があったため掘り返さずにいたけれど——間違いなく、彼は言った。

一生ものではないが——性転換薬は あると。

「男として振る舞っていいならダンスだって踊ってやるよ」

「マリア……あなたねえ……」

「——わかった」

呆れ返るハーマイオニーをさえぎり、うなずいたのはハリーだった。

「それなら僕も薬を飲もう。そして僕は女の子、君は男の子として参加しよう」

「ハリー！」

「マリアにばかり妙なものは飲ませられないよ。僕だって一緒に経験する」

頼もしすぎる弟の姿に、ハーマイオニーやロンだけでなく、僕まで呆気に取られてしまった。

「ハリー……ほんとうに？」

「僕は君の兄さんだもの。妹のワガママにくらい付き合ってやるさ。——ただし」

ハリーはいくつになっても幼げな顔立ちを愛らしくニッコリさせると、第二の試練を突きつけてきた。

「マクゴナガル先生を説得できたならね」

——結果。

当たり前前に惨敗だった。にべもなかった。何だったら、くだらないことを考えてる暇があるならレポートの完成度を上げてらっしゃい！と、宿題を増やされかけた。これにはハーマイオニー以外の全員が堪らないと逃げ出した。

僕は次の作戦に出た。

「ドレスがない」

だって、僕はダンスパーティーなんてものにははなから出場する気がなかったのだから。予定にないもののために荷物を増やせるか。

意地でも用意しなかった。今学期の必要な物リストに記載されていたって、そこだけ都合よく見えないことにした。もしも一言でもシリウスにもらそうものなら仕立てから入ることは容易に想像できだし、ドレスローブが必要なのはハリーだけだと彼にはちよつとのウソを混ぜておいた。(ハリーのドレスローブは僕が隠し持っているのだ！)

そう、僕は自分を女性らしく着飾る品なんて持ってない——はず、だった。

「少し早いけど今年のクリスマスプレゼントとこういうじゃないか」

「……………は？」

ある日ドラコに渡されたのは濃厚な藍と深緑のドレスだった。夜空のような滑らかな濃藍から足元へかけて深緑のグラデーションがされた逸品で、たつぷりとしたシルクをふんだんに流しシンプルながらもフィッシュテールで足元を飾った実に上品なデザインだった。小柄なマリアのシルエットに寄り添う形だ。着ずともわかる。——

似合う。

さらにヒールを控えめにしたパンプスまで用意されて——つまりは完璧なドレスコード一式がそこにあった。

「それほど金がかかってない。君でも気後れしない程度の品だ。シリウスに今から金にものを言わせたドレスを貢がれるよりはよっぽどマシだと思うが？」

「……………」

僕は脱力した。とうとうドレスか。タンスの肥やしになるしかない君からの謎のクリスマスプレゼントシリーズはとうとうここまできてしまったのか。——ん？

「ネックレスに、イヤリングに、髪飾り。そしてドレス——これだけあればパーティーの装いとしては十分だと存じますが？ マイレディ？」

声が出なかった。目も口も開いて目の前の男を間抜けに見上げた。ドラコはすっかり見慣れた憎たらしいしてやったり顔で僕にトドメを刺した。

「ドレスはグレンジャーあたりに着付けてもらってこい。——髪は、僕がいつものようにまとめてやる。練習の甲斐があったよ」

——まさか。四年前のその日からすべて計算尽くだったなんて。なんて男だ。ドラコ・マルフォイ——このスリザリン！

次はパートナーだ。——と、いつても。今回は団子で歩く女子に投げ縄をかける必要はなかった。なんたって、僕には異性の兄弟がいるのだ！

すっかり、ハリーと踊れるものだど油断しきっていた僕は——まさ

かそのハリーにフラれるだなんて思いもしなかった。

「ええ!? ジニーと行く約束をした!」

「うん……ごめんね、マリア。ほら、四年生より下はこちらから誘わないとパーティーに参加できないだろう? ジニーが行きたがってたから……つい。ロンにも頼まれちゃって」

「そんな……いや、そう……そうだね、ジニーも喜ぶよ……」

がつくりと肩をおろす。まさか——まさか再びこの苦行を強いられることになるだなんて。

「マリアなら選り取りみどりだろ?」

「バカ言わないでよ……」

ハリーの後ろからちよつかいをかけてくるロンをじつとりと睨む。それにハリーも神妙にうなずいていた。

「その辺のてきとうな男なんかは僕のマリアは任せられないよ。そもそも——マリア? ドラコと僕ら……あとはセドリックかな。他に君が気を抜ける異性はある? フレッドとジョージはパートナーがもういるし……」

「なんでマルフォイはダメなんだ?」

「ドラコはもうパートナーがいるもの」

僕は答えた。もちろん相手はアステリアだ。ハリーだってそれは知っていた。——否、まだハリーしか知らなかった。

ピタリと立ち止まって目をまんまるにしたロンとハーマイオニーは絶叫した。

「ええええええ!」

「そんなに驚くことかな……アステリアのことはみんなだって知ってるだろうに」

ぶつくさ呟きながら、ひとり昼食後の散歩としやれ込む。ハーマイオニーは図書室。(きつとクラムと会っているのだ。) ハリーはロンにさらわれていった。

——だって、目立つのだ。赤と緑が共にいるのは。ドラコのことはずっかり慣れたグリフィンドール生たちだが、アステリアは性別からしてドラコとはわけがちがう。年下でおしとやかな美少女だ。活発な美少女のジニーともタイプが分かれる。お祭り気質なグリフィンドール生には見られないスリザリン美少女はなんだかんだ珍しいのである。

「どうしよう……」

ずいぶん前に同じようにして頭を抱えたことを思い出しながら、再び頭を抱える。あの時はロンも一緒に売れ残り仲間であってくれたけど……今回は僕ひとりでパートナーを見つけ出さなくてはならないのだ。

そりゃあ、一番勝手がいいのはドラコやハリーに決まってる。だけれど、アステリアからもジニーからも、僕が自己都合で奪っていいわけはない。セドリツクだって同様だ。……と、いうか。これ以上チヨウに目の敵にされるのはつらい。僕が恋した彼女とちがうとはいえ、曲がりなりにも初恋の人なのだ。

ならばロンはどうかという話だが——恋する乙女というのは、時に友情にすら亀裂を生む。僕はハーマイオニーとだけは敵対したくない。未来の魔法大臣に誰が勝てるものか！

ハア……深々としたため息が無情に廊下を踊った——とここで。

「やあ、マリア！　こんなところにいた」

僕の肩を叩いたのはレイブンクローの彼だった。前にもこんなことがあったな。

「ああ、久しぶり………あれ」

ふと、僕ははじめて彼を見た心地になった。

背がずいぶんと伸びていた。骨格がすっかりして、特に輪郭の無駄な肉がなくなっていた。くすんだ金髪は短く刈られ、彼の顔がよく見えた。この夏で身長共々青年への成長を大幅に進んだらしい彼は――
――見覚えがあつた。

「……………アンソニー？」

「うん？　なんだよ、改まって」

レイブンクローの彼――アンソニー・ゴールドスタインは無防備にきよとんとした。

そうだ。アンソニーだ。彼はアンソニー・ゴールドスタイン！　D Aに参加し、レイブンクローの監督生だって勤めた彼じゃないか。『僕』の記憶の彼はD Aで顔を合わせた頃からしか知らなかったから、まるで気付かなかつた。

「君………そういえば背が高かつたね………」

「マリアと比べれば大抵の男は高いと思うけど」

暗にチビだと揶揄されて、不満たつぷりに小突いた。成長期の栄養不足はバカにならないのだ。

「それで、なんだい？　アンソニー」

「ああ――スリザリンのあいつはいないな？　よし」

大袈裟に廊下を見回したアンソニーは、ドラコの影がないことを確認すると何気なく続けた。

「君のダンスパートナーに立候補させてもらえないかなって」

「ワオ、もしや君もあぶれちゃった口かい？」

「君も、て……まさかマリアが？ スリザリンのプリンスはどうしたんだ」

「ドラコはしつかり美少女を捕まえてるさ。そんなわけで立候補者は君一人。満場一致で勝ち抜けだ」

ニンマリ笑う。マリアはなんて運がいいのだろう。向こうから獲物が飛び込んできてくれるなんて！ これでテキトーな男子に投げ縄をする必要はなくなった。

「あつさり決めてくれるなあ」

「だって困ってたもん。君も困ってたんでしょ？ 相互救助だよ」

ケラケラと笑い合う。アンソニー・ゴールドスタインだとわかっただけで、これまでの警戒はすっかり消えていた。

「マリア」

「——つと、じゃ。そういうことだから。また近いうちに予定を合わせよう」

「うん。またね、アンソニー」

やっぱり現れる緑ローブに、青ローブは今日も飄々と逃げていった。『以前』ではDAくらいでしか交流がなかったけど——あんなにも取っつきやすい性格だったのか。セドリック同様、惜しいことをしたな。

「……今のはなんだ？」

それまでアンソニーが並んでいた隣にドラコが収まって、青ローブを睨む顔のままむっすりとして僕を見るので不思議に首をかしげた。

「なになんて？」

「名前、呼んでいただろう。距離も近かった。以前はあれほど……ただの知り合いに触れさせたりはしなかっただろう？ ——『身内』か」

ちよつとした暗号めいた問いかけに、ああ、と肩をすくめる。

「アンソニーだよ。アンソニー・ゴールドスタイン。君は知らないかもしれないけど、DAの初期メンバーのひとりさ。僕もついさっきまで気付いてなかったんだ。——ま、その通り『身内』だ」

ドラコはやつぱり苦い顔をしていた。僕だって、DAは楽しかったけど自動的にあのガマガエルバアを思い出すことになるので心底から気持ちいいとは言えない。苦虫の数なら隣の彼といい勝負だろう。

「それで、あいつと行くわけか」

「タイミングがよかったよ。売れ残り同士うまくやるさ」

「ああそうかい」

ドラコは吐き捨てた。それから、いや……と考え込むと、どこかを見ながらほくそ笑んだ。

「ドラコ？」

「マリア——めいっばい、僕が着飾ってやる」

「うん？ それは……まあ、お願いするけど？」

ドラコが僕の髪に触れる。不機嫌になったりご機嫌になったり——ご機嫌にしては不穩だけど——虫の居所がよくわからないドラコだった。

最後の問題である。ドレスもパートナーも整ってしまった僕は、マクゴナガル先生の放課後ダンスレッスンを前にしてようやくソレに気が付いた。——あ。僕、『リード』しかできない。

当然だ。ただでさえダンスが得意というわけでもないのに、踊ったこともない『フォロー』ができるはずもない。むしろリードの先行知識が邪魔をして頻繁に事故を起こしかねない。アンソニーの足の甲の安全が保証できない。

由々しき事態であった。ここまで外堀を埋められたならば、いっそ完璧に仕上げてしまいたいと思うのが人のさが。——そこで。

「ご指導よろしくお願いいたします。……ミスター？」

啞然とするドラコの前で、見えないドレスをつまんで礼をする僕がいた。

「ハリーと一緒にマクゴナガル女史にしごいてもらえばいいだろう」

「それだとなんでリードは踊れるんだって話になるじゃないか」

「今さらだろう？ 誰からも教わってないのに色んなことを知ってる秘密主義の『マリア』？」

「うるさい。……ハリーたちの前で女役をするのは恥ずかしいんだ。わかれよ」

「わざとだ」

僕の腰を抱きながら意地悪く笑うドラコへと悪態をつく。顔を上げろ、なんて顎を持たれて妙に照れてしまう。相手はドラコだったので。いやドラコだからこそか。これがロンやジョージだったならなんとも思わないのに。

ライバルだったあのマルフォイとホグワーツでダンスしてるだな

んて——まったく、どうかしてる。

「心配するな。完璧なレディに仕上げても。——見せ付けてやろうじゃないか」

「……誰に？」

「さあ」

ぐっと寄せられて、額がささやかに当たって。近すぎるアイスグレーがなんだか熱っぽくて。

機嫌が良かったり、悪かったり——やっぱりドラコは変だった。

逃れられぬダンスパーティーの日がやって来た。シリウスからは「ドレスがないことをなぜ言わなかった！ 今すぐ買いに行こう！」と吠えメールのごとく怒濤の手紙が送られてくるし、やつぱりロンとハーマイオニーはゴタゴタするし、ドビーの寝起きドッキリに心臓を驚かされるし、同室の女の子たちは昨夜から準備にバタバタしっぱなしだしで、朝からてんてこまいのクリスマスだった。

そうして周囲に巻き込まれているうちに時間は矢のごとくすぎて、現在。僕はハーマイオニーによって女子寮へと引っ張りこまれていた。三時間も前からいったい何の準備がいるというのか。女の子の仕度は甚だ謎だ。

「しゃんと立って。そう、きれいよ。——ほんとうに綺麗。あなた、緑がとっても似合うわ」

自分の仕度の前に済ませてしまいたいと僕の着付けへ入ったハーマイオニーは、例のドレスを鏡の前で合わせてうっとりした。

「さすがマルフォイね。わたし、あなたの髪と目は明るい色だから暖色のイメージが強かったんだけど——緑がこんなにも似合うのね」

ハーマイオニーが心から褒めてくれるので、素直にうなずいた。母から譲られた緑の瞳は『僕』の象徴で誇りだった。そして今は——大切な弟の瞳だ。

「……ンン？ 僕、ドラコからもらったって言ったっけ？」

「言われなくてもわかるくらいには、あなたたちに巻き込まれてるつもりです」

高飛車にハーマイオニーが顎を反らせる。目はニヤリとしている。
……こんなときまでからかわないでくれよ。

「さあ、イヤリングと——ほんとうに素敵なイヤリング！ ずっとしまつてただなんて勿体ないことを！——ネックレスはマルフォイに任せようかしら。髪もね」

顔をブラシでくすぐったり、なにやら瞼に描いたりしていたハーマイオニーがポンツと肩を叩いた。終了の合図にドレッサーから立ち上がれば、贅沢なドレープがゆらゆらと流れた。

姿見の前へと誘導されて。

「——綺麗だ」

「ほんとうに」

ほんの少しのメイクと散りばめられた緑。つつましやかながらに存分に着飾った母さんが鏡の中で微笑んでいた。瞳には父さんがいた。

「——わたしね」

鏡にハーマイオニーが並んだ。ハツとした。彼女はこんなにも大人っぽかっただろうか。

「クラムと行くの。マリアのことだから、どうせ知ってるわね」

「……うん。知ってた」

鏡のハーマイオニーと目を合わせる。少年も、少女も、いつの間にか大人みみたいな表情をするようになっていた。

「……なにも言わないのね」

「なにか言ってほしい?」

ハーマイオニーはやわらかく首を振った。

「わたし、ちゃんとわかってるわ。……なにも言わないのが、あなたの優しさ」

背中からそっと抱きしめられる。少女の体温はどこまでも優しかった。

さあ、マルフォイにさらにかわいくしてもらってらっしゃい。『僕』のハーマイオニーに近付いた顔で、姉のように慈愛の瞳で送り出してくれる。なんだか心がくすぐったかった。

談話室にはすでにジニーの姿があつた。ジニーはオレンジに近い赤毛に合わせた淡いブルーのドレスで、パニエでふんわりと膨らませたシルエツトが少女らしくてまるで妖精のようだった。

「ああ! ジニー、とってもかわいいよ」

僕自身もドレスだということを忘れて、駆け寄った勢いそのまま彼女を持ち上げクルクルと回す。いわゆるリフトだ。こちらのジニーは軽くて小柄だからできる技だ。大きなジニーは……これ以上はよしとおこう。

「マリア! あなたこそ……素敵だわ。キラキラしてる」

背中に愛の羽でも生えてるんじゃないかと錯覚する愛らしさでふわふわと舞ったジニーは、そしてニッコリ微笑んだ。なんてことだ。かわいさが留まるところを知らない。

「優勝だよ、ジニー。君が今夜で一番かわいい。そうに決まってる」
「……ほんとに? あたし、かわいいかしら? ほんとう?」

ジニーは髪を指に巻き付けたりして、ソワソワとドレスを握った。

「もちろんだよ！ どうして？」

「ハ……ハリーも……そう、思ってくれるかしら。……ああ、だめだわ。あたし、きんちようで頭がおかしくなっちゃいそうなの。だってハリーと踊るのよ？ あのハリーと！ あたしって実はとんでもなくブスだったりするんじゃないかしら。近くから見ると案外？ そんなの——ああ、どうしよう」

「ありえない！」

ジニーの不安を大声でさえぎって、力いっぱい抱きしめる。

「ぜったいにハリーだって気に入るよ。だって僕がこんなに夢中なんだもの！」

「こんなにも——愛しているもの。」

「僕はハリーの姉さんだよ？ ハリーのことならなんだってわかる。……ハリーは君のかわいさにびっくりするんだ」

冗談っぽく付け足せば、ジニーはようやく肩の力が抜けたようだった。

「そうよね、あたし、かわいいんだわ。マリアだって、ハーマイオニーだって、女の子はみんな！ ドレスを着た女の子は世界一かわいいわ」

「その通り。その意気だ」

パチンツとハイタッチを交わす。自信を取り戻したジニーは溢れる笑顔で胸を張った。

「あたし、ここでハリーを待つわ。驚かせるんだから！ マリアはスリザリンの彼と待ち合わせ？」

「えっと……うん、まあ、そんなところ」

誰と顔を合わせても——同室の女の子たちなんて筆頭だ——僕はドラコとパーティーへ行くのだと思い込んでいる友人たちに苦笑う。アステリアの耳にまで届いていなければいいんだけど。

グリフィンドール塔を下りれば、みなさんご待望の彼が正装で待っていた。この時代の流行を的確に取り入れグレーと黒でまとめたドラコは、悔しいけれどセンス抜群だった。僕だって男として散々悩まされてきたのだから、彼がただしく着飾っていることくらいは一目でわかる。女性のドレスを吟味するよりよっぽど理解できる。

ドラコは僕を見つけると、涼やかな目元を限界まで開いた。

「——綺麗だ、マリア」

「知ってる。母さんの顔だもの」

照れくさくて、わざとらしく何ともないように返した。

「さっさと移動しよう。僕、まだ見世物にはなりたくないよ」

「ああ。僕も今くらいは君を独り占めでいたい」

当たり前のように手を差し出されエスコートを受け入れる。地獄のダンスレッスンの甲斐あって、受け身に慣れきってしまった自分になんだか失望感を覚える。

「はじめてのスカートのご感想は？」

「こんな心許ないものでなにを守るんだ」

「身も蓋もないな」

シニカルに笑ったドラコは、そしてどこかの教室を開いた。中には簡易な机と椅子と鏡があった。

「ホグワーツってよくわからない部屋がたくさんあるよね。たいていが用途不明」

「ホグワーツだからな」

「アステリアのサロンも、ハリーの頃はあんな場所があるだなんて知らなかった」

「あれは……スリザリン特有だ。スリザリンの何年かの先輩に教えられたんだろう。各々が鼻肩にしてきた隠し部屋を気に入った後輩に譲る——ちよつとした伝統さ」

「ウヘエ……お貴族さまらしいや」

スリザリンにはスリザリンの秘密があること聞かされながら、ドラコの手には髪飾りとネックレスとイヤリングを渡して身を任せる。クルクルと魔法みたいに髪がまとまっていく。

「傷はどうしたんだ」

「マダム・ポンフリーが気にかけてくれてね。傷痕を目立たなくするストッキングをくれたんだ。背中だとか腕は魔法でちよいちよいつと。僕は気にしてないんだけど」

「ハリーが気にする」

「その通り」

緩やかになくせつ毛を利用して編み込まれたアレンジは、今までで一番複雑な形に見えた。トップにサテンリボンのなめらかな髪飾りが添えられる。イヤリングを取り付けるため触れられた耳がくすぐつたくて肩が震えた。最後にほんのり温かいネックレスを留めれば——誰が見ても完璧な淑女の完成だ。

「美しいよ、マリア」

「知ってるよ。君だって……まあ、見れなくもないと思うよ。
………ウン、かつこいいんじゃない」

バカみたいに見つめ合って、どちらともなく吹き出す。まるで
ティーンティーンの青臭いやり取りじゃないか。

「緑、似合うな。マリアの瞳に合わせることも考えたが——やはり、僕
にとって『君』は翡翠だ」

エメラルドの髪飾りに触れて、ドラコはまぶしそうに目を細めた。

「……ありがとう」

ハリー 僕の目の色を忘れないでいてくれて。——君だけが、『僕』の緑を
知っている。

再びドラコのエスコートで立ち上がる。廊下はすでにきらびやか
なドレスとドレスローブで溢れていた。大広間で別れて、アンソ
ニーの姿を探す。

「マリア！ こっちだ」

「アンソニー！」

存外早く彼は見つかった。レイブンクローらしい青柄のドレス
ローブが印象的だった。

「ウワア……綺麗だよマリア。君、もっと普段からオシヤレすべきな
んじゃないか？」

「すると思う？ 僕が？」

「その返しは卑怯だ。ノーしか与えてない」

軽やかに交わされる冗談にクスクス笑い合う。差し出されたアン

ソニーの腕を取れば、彼の目線は髪留めへと留まっていた。

「ポッター兄の目とおそろいかい？」

「そんなところ」

赤毛に埋もれることなく存在感を示してくれる緑が誇らしかった。頭の先から足の先までドラコの計算尽くめだったことは癩に障るが、リボンに関してはいい仕事をしてくれたと思う。

今日ばかりは寮も学校も関係なく席に着き、代表選手の入場を待つ。はじめにフラアのペア、次にクラムとハーマイオニー、セドリックにチョウ、そして最後にハリーとジニーが恥ずかしそうに列を進んだ。

最年少のジニーはまさしく妖精のごとき輝きだった。なんて愛らしいペアかとあたたかい目がハリーとジニーへと注がれた。……少し前まではハリーを卑怯ものだと思っていたというのに。調子のいい。

食事が始まりみながドレスを窮屈にしない程度に堪能すると、ダンブルドアの杖の一振りですも椅子も消え失せダンスホールへと様変わりした。代表選手たちが妖女シスターズの演奏に合わせて踊り出す。僕の目はすっかりハリーとジニーに奪われていて、ぎこちなくも楽しそうな二人に胸がいっぱいだった。

「マリア」

目の前に差し出された手のひらが僕の意識を引き戻す。いつの間にか周囲は色とりどりの回るドレスで溢れていた。

「お手をどうぞ、グリフィンドールの姫君。……足を踏んでしまっても許しておくれよ？」

形ばかりの誘いの礼を取って茶目つぶりにウィンクしてく

るアンソニーに、笑いながら大きく一歩を踏み出した。

——クタクタだ。大広間のはしっこへ避難した僕は、適当に掴んできたジューズを片手にうずくまっていた。

本来の予定ならばダンスはアンソニーとだけだった。こんなに踊る予定はなかったのだ。なんだったって——

「ハリーにジニーにグレンジャー、ヴィーラ娘にデイゴリー、赤毛弟とお調子双子——その上アステリアとは。ずいぶん元英雄どのはおモテになるな?」

「せめてアステリアは君が引き留めておけよ!」

ニタニタと見下ろしてくるアイスグレーに愛を込めて足を踏みつけておいた。

「はしたないぞ。しかたないだろう。アステリアが君と踊りたいと言ったんだ。はじめにジニーと踊ってリードもできると晒したのは君だぞ。僕がアステリアのお願いに逆らえるとでも?」

「そうかい、仲むつまじくてけっこうだね!」

中身はジューズのシャンパングラスを雑に煽る。ドラコからの視線がいたい。『僕』が泥酔して帰った時のジニーと同じ目はやめてくれよ。

「ちよつと僕、出てくるよ」

「靴擦れでもしたか?」

「おかげさまでヒールにはすっかり馴れましたとも。熱を冷ましてくる」

「それなら——いや、お前のパートナーはどうした」

「うちの寮の双子に遊ばれてるよ。ほら、あそこ。フレッドかジョー

ジかにずっと回されてる。いつ目をつけたんだか。——ああ、ついてこなくていいよ。その辺を歩くだけだから。君はアステリアの様子でも見てきたら？ 寮で休んでるんだらう？」

ヨイシヨと年寄りくさい掛け声で立ち上がり、ドラコに空のシャンパングラスを押し付ける。ハーマイオニーの淑女教育仕草編を思い出しながら出口へと向かう。「座るときは脚を閉じる！」「大股に歩かない！」

ダンスパーティーはすっかり無礼講上等・飛び入り自由・入り乱れ無法地帯となっていた。ジニーはまだまだ元気にハリーにくつついて回っているし、ロンは……ウーン、今は親友二人には触れないでおこう。余計な火種を撒きかねない。

ともかく、もう僕に注目している人間はいない。これ以上ダンスに付き合わされる前に避難してしまおう。

玄関ホールを抜けると、バラ園と散歩道に出た。そこらの茂みから甘ったるいクスクス笑いが聞こえて、ああ……とうなだれた。そうか、そういうお楽しみゾーンになってるのか。パートナーも連れず立ち尽くす僕はどれほど滑稽に映るだろう。……そもそも周りなんて見えてないか。相手に夢中だ。

だがしかし、またあの無法地帯に戻るというのも……と立ち往生したところで。

「ウウン？」

「……ポッターか」

散歩道の少し先に、これまた一人で佇む少年がいた。セオドール・ノットだ。パートナーを連れていないもの同士、居心地の悪さから自然と話しかけに行ってしまう。彼は僕を嫌っているというのに。

「ずいぶんと楽しんだ様子だな」

「君は……楽しくなさそうだね？」

「ダンスに興味はない」

「それで逃げ出したわけだ。タイミングの悪い」

「君もだろうか？」

いつの間にか並んで歩いていった。思いの外、会話もスムーズに交わ
せて、もしや僕が思っていたほど嫌われてるわけでもないのかと浮き
足立ってしまふ。

彼はなんとというか……『前回』だってそれほど関わってはなかった
けれど——ドラコいわく一匹狼だったそうだ——差別的な部分が強
いように見えた。穢れた血だったり、もっと根元的な女性差別だつた
り。

……案外、そうでもないのだろうか。僕だって思い込みは激しいほ
うだし——どんなに気に食わない相手だって、好きこのんで敵対され
たいわけではない。もしも、このまま仲良くなれるなら——

「——センスがいいな」

ふと、セオドールが僕を見つめて言った。

「ああ、うん。ドラコがそろえてくれて」

「マルフォイか」

途端に苦虫を噛み潰した顔をするので思わず笑ってしまった。ス
リザリン内がドラコ派とセオドール派で分かれているという噂はど
うやら本当らしい。アステリア情報だ。

「そう。やつの計画的犯行さ」

子供らしい反応に気が緩んで、友人みたいに彼を扱ってしまう。ほ
んの少しだけ——ほんとうに友人になればしないかと期待した。――
が。

「男が女に衣服を贈るとき——そこに込められた意図を知らないのか？」

立ち止まったセオドールの瞳は、なんだか不思議な輝きを放っていた。剣呑……でもない。嘲笑……それもちがう。いったいなんだ？

「君はそういったことに無頓着らしいが——自分で着飾った女を別の男の元へ送るとは。あいつも中々……」

次の笑みは間違いなく嘲笑であった。ドラコに向けてなのか僕に向けてなのかは定かでないが——やっぱり彼は僕らが好きではないようだ。

「ネックレスも、イヤリングも、君が直接肌にまとうものだ。そして極めつけにドレスとは——マリア、囲われてるぞ」

そつと睦言よろしく囁いたセオドールに、無意識に握っていた杖を彼の喉元へと突きつけていた。

「——」応、聞いておきたいんだけど、それはドラコへの侮辱？ それとも僕への助言？」

「……ふうん？ 警戒を知らないバカではないらしい」

「警戒つてのは悟らせないから警戒なんだよ。覚えておくといい」

「ご助言、痛み入るよ」

セオドールは両手を上げて離れた。いまだ杖先を向ける僕に不気味に笑うと、優雅な礼を残して引き返していく。取り残された僕は周囲のピンクな空気なんて忘れて呆けた。……なにがしたかったんだ、あいつ。

ダンスパーティーも締めへと入り、アンソニーにおやすみの挨拶を

済ませた僕はドラコに連れられ八階へと上がっていた。通りを三往復。開かれた扉の向こうはダンスホールだった。――僕がドラコとダンスレッスンに使っていた部屋だ。

「ドラコ？」

「――最後の一曲を、お相手願えますか？ レディ」

振り返ったドラコが大振りに手を差し出す。……似合うのだから腹立たしい。

「ドラコ……君とは散々踊ったじゃないか」

「練習をな」

「おかげさまで本番は大成功さ。余分なくらいね。これ以上は十分」

「そうか……では、これは無駄というわけだ」

ドラコが懐からなにかを取り出し軽く振った。――小瓶だ。魔法薬だ。

「――性転換薬」

僕の怪訝な表情を読んだドラコは、小瓶を顔の横まで持ち上げるとニンマリ笑った。

「なんで……？」

「君が言ったんだらう？――男役なら踊ってもかまわないと」

手を取られ、ホール内へと一歩二歩と導かれる。

「ここは願えば揃う部屋だ。男の服ならわざわざ僕があつらえなくても君に任せられると思ったんだが？ それとも、こちらも上から下までコーデイネイトして差し上げようか。ミスター？」

「ドラコ、まってよ。話が見えない。なにを……」

「——ハリーも、マリアも、みんなのものだ」

ピタリ。ホールの中心で、僕らは立ち止まった。——僕らだけがいた。

「僕だけの君が見たいと——そう言ったら？」

ドラコの目は愚直なほど真摯だった。

「君だけの……僕——？」

「男としての性を取り戻した君は、誰も見たことがない。『君』のグレンジャーも、ウィーズリーも、ハリーも——^{マリア}君も」

「——」

急に羞恥が込み上げてきた。女であることを突き付けられたあの日のような——胸の膨らみが、ハリーよりも低い身長が、変わりはしない声が、腹の中が——僕は『女』なのだとしようもなく思わされる。

女性の身で——どうして僕は男のドラコの前に立っているんだ。少女にするみたいに手を引かれて、ドレスなんて着ちゃって。

「マリア？」

「は、なして……うん、わかった。飲むよ。それでいいんだろう？ だから手を放せ」

「……ああ」

きょとんとしているドラコを振りほどく。——こっちは君のせいで変な気分させられてるっていうのに！

「その代わり、君だって飲みよ。——ソレ」

「はっ。」

「君だけの僕が見たいんだろう？　だったら——僕にも僕だけの君をくれなくちゃ」

ちよつとした意趣返しのもりだった。元々男だった僕が男に戻るのとはわけがちがう。ずっと男として生きてきたドラコに女になれと言っているのだ。困るだろうと——嫌がるだろうと、そう思ったのだ。なのに。

「……クツ」

「……ドラコ？」

「クツク……くくくつ、ふはっ」

ドラコは笑っていた。いつものニヒルで人を小バカにしたような、口端だけを上げる笑いかたじゃなくて。

腹を曲げて。形ばかり口を手で抑えて。そっくりそのまま十四歳の少年みたいに——楽しそうに笑っていた。

「なんて口説き文句だ。完敗だよ、ポッター」

「は……ハア!?　僕が君を？　バカじゃないの!?!」

「ああ、ああ、わかっているとも。だから笑いが止まらないんじゃないか。君ってまったく、罪深い」

「言つてろ！」

ドラコから小瓶をもぎ取り半分飲み干す。なんとなく服がある気がして顔を向ければ、壁に男性用の正装一式がかけられていた。

身体がムズムズして——痛みはなかった。ポリジューズ薬のような副作用がなくてほつとした——ドレスがきつくなっていくのがわかった。壁に向かいながら脱ぎ捨てて行けば、たどり着いた頃にはすっかり男の体格になっていた。いまだクツクツと抑え笑いが聞こえる後ろを無視して着込む。ご丁寧にハンガーの下に用意されてい

た靴まで履き替えれば――

「…………ふう」

なんだか呼吸がしやすくなった気がした。僕の身体が戻ってきた……そんな気分だ。

「ドラコ、着替えたよ……あ、そうだ、この髪ほどいてよ。あと顔も。ハーマイオニーになんだか知らないけど弄られたんだ。フィンニートで解けるようなものじゃないだろう?」

振り返れば、存分に笑い終わったらしいドラコがちよつと目に涙を浮かばせながらいつものニンマリ顔で立っていた。

「…………なんだよ」

「いや、まるで男装の麗人だなと」

「そりゃあ滑稽でしょうとも!」

やっぱりまだ口元がひくついているドラコに、ツンと顔を背けながら髪留めを外してもらおう。髪の長さは MARIA よりも少し短いくらいで、ハーマイオニーに塗られたり描かれたりした顔は思い浮かべた洗面台で洗ってすっきりさせた。いつの間にか添えられていたタオルで水気を拭き取れば――鏡に映ったのは赤い髪とハシバミ色の瞳を持った少年だった。

なんてことだ、ハリーの頃より顔がいいじゃないか。母さんの遺伝子ついたらずるいぞ!

ドラコが男装の麗人と揶揄した意味がわかった。整ってはいるが――男版 MARIA はかなりの女顔だった。

「ほら、僕の準備は終わったぞ。君もさっさとそれを飲んで僕と同じように恥をさらせばいい」

「恥なものか。君だけのレディだ。ありがたがるべきだろうか？」

「はいはい、顔がかわいくても中身がこれじゃあね」

「……………今のセリフは鏡に向かって言うべきだったぞ、ポッター」

ふざけ合いながらもドラコが小瓶の残りを飲み干すのを見守る。変化はすぐに現れた。身長が縮んで、服がだぶついていく。ふと、アニメーガスの変身に似ているのだと思いついた。

アニメーガスといえば、ピーター・ペティグリューは今——
ぼんやりしているうちにドラコの性転換は終わった。

「……………」

「…………ポッター？」

美少女だ。儂い金髪にけふる睫毛。小振りな唇はほんのりピンクで、グレーとブルーの狭間の瞳が神秘的だった。男のドラコは縛れる程度に髪を伸ばしていたので、それがさらに少女らしさに追い討ちをかけていた。小首なんてかき上げてみれば肩からサラサラと金糸がこぼれ落ちた。——非の打ち所のない美少女がそこにいた。

「おお…………声が…………まるで金糸雀だ！ どうだ、ポッター。僕は女になっても美しいだろう」

「ウワア…………中身がマルフォイだ…………ウワア…………」

「なんだその反応は」

幻想を打ち砕かれた気持ちでがっくりと肩をおろす。よく見ればマリアより胸だって大きいじゃないか……………なんでこんなところで悔しい思いをしなくちゃならないんだ。

「もう…………いいからさっさと着替えなよ。その辺に放っちゃったけど」

「…………あのドレスを着ろと？」

「君が選んだんだろ？ 緑だし、君に似合わないわけはないと思うけど」

ドラコ……なんだか女の子のドラコをドラコって呼ぶのは変な感じだな。ああ、それでさつきから彼……いや、彼女？ はハリーでもマリアでもなくポッターと呼んでくるのか。ならばここは無難にマルフォイだろうか。

マルフォイはなんとも微妙な顔をしてドレスをつまんでいた。それ見たことか。女装を強要された僕の気持ちをよく知るといい。

「……ほんとうにいいんだな？ 君が着ていた服を僕が着るんだぞ？

後で文句を言うなよ」

「いったいなんの文句があるっていうのさ」

ムスツとしたマルフォイは——悔しいことにそんな顔だっただけかいいのだ。顔だけだ！——意識のスタートラインがわからないだのなんだの呟きながらだぼだぼの正装を脱ごうとしていた。意識のスタートライン……？ ——って、いやそんなことより！

「ちよつと待て！ 君、僕の目の前で脱ぐ気か!？」

「なにか問題が？」

「問題に決まってる！ 今、君は女の……子……」

「……………」

「……………」

「……なるほど、こうすれば手っ取り早かったわけだ」

僕は彼……彼女……にそつと背を向けて天を仰いだ。

手っ取り早かったね……ドラコが散々、^{マリア}僕に厳しかった理由を、今、身をもって理解したわけだからね！

「ほら、着替えたぞ」

すっかり愛らしくなったマルフォイの声に、やるせなく思いながらも振り返れば。

「——とつても、似合うよ。マルフォイ。綺麗だ」

「当然だ。僕だからな」

不遜にふんぞり返っても美しい少女だった。化粧だとかがまるで
いらぬ、人形じみた美しさだ。緑のドレスはまるで彼女のために仕
立てられたようだった。だというのに——彼女はドレスをつまむと
「やはり僕より君に似合う」なんて微笑んでみせるのだ。

どこからともなく音楽が流れ出す。練習していた頃とまったく同
じ曲で、顔を見合わせて同時に笑ってしまう。

「お手をどうぞ？ ——マイレディ」

ふんわりと赤と金と緑が宙を舞った。

波乱のクリスマス休暇も明けた新学期。リータ・スキーターによって早々にハグリッドの秘密が暴かれた。ハグリッドの母親が巨人である事実の記事が発表されたのだ。ハグリッドはすっかり落ち込んで、引きこもるハグリッドに代わり魔法生物飼育学はグラブリー・プランク先生が教鞭を取っていた。

「マリア、知っていた?」

「そう言うハリーは知ってた顔だね?」

「……うん。マリア、ダンスパーティーの時に途中で抜けただろう? 気分でも悪くなったのかと思って、それで」

「ついてきた?」

「そう。僕とロンで。そのとき、聞いたんだ。マダム・マクシームとハグリッドが……その……話してるのを」

ハリーはどうかとといった風にごしたがるが、盗み聞きしてしまった負い目があるのだろう。ロンも新聞に隠れてもじもじしていた。

「ねえ、そのとき——近くにコガネムシがいなかった?」

「コガネムシ? あ、うん。いたかも。どうして?」

「実は僕もこのあいだ見かけたんだけど……この時期にまだ活動してるなんて、根性があるなって」

ほんとうに、根性があるよ。腐りきった根性がね。

「………マリア、虫を集めるとかはやめてくれよ。母さんがそういうの好きだったらしいけど」

「ボウトラックルを飼い始めたら約束はできないな」

ハーマイオニーがプーツと吹き出した。それを見てロンとハリーも新聞なんて放ってキラキラキャラと笑った。

仲良し三人組が堂々たる態度でホグズミードを満喫している間、僕はアンソニーと会っていた。ホグズミードからいち早く帰って来た彼が僕に土産を渡したいと声をかけてきたのがきっかけだ。廊下に立ちっぱなしもなんだからと適当な教室を見付けて腰を落ち着ける。時折、信じられないトラップが仕掛けられた部屋だともあるので、見つけた教室が普通の部屋か変な部屋かはその時の運だ。今とこの僕が変な部屋に当たった回数も十二回だけである。多いのか少ないのかは比較対象がないのでわからない。ジャパニーズニンジャヤシキよりも可笑しな所だ、ホグワーツ城は。

「これ、マリアに似合うと思って」

アンソニーが差し出したのはラッピングされたブローチだった。琥珀色の合成石が贅沢に使われている。……合成、だよな？

「ポッター兄の目もきれいだけどさ、やっぱりマリアの目が好きだよ。僕は」

屈託なく笑いかけられて照れてしまう。封から取り出したブローチは角度を変えるたびキラキラと別の輝きを見せて飽きなかった。

「……ダンスパーティー、僕たち、一緒に行っただろう？」

うん。隣に座る彼へとうなずく。

「楽しかった？ その、ア……僕といて？」

もちろん。再びうなずく。

「それなら……マリア？ 君、たぶん知らないよな。パーティーのパートナーってのが、一般的にどういう関係の人間を連れるものなのか」

「知ってるよ」

アンソニーはポカンとした。なんなんだ、みんなして僕を鈍感みたいに扱って。それは否定しないけど、妻のジニーを連れて面倒な席に何度も出席してきた『僕』が知らないわけないだろう。

「恋人、だろうか？ だけど、僕たちはそうじゃない」

「……そうだね。そう、僕らは友だちだ。でも——僕はそうなれたなら、いいと思ってる。……つまり、」

迷うように言葉の先をつぐんでしまったアンソニーに、おそろおそろの続きを引き取った。

「アンソニー……君——僕と恋人になりたいって言ってるの？」

「……君がうなずいてくれるなら」

アンソニーは飄々とした掴み所のない顔を捨てて、まっすぐに僕を見ていた。僕にはまぶしい眼差しだった。

「……ありがとう。でも、ごめん。僕、君をそんなふうには」

「スリザリンの彼がいるから？」

「ちがう。ドラコは関係ないよ。そうじゃなくて……僕、きっと誰もそんなふうに見られないんだ」

「……それは、君が女性を好きだから。とかだったりする？」

「それもちがう。そして待ってくれ、もしかしてそんな噂があるの？」

「……………」

「あるんだ……」

ぐったりしてしまった。アンソニーは噂に敏感だ。彼があると
言ったらあるのだ。

「あのね、アンソニー……」

「マリア」

再びアンソニーが決意を固めた目で僕を見据えた。

「——これからも、友だちでいてくれる？」

「……もちろん！ もちろんだよ。君が望んでくれるなら」

「そうか。よし。じゃあ、今はそれでいい。一先ずリードだ」

「へ？」

「知っているのと知らないでは、ちがうだろう？」

アンソニーは肺からすべての空気を吐き出すみたいに深呼吸をす
ると、ヘラリといつもの中身がなさそうな笑顔へと戻っていた。

「ところで聞いていいかい？」

「う、うん？」

「ダンスパーティーの衣装、どれが『彼』のプレゼントだったんだい？」

彼——指している対象を察せないほど、僕は周囲の目に疎くない。

「全部だよ。ゼーんぶ、あいつが用意したのさ。とんでもないだろう
？」

「……ほんとうに、とんでもないな」

アンソニーは僕を上から下まで眺めると、どことなくおそろしいも

のを見るように目をそらした。そして身軽に跳ぶようにして立ち上がると扉へ向かった。戸を開けると同時に振り向いて――

「フェアじゃないからね。教えておいてやるよ、マリア。――それ、牽制だ」

お先に、と手を振るアンソニーは、迫るドラコの影を察知して逃げる時と同じ――妙に楽しそうな子供っぽい笑顔だった。

「……………」

――牽制。牽制だって？

「……………ウーン？」

それまで椅子にしていた机にペツタリと背中をくつつける。アンソニーがいなくなった分、広くなったそこを存分に腕を広げて占領した。

牽制……なにをだ？ いや、この場合は誰に対して、か？ いやいや、そもそも前提からして――ドラコがそんなことを考えていたという確証がないじゃないか。

「うん。そうだ。あいつのことだもの。僕が女装から逃れられないのを楽しみたかっただけなんだ」

「――それはずいぶんと底意地の悪い趣味を持った輩もいたものだね」

バネ仕掛け人形のように飛び上がった。噂のその人がアンソニーが出たばかりの扉にもたれかかって立っていた。

「ドラコ――どうしてハンコッ？」

なんだって君は——いや、君たちは絶妙にタイミングをずらしておいかけっこするんだ！

「弟君が『あのぽつと出とマリアが二人きりにいる！』と騒いでいたものでな。僕がお迎えにあがった次第さ」

「ハリー……」

ホグズミードから帰ってすぐ、寮にいない僕に忍びの地図を迷うことなく取り出すハリーの姿が容易に想像できて、なんとも残念な気持ちになった。僕も息子に対して似たようなことしたけどさ……。

レイブンクローの彼をアンソニー・ゴールドスタインだと知らなかった僕は、クリスマスその日までハリーに紹介しなかった。なるほど、ハリーからすればアンソニーはぽつと出なんて不名誉な認識になるのか。……実は一年生の頃から気まぐれ同伴の交流があったとは、言わないほうがよさそうだ。

「それで？ 姫におかれましては、このような粗末な部屋で逢い引きを？」

「逢い引き……あながちまちがってもないか」
「は？」

冗談の延長だったドラコは、自分で投げたおいて固まった。

「告白でもされたか」

「それが——なんとその通り」

「………返事は」

「オーケー。——な、わけないだろ？ 肉体は同じでも僕らの中身はずれてる。化け物だ。周りをそんなふうに見るのは無理だ」

……少なくとも、僕は無理だ。

「僕だつてまさかアンソニーが………アア、なんだこれ、疲れる」

またまたアンソニーと同じ場所——つまりは僕の隣に座ったドラコに、断りもなく膝へと倒れ込む。ドラコは僕を真上から見下ろしてクツクツと笑った。

「そういう歳だ。——君はそう見られるんだ」

「それが、女の子ってこと？」

「さあ……男女関係なく、君自身の魅力がそうさせるのかもしれない」
「ウゲエ、心にもないことを」

「まさか！ 現に僕は男の君だつて——」

そこでドラコは、致命的な失敗でも犯したみたいに大急ぎで口を閉じた。つられて僕もドラコを見上げて呆けた。

「僕が……なに？ ドラコ」

「いや。口が滑った。忘れてくれ」

「え——ええ？ どういうこと!?!」

「うるさい。君なんかにあせらされるなんて、一生の不覚だ」

「流れるように貶められた……マルフォイめ」

「前から思っていたが君はマルフォイ家をなんだと思ってるんだ」

すっかり奇妙な雰囲気はふき飛んで、湖畔でじやれる日常のようにドラコの手を取って笑い合う。

ほんの少し、ほつとした。ドラコが——そうだ、「僕だけの君を見たい」と告げたあの夜みたいな顔をするから………なんだか落ち着かない気分させられたのだ。

「僕——『身内』からそう見られるだなんて、思いもしなかった。だつてハリーの頃はちがっただろう？ ……思った以上に疲れるや」

「……そうか」

ドラコの指がやわらかく前髪をかき上げ額をなぞった。——かつて、死の呪いが刻まれていた場所だ。

「僕は——『身内』か」

逆光を受けるドラコの表情は——僕に目をそらすことを許さなかった。

「当たり前じゃないか、相棒」

「……憎たらしいな」

「なんでだよ」

再びクスクス笑いが戻ってくる。ドラコは、僕の頬をつねったり唇を撫でたりと好き放題だった。人の顔をオモチャにして、まったく……嫌でもないから、困る。

——いつから、彼に嫌悪を感じなくなったんだっけ？

ここまでの距離を許したのは——家族と親友たちだけだったのに。

「ねえ、ドラコ。——僕にドレスをくれたのは、どうして？」

ドラコはお人形みたいにきれいに笑った。

「……ただの気まぐれだよ」

少女は上級生ばかりの周囲にも臆することなく背筋を伸ばした。だって彼がいるから。彼が手を引くのだから——情けない顔は見せられない。

そんな少女にエスコート役をこなす少年——ドラコ・マルフォイは、どうしようもなく愛しいものを見る目で微笑んだ。

「似合ってるよ、アステリア」

「当然です。わたくし、レディですもの」

淑女然とした、年齢に似合わぬ完璧な笑みが返される。強がりばかりの仮面ですら、ドラコにとっては幼げで——痛々しくて、愛おしかった。

彼女が笑っていてくれるだけでよかった。彼女と、そして彼女との子さえいればそれ以上は望まない——謙虚にすらなれると思っていた。

アステリア・グリーングラス。『前』で喪ってしまった最愛の人に出逢えさえすれば——こんなドロドロとしたものはなくなると思っていた。

「ドラコお兄様もとっても素敵です。今宵で一番の貴公子ですわ。けれど、きつとドラコお兄様が普段のローブ姿でいたって、わたくしには素敵にうつるのです」

「アステリアは素直だな」

「マリアはごうは言わないでしょう?」

クスクスと十二歳の顔が戻ってくる。皮肉なことに——彼女から淑女の仮面を剥がし少女を戻してやれるのは、ライバルだと彼女自身が宣言するマリア・ポッターばかりであった。ほんの少し、ジェラシーだ。……どっちに、と問われると、それは答えられないけれど。ドラコは輝かんばかりの緑と赤を視界の端で追って、完璧に整えられた姿にほくそ笑んだ。彼女に注目が集まれば集まるだけ——『気付く』者は多い。

「ひどいお方。こんなにも完璧なレディを目の前にして、他の女性に目移りだなんて」

「そうは言うが、君もマリアが気になっていただろう？」

「……………おともだちですもの」

微妙にずれている不器用な少女の友達観念にやはり笑ってしまう。どこまでも最愛の人から『少女』を引き出してくれる。ずるいのはどちらだ。

僕ら二人ともを——手中にしてしまうだなんて。

「マリア——綺麗ね」

アステリアは儂げに瞳を細めた。曲が変わり、何がどうしてそうなったのか、マリアは自分の弟と踊っていた。……見方を変えれば自分自身というわけだ。もつとも——彼はもう、『自分』とは思えていないだろうけど。

「全部、マリアのためだけ——マリアに似合うものだけでそろえられてる。……さすがですね？ ドラコお兄様」

アステリアはいたずらっぽく、手を取り合っている目の前の想い人を見上げた。

「なんて子供っぽい牽制かしら」

「どうせ子供さ」

「マリアの前だとことさら、でしよう？」

ふんわり。ドレスをなびかせてターンする。ドラコはどうあつても勝てないと思わされていた。『前』の彼女だって——淑々と、そしてしたたかな人だった。

「どうせマリアは気付いていないのでしよう」

流れるようなステップが、彼女が受けてきた『教育』を知らしめる。

「教えもしなかったのですね。可愛いそうなマリア。知らぬうちに囲われちゃって——まあ」

優雅に舞いながら、いたいけな少女は大人の顔で微笑んだ。

「——もう、お心はお決まりなのね。ドラコお兄様」

それは、最終通告だった。

「ああ」

「わたくし、応援しませんわ。くやしいですもの。……ドラコお兄様は、苦しめます」

「それでもいいんだ。僕が苦しむくらいはどうってことない。そして——彼女はつよい」

「……ひどいひと」

「すまない、アステリア」

身勝手な男に絡め取られた純粹で優しい女の子。慕い続けてくれたかわいい子。そしてきつと、この先も変わらず心を預けてくれるた

だ一人だけの光。

ドラコはまったく不誠実な自分に苦く笑うしかなかった。——それでも、手放せない。

「いいえ。知っていましたもの。今日だって……お心の確認なのでしよう？　利用されて差し上げます。ドラコお兄様を愛しておりますもの」

「僕も愛してるよ。アステリア」

「存じております」

「なら、結婚してくれる？」

「お断りです」

にべもなくフラれてやっぱり敵わないと思わされる。思えば、出会ったばかりの頃から彼女はつれなかった。かわいい人だ。

「わたくし、これからも邪魔をいたしますから。どうやらマリアは女の子のほうが興味があるご様子。……案外、ドラコお兄様の敵は目の前にいるのかもしれないわね？」

「冗談にならないからやめてくれ……」

ドラコの弱々しい懇願に、アステリアは声を上げて笑った。珍しい姿であった。マリアの話題となるとこうなのだから——マリア、やっぱり僕は君のほうに嫉妬してしまいそうだ。

「ドラコお兄様——後戻りはできませんよ」

手を取り合って、澄んだブラウンとグレーが互いをうつす。

「今さらだ。どんな手段を使っても、目的遂げる狡猾さ——それが僕たちだろうか？」

スリザリンの少女少年は、ここに宣戦布告した。

第二課題の日が近付いてきた。ハリーはすっかり食欲など失せてしまったようで、呼吸……一時間……呼吸……とゴーストも真つ青な顔色で咳いていた。我が弟ながら病気にしか見えなかった。

そして僕も——ハリーと同じような状況にあった。

「どうしよう……なにも思い付かない……どうしよう……」

相手は水中にいて、僕らは客席だ。息子たちはセドリックを膨らませただとかで見事妨害せしめたいが、それはあの子たちがタイムターナーでその時代からすぐに消えられるからできたことだ。この時代に生きる僕がそんなあからさまな妨害行為なんてしようものなら、その場で魔法省役人のお世話になってしまう。

——無理難題すぎる。

今日もドラコと二人、大イカがペロペロと触手を振る湖を眺める。

「……第二課題はパスしないか。ようはトロフィーに触れさせさえしなければいいんだろう。つまりハリーに勝ち越してもらえばいい」「ハリーに全部丸投げするって？ 人の命がかかってるんだぞ」

「なら、君、誰にもバレずに水中のデイゴリーへと呪文を飛ばせるか？

透明マントも使わずに」

「……………」

実りのない時間ばかりが過ぎていく。結局、どれだけ月日を費やし策をひねり出そうともどん詰まりには変わらないのだ。まだまだ雪の名残が見られる地面へと背中から倒れ込む。

「……探すよ、方法を。ギリギリまで。このままセドリックの不幸を見届けるだなんて、そんなのはいやだ。それって見殺しだ。シリウス

を助けられたんだ、セドリツクだって——きつと——」

ふと、ドラコの手のひらによって目をふさがれた。冬の空気に冷たくなった彼の手にたちまち僕の体温がつたってじわりとした熱を生んだ。

「ドラコ？」

「……………」

「おーい、この手はなにさ」

「……………」

「え？ 聞こえなかった、もう一度言つて？」

「……………大したことじゃない」

あたたかい闇が離れば、次は冬の太陽に目を焼かれる。チカチカと目の前を光が跳ねる。

「ドラコ？」

「風邪を引くぞ。今日は切り上げてまた明日考えよう」

「……………今日も、だろ」

ドラコの手を取って立ち上がる。気持ちばかりが焦ってそれはため息の形に変わる。きつと明日も駄目だ。

——第二課題の日が近付いていた。

「——英雄の目をするなよ、マリア」

前日である。とうとう、ハリーの第二課題日は明日に迫っていた。どうやらハリーはいまだ水中で一時間呼吸をたもつ方法を見つけられずにいるようで、ハーマイオニーやロンの力も借りて図書室に通い詰めていた。そして僕はというと。

「明日だ……明日……僕ってこれだから……後回しにばかりして……だからハーマイオニーにいつまでも叱られるんだ……」

「……大丈夫？ マリア」

談話室で膝を抱えてうめいていた。心優しい少年、ネビルが僕の周りでオロオロしている。とぼけた仔犬みたいでちよつと和んだ。

「ハリーの課題のことで悩んでるの？」

「……うん、まあ、そんなかんじ……」

「そつか……。どんな内容なんだろうね、マリアをここまで悩ませるなんて。とんでもなく難題なんだ」

「うわこころがいたい」

「え、マリア!？」

ネビルの純粋な心配に、疲労感の上に罪悪感までずっしりと重なった。ダンスパーティーなんか悩む時間があったなら、もっとこちらに真剣に取り組むべきだったんだ。ハリーもそれで今になってツケを払わされている。ほんとうに成長しないな——『僕』は。

せめて目先のことだけでも片付けてしまおうとネビルを見上げる。

「ねえネビル、水中で息をする方法、知ってる？」

「僕が知るわけないよ。そんな呪文があるの？」

「呪文じゃなくなっちゃっていいんだ。たとえば魔法薬とか——植物とか」

植物と聞いたネビルは丸顔をキョトリとさせると、次にはパツと目を開いて自室へ駆けていった。さすがネビル、未来の薬草学教授だ。

「僕、ぴったりのものを知ってるよ！　ここ、これを見て——あ、この本はムーディ先生が貸してくださったんだけどね」

「うん、うん、よかったね、ネビル」

瞳をキラキラさせてエラ昆布を指すネビルに、ニコニコになってうなづく。ネビルは僕が見てきた子供の中でもひとときわ素直だ。彼と話しているとどうも父親だとかお爺さんの気持ちになってしまう。ルーナも別の意味では素直で純粹だけど。

「ネビル、今の話をハリーにもしてやってくれないかい？」

「エラ昆布のこと？」

「そう。もしかしたら思わぬ助けになるかも」

再び、ネビルはエラ昆布のページを開いたまま幼げに目をまたたかせた。そしてニッコリ笑ってうなずいてくれた。

ネビルを三人組が待ち構える図書室へと送り出せば、次は厨房だ。

——入れ違いでなければいいんだけど。

「ドビー——」

目的の、愉快的ソックスにティーポット帽子を被った小さな友達
は、厨房の隅にて飲んだくれる同僚の面倒を見ていた。

「マリア・ポッター！　マリア・ポッターがドビーに会いにきてくださった！　ドビーめは嬉しくてマリア・ポッターにお茶をお出しします！」

「ああ、お嬢様……ああッ」

僕や、ハリーにロン、ハーマイオニーもだ。あの日の夜に関わった人間を見ると大切なお坊っちゃまのことを思い出すのだろう。飲んだくれのウインキーは鼻唄でも歌い出しそうなドビーとは反対に、ブワアツとテニスボール大の目に涙を溜めていた。

「マリア・ポッター、ウインキーはずうつとこうなのです。ドビーはそれではいけませんとウインキーに言いますがウインキーはお酒を飲むのです」

「ああ、うん……ウインキー、また、ええと……話せる時に話そう。あの——君がよければ、だけど」

ウインキーは顔の半分も隠れるかわからない両手で目をおおった。心は痛むが、ウインキーのことは後回しだ。

「ドビー、いいかな？ ——ちよつと頼まれてくれるかい？」

ハリーへのエラ昆布調達の下準備は終わった。さて、次は——

「……セドリック」

「なんだい？ マリア」

意図せずこぼれた呟きに、これまた思わぬ返事が返ってきて肩が跳ねた。振り返れば、セドリックが爽やかに首をかしげていた。

「僕のことではなかった？」

「あ、ううん。君のこと……」

「よかった。僕がなに？ マリア」

セドリックは相変わらず人好きのするハンサムで優しい顔立ちを

微笑かに笑ませた。

「えっと——第二課題のことで、すこし」

「ああ。……もしかしてハリーはまだ悩んでる？」

「うん。でも、それは大丈夫。ハリーなら大丈夫だよ。それより——」

君のほうがよくぼど危ないんだ——セドリック。

「セドリックは……」

彼の目的地は寮ではなかったようで、厨房と寮の前を通り過ぎ自然と廊下を共にする形になった。セドリックは穏やかに微笑んでいるが、僕はそんな彼を罪悪感ゆえに横目で見るしかできなかった。

「——どうして立候補したの？」

グレーの瞳が子供みたいに丸まった。

「対抗試合のこと？」

「そう」

「それはもちろん——自信があったから。自分の力を試したかった。……ま、ドラゴンなんてあてがわれた時はちよつと後悔しかけたけどね」

あと一步で大人の青年が子供っぽく肩をすくめる。三年前に再び出会えたその日から彼は変わらず優しい人だった。

「それから——父が、喜ぶと思ったんだ。あの人は僕を誇りに思ってくれてる」

セドリックはガラス玉にきれいなものだけを詰め込んだ瞳で前を

真っ直ぐに見た。僕は複雑だった。セドリックを応援したい。セドリックのストイックな志を尊いと思う。けれど——ほんとうにこれでいいのか。

「優勝したい？ お父さんのためじゃなくて——君は、危険を背負ってまで優勝したいの？」

それは、命をかけられるほど——？

「当然だよ。立候補した限り、優勝を求めるのは礼儀だと思う。……無理矢理だったハリーは別としてね」

一歩だけ僕より前進したセドリックは己の意志をもって宣言した。

「僕は優勝するよ」

ひとりの人間として——未来を望む顔だった。

「——そうか。わかった。君はやっぱりセドリック・デイゴリーだ」

「もちろん、僕はセドリック・デイゴリーだとも」

心の中の一番大きなささくれが消えた気がして、僕はセドリックとニッコリ笑い合った。

——なんだ。初めから、僕がやるべきことは一つだったんだ。

セドリックと別れて談話室へと向かう途中、頬を紅潮させたネビルに会った。この様子ならば、無事にエラ昆布の情報を渡すおつかいは完遂されたと見ていいだろう。仔犬を褒める気持ちでふわふわと頭を撫でる。

「わっ——マリア？ ああ、いいところに！ マクゴナガル先生が君を探してたんだ」

「マクゴナガル先生が？」

「うん。さつき談話室にいらしてね、すれ違いにならないよう準備室で待ってるって」

ふーん？ 首をかしげる。なんの用だろう。宿題はすべて提出してるはずだし——守護霊の呪文のことか？ あれはてつきり不問になっただとばかり。それとも通信紙か？ はたまたタイムターナーの不正使用がバレた？

心当たりが多すぎてキリキリと胃が痛む。

「マリア？」

「……行ってくるよ」

なんだって、ハリーが大事なこの時に——そう、恨めしく思うと同時に思い付いた。

——あ。まさか。

心地よく揺らめいていた。肩までの髪がふわふわと頬をくすぐつて、それすらも誰かの指のようだった。揺りかごの中であなたの愛を受け取る赤子のような——まるで母の腹の中に還ったような——

冷たい。

急速に息を奪われる。肺から吸い上げられていく。口や鼻から飛び出したそれは泡になり、顔に当たって弾ける。空気の代わりにドゥツと冷たい水が喉まで襲い来る。

誰かに抱かれていた。腰を力任せに。片腕だった。目を開く。水の中だ。目玉をごろごろと水流に撫でられる。何度か水圧に逆らつてまばたきをすれば、すぐ前に少しだけ魚っぽくなった『僕』が見えた。

ハリー。声は泡になる。ぼうつとした頭の中でかつて愛娘リリーに読み聞かせた人魚姫の結末を思い出した。

「——ツプハッ！ ゲホ、ゴホ、ハア……エホツ……ハリイ」

「マリアっ！」

水面から顔を出せば、ようやっと音が届いた。熱狂的な拍手と歓声の嵐だ。それからハーマイオニーが僕らの名を叫ぶ声、ロンの声、フラーの妹を求める声、マダム・ポンフリーの怒声——情報が飽和して、空を見上げながらぼんやりしてしまう。

「マリア、この子をお願い」

「……ああ、一緒に助けてあげたんだ」

シルバー・ブロンドを水面に描いていた美少女は呆然とハリーに抱かれていた。フラーの人質——妹のガブリエルだ。ガブリエルを真ん中に、湖畔へと三人で泳ぐ。たどり着いた途端、待ち構えていたマダム・ポンフリーに三人もろとも毛布で包まれた。

「なんて嫌な催しなんでしょう！　こんなにも冷えきって……人質たちは水中でも問題がないよう配慮されると校長はおっしゃっていたのに！　話がちがうわ」

苛烈な白衣の天使はプンプン怒りながら、もつともか弱いガブリエルの処置を始めていた。後回しの僕らは一枚の毛布に包まれて、中で抱き合っていた。よくがんばったね。セーターにスラックスのまま飛び込んだらしいぐっしよりした背中を叩いて労う。前日に人質要員として呼び出された僕もまったく同じ格好なわけだが。

「僕、最下位だよ。一番早くたどり着いたのに、みんな助けたくて欲張ったんだ。笑っちゃうだろ？」

「うん。笑っちゃう。——僕の弟はこんなに立派なんだって！」

わしやわしやとシリウスにするみたいに——じゃなくて、犬にしてみたいにハリーのくしゃやくしゃ頭を撫でた。今は水でしっとりしているが、乾けばとんでもないことになりそうだ。自然乾燥は危険だと僕はハーマイオニーから叩き込まれているのだ。

じゃれあう僕らにつられたハーマイオニーも飛び込んできて——捨て置かれたクラムがちよっぴりかわいそうだった——ロンと四人でいつものようにはしやぎ合う。

「さあ次はあなたです！」

マダム・ポンフリーの近くにいたハリーがむんずと腕を取られて奪われた。すると、ドナドナされゆくハリーに代わってフラーとその腕

の中にいるガブリエルがやってきた。

「アリー、アリー・ポッター……あなた、ガブリエルの恩人でーす。ガブリエール、あなたのいとじちでなかった」

「メルシイ、アリー・ポッター」

光そのもののような美少女二人に微笑まれて、マダムにもみくちやにされながらも照れるハリーが見えた。ハーマイオニーと顔を合わせてニヤリとしてしまう。

「マリー」

——ん？

ハリーを通りすぎ僕の元にまでやってきたデラクール姉妹は、ハーマイオニーにぬいぐるみのように抱えられている僕の手を取って中に熱を落とした。

「マリー、ガブリエールに寒くない、くれました。ありがとう」

「メルシイ・ボクウ」

ガブリエルが愛らしい札と共に渡してきたのはネックレスだった。——ああ、そうだ。昨日、冬の湖がいかに冷たいかを知っている僕は、幼い女の子が沈められてしまう事実が不憫でドラコからもらった一番目のクリスマスプレゼントを貸し出していたのだった。

このネックレスは宝石の中に特別な炎を閉じ込めたマジックアイテムで、使用者の体温に合わせて適当な温度へと変化する機能を持っている。寒ければ温かくなり、火照るときは冷たい炎がゆらめく。ほんの気休めであったが少しくらいは役に立てたらしい。

「どういたしました。ええと、フランス語だと言うのかな……」

「ジュヴ・ゾンプリ、かしら」

「さすがハーマイオニー」

何度かフランスにも旅行している親友が頼りになりすぎる。つたないながらもハーマイオニーの言葉をガブリエルへと繰り返せば、ガブリエルは天使もかくやといった笑顔で頬にキスをくれた。フラワーもだ。そして「サリー！ ムツシユウ」と残して元気にマダム・マクシームの元へと駆けていった。

「……あのさ、ハーマイオニー。ムツシユウって……」

「ミスターよ」

「……………」

「あなた、ヴィーラにどう見られてるの？」

「わからない……」

どこで男だと判断されてるんだ……。

マダム・ポンフリーの世話になってるあいだにハリーの点数結果が発表された。『前回』同様、道徳的な行為が認められセドリックと並び同点一位へのし上がっていた。ワイワイとハリーが赤い集団に囲まれる。ハリーもまんざらでもないようだった。

今だけは——薄暗い未来を忘れて素直に弟の奮闘を讃えよう。

「マリア」

マダムのおかげでほとんど乾いた体にローブがかけられる。緑色のローブだ。心做しか自然乾燥によってきしんだ気のする髪に指を差し入れられる。

「——ドラコ」

「ああ」

「僕、妨害はやめる」

「そうか」

「正々堂々——セドリツクを打ち負かそう」

それが、僕にできる最善だ。……きつと。

最高級の生地を使っているのだろうなめらかな緑が、冷たい風と共に肩を撫でていった。

ダアアアーンツ——

響いた打音と引き換えに水を打ったような静寂が大広間中を嘗めた。発生源はグリフィンホール席。かのハリー・ポッターとハーマイオニー・グレンジャーのあいだ——マリア・ポッターが机へ叩き付けた拳からであった。

週刊魔女に記載されたりタータ・スキーターの捏造記事はあまりに堪えがたく、おぞましく醜悪だった。

ひとつにハーマイオニーの中傷記事。ハリーとクラムを手のひらの上で転がす計算高い悪女——モリー母さんいわく 緋色のおべべ——として書かれたものだ。そしてもうひとつが。

「マ、マリア……？ だれもこんなこと——こんなくだらない記事を本気になんかしたりしないわ。————ハリーとあなたが関係にあるだなんて」

ハリーと踊ったダンスパーティーや、ロンと不仲にあつた際に僕がハリーを慰めていたそれが、あたかも 慰めていたかのように書かれていたのだ。

ドラコのいつかの『邪推』の意味を今はつきりと理解した。

「ぜったいにゆるさない」

喉からうなるような声が落ちる。両脇の子供たちの肩が跳ねた。

「マリア、僕、気にしないよ——」

「そうよ、マリア。あなたたちは確かに仲が良いけど——」

「——僕と、ハリーの——血が繋がっていない可能性について——だって?」

え、そこ? ハリーとハーマイオニーは思わず顔を見合わせた。

僕とハリーがどうこうなどと勝手に妄想するのは百歩譲ってよしとしよう。腐った玉子味ビーンズにあたるよりもひどい吐き気だが、僕らのスキンシップが男女を越えているのも事実だ。人の頭の中までは操作しようもない。洗脳や服従の呪文でもかけない限り。

だが——

『ハリー・ポッターとマリア・ポッターは双子である。男女の双子だ。片や生き残った男の子、そしてもう一人は無名の女の子。はたして、ここまで 違う彼等はほんとうに双子なのだろうか——? 性別、背負った運命、そして容姿。まるで重ならない二人の少年少女は、ゆえに孤独を舐め合ってきたのではないだろうか。ただ二人だけの中に愛を見つけて——……』

—— だあ!?

僕とハリーが兄弟であることを否定する——僕から兄弟というただひとつの絆を奪い上げんとするこんなデタラメを——誰が許せるものか。

「僕とハリーは間違いなくジエームズ父さんとリリー母さんの子だ。僕らは間違いなく兄弟だ。世界中の誰にも『家族』を否定させはしない。——ハーマイオニー!」

「ハ、ハイ!」

「このゲス女、捕まえるぞ」

「は、」

「——協力、してくれるよね？」

「ハイ！ もちろんです！」

反射的に立ち上がったハーマイオニーを従えて朝食の席を立つ。

「マ、マリア……？」

「大丈夫だよ、ハリー。ぜんぶ姉さんに任せて。——ギツタギタにしてやる」

なにも大丈夫じゃない!!

大広間でマリアの噴火を恐々見届けた生徒たちの心の叫びは——
当然、マリアに届くことはなかった。

ハーマイオニーにリータ・スキーターの正体をうつかりもらした僕は(わぎとなんかじゃあないとも。あくまでも うっかりだ。)ハーマイオニーとわかれてさっそく昆虫採集にくり出そうとしたところで

「……やあ」

今、一番会いたくない親友に出くわした。

「……やあ、ロン」

ぎこちなく挨拶を交わす。あの日から、ハリーとハーマイオニーがいないところで僕たちは上手く言葉を噛み合わせることができなくなっていた。

だって、どうしたらいいのかわからないんだ。謝ってもらうのは変だ。僕が謝るのも変だ。互いにわかりやすい解決法がなかった。……ハリーとはすっかり元通りなのに。

ハリーとハーマイオニーのどちらかがいれば今まで通りバカができた。空気に酔ってしまえば周りにはやし立てられながら踊ったりもした。けれど——二人つきりになればこれだ。だから、避けていたのに。

「……記事を、読んで、」

その先は聞きたくない。僕は心の悲鳴にしたがってロンの言葉をさえぎった。

「ああ、相変わらずひどいよね。スキーターババアの記事はさ。気持

ち悪かっただろろう?」

「そんなこと、」

「いいよ、隠さなくても。今さらじゃないか。僕はハリーじゃないんだから、好きに言えばいい」

「ツなんだよ、その言い方!」

「僕、変なこと言った? 別にバラしやしないよ。——君が雑誌の上にゲロを吐いたとしてもね」

ロンの手が伸びて僕のローブを掴む。殴られるだろうか。それもいいな。——それで、彼の気が晴れてまた前みたいに戻れるのなら……痛くない。

「僕はツ——謝り、たくて」

「は?」

ローブを掴まれたまま、頭一つほど高い場所にあるソバカスを見つめた。

「……あんなこと、言うつもりじゃなかったんだ」

「そうだろうね。咄嗟に出た本心ってやつだ」

「ちがう!」

「なにがちがうの。君——本気で嫌だって目をしてた」

「——っ」

目の前で唇が噛みしめられる。うなだれたって見上げる位置にあるブルーアイは僕でなく足先をにらんでいた。

「……うらやましかったんだ」

ロンはポツリとこぼした。

「なにが？」

「君にハリーがいて——ハリーにマリアがいることが」

ほとんど締め上げるに近かったローブが解放される。ほんの少しよろけた僕は、それを悟られるのは癪で、なに食わぬ顔で立ち直した。

「どういうこと？」

「……マリアは、ぜつたいにハリーを信じるじゃないか」

「もちろん」

「ぜつたいに味方で」

「そうだね」

「ぜつたいに裏切らない」

「そう……かな」

「ハリーが一番で」

「……………」

「ハリーのために生きてる」

すべてにうなずくのは嘘な気がして、黙って立ち尽くした。

そうだろうか。僕はほんとうに、ハリーのためにあれているだろうか。この先、可哀想なあの子を犠牲にすることを知っているから——せめて味方であろう。そんな自己満足とエゴイズムだけなんじゃないだろうか。

「ハリーも一緒だ」

ロンは僕からの返答を必要とせず告解のように続けた。

「たぶん、僕がハリーだったなら——つまりは、入れてもないのにゴブレットから僕の名前が吐き出されたなら、てことなただけ——もちろん、それはありえないことだけど——ジョージやフレッドは僕を信じなかったよ。ジニーもだ。パーシーなんて、ウソをつくな！ どん

なズルをしたんだ！ てパパとママを味方につけてホグワーツまで乗り込んできただろうね。断言できるよ」

「……………」

そんなことない！ と否定してやることはできなかつた。ウィーズリーの兄弟たちは案外ストイックなのだ。僕はそれを知っている。

「ハーマイオニーだって信じないよ。ひよつとするとダンブルドアも。でも、ハリーにはたとえ世界中が嘘つき呼ばわりしたってマリアがいるんだ。ぜったいに信じてくれる人がいるんだ。……うらやましいよ」

そしてロンは、ひよろ長い背中を持っているくせに縮こまるように丸めた。魔法薬学の授業を受けるネビルよりも小さな姿に見えた。

「あのさ、ロン」

「……………うん」

「なんで僕らを入れてくれないんだい？」

「……………え？」

ソバカスの上で揺れていた赤いまつ毛がゆるりと上がった。

「ロンの兄貴たちは信じないかもね。モリー母さんも、アーサーおじさんもたぶん叱るね。ジニーはあれで思い込みのまま過激になるところがあるし、ハーマイオニーもまずはお説教からだ。それで、ハリーと僕は？ 信じないと思うの？」

「……………」

「信じるよ。ロンがやってないって言うなら——『僕』は信じる」

だって君——嘘をつくのがこんなにも下手くそなんだもの。……大人になってからも、ずっとね。

「……やっぱり僕、マリアのこと好きじゃない」
「えっ」

てつきり和解の流れだと安心しきっていた僕は、投げられた二球目に動揺した。

「わからない？ マリアって——いつも僕らを見下してる」

「そんなわけ！」

「ないって言えるの？ ——なら、なんで二年前、一緒に連れていってくれなかったんだよ」

二年前——？ 明らかに思い至ってない僕にロンは爆発した。

「バジリスクのところだよ！ 僕、君たちと一緒に戦うつもりだったのに！」

ああ——ああ、そうだ。今回、僕たちは——『僕』だけで、脅威と戦った。

でも、それは——それは——君が大切だから——危険なことになんて、ほんとうならひとつだつて巻き込みたくはないから——

「僕、ロンを危険な目にあわせたくなくて」

「そういうのが見下してるっていうんだ！ 同じ歳のくせに！ オトナ気取りで！ 優しいことばかり言ってる！ ——勝手に守るなよ！」

ロン自身、自分がめっちゃくちゃなことを言っているとわかっているのだろう。

ロンは焦っていた。——それでも、止まれないのがロンだ。

「ハリーには僕が必要だって——わかった、それはわかったよ。ハリーは僕を必要としてくれる。——それじゃあ、君は？」

ギラギラとした青い瞳がこんなにも傷付いていたことに、今さらになつて気づいた。——いつも僕は遅すぎる。

「マリアには——僕なんかいないんだ」

迷子の子供のようだった。

「ハリーがいればそれでいいんだ。ハーマイオニーがいたらもつと良しだ。それで、あとはマルフォイだ。それだけいたら十分なんだろう？
僕なんかいない——」

「——ステューピファイ！」

「ツプロテゴ！」

反射的にロンを突き飛ばし呪文を弾いた。廊下の向こうに、彼は立っていた。

「——どういふつもり、ドラコ。今の——本気だった」

「ああ、本気でウィーズリーに当てようとしたさ」

うつそり笑んでいまだロンへと杖先を向けるドラコに、ロンの前へと立ちはだかりイトスギの杖とサンザシの杖とを突きつけ合う。

「僕に杖を向けるのかい？」

「当たり前だ。ロンに危害を加えようってなら——誰だって、君だって、容赦はしない」

ピリツと空気が痛みをもつて震えた気がした。本気だった。僕もドラコも——本気で互いを敵と相対していた。ドラコが杖を振った。

「——ツインペ、」

「——と、まあ。この通りこいつは君たちのためなら相棒にだって敵をいとわないわけだ」

「ディメ……………ん？」

杖を振って——ドラコはシニカルに笑いながら腕を下ろしていた。

「ド、ドラコ……………？」

「教えてやろう、駄々っ子でわからずやのウィーズリー？——これは、君が大好きだぞ」

なにを言い出すのか。僕もロンも唾然としてしまって、全身金縛りの術でもかけられたみたいに動けない。

「ド、ドラコ、ちょっと」

「君がたとえば崖に落ちたなら、こいつも飛び込むぞ。火の中なら炎凍結術も忘れて巻き込まれに行くだろうし——闇の帝王のお膝元にすら単独で乗り込むだろう」

コツリ。革靴が音を立てて彼の前進を伝える。

「いいか、こいつは——僕よりも、ダンブルドアよりも、世界よりも——君たちが大切に愛してるんだ」

まったくおかしいな空気だった。なにを——なにを言ってくれるん

だこいつは。警戒すればいいのやら憤怒すればいいのやら羞恥に悶えればいいのやら——頭の中がしっちゃかめっちゃかでなんだか目まで回っている気がした。

「だいたい、ドレスを着たくないなんてワガママ放題言っただけで周りにさっせんさん迷惑をかけたこいつが大人なものか。ハリーのほうがまだしっかりしてる」

反論すらできない僕の腕を取って、ドラコはなんとも雑に僕をロンの方へと投げやった。ロンに受け止められて、僕は奇妙きわまりない表情で見つめ合った。

「……その、マリア」

「う、うん」

沈黙。いつそドラコがしゃべってくれればいいのに。役目は終わったとばかりにそっぽを向いているドラコに理不尽な怒りを覚える。——ああ、もう、しかたない。

「ごめん。僕、君たちを見下してるとか——いや、うん、そう見えたなら、ごめん。でも、ちがうんだ。僕は——うまく言えないんだけど、つまり」

「……いいよ、もう」

ロンになだめるみたいに背を叩かれる。女の子の扱いがまるでなっていないいつものスキンシップに、ぐっと喜びが胸を競り上がった。

「僕が悪かったよ。八つ当たりだった。……ごめん」

「う、うん。僕も、ごめん」

「もう聞いた」

「うん……」

「……………」

「……………」

「……………プツ！」

同時に吹き出して——ロンがあんまりにも情けない顔をするから——きつと僕も同じ顔だ——ケラケラと笑い合った。肩を叩いて、なんだか——そう、ハリーののように。ハリーであった頃の僕がロンとじゃれあうみたいに、無遠慮に小突いて小突かれた。——目の前の彼は僕のロンなのだど無性に叫びたくなった。

「——こんなかんじで収まったぞ」

発作が止まらない僕らから目線を外してどこかに声を張り上げたドラコは、そしてお得意のバカを見るニンマリ顔で僕を笑った。

「うわ、その顔ムカ——わあッ!？」

「いじつぱりのすねっぱり！　あなたたち、話し合いが足りないのよ！」

飛び込んできたのはハーマイオニーだった。それから、ハリーがドラコにやりすぎ、なんて唇を尖らせて苦情を言っていた。

「い、いつから……」

「ドラコが失神呪文を飛ばしたくらいから」

「というか、あなたたちを見つけたと同時にマルフォイが杖を取り出したの。止める間もなかったわ」

「案外ドラコって野蛮だ」

「案外じゃないよ」

ロンと二人で反論すれば、またまたクスクス笑いの発作に襲われ

る。それはハリーとハーマイオニーにも伝染して、四人で廊下中に笑い声を響かせた。

僕とロンの奇妙な喧嘩は——親友たちと弟と相棒の笑顔に溶かされてようやくここに終結した。

——終結といえば。もうひとつ。

ポッター兄弟の血が繋がってない（ので アヤシイ）疑惑騒動もまた思わぬ終息を見せた。

まず、シリウスがキレた。ぶちギレて乗り込んだ。週刊魔女発行部所へと。声高にうちの息子と娘になんの文句があるんだと強盗のごとく暴れまわったそうさ。なお、アヤシイの部分についてはノーコメントであった。

そして、思わぬの大部分——それが『彼』のコメントであった。

「ポッター兄弟は間違いなく血の繋がった子供である。あれらの両親を知る者ならばそのような疑問は持つことすら難しだろう。——憎たらしいほどに、瓜二つよ。父と、母にな」

彼の憎々しげなこのコメントはしっかりと週刊魔女へと掲載され（おそらくシリウスが圧力をかけたのだ。……きっと、ものすごく嫌な顔をしながら。）匿名のホグワーツ魔法魔術学校関係者とされていたが——わからないはずがない。

僕は今日も職員席で我関せず顔を決め込むひねくれた大蝙蝠にこっさり笑った。

ハリーは怯えていた。占いでおそらくヴォルデモートの夢を見て、痛む傷痕を押さえながらダンブルドアの元へと向かったハリーは、戻つてすぐに僕を捕まえると校庭へ出た。会話なく手を引かれるままに突き進んで、すっかり青草の絨毯へと換わった湖畔で立ち止まる。

「ハリー？」

「ワームテールが」

「うん」

「ワームテールがアイツに拷問されて——頭が割れそうなくらい痛くて」

「うん」

「先生のところで色んな記憶を見た」

「そう」

「カルカロフだけじゃない。スネイプも——」

死喰い人だった——

色んなショックが重なって自分をたもてないただの少年に、肩を抱いてそつと座らせる。ただの子供だ。ただ、生き残ってしまっただけの男の子なのに。

「僕、シリウスに教えてもらった。手紙で。少しずつ、色んなことを。それで——クラウチは息子をも無慈悲にアズカバンへ送ったんだってことも」

ハリーが両耳に爪を立てる。あまりに痛々しくて、せめて片手だけでもと指を絡めて取り上げる。

「耳から離れないんだ。あんなに必死に——お父さん、お母さんつて——あんなに——どうしてあれほど非情になれるのか、我が子を突き放せるのか、わからないよ。——あんなに、呼んでいたのに」

クラウチ・ジュニア——今なお父への憎しみに生きる人。そしてとうとう——肉親をその手にかける憐れな人だ。

「僕、思ったんだ。もしも——もしもマリアにあんな目をされたら——もう生きてなんていけないって」

「ありえないよ。絶対に。僕はハリーの一番の味方だ」

背中をなでれば、ハリーは微かにうめいて、そしてもつと小さな消え入る声で喘いだ。

「それ、なら——」

ただの子供なのに英雄に祭り上げられる可哀想な生贄の、精一杯の悲鳴だった。

「それなら、助けてよ。もうたくさんだ。うんざりだ。どうして僕はかり——僕がなにをしたの。これはなんの罰なの。生まれた瞬間から殺されかけて——どうして生きてるだけで死を願われなくちゃならないの」

「ハリー」

「助けてよ。僕を助けて。望んでないよ、こんなの。見せられたんだ、次の課題は迷路だって。面白くともなんともない。だれが僕を狙ってるの。——お願いだから、だれかかわって」

僕はうなずいた。——うなずいた。

「わかった」

涙を溜めたうつくしい翡翠が——『僕』が僕を見上げていた。

「僕がハリーになるよ」

「マリア……?」

「今ならポリジューズ薬の作製も間に合う。僕がハリー・ポッターとして第三課題に出よう」

「なに、言って」

クラムよりも、セドリックよりも、ずっとずっと小さな体を抱き込む。

「よく頑張ったね、ハリー。——これからは、『僕』がやる」

茫然とするハリーの傷痕にキスを落として立ち上がる。そうと決まれば材料、それからドラコだ。僕ひとりではポリジューズ薬なんて複雑なものは作れない。少しでも早く。少しでも——この子を解放したい。

「ハリー?」

僕のローブをハリーが握っていた。

「ありがとう」

「いいんだよ。君は十分、がんばった」

「うん——うん、十分だ」

ローブから腕に手は移って、強い力で引かれて再びハリーの元へと座らされる。

「ハリー?」

「ありがとう、マリア——その言葉だけでいいんだ」

「ハリー、僕は本気だ」

「わかっている。だからいいんだ。もう。——いつだって本気で僕を救おうとしてくれるマリアがいるから、それだけで、僕は立てる」

言葉の通り、ハリーは立ち上がった。僕を正面から抱きしめて、震える声でありがとうを繰り返した。

「マリア——僕の兄弟でいてくれてありがとう」

「ハリー……」

ちつとも力の入らない弱々しい腕で、ハリーの背を抱き返した。

「こちらこそ——ありがとう」

どうか——

知りながら君にすべてを背負わせる『僕』を——ゆるさないで。

第三課題のその日まで、僕は期末試験勉強なんて二の次にしてハリーの付きつきり指導にあたっていた。少しでも多くの呪文を覚えてもらい、精度を上げて、勝率と——そして生存率を上げてもらおうと必死だった。ロンとハーマイオニーもできる限り手伝ってくれたが、彼らには試験がある。もちろん僕にだってあるが、一度経験しているという利点をここぞと利用して乗る切るつもりでいた。

「ハリー、いいかい？ 情けはかけちゃだめだ」

何度も繰り返す。絶対に君が——トロフィーを掴むんだ。

とことん攻撃呪文や防御を叩き込んだ翌日。とうとう試合当日となった朝にハリーはマクゴナガル先生から呼び出された。午前試験を乗り越え大広間で再会すると、ハリーの周りにはモリー母さんとウィーズリー家の長男、ビルの姿があった。ジョージやフレッドも駆け付けてハリーを囲むさまは、まるで隠れ穴の空気がまるごとホグワーツへやってきたかのようだった。ハリーが課題に備えるあいだに午後の試験も終わり、夕食をみんなで囲んだ。誰もが笑っていた。セドリックも、フラーも、クラムも、各両親も——誰もが。

「ハリー、ハリー、忘れないで」

「わかってるよ。同着はなし。絶対に僕がトロフィーを取る。覚えてるったら」

「ハリー……」

「まあ！ ハリーよりもよっぽどマリアのほうが顔色が悪いわ。落ち着きなさいな、ハリーなら大丈夫よ」

「はい、モリー母さん。でも、」

「大丈夫。かわいい子たち、きつと上手くいきますよ」

「……はい」

モリー母さんのあたたかでよくよかな腕に抱かれて、ようやく息をつく。一足先に会場へ向かった代表選手たちを追って観客席へと入場すれば、なんとそこにはシリウスの姿があった。

「シリウス！」

「やあ、マリア。遅れてすまなかったね。魔法省のやつらがギリギリまで渋ったんだ。私には君たちの保護者としてここに駆けつける権利があるつてのに。うん？　少し背が伸びたか？」

「思ってもないこと言わないで」

「ハツハ、女の子はむずかしいな」

駆け寄ればわしゃわしゃと髪を混ぜられた。せつかくのブラッシングが台無しになってしまったが、それすらも嬉しくてニコニコしてしまう。

「ハリーにはきつき挨拶を済ませてきたんだ。マリア、どうしてドレスのことを言ってくれなかったんだ？　君の写真をもらったが——あのコリン・クリービーとかいう少年は実に優秀だな——私ならばもっとすばらしいドレスを用意してやれただろうに。ああいや、決して似合っていないという意味ではないぞ。美しかった。私は君ほどの美女を知らないとも」

「母さんは？」

「リリーももちろん美しかった。だが、うむ……マリアには敵わないな」

うそぶくシリウスにケラケラと笑った。大袈裟なことばかり言っつて。親の欲目の権化みたいな人だ。

「ドレスのことは、ごめんなさい。僕、ほんとうはパーティーに出る気はなかったんだ。でも、ほら、ハリーが——ね？　それで、あんまり

急だったから……間に合わせで」

……ドラコに用意してもらったとは言わないほうがよさそうだ。面倒事になるとわかりきっている。

「次は私にプレゼントさせてくれるかい？」

「……機会があれば」

二度とダンスパーティーになんて出る気のない僕は曖昧に流しておいた。スカートはこりごりだ。防御力が低すぎる。転んだだけで傷だらけになるじゃないか。

ルード・バグマンの開会挨拶によって生徒たちの注目が迷路へと集まる。課題内容の説明後、笛が響く。同点一位のハリーとセドリックの対決が始まった。次々と笛が追いかけて代表選手みな姿が迷路の中へと消えていく。すっかり観察対象をうしなった観客たちは、思い思いに誰がトロフィーを勝ち取るか予想したり賭けをしたり話し合うことで盛り上がっていた。その中で、僕たちは声を潜め情報を交換し合った。

「——となると、やはりこの試合は誰かに仕組まれている、か」

「まちがいなく。——今日、起きるよ。ハリーがトロフィーを掴んだ、その時に」

「……予言か？」

「やだな。どうしてみんな僕に予言なんてできると思うのさ。僕の占いの成績を見せてやりたいよ。……僕は、知ってるだけだよ」

ただ、知ってるだけ。変える力はない。勇気もない。ほんの少しだけ——拾い上げただけだ。

「マリア……君は——いや。信じよう。私は、なにがあっても君たちを信じるよ。もう、君たちが二人だけで生きる必要はないのだから」

ら」

肩を抱かれて強く引き寄せられた。不安を隠しきれない子供をなだめるように——父が我が子を包むように、大きな腕は力強かった。

「シリウス……」

「一緒に生きてほしいと君が泣いた日から、私の心は君たちに捕らわれてしまったのだ。君を二度も泣かせたとなったら、今度こそ私はジェームズに崇られる。リリーにもだ。リーマスにはこんこんと説教をされるね。それから——ハリーに杖を向けられてしまう」

「そんなことはしない！」

「いいや、するとも。あの子は君のためなら神にだって杖を向けられるよ。——あの子はジェームズの子だ」

よく、わからない。困惑する僕に、二度肩を叩いたシリウスは哀愁を含ませながら微笑んで続けた。

「君も——まったく、ジェームズの子だね」

「……手がかかるって言ってる？」

「君たちなんてかわいいものだ。私とジェームズのほうがよっぽど手がかかった！」

「それは武勇伝みたいに語ることにじゃないよ、シリウス」

小突けば、軽快に声を上げて笑われた。『僕』が知ってるシリウスがこんなふうに笑ったのは、初めて共に過ごしたクリスマスの日だけだった。鼻唄まで歌って、あの陰気なブラック邸をクリスマス一色に飾り付けて——そして、次には、もう。

あの陰は今のシリウスにはない。それだけが救いだ。——さびしいなんて、そんなことを思うのは筋違いなのだ。

「……シリウス、信じてね。ハリーを。絶対に。これからハリーはひ

どい立場に立たされる。だから、あなただけは——ハリーの心の支えは、あなたなんだから」

「……マリア？ 君はなにか、おかしい勘違いをしていないか？ あの子は——」

客席がざわついた。迷路のどこから赤い閃光が空へと打ち上げられたのだ。選手が棄権した合図だった。近くにいた先生が救出に入り、バグマンが脱落者の名を叫ぶ。フラー・デラクールだった。

僕は唇を噛み締めた。——始まった。

「マリア、落ち着きなさい。なにをそんなに焦ってる？ 時代がちがうんだ。安全面はそれなりに考慮されて……」

「それでも、死人が出るかもしれない」

「マリア、ハリーが心配なのはわかるが」

「可能性があるんだ！」

シリウスへと勢いをつけて振り返る。彼の眼差しは僕が思っていた以上に真剣だった。

「わかった。警戒は怠らずにしよう。だが、君は落ち着くべきだ。わかるね？」

「……うん」

背中から力を抜いてシリウスへともたれかかる。シリウスは大きな胸板で受け止め肩を撫でてくれた。

「これで死人なんて出せば、魔法省はさらに落ち込むだろうな。いいさまだ。スキーターあたりに手酷く書かれればいい」

「ああ……フツ、それはむりだよ。シリウス」

僕の含み笑いに、シリウスは、うん？ と眉を上げた。

「当分、スキーターは記事を書けない。——僕とハーマイオニーで思い知らせてやったからね」

今頃、小瓶の中で会場の声を聞きながら悔し涙を流していることだろう。……コガネムシが泣けるかどうかなんて知らないけど。

次の閃光が上がった。クラムだ。やはり残るのはハリーとセドリックとなってしまった。ああ、ハリー、どうか……。

いてもたってもいられなくなった僕は立ち上がった。シリウスに場所を替えると告げてコロシラム風の客席を下りる。せめて、せめて近くで——ヴォルデモートと対峙し恐怖して帰ってくるだろうあの子に、誰よりも早く駆けつけられる場所でいたい。

迷路の入り口へと向かう途中に、地面になにかが光るのが見えた。——ネックレスだ。誰かの落とし物か……近付いた僕はそれをはつきり目にすると思わず周囲を見渡した。

ネックレスは僕をよく知る形をしていた。中に不思議な炎を閉じ込めた宝石と、それを繋ぐ華奢な鎖。——ドラコからもらったマジックアイテムであった。

どうしてこんなところに……？ 普段はラベンダーがお下がりしてくれたアクセサリーケースの中へとしまっているというのに。

僕はかがんだ。指を伸ばした。

誰かが僕を呼んだ。

宝石に触れた。

景色がぐるりと歪んだ。

墓場だ。僕は知っている。——トム・リドルの墓を知っている。ネックレスをにぎったまま、油の足りないブリキ人形のように周囲を見渡す。手入れのされていない墓と地面。遠くにポツリと浮かぶ生を感じさせない教会。古い館。——知っている。

ここがリトル・ハングルトンの墓地であることを確信した僕は、手の中のネックレスを見つめた。なぜ——なぜ、これがポートキーに？ いったい、いつ、どこで——

そして気が付いた。——宝石の中に炎がないことに。ダミー……ネックレスはよく似せられた偽物だった。

なぜ。どこで。だれが。どうやって。

答えはひとつ。——マッドアイ扮するクラウチ・ジュニアの仕業だ。

どこで目をつけたのか——ダンスパーティーだ。

いつ複製したのか——第二課題の人質として召喚された時だ。

どうやって——彼はハリーの忍びの地図を持っている。先回りくらいわけではない。

なぜ——なぜ？

なぜ、僕まで呼ぶ必要があった？ 僕に母の愛の呪いはない。僕に血の価値はないはずだ。なぜ——いや、そうか。ヴォルデモートは知らないんだ。

ポートキーとしての役目を終えたイミテーションのネックレスを踏みつける。ガラスの割れる音はなんとも呆気なかった。深呼吸して——トム・リドルの荘厳で惨めな墓石を見上げた。

「油断大敵——闇祓い失格だぞ、ハリー」

どしやりと崩れ落ちる音がした。黄金の杯が雑草しげる地面に転がる。近くで二人の少年が折り重なっていた。——『二人』。

「ハリー！ どうしてッ!!」

ほとんど絶叫だった。どうして——どうして、彼を杯に触れさせてしまったんだ！

君は——僕は、また、過ちを繰り返すのか！

「マリア……?」

「ここは……」

なにも知らない少年二人が無防備に墓場を見回す。場違いなくらい無垢だった。だめだ——来る——来てしまう——このままでは——

「二人とも、杖を持って。——さあ！ 早く!」

「マリア? どうしたの? どうして君がここに?」

「これも課題の続きか?」

「立つんだ!」

「待つてよ、マリア——イタッ!」

ハリーがうめいた。片足からおそろしく出血していた。セドリックだってよく見れば満身創痍だった。『僕』の時はこれほど痛めつけられはしなかった。なにか、『前回』とちがうことが起きている——?

「セドリック、君の杖を貸して」

「なにを言ってるんだ? 杖なら今、君が持つてる」

「この杖は僕では使いこなせないんだ。お願い、時間がない」

いぶかしむセドリックから無理に杖を借り受け二人へとエピスキを唱える。あくまでも応急処置だが、ないよりはマシだ。立つことすらできないのでは話にならない。

「これでいい。返すよ、セドリック。ありがとう。二人とも決して杖を手放さないで。警戒するんだ。反撃しようなんて考えないで、とにかく逃げて、生き延びることだけに集中するんだ。いいね？」

「マリア——？　なにが——？」

足音だった。小柄で、ローブを深くかぶっていた。腕に抱えていた。丸めた布のような——赤子の——よう——な——

「ヴぁッ、あ、アアアッ!!」

「ハリー!?　マリア、ハリーが————マリア？」

こわい。

音が消えた。

こわい。

辺りは暗闇だった。

こわい。

あの子が。

こわい。こわい、こわい————こわい!

いやだ。見せないで。

見せつけないでくれ。

どうしようもなかった。『僕』にはむりだったんだ。

しかたないじゃないか。君は——僕には救えないんだ!　僕じゃだめなんだ!

不可能なんだ！

「——マリア！」

「——よけいなやつは殺せ」

永久に魂を縛り付ける——その声。冷たい声。
僕は知っている。——知っている！

「セドリツ——」

「アバダ・ケダブラ」

放たれた死の輝きは————セドリツクの背後の墓石へと当たり拡散した。

「——ツセド——セドリツク、セドリツク、生きてる!？」

「あ、ああ……あいつ……今……」

僕の下敷きとなったセドリツクは目を白黒とさせてローブの男——ピーター・ペティグリュウを見た。ペティグリュウは杖を震わせて歯軋りしていた。

ああ——生きてる。セドリツクは生きている！

「ご、ご主人様——申し訳——」

「よい。——どうやら、邪魔をする気はないらしい。そうだな？ マリア・ポッター。さあ、小僧にかかれ。小僧がいるならば小娘は無用だ」

ペティグリュウがうろたえながらも、額のあまりの痛みに動けずに

いるハリーを拘束する。僕とセドリックは杖を握りしめ、ただそれを見届けるしかなかった。

「マリア……マリア、ハリーが」

「だめだ」

「マリア……！」

「だめなんだ！——僕は君をうしないたくない！」

セドリックが信じられないと僕をあおいだ。

二度も——君のあの顔を——なにもわからないと、巻き込まれただけの罪なき顔で死んでいった君を見るのは——たえられない。

ハリーは死なない。死なないんだ。そうだろう——？　しかるべき時に死ぬために、『僕』はレールの上を歩かされてきたのだから！　ペティグリューが震えながらも黙々と儀式を進めていく。大鍋に『彼』を沈め、父親の骨を落とす。ペティグリューの片手が捧げられ、そして——ハリーの血が混じる。

「あ……ああ……」

なにかとてつもなく嫌ものが来ると本能で理解したセドリックは震え上がり、僕はそんな彼の手を握るしかなかった。

「——ローブを着せろ」

『彼』が言った。赤い血の目に蛇の鼻。唇のない口。青白い肌に蜘蛛のように細く伸びた腕。

ヴォルデモート卿の復活であった。

ヴォルデモートがハリーだけを見つめて語る。父のこと——母のこと——死喰い人のこと。

動けない。わかってしまうのだ。誰よりも死に近い場所で生きてきた『僕』が訴える。——今動けば、死ぬ、と。

ペティグリュウ——ワームテールの腕の印に導かれ死喰い人が集結する。ワームテールへと銀の腕が授けられる。……そんなことはどうでもいい。

ああ、ああ、こんなのは見たくなかった。——無駄だったなんて、こんな形で思い知らされたくはなかった。

「ルシウス——おお、我が朋よ」

ルシウス・マルフォイはかわらずヴォルデモートの元へ跪いていた。

「ルシウス？——息子は元気か？」

ピクリと。ルシウスの肩がかすかに跳ねた。

「はい。まったく不出来な——我が君の御前を拝するにはあまりに未熟で恥ずかしい不肖の子ではありますが」

淡々とした声だった。まるで情など欠片もないかのように——

「そうか。それはさぞ、苦勞しているであろうなあ？ 父というものは、どの世も我が子のために頭を悩ませるのだそうだ。——俺様は知らないがな」

暗い笑い方と共に死喰い人たちとヴォルデモートの語らいが交わされる。誰もが表情という名の仮面を貼り付けている。薄気味悪い光景だった。ただ与えられた役を演じるだけの役者たち。魂も命もない忠実な人形。——すべては、恐怖ゆえに。

ヴォルデモートの演説はハリーとそして自身の話へと移る。復活

するまでの恨みと苦勞——いかにハリーをホグワーツから連れ出すかの算段——バーサ・ジョーキンスという幸運の贄——

ヴォルデモートの饒舌はやがて止み、禍杖がハリーへと向けられた。途端——誰もが緊張した。

「クルーシオ！」

ハリーの絶叫が今や地獄の底となった墓場に響く。血の味がした。噛み締めすぎた唇が切れたのだ。手が湿る。握りすぎた拳の中で爪が皮膚を突き破ったのだ。

これが——あれは——『僕』だ。

「さあ、ワームテール？ 若き我らが友人の縄を解いてやるのだ。そして杖を返して差し上げる。彼は我が復活においての最大の功勞者。相応に——扱ってやらねばな？」

下品な嘲笑が辺りに満ちた。——ここだ。

「セドリック——ハリーを頼んだ」

ハリーと、そしてポットキーである優勝杯を順に見て目配せを隣の彼へと送る。

「マリア——？ 君は、なにを——」

「ヴォルデモート」

笑い声が止んだ。身じろぎも——呼吸の音すらも消えた気がした。

「——死に急ぐか。小娘」

「これでもハリーの姉を自称していてね。実際のところは知らないけ

ど……これ以上は——『僕』の矜持が許さない」

少しずつ、セドリツクから、ハリーから離れる。引き付けろ——少しでも多く、誰も目を、意識を、僕が捕らえるんだ——！

「姉——姉か——ククツ、聞いたかお前たち！　なんと美しい兄弟愛か……泣かせる話ではないか。——弟を犠牲に生き残った姉がこのように立ち上がるとは」

「——え？」

杖を真っ直ぐ向けたまま、明かされる真実に硬直した。

「憐れなマリアよ——お前たちはまだ赤ん坊だった。知らぬであろ
う、あの夜の悲劇を。疑問には思わなかったか？　呪いの残った弟と
無傷の自分。なぜ自分は生き残れたのか——と」

「それは……」

「教えてやろう。それは——お前が弟の後ろにいたからだ。ただそれ
だけのことだ。ただの偶然だったのだ。再び——お前は愛する弟を
俺様へ差し出したのだ」

ああ。なんだ。単純明快——その通りだ。

僕は——マリアは——真実、ハリーを身代わりにして生きてきたの
だ。

「さあマリア。弟を盾に生きる憐れな姉君。決闘といこうじゃない
か。方法は学んでいるな？　——お辞儀だ。死にお辞儀をするのだ。
弟の前だ、姉らしくせねばなあ？」

ゲラゲラと不快な笑い声が響いた。——いい調子だ。みんな僕を
見ている。僕を笑い者にするために。僕がぶざまに死ぬのを嗤うた
めに。そうだ。それでいい。誰も——自由になったハリーに気付い

てくれるな！

「クルーシオ！」

「プロテゴ！」

杖を振るう。しかし盾が構築される感覚はない。反射的判断で杖なし魔法へと移行する。——やはり、ここにきても僕の身を守ることはいらないか。

「ほう……？ その杖は飾りか？ 指揮者の真似事で魔女は名乗れん

ぞ、マリア・ポッター！」

「ボンバーダ！ コンフリンゴ！」

爆破した墓石の破片をさらに破裂させ目眩ましの効果を上げる。倒す必要はない。引き延ばし——引き付ける！ それだけだ！

「インカーセラス！」

「エマンシパレ」

「ネビュラス！ デイフィンド——ステューピファイ！」

作り上げた霧を赤い閃光が射抜いていく。——見えた！

「かくれんぼは終わりだ。——アバダ・ケダブラ」

「——エクスペリアームス！」

迫る緑と赤い光が繋がった。ハリーの杖とヴォルデモートの杖が繋がったのだ。

「マリア！ 無事かい!？」

「ハッ……ハア、ありがとう、セドリツク」

「ごつちこそ。……ハリーのあれは」

「手を出さないで。——大丈夫」

ハリーを気にするセドリックを止めれば、同じ頃にヴォルデモートも死喰い人たちへと手出しを禁じていた。ヴォルデモートとハリーの互いを縛る光は黄金にまたたいて、霧を吹き飛ばし目を焼くほどだった。場違いにも美しく思えた。

二人を囲む光のかごが宙に編まれて、二人の体をも浮かばせゆく。不死鳥の調べが闇を切り裂く。そして光の拮抗が崩れかけた時——ヴォルデモートの杖が呪文の逆戻しを始めた。

エマンシパレ——クルーシオ——ワームテールの銀の腕——そしてアバダ・ケダブラ。

老人が浮かんだ。「あいつをやっつけろ、坊や」

バーサ・ジョーキンスが言った。「杖を放すんじゃないよ！ 絶対に！」

ハリーは目を見張った。僕はただただ見ていた。

「お父さんが来ますよ……」

美しい人だった。たつぷりとした赤毛の——美しい翡翠の瞳の人。

「ハリー」

やわらかな声がささやく。くしゃくしゃ頭で、丸い眼鏡をかけた——ハリーそっくりのその人。

「さあ、行きなさい。子供たち」

「——はー」

杖の繋がりが切られる。僕たちは走った。優勝杯^{ポトキ}へと。死者たちを背に、戸惑う死喰い人を蹴散らし、墓石を盾にして。走る。走る。走る。走る——！

あと、少し。

隣にハリーがいた。

あと、少し。

セドリックが追い付いた。

あと、少し。

指を伸ばした。

あと、少し。

ほうら、届い——

あ。

——トンツ。彼はいつもの優しい顔で微笑んだ。

[new page]

[new page]

マリア。マリア。離しなさい。

うるさい。

彼を離すんだ。

うるさい。

マリア——さあ、君は休まなくては。

うるさい。

マリア。セドリックは——もう。

——うるさい!!

「あああああああああああああああああああああッ!!!」

冷たい腕にすがって彼の微笑みが消えなくて緑の光が背中に迫っていて彼が背を押してくれてだから彼はだからだからだから——
—僕の、せいだ。

僕が最後尾を走るべきだった。

三人揃った瞬間にアクシオを使うべきだった。

もつと早く走ればよかった。

ハリーの代わりに出場するべきだった。

セドリツクを——なにがなんでも止めなければならなかった。

僕が殺した。

「ハリー」

誰かに包まれる。その人は血だらけだった。理不尽に刻まれていた。いつだって整えられているブロンドの髪がバラバラに乱れていた。アイスブルーの瞳が僕を見ていた。

「ハリー」

やさやく。

「眠ろう。——君は、生きているのだから」

血があたたかい。鼓動は優しい。声は責めない。

なんて——ひどい。

「ハリー、君、死ぬのか」

ああ、死ぬなあ、これ。——なんて。ずいぶんと呆気なかった。英雄だとか散々持ち上げられた男の最期がこれだ。……まあ、悪くない。そんな気がする。

死期というのは、ほんとうに悟れるものらしい。たとえばすぐに治療を施されたとしても——駄目だ。駄目だとわかる。

死ぬなあ、これ。

指先からなくなっていく感覚を追って、かろうじて動く脳みそと会話する。なんともものんきで——穏やかだった。

死ぬなあ、これ。

しかたないな。誰にも看取られないことにほんのりさびしさはあるけれど——この期に及んで愛する人たちにこんなぶざまな姿を見られなくて済んだ、だなんて。

死ぬなあ、これ。

そろそろかな。君って時々、ものすごく運がない。

——ほうら、見つかった。

マリア・ポッターと炎のゴブレット【完】

翌日の医務室で、僕はすべてを話した。ポートキーとしてネットクレスの複製を企まれ墓場へ送られたこと。優勝杯によつて飛ばされたハリーとセドリックと合流したこと。ヴォルデモートの復活を見たこと。彼と決闘したこと。——セドリックが僕をかばって死んだこと。すべて、話した。

そして聞かされた。ポートキーに巻き込まれる瞬間を見ていたシリウスがすぐにダンブルドアへと報告したこと。セドリックの亡骸から離れず魔力暴走を起こしたこと。誰も近付けぬ中ドラコだけが——怪我を厭わず僕をなだめたこと。そして——すべてが終わったことを。

「マリア、ハリーは隣で眠っておる。直に目覚めるじやろう。過酷な試練じゃった。君も——まだ少し、休むべきじや」
「はい」

ダンブルドアがキラキラしたブルーアイを静かに伏せる。ハリーの眠るベッドとのあいだに丸まって、一晚中付き添ってくれたらしい犬のシリウスを撫でた。ピスピス鳴る鼻が愛らしくて指先でくすぐった。——なにも考えたくなかった。

「先生、ドラコは」

「ひどくはない。ポンフリー先生が痕も残らぬよう治療してくださいました」

「そうですか」

小さく安堵の息をつく。大変な尻拭いをさせてしまった。その上怪我だなんて……なんて、有り様だ。

「マリア——ひとつ、答えてはくれんかの」

腰を上げ、退室の意図を見せていたダンブルドアはそして立ち止まった。僕はシリウスを撫でていた。

「これは——必要なことであつたか」

シリウスの耳がふるふると震えた。愛しい黒犬の寝息は変わらず健やかであつた。

「はい」

ヴォルデモートを打ち倒す未来のため、ハリーの優勝と、ハリーの血、そしてヴォルデモートの復活——すべてが必要だつた。

——セドリック・デイゴリーの死、それ以外が。

目覚めたハリーとも話し合いをした。——迷路の中でながあつたのかを。

ハリーは本来ならばトロフィーを掴める人間ではなかつた。正々堂々、完膚なきまでにセドリックに負けたのだ。そしてセドリックがトロフィーを取ろうとしたその時——おかしなことが起きた。現在はクラウチ・ジュニアの仕業だと判明しているが——当時はまったくおかしな現象でしかなかった。

トロフィーが宙に浮いて、ハリーの元へと飛んできたのだ。当然、セドリックは追う。そしてハリーも戸惑いながらトロフィーを受け止めた。——触れたのは同時だつた。すべてが悲劇だつた。

「僕のせいだ」

シリウスのいなくなった医務室で、みじめにハリーと肩を寄せ合う。

「セドリックはあの場にいる必要はなかったんだ。それなのに——どうしてセドリックが死ななくちゃならなかったんだろう。あいつが付け狙うのは僕のはずなのに——どうして、セドリックとマリアがひどい目にあわなくてはならなかったんだろう。僕のせいだ。僕が——」

「僕が、殺したんだ」

男女の声は空疎に響いた。

「マリア……？ どうして——だって君は——なにも——」

「クイレルを」

クイレル——？ かつての痛みを思い出させる名前に、ハリーは不安げに瞳を揺らした。緑の瞳はこんなにもきれいで——憎たらしい。

「僕、クイレルを看取ったんだ」

「え？ でも、君は——あそこに——？」

「そう。ダンブルドアをお願いしてね」

「じゃあ……あの時マリアの声がしたのは、僕の気のせいではなくて、」

「うん。僕、そこにいたよ。それで——クイレルが息を引き取るまで、見ていた。なにもせず、ただ見てたんだ」

「マリア……」

「僕が手をかけて、僕が見届けた。——僕たちが殺したんだ」

クイレルは救えない。ヴォルデモートに寄生され、ユニコーンの血の呪いを受けた彼に生きる道はない。そして、僕は、記憶に無いはじめての殺人に苛まれ続けるのだ。だから。

「セドリックもクイレルも——君と僕が殺したんだよ」

せめて、血濡れのその手を握りしめ共に穢れよう。——『僕』は、君だから。

「セドリツクは僕をかばったんだ」

ソファに寝そべる僕に声をかけることなく、お気に入りのリクライニングチェアへと腰かけたらしい彼にポツリとこぼした。

「ねえ、君、言ってたよね。『僕』に責任はないって。みんな自己責任だったんだって」

シリウスをうしなうのがこわいと——これから先に待ち受ける希望と絶望に弱音を吐いた僕を、君は傲慢だと軽蔑した。思い上がりも甚だしいと。

「今、それ、繰り返せるかい？　なあ、言えるか？　僕のせいでないって——この有り様を見て、そんな綺麗事が言えるか!？」

ふつりふつりと沸き上がる。どす黒く——熱く煮えた痛みが凶器に変わる。

「今度こそ！　間違いなく！　——僕の、責任だ」

声に出せば、ゾツとするほど現実が押し寄せてきた。

「だって守れたじゃないか。今度こそ、守れたじゃないか。その力が僕らにはあったじゃないか！　——もう、君の詭弁は通用しないぞ！」

『君のせいじゃない』——その言葉は優しくなんてなかった。今さらになって、知らないうちに刺さっていたトゲが血を巡りとうとう心臓を突き刺したのだ。

「調子に乗ってた。シリウスを救えたと——だから、セドリツクだった——軽く見た。命を。歴史を」

「止められたのに。知っていたのに。——見殺しにしたんだ。今度こそ、たがえようもなく——殺人だ」

寝そべるソファの上で体を折り曲げ、込み上げる熱を押し留める。中でくすぶって、マグマみたいに今にも内からすべてを焼き尽くしてしまいそうだった。

「なにが正々堂々だ。ただの言い訳だ。綺麗事だ。ロンの言うとおり——僕は口だけだ」

あんなに、きれいに、

「死に顔が笑顔だなんて————なんの慰めにもならない」
「マリア」

咄嗟に唇を噛んだ。内側の痛みでなく、れっきとした外傷がほんの少し頭の中を突き通らせた。あんまりにもぐちやぐちやで、このままでは彼に————してしまいそうだったから。

「なにも言わないで」

激情を呑み下すことを選んだ僕の声は情けないくらい震えていた。

「お願い。きつと、僕、ひどいことを言ってしまう。今、君に慰められ

たら——君を恨んでしまう。お願いだ、そんなのは——もう、苦しいんだ」

絶対に彼を見ないようにしながら、顔をおおう。

「君の言葉が、すべて刺さって、いたいんだ」

簡単に心のやわらかい部分にまで届いてしまう。そうすれば、あとは優しい声色で切り刻むだけだ。

「なにも言わず、そばにいて」

「……ああ」

ドラコは、ソファの空いていたスペースへと移動して、僕の髪を撫でた。

君のせいだ。君がいたから——希望を見た。君のせいで——君の言葉のせいで、君の存在のせいで、こんなにも苦しい。

ドロドロと溢れ返りそうになる怒りを恨みを痛みを呑み込む。呑み込む——呑み込む——……

懇願通り、一言だって声を発さず隣にいた彼の眠る間際の呟きは、僕の落ちゆく意識を追ってはくれなかった。

「いつだってハリーに死を教えるのは——セドリック・デイゴリーなんだな」

少年はささやく。目元に涙の悲壮さを滲ませて、それはすっかり馴染んで、再び死者に心を捕らえられてしまった彼を想う。希望に目移

りして——そのたびに自ら血だらけになる彼を憐れむ。

「気付いているか、ハリー。——君、あの人を『憎い』とは、言わないんだ」

どうか、気付かないで。その時まで。

魔法省は『前回』同様にヴォルデモートの復活を報道しなかった。だが、『前回』に比べ状況はずっと良かった。ほとんどの人がハリーの語った真相を信じたのだ。

スキーターがハリーについてバカげた記事——たとえば『生き残った男の子ハリー・ポッターは精神面に問題有りか?』なんてゴシップだ——を書く前に僕らで捕らえられたことも大きいかもしれない。デタラメだろうと情報による印象操作はバカにならない。僕はそれをよく知っている。

学期末の大広間にてセドリックへの追悼が行われた。誰もが手元のゴブレットをかがげ喪われた善良な魂に祈った。そしてダンブルドアからの布告におののいた。

ヴォルデモート卿は復活した。

「ミスポッター」

激動の一年を終え、家族の元へ帰れると思いきいにトランクを運ぶ生徒たちの中から、たおやかなながらも凛としていた彼女の弱々しい声が僕を呼び止めた。

「……ハイ、ミスチャン」

目や鼻を痛々しい赤で染めたエキゾチックな美少女は、唇を噛み締め僕を睨んでいた。

「話を——させてほしいの。時間はあるかしら」

「マリア、行きましょう」

「いいよ、場所を変えようか」

「マリア！」

ハーマイオニーが、ロンが、僕の手を引きしつかりした足取りで歩いていたハリーが、心配そうに振り返った。……僕の親友たちと弟は、ほんとうに優しい。

「大丈夫。馬車の時間までには間に合わせるよ。……待っててくれる？」

「当たり前だ」

「マリア、僕も一緒に」

「女の子同士の話が邪魔するものじゃないよ、ハリー」

『僕』のジニーと娘のリリーからの受け売りで茶化せば、ハリーはますます心配そうに眉を寄せた。

「……大丈夫」

うつすらと目元に隈の浮かぶ弟の額へと背伸びをしてキスを送る。

「待たせたね。——行こうか」

チヨウは唇を噛み続けていた。

「——彼は、どんなふうにして死んだの」

温室やハグリッドの小屋が見える位置まで歩いて、ようやくチヨウは口を開いた。声は静かだった。

「僕を庇ったんだ」

「——っ」

息をのむ音が聞こえた。

「ホグワーツ行ききのポットキーに向かって走っていた。三人で。みんな必死で、背後なんて見えていなかった。誰かの死の呪文が僕に迫ったんだ。でも、僕は気付かなかった。——セドリックが、気付いた。そして、僕の代わりに彼が呪文を受けた」

パアン——乾いた音が耳元で破裂した。少し遅れて、頬に熱が生まれる。

「あなたが——あなたさえ——あなたなんか——」

チヨウはその先を続けることができなかった。

可哀想な人だ。なまじ、善良なだけに——憎い女を徹底的に責めることすらできない。

言ってしまうばいいのに。——お前が死ねばよかったんだ、と。

「……彼は、わたしのことをなにか言っていた？ 最期に、わたしに？」

「そんな暇はなかったよ。……一瞬だ」

僕の頬を張った手を抑えるようにして、恋人を奪われたあわれな少女は涙を一粒こぼした。

「だけど」

僕はもうずっと昔の出来事のような——こんな結末を迎えるなんて知るよしもなかったダンスパーティーの夜を思い出していた。

「卒業したら——君を、家に呼びたいって……ご両親に紹介したいって——そう言っていたよ」

チヨウはとうとう、顔をおおってワアツと崩れ落ちた。僕は咄嗟に伸ばした手を握り戻してその場から離れた。

彼女からセドリツクを奪った僕に、彼女を慰める資格なんて——ない。

馬車の前には見慣れた三人組が落ち着きなく立ち尽くしていた。僕を視界に認めて、真つ先にハリーが駆け寄ってくる。

「マリアー！ その頬……」

「まあ！ あなた、ぶたれたの？ なんてこと——あのチヨウとかいう女……つらいのは自分だけだとも思ってるのかしら。目の前で死——ごめんなさい。でも、マリアのほうがよっぽど、」

「やめて、ハーマイオニー。……やめて」

馬車へ乗り込んで、ハリーの手に誘導されるままに彼の肩へともたれる。目を閉じれば、チヨウとセドリツクの美しいダンスと華々しい笑顔が浮かんだ。——もう、二度と取り戻せない。

「チヨウには僕を叩く権利も、責める権利も、恨む権利もあるよ。そして僕には——チヨウに憎まれる権利がある」

僕は、彼女の最愛も未来をも奪ったのだ。

セストラルの引く馬車が動き出す。ハリーにも見えるようになってただろう。それになにも告げず、窓枠から遠退いていくホグワーツ城を見上げた。

後戻りなんか、とつくにできなくなっていた。

キングス・クロス駅にはシリウスが待ち構えていた。それから、ルーピン先生の姿もあつた。不思議に思つて、ハリーと共に駆け寄りながら首をかしげる。

「シリウス、どうして?」

「ああ、いけないな、マリア。質問の前に君は言わなければならないことがある」

ハリーと目を合わせて、ますます首をかしげる。ルーピン先生はなぞなぞに悩む子供を見るような目で僕らを見守っていた。

「——おかえり。ハリー、マリア」

高い背を曲げて腕を広げるその人に、ハッと目を見張る。ああ——

「——ただいま! シリウス!」

十四歳の子供二人を受け止めた腕と胸板はこの世のなによりも頼もしかった。

「……でも、ほんとうにどうして?」

ぎゆうぎゆうと苦しいくらいに僕らを抱き締めるシリウスの肩から顔を覗かせて、ルーピン先生を見上げる。

「つまり君たちは、伯父さん伯母さんの元に戻る必要はない——ということだよ」

ぱつくりと口を開いた。ハリーもまったく同じ顔をしていた。

「それって……それって——！」

「ああ。——一緒に住もう、私の子供たち」

憂鬱でしかなかった目の前が途端に明けた気がした。

シリウスやルーピン先生が僕らの荷物を持ってどのように帰ろうかと相談する中、僕の肩を叩いた存在があつた。——ドラコだ。

涼しげに笑むドラコが目線を流した先にはマルフォイ夫妻が立っていた。夫人が緊張の面持ちで息子を見ていた。——ルシウスは感情の見えない瞳で僕を見ていた。

「ドラコ……？」

僕らの様子に気付いたシリウスやルーピン先生もどことなく警戒するように夫妻を見た。ハリーは困惑していた。そして僕も、戸惑っていた。

少なくともルシウスは闇の陣営だとはつきりしている中で——彼の前で僕に接触するだなんて。……らしくないぞ、ドラコ・マルフォイ。

「ドラコ、これは」

「君の気持ちを考えるなら——今、言うべきことではないんだろうな」

ドラコが僕の手を取った。瞳を細めて、頬を撫でた。

「ドラコ……？」

「だが、君もご存知の通り僕は狡猾なスリザリンだからね」

ドラコは笑った。青と灰のあいだの溶ける氷の瞳が美しかった。

「君が好きだ」

新しい波乱が幕を開けようとしていた。

炎のゴブレット【番外編】

あなたと踊った話

差し出された手に少女はそれはげんなりとした。

「君もなの？ ——セドリック」

「僕とは踊ってくれないのかい？ マリア」

いかげん壁の花を決め込もうとしていた少女へ、ハンサムな顔立ちをふんわりと笑ませて彼は手のひらを差し出し続けた。

「また僕がチョウに睨まれるんだけど？」

「睨む彼女って素敵だと思わない？」

「つまり僕は当て馬ってことだね」

「冗談。彼女にはちゃんと断ってるよ」

セドリックの弁解通り、彼の恋人でありダンスパートナーのチョウ・チャンは友人マリエッタと楽しそうに談笑していた。——チラリチラリと壁の二人を気にしながら。

絶対に大丈夫じゃないぞ……。マリアは思ったが、純粋にマリアとのダンスを楽しみたいと期待に瞳を輝かせているセドリックを断れるほど、マリアはチョウに心を寄せているわけではなかった。セドリックがチョウに首ったけなのは、散々のろけを聞かされてきたマリア自身がよく知っている。彼は本当になんの下心もなく、誠実そのままに妹分としてかわいがるマリアと踊りたいだけなのだ。まったく、罪な男である。

マリアは嘆息した。

「君でラストだからね」

「どうだろう。マリアは人気だから、まだまだ君とのダンスを諦めき

れない諸兄がいるかもしれないよ」

「穴熊の貴公子がそれを言うのかい？」

「獅子の姫君に夢中な生徒がうちの寮にもいるってことだ」

顔を見合わせて、二拍ほどおいてくふくふと二人は笑い合った。

「しかたないな。完璧にリードしてくださいね、ミスター？」

「レディに恥をかかせないよう、努力するよ」

セドリツクの手を取って、マリアはふわりとドレスをひるがえした。タイミングよく曲がスローテンポに替わる。見目麗しい少年少女は手を取り合って中央へと躍り出た。

「それで？　ほんとうはどういう用件だったんだい？　セドリツク」

「かなわないな、マリアには」

体を揺らしながら、セドリツクは苦笑した。マリアの猫のような勝ち気な瞳は得意気にニンマリとしていた。そんなところもかわいいと、セドリツクは慈しみを込めて思うのだ。

「——君は、僕の父に会っただろう？」

小声で、ためらいつつもセドリツクは切り出した。

「ああ、うん。ワールドカップでのこと？」

「そう。率直に聞かせてほしいんだけど……どう思った？」

セドリツクの率直という言葉に甘えたからではない。ただただ顔に出てしまったのだ。——あの人は苦手だ、と。

予想していたのだろう、セドリツクは苦々しい顔を慌てて取り繕おうとしたマリアにやんわりと微笑んだ。

「やっぱり、いい気持ちはしなかったらうね」

「いや、まあ、ウーン……」

感情を誤魔化すことが得意でないマリアは、結局うなずくしかなかった。彼——エイモス・デイゴリーの息子を取り戻したい切実な願いからとある大事件へと発展した記憶を持つマリアだ。なにより、マリアはハリーであった頃に彼から手酷く現実を突きつけられた。——お前のせいでどれだけ死んだ。……と。苦く思うのも無理はない。

「どうしてそんなことを？」

ドラコとの地獄のダンスレッスンを経て、意識を別に飛ばしながらも完璧なフォローステップを取れるようになったマリアは——マリアもハリーも座学や理論よりも実践型だ——リボンを愛らしく揺らしながら小首をかしげた。やっぱりかわいいなあ、とセドリックは思うのだ。恋人に向けるものとはちがう——じゃれつく仔猫をかまうような気持ちだ。

「マリアには色々相談してるからね」

「……チョウのこと？」

幸せをにじませながらもほんのり複雑そうにセドリックはうなずいた。

「僕はあと一年で卒業だ。そうすれば、彼女を一年、ホグワーツに置いていくことになる」

「うん」

相槌を打ちながらも、マリアはその続きがわかった気がした。

「――彼女を、家に呼んで両親に紹介しようと思うんだ」

セドリツクはそれまでの不安げな声色を捨ててはつきりと言いつ切った。

「おめでとう」

マリアは破顔した。猫に似たぱつちりとした丸いアーモンドアイを細めて、やわらかな陽射しにまどろむように口元をゆるめた。――こんな時ばかり、大人のような顔をする。セドリツクは目の前の少女の、子供のようでありながら大人の顔を持つアンバランスさこそが彼女の魅力なのだ実感していた。

「気が早いよ。まずは僕が卒業しなくちゃ」

「でも、そういうことでしょうか？」

「……たとえば、挙式に呼んだなら君は来てくれるかい？」

「もちろん！」

今度は弾けるように笑ってマリアは幼げに声をあげた。隣を踊りながら通り過ぎた上級生の男子がマリアを見て微笑まじげに目尻を下げた。

「それで、挙式の前に両親の説得が難関点ってわけだ」

「ああ。彼女は東洋人で、はつきり言って父が彼女を傷付けないとは断言できない」

マリアは再びエイモス・デイゴリーの顔を思い浮かべた。悪気なくチョウを侮辱したりは……してしまいそうだ。本人はあくまでも善性で、そこに悪意がないことがなおさら手に負えない。

「どうすれば彼女を傷付けずにいられるか……」

「そんなのはさ、方法はひとつだけだよ。セドリツク」

繋いでいた手を引き寄せ、マリアは内緒話をするように彼の耳へと唇を寄せる。

「——なにがあってもチョウの味方をするんだ」

囁かれたセドリツクは灰色の瞳をパチリとさせた。

「……それだけ？」

「それだけ」

悪戯っぽくウィンクを送ったマリアに、ますますセドリツクはきよとりとした。

「それだけでいいんだよ。——僕は、そうして世界中のなによりも尊敬していた両親に齒向かい、妻と子を守りきった男を知ってるんだ」

たとえ妻を亡くそうとも——愛を貫き通したどうしようもなく不器用な男がいたのだ。

「セドリツクもご両親のことが好きみたいだから、むずかしいかもしれないけど」

「そうでもないよ、きつと。もちろん、両親のことは好きだけどね」

セドリツクは肅然と目を閉じた。マリアの言葉を噛み締めていた。

「……かっこいいな、その人」

「ほんとうに」

最愛の人——彼にとつての光と談笑する樽の不器用な男を横目で確認する。ほら、あんなにも——二人は幸せそうだ。

曲の終わりと共に手を離し、大袈裟に礼をしてセドリツクと等身大に顔を見合わせる。ニツと二人同時に企むような笑みを作る。

誰にも、まだ、秘密。——これは二人だけの秘密だ。

「おめでとう、セドリツク」

マリアは繰り返した。セドリツクはくしゃくしゃに笑った。

どうか、あなたたちの未来に——幸が多からんことを。

ハリー・ポッターと胡蝶の夢

1

——ハリー？

肩を揺すられ馴染みの声に起こされた。ハリーと呼びながら、なんだって僕の肩を揺すめるのか。ハリーはきつと隣だ。

「ハリー、こんなところでなにをしているんだ。起きろ、マリアはどうした」

「なに言ってるのさ……ドラコ」

せつかく心地よく芝生の柔らかさに包まれていたというのに、どうあってもまどろみから僕を引き上げたいらしいその人に渋々身を起こす。——鼻頭からなにかが落ちた。

「ん？」

目を開いた。だめだ。まだ脳が覚醒していない。目の前がずいぶんとぼやける。地面と同化してなにを落としたのかもわからない。

「おい、眼鏡が落ちたぞ。ハリー」

「だつてさ、ハリー。君ってほんとうっかりして——る——」

ぼやけた視界に映った、眩しい光の色をしたその人——らしき輪郭と、はた、と見合わせていた。

「……ハリー？」

——声が。

……いや、いや、落ち着こう。三度目だ。三度目ともなればさすがの僕も慣れて——そんなわけないだろう！

「……………ドラコ、眼鏡、貸してくれる？」

「貸すもなにも君のものだ」

僕の代わりに眼鏡を拾ってくれていたドラコから受け取って、パツドを鼻に乗せ耳につるをかける。目の前がレンズを通してクリアになった。今度こそ輪郭まではつきりと見えたドラコは、柳眉を中央に寄せて怪訝に僕を覗き込んでいた。

……なつかしな、この感触。鼻根の違和感が顕著だ。マリアは幸運なことに関心のない父さんの目の悪さは受け継いでいなかったから、すっかり裸眼を謳歌していた。

「……………ドラコ、僕の目の色って、なに？」

「今日の君はおかしいな。緑に決まってるだろう」

当たり前前に言い切ったドラコに、僕は心を落ち着けて微笑んだ。

「——ドラコ、僕、分霊箱部屋のあのチェストは正直に言って趣味が悪いと思うってんだ」

「あのデザインの良さがわからないなんて君のセンスを疑うよ、マリ

——」

再び、僕らは間抜けに顔を見合わせた。次に豆鉄砲を食らったハトの顔をさらすのはドラコのほうだった。

「……………君、まさか——マリア？」

「君以外にそう呼ばれているハリー・ポッターのことを指してるなら、僕だね」

意識が遠退いていくような心地で力なくうなずいた。ドラコも同様だった。

「……つまり、今、マリアの肉体には——？」

「……たぶん、弟ハリーがいる」

ヒュウ。と、僕らのあいだを乾いた風が通った。——そうだ、風。なぜ僕は外で眠っていたのか。

「ねえドラコ、君、ここで僕を見付けてくれたの？」

「いや……」

ドラコは途方にくれたと言わんばかりに周囲を見回して僕へと首を振った。

「僕もここで眠っていたんだ。もしくは倒れていたのかもしれない。それで、隣に君が寝ていたから——」

「つまり、先に起きたってだけで状況は把握できてないわけか」

僕も改めて見回す。ホグワーツの敷地内だ。湖が見える。普段とにも変わらないように思えた。

「ともかく、まずはハリー……ややこしいからマリアってことにしようか。マリアと合流しよう。あっちも今頃大パニックだぞ」

立ち上がれば、ドラコは校舎の方向を見て薄く笑っていた。

「——どうやら、こちらからおもむく必要はなさそうだぞ」

「え？」

艶やかでたつぷりとした深い赤毛を靡かせて、少女がこちらへ向

かっていた。ああ、マリ——ん？

「ポッター！ 次の薬草学は第二温室だって、先週スプラウト先生がおっしゃったでしょう！ まさかまたサボる気じゃ——ミスターマルフォイ？」

腰に手をあて、目一杯胸をそらして怒鳴り込みに来たマリア——にそっくりの少女は、ドラコを見ておずおずと語気を静めた。少女と僕らのあいだになんともいえない沈黙が落ちた。

「卒業生のあなたがどうしてここに……それも、縮み葉を？ ……ポッター、なにを企んでるの。内容によつては——いいえ、内容関係なく、このことはマクゴナガル先生にご報告させていただきます」

ハッと自分を取り戻し、地団駄でも踏み鳴らすようにしてきびすを返そうとする少女に、咄嗟に腕を掴んでいた。ふわつと踊った赤毛から花のおいがした。気がした。

——まずい。よくわからないけど——なにかすぐくまずいことになつてる気がする！

「待って！ 僕たち、」

「放して！ ポッター、あなたのバカげたイタズラとやらに巻き込まれる気はないわ！」

「ちがうんだ、話を……あの、僕たちの話を、聞いてくれないかい？」
「……………あなた、なにか変なものでも食べたの？ あなたが、わたしに、うかがいを立てるの？」

全身をもつて疑わしいと、一言一言区切って問う少女に、僕は背中をなにか奇妙なものが滑り落ちていくような感覚に襲われていた。

——うそ。

「わたしの意思なんてすべて無視で、わたしがどれだけ違反はダメ、彼へのイタズラをやめてとお願いしてもヘラヘラ笑ったあなたが、わたしにお願いをするの？ あなたはそれが叶うと思うの？ ずいぶん虫のいい話ね」

「え——あ」

うそだ。うそだろう。間近から見た彼女の瞳に心臓が音を立てる。

緑色の目で——僕と同じ目で、背中まである波を描く赤毛で——誰かを一心にかばえるような、美しい心を持った人で——そんなことが——まさか——まさか——

「失礼、ミス。乱暴をしようとしたわけではないのです。ただ……私たちはあなたを知らないもので」

ドラコが僕の手をやわくほどいて、彼女とのあいだに立った。片手は僕の背へと添えられていた。情けないくらい僕は動揺していた。

「……なんの冗談ですか？ ミスター。ああ、わたしののような下賤な血は名前を覚えるにも値しないと？」

「いいやちがう。どうか落ち着いて——まず、私……僕はルシウス・マルフォイではない」

少女はとうとう正面から向き合って、宝石みtainなエメラルドの瞳で僕たちをねめ付けた。——きれいだ。

「もう一度聞きます。——なんの冗談なの？」

「あ……」

声が震える。背にある手がゆるりと撫ぜる。これ以上頭がぐちゃぐちゃになってしまわないよう、そこに意識を集中させる。やさしくて、きもちいい——落ち着く手だ。

「ハリー、僕が話す。……それでいいな？」

「う、ん」

「……ハリー？」

ああ――

「あなた、ジエームズではないの？――ハリーというの？」

ああ、ああ――あなたの声が、ディメンターや誰かの記憶が見せるあなたじゃない、ほんとうのあなたが――僕の名前を――僕を――

「僕はドラコ・マルフォイ。そして彼は――ハリー・ポッター」

少女が片眉を跳ね上げる。ジロリと僕とドラコを見回す。そして一拍おいてから――続けた。

「リリーよ。――リリー・エヴァンズ」

二度と触れられないその人の過去に――僕は出逢った。

秘め事ならばお馴染みの必要の部屋にて、少女時代の母リリー・エヴァンズを前に僕は縮こまっていた。(リリーは必要の部屋の存在を知っていたく感動していた。)

娘に母さんの名前をもらっておいてよかった。リリー・ルーナがいなければ、目の前のその人の名前すらも呼べたかどうか怪しいところだ。

「つまり、こういうことね？ あなたたちは確かにポッター家とマルフォイ家の子供で、だけどここの時代に生きる人間ではない。どうして、どのようにして時を移動したのかはわからない——そうね？」

コクコクとうなずいて、母の目が僕へと向けばやっぱり背を丸めて小さくなってしまう。……あの緑の目は、なんて面映ゆいのだろう。

「でも、年代は近いでしょう？ 察するに……そうね、息子か孫あたりなんじゃないかしら」

ビクツと肩が跳ねた。リリーは正解を見つけたとばかりに得意気な顔をした。そうすれば、ほんとうにマリアそっくりだ。……マリアが母さんに似たんだ。

隣から恨めしげに肘で小突かれる。ごめんって、そんな目で見ないでよ、ドラコ。今、僕、すごくセンチティブなんだから。

「どうして、そう？」

「だって、あなた……ええと、ドラコ？ ルシウスを知ってたじゃない。学生のあなたがルシウスを知っているなら、彼以降の子孫なんだと思っただわ。はつきりとルシウスの名前を上げられるくらい近い血縁なら、息子や孫だと思ってしまう？ ——わたしの勘としては息子

ね。どう?」

まあるいアーモンドの瞳をキラキラさせて、リリーは正解を求めた。僕らは目を合わせ、どちらともなくうなずいた。

「ええ、おっしやる通り——僕はルシウス・マルフォイの息子です」

「僕は……ジエームズ・ポッターの」

「まあ! ほんとうに?」

リリーは飛び上がって、それから、疑いではなく好奇心の眼差しで僕らを再びじっくりと見回した。

「ドラコ、あなたがミスターマルフォイの子供だというのはわかるわ。こんなにもそっくりなんだもの。でも、そうね——お父さまよりよっぽど紳士的で素敵よ」

ドラコは苦笑した。かつての父を知っている彼としては、マグル出身であるリリーを父がどんなふうに扱ったかは——想像に難くない。

「そして——ハリー?」

僕は再び緊張した。なにを言われてしまうのだろうか。出会い頭の剣幕から、この母はまだ父と不仲である頃の母のはずだ。ジエームズそっくりの僕を見て——なにを——

「あなた——とってもかわいいわ!」

花咲くようにリリーは破顔した。ドラコ共々、僕は唾然とした。

「不思議ねえ。まさかあのジエームズ・ポッターからこんなにおとなしくてかわいい子ができるなんて。見た目はそっくりだけど——よ

く見れば瞳が緑色なのね！ 綺麗な目だわ。きっと性格や目はお母さまに似たのね。それつてとつても良いことよ！ ……あ、ごめんなさい。お父さまに似るのがいけないってわけではないのよ。 ……才能とかなら」

こぼれ出た母の本音に、僕はやつと肩から力が抜けて笑えた。そうだよ。——あなたから、この瞳をもらったんだ。

「大丈夫です。僕、ちゃんと知ってます。その——父が、一部の人によくない態度を取ってたつて。親友たちと一緒に、問題児だったんだ」
「そう！ そうよ！ ジェームズ・ポッターにシリウス・ブラック！ あの二人ときたら——ご、ごめんなさい。ハリーはきつとお父さまのこと、好きよね？ 他人から父親をこんなふうに言われるのは気持ちよくないわね……」

他人。その言葉にツキリと胸が痛んだ。自分がジェームズ・ポッターと結ばれるだなんて——あなたが僕の母親だなんて、思い付きもしないんだろうな。

「いいえ。嬉しいです。 ……僕、父さんから父さんの話を聞いたことはなくて」

ポツリとこぼす。あなたたちは、僕がまともに話せる前に——死んでしまったんだ。

「いつも他人から両親の話を聞くんです。それで、想像して——だから、あなたの口から父さんのことが聞けるのは、とても嬉しい」

母親が父親の話をする。そんなごくありふれた普通が——こんなにも尊い。

「……そう。わたしはどちらかといえれば彼らが苦手だから、あなたの理想とはちがう形になるかもしれないけど——ハリーが望むのなら」

リリーは優しく僕の頭を撫でた。なにかしら事情があることを察して、それを問わずにいてくれる心遣いに、母の体温も含めてじわりと視界がゆがんだ。左手はドラコに取られていた。——なんて、あたたかい。

「そうと決まれば透明マントだわ。あなたの父親から拝借しまし
う」

「へ？」

余韻を吹き飛ばす勢いでリリーが立ち上がる。マリアと同じ色合
いの髪が遅れてゆるやかに波打った。

「わたし、今日一日あなたたちに付き合うつて決めたの。どうせサ
ボっちゃったんだもの。今さらよ。きつとメリーならノートを取っ
てくれているわ」

「リ、リリー？」

「あなた、ポッター家の子なんでしょう？ 当然、透明マントのことは
知ってるわね？ もう受け継いでるのかしら。ポッター……ジェー
ムズはさんざん見せびらかして悪用三昧だけど——見たところ、わた
したちとそう歳が変わらないように見えるわ？」

「十四歳です。ホグワーツの四年生で……」

「あら！ 偶然ね、ぴったり同じ年よ！ どうりでそっくりなわけだ
わね。……いいわ、ここで待ってて。ジェームズだっていずれ譲る家
宝を自分の息子に貸すくらい、わけないでしょう」

「えっ!？」

飛び出した発言に慌てて立ち上がる。隣でドラコもとんでもない
とばかりに目を剥いていた。

「と、父さんには……！」

リリーはクスクス笑った。

「冗談よ。あなたたちのことは言わないわ。闇の魔術なんかと間違われたらゾツとするもの。ここだけの話なんだけど……ハリー、あなたのお母さまには内緒にしているね？——実はジェームズ・ポッターはリリー・エヴァンズに夢中なの。透明マントを借りるくらい、わたしが丸め込んでみせるわ。任せて」

パチツと緑の目が可憐にウインクした。そしてリリーは有無も言わずさつきと扉から出ていった。思考も行動もおいていかれた僕たちは閉じた扉を見て呆然とするしかなかった。

「……ハリー、君の母君は、なかなか……」

「僕、^{マリア}父さん似だつてよく言われるんだけど……やっぱり母さんにもよく似てる気がしてきた」

母さんも十分おてんばだよ……。

再び腰を落ち着けて、生きた母と言葉を交わせた感動によって誤魔化されていた現実が遅れてやってきて、じわじわと胃が痛んだ。

「どうしよう、ドラコ。これ、とんでもないよ。——父さんと母さんが学生の頃だつて？」

記憶の中にしかない母さんがあんなにもイキイキと——そうじゃない。そうじゃなくて。

「いったい何が起こってるんだ？ 僕はマリアじゃないし、こんなにも過去に——アルバスだつて知らないくらい時間をさかのぼってし

まうだなんて。もしも僕たちが余計なことをして、たとえばそれが原因で僕らが生まれなくなったりしたら？ そうだ、ハーマイオニーの言っていた親殺しのパラドックスみたいなの——」

「ハリー。ところで、鏡でも見てきたらどうだ」

「……ハア？」

まったく論点からずれた返答をされて、胡乱に彼をにらんだ。君はもつとこの事態を深刻に受け止めるべきだ！

「まだ自分の姿を確認していないだろう。見てこい」

「なんだよ、えらそうに」

「弟を溺愛する君なら気付けると思うが？」

「………」

言葉に従うのは癪だが、なにやら笑いを堪えている彼の様子に思うものがあつて指示通りに鏡を求める。部屋は当然応えてくれて、すぐそばに手鏡が伏せて置かれていた。

鏡の中を覗き込む。と。

「……あれ？」

じつくりと、緑色の目のそいつと見つめあった。

「——『僕』？」

鏡に映ったハリーは、弟ではなく僕^{ハリー}だった。

弟の髪は長年のブラッシングが効いてふわふわだ。しかし鏡のハリーはくしゃくしゃで、身だしなみという言葉をバカにしてるみたいだった。——なつかしい。

ドラコはマリアも知ってるドラコなのに、僕は『僕』だなんて。ますます、どうなってるんだ。

「——思うに」

ドラコは語った。

「ここは僕らの世界——はじめの世界ともマリアが存在する世界ともちがう、平行世界なんじゃないか？」

「平行世界——？」

優雅に足を組んで、金色の睫毛の奥に秘されたアイスグレーがするどく輝いた。

「つまり、まったく別の世界で、ここで何があつたとしても僕らの生きる未来には影響しないんだ」

なるほど、とうなずく。フローレンスの夢のようなものだろうか。

「そんなところに、どうして僕らが？」

「さあ」

プラチナブロンドは首を振って呆気なく推理を終えた。

「原因は当然不明だ。グレンジャーを見習って、図書室でそれらしき文献を探す他ないだろう。……当分、リリー・エヴァンズの面倒に与りながらね」

彼女が飛び出していった扉をもう一度見る。——いったい、この先僕らはどうなってしまうのだろうか。

いつの時代だって、学生の活気溢れる声は変わらず心を躍らせる。

「どう？ ハリー、ドラコ。あなたたちの時代とちがう箇所はあるかしら」

小声でリリーがささやく。イエスもノーもないが、返事のもりでチョン、と指先だけで腕をつつけば、楽しそうにクスクス笑われた。

一日中付き合うという宣言通り、獲得した透明マントを抱えて戻ってきたリリーは残りの授業すべてをサボろうとしていた。それを、おとなしくマントをかぶって待っているから授業に出てほしい、僕らのために時間を無駄にしないでほしい、と説得して今に至るのだ。次はマクゴナガル先生の変身学の授業だ。

「それにしても、ほんとうにおもしろいわ。あのルシウスとジエームズの息子が仲良しだなんて！」

マントからうっかりかかとうが出ているだなんて間抜けなことにならないよう、極限まで近付いてほとんど腕を組むような状態にあった僕らは無言で見つめあった。

残念ながら、真実この見た目の頃の僕らは犬猿も犬猿だったとも。その言葉はあなたの孫のアルバスとスコルピウスに向けられるべきだ。

「リリー！ 探したわ、次の授業は出られるの？」

「メリーー！」

親しげに女子生徒がリリーへと駆け寄る。間違ってもぶつかつたりしないよう、そつと壁へドラコを押し寄せて寄りかかる。

「薬草学、どうしてこなかったの？ 先生にはわたしからてきとうに言っておいたけど」

「ありがとう、メリー。あなたならそうしてくれるって信じてたわ。ちよつとトラブルがあつたの。でも、もう大丈夫よ」

「だってリリーだもの。お騒がせなあいつらとちがつて、リリーが意味もなくサボるだなんて思えないわ」

「嬉しいわ、メリー」

少女たちが華々しく語らう。……これって、僕ら、なんだか盗み聞きしてるみたいだ。そう、ドラコにアイコンタクトを送れば、ドラコもなんとも複雑そうにうなずいていた。彼の場合は、気まずさよりもプライドが邪魔をするのだろうか。

「あら、リリー？ どうしてその道を通るの？ こっちの方が近いじゃない」

「今日は遠回りをしたい気分なの。わたし、今、校舎案内をしているのよ」

「誰に？」

「目に見えない子供たちに」

茶目っ気たつぷりにリリーはうそぶく。まったくの偶然だとわかつてはいるが、リリーの目がまつすぐに僕らへ向けられてドキリとした。リリーの友人、メリーは不思議そうにしながらも、「わたしは早く着きたいからこっちから行くわ」と道を替えてしまった。

「……いいのかい？ リリー」

周囲の警戒はドラコに任せて、リリーへとささやく。リリーは人気者だ。ひとりでいればそれだけたくさんさんの友人に話しかけられた。そのすべてをリリーは断ってきたのだ。僕たちのために。

「いいの。ほんとうならあなたたちを連れて校舎を歩き回りたいくらいなのよ？　せっかく未来から来てくれたんだもの。でも、それは明日にするわ。明日は土曜日ですからね」

「僕たち、あなたが思ってるほど子供じゃないよ」

たまらなくなつて、噛み締めるように告げた。ほんとうは、とつくに大人なんだよ。——未来のあなたよりも。

「透明マントさえあればどうにでも——」

「だめよ。それで、仮に誰かに見つかったらどうするの？　誰もあなたたちを知らないのよ。かばえないのよ。——誰も、たったひとりだつて」

ハツとした。透明マントを受け取り、生徒たちがいなくなる授業時間まで必要の部屋にこもろうとしていた僕らに、リリーが今の時代の校舎を案内するだなんて言い出したわけを、ここにきてようやく理解した。

「あなたたちからすればお節介でしようけどね、あなたたちが——ほんとうはわたしの子供にあたいする歳と知って、それで誰一人と味方も知り合いもないこの世界に放り出すほど、わたしはつめたい人間じゃないわ。たとえ歳が同じだとしても——あなたたちは、わたしたちの『子供』よ。先生方に相談するのだから慎重にならなくちゃ。あなたたちのことは——このリリー・エヴァンズが責任を持ちます」

見えない僕らに向かって凜と宣言する少女は美しかった。まさしく白百合のごとき気高さと輝きを内から放っていた。

「ありがとう……リリー」

ずっと伝えるべき場所をうしなっていた言葉を、今、ようやく届ける。

ありがとう——僕の母さん。

変身学の教室の前でリリーを見送る。授業が終わるまで廊下で待つ約束をした僕らは、人影がなくなるのを待ってから口を開いた。

「君の母君は、」

「うん」

「美しい人だな」

「そうでしよう?」

照れ臭さから、わざとらしく大仰にうなずいてみせた。さらに羞恥が募った。失敗だ。

「もちろん、僕の母上だつてすばらしい人だが」

「ウワ、相変わらず君つて……はいはい、聞きますつたら」

「母となる人はどうしてこうも……愛が深いのだろう」

思わず吹き出していた。だつて——あのドラコ・マルフォイが、大真面目な顔で愛を語るだなんて。

「君つて——どうして時々、そんなにかわいくなつちやうんだい?」

「斬新な喧嘩の売り方じゃないか、ポッター」

ジロリと冷たいブルーとグレーの目で見られたので、さっさと降参のポーズを取った。

「そりゃあ……愛が深いから母になるんだよ」

眩いてから、言葉にすると軽薄だなあ、なんて苦笑する。思えば、母

親の愛さえ実感できれば、トム・リドルだって——やめよう。こんなのは、不毛だ。

会話はなくなつて、どこかから聞こえる生徒たちの声に耳をすませる。——平和だ。とても、これから闇の時代が深くなるだなんて思えない。

「普段の僕なら、今のうちに図書室だとかに行つておきたいところなんだけど」

「……ミスエヴァンズとの約束はたがえられそうにないな」

「困つたことにね」

胸に広がる切ない心地よさにゆるゆると笑う。まるで生徒も学校も変わらないのに——ここは『僕』だって知らない過去なんだ。

「……変な気分だ」

手慰みに透明マントを揺らした。向かいの壁が奇妙な模様を作つた。

「だつて僕、今、ハリー・ポッターなんだよ。……ロンとハーマイオニーが側にいないことが、すごく変だ」

もしも二人がいたなら、母さんの言い付けだつて守らなかつたかもしれない。ハーマイオニーは約束を取るか自分の時間を取るか悩んで、ロンはそのうち飽きててきとうを言つてハーマイオニーに叱られるんだ。それで、結局ハーマイオニーは図書室を取る。『僕』の親友たちだもの。目の前にいなくなつてわかる。

「隣にいるのがドラコ・マルフォイで悪かつたな」

不機嫌に吐き捨てられて、思わずドラコを見つめた。

「なに言ってるの。ロンとハーマイオニーが側にいることは当たり前だけど——君が前にいることだって当たり前じゃないか」

僕はドラコを見つめた。ドラコも僕を見つめた。

「ハリー・ポッターのライバルはドラコ・マルフォイ。そんなの——『僕』を知る人間なら誰だって知ってることだよ」

ドラコは僕を見つめた。見つめた——アイスグレーにたつぷりの感情を乗せて。

「君が近くににいるのだからって当たり前のことだ。さんざん行く手を邪魔しておいて、なにを今さら」

負けじと目を合わせる。開心術を使うときだってここまで真剣にならないと、そう思えるくらい、心を閉ざす才能に特化している彼の感情を読もうと必死だった。——こんなにも、瞳が語っているから。

なんだって君が忘れるんだ。どこへ行くにも、なにをするにも君が現れて、僕に存在感を示して、とことんまで僕をイラつかせて——ドラコ・マルフォイという人間を刻んでいったくせに。

「今さらか」

「今さらだよ」

氷の溶けゆく熱い瞳にまぶたが落とされた。ドラコは僕を見ることをやめた。再び会話はなくなつた。

沈黙。先ほどとちがうのはただひとつだけ——彼が僕の手に触れた。それだけだった。

授業から解放された生徒たちが飛び出していく。壁に寄って、リリーの姿を待つ。そして――

「いい加減にして！ それは聞かないって約束でしょう!？」

「待ってくれよ、エヴァンズ。だって気になるじゃないか？ 君が僕におねだりしたんだもの」

「気持ちの悪い言い方をしないで！ 貸してほしいと言っただけよ！」

「その貸したマントはどこにいったんだい？ 君は持つてない」

つきまとうくしやくしや頭の男を振り払いながら、足を踏み鳴らし、ついでにリリーが現れた。――父さんだ。スネイプ先生の記憶で見たいつかと同じ――かつこつけたわざとらしい髪に丸い眼鏡、ハシバミ色のつり上がった瞳を持った細身の男だった。隣には若きシリウスがいた。(まったく、信じられないくらいハンサムだ！)シリウスに従うみたいに小柄な少年――ピーター・ペティグリュー。そして全員を見守るような形でリーマス・ルーピンが控えていた。

……母さんとはちがって、心構えができていたからだろうか。生身の父さんを見て、僕は感動よりも先に顔をおおってしまった。なんてやるせなさだ。――あなたの孫はほんとうにあなたそっくりですよ、父さん。ジェームズ・シリウスのこと、ホグワーツに呼び出された時くらい、恥ずかしくて情けない。父さんは母さんが本気で嫌がってるのをむしろ愉しんでいるようだし、シリウスは愉しそうな父さんを見ているのが楽しいみたいだ。だめだこの名付け親。ルーピン先生はすっかり諦めきっているし、ペティグリューは状況を理解しているのかすら怪しい。なんて頼りにならないんだ。

リリーがきよろ、となにか――考えるまでもなく僕たちだが――を探すように目をさまよわせた。嫌がるドラコを引っ付かんでどうに

かりリーに近付く。軽く肩を叩く。それだけで、リリーは見えない僕らへと振り向いて微笑んだ。

「用はそれだけ？ わたし、もう失礼するわ」

「ああ、待ってよ、美しい人。僕の白百合」

「そのバカげた呼び名はやめてって言うてるでしょう！」

「ほうら、お前の姫が怒ったぞ」

「ジェームズの姫じゃなくて今ではグリフィンドールの姫だけどね」

「全部あなたのせいよ！」

リリーの激昂に、まったくだと激しくうなずいた。父さんのせいで娘にまでそのバカげたあだ名は継承されたんだぞ！ 見えないことをいいことにジェームズを目一杯にらむ。クックと声を抑えて笑う隣の王子の背中もつねっておいた。

「ともかく！ わたしにかまわないで！ 特に今日はダメ！」

走り出そうとしたリリーの腕をジェームズが掴む。出会った時の僕と同じ行動なあたりに血を感じつつ、彼の表情を見て再びうなだれた。完全に好きな子をいじめたいクソガキの顔だった。たとえばうちの長男が次男を泣かせようとしている時のような。ロージイ大好きなスコープウスだってそこまでは強引にしなかったぞ。

心の中で大きく嘆息して、無言魔法と杖なし魔法の合わせ技でデパルソを唱える。バチンツと間抜けにジェームズが弾かれた。隣のシリウスに受け止められ、ガツチリ抱かれて支えられたジェームズはきよとりとっていた。……そんな顔は年相応だったのに。

「……エヴァンズ？ 今、なにを？」

「わ、わたしじゃないわ。わたしはなにも……」

そこでリリーはハツと目を開くと口をつぐんだ。「失礼」固い声で

残してジェームズたちから離れる。リリーを追って、若き父と名付け親、そして恩師に後ろ髪を引かれつつもどこかの廊下へとたどり着いた。

「……リリー？」

「——今の、どっちなの」

リリーの声は変わらず固かった。叱られてしまうだろうか。僕は縮こまった。怪我をさせるほどの威力でないとはいえ、人に向かって魔法を放ったのだ。——優しい母さんはきつと、そんなのは許さない人だ。

「ごめんなさい。あの——僕です——ハリーです」

「ハリー！」

張り上げられた声に肩が跳ね上がった。

「すばらしいわ！」

「アアツ、ごめんなさ——へ？」

「杖が見えなかったわ！ それに、詠唱も聞こえなかった！ 無言呪文なのね？ その上、まさか杖なしで——？ なんてこと！」

明らかにはしゃいだ声色のリリーに思わずマントから顔を出せば、待ってましたとばかりに頭を撫でられた。

「リ、リリー……？？」

「あいつはいけすかない男だけど、才能は本物よ。しっかりハリーに継がれていてよかったわ」

「……怒ってないの？」

「あら、どうして怒るの？ ハリーはわたしを助けてくれたんでしょ？ ——ああ、あいつらを心配して？ まさか！ あんなのは自業自得よ」

鼻息荒く吐き捨てたりリーに、ほんの少し彼女への理想が崩れて——だけでも、子供らしくて、人間らしくて、僕もくしゃくしゃに笑ってしまった。大好きな母さんをもっと好きになれた気がした。

「さ、次の授業に向かいますよ。こつちからなら人に会わないと思うわ。わたし、もつとあなたたちとお話したいの。未来のホグワーツではどんなことを勉強するのかしら。まさか四年生で無言呪文を習うの？」

勉強欲から緑の瞳を輝かせるリーに、ドラコと顔を見合わせてニヤリとしてしまう。

「あのね、僕たちのホグワーツではね——」

授業をすべて終え夕食時に別れる頃まで、リーとの時間は和やかに過ぎていった。

少年は眼鏡の奥にあるハシバミの瞳を冷たく細めて、赤毛の少女の

背を見送った。美しい少女だ。よく愛されて育った幸福な女の子——
—学年で一番の美少女だと噂される勝ち気で正義感の強い子——
こんなにも、僕にふさわしい。

「シリウス」

名家、ブラック家の嫡男でありながら己に犬のように付き従う親友をうかがい見る。彼のほうが身長が高い、というのはジエームズにとつておもしろくないことの一つであったが、彼が立派であればあるほど、隣に立たれた際の安心感と優越感はずいぶん自尊心を満たした。ジエームズなりに、親友たちを誇っているがゆえだ。

「やっきの、どう思う？」

シリウスの左後ろへと並んだピーター・ペティグリュウ、ジエームズの右隣に収まったリーマス・ルーピンへも悪戯げな流し目が送られる。

「誰かいたな」

「やっぱり？ そのための透明マント——てところかな」

少女が消えた先の名残を見透すかのように八つの眼まなこが宙を見た。

「僕の透明マントを使って隠れる誰か——これを暴くのって、最高のシヨーになると思わないかい？ ——いかがかな？ 悪戯仕掛人の諸君？」

大仰な身振りで一步を踏み出しクルリと回ったジエームズは、ローブを踊らせ芝居がかった仕草で礼をした。まるでどこぞのサーカスの座長のごとくだった。

シリウス・ブラックは同意を込めて笑った。ピーター・ペティグ

リユースはへつらうように笑った。リーマス・ルーピンは諦めるように笑った。

ジェームズ・ポッターはすべてを受けとめ——王様のように笑った。

事件は夕食後に起きた。さすがに女子寮で匿うのは無理だと、当然のことでしょう。ぼりしたリリーに送られながら八階へ向かう途中、窓から見えた光景に僕はドラコをつれて走り出していた。足音で気が付いたのだろう、リリーも驚愕しながら僕を追った。

「ハリー？ どうしたの？」

はぐれるのも悪手かと改めてリリーの手を取りながら、頭の中に忍びの地図の図面をえがいて人目のない道を選ぶ。

見えた。——ああ、やっぱり。

「——セブ！」

卑怯にも、中庭から校庭へと続く渡り廊下の奥、木々と塀に囲まれ人目の届かないそこで緑ローブの少年に杖を向けるジェームズ・ポッターがいた。シリウスはニヤニヤしながら塀にもたれかかり、ペティグリューは瞳を輝かせて観戦態勢、ルーピン先生は我関せずと夜月を見上げていた。

「あなたたち——またこんなバカげたことを！」

「ああ……エヴァンズ。君っていつもタイムリングが悪いよ。別に彼をいじめてるわけじゃないさ。一緒に遊んでるだけだ」

「ふざけないで！ 一緒に？ 彼で遊んでるの間違いでしょう!? そうやって——あなたたちみたいな弱いもの苛めの卑怯ものを見ると虫酸が走るのよ！」

「——弱くなんかない!!」

地面に尻餅をついてローブを汚していた少年が激昂した。リリー

は面食らい、誰もが少年——若きセブルス・スネイプに注目した。特に——

「おい、スニベリィー？ お前、誰に向かって怒鳴ってるんだ？」

ジェームズの杖が振り上げられる。バチツと閃光が彼の足元に走りズボンに焦がした。

「ポッター!!」

「生ぬるいな、ジェームズ。エヴァンズの前だからって紳士面か？」

「そりゃあね、君。君みたいに立ってるだけで女の子が寄ってくるハンスムでもなければ、我ら凡人は好きな子のために涙ぐましい努力をしなくちゃならないのさ」

「クツ、言いやがる」

「ポッター、それ以上セブに悪さをしてごらんない。わたしがあなたを呪うわよ」

ジェームズがスネイプ少年に、そしてリリーがジェームズに杖を向ける凶になる。僕もあわてて己の懐をまさぐって——あれ。ドラコを見れば、ドラコも両手を挙げて首を振っていた。僕たちの杖がない——？

目を前方に直せば、リリーにはシリウスが杖を向けていた。

「おいおい、やめてくれよ、我が友シリウス。エヴァンズは僕の想い人だって知ってるだろう？」

「エヴァンズよりジェーのほうが大切だからな」

「ワーオ、僕ってば貞操の危機？」

「ふざけるなど何度言わせるの！ わたしは本気よ。さあ、セブ？ こっちにいらっしやい。寮まで送るわ」

リリーのやさしくて傲慢に満ちた気遣いに——ヒュウ。嘲笑たつ

ぷりに口笛を吹いたのはシリウスだった。スネイプは惨めで堪らなかつたのだろう。歯を食いしばって立ち上がると、リリーからも背を向け走り出していた。

「セブ！」

「スリザリンの根暗君はせっかちななあ。——土産くらい持っていきなよ！」

再び、ジェームズがスネイプを狙い打つ——

「エクスペリアームス！」

ジェームズの杖が飛んだ。——僕の手元へと。リリーは己の手からなくなった杖に呆然として、すべての視線が僕へと集まっていた。目をネズミのようにキョロキョロさせていたペティグリューも、一歩引いて見ているだけだったルーピン先生も、すべてが。——これ以上、見ていられなかった。

「——なるほど？ 君が透明人間なわけだ。——ハリー・ポッター？」

驚愕に、僕とリリーは同時にジェームズを見遣った。なんで——父さんが僕を——？

「ほら——おいで？ ハリー」

ジェームズが腕を広げる。優しく微笑んで——まるで父親みたい

「ダメよ、ハリー！」

リリーの声が幕をへだてた一つ向こうのように遠く聞こえた。——

―僕はジェームズ・ポッターの腕の中に収まっていた。

「いいこだね、ハリー。さあ……顔をよく見せて？」

ジェームズが僕の頬を両手で包む。そして。

「ウツ!？」

―父さんに、僕は首を絞められていた。

「――ツなにをしてるの！ やめなさい、今すぐやめて！ ジェームズ・ポッター!!」

「いやあ、すごいな。ちゃんと体温があるし、苦しむ顔も完璧だ。ほんとうに生きてるみたいだ」

「ポッター！ ハリーを放して！」

リリーの絶叫に、飽きたオモチャでも捨てるみたいにあつさりとしてジェームズは僕を解放した。だが、杖はジェームズに取り返され、シリウスの杖先がリリーから僕へと移動していた。

「……ポッター、あなた、ぜつたいに後悔するわ。ハリーにそれ以上暴力を振るってみなさい。あとで死ぬほど後悔するのはあなたよ」

「ふうん？ そうなのかい？ ハリー？」

再び、ジェームズの片手が僕の首へと伸びる。首筋を撫でて、頬に添わされる。―僕は、すっかり動けなくなっていた。

父さんが僕に危害を加えようとした。シリウスが僕に杖を向けている。大好きな二人に―敵として見られている。

「ポッター――！」

「それで？ 君はいつたいなんなの？ どうして僕のマントを使って

までエヴァンズの側にいた？」

「あなたには関係のない話よ」

「ないわけないだろう。この顔をごらんよ、薄気味悪い。エヴァンズ、僕は君のことを想って言ってるんだよ。だってほら——僕の顔に君の目だなんて、まるで僕たちの子供みたいじゃないか」

「おぞましいことを言わないで！」

「ほうら。だろう？　つまりはこれは僕たちをからかうための誰かの悪意さ。闇の魔術だよ。あのスニベルスと同じで君は騙されてるんだ。だから僕が、こうして君を助けてやったのさ」

両親の声が左右から脳を殴る。薄気味悪いのか。おぞましいのか。

僕は——父さんと母さんに望まれていないのか。

「いいえちがうわ。あなたはわたしのためなんかでは動かない。単純に自分が気に食わないってだけなのよ。わたしを所持品のように扱って——だから、あなたの許可なくあなたのお姫さまの近くに食わないものがあるのが許せないんだわ」

「わたしのことを想ってなんかじゃない。ほんとうにわたしを想ってくれるなら——こんなにもわたしの言葉を無視したりなんかしないわ！」

空気に腕を引かれた。不自然な姿勢でリリーの元へと戻る。——

ドラコだ。

「あなたの好きって——羊皮紙一枚よりも薄っぺらくて中身がないのよ！　あなたが好きなのはつれないリリー・エヴァンズを口説く自分よ！」

リリーは僕にも気付かず、艶やかな髪を振り乱して徹底的にジエームズを糾弾した。

「わたしを想うなら——わたしの言葉を聞いて、わたしのために動くべきよ!!」

——なんて、傲慢だ。父も、母も。

「リリー」

「あ——ああ、ハリー。大丈夫？　ほんとうに、なんてひどいことを……。さあ、もう行きましょう。大丈夫、わたしが守るわ」

リリーに杖を優しく取られて、ドラコによってマントをかぶせ直される。ぼんやりする僕をリリーに続いてドラコが引いていく。

父さんたちは——誰もハリー・ポッターを追わなかった。

月もすっかり昇りきった夜だった。

「こんばんは、ハリー」

バランスを崩せばたちまち奈落の底へと繋がる橋の上で、その人は月明かりを受けながら飄々と立っていた。くしやくしやの黒髪にハシバミ色の瞳——ジエームズ・ポッターだ。ドラコが梟から預かったと、僕に彼からの手紙を手渡したのがきっかけだった。中には場所の指定と簡素な呼び出し文。ドラコはしぶったが、透明マントをかぶる僕を止めはしなかった。

「ドラコ・マルフォイは連れてこなかったの？」

「……どうして」

ジエームズの指に挟まれて、折りたたまれた羊皮紙が揺れる。忍びの地図だ。なるほど、忍びの地図は透明マントも、ポリジュース薬の偽装をも見抜く。だが、しかし——それは地図に認知されているならばの話だ。

ハーマイオニーとタイムターナーで時間逆行をした際には、未来の MARIA とハーマイオニーは地図に表れなかった。となると——やはり僕はここに『僕』として存在しているのだろうか。

「ふーん、やっぱりこれを知ってるのか。ポッターだとかマルフォイだとか、なんの冗談かと思っただけ——」

ジエームズが指だけで僕を誘う。ためらった。こわかった。父親に——僕は愛ではなく暴力を与えられたのだ。

僕は父さんを知らない。だけど——二度、死したあなたに会った。

ヴォルデモートと対峙する時、あなたは僕のことを鼻が高いと——最後の最後まで側にいてくれると、そう微笑んだ。タイムターナーで息子を追った時、赤ん坊の僕を優しくあやしてくれていた。——『父』のあなたしか僕は知らなかった。

そして今、目の前にいるのは、スネイプ先生の記憶にある悪童ジエームズ・ポッターだ。僕の父さんではない。母であることを知らないリリー・エヴァンズが、ジエームズ・ポッターとリリー・エヴァンズの子をおぞましいと叩き付けたように——このジエームズ・ポッターにとって僕の存在は薄気味悪いナニカでしかないのだ。

「ハリー、おいで。大丈夫だから」

父さんが呼んでいる。

「ハリー」

ジエームズが呼んでいる。

「ハリー——お父さんのところにおいで」

僕は飛び出していた。ジエームズは僕を受け止めた。元々くしゃくしゃの、父さん譲りの髪をさらにくしゃくしゃに混ぜて、僕の背中にしっかりと腕を回して——首を撫でた。

「エピソード」

咄嗟に体を固くした僕に、父さんは眉を下げて微笑んでいた。

「……なーんて。気持ちだけ、ね。怪我になるほど絞めてはいないつもりなんだけど。——心の方はそうもいかないか」

ポン、ポン。子供にするみたいに背を叩かれる。父の胸板は心地よかった。——心臓が動いている。生きている。

「——どうして？」

「さあ、どうしてだろう。状況とか、エヴァンズの反応とか……君のあの時の顔とか、そういう不粋な推理もあるけどね——そんな気がしちやっただんだ」

両腕で抱えられる。同じ年で、同じ背丈で、違うところなんて彼のほうが鼻がちよつと高いくらいで——それなのに、僕は困う腕から脱け出せなかった。どうあってもこの人は——僕の父さんなんだ。

「君のお父さんの話を聞かせてくれる？」

抱かれたまま、少し背を反らせば共に谷へへ行ける橋の欄干に腰掛ける。いつそう月が明るく見えた。

「……僕、知らないんです。父さんも、母さんも。誰かは知ってるけど——ちつとも、一緒にいられなかった」

「……なるほどね」

ジエームズは静かにうなずいた。

「でも、色んな人が教えてくれた。ハグリッド、マクゴナガル先生、名付け親、父さんの親友——母さんの姉。みんな、両親は勇敢な人だと言いました。ちよつと悪戯が過ぎることもあったけど——人気者で、誰からも愛されていたと」

「それはそれは」

「——だけど」

思い出す。先ほどの少年ではない。真っ黒のローブで、暗くて痛々

しい瞳をしていて、死ぬべき時を見誤り育ちすぎてしまったコウモリのような——愛に生かされ愛に蝕まれたその人を。

「傲慢だと。彼は言いました。お前は外見もそっくりであれば中身も父そっくりだと。父親と同じく傲慢で英雄気取りだと。——あの人だけが、僕を否定してくれた」

お前は英雄なんかではない——ただの傲慢な子供なのだ。

「ジェームズ・ポッター。あなたの行いは——将来の子供に誇れますか？ もしも我が子がそれを知ったとして——失望するとは思わないうんですか。ずっとヒーローだった父が——心のよすがであった両親の残酷な姿を見て——」

「どう思った？」

「……軽蔑、した。最低だ。幻滅だ。父さんはずっとかっこいい人だと思ってた。みんなそう言ったから。でも——ちがった。あんな——あんな卑怯なことを平気でするんだ！」

すぎる。今、言わなければ届かない。僕の父さんは——死んでるんだ。

「人を虐げて楽しむんだ！ 僕のことを苛めて楽しんでたダドリーみたいな！ ゲーム感覚で人を傷付ける！ ほんとうに母さんが好きなの？ それすらもわかんないよ。あんなの見たくなかった！」

胸を叩く。ジェームズはまるで場違いなほど優しく僕の背を撫でていた。

「——それで？ 今のハリーはお父さんとお母さんのことをどう思ってるんだい？」

喉が震えて、呼吸の仕方を忘れてしまったような心地だった。

「——大好き、だよ。どんな人だったとしても——僕の両親なんだ。理想ばかりで偶像化してるだけだとしても——僕は僕を誇ってくれたあなたたちを、僕を命を懸けて守ってくれた人たちを誇りたい。だから」

「——はつきり言ってさ、」

手は絶え間なく背に添えながら、ジエームズは額を突き合わせて拗ねるように笑った。子供っぽい笑みだった。

「僕、今、十四歳なんだよね。友達とバカやってるのが楽しいし、大人の自分なんてまったく想像できない。子供とか論外。どんな仕事に就いてるかとかどんな生活を送ってるかとか、夢よりも不確かな空想でしかないわけだ」

「……はい」

「君も十四歳なんだろう？ 将来の子のこと、今から考えられる？」

僕は知っている。ジエームズ。アルバス。リリー。愛する我が子たちのことを。——なぜなら、中身は十四歳でないからだ。

だが、真実子供であった頃は自分の面倒に精一杯で、そんなことは思い付く発想すらなかった。ジニーのお腹の中に赤ん坊がいると知らされて、はじめて自分が父親になることを自覚したのだ。

この人は——子供だ。

「……いいえ」

うつむく。子供の父を責めるのは筋違いだ。けれど。だけれど。それならば。——憎む男を重ねられ、あの人に散々つらく当たられた幼い僕の心はどうすればいい。元凶であり父であるあなた以外の誰に——この悔しさをぶつければいい。

「——だけど」

くしゃつと。前髪をかき上げられた。父の目に稲妻の傷がさらさられた。

「それは知らなければ、の話だ。いざ、自分の子がいるかもしれない、なんて……ウン、こんなにはつきり突き付けられちゃうとね——そうだな、君のお父さんは、少しくらいは後悔してるかもね?」

思わず吹き出していた。茶化しやで、負けず嫌いで、お調子者で——僕の思っていた通りの人だ。

「もつと聞かせてくれる? ……恨み言はほどほどで」

「はい、僕の父さんの話——ジエームズに聞いてほしいんだ」

さやかな月明かりの下で——僕は子供の父と子供のように語り更けた。

「ジエームズ・シリウス・ポッターだって」

門外不出の家宝である透明マントに消えてしまった自分そっくり

の客人を想う。

彼が歩んできた軌跡については一切わからずじまいであった。彼の両親がなぜ彼と共にあれなかったのか。彼はなぜ見た目と本来の年齢がそぐわないのか。そもそも、なぜこの時代にいるのか。それを彼は語らなかつた。(もつとも、後半はハリー自身もわからないのである。)

だが——あの、額の呪い。そして不穏さを増していく世情。——おのずと答えは見えてくる。

ジェームズの胸にはかつてない愛しさが溢れていた。きつとこれから——彼女にだってこの気持ちを向けるようになるのだろう。

どうせついてきていると予測して、親友に向かって笑いながら呟く。

「ハリーには子供が三人いるんだって」

「……つまり、お前の？」

「そういうことになるかな。世の中、なにが起こるかわからないね」

やはり濡れるような黒髪的美貌の少年はジェームズ・ポッターともう一人のポッターの密会を監視していた。その杖は常にハリーに向けられていた。——再び、向けられる日が来るかはわからない。

「——シリウス。僕の言いたいこと、わかるね」

「ああ」

月光によって一本一本が絹のように輝く黒髪を流して、シリウス・ブラックは挑発的に笑った。誰が見ても野性的で美しく、ゾクゾクする顔だった。美形は得だな。ジェームズはこっそりひがんだ。

「それにしても……長男がジェームズ・シリウスってのは最高だが、次男はなんなんだ。なんだってそうなる」

「アルバス・セブルス——どちらも偉大な恩師から取ったそうだけど

？」

「恩師イ？ 未来の俺はなにを……いや、ン。大体予想はつくけどよ」

せつかくの上品な顔も粗雑な仕草で台無し——となることはなく、上から下まで女の子が黄色い声をあげる色男は嘆息した。

ジェームズ・ポッターは愛嬌たっぷりにつり上がった目を細めた。月のように瞳はあやしい光を放っていた。

「——スニベルスを口止めしなくちやね」

親が我が子を守るのは、当然の正義なのだから。

必要の部屋って本当に便利だ。扉を開ければ出現していたキングサイズベッドを目に、しみじみ思った。

「話せたのか」

そこに寝転んでいた貴族然とした少年に、ぐっと疲れが込み上げてくる。白鳥の羽休めがごとき、なんとも優雅な姿だった。——なんだってこいつはこの状況でのんびりしてられるんだ。慌てているのは僕ばかりみたいじゃないか。

「話せたよ。未来のことは何も話してないけど。……僕の話はした」

ローブを脱いで靴を投げ出して。ベッドに背中から倒れ込む。すぐ横にある相棒——マリアでなくハリーとしての僕の相棒を彼とするのには違和感があるけれど——の顔を意味もなく見つめてしまう。ほんとうに……貴族らしい綺麗な顔だ。美形と言われれば思い出すのはシリウスだけど（少年の時点での美貌はすっかり完成されていた。）ドラコの造形にはガラス細工のような繊細さがある。

「なんだ」

微笑まれてはじめて、同じ血の通った人間なのだと思わせる。なるほど、表情がない時の彼は精巧なお人形のようにだった。青白い肌と色素の薄い髪瞳がそれを助長させていた。

「君はよかったのかなって」

「うん？」

「ナルシツサさんは最高学年に残ってるみたいだけど。……会わなく

「ていいの？」

光の加減で淡いブルーにも見えるドラコの瞳が、物思いに耽るように細められた。金色の睫毛が瞳に重なるさまはヴェールのかかった宝石を思わせた。

「かまわないさ。君とちがって僕の父上と母上は存命だ。いつだって会える。あの戦でも生き残ることを優先した。……裏切り者とそしられようがな」

我が子のためハリー・ポッターの死を偽ったナルシッサ。戦火の中、杖なくとも我が子の元へ駆け付けたルシウス。——すべては、愛する家族と『生きる』ために。

「……うらやましいな」

「そうだろう。——君の周りは、酷い大人ばかりだ」

ドラコの指が前髪を払って額をなぞる。稲妻の傷を指先でくすぐる。

目を閉じた。この世界の時間はどこまでも『僕』に優しくかった。

「おやすみ。ハリー」

なにも考えられなくなるくらい——甘い世界だ。

図書室でその人を見かけたのはまったくの偶然であった。周囲に人目がないためマントを脱いでリリーについていたドラコと、マントを持ったまま別の本棚を回っていた僕。休日の土曜日に図書室を利用する生徒なんて、試験前でもない限り多くはない。ゆえに——彼が

目に留まった。

「スネイプ」

彼は振り向いた。ハッキリと目が合った。なんともいえない沈黙が間に生まれた。

「……まだ用があるのか。ポッター」

——『まだ』？ まだ、とはなんだろうか。……まさか、父さんがなにか？

「昨日見たことなら誰にも話さないと再三——そうか、お前が」
「はい。あの——ハリー・ポッターといいます」

べつとりとした髪の毛の奥に隠れた黒目が不快感に細まるのがわかった。眼光は鋭い。きつとその目が見えなかったとしても如実に伝わっただろう。彼は僕を——この容姿を憎んでいると。

「スネ、」

「お前がなんだかは知らないが、リリーを味方につけたのはかしくかったな。ポッター家の人間は彼女につきまとうよう血に組み込まれでもしているのか？」

軽蔑的な眼差し。知っている。憎まれている。恨まれている。——僕はこの目を知っている。

「僕はジエームズじゃない」

喘ぐようにこぼれ落ちた。あなたが憎むジエームズ・ポッターではないんだ。——スネイプ先生。

「……礼は言わない」

「はい。僕だっていりません」

挑むように返せば、忌々しげに舌打ちをされた。この人、昔からこんなふうなのか。

ほんとうに——生きてるんだ。この場所で。この世界で。彼の首に死の痕はない。

「——セブ！」

リリーもスネイプ少年を見つけたようで、喜色いっぱいに駆け寄ってきた。ドラコは深々とローブのフードをかぶっていた。

「セブ、どうして——あつ……ちがうのよ。彼はポッターじゃないの。いえ、ポッターなんだけど」

「わかってる。おおかた、あの男の親戚辺りだろう。あいつは一人っ子で、ちやほやされて育ってきたんだからな」

「セブ、そんな言い方は……」

リリーの目が気遣わしげに僕とスネイプとのあいだを泳ぐ。話題の人物の息子である僕を気にしていることだとわかりきっていた。

「リリー、僕も同じことを思ったから大丈夫だよ」

「ああ、ハリー。絶望しないでね？ その、いいところもあるのよ。仲間思いだったりリリーダーシップがあったり。彼を慕う人も憧れる人も多いわ。ほんとうよ？」

懸命にフォローを入れてくれるリリーに、中身の無い笑みで返した。それ以上はスネイプの目が呪いでも放ちそうだからやめてくれ。

「それで、こいつは」

「ハリーよ」

「……………」

「ハ、リ、イ。ちゃんと名前でも呼んであげて」

腰に手を当てすつかり見慣れたお説教のポーズを取るリリーに、スネイプは屈した。（怒る母さんがとつてもかわいかったからにちがいない。）

「…………ハリー」

その瞬間の僕といったら！ 雷にでも打たれた心地だった。だってスネイプが——あのスネイプが僕をハリーだって!?

「昨日のこと、ハリーにお礼を言った？ ハリーがいなかったらどうなってたか」

「…………あのくらい、自分でどうにかできた」

「意地を張らないの!」

リリーがやわらかくスネイプの頬をつねる。なんともほのぼのとした光景だった。その間にドラコが僕の隣へと戻って、二人でマントを握りしめる。リリーには悪いけれど、今のうちに——

「ああ、ここにいたの、僕の白百合！ ——と、そうだな。花を荒らす害虫ってところ?」

「アブラムシなんてどうだ?」

「最高だね、シリウス」

大好きな人たちの大嫌いな声が出た。僕は再びジエームズたちの前へと立ちふさがっていた。なんだって、あなたたちは無邪気に悪意を振り撒くのか。

はつきりと睨み付ければ、ジェームズはニツコリ笑った。——ニツコリ笑った？

「ハリー！ 君を探してたんだ。きっとエヴァンズのところにいると思ってるね。ちゃんとマントを持っているね？ さあおいで」

「え？ と……ジェームズ？」

「ハリー」

ドラコが僕の腕を掴む。僕とまったく同じ顔がドラコを見る。フードのおかげで顔は見えていないはずだ。けれど、ドラコ・マルフォイの名を知る彼ならばそこにいるのが誰か、容易にたどり着くだろう。

「ああ、君はいいよ。スリザリンらしくその泣きみそと一緒にいればいい。さあ、ハリー？」

「おあいにくさま。この子たちは今、わたしが保護しているの。昨日の今日でなにを考えてるの。恥を知りなさい。あなた、彼になにをしたか——」

「そこは和解済みだよ、愛しのリリー。すまないね、君との図書室デートももちろん魅力的なんだけど……今日はハリーだけの招待なんだ。来るよね？ ハリー」

断られるだなんて想定していない当然の顔つきでジェームズは僕へと手を差し伸べた。

「グリフィンドールの勇者どのは身内にも変わらず傲慢でいらっしやるようだ」

「おや、アブラムシってしゃべれたのかい？」

「ポッター、セブへの侮辱はよして」

杖こそ出していないものの、空気に不穏さがただよい始めていた。

一触即発。一触の前に彼らを連れて離れるのが現状における最適解だと、僕はドラコとリリーへと振り返った。

「いってくるよ」

「ハリー！」

「大丈夫だよ、リリー。和解したのは本当なんだ。……頼むね、ドラコ」

フードで綺麗なブロンドがすっかり隠れてしまった彼にささやく。透明マントがなくても、彼ならやりくりできるだろう。物言いたげなリリーの視線を振り切って図書室の出入り口へと向かえば、ジェームズはお気楽にリリーへとちよっかいをかけていた。

「美しい僕の姫！ 愛してるよ！」

「わたしはあんたなんて大嫌いよ！」

……この時代の司書がマダム・ピンスでなくてよかったと心底思った。

透明マントをはおって、前方を歩く彼らについていく。僕は今、透明人間だというのにジュームズは人目はばからず話しかけてくるのだから困ったものだ。

「図書室でなにをしていたんだい？ ハリー」

「調べものだよ」

「調べもの？」

「うん。どうして僕がここにいるのか——」

思い出す。栗毛に茶色い瞳の彼女を。マリアである時はすぐに会える同年齢の少女の姿が浮かぶというのに、今は不思議と大人の彼女ばかりが頭の中にあつた。——僕が『僕』だからだろうか。

「ホグワーツで不思議が起きたらまずは図書室って、ハーマイオニーはいつもそうしたから。僕の親友なんだけど、首席を常にキープしていた才女で……彼女の知識のおかげで何度も命拾いしたんだ」

今になって思い出しても、彼女ってクロスワードパズルのヒントみたいな人だった。

「なるほど。さてはガールフレンドだね？」

「まさか！ やめてよ、ロンににらまれちゃう」

「ロン？ その子も友達？」

「うん。最高の親友。二人とも、ハリー・ポッターには絶対に欠かせない人たちだよ」

たとえ同じ姿かたちの同一人物がいたとしても——代わりになることなんてない、『僕』だけの親友たちだ。……会いたいよ。ロン、

ハーマイオニー。

「それじゃあ——ドラコ・マルフォイは？」

「ドラコは……」

言葉につまった。——相棒？ それもおかしい気がする。マリアの相棒は彼で間違いないけれど、ハリー・ポッターの物語はロン・ウィーズリーとハーマイオニー・グレンジャーとの冒険で占められていて、そこで完結する。彼は……彼は、どんな存在だったんだろう。ライバル。邪魔なやつ。嫌なやつ。どこにいたって目につく目の上のたんこぶ。——彼だって、欠かせない存在だった。

「ドラコは……わからない。まだ、わからない。けれど、これからわかる気がする」

マリアとしての物語が——彼を明かす。そんな予感があった。

「ねえ、ジェームズ。僕からも聞きたいんだけど——スネイプになにかした？ さっきの態度だって」

へたくそに話題を変えた。ジェームズは察しているだろうに、ニヤリと口角を持ち上げると答えた。

「ちよつとお願いをしただけさ。昨日のことは他言無用に、てね。あれくらいは挨拶だよ。呪いはかけてないだろう？」

黙り込む。呪いをかけなければいいってもものじゃないよ……。ああでも、この二人からすればせいっぱいの譲歩だったんだろうな。

「……言わないよ。スネイプは」

小声を越してささやくような声だったが、ジェームズはしっかりと拾っていた。

「へえ？」

「リリーが困っちゃうし」

それに——彼は想いを黙する人だ。ルーピン先生のことだって、学生時代の頃も、僕らの時代も、追い込もうと思えばできたろうに（当然、ダンブルドアに目をつけられるリスクはあるけれど。）隠し通そうとした人なのだ。

「スネイプはいい人じゃないよ。すつごく嫌なやつだ。僕、大嫌いだった」

それは、愛する人たちの死を経て——憎しみにすら育った。

「だけど——後悔して泣くことができる人だ。たったひとつの愛のためにはすべてを捨てられる人だ。善人じゃないけど——救えない悪でもないよ。まだ、彼の魂は壊れていない」

ダンブルドアがドラコの魂を想って、己の殺害をよしとしなかったように——スネイプ少年はまだ、なにもうしなっていないのだ。

「…………ふうん」

ジェームズとシリウスはどこことなく気に食わなさそうにしながらも、それ以上を続けることはなかった。

話しているうちに太った婦人の前へとたどり着いていた。つまりは、彼らの目的地はグリフィンホール寮だったのだ。……なぜ、僕をここに？ この時代の合言葉を唱える二人に続いて侵入する。そのまま、彼らの寝室へと案内された。中にはペティグリューとルーピン

先生がそれぞれのベッドに腰かけ待機していた。

「ハリー、もうマントを脱いでいいよ」
「うん……」

おそろおそろ顔をせば、ベッドの二人から驚愕の眼差しで迎えられた。ペティグリューは時おり僕とジェームズとを見比べていた。

「ほんとうにそっくりだ……」

「そうだろう、そうだろう。——それでは、改めて諸君らにも紹介しようではないか。未来からやってきてくれた貴重なる客人、ハリー・ポッター君だ」

ペティグリューが衝撃のあまりベッドの上でひっくり返った。そんなところは、愛嬌たっぷりの鼠スキヤバーズを思い出させる。

「未来から……そんなことが？　ほんとうに？　それじゃあ——彼はジェームズの？」

「その辺は想像に任せるよ。ほうら、ハリー。僕のベッドにおいで。とつくに知ってるかもしれないけど、僕の仲間たちを紹介させてほしいんだ」

ジェームズの仕切りのままに若い恩師や名付け親、そして苦い記憶の裏切り者と挨拶を交わす。どうにか微笑んでみせれば、隣のジェームズに目一杯抱き締められた。

「ジェームズ？」

「ああ、ハリー！　君ってなんてかわいいんだろう！　同じ顔なのにこんなにも庇護欲をくすぐるのはどうして？」

「控えめなジェームズだなんて……誰かがポリジューズ薬でも飲んだみたいだ」

「——それだ！」

僕をぬいぐるみかなにかのように抱きながら、ジェームズがルーピン先生へとするどく人差し指を突き出した。どうしてかルーピン先生でなく隣のペティグリュウがわたわたしていた。

「なにが、それだ！——なの？」

「明日にお楽しみがあつてね」

なにやら察したらしいルーピン先生が悩ましげに額へと手を置く。二大自分勝手のジェームズとシリウスに、どの時代もリーマス・ルーピンは苦勞しているらしい。

「ジェームズ、あまりルーピン先生に迷惑をかけちゃ……アツ」

「ルーピン」「先生」「だって？」

仲良く声を揃えて、唾然とするルーピン少年当人において仲間たちが瞳を輝かせる。

「リーマス！ 君、先生になるのか！ ああいや、わかるぞ。君は教えるのが上手い。特に年下をたらし込むにあたっては天才的と言えよう！」

「今日からセンセイって呼んでやろうか、リーマス」

「バカ言わないでよ……。ジェームズ、シリウス。先生は先生でも、なんの先生かはわからないじゃないか。ハリーの家庭教師だとかかも」

「十分じゃないか！ ハリー、リーマスはなんの先生に……。アー、それは内緒、かな？」

すっかり困っていた僕に、ジェームズはクルクル変わる表情を苦笑に定めてうかがった。

「……ごめんなさい」

「謝ることじゃないさ。不用意に情報はもらすべきじゃない」

マリアであった頃、鏡越しに見つめてきた瞳が慈愛を含んで僕に向けられた。

「それにしても……そうか、リーマスが」

きつと、ルーピン先生以上に周囲が安堵し喜んでいるのには、彼に『ふわふわとした小さな問題』があるからだろう。もうこの頃には友の秘密をあばいていたはずだ。そして、だからこそ本人がもつとも浮かない顔をしているのだ。

「それじゃあ、ピーターは？」

これ以上の空気は毒にしかならないと判断したジェームズが話題をそらした。次に気まずい思いをするのは僕だった。

「……わからない。あまり、関わりがなくて」

「僕、関わりないんだ……」

しょんぼりするペティグリーユをシリウスとルーピン先生が慰める。

彼に対する憎悪は——無いと言えば嘘になる。だが、それは暖炉の残り火のようなもので、くすぶりながらも再び燃え上がるには燃料が足りなかった。彼の命と引き換えに命拾いしたことだってあるのだ。それを周りは自業自得としたけれど——彼と僕には救い救われる『魔法使いの絆』があった。

「あの——あのね、ピーター」

目をそらし続けていた少年の耳に唇を寄せる。十四歳にしては察しのいい面々は、場をあげて僕に大切な仲間ペティグリュウを預けてくれた。

「ジエームズやシリウスは神様なんかじゃあないんだよ。——英雄だって、死ぬんだ」

ペティグリュウはきよとりとしていた。幼い顔だった。これからこの子がユダとなるだなんて、想像もできないただの少年の顔だった。

この程度で未来なんて変わりやしないのかもしれない。彼は明日には僕の言葉なんて忘れてしまうかもしれない。それでも、どうか——その日、僕の言葉があなたの中で火となりますように。

「よし、それじゃあ最後は俺だな。ハリー？俺はどうなってる？」

「大きくなってもポッター家に入り浸ってるんじゃない？」

「……あるかもな」

「それは卒業しなよ、シリウス……」

ジエームズの茶々とルーピン先生の呆れたふうな一言にドツと笑いが溢れた。

「シリウスは——うん、シリウスはね、僕の遊び相手をよくしてくれたみたいだよ」

箒をくれたり犬になったり——たくさん、愛してくれたよ。

「子守りをするシリウス？想像できないなあ」

「シリウスが遊んでもらってたの間違いじゃないかい？」

「お前らなあ」

少年たちの等身大にじゃれ合う姿が微笑ましくてクスクス笑う。

「僕、大好きだよ。シリウスが大好き。——ずっと」

たとえばマリアのシリウスがこれから先も側にいてくれるのだとしても——ヴェールの向こうへ消えた『僕』のシリウスを忘れることはない。決して——永遠に。

ふと、今度はシリウスに苦しいくらいに抱き締められていた。ジエームズには頭を撫でられた。ルーピン先生が大好きなチョコレートでも頬張るような顔をしていた。ペティグリューがキャラキャラと笑っていた。

みんな生きてる——ここは、たまらなく幸せな世界だ。

振り返る。透明マントから顔を出す。その人に笑いかける。

「……あの、ハリー？」

臆病で優しい狼は勇気をふりしぼってそこに立っていた。

「君は、僕のことを……」

彼の勇気はそこで尽きてしまったらしい。少年は自分を隠すように髪を掴んでうつむいた。——十分だ。彼のせいっぱいをもたらった。だから——ほんの少しお返ししたって罪にはならないだろう。

「僕に守護霊の呪文を教えてくださいました大好きな先生がいるんです。チョコレートを持ち歩いていて、顔は傷だらけで、友人を大切にしている——自分が臆病であることをよく知っている勇敢な人。……彼のボガートは『満月』でした」

「その人を、みんな——心から先生と呼びました」

ふわふわした小さな問題と死するその時まで闘い続けた僕の先生は、泣き出しそうな顔で笑った。

この不思議な世界で目覚めてから三日が経った。日曜日だ。大広間の食事を皿ごと持ち出してくれたリリーと共に必要の部屋で遅い朝食を取る。

「今日は比較的動きやすいと思うわ。ホグズミード村への解放日なの」

「ああ……リリーは行かないの?」

「今日くらいかまわないわよ。何度言わせるの? あなたたちの面倒はわたしが見ます。さあハリー、もつと食べるのよ。ドラコ、紅茶ばかりじゃダメよ」

テキパキと均等にサラダを取り分けられる。ご機嫌だ。彼女いわく弟ができたようで、世話を焼くのが楽しくてたまらないようだ。母に対する表現としては適切でないが、懸命に姉ぶりたい末っ子娘のようで微笑ましい。うちの愛娘のリリーが甘ったれに育ったのも、母さんから名前をもらったからかもしれない。……いや、家族全員で甘やかしたからだな。

「今日はどうするの? もう一度図書室にでも行きましようか」

「そうだね。昨日は思うように調べられなかったし」

なんとたつて父さんと悪友たちに拉致されてましたから。

「透明マントを忘れずにね」

リリーが空になった食器をまとめてバスケットへとしまおうあいだに透明マントを取り出す。ドラコとはおつて——この二日で彼と密着しマントで移動するのにもずいぶん慣れた——リリーの肩を叩

いて位置を伝える。

「それじゃあ行きましようか——ゲツ」

リリーと同時に僕らまでうめき声を上げてしまいそうになった。扉を開いた瞬間、廊下にリリー・エヴァンズの天敵、ジェームズ・ポッターとその仲間たちが待ち構えていたのだから。……母さんの天敵が父さんだなんて、息子として実に切ない事実だ。

「ウォー！ こんなところにこんな部屋があっただなんて。隠し部屋ならとつくに知り尽くしたと思ってたのになあ。シリウス、これって悪戯仕掛人として痛恨のミスだったりするんじゃないかい？」

「まだ探れるところがあるとおもっておもしろくなっただろ」

「ウーン、君ってほんとう、最高の考え方をするよね」

「ジェームズ。シリウス。エヴァンズの顔を見て」

ルーピン先生が軌道修正を図ってくれたおかげで、憤怒の形相のリリーへと全員の視線が戻った。

「ポッター……聞きたくないけど訊くわ。まさかわたしをつけたの？」

「いや、いや。そんなことをしなくとも君の居場所ならわかってしまうのさ。そう、愛の力でね」

ジェームズがかっこつけて髪をかき上げる。……^愛忍びの^カ地図か。忍びの地図に必要な部屋は表れないから、突然消えたりリリーを不思議に思って追ってきたのだろう。我が父ながら行動力が間違った方向に突き抜けている。……ほんとうに、ここからどうして結婚にまでこぎつけられたのか。僕とジニーも中々の遠回りだったから人のことは言えないけど。

ジェームズがリリーの背後を覗き込み、必要の部屋内をくまなく見

回す。なにかを探している様子だ。……聞くまでもないだろう。

「ハリーならいいわ」

先回りしてリリーがつつけんどんに答えた。

「そうなの。残念だなあ、どこにいったか知らない？」

「答えると思うの？ さっさと仲間引き連れてホグズミードにでも行ってらっしゃいよ」

「——ホグズミード！」

ジェームズを避けて歩き出そうとしたリリーの前に、再びジェームズが立ちはだかった。悪戯仕掛人の仲間たちはすっかり傍観の姿勢だった。

「せっかくだからかわいいハリーにバタービールでも飲ませてあげようと思ったんだけど」

「かわいいハリーですって？ 確かにハリーはいいこでとってもかわいいわ。あなたとちがってね。だけど、それをあなたが——なによ」

ジイ。と。ジェームズはリリーを見つめていた。なにか思わぬものにも気付いたような顔だった。

「……エヴァンズって、やっぱりかわいいね」

「……は？」

は？ 僕まで、あんぐりと口を開けてしまった。

「いや、そうなるんだと思うと——エヴァンズがさらにかわいく見えてきて。うん。やっぱり僕は君をこれからもっと好きになるんだと

思う」

「は——はあ!？」

リリーの顔が髪にも負けなくらい真っ赤に染まった。——あれ？ この反応……もしかしてこれって——案外？

「か、からかわないで!」

「からかってなんかないよ。素直に思ったんだ。意識のちがいつてすごいな……君が昨日よりもずっとキラキラして見える。もちろん昨日の君だって輝いていたけど、今日はさらにだ!」

言葉の通り、ジエームズはどこまでも自然体だった。本人にはほんとうに口説いているつもりはないのだろう。大げさな表現も動作もないが、それがリリーの乙女的な部分を直撃しているらしかった。なんてことだ……こんなふうにして母さんをたらしこんだのか!

「そうか……ともかく、ハリーがいないならホグズミードへ行っても意味がないな。エヴァンズと三人で歩ければ、それが一番の理想だったんだけど」

「……どうして?」

「それがあの子にとって幸福な記憶になると確信したからさ。なるべく、君の機嫌を損ねて喧嘩だとかもしないよ。そんな姿、見せたくないだろう?」

「……………」

リリーは緑のぱっちりとした瞳をまっすぐにハシバミ色へと向け、彼の真意を見抜こうとした。そしてやがて肩から力を抜いた。

「——だ、そうよ。ハリー。あなたが決めるといいわ」

リリーの合図にしたがって透明マントから顔を出す。想定してい

たらしいジェームズや他の面々は僕らに驚くこともなくニツコリ笑った。

「おはよう、ハリー」

「おはよう、ジェームズ。リリーとリーマスをあまり困らせないこと」

軽くにらめば、おお、そっくりだ！ と喜ばれる。お説教が効かない人だ。そんなところまでジェームズ・シリウスへ受け継がせなくてもよかったのに。……いや、長男よりも次男のほうが頑固でお説教の聞かない子供だったな。アルバスもセブルスも頑固といえれば頑固な人たちだものね……。

「それで、ハリー？ ホグズミード、来るだろうか？」

昨日同様、断られることなんて頭の片隅にもない顔でジェームズが無邪気に誘う。

「いいけど……僕だけじゃないよ。ドラコだって一緒だ」

スリザリン嫌いの彼にうかがえば、ジェームズは鷹揚にうなずいた。

「ドラコ君は透明マントを使ってついてくればいい。そして君はどうだと僕の隣を歩くんだ」

「え？」

「バカを言わないで、ポッター。あなたが二人もいたら大混乱よ。そして大迷惑よ」

「その通り。突然、僕みたいなユーモアあふれる美男子が増えれば、嗚呼、歓喜の混乱はまぬがれない……そこでだ、昨日のうちに布石を打っておいたんだ」

バチツとウインクを飛ばすジェームズの隣で、頭がいたいと顔に書いてあるルーピン先生がその先を引き継いだ。

「ある噂が昨日から広まってるんだよ。——ジェームズがこっそり造り上げたポリジューズ薬を誰かに試したがってるってね」

リリーは絶句していた。おそらく僕も同じ顔をしていた。
………つまり。

「つまり——ハリー、君は今からジェームズ・ポッターにポリジューズ薬を飲まされたグリフィンボールの誰かさんだ」

先ほどはリリーへ飛ばされたウインクが今度は僕へと茶目つ気たつぷりに寄越された。ああ——ルーピン先生と一緒に頭を抱えたくなった。

ジェームズは周囲（シリウスを除く。シリウスはジェームズのやることなすことすべてが楽しいみたいだ。）をおいてけぼりにして続ける。

「ドラコは出してやれないんだ。意地悪をしてるわけじゃないんだよ。ルシウスは去年に卒業してるし——スリザリンの方のブラックに見付かったら面倒だ」

スリザリンの方のブラック——最高学年生のナルシッサ・ブラックだ。ルシウスの婚約者である彼女の前にルシウスそっくりのドラコを差し出せば、騒ぎになるのは目に見えている。……本人に名乗る意思がないためにおおさらだ。

「ドラコ……」

「いいさ、ハリー。君が楽しめるならそれが一番だ」

はじめて、リリー以外の面々にドラコの顔が晒された。一様に驚愕を示す中、とくにシリウスはナルシッサの従兄弟であることもあつて嫌悪を見せた。

「シリウス」

たしなめる意図を持つて呼べば、舌打ちと共に目をそらされる。この場でドラコにつつかかる気はないようだ。

「ほんとうに、仲がいいんだねえ。ウーン、複雑だけど……ま、それは追々。さ、今はマントをかぶっていて。後で合流しようね、エヴァンズ」

「なにを勝手に」

「一緒に来るだろう？」

言葉につまったりリリーはそのままそっぽを向いて歩き出した。廊下を曲がる直前で振り返ると、「これはすべてハリーとドラコのためよ！」と告げてから鼻息荒く去っていった。

「エヴァンズのああいうところ、たまらないと思わない？」

「こればかりはお前の趣味がわかんねえ」

「あんなにかわいいのに」

魂の双子たちのバカげたじゃれ合いを放つて、この中でもっとも頼れるルーピン先生を見上げる。ルーピン先生は僕とドラコと両方を両手を使って撫でると、やわらかい笑顔で廊下の先を指した。

「それじゃあ、行こうか。——思い出を作り」

この時代の人間でないため正門から出られない僕たちは、当然、隠し通路を利用した。未来でも散々世話になった方法だ。僕とジョージたちが地図を利用していた頃には閉ざされていた道も、今ならば楽々と通れる。薄暗いトンネルの先を進んでにぎわう村の端にたどり着けば、僕はマントからも解放された。いまだ透明マントを手放せないドラコには悪いが、久々に地上に出たニフラーのような気持ちで大きく息を吸った。村の空気感はまだで変わらないのに、僕の知らない店がチラホラと開いていて不思議な感覚だった。

「さっきの通り道は、エヴァンズにはナイショだよ？」

ジェームズが悪戯っぽく口元に人差し指を立てる。だから別行動だったのか。とことん悪知恵だけは働く父に呆ればいいのやら、笑えばいいのやら。

そのうちにリリーとも合流して、大所帯でホグズミードを闊歩する。中央をどうどうと歩くジェームズは王様のようなだった。時々、見知らぬ誰かに声をかけられたりしながら（「ジェームズの実験に巻き込まれたんだって？ 災難だったな！」）ホグワーツ生で溢れる通りと店を眺めた。

「さあさあハリー！ バタービールとしゃれこもうよ。今日は僕の奢りだ。エヴァンズにならいつだってなんだって奢っちゃうけどね」

「けっこうよ」
「つれないなあ、僕の白百合は。深く傷ついた。慰めてくれるかい、ハリー」

「ポッター、ハリーにべたべた引っ付かないで。厚顔なあなたとちがつてこの子はシャイなのよ！ さあハリー、わたしの隣にいらつしゃい。ポッター、そこを空けて。そこはドラコの席よ」

「ああ、僕が正面にいたほうが嬉しいって？ いいね、僕としても愛しい二人を同時に眺められるだなんて最高だ」

「あなた、少しはそのよく回る口を閉じられないの？」

リリーとジェームズの慣れた（一方的な）口論にクスクス笑う。

もしも——もしも両親が生きていたなら、僕をはきんでこんな口喧嘩をしたりして、シリウスはたいがいがジェームズの味方で、ルーピン先生は一步引いていて、でも、僕やどちらかが本気で困ったなら助け船を出してくれて——そんな未来が、あったのかもしれない。

現実はどこにもないけれど。

幸せだ。たまらなく幸せだった。バタービールで乾杯をする。全員で口髭をつけてキャラキャラと笑う。僕らの時代には売っていないハニーデュークスのお菓子をみつけて、ドラコと分け合う。なんでも僕に買い与えようとする父さんを母さんが叱っている。すぐに一人行動をしようとするシリウスをルーピン先生が叱る。ペティグリューが迷子にばかりなつて全員で搜索したり、ジェームズに間違われた僕がグリフィンボールの集団やスリザリンの数名に絡まれたり、その都度ジェームズが杖を抜こうとしてリリーにひっぱたかれていたり——まったくおかしなくらい愉快で幸せな時間だった。

「ハリー」

ささやかれた。ドラコだ。透明の手で頬に触れられ、首を左に回させられる。——あ。

「ごめん、僕——ちよつと」

「ハリー？」

「オーケー、オーケー。さあ先に行こうか、エヴァンズ。ハリー、立ちションは人目をさけてするんだよ」

「ハリーはそんな下品なことはいけません！」

両親の声を背に離れる。——先に独りで歩く『彼』がいた。

「スネイプ」

日光に照らされいっそう顔色の悪さが目立つ彼は、じつとりとした暗い瞳で振り返った。

「……ハリー」

「わかるの？」

「間違えるものか。あんなのが二人もいるなどと……ゾツとする」

彼からすれば悪夢だろう。当然だ。——それだけだ。他意なんかない。わかっているのに——痛みと喜びが同時に湧き上がった。

一目であなたはわかるのか。——わかっていたのか。それならば——ちがうと理解した上で、『僕』が憎かったのか。

「僕にかまうな。野蛮なグリフィンドール共のところにさっさと戻

れ」

黒髪が振れて、印象からか薄汚れて見えるローブの背が離れる。追う勇氣はなかった。元々、話しかけたところで目的はなかったのだ。伸ばしかけた指を下ろして――

「君は、リリーに似ている」

「――っ！ スネ、」

「ハリー」

再び伸ばした手はまったくちがう手に掴まれた。

「エヴァンズがうるさいんだ。さっさと戻ってこい」

「シリウス……」

美貌の少年が不機嫌そうに隣に立っていた。

「お前、杖を持ってないんだろう？ お前の身になにかあったらエヴァンズが発狂する。そうになったら今度はジェームズがうるさい。お前が俺たち以上に問題を起こそうなんて、あと十年早いぜ」

ニヒルに笑う彼は実にハンサムだった。大人の彼は殺伐としていて――そしてマリアの彼は子供っぽくも朗らかだった。こんなにも対等に友達みたいに笑う顔なんて知らなかった。――否、見たことがないわけじゃない。きつと旧友たちの前ではどちらのシリウスもこんな顔をしたのだ。ただ――ハリーもマリアも彼にとっては子供で庇護対象だった。だから――知らない。

「シリウス」

なんだか心細い気持ちになって手を握った。シリウスは払わなかった。……ちよつと、意外だ。

「お前さ」

「うん」

「お前ってか、ルシウスの息子もだけど……それで合ってるよな？」

「うん。その通りだよ」

「ン。で、だ。……まだ、未来に戻る方法とか、わかってないんだよな」

「うん」

「それまで、どうするとか……つまり、もしもこの先も——戻れなかったら……って話なんだが」

「うん」

「身寄りとか——いや、そこはジェームズがどうにかするとは思いますが、まあでも、頼れる先は多くて損はねえし」

「シリウス」

こんなやり取り、前にもしたな。懐かしむほど昔でもないのに、懐古と共にあの日のあたたかさが胸に広がる。

「——はつきり言つてよ」

「………俺のことも、頼っていいからな」

照れくさそうな彼に思わず抱きついていった。やっぱりシリウスは僕を拒絶しなかった。

「シリウス、大好き」

「おう。……調子が狂うぜ。顔はジェームズなのに。ジェームズにこんなことされたら、こうだ」

シリウスが大げさに吐く真似をする。それがロンを彷彿とさせて、彼の首に巻き付いたまま僕は腹から笑った。

幸せだ。僕に優しいものしかない。幸福だ。——このまま、この世界にぐずぐずに溶けてしまいたいくらいに。

「——でも、それじゃあ、いけないんだろう？」

夜だった。天文台の上、闇との戦いの幕開けとなったこの場所で、僕は向き合っていた。——透明マントを脱ぎ捨てたドラコと。

ドラコは微笑んでいた。月明かりを受けるブロンドと神秘的な瞳には人外じみた美しさがあつた。

「この世界はなんなの。ドラコ」

ドラコは変わらずやわらかい眼差しで僕を見つめていた。

「平行世界。そう言っただろう。もう一つの現実だよ。——君が望めばね」

——僕が望めば。

「僕が望めば、現実になる？」

「その通り。この世界で生きていきたいと望めば、ここが『君』の生きるべき世界になる」

「そうか。それなら——マリアの世界は？」

ドラコは熱っぽくうっそりと笑った。

「夢だ。全部——質の悪い悪夢」

「君がぼろぼろになることもなければ、ご両親が死ぬこともない。シリウスはアズカバンに収容されないし、もしかしたらペティグリューは裏切らないかもしれない。ハリーに英雄の呪いはふりかからないし——セドリックは死なない」

「二度目のセドリック・デイゴリーの死はすべて君の『ただの』悪夢になる」

風が彼のブロンドをあおいだ。月がきれいだった。

「さあ、選ぶといい。誰も責めないとも。誰も君に戦えと言わないよ。犠牲になる必要はない。ハリー・ポッターという英雄は生まれない。この世界ではただのハリーだ。もう悪も正義も見なくていい」

絡み付く——心地のよい声だ。

首を絞める——優しい温度だ。

引きずり込む——天使のささやきだ。

「どちらが君の現実だい？ ハリー」

僕は踏み出していた。

「君って案外、忘れっぽいよね」

風が強く吹き上げていた。

「あれだけ繰り返してきたのに」

月がきれいだった。

「僕はさ」

世界は美しかった。

「——ハリーの姉さんだよ？」

かつて、自ら死を選んだその人と同じ場所に、僕は立っていた。

「弟を捨てて自分だけ楽園に行こうだなんて——マリアはそんなことはしないよ」

すべてが揃った世界だ。両親は生きている。シリウスは幸福でいる。ペティグリューは罪をおかさない。ルーピンは仲間をうしなわない。恩師は最愛の死に魂を壊さない。——セドリックは死んでいない。

完璧で、愛しい場所だ。

でも、僕が生きるべき現実じゃない。

「無かったことになんてしたくないんだ。絶対に。『僕』のための死を——僕の責任の死を——僕だけは忘れてはならない。投げ捨ててはいけない」

あと一步。それですべてが終わると確信した。その先を覗き込んでも、不思議と恐怖は湧かなかった。——隣に立つこの男のおかげだとは、認めたくなくて知らないフリをした。

「ひとつだけ、聞かせてくれる？ この世界は現実だ。——それで、『君』は？ 全部、僕の頭の中で起こってること？」

ドラコはいつもの意地悪そうな顔でニンマリ笑った。

「もちろん、君の頭の中で起こってることさ。ハリー」

「——ハリー!!」

緑色の瞳とハシバミ色の瞳が月明かりにキラキラしていた。よく

知っている黒髪と赤毛が寄り添うように立っていた。それは、叶うはずのない光景だった。——奇跡は十分だ。

「ハリー………いってしまふのね?」

「うん。帰るよ。僕の世界に」

ハリーの瞳が涙に濡れながら微笑む。

「盛大に見送ろうじゃないか。——息子の出立だもの」

マリアの瞳が悪戯っぽく笑う。

「いってらっしゃい、ハリー」

ドラコと手を繋いだ。この手にあるもの、その先にあるもの——すべてが現実だった。

「いってきます。——父さん、母さん!」

風に抱かれて見上げる夜空は美しく、手にある温もりは愛おしくて、小さくなっていく両親の姿はかなしくて——声はもう届かないけど。

「あなたなら成し遂げられるわ! 絶対に——絶対に! なぜって——わたしたちの子供なんだから!!」

すべてを終えたその時——あなたたちにもう一度、誇りと思ってもらえるように。

「——リア、マリア、まったく……うたた寝どころじゃないぞ。寝汚いにもほどがある」

「うるさいなあ」

頬をつねっていた手を絡め取って、額へと持っていく。

「マリア？ ……嫌な夢でも見たのか」

「ううん。幸せだった。気がする。——でも、悪夢だ」

「寝ぼけるな。支離滅裂だぞ」

額に移動させた手にぐしゃつと前髪をかき混ぜられた。こいつに
しては乱暴な動作だ。普段お貴族さまぶってるくせに。

「——ねえ、ドラコ」

「なんだ」

呆れた顔で見下ろすドラコの背に月が見えた気がした。まだ昼
だったのに——夢からさめたばかりの世界はまぶしかった。

「僕の目の色って、なに？」

「今日の君はおかしいな。ハシバミ色に決まってるだろう」
「うん。……うん」

腕を伸ばして、ドラコの首に無理やり巻き付く。

「っおい！」

「そう、ハシバミ色——父さんの目だ！」

そのまま、ドラコも巻き込んでごろごろと芝生の上を転がった。今日は日曜日だ。なんだか一日中だつてこの場所で寝転んでいたい気分だった。ひとりは寂しいから——君と一緒に。

「君、ほんとうにおかしいな……どんな夢を見たんだ」

きつと、今夜の月はきれいだ。

「実はね——わすれちゃった」

だから、きつと、そちらの月もきれいでしょう？ 父さん、母さん。

不死鳥の騎士団とマリア

111

グリモールド・プレイス十二番地での生活が始まった。なぜダーズリー家でなくシリウスと共にあっても許されるのか——答えは簡単だった。『前回』同様にここブラック邸が不死鳥の騎士団の本部として提供されたのだ。——つまりは、ダンブルドアが秘密の守人となった。

元々、この計画は去年、夏休みを前にシリウスとの生活を泣く泣く諦めたその時にすぐに立ち上がったのだという。ただし、ヴォルデモートの復活は想定されていなかったため——ダンブルドアはトレローニーの予言から予想のうちの一つには入れていたかもしれないが——この時点ではシリウスがダンブルドアへ秘密の守人を頼む一方的な関係でしかなかった。だが、状況が変わった現在、互いにメリットを差し出しあい、まさしくギブアンドテイクと相成ったわけだ。

『前回』とはうって変わって美しい状態に戻されたブラック邸を眺める。ハリーをはじめ目にする豪邸に驚いていたが、僕は前回とはまるで違う様子に驚いていた。虫食いだらけのカーテンはすべて取り替えられ、壁紙も明るい色で統一されていた。例の夫人の肖像画のカーテンは完全に閉め切られ封をされていた。物理だ。シリウスいわく整えるための期間がまるっと一年あったのだからこのくらいは当然、とのことだ。僕としては、クリーチャーとルーピン先生に指示だけ出して任せっきりだったのだろうと推測している。

——ルーピン先生。そう、ここブラック邸には僕たちポッター兄弟と後見人のシリウスの他にもうひとり同居人がいる。リーマス・ルーピンだ。僕たちを本格的に引き取るまで二人で暮らしていたらしく、シリウスよりもよっぽどルーピン先生のほうが屋敷の物配置にはくわしかった。さらに、今では不死鳥の騎士団メンバーが出入りをした

り会議をしたりと、不気味な記憶でしかなかったブラック邸はすつかりにぎやかな館になっていた。

「シリウス、この家に戻ってよかったの？」

「うん？」

「あの——ブラックの家があまり好きじゃないって、言ってたから」

なんだかうすら寒くすら思えてしまうほど幸福な日々の中、ソファで誰かの便箋——おそらく騎士団員からの報告書だ——を読むシリウスへと背をびったりとつける。シリウスはすつかりかつての美貌を健康的に取り戻していた。灰色の目が暗く濁る彼はいなかった。『僕』のシリウスとは大違いだ。……これで、よかったんだ。

「ああ……マリアの言うとおり、私はこんな陰気で悪趣味な館は好きじゃない。良い思い出なんてちつともないからね。だが、セキュリテイはブラック家本邸の名に恥じない万全っぷりだし、ダンブルドアとの交渉条件のうちの一つだったんだ。君たちをどうしても保護したいのなら、ブラック本邸を使うこと——とね」

ダンブルドアの思惑が絡んでいたことに安堵する。彼が糸をめぐらせているうちは大きな失敗へは繋がらないはずだ。マリアの身になって僕は思い知ったのだ。——なにも考えずに傀儡として生きるのは、ひどく楽なのだ。

「それから……ここだけの話なんだが、実は収容時に没収されたまま、なんだかんだと理由をつけられ、いまだ私の家は完全には返してもらえていないのだ。私一人が住むには問題ないけどね。誰かを住まわせるとなると——奴さんらがここぞとわめく」

「……それ、いいの？」

「よくはないが——君たちと一緒にいられるのなら、どこだってかまわないさ」

頭に大きな手が置かれた。ゆっくりと微笑みと共に撫でられる。『僕』の頃からえがき続けていた理想がそこにあつた。

あれほどブラック邸に監禁される身を呪っていたシリウスが、今、こんなにも穏やかな顔をしている。

「シリウス」

報告書を手放したシリウスにすり寄る。幼子のように両腕を伸ばす。

「大好きだよ」

受け止めて、抱き返してくれる腕とあたたかい胸元にまどろむように瞳を閉じた。どうか、この先も——この優しい時間が続きますように。

「シリウス、今、いいかい？」

シリウスに身を預けて、すっかりうとうとしかけていたそこにルーピン先生が顔を出した。

「客間の文机だけど、やっぱりボガートがもぐり込んでいたよ。まったく、いつの間に……おや、マリアもいたのか。君がひとりってことは、ハリーはまだ部屋かな。昼食はもう済ませた？」

傷だらけなのにおそろしさを感じさせない柔和な微笑みが僕へと向けられた。四人で暮らす中、彼は僕たちの中ですっかり母親の立ち位置になっていた。シリウスは……お父さんというよりもお兄さんかな。子供と一緒によくルーピン先生に叱られているもの。

「まだだよ」

「それじゃあ、今日は私が作ろう。ハリーを呼んでおいで。寝ているなら……そつとおこう」

「ハアイ」

ソファから立ち上がる。騎士団の仕事で忙しい二人に代わってブルック邸の家事は僕とハリーで回すのがほとんどだったが、時おりこうしてルーピン先生やシリウスが手料理を振る舞ってくれることがある。そんなささやかなしあわせすら僕には愛しくてまぶしかった。この館に安全面から軟禁状態にある僕たちを大人たちは不憫な目で見ているようだけど、僕としては一向にかまわないのだ。ハリーは……わからないけど。

停滞した幸福がここにはあつた。

「リーマス。ボガートの処理は終わってるのか」

「ああ。一応、他のところも掃除がてら見てくるよ」

「クリーチャーのやつ……掃除すらできないとは」

大人たちの会話を背に二階へと上がる。クリーチャーと顔を合わせる事ができたのは初日のみだ。シリウスが互いの紹介のために無理に呼びつけたのだ。クリーチャーは落ち窪んだ目で憎々しげに僕たちとシリウスを見回していた。

主人への想いと遂行できない命のためにロケットを握り続けた年老いたしもべ妖精——そして、息子アルバスの良き友達となってくれた家族。……彼とシリウスの確執もどうにかしてやりたいのだけど。

「ハリー？」

僕の個人部屋と隣り合う扉をノックする。返事はなかった。ルーピン先生の言うとおり、まだ寝ているのかもしれない。

「ハリー、入るね」

勝手知ったるとドアノブを回す。いつかの宣言通り、家主のシリウスによって一人ずつ個別の部屋を与えられた僕たちだが、結局、一人部屋を満喫できたのははじめの三日が限度だった。——ハリーがうなされるのだ。セドリツクの夢を見て。ヴォルデモートとの繋がりが深くなっている彼に、眠りは牙を向いた。

放っておけなかった。かつて苦しみ抜いた『僕』がそこにいるのだから。そうして、シリウスに懇願した僕はマリアの部屋と銘打ちつてもほとんどをハリーの部屋で過ごしていた。

血の守りの関係もある。きつと僕にペチュニア伯母さんほどつよい盾の力はない。でなければ、これだけ四六時中共にいて、ヴォルデモートがハリーに近付けるはずもないのだから。——それでも。

少しでも、宿敵の呪いと、そして母の呪いを背負ったこの子の心を救いたい。

「ハリー」

ベッドのハリーは眉根を寄せて寝汗を浮かばせていた。また、悪夢を見ているようだ。墓場の夢を。

「だめだ、セド……マ、リ……」

「ハリー。ここにいるよ。僕はここにいる」

「にげて、セドリツク……マリア……マリア……」

「うん。マリアは君の側にいるよ」

手を握って、くしゃくしゃの前髪を払って額を撫でる。汗でしっとりしていた。傷が熱を持っているように感じた。

「ハリー」

「マリア」

涙でゆらゆらした緑色の瞳がおもむろに開いた。

「おはよう、ハリー。もうお昼だけだね。お腹は空いてる？ ルーピン先生が昼食を作ってくれてるんだ」

「……マリア」

伸びてきた腕を自らむかえて、脂汗にしめったハリーの背を叩く。耳元で呼吸をするハリーの声はかすれていた。この夏で男の子のハリーはぐんと背が伸びて、声変わりもむかえて本格的な思春期へと入っていた。心のバランスがぐちゃぐちゃなのだ。『僕』自身、そして我が子たちの成長を見てきた僕にはそれがわかった。

「マリア……マリア……」

「うん。ちゃんと生きてるよ」

冷たいハリーの体に僕の熱が移るまで、僕らは子供らしくベッドの上で抱きしめ合った。

一ヶ月ほどしてから、ウィーズリー家の人々やロンとハーマイオニーもブラック邸へとやってきた。騎士団の活動も活発的になり、ほとんどがブラック邸を間借りしているような状態だった。それが叶うほどに、ブラック邸は広いのだ。ウィーズリー夫妻に、姿現しを頻繁に行ってはハーマイオニーをイライラさせるフレッドとジョージ、ロンにジニー、ビルは表向きの仕事もあつてブラック邸へ戻るのは時々だった。チャーリーは遠くまで出ているようでもまだ一度も顔を見られていなかった。そして——パーシーは。

「あんな野郎、兄弟じゃないよ。ファッジのローブ持ちめ。野心家の恥さらしめ」

すっかり台所の主となったモリー母さんに聞こえない場所でフ

レッドは吐き捨てた。今回もパーシーは魔法省側についてしまったのだ。

日刊予言者新聞を手取る。一面にダンブルドアのヘイト記事が見られた。『前回』ではハリーの情報操作と五分五分だったそれは、標的をダンブルドア一本へとしばっているようだった。ハリーを貶めるには情報が足りないのだ。そしてなにより——冤罪をかけてしまったシリウス・ブラックが黙っていない。それは、リータ・スキーターの記事の一件で確認されている。ペティグリューの不祥事を黙っていることも牽制の役割をなしていた。

ゆえに、ハリーはダンブルドアに操られる哀れな被害者として書かれているのである。みんなの希望的存在のハリーを悲劇に落とすことで、ダンブルドアへのヘイトをより集める方向にしたようだ。——どつちにしろ、ハリーの声は届かない。

「会議、終わったみたいだぜ。チエツ、やっぱりスネイプがいると防がれちまう」

伸び耳を名残惜しげに回収したジョージがぼやく。好奇心旺盛な子供たちは大人たちの会議が気になってしかたないのだ。それはハリーにまで伝染して、不安定な彼に苛立ちを覚えさせていた。

「スネイプが騎士団の人間だったなんて」

「シリウスはこの件に関しては何んとも？」

「うん。相変わらず仲が最悪だっただけ以外は、なんにも」

ハーマイオニーからの問いかけに首を振って答える。二階はもっぱら子供たちのための階となっていて、特にマリアとハリーの部屋は室内からも扉一つで移動できる仕様なために子供側の疑似会議室となっていた。

「とりあえず、お袋に見つかる前にマンダングスのところへ行こうぜ。」

兄弟」

「だな。いい商売にしなくちゃ」

フレッドとジョージがここぞとばかりに取引商品を手に階段を下りる。ハリーをスポンサーとした悪戯専門店の計画は順調のようだ。それに、ハーマイオニーはこれ見よがしに肩をすくめた。

「わたし、あの人、好きじゃないわ。どうにも信用ならないんですもの——キャア!?!」

ハーマイオニーはなにに悲鳴をあげたのか——ハーマイオニーの目線を追って、みんなが同じように飛び上がった。鬱々としたブラツク家のしもべ妖精、クリーチャーがいつの間にか忍び込んでいた。

「あの、あなた——そう、クリーチャーよね」

悲鳴をあげてしまったことを恥じたハーマイオニーは懸命に優しい声を出した。だがしかし、クリーチャーには純血でない——特に、両親のどちらも魔法族でないハーマイオニーからの友好の手などは屈辱でしかないのだ。

「穢らわしい女がクリーチャーに話しかける。穢れた血の分際で奥様のお屋敷を荒らして——おお、おかわいそうな奥様。高貴なる屋敷を獣共に荒らされて、どれほどお嘆きか——」

「気にしないで、ハーマイオニー。……これ、彼の独り言なんだ」
「そう……」

ハーマイオニーは同情的な目でクリーチャーを見ていた。彼女の頭の中には今、かわいそうな屋敷しもべ妖精クリーチャーでどんなに悲劇的なストーリーがくり広げられていることだろう。『前回』壁の飾りとなっていた歴代しもべ妖精の首はとつくの昔に撤去済みだが、

このおぞましいブラック家の伝統を彼女が知ればどう思うか。……
想像するだけで^{SPEW}反吐が出そうだ。

「ここにブラック家の人々の遺品はないよ、クリーチャー」
「おつしやるとおりで、お嬢様。……穢れた血の混血がクリーチャーに家族面をする。このお屋敷の主面をする。なんたることか。このような惨憺たるさまを奥様がご覧になられたら、クリーチャーめになんとおおせになるか……」

クリーチャーは悪態をつきながら退室した。ハーマイオニーは彼のちいさく衰れな後ろ姿に同情あまつて口をおおっていた。

「かわいそうに……正気じゃないんだわ」

「正気じゃないのは君だよ、ハーマイオニー。あんなことを言われて、なにがかわいそうだって言うんだ？」

「あれが虐待の結果なのよ。みんながよつてたかつて、正当に評価せず奴隷のように扱うからああなるんだわ。彼は屋敷しもべ妖精の悲しい運命そのものなのよ」

ロンと、それからジニーがハーマイオニーから目をそらして救いを求めるような眼差しで僕を見た。……諦めてくれ。彼女のこれは魔法大臣になったって変わりやしないんだから。

夕食を終えれば子供たちは追い立てられるように就寝だ。特に、モリー母さんからの監視は完璧だった。モリー母さんは子供たちの耳に騎士団の活動内容を触れさせたくないのだ。少し前に伸び耳を使ったジョージが『ヴォルデモートが求める形のわからない武器』についての情報を盗み出して以来、ピリピリと神経を尖らせていた。

「……眠れない？」

マリアの部屋はハーマイオニーとジニーに譲って（室内ドアの鍵は

当然閉めた上でだ。) ハリーの部屋で同じベッド横になる。手慰みにハリーの背を一定のリズムで叩く。

ハリーの悪夢には二種類ある。セドリツクの夢と——ヴォルデモートとリンクする夢だ。神秘部へ向かう扉の夢——

「大丈夫だよ、ハリー。僕が起こすから。……その先には、行かせないから」

「マリア……」

まだハリーは誰の目線で扉の夢を見ているのか気付いていない。だが、それも時間の問題だ。じわじわと記憶を脳を侵食されるあの感覚——それはハリーと『僕』にしかわからない。

十年以上共にあるくしゃくしゃ頭を抱き込んで、何度だって繰り返す。

「大丈夫だよ。——君には、僕がいるんだから」

『僕』にはいなかった——^{マリア}僕がいるのだから。

忘れてた。

「マリア？」

朝食の途中、思わずオートミールをつついていたスプーンを落とし、ハリーは低血圧から起きてこられなくて、他のみんなもまだ眠っていて、シリウスとルーピン先生の三人だけで机を囲んだ朝のことだった。(モリー母さんはアーサーおじさんに付き添って隠れ穴に帰っていた。)

「——デイメンター！」

「デイメンター？」

同じタイミングでおじさん二人が首をかしげる。

思い出していたのだ。「僕」の時とあまりに現状がちがいすぎて——あんまりにも幸せで、だから、「僕」がこの家でどう過ごしていたか。過去に思いを馳せていた。

——そして、至った。魔法省に呼び出されたこと。理不尽な尋問を受けたこと。——僕は退学ハリーの危機にあった。

その、原因が。

「ダドリー！」

「ダドリー？」

頭を抱えた。そうだ、ダドリーをかばったんだ。守護霊を喚んで、ついでにフィッグばあさんがスクイブであることも知って——

だがしかし、此度のハリーはプリベット通りに戻っていない。デイメンターに遭遇すら叶わない。ダドリーは無事だろうか。そもそも

デイメンターは現れるのか。

「シリウス。デイメンターがマグルの街をうろついたとか、そんな話は聞いてない？」

「これまでもこれから聞くことはないと思うが」

「デイメンターがホグワーツへやって来たのは特例のことだったんだよ、マリア。あいつらはアズカバンにいるんだ。くわしくは君のおじさんに聞くといい。ここにいる誰よりも彼らにくわしいだろうからね」

「ソレ、笑えないぜ。リーマス」

「そんなことは知ってるよ。知ってるけど——ああもう、僕はここから出られないのに」

ルーピン先生が新しいスプーンを用意してくれたのにも目もくれないで、なすすべなくオートミールを見つめた。『前回』、デイメンターがプリベット通りへと現れたのはハリー・ポッターを陥れるためだった。つまりは、ブラック邸に引きこもっている今回ならば例の事件は起きないのかもしれない。——だが、確証はない。

ダドリーのことは好きじゃない。和解してからだって、義務的な付き合いはあったが友好的とは程遠かった。今のダドリーなんて最悪だ。極力、関わり合いになりたくない。ダドリーのことは好きじゃない————だとしても、廃人になっていいとまでは思うはずもないだ。

「マリア、どうしたんだ。困ったことがあるのなら言いなさい」

シリウスとルーピン先生に心配そうに顔を覗き込まれて、僕は躊躇した。言っているものだろうか。これは不確定な未来だ。自分の代わりに——来るかどうかもわからないデイメンターを警戒してプリベット通りを見張ってほしい、だなんて。

「マリア」

「マリア」

シリウスのグレーの瞳も、ルーピン先生の緑の瞳も、どちらも透きとおるほど真摯で僕はうながされるままに口を開いていた。

「ぜったいの、ことじゃないんだ。信じてもらえなくてもしかたないんだけど」

「信じるさ。なにがあっても君たちを信じると、私はそう言ったはずだ」

「シリウス……」

ぐしゃぐしゃと頭をかき混ぜられた。女の子の髪を雑に扱うものじゃない、なんてルーピン先生に叱られているシリウスの姿に、笑顔までくしゃくしゃになってしまった。

「マリア、私たちになにをしてほしいんだ？」

「言ってごらん」

一呼吸。

「——プライベート通りに、向かってほしい」

二人はきよとりと顔を見合わせた。

「プライベート通りというと——君たちが預けられていた？」

「うん。……出所は、言えないんだけど。もしかしたらその辺りをディメンターがうろつくかもしれない」

目を見張ったのはシリウスだ。ルーピン先生は口元に手を当て考え込んでいた。

「そんなことがあるのか」

「わからない。絶対じゃないんだ。いつかもわからない。まったく無駄なことかもしれない。僕が見張れたならそれが一番なんだろうけど——」

「ここから出せるわけがないね」

「……そうだよ。僕もハリーを置いていくなんてできないや」

苦笑すれば、ルーピン先生は大きくうなずいて僕の肩を叩いた。

「わかった。私が張ろう。満月まではまだ遠い。シリウスよりも私のほうが適任だ」

「リーマス」

「忘れがちだけど、君だってこの屋敷から出ることは控えるようダンブルドアから言い付けられているだろう。二人の側にいてやるという」

現状、打てる手の中での最善だった。ルーピン先生の守護霊の呪文はうつくしい。きっとダドリーを救ってくれる。

「ありがとうございます、先生。……あの、ほんとうに?」

「ああ。私は君の……そうだな、予言、ということにしておこうか。君の不安感は見過ぎせないからね」

「……ダンブルドアが、そう?」

「……私の生徒はかしこい子ばかりだ」

シリウスとはちがつて、撫で付けるような優しさで頭に触れられる。

「勇気を出してくれてありがとう、マリア」

「——」

寝起きのハーマイオニーが下りてくるまで、僕は保護者二人の手に身を委ねてありあまる幸福感にひたっていた。

「——やはり、マリアは」

リーマス・ルーピンは家主シリウス・ブラックの自室にて美貌の男と向き合っていた。

「予知能力、か……向こうの陣営に知られるとやっかいだな」

「予知——かな？　ほんとうに？」

「どういう意味だ？」

かつての仲間たちの中でも一等思慮深く慎重だった男の疑問に、シリウスは深く腰掛けた身をただして先をうながした。

「このあいだボガートを退治した時に思い出したんだけど……マリアは守護霊の呪文を使えるだろう？　ハリーに教えたのは僕だ。だがしかし——マリアは誰から教わったんだろう」

「お前じゃないのか？」

「そんな暇はなかったよ。——あの子ははじめから知っていた」

はじめから。十一歳まで魔法の存在すら知らなかったマグル育ちのポッター兄弟が、独学で高等呪文を覚えるなんていうのはまず不可能だ。その点、ハリーは才能云々を含めたとしても等身大で——マリアは謎が多すぎた。

「聞いてみたんだ。そうしたらあの子は——マリアは、まるで『僕』から教わったかのように答えた」

「ハア？ お前、さつき、」

「ああ。僕は教えていない。ぜったいに」

リーマスは断固と否定する。

「これは予知では説明がつかない。予知で パトローナス・チャーム 守護霊の呪文のような高等呪文を扱えるようになるなら、これまでの予知能力者たちは軒並みマールン並みの化物でなければならぬ。予知というより——あの子は、経験してきたみたいだ」

荒唐無稽な絵空事だ。ありえないことばかりが積み重なっている。マリアもハリーも亡き親友の忘れ形見として等しく愛しているけれど、少女の方に得たいの知れないものを感じていることも事実だった。

「セドリック・ディゴリーのことだって——」

「……………」

その日、マリアはおびえていた。周囲がエンターテイメントの一つとして試合を観戦する中、彼女だけは先を見据えて警戒していた。シリウスはそんな彼女の傍にいたのだ。——マリアの異常をひしひしと感じていた。

それから、もうひとつ。リーマスは続けた。

「ボガートは対象がもつとも恐れるものに化ける。僕の場合は満月、ハリーはデイメンターだ。それは知っているね？」

「ああ」

「あの子の恐怖は——『赤ん坊』だった」

「赤ん坊？」

シリウスの愁眉にリーマスは記憶を引き出しながらうめくように語った。

「それも、普通の赤ん坊じゃない。おそろしくみにくいんだ。血だらけで、骨の浮かんだミイラのような——とにかく、常識では考えられない形をしていた。ゾツとしたよ」

形から赤ん坊と表現したが、それすらも定かではない。とても愛することのできない——嫌悪の象徴のようなナニカだった。

「魔法界には様々な生き物が存在するけど、あんなのは見たことがない。マリアは、いつ、どこであんなものを知ったんだ？　なぜそれに怯えている？」

ハリーを愛し、慈しみ、姉として最愛の家族を盾になっても守ろうとする少女。そんな毅然とした彼女が試験すらも投げ捨て逃げ出すほどの恐怖。——マリアはたった十四年のあいだになにを経験してきたのだろう。

それから——そうだ。リーマスは連鎖的にもう一人の存在を思い出した。

「ドラコ・マルフォイだって気になるんだ。彼のボガートは——
ジェームズに化けた」

「ハアア？」

シリウスはどうとう立ち上がった。ドラコと、ジェームズ？ まるで接点が見えない。

「なんだってルシウスのガキがジェームズを？ いつ見たっていうんだ？ ジェームズが生きてた頃なら、あいつだって一歳だろう」

「僕が知るわけないよ。マリアから写真を見せられたにしても、なんでそれが彼のもつとも恐れる対象になるのか」

ジェームズ・ポッターとドラコ・マルフォイ。繋がるはずのない糸が絡みもつれ合う。

「それも、ジェームズは傷だらけで——今にも死にそうな姿だった」

「……それ、ほんとうにジェームズか？」

「まちがいない。僕が彼を忘れるはずがない。あの背中、あのくしゃくしゃの頭は確かにジェームズだった」

「……………」

シリウスは再び脱力するようにソファへと座り込んだ。リーマスがジェームズを間違えるはずがない。その通りだ。シリウスだって間違えたりはしない。

どれほど——彼の背中を見てきたか。

「……それは、ドラコには」

「聞けるわけがないだろう？ プライバシーの中でも特にデリケートな部分だ。マリアの赤子のことだって、僕は真相を知らないよ。そもそも、ルシウスからもミセスマルフォイからもかわいがられているはずのドラコが二人と仲がいいことも謎の一つなんだから」

知れば知るほど複雑になっていく。英雄としてかつき上げられる

ハリー。そんな彼の影にあるマリアの存在。両親から離れポッター兄弟に関わるドラコ・マルfoy。

「あの子たちは——なにと闘って生きているんだろう」

夏休みも終盤へと差し掛かった頃、ようやくと新学期の案内と教科書リストが届いた。そして――

「これ、これ――夢じゃないよな？　ねえ、マリア、試しに僕の頬をつねっ――アイタタ！　夢じゃない！　もういいよ、マリー――イタイイタイ！」

涙を浮かべながら歓喜するロンの手には監督生バッジがあった。今回もロンとハーマイオニーが監督生に選ばれたのだ。モリー母さんは当然狂喜乱舞で、その日の夕食は二人のお祝いパーティーとなった。

「ハリー」

パーティーから抜け出したハリーに寄り添う。

「ロンが羨ましい？」

「どうして？」

ベッドに寝転ぶハリーの声はぼんやりしていた。

「自分が監督生になれると思ってたろう？」

「マリアは思ってたの？」

「まさか。我がグリフィンドールの優等生はハーマイオニー以外ありえない」

「でも、ロンは優等生じゃない」

「……そうだね」

そつと髪を撫でる。ハリーは癩癩を起こしはしなかった。感情を呑み込むように目をつむっていた。

「ロンには僕に無いなにかがあったのさ。ダンブルドアにはそれが見えた。でしよう？　もしも——もしも、マリアが監督生だったなら」「ありえないよ」

「だとしても。ハーマイオニーがいなければきつと君が監督生だった。そしてもしもその時、対の監督生がロンだったら——僕、わからない」

トン、トン——ハリーの背を叩く。

彼は今、理不尽に思ってしまう自分に、理不尽をかんじている。ぜんぶ、わかってる。君も、僕も。

「ダンブルドアはなにを考えてるんだろう」

「さあ」

「マリア、気付いてる？　——僕たち、ダンブルドアに避けられてるよ。みんな、なにかを隠してる」

「……うん」

目を開かないハリーがそのまま眠ってしまえるように祈る。

気付いてるよ——気付いて、しまったんだね。ハリーも。もう少し先であつたならよかつたのに。

芽生えてしまった不信心は着実にハリーの心を蝕んでいく。

「ハリー、ダンブルドアは——」

「マリア、いいかい？」

ノックと、ルーピン先生の声だった。僕は立ち上がった。ハリーは止めなかった。

「ちよつと、行ってくるね。……おやすみ、ハリー」

「マリア」

ハリーは。

「——君も、僕に隠し事ばかりだね。マリア」

喪失感を抱えながら、少年はぬくもりのなくなったベッドを撫でた。

ルーピン先生の呼び出しによって、僕はシリウスの自室にいた。二人は深刻な顔をしていた。

「マリア、デイメンターの件だけど——君の言うとおりでった」
「——！」

ハツと息を呑む。やはりデイメンターは現れたのだ。マグルの街中に——命を受けて。

「あんな場所に偶然でデイメンターがいるはずもない。——これは、ハリーを狙ったものだね？」

うなずく。どこからの差し金か、二人ならば理解できるだろう。魔法省は今年もハリーがプリベット通りに戻ると思っていたのだ。

「敵が多すぎるな……」

舌打ちと共にシリウスは長い髪をかき上げた。場違いにもさまになるな、なんて思った。ルーピン先生はすっかりくたびれたふうに眉

間を揉んでいた。

「いいかい。ハリーに警戒させるのは当然として、マリア、君だって気を付けなくちゃならない。ホグワーツで無茶をしすぎないように。目立った行動はひかえなさい。特に君は——ジェームズに似てかしこい」

シリウスの真面目ぶった眼差しとその言葉に、僕は面食らっていた。

シリウスが—— 無茶をするな、だって？

「ホグワーツで情報収集に動け、とは——言わないんだ」

「当たり前だろう。君たちは学生だぞ。騎士団に入ってるわけでもない。そんなのはスニベルス……いや、スネイプの仕事だ。危険は大人が背負うんだ。君たちは守られるべき存在だ」

シリウスが続ける。ルーピン先生も当然の顔をしている。二人は心から——僕たちを案じている。

「でも——父さんなら、こういったスリルを楽しんだんじゃない？」
「マリア……いいかい、君たちは確かにジェームズによく似ている。才能も受け継いでいる。だがね——ジェームズではないんだ。あいつの無鉄砲まで継いでくれるな。ちゃんと守らせてくれ」

シリウスは呆れたとばかりに首を振っていた。父親の顔をして、ハリーをハリーと呼ぶ。

僕はジェームズじゃない——そんなのは、『僕』が一番知っていたんだ。『僕』こそが、伝えたい言葉だったのに。

「シリウスは——ちゃんとハリーが見えてるんだね。父さんじゃなくて、ハリーが」

彼の灰色の目にジェームズの亡霊は映っていなかった。

「当たり前だ」

迷うことなく即答したシリウスに、僕は下手くそに笑った。そうしなければ、吐き出しそうだった。パーティーのご馳走をかもしれない。息をかもしれない。声かもしれない。とにかくぶざまをさらしたくなくて、笑った。

きつとこのシリウスがハリーを見てジェームズと呼ぶことはない。ハリーにジェームズと同じ冒険を求めることもない。自分の親友を取り戻そうとはしない。彼の中で——ジェームズは『過去』となった。ハリーがハリーとして生きている。

ああ——ああ——うらやましい。

九月一日。騎士団の護衛を受けながらキングス・クロス駅へと向かう。シリウスが犬となつて忍ぶ必要もなく、どうどうと見送られる。ロンとハーマイオニーは監督生用のコンパートメントへと向かい、僕とハリーはジニーと共に空いている席を探す。

「マリア、マルフォイはいいの?」

「どうせあいつも監督生だからね。……ああ、ジニーからすれば僕はお邪魔虫かな?」

「そんなことないわ! もう、いじわる」

からかえばかわいらしくすねるジニーを愛でながら、ネビルと、そしてルーナが座るコンパートメントを発見した。

「彼女、ルーナ・ラブグッドよ。あたしと同じ学年のレイブンクロー生。ハイ、ルーナ！ こちらは、」

「知ってるよ。あんた、ハリー・ポッターだ。それで、あんたはマリア・ポッター。ジニーがよく話すもん」

ルーナは常にびっくりしたような飛び出た目をパチパチとまばたきさせた。それから、ジツとハリーを見つめた。ハリーは非常に居心地が悪そうだった。

「その雑誌、いいよね」

ハリーをルーナの視線から救うべく、テキトウなおべんちやらをか。ルーナのお父さんが編集する『ザ・クイブラー』は彼女の自慢なのだ。誰もがバカにするインチキ雑誌だが、これが後々、奇矯にもハリーの生命を繋ぐこととなる。

一時間ほどすればロンとハーマイオニーもやってきて、コンパートメント内は賑やかになった。僕はすっかり忘れていた。——否、忘れようとしていた。『彼』の存在を。

「マリア」

シン——笑い声が冷や水でもかけられたように消えた。みんなの視線が僕へと集まった。

「歓談に水を注したようですまない。——彼女を借りても？」

ドラコ・マルフォイだ。胸には監督生バッジが誇らしげに輝いていた。

「マリア」

ハリーが僕の手を取る。ハーマイオニーが気遣わしげに僕とドラコを見比べている。……やっぱり、二人には気付かれていた。僕が彼を避けていることを。

「大丈夫だよ」

「マリア……」

「時間は取らせないさ」

ハリーとハーマイオニーの目を振り切つて席を立つ。ドラコはすでに歩き出していた。取つておいたらしい無人のコンパートメントへと案内されて。

「——返事は期待してない」

「——」

僕は座ることもできず立ち尽くした。

「……本気だったの？」

「本気じゃないとでも？」

「だって、君——おかしいだろう。君が、僕を——だなんて。僕は——

君は、知ってるはずだ。——僕が、ほんとうは男だって」

「君の性別は関係ない」

引かれるままに彼の向かいへと座る。ドラコの目は静かだった。水面から覗く水底のような色をしていた。

「『君』だから好きなんだ。——ハリー・ポッター」

どのように解釈して、そしてどのように受け止めればいいのかわからなかった。

ドラコ・マルフォイが、ハリー・ポッターを、好き？——世界ま

るごと、狂ってるみたいだ。

「……アステリアのことは」

「もちろん、愛しているとも」

「アステリアを愛してるのに、ハリー・ポッターも、好き？」

「そうだ」

「めちやくちやだよ……気でも触れたみたいだ」

「恋愛とは人を狂わせるものだろうか？」

いつも通りのシニカルな笑み。——唐突に気付かされた。顎はシャープで、鼻はスツと立っていて、睫毛は涼しげに伸びて、瞳は静かで——手には血管と骨が浮き、腕も足もしなやか。声は——低くなっていた。

目の前の少年は男になろうとしていた。……僕を置き去りにして。

「マリア。いや、今はハリーと呼ぼうか。ハリー、返事はいらぬ。——まだ。君が僕をそんなふうに見ないことは知っている」

「……………」

「君をあそこから連れ出したのは別件だ」

組んでいた脚をほどいて、ドラコは瞳に不思議な光を宿した。僕はすっかり呑まれていた。彼の蠱惑的な魔力に。

ドラコは告げた。瞳に僕を捕らえたまま。ゾツとするほど——いつも通りの顔で。

「僕と共に——僕の父を殺してほしい」

大広間へとたどり着けば、様々な箇所がハリーたちの困惑を誘った。不在のハグリッド、警告を歌う帽子、埋まった闇の魔術に対する防衛術教授の席——なにかが動き始めていると、厳しい空気からもひしひしと感じられた。子供たちは不安げな顔を隠せなかった。

「なんてこと——あの女、とんでもない宣言をしていったわ」

「あの女って——ア—…ドレス・アンブレラ？」

「ドローレス・アンブリッジ」

「そう、それ」

監督生の二人が一年生を寮へ案内するのについていきながら、声をひそめたハーマイオニーに同意を示す。ダンブルドアの挨拶をさえぎってまでされた甘ったる声のスピーチ——反吐が出そうだった。

「やっぱりわたしとマリアしか聞いていなかったのね。マリアはさすがだわ」

「君みたいにぜんぶを聞いてたわけじゃないよ。ハーマイオニーは僕を買いかぶりすぎだ」

「でも、理解できたでしょう？ あの女がホグワーツになにをしようとしているのか」

「なにをしようとしているんだい？」

声をひそめることすら忘れたロンに、僕とハーマイオニーははつきりと答えた。

「魔法省が学校運営に」「介入してくるってことだよ」

男子寮と女子寮を前に分かれる際、僕は慎重にハリーをうかがい見

た。周りはハリーを指してはひそひそとささやく。不快でたまらな
いだろう。すべてが敵に見える頃だ。ただひとつ、『僕』とちがうの
は、ひそひそする人々の目には同情が浮かんでいることだった。日刊
予言者新聞に踊らされる人々にとつて、今のハリー・ポッターは、詐
欺師ダンブルドアの魔の手にかかり正義の魔法省から保護を受けら
れない悲劇の男の子なのだ。

そうじゃない。——かわいそうに。

ダンブルドアは間違つてない。——かわいそうに。

僕は騙されてない。——かわいそうに。

僕の話聞いて！——かわいそうに。

憐れむだけの無責任な人々に、ハリーの声は届かない。

「ロン。ハリーのこと、見てやってよ」

「ああ……うん」

ロンは一瞬、ハリーの八つ当たりにつき合うのは嫌だなあ、といっ
た顔をしたが、ハーマイオニーから見つめられて、しぶしぶ風にな
ずいた。男子寮の中までは女の子のマリアじゃすぐにかばいに行
けないんだもの。

「君たちは O・W・L 試験だつてひかえてるし……大変なのはわ
かってるよ。それでも、お願い。今のハリーは誰が味方かもわからな
いんだ」

「僕たちが味方だ。そして君はぜつたいに味方だ」

「その通り。——君があの子にそれをわからせてやって」

ようやくと、ロンは笑った。そんな僕たちにハーマイオニーが偉
ぶった政治家のように咳払いをした。

「ハリーのことなら言われなくつたつて任されるわ。親友だもの。そ
れで——マリア？　まるで他人事のようにおっしゃいましたけど、あ

なただって『ふくろう』の年のはずなんだけど？」

「……ハアイ」

今回も勉強の鬼からは逃れられそうにない。

アンブリッジの初授業の日だ。すでにハリーのイライラは限界に達していた。イキイキとハリー（と、ネビル）をいびるスネイプ先生に、タイムリーにも夢占いの分野へと入った占い学。ただでさえ悪夢により慢性の寝不足と化しているハリーに追い打ちをかける宿題の山。そしてなにより、腫れ物に触れるがごとき周囲のよそよそしさ。そのすべてがハリーを追いつめていた。——僕たちを巻き込んで。僕たちはハリー・ポッターという爆弾を常に抱えていた。

「ハリー、先に言っておくよ」

闇の魔術に対する防衛術の教室の前で、僕は三人を呼び止めた。

「次の授業で君はぜったいに怒る。ハーマイオニーも怒ると思う。良い授業にはならない。アンブリッジはクズだ。——いいかい、まともに相手をしようとしちゃだめだ。君は嫌な人間とのやりくりを覚えるべきだ」

「マリア。確かにあの先生はおかしいわ。校長先生の挨拶をさえぎるだなんて。それに、あの口調。わたしたちのことを一年生から七年生まで、まるで五才児あつかい。……でも、まだ、それだけよ。これ以上のクズかはわからないわ」

「いいや、クズだよ。あいつは」

ハーマイオニーは話にならないとばかりに肩をすくめた。そんな彼女を見てロンは兄そつくりニヤツとした。

「ロックハートよりも?」

「ロックハートがかわいく思えるくらい」

ハーマイオニーの顔が赤くなった。例の事件以来、彼女の前でロックハートの名前は禁句なのだ。ロンのおかげで空気が緩んだところで——ハリーの導火線にぬる火がついた。

「マリアお得意の予言? どうでもいいよ、そんなの。僕にとってはみんな等しくクズだ。——あ、いや、君たちを除いて、だけど」
「ハリー」

「そんなに自信があるのならいつそ占い学も君が教鞭を取ればいいんだ。そうすれば、お友達が死ぬ夢ばかり見るのはあなたに死が近づいているから、なんてご高尚な解釈を聞かされなくて済む」

「ハリー、ちゃんと話を聞いて」

「聞いているよ。ミスアンブリッジに怒らない。ああ、かまわないとも。彼女が僕をかわいそうな五才児あつかいしないならね」

ハリーはさっさと教室へと入ってしまった。僕と、そしてロンとハーマイオニーは言葉もなく顔を見合わせた。

「あいつ、マリアにすら当たるなんて——相当だぜ」

「そうよ。マリア、あなた怒るべきよ」

「……いや、僕に当たれるうちはいいんだ」

それで、彼の気が済んで、周りの声が聞こえるようになるのなら——『僕』のような致命的な間違いは犯さない。そう思いたい。

親友二人は名状しがたい表情で沈黙すると、やがてチャイムにうながされて入室した。

授業は『僕』の知っている通りだった。実践あるのみの防衛術に対して、ひたすら理論を説き、板書を書き取る。絶望的につまらなかつ

た。ハーマイオニーが理解できたとばかりに僕へ暗い流し目を送った。僕はそれに首を振った。我慢して——そのうち別の形で学べるようになるから——

しかし、導火線にとっくに火が着いていたハリーにまで僕の煩慮が届くはずもない。

「それで、いつ実践に入るのですか。アンブリッジ先生。まさかこの時間ずっと、書き取りを？」

「発言には挙手を、ミスターポッター。どうして実践する必要があるの？ この先だって実践はありません」
「なんだって？」

ロンが耳を疑うとばかりに声を張り上げた。触発されて、クラス中がペンを置いてざわめいた。

「試験に実技はないということですか？」

「理論を十分に勉強していれば、その時に呪文をかけられないということはないですよ。ミスブラウン」

「フリットウィック先生は練習が大事だとおっしゃいます。マクゴナガル先生だって！」

「発言には挙手！ ミスタートーマス。申し上げておきましょう。現在の Hogwartz の教師方は、はつきり言って……」

そこでアンブリッジは薄ら笑いを浮かべた。誰が見てもわかる嘲笑の笑みだった。

グリフィンドールの寮生たちは等しくマクゴナガル先生を尊敬している。厳格な人だが、それだけ生徒たちを生徒として見守り愛してくれる人だ。Hogwartz の師であり母だ。それを——この女は侮辱した。今や教室中を不穏な空気が包んでいた。

「つまり、アンブリッジ先生はこうおっしゃるわけだ。今、目の前に

ヴォルデモート卿が現れたとしても——理論を知っていれば誰もが太刀打ちできると」

氷のような沈黙だった。誰もがハリーを見て硬直した。ただひとり——不気味な微笑みのアンブリッジを除いて。

「ミスターポッター、よろしいですか。死者はよみがえりません」

「ヴォルデモートは死んでなかった！」

「ええ。ええ。そう言えと強要されたのね？ わたくしはきちんとわかっていますよ。あなたはこれまで多大なる恐怖に見舞われてきました。労しいことです。そしてあなたの最大の不幸は、周囲に正しい人間がいなかったこと……正しい判断ができなくなっているも仕方のないことでしょう。あなたのように純粋な坊やが……おお、わたくしは正しい大人として大変心を痛めています。——今なお、悪い大人に騙されて、かわいそうに」

「僕の周りには悪い大人なんていない！」

「ええ、そうでしょうとも。そう思いたかったわよね……さあ、そのお話は授業後にゆつくりしましょうね。みなさんも、かわいそうなミスターポッターのことをよく見てあげて。そして教えて差し上げましょう。——おそろしい闇の魔法使いはもういないのだと。みなさんでミスターポッターの病気を救いましょう」

もはや五才児あつかいですらなかった。親の命令がわからない三才児をあやす声だ。教祖がごとく腕を広げて、ガマガエルは薄汚れた偽善に酔いしれていた。

「それじゃあ——」

ハリーは椅子を蹴飛ばし立ち上がった。

「セドリックは勝手に——独りでに死んだと？ ああ、それとも——」

僕たちが殺した？」

針のような緊張が走った。アンブリッジですら目を見開いていた。そして。

「——セドリック・デイゴリーの死は、悲しい事故です」

「ツセドリックは——」

「ハリー」

僕もまた立ち上がっていた。醜悪な女へ噛みつかうとするハリーの緑色の目が、様々な感情をふくんで僕を見た。

大丈夫。堪えられる。——僕はこの痛みを抱えると決めたんだ。

「どうやら先生の授業は私たちには合わないようです。失礼します」

「認められません。ミスポッター」

「では、罰則を。マクゴナガル先生に伝えておいてください。行こう、ハリー」

「待ちなさい！」

ハリーの腕を取って退室する。適当な空き教室へと入り（まともな部屋にたどり着くまでにフェイクの扉一つと、教室内が空洞の部屋に当たった。ホグワーツではサボりすら命がけた。）ハリーと向き合った。

「ハリー」

「我慢しろって言いたいんだろう」

「……いいいや」

見上げる位置に変わった肩を抱きしめる。ハリーは拳を握って唇

を噛みしめていた。

「僕も我慢できなかつた」

「うそだ」

「ほんとう。……セドリツクへの侮辱を、僕らだけは許しちやならな
い」

くしゃくしゃ頭をゆるく撫で付ける。ハリーははじめて呼吸を思
い出したように、ゆつくりと息をはいた。

「マリア——君だけは——」

「うん……うん」

授業終わりのチャイムが鳴るまで、ハリーの手は僕の背のローブを
握り続けていた。

アンブリッジは僕の挑発を言葉通りに受け取ったらしい。苦々しい顔のマクゴナガル先生を前に、僕まで苦笑いだった。

「グレンジャーからおおよその流れは聞いています。あなたが兄弟をかばったことくらいはわかっていますよ。もっとうまくやるように、とは——あなたにはいろいろな説教でしょう」

「ただの私怨です」

「ええ。そう言うだろうこともわかっています。ですから、私が伝えたい言葉はあなたではなく弟君に言伝するとしましょう」

「……お手柔らかにお願いします」

「あなた次第ね」

罰則内容が記された羊皮紙を手渡しされる。放課後にアンブリッジ教授の準備室へ——やはり例の卑怯な体罰だろうか。

「すぐに行ったほうがよさそうですね」

「……気を付けて」

「はい。ありがとうございます、マクゴナガル先生」

ほんとうに、心から僕とハリーを案じてくれるマクゴナガル先生に張りつめていた気をゆるめて微笑む。ホグワーツは尊敬できる大人ばかりだ。

アンブリッジの部屋——ルーピン先生との思い出がつまった教科準備室は、面影を完全に破壊して待ちかまえていた。仔猫の絵と攻撃的なまでのピンクにクラクラした。絶句する僕をよそにアンブリッジは甘ったるい夢見る少女の声で誘った。……夢見る少女ならばルーナのほうがよほど心地いい。

「素敵でしょう？　乙女同士、きつとわたくしたち、よいお友だちになりますわ」

よいお友だちとやらをこれから体罰に処そうというのに、アンブリッジはまるで茶会の女主人がごとく悠然と微笑んだ。指で机を指して、そこに向かう僕の一挙一動を観察していた。

「あなたの評判はきいていますよ、ミスポッター。優秀で、理的で——とても、ご兄弟に献身的だとか。同学年の中でもリーダー的存在なのね」

「まさか」

「みんながあなたを誉めましたよ。——あなたの弟とはちがつて」

机の下で拳を握りしめる。爪の痛みに集中して頭を透き通らせる。例の羽ペンが出てくる様子は——まだない。

「わたくしにもね、弟がいたの。ほんとうに——不出来で、どうしようもなく、愚かな弟。血が繋がっているなどと考えるのもおぞましい子。わたくしは不遇な幼少を過ごしました……ですから」

アンブリッジはハエをとらえたガマガエルのように、ニツタリと口角を吊り上げた。

「あなたの気持ちがよくわかるの」

「……私の、気持ち——ですか」

ねばつくような目から、嗜虐的な色が覗き始めていた。

「かわいそうなマリア。あなたは優秀なのに、兄弟というだけでお荷物を抱えなくてはいけない……。姉というだけでかばわなくてはならない。面倒を見なくてはいけない。考えたことがあるでしょう？」

——あんな子、いなければ。」

僕は。

「——いいえ」

きつぱりと、迷いひとつなく首を振った。

「いいえ。ハリーがいなければ、なんて、一度も考えたことはありません。僕はハリーを愛しています。……あなたとちがって」

目覚めたとき、僕が二人いるなんておかしな感覚だった。僕の弱さ、愚かさをハリーを通して突きつけられ、悔しい思いもした。ままならなくて、ハリー・ポッターでない身を呪ったりもした。——だけ

^ハ兄弟がいらないマリアなんて、想像すらできないんだ。

「……そう」

アンブリッジの目から急速に温度が消えた。

「罰則に入りましたよ。このペンを取って」

インクを必要としない黒羽根のペンを渡される。まだなにも書いていないのに、手の甲がうずく感覚に襲われた。

「そうね……『わたしは教師に歯向かってはならない』——そう、書き取りをするのよ」

今さらインクについて聞くのもバカらしくて、歯を食いしばって羊皮紙へと立ち向かった。手の甲に傷が刻まれていく。わたしは——

教師に——齒向かつては——ならない——バカバカしい。

「わたくしの言葉をよく考えてちょうだいね。わたくしは、あなたの味方よ」

手の甲にミミズ腫れが浮かんだ頃、アンブリッジはうつそりと傷を撫でて解放を宣言した。僕は最後まで弱味を見せずに退室した。足音だつて聞こえなくなるところまで歩いて——食いしばり続けている息を大きくはいた。

「——僕は、あなたの都合のいいスパイになつたりはしない」

傷痕を睨みながら呟く声は、憎々しきにあふれていた。

「——なにをしている、ポッター」

咄嗟に手を隠した。それがなおさら、彼の関心を引いてしまった。

「スネイプ先生……あつ」

問答無用で手首を取られる。すっかり夜に染まった廊下で、彼の暗い瞳が手の甲を見つめる。言葉はなかった。手首から伝わる人肌のぬくもりに、居心地の悪さをだけを感じていた。

「……あの、もう、戻りますので」

「ついてきたまえ」

「え？」

手首は放され、重そうなロープをひるがえしてスネイプ先生は歩き出した。振り返りもしない。歩みを合わせることもない。ついてこいと命じながら、それを期待していないように見えた。そう思うと——

—なんだか悔しくて、駆け足で隣へと並んだ。

たどり着いた先は予想の通りスネイプ先生の準備室だった。最低限の明かりしかないそこで、スネイプ先生は隅々まで見えているかのように迷いなく小瓶を取った。

「痛みと化膿止めだ。完全に治しはしない。……数日は、見せておく必要があるだろう」

「どうして……」

スネイプ先生は答えなかった。一度も目を合わせず、機械のような単調な動きで薬を僕の手の甲へと塗りつける。僕はそれに一瞬だけうめいて——うめいてしまったことに驚いた。アンブリッジの前では我慢できたのに。きつと、ハリーや親友たちの前でも我慢できるのに。

「お前は——泣かないな」

ねつとりとした前髪が遮光カーテンのようにさえぎって、彼の表情は見えないままだ。声からだって感情はうかがえない。——言葉だけが頼りだった。

「泣いたところで、時間は戻りませんから」

たとえば、名前も性別もちがう他人として生きない限り。——なんて。

「……フン、送ろう」

「ありがとうございます」

刺すような痛みはすっかり落ち着いて、ローブの中で意味もなく指を遊ばせながら、グリフィンドール寮の下まで僕はスネイプ先生の隣

を歩いた。

女子寮の自室にはハーマイオニーの姿しかなかった。ハーマイオニーは髪を苛立たしげにかき上げながらベッドへと座っていた。編み物テロを未遂で止めて以来、彼女は勉強のかたわら、屋敷しもべ妖精救出法について頭を悩ませているのだ。見慣れたしかめっ面の彼女に、今回もそれだろうと苦笑すれば目ざとく見とがめられた。

「ああ、マリア！ きいてちょうだい。フレッドとジョージが——彼らだったら、一年生で商品の実験を——まあ！」

ハーマイオニーはほんとうに目ざとい。彼女に隠し事は通用しない。……たとえば、怪我だって。

「なによこれ……なんてこと……抗議よ」

スネイプ先生とはまるでちがう力強さで手首を取られる。鼻息荒く下りた先、一緒に宿題をしていたらしい談話室のハリーとロンがハーマイオニーの登場に目を丸くしていた。

「いいところにいたわ。ごらんささい、ハリー。これを見てマクゴナガル先生の言葉をよく思い出すことね」

「待って、ハーマイオニー」

「なんだよ、君……フレッドとジョージならもう寝室に——ウワツ、なんだこれ」

ロンがミミズ腫れを目に入れてぎよつと目を剥いた。ハリーは呆然としていた。

「マクゴナガル先生がおっしゃったでしょう。真実が必ずしも正義になるわけじゃない——常識を働かせなさい、と。こういうことなのよ。あなたが勝手をすればマリアにまでシワよせがいくの。あなた

は自分の発言力を理解しなくてはならないわ」

「ハーマイオニー、いいんだ」

「よくないわ！ マリア、あなた、ハリーを甘やかしすぎよ。さあ医務室へ行きましょう。その次はマクゴナガル先生のところよ」

「ハーマイオニー！」

持ち前の押しの強さで暴走しかけるハーマイオニーを、取られた手首を逆手に止める。ハーマイオニーは不満たつぷりに振り返った。友のこととなると彼女の沸点はぐんと低くなる。

「怪我なら大丈夫。薬をもらったんだ」

「……誰に？」

胡乱な目のハーマイオニーへと小瓶を差し出せば、さらに胡散臭そうに見られた。

「アー……スネイプ、先生」

「エーッ!？」

ロンが声をひっくり返らせた。

「あら、そう。スネイプ先生なら間違いはないでしょう。それなら、まっすぐにマクゴナガルのところだわね」

「それもナシだ」

ハーマイオニーの目がつり上がった。ロンと、それからタイミング悪く談話室へと下りてきていたネビルの肩が跳ね上がった。

「まだたった一度の罰則だよ。様子見——君がいつも言うことだろう？」

「でも、あなたはあの女はクズだと言ったわ。そしてわたしも確信し

ました」

「僕が間違つてるとは思わないの？」

「思わないわ」

それは信頼からの言葉だった。純粹で、まっすぐで——力強すぎて、痛い。

ぐずりと、腹に石を投げ入れられた気分だった。

「……僕は、間違えてばかりだよ」

ハリーであつた頃とはちがう言葉が刻まれた甲を見つめながら、誰にも届かず声は足先へと落ちていった。

「マリア」

示し合わせたわけではない。そんな気がした——としかいいようがないのだけど。みんなが寝静まった談話室で僕はハリーの隣へと座っていた。

「ごめん」

「その謝罪は受け取れない。これは僕が勝手にやったことだ」

「受け取って。行き場がなくなってしまう」

「……………」

行き場のない懺悔は蓄積するしかない。僕はそのつらさを知っている。——うなずくしかなかった。

「マリアは、僕を責めないね」

「責める必要がない」

「ほんとうに?」

暗い談話室でハリーの瞳は、自ら発光しているかのように不思議な光を持っていた。

「——ほんとうに?」

「……ハリー?」

「マリアは大人だ。すぐに誰とでも仲良くなれる。寮関係なく友達がいる。あのスネイプとすら——僕が、あいつを嫌ってるのを知ってるくせに」

「ハリー、待つてよ。スネイプは」

「シリウスとも仲良しだ。ルーピンもマリアをかわいがる。マクゴナガル先生にも気に入られている。……ダンブルドアとだって、実は繋がってるんだろう」

エメラルドの瞳の魔力にあらがえなくて、見つめあつたまま首を振る。

「そんなことない! 僕——知らないよ、ほんとうに」

「僕たち、双子なのに。すべて同じ時間を過ごしてきたのに。——どうしてちがうんだろう」

「ハリー……」

ちがう。ちがうわけない。だって僕は——ハリーだ。

「ハリー、僕たちはちがわないよ。同じだ。君は僕で、僕は君だ。今、君は——傷が痛くて、夢がおそろしくて、だから不安定なんだ。大丈夫、君は愛されてる。ほんとうに——みんなが君を想ってる。ちやんと、わかるから」

僕は完璧な愛をもつて愛されていた。疑えるはずもなかった。

疑っていいものじゃなかった。それに気付けなくて——気付いたときには取りこぼしていた。あの絶望は、永遠に心に巣食い続ける。

君には、そんなふうになつてほしくないんだ。

「そこにマリアがいなくちや意味ない」

「もちろんだよ。……僕が一番、君をわかつてる」

僕は——君だから。

少しずつ心の均等が崩れゆくハリーを繋ぎ止めたくて、必死に抱きしめた。どうすれば伝わる。どうすれば——あの頃の『僕』には、誰の言葉が届いた？

「それなら、そばにいて。ちゃんとそばにいて」

「うん——うん」

抱き返してくる腕が苦しくても、ふがない自分への悔しさも呑み込んで、されるがままにあるしか僕にはできなかった。

翌日はハリーが罰則に呼ばれた。さらにそこでひと悶着あったよ
うで、ハリーの罰則は週末まで続くことになっていった。金曜日にはグ
リフィンドールクイディッチチームのキーパー選抜があるというの
に。……今度こそ、ロンの選抜試験を見に行かなくては。僕はハリ
ーではないけど。

「ハリー！ あれほど気を付けてと言ったじゃない！」

ハーマイオニーがガミガミとハリーを叱りつける。ハリーはすつ
かりうんざり顔だ。ハリーもハリーだけど、ハーマイオニーも頭ごな
しにするから響かないんだ。客観的にならこんなにも見えるのに。

「わかってるよ！ もう、かんべんしてくれよ。僕、頭がいたいんだ。
少しくらいお説教以外のことは話せないの？」

「あなたがわたしにお説教をさせるのよ！ やっぱり黙ってられない
わ。マクゴナガル先生に報告します」
「ダメ！」

ほとんど掴みかかるようにしてハリーは怒れる少女を制した。

「僕、告げ口なんてしない」

「告げ口じゃないわ。正当な抗議よ」

「ぜったいダメ。そんなことしたら、あいつは付け上がる。あの女に
だけは負けたくない」

「いつ勝ち負けの話になったの？ いいこと？ これはあなただけの
問題じゃ……」

「僕とあいつの問題だ。君には関係ない。いい加減、君のお節介には
うんざりだ」

ふてくされたハリーが自室へこもろうとするのを追って、せめてとスネイプ先生からの薬瓶を手渡せば、ハリーはそれを床に叩きつけてしまった。パリンと、ガラスの割れる音は笑えるくらい軽かった。

「ハリー！」

「あんなやつほどこしなんかいらぬ！」

ハーマイオニーがさらに追おうとするのを、今度は僕が止める番だった。

「マリア！　こんなの、許しちやダメよ！」

「いいんだ。……今頃、ハリーも後悔してるから」

「そんなのわからないわ！」

「わかるんだよ」

八つ当たりして、独りぼっちになって。そしてぐるぐると頭の中で理性の僕が責め立てる。この頃の僕ってほんとうに——最低だ。

薬瓶の残骸を拾い終えれば、ハーマイオニーが不満顔のまますっかりマスターした消失呪文を残りにかけてくれた。それを見てロンは、ふくろう試験に出題されるとマクゴナガル先生より忠告されていたことを思い出したのか、消失呪文ふくめ机に起きっぱなしの宿題の山を不安げに見た。

「……僕と一緒にしようか、ロン。ネビルも」

「マリア！」

宿題に悩む二人の声が輝く。ハーマイオニーは、もう知りません。とツンと顎をそらせて自室へと戻ってしまった。ついていけないよね？　そう、仔犬のような瞳ですがる同級生たちを放っておくことは僕にはできそうになかった。

「まずは自分で考えてよ？ 僕、ヒントしか出さないからね」

「うん！ ありがとう、マリア。僕、一生終わらないんじゃないかと思ってた」

「安心しろよ、ネビル。こう言いながらも最終的にレポートを見せてくれるのがマリアなんだ」

「わかった。ロンにはなにがなんでも見せてやらない」

「ウソ！ 我らがマリア様、なにとぞ、なにとぞ」

ハハア、とひれ伏すフリをするロンにケラケラ笑う。ネビルも丸い頬を震わせてニッコリした。そしておずおずとささやいた。

「マリア……あの、ハリーはいいの？」

「……ロンが見せてやってよ。僕よりロンのほうが今のハリーには近づきやすいと思うんだ」

「そうかなあ」

「そうだよ。弟を頼むよ、親友。そうしてくれたなら……月長石のレポートもオマケしちゃうかも」

「慈悲深きマリア様の望むとーりに」

再びロンが机にぺったりと頭をつけた。僕とネビルは爆笑した。

土曜日だ。ハリーも罰則から解放されて、ロンは無事キーパーに選ばれた。二人は朝から練習だ。——そして僕は。

「ミスポッター、お伺いしてよろしいですか？ なぜ、時計回りに二度回す前に火蟹の宝石を入れたのか。我輩がどのように説明したか、脳にたどり着くまでのあいだになんらかの障害があったようだ」
「……………」

スネイプ先生からマンツーマンレッスンを受けていた。目の前にはコポコポと怪しい色の液体をあふれさせる鍋があった。そして、ス

ネイプ先生の深くシワの刻まれたしかめっ面だ。こちらは常時だ。

頼んだのは僕だ。薬をスネイプ先生からは受け取れないのなら、僕が作ってしまえばいいのだと思いついたのだ。これからハリーは何度もアンブリッジの罰則を受けることになるだろうから。だがしかし——『僕』の頃から僕の魔法薬のセンスは最低だった。すでに投げ出したい気持ちでいっぱいだ。せめて、この人の嫌味癖さえなければ……もしくは、そう——嫌われたがりというべきか。

「すみません。もう一度おねがいます」

「ほう、ほう、なるほど。グリフィンドールの麗しき姫方は、材料などは無限に湧くものだと思いでいらっしやる」

「……材料を無駄にして申し訳ありません。よろしければもう一度はじめからご教示ください」

「……フン」

スネイプ先生の杖の一振りでグロテスクな液体は消えて、互いに目を合わせることなく淡々と作業は再開された。僕も大人になったものだ。これがハリーなら鍋を投げ付けるくらいは——いや、こちらのハリーなら三回までは我慢できるかな。

彼だって——『僕』の記憶にあるスネイプ先生よりもずいぶんとやわらかいように思う。まず、授業外レッスンなんて、ダンブルドアから命じられない限りありえなかっただろう。……いや、もしや命じられているのか？ 僕の監視もかねて——？

「ミスポッター。集中できぬなら鍋の前に立つな。我輩の時間を貴様が今このときにも無駄にしているのだと自覚しろ」

「つすみません。集中します」

頭から雑念を払って量りにハナハツカ粉末を乗せる。——この時間だって、僕には限りなく尊いものなのだから。大切にしないで。

「……お前の母親は、器用に調合したものだかな」

思わず、手を止めて目の前の人を見上げていた。スネイプ先生は鍋の中を見ていた。

「……めずらしいですね。先生から母さんの話をしてくれるなんて」
「……………」

返ってくる言葉はなかった。けれども——その時のスネイプ先生の目は、感情ある人の目をしていた。

少女には人形のように表情がなかった。ただ、僕の腕を引く手には力がこもっていた。

「アステリア」

突き当たりを曲がって、中庭を抜けて。人とすれ違うこともなくなった頃、いつのまにか小さな花園らしき場所に出ていた。花園と呼ぶには華やかさが足りないので、跡地——といったところか。使用感のあるベンチにアステリアが腰かける。ここまで、彼女とは一言も言葉を交わしていないかった。廊下でむんずとローブを掴まれて、問答無用で連行だ。今日が休日の土曜日でよかった。

「ねえ、アステリア」

彼女を日の下へやってもいいものか。不安になった僕はローブを彼女の肩へとかけた。赤色は嫌だと逃げられるかとも思ったが、アステリアは小さな指でローブをにぎってくれた。

「なにか、話があるんじゃないの？ 僕に？」

アステリアはようやく口を開いた。

「——ドラコお兄様が」

「うん」

「ドラコお兄様が、孤立しています」

「……………」

——想像は、していた。ドラコは今、これまでにないアプローチの方法で大切なものを守ろうとしている。そしてそれは——大切なものを切り捨てる方法でもある。

「去年の夏休みに、ドラコお兄様がキングス・クロス駅で——あなたに

——それが、噂になっただけ」

「……僕のせいだって、言いたい？」

「いいえ。ドラコお兄様のことを知る人ならば、とっくにわかっていたことですから。……たとえば、わたくしですとか」

「そ、そう……」

他人事にするわけにもいかず、かといって当事者顔をするにも気恥ずかしくて、口ごもった。アステリアは静かな目をしていた。

少しずつ、わかってきた。彼女が人形のように美しい顔をする時——彼女の中には激しい感情が渦巻いている。

「それじゃあ、僕に恨み言を言いに来たのかな。君は——ええと——邪魔をするんだものね？」

「ええ。ドラコお兄様の気持ちもマリアの気持ちも関係ありません。わたくしのために——わたくしの自己満足で、あなたたちを引き離すと——その、つもりでした」

——つもり、だった？

明らかな変化に少女を見つめる。アステリアは僕の視線を受けて小さく唇をかんだ。

「事情が変わりました」

「事情？」

「——ブラック家です」

「——」

「あなたの後見人、シリウス・ブラック——ブラック家の正当な血筋が力を取り戻そうとしている今、ドラコお兄様は、思っているほど家名に縛られる必要はないのかもしれない。なぜなら、あなたは、ブラック家に正当に養子として迎え入れられブラックを名乗れるかもしれない」

「……………」

そう、なるのか。思いもしなかった。だって、僕は、どちらであれ『ポッター』だ。ハリー・ポッターであることも、マリア・ポッターであることも——父さんと母さんの子供としての僕を放棄しようとは、一度だって考えたことはないのだ。

「バランスが急激にくずれて、純血のコミュニティがぐちゃぐちゃになっっているのです。そんなときに、ドラコお兄様が——」

「……血を裏切るもののポッター側に心を寄せているような素振りを見せた」

「そうです」

ふう、と、どちらともなく重いため息を吐き出した。ドラコ、君つてやつは……どれだけ健気な女の子に心配をかけるつもりなんだ。

「ドラコお兄様の立場は現在とてもあやういものです。このままでは

……。ですが、わたくしにはわからないのです。いつそ、ドラコお兄様がそちら側へいつてしまえば、そのほうが——それが、最善に——せめて、最悪からは——」

「——アステリアは」

無意識にうなだれゆくアステリアに、僕の胸はしめつけられるばかりだった。

「ほんとうに、ドラコが好きだね」

アステリアは微笑んだ。——うつくしく。

「当然です。——愛しておりますもの」

泰然とした顔だ。こんな愛し方があるだなんて、知らなかった。とつくに大人のつもりだったのに、彼女には学ばされてばかりだ。いつだって彼女の想いにはハツときせられるのだ。

「ドラコなら大丈夫だよ。僕が彼に応えることはないけど——つまりは、僕はそう思ってるんだけど——睨まないでよ」

返事はいらぬ。その言葉に甘えて逃げている自覚がある僕に、彼を想う少女からのまっすぐな眼差しは痛すぎる。

「あいつなら大丈夫。案外、考えてるよ。……君のことも、一番に考えてる」

「……………」

アステリアは口端を震わせて、それから、小さくうめきながら両頬を手でおおった。

「ごこでよろこんでしまえば、わたくし、嫌な女ですわね」

「でも、うれしい?」

「うれしい」

素直にうなずいた少女に、思わず声を上げて笑った。

「いいじゃない。それでいいんだよ。そんな君がドラコは好きなんだから」

こんなにもいじらしい姿を見せられて——愛さずにいられるものか。

「マリアは? マリアは——わたくしをきらいにならないかしら。みにくい女だと」

「思うと思うかい?」

「……思わないわ。わたくしが認めたライバルですもの。ずるい人ですもの」

クツクと笑い合う。やっぱり、アステリアには笑顔がよく似合う。きれいなお人形さんの君よりも——ただのアステリアが、僕たちは愛しいんだ。

「大丈夫だよ。……きつと、大丈夫」

ベンチの上で、小さな手に手を重ねた。アステリアの横顔は、ほんの少しだけ泣き出しそうに見えた。

大丈夫。マルフォイの人間は——『生きる』覚悟を持つ人たちばかりだから。

日曜日にはパーシーからロンへ、なつかしいダンブルドアネガティブキャンペーンの手紙が届いた。それをロンはハリーの前で忌々しそうにやぶり捨てた。

「なにが——バツジを——失う——危険性について——だ！」

「パーシーらしいね」

「マリアはほんとうにのんきね」

ハーマイオニーの髪をポニーテールにしながらクスクス笑えば、そのハーマイオニーからは呆れたふうに肩をすくめられた。

だって僕は知ってるもの。——パーシーが弟の亡骸を前に、どれほどの愛を突き通すか。ムカつくけど、憎めない人だ。

「それにしても、アンブリッジについての箇所が気になったわ。アンブリッジがこれからやりやすくなるって——どういうこと？」

仕上げにブラシで毛先を整えて。ハーマイオニーはふわふわの髪を振って僕らへと向き直った。

「——明日、わかるよ」

きよとんとする三人の子供たちの顔を眺める。窓の向こうは暗い。嫌な天気だ。——ホグワーツに大人の思惑が絡み始めていた。

翌日になって、広げた日刊予言者新聞を前に三人は苦々しく大見出しを見た。『ドローレス・アンブリッジ、初代高等尋問官に任命』——素早く内容を理解した才女、ハーマイオニーの目がメラメラと燃え上がった。

「最低だわ。あの女、他の先生がたに口を出す権利を得たのよ。魔法省の狙いはこれよ」

「マクゴナガルの査察時にコテンパンにされるさ」

「……あいつのクズっぷりを甘く見ちゃダメだ」

少女の声が低く落ちる。マリアの声だった。脳裏には失神呪文をいくつも受けて倒れるマクゴナガル先生の姿があった。ハーマイオニーとロンは意味深げに顔を見合わせた。

「……ずいぶんと敵視するのね？」

「人として好きじゃないんだ」

「マリアって他人への好き嫌いが激しいけど——そこまで表に出すのはめずらしいね」

ハリーの言葉に二人がぎよつとする。僕としても、当然の顔で見抜かれていたことにドキリとした。

「マリアが嫌いなら、僕だって嫌いだ」

「それは——」

「だって——僕は君で、君は僕なんでしょう？」

「ハリー……」

なんとも言えない空気が四人を中心にただよった。新聞の中のドローレス・アンブリッジだけが場違いにニコニコとしていた。

アンブリッジの査察は古い学時にやってきた。ああ、と思い出す。このままではトレローニーはアンブリッジの職権濫用によってホグワーツそのものから追い出されかねない。好きな先生ではないけれど、不憫に思う心くらいはある。だが——子供の身ではどうしようもない。僕は闇祓い局に勤める大人のハリー・ポッターではないのだ。ホグワーツに在籍する五年生の少女、マリア・ポッターだ。平凡な女の子だ。法的権限を持った大人を相手に太刀打ちする力はない。武

力だけではどうにもならないものもあると、大人になってから『僕』は学んだ。それぞれの戦い方を選ばねば大人の世界では生きていけない。

アンブリッジがトレローニーの後ろをハグリッド作糖蜜ヌガーのようにくつついて回る。トレローニーは目に見えて苛ついていた。あくまでも事務的な確認と質問を交えて、最後に自身に予言をとトレローニーを試す。

「あたくしには見えますわ——あなた——あなたはこれから——それはおそろしい——」

「……………そう。結構ですわ」

アンブリッジは能面のような微笑みで冷たく答えた。クリップボードへ書き込んでいくさまは裁判長のジャッジ・ガベルのようだった。

次はアンブリッジ自身の闇の魔術に対する防衛術の時間だ。そこでもアンブリッジとハリーの対決は為された。

「魔法省はクイレルがなにに操られていたのかご存知ないんですね」

「……………何が言いたいのかしら。ポッター」

「いつまでも目を背けることはできませんよ。ヴォルデモートは戻ってきたんだ」

「——罰則です」

僕と隣席のハーマイオニーはがつくりと肩を落とす。ロンは天をおおいでいた。当時の『僕』の親友たちもこんな気持ちだったのだろうか。

ハリーの気持ちだつてわかる。現在のハリーがどれほどストレスをためているか。きつとハリーを除いて僕が一番理解している。けれども——子供の気持ちになって寄り添ってやることは難しかった。彼の思考がわかるからこそ、それではいけないのだと叱りつけたく

なった。

「ハリー」

クイディッチキャプテンのアンジェリーナとも一戦を交えてきたハリーに再び薬瓶を渡す。今回は衝動のままに割られることはなかった。僕の数日の特訓は無駄にならずに済んだ。

「ハリー、わたしからも」

ハーマイオニーが手渡したのはマートラップ触手液だ。ようやつとずさんだ顔のハリーに穏やかさが戻った。さらに、マクゴナガル先生の査察時にアンブリッジが完膚なきまでに叩きのめされたこともあって、数日ぶりにハリーは晴れやかな心地でいるようだった。

——だがしかし、悪夢は彼を見逃してはくれない。

「ハリー。……シリウスに、手紙を書いてみようか」

不眠から目の下に痛々しいくまを作るハリーをやわらかく撫でる。ハリーは小さく鼻をすすった。

「なにを書けっというの？」

「夢のこと。傷が痛むこと。ダンブルドアに接触するのはいやなんだろう？ シリウスならかならず君の力になってくれる」

——こちらのシリウスには、君^{ハリー}が見えているから。かげるばかりのエメラルドの瞳に微笑む。

そうすれば、シリウスからダンブルドアへとハリーの状態も伝わるだろう。不死鳥の騎士団については、ダンブルドアの手を借りなければ子供の^{マリア}僕にはどうしようもない。必要になれば向こうからコンタクトがある。今はそれを待つしかない。シリウスの言葉ならば今

のハリーにだって響く。

「……わかった」

便箋を取りに戻るハリーの背を見つめる。——『僕』も、あんな風に見えていたのだろうか。不安定で、今にも崩れそうな背中だ。

理由もわからず隠し事をされるのはつらい。僕はそれを知っている。だけれど、ハリーに隠さねばならない大人の事情だって知っている。閉心術を持たない現在のハリーは分霊箱の絆からヴォルデモート専用の情報庫となりかねないのだ。……きっと、ダンブルドアは『僕』が閉心術を習得したそのときにすべてを教える心積もりでいたのだと思う。そしてそれが、修復不可能なまでにすれ違った——

「……むずかしいな」

どちらの思惑も見えてしまう。僕になにもわからない子供のふりはできそうになかった。

「このままではいけないわ」

とうとう来たぞ、と——決意を固める少女を前に僕はあいまいにうなずいた。

「そろそろ潮時じゃないかしら。わたしたちが——わたしたち自身でやるのよ」

「アンブリッジの暗殺を？」

「ロン、わたしは真面目に話してるの」

「僕だって真面目だ」

間違いない。どちらにも真剣な顔をしている親友二人を見比べて、ハリーと共に顔を背けてこっそり笑った。

「あの女からは一年生の呪文すらも学べやしない。わかってる？ わたしたち、五年生なのよ？ このふくろう試験がわたしたちの将来を左右するの。このままでは今年の五年生は総じてクズになってしまおうわ」

「ウーン、まあ。つまり、どうするんだ？」

ロンの催促に、ハーマイオニーの茶色い目がペットとおそろいにキラリと光った。

「——自習するのよ。闇の魔術に対する防衛術を」

ロンがうめき声を上げた。たくさんだとばかりに両腕も上がっていた。キーパーとして励む彼の手には練習タコが見えた。

「これ以上勉強しろって？ 君、僕たちがどれほど宿題を抱えてるか知ってる？」

「知ってるわよ。こっそりマリアが手伝ってることもね」

三人そろってそっと彼女から目をそらしていた。

「この件に関してはなにも言いません。話を戻すわ。魔法省はわたしたちに知恵と力をつけさせたがらない——ここは学校なのに！ 学ぶ権限を奪おうと言うのよ。それで損をするのはだれ？ わたしたちよ！ わたしたちはわたしたちのために立ち上がらなくてはならない」

「でも、大したことはできないだろ？ 本を読むっていうのなら、今と変わりない」

「その通りよ。つまり、今、わたしたちに必要なのは——先生」

僕はハリーを見ていた。ハーマイオニーもハリーを見た。ロンもつられてハリーへと純つぽい目を向けた。ハリーはパチパチと目をしばたたかせていた。

「……………なに？」

「わからない？」

「君のことを言ってるんだよ——ハリー」

めずらしくハリーよりも先に察したロンが、「それはいいや！」と喜色をたたえた。

「なにがいいの？」

「君が僕たちの先生になるってことさ」

「僕が——なんだって？ 僕——だって、先生じゃないよ」

「ええ。けれど、今の先生よりも断然、実績があるわ」

「実績？」

ロンもハーマイオニーもニヤツとした。からかう時の顔だ。たとえば、そう——僕とドラコのことをだとか。

「一年生。『例のあの人』から石を守ったのはだーれだ」

「あれは——君たちだって知ってるだろう？ ただ運が良かったんだ——」

「二年生。バジリスクなんて化け物に立ち向かったのはだーれ？」

「僕——マリアだって一緒だった！」

「三年生。君は守護霊の呪文を完璧にした」

「まぐれだよ。ルーピンとダンブルドアが手伝ってくれた——」

「四年生。君たちは『あの人』との対決に四度目の生還を果たした」

「だから——話を聞けよ！」

ハリーは爆発した。二人からニヤニヤ笑いが引つ込んだ。僕はといえば、心を落ち着けてハリーを見守っていた。

「ぜんぶただのまぐれだ！　自分がなにをしてるかなんてわかっちゃいなかった。結果的にうまくいっただけなんだ。——訳知り顔で語るのはやめてくれ、その場にいたのは僕なんだから！　僕たちだけが知ってるんだ。正解かもわからずに闇雲に走らなくちゃならないあの恐怖。ほんとうの殺し合いが教科書なんかに掲載してあるもんか。いちいち考える時間なんかないんだ。お手本みたいに杖ひとつで目の前に立つちやくれない。これから何の呪文を使うかなんて授業みたいに宣言しやしない。僕たちが優秀だから切り抜けたと思ってる？　ちがう——すべてただの運だ！」

「そして——その運を掴んだのは僕たちだ」

六つの目玉がいつせいに僕を見た。怯える瞳たちに僕はせいっぱい大人ぶって微笑んだ。

「運も実力のうち——てね」

ロンが少し笑い、ハーマイオニーの目に理性的な光が戻った。

「ハリー、あなたの言う通りだわ。あなたが特別だから生き残れたわけじゃない——それを知るあなただからこそ、先生として申し分ないと考えたの。……ヴォルデモートと戦う現実を、あなたとマリアだけが知っているのよ」

震える声でヴォルデモートの名をはっきりと告げたハーマイオニーに、ロンとハリーはハツとした顔で彼女を見つめた。

「わたし、あなたが特別だから大丈夫なんて考えないわ。三年生の夜

に誓ったもの。あなたもマリアも、当然わたしたちも——いつ死んだっておかしくないのよ。だからこそ、それでも死ななかつたあなたの口からその方法を教えてほしい」

彼女の瞳はまっすぐだ。ハリーはつられるようにうなずいていた。ハリーの痲癩がおさまって、僕もロンもほっとした。

「考えておいてね」

「……うん」

ハーマイオニーの目配せに従って共に女子寮へと戻る。男の子たちが見えなくなつてから、ハーマイオニーは僕へも乞うような視線を寄越した。

「ほんとうは、あなたにもお願いしたいの。でも、あなたは——」

「……ごめん」

「無理強いはしないわ。……考えておいて」

ハリーへ向けたのと同じようにハーマイオニーは確固とした目で僕を見上げると、口元を笑ませてベッドへともぐつた。——僕はなにも言えなかつた。

ハリー・ポッターは正解もわからずに走り続けた。そして、今——また、先のわからない道の前で立ちすくんでいる。

それは風の強い日だった。ホッグズヘッドに集まったメンバーを見回して、そこにある二つの顔にドキリとした。——アンソニー・ゴルドスタインとチョウ・チャンだ。僕を、違うようで同じ意味を持つ混乱に陥れる人たちだ。……最近、ここに相棒のドラコも含まれるようになってしまった。

カウンターの向こうからアバーフォース爺さんが顔を出す。壁側に座る魔女は変装したマンドングスだろう。その他、うさんくさくて怪しい覆面ばかりが店内にいた。つまりは——こたびの集会は良くも悪くも各所に筒抜けなのだ。それが後の大失敗へと繋がる。なにがトリガーとなったかを僕は知っている。

だけれど、ダンブルドアには僕らが組織するこの計画を知ってもらわなくてはならない。……手痛い授業料だったと、ハーマイオニーたちには諦めてもらうしかない。

「ええと——コホン。それでは——こんにちは」

ハーマイオニーが慣れてないふうの上擦った声を出した。どうにか会の説明を務めていく。アンブリッジの授業ではなにも得られない。わたしたちはわたしたちで身を守るすべを持たなくてはならない——なぜなら、ヴォルデモート卿が戻ってきたから。そう締めくくれば、数人の好奇心に満ちた生徒の目が光った。

「それじゃあ、改めてあの日、何が起こったか話してくれるわけだ？」

ハリーが顔をしかめた。ロンが生徒——ザカリアス・スミスをにらんだ。ハーマイオニーがまずいと蒼い顔をした。わかつてはいたことだけど——やっぱり良い気持ちはしない。

「それを知りたいだけなら帰ってくれ。今日集まった理由なら今、ハーマイオニーが説明した」

ハリーのぴしゃりとした言葉にザカリアスは不満たつぷりにだまった。誰もがハラハラと二人を見比べていた。

「じゃ——そう。とにかく、そういう計画です」

つたないながらもどうにかこうにか署名にまでたどり着けば、やはりザカリアスやアーニー・マクミランなんかは記入にしぶった。僕ははじめて口を開いた。

「私たちがこれから行うのは試験勉強なんかじゃない。——これから先も生きる方法を学ぶんだ。……まあ、死んでしまえば試験なんて関係ないものね？」

アーニーはおそろおそろと名を羊皮紙の下の方に連ねた。ザカリアスはハリーよりもはつきりと僕をにらんでから（そしてそのザカリアスをハリーがにらんでいた。）小さく署名した。ここで名前を書いてももらえねば進むものも進まないのだから。

「では、えー……解散」

ハーマイオニーの最後まで締まらない挨拶で生徒の群れはそろそろとホッグズヘッドから消えていった。数名を残して。残ったのはジニーやネビル、そしてチョウにアンソニーだった。

「マリア、あなたは——」

チョウが僕へと話しかけた途端、ネビルをのぞいてその場に緊張が走った。僕とチョウの事情を知る者ばかりだ。アンソニーなんかは

情報通ゆえ、今さらおかしいとは感じなかった。チョウは気まずそうに言いよどんだ。

「……場所を変えようか？」

「いいえ、いいの。わたし、聞きたいだけなの。——あなたも、教えてくれるの?」

「え?」

聞き間違いだと思った。だって——僕は『マリア』だ。ハリー・ポッターではないのに。

「生き残ったのはハリーだけじゃないわ。あなただって、あの夜から生きて戻ってきた。わたし——わたし、教わるなら——あなたがいいわ」

それは衝撃的な言葉だった。彼女からすれば僕は、愛する人のカタキだろうに。

「……どうして?」

もはやこの場で言葉を交わしているのは僕とチョウだけだった。

「——自分を納得させるためよ」

今日は風が強い。申し訳程度の扉から入り込んだひと風がチョウの黒髪を絵画のように巻き上げた。——決意を瞳に宿した彼女は美しかった。

「わかった」

僕は答えていた。不思議な感覚だった。ぼんやりしながらも、はっ

きりと心がうなずいていた。

「よろしくね、マリア」

「よろしく、チョウ」

チョウはハリーや全員に微笑んでから店を出た。数秒ほど、彼女に呑まれていた僕たちは会話も忘れて惚けた。

「わたし、誤解してたわ。あの人、案外——」

「……うん。つよいね」

ハリーであった頃の淡い恋心を思い出させる少女だ。

「それじゃあ、次は僕がマリアを借りてもいいかな？」

待つてましたとばかりにアンソニーが立ち上がる。どうしてかハリーも立ち上がろうとしたので、それをハーマイオニーが呆れ顔で止めていた。

「今のうちにどうぞ」

「ハーマイオニー！ あいつ、マリアに気があるんだ！ 二人つきりにしちやダメだ！」

「大抵の男の子はマリアに一度くらい恋してるわよ。見た目でね。それでもれなく玉砕よ。あなた、マリアに近づく男みんなに威嚇して回るつもりなの？」

「それは——でも——僕、僕——」

ハリーの声を背に、アンソニーをつれて足早にホッグズヘッドから離れる。後ろでアンソニーは愉快そうに笑いをこらえていた。

「愛されてるね、マリア。マルフォイはいいのに僕はダメなのか」

「僕もハリーにジニー以外の子が近付いてきたら気になるから、これって兄弟のきがなのかも」

隣に並んだアンソニーへとカラカラと笑う。ロンだって兄たちや、特に妹のジニーのこととなると恋人問題をかなり気にしていた。兄弟ってきつとそういうものなんだ。

「そうか。僕は一人っ子だから知らなかったよ」

「僕も」

「うん？」

「ううん。こっちの話」

村から離れた場所の柵に手をついて、足を止めて振り返る。ここは、かつて『僕』のシリウスと落ち合った場所だ。——僕だけが知っている思い出の場所。

「デートにしては雰囲気がありすぎるな」

「プランニングは慣れてなくて」

「いいんじゃないか。そういう君が好きだから」

「……………」

ストレートに表現されて思わず面食らってしまった。じわりと頬が熱くなる。まだ肌寒い程度の季節では、頬の赤さはしもやけだどごまかせそうにはなかった。アンソニーは柵に背を預けながら指先を遊ばせていた。

「…………ブローチ、使ってくれてる？」

「あ——うん——時々——髪留めになるから」

アンソニーからもらった琥珀色が美しいブローチは、裏に衣服留めのピンとクリップと両方がついていて、ドラコからもらった髪留め

よりも普段使いしやすいデザインなために重宝していた。ハリーやハーマイオニーがマリアの瞳の色だと褒めてくれたことも大きい。

アンソニーはニツコリとした。

「よかった。またつけてるところを見せてよ」

「うん。そのうち」

「……………」

「……………」

会話がなくなる。けれども、気まずいのはまた違った沈黙だった。笑いたいのを我慢するときみたいなの——

アンソニーはいいやつだ。彼は——僕と友だちであろうとしてくれる。

「…………マルフォイなんだけど」

「うん」

——だから、きつとアンソニーならば『彼』について聞いてくるだろうと予想していた。

「今日、来なかったのは——君を避けているから?」

「そうかもしれない」

「でも、喧嘩ってわけじゃないんだらう?」

「そう思う?」

アンソニーは迷いなくうなずいた。

「もしも君たちが喧嘩してるなら——もっと僕につけ入れる隙があるだらうからね」

「……………」

案外、道理かもしれない。アンソニーの神妙な顔にうつかり納得させられかけて、あわてて首を振った。アンソニーはそんな僕にニヤリとしていた。

「でも、彼、ちよつと不思議だ。元々一匹狼っぽいやつだったけど、ここ最近は特に……」
「……そうだね」

心のどこかが罪悪感でしくりと傷んだ。ドラコは一匹狼なんかじゃない。クラブとゴイルをつれていた頃の小さなマルフォイが容易に浮かぶ。ほんとうは群れたがりだ。臆病者の小心者で、そして見栄っ張りだから自分がいはじめて胸を張れるのだ。お山の大将気取りだ。だからこそそんな彼が独りを選ぶときは——大きな目的があることを意味するのだ。

「ともかく、気をつけるべきだね」

「うん？」

「油断していると横から驚にかっさらわれるからさ」
「……………」

悪戯っぽい顔でからかうアンソニーに、行き場のなかった手で背中を強めに叩いておいた。

「——マリアは今回のこと、どう思う？」

ふくろう小屋の前で手紙を持たないヘドウィグを撫でながら、ハリーはポツリと呟いた。

「だって——危険だ」

その通りだ。こちらのハリーは知らないが、僕は魔法省によって濡れ衣を着せられかけた経験を持つ。視野のせばまった奴らがどれほどなりふりかまわず攻撃してくるかを知っている。見つければ注意や退学では済まない。——それでも。

「僕は——このまま計画を進めるべきだと思う」

マリアの声はずいぶんと通って聞こえた。

神秘部に侵入した時、『彼』の手引きによってホグワーツが死喰い人の襲撃を受けた時、そして最終決戦の時——たかだか学生の僕たちの生存率を上げたのは、ダンブルドア 軍団——通称DAとしての訓練があつたからだと自負している。これは生きるための綱渡りなのだ。

「これから酷い戦いになる。たくさんの人が死ぬ」

クリービー兄弟に同級生たち。果てには名前も顔も知らない下級生たち。決して死ぬべきではなかった人たち。——ひとりでも多く、生き残るすべとなれるなら。

「それを少しでも防げるのなら——危険を犯す見返りはあると、僕は思う」

ハリーはヘドウィグの嘴をくすぐりながら微笑んでいた。

「知ってたよ」——そう、穏やかに答えた。

教育令ラツシユが始まった。手始めに第二十四号——学生による組織作成禁止の令だ。これにはクイディツチチームのキャプテン、アンジェリーナがほとほと困らされていた。マクゴナガル先生の手を借りてどうにかチーム再結成は叶ったが、すぐに許可されたスリザリオンや他チームからはかなりの遅れを取った。そしてDAの行方——これは、『僕』の時と同じくドビーから必要の部屋の情報を得て無事決行された。一回目の訓練は大成功におさまった。二回、三回とアンブリッジの目の先鼻の先での会合は成功を積んだ。誰もが興奮していた。今、僕たちは大人への対抗手段を持っているのだと。

今日もハーマイオニーの配ったコインが熱を伝える。

「エクスペリアームス！」

「ワツ——うん！ 今のいいよ、チョウ。完璧だった」

「ありがとう、マリア」

先生役兼リーダーはハリー、副リーダーはハーマイオニー。そして僕は上手くいかない生徒の相談役のようなポジションで訓練に挑んでいた。チョウとは訓練の最中に少しずつ関係修復が叶っているように感じた。もう誰もDAの存在に文句を言う者はいなかった。ザカリアスも、アーニーも、誰もが必死に——そして楽しんでハリーの授業を受けていた。

「いいなあ、チョウ。まだ、僕、マリアから杖を奪えた試しがないんだ」

アンソニーが軽快に杖を振る。吹き飛ばされた僕の杖がアクシオによって彼の手元へと寄せられる。

「まだ取らせてあげないよ。でも——すぐく上達してる。二人とも」

顔を突き合わせてクスクスと笑う。すべてが順調だった。なにもかもが上手くいっている気がした。アンブリッジの罰則の跡も消えて、久々にハリーも僕も満面気色だった。絶好調だった。

——ロンのクイディッチ初試合がやって来るまでは。

「やめなさい——やめなさい、二人とも！ ジョージ——ハリーツ!!」

試合終了直後に起きた選手大乱闘に観覧席は絶句していた。そうだ、そうだった——このときに『僕』はクイディッチを禁止されたんだ！

マクゴナガルに連れられゆくハリーとジョージの背中を目で追う。この後の結果はわかりきっていた。箒を奪われたハリーと、そしてウィーズリーの双子たちは談話室にて意気消沈としていた。からがら勝利を掴んだというのに、まるで寮全体が全敗したかのような空気があった。

「ハリー、どうして……?」

今回は挑発してくるマルフォイだっていなかったのに——?

ハリーは思わずとこぼれ出た僕のささやきを拾ってカツと目を開いた。

「どうして? どうしてだつて? あいつらがロンになにを言ったか! おじさんとおばさんを——僕らの父さんと母さんを! ——君を!」

そこでハリーはぐっとこらえた。きっと僕の耳に内容までもを届けたくはなかったのだろう。誰かがきつかけになったわけじゃない。スリザリンチーム全体からの挑発の結果らしかった。

僕の判断ミスだ。今回にマルフォイはいなくて、そしてセオドール

はかつてのマルフォイほどバカではないから、どうにかなると樂觀視していた。ロンをなぐさめるだけで済むと――

「ごめん、今、誰とも話したくないんだ――君とも」

大好きな緑色の瞳に拒絶されて、僕はすごくごと自室へ引き返してしまった。誰もが傷ついていて――僕までも運命に敗北した気分だった。めぐってきた運が再び尽きた。

ハグリッドが戻ってきた。その報せは陰鬱としていたグリフィン・ドール寮にほんの少しの光を射した。数人はかえってがっかりしていたが、それも致し方ないものと受け止めた。ハグリッドのことは好きだが、彼が良い先生かと問われればそれはさすがにうなずけない。三人組からハグリッドの大怪我の様子を聞きつつ、ほっと胸を撫で下ろす。ハグリッドとマダム・マクシームの旅は確かに結果を残してきたようだ。

「大丈夫かしら……ハグリッド、どんな授業をするつもりなのかしら」
旅から戻って初の魔法生物飼育学の授業で、さっそく生徒を禁じられた森へといざなうハグリッドにハーマイオニーが不安げに呟く。ハーマイオニーの懸念はおそらく的中する。

「さあ――こいつらが見えるもんはおるか？」

骸骨のような身体に空洞の目、コウモリのような翼を持った馬っぽいなにか――手を挙げたハリーにしぶしぶと僕も倣った。ハグリッドは神妙にうなずいていた。そして――ドラコも静かに手を挙げていた。思わず目の前の『条件下によっては見えるもの』――セス・トラルよりもじつとドラコを見つめてしまった。魔法薬学やスリザリンとの合同授業時に見かけているというのに、久々に彼を見つけた

気分だった。

「ン。そうかそうか、ネビルにマルフォイの坊主もだな。そうか——見えねえやつらは幸福だ。ここにいるのはセストラルだからな」

ハーマイオニーが、アアッ！ と声をあげた。セストラルが食事をすることによってひとりでに減っていく肉塊を一部以外が不気味そうに見ていた。

五年生の授業にセストラルというチョイスは悪くない。尻尾爆発スクリュートなんかよりもずっとずっと良いに決まってる。これが普段の授業だったなら、僕も気楽にセストラルと戯れられただろう。ただし——

「エヘン、エヘン」

この女さえいなければ。

「メモを、受けとりましたか？」

アンブリッジは甘ったるく、そして言葉の通じない外国人にでも話しかけるようにゆったりとハグリッドへと声をかけた。

「おう、おう！ ここがわかってよかった」

「ふむ、文字は読めるようね」

ハグリッドの怪我だらけのまだら顔がカアーツと赤くなった。緑ローブの数名がキャーキャーとかん高く笑った。ハーマイオニーは悔しそうに唇を噛んでいた。

「どうぞ、わたくしのことは、お気になさらないで。さあ、授業を、お続けになつて」

ハグリッドはアンブリッジの慙懃無礼な態度にたじたじとしていたが、それでも気丈に授業を続けようとした。——それを邪魔するのがこのガマガエルだ。

「原始的な——身ぶりを交えねば——言葉もまともに——伝えられない——」「うなるような声は——生徒を——怯えさせる——」

わざとらしく声に出してクリップボードへとまとめていくさまは、スリザリンの生徒たちをいやらしく喜ばせた。抱腹絶倒とばかりに緑ローブが地面へと転がる。ハーマイオニーは悔し涙すら浮かべていた。ハグリッドはすっかり大きな体を丸めて小さくなっていた。(それでも普通の人の二倍は大きい。)

授業を終えて、三人組はカリカリと怒りながら談話室へと戻っていた。

「わかったわ。あいつ、混血が嫌いなんだわ。ハグリッドもトレローニーと同じく停職に追いこむ気よ」

そんなことは三人ともわかっていた。アンブリッジは確実にハグリッドを毒牙にかける。それを救うすべなんて——ただの子供にあらはすもなかった。

クリスマス休暇を前に、浮かれゆくホグワーツと共に僕も落ち着かない気分でいっぱいだった。クリスマスが楽しみだからじゃない。否、こたびの僕たちポッター兄弟にはブラック邸というれっきとした『帰る家』があるのだから楽しみでないはずがないのだが、とある心配事がそれを台無しにしていた。

——確か、このあたりだったはずだ。『僕』がウィーズリーおじさんの怪我を夢で見るのは、はつきりと覚えているわけではないけれど——雪のよく降る夜だった。

「マリア——マリア、たすけて」

飛び起きた。ぼやけた視界にはじめに映ったのは火の粉を跳ねさせる炎だった。

「……ハリー？」

「っおじさんが——僕——」

「僕、マクゴナガルを呼んでくるよ。ハリーを頼んだ」

暖炉の前、うたた寝をして占領していたらしいソファにハリーを座らせて、ロンが談話室を飛び出していく。ハリーは額を押さえて震えていた。

「どうしたの、ハリー。なんの夢を見たの」

「僕——僕——僕が蛇だった——僕がおじさんを——僕の牙が」

「ハリー、落ち着いて」

「どうしよう。ひどい怪我だった。あんなの——しん——死んで——」

「——君は、誰の目からそれを見ていたの」

ハッとハリーが顔を上げた。信じられない——そう、ハリーの目は訴えていた。

「どうして——」

「ポッター。私にも話を聞かせてくれますか」

マクゴナガル先生だ。寝間着姿のまま、ヘアネットすらもつけたままで息を切らして女史はそこに立っていた。ロンはマクゴナガル先生の後ろで怯えたようにハリーを見ていた。男子寮の寝室からはハ

リーの同室者たちがおそろのおそろと顔を覗かせていた。

ハリーが途切れ途切れながらも夢——否、蛇の目を通して見たヴィジョンを伝える。マクゴナガル先生は固い声で答えた。

「——ダンブルドア先生にお目にかかりましょう」

ダンブルドアが歴代校長の肖像画を動かす中、僕はハリーの手を握り続けていた。ダンブルドアはハリーを片時だつて見ようとはしなかった。今ならばわかる。ハリーにどれだけヴォルデモートの感情が侵食しているかわからないのだ。ダンブルドアは聡明な人だ。現状と、そしてハリーの様子だけでそれを見抜いた。けれども、態度の説明を受けられないハリーに彼の葛藤が理解できるはずもない。ダンブルドアが目をそらすたび、ハリーの手はいかるように僕の手を握りしめた。

「ごころう。ミネルバ、ウィーズリーの子供たちをここへ」

肖像画ネットワークによってアーサー・ウィーズリーの危篤をはつきりとさせたダンブルドアは、きびきびと次の指示を出した。やがてロンの双子の兄たちやジニーも校長室へと招かれて、誰もが暗い顔で怯えていた。フィニアス・ナイジェラスから騎士団本部のシリウスの在住を確認すると、まともな説明もなくウィーズリー家の子供たちはグリモールド・プレイス十二番地へとポートキーによって飛ばされた。煙突ネットワークや手紙なんかは監視されている。ゆえに、ダンブルドアは少々荒っぽい手を取るしかなかったのだ。それにハリーは、ああ、だから……と覇気なく呟いた。シリウスが返信をくれないことを気にしていたのだ。

「ハリー、マリア——！ さあ、子供たち——火の前にはけなさい」

夜遅くだというのにシリウスは両腕を広げて子供のみんなを迎えてくれた。一瞬、ハリーは泣き出しそうに顔をくしゃつとさせたが、ロンを見て、ロンが繋ぐジニーを見て、弟妹を守るように立つ双子の兄たちを見て目をつぶった。その気持ちに僕には痛いほどわかった。彼らの家族の絆に触れて泣く資格なんて、僕たちにはないのだ。

杖を振ったシリウスが椅子を人数分、暖炉の前へと並べる。机には熱々のバタービールだ。のろのろと子供たちは崩れ落ちるように座りこんだ。

「フィニアス・ナイジェラスからおおまかには聞いている。アーサーが怪我をしたって? ——それを、ハリーが見ていた?」

「うん——」

ハリーは校長室での話をシリウスへとくりかえした。扉を進む蛇。するどい牙を唸らせて、男の脇腹へと噛み付く——

ハリーはひとつだけ嘘をついた。蛇の目から見えていたのではなく、隣からそれを見ていたかのように語ったのだ。真実を知る僕とロンは一度だけ意味を含んだ目配せを交わしたが、それからはなにも言わなかった。

「そうか……そしてそれは夢ではなく、現実起きていた——」

「ごめん、シリウス。ハリーはまだ混乱してるんだ。寝室へ行ってもいい? 呼んでくれればすぐに戻るから」

「っああ、もちろんだ。君たちは——」

「ここにいる。ここで待ってる。ママが一番に来るのはここだ。そうだろう?」

軽蔑すべき冗談を聞いたとばかりにフレッドとジョージが反抗的な目でシリウスをにらみ上げる。シリウスは痛ましそうに子供たち一人一人を眺めた。

「そうしたければ、好きにきなさい。夜食を作つてこよう。毛布はそこだ」

「さあ、ハリー。行こう」

ハリーの肩を支えて、ロンへともう一度だけ目配せしてから、シリウスへ唇だけでおやすみを伝えて二階へと上がる。このままではハリーがなにを口走るか、わかったものではない。

ハリーは自我喪失状態だった。怯えている——この子はひどく怯えているのだ——自分自身に。

「ハリー」

ベッドへ腰かけて、彼の頭を膝へと乗せて。ゆっくりと背を撫でた。ハリーは今にも消え入りそうな声で吐露した。

「僕——ほんとうに、狂ってるのかもしれない」

「君は狂ってないよ」

「僕だった——あの蛇は僕だった——」

「君じゃない」

「僕——おかしいんだ。ダンブルドアが憎く思えたんだ。ポットキーで——あの時、ダンブルドアと目が合った。そうしたら、僕——急に

——僕の中で憎しみがふくれ上がって——蛇みたいに——」

「ハリー」

冷たい頬に触れる。どうかそれ以上は考えないで。——祈るも、届くわけがないことくらいはわかっていた。このときのハリー、僕がどれほど恐怖したか——『僕』は知っている。

「僕、考えてた。これって——ヴォルデモートの感情なんじゃないかって。傷が痛むのはヴォルデモートが怒っている時だ。でも、僕の

心にまで届いた。僕が感じていた。——アーサーおじさんを殺そうとして、それを楽しいって僕は思ったんだ」

「ハリー」

「僕——僕は——このまま、ヴォルデモートに——？」

「ハリー！」

とうとう悲鳴のように叫んでしまった。ハリーはぼんやりと僕を見上げていた。いかないで——そっちはおそろしいから。届かなくなるから。

「マリア——僕——僕がこわいよ——君のことまで、殺してしま
うかもしれない。目覚めた時——君が——」

「そんなわけがない。君はハリー・ポッターだ。アーサーおじさんを襲った蛇じゃない。ヴォルデモートじゃない。マリアを愛してるハリーだ。ハリーはマリアを殺さない。マリアだってハリーを殺さない。そんなの、ダンブルドアが蛙チョコレートカードになるくらい当たり前のことだ」

「僕がこわくないの——？」

「僕の弟は時々すつごくバカだ」

シリウスを見たハリーの一瞬の表情を思い出した。今、僕も同じ顔をしているだろうと思った。

「言っただろう？ たとえ君が闇の帝王だったとしても——僕は変わ
らず君を抱き締めるって」

ハリーは、ぎゅつと我慢していた目を開いて泣きながら笑った。

「……僕が、兄だよ」

薄暗いクリスマスの始まりだった。

モリー母さんがブラック邸へやってきたのは朝方の五時過ぎだった。一睡もしていなかった子供たちからようやく力が抜けて、みんなへなへたと床に座り込んでしまった。それを一人一人抱き締めてから、モリー母さんは朝食の準備へと入った。ハリーは気まずそうに沈黙していた。自分がアーサーおじさんを襲った——そう思い込んでいるのだ。こうなれば、^{ハリー}僕は誰の言葉も聞かない。今は慎重に様子を見るしかない。

午後にはアーサーおじさんのお見舞いにウィーズリー一家に続いて聖マンガへと向かった。そして——そこでハリーは聞いてしまうのだ。大人たちの会話を。

「もし、『例のあの人』がポッターに取り憑いているのなら——」

それからハリーは逃げるように自室へともってしまった。事情を知る子供たちははじめこそそつとしておこうと遠目からハリーを見守っていたが、次第に両者ともが苛つきを隠せなくなっていた。

「ハリーは一体どうなってるの？ マリアしか部屋に入れないのよ！」

「頭の整理が必要なんだよ」

「誰もハリーが『例のあの人』のように凶悪になるだなんて、そんなこと考えるはずなのに！」

ぶんぶん怒るジニーをなだめつつ、家族とのスキー旅行をパスして騎士団本部へとやってきていたハーマイオニーと顔を合わせる。ハーマイオニーは頼もしくうなずいてくれた。

「わたしが引つ張りだしてくるわ。マリアはここにいて。いい加減、

「マリアに甘えつきりじゃいけないのよ」

「あたしも行くわ。まるであたしたちみんなが敵みたい——そんなのって侮辱よ！ どれほどあたしたちがハリーを大切に想ってるか、わからせてやるんだから」

鼻息荒く二階へ上がっていく乙女たちの後ろ姿に、残されたマリア含む男性陣はなんとも微妙な表情で固まっていた。……僕の親友とハリー僕の妻はまったく惚れ惚れするほどに心強い人たちだ。

数時間後、有言実行とばかりに少女二人に連行されたハリーが顔を出した。みんなが歓迎した。モリー母さんなんかはよくよかな頬をニコニコさせて続々とハリーの皿に夕食を盛った。ハリーは困ったふうにしながらも落ち着いているように見えた。

明日はクリスマスだ。このまま平穏な時間が続けばいいと誰もが願っていた。きつと、ハリー自身でさえ。けれども——導火線は本人すらもコントロールできないところで着火するのだから、思春期とは手に負えないのだ。

「ちょうどハーマイオニーもそろったからね。少しお説教といこうか。——どうせ、君たち全員が参加しているのだろう？ 秘密の『防衛グループ』に」

デザートまで平らげた夕食後の席で、子供たちはハツと肩を跳ねさせた。切り出したのはシリウスだが、モリー母さんもわかっていたように固い顔で定位置へと座り直した。

「どうして、それを？」

「裏をかいいたつもりだろうが、集会場所にホッグズヘッドはまずかつたな、ハーマイオニー。きな臭い場所にはきな臭い人間がいるものだ」

「誰がいたの？」

「君たちのお得意さんだよ」

瞬時に思い至った顔をする双子の息子たちに、モリー母さんは不快げに顔をしかめた。そんな顔をされると否応なしに叱られている気分になる。——事実、叱られているのだ。あのシリウスに。

「……シリウスは反対なの？」

「当然だ。マリア、私が新学期前に君に何を言ったか覚えてないのか？　くれぐれも無茶をするなど、そう聞かせたはずだが？　それともなにか、これは優秀な諸君からすれば無茶の範囲には含まれないとも？」

「待って、シリウス。マリアを責めないで。発案はわたしなの」

「だとしても、ハリーはともかくマリア——君は止めるべきだった」

食卓に重々しい沈黙が落ちる。ウィーズリー家の子供たちは母親をうかがい見て、ハーマイオニーは氣遣わしげに僕たちポッター兄弟を見ていた。そしてシリウスは僕一人を見つめていた。

僕は混乱していた。『僕』の知るシリウスは自主的防衛訓練を喜び後押ししてくれた。それを『僕』のハーマイオニーは「彼は自由に動けない身ゆえにわたしたちを通して生きようとしている」と非難したが、当時の『僕』は自暴自棄で、肯定してくれるシリウスを慕い無条件に擁護していた。けれど——今ならばわかる。こうも、変わるのだから。

シリウスはシリウスなのに、彼の姿をした他人に思えてしまうのだ。親代わりを担ってくれる彼にこんな感情はいだきたくないのに、記憶との差違にゾツとしてしまうのだ。どちらが——ほんとうのシリウスなのだろう。

「母さんも同意見ですよ。訓練は卒業してからだって積めるんだから、どうか今はおとなしくしてちようだい」

「でも、ママー！」

「でももへったくれもありません！　お父さまが大変なときに、あな

「たたちまで心配をかけないで。ロン、監督生だというのに妹の手本になれないでどうするんです」

モリー母さんからの追い打ちに、子供たちの反論は完全に封じられてしまった。だって、子供なのだ。まだまだ大人から教えを乞う立場の学生だ。だからこそ——僕だけは黙するものか。

「譲れない。このことは誰にも譲らない。DAだけは絶対にやめない」

「マリア」

「卒業してから？——卒業まで生き残れる保証はないんだ」

戦場は場所を選んでくれない。ご丁寧に指定した時間、場所に敵がのこのことやって来てくれるわけもない。誰かの家かもしれない。どこかの店かも知れない。森の中、街の中——学校が舞台かもしれない。子供だから許してくれ、大人になるまで待ってくれ、なんてバカげた懇願が圧倒的脅威の前に通用するものか。

僕はたとえこの身が修羅を知らぬマリアのものであろうとも、大戦の犠牲となった四色のローブたちを忘れない。『僕』やフレッドとジョージのように自ら選んだのではなく——卒業できなかった者たちがいることを忘れてはならない。

——セドリック・デイゴリーを、忘れない。

「マリア、どうして君はそうも生き急ぐ。もっと大人を頼りなさい。君たちは十五才なんだぞ」

「そうよ。マリアもハリーも……みんなあなたたちを心配しているだけなのよ。どうか今回は聞き分けて——」

僕が口を開く前に、隣から立てられた大きな音にすべてをふさがれた。ハリーが立ち上がった音だった。両手は机に叩きつけられていた。

「——たくさんだ」

「……ハリー？」

「なにが大人を頼れだ。隠し事だらけのくせに。僕は知ってるんだ。あなたたち騎士団がなにを警戒しているのか。僕を監視して、恐がってる！ アイツのようになるかもしれないって！」

「ハリー、いったいなんの話を……」

「たくさんだって言ったんだ！ 他人のくせに——親面しないでくれよ!!」

ハリーが食堂を飛び出していく。考える前に動いていた。誰よりも早くハリーを追いかけた。ハリーの背中は自室ではなくとある部屋へと飛び込んだ。

整った部屋だ。部屋主がいなくなってからも埃ひとつためることなく丁寧に掃除され、それがいつそう生活感を奪っていった時の停まった部屋。——レギュラス・ブラツクの自室だった。

ルーピン先生と協力して一年のあいだに大幅リフォームを済ませたブラツク邸だが、シリウスがかつての家族の個人部屋だけはどれにも手を入れられずにいることを僕は知っていた。おそらくハリーも、部屋主との関連は知らないにしても気づいてはいたのだろう。数点、家主の彼が触れられない部屋があると。だからここに逃げてきたのだ。

「ハリー」

「僕が悪いんだ。わかっている。わかっているさ」

「うん。——君がわかっていることをわかっている」

しゃがみこんでうずくまるハリーに寄り添う。

「マリア。君だけはそばにいて。なにがあっても」

「もちろん。でも、どうして？ 僕のことば許してくれるの？」

籠城するハリーを引き出した時点で、彼の心はある程度は溶かされたはずだ。『僕』は長年の友に対してまで猜疑心の強い子供ではなかった。

ハリーは小さく答えた。

「マリアなら、なにがあるうとぜったいに僕を止めてくれるから」

「――」

「ロンやハーマイオニーじゃためらう。二人は優しいから、きっと咄嗟に友達へ杖を向けるなんてできないよ。でも――マリア、君はちがうだろう?」

「……ハリー」

「君なら迷いなく僕に杖を向けてくれる。……だから、ちゃんと、そばにいて。手遅れになる前に」

なにも言えなかった。彼は周囲の愛を疑っているわけではなかった。――ただただ、自分が信じられないのだ。そして、ハリーの脆い部分を誰よりも理解しているのは僕だ。もしかしたら、ハリー自身よりも。そんな僕の言葉が届くはずもなかった。^{ハリー}僕の弱さを知る僕の励ましなんか、力になれるはずもなかったのだ。

^{ハリー}僕を知る僕こそが、誰よりもハリーの強さを信じていなかった。迷いを表すように、ゆっくりとハリーへ手を伸ばした。ハリーは自ら僕の腕の中へと飛び込んできてくれた。

「ヴォルデモートと気味の悪い絆を持っている僕だっつかまわず抱きしめてくれる君だから、信じられる。マリアに託したいって思うんだ」

「……うん。応えるよ」

腕の中のぬくもりが愛しくて、そしてどこか憎らしいようにも思えて、唇をきつく噛んだ。

君が望んでくれる限り——僕はこの世の誰よりも ぼく 君の味方だ。

クリスマス当日。山のようなプレゼントを前にさつそく開封の儀を始めた子供たちを見守りながら、同じく微笑ましそうに眺めるシリウスを横目で見た。昨日のうちに飾られた居間はクリスマスカラーでいっぱい、訪れる者の心を躍らせた。(心做しか赤色が強い気がする。) おもな準備をしたのはシリウスだ。鼻歌をうたいながら飾りつけをする姿は『僕』の記憶にある通りで、ほんの少しだけほっとした。

子供たちに混じって自身宛のプレゼントをほどいていく。ハーマイオニーの宿題計画帳、ハグリッドから牙のついた財布、トンクスからはクリスマスソングを歌う奇抜なチョーカー、ロンはハリーとお揃いにした百味ビーングズの詰め合わせをくれた。そして、シリウスからの贈り物で手が止まった。——闇の魔術に対する防衛術についての本だった。僕は思わずシリウスをあおぎ見た。

「賛成はできないが、君たちは聞きやしないだろうとも思っていたんだ。……ジエームズとリリーの子だからね。あいつらはとことん頑固だった」

「君たちはサラブレッドだものね」

ルーピン先生が悪戯っぽく目を細める。僕とハリーは本を抱いてきよとりと顔を見合わせていた。緑の瞳を見つめていれば、遅れてやってきた喜びがじわりと全身へ広がった。

「——シリウス、ありがとう！」

二人で駆け寄る。シリウスは大きく両腕を広げて受け止めてくれた。

「シリウス——僕、昨日は——ごめんなさい」

「謝らなくていい。君の言葉は正しかった。私も——そうだな。はりきりすぎている。口うるさいのがいかにうっとうしいか、私はとくに知っているつもりだったんだが」

「昨日のことを朝方に聞いたけど、万年反抗期だったシリウスに比べればハリーの反抗なんてかわいいものだよ。こいつはそのうちに家すら飛び出したんだから。そして君たちのお父さんの実家にべつたりだ」

「十七からは一人暮らしだった!」

「休日たびに入りびたっていたくせによく言う。親の心子知らずがよく身に染みたんじゃないか?」

「俺の常識ではアレを親とは呼ばないんだ」

「ほーら、ごらん。いいお手本がここにいる」

シリウスをからかって遊ぶルーピン先生にクスクス笑う。やがてルーピン先生は声をひそめるとハリーへと向き合った。

「ただ、ね、ハリー。私たちが君を心配している、その心は疑わないでほしい。色々と不満はあるだろうけど——みんな、君を愛しているからなんだよ」

「……はい。ルーピン先生」

ハリーはうなずきながら、片方の手で隠れるように僕の手を握った。

「それから——そうだ。もうひとつ、面白い話をしてあげよう。そのプレゼント、実はけっこううてきとうなんだ」

「おい、リーマスー!」

「シリウスが私に泣きついてきてね。というのも——マリア、君になにをあげればいいのかわからないって言うんだ」

暴露されたシリウスはグウツとうなっとうなだれた。それが落ち込む犬にそっくりで吹き出してしまった。

「きつとハーマイオニーやジニーにならこいつはここまで悩まなかつただろうね」

「どういうこと?」

「百戦錬磨の女たらしも君には敵わないということだ。ほら、クロージェットの件もあるし」

「ムーニー……」

夏休みの初日以来、開かずの扉となったクローゼットの中身を思い出して目が遠くなった。つまり、僕が女の子らしくないためにこのセレクトになったと言いたいのだ。ルーピン先生は。

恨めしそうに親友がにらんできてもルーピン先生はどこ吹く風だ。実に力関係のわかりやすい図だった。

「だからもつとわがままを言うといい。君たちの親代わりをどんどん困らせてやりなさい。それがこいつは楽しくて仕方ないんだから。改めてプレゼントを要求してやるのも手だ」

ハリーと一緒にやわらかく頭を撫でられる。くすぐったくて、そしてどこか申し訳ない気持ちになった。

「十分だよ」

僕は心の底から満たされていた。ハリーとはちがった意味で怪しい人間のマリア・ポッターをこれほどに愛してくれる。それが、如何に得難いことか。これ以上なんて——あ。

唐突に、完璧でさびしい無音の部屋が頭に浮かんだ。

「——シリウス。僕のお願ひ、ほんとうに聞いてくれる？」

大人二人の面食らった顔を見上げる。『彼』のことを切り出すならば——今しかない。

シリウスは子供っぽく歯を見せて笑った。停まっていた時が動き出す予感がした。

「——弟は、両親にとって実によい息子だった」

扉に書かれた、ちよつと気取った文字をシリウスが撫でる。

『許可なき者の入室禁止——レギュラス・アークタルス・ブラック』

ハリーはこの時になって、ようやく気になっていた部屋の主とシリウスとの関係を知った。シリウスは弟の部屋を避け続けていたのだ。

「軟弱でおろかな弟だった。両親の言いなりで——ヴォルデモートの信奉者でもあった」

ハツと息を呑む音が聞こえた。ハリーからだ。シリウスはかまわず扉を開いた。昨日だって訪れた部屋だ。だというのに——ハリーには途端におそろしい場所に思えた。

「ヴォルデモートの信奉者である——この意味がわかるか？　つまりは、死喰い人であったということだ。ゆえに、殺された。弟が十七の頃だ。……私は、その事実をずいぶんと知らずにいたがね」

部屋は綺麗なままだ。心から主を慕うしもべであり友によつて守られた、永く誰にも侵すことを許さずにいた語られぬ英雄の聖域。

僕は思い出していた。水盆の毒に苦しむダンブルドアの姿を。あのダンブルドアでさえ殺してくれと乞う地獄の痛み——それに、十七歳の少年が堪えきつたのだ。すべては——友と家族を守りたいがために。

「結局、弟は逃げ出したのだ。すべてが中途半端だった。ヴォルデモートの残虐行為に恐れをなして——ぶざまに尻尾を巻いて自業自得で死んだ」

彼が守りたかった家族の——兄であるシリウスの口から彼に対する侮辱がつづられるのは、ひどく残酷に思えた。

「——ほんとうに?」

少女の声は場違いなほど響いた。部屋がそれを求めたように感じた。

「どうしてそう言えるの? シリウスはレギュラスの死を知らなかったのに?」

「マリア——?」

「シリウスの知るレギュラスは軟弱者でしかなかった? レギュラスとの思い出はそれだけ? ——彼の死因を知るものが他にいないかもしれないとは考えなかった?」

シリウスは戸惑う前に苛立ちを見せた。それほどに、彼のかつての家族について触れることは危険だと暗黙の了解があったのだ。

「君がなにを言いたいのかは知らないが、父も母もとうの昔に死んだ。ルシウスやベラトリックスならばともかく、ナルシッサがレギュラスの件に関わっているとも思えない。ブラック本家の残りは俺だけだ。それで、誰に聞くんだ? ダンブルドアか? それともヴォルデモート本人か? どんなふうに見えぬ人を使つて私の弟を殺してくれたか——とでも?」

「あなただけじゃない」

手に力がこもって気付いた。無意識にハリーの手を握っていた。ハリーは迷うことなく握り返してくれた。

「この屋敷を、老いてなお守り続けてきた存在がいるじゃないか」

シリウスはとうとう黙りこんだ。彼の優秀な脳が答えを導き出せないはずがない。

「僕のお願いはこれだよ。——クリーチャーからレギュラスの話を聞き出して」

緊迫した空気が僕たちポッター兄弟とシリウスのあいだに張りつめた。

「マリア……目的が見えない」

「そんなのはどうだっていい。僕の下世話な好奇心だよ。だから、お願いだからレギュラスの最期を知って。クリーチャーはあなたの命令には逆らえない。無理矢理だっていいから。——あなたで、ないと」

だって、他人の『僕』でなく家族であるあなたに託されるべきだったんだ。彼の意志は。——あなたは、弟の真の勇気を知らずに死ぬべきではなかった。

シリウスは戸惑いながらも数秒を使って、葛藤の末にうなずいてくれた。かなり嫌々ではあったけれど、いわゆる根負けだ。

「わかった。約束をやぶる男だとは思われたくないからな。——クリーチャー！」

シリウスの呼びかけひとつで鶏ガラのような屋敷しもべ妖精が姿を現す。クリーチャーはレギュラスの個人部屋へと侵入していた僕らを見回してギョロつく目でいらんだ。これまで何度か顔を合わせた中でも最高の憎しみがこもっていた。

「何用でしょうか、ご主人様。……クリーチャーは許せない。レギュ

ラス様のお部屋をブラック家の裏切り者と野良犬どもが土足で踏み荒らしている。ここだけは穢されてはならない。クリーチャーは絶対に許してはならない——」

「そのレギュラス様の話だ。——お前はレギュラスがどんなふうにして死んだのか、知っているのか」

クリーチャーは糊でもつけたように唇を引き結んだ。明らかな拒絶の表れだった。それによってシリウスも確信した。——このしもべはなにかを隠している。

「命令だ。嘘も誤魔化しも許さない。レギュラスについて話せ。——弟はどのようにして死んだ」

「……………」

「クリーチャー……現当主である私に逆らう気か？」

「いいえ、滅相もございません。クリーチャーめはブラック家の忠実なしもべです。……クリーチャーは、クリーチャーは話したくない。この男にだけは——ブラック家を、レギュラス様を裏切ったこの男にだけは——」

「クリーチャー」

額を床にこすりつけ、全身を使って震える哀れなしもべ妖精の前に膝をつく。クリーチャーは顔を上げなかった。それでも、僕にはわかった。『僕』はクリーチャーが泣く姿を知っている。

「クリーチャー」

触れずに、声だけを届ける。

「——レギュラスのロケットを、取り戻してくるよ」

クリーチャーは息もつかぬといった早さで頭を上げた。ただでさ

え大きな目が極限まで開かれていた。

「なぜ——なぜ——」

「だから、話してくれ。君が誇る主人の話を」

ぼろぼろとクリーチャーの目から涙がこぼれ落ちた。僕の肩にはハリーの手があった。シリウスは呆然とクリーチャーを見ていた。シリウスは知らなかったのだ。——しもべ妖精にだって、僕たちと同じように誰かを想い泣く心があることを。

「クリーチャーは——レギュラス様の命令を、果たせませんでした」

クリーチャーは語った。喘ぎ喘ぎに、最愛の主人の勇敢でかなしい最期を。屋敷しもべ妖精のクリーチャーを家族として、友としてかわいがったレギュラス・ブラック。命の危険にさらされたクリーチャーのため立ち上がった優しい人。家族のため誰にも告げずに暗い湖の底へと沈んだひとりぼっちの少年。

シリウスはクリーチャーの告白を止めなかった。しもべ妖精特有の甲高いしやがれた声がただの嗚咽に変わった頃には、誰もが想いを抱いて黙した。空気が質量を持ったかのように重たかった。僕はシリウスを見上げた。

「あなたの家族に——あなたと同じように闘った人がいたんだ」

シリウスは灰色の瞳を揺らして、埃一つない特別磨かれた床へと崩れ落ちたクリーチャーを見つめた。

「……少し、ひとりに、してくれないか」

「シリウス」

「出ていってくれ」

クリーチャーは体を引きずってシリウスの命にしたがった。そして僕とハリーも、しきりに振り返りながらレギュラス・ブラックの部屋をあとにした。扉を閉める間際、室内に残されゆくシリウスの背中は、重さに耐えるように丸められていた。

「……ねえ、マリア、君は——」

「ハンカチは必要かい？ ハーマイオニー」

廊下の向こうで物の倒れる音がした。おそろおそると角から現れた頭は二つ。ロンとハーマイオニーだ。ハーマイオニーは泣き腫らしながらも大慌てで目をこすっていた。……ハンカチは水で濡らしておいた方がいいかもしれない。

「あの——わたしたち——」

「盗み聞きするつもりじゃなかったんだ。ほんと。僕はやめとけって言ったんだよ。でも、ほら——わかるだろ？」

ハーマイオニーが裏切り者を見る目でロンを見上げた。察するにロンも望んでここにいたのだろう。どうせハリーが後々に報告すると見ていた僕は、呆れ半分、手間が省けてよかったと思うことにした。

「怒ってないよ。僕たちがこそこそ居間を抜けたから気になったんだろう？」

「伝言を伝えたかったのよ。ウィーズリーおばさまが、午後にはウィーズリーおじさまのお見舞いに行きましょうっておっしゃったの。そうしたら、シリウスがクリーチャーを呼ぶ声がして……」

「虐待がおこなわれなにか心配になった？」

「……」

ハーマイオニーは恥じ入るようにうつむいた。

「繰り返すけど、僕たち、怒ってないよ。だって君たちにも教えるつもりだったもの。そうでしょう？ ハリー」

「もちろん」

「というわけで、居間へ戻ろう。朝食を食べそびれちゃった」

「ママがサンドウィッチを残してたぜ」

「それはいいや！」

いつもの四人組でレギュラス・ブラツクの名の書かれた部屋から離れる。誰からもあえて話題に出さない気遣いを感じた。

どうか、失敗でありませぬように——祈る。クリーチャーが心を開いてくれますように。シリウスが心を信じてくれますように。

力を貸してくれ。——R・A・B。

この洞穴を見るのは二度目だ。体が震えた。冬の海の冷たさからか、獣の口のような穴の深さからか。大きな大人の手が二つ、肩を撫でる。優しい体温にほんの少しだけ心が落ち着いた。

「ここだな」

男のかすれた声が呟いた。僕と、シリウスと、ルーピン先生と。そしてクリーチャーは大口を開けて待つ地獄の穴を見上げた。誰の心にも恐怖と決意があった。

再び、僕は亡者うごめく洞窟の前へと立っていた。

「マリアを借りてもいいかい」

昼食を終えて、いざ聖マングへ向かおうという時に思い詰めた顔のシリウスが切り出した。予想していた僕と、事情を知る親友二人は、ああ……と目だけでうなずきあった。シリウスがうかがいを立てた相手はハリーだ。ハリーは、はつきり顔に不満を浮かばせながらも答えず二階へと上がった。シリウスは苦笑した。なんだか今だけは隣に並ぶルーピン先生と同じくらいくたびれて見えた。

「——許してはくれなさそうだ」

「ハリーが一緒だとダメなの？」

「護衛つきで人が多くいる病院と、人知れず隠された洞穴——君はどちらが安全だと思う？」

「……連れていけるわけないか」

至極当然に返されて、僕も大人二人へと苦笑せざるを得なかった。つめたいように聞こえるが、現在の不死鳥の騎士団の最優先事項はハリーの身の安全と護衛だ。拘束が僕とは比べ物にならないのだ。

「しかたないな。案内役は——」

「マリア、これを使って」

拒絶を示したと思われたハリーは、透明マントを手に戻ってきた。指に触れた水みたいなのめらかな感触に僕はぽっかりと口を開いてしまった。

「用心して、必ず戻ってきて。無茶はダメだよ。ぜったいにダメ。シリウス、マリアから目を離さないでね。この子、ほんとうに無鉄砲なんだから」

「……もちろんだとも」

「ハリー……いいの？」

「いやだけど——約束してくれたから」

不満たつぷりの拗ねた顔。そこに見える——隠しきれない不安。

「そばにいるって、言ってくれたじゃないか。それって、どこにいても必ず僕の元へ帰ってくるってことだろう？ ……信じてるから」

咄嗟に抱きしめていた。いじらしい僕の兄弟。愛する、たった一人の血の繋がった家族。

「当たり前だよ。……僕、君におかえりって言ってもらうことに慣れちゃったんだもの」

おはようも、おやすみも、ただいまも、おかえりも——君の声でないと物足りないんだ。

「うん——信じてる。シリウスのことも、ルーピンのことも」

何度か背を撫でられて、額に額を当てられた。ハリーは少しだけ身をかがめていて、明確な身長差に悔しくなった。

「僕は君の兄さんだからね」

「……僕が姉だよ」

ハリーの笑みは穏やかだった。

暗い洞窟の中は空気すらもしめつていて、杖の先に光をともしているように先は見えない。不快感がゾツと肌をなめていく。『僕』は一度経験している。だから進めた。だが、それはダンブルドアという絶対的な盾があったからだ。今にも奥から魔物が姿を現しそうな闇の中、臆することなく歩みを進める大人の背中に他人事にも感心していた。

これは、きつとハーマイオニーならば無謀と呼ぶ行為だ。……たぶん、ドラコもそう言うだろう。怒りと嫌悪を乗せて。

クリーチャーが立ち止まる。壁を見上げて、暗い目で「ここに扉が隠されております」と告げる。

「扉？ ただの壁だろう。開くのに条件があるのか」

「——血だよ」

声の一つ一つが反響して不気味に響いた。歪んで耳へ返ってくるのだ。

「通行料だ。血を捧げなくちゃダメなんだ」

シリウスはためらいなく己の腕を杖で切りつけた。止める間もなかった。静かな瞳で壁へと傷口を擦り付け、扉を開いた。

「シリウス……」

「なぜ君が扉の開き方を知っているのか——それは聞かないよ。聞かないと決めたんだ。だから、教えてくれるだけでいい。この先にはなにがある。なにをすれば——レギュラスのロケットを取り戻せる」

「……先には——」

僕が答える前に答えは目の前に広がった。黒い湖だ。向こう岸が見えないくらい広く、天井は高い。——この下に、レギュラス・ブラツクは眠っている。

「レギュラス坊っちゃまは小舟を発見されました。闇の帝王が使った小舟です。ご自身で見つけられました——」

クリーチャーはチラリとシリウスを目だけで見上げると、軽蔑の眼差しのまま口元を歪めた。シリウスはクリーチャーを見てはいなかった。緑に光る湖の中央を一心に見つめていた。

クリーチャーはいまだシリウスを許してはいない。協力するのは当主としての命令があるからだ。そしてレギュラスのためだからだ。それがありありと伝わる顔だった。お前とちがってレギュラス坊っちゃまは自分だけでこれらの妨害を突破したのに——そう、クリーチャーは言いたいのだ。

ゴムのような手が宙をまさぐる。やがて、クリーチャーの手には鎖が浮かび上がった。鎖の先には小舟が湖を泳いでいた。

「二人用か」

「ヴォルデモートが使うためのものだからね。一人の魔法使いしか乗れないようになってるんだ。つまり——成人でない僕はカウントされない」

瞬時に意味を理解したシリウスはじつと僕を見た。僕も負けじとシリウスを見つめた。けれども、シリウスは折れなかった。

「だめだ。ここにいなさい。ハリーと約束したからね。リーマスから離れないように。リーマス、わかってるな？」

「いつそ僕が行こうか？」

「俺の弟が害されたんだ。それはすなわち——ブラック家そのものに對する喧嘩だ。俺には買う権利がある」

シリウスの瞳はギラギラと緑の光をにらんでいた。——怒りに美しく輝いていた。

「この先の敵はなんだ。マリア」

「……湖の中に亡者がいる。そして——毒。ロケットは毒で満たした水盆に沈められていて、すべてを飲み干さないと取り出せないようになってるんだ。……どれほど強力な魔法使いだって、殺してくれと叫ぶような毒だよ」

クリーチャーが震えるのが見えた。クリーチャーは毒の苦しみを経験している。そして、今、再び——

「わかった。——クリーチャー、俺に何があつても毒を飲ませ続ける」

すべての目がシリウスへと集まった。クリーチャーですら目玉を剥いてシリウスを見上げていた。

「ご主人様——？」

「そしてロケットを取り次第、俺を連れて必ずマリアの元へと戻れ。万一、俺が口が利けない状態にあつたらマリアの言葉にしたがえ。いいな、ここまですが命令だ。この間、俺がなにを言おうとも命と受け取

るな。これも命令だ」

クリーチャーは呆然としていた。ルーピン先生も、そして僕も。みんながこう思っていたのだ。——シリウスはヴォルデモートと同じようにクリーチャーに毒を飲ませるだろう、と。シリウスは屋敷しもべ妖精という生き物を軽視していた。

シリウスの中で——なにかが変わり始めていた。

シリウスとクリーチャーを乗せた小舟が湖の中央へと遠ざかっていく。目が離せなかつた。僕の肩を抱きながら、ルーピン先生も二つの背中を見つめている気がした。

久遠のような時間を感じた。シリウスがひざまずく。クリーチャーが側でなにかを動かしている。声が聞こえた。はじめは小さく、湖が無音でなければ掻き消えていただろうくらいの——そして声は徐々に大きくなる。呻く。喘ぎ、懇願する。——シリウスだ。

「——るして、くれ。そんなのは、いやだ」

「おれは——ちがう。俺は、こんなつもりじゃ——」

「おれが間違えた。おれのせいだ。どうして——」

耳を塞ぎたくなつた。涙があふれそうだった。それでも、僕はシリウスを見続けた。シリウスの小さくもだえる哀れなシルエットを目に焼き付けた。ダンブルドアが幻覚に己の罰を乞うたように——シリウスは自分自身が課した罪に苦しんでいた。

「ゆるさないでくれ。どうか——殺してくれ————ジエームズ」

クリーチャーの手の中でなにかが光った。次の瞬間には、シリウスを掴んだクリーチャーが僕の元まで姿現ししていた。シリウスの目は虚ろだった。

「シリウスッ！」

「マリア、前に出るな！——インセンディオ！」

「でも——ああ、シリウス……っ」

シリウスの手が宙をもがく。水を……そう、うわ言に繰り返す。湖は亡者であふれていた。このままでは全員が吞まれてしまう。

「クリーチャー、命令だ！ 僕たち全員を——グリモールド・プレイス十二番地に付き添い姿現しするんだ！」

ぐにやりと歪む視界の最後に映ったのは、ロケットの輝きと亡者を包む炎の海だった。

クリーチャーが飛んだ先はシリウスの部屋だった。現在のシリウスが使っている部屋ではない——学生のシリウスが家出をするまで使用していたと思われる部屋だ。主張の激しい赤色で統一され、オートバイの切り抜きやグラマラスな女性のポスターなんかの色褪せた状態で壁に貼られていた。レギュラスの部屋とちがって埃が目立つたが、クリーチャーは良くも悪くもこの部屋に手を入れることはなかったようだ。

シリウスをベッドへ寝かせて、クリーチャーに持ってこさせたコップに水を満たしてシリウスへと手渡す。

「シリウス、シリウス、もう大丈夫——大丈夫だから——」

「……ジエー、ムズ」

シリウスの指が僕の目元を撫でる。僕の目に父を見ている。ツキリと胸が痛んだ。——それでも、かまわない。

「……ああ。なんだい？ パッドフッド」

「ジェームズ……俺は……」

「少し休むといい。君はまた無茶をしたんだ」

「俺は……許して……おれを、ゆるさないでくれ……」

「許すさ。親友だもの。……君を許すよ、シリウス」

シリウスはほんの少し微笑んでから目を閉じた。シリウスの息がぐっと深くなった。

「マリア……」

「ありがとうございます、ルーピン先生。先生がいなければきつと、僕もシリウスも湖に引き込まれてた。……クリーチャーも、ありがとう」

クリーチャーは眠るシリウスからコップを取り戻すと、ぶつきらばうに僕へと鎖を押し付けた。——レギュラスのロケットだ。

「クリーチャー……？」

「ご主人様からお預かりしてよいと命を受けておりません。クリーチャーはお嬢様が持つべきであると判断しました」

クリーチャーは退室の礼もなく部屋から出ていった。残された僕とルーピン先生は信じられない気持ちで見つめ合ってしまった。

「……これって」

「君は思っていた以上に偉大なことをしてしまったのかもしれないよ。マリア」

ルーピン先生がクスクスと笑った。つられた僕も、吐き出すようにくしゃくしゃになって笑った。

「おかえり、マリア！」

ハリーにぎゆうぎゆうに抱きしめられる。苦しくて、笑いながらハリーの背を叩けば渋々面で解放された。

ハリーの部屋だ。室内にはロンとハーマイオニーの姿もあった。

「怪我らしい怪我がなくてよかったわ。シリウスは寝込んでると聞いたけど……ルーピン先生が看病しているのよね？ どうしてマリアまで行かなくちやいけなかったの？」

「病院で僕たち、ネビルのばあちゃんに会ったんだ！ それで、ネビルのママが——」

「その話はあと。レギュラスのロケットは取り戻せたの？ マリア」

三人が示し合わせたみたいにいっせいにしゃべり始めるものだから、一度逃げ出したハリーの腕の中に戻り直してしまった。ハリーはニツコリとした。

「これがレギュラスのロケットだよ」

「これによく似た物を、ヴォルデモートが湖に隠していたのね。そして今はクリーチャーが持っている……」

「そうなるね」

ハーマイオニーがロケットを慎重にいじる。開いた中身は空っぽだった。——僕が取り除いたのだ。まだ、分霊箱のことを知られるわけにはいかない。然るときにその他の分霊箱と共にハリーに譲ろうと考えている。シリウスやハーマイオニー……彼らの優秀な頭脳からハリー自身が分霊箱である可能性について勘づかれるわけにはいかない。

「ああ、僕、わかったぞ。そのロケットがジョージが盗み聞いた『例のあの人』の武器なんだ!」

「ちがうと思うわ。ヴォルデモートは『手に入れてない』武器を探しているのよ。ヴォルデモート本人の所有物じゃ辻褄が合わないわ」

ハーマイオニーにバツサリと切られてロンはちよっぴり拗ねた。

「けれど、だとすればヴォルデモートはなんのつもりでロケットを隠したのかしら。なにかすごく、重要なアイテムなの——?」

……さすが僕らのブレイン、ハーマイオニーだ。うかうかしている
と一人だけで分霊箱の存在へとたどり着きかねない。

僕が心底からひやひやしていると、ハーマイオニーからロケットを
取り返したハリーが僕ごと立ち上がった。

「ともかく、クリーチャーへ渡そう。シリウスもそうするつもりだっ
たと思うんだ。それで、ヴォルデモートのロケットと交換してもらお
う。いいかい? マリア」

「ハリーの望む通りに」

胸のすく思いで兄弟を見上げた。——どうか君はそのまま。

間違えないで。

ハリーから改めてロケットを渡され、そして唯一実行できなかった
スリザリンのロケットの破壊をハリーに約束してもらえたクリー
チャーは、再び泣き崩れた。ハーマイオニーはもらい泣きしていた。
その日からクリーチャーの態度は間違いなく軟化した。相変わらず

ぐちぐちと文句を言う癖はあるものの、慇懃無礼な態度は心持ち鳴りをひそめていた。そしてシリウスも、クリーチャーをその辺の雑巾でも見るような目で見ることはなくなった。改まった交流があるわけではないが、それだけで屋敷の空気がほんの少し変わった気がした。

「ハリー、マリア、準備できたか」

玄関でシリウスが穏やかに僕たちを呼ぶ。クリスマス休暇終盤の本日、シリウスの計らいにより僕たちポッター兄弟はゴドリックの谷へと両親の墓参りに行く予定となっていた。もちろん、万全の護衛つきだ。念のため透明マントをハリーのポケットに突っ込みながら、大人たちの群れに混ざる。玄関先でクリーチャーが見送りのために頭を下げていた。

「まだ奴らが行動に起こすとは思わないが——ま、用心して損はない」

マッドアイが目も鼻も利かせた中で進む。トラブルひとつなく両親の墓の前へとたどり着いた。気を利かせた騎士団員たちが一時的に解散してくれたおかげで——当然、見えないところで待機しているだろうことはわかっていた——シリウスとハリーと僕の三人だけになった。

美しい大理石だ。両親の名前と生年月日、没年月日、その下には『いやはての敵なる死もまた亡ぼされん』と刻まれていた。

……ひさしぶり。父さん、母さん。

「……僕、周りを見てくるよ」

「ハリー？　ひとりではダメだ」

「透明マントをかぶっておく。トンクス辺りと一緒にいるから」

「ハリー、待ちなさい！」

制止を振り切って消えたハリーに、追おうとしたシリウスを止めた

のは僕だった。

わかるのだ。ハリーは堪えられなかったのだ。かつての『僕』がそうであったように——両親の死と、あったかもしれない故郷での生活を浮かべて苦しくなったのだ。『僕』は時に任せて痛みを癒していったけれど、こちらのハリーははじめて直面した。鮮明に目の前へ差し出されてしまった。理不尽に奪われたものを。当たり前にあるはずだった形を。あの子にもまた——どうしようもなく時間が必要だった。

「大丈夫だから」

シリウスはしゅしゅと墓の前に座り直した。花を手向けて、墓石に刻まれた名前をじっと見つめる。1981年10月31日——没。その日はきつと、シリウスにとっても最悪のはじまりだった。

「考えていたんだ」

指がジェームズの文字を撫でる。

「クリーチャーの言うとおりあれが湖に沈んだとするなら——あれの墓の下にはなにもないのだと」

誰の話だか、聞かずともわかっていた。遺体のない墓。空っぽで、土に墓標を刺しただけのハリボテ——そこに刻まれたシリウスの名前。前。

僕は知っている。むなしさを知っている。悔しさを知っている。怒りを知っている。愛する人の体すら取り戻せぬ死は、遺された者の心を刻み続ける。

「……シリウスは、眠るならどっちがいい？」

なんてバカなことを。そう、眩いてから血の気が引いた。けれども、シリウスは穏やかなま僕をたしなめることなく答えた。

「どうせならジエームズたちのところがいい。そして、永く永く君たちを待ってしよう。急ぐんじゃないぞ。たつぷり時間をかけて——そうだな、ダンブルドアを越えるくらい老人になるまで私たちを待たせなさい」

なんとも無茶な要求に笑ってしまった。大きく息を吸って、シリウスの手を握って——彼の涙伝う横顔に寄り添った。

「レギュラス。すまなかった。お前を取り戻せなかった。そこは冷たいだろう。恐ろしかったろう。俺の弟、たつたひとりだけの弟、レギュラス——」

父と母にかけられた花輪が、親友を慰めるようにほのかに揺れていた。

追いつかない。届かない。その先はだめだ——叫ぶのに声は出ない。不吉なヴェールが揺らめく。大切な人の体が喰われていく。魂が分離する。これだけ伸ばしているのに——指先ひとつですら触れられない。
たすけて。連れ戻して。止める腕を叩く。もがく。だれも邪魔をしないで。

絶叫した。

「——シリウスッ!!」

「なんだ？」

伸ばした手を取られた。夢の中で追い続けた人がそこにいた。果然と見つめれば、目尻を片方の手で撫でられた。シリウスの指は濡れていた。

「——リ、ウス」

「マリアにしてはめずらしくよく寝てたからな。ハリーならともかく。ああ、ハリーは先に下りてるぞ。ロンと一緒にリーマスを巻き込んで宿題の追い込みだ。今頃しごかれてるな。リーマスはあれで案外スパルタなんだ」

寝汗がひどいだろうに額を撫でたシリウスは、やわらかく笑った。背中を起こせば、彼がベッドへと腰かけていることに気が付いた。

「いつから——？ 僕——」

「しっかり呼吸をしなさい。——悪夢を見たあとは、誰だって落ち着かないものだ」

引かれるままにシリウスの胸へと倒れこむ。背中を大きな手が叩く。呼吸に合わせるように、ゆっくり、ゆったりと体温がなじむ。

「——マリア。これは私の独り言だ。誰に向けたものでもない。いいね？」

「え？ うん……」

ぼんやりしたままうなずいた。やわらかく拘束されて、彼を見上げることは叶わなかった。

「たとえば——たとえば、私が死を迎えるとするなら——」

「ッシリウスは死なない!!」

衝動から胸を突き飛ばしていた。シリウスが僕を見る瞳は風のな
い水面のように静かだった。

どうして、そんなこと。どうして、そんな目で。

「ぜったいに、ぜったいに死なない——!・ 死なせない——!!」

ほとんど錯乱に近かった。夢と現実が曖昧になっていた。

「マリア。落ち着きなさい。……これは、ただの独り言だ」

「あ——」

手を取られる。体温によって落ち着かされる。その上で、シリウス
は繰り返す。僕を逃がさぬように、瞳の中にまで僕を捕らえて。

「たとえば私が死ぬとすれば、誰かを守る形でありたい。無意味に死
ぬよりも後に繋がるものでいたい」

「……いやだ」

「私のことだ。調子に乗った末の無駄死にな可能性も否認ないが——
まあそこは、かっこよく散りたいと思うのは男のさがじゃないか？」

「やめて、シリウス」

「ともかく、誰か——それはもう大切なものを守った上での死なら——
——私は後悔しないだろう」

「やめろってば!」

腕を振り回す。シリウスは手首を離してはくれなかった。

いやだ。聞きたくないのに。いやだって言ってるのに。——彼の
前から逃げたいのに。

「私が後悔しないのに——君が嘆いてはいけない」

ナイフのようにするどい言葉はひたすら僕を刺し尽くした。

「私の身勝手を背負うな。そんな資格は君たちにはないんだ。怒りなさい。勝手なことをした男だと——エゴを押し付けた高慢ちきな男だったと」

ぼたぼたとバカみたいに涙が落ちる。残酷だ。許さないなんて。奪っていくなんて。一緒に持つていこうとするなんて。

傲慢に——僕を許そうだなんて。

「そんなの、ひどい」

僕は泣いた。子供みたいに泣きわめいた。顔をぐしゃぐしゃにして鼻水だつて垂れさせて、外面を放り出して泣いた。

今、泣かねば——この人はヴェールの向こうまで僕の心を持って行ってしまふんだ。

「どうやら私は死ぬようだ」

親友の気でも狂ったような言葉に、リーマス・ルーピンは指先まで凍える心地になった。

「あの子たちの依存はいずれ互いか——互いに近い誰かを殺すと、以前に言ったな」

「……ああ、言ってたね。夏休みに」

「どうやらそれは俺らしい」

「……………」

沈黙。シリウス・ブラックは何気ない世間話のように最後の親友を追い詰める。

「——マリアが、そう?」

「いや。明確に『予言』されたわけではない。——ただ、あんなにうなされて——あんな泣き方をされればわかるさ」

予兆はあった。そも、マリアがシリウスを見つめる瞳は親愛と——時おり懐古の痛みに揺れていた。ジェームズが持つはずもない色だ。マリアは未来を知っている。それは、シリウスとリーマス、そしてダンブルドアの中では確定となっていた。——なにか、かたくなに明かせぬ事情があることも。

「あとを頼むよ。リーマス。俺たちのとびきり優しい親友」

一番の親友の子供を赤ん坊からこれまで見守り続け、想い、とうとう家に引き取る形になってからシリウスはぐっと大人になった。親の顔をするようになった。そして、今——先行くものの達観した残酷さで残されゆく親友を突き放すのだ。

「……悲しむ暇すら、くれない気か」

「その代わりに覚悟する時間をやったんだ。お前は考える時間を与え

るどろくなことにならない。二人の世話でいっぱいいっぱいになってくれ」

子供っぽく笑う。誰よりも苛烈だった男は親友にだけ許す笑顔で呪う。追ってくるな。嘆いてくれるな。ひとりぼっちになっても——その二つの重りにすがって生きろ。と。

「ひびく」

リーマスは失敗した微笑みを隠すため、情けない気持ちでうつむいた。シリウスはそれでも笑った。

「マリアにも言われた」

クリスマス休暇明けの今日、ホグワーツ特急を前に親子たちは別れを惜しんでいた。恥ずかしそうに母親に抱きしめられるウィーズリー家の息子たちに、トンクスとクスクス笑い合うジニー。マッドアイは周囲への警戒に魔法の目を光らせ、ハーマイオニーはルーピン先生と堅く握手を交わしていた。

「ハリー、しっかりな。妹を守ってやるんだぞ」

「はい。シリウスおじさん」

くしゃくしゃ頭を撫でられ親愛の抱擁を受けたハリーは、ロンの呼び声に従って汽車へと乗り込んだ。シリウスのやわらかな目が僕へと移る。

「マリア」

「シリウス……」

「そんな顔をするな。学校を楽しんでおいで。友達と、勉強と……それから、そうだな。イタズラなんかもして」

「それはアンブリッジババアが黙ってないよ」

「シリウス・ブラックが黙ってないぞと返してやれ」

マクゴナガル先生が頭を抱えそうな悪戯っ子の笑みで返したシリウスは、ハリーに与えたのと同じように僕のことにも抱きしめてくれた。

「愛してる。君はジェームズとリリーの子だ。そして、私の娘だ」

手を彼の背へと回し返す。

「僕も愛してる。……ありがとう、シリウスおじさん」

うしないたくない。この腕の中はこんなにも心地よいと知ってしまったから。だから——この先もあなたを家族と呼べるように、僕は戦うよ。

汽笛に急かされるままに汽車へと乗って、席を取ってくれていたハリとジニーと共に窓から騎士団のメンバーたちへと手を振る。監督生のコンパートメントがある窓からはロンとハーマイオニーの頭が見えた。——ブロンドは無い。窓から身を乗り出してまで別れを惜しむ相手がホームにいないのだ。

……ドラゴ。

ポケットの中の羊皮紙を握りしめる。僕は諦めない。だから君も——どうかやり遂げて。

保護魔法をかけているとはいえ、五年も使用すればさすがにくたびれる——そんな気のする通信紙を片手にとあるコンパートメントを覗く。

「やあ、孤高の王子さま」

「ご機嫌うるわしいようで。勇敢なる姫君」

中の少年は監督生としての仕事を終えてすっかりくつろいでいた。見ないあいだにまた背が伸びたように見える。……ずるいや。

「ハリーはなにも?」

「まあね。ジニーのほうが気にしてた。ハリーと個室で二人きりはまだ緊張するみたいだ」

「ダンスもした仲なのにか?」

「人数の問題なんじゃない? 普段は僕が一緒だし。ルーナでもいれ

ば気も楽だろうに」

「ああ……^{ルーニー} 変人か」

「その呼び方はやめて。娘の名前にまでもらった僕らの友人だ」

「それは失礼」

皮肉屋は相変わらずなドラコの向かいへと座る。ホグワーツへ着けばまた僕たちは距離を取らなくてはならない。通信紙は便利だけれど文字だけでは限界がある。互いの情報を今のうちに擦り合わせしておかなければ。……いつそ、僕も両面鏡を買ってみようか。

「調子はどうだい？ アー……色々？」

「それなりだな」

「計画は順調に進んでるってわけだ？」

探るように返せば、ドラコはどことなくためらいがちに答えた。

「……マルフォイ家の別荘を使おうかと考えている」

「別荘か。いいね、お貴族さまはこんなときに困らない」

「君だつて似たようなものだろう。いずれはブラツクの跡取りだ」

「ハリーがね」

クスクス笑えば、ふと目が合つて言葉もなく見つめてしまった。——やっぱり、いくら中性的だつてドラコもどんどんと男に近づいていく。ハリーがいずれ『僕』になるように。それなのに——僕はどこもかしこも『少女』のままだ。

「マリア？」

「っ、ああ、うん。問題は誰を守人にするか、だね」

目をそらした。あの目がいけない。あの、溶ける間際の氷のような目が。どうにもあの日から——彼がハリー・ポッターを好きだなんて

トチ狂ったことを言い出した日から、彼のグレイアイに見つめられると落ち着かない気分になるのだ。……時々、だ。

「秘密の守人か……この事を知るのは、僕と——そして君だけだ」
「……僕に頼みたい、て口だね」

ドラコは観念するように軽くうなずいた。

「君は死なないだろう?」

「それはわからないよ。——でも、死ねない理由にはなるかもね」

僕の言葉をどう受け取ったのか。ドラコは満足そうに笑った。

きっと僕はハリーのためならば死ねる。けれど——君のためになんかでは死んでやらない。だって、君だって僕のために死んだりなんてしないだろう。

「そちらの件は了承した。それで——僕の『お願い』はどう進んでる?」

ドラコは再び顎へと手をやってしばし黙考した。

「買い取りは終わった。こちらはアンドロメダ伯母様を頼ることにした。あとは、タイミングを見て使える段階まで修理だ」

「アンドロメダさんか……考えたね。灯台もと暗しってやつだ」

トンクスの母でありナルシッサの姉、そしてマグル出身の魔法使いと結婚したことで血を裏切るものとなったアンドロメダ・ブラック。テイを育てるにあたって手を取り合ってきた『僕』は彼女の人となりをよく知っている。……彼女になら、みんなを任せられる。

「それなら、そちらも僕が『守人』であるほうが都合がいいか」

「……任せられるか」

「もちろん。そもそも僕が君に依頼したんだ。当然の落としどころだよ。あとは——結び手を誰にするかだ」

そこでドラコは待つてましたとばかりに含み笑った。

「……もしかして、もう決めてる?」

「ああ。——ダンブルドアだ」

「——」

思わず目を見張った。……ドラコ・マルフォイが、ダンブルドアを頼るだなんて。

「……代償を払わなくちゃいけないよ。あの人は善良だけど、無償で救う人ではない」

「知ってるさ。僕は——僕と僕の愛する者のためなら何を犠牲にしたってかまわない」

強い眼差しだった。自身と、自身の内に含めた者だけは何があっても手放さないと言い切るあたり、彼らしくて安心してしまう。

「スリザリンめ」

お約束を口にすれば、ドラコは自信たつぷりにお約束のニヒルな笑みを返した。

「ところでマリア。手を出せ」

「うん?」

突然の話題転換に警戒もなく従う。手のひらにラッピングされた小箱を落とされた。

「ブラック邸は隠されているからな。直接渡すしか手がなかった」
「……………」

もしかして。もしかなくとも——これって、クリスマスプレゼント
ト。

思わず胡乱な目でドラコを見上げてしまった。

「……………また、なにか企んでるのかい？」

「さあ」

「さあ——じゃないよ！ ダンスパーティーの一件で僕は学んだんだ。君ってほんとう、油断ならない！」

「なんたってスリザリンだからな？」

クツクツ笑うドラコの前でラッピングをほどく。現れたのは金色のオルゴールだった。

「君の好きな人間の声で歌う。ぜひ回してみたまえ」

「いやだよ。どうせハリーかロンかシリウスか——誰の声で歌い出したっておかしくないんだから」

慎重に小箱へ繊細そうなオルゴールを戻してそっぽを向いた。ドラコはまだ発作でも起こしたみたいに笑っていた。ムカつく顔だ。

「……………ありがとう。でも、ごめん。君に返せるものがないんだ。僕、思ってもみなくて」

「はじめから期待なんてしていないさ。君だからな」
「どういう意味だい」

にらめば、ようやくドラコはクツクツ笑いを止めた。やわらかに目を細めて、リラックスした体勢でクリスマスはとうだった？ と続け

る。

「僕はごらんの通り、両親に隠れてあっちこっちと奮闘するすばらしい休暇を過ごしたわけだが——シリウスと気兼ねなく過ごせるはじめてのクリスマスだったんだらう?」

「洞窟で亡者と刺激的なパーティーをしたよ。うっかり溺れちやいそうなくらい夢中でね」

ポカンと。ドラコから余裕たつぷりの面が剥がれ落ちた。そうすれば途端に幼くなる。いい気味だ。

「君ってやつは——クリスマスくらいおとなしくできないのか」

「チャンスだったんだよ。おかげで分霊箱だって手に入れた。スリザリンのロケットだ」

「今、持ってるのか?」

「ハリーに預けてるトランクの中にね。……人の手に触れさせたくない。あれは心を狂わせる」

衣服で何重にも巻いて奥へ押し込んだ。ハリーはもちろん、ロンやハーマイオニーにだって渡したくはない。アレを持っていて無事な人間なんて、アンブリッジのような性根から腐った人間くらいだ。

「……必要の部屋へしまう時には僕も呼べよ」

「DAがない日を狙うよ。僕には君渾身の封印は解けないもの。——頼りにしてるよ。相棒」

「調子のいい」

鼻で笑いながらも、やつぱりドラコは得意気だった。見慣れたその姿がうっかりかわいく見えて——ウウン、僕、疲れてるな。

「すべて、上手くいけばいいね」

「シビアな作戦だがな」

自然と会話はなくなる。けれど、不思議と心地はよいのだ。気まづさがまるで無い。彼がそこにいることが当然のような——やつぱり、変な気分。僕と君は——ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイなのよね。

「マリア」

ドラコの腕が伸びて、僕の頬と目元を撫でた。続く言葉はなかった。タタン、タタン、と進む車輪の音だけがあいだにあつた。

彼の手を払う気は——到底起きなかつた。

どうして。

開いたトランクを前に心身から凍りつく。どうして。どうして——ロケットが消えている。確かに、ここに、入れておいたはずなのに——！

「ハリー——」

男子寮へと駆け込む。ひやあ！ パンツをしまっていたネビルが女の子みみたいな声をあげた。

「マ、マリア、せめてノックを」

「ハリー。列車の中で、誰か僕たちのトランクに触った？」

あんぐりと口を開いていたハリーは、そのままゆっくりと首を左右に振った。

「いや……どうしたの?」

「……知らないなら、いいんだ」

どうにか心を落ち着けて声をしぼり出す。ブラック邸を出た頃は確かに有った。再三確認した。仮に思い違いをしてブラック邸へ忘れてきてしまったのだとしても、現物はシリウスからダンブルドアへと渡るはずだ。(ダンブルドアに渡すためと説得して持ち出しを可能にしたのだ。)

……いいや、最悪を想定しろ。希望的観測は結果的に最悪を生みかねない。もしもロケットをトランクから盗めるタイミングがあったとすれば、それは僕がドラコの元へ行っていたあいだだ。そしてハリーとジニーの目がそれた時――

ジニーは僕が戻った頃にはコンパートメントを移っていた。そしてハリーはトランクに近づく不審者は見なかったと言う。ならば、一体どこに空白の時間が――?

「……マリア?」

「……なんでもない。おやすみ、ハリー」

不安そうに眉をしょげさせるハリーの額へとキスを送って立ち上がる。もう一度トランクを調べよう。焦ってはいけない。『僕』が焦るとろくなことにならないのは長い人生で知ったことだろう。

「ああ、そうだ。ハリー」

振り返れば、ハリーは依然と呆け顔で僕を見上げていた。

「シリウスからなにか預かってない?」

「あ——うん。ホグワーツに着いてから開くようになって」

「それ、早く開けなよ。……おやすみを言うのが楽しくなるから」

ロンやネビル、ついでにシエーマスやディーンにもおやすみの挨拶をして男子寮を出る。談話室はすっかり無人になっていた。春学期早々からくたくただだ。

……さつそく、ドラゴにやつかない報告をしなくてはいけないようだ。

顔面蒼白で失敗作の鍋を落としてしまったハリーに、ああ、と天をあおぐ。前方には血色の悪いコウモリのような黒男がそれは意地悪な顔をして立っていた。ハリーの怯えるさまを心底楽しんでいた。

そうだった——クリスマス終わってから始まったんだ。スネイプ先生との地獄の閉心術レッスンは。

「ほ、補習？ 僕が？ 今日から？」

「さよう。ご自身の成績について、天才のポッター殿はご自覚がないのかね？ いい加減、貴殿のその 芸術に我輩の時間を無為に割かさせられるのは我慢ならなくてね」

クスクスと嫌な笑いがスリザリン席から挙がる。ドラコは微妙な顔をしながらもどうにか無関心をつらぬいていた。

「僕、でも——」

「これは決定事項だ」

ハリーの反論をはねつけ黒衣がひるがえる。そして壇上へと戻る途中に、スネイプ先生は一瞬の視線を僕へと投げた。そうだ、ドラコとちがってバレているのだ。——マリア・ポッターは閉心術を使えると。

彼としてははなはだ納得いかないところだろう。身内に使い手がいるのに、なんだってお鉢が自分に回ってくるのかと。つまりは——まだまだ僕はダンブルドアに警戒されているということだ。

「さいあくだ……」

廊下を歩きながら、すっかり意気消沈するハリーを肩を叩いてなく

さめる。

「ぜったいにいやがらせだ。だって、僕より成績が悪い人間なんてもつとあふれてるはずなんだ。つまりは——ネビルだとか。(ハーマイオニーが「そんなふうに言うもんじゃないわ」と非難した。)君にはわからないよ! 想像してもごらんよ。あいつとあの地下牢で二人つきり——二人つきりだって? ゾツとするよ……」

あんまりにも不憫な姿に、ロンまでもが終わったら僕の蛙チョコレートを分けてやるよ、なんて不器用に気遣っていた。今ばかりはハーマイオニーよりもロンの味方をしようと思った。ハリーがどれほどスネイプを苦手としているかは、それこそ我が身のように知っているのだから。

だがしかし、その真実は魔法薬学の補習などではない。もつと過酷な試練だ。はてさてこちらのハリーは堪えられるのか………荒れて帰ってくる予感しかないや。

——的中である。閉心術の個人授業初日を終えたハリーは大荒れだった。嵐だ。額の稲妻が目の中にまでとどろいているようだった。

「あいつ——あいつ! 僕は——努力——してるのに!」

眼鏡がずれる勢いで枕をベッドへと叩き付けている。ロンは手に負えないとばかりに両手をあげて部屋の隅っこへと避難していた。ここにロン以外の同室者がいなくてよかった。

「ハリー、ハリーイ、落ち着いて。ちゃんと話を聞くから」

体を張って、腕を閉じ込めるようにして抱きしめれば、ハリーの瘡

癪はようやく沈静した。目はギラギラと不穏に光ったままだが。視界の端にほっと胸を撫で下ろすロンとハーマイオニーの姿が見えた。猛獣の無力化に成功した、といった様子だ。

ハリーを抱いたままベッドへと落ち着かせて、二人に目配せを送る。うなずいたのはやはりハーマイオニーだった。

「ねえ、ハリー。落ち着いて聞いてね。あなたが『閉心術』を学ぶべきだというダンブルドアの判断は——はつきり言って道理だよ」

「君もスネイプの味方をするっていうのか？」

「敵だとか味方だとか、そんな話じゃないのよ。スネイプ先生がおっしゃったように、ヴォル——ヴォルデモートのほうが、ずっとずっとあなたより強力に記憶を覗けるに決まってるの。これはすべて、自分を守るための手段なのよ」

「だからって——あんなやつを頼らなくても」

ふてくされるハリーに苦笑する。ハリーだって頭ではわかっているのだ。……ほんとうは、ちゃんとわかっていたんだ。

「別の点に注目しましょう。あなた——いいえ、ヴォルデモートが化けた蛇はとある扉を執拗に狙っていた。それを、ウィーズリーさんが結果的に防いだ——ええ、ええ、そうだね。それで繋がる。やっぱりこの仮説は正しいんだわ」

「ハリー、僕らの頭脳。一人で解決しないで僕らにもその頭の中身を分けちゃくれないかい？」

「今言おうとしたのよ」

ロンの茶化しにハーマイオニーはムツとしながらも応えた。

「ロン、あなたのお父さまはお役所勤めでしょう？　そして蛇は建物の中をさま迷っていた……必然的にそこが何処かわかりそうなものじゃない」

「次に蛇の目的よ。蛇はヴォルデモートだった。そしてヴォルデモートの行く先を不死鳥の騎士団の人間が防いだ。つまりは、その先に彼に進ませるはならない何かがあった——これではつきりしたわ。ヴォルデモートが求める武器は『魔法省』にあるんだわ」

男子寮の寢室を、ほう、と感嘆の息が包んだ。さすがハーマイオニーだ。きつと彼女ならばたどり着くと思っていた。……もう少し、先延ばしできたならよかったのに。

「どうかしら、マリア」

「え？」

ハーマイオニーの茶色い瞳が理知的な輝きをもつて僕を見ていた。

「わたし、正しいかしら。——マリアは知ってる？」

ハーマイオニーだけじゃない。ロンも、ハリーも——見ていた。

「……さあ。わからないよ。知らないもの」

嘘をついた。空っぽの笑みで。嘘をついた。君たちを神秘部にいざなつてはいけない。——シリウスを、あのヴェールに近づけてはならない。

今度こそ、僕は間違えない。

翌日の日刊予言者新聞によって事態は急速に動いた。アズカバンから死喰い人たちが脱獄したのだ。それを夢で見ていたハリーは何度目かの情緒不安定に陥っていた。さらに——ああ、プロデリック・ボード！ 悪魔の罠によって口封じに殺されてしまった哀れな『無言者』——彼の死があることを完璧に忘れていた。クリスマスの日、ハリーたちと一緒に聖マンゴへ向かっていれば少しは手を尽くせたかもしれないのに。

「僕たち、この人を見たよ。ネビルとネビルのママに会ってから。どうして気付けなかったんだろう。これって——殺人だ」

唇を震わせるロンにハーマイオニーは新聞をたたんで立ち上がった。「やることがあるわ」

チラリと強い意志に開いた目で僕を見てから大広間を出ていく。置いていかれたハリーとロンは顔を見合わせて大きめに肩をすくめた。

「そーれ、いつものやつだ」「事後報告ってね」

彼女がなにをしようとしているのか。懸命に古びた記憶を引き出しながら僕も笑った。

不運は続く。手始めにハグリッドの停職だ。アンブリッジの姿を見かけるたびにハグリッドは元気をなくして縮こまっていた。ロケットはいまだに見付からないし、ハリーの閉心術訓練はまるで上達しない。延いては、ハリーの体調と精神状態も最悪だった。

学業だつて追い討ちをかけてくる。ハリーが荒れば荒れるだけ、四人の仲はグスグスした。当時の『僕』は自分を世界一不幸だと哀れんでいたけれど、いざロンとハーマイオニーの立場になってみれば扱いはぐらいことこの上ない。なんて面倒なんだ、ハリー・ポッター！自分自身の欠点を見せつけられるようでいたたまれない。もしも今ここで『僕』のロンとハーマイオニーに会えたなら、心底から謝りたい気分だ。

そして、最悪の調子でホグワーツは二月を迎えた。世間はバレンタイン一色に染まっていたが、こたびのハリーとチョウの間に特別な関係はない。つまりは——

「返事が来たわ。ハリー、マリア——とある人に会ってほしいの」

心置きなく反撃の手が打てるのだ。

「それで、あたくしを呼んでミス優等生はどんな記事を書かせたいのかしら」

ハーマイオニーと、僕と、ハリーと、ルーナと、そしてリータ・スキーター。異色の面々が三本の箒にて神妙に顔を合わせていた。

「今、ここで、世間が知りたがっているあの夜の真実を明かすわ。——ハリーと、マリアがね」

僕もハリーもそっくり同じ顔でハーマイオニーへと振り返っていた。ハーマイオニーはすまし顔でバタービールをあおっていた。

ハリーはともかく——僕もだって？

「ハリーだけではダンブルドアの洗脳がどうのこうのと逃げられるでしょ。今まで通り。でも、マリア、あなたの証言もあれば少しくらいは信憑性も増すと思うの。そのために、取材は時間をずらして順におこなっていたできます。ごらんの通り二人はこのときまで取材をされるなんて知らなかったし、口裏を合わせる暇はなかった。別々の視点から例の事件を見つめられるわ。あなたにとっても悪い条件ではないと思うけど？」

スキーターは、ふうん？　といやらしく目を細めると宝石の取れかけたペンをなめた。

「で、どこがそんな記事を取ってくれるって？　魔法省が黙っちゃいないよ」

「うちで取るよ。パパが『ザ・クイブラー』の編集長なの」

ふわふわ浮くようなルーナの声に、スキーターはプーツとバター

ビールを吹き出した。ゲラゲラ笑ってザ・クイブラーのクズっぷりをこき下ろしている。ルーナの飛び出た目が冷たくなるのに見かねて、机の下で思いつきりスキーターの足を踏んづけておいた。

「静粛に。各々、言いたいことがあるのはわかります。わたしだってこれは賭けよ。けれど——試す価値は大いにある」

ハーマイオニーの有無を言わせぬ迫力に、四人の目が少女の決意を確かめる。いつのまにか、本来ならば縁もゆかりもない面々に奇妙な連帯感が生まれていた。（スキーターはハーマイオニーに脅されたからだが。）

数日後、無事に発行されたポッター兄弟による告発記事は飛ぶように売れた。元々、ハリーに対して同情的だったのだ。その同情はダンブルドアへも簡単に移行した。そもそもが、ダンブルドアの人望は求められる校長の席がはつきりさせているのだから。

表向きの事態は好転したが、しかしハリーの心を閉じる訓練は悪化の一方をたどっていた。眠るのをおそれて、不眠症に片足を入れかけていた。顔色は悪く、常に頭痛を訴えていた。そして——疑り深くなった。夢による情報を僕には話してくれないのだ。四年前、賢者の石を三人だけで追っていた頃のように。それもこれも——

「マリア、ほんとうによかったの？　確かに、わたしは真実を話すように言ったわ。けれど」

「友人だからとか言えば、それは真実じゃなくなるだろう。そして君の重視した『信憑性』は完全に潰える」

ポッター兄弟の実体験による告発記事には、その夜ヴォルデモートの元へ馳せ参じた死喰い人の名も載せられていた。エイブリー、クラップ、ゴイル、ノット、そして——マルフォイ。ドラコ・マルフォイの父、ルシウス・マルフォイの名が、息子が懇意にするポッター兄弟から挙げられたのだ。否、驚くことにハリーはルシウスの存在を秘

した。ルシウスを告発したのは——僕だ。マリア・ポッターがルシウス・マルフォイを敵であるとはつきり認めたのだ。

効果は絶大であった。ドラコはどっちつかず者としてますますスリザリン生から遠巻きに見られていた。親に死喰い人を持ちながら、因縁のポッター家の少女に告白した少年。沈黙を続ける渦中の人。ドラコはいまやホグワーツいち掴めない人間となっていた。——ゆえに。

ハリーは僕へと情報を共有してくれないのだ。僕には、ドラコ・マルフォイとの繋がりがあるから。

「たとえば父親が罪人だとしても、子まで罪を犯すとはかぎらない。わたしたち、マルフォイが——つまりはドラコのことだけど——彼が闇の陣営側だなんて思っていないの。ハリーもそうだったはずなのよ。でも、最近のハリーは……」

「……うん」

はつきりとドラコに対して敵対心を見せたわけじゃない。けれど、よそよそしくなった。彼の話題を口にしなくなった。そして、僕のこととは家族としてならば今まで通りの愛情を返してくれるが、夢の件には関わらせなくなった。——まさかここまでこじれてしまうだなんて。

ハリーはどこかがおかしかった。

誤算だ。ドラコの件は互いに了承している。いわゆる作戦のひとつである。だがしかし、ハリーとすれ違うことは計算になかった。三人がどこまで真相へたどりついているか——確認することができないのだ。ハーマイオニーがリークしてくれないかと期待したこともあったが、彼女はハリーが黙れといえは黙る人だ。(その上でハリーに苦言するだろう。)だからこそ『僕』だって信用してきたわけで——頭のいたい事態だった。

『僕』は、どこまで攻撃的だっただろうか——？

整理する間もなく次々と問題はなだれ込む。ひとつにアンブリッ

ジの解雇辞令権限だ。『前回』同様にトレローニーが被害を受けた。古い学の教師はインチキのトレローニーからアンブリッジが嫌悪する半人——ケンタウロスのファイレンツエへと替わった。これにアンブリッジは我慢ならないようだった。

ファイレンツエの授業は実に開放的で、そして独特だ。教室を森のようにしてしまうのだから。星を眺め、セージを焼き、未来を示唆するしるし徴を探すのだ。

初授業の終わり、ハリーとロンを残したファイレンツエは、僕にも観察するような目を向けてほう……とうなつた。そういえば四年前のあの日、彼は僕を『呪われている』とひょう表した。そして、今。再び。

「星と星は近くあればあるほど互いの熱によって身を滅ぼす。溶け合うことはありません。あなたのそれは——手遅れでしょう。どちらがより相手を焼くか——あなたが見るべき未来は滅びかもしれない」

「……………」

ケンタウロスの警告はいかにも不吉で、不親切だった。手遅れだとか——今、一番聞きたくない言葉なのに。

四月に入れば、とうとうDAの存在がアンブリッジへと密告された。つまり、ダンブルドアがホグワーツから逃亡する日がやって来たのだ。ホグワーツにとっても、そして魔法省の善良なる人々にとっても悪夢の始まりだった。

僕としても再びこの日を迎えてひどく憂鬱な気分だ。唯一救いを挙げるとすれば、この事態の前にドラコ希望の忠誠の術の『術者』の件を済ませられたことくらいだろう。——それは先月のことだった。ニワトコの杖を振ってダンブルドアがほがらかに笑う。

「これで、マルフォイ氏の秘された別荘はそれを知る者にしか明かされん。公にできるのはミスポッターのみじゃ」

ハリーへは決して合わせない目が僕を見てキラキラと輝く。

「ありがとうございます、ダンブルドア先生」

「ありがとうございます」

ドラコと声を揃えれば、よい、よい、と好々爺の顔でダンブルドアはうなずいた。

「君たちはずいぶん大きな敵と戦っているようじゃのう。——孤独でないことこそが、君たちの力となるじゃろう」

「先生……」

優しい目だ。そして——探る目だ。

「ダンブルドア先生。私は、どのように お礼をすればよいのでしよう」

踏み込んだのはドラコだった。ダンブルドアはおや、と眉を跳ね上げると、なんだか悪戯っぽい様子で続けた。夕食に好物が出てきた時の顔だ。と、いつても、ダンブルドアは百味ビーンズ以外は大抵が好物らしいが。

「君の勇気に見合う対価ならすでもらっておる」

思わぬ言葉だった。きよとりとドラコと顔を見合わせる。明らかに理解していない僕たちに、ダンブルドアは満足げに髭を撫でていた。

——それが、先月だ。たった一ヶ月前のことなのに。急速に変わっていく現状にクラクラする。追いつかない。振り回される。僕だけはそうあつてはならないのに。視界ごと暗くなりそうな目を閉じて——目の前のガマガエルのニツタリ笑いを振り払うように唇を噛ん

だ。

「さあ、ミスポッター。どうぞお飲みになって。お砂糖は必要かしら？」

「……いいえ」

嗜虐の色に瞳をギラつかせたアンブリッジの後ろには、大袈裟な額縁と金文字で『校長』と飾られていた。

ここは闇の魔術に対する防衛術教室の準備室だ。案の定、本来の校長室からは締め出されたようだ。いい気味だ——と、思う余裕もなく、ティーカップの中の紅茶を見つめた。水面のマリアは緊張におそろしく無表情だった。

アンブリッジはここに真実薬を入れている——本人はそのつもりのはずだ。けれども、実際はスネイプ先生がただの無害な薬液へとすり替えて——その、はずだ。

……ほんとうだろうか。ほんとうに——
緊張に唾を飲んだ。——僕はあまりに情報を抱えすぎている。

「さあ——どうぞ?」

意を決して飲む——フリをした。心臓の音がうるさすぎて自分の声すら聞こえない気がした。

「さきほどね、あなたの弟ともお話をしたの。彼は知らないと突っぱねたけど——さあ、マリア。教えてちょうだい? ダンブルドアはどこ?」

「知りません」

落ち着いて答えた。真実だ。僕は、今、あの人はどこにいるのかわからない。

「そう……いいわ。さあもつと飲んで。——あら！ 減ってないじゃないの！ ちゃんと飲むのよ。……ええ、そうよ、いいこね。それじゃあ、次の質問に入りましょう。ダンブルドア軍団はほんとうに、これまでも反抗的な集会をおこなったことはないの？ あるわよね？ そうでしょう？」

「——いいえ」

嘘をついた。——嘘を、ついた。やむなく口にした紅茶なんて一瞬で胃の中へと消えて、喉はカラカラだった。それでも——嘘がつけた。ああ、感謝します、スネイプ先生……！

「……いいわ。そちらは本題ではなかったの。わたくしはね、マリア——あなたを救いたくてここへ呼んだのよ」
「は、」

思わず無防備に呆けてしまった。アンブリッジはカエルそっくりの口をニーツと横に広げて笑んだ。寒気のするような笑顔だった。

「あなたが——つらい思いをしているんじゃないかって」

「——ハア？」

ますます意図が読めなくて、まぬけにアンブリッジをにらみ返していた。つらいかだつて？ ああ、もちろん。お前の前に座るこの時間がなにより苦痛だ！

「以前に話したでしょう？ わたくしにも不出来な弟がいたと——ハリーと一緒にいて、つらくはないかしら」

「——」

ゾクリと。

「兄弟のせいであなとはとぼちりばかり。それなのに、当の本人は目立ちたがりやで自己満足的な大嘘つきとききた！ あなたのこともかえりみてないじゃないの？ あなたのことをほんとうに愛しているなら、もっとあなたに不利益がいかないよう動くものだよ。だというのに、現状はどうかしら。あなた、今までに何度、彼の身代わりになってきたの？」

「……………」

「かわいそうだよ。ハリーと兄弟だったばかりに。なんてかわいそうなマリア。——憎くはないかしら？ あなたの、弟が？」

グラグラと頭が揺れた。心がざわついた。僕は——ぼくは——

「——憎くなんてない」

答えはとつくにこぼれ落ちていた。

「ハリーが憎いわけじゃない。ずっとほしかった兄弟なんだ。誰よりも愛してる。僕はハリーを愛している」

だって僕はマリアだから。マリアはぜつたいにハリーの味方なんだ。——そう、あるべきなんだ。マリアである限り。

「その手には乗らないぞ。僕はハリーを裏切らない。——ぜつたいに」

先ほどよりもはつきりと嫌な目付きの女をにらみ上げた。お前なんか、僕たちの絆を壊させるもんか——！

「…………マリア、あなたはもつとかしこいと思ったのに」

冷たい声で吐き捨てたアンブリッジは、杖を持って立ち上がり――
――バァン！

信じられない爆音が外で響いた。僕もアンブリッジも咄嗟に窓を見た。

「何事なの!?! あれは――なに――?！」

窓の向こうを色とりどりの火花が踊っていた。――花火だ。
ウィーズリーたちの自慢の花火だ！

「なに――なにが――あ、あなたは昼食へ行きなさい！ ああ、なんてこと――!」

ドテドテと丸っこい体を揺らして、アンブリッジが駆けていく。僕は笑った。大声で笑った。窓の向こうでは花火が空を明かしていた。曇天を照らしていた。

僕は――――まだ、大丈夫なんだ。

バリン——割れる音だ。談話室は動揺する男子寮生のたまり場となっていた。

「みんな、どうしたんだい？ 中でなにが——」

「ああ、僕らのマリア様！ もう君しかいないよ！」

人のかたまりをかき分け飛び出したシェーマスが僕の腕をひっ掴む。そのまま、周囲からも押されるようにして五年生の寝室の前へと誘導された。

「なんとか今はロンがおさえてるみたいなんだけど——ハリーが」
「……なるほどね」

怯えきった顔のシェーマ스에苦笑した。中で困った弟の痲癩玉がまた爆発しているらしい。それも、今回は今までに見ない激しさだ。かすかに聞こえる聞きなれた声たちの争う様子を確かめながら、そつと扉を開く。

「ハリー？ ロン？」

「幻滅だ。クズだったんだ——父さんも、シリウスも！」

絶望に震える声。失望と、父の裏切りヒーローに混乱する少年。嗚呼、そうか——今日は『あの日』なのか。

「落ちつけよ。誰だって間違いは犯すものさ。それに、ほら——君のパパは十五歳だったんだらう？」

「僕だって十五歳だ！」

悲痛にわめくハリーの背後へ忍び寄って、静かに抱きしめた。正面のロンの肩から力が抜けたのが見えた。

「ロン、ここは僕に任せて」

「よろこんで」

疲れきった様子のロンがバトンタッチだとばかりに僕の肩を叩いて退室する。寝室は僕とハリーの二人だけになった。

「スネイプの記憶を見た。父さんが——父さんとシリウスがスネイプをいじめてたんだ。ひどいことをしてた。母さんは父さんが大嫌い——ルーピンは止めもしなかった」

「うん」

「最低だ。スネイプをかわいそうだと思う日がくるなんて。それが、父さんのせいだなんて。父さんたちのせいで僕は今こんな目に遭ってるんだ！」

突然、突きつけられた現実にしむかつての『僕』に寄り添う。ハリーの中の理想の両親像は完璧に死んでしまった。少しずつだって、父さんと母さんも『人間』なのだと教えてやればよかった。マリアに両親の記憶はないのだから、叶うはずもない後悔だ。

「君の気持ちは——ハリー、それは？」

床の一部がキラリと光ったように見えて、目を留めた。——破片？

「ハリー、君、なにを持って——ハリー!？」

ハリーの手に固く握られていたもの——それは両面鏡だった。無惨にも鏡面が割られていた。

「なんてことをしたんだ!!」

鏡だったものを取り上げる。勢い余って、残った破片で手のひらを一直線に切ってしまった。痛みは感じなかった。それどころでなかったのだ。

なんてことだ——これでは、いざという時にシリウスと連絡を取れるかわからない。そうだったら——『僕』は騙される。

「シリウスに伝えないと……ハリー、便箋とペンを、」

うつむくハリーに手首を取られた。——痛い。切った手のひらよりもずっと痛い。

「ハリー……?」

「そんなにシリウスが大切? あんなにひどいことをしてたのに? そんな男だったのに?」

「ハリー、シリウスは確かに、昔は悪戯が過ぎたかもしれないけど——」

「——つなんでマリアがそんなにもシリウスを好きなのかわからないよ! 墓参りでもずっとシリウスに寄り添ってた。僕、透明マントに隠れて見てたんだ。側で見た。マリアは——マリアがシリウスを見る目はおかしい! 僕よりもシリウスが好きだっていうのか!? それなら、さつさとシリウスと家族になればいい——マリア・ブラツクになってしまえばいい!」

「ハリー!」

激昂するハリーを抑えれば、カツン、となにかが足に当たった。ハリーのポケットの中から。頭のどこで判断したのか——僕は無我夢中でそれを取り出していた。

「……どうして、これを、君が」

黄金と緑にまがまがしく輝くロケット——
スリザリンのロケット^箱だった。

「どうしてだまっていたんだ！ ずっと持ち歩いてたのか!？」

怒りが爆発する。だから、ハリーの様子はおかしかったのか。こんなにも攻撃的になっていたのか。

ハリーは闇の魔術に狂わされていたのだ。

「返せ！」

飛びかかったハリーによつてロケットを奪い取られた。だめだ。あれを持つかぎり、ハリーの心に平穩はない。

「ハリー、それを渡すんだ。それは——よくないものだ。君にもつともよくない」

「へえ？ なんだっていうの。ちゃんと説明してよ。——できないでしょう？ 君っていつもそうだ」

ロケットの中心に刻まれたSの字と同じように、ハリーの目は爛々としていた。危険な輝きだった。

「全部わかってるって顔をして、そのくせだんまり。誰となにをたくらんでるんだかわからない。僕のことはずうっと子供扱いで、偉そうに後ろから見るだけで、そのくせ、勝手に知らないところで傷ついて——僕がどんな気持ちで君を迎えてると思う?」

「君って、ダンブルドアと一緒になんだ。なんにも話してくれないくせに、僕にはあれをしろこれをしろと当然の顔で要求してくる。僕に言い聞かせる権利があると思ってる。少しは僕の身にもなれってんだ！」

「なにが閉心術だ。あいつと訓練をすればするだけ嫌な夢を見るんだ！ 悪化してるんだ！ それなのに、どいつもこいつも早く習得しろ、努力しろって——あんなものを味わってないから言えるんだ！ 僕は努力してる！ これ以上どうしろってのさ！」

「……っハリー。ハリー、僕が悪かった。君がづらいのはわかったから。わかってるから」

「わかるもんか！」

「わかるさ。……『僕』は君だもの。だから、どうか閉心術の訓練だけは投げ出さないで。お願いだ。今に後悔する。このままでは取り返しつかないことになってしまう」

「それは興味深いね。で、どうなるんだい？ 言えないんだろう？ 言えないのならもう二度とするもんか」

「ハリー——」

ロケットを握るハリーの手を両手で掴む。カランと両面鏡だったものが床で軽い音を立てた。

「ハリー、頼むよ。君でなくちや駄目なんだ。どうか考え直して」

「マリアが秘密主義を改めるなら考えるさ」

「わがママを言うな」

「わがママ？ これはわがママなの？ 僕に隠し事ばかりの君たちが悪いんだろ！？」

「好きで隠してるんじゃない！ そんなだから——君がそうだからツ——シリウスが犠牲になるんだ！」

ハツ——と。空気が張りつめた。ハリーは丸い目を極限まで開いていた。僕の頭の中には本能的な警鐘と、ヴェールへ沈む『僕』のシリウス、そして嘆いてはいけないと突き放したシリウスがいた。

「……シリウス、シリウス、シリウス——愛しのシリウス！ ああ、そ

う。全部シリウスのためなの。これではつきりしたよ。僕はシリウス
のせいでこんなにもぐちやぐちやにされてるんだ」

「ちがう！ どうしてわからないんだ——僕は、」

「わからないのはそっちだ！ 知らないくせに——僕がどんな思いで
いるか知らないくせに。どんなに恐ろしいか知らないくせに。どん
なに痛いかわからないくせに。どんなに——僕が独りぼっちで堪えて
いるか——」

——『ひとりぼっち』

ふつりと。

精神を繋いでいた最後の一本が、切れた。

「——ッ不幸ぶるな!!」

喘ぐ。いたい。苦しい。そんな残酷なことがあるものか。

「君にはマリアがいるだろう！ ——『僕』にはいなかった！」

叩き付けるように。叫ぶ。あふれる。あぶれる。煮えつく。

「シリウスは君を見てくれる！『僕』のことは見てくれなかったのに！

絶対の味方のマリアがいて、虐待のつらさも使命の重さも分け合え
て、弱音を吐き出せて、君に友好的な人間ばかりで」

「邪魔者のマルフォイすら味方で、ヴォルデモートに一人で対峙する
ことも、これから死にゆく命をただ一人だけで背負うこともない。針
のむしろみたいな裁判を受けて退学の危機もない！」

「こんなに愛されてるのに——『僕』よりずっとずっと生きやすいのに
——だって『マリア』がいるから！」

マリアがどれだけ君をかばってきたか。ハリー・ポッターの肩代わ

りをしたか。ハリー・ポッターの生きやすい世界のために心を砕いたか。

『なんてかわいそうなマリア』——憎らしい女のささやき声が脳を犯す。

「君はもつと感謝すべきだ！『マリア』に感謝すべきだ！『マリア』がないハリー・ポッターがどれほどのものを喪うか——」

頭がぐちゃぐちゃに掻き回される。

なにもわからずに死んだセドリック。撃ち落とされたヘドウィグ。フレッドに泣きすぎるジョージ。たった一度だけ泣いたスネイプ。ヴェールに消えたシリウス。——笑顔で死んだセドリック。

「僕には、マリアはいなかったのに」

ひとりぼつちは——『僕』だ。

「……なに、いつてるのか、わからないよ」

ハリーの瞳はおびえていた。マリアを見て——ハリーがおびえていた。

「そうだろう。そうに決まってる。わかるもんか。君に——『僕』がわかるもんか」

髪をかきむしる。赤毛だ。（僕がほんとうは黒髪だったなんて。）ゆるやかにくせ毛だ。（くしゃくしゃの髪だったなんて。）少女の声だ。（男だったなんて。）きれいな額だ。（稲妻の傷があっただなんて——）君にだけは、理解できるもんか。

マリアのいないハリー・ポッターを、マリアを得たお前が知れるもんか——！

「わからない——いやだ——知らない——こんなの知らない——
マリアなんて知らない！」

それは、すべてがおわる言葉だった。

「そう」

ハリーからロケットをもぎ取る。心は奇妙なくらい凧いでいた。
感情は死んでしまった。マリアは死んでしまった。

「それなら——お前もひとりぼっちで、『英雄』になればいい」

僕は ^{マリア}僕を、放棄した。

ハリーを置いて部屋を出る。談話室にはロンとハーマイオニーの
二人だけだった。親友たちの姿を見て、ようやく呼吸の仕方を思い出
した。

「ずいぶん長引いたわね。大丈夫なの？ マリア。ハリーの様子は
？」

「他のみんなは夕食に行ったんだ。そうしたらほら、けっこうな怒鳴
り声だろ？ ひやひやしたよ。いったいなにを話してたんだ？」

心配そうに駆け寄る二人を避けて出口へと向かう。

「マリア？」

「マリア？」

今ばかりは『マリア』と呼ばれたくなかった。——マリアは、もう
いないんだ。

「——マリア！」

肩を掴まれた。どこを歩いているのかわかっていなかった。目の前には扉があった。——必要の部屋だ。

「グレンジャーがスリザリン寮まで飛んできたんだ。あのグレンジャーがだぞ。それで、君たちが——なんだその手は！」

振り返った廊下には点々と赤が残っていた。血だ。鏡の破片で切り、握り拳から爪が深々と食い込んで傷口をえぐっていた。

いたい。

「はやくマダム・ポンフリーのところへ——マリア？」

ローブに触れる。緑色のローブだ。大嫌いだっただローブだ。いたい。

淡い金色の髪に額を預ける。やわらかく頬をくすぐって気持ちいい。大嫌いだっただ色だ。いたい。

ためらうように宙を泳いだ腕を掴む。手は背中を撫でている。大嫌いだっただ温度だ。いたい。

いたい。

いたい。

いたい。

ほんとうは、とっくに。

「たすけて、ドラコ」

限界だ。

「ハリーを妬んでいた」

箱の中のロケットを見つめる。ティアラの側にコロリと並んだロケットは、こんなにも華奢なのに。美しいのに。僕の周りにあるものすべてを狂わせていく。

「羨ましかったんだ。あの子が。僕は、ずっと——ずっとずっと、『僕』と比較して、妬んでいた」

僕よりも優しい子だ。僕よりも愛しい子だ。僕よりもかっこいい子だ。僕よりも——愛される子だ。

「騙しきれぬつもりだった——永久に。でも、軋んだ。あつげなかった。……シリウスが、あんな風になるなんて」

僕の知らない目で、ハリーを見る。（その目が僕は欲しかったのに。）

僕の知らない声で、ハリーと呼ぶ。（そう呼んで欲しかったのは僕なのに。）

僕に得られなかった愛情を与えてくれる。（それはマリアだ。）
深く深く愛してくれる。（それはマリアだ。）

「どこかで後悔しそうになっていた。自分の選択を。成功が憎かった。どうして——僕の時はこうならなかったんだろう、て」

蓋を閉じた。見つめていれば——また、緑に狂わされる。

「あの女のせいだ」

いやらしい微笑みが脳裏に貼り付いている。かつてロケットを手にした女——どこまでも立ちふさがった権力の敵。彼女の声は——
——猛毒だ。

「あいつが言うんだ。『かわいいそう』——『マリアはかわいいそう』——
て」

甘い声で、獲物を知らぬうちに麻痺させてしまう蜘蛛のように。隠しもしない針でやわらかく刺す。——僕はまんまと絡め取られた。

「あいつは毒だ。存在そのものが毒なんだ。いつそあいつ自身が分霊箱みたいだ。——引き出すんだ。みにくいものを。言葉で掻き回して、ぐちゃぐちゃにして、表までひっぱり出してしまおう。……おぞましいよ」

箱から離れて、ソファに手をついた。名残惜しむように見つめていた。——あんなにも、うつくしいのに。

「そうになると、もう、止まらない。追い付かない。わかってるのに——
どうして失敗する——?」

目を閉じた。忘れられるわけがなかった。

「僕は——何度、くり返せば——ッ」

かつてアルバスに言った言葉がある。我が子に——愛しい僕の子に、父親である僕はこう言ったのだ。

『お前が息子じゃなかったらいいのに』

ひどい言葉だ。あまりに残酷だ。売り言葉に買い言葉だなんて、本心ではなかっただなんて、そんな言いわけは通じない。永遠に恨まれ

るべき攻撃だ。

僕は、今、再び——『家族』にくり返したのだ。

「このままじゃシリウスが死んでしまう。だって、シリウスは——
—シリウスは、生きる気がないんだ。言ったんだ。僕を見て、彼は
言った。僕をジェームズと呼んだ。そして——『殺してくれ』」

彼はうかさされていた。湖の悪意に。毒の殺意に。自身の罪過に。
——これこそが、彼のさらけ出された願いだった。

「生きる気がないんだ。ヒーローぶって、守りたいものを守れたらそれで満足。きれいに散られたらそれでいい。後のことなんかどうでもいい。後のことは後の人間の問題。——そんなやつらばかりだ!!」

叫ぶ。頭の中でタイムターナーを回したみたいに、廻る——廻る——
—愛する人たちの顔が浮かんでは消えていく。

「僕は——『僕』のために死んでくれなんて——一言も言ってない！」
マリアの皮を破ってハリーが叫ぶ。マリアこそが、心の盾の最後の一枚だったのに。

「生きてほしい、だけなのに。一緒にいてほしいだけなのに。それって——なあ、生きるって——そんなに難しいことかい——？ 僕の願いは——そんなにも無謀か——？ それって——『僕』が生きるよりも——？」

生きろと望まれた。なにがあっても、誰を置き去りにしても、誰の屍を踏み越えてでも——生きろ——生きろ——お前だけは死ぬことは許されない——

そして、しかるべき時に死ぬ。

「生きる気がない人間を、どうやって引き留めろって——？ 無我夢中になるしかないじゃないか。ぜったいに駄目だって——手を掴み続けるしかないじゃないか。それなのに——『ハリー』は手放すんだ」

僕が欲しくて欲しくてたまらないものを手に入れて、僕にはない人生そのものを手にして——傲慢にも足りないといわめく子供。

「癩癩を起こして、また、失敗する！ また、後悔する！ また、犠牲を出す！ また——『僕』が殺すんだ」

目を開いた。揺らめく視界に手が映った。

「僕は」

少女の手だ。少女の声だ。少女の景色だ。

「こんな手で——こんな身体で——」

僕の手は大人の手を引き留めるには小さい。僕の背は友をかばうには足りない。僕の腕は立ち止まる人を引くには弱い。——マリアは、英雄じゃない。

「なにができるっていうの。マリアに、これ以上なにができるの。置いていくのは君たちだ。これから先をいくのは君たちで——いつだっておいてけぼりはマリアだ」

これ以上この背は伸びないだろう。——ほんとうはこんな景色じゃなかった。

この声は愛らしいままだろう。——ほんとうはこんな声じゃなかった。

君に繋がれるような手じゃなかった。誰かを繋ぐための手だった。

「うらやましい。にくたらしい。僕は——『僕』が、憎い」

それこそが——真実だった。

「そうだ。君はずつと——^{ハリー}君を憎んでいた」

声ははじめて僕に意志を返した。

「そしてハリーを愛していた」

「——」

見上げる。立っているだけで儂く見えるその人は、美しく笑っていた。

「だからこんなにも苦しむんだ。自分が嫌いなくせにハリーを愛していることに罪悪感を覚えてる。——ほんとうに、心底からの愚か者だ」

手が伸びて、僕に影を作る。見下ろす。冷たい瞳なのに——熱っぽい。氷みたいだ。……炎みたいだ。

「ハリーを愛せば愛すだけ、自分を許したような気になるんだろう。自己愛をおどましく感じたんだろう。だから、ハリーを許してやれない。ハリーの間違いを見守ってやれない。なぜならそれは、自分自身の過ちを映した鏡だから——ハッ。ざまあないな? 『英雄』」

ドラコは僕をソファに押し付けながらうつそりと笑った。視界が

反転して天井を映した。僕よりも長く垂らされた髪が頬をくすぐった。

「この機会だ。教えてやろう。ほんとうは君が自分自身で気付くことを待っていたんだがな。……お前はほんとうにどうしようもない。ウィーズリーとグレンジャーに同情すらするよ。さあ、よく聞け、ハリー・ポッター」

薄い唇で呼ぶ。——ハリー・ポッター。

瞳の中にマリアを捉えて、ドラコ・マルフォイがハリー・ポッターを乞う。

「僕のハリーと君のハリーは——ちがう」

ゾクリと、心が震えた。

「僕が執着し、嫌悪し、憎悪し、敵対し、そして愛したハリー・ポッターは——『君』だ」

「あ……」

指が目尻を撫でた。——ハシバミ色の瞳なのに。

唇が額に触れた。——傷のない額なのに。

髪をすくってキスをした。——赤い髪なのに。

ドラコ・マルフォイの瞳にはマリアがいるのに、彼はハリーと呼ぶ。ハリー・ポッターではないと否定しながら。

「君の理屈では、同じ感情をこちらのハリーにも向けていなければおかしいだろう。——想像するだけで吐き気がするね」

愛でもささやくみたいに微笑んで、瞳は軽蔑に嗤っていた。ドラコ・マルフォイは怒っていた。

「マリアがいないハリーとマリアのいるハリーが同じなわけないだろう。僕が見てきたのは『君』だ。僕が告白した相手も『君』だ。口では言えるくせに、まるで頭が理解していない。この頭でつかちめ。自分の言葉すらまともにもきけないのか。頑固もここまでくれば病気だな。魂に刻み込まれでもしてるのか？」

口汚い言葉だ。それなのに、頬に触れる手はこんなにもやさしい。

「君はハリー・ポッターだ。マリアの名を得たハリー・ポッターだ。間違はなく僕のハリーだとも。だが——この世界のハリー・ポッターではない。ここに存在するハリー・ポッターは君の兄弟ただ一人だ。君はマリアでしかないんだ。僕の前でしか——君がハリーであることは許されない」

「ハリー・ポッターである君は、僕だけのものだ」

身体の芯からしびれるような感覚だった。血が沸き上がって、ゾクゾクと肌を立たせた。目の前の男に完璧に捕らえられたことを理解した。

そして、ドラコはささやいた。

「だから、安心して——ハリーを愛してやれ」

「ハリーに求められるマリアじゃない。君自身が彼を愛してやれ。……それをマリアに許してやるんだ」

腕を取られる。倒れていたソファから起き上がって、彼に正面から包まれた。あたたかい。ハリーともシリウスともちがう男の胸だ。

——こんなにも、安心できる。

悪夢の後のまどろみから引き上げられた心地だった。

「——ああ、うん。目が、覚めた」

「お目覚めの気分はいかがで？ 眠り姫」

「……最悪だ」

抱き返して、それが正しい形のような気がして、脱力感のまま力なく笑った。ドラコの手は背に置かれていた。

……なんだ。僕たち——二人して『ハリー・ポッター』に振り回されていたのか。

「ハリー・ポッターってずるいね。……ずっと、こんな気持ちだったわけだ？ 噛ませ犬のマルフォイ？」

「うるさいぞ、英雄気取りのポッターめ」

クツクツ笑い合う。ようやくくすぶっていた淀みが溶けた。

ドラコはたぶん、優しくなんてない。けれど——『僕』にはこれくらいがちょうどいいのだろう。

さんざん体温を分け合ったドラコは、それからふと意味深に笑うと杖を取り出した。見慣れたサンザシの杖だ。

「寝起きの君にいい眠気覚ましがある」

改めて隣に座ったドラコが杖を振った。彼の口が唱えた。

——エクスペクト・パトローナム。

「え——」

銀の光がほんのりと杖先に灯った。あの光だ。絶望を遠ざけてくれる幸福の記憶。DAでさんざん見守ってきた明かりが、今は信じられないほど幻想的に見えた。

光はやがて形にならず拡散したが、ドクドクと心臓が騒いでいた。

「君——だって——死喰い人は——」

「この世界のドラコ・マルフォイは死喰い人じゃない。なにより——」

目が。

きれいな目だ。僕を——好きだと告げる目だ。

「守護霊を作るのは幸福の記憶。……僕はまだ、なにもうしなつてはいない。守護霊を作るだけの幸福が僕にはある。アステリアは生きている——君が、僕を見ている」

それこそが、僕にとつての幸福だ。

胸をかきむしつて、叫びだしたくなるくらい愛しいと伝えてくる眼差しなのだ。いっそ——残酷なくらいに。

「僕は死喰い人であつたことを後悔していない。あの時に取れる最善がそれだけだつた。だからこそ守れたものがある。……それはもう、おそろしい目に遭つたがな」

もう一度杖を振つて。

「けれど——まあ、これも悪くはない」

色白で綺麗な腕のまま、かつての悪役は微笑んだ。ドラコ・マルフォイもまた——新しい人生を生きているのだ。

「……まだ、形にはならないんだね。こつそり特訓してたわけだ？」

からかってみる。どんな形になるのだろう。ドラコの守護霊は、どれほど美しいだろう。

「ちゃんとモノにしてから君に見せるはずだったんだ。予定が狂ったよ」

「……どうして？」

どうして、今、これを——？

「君の守護霊は牡鹿だな」

「……うん。その通りだ」

「——ハリーは？」

「え……」

「ハリーの守護霊は？」

二年前の夜、吸魂鬼によって凍える空を駆け抜けたのは。

「——雌鹿」

ドラコが瞳を細める。悩んだ末の正解を見つけ出した子供を見るように。ほうら、たどり着いたと——瞳の氷を溶かす。

「守護霊は術者の心のあり方。想いの形だ。——同じ牡鹿でない時点で、君たちはとっくに別々なんだ」

ああ——ああ、なんだ。答えは何年も前にとっくに示されていたのに。

「……ほんとうに、バカだね。『僕』」

「『どっち』だ？」

「もちろん——^{マリア}僕さ」

目の前の肩に額を押し当てて笑った。間抜けだ。やっぱり僕は

『僕』だ。こんなにも簡単なことで——ヒントどころか答えが目の前にある状態で、いつまでも同じところを走っていた。盲目のまま、耳をふさいでうずくまっていた。

差し出された幾多もの手なんて——気付かないまま。

「ハリーに謝らなくちゃ」

立ち上がる。生まれ直した気分だ。手のひらの痛みすら愛おしい。

「しっかりと喧嘩してこい」

いつも通りの、人の神経を逆撫でする嫌味な笑い方。慣れてしまえば——なんだか癖になっちゃいそうな顔だ。……たぶん、手遅れだ。作業のようにサンザシの杖が振るわれて、秘密箱がキャビネットの中へと吸い込まれていく。当分、この部屋は必要ない。

「ただ——」

「うん？」

ひとつ、気になることがある——取っ手に手をかけた状態でドラコが切り出した。薄い眉を怪訝にひそめていた。

「いくらなんでも、『君』……不安定になりすぎやしないか？ ハリーにつられて——いいや、ちがうな」

「……………」

「君は、いったい誰の感情に引きずられているんだ？」

——やはり、ハリー・ポッターの人生は一筋縄ではいかないようだ。

「——マリア！」

出会えた黒髪のくしゃくしゃ頭に、ぐつと想いが込み上げてきた。これは——愛しさだ。

僕は『僕』が嫌いだ——そして君のことがこんなにも大好きなんだ。

「マリア——僕——僕は——」

普段ならば人目かまわず抱きしめてくる腕が、拳を作ってこらえている。唇をかんで、眼鏡の奥で瞳を強い意志にきらめかせている。ドラコとはちがう輝きだ。——大好きだ。

「なあに、ハリー」

「僕——マリアが、きれいだ」

ハリーについていた親友二人がハツと息を呑んだ。

「頼ってくれないマリアがきれいだ。だんまりのマリアがきれいだ。心配ばかりかけるマリアがきれいだ。自分勝手のマリアがきれいだ。僕から離れていくマリアが——きれいだ」

僕は——笑った。

「優柔不断なハリーがきれいだ。八つ当たりばかりするハリーがきれいだ。自分だけつらい顔をするハリーがきれいだ。ひとりぼっちなんて言うハリーがきれいだ。マリアを捨てるハリーなんて——きれいだ」

「でも」

「でも」

一步を踏み出す。合図なんてないのに同時で、二歩目だって同時で、あつという間に愛しい片割れとの距離はなくなった。

「——大好きだ」

ぼろっと、緑色の瞳から涙がこぼれ落ちた。きつと、ハシバミ色からもこぼれていった。

「マリアが抱えているものが、僕にはわからない。だって教えてくれないから。でも、いいよ。それでいいよ。だってマリアだから——マリアが誰だって、なんだって、僕の兄弟のマリアには変わらないから。だから——僕を見て。ちゃんと、見て」

「——っ」

その、言葉は——

「——うん。うん。君はハリーだ」

「君はマリアだ」

「君は僕じゃないし」

「僕は君じゃないね」

「……………アハハッ」

兄弟を抱き締める。大好きだ。僕はハリーが大好きだ。だって君は——『僕』じゃない！ 愛していいんだ——そうだろう？ マリア。

こんなに小さな身体だって——兄弟を抱きしめるには十分なんだ。

「——あの二人って、喧嘩しない分、一度すれ違うととことん手に負えないと思わない？ ドラコ。ロンみたいに普段からくだらないことで喧嘩しておけばいいのに。発散のしかたが大袈裟なのよ」
「まったくだな。どちらも思い込みが激しいせいで対話をなまける—— グレンジャー？」

ドラコはふと奇妙な言葉を聞いたとばかりに隣の才女を見た。
ハーマイオニーはどこまでも涼しい顔をしていた。

「なによ、ドラコ」

「へーえ。お前もそんな顔するんだ。いいもん見ちやったよ」

「……………なんの冗談だ？ グレンジャー、ウィーズリー」

「なんのこと？ ドラコ」

ハリー・ポッターの親友たちがニンマリと笑む。ハリー・ポッターと決して繋がれやしなかったドラコ・マルフォイに——差し出した手を取られることはなかったドラコ・マルフォイに、まるで対等のように。まるで——仲間のよう。

「……………いいや、なんでもないよ。ロン。ハーマイオニー」

そっぽを向いたドラコに、ロンとハーマイオニーはますます笑みを深めた。金髪のあいだから覗く耳がすべてをさらしていた。

君たち三人のことをほんとうは羨ましく思っていただなんて——
——もう二度と言ってやるものか。

寮にて仲直りした僕たちを迎えたのはジニーだった。ハリーを見て、「ちゃんと喧嘩してこれたようね？」なんて茶目っ気たっぷりです

ごんでいた。あのジニーがだ。その姿はまさしく『僕』の妻の勝ち気なジニーそのものだった。

「どういうこと？」

「……僕の妹は鬼だった、てことさ」

ロンのどこことなく遠くを見つつのぼやきに首をかしげる。実はね——恥ずかしそうに語り出したのはハリーだ。

時は遡る。マリアが談話室を出てすぐだ。ジニーと入れ違いになったことに、自己喪失に至っていたマリアは気付かなかった。

「ねえ、今、マリアとすれ違ったんだけど……ひどい顔色だったわ。いったいどうし——ハリー？」

ジニーは戸惑った。談話室内はたった三人だけだというのに混沌状態にあった。

「ぼく——ぼく、なんてことを——マリアに——なんてこと——」

「落ち着けて！ ハリー！」

「あんなこと言うつもりじゃなかった。僕、おかしかったんだ！ あやまらなくちゃ——マリアがっ」

「ああもう、いっそ気絶させてしまおうかしら！」

ハーマイオニーが暴れるハリーに杖を振り上げる——前に。
パァン。

時でも停まったかのように三人は停止した。——平手を打ち下ろしたジニーを除いて。

「——どう？ ハリー・ポッター。目は覚めた？」

ひっぱたかれた頬に手をやって、ハリーはパチパチと無垢な目をジ

ニーへと向けた。その目には分霊箱によって奪われた理性が戻っていた。

「これが手っ取り早いかと思って。どういう状況か、説明できる人はいないの？ ハリーとマリアが喧嘩をしたってこと？ それで——マリアがひとりぼっちに？」

ハッとハーマイオニーが口をおおう。ハリーを放して立ち上がる。

「そうだわ——だめよ——マリア、ひとりぼっちなんだわ！ あんな状態で！」

ロンとジニーをハリーへと押しやって、友人想いの少女は出入口に向かって駆け出した。

「ハリーはあなたたちに任せるわ。わたし——行かなくちや」

「えっ——ハーマイオニー!? おおい……アイツ、行っちゃったよ……」

才女の一瞬の判断においてけぼりにされたロンは、呆然とする親友と状況を呑み込めずにいる妹を見て、すべてを放棄したい気分になっていた。——なぜなら。

「僕——僕も、マリアに会わなきゃ」

立ち上がったハリーの腕を取ったのはジニーだった。ジニーの目はおそろしく冷静に据わっていた。ロンはこれまでの兄妹喧嘩から学んでいるのだ。——この状態のジニーには逆らってはならないと。

「そんな顔で会ってどうするの？ なにを言うの？」

「謝るんだ」

「なにを謝るの？」

「ひどいことを言った。マリアを傷付けた」

「なにを言ったの？」

「——マリアなんて、いらなんて言っただんだ」

ジニーに掴まれたまま、ハリーは改めて己の言葉を反芻して崩れ落ちた。マリアの目は本気だった。本気で——ハリーを捨ててしまう目をしていた。いつだって猫みたいに勝ち気そうで、けれどハリーを見る時は誰よりも甘くとろけるハシバミ色が冷たく色を落としていた。

——自分が、あの目を向けられるだなんて。

「それだけはだめだ。それだけは言っちゃいけないかったんだ。僕にはマリアがいなきゃ——マリアがいなくちゃ、僕は、なんにもできない」
「……そう」

ジニーはハリーの前へとひざまずいた。そして。

「それなら——なおさら、マリアの前には出せないわね」
「え——」

うつむくハリーの顔を持ち上げて、苛烈ににらんでいた。

「そんな顔で謝られたって、あたしなら出直せって言うわ。……マリアは、許すでしょうけどね。だってマリアはあなたに甘いもの」

吐き捨てる。少女はいかる。

「甘すぎて——あなたを駄目にしちゃうんだわ」

最愛の緑の前に、姉と慕う少女を重ねて——どちらにも激しく憤っ

ていた。

「ハリー・ポッター。あなた、どれだけマリアに背負わせる気なの？

一人で立てもしないの？ マリアが支えなくちや歩けないの？ —

—いつまで甘ったれてるの」

「——」

「マリアはそれでもいいって言うんでしょね。マリアだもの。あたし、マリアのそういうところ——大嫌いだわ。マリアはマリア自身がハリーを駄目にしてることに気付いてないわ。だってマリアだもの！ ——だから、あたしが言うわ」

なにもできないなんて嘆く少年に、信じる少女は逃げ道を許さない。

「いつまでも楽なものにすぎるのはやめなさい、ハリー・ポッター。マリアはあなたに安らぎを与える存在よ。そして、あなたから自信を奪っていく存在でもある。あたしは——そんなハリー・ポッターは許せない」

だってジニー・ウィーズリーは。

「あたしが恋したハリー・ポッターは——もっとかっこいい男なんだから！」

ハリー・ポッターを愛しているのだから！

「マリアが許すならあたしが許さないわ。マリアが怒らないならあたしが怒るわ。マリアが投げ捨てるならあたしが拾うわ。マリアに握れない手はあたしが握るわ。——あなたの一番近くで、あなたに恋する女として、あなたを見てきたのはあたしだもの！」

たたみかける。わからず屋の鈍感男だ。今だって、ほら、年下の少女の剣幕に負かされて、手を振りほどくことすらできないのだ。——そんなハリー・ポッターが好きだ。

「きつとマリアがいなくちや近付けなかった。マリアがあたしをかわいがってくれるから——妹と呼んでくれるから、あなたの側にいられたの。今だって——こんなにドキドキしてるわ。ずっと——あなたを見てきたの」

優しい男だ。でも、子供っぽい男だ。勇敢な人だ。でも、弱虫だ。——そんなハリー・ポッターが好きだ。

「だからこそ——こんなにも情けないハリー・ポッターは許せない」

ジニーの言葉はひどく自分勝手に、希望にあふれていた。

「あたし、マリアの味方をしてるわけじゃないのよ。だってマリアはひどいもの。あなたはちゃんとできるのに——ちゃんと乗り越えられるのに、マリアは許しちゃうんだもの。つらいつて弱音を吐くあなたを肯定しちゃうんだもの。それって——あなたの強さを信じてないってことだわ」

「でも、そんな人がいないと人は潰れちゃう。だから、マリアってひどいけど——大切な人よ。大好きよ。あなたにもあたしにも必要な人。——でも、マリアだけじゃだめ」

ジニーは立ち上がる。ハリーも立つ。地を踏みしめてまっすぐな目で少女を見る。

「マリアでは足りない部分をあたしがおぎなうわ。あなたに恋する女として——それだけは譲れない。マリアが信じない強さをあたしが信じる。マリアが奪った自信をあたしが与える。あたしだって——

あたしの『英雄』を支える」

ジニーは叫ぶ。叫ぶ。止まらないように。震えてしまわないように。ジニー・ウィーズリーの矜持がハリー・ポッターを揺さぶるのだ。

「自分を信じられないならあたしを信じればいい。ハリー・ポッターを信じるあたしを信じなさい！ あたしの見る目を信じるのよ。ジニー・ウィーズリーが恋した男は——こんなにも情けなくなっていないだから！ あたしに愛されてることを誇りに思つて自信に変えなさい！」

談話室内に沈黙が落ちた。ロンは啞然としたまま妹を見ていた。ジニーは肩を震わせて息を吐き出していた。ハリーは——笑つていた。憑き物でも落ちたように、穏やかに笑んでいた。

「君——それって、すごく傲慢だ」

「……そうよ。あなたに見合うために、あたし、傲慢で強い女になろうって決めたの。自分に自信すら持てない女があなたの隣に立てるわけないんだもの。あなたにはそれだけの価値があるのよ」

「あなたが不安になるたび、その横っ面をたたいてあたしに目を向けさせてあげる。そしてあたしを見てよく自分に言い聞かせるといいんだわ。『ジニー・ウィーズリーに愛されてる僕は世界一カッコイイ男なんだ』って」

強気な言葉とは裏腹に、ジニーの瞳は潤んでいた。耳は髪と同じくらい染まっていた。ハリーの腕を掴む手は震えていた。

「……ねえ、ジニー。顔が真っ赤だ」

ハリーが頬へと手を添えた瞬間、堪えていたしずくはほろほろと赤い頬を伝っていった。

「あ——あ——当たり前じゃない！　すごく、すごく恥ずかしいわ！
あ、あたし、今、とんでもないこと言ってるんだから！　——なに
よ、笑うならちゃんと笑いなさいよー！」
「ええ!?　僕はなんも言っていないだろ!?!」
「顔が言ってたもん！」

照れ隠しに兄を叩き出した少女に、ハリーは思わず腹を抱えて笑っていた。——ああ、こんなにもかわいい子が僕を好きだなんて！

「ありがとう、ジニー。……行ってくるよ」

笑い涙をぬぐって、震えていた手を包み直す。

「——ちゃんと、喧嘩するのよ」

「ああ！　——君が信じてくれるハリー・ポッターだからね」

未熟な英雄の心は、少女の『怒り』によって再び息を吹き返したのだ。
だ。

——なんて、ことがね。

照れ臭そうに締めくくったハリーに、僕はジニーを全身全霊で抱きしめていた。

「ああ、ジニー！　君——最高だよ！」

「マリアったら……その反応は変よ。あたし、マリアの悪口を言ったのよっ。」

「そんなのただの正論じゃないか。……やっぱり、ジニーはジニーだ」
「よくご存知のとおり」

クスクスと笑う。ジニーも笑ってくれる。嫉妬心はなかった。

きつと、ハリーをハリーとして見られたからだ。——僕の愛しい人たちなんだ。

「……つまり、喧嘩は終わりってことでいいのかしら？」

ハーマイオニーの言葉にハリーと共にうなずく。今ならアンブリッジを前にしても腹から笑い飛ばせてしまえそうだ。

十五年もの時間を軋みながら回っていた歯車は、今、ようやく正常に噛み合ったのだ。

きれいな月だ。見上げる影は二つ。この静けさは嵐の前だからなのか嵐の後なのか——ドラコには判別がつかなかった。

「僕だつてわかつてた？」

「筆跡がちがうからな。——こんばんは、ハリー」

月明かりのような髪を持った少年と闇色の髪の少年は、夜の空気に包まれるままに相對していた。ドラコの手には呼び出しの旨が書かれた『通信紙』があった。——なつかしい字だ。

「ドラコはマリアを知ってるよね」

ハリーがささやく。無駄話をゆるさない断定の声だ。夜は彼に味方をするようにささやかな声すらも響かせた。

「ああ」

ドラコはうなずいた。無為にごまかせるほど——彼はもう子供じゃない。

「教えてほしいとは言わないよ。マリアの口から聞きたいから。……一生、話してはくれないかもしれないけど。でも——ひとつだけ聞きたい」

緑色の瞳がうつくしいと——ドラコは自身に刻まざるを得なかった。

「マリアはなにに怯えてるの」

ハリー・ポッターは求めた。最愛の兄弟のため、兄弟の痛みを共有したかった。それを——彼女は許してはくれないけど。

君ばかり僕の痛みで泣くなんて——そんなのずるいじゃないか。

「……これはマリア・ポッターの物語じゃない。だから、信じるも信じないも君に任せよう。なんたつて僕はスリザリンで、僕は僕のために平気で嘘をつくからな。だが、それでも語るとするなら——あいつは遺されてきた」

ハリーは沈黙した。

「想いを遺された。命を遺された。希望を遺された。——ひとつも捨てられずに抱えてきた。こんなところにまで」

なんて皮肉だろう。彼を前にして——『彼』を語るだなんて。

「あいつは死をもって守られることしか知らない。だから繰り返すしかない。それがどれほど苦しいことか理解した上で——その方法しか知らないのだから。共に戦う友はいても——共に逃げてくれる大人はいなかった」

なにがなんでも、どんな手を使つてでも——どんなに悪事に染まろうとも、愛するもののため生き抜き共にあるうとする。そんな大人はいなかったのだ。『英雄』の周りには。

グリフィンドールの勇気はうつくしく残酷だ。

「……そっか」

ハリーは静かにうなずいた。

「責めるなどは言わない。君があれの都合に合わせてやる必要はない。ただ——理解してやってくれ。それこそが、あいつにとっての救いになる」

唯一得られた絶対の家族だ。ハリーにとってマリアがたった一人の家族であるように——マリアにとってもハリーはただ一人の家族なのだ。

ハリーは堪えていた最後の一本がちぎれてしまったように、力なくうずくまった。身を丸めて嗚咽をこらえていた。ドラコはそんなハリーを不思議な目で見ていた。

慈愛ではない。憐憫でもない。愛玩とも憎しみともちがう——心を閉じ込めた宝石めいた瞳だ。

「君は弱いな、ハリー。……僕が『知る』より、ずっと」

頭を撫でていた。触れたいと願っていた感触だ。やわらかくて気持ちいい。けれども——以前ほど心躍ることはなくなっていた。別の髪の毛の感触を知っているからだ。

「その弱さが愛しいよ。君の脆さこそが——君のさらけ出された弱さこそが、『彼』が努力してきた証だから」

憎しみも、悲しみも、痛みも、怒りも——すべて、置き去りにした『彼』の上に積み上がってきたものだから。

「マリアは——どこへ行き着くんだろう」

ドラコ・マルフォイは罪を犯した。

「どこにもいけないよ。彼女はただひとり——救いたいだけなんだ」

置き去りにした場所で——罪を犯した。

失敗した。

イヤリングを握りしめながらその人を見上げる。

失敗した。

冷たい顔だ。そこに憎しみはなかった。——人形のようなだ。

失敗した。

周囲は囲まれていた。どうあっても突破口はなかった。

失敗した。

その手を掴むしか——生き残るすべはなかった。

「共に来ていただこう。——マリア・ポッター」

僕は——『マリア』の価値を見誤った。

地獄のO・W・L試験を終えた日のことだった。ぐったりした様子の五年生たちを眺めながら（ハリーやロンとハーマイオニーも例外ではない。）夕食にありつく。『前回』ではこの最終日にどつと問題がなだれ込んできたものだが、ハリーを見る限り、シリウスの夢に誘われた様子はない。アンブリッジの魔の手からハグリッドは無事逃げおせたし、ハグリッドが逃げられたならばマクゴナガル先生がアンブリッジの前へ立ちはだかる必要もない。失神呪文を四本も受けて倒れ伏す女史の姿を見ることはなかった。一步一步と着実に『最悪』は防げている。——ゆえに。

「今日しかないだろうな」

「奇遇だね。同じことを考えてた」

夕食終わりにドラコと合流した例の湖畔にて、深々と互いにうなずき合った。

「試験が終わって先生方も気が緩んでる。ハリーたちの目もまだ優しいだろうさ」

「今日のうちに移動して明日に予定を済ませ、明後日ホグワーツへ帰還、か。忙しいな」

「試験がイースター休暇前だったならもつと時間も取れたんだけど。土日じゃ余裕はないに決まってるよ」

解放感あふれる生徒たちから隠れ、苦笑う。中でも五年生と七年生は疲労困憊といった有り様だ。僕も、実技はまだしも筆記についてはかなり記憶を絞り出さなくてはならなかった。……ちよつとだけ、盛大な拍手喝采と共にホグワーツを去ったウィーズリーの双子たちが羨ましくなった。

「でも」

「今しかない」

改めて互いの決意を確認する。夏休みに入れば僕たちポッター兄弟は再び軟禁の身に置かれるだろう。ドラコは外出どころでなくなるはずだ。——『計画』通りに事が進んだならば。

ホグワーツを抜け出すには、今しかない。

「僕が先にアンブリッジに仕掛けてくるよ。君はお父君の名前でも出せばいい」

「出発は遅くすべきだな」

「僕が先で君が後だね」

「移動はどうする気だ？ 僕はアン伯母様に付き添い姿現しを頼む予定だが」

「おいおい、忘れたのかい？ さんざん君の目の前でスニッチをかすめ取ってやったっていうのに」

ニンマリ笑えば、いかにも嫌そうに舌打ちをされた。こいつの余裕なふりをしたすまし顔にも慣れたものだけど、やっぱりこの顔が馴染みがあつて好きだ。ハリー・ポッターとドラコ・マルフォイはいがみ合つてこそじゃないか。……今は、友達だけだね。

「夜中にのんびり飛んでいけば、いい時間に合流できそうだ」

「学校の箒を使うのか？」

「ハリーのファイアボルトは地下だからね」

「……大丈夫かい？ ついていけるのか？ 箒が、君の技量に？」
「ついてこさせるのさ。それもまた技量だろ？」

不敵に笑い合つて。——パチン！ ハイタッチを合図に僕らは立ち上がった。

「作戦決行だ」

「幸運を」

僕らの闘いは、なにひとつだつて終わつちやいないのだから。

——つまり。アンブリッジは懸命に彼女の考える理想の優しい声を出そうと奮闘していた。だがしかし努力は不快そうにわななく手と唇が台無しにしていた。

「長期休暇でもないのにホグワーツを出たいと言うのね？ ミスポッターは？」

「はい。アンブリッジ先生」

ニツコリと。渾身の笑顔をアンブリッジへと突き付ける。アンブリッジは頭がいたいとばかりにガマ口を開いて大息をついた。

「ミスポッター。生徒の帰省はクリスマス休暇と夏期休暇のみと校則で定まっていることは、当然ご存知ね？」

「ええ。ですから、アンブリッジ先生にこうしてお伺いしてるんです」

「なら、わかるでしょう。例外はないのよ」

「いいえ、あります」

アンブリッジの苛立たしげに震えていた指が電池切れとばかりに止まった。額のだらしない肉を持ち上げる眉がひっそりとひそめられた。

「……どんな例外かしら」

「私の従兄弟の様子がおかしいと連絡が入ったんです。この夏にそれはおそろしい体験をしたそうで。以来、どうも体調が良くないと、心がずいぶんと弱っているというんです。——身内の心配をするのはおかしなことではないでしょうか？」

「……………」

あの悪ガキが身内だなんてはなはだ笑い草だが、書類上の諸々では僕たちポッター兄弟はまだダーズリー家預かりのままのはずだ。だからこそ吸魂鬼をプリベット通りへと差し向けたのだから。——この女は。

ウィーズリー兄妹が父の危篤のため少し早くクリスマス休暇に入ったことや、例のキャビネットに突っ込まれて頭がおかしくなったモンタギューを看にその家族がホグワーツへやって来たことも大きい。身内の大事が例外になる例をすでに作っているのだ。

さあ、断れるものなら断ってみろ。まだ、たとえ身内が死んだってホグワーツからは出られない——なんて教育令はないのだから。

「いったいプリベット通りに住む従兄弟はどんなおそろしい目に遭ったのでしょうか。どう思われます？ アンブリッジ先生」

アンブリッジは齒軋りした。この女は理不尽を味方につけているが、ゆえに正当法には弱い。そして。

「とある筋からの情報なんですけど、どうやら闇の魔法生物が関わっていたそうなんです。彼はマグルなのに——魔法が。なにかご存知ありませんか？ 魔法大臣上級次官のアンブリッジ先生。なんとつて、マグルの少年が魔法界に関するものに害されたとあれば、魔法省としても一大事ですものね。ああ、それとも」

ひと呼吸。

「——逃走したペティグリュを追うのに、それどころではなかったのでしょうか」

沈黙のもと、あたため続けてきたカードは今、切られた。闇祓い局長としてつちかつてきた話術がここに役に立った。ああ、感謝します、我らがミセスウィーズリー魔法大臣閣下。

アンブリッジはぐつと口を横に引き結ぶと、鼻息を大きく吹いた。それだけで机上の書類が吹き飛んでしまいそうだった。

「……よろしい。許可しましょう」

「ありがとうございます、アンブリッジ先生。ああ、向かうのは私ひとりですので」

「それはけっこうだけど、列車は」

「移動手段はこちらでまかさないです。お気遣いなく」

「……そう」

悔しそうなガマガエルを背に退室する。その瞬間、僕は天高く拳を突き上げていた。——完全勝利だ！ 今すぐ君に報告したいよ、『僕』のハーマイオニー。君のたゆまぬ教育のおかげだ。

達成感にニマニマと頬を緩めていると、クツと小さな失笑が背後から聞こえてきた。

「……ドラコ？」

「交渉は上々のようだな」

「完膚なきまでの勝利さ」

「ああ。実にスリザリン向きの『交渉』だったとも」

ニヤリ。性悪な顔付きで向かい合う。

「お坊っちゃん盗み聞きかい？ おっと失礼。マルフォイといえば盗み聞きだったね」

「ポッターはどこにいたって吠えメールのごとく騒ぎ散らしてるからな。僕の繊細な耳が堪えきれず拾ってしまうのさ」

「それはそれは。WWの伸び耳と同じくらい繊細だ」

にらみ合って——ぷっ。同時に吹き出した。こんなやり取りも久々だ。久々だと思うと——心底から愉快になれた。

「このあとは優雅な空の旅かい？」

「アンブリッジの子飼いとね。その前にハリーを説得しなくちゃいけないけど。透明マントを借りないと」

「それはかわいそうに。……君と並走は実に骨が折れる」

「翻弄されちゃう？」

「とつくに」

軽口を叩きながらも、ドラコは距離をつめてそっと声をひそめた。

「杖を忘れるなよ。いざとなれば未成年の魔法使用禁止の法なんて関係なくなるんだ」

「誰にもを言ってるんだい？『君』のハリー・ポッターの職業を口にしてごらんよ」

今度は拳をぶつけ合う。一人で大丈夫か、だなんて。そんな心配はいらぬんだ。それこそが僕らの信頼だ。

「またあとで」

再びのハイタッチは軽快に廊下を鳴らした。

「いつでもいらしてね、マリア。私たちの小さな守人さん」

「はい。アンドロメダさん」

アンドロメダ・トンクスの美しい微笑に見守られながら屋敷を後にする。ドラコとほっと胸を撫で下ろす。成功だ。——これで、裏工作はすべてだ。

「どうにかなったね」

「未成年の匂いさえなければ自分たちで忠誠の術だって結べたんだがな」

「十五歳で忠誠の術を扱えるってのはどうかと思うよ」

「貴重なご意見をどうも？　十五歳で守護霊の呪文を扱うミスポッター」

皮肉を返されてぐっと唸る。ドラコは上機嫌だった。信じられないほど順調なのだ。これで隠れ家は二つ。僕が死なない限り、二軒の屋敷の護りは薄れない。

「あとは——『その時』に乗り込むだけだな」

「そうだね」

立ち止まる。アンドロメダがまだブラックであった頃に親戚のアルファードより支援されたという屋敷は森の奥にあった。目の前にはなんの変哲もない道路と小道の境目。ここからはマグル避けが効かない。

「ここままでいいよ。君はアンドロメダさんの手を借りて Hogwarts だろう？　僕はいったんグリモールド・プレイスに戻るよ。一応、建前上はプリベット通りにも顔を出さなきゃ。屋敷に残ってる団員の誰かに頼むつもりだ。帰りはそのまま僕も付き添い姿現しに与る形になるかな」

「了解した。……いいんだな、ほんとうに」

ドラコの痛むようなささやきに真正面から答える。

「ああ。——君の共犯者になってやる」

彼のずいぶん伸びた髪に指を差し入れた。やわらかくて、細くて、儂い。きつとこれがシルバーブロンドだったならルシウス・マルフォイにそっくりなんだ。ドラコは心から家族を愛している。——たとえ親殺しの汚名を背負ってでも、守りたいものが彼にはある。僕が、なにに代えても兄弟を想うように。

「それじゃあ、ホグワーツで」

「マリア」

ドラコの手が耳朶に触れた。そこにはドラコからもらった三年目のクリスマスプレゼント——月明かりに輝くイヤリングが下がっていた。ルーモス代わりに、夜行飛行のお供として大変重宝したものだ。

「ドラコ？」

「——ホグワーツで」

彼の香りがかすめる。それは久々に受けたチークキスだった。ゾクツと胸の奥がざわついた。

「っあ、ああ、うん。また」

足が妙なふうにもつれながらも透明マントをかぶる。境を越える。森が消え失せ車や人の声であふれる。マグルたちの時間が忙しなく行き交っている。

ドラコの頬が触れた箇所を手の甲でこすった。心臓がおかしな鳴

り方をしていた。あいつ——そうだ——あいつ——僕が、好きなんだ。

「……マルフォイのくせに」

なんの意味にもならない悪態をつく。じつとしていられなくてさらに頬をこすれば、指に引つ掛かったイヤリングがポロリと地面へ落ちた。アスファルトを白い輝きが転がる。このままではマグルの誰かに踏まれてしまう。

「ったく、もう。なにやっ——」

ぐるり。

ドラコ・マルフォイは常々思う。英雄付きの才女どのの度胸はそれこそ英雄すらも越えるのではないかと。

「連れてきたわよ、ハリー」

「ドラコッ！」

ほとんど飛びかかるようにして駆け寄ってきたハリーを受け止める。あのハリー・ポッターに名前を呼ばれずがるように腕を伸ばされるだなんて、ドラコは今でも自分は夢を見ているのではないかと疑ってしまう。——あの日から、『英雄』の側で、長い夢を。

そして、赤毛の少女のハシバミの瞳の中にかつての悪戯っぽい感情を見つけては現実であることを噛み締めるのだ。

「どうした？ ハリー」

ふわふわの黒髪を撫でて。丸い目をさらに大きく開いたハリーは緑を強烈に光らせてドラコを射抜いた。

「——マリアを知らないかい!？」

「——は？」

夕食も過ぎ、空は完全に夜を迎えようとしている頃だ。時刻にすれば十九時か、二十時か——ともかく、アンドロメダの隠れ家を後にしたのは昨日の昼に差しかかるかほどで、プリベット通りを経由したにしてもこれは遅すぎる。シリウス・ブラックが引き留めているのか？ 連れてこられた空き教室を眺め、そこにいる面々を確認してからドラコはハリーの肩を掴んだ。

「説明してくれ。マリアはまだ帰ってないんだな？」
「そう——そうなんだ。僕、見た——」マリアはヴォルデモートに捕まってる！」

ヒュツ——と。ドラコの喉から空咳の鳴りぞこないのような音がもれた。その目ははつきりと恐怖を映していた。アイスグレーが色を温度をなくしていく。冷たく——冷たく——凍った水底のように。

「……それは、確かか？ シリウスに確認は取ったのか」

「取ったよ！ とつくに！ 両面鏡は僕が割ってしまったけど、破片でもちやんと使えたんだ。シリウスはマリアには会ってないって、そう言った」

「……そうか」

ドラコの煮え切らない態度にハリーは癩癩を起こして地団駄を踏んでいた。なんでわからないんだ、マリアが危ないんだ、そう叫ぶハリーにロンは同調して冷酷無慈悲な人間でも見るようにドラコと、そしてハーマイオニーをにらんでいた。ジニーとルーナは重く沈黙していた。(いいやルーナはぼんやりしているだけだ。)ネビルは真つ青だった。

マリアを心配する気持ちは全員にある。だがしかしドラコとハーマイオニーがためらう理由は一緒だった。——これはマリアの幻覚を見せた、ハリーを神秘部へと誘い出すための罠ではないか。

それこそが『彼』いわくの『前回』での失敗だったのだ。『彼』はそれを永久に引きずった。……今もお。

ハリーのもっとも大切なものが、『シリウス』から『マリア』へと換わった結果ではないか——

そしてもうひとつ。ドラコだけがその疑問を持った。否、ドラコにしかわからない違和感だ。——あの、『ハリー』がたかだか死喰い人数人を相手に遅れを取るのか？

ヴォルデモート本人が出向いたならまだしも、また杖のハンデを含めたにしても、英雄としての記憶を持つ彼女が易々と誘拐だって――？

どうにもドラコは腑に落ちないのだ。『ハリー・ポッター』を知るドラコにとつて、マリアという少女は内に獰猛な蛇と獅子を飼う英雄だ。たとえこの世界では英雄でなくとも――彼女は助けを求め守られるヒロインではなく血反吐を吐きながらも進み続けるヒーローなのだ。

そしてそれが――ドラコは恋しくて憎らしくて嫌いだった。

「――もう、いい」

ハツとドラコは呑み込まれゆく思考の渦から抜け出した。ハリーは冷たく吐き捨てていた。

「僕ひとりだって行く。僕の妹なんだ」

「あたしだって行くわ」

間、髪入れずに答えたのはジニーだ。マリアの愛する強い意志の瞳でハリーを見つめていた。

「あたしの姉さんだもの」

「――で、僕の親友だ」

もうひとつの赤毛がハリーの側へと立つ。

「ぼ、僕――僕も、行く。マリアが信じてくれる限り、僕は立てる。このためのDAだ」

みんなが驚いた顔でネビルを見た。ネビルは相変わらず顔色は悪いものの震えてはいなかった。

「マリアって——ハリーからは自信を奪っちゃうけど、その分ネビルにあげられる人だったのね」

ジニーがクスリと笑った。

「それじゃあ、悪いけどルーナはマクゴナガル先生に伝言を——」
「あら、あたしも行くよ」

ネビルに集まっていた目が次はルーナへと流れた。ルーナは夢見るようなぼんやり目のままふわふわと首をかしげていた。どうして自分をのけ者にするのかわからない、といった顔だ。下手すれば状況だってわかっていないかもしれない。

「でも、あなたはマリアともそれほど仲良くはないでしょ？ これはゲームじゃないのよ、ルーナ。みんな命を懸けるの」

ジニーの厳しい言葉にルーナはううん、と緩慢に首を振る。ドラコには眠気を覚ましている仕草にしか見えなかった。

「あたし、マリアが好きだよ。だってほめてくれたもん。ザ・クイブラーのこと、いいよねって言ってくれた」

ルーナはそれはそれは満足そうに笑った。なんだかもう、どうにでもなれと言ってしまったくなるような笑顔だった。まったく真反対の性格のルーナとジニーが仲良くできる理由をドラコは見た気がした。

最後に視線が集まる先はドラコとハーマイオニーだ。ハーマイオニーはうろたえていた。

「待って、ねえ、ほんとうに、ほんとうにこれは正しいの？ 罠でない

と言えるの？　もしもこれでハリーが捕まってしまったら———それこそマリアはどうなってしまうの」

苛烈に口を開きかけたハリーよりも先に———隣の少年が紙を開いて少女の問いに答えていた。

「いいや、これは罠だ。———マリアは捕まって　いる」

くたびれた羊皮紙には手のひらにインクを塗りたくって握りしめたかのような奇妙な模様が浮かんでいた。

———どうか、ドラコが気付いてくれますように。背で拘束された手をどうにか動かして通信紙を握りしめる。両面鏡の破片で真横に切ったかつての傷は治りかけの真新しい肉となっていて、そしてそれは自身の爪によって無惨にえぐられ傷に戻っていた。もちろん、痛い。けれど手段は選んでられない。

通信紙に使用するインクは種類を問わない。紙に移りさえすればいい。つまりは———血だつてかまわないのだ。

拘束されてどれほどになるだろうか。杖を奪われシレンシオをかけられた状態で目だけを大きく動かす。———神秘部ではない。どこかの屋敷だ。なぜ？　ハリーをおびき寄せるだけなら、僕を神秘部へ放り投げてその映像をハリーに見せるのが手っ取り早いだろうに。

「っ！」

扉が開いた。カツリ。革靴の音。この靴は知っている。僕の腕を取って姿現しした男の靴———ルシウス・マルフォイの靴だ。

周囲に人気はなかった。扉に立つのはルシウスただひとりだ。

「フィニート」

ルシウスの杖が振られる。心做しか呼吸も楽になった気がした。

「……なんのつもりだ」

「闇の帝王がお待ちだ」

脇に手を差し入れ立たされる。ルシウスの長髪が僕の肩や首筋にまで流れた。——ドラコのものによく似ている。やわらかくて、細くて、儂い。

「……なぜ、逃げなかった」

ルシウスは手を自由に使えない僕を介護——いいや、拘束しながら耳元でささやいた。あの人形めいた美貌がずいぶんと人間くさい声を出すものだと思った。

「あなたこそ——どうやって?」

いつ、僕の存在に気づいたのか。どこから見ていたのか——僕を。

「お前を見ていたのではない」

ルシウスはきっぱりと否定した。それは自惚れるなど嫌悪にまみれた拒絶のようにも聞こえた。

「私は、我が子を見ていたのだ」

「ドラコただひとりを追ったのだ」

ああ——

通信紙を握りしめる。なんて口惜しい。今すぐにだつて君に伝えたいのに。ルシウスは——ルシウス・マルフォイは、こんなにも君のことを——

ますます、逃げられなくなつてしまつた。まだ、ルシウスを『失敗者』にするわけにはいかない。——そうするのはドラコだ。

こたびのルシウスは『前回』よりもヴォルデモートから信頼を寄せられているのだとドラコが苦々しく語つていた。二年生の夏にヴォルデモートが下僕の身体を使つて無防備にマルフォイ邸へとやつてきたのが証拠だ。

まだ、まだだ。まだ——ルシウスをヴォルデモートの右腕として機能させなければ。

僕の手を掴んだのがあなたでなければ——見捨てられたのに。

蛇がのたくつたような扉の前に立たされる。どことなく秘密の部屋の門を思い出させた。開けと——蛇語でささやく必要はなさそう
だ。

「我が君——例の娘を連れて参りました」

ノッカーを叩いたルシウスはうやうやしく扉の向こうへと声をかけた。扉は——開いた。

「こうして顔を合わせるのは二度目だな？ ——マリア」

その蛇顔を見た瞬間、ジクジクとあるはずのない傷がうずく感覚に襲われた。気のせいだ。わかっている。マリアの額に傷はない。——けれど、こいつを前に冷静でなんていられるものか。

——『僕』の宿敵を前に。

「ヴォルデモート——！」

途端、強烈な平手が飛んできた。ヴォルデモートの側に控えていた

ベラトリックス・レストレンジだ。ベラトリックスは容赦なく手加減も一切なく平手を二、三発繰り返した。髪まで引っ付かんで、強烈極まりなかった。

「お前、どの口がご主人様のお名前を呼んだ？ え？ この——混血の——穢らわしい舌で！」

「ベラトリックス、我が君の御前だぞ」

「いいさ、ルシウス。だがしかし、ベラ？ その目の目と舌はいつそう大切にせねばならぬ——」

粗雑に前髪が解放されて首が大げさに触れる。鼻血がパタパタと床に飛び散った。

「しかし、我が君……ほんとうに、こんな小娘が——？」

「俺様の言葉を疑うか？ ベラトリックス」

「そのような——！ そのようなことは決して——！ ああ、我が君……」

ベラトリックスが床へとひざまずく。それは神へと懺悔する罪人のようにも見えた。ただしく、ベラトリックスにとって神なのだ。ヴォルデモートは。

「さて、マリア」

すぎるベラトリックスを放ってヴォルデモートは僕を見る。僕もヴォルデモートを見た。鼻血が伝って口の中に鉄の臭みを広がらせた。

「僕にハリーの予言は取れないよ。——僕は『生き残った女の子』じゃないもの」

先手とばかりに口をつけば、器用にも頭を伏せながらベラトリックスの目がギョロリと僕をねめつけた。元がブラック家特有の美人なだけに迫力がとんでもない。ナルシツサの冷たい美貌ともアンドロメダの優しい微笑とも似ないが、間違いなく血を感じさせた。ルシウスは僕の隣で人形の顔に戻っていた。

「ああ。よいのだ。それは本人に取らせるとも」

ヴォルデモートの言葉に、思わず意地だけのポーカーフェイスも捨ててやつを凝視した。僕はハリーに対する餌ではないのか？ だとすれば、なぜ、神秘部でなくお前の前に……？

ヴォルデモートは実に教え甲斐のある生徒を前にした教師のようにうつそりと笑んだ。

「お前はどのような条件をもとに、予見をするのだ？」

「――」

硬直。顎からパタパタと降り落ちた血の音で我に返った。まさか――まさか――こいつは、『予見者』としてのマリアに価値を見出だしたというのか。

ああ――そんなのって――とんだ間抜けだ！

「は――は、はは――はははっ、予言？ 僕が？」

笑いが込み上げた。たまらない。バカだ。大間抜けだ。どいつもこいつも。早とちりの能なしどもめ。くだらない。くだらない。

「予言なんて――くだらない」

吐き捨てれば、ヴォルデモートは血のような目を細めて「ふうむ」と杖を撫でた。

「ああ、けれど、いいとも。してやるよ。ヴォルデモート、お前への予言だ。ありがたく拝聴するがいい。——お前は滅ぼされるよ。ハリーにお前は勝てない。絶対に勝てない。ハリーに負けるんだ。お前が選んだちっぽけでかわいそうな男の子にお前は敗北する!!」

「——クルーシオ！」

この世にこれほどの痛みがあったのかと絶句するほどの激痛が襲った。全身を滅多刺しにするような。内から灼熱で焼くような。大雑把に痛みという概念を直接脳へと叩きつけているようだった。

やがて術は解かれたがマリアとして受けたはじめての拷問に心身が放心状態にあった。

「う、あ……くっ……」

「ほう、理性を保つか。なかなかどうして……兄弟揃って憎らしいものだ」

ハリーの兄弟杖が喉の中心をなぞって上がる。自然と上を向かされる。赤と目が合う。

僕は。

「……………いい、そう、だ」

「うん？」

「……まえ、は、かわい……そうだ。かわいそうな……やつだ。愛を知らない……さびしがりやの、子供だ。お前、なんか、ただの——子供、なんだ。——つう、あッ」

横に殴り付けられた。無防備に吹き飛ばされてルシウスの足へと激突した。ルシウスはビクともしなかった。

「……連れてゆけ。神秘部だ。兄弟との感動の再会の準備を整えて差

し上げる。——このままでは、勢いあまって殺しかねん」

薄れていく意識の中で、僕はやはり笑っていた。それを遠くから僕が感じていた。身体的余裕がないため目は閉じられていたが、それでも口元はいびつに歪んでいる気がした。

だって。ほら。その声。

ヴォルデモートの声が。

布をかけられる。水のような感触——透明マントだ。五感が徐々に闇へと吞まれていく。聴覚を最後にして暗闇へと落ちる。

君の声が——まるで拗ねた子供のようなんだもの。

かわいそうな、愛を知らぬトム・リドル。

暗い森を前にして立ちすくむドラコをはたして誰が責められようか。ドラコの頭の中にはかつてのトラウマが走馬灯のごとくめぐっていた。

「あなただってセストラルが見えるんでしょう？　はやく乗りなよ」

ルーナがドラコを見下ろしながらくすんだブロンドをふわふわとなびかせる。凶だけ見れば白馬に乗せられたお姫さまのようだというのに、馬もお姫さまもてきとうにまかなってきた三流芝居のようだ。

機転を利かせたジニーによって、厨房からもらってきた血抜き処理前の肉で次々とセストラルをおびき寄せる。残り一匹、それはネビルが乗る用だった。

「そういえばドラコって禁じられた森が苦手なのよね。ハグリッドの

授業でもあなた、いつもちよつと——かなり——嫌そうじゃない？」

自身が乗り上げた、彼女にとっては透明の馬——セストラルをおそるおそると撫でながらハーマイオニーが眩く。ほんとうにこの女は余計なところにはかり目がつく——と、本来のドラコ・マルフォイならば即座に売り言葉買い言葉で返していたところだ。そうすれば彼女からはグーの拳が飛んでくること請け合いだが。

「こんな森を庭扱いするのは、化物も赤ちゃん扱いのどこぞの森番だけで十分だ」

ぼやけば、側で聞いていたロンがプツと吹き出した。ロンをハーマイオニーが責めるようににらんでいた。

「ほら、ネビルの子がきたよ。……あれ、二頭だ」

夢見がちで輪郭がぐにやぐにやなのによく通る声が森の奥へと向けられた。ルーナの声だ。目を向ければジニーの持つ肉につられたセストラルが二頭、影から空洞の目を覗かせていた。ハリーがイライラした様子でネビルを急かした。

「どっちだっていいからはやく——」

「あら、それじゃあこれで数はぴつたりということね」

まったく第三者の声だった。全員で振り返る。彼女は美しい黒髪を肩から流して婉然と笑んでいた。

「わたしだって行くわ。マリアがピンチなんでしょう？」

『ハリー・ポッター』いわくほんとうは泣き虫な彼女は、地を踏みしめ

て確かな足でそこに立っていた。強い決意の眼差しだった。

「あなた……」

「——ああ。行こう。君も一緒に」

「ドラコ！」

ハーマイオニーの声を振り切って飛び上がる。セストラルに行き先をささやく。続々とハリーたちのセストラルが後をついてくる。夜空を八人の影が、そして見えるものにだけ見える八頭の馬が駆けていく。

きつと——きつと君は、僕を許さないだろう。彼を巻き込むことを。彼女を巻き込むことを。けれど。

たとえなにを犠牲にしたって——僕は僕の愛するものを守ると決めたんだ。

誰かに蹴られて端まで追いやられたらしいイヤリングを発見した。とつくにクローズとなったカフェの植木鉢が影になったことが幸いしたのか、マグルの誰にも拾われることなくそれはささやかに主張していた。

「これ……マリアのイヤリングよね。わたし、知ってるわ。ダンスパーティーでつけていたでしょう？」

ハーマイオニーが呆然とドラコの手にあるイヤリングを凝視する。ドラコもまた、ちつぽけな宝石を沈痛とした表情で見つめていた。つまりは——ここで、イヤリングが外れるようなことがあったのだ。彼女の顔の付近にまで脅威が迫ったのか。

「周りにはなにもなさそうだよ」

周囲を見て回っていたロンが報告する。ハーマイオニーは不安を隠しきれない顔でハリーへとあおいだ。

「ねえ、ハリー。もっとわかることはないの？ あなたが見た——マリアの姿で？」

「わからない……どこかの屋敷だった気がする。あの部屋ではなかったんだ——あの、ガラス玉が並んだ部屋——神秘部では」

立ち往生だ。誰もがイライラして、そして今やマリアの身に『最悪』が迫っていることを疑うものはいなかった。

ドラコはこの年の決戦の場が神秘部であることしか知らない。今、向かったとして、マリアとすれ違いになれば元も子もない。目も当てられない失敗だ。

自分は必ず向かわなければならぬが——ハリーたちは。

「——殺してやる！」

突如、物騒な怒声が人通りのない路地に響いた。——ハリーだった。額の傷をえぐらんばかりに両手で押さえ、身をかがませて怒りに震えていた。

「ハリー？」

「殺してやる……殺してやる……！　ベラトリックス・レストレンジ——！」

ハッと少年は息を呑んだ。ネビル・ロングボトムだ。

「ハリー、まさか——マリアは拷問されてるの？」

ネビルは蒼白で、けれどもネビルの目にも悲壮な怒りが満ちていた。

「あいつもいる……見てるだけだ……あいつ——ルシウス・マルフォイ」

ハリーの言葉にドラコはイヤリングを握りしめてセストラルへとまたがった。急展開についていけず目を白黒とさせている子供たちへと冷たく宣言する。

「行くぞ。——マリアは神秘部だ」

父上ならば——そこにいる。

「——ぐあッ！」

「ハロー？ ポッターベイビーちゃん？ 優雅な目覚めにならなくて残念だったねえ」

腹への衝撃に目の前がグラグラと揺れた。ご丁寧に強烈な美女はリナベイトでなく物理でモーニングコールをしてくれたようだ。お優しいことだ。

「ベラ、ト、リックス……！」

「さあここがどこだかわかるかい？ ん？ これからやってくるお前のかわいいベイビーちゃんの墓場だよ」

髪を掴まれて限界まで首を振らされる。幾万もの言葉を秘めたガラス玉が目に入った。——神秘部。

「お前の弟が間抜け面さげてやってくるまで、死なない程度ならば遊んでもいいとお許しをいただいたのさ。さて、さて、お前はどんなイ声で泣いてくれるだろうねえ？」

両目を開いて迫り来るベラトリックスの顔へ、血混じりの唾を吐きつけた。薄い赤は蒼白く瘦けた彼女の頬に色をつけた。ベラトリックスは己の頬に触れて呆然としていた。

「……ハッ、少しはいい化粧になったろう？ かつてのブラック家の栄光の姿に近づいたんじゃないかい」

「——ッ」

バチンッ！ 何度目かの平手だ。伸びた爪が狼男のごとく頬を裂いた。次は拳だ。殴られる。何度も。何度も。頬骨を砕こうとしている。脳みそが揺すられる。

「この、この、私に——！ 穢れた血を——穢れた血を——よくも！」
「ベラトリックス」

打撃が止んだ。すっかり乱れてカーテンのようになっていた前髪の隙間から二人を覗く。ルシウス・マルフォイがベラトリックスの腕を掴んでいた。ベラトリックスの手の甲は僕の血に濡れていた。鼻血はとつくに止まらない勢いで、口の中も血の味でいっぱいだった。視界はおぼつかなかった。いまだ縛られたままの手首は摩擦に擦り切れ、全身の関節がきしんだ。顔はどこもかしこもが熱を持っている気がした。

「それ以上は死ぬ。相手は子供だ。思いの外、簡単に死んでしまうのだ」

「おお、そうかい。死ねばいい。死ねばよいのだ。あの方をお助けするのは私だけでいい。私だけがお側にお仕えし、お支えするのだ。あのお方のお心にとどまるのだ。こんな小娘に価値を見出す必要はない！」

「我が君の命に背くか。ベラトリックス」

「——ッ」

僕は見た。二人の腕に刻まれた闇の印が不気味に光っていた。

「——放しな。気安く義姉の手を掴むんじゃないよ」

「それは、失礼しました。義姉君」

ベラトリックスが再び僕へ顔を近付ける。前髪を力任せに引き上げられる。ブチブチとちぎれる音がした。

「心底——憎たらしい目だよ」

ベラトリックスの杖が目の縁を杖先でなぞっていた。

「えぐり取ってしまおうか。愛しの従兄弟どのはお前の目玉だけが帰って来たら、はてさてどんな反応をするだろうねえ。ぽっくり死にしまったご主人さまの——ジェームズ・ポッターの目だ」
「……………ッ」

杖先が眼孔に押し入ろうとする。貫かれてしまう。

「ベラトリックス」

「もちろん——冗談だとも」

杖は離れた。全身が震えていた。冗談？——いや、あれは本気
の目だった。『予見者』という勘違いがなければ間違はなくえぐり取
られていた。拷問に快感を見出だす——吐き気のするような女だ。

「それにしても、ルシウス？ ずいぶんとこのお嬢ちゃんをかばう
じゃないか？」

「死なせてはならないのだ。狂わせてもいけない。予言は狂言ではな
い」

「ああ、そうだねえ……………愛しのガールフレンドの変わり果てた姿
なんて、かわいいかわいいドラコ坊っちゃんには見せられないものね
え」

わかりやすい挑発だ。それを受け止めるルシウスの表情は——無
だった。

「あれは関係ない。跡取りであるから生かしているだけのこと」
「そうだろうさ。私ならあんな恥知らずはこの手で殺しているよ。そ
れが親の愛情つてもんさ。さっさとシシーと次の子を作って処分す
るんだね」

頭上の会話に齒軋りする。口腔にたつぷりたまつた血は生ぬるかった。

——癩癩を起こすべきじゃない。この状況で、口答えは自殺行為だ。わかっている。そんなのは、どんな愚か者にだつてわかることだ。トロールにだつてわかる。だというのに——ハーマイオニーが『穢れた血』だと侮辱された時のような、ロンが貧乏な物乞いだと嘲笑われた時のような——沸々とマグマに変わった怒りが喉元を飛び越えていた。

「ドラコは死んでいい人間じゃない」

二つの視線が突き刺さる。

「お前なんかより——よっぽど価値のある人だ！」

ベラトリックスの足が腹へと吸い込まれた。バキツ。嫌な音。骨の折れる音だった。

「あぐツ——あ、ア、ア、ア、アアアツ」

頭を踏みつけられる。床には血の池ができていた。吐瀉物も混じっていた。身体はどこから出血しているのだから、もうわからなかった。

「ポッターってのはどこまでも生意気だ。ご主人様の命さえなければ——目をえぐって、鼻をそいで、耳を切り落として、爪を剥いで、ありとあらゆる痛みに命乞いをさせてやったというのに。口惜しいものだ。ああ、それとも、女としての絶望を与えてやろうか。雌に餓えた雄どもの群れに裸にひん剥いて放り投げてやろうか」

「ア、ツ、あ、ぐつ、げほツ」

ガツン。ガツン。踏みつけられる。体重を目一杯込めて。憎しみを込めて。愉悦を込めて。

「ベラトリックス……私に何度言わせる気だ」

「わかってるさ。ああ、胸くそ悪いったら。少し外を見てくるよ。そろそろおバカなポッター赤ちゃんが来ているかもしれない」

ようやくと靴裏は離れた。自分が人間としての原型をとどめているのかすらわからなかった。完全に虫の息だった。

「チィ……靴が汚れたじゃないのさ！」

「ぐツ——!!」

最後に折れた肋骨へ渾身の蹴りをお見舞いして、ベラトリックスは通路の先へと消えた。予言に囲まれ残るのは僕とルシウスだけになった。

「……お前は、自殺願望があるのか？ 挑発さえしなければこれほど痛め付けられることもなかったろうに。——エピソード」

淡々と申し訳程度の治療魔法がほどこされる。ようやくと口を動かせるだけの気力を取り戻した。

「……………いい、の……………」

「お前を死なせてはならないとの命令だ」

ルシウスの目にも声にも情はなかった。——僕は知っている。

「次はおとなしくしていたまえ。あの女は元来、手加減というものを知らない。ロングボトム夫妻の末路を知っているだろう。私に苦勞

をかけるな」

知っている。

「どうして黙っていられなかったのだ」

あなたは。

「おい、聞いて——」

「これ以上——ドラコの悪口は、言いたくなかったでしょう？」
「——」

はじめて、ルシウスが感情的な眼差しで僕を見た。

「あなたは——家族を愛している」

わざと遠ざけることになったって——真逆の嘘をついたって——
『守る』ためなら悪になれる。

ほんとうに——君たちって似た者親子だ。

「……私は、命令さえなければ君が死のうとなんとも思わない」
「ええ」

うなずく。皮肉にも僕の命は、ヴォルデモートの命令ただひとつに
守られている。

「だがしかし——」

ルシウスが手首を縛っていた縄にナイフを刺し入れた。

「え——」

「このナイフは君が持っていた」

「え？」

「私は気づかなかった。ベラトリックスも気づかなかった。君は隙をついて器用にも拘束を抜け出した。そして私という障害をかい潜り逃げた」

「――」

片手の縄が切れた。手は自由になった。

「君の杖を持っているのはドロホフだ。そして透明マントを持ってるのは――奇遇にも私だ。君は手癖の悪さから、逃走の際に私から透明マントを盗んだ」

「元々僕のものだ」

「そして――透明になって逃げた」

ドラコによく似た目と見つめ合う。言葉はなかった。

「……礼は言わないよ」

「なぜ礼がいる？ 私は逃げられたのだから」

どうにかして微笑む。ちよつと頬を動かすだけでひりひりと顔面が痛んだ。フランケンシュタインも真つ青の顔にちがいない。

「――そして、人質に逃げられた間抜けなルシウスにマリアは言い捨てた。――ドラコはあなたが大好きだよ」

「――」

ルシウスの冷徹ぶった目が大きく開かれていくのなんて待たずに、僕は透明マントをかぶって駆け出していた。

「さすがマルフォイね。——まさか魔法省への入り口を知ってるだなんて」

ハーマイオニーの感心した声にドラコは苦笑った。神秘部の廊下だ。——とうとう、ここまで来てしまった。

この時代のシステムを覚えていてよかった。ハーマイオニー・グレンジャーが大臣となってからは魔法省への登庁システムだってずいぶんと便利に変わったものだ。改めてコーネリウス・ファッジは大臣には向かない人だったのだと思わざるを得なかった。……決してその人が優秀でなかったわけではないのだ。

「あれ、見て。光ってるよ」

ルーナが暗い廊下の先を指す。マリアのイヤリングだった。ワツと子供たちが駆け寄る。ドラコは確信した。——誘い出されている。

あんな目立つものを死喰い人たちが見逃すはずがない。わざと置かれたのだ。マリアのイヤリングは。ハーマイオニーだって相手の思惑に気付いただろう。——それでも。後戻りはできない。

ハリーの案内によってひとつの扉の前へと立つ。ハリーがシリウスナイフを使って解錠する。誰の顔つきにも命を懸けた覚悟が見られた。あの、ルーナ・ラブグッドにだって。

戦場への扉は開かれた。

「——マリア……?」

いるはずのない人の姿を見つけて、あるはずのない声を聞いて、僕は透明マントを脱ぎ捨てていた。

「——チヨウ？」

『前回』のシリウス奪還作戦にはいなかった黒髪の少女が、ロープを引きずりながらぼろぼろの姿で立っていた。

「君——どうして——その姿——まさかハリーが？」

「どうしてですって？ どうしたもこうしたもないわ！ ああ、なんて姿——なんてひどい——」

チヨウが室内へと一步を踏み入る。扉の向こうは信じられない爆音にあふれていた。だがしかし戸が閉まった途端、音は世界でも変わったように消えてしまった。——だから気付けなかったのか！ 死喰い人の姿を見かけた際にたまたま隠れた部屋だけれど、ここは外との繋がりを断ち切ってしまう部屋だったのだ。神秘部ってのは相変わらずめちやくちやだ。

「行かなくちや」

「待って、だめよ。まずは治療よ。自分でできなかつたの？」

「杖がないんだ。応急処置はしてる」

「どこが！ 血だらけだわ」

「足は無事だ。五体も満足。足に問題がなければ動ける」

「まあ！」

チヨウに腕を取られて引き留められる。その瞬間に電流のごとく激痛が走って、僕はうめいていた。チヨウは、ほら、ごらんさいとばかりに呆れた顔をしていた。

「立っていられることが不思議なほどの怪我よ。……やっぱり、拷問

されたのね。ハリーが見ていたの」

「それは……怒っただろうね」

「そんなものじゃなかったわ。今にも人を殺しそうな目をしてた」

覚えがありすぎて苦笑してしまう。チヨウは丁寧に治療を始めていた。……変な気分だ。

「……やっぱり、聞いていい？ どうして、君が、僕を？」

こたびのチヨウにハリーへと付き合う義理はないはずだ。僕とだって——DAのおかげで関係は改善の傾向にあるにしても、命を懸けるほどの情はなかっただろう。ハリーがそれほどの剣幕を見せたなら、ちよつとした度胸試しで済む事件でないこともわかっていたはず。

それなのに——どうして——？

「——あなたに、文句を言うためよ」

チヨウはフェルーラを使って包帯を巻きながら冷たく吐き捨てた。

「最大の敵にノコノコと捕まって——あなたは自分の価値をわかってないわ」

「わかってるさ。いや、今回でわかった。予見者だとか——それは、結局は全部誤解なんだけど」

「そうじゃないわ。そんな話をしてるんじゃない。——あなたには、あなたをないがしろにする権利なんてないと言っているの」
「……………」

思わず黙り込んだ。チヨウの目には軽蔑が浮かんでいた。

「あなたの命は——誰の犠牲の上にあるの？」

「あ……」

「セドリックがあなたを守った。セドリックの死の代償にあなたの命が残された。それを——こんな風に台無しにされるなんて、セドリックの最期を無駄にされるなんて、そんなのは許せない」

少女はいかっていた。

「わたしが許さない」

「——」

「あなたは生きなければいけない。セドリックがあなたのために死んだ時点で、あなたの命はあなただけの意志で左右できるものではなくなったのよ。それこそがあなたのセドリックへたむける贖罪。——理不尽？ 知ってるわ。セドリックはそんなことは望まない？ ええ、もちろん知ってるわ」

チヨウは立ち上がる。美しい黒髪を肩から流して、瞳に光を映して、僕を見下ろす。

「だってこれは——わたしの復讐だもの」

息を呑んだ。——なんて、うつくしい。

「あなたは、わたしに憎まれるために生き続けなければいけないの」
「チヨウ……」

そのまま、チヨウは微笑んだ。僕へ手を差し伸べて、やわらかく睫毛を震わせる。

「だから——守るわ。あなたが死にかけてるっていうなら、どこへだって駆け付けてみせるわ。守り抜くわ。そして——あなたの命こそをわたしのセドリックへの愛の証明にする」

手を取った。彼女のほうが身長は高い。それでも、等身大に向き合えている気がした。

「君の言ってた『自分を納得させるため』って——それって、こんなにも攻撃的な言葉だったんだ」

「そうよ。今さら気づいたの?..」

クスクスと東洋の美しさを惜しみ無く振りまく少女は笑む。優しい顔だ。復讐なんて言葉がその唇から出てきたことが嘘みたいだ。

「.....わたし、あなたが嫌いじゃないわ」

「僕も——君が嫌いじゃないよ」

少女の支えに甘えて扉へと向かう。

「いつそう——この戦いは『生きる』ためのものだと心に刻み付けた。」

マリア・ポッターと不死鳥の騎士団【完】

轟音だ。ハリーたちとの合流は簡単だった。音のする方へ向かえばよいのだ。ハリーたちと死喰い人が戦う方へ――

「マリア！」

「――シリウス！」

ほとんど悲鳴だった。倒れ伏す仲間たち、ロンを絞め上げている脳みそ。それを解除するルーピン先生。不死鳥の騎士団員たち。そして――シリウス。

シリウスはパツと顔を明るくしたが、僕はとてもそんな気分にはなれなかった。

わかっていた――シリウスが、『僕』の危機を前におとなしくできるわけではないって。

「シリウス……」

「ああ、よかった。マリア……ハリーが両面鏡で君がいないことを知らせてくれたんだ。ひどい怪我だ。君の顔をこんなにするなんて！

ささては相手は女だな？」

「ベラトリックスだよ。……シリウス」

腕を広げて待っていてくれるシリウスの元へとふらつく足取りで吸い込まれる。ロンに絡む脳みそはルーピン先生が完璧に取り除いていた。みんな生きてはいるようだ。ジニーも、ルーナも、ハーマイオニーも、ロンも――そして、チョウ。ほんの少し安堵の息をつけば胸がきしむように痛んだ。

肺が痛い。折れた骨のせいだ。頭が痛い。失った血のせいだ。目があつい。――あなたのせいだ。シリウス。

「ハリーとネビルは先に？」

「おそらくな。それから——」

「ドラコも、だね」

「……ああ」

シリウスは沈痛と答えた。きっと先にルシウス・マルフォイが待ちかまえていることを知ってるからだ。

——大丈夫だよ。そのために、あいつはここへ来たんだ。

「シリウス、約束して」

騎士団員の二名ほどが子供たちを看るため脳みその部屋に残る旨の相談を片方で聞きながら、シリウスへとささやく。シリウスもどことなく神妙な顔つきでいた。

「——僕を、ぜったいに、かばわないで。守らないで」

シリウスはうなずいた。

「——わかった」

はつきりとした意志のものと返答だった。

「君も約束してくれ。無茶はしないと」

「それは………うん」

「大丈夫よ。わたしが監視してるわ」

言いよどむ僕にかぶせるようにして答えたのはチョウだった。ニッコリとたおやかに微笑んでいた。

「うん。死さないよ」

僕に『死』を許さないあなたたちがいる限り——
エメリーン・バンスとディーダラス・ディグルを残して最後の部屋へと向かう。あのアーチの部屋だ。途中の死喰い人を邪魔だとばかりに殴り飛ばせば、シリウスに哄笑された。脳みその部屋でのびていたドロホフは僕の杖を持っていなかったのだ。おそらくハリーが回収したのだろう。だからしかたないのだと弁解すればさらに笑われた。戦闘なんて体術ありきじゃないか。僕に言わせれば、魔女や魔法使いたちは杖に頼りすぎなんだ。——なんて。

「さっさと済ませないとな。マクゴナガルの足留めもどこまでもつか」

「足留め？」

「アンブリッジ現校長さまさ」

ああ、と苦笑する。今回はケンタウロスとの衝突は避けられたようだ。グロウプもおとなしくしているだろうか。

ヴェールの間はまさに総力戦となっていた。トンクスが伯母のベラトリックスへと立ち向かい、ムーディは死喰い人を同時に二人も相手取っていた。キングズリーも二人だ。ルーピン先生はどうか攻撃を受け流しながらトンクスの元へ向かおうとしていた。

——奥に、場違いにも美しいブロンドが二つ見えた。マルフォイ親子だ。ドラコが父へと杖を向けていた。ルシウスも息子に杖を向けていた。ルシウスは無感情な人形の顔を捨てて戸惑っていた。息子の思わぬ実力にだろうか、それとも——息子の一切迷いを捨てた瞳にだろうか。

満身創痍のネビルがアーチの台座の下に転がっている。駆けつければどうにか息はあった。意識も無事のようにだ。

「ネビル、ハリーの予言は？」

「ごわれ……ちやっだ」

鼻が妙な方向に曲がりだくと血を流している。さいわい、僕の鼻の骨は無事だが血濡れはおそろいだ。どうにか抱き起こして流れ弾が当たらぬようネビルを隅へと引きずる。

——と、なれば。今ハリーを守るものはないのか。予言がなければハリーを生かす意味もない。早急に片付けないと。

「マリア、……ぎみ、ぶじだったんだね」

「これが無事な顔かい？　でも、君よりは健康そうだ」

ネビルがどうにか笑おうとしてうめいた。ネビルはもう無理だ。ついていたチョウへと振り返る。

「ネビルを頼んでいいかい？」

「あなた、杖もないのにどうする気？」

「ここだけの話——僕にはちよつとした裏技がある」

悪戯っぽく笑えばチョウは演技かかった仕草で肩をすくめた。

「そんな気がしてたわ。わたしでいいの？」

「僕から武装解除できる実力があるんだ。この僕からだよ？　なにも心配なんてしてないさ」

「まーあ！　なんてお言葉！」

戦火に囲まれた中で笑い合う。互いに強がりなことくらいはわかっていた。それでも——救われる。

立ち上がった。まずはハリーだ。どうにかしてハリーの元へ向かわねば。邪魔な死喰い人を殴り捨ててきとうな杖を拾う。プロテゴで徹底的に被害を抑えながらめちやくちやな足場を進む。

ダンブルドアは来てくれるだろうか。来てくれるはずだ。彼はハリーを愛している。真相は利用価値で結ばれた関係だとしても、間違

いなくハリー・ポッターという個に情を向けている。こんなところでみすみす失う失態は犯さない。——その、はずだ。けれど。

彼だって、人間だ。

「ハリー！」

声を張り上げれば、ハリーはすべてを振り切って僕を見た。彼もすっかりぼろぼろだ。眼鏡なんてどうにか鼻にかかっているだけだ。不安定な足場で、ほとんど前線で荒れ狂う閃光の嵐に耐えていた。

緑の瞳が安堵に揺れた。ともすれば泣き出しそうな顔だ。それから怒りに燃え上がった。

「マリア——そんな、ひどい……ッああ、クソ！ 邪魔だ！ 引っ込んでろ！」

杖を握らぬほうの手でハリーが飛びかかった死喰い人を殴った。ついでに蹴り転がし台座から捨てた。……ワーオ、やっぱり僕たち、根っこは同じだ。

「マリア、そこで待ってて！」

ハリーの声にうなずいて、再び戦況を確認する。ベラトリックスとルシウスが隣り合うような位置にいる。ルシウスの相手はドラコただひとりだ。ドラコの相手もルシウスひとりだ。暗黙の了解でどちらの陣営も親子の戦いには触れずにいるようだった。

トンクスが失神呪文を受けて落ちた。ルーピン先生がトンクスを受け止めた。すぐさま手当てをどこしている。キングズリーはまだ立っていた。ムーディは倒れていた。シリウスは——シリウスは——生きてる。血の気をあふれさせて戦っている。ヴェールからは遠い。間違っただって吸い込まれる位置にはいない。誰もヴェールに近づいてない。大丈夫だ——間に合う。ダンブルドアが来てくれる

まで、このまま耐えればいい。早く——早く——！

「マリアー！」

「ハリーー！」

二方向から絶叫が聞こえた。目の前が弾けとんだ。大規模な爆発が起きたのだ。咄嗟に腕で目をかばえば、鋭利な凶器となった台座の屑が腕にいくつか刺さった。

「ぐっ——ウツ——」

膝をついて。うつすら目を開けると少し先にヒイラギの杖が転がるのが見えた。『僕』の杖だ。ハリーの杖だ。どうして。

「あり、ー!!」

叫んだのはネビルだった。頭を上げる。台座から小さなシルエツトが投げ飛ばされるのが見えた。そして——ベラトリックスがそれに杖を向けた。

だめだ。

だめだ——！

「ハリーッ!!」

「——行かせないわ！」

少女が僕の腕を掴んだ。勢いを殺されて膝がガクリと折れた。隣を男が走った。長髪の男だ。スラリとした男だ。傷だらけだって、やつれていたってハンサムな男だ。『僕』の——名付け親。

「——」

男が走る。ハリーを追って飛び出す。ハリーを抱きしめる。二つの体が宙に浮く。女が嗤う。杖が——緑を。

男は笑った。懸命に親ぶって、大人ぶって、僕たちを子供として扱った男が——子供みたいに。親友に向けるみたいに。

「泣くなよ、マリア。——約束だ」

「アバダ・ケダブラ」

女の声で。

最悪の緑が目を焼いた。

僕にとって、緑の光はなによりも明確な『死』だ。

たとえば事故死。焼死。水死。病死。どの死に様をもってしても、緑の閃光には勝てない。人生で一番はじめに見た『死』だ。もつとも

刻まれてきた『死』だ。

疑いようもなく——彼は死んだと突き付ける色だった。

少女の手が離れた。ハリーが叫んでいる。姿くらましの音がする。ダンブルドアが杖を振り上げる。ハリーが叫んでいる。

シリウスの死を認めて、『僕』が叫んでいる。

「ハリー」

「シリウス……シリウス……うそだ……うそでしよう……？」

「ハリー」

「マリア……僕……僕のせいだ。僕のせいでシリウスが、僕、僕が」

「そうだよ。——僕らのせいだ」

シリウスを揺さぶっていたハリーの手を払う。シリウスは死んでいた。希望をひとつも残すことなく——完璧に死んでいた。

「マリア」

「行っておいで」

「マリア……？」

「あいつは臆病だから、君が出てこないと姿を現さないんだ。ダンブルドアと一緒に行っておいで。シリウスなら僕がみているから」

「マリア——君——」

「行くんだ。ハリー・ポッター」

ハリーは呆然と僕の顔を見てから立ち上がった。そして駆けた。僕は追わなかった。シリウスに——死んだシリウスに寄り添った。

戦場はヴェールの間から移動して、場に残されたのはダンブルドアによって拘束された死喰い人のうめき声と倒れ伏す騎士団員たちの息の音だけだった。

「マリア」

優しい声だ。彼の目には涙が浮かんでいた。とうとう、彼はひとりぼっちになってしまった。

「マリア、堪えなくていい。……泣いていいんだ」

僕はシリウスへと視線を戻した。シリウスは死んでいた。

「シリウスは約束を守ってくれた」

「マリア……?」

「だから——僕も守らないと」

シリウスは緑を抱いて——死んだ。

マダム・ポンフリーからお説教と治療を受けて、ハリーと入れ替わりに僕は校長室へと来ていた。この内装も久々だ。校長席に座るのはマクゴナガル先生ではなく、恩師たちの肖像画も飾られてはいない。

「お掛け、マリア」

ダンブルドアの声は苦渋を慈愛で塗り固めたようににじんでいた。僕は老人の前へと腰かけた。肖像画たちが眠ったふりをして聞き耳を立てているのがわかった。フィニアス・ナイジェラスの肖像画は空っぽだった。

「……ハリーは、部屋を半壊にはしなかったようですね」

「君の知るハリーはそうしたのかね？」
「盛大に」

口だけで笑えば、ダンブルドアも弱々しく微笑みを返してくれた。ずるい人だ。この人は、僕の前ならば弱つてもいいと考えている。僕にまで背負わせようとしている。僕が——あなたを愛し許していることを知っている。僕にとつてのドラコのように——僕を共犯者に仕立て上げようとしている。

そして、それを僕が拒絶しないことを知っている。

「ハリーに話した。ヴォルデモートとの繋がりのはじまりを。……無論、君は知っておろう」

「はい。あなたよりも、きつと。あなたの確信の少し先まで」

「わしを恨んでおるかね。わしは失敗した。そして君の愛する兄弟を追い詰めた。——君から、愛するものを奪った」

「——いいえ」

まだきしんでいる気のする首を振る。この対談が終わればまた入院だ。ハリーと一緒にすっかり常連である。マダム・ポンフリーのお説教もそろそろおざなりだ。

「あなたも許されるほうが苦しいでしょう。だから許すし、恨まない」

ダンブルドアは老人らしい顔で疲れきったようにうなだれた。

「マリア——君は、わしをよう知っておる」

「ええ。よく知っています。なにより—— 今回も、僕の失敗なんだ」

ダンブルドアの目はいたみに潤んでいた。

「僕がへまをした。僕が彼をおびき出した。僕が——ハリーたちを危険な目に遭わせた」

「マリア」

「言わないでください。どうしようもなかったただとか——君のせいじゃないだとか——そんなのはほしくない。それは優しさじゃない。あなたはそれをよくご存知でしょう」

沈黙。肖像画たちすらも息をひそめる重みで部屋は満ちていた。

「お互いに——失敗しました」

それこそが真実だった。ダンブルドアは失敗した。僕は失敗した。
——過つのはいつだって『僕』だ。

「——じゃが、ルシウスは救えた。そうじゃな？」

「——」

大きく顔をあげた。もうダンブルドアの目に涙は見えなかった。

「ドラコはうしなわなかった。すなわち——彼は勝利した」

「ええ……ええ、彼は決して手放さなかった」

よそ見なんてせず、一心に求めて——そして奪い返したのだ。ドラコは件の戦いにおける唯一の勝者だった。

「救いじゃ。それは……わしらにとって大きな救いとなる」

「……はい」

拳を握りしめる。うなずくしかない。だって——泣かないと約束したんだ。たとえ、それがあなたに届くことはなくても。

「マリア、君は優しい子じゃ。わしは君だって愛しておる。君が絶望を見ないよう、君が健やかにその時までであるよう、祈っておる。願っている。愛している。こんな老いぼれで代わりになれるならば命とて惜しくはない。君たちは——愛しい。じゃが、しかしそれでも君は『予言』に向かって、」

「——予言？」

はた、と、空気は硬直した。ダンブルドアは目を見開いていた。僕はさらに開いていた。

予言？ 予言だって？ —— 僕に？

「どういうことですか。予言って……僕に？ マリアに？ それは、確かに？」

「……知らぬのか？」

「僕——僕、ハリーの予言は知ってる。七つ目の月が死ぬときに生ま

れる子供。三度、帝王に抗った両親から生まれる子供。それを——帝王が自ら選んだ。印を刻んで」

「そうじゃ」

「一方が生きるかぎり、他方は生きられない——ハリーとヴォルデモートは、最後には互いを殺し合わねばならない」

「その通りじゃ」

ダンブルドアは動揺していた。人間らしい顔だった。

「それで——トレローニーの予言は、それだけじゃなかった？」

「まったくその通りじゃ、マリア」

再び、沈黙。言葉もないのに場は混乱の極みにあった。

「マリアの予言——それは、ハリーに関わるものなのですか——？」

「そうとも言えるし、そうでなかったかもしれない。正確には『生き残った男の子』に関わる予言じゃ」

ダンブルドアは杖を取り出していた。こめかみ辺りへと杖先を当てた。そして——ためらった。幼い子に対してひどくむごい事実を告げるような——いたいけで無垢な生き物に残酷な行為を働くような——そんな顔で押し黙っていた。

「先生」

「マリア、わしは君を愛しておる」

「ダンブルドア先生」

「愛しいのじゃ、君たちが。これ以上、どうして苦しめられよう」

「ダンブルドア先生！」

癩癩と同時に責め立てれば、ようやっとダンブルドアは記憶の糸を引き出した。情けないほど弱々しい銀糸が憂いの篩へと吸い込まれ

ていった。

「わしは——君は 知^らずだと思つておつたのじゃ」

トレローニーの声が語りだす。

——分かつ男女の子供。元はひとつの子供。少女は寄り添うだろう。闇の帝王を打ち破る力を持った者に、少女は死するときまで付き添うだろう。彼女は死を抱き締めるだろう。

一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ。分かつ子供たちは、同時には生きられぬ——

「『生き残った男の子』の近くにある男女の双子は——君たちだけじゃ」

静寂だった。自身の心音すらも嘘くさくて、肖像画すら狸寝入りを忘れて聞き入っていた。ダンブルドアは苦悩の表情にあつた。

マリアは。

「僕は——ハリーのために、死ななければならない?」

ピイピイ鳴くみにくい雛のフォークスだけが間抜けに返事をくれていた。

分かつ子供——ホグワーツに存在する双子が僕たちだけなわけではない。ウィーズリーの双子がいる。パチル姉妹だつて双子だ。けれど、どちらも同性の双子だった。そして——たとえ『生き残った男の子』がネビルだつたとしても、僕は共に歩いていた。『生き残った男の子』に付き添う双子の女の子は——^{マリア}僕だけだ。

「だから——」

僕は立ち上がった。

「だから、僕を排除しなかった？　こんなに怪しい人間を——『生き残った男の子』であるハリーの側から？　あえて対になるよう見逃していたんですか？　ハリーの危険はマリアが背負うものなんだと、そう、あなたは思っていたのか」

「わしは君は承知の上なのだと思っていた。まさか——まさか——君の献身はただその心からだけだったとは——兄弟を想う心だけだったとは——」

「僕は——僕もまた、家畜のように育てられてきたのですか？」
「ちがう！」

ダンブルドアも立ち上がった。ダンブルドアは再びくたびれきつた老人のように、今にも崩れ落ちそうに見えた。それでも——彼にはそれが許されない。みながダンブルドアを求める限り、ダンブルドアという絶対の庇護を盲信する限り、ダンブルドアは心を無にして応えねばならない。

ハリー・ポッターが『英雄』であるように。

「それでも——君たちになによりも幸せであってほしかった」

ダンブルドアのからがらの叫びに咄嗟に口を抑えた。そんな綺麗事——飛び出しかけた罵倒を手の中で唇を噛んで耐える。

なにがちがう。僕と彼と——なにがちがうというのだ。僕らは互いに、互いを刺す剣を持つことはできないのだ。

「マリア……」

どうにか唾と共に激情を呑み込んで、ダンブルドアの前へと立つ。声はいっそ無感情的ですらあった。

「言ってください」

「マリア」

「あなたの口で、言ってください。誰かに託すのではない、あなたの口で。——しかるべき時に、死ねと」

「——」

スネイプ先生に預けるだなんて、そんなずるい真似はしないで。あなた自身が噛みしめるのだ。——僕たちが生きていて、愛する人に生きながらに死を望まれている残酷を。僕たちが人間として生きていくことを。

僕とあなたに——逃げ道は許されていないことを。

ダンブルドアは罪過にあえいだ。

「マリア——どうか——どうか——」

痛みを知るダンブルドアは——人間だ。

「ハリーのために、しかるべき時に、死んでおくれ」

僕は。

「——はい」

僕は、笑った。笑えた。よどみが拭われた心地だった。喉にへばりついていたどろどろを胃の底まで押し込んだ。消えず、蓄積した。

これでいいんだ。……今は、これだけでいい。

「すまぬ、マリア……マリア……どうにもできぬ老いぼれを、許さんでくれ」

「いいえ、許します。だからいっばい苦しんでください」

ダンブルドアのキラキラしたブルーアイから涙がこぼれ落ちた。この人は——こんなにも人間なのに。

「ダンブルドア先生。あなたを愛しています」

「マリア……」

「あなたに果てしない恩義を感じています。あなたの心を受け継いでいます。……こんなところまで」

目の前の老人の肩を抱いた。ハリーであつた頃よりもダンブルドアを大きく感じるはずだ。なぜならこの身はハリーよりも華奢なマリアなのだから。けれども——なんてちいさな肩だ。この人は人間だ。

「だから、特別です。先生にだけ、特別ですよ。よく聞いてくださいね。——ハリーは、三人の子宝に恵まれました」

「——」

「ひとりはやんちゃな男の子、ジエームズ・シリウス・ポッター。二人目はおとなしいけど頑固なところはそっくりのアルバス・セブルス・ポッター。三人目は甘えん坊のお姫さま、リリー・ルーナ・ポッター。みんな、かわいい子供たちです」

「……ハリー、は」

「ハリーは幸せに生きました」

「……っおお、おお……」

背にダンブルドアの手が寄せられる。誰かのために生きる人は——いつだって自分自身を罰している。誰かが許してやらねば、永遠に心は血濡れのままだ。

「さあ、先生。しっかりしてください。あなたはアルバス・ダンブルドアなのだから。あなたを慕い、あなたの名を継ぐ子が未来にいるのだから。アルバス・セブルスが失望しないよう、もっと隙のない姿でい

てくれないと」

「……手厳しいのう」

ダンブルドアの手が離れた。ダンブルドアの涙は笑顔の向こうへとなくなっていた。

「先生の話が長いものだから、僕、すっかりお腹がペコペコなんですよ」

「老人の話は得てして長いものじゃ」

「それは学期終わりの挨拶だけで十分です。……マダム・ポンフリーは大広間に行く許可をくださるでしょうか」

「はてさて、当分、ごちそうはお預けやもしれんのう」

「口添えはしてくださらないと?」

「わしも女史にはめっぼう弱くての。頭がほれ、この通りじゃ」

ほとんど首なしニツクのようにガツクリ頭を落としたダンブルドアにクスクス笑う。

大丈夫、笑えるとも。あなたと約束したから。——泣かないと、約束したから。

「マリア」

取っ手に手をかけたところで、ダンブルドアの声がやわらかく僕を呼んだ。

「君は——」

ダンブルドアはその後に続く言葉を完全に呑み込んだ。そして慈愛の目で問うた。

「もしも死者に会えるとするなら——君なら、どうする」

僕は答えた。

「もう、会えました」

この世界は奇跡でできている。——奇跡の中に、僕たちは生きていく。

校長室を出てすぐ、黒髪の少女に会った。神秘部での戦いの中、もつとも軽傷だった彼女はマダム・ポンフリーの入院の刑から逃れることができたらしい。ところどころ包帯を残しつつも、美しさを損なわない凜とした姿で立っていた。

「やあ、チョウ」

「こんなところにいたのね。わたし、ついさっきあなたのお見舞いに行ったのよ」

「戻るところだったんだ」

雑談を交えて自然と廊下を共にする。ふと、アンソニーを思い出した。こんなふうに行くのは彼とが多かった。そして、途中でドラコが邪魔をして——

「……………」

「……………」

気まずい。いつまでも脳内にはかり逃げてはいられない。立ち止まった。チョウも立ち止まった。

彼女は知らない。知つたとすれば、どう思うだろう。——君が懸命に守るマリアは、生まれた瞬間から死を決定付けられていたのだと。

「——わたしを恨んでいるでしょうね」

沈黙を破ったのはチヨウだった。

「わたし、彼が誰だか知ってるわ。新聞で何度か見たもの。シリウス・ブラック——あなたたちの、親……のようなもの、だったんでしよう」
「うん」

「わたしが止めなければ、間に合ったかもしれないわね」
「……………」

「でも、あなたは死んでいたかもしれない」

「——っそうじゃなかったかもしれない！」

自身の声が人のいない通路に反響して、ハッと息を呑んだ。チヨウは凪いだ目で静かに僕を見つめていた。

「それでも、わたし、同じことをするわ。何度だつてくり返すわ。何
度、同じ場面になってもあなたを引き留めるわ。あなたが絶対に死な
ない方法を選ぶわ。だから——謝らない。あなたには謝らない」

チヨウは、泣いていた。

「わたしを恨んでいるでしょうね」

「チヨウ……」

「わたしたち——同じ場所に立ってしまったのね」

美しく泣く彼女の頬へと手を伸ばす。こんなふう泣かせてしまつて……君に怒られるだろうか、セドリック。

僕が結局、その手からすり抜けてしまったなら——やっぱり君は泣いてしまうのだろうか。

「どうして、君が泣くの」

「あなたが泣かないからよ。わたしは泣いたわ。たくさん泣いたわ。泣いて受け止めたわ。あなたが受け止めてくれたんだわ。——でも、あなたは泣かない」

「チヨウ」

「だからわたしが泣くの。さあ、ほら、わたしを泣き止ませたかったら泣いてごらんなさいよ」

「めちやくちやだ」

濡れる頬を指でぬぐう。何度ぬぐったって綺麗な真珠はこぼれていく。泣くどころか——こんなの、笑ってしまうじゃないか。

「やっぱり泣き虫だなあ、君」

「知ったふうな口を利くのね」

「実は、よく泣く君を知ってるんだ」

「セドリツクから聞いていたんでしよう」

「当たらずといえども遠からずかな」

とうとう本格的にしゃくり上げ始めてしまった彼女に苦笑する。彼女のほうが年上で、身長も高くて大人っぽくて、ハリリー・ポッターの頃からの憧れで——そんな人が鼻も耳も真っ赤にして泣く姿はほしいものを得られずだをこねる子供みたいだった。

「泣いてちょうだいよ。見てられないわ」

「泣かないよ」

「どうして」

「約束したんだ。……泣かないって、約束したから」

「そんなの——そんなの、呪いだわ」

チヨウは大声で泣いた。その声は遠くの誰かを責めているようだった。

僕のために——誰かを責めていた。

やあ、おかえり。心做しか薄くなったような気のするブロンドの彼にヒラヒラと手を振る。

「……ずいぶんやられたな」

「君の伯母さん、ほんとうにおそろしいよ」

茶化せば、軽く額を小突かれた。それだけで世界が揺れた気がした。受け身も取れず看護ベッドへと沈む僕に、焦るドラコにほんの少し意地悪な気持ちで湧いてわざとらしくうめいた。

「ああ、ひどい。今のがトドメになった気がする。彼女の患者を殺したとなったら、マダム・ポンフリーに地の果てまで追いかけられるぞ」「やめろ。洒落にならない——件のマダム・ポンフリーは？」

「出てるよ。みーんなが寝たからね」

行儀悪く顎で隣を差す。僕以外の患者たちはすっかり夢の中だった。僕の隣はハリーだ。向かいはロン。その隣がネビルで逆隣がハーマイオニーだ。ジニーとルーナは事件の翌日には退院していた。——つまり、実質僕らは今、二人きりなのだ。

僕の言葉の意図を正確に読み取ったドラコは素早くカーテンを引いた。薄っぺらな布で空間を切り取って、流れ作業で防音魔法をかければ簡易報告室のできあがりだ。

「ひさしぶり、と言うべきかい？ 親子水入らずは楽しめたかな、ドラ

コ坊っちゃん」

「うるさい」

ドラコに小突かれた額を今度はドラコ自身によって撫でられる。

子供たちが熱を出した時の『僕』のジニーのような手つきだ。幼少の頃にナルシツサからこのようにあやされたのだろうか。

「……ルシウスは、ちゃんと生きてるんだね。すっかり死喰い人たちの証言で死亡者扱いになってるけど。——案外、上手くいくものだ」
「……ああ」

ドラコはどことなく放心気味にうなずいた。

——すべては、彼が僕に『告白』した一年前から始まった。

ホグワーツの生徒たちも、そしてその親たちも多くいる駅を舞台に選んだのには訳があった。——牽制だ。ドラコは牽制したのだ。闇の陣営に与するものたちに。そして自身の両親に。ドラコ・マルフォイはポッター家に関心を持っているのだと知らしめた。

だがしかしマルフォイ家そのものは闇の陣営に近い存在だ。ゆえに——ドラコは不安定な『中立』の立場を得られた。

ホグワーツでの態度も拍車をかけた。ドラコ・マルフォイがマリア・ポッターに告白する場面を多くのものが見た。だというのに当の本人たちはまるで親しくする様子がない。いつそよそよそしいほどだ。どうなってしまったのか。ドラコ・マルフォイは、どちらなのか

混乱は子供から親へと伝わり闇の陣営そのものを巻き込んだ。

スポンサーであるマルフォイ家のただひとりの子息だ。大切にしなければならぬ。だがしかしポッター家に肩入れしているかもしれない子供だ。ならば排除しなければならぬ。

ドラコは絶妙に『どつちつかず』を利用した。自身が死喰い人として目をつけられることも、また邪魔者として処理されることも避けた。それはまさしく一つの判断が死を招く命がけの駆け引きであった。

では、なぜ、それほど危険な橋を渡ったのか——ルシウス・マルフォイただひとりのためだ。

このままではルシウスは神秘部での作戦失敗を機にアズカバンへと投獄されてしまう。それによつてマルフォイ家の闇の陣営内の権威は極端に落ち込み、結果、子供のドラコがとんでもない尻拭いを課せられることとなる。

ドラコはどうしても避けたかった。家族の不幸を。自身の悲惨な末路を。——そして、ひとつのシナリオを計画した。

ルシウス・マルフォイの悪事をその手で阻止する息子というシナリオを。

ルシウスをある程度まで成功させ、ヴォルデモートにルシウスを信用させた上で神秘部にてドラコがルシウスを打ち倒す。可能ならばルシウスを 殺すように見せかける。そこまでしてようやく、ルシウスは解放されるのだ。

死喰い人たちにチームワークは存在しない。役立たずも怪我人も死人も切り捨てていくのが彼らだ。魔法省とて死人までは追う余力はないだろうし、仮に身柄を確保され裁判へ起き上がったとしてもドラコの働きから情状酌量の余地は十分にあるだろう。どうあつてもルシウスはドラコの手で 死なねばならなかった。

それらが叶えば、あとは時が来るまでルシウスを世間からかくまうだけだ。——そこで活躍したのが『忠誠の術』とマルフォイ家の別荘であつた。別荘の在処を知るのは僕とドラコ、管理していた家のもの、最後にナルシッサのみだ。あらかじめ僕の筆跡で住所をしたためた紙をドラコへと持たせ、無力化したルシウスを連れて別荘へと向かえば、晴れて死人のルシウスを囲む檻は完成した。

これほど壮大な計画を、ドラコはただひとり内に秘めて決行したのだ。

相談する相手もマリア・ポッターを除いてたったのひとりもいない状態で——ドラコ・マルフォイはやり遂げた。

ナルシッサにだつて別荘の話を持ちかけるまで騙しきつた。そうするしかなかった。——ヴォルデモートは優秀な開心術者なのだから。どちらの心にもドラコへの愛情を染み付かせるわけにはいかなかった。徹底的に親との不仲を演じるしかなかった。

「いったいどんな目眩ましをしたんだ？ まさか本気で——死の呪文を放ったわけではないだろう？」

「……ああ」

すっかりくたびれた様子のドラコはためらいがちに答えた。

「ベラトリックスが唱えたのに合わせて失神呪文を使ったんだ。おそらくそれが、周囲には僕も死の呪文を放ったように見えたのだろう」

「……そう、仕組んだくせに」

「ご名答だ。——チャンスだと思ったよ。そのあとは事前の打ち合わせ通り混乱にまぎれて屋敷付近まで姿現しをして、父上にお目覚めいだだいてから別荘で待機していた母上へと引き渡した。ホグワーツまでは母上の手を借りた。あんなめちゃくちゃな状況にあったんだ。誰も僕が消えたことになって気づいちゃいなかっただろう？」

「ダンブルドア以外はね」

「……はなからそのご老人は数に入れてない」

ドラコのダンブルドアへの苦手意識をひしひしと感じて小さく吹き出す。どちらの声にも覇気はなかった。

「……君は、利用したんだ。シリウスを殺した光を」

「ああ」

ドラコはうつむいていた。目を閉じた。なんだか刑を待つ罪人のような顔だった。

「ドラコ」

背を起こす。何度もベラトリックスの拳によって揺すられた頭を動かさないよう、時間をかけながらドラコへと向き合う。

「ドラコ」

「なんだ」

ドラコは目を閉じたままだった。……殴ってなんか、やらないよ。

「——がんばったね」

瞬間——長く透き通った睫毛を押し上げて水面のような瞳が現れた。波紋を中に浮かべるように瞳は揺れていた。

「マリア」

「君、すごくがんばったよ。僕が手助けしたのなんてほんの少し。ぜんぶ、君がやった。——君がルシウスを救った」

「——がう、ちがうんだ、父上は」

ドラコは声を震わせた。

「父上は、ずっと、僕を」

ドラコは優秀な閉心術の担い手だ。それは、彼が真から『子供』であった頃から揺るがぬものだった。ならば——ルシウスだって、彼の自身の心を殺す覚悟は本物だったのだ。

「父上は、僕を愛してくださっていた」

「うん」

「あの人の目が僕へ向かないよう——僕は一度、殺されかけているから」

「そうだね」

「ダンブルドアと交渉して——僕のために、危険な任を——スネイプ教授のように——僕のために。僕を見守ってくれと、ダンブルドア

に」

ダンブルドアがかつて告げた言葉——「君の勇気に見合う対価なら
すでもらっておる」

それを支払うものこそが、ルシウス・マルフォイだったのだ。ルシ
ウスはスネイプ先生に続くスパイとして息子の命を守っていた。

「私は——父に愛されていた」

「ルシウスはドラコが大好きだよ」

ビリビリと嫌な痛みを訴える腕を持ち上げてドラコの頭を胸に抱
く。

「よくがんばったね、ドラコ。君、すごいよ。君たちの未来は明るいと
も。それは、君が——君がその手で掴んだ未来だ。君が愛する人たち
を救ったんだ。……弱虫の、意気地無しの、臆病者のマルフォイが」

ドラコの手が僕のパジャマを握りしめる。背中まで回って、無遠慮
に締め付ける。肩は震えていた。胸にかかる息も震えていた。じわ
りと彼の目と触れる部分がしめつた。ドラコは一年間ものあいだ抱
き続けた恐怖を、孤独を吐き出すように泣いていた。

「……リー、ハリー」

「なんだい、ドラコ」

「ハリー……っ」

情けない涙声で僕の名を呼ぶ、子供のような彼の背を撫でる。

「私……でも、こんな、私でも、私にも、誰かを——私が、」

「君があの日スコルピウスを救ったし、今日のルシウスを守ったん
だ。どこの誰でもない。もちろんハリー・ポッターでもない。——君

だよ、ドラコ・マルフォイ」

殺しきれない嗚咽がしめった布の貼り付く肌を撫でた。ドラコは泣きじやくった。十五歳みたいに。子供みたいに。もうひとつの人生を生きるドラコ・マルフォイははじめて年相応に泣いた。押し殺した涙じゃなく、声を上げて泣いた。

十五歳のドラコ・マルフォイはここに生きていた。

今学期最後の夜だ。とても学期末パーティーに出る気分にはなれなくて、荷造りをするふりをして寝室へと閉じこもった。みんなが無事に退院し、アンブリッジもいなくなったホグワーツはほがらかで日常にあふれていた。その中で笑う僕は——パペットショーのように嘘くさかった。

建前上、荷造りと称して追い出したのだからと、のろのろと嘘をまことにする。トランクにくしゃくしゃのまま服をつめる。ローブがしわくちやになってしまおうとかまわなかった。

ふと、荷物に潰され妙な模様を作っていたベッドシートに巻き込まれる形で小物が落ちた。両の手のひらに収まるほどの箱だった。

「——あ」

ドラコからのクリスマスプレゼントだ。好きな人の歌声でうたうというオルゴール——

荷造りからすっかり意識がそれて、惰性的にネジを回した。カラカラと透き通った音色が流れ出す。

はじめに歌い出したのはやはりハリーだった。自分の歌声はこんなだっただろうか——妙にくすぐったくて小さく笑った。次はロンだ。まったく調子外れの音程でクリスマスソングを熱唱していた。ロンらしいと思うと同時にロンには聴かせられないなど笑った。

うっかり拗ねられかねない。次はハーマイオニーだ。程好く音程の取れた綺麗な歌声で、教会のミサを思い出した。その次はジニー、ネビル、アステリア、ルーナ……様々な仲間たちの声に包まれて少しづつ心が浮上する。羽ペンや教科書なんか散らばったままのベッドへと腰を落ち着けて、愛しく愉快なオルゴール撫でる。そして、クリスマスソングも最後のフレーズに差し掛かった頃。

「——あ」

その、声は。

グリモールド・プレイスをクリスマス色に飾り付けて、鼻唄まじりにもみの木を置いたりして、心做しか赤色が強いモールをそこかしこに引っかけて。

楽しそうに、彼が歌った——声。

「あ、あ——あ、」

彼が歌っている。彼の声が歌っている。たぶんそのつもりになればものすごく上手いのに、恥ずかしそうにわざと下手くそっぽく鼻唄で歌っている。

オルゴールにパタパタと滴が降り落ちた。

もうその声はどこにもないのに。

彼は、歌わないのに。

彼の声は永久に喪われたのに。

歌声が。

「ああ、あ——あ——あ」

ぼろぼろと、あふれる。とまらない——とまらない——歌声が、止まない。

「あ……………あああああ……………」

オルゴールを手の中で懸命に握りしめた。そうしなければ、なくなってしまう気がした。

「シリウス」

無理だよ。

「シリウス」

やっぱり、僕には無理だ。

「シリウス……………」

身を屈めて、オルゴールを抱え込んで。彼の声を抱き締めた。

「泣くな、なんて——嘆くな、なんて————そんなの、無理だよ。シリウス」

あなたがないのに。

あなたは、いないのに。

「シリウス」

声は、もうマリアとは呼んでくれない。

不死鳥の騎士団【番外編】

偽親子の日常の話

大荷物を抱えて、新居の各個人部屋へと案内された少年少女はあんなぐりと口を開いた。

「こ、これが一人部屋……？ この広さで？」

「ダドリーの部屋よりも大きいよ……」

身長以上の高さがある窓にシャンデリアの天井、天蓋のベッド、艶々で新しい家具。不遇の生活を強いられてきた双子の目には何もかもがまぶしかった。荷物を置いて二人で小動物のようにそこかしこを確認する姿は、ハーマイオニーいわくの子リスと子ウサギそのものだった。

愛し子たちのほほえましい反応にほっこりしつつ、シリウスは室内にあるもう一つの扉を開いた。

「ここからマリアの部屋へもいける。もちろん、どちらからでも自由に鍵をかけられる」

「部屋伝いな？ はじめて見た！」

「わざわざ廊下に出なくてもすぐに会えるんだ！」

「夜にはちゃんと鍵を——て、聞いてないな」

二人で飛び出すように隣へ移動した子供たちに大人二人が苦笑していたらば、子供たちはどことなく物言いたげにハリーの部屋へと戻ってきた。特にマリアの形相だ。猫のようなはつきりとした目を不満に細めてシリウスを見ていた。

「マリア？」

「……シリウス、僕、十四歳なんだけど」

「うん？ 知っているとも」

「マリアの部屋にしてはかわいすぎるね……」

ハリーの控え目な通訳に、リーマスはほらみろ、とばかりにシリウスを小突いた。

「言っただろう、シリウス。これはやりすぎだつて」

マリア専用として与えられた扉の向こう——そこに広がっていたのは純白のフリルとレースの海だった。基本的な構造はハリーの部屋と変わらないのに、キラキラ具合がまるでちがう。外見はともかく乙女から程遠い精神のマリアにとって、この空間で暮らす自分など想像するだけで罰ゲームの気分だった。

「女の子はああいうのが好きなんじゃないのか？」

「僕を女の子と思わなくていいから……」

「マリアを女の子と思わないほうがいいよ」

双子から切実に訴えられたシリウスはちよつとだけしよんぼりした。

「俺の従姉妹たちの部屋はあんなかんじだったんだが……」

「マリアとブラック家のご令嬢たちと一緒にするのは酷だよ。君は張り切りすぎだ。ほら、あの……クローゼットの中だつて」

——クローゼットの中？

嫌な予感があったマリアは部屋へと戻り（目が痛い！）慌ててクローゼットを開いた。そこには。

ふあさあ……

目の前を白やらピンクやら黒やらのヒラヒラが踊っていた。

「……シリウス……」

「マリア、いいことを教えておいてやろうね。それ、こいつのただの趣味だから。こいつが君に着せたくて勝手に詰め込んだだけだから気にしなくていいよ」

「あつ、お前、それは内緒だつて！」

「シリウス……」

じつとりとしたハシバミと緑の視線がいたい。さすが双子、こんな時ばかりそっくりである。

扉を閉めて、ファンシーでフェミニンなドレスたちを強制シャツアウトしたマリアは宣言した。

「僕、スカート、着ないから」

誰もがわかっていた事実だ。マリア・ポッターは女性らしい装いが嫌い——有名な話だ。それこそ制服ですら我が儘を通す頑固さなのだから。だがしかしシリウスも諦めきれない。

「一度着てみればオシャレに目覚めるかもしれないじゃないか。君たちが望むのなら、私はなんだつて買ってやるぞ」

「許してやってくれる？ マリア。このバ……君のおじさんは君たちに貢ぎたくてしかたないんだ」

「リーマス、変な言い方をするな！ お前はどっちの味方だ！」

「ハリーとマリアだけど？」

学生のようにじゃれ合う大人に、子供二人は顔を見合わせてがっくりと肩を落とした。

——これは、随分と楽しい日々になりそうだ。

夜になって、クローゼットの中を見なかったことにしたマリアは、長年愛用のパジャマへと着替えてうなっていた。

……………これに、横になるのか？

ハリーと同じ天蓋ベッドだ。だがしかし明らかに『同じ』なんかではない。ニフラーやパフスケインのぬいぐるみが敷き詰められた枕元に、枕そのものはフリルでいっぱい。花柄のかけ布団にレースのカーテン、豪華なベッドフレーム……見た目がうるさすぎて睡眠どころではない。

大きいため息をついたマリアは迷うことなく扉を開いた。

「一緒に寝よう、ハリー」

「だと思った」

扉一枚の境はあっさりと越えられた。二人で寝転んだってまだまだあまりあるベッドに黒髪と赤毛が散らばる。こちらはシンプルな色合いでまとめられているというのに……魔法界の王族はさすが常識がぶっ飛んでいる。

「シリウスに怒られるかな」

「知らない。あの部屋をどうにかするまで僕の部屋はここだ」

「これに関しては頑固だね、マリアって。僕としてはちっともかわわないんだけど」

ハリーは慣れた体温を慣れたふうに抱き寄せた。ホグワーツでは男子寮女子寮と分かれて生活する二人だが、今日は兄弟がいなければ眠れないような気がしていたのだ。

マリアもまた、愛しい体温にすり寄った。もしも悪夢がやってきたとしても——この手があれば帰ってこられる。

「おやすみ、ハリー」

「おやすみ、マリア」

額に唇を落とし合って、子供たちは安らかに目を閉じた。

「——やっぱり、こうなるか」

カンテラを片手に、家主は同じベッドに丸まって眠る子供を確認して嘆息した。その目は困ったふうでありながら慈愛に満ちていた。

なにもシリウスとて、思春期とはいえ男女の兄弟に対して『間違い』を邪推しているわけではない。この子たちの仲の良さに関しては多
少思うものもあるけれど、ベクトルは疑いようもなく家族愛だろう。

だがしかし——それではいつまでも自身の性に対する自覚が
ない。特に、女の子の MARIA だ。この子は気を許した相手に対して無
防備過ぎる。

「まったく……」

まくれてしまっている上掛け布団をかけ直す。そのまま、子供の顔
で眠る少女をシリウスは優しく撫でた。

実際のところ、MARIA が無防備であるというのは正解であり不正解
だ。身内でない人間の前では MARIA は不眠不休で警戒する。それは
ほとんど本能や無意識の域だった。だがしかし、ハリーやシリウス、
リーマスなんかは身内筆頭であるため、警戒されるはずもないだけな
のである。

「んん……」

ぐずる MARIA に、ハッとシリウスは手を離した。子供たちの寝顔が
あまりにもかわいくて、あやすのに夢中になっていた。

決してシリウス自身が子供好きというわけではない。親友夫妻の
忘れ形見だからこそ、愛しきは際限なく募っていくのだ。

「すまない、起こしたか？」

「シリウス……」

マリアは舌つたらずに目の前の人を呼んだ。ふにやふにやに溶けたハシバミの瞳はカンテラに照らされべつこう飴のようにも見えた。

「ごめんなさい」

「うん？」

「ひとりで寝なかったから」

「ああ……今日は特別だ」

寝ぼけながらも哀れっぽく眉を下げるマリアを宥めていれば、その手は件の少女に取られていた。

「マリア？」

「とくべつ？」

「うん？」

「今日はとくべつなの？」

「まあ……初日だからな」

「そっかあ」

マリアがハリーとのあいだを手で叩く。勝ち気な瞳は依然とろけたままだった。

「じゃあ、こい」

「……ん？」

「シリウスはこい」

「……マリア？」

「今日は特別なんでしょう？ ……一緒に寝よう？」

シリウスは唾然としていた。この子は寝ぼけている。そんなのはわかっている。だがしかし服を掴むこの強さはなんだ。ちつとも放さないぞ。これも寝ぼけているがゆえか！

「マリア……いくらその、なんだ、君たちの親代わりとはいえ」

「シリウス、今日は特別って言った」

「言ったけれども」

「シリウス……」

「……………」

結果。今は亡き親友の瞳を持った少女のいたいけな懇願に、自称親代わりは屈した。――犬の姿でもぐり込むという最低限の抵抗を示しながら。

「おやすみ、シリウス」

……バウ。

満足そうに瞳を閉じた少女へ唸るように答える。少女は大好きな親代わりの毛に鼻をうずめながら再び眠りへと落ちていった。示し合わせたかのように少年もすり寄ってきて、あいだで黒犬はクウンと情けない声を上げるのだった。

「……………へえ、これは中々」

翌日、ブラック邸のもう一人の同居者リーマス・ルーピンはその光景を目にして悪戯っぽく笑った。眠っているあいだに解けてしまったらしい変化によって、中央の大人が子供二人を腕枕している姿は、なんとも間抜けでほほえましかった。

「初日からすっかり親子じゃないか」

偽親子のちよつと困った日常の話

話し声だ。風呂上がりには自室へと戻る途中の廊下で家族二人の声を拾った。マリアは扉を見た。自室の隣の部屋だ。つまりはハリーの部屋だ。中にいるのがハリーとシリウスならば、マリアに遠慮なんてものは存在しない。

ガチャ。

「ハハーン、やっぱりロニー坊やは綺麗どころがお好みか。そんな気はしてたんだ。俺としてはこつちがイイな。女は出るところ出てねーと」

「僕はマリアを見慣れてるから体型はそんなに気にしないけど」

「わかってないな、ハリーは。もちろんマリアくらいサイズの揉んで育ててやるってのも男のロマンだが、乳はでかければでかいほどいい。顔を埋めてみる。天国だ」

「それ、シリウスだから言えるんだよ。僕はそれよりスラツとした脚……が……」

緑の目が片割れをとらえる。異性の兄弟は何喰わぬ顔で男たちの側へとしゃがみ込むと、小首をかしげてニッコリ笑った。

「続けていいよ。ちなみに僕は一番左の娘が好みかな。ロングの赤毛って最高だよね」

「マリア！」

いわゆるセクシャルな雑誌を抱えてハリーは飛び上がった。シリウスは冷や汗を流していた。

「ち、ち、ちがうんだ！ あの、これは、ロンが、むりやり！」

「ああ、やっぱり？ ロンの好きそうな表紙だと思った」
「なんで知ってるんだ!？」

今度は別の意味でシリウスが飛び上がった。やっぱりあの赤毛のノッポ、マリアを狙っていやがったのか！

「うん？ まあそれはおいておいて」

「おいておくな！」

最愛の少女に情けないところを見られてしまった男二人は心底慌てた。こんなもので軽蔑されてはたまらない。いたたまれないにも程がある。マリアが入浴中だからと油断していた。マリアの目に触れさせる気なんてこれっぽっちもなかったのに！

——だがしかし、男二人の心配をよそに、マリアは聖母のような顔で微笑んでいた。マリアはそもそもが普通の『少女』ではないのだ。

「隠さなくてもいいさ。父さんはちゃんとわかってるから」

「へ?」

「いや、こっちの話」

マリアの頭の中にはかつての我が子たちが浮かんでいた。ジェームズが兄貴ぶってはアルバスを猥談に付き合わせて、フレッドがそれに悪ノリしてたまにスコープウスを巻き込んだりもして——そして女の子のリリーが近付けば、普段の仲の悪さが嘘のように団結して『ソレ』を隠すのだ。

まさしく現在のシリウスはジェームズ・シリウスに、ハリーはアルバス・セブルスにそっくりだった。つつい、自分を父さんなんて呼んでしまう始末だ。仮にマリアが女性でなかったとすれば、まるきり父親のような顔をしていたことだろう。

「そうかそうか、ハリーもそんな歳なんだな」

「君と同一年だよ」

「僕がいると気まずいかい？　姉さんは弟の思春期くらいお見通しだからね」

「僕が兄だ。そしてもう黙ってて」

ハリーは真っ赤になってシリウスの元へと逃げ込んだ。シリウスとしても、ふわふわの黒髪を撫でながらなんとも複雑な気分だった。まさかこの豪快な少女が女の子らしく悲鳴を上げるだとかを期待していたわけではないが……男の猥談を優しい目で女兄弟に見守られてしまったハリーの気持ちを思うと、自分まで死にたくなる。

「シリウスはでかければでかいほど良しか……ルーピン先生はお尻とか好きそうだよ。ちなみにドラコは面食いだよ。本人は気にしない風にしてるけど、あれは間違いなくおっぱいが好きだね」

「マリア、マリア、そこまでにしてやりなさい。ハリーが泣いてる。あとおっぱいとか言うのはやめなさい」

シリウスはうなだれていた。一体どうすればこの子に女の子としての憤ましが生まれるのか。……もう手遅れか。

「なあんだ。僕はのけ者なの？　さびしいなあ」

「マリアは女の子としてよ！」

「女性にこんな話できるわけないだろ。セクハラじゃないか」

「マリアの基準がわからないよ！」

「まあ……まあ……君たち、落ち着きなさい……」

キャンキャンわめく年頃の男女二人に囲まれたシリウスは、遠い目でいつかの親友へと思いを馳せた。

ジエームズ、お前の娘はほんとうにお前そっくりだぞ。……どうしてくれるんだ。

黒犬が狼に相談する話

うなされるんだ。

シリウスは二階に続く階段を横目で見て神妙に息を吐いた。正面に座るリーマス・ルーピンもまた、深刻そうに思い耽っていた。

「はつきり言って、あの子たちを同じベッドで寝かせるというのは、倫理的な面を除いても私は良しとしない。いい加減、兄弟離れを覚えさせるべきだ。だが——」

「離せば、うなされる」

「そうだ」

悪夢に喘ぐ少年少女たち。——そう、少年少女たちだ。

どちらとも自覚はないようだが、どちらもが悪夢に侵されていた。そして相手のためにと体温を分け合って眠るのだ。——なんて、歪な支え合いだろうか。

「どうすれば正しいのかわからない。今は離すべきでないのはわかる。だが——このままでいいはずがない」

「二人ともひどい経験をしてしまったからね。あの子たちはしっかりしているから忘れがちだが——まだたったの十四歳なんだ。殺人なんて見ていい歳じゃない」

「ああ……せめて、あのとキ間に合ったなら」

シリウスの脳裏に浮かぶのは、ポートキーによって移動する瞬間のマリアの唾然とした顔だ。

子供の顔だった。試合のさなかから、あの子は怯えていたのに。せめて指先だけでも届いていたならば——共にヴォルデモートと対峙してやれたのに。

「どうすれば、解放してやれるんだろうか。もつと普通に——あの子どもたちをただの子供に——なんだ」

目の前で頬杖をつく親友の目が笑っていて、シリウスは眉をひそめた。この深刻な現状にリーマスの表情はいつそ場違いだ。

「いや——まるで親のようだと思ってね」

「親なんだ」

シリウスは迷いなく言い切る。そして再びため息をついた。親であることを知らない男が親の真似事をする。その苦悩が若々しいかんばんせにありありと表れていた。

「私はよい親というものを知らない。ジエームズやお前と違ってな。だから——きつと私自身があの子たちにとって完璧な親になれるとは思わない」

たとえば子供たちが求めるものが兄であったなら、少なくともシリウスはその感覚を知っていただろう。良好な関係でなかったとしても——シリウス・ブラックはレギュラス・ブラックの兄だった。

「いい加減、互い以外にも頼る先があることを知るべきなんだ。もつと周囲へ目を向けることを教えなければ」

「ハリーはともかく、マリアはずいぶんと君を信頼してるようだけども？」

「それだって、妙といえば妙だろう。あの子はなぜ私を——いや、あの子に関しては『何故』を言い出せばキリはないが」

「……ほんとうに、不思議だね。マリアは」

得たいの知れない子供、マリア・ポッター。闇の帝王を退けたその

日から注目され続けてきたハリー・ポッターの影にある子。語られぬ生き残った女の子。表舞台から消えた少女。

ひとたびその存在を知ってしまったえば——ハリー・ポッターよりもよほど奇妙で興味深い子供だ。

「マリアも、ハリーも、大切だ」

「もちろんだ」

シリウスの言葉に間、髪入れずとリーマスもうなずく。

「どちらも等しく愛される子供なんだ。そうでなければならぬ」

「ジェームズもハリーも、もういないからね」

「俺たちだけでも、あの子たちを子供として愛したい。生き残った男の子じゃない。ハリー・ポッターの……オマケじゃない。ただのハリーとマリアとして。真似事だとしてもいいんだ。あの子たちがここを家と思えたなら」

「シリウス」

シリウス・ブラックは知っている。アズカバンを脱獄しホグワーツへと駆けた夜。ホグワーツにて愛しい少年少女を見守った日々。周囲が二人に向ける——英雄としての残酷な期待と押し付け。

あの二人を孤独へ追いやったのは——大人だ。

「そうでなければ——」

シリウスはきつく双眸を閉じた。かつて家族のため命をかけたハシバミと緑が脳裏で強烈に輝いた。それは——シリウスにとってもリーマスにとっても、恐怖を呼び起こすうつくしきだった。

「双子の依存はいずれ互いか——互いに近い誰かを殺すぞ」

謎のプリンスとマリア

1-1-1

もうあんたしかいないのよ。マリア・ポッター。

思えば彼女の目をこんなにも間近に、はつきりと対面の形を持って見たのははじめてだった。すっかり憔悴した様子で、しかしなおも声を絞り出してブルネットの乙女は続ける。激しく渦巻く感情は強烈に彼女の瞳を彩った。

「あんたしかいないの。——ドラコを助けて、マリア」

パンジー・パーキンソンは憎しみのすべてを払ってマリア・ポッターの手を掴んだ。

『まとも』であるダーズリーの人間たちと『まとも』でない老人——ダンプルドアの対談を僕はなんとも気まずい心地で見守っていた。夏休みに入って二週間目のことだった。ダドリーなんてかわいそうに、またまた尻を押さえている。よほどハグリッドに豚の尻尾を生やされた件がこたえたと見える。

「あと一年で二人も成人じゃ。であるからして、その前にいくつか話し合っておかねばならんかう」

ほけほけとした老人の口から語られる『魔法界』での真実に、ダブリー一家はわからないながらに戦慄した。(ペチュニアは少しくらいは理解していたかもしれない。)

シリウスの遺言と彼の遺産の相続権を得たハリー。クリーチャーの処遇について。ブラック邸を一時手放す旨と不死鳥の騎士団の意向。そして、隠れ穴へ移る前に求められた『手助け』――

「上々、上々。準備は済んでおるようじやな」

玄関にまとめられた荷物を杖のひと振りですぐ隠れ穴へと送ったダンブルドアは、好々爺の顔のままダブリー家へといとまを告げた。――黒い手だ。杖を振った老人の手は焼かれきった枝のように痛みを刻んでいた。

あ！ ヘドウィグのフクロウフーズ！ さつそく忘れ物を思い出して二階へとって返したハリーにダンブルドアと顔を合わせてクスクス笑う。

「先生、死者には会えましたか」

ダンブルドアは朗らかに代償を撫でた。

「会えんよ。――それは死者なのだから」

ダンブルドアは落ち着いていた。解放されゆく老人の顔だった。シリウスと同じ――遺すものの顔だった。

死んだ人間に会えるのは――死んだ人間だけなのだから。

ダンブルドアの付き添い姿現しによってたどり着いた先はさびれた村だった。スラグホーンが隠れ住むバドリー・ババートンだ。若干酔ったハリーの、箒のほうが好きだな、なんて文句に「近頃、学校の箒が紛失する事件があつてのう」なんてチクリとつかれて苦笑いした。……そういえば、乗り捨ててしまったあの箒はどこまで旅立ったのだろう。優雅な旅になるといいけど。

ダンブルドアのスカウトの手から逃れようとするホラス・スラグホーンと対面する。スラグホーンは僕とハリーとを見比べると、口惜しい口惜しいとくり返した。

「両方ともがグリフィンボールだなんて……せめて、君、リリーの……エー……」

「マリアです」

「そう、マリア！ 君がスリザリンであつたなら……。こんなにもそっくりなのだ。あの二人の子供だ。もちろん、才能も受け継いでいるだろう？」

「それは——あなたの目でお確かめいただければ」

スラグホーンはむつすりと黙りこんだ。その目はこのブランドに自身の安寧を秤にかけるほどの価値があるのかを見定めていた。相変わらずな人だ。正直というか、愚直というか、……スリザリンらしいというか。

ハリーがたたみかけたことによつてとうとうスラグホーンは復職にうなずいてくれた。ダンブルドアは再び、上々、上々とご機嫌に微笑んだ。

「それでは、ミセスウィーズリーに君たちをお届けしようかの」

再びダンブルドアの腕に掴まって隠れ穴の前へと姿現しする。ダンブルドアがハリーだけを誘つて密談へと入ってしまったので、僕は穏やかな気持ちで受け取った荷物とヘドウィグをふくろう小屋へと

繋いだ。

——穏やかだ。ダンブルドアの腕の呪いは彼の命をむしばむ。『前回』と同様ならば、彼の命はもって一年だ。

当然、さびしさはある。けれども、シリウスやセドリックの頃のように彼の『自殺』を防ぎたい猛烈な熱はなかった。たとえばそれは諦めからなのかもしれないし——彼自身が選んだから、というのが大きいように思えた。

ダンブルドアは死よりも惨いものを知っている。ゆえに、彼にとって『死』は解放に近いのだと僕は悟ってしまったのだ。

だって彼は——殺してくれと泣く人だ。

「マリア」

ダンブルドアが微笑む。僕も微笑む。僕たちは語らぬ共犯者だ。

隠れ穴での日々はやはりというかなんというか——実にトラブルにまみれて愉快だった。彼女がいるからだ。銀髪の輝くような美女——フラー・デラクル。フラーは妹の恩人であるハリーは当然のこと、どうしてだか、僕のことにも気に入ってくれているようで、フラーが僕へ好意的に接するたびに女性陣から非難の視線を浴びせられた。僕が。解せない。

「どうぞあの女の味方をなされば？」

ムツシユウ

「マリアの浮気者」

ハーマイオニーとジニーにいやしい野良犬でも見るように吐き捨てられて、僕はほとほと参っていた。思わずロンへ泣きつくほどだ。

「ねえ、どう思う？」

ロンはうんざりだとばかりに首を振った。

「女心って、やっぱりめちやくちやだよ……」

「お忘れのようだから言っておくけど、君、女だぜ」

ハリーまで僕を胡乱な目で見ていた。なつとくいかない！

はてさて、ふくろう試験の結果に一喜一憂した夜、ハリーは自身の予言について親友たちへと切り出した。ヴォルデモートとハリー・ポッターは、どちらかがどちらかを殺さねば生きられない絆にある――

ロンとハーマイオニーは絶句していた。けれども。

「ああ、ハリー……わたしたち、あなたになにができるかしら。まずは呪文ね。もつと強力な防衛術がないか、わたし、調べるわ。それから反対呪文……呪い崩し……回避呪文……」

「ダンブルドアが個人授業だつて？　ダンブルドアは知つての通り無駄なことはしない人だよ。つまり君は期待されてる。僕たち、ぜったいに力になるよ」

「ハリー」

「ハリー」

親友たちの目はあたたかかった。厄介者を見る目じゃない。化け物を見る目じゃない。真つ当に友を見つめる目だ。心からハリーを案じる目だ。それにハリーはぐつと気持ちをこらえた。僕も――大好きだ。ロン、ハーマイオニー。まだまだ、ちつとも、感謝は伝えたりない。……『君たち』に会えないことが、今、こんなにもさびしい。

「マリア」

ハリーが僕の手を取っていた。

「マリアは、このこと――ううん、いいんだ。マリア、愛してる」

ハリーに抱きしめられる。ハーマイオニーが僕とハリーとどちらをも懸命に腕を広げて包む。ロンが照れながらもハリーの肩を叩いている。

すべてが僕の愛する体温だ。欠けてはならない三人だ。彼らを守るためならば——僕はダンブルドアの後を追える。

僕は——死ねる。

夏休みも残す一週間となった頃、例年通り通達された教科書リストや必要教材のためにウィーズリー一家とハーマイオニー、そしてポッター家の双子はダイアゴン横丁へと来ていた。死喰い人たちの凶行が横行する中、店はほとんどが閉店をかがげていて、どうにか開店している店を見かけてもかなしいかな、大半が閑古鳥の鳴く始末だった。

昨年までのダイアゴン横丁の活気はすっかり失せていた——そんな中。

「なんだよ、兄貴たちのやつ——これって、すっげえや！」

フレッドとジョージの華やかな看板は一際目を引いた。客は満員。本来ならば横丁のそこらへ散らばっていただろう笑い声がW・W・Wの店内に集結しているようだった。

「おおっと！ こいつは我らがスポンサーさまじゃないか」

「ちよいとお二人さん、こっちへ来てみるよ」

商品の羅列にすっかり目を奪われている面々から離れて、ハリーと共に店内の奥へと進む。フレッドとジョージがいきいきと自慢の商品の紹介を始める。完成版ずる休みスナックボックスに種類の増え

ただまし杖、盾の帽子にインスタント煙幕——ジニーや娘のリリーのお気に入りだったピグミーパフも愛らしく転がっていた。

「ハリー、好きなもの、何だって持って行っていいぜ。マリアは——ン、オマケしておいてやろう。我らがマリア様だからな」

「おひいさまのお眼鏡にかなう品がきつとありましようぞ」

「たとえばピグミーパフは……ダメだな。こいつは 女性に人気なんだ」

「マリアには惚れ薬解毒剤のほうが入り用かもしれないな」

「やめてくれよ……」

ニンマリと意地の悪い顔をしてからかい倒す赤毛の双子へと軽くパンチを入れる。ケラケラ笑いながら受け止めたフレッドかジョージかは、そのままハリーから離すように僕の手を引いた。

「マジな話——ひとつくらいは持つておくべきだと思っぜ。ほーら、お前さんの王子様にお熱の連中だって少なくはないんだ」

「そんでもってマリア自身にもな。ま、防衛に関しては問題ないにしてもだ」

「初恋泥棒たちよ、警戒はゆめゆめ怠らぬよう」

「初恋泥棒……」

思わず頬が引きつった。なんて名で呼ばれてるんだ、ドラコは。……そしてまさか、僕も？ ゾツとしない。

両方から肩を組まれて惚れ薬の解毒剤とやらを掴まされる。相変わらず 僕の扱いがぞんざいな兄貴分たちである。

「なんなら今、渡してきてやってもいいんじゃないか。さつき外を歩いてたから」

「え？」

「だーかーら、王子様だよ。……噂なら俺たちの耳にだって届いてる。

——大丈夫か？」

別々に絡む二本の腕をほどいて向き直る。

「どっちへ行つたの？」

「出て右だ。急げよ」

「ありがとう」

ハリーがロンとハーマイオニーの元へ戻つたのを確認してから店を出る。——ああ、そうだ。

「ジョージ！ フレッド！」

愉快的看板のあいだから同じ顔が二つ覗く。今が楽しくてしかないと言わんと若々しく輝いている。この光景が——これから先も続くように。

「君たちの店、最高だよ！」

W・W・Wはフレッドとジョージが揃ってこそなのだから。

「——どうぞご最真に！」

双子の兄貴分たちの声を背に僕は駆け出した。

——ドラコの現状ならば、アーサーおじさんから少しくらいは僕だって聞いている。拘束した死喰い人たちからの証言はあれど、ルシウス本人の安否を明確にできないうちは彼の扱いは行方不明、もしくは失踪とすることに魔法省は決定したようだ。ゆえに、ドラコは無罪放免を勝ち得た。だがしかし——噂は広がれば広がるだけ禍々しく形を変える魔物だ。魔法省の判決がどうあれ、口さがないものは口を揃えてくり返した。——ドラコ・マルフォイは親殺しであると。

「——ドラコ！」

気取った服の青白い少年の腕を掴む。父親によく似たまとめられた長髪が振れて切れ長のアイスグレーが丸まる。問答無用で袖をまくり上げた。——ああ。

「——君のよく知る通り、美しい腕だろう？」

かつてそこに邪悪な黒蛇と髑髏を刻んでいたドラコ・マルフォイは、真っ白の腕を振ってニヒルに笑った。

「……女の腕みたいだ。僕よりなよなよしいんじゃないか？」

「言ってる。男女の体格差をなめてかかると痛い目をみるぞ」

「十分、痛い目に遭ってきたよ」

腕を解放して安堵に笑う。よかった——彼は死喰い人としての人生を放棄した。

「君、ひとりかい？」

「母上が一緒だ。だからあまり時間は取れない」

「ああ、うん。それならいいんだ。——会いたかったただだから」

「……………」

数年前にダイアゴン横丁で見かけたドラコを思い出す。彼は独りだった。両親も、腰巾着もつけずひとりぼっちで歩いていた。無性に切なくなったことを覚えている。あの頃の小さなドラコは——今、こうして報われたのだ。

僕の顔を言葉なく眺めたドラコは、袖を直しながら小憎たらしく鼻で笑った。そして僕の頬をつまんだ。

「ご心配には及ばないさ。ノクターン横丁にだって行かない。行く必要がない。とつくに買い取りは終えてるんだ。……つまらない顔をするな」

慰めと呼ぶには不器用な指だった。握り返してクスクス笑う。現在のボージン・アンド・バークスにかつての悲劇の引き金となった姿をくまますキャビネット棚は存在しない。それはドラコの手の中にある。延いては、依頼主である僕のものだ。

「ダンブルドアの殺害方法に悩む一年は存在しない」

解放された顔で余裕たつぷりに笑ったドラコに、そうだねとうなずいてから僕は他人事に続けていた。

「でも、ダンブルドアは死ぬよ」

ほんの少し、予言めいた声色だった。ばかばかしくて追って空笑いした。

ドラコは瞠目した。——瞳を氷の色に戻して吐き捨てた。

「……わずらわしいものを後に押し付けて、手前はさっさといち抜けか。相変わらずご立派なことだな。グリフィン^グドール^ド騎士道精神は。——最低だ」

僕は心から微笑んだ。いつそ晴れやかだった。

「ほんとうに。——最低だ」

九月一日。監督生のロンとハーマイオニーと分かれた僕たちはルーナとネビルのコンパートメントへとお邪魔していた。ルーナは付録のメラメラガネをかけて夢見心地に雑誌ザ・クイブラーを開いていた。相づち役はもっぱら僕だ。初対面時にザ・クイブラーを褒めたことが功を成したのか、ルーナは実に僕に好意的だった。僕としても、妻の親友であった印象が強いので苦なく会話を交わせた。

そこに―――乱入者だ。

「ハロー、ハリー。わたし、ロミルダよ。ロミルダ・ベイン」

気の強そうな黒髪の女の子だ。クスクス笑いの仲間を引き連れて、たつぷりの自信と共にコンパートメントの扉を開いていた。

……………ああ……………アー……………。戸惑うハリーの隣でそつと目をそらす。

……………いたね、君。

そうだ。この年つて、急に周囲が色めき立つというか…………『僕』もそれなりにモテたりしたというか。彼女もそのうちの一人だった。

「コンパートメント、空きがなかったんでしよう？ わたしたちのコンパートメントに来ない？ こんな人たちと一緒にいる必要はないわ」

どうやらロミルダは空きがないためにしぶしぶハリーがこのコンパートメントを選んだと思っっているようで、横目で変人^{ルーニー}を見てははつきりと侮蔑の表情を浮かべた。ムツとしたハリーが眉をつり上げる。ネビルはおろおろしていた。槍玉に挙げられたルーナはメラメラガネに夢中だった。…………ウーン、これは相手が悪い。

不憫な二人（おもにネビル）のため、あいだに入ろうと口を開く。――

「前に、地に足のついていないただようような声がふわふわとロミルダに応戦した。」

「あんたじゃハリーの気を引くのはむりだと思うよ。ハリー、面食いだもん」

「はっ？」

ロミルダは硬直した。視線の先は ルーニー 変人だ。

「マリアが側にいるんだからしかたないよね。目が肥えちゃうんだよ」

「……………」

「あんたがマリアと並べるっていうなら話は別だけど。あたし、ジニーくらい美人じゃないとむりだと思う」

衝撃に固まっていたロミルダはやがてルーナの言葉を理解して赤面した。怒りの赤だ。ギツとルーナと僕を睨んでから地団駄を踏み鳴らすようにして通路を去る。子分たちがちよろちよろと後を追う。場には何とも言えない沈黙が残った。ルーナは自分のななが彼女を怒らせたのかわからないとばかりに小首をかしげていた。……おそるべし、ルーナ・ラブグッド。ある意味でこの人こそが敵なしの最強だ。

「…………ハリー、あとでいいものをあげるね」

どつと襲い来る疲労感に任せてハリーへともたれかかる。ハリーは手慰みに僕の赤毛を撫でていた。

君たちのご厚意は無駄にはならなさそうだよ。フレッド、ジョージ。

スラグホーン主催の昼食会から戻ってきたハリーとジニーとネビルを迎えて、場はホグワーツの大広間へと移る。ふと、違和感を覚えた。なにかが足りないような――

夕食の宴が始まる。がつつくロンにハーマイオニーが顔をしかめている。遠くのラベンダーがロンを見てパーバティと笑っている。コリンが弟にカメラを見せては得意気に話している。シエーマスがゴブレットを爆発させている。ジニーが男の子に囲まれる。(ちよつとソレにはもの申したい。)

グリフィンドール席はいつもと変わらぬ様子だ。いったい、なにが足りないんだ――？

突如、大広間の扉が開いた。視線がいつせいに『彼』へと泳いだ。シックな黒リボンで肩を越すほどのブロンドを結った少年は、ローブをなびかせながらスリザリン席へと着席した。――ドラコだ。ドラコ・マルフォイが遅れて到着したのだ。

かつて奴にしてやられたハリー・ポッターとドラコ・マルフォイの立場が逆転していた。

「見たかよ、アレ。遅刻したってお坊ちゃんは優雅なもんだ」

「なにかあったのかしら？」

「マリア？」

ハリー含む三人が僕を見る。僕だって知らないと言を振る。――列車の中で、なにかあったのだろうか。

チキンをつついていたフォークを置いて、僕はポケットの中の通信紙を握りしめた。

「――ドラコ！」

九月初めの夜は比較的空が明るい。お決まりの湖の側で難しい顔をしている相棒を捕まえる。

「わかってると思うけど——」

「ああ。ちよつと……いや、僕も整理がついてないんだ」

芝生へ座り込んで、眉間にシワを寄せるドラコを覗き込む。ドラコは夏を経ていつそう大人っぽくなっていたが、そんな顔をすれば『僕』のよく知るマルフォイに見えた。

「その——寝過ぎしたんだ」

「ハア？」

すつとんきように声を上げた。ドラコは宿敵に失態を知られたとばかりに苦々しそうにしていた。

「列車で？ 誰も起こしてくれなかったのかい？ そこまで嫌われちゃった？」

「嫌われてなんかない。遠巻きに見られてるだけだ」

「それ、腫れ物扱って言うんだぜ」

「うるさい、減らず口。……そうじゃなくて」

出会い頭の言葉の通り、ドラコは困惑の表情のまま告げた。アイスグレーの瞳は揺れていた。

「アステリアだったんだ」

「えっ——？」

「僕を眠らせ汽車に放置したのは——アステリアだ」

ハリーがこの授業に対してこれほど警戒した顔をするのははじめてだ。——と、僕は横目から弟を眺めて思った。スネイプ先生の教える闇の魔術に対する防衛術の時間だ。毎年、教師によって様変わりする教室はすっかりスネイプ色に染め上げられていて、地下牢の教室に入る時くらい陰鬱な気持ちで生徒たちは着席していた。ドラコの姿もある。——スリザリンの様子は少々おかしくなっていた。

ドラコの寮内での孤立はドラコ自身の意識により解除された。だがしかし、スリザリン寮内の分裂はまだまだ続いているようだった。——ヴォルデモートを支持する親を持つものと、そうでないもの。もしくは、完璧な純血主義のものと、そうでないもの。ドラコは良くも悪くもスリザリン内にてポッター兄弟並みに目立つ時の人となっていたのだ。周囲が勝手に手につき上げては派閥のリーダーのように扱っているらしかった。

今日も今日とてドラコの隣を死守しては甘ったるくしなだれかかっているパンジー・パーキンソンが目に入る。お気の毒さまだ。ドラコはアステリア一筋だっというのに。……たぶん。そのはずだ。アステリアだっ——そのはずなんだ。

「うげっ」

ドラコを盗み見ながら昨日の水辺での会話を思い出していれば、パンジーにギラギラとにらまれた。相変わらず彼女にマリアは親のかたきのように憎まれている。ドラコが去年に僕へと告白なんて茶番をしたものだからなおさらだ。勝手にライバル視されてしまっているのだ。ちよつとくらいはドラコにだってその雌牛の躰を頼みたいものだ。

恋する乙女の視線にそそくさと肩をすくめる。見ないふりをして前へと向き直る。スネイプ先生が入室した。ピンツと空気が張りつ

める。——特にハリーだ。隣の弟はパンジーにも負けない嫌悪の目でスネイプ先生を睨み上げていた。

ハリーとヴォルデモートが根っこで繋がっている限り、下手なフォローは入れられない。けれど——やっぱり、ハリー・ポッターがセブルス・スネイプを憎む凶は切なくなってしまう。いたたまれない。

スネイプ先生自身がそのように印象操作をしているのだから、僕のフォローなんて余計なお世話でしかないのは決まりきっているが。

「我輩はまだ教科書を出せとは言っておらん。それをさっさとしまえ、グレンジャー。……我輩の話をも十分に傾聴するように」

憎しみをたつぷり何十年も煮詰めた暗い瞳がハリーを見る。ハリーもまた母の瞳をカツと光らせてスネイプ先生を見る。——どんな想いで、彼はあの視線を受け止めているのだろうか。愛する人の目で憎まれて——彼はそれで満足するのだろうか。

「——であるからして、諸君らは無言呪文を学ばねばならん。はつきり申し上げて、この中にそれを習得しているものは——まあ、今日中に二名ほど叶えばよろしいでしょうな」

彼の銃口のような瞳が今度は僕とドラコを捉えた。僕はともかく——どうやら今回はドラコまでしっかりとバレているようだ。授業初日から無言呪文の特訓とは、なんともハードだった。

二組ずつに分かれて実践へと入る。ハリーはロンと、ハーマイオニーはネビルとペアだ。そうなれば、僕の相手はやはりというか——色違いのローブが悠悠緩々と佇立していた。去年に距離を置いていただけに、周囲の目が好奇心をたつぷり込めて僕たちを刺し尽くした。特に愛しの彼を奪われたパンジーのギラギラ光線は勢いを増していた。

「アー……まあ、お手柔らかに？」

「してくださいさると?」

つついその場しのぎの軽口を叩き合って杖を向ける。マルフォイに杖先を突き付けるだなんて、とつくに慣れたものと思っていたけれど——なんだか、喉がカラカラでツバが飲み込みにくかった。

——オーキデウス。

ぽぽんつと光の透けるような金髪に花が咲き誇る。ブツとどこかで吹き出す音が聞こえた。ドラコは啞然としていた。金髪に花弁を散らせて立ち呆ける彼は、中性的な容姿もあいまっておとぎ話のお姫様のようなだった。

「……マリア、遊びじゃないんだぞ」

「もちろん遊びじゃないとも。——仮にそれが毒花だったら、君、花粉で今頃死んでるぜ?」

シン——ドラコの愛らしい姿にクスクス広がっていた忍び笑いが消えた。

「——ナルホド」

次にドラコが杖を振る。シュルツと頭になにかが巻き付いた。触れてみれば、ドラコの髪を縛るリボンと同じ黒い紐が僕の頭上で蝶々結びされていた。

「……遊びじゃないんだよね?」

「標的を変えれば君の首を絞め上げられる。お返しには十分だろう?」

「……へえ」

ドラコは花を飾り、僕はカチューシャを乗せた間抜けな姿でにらみ合う。心地よい緊張感だ。僕とマルフォイはやっぱりこうでなくて

は。

さて、次はどう料理してやろうか——再び互いに杖先を合わせたところで。

「——そこまでだ」

ねっとりとした這うような声に意識を中断させられた。スネイプ先生が無機質な瞳で僕たちを見ていた。

「成功者はグレンジャーにミスポッター、そしてマルフォイだ。……フン、一人増えたようだなによりだ。諸君らもこれに倣い、我輩を失望させる結果とならんことを——祈ろう」

チャイムが鳴る。生徒たちがワツと飛び出す。僕はスネイプ先生を見た。スネイプ先生はドラコを見ていた。——僕の瞳から逃げるように、ドラコを見ていた。

「マリア」

今年へ入ってすっかりスリザリンとグリフィンドールの確執を取り繕う気がなくなったらしいドラコに廊下にて捕獲される。ハリーはハーマイオニーが連れていった。気まで利く僕らの才女さまはまったく最高だ。

ドラコはひとりだった。彼もまた引っ付き虫のパンジー・パーキンソンをまいてきたようだ。

「この後の授業だが」

「ん。僕たち、一緒だろうか？ スラグホーンの魔法薬学だよ」

ドラコと並んで歩く。ほぼ一年、こうして彼とホグワーツの廊下を共にすることはなかった。どことなく空気がくすぐったいように感

じて、わざとらしく歩幅をずらした。

「去年は目を合わせないようにしてたから気付かなかったけど、君、そんなにパンジーにべったりされてたのかい？ まさか付き合ってるわけじゃないよね」

「まさかだ。^{マリア}君に告白しておいてそれは——よろしくない」

「外聞 が？」

「外聞 も」

クツクツと笑い合う。くせになりそうな毒を含んだ軽口に軽やかな足取り。透けるような髪と瞳と嫌味なローブが隣にある。それが、こんなにも心地よい。

ようやく、彼との当たり前の距離が戻ったことを実感できた。——これが、ドラコと『マリア』の距離だ。

「でも、ほら——僕らが真実この歳だった頃は君、パンジーと付き合ってたんじゃないかい？」

「……………忘れた」

「ウウワ、最低だ」

肩を震わせて声を上げれば、ドラコはどこことなく悪戯っぽい目で僕を見ていた。

「どうしてそんなことを気にするんだ？」

「えっ？」

「どうして——僕とパンジーの関係が気になるんだ？」

「……………」

——間だ。なんだか理解してはいけない間がそこにあった。覗いてはいけない名前が隠れている気がした。

「——どうしてだ？ マリア」

ドラコがささやく。

「——つそ、んなの……………アステリアが気の毒だからに決まってる
だろ！」

持っていたてきとうな教科書で、思っていたよりも近くにあった顔を叩く。ドラコは哀れにうめいた。それが普段からは想像もつかないような間抜けで、思わず失笑してしまった。

「君——君——今——ンツ、フフツ……………！」

「……………マリア」

「や、やめ、クツ、ちよつと、今は顔を向けないで」

「もう一度無言呪文でステキな姿にしてやろうか。次は君のダイスキなスカート付きだ」

「やつ——ごめんってば、ふっくく」

鼻と額を赤くしたドラコにすごまれる。キヤラキヤラ笑いながら絞め上げようとする手から逃れる。子供みたいだ。バカやつて——ほんとうに、心から仲の良い親友のようだ。

「しつこいよ、ドラコ。このままだと遅刻するってば」

まだ引つ張られている感覚の頬のままドラコの手を掴む。地下に向かつて駆け出す。赤と緑のローブが重なるようにはためく。

少女は見ていた。

——少女は泣き出しそうな顔で見ていた。

スラグホーンの授業では、まず一番にハーマイオニーがお気に入り認定された。当然だ。ハーマイオニーは学年で一番優秀な魔女なのだから。僕らの自慢の親友が、人脈と才能の収集家たるスラグホーンのお眼鏡にかなわぬはずがない。

そして、はじめから目をつけられていた『生き残った男の子』であり『選ばれしもの』のハリーは――

「――すばらしい！ ハリー、君がまぎれもない勝者だ！」

スラグホーンはハリーの鍋を覗いて歓声を上げた。そこにはハーマイオニーですら作り上げられなかった完璧な『生ける屍の水薬』がたゆたっていた。半純血のプリンス――スネイプ先生の蔵書はまちがいになくハリーの手へと渡ったのだ。――と、いうか。

「マリア、マリアもこの本を見るべきだったんだよ」

小声でささやくハリーにこっそり笑い返す。スネイプ先生の本をハリーへ渡したのは僕だった。ハーマイオニーには悪いが、彼にはスラグホーンにさらに気に入られてもらわなくてはならないのだから。

「どれ、どれ、君のご兄弟の出来は――ウム、なるほど。いや、しかし、うむ……リリーの才能はハリーに継がれたようだね」

スラグホーンはハリーの隣に並んだ僕の鍋の中身を見ては微笑んだ。気落ちした様子を隠しきれていなかった。……気持ちは嬉しいけど、あまり噛みつかないでくれよ、ハリー。

「ふうむ、ふむ、見込みがあるのはミスグレンジャーとミスターマルフォイといったところかな。いやもちろん、君たち全員に私は期待しているとも。特に――ハリー！ 彼に続いて、私に君たちの才能を見

せてくれたまえ」

でっぷりと膨らんだ腹とセイウチ髭の男は上機嫌にハリーへと小瓶を手渡した。

黄金のしずく——フェリックス・フェリシスはこたびもハリーのものとなったのだった。

ハリーが個人授業と称してダンブルドアと記憶の旅に出ているあいだ、僕はお決まりの湖にてドラコと落ち合っていた。最近是人目を避けずとも周囲が自ら目をそらしてくれるので楽なものだ。ハーマイオニーいわく暗黙の了解なのだそうだ。この湖畔を五年かけて僕たちは占領してしまつたらしい。

その事実には笑つてから、本題へと入る。

「——アステリアだけだ」

ドラコは落ち込んでいた。なんとアステリアに避けられているというのだ！ 良くも悪くもドラコ第一主義であつたあのアステリアにだ。その穴埋めとばかりにパンジー・パーキンソンが今ではドラコの側にべつたりだつた。

「アステリアはダフネと行動を共にしているらしい」

「アステリアは——その、それほど家族仲が良好なわけでは……？」

「ああ。だが姉妹仲はそれなりだ。少なくともアステリアが体調をくずした際、面倒を見るように言い付けられてはいるようだ」

「じゃあ……やっぱり、家でなにかあつたのかな」

ドラコの側で僕は頭をひねらせた。以前であればこの手の——いわゆる純血のコミュニテイ事情にくわしいのは当然ドラコであつた。だがしかし、当主の父を手にかけたと噂のドラコに貴族社会の人間が親切に情報を分けてくれるはずもない。ドラコ自身が当主となるには若く、代理の母ナルシッサも表舞台からはしりぞいている。生存だけを示してルシウスと共に隠れているはずだ。そうでもしなければ、ヴォルデモートの報復がいつ彼女へ向くやらわかつたものでないのだから。

「それも含めて話を聞きたいところなんだが……」

「ドラコ相手だと話しづらいのかも知れない。僕が聞くよ」

ドラコは不満げながらも小さくうなずいた。最愛のアステリアが関わるとこんなにもわかりやすい彼が面白くてならない。かわいいじゃないか。

「そちらは——ハリーは今、ダンブルドアと一緒になんだな？」

「そう。トム・リドルに関する記憶の旅をしてるところだと思うよ」

「君は関係ないのか？」

「どうして関係があるんだ？ 僕はたまたまハリーの双子として生まれただけの子供だよ。ダンブルドアが求めているのは、ヴォルデモートを打ち破る力を持った『選ばれしもの』だ」

そして僕は——『マリア』だ。ただの凡人で『生き残った男の子』のオマケのマリア・ポッター。優先されるべきはハリーで——『僕』はずっとそう守られてきた。

「……まあ、君があのご老人に拘束されないというのなら——」

認識するよりも早くドラコを地面へ押し付けていた。

「プロテゴ！」

目の前で爆発が起きる。誰かが僕らに向かって攻撃魔法を唱えたのだ。咄嗟に盾を張ったとはいえビリビリと振動が伝う。この威力——悪戯ではすまされないぞ！

「誰だッ!!」

僕の斬るような誰何の声は水面をすべって消えた。当然、答えるものはなかった。気配も消え失せ、下品に飾りばかりの杖を振りながら身体を起こした。

「……チツ。ドラコ、怪我は？」

すっかり押し倒される形になっていた人形じみた少年は、アイスグレイを数回またたかせると顔を手でおおった。状況もあいまって、狼藉者に襲われた生娘のようだった。指でリボンのほどけた金髪をすくう。

「……ドラコ？ 乱暴にしたのは悪かったよ。でも、いくら君だって受け身くらいは取れただろう？ ……次は優しくするから」

「……お前、わざとだろう」

暗闇だつて赤さがわかるくらい羞恥に染まった耳に、クツクと笑う。腕を掴んで引き起こす。不機嫌なドラコは、僕と目を合わさないためにおそらく犯人がいただろう森の方向をきつくにらんだ。八つ当たりも込みだ。アイスグレイがぐんつと氷の冷たさを帯びる。

「——さんざん命を狙われてきた元英雄どのの見解としては、『どちら』だ？」

「君も僕もかなり モテるからね。なんたつて初恋泥棒だ。そろそろお釣りで喧嘩が買えそうだし」

二人で立ち上がり再び森を見つめる。禁じられた森の方向だ。生徒か、教師か、はたまた——いや、それはあり得ないはずだ。必要の部屋のキャビネットはボージン・アンド・バークスへは繋がっていないのだから。

「……油断するなよ」

ドラコの囁きに、ローブの土くれを払いながら固くうなずいた。

アステリアとの対談は思いの外はやく叶った。——否、それは対談なんて易しいものではなかった。

「アステリアー！」

道すがら、珍しく緑ローブの同年代ほどの少女に囲まれているアステリアを発見した。本日はクイディッチ・グリフィンドルチームキャプテン——つまりはハリーだ——による選手選抜試験日だ。あのハリー・ポッターがキャプテンとして新チームを引くとのこと、どこから漏れ出したのか選抜試験の様子は他寮にまで伝わっていた。圧倒的に赤ローブが多い中、観客には黄色や青色のローブも混ざっていた。遠くからでもハリーのうんざりした顔が見えた。

「よかつたらアステリアも見に行かない？ たぶんドラコがいると思うんだ。あ、もし彼に会いたくないなら——」

「——まあ、お聞きになりました？ みなさん」

アステリアはうつくしく微笑んだ。——人形の笑みだ。

「……アステリア？」

「こちらの方がわたくしをあの獣臭い群れへと招待してくださいるのですって。おやさしいこと」

「いやだわ、なにさまなのかしら」

「ミスグリーングラスのお名前をそのように……なんてずうずうしい

の」

側に控える少女二人が示し合わせたように冷笑する。その光景はクラッブとゴイルを背に幾度と『僕』の前へ立ちふさがったマルフォイを思い出させた。

「……あまり、品のいい冗談とはいえないね。アステリア」

自然と僕の声も低く落ちていた。窓から差す朝日がアステリアの柔らかな黒つばい茶髪を浮かび上がらせて、場違いにも天使の輪のようだった。

「野蛮人のグリフィンドールが品を語るなんて！ 口の利き方がなつてらっしやらないわね」

「ミスグリーングラスはもうあなたなんて相手にしないのよ」

ふんぞり返る左右の二人を無視してアステリアひとりを見つめる。アステリアはひるまなかつた。——きれいな顔だ。アステリアという少女を殺しきった顔だ。

「わたくしと——ミスポッター、あなたの生きる世界はとっくに分かたれました」

アステリアはためらいなく切って捨てた。

「これまでのことはお貴族さまの悪趣味なたわむれだったとでも？」

「いいえ、交遊関係にあれたならば光栄だと心から思っていましたわ。

——ミスブラックとなら」

「——！」

——『ブラック』

ここで、その名が出るのか。

「ですが、シリウス・ブラックは死んだ。実質、ブラック本家は完膚なきまでに没しました。そしてあなたはポッター。いちから説明しなければご理解いただけませんか？ わたくしがあなたと交遊を持ち続けてきたのは、あなたが『ブラック』となりうる可能性があったから。……もう、あなた単体に価値なんてこれっぽっちもないの」

アステリアは笑う。いやな笑い方だ。人の傷つけ方をよく知る笑い方だ。彼女は——こうして嗤われてきたのだ。

「……ずいぶんえらくなったものだね。ミスグリーングラス。それで、代わりの腰巾着を二つももらえたってわけだ。——なにが君をそこまでえらくしたんだい？」

交わる視線に摩擦が起きる。無論、そんなものは幻覚だ。だがしかし互いに譲れぬ熱がそこにあった。

「……お話になりませんわ。行きましょう、みなさん。獣の臭いが移ってしまいますもの」

アステリアが側を通る。通りすぎる。うそみたいに——嘘で固めたみたいに、きれいだ。

「——ドラコのごとは、どうする気」

足音が消えた。

「——ミスターマルフォイト、よく、お似合いでしてよ。ミスポッター」

それが人形の答えだった。

「そうかい。それじゃあ、君の大嫌いなグリフィンドールらしくぶざまに噛みつかうじゃないか」

振り返る。そこにはアステリアの背がある。凜と立っている。

「僕とドラコは最高に諦めが悪いぞ。——覚悟してろよ、アステリア」

アステリアは振り返らなかった。アステリアの背は誇り高く伸びたままだった。彼女は微塵も心を見せず立ち去った。

ひとり残された廊下にたっぷり時間をかけて息を吐き出す。しやがみこむ。頭を抱える。

アステリア・グリーングラス——君の悲鳴は、静かすぎる。

「あれ、ロンだけかい？」

夕食時に大広間へと降りれば、いっだって並んで座っている仲良し三人組の一人の背しか見当たらなかった。一番ノツポの赤毛だ。よく見慣れた後ろ姿だ。マリアとなつてからはさらには身長差は広がってしまった。……悔しくなんてないとも。

「ハリーはスネイプと、ハーマイオニーはナメクジクラブで砂糖漬けの晩餐会さ。スネイプとの先約がなければハリーもナメクジの一員だったね」

すっかり拗ねきっているロンに肩をすくめて隣へと座る。つまりはここへ来るまでにスラツギー爺さんに親友たちを横取りされてしまったというわけだ。ついでに妹の姿もない。ネビルはシェーマスと共に大広間へ来ていた。

「それじゃあ、こちらも脇役仲間同士で夕食と洒落込むしかなさそうだね？」

「マリアが脇役なもんか」

「ロンだって」

側のチキンを取りながら隣の赤毛と顔を合わせてニンマリする。ロンの機嫌は思っているほど悪くはなかった。自分と同じくスラグホーンの目に留まらなかったマリアの存在が彼の中では大きいようだった。遠くにある糖蜜パイを三つ取り寄せてくれる程度には。ハリーにはナイショだぞとブルーアイは双子の兄そっくりに細まっていた。

「あの爺さんも見る目がないよ。我らがグリフィンドールの姫を招待しないなんて」

「まったくだ。彼は今晚、手痛いミスを犯したのさ。僕らの敏腕キーパーを逃すなんて」

クツクと悪戯に笑い合う。――彼との気安いやり取りが好きだ。ロンとだけは、どんな関係にあっても僕は身軽でいられる。等身大に喧嘩して好きだと伝えられる。ハリーでもマリアでも心の持ちようは変わらない。それが――僕にとってどれほどの救いか。

「二人がいらないあいだに宿題を進めて悔しがらせてやろうよ」

「そりゃいいね。悔しがるのはハリーだけだろうけど」

「ハリーはスネイプとあまーい時間を過ごしてくる――なんだ？」

続く言葉は騒音に奪われた。スリザリン席から歓談をつんぎく悲鳴が上がったからだ。ざわつく緑ローブの中心にはよく知る金髪があつた。

「ドラコ？」

ドラコのローブに引っ付いていたパンジーがヒステリックに何かを指している。ヘビだった。怒り狂った大蛇が椅子に乗り上げ這っていた。

どうして大広間にヘビが。そしてスリザリン寮のシンボルたるヘビごときにああも騒いでいるのはなぜか。

「誰も動くな」

大広間の扉が開いて、ハリーを連れしたスネイプ先生が登場した。スネイプ先生はじろりと暗い瞳でスリザリン席のすべてを見渡すと、ヘビに向けて杖を振った。

「ヴィペラ・イヴァネスカ」

それはかつてのマルフォイが喚び出したヘビを返す呪文だった。
——つまりは、誰かが意図的にあのヘビをこの場へ喚んだのだ。

「マリアー！」

「ハリーー！」

騒動から離れ真逆のグリフィンホール席へと駆けてきたハリーを迎える。ハリーもスネイプ先生と同じ訝る目でスリザリン席を見ていた。

「ハリー、ヘビはなにか？」

「うん……どいつが敵だ、食い殺してやるって——たぶん、あのヘビ、毒蛇だ。ひと咬みで済むって言うってた。牙に猛毒を持つてるんだ」

ハリーのみから得られる情報を噛み砕いて呑み込む。

だから、誰も近付けずにいた——なんてわかりやすい『悪意』だ。たまたまで禁じられた森にでも住んでいそうなヘビが大広間にまで迷いこむものか。

だがしかし——誰が、誰を、なんのために？

マルフォイは死喰い人じゃない。こたびのマルフォイにダンブルドアを狙う理由はない。現にダンブルドアはホグワーツから離れている——それこそを、狙って？

「ここにハグリッドがいなくて助かったね。僕ら、カワイイ毒蛇ちゃんの子守り相手にされかねなかったよ」

隣からふと耳に入ったロンの皮肉にうっかり吹き出してしまった。なけなしの集中力は親友に一瞬にして奪われた。騒動の落ち着いた

スリザリン席から目の前のごちそうへと視線を戻していたハリーもニヤツと笑った。

「僕らよりグロウプのほうがいい遊び相手になりそうだよ」

三人で顔を合わせて悪ガキの顔で忍び笑う。

「——あつ！ マリア！」

突如、ハリーの目がカツと開いた。

「——糖蜜パイは二つまでって、いつも言ってるだろう！」

「……だ、そうだ。マリア」

「失敗したね。ロン」

ぶんぶん怒るハリーから逃げてロンの背中を小突く。ここぞとばかりにロンの長身を利用してやる。ロンはオーバーにおどけてハリーを煽ったりなだめたりしていた。

マリアとロンのこの関係も——悪くないね。

へび避けは必要かい？ 釈然としない様子でいる相棒にわざとらしく杖を振ってみせた。僕としては笑顔よりもよっぽど見慣れたしかめっ面だが、なにがどう作用したのか、ドラコは肩の力を抜いて腑抜けた顔で笑った。

「冗談はおいておくとして、だ。……あれ、君を狙ったものか？」

ドラコは躊躇しながらも首を横に振った。

「あのへビはまっすぐ僕に向かってきたわけじゃない。目に入るすべてに威嚇していた」

「ああ……ハリーもそれらしいことを言ってたな」

夕食でのパーセルタングの彼の言葉を思い出す。『どいつが敵だ』——へビは敵意を明確にした上で標的は定まっていないう振りだった。

「はつきり言って、攻撃される心当たりならいくらでもあるからね。僕たち」

「僕が恨まれているなら当然、君だって恨まれてるわけだ」

「むしろ死喰い人関係なら『ポッター』の僕のほうがよほどモテると思うんだけど……わかんないや」

座り込む。横にある肩へ頭を預けてみる。当たり前に受け入れられる。……たぶん、この場所はアステリアのものだ。彼の隣にあるのはパンジーでなくアステリアでなければならぬのだ。——それなのに。

「アステリアのことだけど」

「ああ」

「僕も逃げられた」

「そうか」

静かな声だった。湖に消えてしまっそうだ。

「あの子、もしかしてハリーよりも頑固だったりしない？」

「つまりは君よりもってことだな。ご明察の通りだ」

「頭がいたい」

僕まで腑抜け顔になって口端をゆるめる。

——でも、諦めたりはしないんだ。強欲で傲慢で手段を選ばないスリザリンのマルフォイは。僕は彼の家族に向ける愛の深さを知っている。犬猿の仲であった『僕』の家に、我が子のために乗り込んでしまいうくらいなのだから。

「……僕が好きって、ほんとう?」

「ほんとうだ」

何度目かのつたない確認だった。ドラコはそのたびに迷わない。迷うのは僕ばかりだ。散々、暗闇の中をもがいて生きてきたマルフォイは、得るために捨てることを知っている。ゆえに、迷いが無い。取捨選択をためらわない。

すべてを欲しがら僕と彼はこんなにもちがうのに——やっぱり、狂ってるよ。ドラコ・マルフォイがハリー・ポッターを好きだなんて。

「たとえば——」

ドラコは謎かけでもするように語った。

「たとえば、僕と君のジニーが崖から落ちかけていたとして、君はどちらを救う? この場合、僕たちは杖を持たない。マグルのように使えるのは自身の腕だけだ」

僕も迷わなかった。

「ジニーだよ。君は僕が手を出さずとも立てる。……結局、君だけを一番になんて考えられないんだ。ハリーが大切だ。ジニーが大切だ。ロンが、ハーマイオニーが——もしも『僕』のロンとハーマイオニーに会えたなら、君のことなんて放り出して二人のもとへと駆けてしまおうよ」

ドラコの顔を見ることはできなかった。いつそ軽蔑してくれればいい。そう思った。

「——それでも、いいの?」

ドラコ・マルフォイは。

「なにを今さら」

鼻で笑った。心底憎たらしい顔で。憎み合っていたマルフォイの顔で。そしてマリアの相棒のドラコの顔で。

「それでこそハリー・ポッターだろう。僕が『君』のグレンジヤーとウィーズリーに勝てるものか。散々、ひがまされてきたんだ。君たち三人の絆に。そんなものはとつくに承服済みで——今さら君の一番になれるだなんて高望みは不可能だ。それだけ——僕は君を見てきた」

今だって、見てる。『君』の瞳がエメラルドであることを知っている。君の瞳がヘーゼルであることを知っている。

「僕だって同じさ。君も、アステリアも——逃がす気なんてさらさらないんだ」

指を一本一本と絡め取られる。へびみたいな手付きだ。大広間で見た毒蛇なんかよりも、目の前の男のほうがよほど手強い気がした。

——昔は、ちよろくて、バカっぽくて、どうしようもなく甘ったれたダドリーみたいな子供だったのに。あの頃の僕たちがこんなふうに手を繋いで安心したみたいに笑い合える世界があるだなんて、誰が想像できるものか。きつとダンブルドアだってマーリンだって困惑するにちがいない。

「お互いが一番じゃないのに、好きだなんて言うんだ」

「お似合いだろう?」

「そうかもね」

額と額を当ててささやく。

「——たとえば、僕とアステリアが崖から落ちかけているとしたら……君はどっちを助ける?」

額に熱が触れた気がした。いやだな——君の体温が、嫌じゃないなんて。

「もちろん——アステリアだ」

与えられた答えに、心の底から安堵に微笑んだ。

ああ、よかった——君にマリアは必要ない。

ハリーはすっかり習慣になっていた『上級魔法薬』のとあるページで指を止めた。この本は面白い。それほど読書という行為に興味の持てないハリーを十分に夢中にさせてきた。半純血のプリンスの書き込みは、ハーマイオニーが嫉妬するほど繊細で綿密で愉快だった。ハリーに最早プリンスの蔵書を手放す意思はなく——だから、気付いてしまった。

「ハリー。やっぱりわたし、反対だわ。このリベラコーパスなんて見て。これ……わたしたち、知ってるわ。ほら、ロン、思い出せない？ クイディッチ・ワールドカップの夜で？」

「知ってる」

「そうでしょう？ 死喰い人たちがこの呪文を使ってマグルのかわいいそうな人たちを——ハリー？」

「僕、知ってる——『マフリアート』」

ハリーの指が文字をたどる。隅っこでつぶれたインクの上をなぞる。ハーマイオニーの茶色い瞳がきよとりと指を追う。

「ハリー？ どういうこと？」

「これだったんだ。マリアがいつも使うのは。マリアは——マフリアートを知っている」

三人のあいだに沈黙が満ちた。六つの目玉がひとつの単語を捉えた。

「それも、プリンスの創作呪文よね？」

「ああ」

「……マリアは、いつから？」

「わからない。——わからないくらい、前からだ」

「それって——おかしい、わよね？」

「……………」

「まあ、あのマリアだからアヤシイとかオカシイとかそんなのは今さらだけど……」

ハーマイオニーとロンはそつと親友をうかがい見た。ハリーは教科書を凝視したままだった。

ハリー・ポッターはなおさら、半純血のプリンスの蔵書を手放せなくなっていた。

その人と遭遇したのは偶然だった。まったくのたまたまだ。三年生以上の生徒はホグズミード村へ向かっているために、がらんどうな廊下の途中で互いに立ち呆けた。

「スネイプ先生」

「……我輩の記憶が確かであれば、貴様は開放日のほとんどをホグワーツで過ごしているようですね。その愛校心にはまったく感服させられる」

相も変わらず絶好調な皮肉に、ニヘラと締まりのない顔で返す。スネイプ先生はそつと僕から目をそらした。

「やっぱり逃げるんですね、スネイプ先生。いつそ目もハリーと同じだったなら見てくれましたか?」

「おぞましいことを言うな」

間も入れず切って捨てられる。わかっている。僕が母に似れば似るだけ、この人の傷口は開く。彼にとってマリア・ポッターの存在は罪の具現でしかないのだ。……母さんはとつくに、あなたを許しているのに。

あなたにとってリリー・エヴァンズは、生きる希望を与える慈愛の悪魔であり罰を与えてくれる残酷な天使なのだろう。

ほんとうに、どうしようもなく臆病な人だ。——そして勇敢だ。

「たまにはマルフォイも外へ連れ出してやりたまえ。お前たち二人と来たら……スリザリンとグリフィンドールだというのに、」

「ドラコなら今日はホグズミードへ出ていますよ。パンジーお嬢さんと優雅なデートだ」

ピタリ。重々しいローブを引きずる汚れきった革靴が歩みを止めた。

「——あいつは、今、ホグワーツにいないのか？」

「え？ ええ……それがなにか？」

「……………」

スネイプ先生のまとう雰囲気が気だるげで陰鬱なものから鋭い刃へと変わるのを感じた。——スネイプ先生が警戒している。

「失礼する」

「待ってください！」

咄嗟に目の前のローブを掴んだ。——パシンツ。

「——」

目を見開く。奈落の底みたいな目も僕を見て開く。沈黙。どちらもが驚愕を面上に浮かべていた。

「あの——僕——」

「——セブルス！」

払われた手を抱いていたたまれない空気の中どうにか声を絞り出せば、前方からの呼声に僕もスネイプ先生も意識を引かれた。マクゴナガル先生だった。

「セブルス、至急あなたに見ていただきたいものが——ミスポッター！ ああ、なんてこと……落ち着いて医務室へお向かいなさい。それがいいでしょう」

老成特有の伶俐な面立ちを憐憫にゆがませたマクゴナガル先生に心がざわつく。医務室——僕に近い誰かの身にマクゴナガル先生が慌てるほどの事態があつたのだ。ハリーか、ロンか、それとも——

医務室内には少女のすすり泣く声だけがあつた。パンジー・パーキンソンだ。ベッドには常から青白い肌をさらに青くした少年が眠っていた。……ほら、まるで吸血鬼じゃないか。

「ドラコ」

目を腫らしたパンジーが僕を見た。

「ポッター」

そして彼女は告げる。——もう、あんたしかいないのよ。マリア・ポッター。

「あんたしかいないの。ドラコを助けて、マリア」

パンジー・パーキンソンは憎しみのすべてを払ってマリア・ポッターの手を掴んだ。

「……どういうこと？　なにがあつたの？　——このために、君はドラコの側にいたの？」

適当な椅子を呼び寄せてパンジーの隣へと腰かける。素直な彼女は一瞬スリザリンらしく嫌そうに顔をしかめたが、なんとか飲み下したようだった。

「そうよ。ドラコは狙われてるの」

「なにに」

「知らないわよ。けれど——ドラコを本気で殺そうとしている誰かがいる」

呼吸だけが生を伝える少年を前にして、空気は質量でも持つかのよう
に重く少女の肩へともし掛かっていた。

「ドラコはどうなってるの」

「命に別状はないわ。マダム・ポンフリーはそう言った。昏睡状態に
あるだけだって——でも、死んでたかもしれない！」

パンジーがワツと声を上げた。パンジーは被害に遭ったドラコに
負けず劣らずひどい顔色をしていた。少女は完璧に追いつめられて
いた。

「はじまりは新学期すぐに届いたお菓子だったわ。ドラコ宛に届いた
の。チョコレートだったわ。わたし、それにムカついたの。だって女
の子が好きそうな包装だったんだもの！ ドラコに色目を使ってる
身の程知らずが寄越したんだって——だから、開けてやった。それ
で、わたし、チョコレートを捨てたわ。ゴミ箱へ。そうしたら——」
「誰のペットかは知らないけど、ネズミが食べたの。チョコレートを。
——そのネズミ、死んだわ。口から泡を吐いて、ゴミ箱の中で死んで
た。——毒入りのチョコレートだったのよ」

ぎゅうつと背を丸めてあえぐ。どれほどおそろしかっただろう。
どれほどの衝撃だっただろう。それでも、彼女は逃げなかった。

「その次は悪夢に引き込む本よ。呪われた本。開いた人間は悪夢に囚
われてそのまま目覚めなくなるの。そしてゆくゆくは衰弱死。それ
が、ドラコの鞆の中に入っていたの。——わたし、ほんとうにたまた
まその本を知ってただけなの。もしも、知らなかったら——もう、こ

んなの悪戯じやすまないって……このままじゃドラコが殺されちゃうって……」

「……それを、どうして先生に」

「言ったわよ！ スネイプ先生に言ったわ！ でも——」

パンジーは黒髪を振り乱して拳をにぎった。少女はたえていた。たくさん、たえてきた。

「きつと助けてなんてくれないわ。——ドラコは『裏切り者』なんだから」

痛々しい答えだった。大人を頼れない子供はいつだって悲惨だ。

「それで、君がドラコの代わりに悩んで、苦しんで、彼の危険に立ち向かってくれてたんだね。——ありがとう」

思わず礼が口をついていた。パンジーはカッと苛烈に僕をにらんだ。ひどい屈辱を受けたとその目は語っていた。

「あんたに礼を言われる筋合いなんてないわ。今だってほんとうは頼りたくなかないわ。ムカつくもの。わたし、あんたなんか大嫌いよ」

その通りだ。パンジー・パーキンソンはマリア・ポッターが大嫌いだ。そんなのは誰もが知っていた。——それでも。

「ドラコが死んじゃうのは、もつと嫌」

切々と、声は落ちた。感情がにじんで、彼女は再び泣き出してしまったのだと思った。パンジーは泣いてはいなかった。

「だから、一時休戦よ。わたしの目の届かないところでは、あんたがドラコを守るの」

ひと呼吸。ずいぶんな身勝手を押し付けてくる少女に小さく笑う。

「ねえ、パンジー。怒らないで……ていうのは無理だろうけど、君は——君って、ほんとうにドラコが好きだったんだね」
「どういう意味よ」

先程とはちがい、パンジーは叱られふてくされた子供のようにならざるを向いていた。

「君は『マルフォイ』目当てだと思ってたから。でも、ドラコはこの状態で——君たちに言わせれば『裏切り者』で、それでも君は」

たとえば僕の知っているパンジーならドラコを迷いなく見捨てただろう。我が身が世界一かわいい女の子だ。裏切り者とまで呼ばれているらしいドラコの側において、彼女が嫌な思いをしなかつたとは思えない。無論、偏見であることは否定しないが、おそらく間違っていない。

パンジーは口をひん曲げて、ただでさえ整っているとは言いがたい顔をぐしゃぐしゃにして吐き捨てた。

「フン、そのとおりよ。地位目的だったわ。だってドラコと結婚すればブラックの間を母に持つことになるんだもの。これってすごいことなのよ。マグル育ちのあんたにはわかんないでしょうけどね」

悪ぶって。悪態をついて。せいっぱいの虚勢をはって。

「でも、好きになっちゃったのよ」

少女は陥落した。僕は無性に目の前の寝顔をひっぱたいてやりた
い気持ちでいっぱいだった。

どうしてやろうか、この色男。よりによってなんだって僕がパン
ジーなんかの甘酸っぱい告白を聞いてるんだ。そして君はなにを呑
気に——まったく、憎たらしい！

「オーケイ、青春はあとだ。こいつが起きてからにしてくれ。——も
う一度、情報を整理していいかい？ 狙われているのは僕や他の誰か
でなくドラコなんだね？ それははつきりしているね？」

どうにかと軌道修正をはかる。こんなパグ女をいちミリだってカ
ワイイなんて思うのは許せなかった。——彼女の声を受け止めるべ
きは、ドラコ・マルフォイなのだから。

「ええ、そうよ。ドラコ宛に手紙があったもの」
「手紙？」

くり返す。パンジーは鼻へシワを寄せながら記憶を絞り出してい
た。

「チョコレートの包みに挟まれてたの。一緒に捨ててしまったからも
うここにはないけれど——ええと、オーグリーがどうとかって」

「——オーグリー？」

背中を針が滑るような——悪寒。

「鳥の絵も描かれてたわ。それこそオーグリーの絵がね。死の予兆を
寄越すだなんて——最低」

ドクリ。心臓が暴れだす。目の前に自分を食らう猛獣を見た小動

物の気分だった。

オーグリーが、ドラコに。――^{オー}デルファイニー、だって？

「ああ――」

戸惑うパンジーを置いて立ち上がった。動かなければ。オーグリーが関わるのであれば――『僕』こそが立ちはだからねば。

医務室から退室する。向かうべくは――

背中の冷たい熱は心臓をも冷やした。心に氷を落とした。腹の底で恐怖を混ぜた。

オーグリーがこの世界にいる。

「最悪だ」

パンジーは語った。『彼』は助けたくない。

僕はそうは思わない。僕と、ドラコと、そしてダンブルドアは思わないだろう。

「スネイプ先生」

『彼』こそが愛に殉ずる護り手なのだから。

「それが、ドラコに害なした現物ですか」

スネイプ先生は自室で机の上のなにかをなぞっていた。顔を限界まで近づけて杖でゆっくりと愛撫するようになっていた。それはペンドラントに見えた。

「ドラコのこと、守ってくれていたんですね」

「ポッターと名のつく人間は無礼であることがマナーらしい」

杖でペンダントを叩いたスネイプ先生は、やつれた蝙蝠のように緩慢に背を起こした。遅れてのつぺりとした髪が机から頬へと戻った。

「それ、触ったならどうなりますか」

「死ぬ」

単調な答えだった。——たぶん、ドラコは知っていたのだ。だから受け取ったのだ。

「ドラコは触れてはいないですよね」

「ああ。あれも悪運ばかりは恵まれている」

後ろ手で扉を閉めて暗く笑う。バカナやつ。一目で見抜いたんだ。それが闇の魔術道具だって。それで——誰にも触れさせないように、自分ならどうにかできるって思った。ほんとうに——マルフォイは肝心なところで抜けてるバカだ。

「先生は否定したいのでしょうか、あいにくと僕は先生が嫌いじゃないので勝手に感謝します。ドラコを見守ってくださいありがとうございます」

「恥ずべき早とちりだ」

ピシヤリと跳ね退けられる。心底から迷惑そうに相貌はゆがんでいる。

たとえば闇の魔術に対する防衛術での視線。たとえばドラコに触れる前に消されたヘビ。ハリー・ポッターを憎みながら見守っていたセブルス・スネイプは、くたびれた腕を広げてドラコをもかいなに含

んでいた。

「それ、触ってみたいですか」

ふと、こぼれていた。スネイプ先生は当然無視をして——おそらく、答える気なんてなかったのだ。

「こんな無粋なものは好かん。私は——死を選べるとするならば、君の手でありたい」

「——」

そんな気はなかった。きつとそうだ。スネイプ先生はすぐに口をつぐんだ。自分の声に驚いたのだ。——もう、遅い。

僕はやわい腕をもつてしてスネイプを机へと叩きつけていた。

「ふざけるなよ……あんたたちはそうやって、自分だけ楽になろうとする！ 大義名分を得た瞬間に勇んで死ぬんだ！ それが褒美みたいに解放されようとする。そんなの——許すもんか！」

真つ黒の瞳だった。穴の底みたいな瞳だ。だから——僕が^{マリア}よく見える。

「ああ嘘だ。あんたが嫌いじゃないなんて嘘だ。大嫌いだ。死にたがりなんか大嫌いだ！ 誰が殺してやるものか。みじめに這いつくばってでも生かしてやる——もううんざりだって笑うまで許してやるもんか！」

叫ぶ。どうしても許せなかった。僕だって同じだろうに。でも、彼には生きる価値があるのだ。——『僕』がそれを望んだんだ！

「勝ち逃げなんかさせない——負け犬は負け犬らしく生に足掻いてろ

！」

スネイプは瞠目していた。当然だ。めちやくちやだ。こんなにも——生きた顔ができるのに。あなたは生きているのに。その目はここにあるのに。暗闇ばかりを見て、死者だけを追って、愛に呪われゆく人。

どうして、優しい人たちはバカばかりなんだ。

「ちやんとハリーから二人分の感謝をもらってくれないと」

噛み締める。『僕』のスネイプは圧倒的に勝ち抜いた。受け取ることを拒否して届かないところまでいってしまった。ポッターからはなにひとつだつて貰ってやるものかと嗤った。悔しくてならなかった。

行き場のない謝罪と感謝は腐るしかないんだ。

「地獄の底まで追いかけてやる。セブルス・スネイプ」

たぶん、ちよつとした恨みとか、八つ当たりとか、苛立ちとか——腐りくすぶっていた尊愛とか。

すべてをぐちゃぐちゃに溶かして混ぜたハシバミの瞳で、僕は死にたがりへ贖罪を突き付けた。

揺れる。おぼつかない足取りだ。とんでもない啖呵を切ってしまった。そんなのは今さらだ。

立ち止まる。窓の向こうから誰かの声が聞こえる。日常がある。誰もが愛する時間がある。

守らなくてはならない。奪われてなるものか。それは僕の役目だ。僕は——そのために生まれてきたのだ。

僕は、ハリーのために死ぬのだ。

「……はは。そんなことって、あるかよ……」

地面へ膝をついた。気付いてしまった。どうしてだか、当たり前に
あつた。

当たり前にあるはずのないものが、僕のなかにあつた。

気付いてしまった。

「これは、誰の感情だ」

僕は、だれだ。

それからドラコは三日ほどで目覚めた。後遺症などもなく、周囲の心配をよそにけろりとしたものだった。

「とりあえず一発殴っていいかい」

「まったくよくないが!？」

冷や汗をかくドラコを壁へと追い詰める。姑息にも逃げようとするので逃走進路を足でふさいだ。なんだっけ……娘のリリーが足ドンとか言ってたやつだ。

「……………マリア?」

「君さあ」

次は腕である。身長差なんてものともせずドラコを閉じ込める。片手でネクタイを引っ掴めば簡易首輪の完成だ。

「なんで——大事なこと——黙ってるわけ?」

「待て、落ち着け」

「なんで——殺されかけといて——話さないわけ?」

「おい、マリア」

「僕たち……相棒じゃないの?」

「……ハリー」

「うるさい。今はマリアとして話してる。いいか、言い訳ならかしこくしろよ、マルフォイ。寿命が縮むぞ」

「縮められる前提なのか!？」

壁に背をつけ縮こまっていたドラコは、やがて腕を伸ばして僕を包んだ。

「……悪かった。心配かけた」

「……フン」

壁を使つての拘束を解く。秘密ならば僕のほうがよっぽどだ。棚上げもいいところだ。けれど——アステリアのためにも、スコープウスのためにも、ドラコ・マルフォイはうしなえないのだ。

「君がのんきに寝てるあいだに色々動いたよ。とりあえずは事情聴取だ。なぜ君にあのペンダントが届けられたんだい？」

「動機なら絞りきれないのが僕らだろう。ただ——届けにきたのはセオドールだった」

「…………」

片眉が跳ね上がる。セオドール・ノット——確かに、セオドールを使えば同じスリザリンの同輩としてドラコへかなり近付きやすい。つまりは、セオドールが『前回』のケイティに取って代わったのだ。ドラコが受け取っていないければ——セオドールは死んでいたかもしれない。

「かしこい言い訳にはならないが——そんな顔するなよ。不細工だぞ」

「母さんの顔はなにしたって美人だよ」

「中身が不細工だ」

小さく笑い合う。程よく肩の力が抜けた。

「ほんとうに、狙いが僕だとは思っていないなかったんだ。疑ってはいたが——ここで僕を殺すメリットなんて、私怨の他にないだろう。僕が死んだところでなにに響く？ 個々への影響はあるにしても、組織を揺るがすほどの大事にはなり得ない。——ダブルドアならともか

く」

「ハリーを動揺させるって意味なら僕のほうがよっぽど有効だろうしね。つまりはおっしやるとおり私怨なんじゃないか？ そうなると、それこそ動機なんて無数にのぼるわけだけど」

「……さすがに殺しにかかられるのは看過できないね」

「周囲への被害もバカにできない」

たとえばパンジー。たとえばセオドル。たとえば——アステリア。ドラコへ向けられた殺意の鎌はドラコごと周辺を刈り取ろうとしている。——オーグリーの鳴き声が不吉に死を呼んでいる。

「それじゃ、こちらからも報告だ——心して聞いてくれ」

そして思っていたとおりにオーグリーの名を聞いたドラコは真っ青になった。ただでさえ青い肌が吸血鬼の色になっていた。

僕もこいつも、そして僕たちの息子たちも、オーグリーに対してよい思い出を持っていない。オーグリー——ヴォルデモートの娘、デルフィーニに対して。

「その世界は、全員が試練を受け、全員が失敗した世界だ。可能性すら復活させてはならない」

「無論だ。僕が——私の息子が、王なんぞに仕立てあげられる世界はあつてはならない。あの子は人の上に立てる子じゃない」

「私はよい父親ではなかった。役立たずの父親だった。君の息子にも酷い仕打ちをした。友情を引き裂こうとした——友と共にあることがどれほど力になるか、誰よりも私が知っていたのに。私の盲目が、息子たちを破滅させかけた。……君にも、ずいぶんと迷惑を」

「ハリー」

ドラコが肩を叩く。友へするように。ドラコ・マルフォイが仲間である——それがどれほど得難いことか。

「だから、止めるんだ。僕たちで。——未来への持ち越しはなしだ」
「……ああ」

深呼吸。感情を落ち着ける。子供たちにまで僕らの尻拭いをさせるわけにはいかない。オーグリーの望む世界は——私たち大人が打ち碎かねばならない。

「情報を集めよう。彼女が本当にこの世界にいるのか。だとすれば、彼女は——」

「奴の母親はベラトリックス・レストレンジで、出産場所はマルフォイ邸だった。だがしかしそれはこの世界ではありえない。オーグリーがどのようにして存在しているのか。なぜ——『僕』なのか」
「突き止めよう。僕たちで」

しつかつおなずき合う。例の事件は起こるべくして起こった。残恨を後世までくすぶらせてしまった大人の責任だ。今度こそ——子供たちに血のにおいのしない世界を譲り渡さねば。

「頼りにしてるよ。——相棒」

今さらな握手を交わす。僕と君の抱える未来は似て異なるものだけれど——見据える先はきつと同じだ。

報告会は終わりだとばかりに別れる。そして振り返る。そうだ、ひとつ文句をいい忘れていた。……これのどこがいいんだか。やっぱり見た目か？ 色男め。

「ちゃんとパンジーに礼を言っておけよ。あと、あまり邪険にしてやるな。彼女、なかなかかわいいから」
「単純め」

ニヒルに笑い返されて、今度こそ彼へと背を向けた。——たとえば。たとえば、それが、僕^{マリッア}がこの世界に在る理由なのだとしたら——

「……悪くないかな」

少年は己の手のひらを見つめた。男になろうとしている手だ。子供のがむしやらさが抜けて要領よく傷を負った手だ。だがしかし——
——幼い。

「デルフィーニ——罪の、清算か」

男のかつての夢想到現実が追い付こうとしていた。

薬草学を終えたハリーはげっそりしていた。昨日にはダンブルドアとの二回目の個人授業があったようだし、リドルへ繋がる記憶に触れて何か心に負ってしまったのかと思いきや、悩みの種は親友二人のことだった。

「あの二人、付き合うのかな」

「なにか不満かい？ わかってたことじゃないか」

「ウン……でも」

しょんもりした様子のハリーを土濡れの手を拭ってから雑に撫で

る。

「さびしいの？」

「……………」

「君にはジニーがいるじゃないか」

「まだそんな関係じゃないよ。それに、それとこれとは」

「——別だよね。わかってる」

言いよどむハリーに同意を込めてうなづく。この年つて、そういったことも含めて大きく関係が動いたものだ。僕は結果的にロンとハーマイオニーが上手くいくことを知ってるから楽観視できるけど——いや、できない。息子たちが見た世界では、互いへの想いを抱いたまま二人は別れていた。

「……………むずかしいね」

「ほんとうに」

恋愛下手同士で寄り添い合う。チョウウが絡まないだけ、ハリー自身はすつきりとしたものだけ——僕は。

「マリアは」

ドキリとした。さすが双子というべきか。緑の目は僕を見ていながらその先を見透かすようだった。

「マリアは、どうするの」

僕は。——マリアは。

クイディッチ練習が始まるとロンとジニーの衝突も激化した。ロンのプレイには波がある。主に精神面がコンディションに大きな影

響を与えている。それにジニーは堪えられないようだった。

「この、ヘボ！ デメルザをごらんなさいよ。あなたの『事故』で何度顔をぶつたの？」

「まだ調子が出ないんだ！」

「あなたの調子はいつ整うの？ 三日後？ 一年後？ それともあなたの愛しのチャドリー・キャノンズが優勝するとき？ それって何百年後の話かしら」

「この——言わせておけばっ」

「二人ともやめろ！ ロンは冷静になれ。ジニー、ロンをヘボなんて呼ぶな」

新チームのキャプテンを担うハリーはすっかりてこまいだった。それを僕はかつての自分を見る気持ちで見守る——とはいかない事態が、先に待ちかまえていた。

それはすっかり見慣れた兄妹喧嘩を二人が寮までの道のりでくり広げている時のことだった。二人とも練習後で疲れていた。特にジニーはゴールを六回も決めてくれたかった。つまりは頭が回っていなかったのだ。その代わりに口が滑ってしまった。

「そんなだからハーマイオニーからクリスマスの誘いをもらえないんだわ」

「なんの話だよ」

「スラグホーンのクリスマスパーティーのことよ。彼のお気に入りメンバーから誘いをもらえればお気に入りじゃなくても参加できるの。あなたは誘ってもらわなくちゃ参加できないでしょ？ ハリーはマリアと行くものね？」

「えっ？」

「ああ、うん。そのつもり」

まさかの事後承諾である。啞然とハリーを見上げれば、ふにやつと

した腑抜けな笑顔で返されて肩をすくめた。僕が断るだなんてまるで思わない安心顔だ。まったく、僕の弟はいつまでたつてもかわいい。……ダンスパーティーでは姉さんを見捨てたくせに。

「あたしはハリーじゃないから、兄弟を誘うなんてまっぴらごめんだわ。つまり、あなたはハーマイオニーからの誘いを受けないとクリスマスパーティーには来られないってことよ」

「別に——僕——そんなの——だいたい、あいつだって誘える男なんて僕とハリーしかいないだろ」

「ああら、おあいにくさまね。ハーマイオニー、モテるわよ。だって綺麗になったもの。二年前のダンスパーティーで？ それに、キスだって済ませたわ」

ロンが立ち止まった。遅れてジニーも立ち止まった。その顔にははつきりと「しまった」と浮かび上がっていた。

「……それじゃ、あたし、先に行くわ」

奇妙な顔の兄を置いて、ジニーはそそくさと逃げた。残された僕たちはロンに隠れて目で相談し合っていた。……どうしよう、これ。

「あれ、ほんとうか？ 相手はクラムか？ ダンスパーティーでなら、そうに決まってるよな？」

「えーと」

「ウーン」

曖昧ににがすが、ロンの中ではすでに決定してしまったようだ。事実、ハーマイオニーとクラムが当時それなりにイイ仲になったのは本当なのだ。そして僕たちは——嘘が上手くない。

それからロンのハーマイオニーに対する理不尽な攻撃は始まった。『前回』では親友に挟まれ昼はロン、夜はハーマイオニーとフオローに

駆け回った『僕』だが、今回は『僕』が二人いるのだ。僕たちは絶妙に分け合って親友の聞き役に徹した。僕は当然ハーマイオニー側だ。一応……マリアは女の子なのだから。

「わけがわからないわ。どうしてロンはわたしに冷たくするの？ わたしのなにがロンをあんなに怒らせたの？」

「ハーマイオニーは悪くないよ」

君が二年前にクラムとキスしたからだよ。とは、到底言えそうになかった。

「わ、わたし——ロンを誘おうと思っていたの。クリスマスパーティーのことよ。わたし、ロンになら——でも、これじゃあ話すことすらできない！ こんなので、みじめだわ」

「ハーマイオニー……」

顔をくしゃくしゃにするハーマイオニーを抱きしめる。ロンは君が好きだよ、と、一言いってしまったら全部がおさまる単純さで彼らの恋心ができていたならよかったのに。それではいけないのだ。誰かを愛するって——『好き』だけでは成立しない。

親友二人の仲がめちやくちやのままクイディツチグリフィンドールチームは初試合を迎えた。案の定ロンはふてくされきって、今回のプレイに期待できそうな素振りにはまるでなかった。ゆえに——ハリーは細工をした。

ハーマイオニーは憤慨した。フェリックス・フェリシスをロンの飲み物に仕込んだと思い込んだハーマイオニーは正当にいかった。どうにか選手二人を会場へ送り込んでからハーマイオニーへとささやく。

「落ち着いて、ハーマイオニー。あれ、演技なんだ。実はなにも入れてない」

「……なんですって？」

「ロンに今日の自分は幸運だと思わせるためにひと芝居打ったのさ」

現に空は絶好のクイディッチ日和で、対戦相手のスリザリンチームからは欠員が出ていた。ほんとうなら病的になってしまったマルフォイの代わりにド素人のシーカーがあてがわれるはずだったが、こたびのスリザリンシーカーはマルフォイでなくセオドル・ノットだ。セオドルが休場する理由はなく、どうどうと彼は立っていた。

「わたし……………そう。それじゃあ、その相談をわたし抜きでしたのね。石頭のわたしに話せば台無しにされると思ったんでしよう」

「そうじゃない！」

「いいえ、そういうことよ。そういうことなのよ。……………わたし、戻るわ。ついてこないで。……………マリアまできらいになりたくないの」

ハーマイオニーは試合が始まる前にクイディッチ会場から去った。後ろ姿がずいぶんと華奢に見えた。傷付いているのだ。彼女はあんなにも傷付いているのに——僕ではろくに寄り添うこともできない。結局、僕は男だった。

ハーマイオニーの心を置き去りにしたまま試合は万全に進み、晴天の下はグリフィンボール生やグリフィンボールチームを応援する生徒たちの歓声で溢れていた。むなしいくらい、世界は光を振りまいていた。ロンもハリーも笑顔だった。成功に酔っていた。

少女たちはひとりで泣いているのに。

グリフィンボール新チームの初勝利を祝う宴でもロンとハーマイオニーの悶着は起きた。ロンが当て付けのようにラベンダーとベツたりするのだ。さらに最悪なのが元々ハーマイオニーとラベンダーは同室にあるため、ハーマイオニーの逃げ場所がことごとく奪われているということだった。

魔法で作り出した小鳥にロンを襲わせたハーマイオニーは寮を飛び出した。慌てて追えば、僕とドラコが密会に使う湖畔で涙を流して

いた。

ロンのほうはハリーがどうにかするだろう。僕は言葉なく少女の隣へと座り込んだ。

「うらやましいわ」

「なにが？」

「あなたたち、うまくいつてるじゃない。それすら妬ましくなるのもううんざりよ」

「あなたたちって——僕とドラコ？」

「他に誰がいるの？　あなたのことを好きな人はたくさんいるわ、マリア・ポッター。あなた、毎年綺麗になっていくもの。グリフィン・ドールの男の子なら一度は一目惚れしてるわ。でも——あなたが好きなのはひとりだけ」

「……………」

ハーマイオニーがそんなふうには僕とドラコのことを誤解してるのは知っていた。面倒からそれほど強い訂正も入れてこなかった。けれど——それはおそらく間違いだった。

「あなたたちって変よ。かなり変。でも——上手くいつてる。形として成り立ってる。好き合ってるのに友達ができる。それって——」

「待って、ハーマイオニー。ドラコは確かに僕を好きと言ったかもしれない。けれど、彼にはとつくに心に決めた人がいて、」

「それってスリザリンのあの子のことでしょう？　でも、あの子、ちよっと変わってきてるわ。——それでいいの？」

「————」

マリアはどうするの——ハリーの声がよみがえる。

「ねえ、マリア——それでいいの？」

涙に濡れた茶色の瞳はどこまでも誠実だった。正義に近い場所にあるうとする少女の眼差しは無垢に逃げ道を碎いていく。前を見ると叱咤する。彼女の正しさはいつだって痛みと同じだ。

「わたしたち、もう誤魔化して見て見ぬふりをしていい歳じゃないわ。ちゃんと考えなくちゃ。マリア——あなたはどうするの」

たとえば二人だけのダンスの夜。たとえばアンソニーと入れ替わりの空き教室でこぼれた言葉。駅での告白。パンジーが目について仕方なかった理由——

子供のふりの時間は終わりだ。

クリスマスパーティーには結局、ハーマイオニーはマクラーゲンを連れてきた。完全なるロンへの嫌がらせだ。それにハリーと揃って肩を落とす。

「ねえ、僕、もう二人の友情は無理な気がしてきた」

「まあ……友情は無理かもね」

胡乱に囁く。互いへの嫉妬心がなければなにがどうしてそうなるのか、ロンはパーバティと結ばれることになるのだそうだし、この憎しみは最終的にプラスへ転じるのだから必要なだと割りきれたらよかつたけど——振り回される身としてはいい加減にしてくれ、の一言に尽きる。結婚してからも喧嘩するたびにうちへと駆け込んできてたものね……どちらもが。

「マリア、それ、素敵だね。かつこいいよ」

ふと、たゆたう雲のような浮いた声が背後からかけられた。ルーナだった。ルーナがスラグホーンのお気に入り指定に入ってるとはとも思えないので、誰かから招待を受けたのだろう。いったいルーナのような変人（僕はそこを面白いと思ってるんだけど。）を誰が呼んだのか。答えは簡単に見つかった。

「ぜったいに異性を連れてこいとは言われなかったもの」

茶目っ気たっぷり鮮やかなドレスを着たジニーがウイנקをした。かわいい。なんてかわいいんだ。今宵一番の淑女は君だ。そもそも周りの有象無象なんて勝負にもならなかった。照明が一気に褪せてしまった。色彩が彼女へ集中したからだ。

オレンジ味の強い赤毛はサイドにまとめられ肩を流れていた。ドレスはシックな黒を基調に白のレースと淡いブルーが踊っていた。頬はうっすらと色付き、リップは彼女の魅力をふんだんに膨らませていた。僕はクラクラする思いだった。こんなのって——もはや妖精だ！

「やっぱりマリアはドレスじゃないのね。今夜がダンスパーティーだったなら、またダンスへ誘ってくれたかしら？」

「もちろんだよ、マイレディ」

思わず手を取ればクスクスと軽やかに笑われた。どうしてか隣でハリーが深々としたため息をついていた。

「ドラコの気持ちが変わったよ。どっちにどう思えばいいんだか」

「好きな人たちが仲良しってのはいいことだと思うよ。あたしはジニーとマリアがロンとハーマイオニーみたいになつたらいやだもん」
「それは……うん、そうだね」

やっぱりずれてるルーナの発言に三人で笑い合った。そうすれば、ハリーは案の定スラグホーンに見つかってしまった。セイウチに似た巨体が上機嫌にハリーの肩を叩く。

「やあ、やあ、ハリー！ 私は君の登場を首を長くして待っていたんだよ。君に引き合わせたい人が大勢いるんだ。なんたって君は——ちよつとばかりシャイだからね」

暗にスラグホーンの夕食会から逃げ回った日々を揶揄されてハリーの目がずっと遠くなった。スラグホーンは次にジニーへパーティーを楽しんでいるかうかがうと、それから僕を見た。

「これは……惜しいなあ。ドレスであればどれほどリリーに似たか。

君は女性の装いが嫌いだと噂には聞いていたけれど……ああ、セブルス！　こちらにいらつしやい。ごらん、まさしくミニチュアリリーだ！　ぜひとドレスで着飾ってほしいところだった……」

渋々である様子をつくろいもせず普段と同じローブ姿の鬱々とした男がやってくる。途端、ハリーの機嫌が地に落ちた。そんなハリーを上から下まで眺めてスネイプ先生は暗い瞳と共に鼻へシワを寄せた。

「ハリーはすごいぞ、セブルス。両親の才能を完璧に受け継いでいる！　特に魔法薬学だ。私はリリーの再来だと瞠目したとも。まあ……見た目に関してはマリアこそが再来なわけだがね。君の教え方が上手かったこともあるだろう」

「……ほう。それはそれは。我輩の印象ではポッターに教えることなどまるで叶いませんでしたかな」

「ほっほう！　教えることがないほどにハリーは天才だったのか！」

すべてを好意的に捉えてスラグホーンはぬか喜んだ。ハリーはスネイプ先生の目から逃れようと必死だった。「教えることは叶わなかった」の正しい意味を理解しているからだ。今頃、テスト中にカンニングしたような居心地の悪さに襲われていることだろう。

ハリーの祈りが通じたのか、スラグホーンはハリーを見世物のように腕にがっちりと捕獲すると、連れ立って人脈作りにいそしみ始めた。残された面々は言葉なく立ち尽くすしかなかった。

——瞳だ。暗い瞳だ。穴の底のような瞳だ。月のない夜のような瞳だ。泥を煮詰めたような瞳だ。澄んで濁った瞳だ。

心の底から憎んだ人の瞳だ。

「スネイプ先生」

スネイプはそれが合図であったかのように僕へと背を向けた。

「我輩は——君にドレスは似合わないと思うがね」
「え……」

惚けてしまった。隣でジニーは憤慨していた。失礼極まりないとぶつくさ悪態をつくジニーをなだめることも忘れて漆黒のローブを見つめた。スネイプ先生はさっさと人混みにまぎれていた。あんなにも目につく黒だというのに、嘘のようにローブの背は消えていた。

「スネイプってマリアが好きなんだね」

「とんでもないわ！ 確かにあいつ、ハリーとはちがつてマリアにはそんなに嫌がらせをしてこないけど——でも——そう！ 目付きよ！ あの目付きはすごくすごく邪悪なものだわ」

「そうかな。空っぽだと思ったけど。だから、ほら、空っぽなら好きなものを詰められるでしょう？ ナーグルの酔漬けとか、プリンピーの羽根とか」

「ルーナ……あなたがさっきまで見てたのって空のグラスかなんかなんじゃないの」

少女二人の仲睦まじい掛け合いをぼんやり流したまま呟く。

「やっぱり——あの人の目は銃口に似てる」

「銃口？」

声もタイミングも仕草までもを揃えて見上げてきた女の子たちにハッと意識を取り戻して空笑った。

「マグルの武器だよ。君のパパに聞いてみるといい、ジニー」

……正確な知識で返ってくるかはわからないけど。

きよとりとする女の子たちを誘導しながら隅へと移動する。そう

すればそこには、マクラーゲンから逃げてきたらしいハーマイオニーがドレスをたくし上げて椅子に寄りかかっていた。

「男の子ってどいつもこいつも——クイディッチとぞ、ぞ——そういうことしか頭がないのかしら!?! なんておぞましいの、コーマック・マクラーゲン。グロウプのほうはまだ紳士的よ」

「そういうことしか頭がないのよ。ロンを見てればわかるじゃない」

痛烈に返したジニーにハーマイオニーはぐつと押し黙った。僕は女性たちの爆弾がいついかなる時に破裂するか気が気じゃなかったし、ルーナは足元でちよろちよろするしもべ妖精の頭に関心を吸い取られてしまったらしかった。

「やっぱりあなたがうらやましいわ、マリア。ドラコならこうはならないでしょうに」

「……どうかな」

ふと、パンジーに膝枕されていたいつかのマルフォイが浮かんだ。こんな埃を被りきった記憶が引き出されるだなんて——見た目に引きずられてるのか？

「マルフォイは参加してないの?」

「できないわよ。……色々あったもの。スラグホーンは取捨選択をする収集家よ」

「でも、あの子はいたよね?」

「あの子?」

ルーナの『あの子』の言葉に仕草だけで続きを促す。ルーナは答えた。

「スリザリンの女の子だよ。マリアが仲良しの」

」

グリフィンドールのマリア・ポッターと懇意にしていたスリザリンの女の子。それだけで該当者はただ一人にしぼられた。

「どこで見た？ 今もいる？」

「ううん。あたし、途中から来たけどその時にすれ違ったよ。寮に帰るところだったんじゃないかな」

「ありがとう」

女の子三人衆から離れて会場を後にする。

スラグホーンは取捨選択をする収集家だ。ドラコは呼ばれない。なぜなら父に死喰い人を持ち、かつ、親殺しと噂されているからだ。スラグホーンは自身に利益をもたらすものしかお気に入りに入れたい。ならば——アステリアはなにを気に入られたんだ？

後先考えずに廊下を走っていた。それで彼女に追い付けるはずもない。とつくに寮へ戻っている頃だろうとスピードを落としたりとこころで——見付けた。アステリアはドレスアップ姿のまま廊下に伏していた。

「——ツアステリア!!」

駆け寄る。肩を抱けば華奢な肩は震え呼吸は激しく乱れていた。顔は真っ青だった。——過呼吸か。

「アステリア、吸うんじゃない駄目だ。ゆっくり吐いて。そう、吐くんだ。落ち着いて。ゆっくりでいい」

「マ、リ……」

「しゃべらなくていい。呼吸を整えよう。僕の心臓の音を聞いていて。それに合わせて息を吐いて」

「ハア——ハ——」

「その調子。上手だよ」

少女を胸に抱いて背を撫ぜる。ハリ―であった頃、闇祓いとして勤めているあいだに何度かパニックになった被害者の相手をしたこともある。その経験が役に立った。気付けば、アステリアの呼吸は落ちて着いていた。

「よかった……このまま医務室へ行こう。抱き上げていいかい？」

「――いりません」

手は振り払われた。

「アステリア」

「あなたの手は借りません。あなたの手だけは――借りません。許されません。ポッターの手は借りません！」

「アステリア、意地を張ってる場合じゃないんだ」

「それでも張らねばならない時があるのです！」

アステリアの声は震えていた。今にも張り裂けて散り散りになってしまいそうな不安感をまとっていた。――少女たちは追い詰められていた。

「――わかった」

「キャツ――!？」

パーティー用のローブを脱いでアステリアへと被せる。そのまま腕に彼女を横にする形で抱き上げた。

「な、なに――」

「僕は君の顔を見なかった」

「……え？」

「だから、君がどこの誰なのか知らないし、制服じゃないからどの寮かもわからない」

「……………」

「ただ廊下に具合の悪そうな子がいた。だから介抱した。——なにも、おかしくないだろう?」

アステリアは腕の中でおとなしくなった。表情はわからない。ローブの下で彼女の顔は嫌悪に歪んでいるかも知れないし——涙を堪えているかもしれない。

見えないから——僕にはわからないんだ。

「……………でしたら、きつと、助けてくださったあなたはグリフィンドールかハッフルパフの方ですわね」
「おそらくハッフルパフだね」

押し殺した笑い声がローブの中でこもった。腕を揺らして返事代わりしてみる。

「それなら——これは、独り言です」

「……………」

「あなたへ向けてではありません。なぜならわたくしはあなたを知りませんから。わたくしの……………哀れな女の浮かされた独り言です」

アステリアはポツリポツリとこぼした。きつと顔が見えていたなら——彼女は口をつぐんでいた。

「廊下で大好きな人たちを見かけました。しあわせそうでした。とても——二人はしあわせそうでした。ああ、あの中に隙間はない——そう思いました」

「わたくし——わたし、くやしかった……………! とてもくやしかった! けれど、安心もいたしました。一等大好きな人はしがらみから解放

されて、幸せを得られると確信できたからです」

「あとは殺すだけ——わたくしを殺すだけ。わたくしの心を殺すだけ。それでも、わたくしはまだ生にあがいている」

「身体はとうに死の予行練習を終えたのに、心が追い付いていませんでした。それに、気づかされた——二人の笑顔に思い知らされました」

「わたしは——死ぬのがこわい」

堪らず唇を噛んだ。彼女の名を叫んでしまわぬよう噛んだ。呑み込んだ。胃の奥まで抑え込んだ。——呼んでしまえば、彼女はアステリア・グリーングラスとして立ち上がるしかないのだから。

「二人はゆるさないよ」

「ええ」

「君の大好きな人たちは、君が死ぬことをぜったいに許さないよ」

「ええ。そうでしょうね。そんな方たちだから、わたくし——好きになっちゃったんですもの」

腕の中で少女は身じろいだ。彼女の指が首に触れたのを感じた。髪が鎖骨をくすぐって、囁く声が耳の近くにあった。

「大好きよ。あなたたちが大好き。マリア、好きよ。わたし、あなたが好き。はじめてのおともだち。嫉妬したって好きよ。だから——
——届かなくていいの」

声はなくなった。呼吸が深くなった気がした。ズンと抱える身体が重くなった。吐き出すだけ吐き出して、少女は夢の旅路へと出た。だから。

「悪いけど、僕もドラコも傲慢で負けず嫌いで奪われるのは大嫌いな人間なんだ。だから——君がどれほど遠くへ隠したって暴きに行く

し、さらいに行くよ。……………アステリア」

重いはずの少女の身体は笑えるくらい軽かった。

「アステリアッ!!」

「マダム・ポンフリーにお見舞いそうそう締め出されたいのか?」

扉を蹴破らんばかりに荒々しい登場をしてくれたスリザリンの王子は、僕の軽口なんて聞こえないとばかりにアステリアの眠るベッドへと駆け寄った。ためらいなくその手を取った。アステリアは眠ったままだ。

「……………原因は」

「心労だつてさ。ストレスだよ」

「……………」

少女の繊細な手を両手で握り込んだまま、ドラコは黙した。激しい葛藤が彼の中で渦巻いていることがわかった。目が如実に語っていた。

「……………確認は」

「ままだよ。……………君がいないところではするべきじゃないと思つて」

ドラコは再び黙ったままアステリアの髪を撫でた。慈しみをたっぷり込めて——そしてその手を彼女の腕へと滑らせた。

「……………左腕は、僕が見る」

「なら、右腕は僕だね」

「……………」

「いやなら止めるけど?」

「いいや——僕たちであるべきだ」

それは切望と独占欲に満ちた声だった。ほらね——こいつは君が自分の元から逃げ出すことをぜったいに許さないよ。

同時だった。同時に——僕たちはアステリアの両袖をまくり上げた。

「……………」

きれいで——真っ白な腕だ。

「……………はああああ」

ドラコがアステリアの手を取ったまま崩れ落ちる。——アステリアは死喰い人ではなかった。

「よかったね、ドラコ。ま、当然だけどさ。アステリアなわけがないよ。そうなると、改めてアステリアの態度に対する疑問が浮き彫りになるわけだけど」

「そんなの今はどうでもいい。彼女が闇に巣喰われていなかった。それだけで」

「気が抜けた? ……え、ほんとに抜けた?」

床に座り込んだままベッドへ突っ伏してしまったドラコに、指差してゲラゲラと笑ってやりたいのを我慢して見守る。アステリアが起きないとも限らないし——マダム・ポンフリーに締め出されちゃ敵わないからね。

「……………よし、確認はすんだ。このまま僕たちがここにいてはまずい。出よう、マリア」

「まずいって、どうして——」

カツリ。規則的な足音が空間を切った。貴族的な足音がリズムを続けた。緑のローブをまとった豊かな栗毛の少女が廊下を照らすランプを背に微笑んでいた。

「あら……親殺しの裏切り者と穢れた血の混血じゃない」

「——ダフネ」

アステリアの実姉、ダフネ・グリーングラスがそこにいた。

「妹に触れるのはおよしになってくださる？ 親殺しの血の臭いと下劣な獣の臭いが移ってしまいますもの」

ダフネの笑みはたおやかだ。だがしかし——アステリアの持つやわらかさはどこにもなかった。

「……君たちは、アステリアをどう扱ってるの」

「あら、まあ——くさいくさい。獣はたとえ人の言葉をしゃべっても理解不能だわ。どう、だなんて——家族としてに決まってるでしょう？」

カツリ。カツリ。丁寧な足音だ。なんだか朝を迎えたくない夜に聴く時計の音を思い出した。

「家族——薄っぺらな血で繋いでいるだけの絆だな」

ドラコの挑発にダフネはコテリと首をかしげた。一定の頃までは彼等もそれなりに交流を持っていたはずだ。ドラコの言葉には比較的耳をかたむける姿勢でいるようだった。

「ええ、まあ……少し前までは扱いづらい子だとは思っていましたが。『病』のこともありますし。けれど——やっど、グリーングラスとして正しい子になりました」

ダフネはうつそりと唇を歪めた。

「未熟な子が成長を見せたのならば、喜んでやるのが姉の思いやりというものでしょう？」

ゾツとした。アステリアが抱えるもの——アステリアを死へと追い込むものの正体を、今、はつきりと目にした。

アステリアは——『家族』に殺されようとしているのだ。

ホグワーツはすっかり銀色の休暇を迎えて、クリスマスには少し前と同じように僕たちポッター兄弟はウィーズリー家預りとなった。ダンブルドアの気遣いであることは容易にわかった。まだ、僕たちに『僕たちの家』の残り香は強すぎる。

クリーチャーは分家とはいえブラック家の血族たるベラトリックス・レストレンジの命令権に抗えるか確信が持てないため、クリスマスもホグワーツの厨房に残ることとなった。ドビーが付いているので彼自身については心配していないが——シリウスもクリーチャーもない屋敷は僕たち二人では広すぎるのだ。寒々しすぎるのだ。ウィーズリー家の、こじんまりとして暖炉の熱が隅々まで届くような——そんな細やかな幸せが僕たちには十分だったのだ。

パーシーを除いたウィーズリー一家とルーピン先生、フラー、ポッターの双子でクリスマススイブの食卓を囲む。翌日にはロンがもらったラベンダーからのプレゼント(『わたしの——愛しい——ひと』ネットワークスだ。)で爆笑する一幕を経て、ハリーは白々しいスクリムジヨールと対決した。

「あいつ、つまりはハリーに会いに来たのか？」

家の窓から二人並ぶ庭を覗いてロンがぼやく。スクリムジヨールの背は神経質そうに張っていた。

「だろうね。魔法省としては新しいシンボルが必要なのだ。みんなが希望と期待を寄せられる、絶対的な象徴がね」

「それをハリーに？ まったく、調子がいいったら」

「ハリーは断るよ」

宣言通り、ハリーはむっすり和不機嫌な顔で戻ってきた。ロンと僕

を連れ二階へ引き上げては、これまで通り会話の内容をロンへと報告する。

「スクリムジョールもダンブルドアを警戒してるのか。でも、君——知らないよな？ ダンブルドアが学校を空けてるあいだ、どこでなにをしてるかだなんて」

「ああ、知らないよ。ほんとうに。——マリアも、知らない？」

二人分の目が真っ直ぐに僕を見る。疑いの眼差しではない。期待でもない。ただただ凧いだ目だ。

「——知らないよ。ほんとうに」

微笑めば、ハリーも同じように僕へと笑みを返した。

「そう。なら、まだ僕が知るべき時ではないってことだね」

「いいや、ハリー。マリアはウソをついてるぞ」

「そうかもしれない。でも、いいんだ。マリアが知らないって言うなら——真実がどうあれ、僕はそれを知るべきでないんだ。……まだ、ね」

そういうことだろうか？ 思慮深い弟は親友をおさえて僕へ形ばかりの確認を超越す。

……おとなっぽくなったな。少しだけ、アルバスを見ている気持ちになった。

「君って——だんだんだンブルドアに似てきた」

眼鏡の向こうで緑の瞳が悪戯っぽく細まる。おそらくハリーは冗談のつもりで言ったのだ。けれど、僕はそれに苦笑うしかなかった。

だって、その通りだ。——きつと、最期も、僕たちはよく似ている。クリスマス休暇明けのホグワーツではついにハーマイオニーの反撃が始まった。ラベンダーをうとましく思い始めていたロンがハーマイオニーへ目移りするたび、ハーマイオニーは敢えて優しい微笑を浮かべて僕を捕らえた。ロンのことは徹底的に無視した。……ま、今回ばかりは僕もハーマイオニーの味方をすると決めたからね。壁役くらいはこなしてやろうと、ニッコリ笑顔で彼女に合わせた。

次にハリーの問題だ。ハリーはダンブルドアより宿題を出されてきた。スラグホーンの記憶を引き出す宿題だ。『僕』の頃にも散々苦労した課題だが、悪戦苦闘するハリーたちの横で僕とドラコは別件に当たっていた。

「——今のグリーン格拉斯家がどうなってるか？」

いつもの湖畔を三人で囲む。特別ゲストは恋に恋する乙女、パンジー・パークinsonだ。ピリピリと常に神経を尖らせドラコに貼り付く彼女は、眉間のシワをさらに深くして鼻の穴を膨らませた。気に入らないと顔に大きく書かれていた。

これまでならばハーマイオニーと一緒に品のない顔だとか幼稚な悪口を叩いていたところだけど……改めて見ればそれほどでもなかったかもしれない。

「くわしいところは知らないわ。けど、妙に羽振りがよくなったのも確かだね。ここ最近の話よ。パーティーでも氏がやたら大きな顔をするってパパがぼやいてたもの。……はつきり言って、マルフォイに成り代わろうとしているようにわたしは感じたわ。身の程知らずもいところよ。たかだか成金のくせに」

鼻息荒く続けたパンジーに、いかるハーマイオニーを幻視しながらおそるおそると尋ねる。

「ダフネと仲良くないのかい？」

「姉妹どっちもよ。ダフネは……そこそこ話す仲だけど、妹のほうは恋敵じゃない。アンタもよ。なに自分は関係ないみたいなのよ」

「お、おお……」

久々に真っ向から受けた乙女の視線にたじろぐ。ほんとうに、女の子たちによってアプローチの仕方がまったくちがうのだから驚いてしまう。女心って開心術を使ってもわからないよ……。

「でも、ま、アンタがそれほど気にするっていうなら一応気にくらはかけてやってもいいわ。それでチャラだから」

「え？」

「アンタへの借りよ。グリフィンドールに借りを作るだなんてスリザリンの名がすたる。わたしはスリザリンのパンジー・パーキンソンなんだから」

勝ち気に鼻で笑って、パンジーが背をそらせれば心得たとばかりに胸のエンブレムが浮かぶ。そこにあるのはもちろん蛇だ。

「大体、なんだってグリフィンドールがスリザリンと仲良しなのよ。それも二人も！ 寒気がするわ。ありえない。アンタ、かなりおかしいわ。だからさっさとそのヨダレを垂らした犬みたいな間抜け面を引っ込めるのね。お忘れのようだからくり返して差し上げますけど、わたし、アンタが大嫌いだし、これから先だって大嫌いだし、これがきっかけで友達になるだとかそんなうすら寒い三文芝居は未来永劫ゼツタイにありえないんだから。………なによ」

ギラギラした目で睨み上げ、丁寧に指まで差してくれたパンジーにパチリとまばたきをする。そしてドラコを見た。ドラコは首を振った。

「パンジー……君って、実はおもしろいんだね」

「ハアア？」

パンジーは心底理解できないと顔を極限までしかめて地団駄を踏んだ。

「ああもうやだやだ、ポッターってこれだから嫌！ お花畑で話にならないわ。ともかく、妹のほうはわたしがどうにかしてあげる。アンタは、ちゃんと、わたしの目の届かないところでドラコを守るのよ。いいわね？ さあ行きましょ、ドラコ」

たつぷりとろけた猫なで声でパンジーがドラコの腕へと絡み付く。これでどうだと言わんばかりに勝ち誇った顔をしているが、ラベンダーがロンへ引付くときのような理不尽な胸焼けはなくなっていた。ドラコはすっかり瞳が虚ろだった。女の子にこれほどどうどうと守る発言をされると——まあ、男としては思うものがあるよね。

「やっぱりおもしろいなあ。ところでパンジー、もう僕のことをマリアとは呼んでくれないのかい？」

「だから、なつくなくなっつってんでしょ！」

さて、アステリアについて留意すると約束してくれたパンジーは翌日の朝にさっそく実行した。それも、かなり強引なやり方で。

「そのの——アンタでいいわ。こっちに来なさい。目上に対する食事の席でのマナーってやつを教えてあげる」

「えっ」

むんずと腕を取られたのは勿論アステリアだ。朝食の並ぶ大広間へと足を踏み入れたばかりの僕とドラコは唾然とした。アステリアのそばで件のダフネは不気味に微笑んでいた。

「かまわないわよね？　ダフネ。これ、教育だもの」

「……ええ。ぜひご厚意にあずからせてもらいなさい、アステリア。わたくしの妹を気にかけてくれてありがとう、パンジー」

「自寮の後輩の面倒を見るのは先輩のつとめだもの。礼にはおよばないわ」

ニツコリ。微笑んでいるのに少女たちのあいだに火花が見えた。寝室でうつかり顔を合わせたハーマイオニーとラベンダーを見るようだった。……女つて、やっぱりコワイ。

さらに、パンジーはもうひとつ大きな働きをしてくれた。わざとセオドールに薬品をかけ、本人に袖をまくらせたのだ。僕らがアステリアの次にあやしんでいたセオドールの腕に闇の刻印はなかった。これで、セオドールも白であることがパンジーの（手段選ばぬ）協力によって判明した。つまりは——振り出しに戻ってしまった。

「誰も彼もが怪しく見える」

「疑心暗鬼で寝込みそうだ」

おどろおどろしい薬瓶を前にドラコと共に頭を抱える。魔法薬学の時間だ。ハリーはロンと、ハーマイオニーは授業前にハリーと衝突があったように僕を避けてアーニーとペアを組んでいた。はみ出しものの僕は同じくはみ出しもののドラコとペアだ。

本日の課題は、現時点では毒である目の前の薬を独自に解毒すること。だがしかしそんなのにはまるで意識が向かなかった。

「誰がオーグリーと繋がってるんだ？　ホグワーツにいなながら。それってかなり不可能に近くないか？　ここはホグワーツだぞ？」

「オーグリーに僕が狙われる理由もいまだわからないしな」

「ハリーならともかく」

「マリアならともかく」

同時に呟いて、おかしくなって失笑してしまう。授業では、ハリーがベゾアール石を使うファインプレーをおこなってスラグホーンから称賛されていた。「ズルだな」ドラコの声に小さく肩をすくめる。プリンスの蔵書についてはすでにドラコへも報告済みで——思いつきり嫌そうな顔をされたのは言うまでもない。こっちのハリーならセクタムセンプラはしないってば。

それから二月のバレンタインまで、嘘のように刺客の魔の手は鳴りを潜めていた。もしや偶然だったのか、そう思い込みたくなるほどにホグワーツは平穏だった。そして、二月十四日のバレンタイン——事件は起きた。

「ハッピーバレンタイン、ハリー。それからロンとネビルにも。これ、チョコレート」

「ありがとう、マリア！ きつとマリアはチョココを用意すると思ったから僕はカードにしたんだ」

チョコレートのおいでむせ返りそうな朝の談話室にて仲間たちとバレンタインギフトを交換しあう。ネビルはさつそく蓋を開いては詰め込み型カエルチョコレートの数匹に逃げられていた。そんなネビルにみんなが笑っているうちにハリーの耳へと唇を寄せる。

「ジニーからのチョココには気を利かせなよ。カードと一緒に花を渡してみるのはかなり効果的だ。それから、ロミルダ・ベインに気を付けること。……追加の解毒剤を渡しておこうか？」

「マリアこそ。ドラコのことちゃんとおかかないと後悔するかもよ」

「そもそもあいつはこんな日にチョココを食べたりしないさ」

クツクと笑い合う。だって僕ら——子供じゃないんだから。

男女がどれほど浮かれきついても授業は通常通りおこなわれる。意中の人間と講義が重なるたびこっさりプレゼントを渡し合う若者たちを眺めながら、老成した気持ちで手元のチョコレートやらカードやらキャンディーやらを数える。ハリーは案の定押し付けられたロミルダからのチョココを臭い玉でもつまむようにしてゴミ箱へと直送

していた。完全に毒物扱いであった。そして昼食時——事は起きる。

「今年もマリア・ポッターへの貢ぎ物の運搬役をうけたまわりました、あなたの親友のハーマイオニー・グレンジャーよ」

隣に座ったハーマイオニーからぼんぼんとラッピングされた箱を渡されて、辟易した。そのまま見知らぬ誰かからのプレゼントが僕でなく向かいのハリーへと渡るのもお約束だ。

「アルフレッド・タイナー？ あいつか……飛行訓練でマリアをやたらチラチラ見てた……やっぱりそうか。これはダガス・マティンソン——ジーン・レックまであるじゃないか！ あいつ、いつのまにマリアに目をつけたんだ？」

「相変わらずね、ハリーは」

憤るハリーの隣に座ったジニーがサンドウィッチを取りながらお茶目に笑う。なぜそこでハリーと一緒にになってハーマイオニーいわくの貢ぎ物を物色し始めるんだい、愛しのジニー。当たり前顔でレベリオをかけるのはやめなさい。……とつくにハーマイオニーが終わらせてるから。

あらかたハリーと協力して差出人の目星をつけたジニーは、次にハーマイオニーへと注目した。

「あら、去年より増えてない？ ハーマイオニーへの貢ぎ物」

ピクリと。ロンの肩が跳ねた。

「やっぱりモテるわね」

「あなたほどじゃないわ、ジニー。もちろんマリアほどでも」

「そうかしら。あかし、同級生からけっこう聞くわよ。ハーマイオ

ニー・グレンジャーがイイって」

ピクリピクリ。ロンの手が震えて止まった。

「そろそろ真剣に考えてみてもいいんじゃない？　どつかの誰かさんは毒花に夢中みたいだし」

「おい、それって——」

ロンのどうにか絞り出した声はハーマイオニーの冷視でもジニーの茶化しでもなく、まったく別の音に掻き消されてしまった。

「キヤアアアアッ」

「ドラコッ！」

ドラコ——？　スリザリン席の一部が総立ちになっていた。デジャヴな光景だ。あいだから薄い金髪が抜ける。腕に少女を抱えていた。——彼の最愛だった。

「マリア!？」

ハリーの声とハーマイオニーの腕を振り切って二人を追う。向かう先は医務室だ。ドラコの腕の中のアステリアはぐったりしていた。死人の顔色だった。

「ドラコ、なにが——」

「ポンフリー先生、毒です。おそらくこれだ」

アステリアをベッドに寝かせ、マダム・ポンフリーへと手をどろどろにしながらもドラコが現物を渡す。チョコレートだった。

「これは……」

「フム？ 失敬」

「スラグホーン先生」

完全なる偶然で居合わせたスラグホーンが、マダムが受け取ったチョコレートを横から覗いて冷静にうなずいた。すっかり研究者の目付きをしていた。

「この臭い……そして一瞬の昏倒——フム、フム、おおよその予想はつききました。お手伝いさせていただきましょう、マダム・ポンフリー」
「ああ、感謝します。スラグホーン先生」
「ドラコ……」

マダム・ポンフリーとスラグホーンが的確に処置をする中、ドラコは思い詰めた顔で押し黙っていた。とても、大広間で何があったのかなんて聞き出せそうになかった。

「ドラコ、大丈夫だ。スペシャリストが二人も揃ってるんだ」

「——アステリアは」

眠る少女の寝息が聞こえるほどの静けさでなければ、それは届かなかったかもしれない。

「どれだけ名癒と名高い癒者を連れてこようとも、呪術師に見せようとも、なりふりかまわず金にものを言わせようとも——治らなかつた」

「ドラコ」

「私は彼女がベッドに眠る姿をよく知っている。彼女が微笑むよりも——知ってるんだ」

たまらなくなつて隣の肩を抱いた。女の子のマリアでは男として成長するドラコの背は大きい。それでも、限界まで手を伸ばした。

「大丈夫だ。大丈夫」

「マリア」

「信じてやるんだ。……君が、信じなくちゃ」

アステリアは、死にたくななんてないんだ。

本格的に解毒と治療へ入った先生方に追い出される形で医務室を後にする。会話はなかった。午後の授業はとづくに始まっていて、けれども、今にも自分まで毒を含んでしまいそうな最低の顔色の友を放り出してまで参加しようとは思えなかった。

ドラコを連れただまま、すっかり定番となった湖の側へと座り込む。当然、人の気配は僕たち以外に存在しなかった。

「——僕はセオドールを怪しんでいる」

ようやく沈黙を破ったのはドラコだ。大広間での事件——そこにセオドールがいなかったというのが理由だった。

「でも、それだけで」

「それだけじゃない。あいつは死喰い人ではなかったが、僕を敵視しているのに変わりはない」

「だとしても……」

焦りからのこじつけである自覚はあるのだろう。ドラコは納得できないでいる僕の態度に反論はしなかった。再び居心地の悪い無音の時間がやって来る。

セオドール・ノット。ドラコと並んでスリザリン内で一目置かれていた少年。だがしかし本人は一匹狼の気質が強いという、どうにも印象に残りづらい少年だ。かつてハリーとして在学していた頃の『僕』の敵はマルフォイというのが自他共の認識で、それが僕に根付いていたために彼のことはマルフォイをやわらかくした程度の障害にしか

思えなくて――

そうだ。彼はマルフォイの代わりだったんだ。

「――あれ」

急速に血がめぐり出す。頭の血管を暴れながら回って脳を刺激する。――僕におかしいと気付かせる。

たとえばクイディッチのシーカーとして名乗りを上げたこと。これは『僕』の知っている歴史ではマルフォイだった。そこにセオドルが収まった。まるでマルフォイの代わりのように。

『前回』スリザリンでリーダー風を吹かせていたのはマルフォイだ。けれど今のスリザリンはセオドルとドラコと二君を据えて二分割する形で分かれている。大袈裟な表現だが、過激派と中立派でリーダーが別なのだ。本来ならば過激派のマルフォイひとりだったのに。

例えば、去年の尋問官親衛隊の中にもセオドルはいなかっただろうか。それだって本当はマルフォイのはずで――ここが『僕ら』の知る世界ならば！

セオドルは一人を好むとドラコは言っていた。『前回』も含めてそうであつたと――なのに、こちらのセオドルはまるでマルフォイのように前へ出ようとしている。一人を好む男が一人を捨てている。それって変だ――セオドル・ノットはなにかがおかしい。

セオドルは――マルフォイを『知って』いる！

一度気付いてしまえば、次々に不審な点が湧いて出る。僕へ突っ掛かるわりにマルフォイほどの気概は感じなかったこと。ダンスパーティーの夜の彼は思っているほど攻撃的ではなくて――彼は僕の名を見ていた？ なにを見て笑った？ 上から下まで――ネツクレスを、見てはいなかったか？

ネツクレスに細工をされたのは第二課題前の招集時だが、ネツクレスへとはじめに目をつけたのがクラウチ・ジユニアでなくセオドル・ノットだったのだとしたら――？

こじつけだったはずの辻褄が滑稽なほどに嵌まっていく。僕は確信した。セオドール・ノットはハリー・ポッターのライバル、ドラコ・マルフォイを知った上で——『マルフォイ』の真似をしているのだ。

「……ドラコ、笑わずに聞いてほしい。君の言う通りかもしれない」
「マリア？」

僕は語った。ただの憶測かもしれない。けれども、僕の長年の勘がそれを『正しい』と訴えていた。ドラコは笑わなかった。

「セオドールは『君』を知っているんだ」

「……………」

「理由はわからないけど——ドラコ？」

ドラコは笑わなかった。ドラコは——うなだれていた。

「ドラコ」

「そうか——そうだ。どうして忘れていた。なんて間抜けだ」

「ドラコ？」

「わからないか？ あいつはノットだ。ノットなんだ」

僕より先に新しい真実へたどり着いたらしいドラコは口早にくり返した。

「セオドール・ノットだ！ 思い出せ、ハリー！」

「何が言いたいんだ」

「あの事件のきっかけはなんだ？ 子供たちはなにを使って過去をめちゃくちゃにした？ 君たち魔法省は『違法のタイム・ターナー』を誰から押収した」

「——」

「『私』がタイム・ターナーを作らせたのは——誰だ」

もはや改まった答えなどはいらなかった。セオドールは大きな秘密を抱えている。セオドールは僕らに関わっている。セオドールは——この世界の鍵を握っている。

結局、セオドールの疑惑についてはアステリアが回復するまで保留となった。応急処置の後、迅速に聖マンガへと運ばれたアステリアは退院までにおよそ一ヶ月を要し、そのあいだに寮違いの僕はともかくドラコはセオドールを捕らえようと尽力したようだがすべて空振りに終わっていた。なんだって透明マントも持たないイチ生徒が都合よく消えられるのか。さすが一匹狼だなんていつそ賞賛してしまいたいほどだ。

そしてアステリアが無事に復学してからも僕たちは変わらず二の足を踏んでいた。アステリアにはダフネや彼女に似合わない取り巻きたちが常にまとわりつき、セオドールの足取りはどう搜索しても不明だった。いつそ忍びの地図を持ち出してしまおうかと強硬も考えたが、こちらもタイミング悪く常にハリーが使用していた。――スラグホーンを追い詰めるために。スラグホーンからハリーは封じられた記憶を手に入れなければならないのだ。決しておろそかにしている課題ではない。ダンブルドアはスラグホーンの記憶がなければ分霊箱について確信しないだろう。確信しないとすなわち、彼に攻めの一手を打たせないということだ。それは困る。

「どうしたものかな」

「せめて動機くらいは知りたいところだよね」

おもに実害をこうむっているブロンドの君と頭を悩ませる。どうしてセオドールがドラコを執拗に狙うのか。オーグリーがそのかしているのか？ 何故？ オーグリーがマルフォイを狙う理由はなんだ？ スコーピウスが目障りなのか？ そもそも、実行犯はセオドールだけなのか。

たとえばタイム・ターナーが関わっていると、あれは未来へ『帰る』ことはできても『行く』ことはできないはずだ。ならば未来のヴォ

ルデモートの娘、デルフィーニからセオドルへと接触したと考えるのが自然で——つまりはデルフィーニが生まれる未来は確定なのか？

わからない。ひとつだって真実にたどり着かないまま六年目のホグワーツは春を迎えようとしていた。

「もしや神秘部での一件でノット氏がアズカバン行きとなったのも恨みのひとつか？」

「ああ……そういえば一緒になって捕まってたね。クラブやゴイルと」

「セオドルがお父君に対してそれほど心を砕いていたなんて思いもしなかったよ。存外、人情深いらしい」

嫌味たっぷり肩をすくめた坊っちゃんに押し殺して笑う。僕らが怪しんでいることに気付いたのか、ドラコを狙う刺客そのものは大人しくなったが、依然ダンブルドアが頻繁に学校を空ける理由は判明していなかった。——今年も悩みの尽きない年になりそうだ。

雪解けを終えたホグワーツを闊歩すれば寂れた花壇へと出た。以前にアステリアと語り合った場所だ。彼女がいなければ、なんてうら悲しい場所だろう。

「アステリア……」

すっかり凍りきった花の少女の笑顔を思い浮かべてベンチを撫でる——と。

「お姉様、どうかお考え直してください……お姉様のお言葉ならばお父様だって耳をかたむけられます。わたくしは——ダフネお姉様！」

咄嗟に隠れた。質の良い生地を使ったスリザリンのローブが二つ流れる。同じ目を持った少女が二人、近付いてくる。今日は二人だけだ。ダフネと——アステリアだ。

懸命にすぎる妹にダフネ・グリーングラスは冷たい眼差しで睥睨した。

「声を荒げるのはやめなさい。貴族とは落ち着いて話すものです」

「あ……」

「わたくしたちの耳は下々の報告を聞くためにあり、わたくしたちの目は下々の監視のためにあり、わたくしたちの口は下々に命じるためにあります。早口に述べるのは『使われる側』のすることよ。今さら、わたくしにこんな説教をさせないで」

「……申し訳、ありません」

……へえ、そうなのか。つまりドラコが嫌味を言う時にやたらとゆっくりの口調になるのは……うわあ、ムカつく。

僕の存在に気付く様子もなく姉妹の会話は続く。

「お前はお父様の決定に不満があるようだけど、現にあの男の言葉通り我が家の経済状況は右肩上がりだわ。お前は目をかけられているのよ」

「それは……わたくしが、あの人を、」

「そうね。わたくしだって『あれ』の言いなりは不愉快です。けれど、お父様が手を取るとされたならば従うのみ。意見も拒否もありません」

「……………」

アステリアはうつむいていた。ドラコ同様の白い肌は髪に隠れてなお、青つぽく不純物のない紙のように見えた。ドラコが恐れる、病に伏す死の際のアステリアを思い出させる色だ。

「お前も馬鹿な子ね。自ら含まなくとも——そこまでして、」
「わたくしは」

アステリアは見上げる。姉を見つめる。揃いの目をはつきりと開いて貴族然と背を伸ばす。彼女は——美しい。

「わたくしは、ドラコ・マルフォイのためならば——毒くらい飲み込んでみせます」

息を呑んだ。停めた。彼女のかもし出す、彼女を彼女たらしめる空気が姉の威厳すらも呑み込んで場を支配していた。

アステリア——君の愛はどこまでも高潔だ。

「……ほんとうに、馬鹿ね」

ダフネの声はどことなく細かった。

ポッター姉！ 久々の呼び名にふり返る。カラツとした笑顔に青いローブ、胸元には監督生バッジをきらめかせるアンソニーだ。隣のハリーがあからさまにふてくされるのに笑いながら足を止める。

「やあ、アンソニー。なにか面白い話でもあった？」

「君、僕を伝書臍かなにかと思ってるかい？ ——とは、まあ、今回に関しては間違ってるだけだ。夜の七時に校長室へ来るようになってさ。君ってば、今度はなにをやらかしたんだ？」

「ああ……それはハリーの用事だね。どうするの、ハリー。例の件はまだ済んでないよね」

「どうしよう……」

アンソニーをにらむことも忘れてうなだれるハリーにアンソニーが、ううん？ と首をかしげる。

「いや——マリアだよ」

「え？」

「ダンブルドアが呼んでるのはマリアだよ。確かにそう聞いた」

きよとり。三人で呆けてしまう。ダンブルドアがハリーでなく——僕を呼んでいる？

ハリーがそつと手を握ってきた。緑色の目が不思議な光を持っていた。

「ハリー？」

ハリーは答えなかった。目をそらし、手を繋いだまま歩き出す。あわててアンソニーへと礼を告げてハリーについていく。ある程度のところまで立ち止まったハリーは有無も言わず僕をかいなに閉じ込めた。

「ハリー、どうしたの」

「……………」

「ハリー」

「僕は」

細い声が耳朶に触れる。

「僕は、それでも——マリアを信じてるよ」

「……………」

心細いのだと、ハリーは全身で訴えていた。たったひとりの身内を

繋ぎ止めようとしていた。

——僕に、兄弟の背へと腕を回す勇氣はなかった。

バレンタイン以降、歩み寄ることを覚えたらしいロンとハーマイオニーのかゆくなるような初々しいやり取りを見守る夕食を終えて螺旋階段を上がる。デザートが少し早めのサマーブディングだったことを思い出して合言葉に告げてみる。案の定、門番のガーゴイルが通した先でダンブルドアはゆったりとくつろいでいた。優しい眼差しだ。

「こんばんは、マリア」

「こんばんは、ダンブルドア先生」

ダンブルドアが杖を振って紅茶とティーカップを滑らせた席へと落ち着く。ダンブルドアは誉めるように二度うなずいた。

「ハリーとわしの個人授業がどのような内容かは——当然、知っておるかな」

「はい」

「では、先日見せた記憶がなんであるかは——ハリーから聞いているわけではなさそうじゃの」

「ハリーは約束を守ってますよ」

言外の確認に何気なさを装いながら肯定する。ハリーはロンとハーマイオニーにしかリドルの記憶を話していない。——僕には、話してくれない。この人が口止めをしているからだ。ダンブルドアは情報をひとつに集中させることを良しとしない人だった。

ふむ、と髭を撫でたダンブルドアはそれから単刀直入に詰問した。

「スリザリンのロケットを持っているね？」

「——はい」

互いに迷いはなかった。

「他にも集めているかの？」

「リドルの日記はご存知の通り破壊済みです。スリザリンのロケットとレイブンクローの髪飾りを保管しています」

「レイブンクローの………そうか」

キラキラしたブルーアイにうながされて紅茶を含む。……おいしい。落ち着くあたたかさだ。

「ハリーは一目で気付いた」

「そうでしょうね」

「マリアが持っていることも知っている」

「隠してませんか」

「その時が来たら——渡してやってくれるかね？」

「必ず」

まっすぐに老人を見つめて誓う。この人は僕へ託そうとしている。僕もあなたと同じ託す側であることを知りながら——僕に最期まで守り通せと命じている。

ひどい人だ。——こんな信頼の示し方をするなんて。

きつと僕の最期はハリーが選ぶだろう。だから、その時まで——僕はよろこんで傀儡^{マリア}となろう。

「ダンブルドア先生。僕もうかがってよろしいでしょうか」

「マリアにもわからないことがあるのかね」

「わからないことだらけですよ。僕の数々の失敗をご存知でしょう」

「はて。君はよくやってくれていると、老婆心ながらにわしは思っておるがのう」

「先生も歳でいらっしやるんですね。盲目は早めに自覚するのがよいそうですよ」

「手厳しいのう」

ほっほと身を揺らして笑うダンブルドアに肩の力を抜く。死を腕に宿したダンブルドアは夏を越せない。だから、目一杯見つめていよう。優しいこの人を。

「マリアの予言はあなたしか知らないですよね」

「わしが知る限りではそのようじゃな」

「スネイプ先生だって知らない」

「さよう」

「……僕の存在を消したのは、あなたですね」

「その通りじゃ」

生き残った男の子のハリー・ポッターとオマケのマリア・ポッター。例の事件以来、魔法界で名を伝えられてきたのはハリーだけだった。マリアの情報は意図的に隠された——『予言』を知るダンブルドアによつて。

「どうして」

「わしはのう、マリア。君を警戒していたのではない。——君を隠し玉にしようとしていたのじゃ」

ダンブルドアは老人がほんの少しの昔話をするように語った。

「ハリーが選ばれしものであることは額の傷がはっきりさせていた。だがしかし、分かっ子供が誰であるかは……確定はできなんだ。無論、君が一番有力な候補であったことは認めよう」

「しかしその日、ハグリッドが教えてくれた。——君は自ら『セストラルの杖』を選んだのだと」

「——！」

「これもセストラルの尾毛を杖芯としておる。セストラルの杖を操れ

るのは死を受け入れられる魔法使いのみ——この杖がどのような伝説を持つかは、君ならば知っておろう」

死んだ手でニワトコの杖を撫でるダンブルドアにそっとうなずく。

「そして君はわしの渴望すらも見透かした。一年生の君がわしを前に『死の秘宝』を口にしたその時、わしは確信したのじゃ。——死に寄り添い、死を抱く運命にあるのはこの子じゃと」

なつかしようにブルーアイが細まる。シワを深くして慈愛を浮かべる。同情と呼ぶにはあまりに愛が染み着いていた。彼は愛を知る人だ。

「おう、マリア——それでもわしを許すか？」

「許します」

迷いなんてあるわけがなかった。

「僕はあなたを信じています。——最期まで、僕を上手マリアに使ってくださいと信じています」

戦いを決意したその日から——ダンブルドアは罪を受け入れてきたのだ。

「すべては大いなる善のため、なんですよ。ダンブルドア先生。そしてあなたはこうおっしゃる。ハリーに。あなたが死のために育てたハリーに。——『真実。それは美しく恐ろしいもの』」

ダンブルドアは瞠目すると、それからやわらかく微笑んだ。

「ほんとうに大切な時になると、あなたはいないんだ」

「……手厳しいのう」

ダンブルドアは泣かなかった。許さないでくれと泣いた人はもういなかった。きつと、シリウスと同じように持っていつてしまうのだ。大切にくるんで呑み込んでしまったのだ。

残さぬ人と、残ったものと——どちらが残酷なのか僕にはわかりそうになかった。

「ダンブルドア——私はあなたの共犯者だ」

僕の腕に留まったフォークスがクルルと鳴いた。

ハリーがとうとうスラグホーンから記憶を引き出すことに成功した。アラゴグと面識がないためにアラゴグの葬式に参列できないのではないかという僕の杞憂はなんとアンソニーが払ってくれた。情報通のアンソニーが、ハグリッドがペットを喪って落ち込んでいると僕へリークしてくれたのだ。本人いわく「マリアと話すための話題探しに必死なだけ」だそうだが、間違いなく彼の趣味だとにらんでいる。彼には学者よりも記者が向いてそうだ。

アンソニーからの情報をもとに、フェリッククス・フェリシスを飲ませたハリーを送り出す。翌日には最後のリドルの記憶を得て達成感に満ちたハリーが見られた。ダンブルドアも余生を使った大詰めへに入ったところだろう。妨害もなくなつて、奇妙なほど準備は順調だった。

「結局、ダンブルドアが裏でなにをしているのかはわからずじまいなんだけどね」

「君の秘密主義には慣れたものだが、あのご老人も相当だ」
「なんとたつてダンブルドア仕込みなもの」

相変わらずダンブルドア嫌いを募らせているドラコに頬をつねってみる。つねり返された。僕たちはすっかり平和ボケしていた。

「キャビネットは絶対に使えないんだ。ホグワーツの落城をほんの少しくらいは先伸ばしできたと思いたいところだ」

「スネイプ教授の辛労もこれで報われるといいが」

「そうだね。あの人、自分から背負っちゃうところがあるし」

「それは君に言えたことじゃない」

「言えてる」

クックと肩を揺らせる。この不気味な平穩に甘えてはいけない。いつだって悲劇は幸福の裏にひそんでいるのだから。

アステリアを操るものと、セオドールの思惑と、もしかしたらすべてに繋がっているかもしれないオーグリーの存在と。まだ何一つだつて解明できていない。

ダンブルドアの死が刻一刻と近付いていた。

「弟はどうした」

「えっ」

思いもよらない声に立ち呆けてしまった。先に立つその人もどことなく所在なげに見えた。吸い込むような闇色の瞳は疲れを滲ませ揺れていた。

「スネイプ先生」

まさかあなたが——僕を呼び止めるだなんて。^{マリア}

彼とこれほどはつきりと一対一で言葉を交わすのはペンダントの件以来だった。

「ハリーならクイディッチの練習ですが……なにかご用ですか？ 呼んでみましょうか」

「必要ない。……君が一人でいるのは珍しいと思っただけだ」
「はあ」

当然、会話は続かない。僕はともかくこの人は口を開けば嫌味嫌味の厭世家だ。誰かを騙すための話術はダブルスパイをこなせるほどに巧みだというのに、どこまでも芯が不器用な人だった。

呼び止めておきながらさっさと歩き出してしまったスネイプ先生

の背を見つめていれば、再びローブが静止した。

「……弟が大切か」

「もちろんです」

真つ黒の背中に向かってうなずく。

「……君は、もしも弟をうしなったらば——」
「——」

ああ——そうか。この人は知ってしまったのか。ハリーの行く末を。

ダンブルドアの『準備』はそれほどまでに進んでいた。

「先生」

一步を踏み出そうとした。足は動かなかつた。

「先生——僕は知っています」

スネイプが振り返った。

「ちゃんと知っています」

スネイプは——怒っていた。

「そのためにあの人は君を——ダンブルドアは君までもを兵隊にしようとしている！」

「先生」

「私は生徒を守るよう言い付かった。そこに君が含まれていないのはなぜだ？ なぜあの人は——」

「先生」

動揺し、激怒し、自分勝手に感情をぶつける優しい人に懸命に微笑む。

「先生、もうおわかりでしょう。——僕はただの子供じゃない」

「——」

「私はあなたが守るべき子供ではない」

せめて僕だけでもあなたの傷だらけの手の中から抜け出したいのだ。その手を外から繋ぎたいと思うのだ。……きつと、あなたは嫌がるでしょうけど。

ハリーがあなたが生きるための枷であるならば、僕はあなたの痛みを奪う存在でありたい。傲慢に、尊大に、残酷でありたい。

「スネイプ先生」

「——いいや」

スネイプ先生は感情の見えない眼差しで反吐でも吐くように告げた。

「君は子供だ」

「先生……」

「君はリリー・エヴァンズの子供だ!!」

衝撃だった。稲妻に打たれるとはこの事かと頭の片隅が眩いた。スネイプはいまや重苦しい髪も振り払って閉ざしてきた心をあらわにしていた。

「お前の中身がなんであろうと知ったことではない。化け物だってかまうものか。それをリリーが愛したなら——我が子だと慈しんだな

ら——お前は何者でもなくマリア・ポッターなのだ。こんなことわ
からない愚鈍が、子供でないなどどの口が言うか！」

「……………」

「私は——彼女が守ったものを守らねばならないのだ——！」

一步を踏み出そうとした。足は動いた。

「スネイプ先生」

逃げようとする手を掴む。届いた。今度こそ——僕の手は届く。

「先生——はじめて、呼んでくれましたね」

「は——」

「そうです。僕はマリアだ。あなたが心から愛するリリー母さんと心
から憎むジェームズ・ポッターの子供だ。……やっつと、映った」

真つ黒の瞳の中にマリアは存在していた。何度だって僕はそこに
いた。

「あなたは僕の手で死にたいと言った。絶対に許せないと思った。も
しかして優しいリリーなら叶えてくれましたか？ けれど、駄目なん
だ。だって僕はマリアだから。リリーでもジェームズでもなく、リ
リーとジェームズの子供のマリアだから、あなたに同情なんてぜった
いにしてやらないんだ。僕はあなたを必ず生かしてみせる」

同情とか、後悔とか、そんな湿っぽい感情じゃない。ただ僕は許せ
なかつただけだ。僕の瞳を見て、その先にいる人を見つめて、それで
満足したあなたに。勝ち逃げをしたあなたに。

シリウスにもダンブルドアにもない純粋な怒りが僕を動かしてい
た。

「どうせ嫌われるなら——僕のしつこさを思い知るといい。セブルス・スネイプ」

スネイプはハシバミ色を眺めて子供みたいに目を丸くしていた。そして嫌味っぽく笑った。

「やはり貴様にドレスは似合わん」

——セオドールが動いた。通信紙に浮かんだ文字に僕は衝動的に飛び出していた。談話室のハリーとロンとハーマイオニーの手をすり抜けてグリフィンボール塔を駆け下りる。夜も夜だ。頭に叩き込んでいる城の抜け道を使って城外へと降りる。

青草をしげらせる校庭とその向こう——禁じられた森の影を背負ってドラコとセオドールはにらみ合っていた。否、セオドールは落ち着いた様子だった。

「ドラコ！」

「ガールフレンド付きとは、隅に置けないな。ドラコ」

「お前のことなら絶えず監視していた。——今になってなんの真似だ？」

ドラコの杖はセオドールをまっすぐに指していた。対してセオドールは丸腰同然だ。余裕たっぷりな笑む彼は、影を我が物におそろしく不気味だった。

「今日でホグワーツは終わるといふことさ」

「……デルフィーニが関わっているのか？」

思わずうなつた僕にセオドールがパチリと幼げにまばたきをした。

——え？

「デルフィーニと言ったか？ 君は今、その人をオーグリーでなくデルフィーニと呼んだのか？ ——マリア・ポッター、やはり君はイレギュラーだ」

セオドールからかき消すように笑みが消えた。それだけでぞつと

闇がせまった。

「お前はいつたいなにを知っている？」

「同じ言葉を返させてもらうよ、セオドール。マルフォイの真似をして、君はなにをたくらんでいる？」

「……そこまで知ってるのか」

ドラコに並んで、僕の杖もセオドールに向かっていた。二本の杖先を向けられてなお、セオドールは抵抗も撤退も見せずに立っていた。

「僕は——未来の僕に会ったんだ」

「……は？」

杖はそのままに、すつとぼけるような声がこぼれてしまった。セオドールは場違いにも軽やかに笑って続けた。

「タイム・ターナーだよ。そのくらいは想像つくだろう？」

「でも——タイム・ターナーは——自分自身に決して見られてはならない」

「それを律儀に守る僕だとも？　君はスリザリンというものを知らないらしい」

とうとう杖を取り出して、指揮でもするように杖先が揺らされる。セオドールの声は今や一帯唯一の音となっていた。

「元々祖父の代から我が家がタイム・ターナーに注目していることは知ってたからね。試作品で過去へやってきたという未来の僕は僕だけが知るちよつとした失敗だとか隠しものの場所だとかを見事当てて見せた。外見だって父によく似ていた。一時間も話せば疑念はすっかりなくなった」

「そして未来の僕は帰ってしまうまでの三時間のあいだに、僕にくり

返した。——マルフォイの栄光をお前こそが手に入れるのだと。お前がサソリ王を作るのだと」

「——!!」

サソリ王。スコープウスが垣間見たもうひとりのスコープウスの名前。

知るわけがない。ノットがそれを知るわけがない——『僕たち』のたどった未来のノットならば!

彼に接触したのはデルフィーニではなかった。デルフィーニはこの世界にいない。

ヴォルデモートが支配する世界のノットこそが、彼自身を操ったのだ。

「これが、二年生へ上がる前の夏休みでの出来事だ。それっきり、僕が僕の前へと現れることはなかったけど——彼は十分に情報を残してくれた」

「マルフォイはシーカーであったこと。マルフォイはハリー・ポッターのライバルだったこと。マルフォイがスリザリンのリーダーだったこと。マルフォイは尋問官を務めることによってアンブリッジとのパイプを作ったこと。そして——マルフォイこそが死喰い人をホグワーツへ引き入れた英雄であること」

「しびれたとも。かならず成り代わってやろうと決めた。その上、どうだ。いざお前は——マルフォイはまるで歴史をたどっていない!

僕が魔法法執行部の部長となることも、ホグワーツの理事へ就くのも、もはや時間の問題だと思った! だというのに——お前がいた。マリア・ポッター」

セオドールの杖が僕へと向いた。彼の瞳は禁じられた森の猛獣を思わせる危険な輝きに満ちていた。

「未来の僕はハリー・ポッターに双子がいるだなんてありえないと

言った。ハリー・ポッターは最終決戦のそのとき間違ひなく天涯孤独で——ゆえにぶざまに血を絶やして死んだのだと。——お前はなんだ？」

杖を突き付け合つたまま、僕は沈黙に徹した。

「マリア・ポッターがなんなのか。——そんなのは、僕がもつとも知りたいんだ。」

ふと、ドラコが独り言にも似た響きで声を落とした。

「……僕を執拗に狙っていたのは、マルフォイが邪魔になつたからか」
「ああ、そうだよ。君を殺した手柄を土産に、この腕に闇の印を刻んでいただこうと考えていたんだ」

「それに——お前はアステリアを利用したのか」

ドラコは静かな怒りをたたえていた。

ドラコにとって、セオドールの演説なんかはどうでもいい。御託など一文句も咀嚼してやる必要はない。ただ、この男が最愛を危険にさらした——それだけが重要で重罪だった。

「ああ……アステリア・グリーングラスか。彼女は未来でマルフォイの妻となるそうだし——言つただろう？ マルフォイに成り代わると。僕の父はおかげさまで現在アズカバンだ。使える大人の手がほしかったのさ」

「アステリアに毒を含めと言つたのか」

蛇足は必要ないとばかりに怒れる人は畳み掛ける。彼のこんなにも純度の高い氷の目を見たのははじめてだった。

「まさか。君に届けろと命じたんだ。——馬鹿な女だ」

ドラコの杖がセオドールの喉を潰していた。

「——ッだめだ、ドラコ！」

「お前のようなものにッ——！」

「ドラコッ！————ドラコ・マルフォイ!!」

追ってドラコの手を掴んだことによつてかすかに拘束がゆるむ。ほんの一瞬、氣道をふさがれたセオドールは地面を背に土に濡れながら酸素を求めてあえいだ。

「……………ポッター」

「これでは殺しかねない。君にそれは重荷だろう。結局のところ、死喰い人がホグワーツに侵入するなんてことはどだい不可能なのだ。君だってわかつているだろう。このままダンブルドアへと突き出そう」

「だが、ポッター」

「マルフォイ」

闇を呑み込んで暗いブルーグレーとなった瞳を見つめる。

アステリアに祈る彼を知っている。懇願し恐怖する姿を知っている。その背中をひとたび見てしまえば——どれほどドラコがセオドールを憎んでいるかは想像に難くない。それでも。

ドラコ・マルフォイに人は殺せない。

——ふ、ふ、ふ。笑い声だった。ドラコの手の下で、セオドールが笑っていた。

「なんだ…………？」

「不可能——そうだ、不可能だとも。ダンブルドアは今ホグワーツにいない。言つただろう——ホグワーツは終わりだと」

地面に引き倒された状態でセオドールが指を天へと突き上げる。見上げる。星空は暗雲におおわれ今にも泣き出しそうに広がって

る。

「うそだ」

ホグワーツ城の天辺を髑髏が飾っていた。

マリア・ポッターと謎のプリンス【完】

暗雲を突く鬨聲を見上げる僕の隣から鈍い音がした。ドラコが引き倒したセオドールの胸ぐらを掴んで強引に起こしていた。優雅ぶる彼にしては珍しい暴力的な動作だが、セオドールはそれでも勝利を確信して薄く笑っていた。

「なにをした。ダンブルドアがいないとはどういうことだ」

「言葉の通りだよ。僕が外へ誘い出した。オーグリーの名を使つて」

「そんなものにダンブルドアが騙されるものか！」

「そんなもの？ —— そんなものでなくしたのは君だろう」

ダンブルドアへの侮辱の響きを持った返答に激昂すれば、セオドールの目はクルリと僕を見る。

「感謝するよ。マリア・ポッター。君のおかげでダンブルドアを騙せた」

「え？」

「君という『実例』がいた。ゆえにあの老人は耄碌になったんだ」

オーグリーなんて不確定な存在を『ありえるかもしれない存在』にしたのは君だ。

セオドールは続ける。

「きつと君がいなければあのご老人は厄介にも今でも校長室に居座っていたことだろう。僕への監視をおこたりはしなかったはずだ。未から脅威を持ち込んだオーグリーなんてものは所詮、僕が妄想から作り上げた虚像なのだ。けれど、彼は思ったんだ。『マリア・ポッターがありえるなら、オーグリーもありえるかもしれない』と」

英雄に関わる予言をいただき、その予言に添うかのように謎めいた少女。未来を見透かすような言動をくり返し、不可解な知識を持って試練を書き換えた予言の子。

マリア・ポッターはダンブルドアに『可能性』を抱かせた。

「お前の存在がダンブルドアの判断を鈍らせたのだ」

すべてお前のせいだ——セオドールは嗤った。

「——だとしても、城には彼が残した守りがある。いにしえの魔法が今も根付いている。死喰い人が介入する隙はない。お得意のはったりはもう通用しないぞ」

セオドールを捕らえたままドラコがすごめば、クツクツ笑って少年はドラコの手を握り返した。

「ああ、そのとおりだ。我々スリザリンが馬鹿正直に正攻法なんて取るはずがないだろう？ ——下水道だよ」

「下水道？」

まったく思いもしなかった単語に、無防備にもドラコと顔を見合わせる。セオドールはドラコの手を払って立ち上がった。

「未来の僕は言った。様子のおかしいサソリ王が湖で発見された。君たちが逢瀬に使うこの湖さ。それによりマルフォイ氏——未来の君のことだけど——はサソリ王……自分の息子のスコープピウスを呼び出さざるを得なくなった。その隙について未来の僕は過去に渡ったのだそうだ」

「——！」

つまり、彼に接触したセオドールはまさしく『例の事件』の真つ只

中にあつたセオドルなのだ。そして様子のおかしいスコープウスとは僕たちの歴史のスコープウスのことだ。

少年たちを捕らえようとする大人の手から逃げおおせた二人は何を使つて城を出た——？

「僕は気になった。おかしくなったスコープウス少年はここでなにをしていたのだろうか。そして見付けた——湖には城へと繋がる下水パイプがある」

月明かりすら失い深い穴のような相貌へと変わり果てた湖を背にセオドルが闇を背負う。嵐が近付いていた。嵐が城を呑み込もうとしていた。

「このパイプは城内のマートルのトイレへと続いている」

そうだ。子供たちはタイム・ターナーとマートルの協力を持つて第二課題の妨害に当たつたのだ。

——だから、セオドルは禁じられた森の付近に頻繁に現れた。的確に、確実に死喰い人たちを湖からパイプの旅へと導けるように。

「さあ向かえよ。愚かな英雄気取りども。——みんな、死んでしまふぞ」

「マリアッ！」

駆け出す。セオドルなんてどうでもいい。城に残してしまつた子たちは——ハリーは！

「マリア、待て！」

「僕は天文台へ向かう。君はスネイプを呼んでくれ」

「マリア！」

「ダンブルドアが帰ってくるまで持ちこたえさせる。——僕がそうす

る！」

ドラコを突き放すようにして校舎内を駆ける。生徒の姿はない。とつくに消灯時間は過ぎていた。そうだ、いつそあの子たちがベッドの中にいてくれれば――

「エクスペリ――」

「ツインペディメンタ！」

「うわッ」

少年の声だった。知った声だ――アンソニーだ！

「アンソニー」

「あれ、マリア……？ ごめん、僕、てつきり」

「謝罪はいい。状況を教えてくれ」

「君はコインの連絡をもらってないの？ ハーマイオニーがDAのメンバーを集合させたんだ。数人しか集まらなかったけど、小瓶の薬を一人ずつ飲めつて……そこにハリーはいなかったよ」

「それで、みんなは？」

「わからない。すぐに散り散りになった」

「クソッ」

心音を抑えて耳を澄ませる。天文台は静かだ。ならば天文台でないどこかで誰かが戦っているはずだ。不死鳥の騎士団員は到着しているのか？ 先生がたは？ ——ハリーは。

おそらくハリーは透明マントを使用している。僕がドラコからの呼び出しに大慌てで寮を飛び出したのを気にして忍びの地図を持ち出したにちがいない。そして気付いた――城内にあってはならない名前が浮かんでいることに。

ハリーは今どこに。

「そうだ、マートル！」

「マリア？」

アンソニーを連れただまま再び駆け出す。下水パイプはマートルのトイレに繋がっているとセオドールは言った。彼の言葉が嘘でなければ——マートルが見ているはず。

「マートル！」

「うっ——うっ——あたしは悪くないわ。あたし、あたし、知らなかったんだもの」

「マートル、僕だよ。君の友だちのマリアだ。さあ話を聞かせて」

「ああ、マリア！ ひどいのよ。あいづらつたら——ほら、見て。洗面台がこわされたの。問答無用よ。だからあたし、すぐに飛んだわ。すぐに知らせてやった」

「だれに？ なにを知らせたの？」

「マクゴナガルに知らせたわ。それから——スネイプとフィルチにも」

「スネイプに？ スネイプに知らせたんだね？ それは確かだね？」

目も鼻も青くして泣くマートルへと食い付くようにしてくり返す。マクゴナガルならば真っ先に不死鳥の騎士団へと連絡を回してくれただろう。きつと魔法省にも——ダンブルドアへだって呼び戻すために尽力してくれるはずだ。そしてスネイプは——目印のために、ダンブルドアへと一目で状況を伝えるために闇の印を打ち上げたのはおそらくスネイプだ。

「ありがとう、マートル。君も——ゴーストだけど——安全な場所に隠れていてくれ。パイプの中とか」

「ええ。あなたの声でしたら出てきてあげる。……ねえ、行くの？」

「行かないと思う？ 僕はハリーの姉さんだよ？」

「そう……止めないけど、そうね。あなたが死んだときのために隣の

パイプを綺麗にしておいてあげる」
「光栄だよ」

ゴースト流のジョークにほんの少し笑って水浸しのトイレを後にする。アンソニーは扉の向こうで沈黙していた。

「マリア……」

「こわいなら無理強いはしない。たぶん、寮にいるほうが安全だ」
「そうだろうね。特にレイブンクロー寮は謎を解かないと入れない仕組みだから。……奴らって、脳ミソが足りてるようには見えないし」

ふと、手を取られた。彼の手は女の子のマリアよりも大きくて——震えていた。声だつて震えていた。神秘部での事件を経験していないアンソニーは命懸けのやり取りなんて知らないのだ。……恐ろしくて、当然なんだ。

「アンソニー……」

「正直に言えばものすごく怖い。僕がDAに参加したのは自分の身を守るためだ。戦うためじゃない。許されるなら全部君たちに任せてベッドの中で震えていたいよ」

「許されるよ」

「ありがとう。でも——好きな子の前では見栄を張っていたんだ」

アンソニーは蒼い顔で精一杯に微笑んだ。——こんな顔を、させなくてはならないなんて。

僕が——もつと——上手く——

「マリアが勇敢でなければ僕も尻尾を巻いて逃げ出してたかもね。——けれど、そんなのはマリアじゃなくて、そうでないマリアをきつと僕は好きにならなかった」

」

頬へと手を添えられる。優しい眼差しと見つめ合う。レイブンクローの彼はグリフィンドールほど無謀ではなくて——勇敢だ。

「生きてくれ、マリア」

「アンソニー……ぜったいに、死なないで」

アンソニーと分かれる。彼等にはフェリックス・フェリシスの幸運がある。ともすれば僕よりも安全だ。それでも、どうか——誰ひとり欠けることなく嵐を乗りこえてくれ。

天文台への螺旋階段を上がる。大きな悲鳴が聞こえた。それから怒声だ。爆発が起きた。誰の声だ。どちらの声だ。止まれない。振り返ってはいけない。足を動かせ。駆けろ。駆けろ。止まるな、進め

！

「アバダ・ケダブラ」

スネイプの杖からほとぼしる光がダンブルドアの胸をつらぬいた。

——レビコーパス!!

叫んだ。ハリーだ。スネイプの身体が螺旋階段の手すりへと叩き付けられる。続けて武装解除によりスネイプの杖とダンブルドアのニワトコの杖がハリーの手へと渡る。ハリーは己の杖を血管がちぎれんばかりに握りしめて絶叫した。

「信じてたのに——先生はあなたを信じていたのに!!」

「……その呪文……やはりそうか。今年に入って異様に魔法薬の腕が達者になったと言われたのも……フン、とんだ笑い種だな」

「何が言いたい!」

ハリーとスネイプの一騎討ちと化した舞台に息を呑む。だめだ。スネイプは丸腰だ。ハリーは周りが見えていない。このままでは取り返しのつかない過ちを犯してしまう。——だって彼は『僕』だ!

息を殺したままハリーが捨て置いたと見られる透明マントへと近付く。はおつて身を隠す。もう少し——タイミングをはかれ——あせるな——あと少し——

「半純血のプリンスの教科書を使っていたな? ポッター。——その呪文を編み出したのは我輩だ。我輩の母の名は純血の魔女アイリーン・プリンス。我輩こそが半純血のプリンスなのだ」

スネイプの告白にハリーが瞠目した。そして——緑の憎しみをさらに燃え上がらせた。

「つまりあなたは——お前は、ダンブルドアだけでなくマリアスから騙していたのか」

「……なに?」

「マリアはプリンスの呪文を知っていた。マリアはマフリアートを使っていた——お前が創作した呪文をマリアが知っていたんだ！いつからマリアを利用していた!？」

スネイプに動揺が走る。当然だ。スネイプはそんなことは知らない。マリアが自分の創作呪文を当たり前のように使っていたなんて知らないのだ。

なんて失態だ。また、僕が——この人を追いつめるのか。

「ハリー、違う！ スネイプは関係ない！」

「マリア!？」

透明マントを投げると同時にハリーへ飛びかかる。彼が握っていたスネイプの杖とダンブルドアの杖とを叩き落とす。蹴って二本をスネイプの元へと滑らせる。スネイプが無駄なく拾ったことを確認して、もがくハリーを全身を使って押さえる。

「マリア、邪魔しないでくれ！ あいつは君を騙してたんだ、僕はこの目で見た。あいつがダンブルドアを殺した!!」

「そうじゃない、僕は——」

「へえ。お前がダンブルドアを殺ったのかい。そいつはお手柄じゃないか——ええ？ セブルス？」

ねっとり舐めるような女の声——ベラトリックス・レストレンジ。

うねる黒髪の方こうで獣じみた目がハリーを捉えては舌舐めずりしていた。嗜虐的にうっそりと狂気を見せていた。——死喰い人たちが天文台へと追い付いた。

「……魔法省が来る前に引き上げるぞ。ベラトリックス」

「ベイビーちゃんたちはいいのかい？　ごらんよ。この状況でピーチクパーチク喧嘩してる」

「それらは帝王の獲物だ。目的のダンブルドアは死んだのだ。勝手に手出しして、またお叱りを受けたいのか？」

「チツ……お前が大きな顔してられるのも今のうちだよ」

「——ッ待て!!」

撤退の姿勢を見せた死喰い人たちにハリーが噛み付く。僕を突き飛ばしてスネイプへと杖を向ける。壁ごとくずれた向かいからルーピン先生とハーマイオニーの駆け上がる姿が見えた。ハーマイオニーが僕とハリーと、おそらくスネイプを目にして顔を明るくした。ハリーが唱えた。

「セクタムセンプラ——!!」

——ああ、なるほど。……これはいたいや。

「——ツマリア!!」

誰かに抱き留められた。ルーピン先生だろうか。いたい。身体中から血が噴き上がってる気がする。飛沫が顔をぶつ。いたい。ハーマイオニーの声だ。ハーマイオニーが泣きながらエプスキーをかけてくれる。いたい。たくさんの声が頭の中で飽和する。ベラトリックスの笑い声が聞こえる。いたい。いたい。

ごめん、マルフォイ。……これ、すつごく痛いよ。

「マリア——そんな——」

ハリーが膝をついた。ハリーのズボンが僕の血を吸っていく。ハリーの手から杖が転がる。どうにか蒼白のあの子に手を伸ばそうとして——彼が嗤った。

「ハ、ハ——ハハハ——愚か者が！ 大馬鹿者が！ 我輩にお前の妹が操られてるとも知らずに！ その手でお前は愛するものを殺そうとしたのだ。あやうく家族を手にかけてそびれた！」

「セブルス——？ これは……ハリー、君は——」

「スネイプ先生……？」

ゾツとした。戸惑う二人を置いて足に力を入れる。服ごと裂かれた胸を押さえる。点滅する視界にスネイプを見る。僕の中で炎が燃え上がっていた。

彼はとんでもないことを言おうとしている。彼は最悪を騙ろうとしている——！

「マリア・ポッターは我輩の服従の呪文にかかっていたのだ」

「——セブルス・スネイプウウツ!!」

吼えた。最低だ。なんて庇い方だ。あなたはどこまで僕を馬鹿にすれば気がすむんだ——!!

「ゆるさない——ゆるさないぞ、ぜったいに！ 僕はお前をゆるさない——」

「マリア、だめよ！ しゃべらないで……死んじゃうわ！」

「離せ、ハーマイオニー！ あいつだけは——ゴフツ」

「マリア！」

口からも鼻からも血溜まりを吐き捨てて、逃げるスネイプを意地だけで睨み続ける。追うハリーの背がある。死喰い人の攻撃をルーピン先生が防いでいる。フェンリール・グレイバックが雄叫びを上げる。——その先をスネイプが罪を背負って走る。

「ゆるさない——最低だ——あの嘘つきめ！ ぜったいにゆるさないッ！」

「マリア……」

もはや自身が痛みで喘いでいるのか怒りで喘いでいるのかわからなかった。無我夢中だった。そうだ。はっきり言って、正直言って、率直に言って——僕は自暴自棄なのだ！

セドリックもシリウスもダンブルドアも誰一人繋ぎ留められなくてムカついているのだ。自分自身にムカついている——無力を憎んでいる！

八つ当たりしてやる——八つ当たりであんたを絶対に生かしてる！

「逃がすもんか！ 許すもんか！ あんたに安らかな死なんて——
——与えてやるものか！」

「ハリー」

「僕はポッターだからあんたに恨まれるのなんか痛くもかゆくもないんだ、だから優しくなんてしないんだ」

「ハリー」

「僕は……ッ、どうして、」

「ハリー」

「ウ——あああああああああああッ」

叫んだ。怒りに任せて叫び続けた。唯一僕をマリアと呼べる男の胸に抱かれながら。慟哭した。

ハリーでもマリアでもあなたの救いにはなれないだなんて——
——そんな現実には許さない。

声がする。

——血は止まりましたが、痕が残るでしょうね。かわいそうに。ただでさえ傷だらけなのに。こんなにも大きく……女の子なのに。

声がする。

——服従の呪文にかかっていたならば真実薬を使用したところで彼女に自覚はないわけですから……

——スネイプは優秀な魔法使いです。記憶の改竄くらいはお手のものでしょう。

声がする。

——ごめん。マリア……ごめん。ごめん。僕のせい……目を覚まして。お願いだから。

——生きてくれとは言ったけど……生きていれば大怪我を許すわけではないんだよ。そういうところ、君はお転婆すぎて困っちゃうよ。

——まったく、少し目を離しただけで死にそうになるんだもの。……これだから、みんなあなたに夢中になっちゃうのね。セドリックもそうだったんでしょ。

声がする。

——あたし、許さないわ。あの男を許さない。あたしの姉さんをここまで傷付けた人を許さない。

——君がいないとハーマイオニーが泣くんだ。……早く起きろよ。

声がする。

——いつまで経っても英雄癪が抜けないんだな。……ハリーは。

声がする。

「——好きでそうしてるんじゃないよ」

「ようやく眠り姫のお目覚めだ」

おどけて皮肉たつぷりに僕の眉間を撫でる男を睨み上げた。それだけで体のいたるところが軋んだ。見慣れた天井だ。それから、こちらも見慣れた綺麗な顔だ。目立った怪我もなさそうだ。今日も憎たらしく冷笑の似合う吸血鬼の顔色だ。

「……だれか死んだ？」

「誰も死んでない。ウィーズリーのところの何番目かが顔に勲章を刻んだくらいだ」

「ああ、うん。男前になっただろうね。元から男前だし」

ビルを思い出してぼんやりと笑む。今回もフラァは豪快にビルへの愛を示してモリー母さんを唸らせたことだろう。たぶん……トンクスも。

「ダンブルドアは」

「あと数日で葬儀が執り行われる。ニワトコの杖と共に彼は眠る。——闘いからイチ抜けだ」

「ずるいね」

「まったくだ」

うつらと霞み掛かった頭のまま相槌を打つ。スネイプは結局、ニワ

トコの杖を拾いはしなかったのだ。……ほんとう、下手くそな悪役だ。

「――不死鳥は」

「……美しい歌声だったよ」

それだけで彼が去ったことを知る。不死鳥はダンブルドアと共にホグワーツを去った。……どうか、再び、美しい彼と相見えられることを願うしか僕にはできない。

「ハリーはどうしてる?」

「君が一番の重症だ。とつくに普段の生活に戻ってる」

鼻で笑ったドラコに、筋肉も骨も皮膚もすべてが熱を持って悲鳴をあげている気のする体を起こす。ドラコはのんきに僕への見舞い品らしき林檎を手慰みにして遊んでいた。

「マリア」

「うん」

林檎がベッドの上へと転がる。

「――がんばったな」

「――」

胸をせり上がる。喉元までやってくる。唇を噛む。紙よりも薄っぺらな理性がそれを阻む。

「よくがんばったな、ハリー」

ふ——息が震える。だから、息すらも停めた。全身が強ばって抵抗なんてできるはずもなかった。

トクリと——生きている音がする。ずるい体温が背を撫でる。

「……………ドラコ」

「なんだ、ハリー」

「ドラコ……っ」

いたかったはずなのに。苦しかったはずなのに。この一瞬だけ体が痛覚を放棄したみたいなのに、僕は加減なくドラコを抱きしめていた。

「ドラコ……ドラコ……」

「ああ」

「ドラコ……僕、がんばったんだ」

「知ってるとも」

「ずっと、がんばってるんだ」

「誰よりも知ってる」

「ほんとうは、くじけそうで——ほんとうは、あきらめそうで」

「そうか」

「でも、いやなんだ。それって、死ぬのと一緒だ。僕は死にたくない」

「誰だって死にたくはない」

「こんな——なにも得られないで、なにも残せないで——死にたくない

い！」

僕を刻んで、マリアを刻んで、たくさんの傷にしてやりたい。マリアの傷痕を世界の奥底まで刻み込んでやりたい。

愛する人たちの——永遠の傷になりたい。

「くやしい——ゆるせない——なにも成せないまま、死んでやるもんか！」

「マリア」

「僕は——だから——」

「マリア」

マリアは泣いた。みつともなく泣いた。大嫌いだった男の胸にすがって泣いた。一度は僕自身の手で傷だらけにした男にしがみついて。泣きわめいた。悔しくて泣いた。

死にたいわけないんだ。——こんなにも、僕たちは生きているのに。

ダンブルドアの葬儀が執り行われる。朝食のため集められた大広間の生徒たちは喪服に身を包んだまま沈痛として、その中にセオドル・ノットの姿はなかった。それから——グリーン格拉斯姉妹もだ。

各寮監と今や校長となったマクゴナガル先生に連れられ生徒たちが向かう先は湖だ。ダンブルドアの眠る白亜の大理石台は夏の日差しをまんべんなく浴びて狂おしいほどに美しかった。その日は世界が祝福する光にあふれていた。

参列者の中にホッグズ・ヘッドのバーテンダー——アバーフォース・ダンブルドアを見つけて思わず見つめた。たった一人の肉親が吊いの炎に包まれゆくさまを老人はひとたびも目をそらすことなく見ていた。僕が見つめるアバーフォースはアルバス・ダンブルドアを最後まで見つめていた。

——不死鳥がどこかで甲高く泣いた。

葬儀が終われば生徒たちはホグワーツ特急に乗って即座に家族の元へと帰されることとなっている。当然、僕たちも養い親に逆戻りしたダーズリーの元へと一時的に身を寄せる必要がある。

ロンとハーマイオニーは監督生のため、ハリーと二人きりのコンパートメントで眠るハリーを撫でる。

ハリーはこれから親友たちと共に分霊箱を探す過酷な旅へと出るのだろう。ハリーが手にすべき分霊箱はあとひとつ——それまで、僕にできるのは。

「子守唄にはなりそうもないけど」

そういえば今年のプレゼントはなかったな。意味もなく呟きながら黄金のオルゴールを開いた。つきはぎのクリスマスソングが二人だけのコンパクト内を泳ぐ。ハリーが歌って、ロンにパスして、ハーマイオニー、ジニーが続いて、ルーナにネビル、アステリア——シリウス。

ハリーを撫でながら愛しい人たちの声に耳を澄ませる。

……ああ、うん。そうか。知ってたよ。

「……あれ？」

「まだ寝てていいよ」

寝ぼけまなこに身を起こしたハリーにクスクス笑う。片手で歌い終わったオルゴールを閉じる。眼鏡は眠るハリーから僕が外しておいたのに気付かないでツルを上げる仕草をするハリーにさらに肩まで使って笑う。

「マリアだけ？」

「うん？」

「今——ドラコの声があった気がしたんだけど」

オルゴールを小箱にしまってから、僕は膝にあるハリーの目をふさいだ。

「気のせいだよ」

謎のプリンス【番外編】

ドラコと少女の話

「ドラコお兄様。もしよろしければわたくしとコンパートメントを共になさいますか」

心から慈しむ少女に誘われ、ドラコは一二もなく頷いた。アステリアはたおやかに笑んでいた。

「だがしかし——ダフネは？」

ドラコは記憶している。目の前の少女はホグワーツ特急の旅を姉のダフネ・グリーングラスと共にしていることを。

「お姉様にだってお姉様だけのお友だちがいらつしやいます。いつまでも姉のおんぶに預かるわたくしではありませんのよ」

アステリアはおしゃまに返した。十四歳になった彼女の美しさは際限なく増すばかりで、ドラコは眩しいように思えて瞳を細めた。アステリアもまた、愛しいものを見る目でドラコを見つめた。

「やはり、マリアとの旅のほうがドラコお兄様はお気に召すのかしら」
「まさか。軽蔑されることを覚悟で言うが——僕に君たちは比べられない」

「まあ……ひどいお方」

アステリアは怒ってはいないように見えた。

「でも、今回はわたくしにひとりじめさせてくださいませね。……きつと、これが最後でしょうから」

そつと加えられた囁きはドラコへは届かない。届くことを少女は望まない。

彼の手を取って乗車するアステリアは小さく唇を噛んだ。

「ドラコお兄様、わたくしね——わたくし——」

ドラコとて伊達にかつての妻を慈しんできたわけではない。様子がおかしいことくらいは容易にわかる。彼女と繋がる手に力を込める。

「いいえ。なんでもありません」

「アステリア、困ったことがあるのなら言いなさい。私はなんだって力になる。君のためなら——」

「あら、大きなお言葉。確証のない言葉はむやみに使うべきではありませんわ」

「アステリア」

ほんの少し語気が乱れるドラコに、アステリアは軽やかに笑った。
——軽やかだ。愛する人と敵対すると決まって、少女の心はいっそ晴れやかだった。

完璧に、置き去りにしようと決めた。

「さあさ、ドラコお兄様。お口を開いてくださいませ。アーン、ですわ。アーン。わたくし、メイドの手を借りてパイを焼いてまいりましたの。何度も味を確認しましたから、きつと下手物にはなっていないと思います」

「アステリア……話を、」

「隙有り」

取っておいたコンパートメントに着いてすぐ、十四歳の少女らしい

無邪気な顔で自作のパイを取り出したアステリアは、敬愛する兄の口に一切れを放り込んでみせた。なんだかんだと食ってしまうのだからドラコもまったく彼女に弱い。……それをアステリアは知っている。

「……いかがですか？」

「おいしいよ。……君のパイが不味いわけがないんだ」

息子だつて大好きな——愛する人の手料理だ。

「ふふふ、おかしな言い方。たくさんご用意した甲斐がありました」

仕方なく詰問を切り上げて、ドラコも均等に分けられたパイへと手を伸ばす。爪まで揃えた男らしくも美しい指先が躊躇いなく生地をつかむ様をアステリアは見ていた。ずっと見ていた。——仕込んだ薬により緩やかに眠りにつくドラコを膝で受け止めるまで、あますことなく見ていた。

このまま汽車に乗って、遠く——遠く——わたしの手の届かないところまで行ってしまえばいい。

髪を撫でて、鼻を触ってみて。細やかなイタズラを堪能すれば、指は少年の薄い唇をなぞる。

「……ごめんなさい、ドラコお兄様」

眠る少年を天蓋で覆い隠すように少女の髪が膝へと落ちる。あと少し。あと少しで触れ合える。愛らしくすら感じる寝息をこぼす唇を見つめる。

「あなたを、愛しています」

降り落ちた滴を受け止めた金色の睫毛は、ほんの少し振れて滴を頬

へと伝えていった。

蝙蝠の話

「君がわしを殺すのじゃ」

沈黙。沈黙だ。男と老人の間には沈黙だけが許されていた。老人の死に侵食された腕を一度見遣つて、男はどうかと口を開く。

「余命を伸ばす、努力もされないと?」

「わしがこの呪いを背負うことは誰に弁解しても認められぬ失敗であつたが、わしの落命についてはこの上なく素晴らしいタイミングじゃ」

「あなたはこの先だつて必要な人だ。あなたが前線でなければ、」

「いいや、わしの後を継ぐ者がおる。老いぼれはここで君の地位を固定させる土産を残して退場する。——どうせ死ぬのならば、甘美なる死の美酒すらも利用してみせようぞ」

己の死を目前にしても、それすらも計画に含んで遂げると豪語する老人に男は叫び出した。衝動をこらえて喘いだ。

「——ポッターですか。あの子供を、あなたと同じように戦わせるのですか」

「ハリーはわしの手の及ばぬところで常に戦つてきた。あの子は生きることこそが抵抗であり悪への反逆なのじゃ。ゆえに、君に守らせてきた。この件はとつくに承諾済みであつたはずじゃのう、セブルス?」

「ええ、ええ!。そうですねとも、私はこの為に見たくもない子供を見続けてきた」

「——それは君が、あの子の瞳から逃れられぬからじゃ」

「——」

感情を永久に等しい時間をもつて煮詰め染み着かせてきた瞳が揺らぐ。愛に凍り付いた彼の魂は腐敗すら叶わず愛に焼かれ続ける。緑の炎が彼を焼く。

ダンブルドアは善人であり、悪に冷酷であった。善のため——男の贖罪を利用することを彼は正義とした。老人の罪悪感と男への憐憫は正義に正当に塗り潰された。

さて、セブルス。ダンブルドアは男の葛藤を何でもないことのように受け止めて自分勝手に続ける。男の非難の眼差しに、老人とは人の話を聞かないものだ——なんて茶目つ気を見せながら死んだ腕を振る。

「ヴォルデモートはルシウスの一件から非常に周囲へも疑り深くなっておる。自分の召し使いとしてその心には一歩足りとも踏み込ませぬ。それがトム・リドルという男じゃ。——ここいらで、忠実なる下僕セブルス・スネイプとしての信頼を取り戻さねばならん」

冷酷な青の視線は老いなど微塵も感じさせずに男を射抜いた。ダンブルドアは繰り返す。男に突き付け続ける。——悪を演じきれと。

「……あなたが、そうせよと命ずるならば」

「そうじゃ、命令じゃ。——そして君の意思じゃ」

ハッと暗い瞳は開いた。セブルス・スネイプに伸ばされた救いの手はその指先すら見えないほどに遠かった。

「君の意思で、わしを殺すのじゃ」

——セブルス、頼む。

ダンブルドアの懇願に微かにスネイプは瞠目する。あまりにその声が悲痛だったからだ。スネイプは知ってしまったのだ。はじめて——この人の心に触れたと。

「ハリーが見ておる。……頼む」

スネイプとダンブルドアが身内として会話を交わす前に件のハリー・ポッターは天文台へと辿り着いてしまった。躊躇いは許されない。——騙すべき子供が見ているのだから。ダンブルドアに残された手段は互いのみ通じる言葉での懇願だった。

透明マントを放り捨てて、威嚇のため振り上げた杖と腕ごと見えないう拘束に縛られたハリーは混乱のままにダンブルドアとスネイプとを見た。ハリーはスネイプを疑っていた。けれども、ダンブルドアはスネイプを信じていた。それをハリーは知っている。

残酷な大人たちの思惑通り——愛すべき子供は舞台へと祭り上げられた。

申し訳程度の武装解除によってダンブルドアがニワトコの杖を手放す。脆い体が天文台のふちへと転がる。ハリーが奪われた声で叫ぶ。

セブルス・スネイプは焦がれる緑の怒りを背に受けながら唱えた。

「アバダ・ケダブラ」

死の秘宝とマリア

111

不死鳥の騎士団員からの迎えを待つ四週間のあいだ、ハリーは自身の痕跡を消すように荷物をまとめていた。ハリーは僕になにも言わない。だから僕もハリーに言わない。ハリーが黙々とリュックに手を入れる傍ら、僕はここ数日ため込んでおいた日刊予言者新聞をひらいた。

——チャリテイ・バーベツジ教授の辞職。辞職とは名ばかりで、おそらくはヴォルデモートによって殺されたのだ。チャリテイ・バーベツジ教授はマグル学を教えていた。

ドラコの『以前』での情報が正しければ、どこかの館で見せしめにされた。問題はどこの館で行われたか、だ。やはり——

「……アステリア」

マルフォイ邸が使えない今、浮かぶのは彼の妻として死の際まで付き添った彼女のことだった。セオドールだってそこにいるだろう。ヴォルデモート率いる陣営の情報源となっているのは奴だ。僕という例がいたからダンブルドアはセオドールを信じたし、セオドールがいたからヴォルデモートは僕を信じた。

新聞の次をめくる。リータ・スキーターの胸くそ悪くなるようなゴシップ記事だった。故人たるダンブルドアを食い物にしようと、スキーターの邪悪な野心が紙面を踊っていた。文字をながめるだけでどつと怒りが押し寄せる。これ以上は疲れるだけだ。新聞を放り出してベッドへ腰かければ、ハリーは毛布を見つめて手を止めていた。

「ハリー」

丁寧にたたまれた毛布がリュックの奥へと押し込まれる。——昨日、ペチュニアおばさんより譲られた母さんのただひとつの形見だ。赤ん坊の僕たちをくるんでいた、そしていつかアルバスへと渡るちっほけな毛布だった。

ペチュニアおばさんは理不尽な罪で死刑台へと立たされる罪人のような顔で、毛布を持って僕たちの部屋を訪ねた。そしてうなつた。

「この家を離れば——ぜったいにあたしたちに害はないんだろうね」

うんざりだとはかりにハリーが鼻で笑う。

「何度説明すれば気がすむんだ？ 魔法省から役人がわざわざこちらまで足を運んで至極丁寧にお伝えしたはずだけど」

いつもならば生意気三昧の僕とハリーに、この時点でペチュニアおばさんのヒステリックな金切り声が部屋をつんざいていたことだろう。——けれど、この日はちがった。

「——赤ん坊のあんたたちを受け取って、ダンブルドアからの手紙を見たとき、あたしは絶望した」

ハリーも僕も口をつぐんだ。

『魔法』なんて馬鹿げたものをあたしの家族のもとへ持ち込んだあんたたちは間違いなく悪魔だったし、妹を奪った『魔法』がまた——今度はあたしだけの家族をも奪いに来たんだと思ったわ。あたしのやっとなんだ幸せをめちやくちやにしに來たんだと思った。あんた

「私たちは——あたしにとって恐怖そのものだった」

ふと、僕は思った。——おばさんのボガートはきつと、僕たちの形をしている。

「お前たちにとっては救いだったんでしよう。ええ、ええ、意地悪な伯母夫婦に虐げられるより魔法に囲まれて才能を伸ばして、しあわせで当然だって顔をして——魔法を持たないあたしたちを見下すのよ。知ってるわ——リリーも同じ顔をしてた」

「そんなこと」

「お前たちは笑った。ダドリーちゃんにあの大男が豚の尻尾を生やしたとき、お前たちは笑ったわね。わけのわからない生き物を持って帰ってはあたしが見たくないと呼んでも大袈裟だって笑ったりリリーにそっくりだった。結婚式で馬鹿げた悪戯をして式をめちゃくちゃにしたジエームズ・ポッターにそっくりだった。わかるかい？ その時あたしがどれほどお前たちをおそろしく思ったか。お前たちを憎んだか。お前たちにとっては遊びでも——『魔法』はいつだってあたしをおびやかした！」

「——」

「お前たちは笑っていられるんでしようよ。魔法使いのお前たちは持たないものの恐怖を知らないんだ。お前たちが笑った『魔法』で——お前たちが杖をひと振りすれば叶う『魔法』で——あたしたちはいつだって怯えていなければならなかった」

ペチュニアは子供の頃から抱え続けた恐怖を、ジエームズの瞳とリリーの瞳を見つめながら叩きつけた。

「あたしは——あんたたちの前に立つときはいつだって死を覚悟した」

魔法なんてものに触れたことがない『まとも』なバーノンよりも、丁

寧に守られ目をふさがれてきたダドリーよりも、『魔法』を知るペチュニアこそがもつとも僕たちをおそれていた。

相づちの一つも返せない僕たちに、ペチュニアは深呼吸して続けた。

「それでもあんたたちを捨てられなかったのは、あんたたちに情が移ったからじゃない。バカな妹の残したものが——これと、あんたたちしかなかったからよ」

たたみジワの見られるほこり臭い二枚の毛布がかかげられる。

「お前の瞳と、お前の顔と——この毛布しかあの妹は遺さなかったのよ」

誰の声もなくなる。耳にうるさい金切り声のイメージでしかなかったペチュニアおばさんの張りつめた発露は、これまでのどんな罵倒よりも耳に残った。

毛布が力尽きたように床へと落とされる。おばさんの性格を表した几帳面な四角形がやわらかに形を崩す。

「——でも、もういらないわ。こんなものいらないわ。あんたたちだつていらないわ。行ってしまいなさい。魔法のところへ。あたしから妹を奪った場所にあんたたちも行ってしまえばいい。決して帰つてこないで、そこで生きなさい」

「……………」

ペチュニアおばさんを見上げたまま動けないでいるハリーに代わって毛布を拾い上げる。

「おばさん」

「……………なんだい」

「覚えてますか？ ——覚えてますよね。あなたが僕の腹に火傷を残した日のこと」

「——」

羞恥なんてものは端から無い。裾をまくり上げれば引きつった皮膚が色とりどりに模様をえがいていた。マリアの肌には数えきれないほどの傷があった。真新しいものはハリーが付けた。

ハッと息を呑む音が二つ。魔法界で背負った数々の怪我に比べれば、ペチュニアおばさんが与えた火傷なんてものはまったく些細で——そしてそれは。

「五年前に蛇の化け物と戦ったんです。大きな蛇で、牙なんてこれくらいあって。猛毒を持っていて——まあ、結果的にこうして生き残れたわけだけど、ほんとうに死にそうな目にあって。——ここに、やつの牙が食い込んだ」

ヘソを避けて少し下——紫っぽく変色し広がる痕を撫でる。

「あなたが僕に与えたケロイドはバジリスクが殺してしまいました」

思わず笑っていた。毛布と、ケロイドと——僕たちは互いの傷を手放したのだ。

「……覚えてないよ。そんなこと」

ペチュニアおばさんは消え入りそうな声で吐き捨てて部屋を後にした。僕とハリーはそれぞれ色違いの毛布を持って見つめあった。

「……ふふっ」

「うん……ははっ」

明確な言葉はなく、寄り添い吐き出すようにして笑う。——ああ、
そうだ。そうだった。肩に触れるほどの赤い髪を掴む。

「そういえばおばさん、ハリーの髪を切ったことはあるけど、僕の髪を
短くしたことはなかったね。ホグワーツから切つて戻つてもなにも
言われなかったから忘れてたけど」

決して彼女は善人ではない。彼女が、そしてこの家が僕らへ振るつ
てきた暴力は、たとえそこにどんな理由があろうと認められてはなら
ない。自己弁護でなく——『僕』も曲がりなりにも親であつたからこ
そ、それだけは許さない。

だから、ここで断ち切ろう。——僕たちを繋いでいた傷は、互いの
手元を離れたのだから。

「ハリー、僕のも持っていて」

ハリーのまとめるリュックへと色違いの毛布を押し付ける。ハ
リーはきよとりとしながらも受け取つた。

「そろそろ来るかな」

時計を見上げる。約束の時間まであと一時間もない。ふと、扉の向
こうで音がした。

「なんだこれ」

ハリーが薄気味悪そうに廊下に置かれたそれを見た。——紅茶の
入ったティーカップだった。二つ、並べられていた。

「ダドリーのイタズラか？ あいつ、この期に及んで——あつ、マリア
！」

ハリーの横をすり抜けてティーカップを拾い上げる。まだあたたかい。……うん、かなり渋い。

「そんな不用心なことしちやダメだろ。なにが入ってるか」

「なにも入ってないよ。ただ下手でマズイだけさ」

「えー……」

ティーカップの持ち手を糞爆弾でも持つみたいにつまみ上げて、ハリーがしかめっ面で水面を見る。僕の視線にうながされるままにおそるおそると口にする。

「……………マズ」

「だろ？」

飲み干した二つのティーカップを廊下へ並べ直して、僕は腹を抱えて笑った。

時間だ。ダーズリー一家の保護にやって来たデイーダラスとヘスチアに挨拶をして、直前になってやっぱり駄々をこね始めたバーノンおじさんを玄関へと叩き出す。

「あいつらはどうして一緒に来ないの」

立ち止まったのはダドリーも同じだった。玄関から先へ行こうとしない僕らにぶくぶくの指をさして押し黙る。戸惑う両親を見上げている。

「それは——そりや、必要ないからだ。え？　そうだろ？」

「うん。まったく」

「これっぽっちも」

声を合わせる僕らにバーノンおじさんは満足するやら憎たらしいやらで忙しなく百面相していた。ダドリーはそれでも動かなかった。

「そいつらはほうっておけばいいんだ！」

「そうよ、ダッダーちゃん。わたしたちの安全が重要なのよ」

「それはあまりにも冷たいのではありませんか。あなたがたの甥御さんは『ハリー・ポッター』なのですよ！」

ヘスチアが信じられないとばかりに目を剥いて伯母夫妻を見る。

「いいんだ。僕なんかこの人たちに粗大ゴミだと思われてるから」

「おまえ、粗大ゴミじゃないと思う」

ヘスチアに続いて、今度はハリーが瞠目した。緑の目が向かう先はダドリーだ。

「おれがあの一変な——」

「吸魂鬼？」

「……それに襲われたとき、おれを助けた男が言ってた。マリアがここに自分を向かわせたんだって。ハリーも同じことをしたって。……おまえたちは、ゴミじゃないと思う」

腹をくすぐるような沈黙が少年二人のあいだに落ちる。ハリーが横目で僕を見る。それに僕は微笑む。

「二ありがとう、ダドリー」

ぎこちない握手だった。散々、暴力を見せてきた拳が壊れ物にでも触れるみたいに僕の手を握った。

「……またな。ハリー、マリア」

「元気でね、ビッグD」

バーノンおじさんとダドリーの背中が車の中へと吸い込まれる。デューダラスがダドリーの隣へと乗り込み、助手席にはヘスチアが座る。呆けていたペチユニアおばさんはやがて鞆を手に取ると。

「じゃ——さよなら」

エンジン音を吹かせる車に向かって僕はめいっばいに声を張り上げた。

「ダドリー！ 紅茶、おいしかったよ！」

……ウソばかり。悪戯っぽく笑うハリーと一緒に、姿くらましで消える車へと手を振り続けた。

七人のハリー・ポッター空を飛ぶ——否、八人のハリー・ポッター空の旅作戦を前に、ハリーは激怒した。

「できるわけない！ 僕のために——僕のせいでみんなを困にするなんて！」

「できるできないの話ではない。やるのだ」

ハリーの反論をピシヤリと跳ね返したマッドアイが懐からポリジュース薬を取り出す。百戦錬磨の戦士マッドアイからすれば、成人にもなっていないハリーの痲癩なんかは魔力暴走を起こした子供よりも取るに足らないものだった。

なおも納得できず言い募ろうとするハリーの背後へとこつそり回る。

「ハリー」

「マリアは黙っ——イタアッ!？」

ブチブチと嫌な音がしたと同時に正面にいたアーサーおじさんが自分の頭皮を押さえた。真っ青だった。よく見たら隣のロンも試験前のハーマイオニーを見るような目で僕を見ていた。心外だ。

指に絡みついた黒髪をマッドアイへと突き出す。ハリーは僕の足元でうずくまっていた。

「これで足りませよ、ムーディ先生」

「む……君たちに教師として教える機会はついでなかったが、それはまあいい。姉のほうが肝が据わっているということがよくわかった」
「僕が兄です……」

頭を押さえたままちよつぴり泣いているハリーに肩を貸す。ハリーの髪入りポリジューズ薬がハリー・ポッター役の七人へと配られる。ロンに、ハーマイオニーに、フラー、フレッドにジョージ、マンダングラス、そして最後は——僕だ。

「マリア……」

十七年ぶりにハリーの姿を取り戻した僕は、ハリーの顔でハリーへとニツコリ笑った。

「はつきり言つて、この中で一番ハリーになれるのは僕だよ。杖を振るときの癖も、発音の仕方、君の笑い方も、gの字をちよつと跳ねて書くところも、気まぜくになると眼鏡のツルを触つてごまかそうとするのも——僕はすべて知ってるんだから」

だつて僕は君なのだから。

ハリーの服に着替えて、懐かしいぼやける視界にこれまた懐かしい眼鏡を鼻の頭へと乗せて、くしゃくしゃの髪をかき上げ久々の感覚に心を躍らせる。股に下がるものをズボンのどちらにしまおうか悩む。このサイズ感——ウン、僕だ。

結局、納得できないままにいるハリーに、同じ目線になった身長を利用して抱きしめた。

「大丈夫だよ、ハリー。ただ……そうだな、二つほど僕をお願いをきいてほしい」

背におそるおそると腕が回った。きつと、彼は今ものすごく変な気分なんだ。自分自身に抱きしめられるだなんて。……よく、わかるとも。

「まず、ハリー、君のファイアボルトを僕に貸してほしい。僕はそれで

飛ばう」

「まさか！ マリア、君、箒は——？」

「僕はジェームズ・ポッターの子供でハリー・ポッターの姉さんだよ？
下手なわけがないよ」

後ろからクツと殺しきれていない失笑が聞こえた。……あとで軽
くながっておこう。

「それから——ヘドウィグとは、ここでお別れをしよう」

ハリーの目に動揺が走った。気遣うように周囲も静まり、すべての
視線がヘドウィグの鳥籠へと流れていった。

「ヘドウィグ……」

「みんながダミーのかごを持つとはいえ、真っ白の雪フクロウはこの
先どうあつても目立つ。ヘドウィグ自身がハリー・ポッターの目印に
なるんだ。……手放そう。やつらに殺されてしまう前に。君の旅路
に彼女は連れていけない」
「……………」

ハリーの目はヘドウィグに注がれたままだった。腕の中からハ
リーが抜けて、ヘドウィグのかごの錠へと指をかける。

「ヘドウィグ」

鳥籠から抜け出したふくろうは当たり前の顔をしてハリーの腕へ
と留まった。

「ヘドウィグ……」

そこにいるのが当たり前だと——ここが自分の居場所なのだと思

まし顔でハリーの腕にしがみついている。彼女は賢い。——理解している。

「……頼むよ、ヘドウィグ」

ヘドウィグの前にひざまずいて、やわらかくてすべらかな毛並みを指でなでる。あたたかい。この子は生きている。

気高い彼女に懇願する。どうか、この先も生き伸びてくれ——と。たとえ、僕のヘドウィグでなくなつたとしても。

「フクロウを逃がすのなら先がよかろう。わしが目眩まし呪文をかける。それでいいな？」

「お願いします」

マッドアイの呪文によってハリーの腕の先から雪フクロウの体が透明になる。それを僕とハリーは見ていた。消えゆく彼女の姿をこれから先も決して忘れないよう、目に焼き付けた。

空から彼女のはばたく音がする。聞きなれた音だ。ハリーの腕が一瞬下がる。重さを失って再び持ち上がる。

「イタツ」

咄嗟に指を押さえて、ホロリと涙をこぼした。ハリーがそれを見て笑った。

「マリア、泣き虫に戻っちゃった？」

「ちがうよ。あいつが本気で噛んでいったんだ」

……血なんて、出やしないけど。

愛しいはばたきは窓の向こうへと遠ざかっていく。見えないそれを目だけで追って、ハリーの手を取る。

——よい旅を。僕らの空飛ぶともだち。

「——話はすんだな？ ほら、いつまで泣いてる。さっさと鼻をかめ、ハグリッド。今一度ペアの確認をする。フレッドはアーサーと、ジョージはリーマスだ。ミスデラクルは、」

マッドアイの点呼にすかさずビルが答える。

「僕がセストラルで連れていく」

「うむ、任せよう。ミスグレンジャーもキングズリーと一緒にセストラルだ。ロンはトンクス——」

「任せて、ロン！」

「ウ、ウン……」

ロンがまったく信用ならないといった目で本物のハリーを見た。僕たちは苦笑するしかなかった。トンクスはたしかに信じられないドジばかりする人だけど、なんだかんだとここまで生きてこられたから……。

「ハリーはハグリッドとだ。そしてマンダンガスは——」

「それだけど、マッドアイ。あなたと一緒に行くのは僕のほうがいいと思うんだ」

マッドアイの魔法の目がギョロリと僕へ向いた。そのまま彼は口をつぐむ。途中の口出しに怒っているわけではなさそうだ。

「さっきも言ったとおり、この中で一番囿として仕事ができるのは僕だよ。断言する。ハリーをのぞいて、一番の危険どころは僕が担当する。だから、その代わりといっってはなんだけど——」

ふり返る。あと少しで十七才のハリーが何人も並ぶ異質な光景の

中で、彼のブロンドはかなり目立っていた。会話に参加せずクールぶりながらも、彼はじつと僕を見ていた。

「——ドラコ、君に頼みたい」

小憎らしいアイスグレーが涼やかに笑んだ。

「マリア、ほんとうに大丈夫か？ ……えーと、マリアだよな？」

各々の得物を手に護衛と七人のハリーが夜空を見上げていた。うちの一人のハリー——隣にいたハリーだ——がそつと僕へうかがってきた。彼のさらに隣に立つ人がトンクスなのでこれはロンだ。ビルにしなだれかかっているハリーはフラードだし、キングズリーとむずかしい話をしているハリーはハーマイオニーだ。アーサーおじさんのお尻に火を点けようとしてるハリーがフレッドで、ルーピン先生の背広を燕尾服に変えようと企むハリーがジョージ。一夜でパラレルワールドハリーがたくさんだ。

ハリー（ロン）がおずおずと僕の持つファイアボルトを見る。

「だって、つまりは——ファイアボルトはプロ用の筈なわけだし、たしかに君は飛行訓練だってオールクリアの優等生だけどクイディッチをしてたわけじゃない。ハリーのように飛ばうと思ってるなら、」

「ロン」

ロンの言葉をさえぎったのは、僕でも本物のハリーでもなく、いまだ彼への呼び名にぎこちなさが残るドラコだった。

「それ以上は余計な世話だ。その実力はそれが一番知っている」

思わず逆隣の顔を見上げた。(ドラコはハリーよりも背が高いのだとこのとき気付いた。)ロンは納得できずに口ごもっていたが、ドラコは話は終わりだとばかりにすましていた。そんな簡単に——だってそれはファイアボルトなんだぞ——僕がはじめて乗った時だってうまくいかなかったのに——

マッドアイの合図と共に八組の影が飛び上がる。ぐつと柄を掴む。加速する。君にとってははじめましてかもしれないけど——僕は君をよく知ってるんだ。頼むよ、ファイアボルト!

予想の通り、上空では異様な数の死喰い人が待ち伏せていた。予定通りに散り散りになって何人かを撒く。マッドアイを背にあえて前方の死喰い人へと大袈裟なそぶりですべて武装解除を当てる。

「あれだ——あの動き——あれがハリー・ポッターだ!」

「ポッター——!」

「ほうら——間抜けが引つかかった」

死の呪文や許されざる呪文の嵐の中を、箒の操縦術一つで切り抜ける。僕の周りで壁役をこなそうと奮闘していたマッドアイも、やがて放つていてもどうにかなると判断したらしい。困うように飛ぶのはやめて死喰い人への反撃に専念していた。

——さあ、こっちはこい——ヴォルデモート!!

いくつかの術に被弾しながらも飛び続ければ、ふと、死喰い人たちの姿が消えた。騎士団員の人間があらかじめ張っておいた防壁の中へと入れたのだ。ハリーを保護するため用意された十二の家のひとつにたどり着いた。——そして、それまでにヴォルデモートが僕らの前に現れることはなかった。死喰い人はおそらく最大人数——目算でも十人はこえていた——を引き付けられた自信があるが、目的の大元は引きずり出せなかった。結局——魂で繋がるハリーの元へ

行ってしまったのだろうか。

「マッドアイ」

「裏切りがあった。そして————生きている。お前は生きているし、わたしも生きています」

「……ええ、そうですね」

激戦によって義足を折ってしまったマッドアイに肩を貸しながら家を目指す。僕の片目は血で前が見えなくなっていたし、おそらくどこかの骨を折った。けれども、ほとんど墜落同然に箒を手放したマッドアイをこのまま地面に放っておけるはずもなかった。——生きて、いるのだから。

ご老人の散歩よりもゆっくりした足並みで民家の前へと立つ。互いに安堵の息をつく。いったんマッドアイを扉の側へともたれさせれば、扉を叩く前にマッドアイが咳き込んだ。

「僕が話します。ムーディ先生は無理せず休んでいてください。……先生？」

「——プロ志望か？」

満身創痍の状態だということにこぼれ出た場違いな単語に、はたと固まった。マッドアイの魔法の目は僕とファイアボルトを見比べていた。

「……それも、いいですね」

マッドアイの冗談なんだか真剣なんだかわからない眩きを受け取って、僕は遅れて笑った。

ポルトキーで約束の隠れ穴へと飛べば、ハリーの組とジョージにフレッド、ハーマイオニーの組はすでに到着していた。そして――
ドラコだ。

「マリアー！」

たいした怪我はないらしいドラコの姿を見た瞬間、どっと力が抜けた。駆け寄ってきたドラコに抱き留められる。まだ治療をしていないので折れてるどこかの骨がきしんでかなり痛かったが、気力だけでどうにか彼の背を叩いた。

「マンドングラスは？」

「逃げたよ。そして僕は追わなかった。自分の命が惜しかったのですね。……それを、期待していたんだろう？」

「相棒っぽいセリフだ」

声に出して笑おうとして、結局それはうめき声にしかならなかった。ドラコの手を借りながら家の中へと入れれば、迎え役のモリー母さんは泣きながらジョージをなでていた。

「ジョージ……」

「ワオ。君、もしかして目ん玉をどこかへ落としてきた？ それはマッドアイの十八番だと思ってたのに。ちなみに俺は耳を落としてきた」

「思いの外、元気そうだね。……口だけが」

血だらけの僕を見て狂乱しながら救急治療セットを取りに戻ったモリー母さんに代わって、ソファに横になるジョージの側へと膝をつく。血に染まった耳から首にかけての包帯を見つめる。

――死ぬよりはましだ、なんて。そんなことを言っただけじゃない。思っただけじゃない。それでも。

「生きててよかった」

ポタポタと包帯に滴が落ちた。ドラコがなにも言わずに僕を引き寄せた。ハリーが「やっぱマリヤ、泣き虫に戻ったみたいだ」なんて冗談めいた声色で言った。

「若いお二人には悪いけど、治療が先ですよ」

「そしてモリーには悪いが、治療の前に確認をさせてくれ」

杖と魔法薬と諸々の小道具を持って戻ってきたモリー母さんの隣にルーピン先生が並ぶ。外見はとくにマリヤに戻っている。それでもルーピン先生が警戒を解かないのは——僕が一度、服従の呪文にかけられたとされているからだ。……最低の大嘘つきめ。

「——君の守護霊の形は？」

ルーピン先生の静かな問いかけに、奥でハーマイオニーの肩が跳ねた。

「ハリーは雌鹿で——僕は牡鹿です」

ハーマイオニーとルーピン先生、ドラコ以外の目が驚愕に開いた。ルーピン先生はなんだか奇妙な微笑みを浮かべていた。ハリーがじつとりとした目で僕を見ていた。……あとでうるさいことになりそうだ。

僕の治療が終わった頃にロンとトンクス、ビルとフラーも到着して、モリー母さんもハーマイオニーも安堵に涙が止まらなくなっていた。それを僕はほんやりと眺めていた。

だれも死ななかった。

ハリーも、ドラコも、ロンも、ハーマイオニーも。ハグリッド、ルー

ピン先生、ジョージにフレッド、アーサーおじさん。ビルにフラーに
トックス、キングズリー。——マッドアイ。

誰の追悼もする必要はないのだ。ここにいるみんなで結ばれる二
人を祝福できるのだ。

ドラコが僕の手を握る。握り返してみる。なんだか、この光景に勝
る幸福はないように思えた。

とうとう、ハリーとマリアの十七才の誕生日がやってきた。ハリーは寝起き早々に杖を取り出し魔法三昧を始めたし、そんなハリーにジニーがクスクスと笑った。

「マリアはしないの？」

「ハリーの魔法が暴走しそうになったら試すよ。——あれとか」

ハリーが手当たり次第にアクシオしたうちの一つにペーパーナイフが混ざっていたものだから、僕の日常での魔法解禁一番目の魔法はプロテゴになってしまった。ジニーはマリアらしいと笑った。

だがしかし、十七才の誕生日は幸福だけでは終わらない。——招かれざる客の登場だ。

「ハリー・ポッター君、ロナルド・ウィーズリー君、ハーマイオニー・グレンジャーさん。個別で話かしたい」

お楽しみの特大スニッチケーキが祝いの席へと運ばれたところで、思わぬ客人に誰もが硬直した。ハリーやダンブルドアと思わしくない関係にあったスクリムジョール魔法大臣だ。おかげでルーピン先生とトンクスは姿くらましてパーティーから退席しなければならなかったし、ドラコは僕が持ち出した透明マントに隠れるはめになった。

三人を連れてスクリムジョールが隠れ穴の中へと入っていく。ご丁寧に防音魔法をかけて四人がこもる。主役の一人を失ったガーデンパーティーは気まずい沈黙に包まれていた。

「その……マリアはいいの？」

「なにが？」

「きつとハリーに関する事なんでしょう？ あの顔を見た？ お誕生日おめでとうの挨拶に、まるで心のこもってないこと！ ハリーに用があつて、それにロンとハーマイオニーも呼ばれて——あなた
は？」

「関係ないよ」

即答する僕に、ジニーはショックを受けたようだった。そしてどことなく寂しそうに瞳をふせた。

「関係ないの？」

「関係ないんだ」

「そう……関係ないのね」

やわらかな手がそつと僕の手を握る。スクリムジョールの話はダンブルドアの遺言についてだ。ハリーにはスニッチを、ロンには灯消しライターを、そしてハーマイオニーには童話集^{ビートルのものがたり}を。すべてがダンブルドアからのヒントだった。……かなり、意地悪なヒントだったけど。

ジニーのぬくもりに甘えて肩を寄せてみる。ジニーはなにも言わずに手を握り続けてくれる。——この手を、僕はなにがなんでも守り抜かねばならない。

もう一人の主演が戻ってくるまで、これから先も永遠に愛している人のあたたかさに触れながら僕は目を閉じた。——なにかが足りないように感じる欲深い自分を、心の奥底へと追いやった。

翌日には皆が待ちこがれたビルとフラアの結婚式が執り行われた。花嫁の介添人を務めるジニーとフラアの妹ガブリエルは金色のドレスに身を包んで輝くようだったし、なにより花嫁衣装とティアラを飾ったフラアはヴィーラをもしのぐ美しきにあふれていた。

ダンブルドアの葬儀でも目にした小柄な魔法使いが新郎新婦の前に立ち杖を振る。魔法族流の誓いの言葉を厳かに唱える。

「——されば、ここに二人を夫婦となす」

杖から銀の星が降りそそぎ抱き合う若き夫婦を取り巻いた。爆発的な拍手がわいて風船から飛び出した鳥が祝いを奏でた。各両家の両親は号泣しながら我が子を抱きしめ、みなが立ち上がって祝いの言葉を贈った。

「やっぱり何度見たっていいものだね、結婚式は」
「それなりだな」

立食とダンスフロアに変わったテントの下で、隅に縮こまりながら言葉を交わす。グラスに映った彼のブロンドがウイスキーの波に揺らされながらなめらかに光っていた。

「君の結婚式はどうだった？」

「彼女がこの世のものと思えないほどに美しかったことしか覚えてない」

「ウゲエ……その顔、パンジーの前でぜったいにするなよ」

「いらぬ世話だ。君はどうなんだ？ —— 『フローレンス』」

堅苦しいドレスローブと蝶ネクタイを開いて、ひと息ついてから隣の男を見る。

「もちろん——最高の花嫁のことしか覚えてないさ」

グラスを互いの目を見たままかたむけて——男二人で僕たちは酒をなめた。

男二人だ。元々男のドラコはともかく、現在の僕は立派な男性として式に参加しているのだ。男装ではなく、男性だ。良くも悪くも有名な人のハリーが変装するのは当然だが、オマケの僕もマリアのままの姿は許されなかったのだ。

そこで、何度も活躍してきたポリジューズ薬の登場だ。少し下りた先の村から、適当な赤毛の青年の髪をちよいと拝借して姿まで借りさせてもらったというわけである。なお、命名はルーピン先生であり、彼いわく「リリーは赤毛の男の子にはフローレンスと名付けようとしていたんだよ」とのことだった。僕が男のまま母の容姿に生まれていたらフローレンス・ポッターだったわけだ。
ぐつと背伸びをして、食事の置かれたテーブルから遠くの席へと腰を落ちつける。

「やっぱり僕は男なんだよ。ほら、今ならハーマイオニーに、足を閉じる！　なんて説教をされなくてすむんだ。気楽極まりないね」
「もちろん君は男だろうさ。君が自分を男だと名乗る限り、間違いないくそうだ」

「……………」

思っていた以上に真面目くさった返答が返ってきて、思わず黙った。空のグラスを手の中でもてあそぶ。

「…………たとえば、僕がこの見た目のまま一生を過ごすとしたら、それでも君は僕を好きなんて言うわけ？」

「その問答は今さら必要か？　君がマリアであろうと、ハリーだろうと、どこの誰とも知れないフローレンスだろうと——それが『君』であるなら、僕は何度だって言ってるよ」

グラスを奪われる。ちがう。奪われたのはグラスを持っていた手だ。首の後ろに回った指がうなじに沿って引き寄せる。

耳に触れるほど近い場所に——彼の唇がある。

「好きだ。ハリー」

「——」

「好きだ。マリア」

「ドラコ」

「好きだ。フローレンス」

「やめてくれ」

「好きだ。——君が好きだ」

「——っ」

立ち上がっていた。膝から落ちたグラスが軽い音を立てて割れた。

——あんまりにも軽い亀裂の音だった。

「——アステリアとの結婚式、いいものにしなよ」

捕らえられていた手首を振り払って駆ける。誰かにぶつかった気がしたけれど確認する余裕なんてなかった。隠れ穴の裏へと座り込む。会場の喧騒がずっと遠くなる。心臓が場所を間違えて耳の傍で鼓動を打ち鳴らしているようだった。笑い声よりも音楽よりも自身の心臓のほう遥かにうるさかった。

走ったからじゃない。わかってる——わかってる——わかってはいけない！

「ハ……僕、また泣いてるじゃないか。どうしたんだ。どこか壊れたのか？ ハーマイオニーとチヨウの泣き虫が移ったか？ ほんとうにおかしいぞ。おかしいんだ、こんなの。——ぜんぶ、おかしい」

「マリア？」

怯えるように顔をあげた。ルーピン先生だった。

「どうしたんだ、彼になにかされたのか？ あ、いや——すべてを見ていたわけではないんだが」

「ルーピン先生……」

「さあ、さあ、これを使って。君が泣くだなんて……よほどひどいことを？」

紳士のたしなみだとばかりにスマートに絹のハンカチを差し出される。それを受け取るとき、見えた。——指輪だ。

「……結婚、されたんですね。トンクスとでしよう？」

「ああ……ハリーから聞いていた？ 君はまだあの時には大怪我で昏睡していたはずだし」

照れくさそうにルーピン先生が指輪を撫でる。トンクスとの未来に思いを馳せて幸せをにじませている。——そして目をつむる。

「……マリア。彼の話をしたくないなら、僕の話聞いてくれないか」
「先生？」

「マリアは、ほんとうに男の子の仕草になれてるというか——君はとても男勝りだったね。今だって、まったく演技には見えないんだ。とても自然体だ。八人のハリー作戦でも、どちらがほんとうのハリーか実のところ私は迷ってしまった」

「……………」

指輪を握って、ルーピン先生は僕の隣へと座り込んだ。大の大人が地面に腰を下ろして縮こまる姿に、不覚にも笑ってしまいそうになった。

「ダメだな、僕は正直に言って駆け引きだとかは上手くないんだよ。案外、こういったことはシリウスが得意だった。——単刀直入に聞こう」

ハリーとは違う緑の目が指輪から僕へと視線の先を移す。

「マリア——君は僕から守護霊の呪文を教わったのか？」

「」

かすかに残っていた心音すらも、体内から消えてしまった気がした。

「いいや、ちがう。正確に問おう。曲がりなりにも私は君たちの教師だったのだからね。——君が守護霊の呪文を習ったのは三年生のときで、それは私でないリーマス・ルーピンからだった」

そしてルーピン先生は確信を告げる。

「君は——ハリーなのかい？」

声が出なかった。否定も肯定もできずにルーピン先生を見つめた。これは僕の身体じゃないからだ。そんなバカげたことを頭の中で呟いた。

しかしルーピン先生は——肩の力を抜くように微笑んでいた。

「いいんだ。答えなくて。君は今こうして、ここでマリアとして生きているんだから。私は君に最低な願いを抱こうとした」

「先生」

「このことはずっと僕だけの秘密にしていたんだ。ダンブルドアにだって伝えてない。おそらくそれを知るのは僕だけだ。——シリウスも、ダンブルドアも、もういないのだから」

ルーピン先生は立ち上がった。すべてを呑み込んだ顔だった。四年前、ホグワーツを辞職するときに見せたやさしい顔だった。

「悪かったね。雑談をするにはちよつと不釣り合いな場所だった。さあ——」

手を差し伸べられる。指輪がある。真新しい指輪が愛を主張している。

「——あなたの子供は」

手を取って、顔を見る。こんなにも似ている。あの子は父親と母親の良いところのすべてを受け継いで生まれてきた。

「ほんとうに優しい子で、とつてもいいこで、ハツフルパフの監督生を務めます。首席で卒業して、誰からも好かれるかわいい子です」

「——」
「とても、立派に育ちます」

指輪のはまった手が限界まで握りしめられた。

「そうか——そうか——僕と彼女の子は——生き残れるのか」
「先生」

「そうか——それだけでいい——それだけでいいんだ」

ルーピン先生の瞳に涙が見えた気がして、それがハリーの見せる色とはまったくちがうように見えて、思わず手を伸ばしていた。

『魔法省は陥落した。スクリムジョールは死んだ。連中が、そつちに

向かっている』

「——ッ」

背を押された。駆け出した。振り向く。ルーピン先生が涙を払って叫ぶ。

「行くんだ、マリアツ！」

走る。ハリーが手を伸ばしている。華やかなドレスが逃げまどう。ハーマイオニーとロンがハリーを掴む。ドラコがいる。机がなぎ倒される。ドラコがハリーの手を取る。ハリーが僕を見る。ドラコがうなずいた。——よかった。

「行ってらっしゃい、ハリー。ホグワーツで待ってる」

四人の姿が歪んだ。

「——マリアツ!!」

男はその人を壁へと叩き付けた。大人と呼ぶには幼く、子供とするには覚悟が桁違いの男は周囲の目もかまいなしに声を張り上げた。

「どうして姿眩ましをしたッ——!? マリアが——マリアの手をまだ掴めていなかったのに！ あの子を置いてきてしまった——君のせいだ！」

「やめて、ハリー！ ドラコの判断はただしかったわ。あれ以上は待てなかった」

「だから捨て置けっ!? 彼女は僕の家族だ！ 僕の妹だ！ もしも捕まったら——やつらにどんな目に遭わされるか!?!」

「捕まらない」

胸ぐらを締め上げられてなお冷静に努めていた男は、小さく呼吸して、挑む目で目の前の男を見る。怒りの緑だ。なつかしい輝きだ。場違いにも高揚しそうになる己の心を叱咤する。

「あいつは捕まらない。絶対に」

「そんなこと——」

「あそこにはあれの最愛が溢れるほどある。君の兄弟はこの程度で崩落しやしない」

「置いていった分際でもわかったような口をきけるな！」

「ハリー、落ち着いて！ 喧嘩してる場合じゃないわ。せめて場所を変えないと」

そこでようやく激昂の声を上げていた男は四方から刺さる好奇の視線に気付いた。ネオンのうるさい街中だ。——マグルの世界だ。

ハリーを掴んだ四人のうち、咄嗟に姿眩ましをおこなったのは純血の魔法使いたるドラコ・マルフォイで、彼がマグルの街を知っている

意外性に不覚にもハリーは昂っていた感情が鎮まるのをかんじた。

「ダメね、この格好じゃ目立ちすぎるわ。着替えるためにも——わたしに掴まって」

掴まれと言いながら自ら二人の腕を取ったハーマイオニーは改めて姿眩ましをした。(ロンは元々ハーマイオニーの腕を握って放さなかった。)

目にうるさい都会のまたたきからそれた場所に出た一行は相談もなく路地へと進んだ。若干、潔癖症のふしのあるドラコがゴミの散らばる隅や排気ガスだのスプレーだのに汚れる壁を見てかすかに眉をひそめたが、文句は喉元で押し留めたらしかった。

「着替えるったって、荷物は」

「全部ここに入ってるわ。ハリー、あなたのもね」

ハーマイオニーが検知不可能拡大呪文をかけたビーズバッグを軽く振ってみせる。ガラングロンと中から雪崩のような音が聞こえた。

「ああ、しまった！ 本が崩れたんだわ……せつかく項目ごとに積んでおいたのに」

「君って……」

称賛すべきなのか正気を確かめるべきなのか、曖昧な表情を浮かべるロンに適当な衣服が押し付けられる。ハリーにも同様だ。そしてブロンドの目立つ美男子、ドラコ・マルフォイをチラリと見たハーマイオニーは、気まずそうにうかがう視線をロンへと移した。

「ドラコはハリーよりも背が高いわけだし——今はハリーだって普段の姿ではないけど、あと数分もすれば戻っちゃうわ——あの、ロン……あなたのお洋服がぴったりだと思っただけ」

あからさまに臭いものでも鼻の下にくつつけたみたいな顔をしたロンは、立っているだけで涼やかそうないけすかない男を横目で見て、ハーマイオニーを見て、ほんの少しだけうなずいた。身長の面ではまちがいなく勝ってる点だけがロンの男としての矜持を慰めた。

「マグルの街へ来たのは素晴らしい機転だったわ、ドラコ。けれどすぐに落ち着いて身を隠せる場所を探さないと……永遠にホテル暮らしというわけにもいかないだし。ヴォル——」
「言うな！」

マグルの装いに着替えた三人は（紅一点のハーマイオニーは着替えるあいだけハーリーの透明マントを借りた。）ドラコの突然の叱声にビクリと肩を震わせた。ハーリーなんかは反射的に杖すら取り出していた。

「ドラコ？」

『『あの人』の名を呼んではいけない』

マリアの件で不満たつぷりだったハーリーは、ここぞとドラコを鼻で笑った。

「ドラコって存外、臆病なんだね」

「そうじゃない！」

ハーリーに子供っぽく噛み付いたドラコは、それからハツと咳払いをする。どうにもこの顔に生意気にされると——彼もまた反射なのである。

「……いいや、訂正しよう。君はただしい。僕は臆病だし、死ぬのが怖いし、追われるのも怖い。うしなうのだって怖い。大いに認めよう。」

だが、それだけじゃない」

ここにもしもマリアがいたならば、あの意地っ張り坊ちゃんがいぶん丸くなったものだ。と面白半分は冷やかしたことだろう。だがしかし件の三人は本来の陰湿なドラコ・マルフォイを知らない。一目置いている青年の押し殺した説得に固唾を飲んで聞き入るしかない。

『名前を言うてはいけないあの人』の名を呼べば感知される。そういつた呪いがすでにどこかされているんだ。『あの人』は君たちが臆さず名を呼べることを知っている」

そんなバカなと声を上げかけたロンを制したのはハーマイオニーだった。

「……ありうるわ。ヴォ——（ドラコが怯えを含みながらハーマイオニーを睨んだ。）ええ、ええ、わかりました。『あの人』はダンブルドアも認めた天才だもの——その使い道を決定的に間違えてしまったわけだけ——魔法省を落とした今、どうにだってルールくらい変えられるでしょうね。道理といえは道理だわ」

立ち止まったハーマイオニーに合わせてロンとドラコ、ハリーも立ち止まる。

「けれど、どうしてそれを——？」

ドラコはマグルの服を思いの外、着こなしながら不敵に笑った。

「お忘れかい？ 僕はマリアの『協力者』だぞ」

ドラコを除いた六つの瞳が示し合わせたように交差する。

秘密を共有し、旅の共にと決めていた三人は予定になかったドラ

コ・マルフォイという追加要素を完璧にもて余していた。なぜなら、旅の目的である分霊箱のことを彼は知らないはずで——巻き込んでしまったことは、まったく不測の事態なのだから。けれど、この様子ならば。

「——マリアだね？」

ハリーの主語もない確認に、ドラコはハーマイオニーからバッグを借り受け、中からとある物を取り出してみせた。

「君、それ——！」

「——これの仲間を探すだろうか？」

ハーマイオニーのビーズバッグのさらに奥、ハリーのリュックに仕込まれていたと思われるスリザリンのロケットが、華奢な鎖を振り子にしてギラギラと揺れていた。

「どうして——」

「ハリー、君にしかこれは開けられないのだそうだ」

「……マリアが、そう？」

「いかにも。そしてあいつは僕が君たちに同行することを望んだ」

「……………」

分霊箱が再びバッグの中へとしまわれる。バッグを受け取ったハーマイオニーはどことなく爆発物を持つ手つきで慎重に口を閉めた。

「わたしたちのことなんてまるでお見通し。マリアお得意の魅力ってわけね。賢者の石を守ろうと躍起になってたわたしたちを、わかっているくせに見てるだけだったあの頃からなにも変わらないわ。あの人ってほんとう——『魔法使い』なんだから」

「マリアは魔女だろ？」

はやる心と共に自然と歩みも再開させていたロンが、今さらなにを言ってるんだとばかりに首をかしげた。

「マグル界では不思議なこと・ありえないこと・奇跡みたいなことを、まるで魔法のよう——と表現するのよ。彼女ってまさしく——『魔法のよう』でしょう？」

男三人の中で唯一マグル社会の常識が通じるハリーが吹き出すようにして笑った。ほんの少し、気が休まったようだった。それを横目にしながら、ドラコは思い出していた。ダンブルドアの葬儀が終わつてからの彼女——否、『彼』の言葉を。

「これを渡しておきたいんだ、君に」

分霊箱の保管部屋へと連れ出され、封印箱の解除の手を取らされたドラコは、そのまま手のひらに乗る美しくも禍々しいロケットを眺めて呆然とした。マリアは、君まで魅入られないでくれよ、なんてどことなく悪戯っぽい目でうそぶいていた。

「最終決戦のときまで保管しておく話じゃ——？」

「そのつもりだったけど、よくよく考えればそれを開くのには蛇語が必要になるんだ。残念ながら、今の僕にはさっぱりだからね。——表面を傷付けた程度では壊せない。中を直接、穿たないと。……ダンブルドアとの約束でもある」

持っているだけで心がざわつく気のある緑のSをなぞってみる。……そりゃあ、彼の元に置き続けるくらいならば己が持っていたいと何度も喧嘩——いや、話し合ってきたが。

ドラコは、例の事件以来マリアがかたくなに預けようとしなかった

分霊箱を今になってあつさりと渡してくれた意味を考えた。——つまりは。

「君の旅に、僕も同行しろと？」

「——いいや」

マリアはゆるやかに首を振った。赤い髪が振れば、空気を含んで所々傷をつけた細い首があらわになる。それにドラコはドキリとする自分を自覚せずにはいられなかった。——そして、そんなドラコをさらなる衝撃が待ちかまえていた。

「僕はホグワーツに残るよ」

「——は？」

何かに包んでおこうか、直接持つよりはマシな気がするんだ。なんてマイペースにロケットをハンカチで包もうとしているマリアの手を掴む。マリアはきよとりと猫っぽい形の大きなハシバミの瞳をさらに大きく丸めると、無垢にドラコを見上げた。

「君、正気か？ ハリー・ポッターは全国に指名手配されるんだぞ。僕は当時の君の貼り紙を飽きるほど見た。その血の繋がった兄弟が——ホグワーツに残るだつて？」

「そうだ。彼等の旅路に僕はまマリアったくもって必要ないし——だからこそ僕にできることがある」

決意の眼差しだ。散々、緑色のそれを見てきた。向けられてきた。ハシバミの色になつても——彼の魂は変わらない。

手首を掴んだドラコの手を片手で取り返したマリアは、少女の頼りなげな手のひらの中にロケットと一緒にして包んだ。微笑む。自分よりもよっぽど不安そうな目の前の男を見上げる。

「安心してよ。正面からバカ正直に生徒として戻るんじゃない。ちやんとやり方は考えてある。——ホグワーツでどうしても完成させておきたいものがあるんだ」

ハリー・ポッターの旅はマリア・ポッターには不要だ。だから——僕は君たちの帰る場所になろう。

「見届けてほしい。『僕』の旅を。他の誰でもない、君に」

かつて焦がれ憎み求めた輝きが色を変えてドラコ・マルフォイを射抜く。揺さぶる。惹き付ける。

「手は出さなくていい。ヒントも与えなくていい。『僕』は必ずやりとげるから。あの旅はハリー・ポッターの人生に必要な不可欠だった。ロンとハーマイオニーを得たくらい——大切だ」

「このロケットだけはシリウスに彼の勇気を知っていてほしくてズルをしたけどね——これ以上は手出ししないよ。ここからは僕の戦いをする」

手を引いて、少女のマリアよりも高い場所にあるアイスグレーにハシバミが近づく。映るのは少女だ。——自分だ。マリア・ポッターだ。

「君が憎み、友になり、挙げ句とち狂って好きになんてなっちゃった『ハリー・ポッター』を見てくれ。ドラコ・マルフォイ」

ドラコは手の中のそれが脈打っているのか、少女の手が脈打っているのか、それとも己の鼓動なのかわからなくなっていた。わからなくてもいい。——もう、わかっている。

「やってやろうじゃないか」

いつも通りの嫌味っぽくて憎たらしい顔で承諾したドラコにマリアは瞠目した。それから目をそらし睫毛の中へと動揺を隠した。

マリアは分霊箱探しの旅の過酷さを知っている。かつて酒の席でチラホラとつまみにドラコへ語ったことはあるが、それがすべてではない。ロンとの決別がどれほどハリーを打ちのめしたかなんて——バチルダの遺骸をかぶったナギニの牙がどれほど近くへ迫ったかなんて——それらをドラコ・マルフォイが知る必要はないのだ。

きつと死ぬような思いをするだろう。一步間違えれば本当に——
——それでも。

マリアはドラコをかつての相棒たちと同じくらい、『信じた』。

「死ぬのは許さない。いいかい、あの子たちが最後にたどり着く旅の先はホグワーツだ。レイブンクロウの髪飾りを求めて帰ってくるんだ。そしてその封印を解くのは君だ。そこに君がいなくちゃだめなんだ。無傷で、なんて高望みはしないよ。——生きて、僕のもとへ帰ってきて」

いつそ甘やかにすら聞こえる哀願にドラコは少女の頬へと指をすべらせていた。

この距離に『君』がいる。得られるはずのなかった人がいる。ここまで育ちきってしまったのに——今さら、死なんかに彼との絆を譲れるものか。

「戦というのは勇敢なものが死に、臆病者が生き残る。そして僕は臆病者だ。父も母も臆病だった。失うことに対して臆病でいた。だから生き残れた。生きるために足掻けた」

「僕は何がなんでも、何を使っても生き残る。死ぬ気で『君』を守るなんてバカげたことはしない。どんな卑劣な技を使っても生き延びて——君のところへ帰ってくる。だから、君も何をしてでも生き残

れ」

「……さすが、僕の卑怯者だ」
マルフォイ

マリアはドラコの腕の中でくしやりと笑った。

「——ドラコ?」

「……いや」

どこに避難しようか——本来ならば介入できるはずもない三人の相談を片耳で聞いていたドラコは、腕を取ったハリーの力強さにハツとした。いつの間にか、この手よりも少女のやわらかさが馴染んでいた。

「数日ならマグルのホテルでもかまわないけど……それじゃあすぐに足がつくわ。やっぱりここは、」

「グリモールド・プレイス」

三人分の目がドラコ・マルフォイへと向く。

「君たちの家、なんてどうだ?」

アイズグレーをまつすぐに寄越されたハリーは、逃げるようにハーマイオニーへと顔を向けた。

「ダメよ、ドラコ。あそこにはスネイプだって入れるの」

「入れないようにすればいい。ブラックの家は忠誠の術で守られているんだらう? つまりは警戒すべきはスネイプ教授、」

「教授だつて?」

「……失礼。君たちの天敵、セブルス・スネイプのみとなる。始終警戒しなければならぬ放浪旅よりもよほど落ち着けると思うが?」

「でも、どうやって」

「それは——着いてから考えればいい」

ドラコの無責任な提案の意味を三人は屋敷を前にして理解した。

「お待ちしております、ハリー・ポッター！」

「ドビー？」

愉快で小さな魔法使いの隣人——ドビーがご機嫌に屋敷を掃除していた。

「君、どうして」

「マリア・ポッターよりドビーはお願いをされました。クリーチャーはホグワーツに残るので大切なお屋敷をドビーに任せたいと。ハリー・ポッターのともだちのドビーに！」

小柄な身体で胸を張ったドビーはドラコを見る。

「なぜなら、ドビーは自由な屋敷しもべ妖精だからです！」

元々の召し使いにはつきりと挑まれたドラコは、なんだか裏でほくそ笑むマリアを見た気がして肩をすくめた。……暗躍の名前が似合うようになってきたじゃないか。

「そうね。クリーチャーでは所有権——この表現は好きではないのだけれど——がシリウスからハリーへ移ったとはいえ、元ブラック家のベラトリックスに抗えるかわからないわ。妥当ね。……あまり、あの口ケットを見せたいとも思わないし。ねえ、ドビー、屋敷の住所を教えたいのはマリアなのよね。それから誰かこの屋敷に来た人はいる？ たたとえば——スネイプとか」

「いいえ。ドビーはホグワーツの夏休みからお屋敷の掃除をしていましたが、ずっとひとりでした。マリア・ポッターがハリー・ポッター

とそのお友達以外は何人も入れてはならないと言ったからです」

記憶の最後にある姿のままの居間まで案内されたハリーはぐっと切なくなつた。もうここに——親と慕つたシリウスはいないのだ。マリアだつて帰つてこない。

ドラコははじめて踏み入れるブラック本邸の様子を眺めていた。

「ドビーはがんばりました。このお屋敷はほこりだらけで、ドビーがびつくりして声を上げるとブラック夫人もさわぎました。なのでドビーはあわてて扉をふさぎました」

「ああ……」

シリウスが物理的に封じたとされる、一度だけ見たブラック夫人の形相と絶叫を思い出してハリーはげんなりとした。たしかにあれは強烈だ。ドビーがウキウキと茶を用意する中、四人で席につく。話題は当然、残す分霊箱についてだ。ドラコへの説明は当たり前前にはぶかれた。

「僕らが探すべきはハッフルパフのカップだ。レイブンクロウの髪飾りは——」

緑の目がドラコを見る。

「……その時がきたら、渡してくれると思うから」
「だれが？」

「さあ。ともかく、ハッフルパフのカップのありかと、分霊箱を壊すための武器をどうにかしなくちゃいけない。日記のときにはグリフィンドールの剣を使ったけど、剣はここにはない」

「ダンブルドアの遺言で正式にハリーの財産になつたつてのに……ケチくさい魔法省のせいだ」

「今はその文句を言つてもしかたないわ。スクリムジョールは『あの

人』に抗って死んでしまったのだから。こうするのはどう？ ハッフ
ルパフのカップを手に入れたら、どうにかしてホグワーツへ戻り分霊
箱の三つをグリフィンドールの剣で壊すの」
「で、そのグリフィンドールの剣をどうやって取り出すんだ？ どう
せ校長室にはスネイプが——」

ロンの言葉は不自然に切り上げられた。ハリーが突如、うめきなが
ら机へと突っ伏したからだ。額の傷をおさえて悶絶していた。ちよ
うど、盆にティーセットを用意して居間に戻ったドビーがおどろいて
ひっくり返った。

ハリーの傷とヴォルデモートの感情が繋がるさまをドラコははじ
めて目にした。——壮絶だ。

「あいつ——怒ってる」

「ハリー！ あなた、その繋がりは危険だって——しっかりと心を閉
じなければ！」

「あつちの自制がきかなくなってるんだ。どこだ——？ 杖を探して
る——？ あいつと対峙したときに僕の杖がおかしな動きをしたの
に関係してるのか？」

「ハリー、ダメ！」

ハーマイオニーが金切り声を上げる。それがさらにハリーの頭を
攻撃して彼を苛んでいるようだった。

「落ち着けよ、ハーマイオニー。なあ、ハリー……それ、僕の家じゃな
いよな？ 隠れ穴が見えたりは？」

「ないよ。とにかくあいつの怒りがすさまじくて——」

「ロン、この状態のハリーを利用しようとしなさい。これは、ダメなの
！ 向こうが嘘の光景を見せてハリーを騙すことだってできるのよ。
なんのための閉心術だっていうの？」

「僕には閉心術なんかできないんだ！ 少しは声のトーンを抑えてく

れよ。君の声は響く」

ドラコはすっかり阿鼻叫喚の三人組を見て引いていた。否、思わず口に出していた。

「相当、苦手だったんだな……」

「ああ!？」

「いや、なんでも」

ハリーの剣幕に元来の気の弱さから一瞬で口を閉じる。……なにが『とつくに完璧』だ、あいつめ。実はめちやくちや苦手なんじゃないか。……強がってたな。

「ハリー・ポッターは病気だ！ 大変だ！」

盆ごと落としてしまったティーセットを指のひと振りで片付けて、ドビーが廊下へとすっ飛んでいく。新しい茶を用意しに行ったのかもしれない。その間に再びハーマイオニーから悲鳴が上がり、ハリーとドラコは無意識に杖を抜いていた。

イタチと牡鹿の守護霊が中央に立っていた。

「家族は無事。返事を寄越すな。我々は見張られている」——と、イタチが。

「僕の吸血鬼はちゃんとそこにいる？ 三人とついでの一人在揃って、ることを信じてる。返事はいらぬ。ああ、僕は無事です」——マリアの牡鹿だった。

へなへたとハーマイオニーが腰を抜かす。咄嗟に駆け寄って支えたロンにドラコはほんの少し見直した。

「みんな——みんな、無事なのね——マリアも。ロン、あなたの家族は無事なんだわ」

「ああ……」

誰もが安堵の息をついた。牡鹿が四人を包むようにぐるりと回って消えた。

ダンブルドアを喪ったホグワーツが新学期を迎えるまであとひと月。——四人と一人のしもべ妖精の生活が始まった。

ほとんど軟禁状態のまま無意味にひと月が過ぎようとしていた。三人は焦っていた。ハツフルパフのカップは一体どこに隠されているのだろうか――

その答えをドラコは知っていたが――グリーンゴッツ破りの話をウィーズリーは何度だって酒の席で語ったものだ。そのたびに妻やハリーに誇張しすぎるなど叱られていた――素知らぬ顔で秘した。マリアが――『ハリー』はこの旅に手を入れられることを望まなかったのだから。

つくづく、ダンブルドアの思想をよく受け継いでいる。

そんなもどかしい日々の中、ルーピンが屋敷をおとずれた。

「ハリー、君は指名手配されている」

ルーピンの持ち寄った日刊予言者新聞は『アルバス・ダンブルドアの死にまつわる疑惑』と不穏な見出しが占めていた。いわく、ダンブルドア殺害現場からハリー・ポッターの逃走を見たものがあること。そしてハリー・ポッターを止めようとしたと思われる少女（知る人ぞ知るマリア・ポッターその人だ。）自身の血の繋がった兄弟すらも問答無用に切り刻んだ彼の残虐性を見れば――

続く内容にハリーは新聞を散り散りまで破りたい衝動にたえねばならなかった。マリアに闇の魔術を持って傷をつけた事実はいつまでもハリーの疵になった。

注目すべき箇所はそれにとどまらない。『マグル生まれ登録』に『学齢児童の強制入学・登校』――着実にヴォルデモートの支配が進んでいる証だった。

「私は君たちの力になりたい」

これ以上の同行者を増やすべきか悩む親友たちを置いて、ハリーはルーピンの態度に引つ掛かりを覚えた。

「トンクスはどうするの？ トンクスは、あなたとは——？」
「そうだよ。彼女は今どこに？ どうして一緒にいないの？」
「……………彼女は妊娠している」

ハーマイオニーとロンが歓喜の声を上げた。暗いニュースばかりの日々にそれは間違いない幸福な報せだった。だがしかし、ハリーはむしろ確信を持った。

「——僕たちを理由にして、逃げたいのか。妻と子供から」

サツとルーピンのくたびれた顔に赤みが走る。それから白くなる。ハリーの挑発がルーピンの隠された本音へ突き刺さる。

「トンクスは大丈夫だ。実家にいる。子供だって大丈夫なんだ」
「どうして言い切れるんですか。僕なら——僕は、両親に側にいてほしいと思う！」

「——マリアが大丈夫だと言ったんだ！」

怒りにかられたハリーが立ち上がる。臆病な男の無責任に食って掛かるうとする。——前に、彼女の拳が二人のあいだへと叩きつけられた。

「マリアだって間違えるわ！」

「ハーマイオニー……………」

「あの子を神聖視しないで。あの子にあなたたちの理想を押し付けな
いで。彼女はたしかに『魔法使い』だけど——人間よ！」

ハーマイオニーは思い出していた。殺人鬼と勘違いしたままシリ

ウスを追い詰めた夜、ジェームズが死ぬとは思わなかったとのたまつた哀れな男を。

誓ったはずだ。ハリーは英雄じゃない。そしてマリアも——全知全能なんかではないのだ。

「わたしはあの子と同室だったから知ってるわ。寝ているとき、彼女は泣くのよ。セドリックを呼ぶの。シリウスを、ダンブルドアの名前を呟くの。そこにあなたまで入ろうというの？」

「しかしマリアは——」

ルーピンはハリーを見た。ルーピンだけが知っている真実がそこにあつた。

「——自分が恥に思うような父親はいないほうがいい」

とうとう、ハリーがわからずやの父の肩を乱暴に掴もうとして——
——声は氷のように冷えていた。

「親のせいでつまはじきにされる子供は哀れだろうな」

四人の視線がひとりへと集まる。——ドラコ・マルフォイ。

「つらいだろう。どれほど本人が優しい子でも、かわいい子でも——清らかな心であつても、親の汚名のせいで後ろ指を指され続ける。嗤われ、蔑まれる。子供の世界は大人が思っている以上に理不尽で、そして大人には手の届かない場所にある。それでも——子は、親を見ているぞ」

どうしてか、ルーピンはドラコの言葉こそがこの場の誰よりも自分に寄り添っているように思えた。

「子は親の背を見て——ときに愛してしまうのだ」

ドラコ・マルフォイには理解できるのだ。出自を疑われた我が子の手を掴もうともがいてきたのだから。

彼の恐怖の名前を知っている。愛ゆえ臆病になる心を知っている。二人は臆病者だった。

「そしてそれをマリアは知っているし——『私』も知っている」

ルーピンはまさしく混乱にあった。わかったような口ぶりの青年は、だがしかし汚名になるほどの欠陥を両親が抱えているようには——
——気付いた。

「まさか……………君も？」

マリア・ポッターの正体。まるで反対の立場にあるのにマリアの側に居続けた少年。理解し合っていた二人。それは——そこにあった秘密は。

「ならば、君のボガートは——あれは——彼は——」

親友の後ろ姿のほんとうの名前を、知った気がした。

「リーマス・ルーピン、この旅にあなたを連れてはゆけない。なぜならそれを——『彼』が許さないからだ」

ルーピンは立ち上がっていた。展開に追い付けず目を白黒とさせるロンの側を通って屋敷を後にする。言葉はなかった。ドビーだけがお客様はどうされたので？　ときよとりとしていた。

残された三人は異分子の仲間を見る。ドラコはとつくにソファへと着き直してティーカップをかたむけていた。

「——まるでマリアみたいだ」

ハリーの呟きには寂寥がにじんでいた。

豊かな茶色の髪をまとめて、顔付きだけは上の姉に似ながらも穏やかさが件の悪女とは別人なのだと思わせる婦人はそつとささやいた。

「ほんとうに会っていかないの？ あの子は——ドーラはあなたをいたく心配しているわ。無事ということは大抵の人に知れてるけれど……顔だけでも見せていかない？」

「ありがとうございます、アンドロメダさん。だけど、僕の居場所は誰にも知られたくないんだ。そのためのここだ」

屋敷だ。家主の方針から、質素でありながらも元々の豪奢っぷりを隠せずにいる立派な屋敷だった。

アンドロメダ・ブラックが実家での居場所を失った際に親戚のアルファードより支援された新居だ。テッド・トンクスと結ばれた頃より触れずにあったブラックの残り香だ。そして今は——マリア・ポッターの隠れ家だ。

カレンダーを見る。九月を過ぎている。強制的に子供たちを集めた学校という名の檻が動き出す。ならば——僕も動く時だ。

「ホグワーツへ行ってきます。ほんとうに、ここまで協力してくださいありがとうございます。そして、これからも。トンクスに伝えておいてください。ルーピン先生と仲良く——元気な男の子を生んでほしいと」

「マリア……」

アンドロメダの切なげな視線を背にして、取っ手へと手をかける。必要なのは忍びの地図と、コイン。そして『僕』自身——僕のやり方で、僕は運命に足掻く。

「いってきます。——さようなら」

アンドロメダはどれほど勇ましくとも華奢に見える少女の背を見送ってから、はて、と頬に手をやった。

「あの子、どうしてドーラの子が男の子だなんて思ったのかしら。まだ生まれてもいないのに」

コインの熱を受け取った青少年たちは、授業中にも関わらず飛び上がった。さいわいにして死喰い人のカロー兄妹の授業は始まっていなかったために、従来の教師陣は素知らぬふりをした。カロー兄妹を除いた教師たちは、今や完璧に生徒の味方だった。

「ネビル」

「わかってる」

シエーマスとネビルが意味深なアイコンタクトを交わす。コインには『必要の部屋に集合。カロー兄妹は入れず、ダンブルドアを心から尊敬する者のみが入れる部屋』とあった。DAの誰かが動いたのだ。

シエーマスは意外に思っていた。本格的に動き出すのは、カリスマ性を見せ始めたネビルだとばかりに思っていたのに。一体誰だろう、しびれを切らしたジニーか？ それともまさかのルーナ？

——その答えに、コインの連絡を受け集ったDAメンバーたちは一

人残らずと叫んだ。

「二——マリア！」

「ワオ、熱烈だ。えーと——元気？」

当たり前の顔をして鍋の前にあぐらをかいていた赤毛のその人は、くふくふと愉快そうに笑った。

ああ、よかった——みんな元気そうだ。どうにか間に合ったらしい。

「君、なんで——ハリーと一緒にじゃないのかい？」

「置いていかれてしまったんだ。かわいそうな僕をなぐさめてくれる？」

「ふざけてる場合じゃないよ！ ホグワーツは今、かなり危険な状態なんだ。特に——君たちにとっては」

詰め寄るネビルにうんうんとうなずく。——だから、ここにいるんだ。

「安心して。僕はこの部屋から出ない。ここから君たちを支援する。——おとなしくするつもりなんてなかっただろ？」

期待の目でネビルを見上げれば、ネビルはため息をついてからふにやりとやわらかく笑った。一年生の頃から見続けた心優しい少年の笑みだ。

「かなわないな、マリアには。ハリーだってそうだけど、君たちってほんとう、破天荒だ。でも、食事なんかはどうするの？ それに君……なにを作ってるの？」

鍋の中身は魔法薬だ。かたわらには使いふるされた上級魔法薬学

の教科書があつた。——プリンスの教科書だ。

「傷薬だよ。マートラップ触手液もいいけど、これは痛みを取り除いて、かつ傷の痕を数日にかけて残してくれる。……僕がアンブリッジから罰則を受けていた頃に役立つものだ」

スネイプ先生と一緒に特訓して作った薬だ。ほんとうに——ひどいひどい。あなたの跡ばかりが僕の周りを取り巻いている。

「これを君たちに持つていてほしいんだ。カロリーのやつらが素直に君たちを医務室へ向かわせてくれるとは思えないし、傷つく子たちを一人でも多く救つてほしい。材料なんかは——申し訳ないけどスネイプの貯蔵からくすねさせてもらう予定だからさ」

「……君が？」

「いいや——彼が」

僕が手のひらを指した先には老いっつも背筋をシャンと伸ばした老しもべ妖精が食事を両手に立っていた。

「みなさま、ご安心くださいませ。マリアお嬢様のお世話はクリーチャーがうけたまわります」

「お嬢様はやめてほしいって言ってるんだけど……」

「お嬢様はお嬢様でございます」

姫の次に似合わないマリア・ポッターへの呼称にシェーマスが吹き出す。笑いが伝染していく。闇の脅威によつてむしばまれていた子供たちの心がほぐされていく。

「一緒に戦わせてくれる？　ネビル。みんな。……ジニー」

当然だと次々に頼もしい顔がうなづく中、最愛の少女はくちびるを

横に引き結んでうつむいていた。

「……心配したわ」

「ごめん。心配かけた」

「ハリーと一緒にいると思ってた」

「そうしたかったけど、僕はホグワーツを選んだ」

「ハリーは無事なのね」

「ぜったいに。ロンとハーマイオニーがそばにいるんだ。……あと、

ドラコも。最強の布陣だろ？」

「……心配したわ」

切々とくり返される。周囲が気を遣って彼女への道を空ける。ネビルがそら見ろ、とばかりにちよつとだけニンマリする。——そして少女は飛び込んだ。

「バカ——心配したんだから！ あなたを心配してたんだから！」

「ジニー……」

腕の中にあるぬくもりにぐつと幸福感が押し寄せた。その人が愛しくてたまらなかった。豊かな赤毛に指を差し入れて、彼女の香りを胸いっぱい吸い込む。

「ありがとう、ジニー。——愛してる」

彼のにおいとはちがうのだと、くすぐったい心の奥底で噛み締めた。

みんなが授業へ出ているあいだ——それこそがマリア・ポッターの挑戦の時間だ。本ならばいくらでも持ち込んだ。積み上がったガラクタと誰かの宝物わすれものを隅へと押しやって、対象の前に立つ。

本音を云えば我らが頭脳、ハーマイオニーの手を借りたくて仕方ない。彼女ご自慢の知識を大いに振るってほしいし、当たり前前の顔をしてそれに頼りたい。あの得意気にツンとそらした顎で見ててごらんなさいと笑ってほしい。こんなにも簡単なことなのだと軽々と杖を振ってほしい。けれど——僕はマリアだから。これはひとりですげなければならない。

「……やっぱり、杖なしじゃ厳しいか」

今日もうんともすんともいわない扉と床を眺めて嘆息する。ホグワーツに戻って早三ヶ月——成果はいまだあらわれそうにない。それでも、諦めるわけにはいかない。

「マリアお嬢様」

昼食を手に控えていたクリーチャーへと礼と共に笑いかける。

「今日は鴨のサンドウィッチか。——うん、おいしい。さすがクリーチャーだ」

「身にあまるお言葉です。それから、魔法薬材の補給もおこないました」

「ああ、そうだった。そろそろ足りなくなると思ってたんだ。いつもありがとう、助かるよ。……スネイプの備蓄も空になる頃なんじゃないかい？」

冗談混じりにうかがえば、クリーチャーは真面目くさった顔のままシワだらけの口を引き結んだ。

「——いいえ。セブルス・スネイプ教授は常に一定の数まですべての材料をそろえていらっしやいます」

「……………」

几帳面な彼らしい、と肩をすくめたい気持ちになった。恩恵に与らせてもらってる僕がいえる立場ではないのだけど——もつと肩の力を抜けばいいのに。……なんて、死の前線で主人の目を欺き続ける男には無理な相談か。

「マリアお嬢様、お時間です」

「え？——あー！」

クリーチャーの手によってかかげられた地図の上に、動く点を視認し立ち上がる。ジニー・ウィーズリーが八階への階段を上がるところだった。——彼女がたどり着く前に部屋の変更をおこなわなければ。

廊下に誰もいないことを確かめてから部屋を出てドアノブへと手をかけ直す。次に開かれるのはD A本部の教室だ。

「マリア、ちょっと聞きたいんだけど」

豊かな赤毛を肩から払ったジニーは、なに食わぬ顔で室内に居座る僕へと挨拶もなあなあに詰め寄った。茶色い瞳がチラリとクリーチャーを見る。

「ブラックの家にクリーチャー以外の屋敷しもべ妖精がいるの？ それを、あなたが誘った？」

「え？ ……ああ！ そうだよ。君もよく知る子だ」

「クリーチャーは認めておりません。あんな若造に大切なお屋敷を任

せるだなんて」

僕の命令だからどうか汲んでくれているクリーチャーがぼそりとぼやく。それに苦笑する。確かにドビーはおつちよこちよいでクリーチャーから見ればまだほんの若造だろうけど……ハリーの友達だからね。ハーマイオニーだって彼のことは気に入っている。

「そう……わかったわ。パパにそう伝えておく」

「アーサーおじさんに？」

「そうよ。パパがマクゴナガルにたずねたの。だれかマリアに確認を取れる人間はいないかって。それでマクゴナガルからあたしに話が回ってきたってわけ」

なるほど、とうなずく。突然なんの話かと思えば——騎士団の誰かがブラックの館へ向かったのだろう。可能性として高いのはルーピン先生だ。職を持つ人たちは四六時中、監視の中で暮らしているようなものだし、ホグワーツ勤務の先生方なんて論外。ある意味で今もつとも身軽なのは無職のリーマス・ルーピンというわけだ。とんだ皮肉である。

ドビーを見た（おそらく）ルーピン先生がアーサーおじさんへと彼の存在を伝えたのだろう。

「それから……これは、ちよつとだけ——あたし、マリアに教えたくないわ。でも、それって卑怯なものね」

ためらう素振りを咳払いでにごしたジニーは、きれいな茶色の瞳で僕を見上げた。

「あなたが気にしていたあのひと——アステリア・グリーングラス——

——ホグワーツにいないわよ」

血の気が引いた。

「姉の……ええと、名前は覚えてないけど、とにかく姉のほうはいるわ。けど、妹のアステリアの姿を見た人がいないらしいの。スリザリン寮の中でも」

「……誰が、そう?」

「パンジー・パーキンソン。廊下であいつに腕をつかまれたとき、ぜつたいに喧嘩を売りにきたんだと思ったわ。このあたしをたかだか伝言役にするだなんて……高くつくんだから」

照れ隠しに不遜ぶるジニーをからかうことも忘れて考えにふける。

ダフネは登校しているのに、アステリアは除外だって——? マグル生まれ以外の魔法族の子は、みなホグワーツへ集うことをヴォルデモート本人が義務化したというのに。配下にした——状況から見るとそう断定していいはずだ——グリーングラスの適齢の子供をそれに従わせないのはなぜだ? そして、どうしてアステリアなんだ?

ダフネとアステリアならば、はつきり言って価値が高いのはダフネのほうのはず。だというのに本人すらも欠陥品と卑下するあの子をなぜ——ヴォルデモートの陣営は重要視している? 『前回』ではこんな扱いはされていなかった。セオドルだってアステリア本人への情は無いように見えた。

「……マリア、むずかしい顔だわ」

「あつ……ごめん、君といるのにつまらない顔をして」

「いいえ、いいの。わかってたもの。わかってて……あなたに伝えなくちゃって思ってたんだもの」

指先を少女の手に取られる。引きこもって薬品ばかり混ぜている僕の手とはちがう。今このときにだって外で戦っている誇り高い手だ。体温を馴染ませ合う。

「遠くにいかないでね——まだ」

細い声だった。

「ああ。いかないよ」

——まだ。

走っていた。森の中だ。霧は深く冷たく肺を内から凍らせるようだった。

「どうして」

ようやく立ち止まったハリーが、逃走の際から掴み取ったリュックを足元に落として肩で息をする。

「どうして——バレたんだ!?!」

屋敷に現れた彼女はまっすぐにハリーへと向かった。手を伸ばした。散々、修羅場をくぐり抜けてきたハリーでなければそれに反応できなかつただろう。その点に置いては、相手がハリーひとりに狙いを定めていたことを幸運とすべきなのかもしれない。——そして、ドビーがいたことだ。

あの小さな手に掴まれていたなら——どこかへ共にさらわれていた。

「裏切りだわ。誰かがグリモールド・プレイスの正確な住所をもらしたのよ。守人のダンブルドアが亡くなった今、住所を知るわたしたち

全員が守人なんだから」

「一人しかないよ。マンダングスの野郎さ」

「もしくはスネイプだね」

吐き捨てるロンに合わせて、ハーマイオニーと共に周囲へと保護魔法をかけていたハリーが憎々しげに名を呟く。緑の目には憎しみがちらついていた。

今さらになつてなぜ——スネイプならばダンブルドアを殺した時点で情報を買っていてもおかしくないのに。

「ともかく、これで本拠地を失ったわ。あの子は住所を明かされただけで守人ではないけれど——わたしたちの知らない魔法を知っているかもしれない。会わないにこしたことはないんだから」

「これからは野宿旅よ。分霊箱はぜったいになくさないよう首からかけておくことにしましょう。……ああ、急いでだから保存食しかないわ！」

ハーマイオニーがバッグへと肩まで腕を突っ込みながら嘆いた。ロンが保存食ってどんなの？　なんてのんきに尋ねていた。

「いいさ。いい機会だと思おう。はっきり言つて僕たち、屋根の下で平和ボケしてぬくぬくしかけてた。ここからは移動しながらカップの情報を集めよう」

ハーマイオニーのビーズバッグからテントをこしらえたハリーが、チラリとその人を見上げる。ハーマイオニーも見る。——野宿という言葉がこれほど似合わない顔があるうか。

「堪えられる？　——ドラコ」

薄気味悪そうに禁じられた森に似た森を見回していたドラコは、ハ

リーからの問いかけにどうかといつも通りに笑った。

「――想定内だ」

こればかりは残す三人にも強がりだと悟れた。だって彼つて――
――実は臆病なんだもの。

屋敷しもべ妖精の厚意に頼りきった至れり尽くせりの生活から一変、四人の放浪旅が始まった。分霊箱の心を荒ませる副作用対策に保管役を四人で交代しつつも、若い三人の鬱憤は静かに着実に積み重なっていった。ヴォルデモートが育った孤児院の跡地へおもむいてみたり、逃走中の誰かの噂を盗み聞きしてみたり――それらしく調査してもこれといった成果は得られない。そんな無為な時間は四人を失望させ憔悴させた。

はじめに限界がきたのはロンだ。ご飯が美味しくない、まともに休めもしないと泣き言をもらし始めた。分霊箱の影響なのだと理解しつつも彼の発言は三人の仲を不穏にした。

「はつきり言つて、ハリー、君がこれほど無計画だなんて思わなかった」

「僕ははじめに言つたはずだ。ダンブルドアが残してくれたものはすべて君たちに話したし、この旅は――」

「そのダンブルドアは君にこんなにも隠し事をしてたじゃないか。いか、今、我慢するのはかまわない。けれど人間つてのは、先が見えない我慢はできないものなんだ」

「それは君だけだろ。僕はいつだって先の見えない恐怖を我慢してきたし、先が見えずとも戦つてきた」

「オウそうかい、さすがは選ばれしもの様はおっしゃることもご崇高だ。平凡の僕にはとても理解できないね」

「いい加減に――」

「二人ともやめて！ 仲間割れなんて、今、一番あつてはならないことだわ！」

ヒートアップする親友二人に泣き出しそうなハーマイオニーが決死の仲裁をこころみるが、それは哀れにも火に油を注ぐ形でしかなかった。

「ハーマイオニーだつて思ってるんだらう？　ここにるのが僕のような役立たずで残念だつて——あいつなら良かったのにつて」

「なんのこと……」

「——マリアだよ！」

ハツと彼女が目を見張る。それを、劣等感と付き合い続けてきた男は肯定と捉えた。

「マリアならハリーのするめちやくちやを笑いながら受け止めただろうさ。なんたつて我らがマリアさまだ。僕より度胸があるし、君みたいに繊細でもない。……まったく、なんだつて僕がここにいるんだか」

「なら、家へ帰れよ。ママの手料理に泣きながら飛び付けばいいだろ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「ダメ、ロン！　戻つて！」

首から下げていたロケットをハリーへと投げ付けて、ロンはハーマイオニーの張った障壁の向こうへ歩き出す。ハリーは止めず、あいだであたふたするハーマイオニーだけが藁にもすがる思いでドラコを見た。

「——今回は、ロンに付くでしょう」

「ドラコ？」

「あいつが気にするのはあちらだろうからな」

最低限の荷物を持ってドラコまでもが障壁を抜けてしまう。そう

なれば、目眩ましをかけているハリーとハーマイオニーの姿は向こうからは完璧に見えなくなる。

ハーマイオニーは茫然とするしかなかった。ただ、二人の背中を言葉なく見送るしかできなかった。決別をうながした分霊箱が囓うようにハリーの手の中で脈打った。

同情かよ。ただひとつだけ追ってきた足音へロンは振り向きもせずごぼした。素知らぬ顔で隣へと並んだドラコは、少し見上げる位置にあるそばかすに堪えきれず嫌味に笑っていた。

「まさか。はつきり言つて、君の癩癩なんて程度が知れてる。——僕のほうはずつとひどい」

「ハア?」

いつだつてクールぶつてマリアと一緒に一步引いた顔をして、マリアの悪巧み仲間であることを隠さず牽制してくる嫌なやつ。ロンにとってのドラコ・マルフォイとはそんな男だ。マリアと同じで、ハリーとはベクトルのちがうなんだからちよつぴり特別な男だった。平凡な自分とはまるでちがう——ロンがドラコを仲間だと認めつつも素直になれずにいたのは、ただ単純な僻みからだだった。

それを——なんだつて?」

「僕はとある人間にもつと最低な言葉をぶつけてきたし、我ながら情けなくなるような嫌がらせばかりを繰り返した。それ自体を後悔するような殊勝な性格はしていないが——今ならもつと上手くやれる」

「悪い顔だ」

「悪い男だからな」

思いの外、軽口が通じてしまい、ロンは面食らった。おかしな話だが、この人形じみた綺麗な顔の男が、実は自分と同じ赤い血の通う人間なのだと今さらになつて気付いた。

ロンの視線を感じながらも、ドラコは前方を見据えたまま続ける。

「せっかく手を差し伸べてやったというのに、無視をしたんだ、あいつ

は。この僕が心を砕いてやったのに、格下の二人を取った。ムカつくだろう?」

「それで……その誰かへの嫌がらせに繋がるのか?」

「ああ。たっぷり苛めてやった。……やり返されたがな」

不思議と、ロンにはドラコの表情が今までにないほど穏やかなものに見えた。——たぶん、マリアの前ではこの顔をするんだ。

「今ならこう言えるし、あの時どうすべきだったかもわかる。——僕の手を取らないバカには、僕からその手を掴みに行けばいいんだ」
「……………」

先には霧深い木々しかないというのに、そこにいない人を見つめるドラコの瞳に、ロンはどこことなく居心地の悪さを感じて目をそらした。けれどもそれは、分霊箱に荒らされた心の延長ではなかった。もつと青くさい——子供っぽい感情だ。

「…………ドラコって、案外変なやつだ。僕のこと好きじゃないくせに、なんでこつちを選ぶんだよ」

ロンの葛藤なんて知るよしもないドラコは、なんでもないことのように答えるのだ。

「ただの嫌がらせさ」

完成しない術とアステリアについて悩む日々の中、思わぬ事態が僕を待ち構えていた。

「アズー?」

ブラック邸と四人のある程度の世話を任せていた小さな友人が、命からがらといった様子で目の前に現れたのだ。もはや敵中となったホグワーツにひそむ、僕の前に。

「どうしてここに？ なにかあったのかい？ さあ、落ち着いて——」
「マリア・ポッター、ドビーめはマリア・ポッターとの約束を果たせませんでした。しかしドビーは自由なしもベ妖精なので自分を罰さないのです！」

「ああ、もちろんだ。僕は命令でなく友達に『お願い』をしたんだもの。うなずくのも拒否をするのも君の自由なんだよ」

ゼイゼイと息をつくドビーをクッションの上へと座らせる。目線を投げれば、それだけでクリーチャーは心得たとばかりに簡易キツチンへと飛んだ。気に入らずとも水の一杯くらいは与えてやってほしいと、次には僕がお願いすることをわかっていたからだ。そこには仕えるものとしてのプライドが見えた。

彼がいなければ僕の敵陣籠城は形を成さなかつただろう。小さな友人たちの協力があるから、今の僕が在る。

「それで、ドビー、いったいなになが」

「ドビーはお屋敷を守れませんでした。ハリー・ポッターたちは行ってしまった……ですからドビーは追いかけてきました。そして突き止めました。ウインキーは——」

待つて。まくし立てるドビーに、意図せず声はひそめられた。

「ウインキー？」

——正直に言って、僕はその名を忘れきっていた。だって、そうだ。あれから厨房へ向かおうとも彼女の姿を見ること

はなくて——用があればなんだってクリーチャーに任せだし、ドビーだって彼女の名を出すことは——つまり、それは。

「……ウインキーは、ホグワーツにいない？」

「？ ええ、とつくに。ウインキーは新しいご主人様を得てホグワーツを去りました。そしてドビーはそれが誰かを判明させ、マリア・ポッターにお教えしよう」と

「待って、待ってくれ——どうして今、ウインキーなんだ？」

そしてドビーは告げる。僕は知ることになる。とんでもない間違いとすれ違いが惨事を引き起こしたことに。

「ウインキーがブラックのお屋敷に侵入したのです。ウインキーのご主人様の命を受けて、ハリー・ポッターを捕らえようとしたのです。ウインキーのご主人様は——ダフネ・グリーングラスです」

三年前のあの日から——僕は決定的に間違えた。

「誰が——いや、そうか——ドビーじゃなかったんだ」

急速に不可解だった線が繋がっていく。アーサーおじさんが確かめたクリーチャー以外のブラック家の屋敷しもべ妖精とは、ドビーではなくウインキーのことだったのだ。思えば、アーサーおじさんはドビーと面識がない。無関係のドビーがブラック邸を預かるよりも、名前を知っていてホグワーツに雇われるまでの不幸な経歴も見届けているウインキーが僕を頼ったとするほうがずっとずっと自然だったのだ。

そしてウインキーはホグワーツに居場所を見出だせていなかった。自由を謳歌しお給金を正当な権利としていたただこうとするドビーの在り方を、クリーチャー同様、屋敷しもべ妖精として恥ずべき精神であると軽蔑していた。彼女の幸せは『仕える』ことだった。

かつて心身から奉仕した一家の全員を喪い、傷心中の彼女にダフネ・グリーンングラス——否、セオドル・ノットが目をつけたのだとしたら？ 屋敷しもべ妖精は人間の倫理では動かない——己にやさしいものの言葉・思想を受け入れる。それはクリーチャーが証明しているじゃないか。

話を聞くべきだった。そうするはずだった。僕はそう、彼女と約束をした。話をしよう——と。

それなのに、目先の問題にとらわれて完璧に後回しにして——そして、忘れた。今このとき、ドビーから名を聞くまで存在すら思い出しはしなかった！

僕の薄情が生んだ結果だった。

「ああ、クソッ——」

頭を抱える。深呼吸をする。ハーマイオニーならこんな失敗は犯さなかっただろうに。ハーマイオニーほどの博愛の精神が僕には根っからなかった。

だから、しかたない。今さら贖罪のしようもない。グリーンングラスがなにをたくらんでいるのか——それが今、僕がもつとも意識を向けるべき問題なのだから。

僕には責任がある。ドラコの大切な人を守る責任があるのだ。

「……ドビー」

クリーチャーから熱々のマグカップを受け取っていたドビーは、テニスボールみたいな目をクルリと僕へ向けた。

「助けてほしい」

ドビーはニッコリと笑った。

「ドビーは自由なしもべ妖精です。ですから、自分の意思でおともだちを助けます！」

友人ではあるものの、距離感をはかり損ねた男二人のなんともしよっぱい放浪旅が始まった。否応なしに共にいる結果、自然と心の距離が縮まるだとかそんな都合のいい青春作用が起こるはずもなく、あくまでもロンとドラコの旅は気まずいものだった。このままクリスマスを迎えるだなんて、ロンは心の底から願い下げだった。ただただ、彼は後悔でいっぱいだった。

「あのさ」

ハーマイオニーほどでないにしろ、ハーマイオニーの次に魔法が得意に見えるドラコへと保護術を任せながら呟く。

「クリスマスくらいはあたたかい場所で過ごしたいと思わないか」

ハーマイオニーの真似事をして周囲に最低限の障壁を張り終えたドラコは、まったく気のない声で答えた。

「マッチでも擦るのか」

「マッチ？」

「いや——これはマグルの童話だった」

ロンは知れば知るほどドラコ・マルフォイという男を意外に思った。

「お前——マグルのこととかわかるんだ。興味ないと思ってた。ほら——純血だし」

「お言葉をそのまま返そうか。血を裏切る純血のウィーズリー」
「そういうところだ。僕たちみたいな人間を完全にバカにしてる」

否定せずクツクツ笑う嫌味っぽい男に、ロンは以前ほどのムカつきを覚えない自分に妙に失望した気持ちになりながら肩をすくめた。手放しに友情を育んでバタービールで乾杯する夜を過ごすだなんて、よりによってこの男とそんな関係は今さら不可能だけど——慣れってやつはいつのまにか忍び寄っては、心の緊張を勝手にほぐしてしまうお節介ものなのだ。ハーマイオニーぐらいお節介だ。

「——事実、マグルそのものに興味はない」

続いたドラコの言葉に、フーン、とそばかすの散る鼻が動く。

「ただ、鼻屑にしてる人間がそれを鼻屑にしていれば——目につくだろう?」

彼がなにを言いたいのか。ロンにはわかる気がした。ハーマイオニーを愛する純血のロンだからこそ、理解できる含みがあった。

「それで、話は戻るんだけど」

これ以上、このいけすかない男を相手に気恥ずかしい思いをするのはゴメンだ。ロンが強引に話題を戻すのに、ドラコは知った顔でうなずいてやる。

「クリスマスディナーをご馳走してくれそうな家にアテがあつたりするんだけど——パーティーに引つ張りだこなお坊つちゃんとしてはいらぬ招待かな?」

ドラコに負けず劣らず、親しい友へ見せる顔とは別の笑みがそばか

すだらけの顔に浮かぶ。なつかしいやり取りだ——本来ならば取り合えるはずもなかった彼の手を掴みながら、ドラコは一步を踏み出した。

さて、ロンいわくの『アテ』には豪華なクリスマスディナーを楽しむ先客がいた。

「ルーナ？」

ビルの新妻フラーの振る舞うフランス料理に舌鼓を打ちながら、ルーナ・ラブグッドがコテリと首をかしげる。飛び出した形の目はとろりと夢心地に旅装束の二人を眺めている。

波乱万丈の中、新生活を送る若き夫婦に似合わない少女が当たり前の顔で夕食の席へとついていた。

「こんばんは、ロン、ドラコ。ロンはこっちに里帰りに来たんだ。ジニーがさびしがるもん」

「いや——ええ？　これってどういうことなのさ、ビル」

「マリアからの依頼だよ。ちよーっと、ルーナのパパが発行する雑誌はやつらには刺激的すぎたのさ。クリスマス帰省を狙ってルーナを人質に取られる可能性がある、だから我が家で保護してほしいと連絡があったんだ」

「なんだそれ……そのマリアはどこに？」

「さあ。そこまでは。ただ、間違いなく彼女の声で、牡鹿の守護霊だったからね」

すっかり汚れきったローブのままルーナの正面へと座ったロンに、フラーはムツと顔をしかめた。杖が振られ、問答無用で男二人からローブが剥ぎ取られる。しかし中身も似たり寄つたりの有り様だったために、フラーは大きく嘆息した。そんなフラーの姿に母モリーを思い出して、ロンはぐつと胸を締め付けられる想いでいた。

「パパの雑誌は素晴らしいんだもん。パパはいつだって真実を伝えてくれるのよ」

「まったくその通りだ。こと、ハリー・ポッターについてはね——それで、お前は どうしてここに いるんだい？ ハリーとハーマイオニーが透明マントに隠れて後ろで盗み聞きしてる、てわけでもなさそうだ」

バツが悪そうに縮こまる歳の離れた弟の姿を、兄は笑いだしたい気持ちで見守っていた。それは不意に悪戯がバレてしまった時の小さなロンそのものだった。とつくに母から叱られ終わり、しよぼくれているときの姿だ。いくつになっても、大人になっても、兄姉にとって弟は弟で妹は妹でしかないのだ。そして父母にとつては子供だ。

「……ま、いいさ。この家の守人は僕だ。気がすむまでくつろいでいきなさい。ロン、ドラコ——メリークリスマス」

この様子では口を割りそうもないと早々に判断したビルは、フラアへと目配せをして共に席を立った。その場には、追加された二人分のチキンとクリスマスプディングをつつくルーナ、肩身のせまそうなロンと手持ちぶさたなドラコだけが残された。

「元気そうだな、ラブグッド」

「うん。ドラコも。ロンは——ちよつと元気ではないみたい」

場の空気を読むなんて俗っぽい世渡り術とまるで無縁の少女は微笑む。それにドラコは感慨深い気持ちでいた。かつては自身の館で拉致監禁の憂き目に遭った少女だ。マリアは——否、ハリーは覚えていたのだ。

「僕——」

たつぷりの時間を使ってロンは食卓へと吐き出した。逃げてきたんだ——と。不思議とルーナにならばかまわない気がした。

彼女の、常に意識が宙を浮いていそうな独特の空気感がそうさせたのかもしれない。ルーナならば慰めも同情もしないとさえ思えたかもしれない。自分よりもナーグルによつぽど興味を持つていそうな宙ぶらりんの距離感が、今のロンには程好かった。

「そんなつもりじゃなかった。ハリーが……ほら、覚えてるだろ？ ハリーとマリアが喧嘩をして、中々の騒動になった。あのときハリーを狂わせたのはロケットで——同じなんだ。僕もあんなことを本心から言うつもりは——」

ルーナにはまるでわからない話だろう。現にルーナはロンの懺悔よりもスूपの残りがあるかどうかのほうが気になるらしかった。

「言い訳だ。あれが僕の本音だった」

シン、と。沈黙が満ちた。永遠にこの静寂が自分を責め立てるのだとロンには思えた。そんなわけはない——そんなわけはないのだ。

「あたしはあんたたちの旅のことは知らないから、あたしが知ってることしか言えないけど——」ロンが大好きってだけなんだと思うよ」

ルーナ・ラブグッドにはロンの葛藤なんてものは関係ないのだ。

「ロンが大好きだから側にいてほしいんだよ。あたしは、ジニーにもパパにもずつと側にいてほしいって思うもの」

ハツ——と、うつむく男から息が吐き出される。嘲笑になり損ねた声だ。

「……て、マリアが言ってたって？ あいつ、妙に僕を買い被ってるんだ。変なやつ」

劣等感を植え付けてくるのはソツチのくせに、誰よりもロンを好きだと明け透けに伝えてくる。ロンを信じている。いつそ双子の兄弟であるハリーよりも——ロンとハーマイオニーを信じてる。

そういうところがずるいんだ、マリア・ポッターは。

「うん。マリアはロンが大好きだよ。でも、マリアじゃないよ。——ハリーが言っただよ。ハリーもマリアも、おんなじだけロンが大好きなんだよ」

青色の目が開かれ、先にあるくすんだ色合いの瞳を見つめた。今度こそルーナの目はロンをとらえていた。

「それだけじゃダメなのかな？ それでは足りない？ それって——贅沢だと思うけど」

ルーナだからこそ重みを持った真綿のような言葉だった。はじめから逃げ道なんて求めてはいないロンの目を覚まさせるには十分だった。

「——足りなくなんかいい。最高だ」

くしゃつと顔をしかめたロンは、父の大好きなゼンマイに油でも注したかのように、猛烈な勢いでチキンを掻き込み始めた。フライが見ていたならば自身の料理を雑に扱われて憤慨しただろうし、ビルならば父親代わりに行儀が悪いと弟をたしなめただろう。ドラコも小言を言いたげに口元を歪めていたが、ルーナはケラケラと大口を開けて

笑った。

だって————食べなくては二人に追い付くための力が出ないじゃないか！

「——出発は夜明けか？」

二人のためにと急遽空けられた客間にて、リュックに荷物を詰め直すロンへと静かな声が問う。

「ん。二人を探すところから始めないといけないし」

今さら、お前もついてくるのか——なんて問答は必要ない。その程度には、楽しい旅でなくとも、かなり微妙な距離感だろうとも、互いの存在は当たり前前になっていた。

ふと、ロンが手を止めた。呆然とした顔で周囲を見回す。呟く。——ハーマイオニーの声がした、と。

「ロン、気持ちはわかるが——」

「ほんとうだって！　ほんとうなんだ、ほら、また——」

耳をすませる。次はドラコにも聞こえた。ハリーの声だった。

「どこから——これか？」

ロンがポケットをまさぐれば、すっかり使い道をなくしていた灯消しライターが転がり出た。カチリ。部屋の灯りが吸い込まれる。カチリ。灯りがともる——窓の外へと。

「エッ？」

カチリ。もう一度外の灯りを吸い込めば、なんとそれはライターではなくロンの胸の中へと消えた。啞然と男二人が見つめ合う。胸の

熱を感じながら、ロンは唐突に自身のやるべきことを理解した。

「僕——わかった。この灯りが僕らを導いてくれる。だからダンブルドアは僕に灯消しライターを遺したんだ。僕が逃げ出すって——あのひとにはお見通しだった。僕——僕——これで二人に追い付ける！」

夜明けなんて待てるものか。制止するドラコを振り切って廊下へ飛び出したロンを受け止めたのはビルだった。ロンのことがお見通しなのはダンブルドアだけではなかった。

「二人とも、クリスマスプレゼントも貰わずに行ってしまうのかい？」

それは、兄としてはさびしい限りだ」

「ビル……」

夜も遅いからね。そつと声をひそめて、彼はとある物を手に室内へとロンを押し戻した。——ラジオだ。

「次の合言葉は『我々が希望』だ。君たちの旅の彩りになるといいけど」

フエンリール・グレイバックにより甘いマスクに危険なものが混じるようになったビルだが、それでも彼の人好きのする茶目っ気は失われない。ロンの知るままの長男は、長男の知るままの弟をたっぷり抱き締めてから魅惑の笑顔と共に解放した。——二人の出立は夜明けだった。

合言葉の意味をロンは再開した旅の夜に知った。独自の通信網をジャックし放送される『ポッターウォッチ』——それはロンの心を大いに躍らせた。ドラコもまた、なんて命知らずがいるものだと笑った。

道標の灯りと、心折れずに戦い続けている誰かの存在、追い付かね

ばと勇気をふるわせてくれる仲間たち。今ならば分霊箱に負けやしない。ロンは強く思えた。

——そして、親友たちの再会の時はやってくる。

雌鹿の守護霊が、手助けとほんのちよっぴりの悪意を込めてロンとドラコを湖へと導く。凍てつく湖に溺れるハリーをなりふりかまわずロンが救出する。グリフィンドールの剣と、分霊箱と、剣を持つ資格を得た者——舞台は整った。

「できなう」

「できる。君だからできる」

弱腰のロンを押し切り、ハリーの蛇語によってロケットが開かれる。中をめがけて剣先が天を差す。当然、分霊箱——リドルの魂は抵抗を始める。ハリーとハーマイオニーの姿を模してロンの心を切り刻もうとする。それでも、ロンは剣を振り下ろした。

「ロン……」

ぱっくり割れたロケットを前にロンは泣いていた。絶望ではなかった。悲しみでもなかった。けれども、それは喜びの涙でもなかった。ハリーはただ彼の肩を撫でるしかできなかった。

「ハーマイオニーは姉のような人だ。マリアも、そう言うよ」

眠っていたハーマイオニーを起こし彼女の激怒を受け止めて、『彼の愛する友たちはようやつとひとつに戻る。』

一件落着——とは、そうは時代が許さない。三人ともひどい姿だ。ハーマイオニーなんて世の女性が絶句するスバラシイ身だしなみでいたし、ハリーもドラコが黒歴史と称する頃に散々からかい倒した鳥の巣具合へと戻っていた。マリアの苦労が水の泡だ。ロンはいわずもがな。

それでも、ドラコには三人がどこまでも眩しく見えるのだ。積もる雪よりもずっと真っ白に見えるのだ。——やっぱり、あの二人にはかなわない。

「ドラコ」

『彼』が手を差し伸べてくれるだなんて——都合のいい奇跡だ。

四人旅に戻った夜、各自の情報交換により新事実が続々と発覚した。灯消しライターの導き、ハリーのものではない雌鹿の守護霊とその術者について、ヴォルデモートが追っていたグリンドルバルドの存在——

それから、これを見て。ハリーがバチルダの家から拝借したスキーター著書の『アルバス・ダンブルドアの真っ白な人生と真っ赤な嘘』を開いた。彼の指がとある箇所を滑る。ダンブルドアがグリンドルバルドへと向けた手紙の一部だ。

『たしかに、その力は我々に支配する権利を与えている。しかし、同時にそのことは、被支配者に対する責任をも我々に与えているという点を、我々は強調しなければならぬ——』

「これ——聞き覚えはない？」

「どういふこと？」

きよとりと目をまたたかせるロンとハーマイオニーに、ハリーは思った。二人とも、覚えていなくとも不思議ではない。何年も前で、その上ちよつとした日常の中での言葉だ。記憶にとどめるには細やかすぎる思い出だ。

けれども、ハリーだけは忘れない。なぜならハリーは——彼女の兄なのだから。

「マリアが言ったんだ。サラザール・スリザリンについて調べていた

ときに——『ノブレス・オブリージユ』

あつ！ さすがと呼ぶべきか。ハーマイオニーの記憶がただその一言だけでほどかれた。

「確かに似たようなことを言ってたわ……サラザール・スリザリンの純血主義は、元々は弱きを導くためにあつたんじやないかって——それはあくまでも考えの一つだけだ」

うなずく。ロンははまだ思い当たるものがないようで、テキトウにハーマイオニーに合わせて肯首していた。しかしロンを見るハーマイオニーの目は、件の騒動もあつて非常に冷たかった。

「ここから推測するに————やっぱりマリアはダンブルドアを『識って』いるんだと思う」

結局のところ、ソレに帰結するのだ。ずっと空気が重くなる。あえて考えずにいた少女の存在が否が応にも三人の頭をかき乱す。彼女の異常性を浮き彫りにする。——そんなときに緩和材となるのは、やはりロンなのだ。

「ねえ、ハーマイオニー。どうして僕の名前を呼んだんだい？」

灯消しライターから聞こえた愛しいひとの声が、どれほどロンへ勇気を与えたか。思い出して、うつとりした目でハーマイオニーを見るロンに、ハーマイオニーは顔を赤くして、それから青くして、最後に白くして目を泳がせた。

「あの……ロンが——ほら、あなたって元々はチャーリーの杖をお下がりに使っていたじやない？ もしもそれを持つていたなら——つまりは、あなたが杖を今、二本所持しているならってことなんだけど

「……ハリーに、渡せたかもしれない——て」

「どういうこと？ ハリーにはハリーの杖があるじゃないか。サイコーにありがたいわくつきの」

「……ないの」

「ん？」

「だめに、なっちゃったの。ナギニから逃げるときに」

どうにか慎重に言葉を選ぼうとするハーマイオニーとロンのあいだに、ハリーの拳が突き出される。ヴォルデモートとの繋がりの一つであった不死鳥の兄弟杖は、ハリーの手の中で無惨にも真つ二つとなっていた。

「……ワーオ、さすがのハーマイオニーもスペロテープの準備はなかったわけだ」

今度こそ、ロンの茶化しでも払拭しきれない重苦しい空気が流れた。——中で、ただひとり肩を揺らして笑う存在があった。ドラコだ。

このためだったのか。憎たらしくも愛らしいニンマリ笑いの少女がドラコの頭の中から「さあ、それを渡せ」と急かす。誰かの手がなければまともに整えもしない赤毛をかたむけて、すべてお見通しだと高笑いしている。

結局のところ——己の杖は皮肉にも主人より英雄の手助けをする運命にあるらしい。

「これを使え、ハリー」

ドラコのサンザシの杖を押し付けられたハリーは、丸い目をさらに丸くして杖とドラコを見比べた。

「君——魔法使いだろ？」

「ああ。魔法使いが杖を手放すなんてことは——まあ、一部を除いてありえない」

「それじゃあ、」

「そして僕は『一部の例外』からこんなものを預かっている」

ドラコの懐から取り出された二本目の杖に、ハリーはカツと緑の双眸を開いた。

見間違えるはずがない。自身と同じ二十八センチに、イトスギの素材——マリアの杖だった。

「どうして」

「僕も押し付けられたんだ。文句はやつに言ってくれ」

この杖は僕の守りたいものを守ってくれるから——そう、祈りたくなるような瞳で告げたあいつに。

「マリアって、やっぱりめちゃくちゃだ」

ハリーのしみじみと落ちた呟きに、その場にいた全員がイエスと答えた。

ゼノフィリウス・ラブグッドに会いましょう。

次の進路はハーマイオニーの希望により決定した。グリンデルバルドとダンブルドアが二人の間だけに通じる暗号のように扱った印、^{マーク}その正体を暴くためだった。

「イグノタス・ペレレルの墓石で見たマークとラブグッドさんの持つペンダント、そしてグリンデルバルドの印——これらはすべて同じものだわ。そしてラブグッドさんになら今のわたしたちでも危険なく接触できる。『ザ・クイブラー』であればハリーを支持してくださいさる人だもの」

「ドラコの分のクリスマスプディングまでしっかり食ったルーナのことも教えてやらなくちゃだしな」

目的地へ向かって雪を踏み締める面々の足取りは軽かった。トントン拍子で事態は好転していく。ゼノフィリウスの最愛は先手を打った『魔法使い』によって安全を保障されているのだから。こたびのゼノフィリウスに旅人たちを陥れるいわれはない。

ロンいわくの城の主——ゼノフィリウス・ラブグッドは快く四人を迎え入れた。

「それはもちろん——『死の秘宝』だとも」

ハーマイオニーから印についてたずねられたゼノフィリウスは、それが常識のひとつであるかのように答えた。ダンブルドアからハーマイオニーへと託された秘密——それが今、探求者であり信奉者の知識人によって明かされようとしていた。

『『三人兄弟の物語』からわかる通り、ニワトコの杖・蘇りの石・透明

マント——これら三つをまとめて『死の秘宝』と呼ぶ」

各々のマークがゼノフィリウスのえがく杖に従い、重なる。三角形の中に円が埋め込まれ、中央を直線が割る。アツとハーマイオニーが声をあげた。三つから一つに戻る姿は、まさしく求めていた印の通りだった。

だがしかし、ハーマイオニーにはゼノフィリウスの語る真実が信じられない。なぜならそれはおとぎ話なのだ——ハーマイオニーがダブルドアから受け取った物語は、子供に聞かせるためのおとぎ話なのだから！

「私にできる支援はここまでだ。君たちを送ったのち、私は姿を隠すことになっている。口惜しいが『ザ・クイブラー』も当分は休刊だ」「わたしたちのことを待っていてくださったのですか?」

「そうだとも。マリアお嬢さんと交換で約束をした。こちらはルーナの安全を……そしてマリアは君たちが私を頼るだろうから、そのときに良くしてやってくれと持ちかけてきた。私は——君たちを待っていた」

ハリーの胸の中にぐつと熱いものが広がった。マリアに苛立つことは当然ある。それはダブルドアへの怒りにも等しい。それもまた熱だ。けれども——どちらもハリーの味方であることだけは、たとえ世界がひっくり返ろうとも闇に支配されようとも、違えられないのだ。

ここに——自分を信じて待ち続けてくれた人がいる。

「貴重なお話をありがとうございました、ゼノフィリウスさん。ルーナと——きつとお元気で」

「……ち……ら……ん」

ゼノフィリウスと友好の握手を交わして、一行は分霊箱探しの旅を

再開させた。だがしかし、決定的な変化が四人の間にもたらされていた。四人の——否、それまでひとつだった三人の目的が分かれた。

ハリーはすっかり『死の秘宝』の魅力に心を奪われてしまったのだ。かたくなに迷信だと断じ、分霊箱探し以外に余力を費やすべきでないと強行するハーマイオニーと『死の秘宝』の可能性を捨てられずヴォルデモートの求めるニワトコの杖を追いたいハリー。長い旅の中で頑固者二人の意見はたびたび衝突した。

「——だから、『死の秘宝』なんてものは存在しないのよ。いくら魔法界だって死者を呼び戻すなんてことは不可能だし、もしも可能だとしたらこの世のすべてのバランスが崩れてしまうわ。それってすごくおぞましいこと。彼らの探求は不幸を呼ぶのだと知るべきだわ」

「けれど、現に『死の秘宝』の一つはここにある——僕の持つ透明マントがそうだ！」

「いいえ。それはとても高度なマジックアイテムなだけ。家宝にするぐらい貴重で、素晴らしくて——ただそれだけなのよ」

「そうだね、死から逃れられるマントなら誰だって家宝にするだろうさ。ただそれだけのことだ」

中立のロンは火花を散らせる親友たちに挟まれ、すっかり頭を悩ませていた。ロンも、ハーマイオニーと同じく『三人兄弟の物語』については、あくまでもおとぎ話の一つとして見ている。けれども、ハリーの主張にもうなずける部分があるのだ。ハリーの持つ透明マントは——それほどに素晴らしい。

ひとまず。青い瞳は二人旅によりちよつとだけ仲間意識の強くなったドラコへと、仲裁援助の視線を投げかけるのだった。

「あなただってバカバカしいと思うでしょ？ ドラコ、あなたはわたしの味方だと知ってるわ」

「……『死者を呼び戻す』、それが限りなく不可能でおぞましいと見られる行為であることには同意するよ。それは罪だ。死者に会えるの

は死者だけなのだから」

「ほうら、っらんなさる」

だから、。

」

その声は誰にも届くはずはなかった。届いてはいけなかった。死することも、生まれることすら許されない祈りだった。

けれども——奇跡はここに成った。

」——ドラコ?」

「ハリー、君がそれを願った理由が、ようやくわかった」

ふわりと。守護霊がドラコの元へと降り立つ。はじめて見る形の守護霊だ。それに触れて、ドラコはかすかに目を開いた。

「すまないが、僕はここで一旦離脱とさせていただけよう」

「エーッ!」

「ロンに続いてあなたまで——いったいなにを言い出すの?」

「ドラコ?」

口論なんて忘れて当惑する三人を背に、マリアのイトスギの杖が振られる。杖先へと守護霊が吸い込まれていく。そして次の瞬間には、引き留める仲間たちの声もむなしく光のような青年は姿を消していた。そこには冬を越えた草若葉だけがそよいでいた。

記憶の最後にある姿のままの居間を通る。なつかしい場所だ。ぐるりと首を回す。ハリーと、ロンと、ハーマイオニーと——それから、

ドラコ・マルフォイ。彼らの気配が濃厚に残る『ブラック邸』から、他のおいは感じられない。魔力の残滓はここまでだ。——ウインキーが再びこの場所を訪れた可能性は低そうだ。

「ドビー」

いわゆる職業病の一つか、すっかり慣れた手付きで茶の用意を始めていたドビーへと苦笑と共に呼び掛けた。

「ほんとうに——明日にグリーングラス邸が開かれるんだね？」

ドビーは帽子にしていたティーポットカバーを手に握り直して、しっかとうなずいた。

籠城戦を決め込んでいたマリア・ポッターがホグワーツから離れ『我が家』にいる理由。それはドビーへの頼みごとから始まる。

一つに、ホグワーツ内でのダフネ・グリーングラスの監視だ。四六時中だなんて大袈裟なものではない。ただ、不可解な動きがあつた際にすぐに教えてほしいとドビーに頼んでいた。次に——こちらこそが本命だ。

グリーングラス邸の在処特定と侵入経路の確保。アステリアの身に何が起きているのかを確かめるため、僕はついに強硬手段へと出ることにしたのだ。自由ゆえフットワークの軽いドビーにしか頼めない『お願い』だった。

そしてドビーは見事に発見せしめた。——チャンスを。

「イースター休暇中にお屋敷で催しがあるようです」

ドビーが得た情報はただただシンプルだ。ダフネのイースター休暇特別帰省に合わせて、グリーングラス家が自身の屋敷にて純血のみを招待したパーティーを開くというのだ。パンジーが以前に、グリーングラス家について突然羽振りが良くなり大きな顔をするように

なつたとぼやいていたが、それは現在も変わらないらしい。むしろヴォルデモートの政権支配にともない勢力を強めたきらいすらあるのだとか。——なにが、それほどにヴォルデモートにとってのグリーングラスの価値を高めているのか。こちらもアステリア搜索と共に要調査だ。

ドビーと別れ二階への階段を上がる。目指すはハリーの部屋と扉一枚で繋がる自室だ。——まさか、自分から『アレ』を解放する日が来ようとは。

「——ウワツ!？」

扉を開いた瞬間、なにかが腹の辺りをすり抜けていった。ホグワーツの廊下でゴーストに体を通られたときみたいだ。はてさて、いつからこのブラック邸にゴーストが空き巣よろしく住み着いたのか。叫ぶ夫人の肖像画で手一杯だというのに。

振り返れば、ゴーストではなく誰かの守護霊が廊下を駆け抜けていくところだった。——その形は。

「……………サソリ?！」

棒立ちのままサソリの守護霊の後ろ姿を見送ってしまう。だって、守護霊の捕らえ方なんて知らないもの。

「いったい誰の守護霊だ?！」

小首をかしげる。グリモールド・プレイスにたどり着ける守護霊なのだから、まず不死鳥の騎士団の誰かのものと見て間違いないだろう。もしくは——

「ドラコ」

「なんだ、驚かし甲斐のないやつだな」

扉の境界の向こうから二本の腕が伸びて室内へと引き込まれた。薄い胸板の感触にハリリと降り落ちる金糸の髪。少し見上げた位置には光射す水晶じみた輝きの明眸がある。——ドラコ・マルフォイ。

「君、どうしてここに」

「君の部屋に侵入する輩があつた場合に、即座に駆け付けられるよう守護霊を置いておいたんだ。……まさか本人が引つかかるとは」

クツクと喉で笑う男につられて、背に彼の手のひらを感じながら頬を緩ませた。実に八ヶ月ぶりの再会だった。

「サソリだなんて、君らしいね」

「僕も僕らしいと思つたよ」

部屋の中央を進み、かすかに埃を積もらせたベッドをたたく。ドラコと並んで腰を落ち着ける。ふと、クリーチャーが触れずにいたかつてのシリウスの部屋のさまを思い出した。——この部屋の時間はあの日から止まったままだ。

「ハリーたちは？」

「アルバニアの森の辺りだ。——『君』はずいぶんと、『死の秘宝』にご執心だったようだな？」

ドラコからからかい混じりに寄越された含む言葉に、ああ、と肩をすくめた。やつぱり、こちらのハリーもかの誘惑に誘われてしまったらしい。……変わらないな、『僕』は。

「と、いうことは、無事にラブグッドさんから話は聞けたみたいだね」

「ハーマイオニーの頭の固さが中々のものだとわかつた」

「だろう？ 彼女、かしこい分、ああいった手合いにはとことん頭でっ

かちになるんだ」

「そして『死の秘宝』に頭がいつぱいのハリーに代わり、ロンが指揮を取っている。思わぬ才能だ」

「いや、思わぬ、ではないよ。ロンに参謀をさせたら右に出るものはないとも」

まさか！　なんて失礼なりアクションを取っている男にニンマリと笑って見せる。

「否定したければ——ロンにチェスで勝ってごらんよ」

ちなみに、僕は一度だって彼に勝てたことはないよ——そう付け足せば、ドラコはわかりやすく百味ビーンズのゲテモノ味にでも当たったような顔をした。

「……考えておこう」

「ぜひと」

気の抜けるような会話だ。通信紙も使えない状態で、半年以上も互いに音信不通であったというのに、なんとも感動の薄いやり取りだった。再会を喜ぶ挨拶すらない。

だのに、彼が隣にいて、彼の声があつて、容易に手の届く場所に体温があることにこんなにも安堵してしまう。だなんて——憎らしいったら。

「思いの外、上手くやってるようで安心した」

「おおむね旅は良好だ。仲良く交互に喧嘩してるよ、君たちは」

「うーん、そうだったような、そうでなかったような」

「それから、クリスマスはロンと過ごした」

「……ロンを選んだの？　ハリーでなくて？」

「君があの場合にいたならそうしただろう？　土産話にでもしてやろう

と思つてね。存分に羨み悔しがるといい。ラブグッドも相変わらずだったぞ」

「アハハ、なんだそれ。それって——相棒ってかんじだ！」

ドラコを巻き込む形で勢いよく背から倒れる。ベッドのスプリングに合わせて息を吐き出す。道連れにされたドラコが声に出して笑いながら僕の手を取る。そして——ほとんど額が当たる場所で笑い方を変えた。

「さて、近況報告はここまでにしよう。——なにがあつた？ マリア」

「——実は、」

今度こそ、僕は互いを繋ぐ少女の名を濁した舌の上から滑り出した。

アステリアにまわりつく不可解な事実の数々を知ったドラコは、深く眉間にシワを刻んで黙り込んでいた。怒りだろうか——それもそうだろう。僕のふがいなさばかりが浮き彫りになったのだ。ドラコとしては、ルーナを気遣うよりもアステリアを優先してほしかったにちがいない。僕なら——そう願ってしまうし、期待してしまう。

「君の怒りはごもつともだ。ここから挽回したい。だから、もしも、君さえよければだけど——」

そして、僕は封じ続けていたクローゼットを開いた。

「——僕のパートナーとして、共にパーティーへ出てほしい」

そこには、たった一着だけのドレスが飾られていた。無駄な装飾はなく華美とは程遠いデザインでありながら、しかしハツとするほど白が鮮やかなドレスだった。純白の一着だけが、クローゼットの空間を埋めてさびしげに存在を主張していた。

「……それは、シリウスから?」

「ああ。ぜったいにありえないと思ってたけど……でも、もしも、彼の『望む通り』に僕がなったなら——そのときには、このドレスを着て見せてやろうって、考えてたんだ」

「……花嫁衣装のようだな」

「フラーのものほど派手ではないけどね」

ドレスを取り出しベッドへと寝かせる。やわらかなシフォンがレースカーテンのように広がる。光の加減によって浮かび上がる百合の刺繍が見る者の目を楽しませる。

ほんとうに見せるべきだったあなたはもういないけど——きつと、許してくれるよね。シリウス。

「我が家に代々伝わるティアアラがよく似合いそうだ」

ドレスを覗き込むドラコの髪が白に重なって、キラキラと反射した。とても綺麗だ。——これなら、問題なさそうだ。

「取りに帰るか?」

「いいや、そんな余裕はないだろう。今の我が家は危険きわまりないからな。裏切り者の生家だ。父上がせっせとコレクションしていた地下の秘蔵品たちも、どう扱われているかわからない。それを除いても、人目に触れさせるには躊躇われる術式がたんまりと眠っている」「マルフォイ邸は相変わらず禁術だらけってわけだ」

「君たち闇祓いのお手をわずらわせ続けた実績は伊達じゃないのさ」

慣れた軽口を交わして、子供っぽく小突き合いながらドレスを適当な椅子にかけて眺めてみる。ハリーのクローゼットから男性用のドレスローブも取り出し、揃えて並べる。ブラック夫人の目覚めの障害を任せていたドビーを呼び戻し、ああだこうだと二人と一匹でコー

デイナーに悩む。

穏やかな時間だ。外では今この時にも誰かが死んで誰かが泣いているというのに——この時間が心地好いだなんて。

「傲慢だ」

「マリア？ ——眠れないのか？」

すぐ隣に寝転ぶ彼の指がこめかみをくすぐった。ハリーのベッドを改めて整えるのも面倒で、結局二人で雑に横になった僕のベッドの上のことだった。室内の明かりは落とされ、窓から射す月明かりだけがかるうじてベッドと彼の輪郭を浮かばせていた。

「暗いね」

「夜中だからな」

「僕、暗いの苦手なんだ」

「それは初耳だ」

「せまいのも嫌いだ。ひとりぼっちの物置部屋を思い出すから」

「……そうか」

「あと、鳩かな。昔、ダドリーに鳩の餌を頭に撒かれてさ、めっちゃくちゃにつつかれた」

「……………」

「怒るなよ。君だって似たようなことしただろ」

「掘り返すな」

薄暗くともわかる苦々しい顔のドラコに、肩まで使って笑う。綺麗だ。彼にはこんなにも光が似合うのに——闇まで似合ってしまうだなんて、贅沢な男だ。

「ハリーは暗闇でもなにも言わなかったが」

「こちらのハリーは大丈夫だよ。……ハリーには背負わせない。『僕』の思い出は僕だけのものだ」

指と指がなぞり合い、絡み合った。言葉はなかった。互いにその先へ踏み込んでほならないと知っているからだ。少女の影と僕の未来が、それを許さない。

手を繋ぎ合うのが精々——たったこれだけで、恐怖は薄れていく。

『君』は、かつて『死の秘宝』と決着をつけた」

「ああ、そうとも言えるね」

「それなら——」

月明かりを背にするドラコ・マルフォイは美しい死神のようだった。その手がこの首へ伸びたとしても——きっと僕は微笑むだろう。

「もしも死者に会えるとするなら——君なら、どうする」

僕は。

ドレスローブを着込み、いぎグリーンガラス邸へ乗り込もうと意気込む僕らの前に立ちはだかったのは、小さな友人だった。

「ドビー、君はお留守番だ。必ず戻るから、どうか聞き分けておくれよ」

「いいえ、いいえ！ ドビーはマリア・ポッターのお手伝いがしたい！

ドビーはお役に立ってます！」

「もちろんだとも。君は十分に役に立っているよ。けれど——この先には連れていけない。お願いだ——いいや、これは『命令』だ」

「マリア・ポッター……」

しょんぼりするドビーの肩を撫でてそつと屋敷へ押し戻す。閉まる戸を見つめる大きな瞳に心が痛む。けれど、背に腹はかえられない。

「いいのかわ？」

「いいんだ。……彼が死んでしまうより、ずっといい」

グリーンガラス邸に例の悪女がいる確証はないが、できる限り危険は犯したくない。なにより——誰かが待っていてくれる事実は、僕に勇気を与えてくれる。ぜったいに生きて帰ろうと思わせてくれる。

「さあ、行こうか。——レディ」

後ろ髪を引かれる思いでかかたとを鳴らして、僕は純白のドレスを着る少女へと手を差し出した。

「君は時々——いいや、大抵においてとんでもなく愚かしい思い付きをする」

「その言い回し、スネイプ先生にそっくりだよ。さすがはスリザリンの姫君だ」

「口を縫うぞ。君の杖が現在、僕の手にあることをお忘れか？」

小声でありながらも憤懣やるかたない様子の少女をエスコートしながら、緩む口元を抑えようと頬を噛んだ。それを見て、少女——性転換したドラコは、人形のように整った顔を極限までしかめた。

そう、僕らは再び互いの性を取り替えたのだ。ポリジューズ薬はハーマイオニーの所持品として管理されているし、ドラコのことだから以前作った性転換薬をなんだかんだと数本ストックしているだろうと踏んでみれば、案の定だ。手っ取り早い変装がこれだったのだ。つまりは、僕は現在フローレンスだし、ドラコのことそのままレディと呼んでいる。

「ありえない……あの流れでどうして僕がこれを着るはめになるんだ？ 草葉の陰で伯従父上が泣いてるぞ」

「ついでに化けて出てくれたならいいのに」

「僕の悪夢にしか出てこないだろうよ」

ごもつともだと吹き出した。近くの婦人から怪訝そうに睨まれた。ドラコの手を取って愛想笑いを浮かべながら壁側へと移動する。不機嫌にしてもなお愛らしい顔立ちのレディは、繋いだ手に爪を立てながらもおとなしく従ってくれた。猫みたいなやつだ。ああ、それともイタチか。

会場はすでにきらびやかな衣装の人々で満杯で、誰もがとある人物の言動に注目していた。——アステリアとダフネの父、グリーンングラス氏だ。グリーンングラス氏はフロアを見渡し人好きのする顔でニコリ笑うと、純血の人々を自邸へまとめた理由を話し始めた。

「ようこそおいでくださいました。純血の正しい魔法使い、魔女である皆さん。どうぞ左右に目を向けてみてください。さあ、隣人の顔を見て。なんと誠実で凛々しい面立ちか！　ここへ集うのはすべて正しき血と歴史を守ってきた同胞です。我々こそが、次代を導き担う『人間』であるのです」

よく通る声が室内中に響き渡る。——なるほど。

「限定的なプロパガンダといったところか」

「まるで純血以外はヒトでないような物言いをしてくれるね」

マフリアートの裏でひっそりと毒づき合う。ヴォルデモート卿の目指す未来がいかに素晴らしいか、それを支えることこそが魔法族の使命であるとグリーングラス氏は拳を振るって熱弁する。つまりは、この絢爛豪華なパーティーの正体は死喰い人への勧誘会だったのだ。

「……フロウ、あれを」

「——ッ！　そんな……」

ドラコがドレスの裾に隠れて指差した先には見知った顔があった。ホラス・スラグホーンだ。なんてことだ、彼は闇の陣営側に付いてしまったのか。

「尊敬すべき『あの方』——いいえ、敢えてこう呼びましょう。近い未来、魔法大臣となられる偉大な人は、魔法族にとつてよりよい未来を選び掴み取ろうと奮闘されています。今、この時にも！　それは我々の目の前にあるのです！『あの方』が世界を統べる支配者となられたあかつきには、研究者諸君にも十分な恩恵が——」

「——この会に参加したのはあくまでも研究者として、か」

ドラコの冷静な分析にほんの少し安堵の息をつく。事実、グリーングラス氏を見るスラグホーンの目には過度な賛同の色はないように思えた。……どうか、そうであってほしい。

だがしかし、なにがこれほどに彼の興味を引いたのか。

「失礼、ミスター」

軽やかに肩を叩かれた。跳びはねる心臓をおさえておそるおそると振り返る。彼女と色違いの髪に、彼女と同じ色の瞳。穏やかな微笑の裏に冷酷さを秘めた不気味な少女——ダフネ・グリーングラスがそこに立っていた。

「あ……」

「そちらのレディがこちらを落とされましたよ」

「えっ?」

ダフネが差し出した手のひらには、愛らしい銀作りの口紅が転がっていた。

「えっと、それは彼女のものでは……」

「あら、気の利かない人ね。いくら素材が良くともルージュのひとつも付けずに社交の場へ出るのは、マナーに反すると言っているのよ。父が演説してるあいだに彼女を連れてそちらから出なさいな。パウダールームは出てすぐ左ですから。パートナーが恥をかかないよう気遣うのも紳士の務めですわ」

微笑みと共に痛烈に返されて思わずたじろいだ。笑顔のまま迫るダフネに無理やり口紅を握り込まされる。隣のドラコは唾然としていて、そんなドラコにもダフネは白々しい笑みを向ける。

「そのドレス、とってもよくお似合いですわ、ミス。こちらの口紅の色

がよく映えることでしょう」

「……お気遣い、痛み入ります、ミスグリーンガラス。せつかくですからご厚意に甘えるとしましょう、フロウ」

「あ、う、うん」

ドラコに腕を取られて、微笑みのひとを背にギクシヤクとフロアを後にする。廊下にはひととなく、どことなく薄暗い回廊が続くばかりだった。

「……………つまり、これってチャンスってこと？」

「やつの罠でなければな」

パウダールームを素通りして先へと進む。ヒールに慣れないドラコを気遣いながら屋敷の間取りを確認していく。会場にアステリアの姿はなかった。アステリアはいつたいどこに隠されているのか。

「フロウ——いや、マリア。まずい。時間切れだ」

彼の少女の声にハスキーなものが混じり始めたのを感じて、ああ、と自身の喉を押さえた。

「……年齢の近いグリーンガラスさんからテキトーに服を拝借する、なんてのは」

「ここにおあつらえ向きのドレスコードが男女共に揃っているというのに？　そしてグリーンガラス家には当主以外に男はいない」

「悪あがきくらいさせてくれよ」

少女の指だったのに力強さを取り戻した手にすぐそばの部屋へと引き込まれる。さっそくウエスト辺りが緩くなってきた気がする。暗黙の了解で互いに目をそらしながら服を交換する。

「それにしても上手くいくものだね。君の嘘八百には度肝を抜かれた」

今回、潜入するにあたって、どこから忍び込んでやろうかと企む僕をよそに現実はまだかの正面突破だった。ドラコが門番へと聖28一族のマイナーな家名を当たり前のようにそらんじたからだ。あまりにどうどうとしていたために欠片も疑われなかった。なんて面の皮の厚さだ。

「怖いもの知らずのマルフォイは嘘が上手いのさ」

僕が先程まで着られていたドレスローブを見事に着こなして、ドラコは嫌味っぽく笑った。

「よく知ってるよ。……クソ、やっぱりヒールなんてろくなもんじゃない。なんだって女性はこんな拷問じみた靴を履いて移動できるんだ？」

「移動しないのさ。荷物だって持たない。それが一流のレディだ」

「僕は一流でもレディでもないから裸足で歩いていいかな」

「おや、君に野生回帰願望があるとは知らなかった」

ああ言えばこう言う憎たらしい男の手を借りながら立ち上がる。股ぐらの風通りが良すぎる。なんて心許ないんだ。せめてこう……このヒラヒラが重みを持って足を隠してくれたならいいのに。——なんて、ドレスの裾を詰まみながら愚痴っていると、ふと、彼の（正確にはハリーの）上着を肩にかけられた。ドラコはじつと僕を言葉なく見下ろしていた。

「なに……ああ、この胸の傷は目立つものね。君の時とちがって僕はスネイプ先生から直接治療を受けられたわけではないし——」なんだよ。見慣れたもんだろう？ まだどこかフローレンスに変化し

「たまたまだったりする?」

「いや……ああ、うん。その通りだ。見慣れたんだ。こちらのほうが落ち着く」

「それは……ええと、どうも?」

「ああ」

ドラコの視線は外れない。ここで僕が目をそらすのは負けのような気がして、根比べでもするようにアイスグレーを見つめてみた。――ら、すっかり男に戻った手のひらで視界をふさがれた。

「……あのさ、坊っちゃん。君、さっきからなにがしたいんだい?」

「少し黙ってる。いや、少し口を開けろ」

「ハア?」

「うるさい。動くな」

唇になにかが触れる。しつとりと移動して、濡らしていく。内にもほんの少し侵入して塗り込む。

「……………ドラコ?」

「鏡がないんだ。レディでない君に鏡を見ずにこれを扱う技量はないだろう?」

目をおおっていた手のひらが離れば、チカチカと点滅する先にこれまたチカチカとまぶしいブロンドの髪と銀の口紅が映った。

「最低限のマナーだと先ほど親切なレディからご指導いただいたばかりだからな」

「……………変な味がする」

ドラコに塗られた唇の艶をかすかに舐めて、結局僕から目をそらした。根比べは僕の負けだ。

乱暴にルージュを拭きたい衝動をおさえながら部屋を出る。ずいぶん遠くまで歩いてきた。おそらくこの階は制覇したと見ていいだろう。と、なれば。

「上か、下か」

「定番は下だろうな。貴族の屋敷に地下牢や倉庫は付き物だ」

「ところでなつかしいものを思い出さないかい、マルフォイ？」

「どこその間抜けが人攫いに捕まった話だとかか？ ポッター」

「……………」

「……………」

睨み合って、どちらともなく吹き出して。

地下への入り口を探すため、僕らは再び歩き出した。

「「なんだってそんなことになるんだ」」

同じ調子、同じ表情、同じトーンで檻の向こうの片割れへと詰め寄る。片割れも格子を引つ掴むようにしてこちらを凝視している。ハシバミ色と翡翠の視線が結ばれる。実に実に八ヶ月ぶりの親友たちと弟との再会だった。

「あなた、マリア？ まあ、なんてこと——とつてもかわいいわ！

……ああ、ええと、そうじゃないわよね。わかってる。わかってるからそんな目で見るのはやめてちょうだい、ロン。——マリアはどうしてここに？ 今までなにをしていたの？ その格好はなに？」

「どうしてはこっちのセリフだよ、ハーマイオニー。どうして揃いも揃って……………さてはハリー、君、不用意に『ヤツ』の名前を呼んだな？」

「まさか！ ウィンキーに追い詰められたんだ。それで、三人がバラバラになるくらいなら——て、まとめて姿眩ましに引きずられて」

「彼女、すごく切羽詰まっていたの。だから、話を訊こうと思って――」

矢継ぎ早に寄越される情報に、ウーン、と唸る。彼等は彼等で『僕』の知らない死闘の末にあるらしい。牢の中にはない土やら葉やら泥やらで仕上げられた斬新なコーディネートがそれを物語っていた。奥には衰弱したオリバンダーと苦い思い出の小鬼、グリップフックが見えた。デインはいない。こたびは人攫いの魔の手から逃げ延びたのだと希望的に思うしかない。

「ともかく、ここから君たちを出さなくちゃね」

「それが、どうしてもダメなの。わたしたち、散々手を尽くしたけれどすべて無効化の魔法にはじかれたわ」

「それは内側からの話だろうか？」
「え？」

鉄格子の間に手を差し入れる。――やっぱり。こんなにも簡単に侵入を許してしまう。魔法族の人間はもつと魔法以外の部分にも目を向けるべきだ。そしてそれは少なくともヴォルデモートが統治する世界では叶わない。

「ハリー、シリウスのナイフを持つてるだろう？ 貸してくれ」

「マリア、だからダメなのよ。鍵開けナイフだってもちろん試してみただけれど、」

「いいから」

ロンがハリーの首から下げられている巾着へと手を差し入れて、探し当てたナイフを手渡してくれる。無言呪文でナイフへと強化をかける。

「離れていて」

大きく腕を振り上げて、かまえる。見定めろ。術式として脆い部分ではない。単純に——ナイフで叩き潰せる場所を！」

「——エイツ！」

ナイフの柄を使って錠の隙間を叩いた。小細工なしの力業だ。筋力以外に使ったものなんて申し訳程度のナイフ強化くらいだ。『魔法』を無効化するアイテムには力こそが最適解となる。

案の定、物理的な負荷には弱かったらしい錠はあっさり壊れた。

「……マリアって、なんというか……」

「どうせハリーもこうなるよ」

闇祓いをしてると物理で解決したくなる問題がわんさか押し寄せてくるんだから。

負傷しているご老人と小鬼に肩を貸して牢の外へと連れ出す。話し合いの結果、『前回』同様に貝殻の家へと一時保護を求める形に決まった。あれやこれやと事ある毎に巻き込んで、ビルとフラァにはまったく頭が上がらない。

「それじゃ、用が終わり次第貝殻の家で落ち合うとしよう。僕たちはまだやることがあるから——」

「僕も残るよ」

「ハリー、気持ちは嬉しいけどこれは僕たちの問題で、」

「そうじゃない。僕らもここに問題を残してる。——グリフィンドルの剣を取り返さなくちゃ」

ああ——うなだれる。確かにそれは決して奪われてはならないものだ。

「わかった。グリフィンドルの剣も一緒に搜索するから、」

「——僕に考えがある。信じてくれ、マリア」

そう、強い意志を感じさせる声色で返したのはロンだった。ハツとする。そうだ——彼等には僕の手なんてはじめから必要ないのだ。

大好きなブルーアイの輝きを真正面から受けとめて、思わず満面の笑みを浮かべた。

「わかった。信じるよ。君って時々、天才的になるんだもの」

「……時々なのは間抜けのほうだよ」

オリバンダー老人と小鬼を抱えて姿眩ましをするロンの耳は、彼の明るい赤毛よりも真っ赤だった。……これだから僕の親友は最高なんだ。

「よし、それじゃあここで別れよう。君たちはロンを待つ、僕らは先へと進む」

「マリア」

ハリーの手が僕の手首を掴む。そのまま、手の甲を返され掌へとシリウスの鍵開けナイフを置かれた。

「ハリー？」

「君が持っていて。きつと入り用になるから。そして——君の手で返して」

「……かならず」

複雑なものを含みながらも柔らかさを失わない緑の瞳に見送られて、ドラコと共に目的へ向かって駆け上がった。シリウスの心もハリーの想いも、このナイフにすべて込められているような気がした。

それはクリームの柔らかな色合いをしていた。花模様が彫られ、きつと部屋の主は繊細で可憐な花のような少女だろうと見る者に思わせた。薄っぺらな愛情と幸福で隅々までつくろった無情な檻だった。

僕らがただの子供であったなら気付けなかっただろう。この扉にだけ——外から錠をする魔法がかけられているだなんて。

二階の最奥。大切な宝物を隠すように、彼女はそこにいた。

「アステリア」

「うそ」

ベッドへ寝転び柔らかな髪をシーツに広げて目を閉じる少女は——なるほど、ここにきてようやく僕はドラコの恐怖を我が事のように実感した。

彼女は死んでいた。

死体の少女が虚ろに侵入者を見上げた。

「どうして」

「僕とハリーにはいくつか小狡い道具がそろっていてね」

「どうして」

「正直、犯罪まがいの代物ばかりだから囚われのお姫様を救いに来たヒーローというよりは盗賊に近いんだけど」

「どうして」

「ねえ、アステリア——君は、」

「どうして——どうしてッ!!」

死体が息を吹き返す。人形に感情が宿る。

「わたし、死ぬの！ わたし、死ぬのよ？ どうして!? ひどいわ——
ひどい——わたし、もう死んだのに！ 死んでいるのに！」

「アステリア」

「わたし——生きていないのに」

「君は生きている」

身を起こし髪を振り乱すその人に真つ先に触れたのはドラコだった。彼女の体温を確かめるように、千切れかけた魂を繋ぎ止めるように、無我夢中で愛する人を抱き締めた。

「君はここにいる」

「——」

「こんなにもあたたかいのだから。——私は、冷たい君を知っている。私は、君の知らない『君』を知っている。だから、断言しよう。——アステリア・グリーングラスはここに生きている」

「わたし——」

色を失った震える指が己を抱き留める男の背へと回る。存在を確かめて、これは幽鬼でないのだとすがる。柔らかな光を持った瞳がもう一人の侵入者を見据える。

「今までで一番、夢のような悪夢だわ」

「夢じゃないよ」

ひざまずいて、彼女の頬を両手で包んで。——あたたかい。触れて確かめねば安堵できないほど——眠る彼女は生を放棄していた。己から死へと向かおうとしていた。……震えているくせに。泣いてしまおうくせに。

「夢でしか生きられないなんて——そんなことは僕たちが言わせない」

ほろつと、滴が長い睫毛にはじかれ滑り落ちた。一粒だけのそれは、泡沫のように胸元のリボンへと吸い込まれていった。

「ほんとうに……?」

「ああ」

「マリアなの?」

「君のマリアだよ」

「ドラコお兄様?」

「君のドラコお兄様だとも」

「わたし——わたくし——」

ためらいから宙を彷徨う彼女の手を同時に掴む。ドラコと示し合わせてニンマリと笑う。

「攫いに来たよ、眠り姫」

「——」

パツとアステリアの瞳が開いた。丸い虹彩の中に僕たちの姿を写すアステリアは、間違いなく僕たちが知るままのアステリアだったし、人間の顔をしていた。不器用で、笑っちゃうくらい真面目で、一生懸命で、ときどき年相応の愛らしいはにかみ笑いを見せてくれる——かわいい普通の女の子。アステリアはただの女の子なのだ。

だから、わかる——アステリアの枷ははまだ彼女を棺に繋ぎ留めている。

「わたくし——ごめんなさい。そしてありがとう、とても嬉しいです。だから、きつと逃げて」

「——君は、共には来られないの?」

「はい。わたくしはお二人と共にはゆけません」

「どうして? ——どうして、君は殺されようとしているんだ」

彼女と、そしてドラコを取り巻く問題のすべてへの核心だった。追いつけてきた真相にチェックメイトを打つときが来た。

「奴等は——君の家族は、君になにをさせようとしている？ 君はいつたい、何の犠牲になってるんだ」

アステリアは——笑った。

「血です」

『血』

「わたくしの血が、必要なのだそうです。延いてはわたくしの身体そのものを——わたくしの呪いを、切り刻んで研究なすりたいたいだそうですわ」

「——」

——嗚呼、なんて。無慈悲。

ようやく繋がった。『前回』に比べ、これほどに激変した彼女の境遇。彼女の価値。彼女の人生とその末路。どこからずれたのか——最初からだ。

アステリア・グリーングラスが血の呪いを持って生まれたそのときから、彼女の運命は彼女に牙を突き立て致死の毒を注ぎ続けてきたのだ。

「血の呪いを持つ者はとても少ないのですもの。ええ、貴重なサンプルと言えるでしょう」

「そんな、ことが——許されるわけ——」

「許されるのです。『あの人』の作る新世界では」

ぐつと拳を固めた。血と共に僕の身を巡ったのは、ただただ純粋な怒りだった。ヴォルデモートと、そして——アステリアへの。

「どうして——どうして逃げないんだ、どうして抗わない!? どうして助けを求めない!」

ここにいるのに。君の手を掴もうともがき続ける男がすぐ側にいるのに。君を愛しているのに。君に生きろと願っているのに。——ドラコ・マルフォイは、ただそれだけを祈り続けたのに。

「だいきらいでした」

声はか細かった。けれども、芯を持ち突き通っていた。

「この血がきらいでした。この身がきらいでした。わたくしはわたくしの呪いを呪いました。わたくし自身がわたくしを恨み蔑み不要なものとして殺そうとしていました。わたくしこそが——わたくしを否定し嫌悪した」

アステリア・グリーングラスは、アステリア・グリーングラスがだいきらいだ。

「それを——求められた。周囲も、家族も、そしてわたくしも、嫌いだ。厭った血を必要とされた。わたくしの個そのものは無価値であると断じ、よりによってもっとも不快な部分を認められた。どうしてでしょうね——わたし、それだけで——死んでしまおうと思ったのです」

「……………」

「とても、必死なのです。それが伝わるのです。面白半分でわたくしを弄くり回したい方も当然いらっしやるでしょう。ですが、『あの人』は——」

あの人、と——アステリアは己を殺そうとしている存在を憐憫の声で呼んだ。

「助けたいのでしょようね。きつと、わたくしと同じような——呪いに生きた誰かを」

「アステリア……」

「わたくし、はじめてだったのです。誰もが厭ったこの血を求められたのは。——わたくし自身が見捨てたわたくしを、価値あるものとして見る人がいた。ただ、それだけのことなのです」

空々しい微笑み——少女の吐露を受けて、男の瞳がゆるやかに開く。冷たい光がそこにある。氷の瞳が熱を持つ。

「その上——その上、なんて幸福でしょう。大好きな人たちが、墓場にまで会いに来てくださった。この死躯に再びあなたたちに触れる誉れをくださった。——十分です」

「アステリア」

空々しく悔いのひとつも見せてくれない薄情者に、プツンと、ドラコの理性は呆気なく切れた。

「アステリア——時々、君は、僕を怒らせることに関しては天才的だ。その才能だけはマリアすら上回る」

「……ドラコお兄様？」

「はじめて、求められた？ はじめて、認められた？ ——僕が、

いつ、君の呪いを疎んだんだ？」

「……………」

「僕は君の呪いを欠点のように扱ったか？ 否定をしたか？」

氷の中でごうごうと炎が荒れ狂っていた。今にも彼の怒りが溶け

出して、少女を呑み尽くしてしまおうかと思った。それを真つ直ぐに向けられたアステリアは、人間のまま人間らしく硬直していた。

「君はどうも、重要なものほど遠くへ置いてしまう悪癖があるからな——何度だって、しつこく、執念深く、繰り返してやろう」

彼の本質は蛇だ。狡猾で、目的のためならば手段を選ばない。そのためならばどこまでも残酷になれる。——一度でも捕らえ、愛したのならなにがあっても逃がさない。

「僕は、君を、愛している」

こんなにも自分勝手に欲だけを煮詰めた愛の言葉^{エゴ}を、僕は生まれてはじめて聞いた。

「ドラコ・マルフォイは、アステリア・グリーングラスのすべてを愛している」

「——あ、」

アステリアの瞳から再びほろほろと意地が剥がれ落ちた。仮面の向こうの無防備な少女が、大口を開けていかる蛇の前にさらけ出されようとしていた。——ほうら、捕まった。

「目も、耳も、鼻も、唇も、髪も、指も、肌も、声も、心も——君の大嫌いな呪いも、僕が愛している」

「わたし、」

「僕が望んでいる。僕が慈しむ。僕が抱える」
「待つて」

「さあ、アステリア。スリザリンらしく利益で決めてしまえ。君のすべてを世界一愛してる男とこれからを共に生きるのか、君の嫌いな部分だけを求める連中と愛のない心中を遂げるか。——どちらが君に

とって幸福だ？」

アステリアは動揺の眼差しを咄嗟に僕へと逃がした。しかし残念かな——僕はこの男の共犯者なのだ。蛇に目を付けられた乙女イヅメに逃げ道なんてものはとつくにない。

「アステリア、君ばかりが求めてほしいって駄々をこねるのはずるいと思わないかい？——君からも、求めてみてよ」

「マリア」

「アステリア——君は、どうしたい？」

ぐるぐる、ぐるぐると、愛に追い詰められた少女の冷静ぶつた思考を壊していく。それでこそ、本音が見える。高く厚くそびえていた壁の向こうの声無き悲鳴を引きずり出す。

「わたし……生きていても、役に立てません」

「ああ」

「永遠にお荷物です」

「かもね」

「お金がかかります」

「マルフォイからすればこれほど些細な問題はないな」

「この身は永くないのです」

「なら、なおさら手放せないね」

「わたし——わたしは——」

そして、丸裸のアステリアは答えた。

「生きたい。死にたくない」

——やっと、僕たちの小さな少女を取り返した。

「生きよう」「一緒に」

「キャツ——」

アステリアをベッドから抱き上げる。なんて華奢な身体だ。ハイマイオニーよりも……もしかしたらジニーよりも、軽い。こんな体躯で、気力だけで立ち続けて、崩れないはずがあるものか。よくも僕たちのレディを私利私欲のモルモットなんぞに仕立てあげてくれたものだ。この借りは必ず返してやる。

「ま、待って、マリア」

「……マリア」

「しかたないだろ？ 君には前衛を務めてもらわなくちやいけないんだから。一丁前の嫉妬はひとまず置いて、僕の杖で存分に露払いしてくれよ」

「チツ、今回だけだ」

「我ら王子にあらず、盗賊なり——てね」

「マリア、マリア、聞いてちょうだい」

首に回ったアステリアの手が弱々しく背を叩くので、そろって彼女を見る。

「わたくし、ここから動けないの」

「うん。だから、僕が抱き上げて——」

「そうではないの。——繋がれているの」

アステリアが示した指の先には、ネグリジェから伸びる脚と白い蔦のようなものが絡む足首があった。皮肉にも、彼女の蒼い肌に白の鎖は儚く美しく見えた。

「なんだ、そんなこと。こういうときは、エマン——」

「待て、マリア。魔法は使わないほうがいい。能力ある者が見れば痕跡を追われる。こういうった場合はマグル式だ」

杖なしのままエマンシパレを唱えようとした僕をさえぎり、ドラコがシリウスのナイフを使って蔦を切る。既視感。——ああ、そうか。そういうことだったのか。

「……？　なんだ、ニヤニヤして。きもちわるいぞ」

「とことん君たちって似た者親子だと思っただけだよ。そしてこの顔はニヤニヤしたって見られる顔だ。母さんそっくりの美人なもの」

軽口を叩き合って、改めて身一つのアステリアを抱き上げる。いつかの夜のように、アステリアはぐったりと僕へ全身を預けてくれた。そしていつかの夜とはちがひ、彼女の顔がはつきりと見えた。

「マリア——ありがとう」

「どういたしまして、アステリア」

「ドラコお兄様——どうか、おゆるしく下さい」
「すべてを」

どうしようもなく不器用に生きる宝物を盗んで、僕らは走った。

「——わかつてはいたけど、これは」

死喰い人らしき影を前方に確認して方向転換する。四度目だ。アステリアに絡んでいた蔦は、どうやら彼女自身の異常を感知し伝える役割も果たしていたようで——とことん実験物としての扱いだ。吐き気がする——それが切れた時点で、屋敷全体に姿眩まし防止の魔法がかけられたらしかった。

ハリーたちは無事に合流・強奪・脱出とこなせただろうか。まだだったなら……悪いことしちやつたかな。

「キリがないね」

「まったくだ」

死喰い人の二人組が通り過ぎるのを、廊下の角で息をひそめて待つ。

「……あの、マリア」

「うん？」

「こんなときにごめん下さい。けれど、目についてしまったものからです……この、傷は？」

腕の中のアステリアがおずおずと触れたそれは、胸から腰まで大きななめに刻まれたセクタムセンプラの名残だ。セクタムセンプラは闇の魔術であるため、通常の治療では完治にまで至れないのだ。ジョージの耳は骨生え薬のように生え戻ったりはしないし、僕の場合は血は止まったがごらんの通り、目に痛い芸術を残してくれた。実は時々、横になった際に肌が引きつって慢性的に痛んだりもする。それが、ドレスの開いた胸元から見えていたのだ。

「いったいなにが——誰が、あなたにこのような」

「シー……僕自身、かな」

「え？」

「因果応報ってやつ」

ニッコリ笑ってみせれば、アステリアはなおさら眉を悲しげに下げてしまった。

「痛くは……」

「レデイたち、雑談はそこまでだ。アステリアは舌を噛まないよう閉じていてくれ。走れるな？ マリア」

「もちろん」

周囲への警戒を解いて杖を握り直したドラコに続く。アステリアは揺れる瞳で僕の傷を見つめ続けていた。優しい子だ。

ああ、そうだ。アステリアを肩へ上げる形に抱き変えて、シリウスのナイフを取り出す。——ビリリッ。

「マ、マリア？」

「……オイ、いいのか」

「だって動くのに邪魔なんだもの。シリウスだってゆるしてくれよ。着る本人が死んじゃあ世話ないのだし」

「……お前はそういうやつだよ」

即席スリットデザインと化したドレスに満足に息をついた僕を見て、アステリアは真つ青で絶句するしドラコは慣れているとばかりに半笑いだった。ムカつくな、その顔。

男の慌ただしい号令やら足音から逃げながら、階段を三段飛ばしに駆け降りる。出口を探す。さすがに、今度こそ正面突破は不可能だろう。どの場所にも刺客が待ち構えていると覚悟すべきだ。

見かねたアステリアの指示にしたがって中庭方面を目指す。

「裏の花壇はダフネお姉様の個人的な財産として扱われています。そしてお姉様のご希望により直に外へ出られる門があります。さらにお姉様は干渉されることを嫌いますから、警備も他の場所よりは手薄かと。ただ——」

「——本人が待ち構えている可能性が一番高いってことだね」

中庭を抜け裏庭へと続く渡り廊下にて、その人は外界の喧騒とは無縁であるとばかりに微笑んでいた。

「思っていたとおり——その口紅、よくお似合いでいらっしやいますわ。ミス」

「……ダフネ」

涼やかに立ちほだかる実姉を見つめるアステリアを、肩を貸しながら地へと下ろす。いまだふらついてはいるものの、家族と対する最低限の矜持からか、アステリアは凜と背筋を伸ばして姉と向き合った。

「ダフネお姉様——わたくしは、」

——カラン。アステリアの言葉をさえぎるように、ダフネが黒いなにかをアステリアの足元へと放った。警戒と共に見れば、それは彼女が身に付けていたレースの手袋だった。

「ダフネお姉様……?」

「なにをしているの? はやく拾いなさい」

「あっ……」

姉の冷たい声に急かされるままにアステリアが手袋を拾い上げる。途端、姉と同じ色形の瞳が開く。ドラコが瞬時にアステリアの手元へ

と目を滑らせて、仕掛けがないかを確認する。

仕掛けは——あった。手袋の中に月桂樹を模した鍵が入っていた。

「……なんのつもりだ、ダフネ」

「お姉様、この鍵は——」

「お姉様？」

冷ややかで、心底からアステリアを嘲笑う——声。

「わたくしに、地に落ちたものを手ずから拾うような卑しい妹はおりませんわ。それは侍女のすること。さあ、拾ったのならば主人の手に早々に返しなさい。——名も知らないあなた」

ハツと。息を呑む。月桂樹ダフネの鍵を握るアステリアの手は震えていた。姉を見るアステリアの目は焦がれていた。ほんの少し、傷付いてもいた。そして——家族への捨て切れない未練と愛情があった。

アステリアは不器用だ。ならば、その姉も——アステリア以上に不器用なのだ。

「……失礼いたします、ダフネ様。——どうか、お元気で」

誰よりも先に、力強い一步を踏みしめたアステリアに続く。ダフネの傍を通る。

ダフネの手は淑女らしく腹の前で重ねられている。目線は真っ直ぐ先だけを見ている。完璧なレディの姿だ。誰もが称賛する計算され尽くした美だ。グリーングラスが作り上げた最高傑作だ。

——唯一、手袋を失った片手の生々しさだけが、彼女の欠陥と心を表していた。

その人は振り返らない。なぜなら、背をゆくそれらはダフネに関わらぬ人間なのだから。名すら知らないのだから。これまでも——こ

れからも、ダフネの人生にあつてはならない存在だ。だから——
ダフネ・グリーングラスは見知らぬ少女を追わない。ほんのりと、ただ
だよう花の香りに口元を緩ませるだけ。

「あら、大変。……侍女でなく、泥棒だったみたいね」

次に立ちはだかったのはウインキーだ。外への門は彼女のすぐ後ろ
ろにあり、彼女はまさしく現状に置けるグリーングラスの最後の砦
だった。

「そこを退きなさい。ウインキー」

「なりません、なりません、アステリアお嬢様はお外へ出てはいけませ
ん」

「我々がダフネの管理する庭にいる、その意味がわからないのか」

「ウインキーに命じられるのはグリーングラス家の方々と、旦那様が
懇意にされる方だけです。そして、命令の優先度は——」

ぶるぶると小さな身体のすべてを使って震えるウインキーは、そし
てハツと大きな目を開くと唇をきつく噛んだ。おそらく旦那様とや
らに黙秘を命じられているのだろう。屋敷しもべ妖精の在り方は従
属と拘束だ。なんとも哀れっぽい姿だった。

だがしかし、それだけではない。形相が尋常でない。彼女は明確に
怯えていた。ハリーたちが彼女の前から逃げるのにためらった気持
ちがわかった。

「ウインキーは旦那様に命じられています。誰よりも『その人』の命に
従えと命じられています。そ、『その人』が——アステリアお嬢様をお
屋敷から出してはならないとおっしゃいます！」

小さな手を胸の前で拳にして、不幸な屋敷しもべ妖精は恐怖にあえいだ。

「ウインキーは、ウインキーは、もういやです。いたいのはいやです。磔の呪文でお仕置きをされるのはいやです」

「——ッ」

咄嗟にアステリアへと振り向けば、アステリアは口をおおって驚愕を表していた。アステリアは知らなかったのだ。ならば、最近の話か。

「アステリアお嬢様をお通しすれば、ウ——ウ——ウインキーは、恐ろしい『あの人』に、こ——こ——殺されてしまいますっ」

「ッああ、ウインキー……！　どうか、君も一緒に」

「マリアッ！」

鋭い制止の声に頬を張られた気分だった。ドラコだ。ドラコは月桂樹の鍵を手に、ウインキーを激しくにらんでいた。

「同情するな。ソレの支配権は僕らにはない。無駄なリスクは背負うべきでないし、そんな余裕もない」

「……でも、」

「屋敷しもべ妖精からすれば、主から与えられるものは死すら名誉なんだ。それが屋敷しもべ妖精という生き物だ。そうだろうか？　しもべのウインキー」

「あ——あ——」

ウインキーはドラコの眼差しに気圧され、涙を浮かべて後ずさった。ガシャリと門が不満の声を上げた。——わかっている。正しいのはドラコだ。これは、僕の悪い癖が懲りずに発症しているだけなんだ。僕にウインキーへと手を差し伸べてやる義理はないし、自分たち

のことで精一杯。これ以上は背負えない。それが現実だ。理解している。けれど——納得はできるもんか！

「ウインキー、お願いだ。共に来てくれ。できるはずだ！」

「マリアー！」

「君たちは多少なら命に抗える。僕は知っている。——ドビーがそれを証明してくれた！」

「そのとおりです。マリア・ポッター」

「——」

まるでオモチヤみたいな、剽軽な柄の靴下帽子。

小さくて、てんで頼りにならない——大好きなともだちの背中。

「ドビー」

グリモールド・プレイスの館で帰りを待っているはずの小さな友人が、地を踏みしめてウインキーとの間に立っていた。

「どうして……」

「マリア・ポッター。ドビーはマリア・ポッターのお友だちです。ですから——命令は聞きません」

「あ……」

誇らしげな顔だった。ドビーは友として、僕の『命令』を拒否したのだ。

「マリア・ポッターはウインキーを助けたい。ならば、ドビーはそれをお手伝いします」

「ドビー——」

ドビーが三度指を振る。ウインキーに三本の光の輪が貼り付く。見たこともない魔法だ。おそらく妖精だけに扱える魔法だ。

「なんだって君は——クソッ、このお人好しども！ 英雄癖も大概にしろよ、ポッター！」

「わかってる！ けど、二度も見捨てたくなかったんだ！」

「ああそうかい、なんだっていいからさっさとまとめて連れてこい！」

アステリアと共に門へ先行していたドラコが月桂樹の鍵を鍵穴へと挿し込んだ。もう少しだ。ウインキーを抱えたドビーへと振り返って、彼が立ち上がるのを待つ。

「——それは、困るな」

バチリと。目の前を火花が痛烈に焼いた。

「マリアツ——！」

「使えないしもべはともかく、アステリア嬢はお返し願わなくては」

茶色い髪に細身の体躯。気だるげでどこことなく印象に残りづらい、かげろうめいた様相——セオドル・ノットだ。悠然と笑む彼は、僕らではなくウインキーへと杖先を向けていた。

「ノ——ノット様、ノット様、お許しください、お許しください！」

ウインキーはアステリアお嬢様をお引き留めされました！ ノット様はウインキーを罰さないのです！」

「お前たちの声はどうしてこうも耳障りなんだ。ほんとうに——なんて役立たずなしもべだろう。もはや生かす価値もないか？」

「ヒイツ」

ウインキーが地面へとへたり込む。腰が抜けてしまったらしい。咄嗟に駆け寄り、小さな彼女を腕の中へとかばう。

「マリア、ウインキーは捨て置け！」

「ドラコ……」

「あれもこれも救えると思うな！ お前は英雄ハリーじゃないんだぞ！」

「――」

正しさは、いつだってナイフの形をしている。

「マリア・ポッター」

「ドビー」

再び、ドビーの背中が眼前に伸びていた。小さくて頼りないのに――おそろしいほど遠くにある。

セオドールの杖はウインキーを捉えている。

「ドビーは、自分の意志でお友だちを助けます」

――たぶん。結局のところ。

僕はどこまでも歪んだ甘えを持っていたのだ。永遠に切り離せない、魂にこびりついた呪いだ。希望はほんの少しの加減で絶望へと転化する――そんな当たり前を、当たり前に理解し損ねていた。

マルフォイの代わりである彼に殺しはできないだなんて、期待した。

「アバダ・ケダブラ」

緑の光と小さな友達の小さな手が、やわらかに僕らを包んだ。

ただいまと言うはずだった。この場所で。彼からおかえりをもらうはずだった。

「ポッター様」

小さな手だ。小さな手が四本もあるのだ。それなのに——うちの二本は動かない。

「ポッター様……ドビーは、」

「だまってくれ」

「ドビーはあたしたちのために、魔法を使いました。妖精の魔法です。触れたものを一緒に、思った場所に移動させる魔法。魔法使いの姿眩ましよりも、もつと強力な魔法」

「ウインキー、だまって」

「ドビーはポッター様を助けました。ドビーはウインキーを助けました。だからドビーは、」

「黙れと言ってるのがわからないのかッ!!」

腕の中にあつたあたたかい体を突き飛ばす。残るのは熱を喪いゆく亡骸だけだ。——ドビーの体だ。

わかっていた。どうにもならない。死んでしまったら、体温はよみがえらない。怒ろうが、泣きわめこうが、死神に祈ろうが——結末は変わらない。

「ポッター様……」

ウインキーを目に入れたくなくて、眠ったようなドビーを見つめた。

ハリー・ポッターと名を呼んで、ルーナの手で目を閉じられた『君』
——友達と呼んでくれた、人でなしの君。

「僕は、君に命をとって守られるほど——価値のある人間になれていたのか」

悔いがにじみ染みついた声だった。情けなくかすれて消えてしま
いそうだった。……消えてしまえば、よかったのに。

「——マリア！　こちらにいたのか。それもそうか、ドビーは貝殻の
家を知らな———そうか」

グリモールド・プレイスの館の先でうづくまる僕に、ドラコの手が
置かれた。介護同然に屋内へといざなわれる。ドビーの亡骸を僕の
ベッドへと寝かせる。

「弔いましょう。勇敢なる隣人を」

アステリアの声にぼんやりとうなずく。

「——海の見える場所がいい。ドビーは、自由を愛していたから」

向かう先はハリーたちとの約束でもあつた貝殻の家だ。そこから
ならば広く広く海を見渡せる。ドビーを丁寧に抱え直して、ドラコと
アステリアへと片腕を差し出す——と。

「ウインキー」

アステリアは僕の手を取ることなく、ウインキーへと人形めいた表
情で向き直っていた。

「ウインキー、こちらを」

強引に何かをウインキーに握らせる。——黒い、レースの手袋。それは。

「ダフネ——ダフネ様の、手袋です。お前も屋敷しもべ妖精であるなら、意味はわかりますね？」

「あ、ああ……そんな……あんまりです、あんまりです、お嬢様。ウインキーは受け取らない！ ウインキーは『洋服』を受け取らない！」

「ウインキー——これであなたは自由です」

「ああああ……っ」

泣き崩れるウインキーを見るアステリアの目はいつそひややかだった。ドラコによく似た、氷の目だ。——その目は僕へと標的を与える。

「マリア、あなたには彼女を連れ出した責任があります。——彼女を背負う、責任があります」

「……そのとおりだ」

ドビーを抱えたまま、ウインキーの前へとひざまずく。ウインキーはこの世の終わりとはばかりに打ちひしがれている。

僕は彼女にむごい仕打ちばかりを繰り返してきた。そして、きつと、これからも——ドビー以上に彼女のことを思いやってやることはできない。それでも。

「ウインキー。君が望むなら、僕は君をこの家のしもべとして雇いたいと思う。もちろん、嫌なら断つかまわないし、別の家のしもべになりたいのなら僕にできる協力は惜しまない。いつだって『洋服』を要求していい。……どうか、考えてみてくれ」

「ポッター様……」

涙でダフネの手袋をびちやびちやに濡らしたウィンキーが、泣き続けながらそろりと僕を見上げた。憐れなしもべへ、かろうじて笑みを作って見せた。

ウィンキーがいる限り、僕はドビーの最期を忘れないだろう。色褪せることすらない。彼女に心を砕くたび——僕は僕の過ちを噛み締め咀嚼し脳へと刻み込むのだ。僕が死ぬ、そのときまで。

「さつきは八つ当たりしてごめん。いつてくるよ。……屋敷を、任せともかまわないかな」

今度こそ、差し出した腕にはドラコとアステリアの手が重なった。向かうは海広がる慎ましい夫婦の一軒家。——友にふさわしい、最上の弔いを。

「いつてらっしゃいませ、マリアお嬢様」

姿眩ましの瞬間、聞こえた屋敷しもべ妖精の声は、それまでの悲劇をすべて忘れてしまったかのように歓喜にあふれていた。

呪詛みたいだ。

貝殻の家の前で待っていてくれた守人のビルから住所を聞き取り、無事にハリーたちと再会する。三人組は誰もが激戦を潜り抜けてきたと言わんばかりの有り様で、大忙しのフラールとルーナからローテーション式に治療を受けていた。

「ロンったらすごいのよー！ 屋敷の間取りを把握するだけでなく、誰がどこへ動くか、次はどこが脅威になるかをハリーが忍びの地図でも見るみたいに当ててしまったの！」

「まあね、ほら——ようはチェスみたいなものじゃないか？ 戦略つてやつはさ」

「あなた、それって最高の才能だわ！ クイデツチでもきつと頼りにされるにちがいないわ！ けれど、今に限ってはだまって治療を受けるのが——マリアア？ ずいぶんと上の空だけど、さつきからなにを抱えて——」

治療がロンへ回ったために、痛みの意識そらしか、治まらぬ興奮からか、小声ながらも止まらなかつたハーマイオニーのお喋りはそして尻すぼみに消えていった。ロンの怪我に夢中だったフラーやルーナも手を止め、はじめて気付いたとばかりに言葉なくドビーの遺体を凝視した。

「……ハリー、僕の毛布、持っていてくれてるよね」

「もちろん」

「魔法は使いたくないんだ。……手伝ってくれる？」

「手伝いじゃない。——僕も、そうしたい」

優秀な脳みそで瞬時に事態を理解したハーマイオニーの瞳からは、止めどなく涙があふれていた。そんな彼女の肩を、ロンが体を引きずりながら引き寄せた。

「ああ、あああ、そんな……なんてことなの……ドビー、ドビーでしよう？ ドビーなのよ。ドビーがわたしたちを助けてくれたの。あの鬼畜女の人質になりかけたわたしを、ドビーが救ってくれたのよ。わたし、素敵な靴下をいっぱいいっぱい用意して、きつとお礼をしようと思っていたのに……こんなことって」

「ドビー、まるで眠ってるみたい」

ガーゼを片手に、ルーナがふんわりとドビーの耳を撫でる。その上から、ハリーが己の物と色違いの毛布をかぶせた。

「……ほんとうにいいの？ マリア」

「ああ。母さんの形見なら、ハリー、君の一枚があれば十分だ。それに……この毛布に会いに、母さんがドビーの元を訪れてくれるかもしれないから」

そうして、家主のビルに断り、応急処置を終えたハリーと共にスコップを持って海の見える庭へと出た。会話も合図もなくもくと穴を掘る。しめつた土の中においの中に、風に流された潮のにおいが混ざる。心地好いはずもない。けれども、互いに手を休めることはなかった。そのうちに、スコップの数は三つになり、四つに増えた。口とハーマイオニーだった。

各々、思い思いに服を着せたドビーを、最後にマリアのおくるみで包んで墓穴の前へと運ぶ。ルーナが代表して祈り、全員が見守る中、再び手作業で土を被せていく。墓石の仕上げはハリーだ。ハリー操るドラコの杖で、石に『自由なしもベ妖精 ドビー ここに眠る』と刻む。

質素な手作り墓が完成する頃には陽もすっかり海との境界へと沈み、庭に出ているのは僕とハリーの二人だけになっていた。夜が運ぶ波の音が眠る妖精への子守唄に聞こえた。

「どこか頭がすつきりしてるんだ。額の傷はめちやくちやに痛むのに」

ハリーが遠くを見ながらこぼした。夜空を見ているのか、海を見ているのか。きつとそのあいだだ。——彼の中で選択は定まったのだとわかった。

「穴を掘ってるとき、色んなことを考えた」

「うん」

「グリーンガラスの屋敷で、ワームテールに会ったんだ。彼、僕に杖を

向けられてるっていうのに、笑った。『ジェームズ、やっと僕を殺してくれるのかい』——そう言った。あいつとの魔法使いの絆は、きつと、父さんとも繋がってた」

「そうだね。そうかもしれない」

足元から冷えがやって来る。現在の僕の格好といえば、泥だらけにした薄っぺらなドレスにドラコの——否、元の持ち主であるハリーのドレスローブのみだ。当たり前前に寒い。それでも、この場から動きたい気持ちは微塵も湧かなかった。

ハリーは星を映したみたいな鏡面めいた瞳で続けた。

「グリップフックとオリバンダー——僕はどちらと先に話すべきだろう」

「それは僕に聞く必要があるのかい？ ——答えはとっくに出てるくせに」

笑ってみる。笑い声が返ってくる。だって、そうだ。僕にはわかるのだ。いいや、『僕』だからわかるのだ。その緑は——決意の色だから。

「ダンブルドアは意地悪だ。遠回りさせて、ヒントなんてほんの少しで、わざとややこしくした」

「君に考えさせるためにね」

「僕は知る必要があった。けれど、求めてはいけないんだね」

「君がそう思うなら」

ふと、ハリーの瞳の輝きは、世界の境目から再びドビーの墓石へと収まった。そして貝殻の家へと移るのだ。彼は動くことを決めた。

ドアノブに手をかけ、振り返らずに愛しいひとへと乞う。ハシバミの慈悲を望み、ちよつとだけ恨めしくも思う。

「マリア、ひとつだけ答えて。なぜなら、今、この世でもっともダンブルドアに近いのは君なんだから——」

ハリーは振り返らない。彼女の目を見れば揺れてしまうから。たぶん、ハリーをほんとうに苛んできたのは、愛する片割れの瞳だ。

「僕は、間違えてる？」

マリアはたつぷりの愛情だけを込めて、とろりと瞳も声も愛に溶かして告げた。

「ああ。——だから、君ならたどり着けるよ。ハリー」

ハリーたちがグリップフックとオリバンダーと話し合うあいだに、僕たちは貝殻の家とは比較対象にもならない豪華な屋敷へと移動していた。『僕たち』とは、僕と、ドラコと、アステリアのことだ。さて、屋敷の中から出迎えてくれたのは、ドラコの母ナルシッサだった。これ以上、貝殻の家に負担をかけるわけにはいかないので、アステリアの保護は別の宛てに任せるとドラコがビルたちを説き伏せた結果だった。その宛てこそが、ここ、僕が秘密の守人を務めるマルフォイの別邸なのだ。

「つまり、ドラコ。あなたはこちらのミスグリーングラスを我が家へお招きしたいと言うのね」

やむを得ずフラワーから借りた防寒用の上着とネグリジェだけの、いかにも訳ありな姿で立つアステリアをうさんくさげに一瞥したナルシッサは、どうにか冷静に努めて息子へと再度の確認を取った。音信不通だった息子が唐突に訪ねてきたかと思えば、異性の後輩を連れ

て、かつ、その保護を頼むというのだから、母としてはそれは困惑の極みだろう。至極当然のナルシツサの不審感を隠しきれない反応に、凜然と返したのはドラコではなくアステリアだった。

「夜分遅くでありますこと、そしてこのようにはしたない格好でお訪ねしましたこと、心よりお詫び申し上げます。マルフォイ夫人。そして、正式に謝罪する名を持たぬ身であること、汗顔の至りと存じます。つきましては、わたくしのこととはどうぞアステリアと——ただのアステリアとお呼びください」

「——！」

ピンと——アステリアを運ぶためだけの存在、つまりは、役目を終え蚊帳の外だった僕すらも思わず背筋を伸ばしてしまうほどに、奇妙に空気が張った。アステリアを見定めていたナルシツサの表情がガラリと変わったからだ。

「——ドラコ。もちろん、彼女を——アステリアを、マルフォイ家が保護するこの意味を、あなた、わかって言っているのでしょうか」

「無論です。母上」

蚊帳の外が加速する。僕には理解できないお貴族さまルールが勃発しているらしい親子のやり取りに、すっかり呆けて壁のシミと化そうとしていた僕へとアステリアがクスクス笑った。困ったふうな眉がなんとも愛らしい。

「やっぱり、マリアは理解していなかったのね。今のわたくしはグリーンングラスの姓を名乗れないのです。ダフネ様のお言葉は事実上の絶縁宣言ですから」

「えっ……ええ!?!」

「そして姓を持たない子供を貴族が保護するとは、すなわち養子縁組を指します」

「エーッ!？」

「うふふ、どうしましょう。このままではわたくし、アステリア・マルフォイと名乗らせていただくことになるやもしれません。とつても素敵」

茶目つ気たつぷりにおどけるアステリアは、ほとんど死人同然の姿を見てしまった反動からかそれは精力的で魅力にあふれているが、問題はそこではない。

「おおい、ドラコ。君……いいのか？　このままだとアステリアと結婚できなくなるぜ？」

母親と難しい顔を突き付けあっていたドラコへと小声で注意を引けば、よく似た顔が同時に僕を見た。

「できるぞ」

「できるわ」

「えっ」

「はい、できます。しませんけれど」

「えっ」

お貴族さま三人から淡々と驚愕の解答をいただき、知らぬうちに体が後ずさっていた。

「結局のところは一時措置だ。結婚したいと思えば、縁を解消し関係を結び直せばいい。さすがに実妹となると問題があるが、赤の他人ならまあ、稀にある話だ」

「ひえっ」

同じ魔法界だつていうのに、とんでもないカルチャーショックを受けた。つまりは、つまり——ドラコはどう足掻いてもアステリア

を逃がす気はないという話だ。このスリザリンめ。

「余計な邪魔が入りましたが（「悪かったな！」）話を戻しましょう、母上。あなたは僕に借りがある。僕はあなたの最愛を救った。次は、僕の最愛をあなたに助けていただく番だ」

僕の茶々はまたたく間に蛇たちに呑み込まれ、親子のにらみ合いが再開した。しかし、僕もドラコも知っている。ナルシツサは——ナルシツサ・マルフォイという人は——

「——わかったわ。借りだなんだと持ち出されれば、私に反論の余地はないのだもの」

一人息子に極限に甘いのだ。

「ついていらつしやい、アステリア。まずはその信じられない格好をどうにかするとしましょう。さて、私のドレスは残っていたかしら」

ナルシツサがきびきびときびすを返す。そして立ち止まる。振り返って、ドラコへと青い目をゆるりと細める。

「……母上？」

「ところでドラコ。あなた、とんでもなく致命的でおろかな間違いをしていますよ。——私の最愛は、あの人だけではありません」
「……………」

硬直するドラコを置いて（アステリアはしきりに振り返りお兄様を気にしていたが）女性二人の背中が屋敷の奥へと消える。おいてけぼりにされたドラコは。——ドラコは。

「ママに愛してるって言ってもらえてよかったね、坊っちゃん」

「……………だまれ、ポッター」

やっぱりマルフォイはこのくらいがからかいやすくして良い。

アステリアと別れ、貝殻の家へと戻れば、面々はすっかり就寝していた。それもそうだ。時刻は深夜へさしかかろうとしているのだから。僕らのために、玄関の鍵をかけずにいてくれたビルルの気遣いに感謝しながら（忠誠の術で守られているとはいえ、気持ちの問題だ。）明かりのないリビングでドラコと二人、雑魚寝を気取る。

「ドラコ」

「なんだ」

グリモールド・プレイスの夜とはちがう背中の中の固さに、寝返りを打つ。——綺麗な顔だ。僕の死神は、今日も闇を味方にしてしまったらしい。贅沢な男め。

「ウィンキー——あんな広い家で、ひとりなんだね」

「ああ。そうだな」

「疲れたなら損得で考えてしまえ、て——うん、君、いつかで言った。いい見本を見せてもらったよ」

ドラコから視線を外し、顔を正面へと戻す。真っ直ぐ見上げた天井は暗い。なにも見えやしない。——なにが見たいのかもわからない。

「つかれた」

なにも見えないから——目をふさいだ。

「ドビーは僕のせいで死んだ」

ドラコは答えない。

「……あの時みたいにな、君のせいではない、すべては自己責任だ——で、言わないの？ シリウスも、セドリックも、ダブルドアも——勝手に守って、勝手に死んだんだって」

ドラコは答えない。

「ドビーは勝手に死んだんだ」

ドラコは答えない。——ドラコは笑っていた。

「いいや。ドビーは情け容赦なく、完璧に、君のせいで死んだ。——
——そう、言っただけでいいんだらう？」

目を閉じていたはずだった。目をふさいだはずだった。けれど、この男だけは見えてしまうのだ。天使みたいな死神だけは僕を放してくれないのだ。

「責めてほしいんだらう？ 苦しくてたまらないから、もつとボロボロに、ズタボロに痛め付けてほしいんだ、君は。別の痛みがほしいんだ。真っ直ぐ受け止めるには痛すぎるから。……難儀な生き方だな、英雄気取りのポッター」

「ひどいなあ」

「ポッターへの嫌がらせならこの世の誰よりも得意だね」

クツクと笑い合う。こんな暗闇に響く僕たちの笑い声は、もしかするともものすごく不気味に変化してるかもしれない。今ならば、ルーナよりもずっとずっと奇妙な生き物になれる気がした。

だって、こんなにも——こんなにも——

「君って、ほんとうに——ひどいや」

美しい死神の胸にしがみついて、僕は悔しさに泣いた。

炎に熱された薪が暖炉の中で弾けた。鉄格子にキラキラと火の粉が降りかかるさまは、暖色基調の室内に一際彩りを加えていた。見ているだけで芯から暖まる光景だ。この場所は、僕にとって団らんの象徴だった。たとえば——指名手配中だっというのに、あなたが顔を出したこともあつたんだ。

「ハリー？」

「こつちに来いよ」

ソファにて、毛布を膝にかけ、その上に拳ほどの厚さのある本を開いたハーマイオニーが眠たげに面を上げる。近くのサイドテーブルでは、チエス盤を覗いていたロンが暴れるナイトをつまんで僕へ指人形劇よろしく振って見せる。

——不思議と、ホグワーツの談話室でくつろぐ二人はとつくに大人の姿でいた。ロンは、アーサーお義父さんそっくりに薄くなり始めた赤毛を補うみたいに髭を生やしているし、ハーマイオニーは、依然強い意志を持った瞳に抗えない老いからの疲れを見せ始めていた。それでも、本来の年齢からすれば彼女は十分に若々しく見えるのだけだ。

——不思議と、このときの僕は『不思議』を不思議だと感じなかった。

「ずいぶんお疲れの様子じゃないか、兄弟。わかるとも、ジニーのケツは重いもんな」

「茶化さないで、ロン。ハリー、あなた、ほんとうに顔色が悪いわ。悩み事でもあるの？」

二人が当然とばかりに空けてくれていたソファのスペースへと身

を滑らせる。この空気、この時間、この声——なつかしい。

——なつかしい？　なんだって、二人のことを私がなつかしく思わなくてはならないのか。この場所に懐古の痛みは、不釣り合いだ。

「ううん、そうだね……そう……私は——」

「いいや、わかるぞ。みなまで言うな、ハリー。親友たるこの僕が、天下のハリー・ポッターの悩みの種を当ててみせようじゃないか。——ズバリ、アルバスのこと！　ンン、やんちゃ坊主のジムのほうか？

ああ、これだ！　お転婆お姫様がとうとう恋人を連れてきた、とか。どうだい？　ん？　ちがう？　ならばこれしかあるまいな——夫婦の秘密のアレコレさ」

「ロン！」

「いいかい、義弟よ……ジニーのむつつり不満にはすべてイエスで答えるのが夫婦円満のコツだぜ」

「ロン。茶化すなど、私は先ほど言いましたよ」

「ウツ——やめてくれよ、ハニー。母さんの口真似をするのは。君つてば、最近ますますソックリになっていくんだから。特に目元が」

「ええ、ええ、お望み通りにね！」

「……………ふ、ハハツ」

堪えきれず、背を丸めて笑った。お調子者のロンと、しっかり者のハーマイオニー。いくつになっても変わらない親友夫妻の軽快なやり取りに、張っていた神経のすべてがやわんでいく。安堵する。彼らの声で、彼らの姿で、腹の底にたまっていた澱みが溶けてなくなる気がした。ずつとずつと抱えて背負って掴んでくるんで呑み込んでいた重みを、今だけは手放せる気がした。

「年というのは取りたくないものだな」

「オオイ、それはいくらなんでもジジ臭いぜ、ハリー。僕たち、こんなにもエネルギーシユな若者だつてのに」

「お役所勤めと自営業のちがいでしょね。若者気取りの中年さん」

「君までそんなことを……これだから頭のお固い仕事人間は」

ぼやくロンへハーマイオニーとタツグを組んで胡乱な目を向けてみる。ロンは唇をとがらせながら髭を搔いていた。ふてくされた彼の肘が盤上のポーンへと当たり、ポーンが悲鳴を上げながら地面に転がっていった。それにまた吹き出して笑った。

「すこしは気分転換になれたみたいね」

「子育てってのは大変だもんなあ。しみじみ思うよ。七人も面倒を見るなんて、正気の沙汰じゃない。うちのローズなんか、最近は特に生気家で家にいると二人のハーマイオニーに小言を聞かされてるみたいなんだ」

「あら、ローズはとつてもいい子よ。ヒューゴのことだってよく見てくれてるわ」

「ヒューゴは姉さんがこわくて逆らえないだけさ」

学生時代のハーマイオニーを思い出し、栗毛のハーマイオニーを赤毛にしたみたいなのを脳裏に浮かべてナルホドとうなずく。不思議だ。学生の頃のハーマイオニーをこんなにも容易に思い出せるだなんて。もちろん、ロンのことも。

「それで、ハリー。いったいなにに悩んでいたの？　ほんとうに子育てのこと？」

「――」

ふと、向けられた二人の視線に声がつまった。あつてはならない違和感。ハリー・ポッターならば持つはずのない疑問。ドクリと心臓が嫌な痛みをとめない軋んだ。

私の子供たちは――どこにいるのだろう。

「……ちがう。ちがうんだ。私は――」

うつむいて、無意識に額を撫でていた。つるりとしていて——指には赤い髪が絡まった。

「とても、大切なことを——私にできることを、しなくてはならない。準備を万全にしなくてはいけない。それは私にしかできない。けれども——私には足りない」

いつだって三人で歩んできた。英雄ともてはやされたハリー・ポッター。ひとりでヴォルデモートを打ち倒した正義の人。魔法界の希望。孤独に奮闘した悲劇の男の子。——そんなわけではない。私には常に最高の友がいた。

「知識が足りない。力が足りない。発想が足りない。結局のところ、私は永遠に未熟だ」

ひとりで立てたわけじゃない。ひとりで杖を振るつたわけじゃない。ひとりでは英雄譚は完成しない。ハリー・ポッターの物語は完結しない。

「君たちの力が必要なんだ」

家族の顔をはつきりと思い出せない——気付きたくない事実から逃げるように、目の前の相棒たちへとすがった。二人は、意味を含んで顔を見合わせると、子供みたいに悪戯っぽく僕を見た。

「なーんだ。ようやく、一緒に逃げてくれ、て泣きついたと思ったのに。——君を連れて、高跳びの準備は万端だったのにな」

「望むわけがないのよね、ハリーが。ほおんど、そういうところ、私たちの親友は憎らしいわね」

クスクスと大好きな顔が笑い合う。そこに非難の色はない。同情もない。——軽蔑も、二人はしてくれない。なぜなら、ロン・ウィーズリーは、ハーマイオニー・グレンジャーは、そんなハリー・ポッターを理解し愛しているのだから。

「あなたはそちらを選ぶのね、ハリー」

「その選択、ぶっちゃけ、めちやくちやキツイと思うぜ。正直、薄情だとも思う」

責めるような口調で、その実、すべてを許している青の瞳と茶色の瞳に言葉を失う。ハリー・ポッターの理解者たちは、いつだってハリー・ポッターに厳しいのだ。ロンが肯定し、ハーマイオニーが否定する。そうして、三人の友情は堅固に成り立つ。ロンの共に逃げてやるといふ言葉はいたって本気だし——ハーマイオニーの、そうはしないというハリーへの信頼もまた、本物だ。

ああ、私は——きつと、いつか、選んだことを後悔する。それでもいい。それでいいんだ。愛する親友たちを——切り捨てた証なのだから。

「それで、私たちはなにをすればいいのかしら？」

「今から図書室へ行って、片っ端から禁書でもあさろうか。解説は君に任せるよ、ハニー」

「最初から他人任せを宣言しないでくださる？　ダーリン」

日常の延長でしかない顔でとぼける二人に、深く息を吐く。心を落ち着けて、期待の眼差しで返答を待つ親友たちへと計画について打ち明ける。

「——つまり、ダンブルドアの術に應用を利かせたいってわけね」

はじめは好奇心から、存外子供っぽく閉じた本の表紙を指で叩いて

いたハーマイオニーの眉間に、戸惑いのシワが刻まれた。彼女の反応は至極正常だ。無茶をしようとしている自覚は、私とてあるのだ。片耳で話を聞いていたロンは、再びチェス盤に乗った駒たちを混ぜながら目を閉じていた。これからハーマイオニーが理路整然と私を詰めるだろうことがわかつている顔だった。

「ハリー、いいこと？ それって、いちから術を作るに等しい行為なのよ。その上、あなたが望むのは一つじゃない。複数形。はつきり言つて、ただでさえ複雑な魔法を同時展開した上に用が済むまで維持し続けるだなんて、とても魔力が足りるようには思えない。そんなことができるのは——ダンブルドアやスネイプ恩師くらいでしょうね。そして偉大なる先生方はもうおられない」

不純物ひとつない正論だ。ゆえに耳に痛い。反論の余地を与えられるわけもなく、才女の弁に沈黙するしかない。ならば——次に口を開くのはもう一人の親友だ。

「でも、できなくはないんだろう？ とりあえず、一つ目から潰していきましょうよ。ええと——年齢線だつけ。まさか、魔法大臣が知識で過去の人間に劣るなんてことは——君に限ってはありえない」

ロンの指がわめくナイトをはじいて一手進めた。夫の迷い一つない断定に、じんわりとハーマイオニーの耳が赤らんだ。見せつけられてしまった。コホン、ウィーズリー夫人の照れ隠しの咳払いに、ひよろ長い背が押し殺した笑い声と共に揺れる。ロンの指は新たに次の駒を定めていた。

「……いいわ。ともかく、出来るところから方法を考えるとしましょう。さいわい——時間はたっぷりとあるのだし」

それから、ハーマイオニーの言葉通り、談話室にゆつたりとした時

間が流れた。ロンは依然とチェス盤をにらんでいたし、ハーマイオニーは様々な本をとつかえひつかえしては研究者よろしく羊皮紙をインクで埋めていた。こうではない、そうでもないと言きながら羽ペンを走らせるハーマイオニーと、黙考して駒をつまむロンは真逆の姿勢にありながらも息ピッタリに見えた。

親友たちの慣れた姿を眺めながら、はぜる薪の音を耳だけで数えてみる。

この時間が永久に続けばいい——そう、願わずにはいられなかった。

カラン。黒のキングが落ちて、チェス盤に白だけが残る。チエツクメイトを打った男はつぶやく。

「思ったんだけど——これって、ようはまとめてしまえばいい話なんじゃないか？　できないかい、ハーマイオニー？」

忙しなく動いていた羽ペンが机上へと置かれる。茶色い瞳は隠しきれない期待で真ん丸に夫を見ていた。

「どういうこと？」

「だからさ、ネックになるのは複数展開にハリーの身がもたないかもしれないって点なわけで——年齢線と、拡大と、守りの呪文、これらすべてをまとめて新しく一つの魔法として作り直すんだ」

シン——無音の間を、一際大きな破裂音が間抜けに裂いた。ロンの右頬を熱のオレンジが照らして、彼の名状しがたい表情をくつきりと影と灯りに浮かばせていた。

「……えーと、僕、今、もしかしてめちゃくちゃ言った？」

「ええ。めちゃくちゃだよ。とんでもなく頭の悪い愚策よ。——そして、やっぱりあなたって閃きだけは天才！」

衝撃に弾かれ、羽ペンが宙を舞う。ハーマイオニーが立ち上がると同時に机を叩いたからだ。インクを残したペン先が羊皮紙の上に落ちて、無惨なシミを作る。だがしかし、彼女の目にそれらは映らない。もう必要ない。

「いいわ、その線でいきましよう。任せてちょうだい、ハリー。私、ぜったいに力になるわ」

イキイキと目を輝かせた才女が談話室を飛び出していく。行き先など決まっている。彼女が知識欲に頬を緩ませながら廊下を走るだなんて、目的はひとつしかない。——図書室だ。

残された男たちは、やっぱり間抜けな相づちじみた炎の音に包まれながら呆然とするのだった。

「……やっぱり、君って案外、参謀が向いてるよ」

「それ、ほんとうに褒めてくれてる？」

お目当ての資料を限界まで抱えて戻ってきたハーマイオニーによる、問答無用・付け焼き刃スパルタ特訓が始まった。いつかの三大魔法学校対抗試合だったり、D Aの訓練だったりを思い出すような精力的な時間だった。楽しくないわけがない。中年三人が集まって、年甲斐もなくはしゃいだ。

「ちがうわ、ハリー。振りはこう。あなた、ただでさえ杖なしのハンデ付きなんだから、失敗したらそんな痩せっぽっちの身体なんてひとたまりもないわよ」

「ほんとうにガリガリのチビになっちまったよなあ、君。ジニーが見たら、発狂しながら家中の食料かき集めて君に食わせてるところだぜ。せつかくそんな——ま、それはいいけどさ」

ふと、ロンが備えつきの壁時計を見上げた。いつのまにか、針は長短共に真上を指そうとしていた。あれ……時計、動いてたっけ？

「——そろそろ時間かしら。目を覚まさささなくちやね、ハリー。あなたを待つ人がいるのだから」

「——」

これで最後よ。得意気にツンと顎をそらして、ハーマイオニーが杖を振る。ぶつ切りの呪文が光を放ちながらキャビネットに向かつて円をえがく。光が地に落ち、模様じみた文字をかたどる。彼女お得意のルーンが床へ刻まれる。

「見ててごらんなさい。こんなにも簡単なんだから。——なんて、強がりはバレバレかしら」

文字と文字を結び、縮小し、一つの線へと変えれば創作魔法は成功だ。術を杖のひと払いで解いたハーマイオニーは、どことなく泣き出しそうな顔で微笑んだ。けれども、彼女は泣かなかった。

僕一人では実用へたどり着くことすら不可能な魔法だ。これはロンとハーマイオニーがいたから完成した魔法なのだ。——ここからは、たったひとりで形にしなければならない。

「ありがとう。ロン、ハーマイオニー」

「どういたしまして」

「お安いご用さ、親友」

親しんだ彼と彼女より、ずっと大きな腕がまとめて僕を包む。僕の、華奢で小さな体を抱き締めてくれる。変わらないのに——こんなにも違う。

「ひとつだけ、聞かせて。これは、全部、僕の頭の中で起こってること？」

ロンは、ハーマイオニーは、揺るぎない友愛を寂寥の色でほんの少しかげらせながら答えた。

「もちろん、君の頭の中で起こってることさ。ハリー」

時計が時間切れを音にして訴える。惜しい。彼らが惜しい。愛おしい。後悔してしまいそうさ。選んだことを。この場所を捨て去ることを。躊躇ってしまいそうさ。

ずっとずっと、永遠に、あたたかな夢に三人ぼつちで停滞していた。逃げ出したい。まどろんで、瞳を閉じてしまいたい。だって、二人は僕が望めば必ず、この手を取ってくれるのだから。

——だから、僕は選んだ。

大きなハーマイオニーが頬に頬をすり寄せる。大きなロンが僕の肩を引き寄せて、髪をぐしゃぐしゃに掻き回してしまう。それにハーマイオニーがキツと目を吊り上げて、結局あきらめて笑っている。僕だけの親友たち。大好きな人たち。ハリー・ポッターに、必要な人たち。

たっぷりと抱擁を交わして、二人の手は離れる。

「でも、悔しいわね。とつても悔しい。あなたの頭の中でしか、私たち、なあんにもできないんだもの。私たちのお株をドラコに取られちゃったわ。彼のことだもの——ざまあみろ、なんて笑ってるにちがいないわね」

「その顔が容易に浮かんでくる、てのがこれまた悔しい」

いい大人だつていうのに悪ガキの顔で悪態つくロンに、子供みたいに大口を開けて笑った。談話室の出入り口から風が吹き込んだ。扉は開いていた。

「どうか、ジニーを——私の子供たちを、頼むよ」
「ええ」「任せろ」

歩き出す。目覚める。きつと、一番に見るのは行き止まりみたいな薄暗い天井だ。それから——あいつの憎たらしい顔。

「それじゃあ——さようなら、親友」

「さようなら、親友」

明日も会おう。そんな気軽さで手を振って、愛しい熱に背を向ける。声が聞こえる。だから、振り向かずに駆け出す。寒々しい明かりに目を細める。

——赤毛もとっても似合ってるわ。

——ついでに、ハシバミ色の瞳もな。

さようなら、マリア。

ドラコ・マルフォイは、人生まるごとかけて拗らせたかつての憧れ、ハリー・ポッター一味の一人として旅に参加したことを、今、はつきりと後悔した。

「いくらなんでも——命がいくつあっても足りないぞ、英雄の親友は！」

暴れる盲目のドラゴンの背にしがみつきながら、かなり情けない形相で後悔していた。

そろそろ、行動へ移そうと思う。切り出したのはハリーだ。それを聞くのは、お馴染みの親友二人と、マリアいわくのオマケ、ドラコ・マルフォイ。そして、こたびのミッションの重要案内役を務める気難しいゴブリン——グリップフック。四人を見渡せるようベッドに腰掛けたグリップフックは、憎き魔法族に利用される事実にはそれは不快感たつぷりにふんぞり返っていた。つまりは——ハリー・ポッター一行はとうとう魔法界屈指の不落城、グリーンゴッツを破ろうと立ち上がったのである。

不謹慎にも、ドラコは次なる冒険の予告にワクワクしていた。ついにこの時がきたか——グリーンゴッツ破りの伝説は、そう遠くない未来で酒の席の定番のつまみとなるのだ。主な語り部は、口も気も態度も大きいロン・ウィーズリーだ。彼の誇張癖もあって、グリーンゴッツ破りの伝説は尾ひれはびれ胸びれを盛大に盛り付けて拡散された。まさに子供憧れの英雄譚なのである。その実態が、今、ここに生の経験としてドラコへともたらされようというのだ。件の伝説の登場人物の一人として舞台に立てる——ドラコ・マルフォイにだって少年の心くらは存在する。

「もう猶予はない。ためらってられない。世界を救うだとかそんな大それた志しはないし、せいぜいが必要に迫られて、てやつだけ——こんな息苦しい世界を、次を生きる子供たちに残すわけにはいかない」

ハリーの指す子供が何であるか、それを四人は知っている。数日前に訪れた吉報——リーマス・ルーピンとニンファドローラ・トンクスの第一子、テッド・リーマス・ルーピンのことだ。ハリーはこたびも小さな命の後見人選ばれたのだ。

歓喜と共に貝殻の家へ報せを運んだルーピンは、まず一番にマリアの姿を探した。しかしマリアはとうに貝殻の家を発つていて、その行き先を知るのはドラコ・マルフォイ——そして、彼女の元こそが己の帰るべき場所であると悟るハリーだけだった。マリア・ポッターはホグワーツで旅の結末を待っている。

マリアに出会えなかったルーピンは、ほんのり寂しげに自嘲してから迷いなくハリーを名指しした。我が子の後見人になつてくれと懇願した。ルーピンにとって、ハリー以外の後見人はいえなかった。ルーピンは少しだけ——ほんのちよつとだけ、とある二人がたどった未来を知っているのだから。

新たな命の存在——新たな世代が手の届く場所に生まれている事実は、ハリーに覚悟を決めさせた。

夜明けの出発。ベラトリックス・レストレンジ扮するハーマイオニーが心底嫌そうにベラトリックスの杖を握る。まずはじめにロンの容姿を変貌させていく。次にドラコだ。ハリーとグリップフックは透明マントに隠れてついていく算段だ。

漏れ鍋を抜けて死んだような暗さのダイアゴン横丁を闊歩する。かつて新入生やその家族でにぎわっていた通りは今や浮浪者ばかりが目立ち、ノクターン横丁よりもずっとひどい有り様だとハリーには思えた。むしろノクターン横丁こそがこの鬱々とした世界の中で最も活気づいている場所かもしれない。

女帝ベラトリックスをはさむようにして男たちがまごまごと歩く。

否、居心地悪そうにまごついているのは見る影もない元ロンの男だけだ。ハーマイオニー・ベラトリックスは緊張から肩肘を張り、ドラコだった男はどうどうと高飛車にしていた。

「マダム・レストレンジ！」

一様に足を止める。ドラコがささやく。トラバースだ——死喰い人だ。かなり古い記憶をしぼり出さねばならなかったが、おそらく間違っていない。あの顔は覚えている。

「あなたがここにいるとは思わなかった。その——あなたは——とてもない失敗をして——」

「無礼者が！」

突如、腹から男へと怒声を張り上げたドラコに、ロンはともかくベラトリックスであるハーマイオニーまでもが仰天顔で飛び上がってしまう。ドラコがふんぞり返りながら一步を進める。トラバースはすっかり呆気にとられている。

「恐れ多くもレストレンジ様に向かつてなんたる口のきき方か。レストレンジ様は失敗などしておられない！」

「し、しかしだ——噂によれば——」

「噂よりも目の前の事実だ。それともなにか、貴様は『あの方』が一番に信用されているレストレンジ様に疑念があるか？ それはすなわち——『我が君』への疑問と取るが、よろしいか」

絶対的支配者の存在をちらつかされ、ブルブルとトラバースが震え上がった。それにドラコことベラトリックスの腰巾着をつとめる男は満足げに鼻を鳴らす。それはそれは完璧な、虎の威を借る小物の姿だった。

「フン、わかったのならば下がれ。レストレンジ様は大切なご用でこちらにいらっしやるのだ。邪魔をすればお前こそがご主人様よりお仕置きを受けることになるぞ」

「くっ……お前——お前、その顔、おぼえたぞ」

「光荣だ」

二度とこの顔には会えんがな——すっかり死喰い人をやり込めてしまったドラコにロンもハーマイオニーも啞然としている。しかしすぐに正気を取り戻すと、ドラコの目配せにしたがって歩き出した。ロンが呟く。君、役者とか向いてるよ。

「……昔取った杵柄とかいうやつだよ」

ここにいないハシバミの瞳の少女の無遠慮な笑い声が、小憎たらしくドラコの脳内を駆け回っていた。

「——クシユンツ」

「風邪は引きはじめが肝心ですよ、マリアお嬢様」

「ううん、ちよつと無理すぎたかな……風邪ではないと思うんだけど。そしてお嬢様はやめてくれれば」

「お嬢様はお嬢様でございます」

「頑固者め」

「主人に似たようで」

なんだかお約束になってきたやり取りを老しも妖精と交わしながらうなる。例の扉を前に僕の悩みはまだ尽きない。僕のロンとハーマイオニーと共に作り上げた創作魔法が思い通りの形にならないのだ。目覚めてすぐに Hogwarts へ戻ったというのに、なんとカールンも付け焼き刃で覚えてハーマイオニーの指示通りに刻んでい

るはずなのに、どうしてか成功してくれない。なにかが足りない。いったいなにが。

しかし、あせる僕とは裏腹に魔法の実験・特訓に割ける時間は少なくなるばかり。——というのも、ネビルを主体にしたレジスタンス勢が必要な部屋での生活を始めたからだ。避難ともいえるだろう。生徒たちの鬨いはピークを迎えていた。

「そろそろ皆さまがアバーフォース様の元から戻られる時間かと」

「今日はここまでか。忍びの地図を見せて。——よし、廊下には誰もいない。今のうちに部屋をいつもの隠れ家に変更しておこう」

後ろ髪を引かれながらも慎重にガラクタ部屋から出る。壁に再び現れた形の違う扉を開けば、そこはガラクタの山ではなく人が十分に暮らしていける内装へと変わっている。奥へ進んで、みんなに絶対に触れないよう厳守させている封印箱へと触れる。——はやく、君に会いたい。

「——マリア、ただいまー!」

「おかえり、ネビル。アバーフォースの様子にかわりはなかつた?」

「ああ。けれど聞いて。ビッグニュースだ! 最高にイカす土産話だよ。——ハリーがグリーンゴッツへ忍び込んだだなんていうんだ!」

ああ——パブへと続くトンネルの向こうから現れた満面の笑みのネビルに、安堵から笑い返す。やつと、ここまでできた。

「僕も、動かなくちや」

「マリアお嬢様?」

側にいたクリーチャーを抱き締めた。ずっとずっと、一心に僕たちを信じて寄り添ってくれたひとでなしのともだち。もう、うしないたくない。

「クリーチャー、ここまでありがとう。きつと、あと数日もないうちに最後の戦いが始まる。ホグワーツは戦場と化す。どうか、このまま——」

「ええ、もちろん——最期までお供いたします」

「クリーチャー……」

「ドビーは我々、屋敷しもべ妖精にとつての英雄です。ならば、クリーチャーはその心を継ぎます」

何度でも胸の寂しい部分を突き刺すともだちの名前を出されて、ハツと息を呑んだ。クリーチャーは決して慈愛の表情を浮かべるでもなく——どこまでも厳しく、僕を見ていた。

「若造だつて嫌つてたくせに」

「今でも嫌いですとも」

……ふふ。笑い声をこぼす。やがて声は大きくなる。次々にトンネルから戻ってきたレジスタンスのメンバーが不思議そうに首をかき上げている。うちの、女の子のメンバー——ラベンダーへと僕はゆっくりと目を合わせた。

「ラベンダー、頼みがある」

ハリーが許されざる呪文リクトを使った。その事実にはドラコは頭が痛いような気持ちでいた。もつとも、それは非難の意味合いではない。たとえばこのメンバーの中でならドラコこそが最も闇の魔術に近い存在であろうし、許されざる呪文にだってそれほどのためらいはない。ただ、英雄だつてお綺麗なままであつたわけではない現実に、身勝手に幻想が崩されたというだけの話だ。なんだかんだハリー・ポツ

ターの一番のファンはドラコ・マルフォイなのかもしれない。

トロッコが動き出す。盗人落としての滝によって三人の姿が暴かれる。次はドラゴンだ。己を繋ぐ鎖を引きずり回しながら傷だらけの巨体が暴れている。とんだトロッコ旅にもはや笑うしかない。

あわれなドラゴンを『鳴子』でおさえて、ついに本命のレストレンジ家の金庫へと忍び込む。

「カップだ！ 金色のカップ——穴熊のマークが掘られていて、取っ手が二つついてる！ 探して！」

双子の呪文と燃焼の呪いによって阿鼻叫喚と化した金庫内に、ハリーの辛々の声が響く。どうにか奥にそれらしいものを発見するが、届かない。アクシオも効かない。リーチの長いもの——グリフィンドールの剣を使うしかない。

さて、火傷覚悟でカップを手に入れても、問題は金庫内と同じくらい山積みだった。一つに、グリップフックの裏切り——ハリーからかすめ取ったグリフィンドールの剣を手には、グリップフックはここに泥棒がいると叫んだ。なだれ込んできた小鬼たちに囲まれる。逃げ場はない。逃げ場は——上にしかない。

「ドラゴンに乗って！」

小鬼たちの攻撃を受けたり避けたりしながら四人が盲目のドラゴンへとよじ登る。巨体を地へと繋いでいた鎖をロンが破壊する。天井をハーマイオニーが穿つ。そして、ハリーがドラゴンに闘志を思い出させた。

「待て、翔ぶのか？ ほんとうに？ これで？ そんな無茶——」

「みんな、ちゃんと捕まっついて——振り下ろされたら命はないぞ！」

「うそだろう!？」

ドラコの絶叫もなあなあにドラゴンが天井を力業で突き破った。飛び上がる。上へ——上へ——小さな小鬼が粒になってもまだ上へ。下を見るのもおそろしくて、しかし上を見るというのも気が遠くなりそうで、ドラコはポロポロの有り様で三人の正気をうたがった。

——英雄なんて生き物は、心底とんでもない。

空の旅は優雅さとは無縁に四人を導いた。そも、舵取りが不可能なのだ。自由の身となったドラゴンは背中に余分な荷物が四つもくっついていてるだなんて思いもしない。気づかれた瞬間に振り落とされるか、あるいは餌にされるか、だ。

ドラゴンが湖の側へと着陸しようとするのに、タイミングを見計らって水面へと飛び降りる。ようやく空の旅ともお別れだ。やはり飛行は箒に限る、とハーマイオニー以外の男たちは水の冷たさを感じながら切に思った。

「死ぬかと思った」

「ハリーに付き合つてるといつもこんなもんだぜ。そつちも似たようなものだろ？ お転婆姫のナイトさん」

湖に仰向けに浮かびながらげっそりとやつれた様子のドラコを口が雑になぐさめる。ドラゴンから遠ざかるようにして反対側の岸へと上がる。服を申し訳程度にしぼってから、魔法で乾かし護りの障壁もほどこす。

「まさに良い報せと悪い報せの二つができたってわけだ」

「——分霊箱は手にいれた。そして壊す手段をうしなつた」

そのことだが——ドラコがふと思いつ出した幸運を悩む三人へと切り出す前に、事態は加速した。ハリーの傷がヴォルデモートへと繋がり、レストレンジ家の金庫から分霊箱が盗み出された事実、奴が気付いたことを知つたのだ。

ヴォルデモートがホグワーツへとやってくる。一分一秒も時間を

無駄にはできなかつた。

「ホグズミードだ。ホグズミードからどうにか城の中へ入る方法を見つけて出すんだ」

「無茶よ」

「その無茶をくり返して、僕たちはここまでできた」

ハーマイオニーの眼前にハツフルパフのカップが突き出される。『無茶』の象徴である金色が不気味にハーマイオニーの顔を映す。

「……わかつたわ。ここで立ち止まって死ぬか、進んで生きるか死ぬかですものね」

休む間もなく一行はホグズミード近くへと姿眩ました。無論、畏はある。死喰い人と吸魂鬼が熱烈に四人を迎える。そしてあわや乱戦となりかけた場からハリーたちを救い出したのは、なつかしいブルーアイの老人——アバーフォース・ダンプルドアだった。

「どいで、その鏡を？」

知らずハリーたちの状況が老人へと筒抜けだった事実には愕然としながら、八つもの瞳が両面鏡の欠片を見つめる。

「マリアだ。あの小娘、なんでも知ってる顔をして協力しろとこれを押し付けていきやがった。気に食わねえ子供だ。兄そっくりの目をしてやがる」

マリアの導きがあった——それに、ハリーは心から喜ぶのは難しい気がした。あの子はなにを識っていて、そしてどうして独りで戦おうとするのだろう。どうして——共にいてはくれないのだろう。

疲労困憊の四人へとパブらしくバタービールと軽い食事が提供さ

れる。このときばかりはドラコもマナーなんてかなぐり捨てて食へとかぶりついた。張りつめていた神経がようやく休息を得た。

無我夢中で皿を空にする青少年たちに、アバーフォースはぶつきらぼうながらも絶えず品を追加続けた。

「——さて、腹いっぱいになったなら寝てしまえ。どうせ明け方までは動けん。夜はさっきのような目に遭う」

「僕たち、ホグワーツに行きたいんです。今すぐにも」

「寝言は寝てからだ」

「本気です。どうか、なにか手立てはないでしょうか」

グラスを磨く手を止めて、アバーフォースがジッとハリーを見る。それが、激情するハリーをたしなめるときのダンブルドアの瞳にそっくりなものだから、ハリーは途端に居心地が悪くなってしまった。それでも——そらしてはいけない。目をそらした瞬間に、彼はこちらの言葉に耳をかたむけてはくれなくなるだろう。

「なぜホグワーツへ行く」

「ダンブルドアから託された仕事がある」

「君のような半人前の魔法使いにか。それはもちろん、半人前が四人いてできるような仕事なんだろうな。え？」

「それは——いえ、けれど、僕にしか——僕でなくてはいけないんです。ダンブルドアが——あなたのお兄さんは、最期まで希望を残して——」

「ずいぶんと兄を信頼しているらしい。さて、ポッター。これまでの旅で兄は君に正直であったかな？ 兄の『君でなくてはならない』という言葉は、はたして真実か。信じられるのか。疑ったことはないのか？ 一度も？」

「それは……」

ハリーだけでなく、困惑を浮かべた四人全員が最終的に沈黙した。

特にドラコは、マリアを思い出していた。マリア——否、マリアとなる前の、この世界では自身のみが知るハリー・ポッターのことを。

君は——君のダンブルドアへの愛は、こんなにも痛み混じりだったのか。過ぎた薬を呑むようなものだ。用量を誤った薬は総じて毒になる。君は——彼の毒すらも呑み込み愛したのか。息子の名に刻むほどに。

「俺は兄を知ってるぞ。兄の残酷さも、兄が兄の思う善を成してどれほどの人間が傷付いたかも、兄の失敗も、兄の間違いも」
「……………」

ハリーの目がアルバス・ダンブルドアとアバーフォース・ダンブルドアの妹、アリアナと思わしき肖像画へと移動する。ブルーアイが緑の視線の先を追う。それだけで、アバーフォースはハリーの言わんとするところを理解したらしかった。

「兄が気にかけて人間は、大抵においてよっぽど放っておかれたほうがマシだと思われる状態になった」

とんでもなく酷い言い草だ。けれども、誰もそれを否定することはできなかった。

アバーフォースは続ける。ダンブルドアの妹への仕打ちと最大の過ちが、血の繋がった弟によって明かされていく。

「それでも、アルバスを信じるか」

そう締めくくったアバーフォースは、どこか祈るようにハリーの目を見つめた。その瞳には、アリアナの死を語る際に見せた涙がまだ残っていた。

アバーフォースから見るダンブルドアの像は間違いなく悪だ。無慈悲で冷酷だ。ハリーや皆が理想としてきたダンブルドアとはまる

でちがう。別人の話をされているようだ。——けれども、確かにダンブルドアだ。

ダンブルドアの幼さを彼だけが知っていた。そして、ダンブルドア自身、アバーフォースと同じくらい自分を悪となじているだろうことも読み取れた。

ハリーは揺れている。誰が見てもわかる。完璧であったダンブルドアのもろい部分を突きつけられて、彼が当たり前に失敗するただの人間であることを改めさせられて、ハリーの中の絶対が揺らいでいる。

だから、ハリーは。

「信じます。——マリアが、あのひとを信じているから」

ダンブルドアと同じ瞳が驚愕に開く。

「マリアは知っていた。ダンブルドアの性格も、過去も、彼の思想も、心も。その上で、あの子はダンブルドアを信頼していたんだ。ダンブルドアの暗い部分すらも共に見ていた。だから——僕はダンブルドアを信じているマリアを信じる」

無情な、間。誰も口を開かない拷問めいた間だった。

「——は、」

それを、嘲笑じみた息が破った。

「ハ、ハ——ハハハ、ハツハハハ！なるほど、そうか、アルバスではなく——君の信ずるものの先に、アルバスがいるのか。アルバスはオマケか。はは——いや、いいざまじゃないか！」

カツカと上がる快活な笑い声に、四人はそろって顔を見合わせた。

気難しい老人の印象がガラリと変わった。やがてアバーフォースは、呼吸によつて発作を静めると気難しい顔に戻つてうなずいた。

「アルバスに盲目的な人間たちよりも、よつぽど安心できる」

立ち上がり、アリアナの元へ。優しい声で妹へと「わかっているね」とささやき掛ければ、肖像画の少女も応えてうなずく。絵画の奥へと歩先を進める。そこにはトンネルがあった。トンネルの向こうから、アリアナは信じられない人を連れて戻ってきた。

「二——ネビル!」

「信じてたよ——僕は君が来ると信じてた! ハリー!」

赤い髪がなびく。首もとをくすぐって、肩を流れていく。おそろく、あの人ほど綺麗な髪ではないけれど——そして、愛するジニーのようでもないけれど、一瞬くらいならば『彼』の動揺を誘えるだろう。彼にとって、この姿がいかに残酷か——僕は理解している。

「ごめん、母さん。どうか、そちらにいたら叱ってよ」

黒い背中。痛々しくて、世界中の罪でも背負っているかのような——身勝手な愛の重さにつぶれた背中。

懸命に、かつての記憶で見たあの人の声を思い出す。

「——セブ」

「」

振り返った瞳に借り物の杖を突きつけた。

「ステューピファイ！」

「——プロテゴ！」

あつさりと閃光は弾かれた。失敗だ。うん——成功するなんて、ほんとうは欠片も思っっちゃいなかった。

杖を下ろして、セブルス・スネイプへと悪意をもって微笑む。やさしく、やさしく、その人を理想にする。これは悪意だ。だって、僕はわかってるんだ——リリー・エヴァンズの姿が、彼にどれほどの痛みを与えるか。

「さすがね、セブ。不意打ちには慣れてる、てところかしら」

「父親そっくりの悪趣味だな、ポッター」

「なんだ、騙されたフリすらもしてくれないんですか？」

ふわふわと耳を触っていた髪を払いのける。ついでに、ラベンダーから借りた女生徒用の制服を手慰みに整えたりしてみる。

無言で僕を見下ろすスネイプ先生の形相は、これまでにないほど歪んでいた。

「僕がホグワーツにいること、いつ、気付いたんですか」

「我輩が手を加えた傷薬を向こう見ずの愚か者どもに配っていただく。あれは我輩のみが知るアレンジレシピだ」

「ああ、そうか……プリンスの教科書を使ったのは失敗だったか」

彼から拝借していた魔法薬材の備蓄が一向に減らなかつた理由にも、これで説明がついた。あえて調整していたのだ、この男は。

礼を口にしたところで素直に認めやしないことはわかりきっているため、微笑むだけにとどめる。スネイプ先生の眉間のシワがさらに深まった。

「何用だ、ポッター。なぜ今さら出てきた。そのまま、コソコソ隠れ回って惨めに震えていればいいものを」

「あなたを説得したくて」

「ほほう。説得とやらのために無い知恵をしぼった結果がそれか。頭の出来までもろくでもない父親に似たと見える」

「そうかもしれない。だって、ほら、この姿なら——泣き落としくらいはできるかもしれないでしょう？」

ぐつとスネイプ先生が押し黙る。僕の緑の眼を見ながら物言いたげに唇を震わせている。しかし、言葉はない。

清々しく失敗だ。駄目で元々なんだ。

「僕の手で倒されてくれませんか、スネイプ先生」

「……ポッター」

「少しの間——かならず、決着はつきますから——そのあいだ、あなたを捕らえていたい」

「——ホグワーツが戦場になるのか」

「はい」

迷わず肯定する。たぶん、もう、一日もない。ハッフルパフのカツプが予定通りに盗み出されたならば、それがヴォルデモートの契機となるはずだ。ヴォルデモートが——ハリーに気づく。

「ハリーは勝ちます」

宣言する。希望でも予言でもない。そう——歴史は歩みを定めている。

「この戦争は、ハリーが勝ちます。だから——」

だから、すべてが終わるまであなたに安全な場所にいてほしい——
——とは、続けられなかった。彼が怒るとわかっていいるからだ。子供が親に失態をごまかすときのような、そんな情けないためらいだった。

「ミスポッター、出来るとまるで思っていないことを口にすべきではない。不愉快なだけだ」

スネイプはうなずかないと理解していながらまごつく僕に、スネイプ先生はあくまでも厳しかった。

知ってるとも。わかっているとも。ダンブルドアから生徒を託されたこの人が、校舎たるホグワーツが戦場になると知っています。僕の手を取るはずはないと。僕という卑怯ものを彼は選んではくれない

い。
だから。

「これは警告です。『あの人』は必ずあなたに接触します。——蛇に、気を付けて」

僕だって勝手をしよう。身勝手なあなたを見習って——僕のために、僕が僕の心を救うために、あなたを救ってみせる。偽善を押し付けてやる。

「ポッター」

無意味なりリーの容姿を解いてから彼へと背を向ければ、スネイプ先生はほとんどささやくような声で僕を呼び止めた。

「——傷は、痛むか」

自然と、杖を持たない手は胸に刻まれた痕を撫でていた。

「はい。とつてもいたいです」

この痛みは——死の先まで僕が持っていく。

「ハリー！」「マリア！」

予想していたとはいえ、扉を開いてすぐ目に入った片割れの姿にひっしと抱きしめ合う。貝殻の家ではそれどころでなかったから、改めてハリーのボロボロっぷりを目の当たりにして心が強烈に痛んだ。

「ほぼ一年ぶりとなると、君たちのその恋人同然のスキンシップにも感慨深いものがあるね」

「なにを言ってるんだい、シエーマス」

「僕らは血の繋がった兄弟だよ？ 恋人なわけないよ」

「そうよ。いくらマリアでもあだし、ハリーを取られたらどつちに嫉妬するべきか悩んじゃうわ」

「僕も困るな。兄弟にまるで勝てる気がしない」

ジニーとドラコから寄越された茶々にどつと笑いが起きる。レジスタンス本部はすっかり人であふれ返っていた。ジニー含め、ウィーズリーの兄弟たちが決戦の予感に駆け付けてくれたのだ。さらには、卒業したはずのチョウ・チャンやOBの何人かも、杖を手にハリーへと微笑んでいた。在校生卒業生関係なく、みなが志を一つに立ち向かう意志を固めていた。

感動にうち震えるハリーの背をたたく。

「おかえり、ハリー」

「ただいま、マリア」

ロンへと手を伸ばす。

「おかえり、ロン」

「ン——ただいま、マリア」

ハーマイオニーの抱擁を受け止める。

「おかえり、ハーマイオニー」

「ええ——ええ、ただいま！ マリア」

彼が、見ている。

「おかえり——ドラコ」

「ただいま。僕のマリア」

美しかった。創立者が残した秘宝はさびれることなく逸品であることを誇っていた。間違いなくそれはねもころごろに守られ飾られ讃えられるべき芸術だった。——世界を手にとする男が求めた、おぞましき。

金色のカップと銀細工のティアラを前に、千年の刻を生きた蛇の牙がかかげられる。

「いいわね？ 同時よ。ハリー、あなたが合図して」

チラリと横目に同じ牙を持つ男を見たハーマイオニーは、震える手をおさえて深呼吸した。男もまた、とつくに渴いた喉へとなけなしの唾を押し込んで牙を握り直した。緊張の面持ちで立ち挑む二人にハリーが厳粛にうなずく。

「——壊せ！」

牙が、その昔だれかの宝であったものへと振り下ろされる。呆気なかった——呆気なく、ヴォルデモートの魂はやぶられた。

「ハ——ハアアア……」

ハーマイオニーが腰を抜かして座り込んでしまう。そんな彼女へ一番に駆け寄り受け止めるのは、当然、恋人のロンだ。コロリと二人の手から牙が転がり落ちる。

「こんなものがあつただなんて——グリフィンドールの剣は、つまりはバジリスクの毒が重要だつただなんて——もつと早く教えてくれればよかったのに——ドラコ」

「……ほんとうに忘れてたんだ」

自身の手を離れた牙を虚ろに眺めながら、ドラコ・マルフォイは力なく答えた。ああ——まさか自らの手であの恐ろしいひとの魂を壊すことになるうとは！

「これで全員が——ヴォルデモートの敵、だな」

「ロン……あなた……」

旅の最中も、その前も、決して男の名を呼べなかったロンの言葉に、ハーマイオニーが大きく瞳を開く。ロンは居心地悪そうに鼻をかきながら続けた。

「もうそこまで来てるんだろ？　なら——ほら——今さらだ」

「……ああ、今さらだ」

ハリーがゆるりと微笑んだ。マリアが望んだとおり——命懸けの旅を経て三人の絆はいつそう強力に結ばれていた。その、マリアは。

「……大丈夫かしら」

「大丈夫だよ。——マリアなら、必ずやり遂げてくれる」

四人以外いなくなった必要の部屋の中で、死んだ分霊箱の前にハリーは今この時にも城を駆け回っているだろう兄弟と仲間たちを想った。

暗い廊下を足早に進む。共に透明マントをかぶるシエーマスがささやく。カロー兄妹の兄のほうがこの辺りを見回ってるはずだ——レジスタンス一勢はこれまで奴らと鉢合わせないよう戦ってきたの

だ。現在のホグワーツについて、もつとも詳しいのはきつと彼らだ。もしかすると、二代目悪戯仕掛人たちよりも。

「ほんとうに、君と僕だけで——？　マクゴナガルに連絡がいくまで待つてみてよ。」

「そんな猶予はないよ。そちらはパーバティとラベンダーに任せる。他の先生方のところへも騎士団のみんなが向かってる。アレクトのほうはネビルとデイーンがどうかしてくれる。——作戦首謀者の僕が、一番の危険どころを担当しなくちゃ、だろ？」

——見つけた。大柄な背中。荒々しい足取り。僕らの学舎を我が物顔で荒らすチンプラじみた男——アミカス・カロー。

透明マントをシェーマスに譲って壁に背をつけながら近付く。相手は気付いていない。どころか、千鳥足だ。どこかで一杯引っかけてきた後らしい。間抜け面でご機嫌に鼻を鳴らしている。それは良い夜だったにちがいない。ならば——夢心地のまま、ここでご退場願おう。ホグワーツは荒くれどもの酒場ではなく、子供のための学舎なのだから。

「ステューピファイ！」

後頭部へと見事な直撃だった。アミカス・カローは簡単に落ちた。シェーマスが拍子抜けだと透明マントから顔だけ出して苦笑った。

「我が寮の信条としては、不意打ちってのはどうかと思うけどね」

「決闘なんて一々してられないよ。僕ら、命を懸けてるんだから」

「君、ほんとにどうしてスリザリンじゃないんだい？」

「ハリーがスリザリンじゃないからだよ」

ビターなジョークでにこしながらアミカスを縛り上げる。男の懐から杖を取り出し真つ二つに折って投げ捨てる。杖作りの皆さんに

は悪いけど……これが無力化には手っ取り早いんだ。

ポケットの中のコインが熱を持った。ネビルからだ。ネビルチームも無事、妹アレクトの捕縛に成功したらしい。さらに、アンソニーやアーニーなど各自寮監の元へ向かっていた面々からも接触完了の旨が届いた。

「みんな——やってくれたんだ」

「伊達にダンブルドア軍団なんて名乗っちゃいけないのさ」

「言うじゃないか、グリフィンドール」

コインをにぎって、アミカスを適当な部屋へ放り込んでから行き先を変える。コインの連絡が届いたなら、ハリーたちも今に向かうはずだ——大広間へと。

「行こう、シエーマス」

「仰せのままに。勝利の女神様」

夜はますます深まってゆく。

大広間はすっかり人で溢れ返っていた。それもそうだ。全校生徒、全教師が揃っているのだから。——カロー兄妹とスネイプを除いて。

「ハリー・ポッター！ それに——マリア・ポッター、あなたまで！」

マクゴナガル先生が歓喜とも悲鳴ともつかない声をあげた。とつとつに就寝していただろうに叩き起こされた生徒たちが困惑にざわめく。ハリーの登場に下級生がワアツと沸き立つ。

静粛に——生徒の興奮を鎮めたのは、不死鳥の騎士団員として一早く駆けつけてくれたルーピン先生だった。

「ハリー、話があるんだらう？」

「——マリアからね」

打ち合わせなんてなくとも通じ合った心のまま、ハリーがやわらかに僕を見た。うん——ここからだ。ここからが、僕の戦いだ。

「これから——ヴォルデモートがホグワーツにやってくる」

そこかしこから悲痛な悲鳴があがった。何人かが泣き出した。震えて、へたり込んで家族の名を呼んだ。ひどい光景だ——ひどい有り様だ。こんなものを——僕たちが生み出した。

「ホグワーツは戦場になる。僕らは戦う。そして——君たちを、必ず逃がす」

シン——と、嗚咽を残して広間中が静まり返った。

「このために準備してきたんだ。今から僕の言う住所を覚えて。僕が忠誠の術の守人だ。意味がわからない子は上級生に聞いてくれ。——これから、ある部屋へとみんなを案内する。その扉を開けば別の屋敷に繋がっている。たぶん、知ってる人は知ってる——姿をくまますキャビネット、てやつだ。拡大の魔法でキャビネットどころか大広間くらい大きな扉になってるけどね」

「屋敷にはアンドロメダ・トンクスという婦人がいて、君たちを迎えてくれる。その後のことはすべて彼女に任せてある。なにか不都合があればその人を頼ってくれ。僕が死ぬまで——その屋敷にいれば安全だ。なぜなら、」

ひと呼吸。コリンを見た。コリンの弟デニスが兄へとしがみついていた。ジニーを見た。ルーナと共に杖をにぎっていた。

「キャビネットを通れるのは——成人未満の子供のみだ」

ひとたびキャビネットを越えてしまえば、大人に子供たちを追うことはできない。死喰い人が子供たちを食い物にすることはできない。当然——大人である僕が駆けつけてやることもできない。だから、その先はアンドロメダと他の大人たちへと任せることにした。

ダンブルドアがかつてハロウインの夜に選定のゴブレットの周りへと張った年齢線——それがアイデアの元となった。

「未成年の君たちが渡りきれぬまで——僕が必ず、君たちを護り通す」

いつの間にか泣きすする声もなくなっていた。嘆きはぬぐい去られた。

「ただ——」

唇を噛んで、不甲斐なさを噛み締める。あとすこし、時間はあると思っていた。そんなわけではないのに。いつだって、僕の思い通りに事が進んだことなんてないのに。希望ってやつはどこまでも甘く染み着いてくる。

「まだ、完成していない。術式は途中だ。だから、どうか——どうか、時間を。彼らを護りきるための時間を、稼いでほしい。大人のアナタたちに」

面々の顔を見回す。ハリー、ロン、ハーマイオニー。ネビルにDAの仲間たち。不死鳥の騎士団員。先生たち。OBの人たち。——ドラコ。

大人たちはまっすぐ僕を見てうなずいてくれた。

「成人済みの君たちはホッグズヘッドから姿くらましでできるようになっている。そこまで自力で向かってもらわなくちやいけないんだけど——」

「一緒に戦うには、どうすればいい?」

次は僕が言葉を失う番だった。目が見ていた。目が——目が——生きようとする数多もの目が。

「死ぬかもしれないよ」

「もちろん」

レイブンクローの男の子が当然顔でうなずいた。

「君たちのことまで、守れない」

「ポッターだけにこれ以上は背負わせられないわ」

ハツフルパフの女の子がほがらかに笑った。

「——死ぬ気か?」

赤いローブのその人が、胸を張って答えた。

「まさか! 僕たちは——生きるために戦うんだ」

「——」

そうだ、そうなんだ——共に七年を過ごした彼らも、ダンブルドアから等しく立ち向かう意志を継いでいた。弱者じゃない。もう——大人だ。自分の未来は、自分の生き様は、自分で決める。

「死んでしまうかもしれない。その可能性は高い。これは授業でも遊

びでも決闘クラブでもなく『戦争』だ。手加減なんてものは存在しないんだ。だから、もしも、この中に死ぬ気で戦おうなんて思ってる人がいるのなら——そう、君たちのことだよ、グリフィンドール。いいかい、それは——ぜったいに、だめだ。残るな。許さない。君が死んだとき、生き残った人間に後悔を、罪を背負わせるんだということを理解した上で、杖を取ってくれ。逃げることは恥じゃないし、誰もそれを責めることはできない。残る人も、去る人も——どちらも尊重されるべきだ」

うつむいていた緑のローブの人たちを見る。逃げていいんだ。臆病でいいんだ。君たちにとって譲れないただひとつのためだけに——戦ってくれ。

「ここから先は、自己責任だ」

『自己責任』

ひどい言葉だ。——君の言葉だよ、ドラコ。

承諾を示して、各自がいつせいに動き出す。マクゴナガル先生が杖を振って城全体へと唱える。ピエルトータム・ロコモーター。フリットウィック先生が護りの障壁で城を包む。キングズリーを中心に不死鳥の騎士団メンバーが配置を開始する。二代目悪戯仕掛人の三人組がピーブスを協力につけようと走り出す。ハグリッドがグロウプを呼びつけるため大きな一步を踏みしめて——

「ハリー・ポッターを差し出せ」

場は、凍り付いた。

「お前たちが戦う準備をしているのはわかっている。——ハリー・ポッターを俺様へ差し出すのだ。さすれば、お前たちのことは見逃してやろう」

声だ。轟音ではない。一人一人の耳へ——脳へ直接ささやくような——声。

ふと、僕はなつかしい気持ちになった。それは、僕の額に傷があった頃、魂へとささやきかけてきた哀れな男の声だった。

「俺様とて、魔法族の貴重な血を無為に流させたくはない。お前たちを殺したくないのだ。真夜中まで待ってやる。——ハリー・ポッターを捕まえ、俺様の前へと連れてくるのだ」

時が停まってしまったようだった。呼吸すらおさえて誰も微動だにできなかった。だから——

「——さて、このありがたい提案に賛成の人は？」

動こう。僕が動こう。リーダーシップだとかきれいな感情じゃない。その責任が、僕にはあるのだから。

もう一度、広間にある顔を見回す。怯えている。迷っている。思考を放棄して目を瞑っている。邪魔な僕をにらんでいる。——ハリーを見て、希望を託そうとしている。

「ポッターを差し出してる暇があるのなら、さっさと避難してしまいたいわ。戦争とかくだらないもの。アンタたちだけで勝手に盛り上がりつつ勝手に犬死すればいいのよ」

パンジー・パーキンソンだった。僕とハリーを心底から嘲笑って、名誉よりも保身が重要だとどうどうと述べてみせる。スリザリンの仲間たちへと同意を求めて微笑んでみせる、立ち上がれない彼らへ——自身こそが逃げ道の象徴となろうとしている。

君って——ほんとう——君たちの戦い方は、実にブレなくて最高だ。

「六年生までの子たちは僕が責任持って避難させます。七年生の君たちは——スラグホーン先生、あなたに案内と護衛を頼みたい」

流汗淋漓の様でいたスラグホーンが信じられないと僕をあおぎ見た。グリーングラス邸での騒ぎにいた彼だ。自身がどちらに近いか、当然、僕らが知っていることを知ってるだろう。——だからこそ。

『彼女』は生きると決めましたよ」

スラグホーンの目に理性が戻った——気がした。

「……私とて一介の教師、引率くらいはできて当然だとも。ついてきなさい、スリザリンの君たち。その次がレイブンクロー、ハツフルパフ、グリフィンドールだ。——残りたいものは、残るように」

スラグホーンが歩き出したことで停まっていた時間が慌ただしく回り出した。どきくさに紛れて大人たちに混ざろうとしている子供の腕を捕まえる。

「ああ、マリア、お願い」

「ダメだ。未成年は例外なく避難だ。ジニー、もちろん君もそうだ」

「あたし、残るわ！」

「ジニー！」

「だって——まだ、アイツのことをボコボコにしてやれてないんだから！」

ジニーの痲癩につられそうになる心を落ち着けて、怪訝に眉根を寄せた。ジニーは茶色の瞳を敵意でキラキラさせながら続けた。

「スネイプよ。マリアをたくさん傷付けたあの男を——ぜったいに許

さないって決めたんだから」

「ジニー……」

少女の愛は強烈で、どこまでもまぶしい。

「スネイプは、ここにはいないよ」

大広間にスネイプの姿はない。それが答えなのだ。——僕は諦めない。

「ジニー、そしてルーナ。君たちにはアンドロメダさんの手伝いをお願いしたい。死喰い人のほとんどは大人だけ——もしもがあるかもしれない。そのとき、ダンブルドア軍団である君たちに子供たちを守ってほしいんだ。それは、ここにいる大人にはできない仕事だ。とても重要なことなんだ。——任されてくれるかい？」

大人のごまかしだと二人には結局見透かされていただろう。それでも、少女たちはうなずいてくれた。しょうがないわね、なんて、それこそ大人顔負けの大人っぽい顔で。

「すべてが終わったら——君が殴ってやってよ。あの嘘つきを」

僕の代わりに。

「いいわ、任されてあげる。……ひとつ向こうで、一緒に戦うわ」

一年生から六年生まで、四つの寮を束ねての大移動を開始する。護衛にはナギニ打倒のため体力を温存する方向で決めていた三人組がついてくれた。ドラコは。

「——あのバカどもの姿が見えない」

「え？」

「この騒ぎだつてのにまだ寮で眠りこけているのかもしれない。……あのウスノロどもめ」

ウスノロと、手酷く称しながらもその目は如実に相手を案じていた。ああ、そうか、君——

「だから、一人でいたんだ。ずっと」

子分の一人が悪霊の炎へと吞まれゆく様を、彼は忘れずに抱え続けていたのだ。

「いっておいでよ」

「マリア」

「君一人抜けた程度で、戦力差なんて今さらだもの。好きにすればいい。……卑怯ものでお人好しのマルフォイ」

てきとうに手を振って、八階へ向けて一年生や二年生を支えながら階段を上がる。振り返りはしない。好きにすればいいんだ。臆病者の君は——勇敢に死を選んだりなんてしないと知っているから。

君を信じてる。——僕のドラコ。

ハリー・ポッターの天敵はドラコ・マルフォイである。その真実を知るのはこの世界ではただ二人、ドラコとマリアのみだ。——否。イレギュラーは三人いた。

「まさかここまでしぶとく生き残るだなんて」

「まったく同じ言葉を返そう。——ノット」

セオドール・ノット——とんでもない反則技で一種の未来を知った狡猾なる蛇。彼が杖を手にドラコの前へと立ちふさがった。かつての子分たちを叩き起こし無理やりホッグズヘッドへと連れ出した帰りのことだった。(ウスノロの元子分たちは親繋がりがりしかなかったその人が自分を容赦なく殴り付けて起こしたことに大層驚いていた。)

「アステリアは元気かい？」

「気安く彼女の名を呼ぶな。穢れる」

「ひどい嫌われようだ。困ったな——君にいつまでも生きていられると計画がくずれる」

互いに決闘のスタイルを取る。許せるはずがない——マルフォイの人間は自分のため、保身のため、権力のために媚売りもロブ持ちも犬の真似だってプライドをかなぐり捨ててこなしてみせるが、身内に含んだその人への悪意だけは許さない。

「——アステリアに、僕の名を使ったな」

どこまでも最愛に残酷だったこの男を——憎まずにはいられない。

「アレはそこまで君に話したのか」

「お前はアステリアと僕が懇意の仲であることに目を付けた。彼女の優しさを利用した。——その身を帝王へ捧げれば僕の命だけは保証すると契約を持ちかけたんだ。ゲスが」

「オイオイ、君が言えた口か？ どうせ同じ穴の貉だろうに。なあ——スリザリンのマルフォイ」

スリーカウントも捨てて呪文が飛び交う。セオドールは容赦なく唱えた。——『アバダ・ケダブラ』

「お前……」

「僕は許されざる呪文だったためらいはしないよ。人を殺せる。君を殺す。——さて、死の呪文を覚えた僕の杖に、その真っ白で赤ん坊みたいな杖はどこまで持ちこたえられるかな」

打つ——打つ——打つ——『彼』の瞳のような緑が稲妻のごとく飛び乱れる。ドラコは己の脚力だけで避けて回りながら齒軋りした。ああ、まったく、これだから——

「馬鹿の一つ覚えはタチが悪い！」

そして、足元を自ら爆破させて飛び上がった。衝撃を上乗せして彼へと振り下ろす。——拳を。

「ツハ——!?!」

セオドールは吹っ飛んだ。ドラコの正拳によつて。セオドールは非常に混乱の極みにあつた。だって、あいつ、魔法使いなのに！

そのまま、セオドールの杖を奪いあげたドラコはフルガーリによつて男を縛り上げた。この時代ではまだほとんど使われていない魔法だ。こいつに反対呪文はわかりやしないだろう。

馬乗りのにのし掛かり、あの夜と同じくセオドールの喉元へと杖先を差す。もう、ここにドラコの凶行を止める『彼』はいない。

「いいか、クソガキ。よく覚えておけ——拳は時に、杖より強い」

散々、ポッターとグレンジャーの『マグル混じり』にしてやられてきたドラコだからこそ言える言葉だった。それはもう——苦い思い出と共に。

「戦いが終わるまで寝てろ」

「僕を殺さないのか？ 臆病者め。どんなに抗ったところでこの戦争

は君たちの敗けだ。未来の僕がそう言ったんだ」

自信満々にせせら笑うセオドルへと、ドラコはまったく同じ笑みを浮かべた。自分自身に翻弄され狂わされた男へと、めいっばいに憐れんでやった。

「いいや、ポッターが勝つ。絶対にな」

「……………」

「君たちの敗因を教えてやろう。英雄気取りの厄介さを知らなかったこと。未来はただ一つだけだと思いついたこと。そして、これがもっとも大きな要因だ。——ネビル・ロングボトムをあなどったこと」

「なに——」

まったく思いもしなかった名に目を見開いたところで、セオドルの意識は落ちた。杖を振って適当な部屋へと男を放り捨てたドラコは、イトスギの杖を撫でながら答えた。

「殺しはしないさ。この杖にそんなことはさせられない。——『それは、僕だけのものだ』」

ドラコ・マルフォイは罪を犯した。置き去りにした場所で——罪を犯した。

爆発音。

キヤアアアッ！ 手前にいた女の子が頭を抱えてしゃがみこむ。城が揺れる。誰かの怒声が響く。——戦争が始まった。

とつさに窓を探して、この部屋にそんなものはないのだと歯を食いしばりながら目の前へと向き直る。まだ——まだ、中にまでは入られていないはず。だがしかし、このままでは。

「マリア、まだなの!？」

「もうすこし——あとすこし——文字が円にさえなれば——」

「廊下はもう満員だぜ!? もしもこの状態で押し入られたりしたら——

——ほんとうに完成するのによ、それ!」

「する!! ぜったいに!」

二人の怒声に怒声で返しながら、はじめから術式を組み直す。何度も何度も『僕』の親友たちと確認して完成させた魔法だ。成功しないはずがないんだ。

キャビネット以外のガラクタは隅へと追いやられ、一度に十人は通れるだろう大扉を前に試行錯誤する。

「なにが足りない……なにが……」

「ポッター!」

「マクゴナガル先生……」

「敷地の全てにバリケードを築きました。しかし、それをもつてしても三十分が限界です。それまでに……まだ終わらないのですか?」

マクゴナガル先生の失望が混じった声色に唇を噛んだ。ふがいない。情けない。みつともない。あれほどの大口を叩いておいて。このままでは——このままでは——

涙をためて弟らしき下級生を抱き締める少女と目があつた。

——だめだ！ 不安になるな。弱気になるな。顔に出すな。大人が揺ればそれはかならず子供へと伝染する。ウソだっていい。無理やりだつていいから——

「間に合います！」

笑笑!!

「完成は見えているんです。間に合わせます。一人だつて死なせません。ダンブルドアの名に誓つて」

「マリア……」

もう一度。深呼吸する。焦つてはいけない。丁寧に——慎重に——思い出せ、親友の声を。彼女の杖使いを。

「スリサズ、ライド、ゲボ——」

扉へ向かつて杖なしで唱える僕にマクゴナガル先生が瞠目した。今さらだ。これは総力戦なのだから。もう、出し惜しみはなしだ。

「——フサルク・ルーンですね」

宙へ浮かび、いずれ地面へと刻まれる三文字を眺めて、ポツリとマクゴナガル先生がこぼした。

「あなた方の中で古代ルーン語の教科を取っていたのは……」

眼鏡の向こうの伶俐な瞳がハーマイオニーを捉える。

「なるほど。『危険回避』に『移動』、『ギフト』ですか。それらをませ

こぜにして、一つの術式へと昇華させることで術者への負荷を最小限にしたのですね。実に見事です。そして——まったくもってとんでもない！ とんでもなくリスキーな創作魔法ですよ、これは！ もしも失敗状態で過って発動したりなんてすれば、あなたの中身ごと吹っ飛びます！ 慎重な彼女の思い付きとはとても思えませんから——ええ、とんでもなく突拍子もない発想をする子が側にいたのでしよう」

女史の目は次にロンを見ていた。マクゴナガル先生に見つめられる二人はまったくわけがわからないと顔に書いていた。……一目で見抜くなんて、やっぱりいくつになっても敵わないな、先生方には。

「さて、ミスポッター。ところでそれは最終的にどのような形になるのですか」

どことなく先生から知識欲としての好奇心が見えて、それが難題を前にしたときのハーマイオニーにそっくりなものだから、なんだか吹き出してしまいそうになった。

「円になります。字と字が結び付いて、形を変えて……」

しかし、ルーン文字は目の前で拡散する。結び付かない。何度ころみてもここで失敗する。どうして——ッ

「——ウィルドが足りないのでは？」

「え？」

「ブランク・ルーン。空白ですよ。文字ではありません。ウィルドをはきむことで他のルーンへの強調になります。正規のルーン魔術でしたらそこまでは含みませんが——本来は省略して使うのが当然のものですから」

バチツと。頭の中に稲妻が走った。

「——『省略』!!」

そうだ。僕のハーマイオニーは文字と文字を結びつけて、そして縮小していた。結び目には空白があった。『空白』という意味があったのだ!

「それだ——先生、ありがとうございます!　ほんとうにありがとうございます!」

「ま、まあ……ふふ」

思わずマクゴナガル先生へと両手を使って手を取れば、老魔女はまるで少女のようにやわらかくはにかんだ。

できる——完成する——間に合う——!

「スリサズ、ライド、ゲボ——あいだにウィルド、縮小——円をかたどれ——扉よ開け!」

キャビネットの扉は——開いた。

ワアアア!　歓声が上がる。我先にと駆け出そうとする子供たちを制して一年生から通らせていく。

「みんなを無事に渡し終えるまで、僕はここから離れられない。術者の僕が離れてしまえば扉はしまる。——僕と子供たちを、どうか守り抜いてほしい」

「「もちろん!」」

頼もしい顔つきが三つ、笑顔を乗せてうなずいた。

「先生、ありがとうございます」

「紐解いてしまえば実に簡単なロジックでした、ポッター」

「ええ、あなたにとつてはそうかもしれない。一生かけても、僕は勉強不足のままだ」

「たとえ杖なし魔法を習得し得たとしても——ヒトである限り、我々は常に勉強不足です」

先生の含みを持たせた厳しい言葉に空笑う。ハーマイオニーが瞳を輝かせながらマクゴナガル先生を見上げた。

「わたし、マクゴナガル先生がルーンにもお詳しいだなんて知りませんでした。これだけ博識でいらっしやるのに、どうしてレイブンクローの寮監をされなかつたんですか?」

胸を張って。背筋を伸ばして。誇りに眼鏡をかけた鼻を高々と上げて。老魔女は悠然と微笑んだ。

「それはきつと、あなたがグリフィンドールを選んだ理由と同じでしょう」

さあ、次の十人も通ってくれ——！ 張り上げた声に、ニッコリと笑顔で返した顔は二つだけだった。ジニーとルーナだ。その後ろには誰もいなかった。

「あたしたちで最後。——完璧よ、マリア」

「うん。かつこよかったよ。マリアのおかげでみーんな助けられたもん」

「ジニー……ルーナ……」

少女たちが労いを込めて僕を抱きしめてくれる。ホグワーツに残

る最後の子供として、キャビネットへ足をかけて、振り返る。

「マリア——あたし、さよならは言わないわ。また会えるものでしょう?」

「ジニー」

きゅつと、胸の奥が締めつけられ僕に別れの痛みを思い出させた。脳へ、魂へ焼き付けるように彼女を見つめた。ジネブラ・ウィーズリーはあふれるほど美しかった。

「……さようなら、ジニー。愛してる」

「ええ。あたしも愛してる、あたしのマリア姉さん。——また、ね」

すれ違う別れの挨拶を最後に、戸を閉める。キャビネットを封じる。『また』、はないんだ、ジニー。これで——もう——

「——待て」

誰もいない? 感傷は一瞬にして吹き飛んだ。

どうしていないんだ。——ハリーたちは、どこへいった。

迷いなく忍びの地図を取り出し広げた。あちらこちらに知った名前が飛び散らかり、 Hogwーツ城内の様子はとも見られたものじゃなかった。——そう、城内は。

城の外。初代悪戯仕掛人でなければまず地図へ書き込んだりはしないだろう、外れにある屋敷へと目を移す。三つの名前が固まって動いている。よく知る三人の名前だ。そして、その先——

セブルス・スネイプと『トム・リドル』が向かい合っていた。

走る。走る。走る。炎が上がっている。閃光が頬をかすめていく。肖像画が吠え、巨人が足を踏み鳴らして、悪魔の罫が人食い蜘蛛を絡め獲る。空を埋め尽くすほどの吸魂鬼を数多もの守護霊がなぎ払う。ピーブスがシャンデリアを落として回っては雄叫びをあげている。

誰かが倒れていた。飛び越えた。誰かが死んでいた。——飛び越えた。

走る。走る。走る。走る。走る。——セブルス・スネイプは、涙の筋を残して目を閉じようとしていた。

「だめだッ!!」

ハリーを突き飛ばして、懸命に彼の首の傷をおさえた。

「だめだ、死んじやだめだ、ぜつたいにだめだ！ そんなの許さない——許すもんか！ もうアンタに勝ち逃げなんかさせるもんか！」

「マリア……？」

「いやだ、ちゃんと生きろ、生きてくれよ！ 僕、言えてないんだ——まだ、あなたにお礼を言えてない！ うらんでやるぞ、ここで死んだりなんかしたら、地獄まで追いかけてやる！ しつこく食らい付いてやるからな！」

「マリ——」

「行きましょう、ハリー」

「でも、」

「行くのよー！」

足音が遠ざかっていく。どうでもよかった。そんなことはどうでもいい。弱々しくも男の心臓の音は確かにここにあるのだから。間に合う。引き上げられる。今度こそ、暗闇からあなたを。

どうか——約束を守ってくれ、ダンブルドア。

「——」

歌だ。

すべての人間が武器を手から落としてしまうような。争うことを忘れさせてしまうような。

歌。

いつかで少年の心を震わせた歌だ。
愛する主人の追悼をうたった歌だ。

愛と——別れの歌。

フォークスが、涙を流しながらスネイプの傍へと降り立っていた。
——その、かたわらには。

「……君が、つれてきてくれたのか？ ——ヘドウィグ」

愛しくてやわらかくてなつかしい真っ白な相棒が、愛らしくホウ、
と鳴いた。

奇跡だ。これは奇跡だ。一度は絆を断ち切った君が——運命を導
いてくれた。

ヘドウィグが見守る中、無垢な瞳を僕へと向けるフォークスに懇願
する。

「フォークス。君の主人に忠実だった、哀れなこのひとのために——
泣いてくれ」

ほろりほろりとフォークスの涙がスネイプの傷口を撫でていく。
清めていく。不死の鳥は今にも消え入ろうとしている男のため、命を
分け与えんと泣いている。死んでいた色が——生者の色へと戻って
いく。

どうしようもなく頬が緩むのをおさえられなかった。笑っていた。
清々しかった。だって——やつと——

「あなたが死にたいと願った僕の手で、あなたを生かしてやる。それ
が——僕を置いて、僕が持つべきだったものを抱えて勝手に死んだア
ンタへの、復讐だ」

大嫌いなひとへ、一矢を報いられたのだから。

懐から通信紙を取り出す。文字が浮かんでいる。『約束は守ったぞ』

荒々しい字だ。きっと彼は書き置き次第、こんなボロ紙なんて破り捨ててしまったにちがいない。——僕も、もう、いらぬ。

ふと、彼の唇が動いた気がした。たぶん、空耳だ。風の音だとか、ヘドウィグの羽ずれの音だとか——あなたが僕をマリアと呼ぶなんて。……ぜったいに、空耳だ。

ダンブルドアは泣かなかった。許さないでくれと泣いた人はもういなかった。きっと、シリウスと同じように持つていつてしまうのだ。大切にくるんで呑み込んでしまったのだ。

残さぬ人と、残ったものと——どちらが残酷なのか僕にはわかりそうになかった。

「ダンブルドア先生、僕はあなたの言う通りにします。あなたへ忠実であります。だから、どうか——あなたも僕にください。『約束』を」

ふむ。続きをうながすダンブルドアの瞳はどこまでも優しかった。澄んだブルーだ。未練を断ち切る瞳だ。——死へと向かう、透明な美しき。

「フォークスを、しかるべき時に僕に喚ばせてほしいんです」

己の名を呼ばれたフォークスがふるりと首を回した。ふわふわと尾毛が振れて風にあおられる炎のようだった。

「しかるべき時に、僕が死ぬるように——それが、未練とならないように」

ブルーの輝きと見つめ合う。ロンにはない冷たさと深みがある。そして、もはや分かち合うもののない痛みがそこには刻まれていた。

「もちろん、君が校長室へとやってきたとき、わしもフォークスもいつだって君を歓迎しよう。——じゃがしかし、そのときにはどうやらわたしは君と話せる状態にはないようじゃのう」

自然と、僕の目線の先はダンブルドアの死んだ腕へと移動していた。心得ているとばかりに、ダンブルドアは己の腕を撫でた。

「さて、耄碌した爺ゆえ正確性に欠ける点については目を瞑ってもらいたいところじゃが——我が家にはちと面白い言い伝えがあつての。我が一族の窮地にはどこからともなく不死鳥が現れるだとかいうものじゃ。もしかすると、遠い遠いご先祖様が不死鳥の雛へとちよいとばかりピーナツなんかを分けてやってたりするのかもしれないのう」

茶目っ気たつぷりに笑うダンブルドアにつられたように、フォークスが飛び上がった。ダンブルドアの生きた腕へと留まって、無垢に僕を見た。

「きつと——わしの弟が優しい我が共犯者どのの願いを叶えよう」

腕を差し出す。炎が舞い上がる。

「ダンブルドア——私はあなたの共犯者だ」

僕の腕に留まったフォークスがクルルと鳴いた。

夜明けを前にして大戦は一時休戦へと入った。一時間——たった一時間だけの猶予だ。ヴォルデモートはそのあいだにハリーへと自ら禁じられた森に来るよう要求した。

スネイプをどうにか整えた寝床へ寝かせながら、僕はその声を遠くで聴いていた。

「ヘドウィグ、彼のことを見ていてくれるかい？ ……ありがとう。フォークスも——ありがとう。もしよければこのまま一緒に——いや、約束はこの一回きりだ。君は自由だ」

僕の肩へと留まり、とさかの部分で頬をくすぐってから炎の鳥は飛び立った。もう彼が Hogwarts へ戻ってくることはないだろう——どうしてかそう、直感的に理解した。

スネイプの呼吸を再三確認してから Hogwarts 城へと戻る。大広間は冷えきっていた。声が冷えていた。体温が冷えていた。友人と、家族と、恋人との別れがそこにあった。——人が死んでいた。

「……ジョージ」

「マリア」

寝かされたフレッドの傍へ膝をつくジョージを見下ろす。フレッドは……フレッドは——？

「……もしかして、生きてる？」

「ああ——ああ！ もちろんフレッドは生きてる。目を覚まさないけど——生きてるんだ！ 俺の兄弟たちはみんな生きてる！」

この騒ぎにも目を開かない、ジョージそっくりの顔へと触れる。冷

たい。けれど、死人の冷たさではない。——フレッドは生きている！

「どうして……」

「フレッドのやつ、調子に乗ってたんだ。何人かの死喰い人を倒して、俺たち、できるぜって——特攻仕掛けて、危うく死にかけて。聞いたこともない呪いと死の呪文が飛んできた。そこを——マッドアイに救われた」

「——」

少し見回しただけで——見付けた。マッドアイの遺体はルーピン先生の隣へと並んでいた。そして、さらにその隣には。

「どうして——彼女は——アンドロメダさんと一緒にいるはずじゃ——」

「……ジニーとルーナが向こうへ行った。だから、ルーピンを追って二人の代わりに参戦したらしい」

「そんなことって——子供がいるのに！ 小さなテデイがいるのに！

また——二人揃ってだなんて！」

たまらなくなつて、並んで眠る静寂の三人へと声を張り上げた。さめぎめしい広間に僕の怒声が反響した。肩をいからせ激情する僕をおさえたのはビルだった。

「三人とも勇敢だった。勇敢に戦い抜いた」

「勇敢——すべては勇敢なる名誉の死だって——？ 手を叩いて讃えるべきだって、そう言いたいのか」

「いいや——大バカ野郎だと、言つてやれ」

拳を握つて、身を抱える。こぼれてしまった。こんなちっぽけで痩せっぽちな二本の腕だけじゃ、どうあつてもすべての命を拾い上げるだなんてことは不可能だ。わかっているのに。わかっていたのに。

どうしようもなく――

その形が正しいことに、僕はもう気が付いている。

「……ハリーは」

「そういえば見掛けないな……まさか？」

「僕、さがしてくる」

「マリア！」

ビルの腕もジョージの視線も振り切って歩き出す。ハリーがどこにいるのか、僕は知っている。

もう、わかっているだろう。――そのときが来たのだと。しかるべきときが来たのだと。

「マリア」

森へ差し掛かった頃だった。その声は怒りに満ちていた。

アンソニー・ゴールドスタインはいつだって浮かべていた剽軽な笑みすらも掻き消してそこに立っていた。

「どうして、君が行くんだ」

「そうしなければならぬからだ」

「呼ばれているのはハリー・ポッターだ。君はハリーじゃない」

「……………」

「マリア」

振り返って、正面から彼へと向き直る。誠実な瞳だった。まぶしく純真な想いだった。――なんてものを、マリアは彼から受け取ってしまったのだろう。ひどいじゃないか。恋心なんて――僕にはどうあっても返しようがないのに。

「それでも、僕は行かなくてはならない」

「……止めても無駄なこと？」

「きつとね」

「マルフォイでも？」

「間違いなく」

アンソニーが静かに杖を下ろす。彼は笑った。きつと次には泣いてしまう。そんな顔で。

「まいったな……めちやくちやに言つてやりたいのに。そのつもりだったのに。無理矢理だつて連れ去りたいのに——死に向かつてしまう君すらも、僕は好きでたまらないみたいだ」

「アンソニー……」

「返事を、聞かせてもらえないか。もう一度」

一歩。踏みしめる。ごまかしは許されぬ。目をそらしてはいけない。向き合つて、呑み込んで——どうせ裏切るなら、最期まで残酷であるべきだ。

「僕は君が好きだよ。アンソニー。だけど、君のそれと同じ感情ではない」

「ああ」

「君に魅力がないとかじゃない。君ってかなり最高だよ。友人として側にいてくれる君はほんとうに素晴らしかったし、とてもいい人だった。僕はほんとうに君が好きだ。君との時間は楽しかった。ただ——僕の心はとつくに『彼女』のものだったというだけの話なんだ」

「……彼女？」

そして、告げる。大きな秘密。大きな過ちだ。どこかの誰かはそれを呪いと言つたし、どこかの誰かはそれを生き様と言つた。

「僕は、男として——ジニー・ウィーズリーを愛している」

アンソニーのきれいで真っ直ぐな目が開かれていった。

「一度も自分の性を女性だと思ったことはない。ずっと——男として生きていたんだ」

永遠にも思える沈黙だった。アンソニーはじつと僕を見つめて、うつむいて、呼吸をして、自分の手を見て、それから——解放された顔をした。

苦々しくて、苦しそうで——それでも、本心からこぼれたのだと云わんばかりの笑顔だった。

「なんだ、そうか——マルフォイは君が男だと知っていた？」

「最初から。自分が自分であると知ったその時から」

「そうか——そうか」

くしゃりと。ゆがむ。彼は笑っている——彼は泣いていた。

「それは、敵わないや」

背を向ける。僕は進まなくてはならない。彼を置き去りにしないではいけない。彼の記憶の中のマリア・ポッターがこれから先もどこまでも残酷な存在であるように。

「ねえ、マリア——それでも、僕の恋心は君の冥土の土産くらいにはなれるかな」

僕は答えなかった。——僕に君のすべては、もったいない。

「——それで？ 次は君かい？ ——ドラコ」

足を止める。思えば、僕らっていつも待ち伏せをしたりされたり
の仲だった。もちろん、相手をこらしめてやるためにだ。

「ハリー」

姿を現したドラコは、戦火を駆け抜けてきたに相應しいみすぼらし
い様でいた。服はどこどころ擦りきれ、血がいたるところに滲んで
いた。綺麗な顔にはアザがあつたし、髪はざんばらに、どうやら燃え
たような痕跡すら見えた。背中ほどまで伸ばしていたのが仇になっ
たのかもしれない。……残念だ、君の髪は光みたいで綺麗なのに。

「ハリー、君、死ぬのか」

男が問う。あの日と同じ声だ。あの日と同じ瞳だ。あの日と同じ
君だ。

やっぱり、君に泣かれるのは苦手だ。

「答え合わせをしようか、マルフォイ。——この世界は、なんなの」

近付く。ドラコは逃げない。臆病者のくせに。とんでもなく卑怯
なことをしたくせに。

泣いて逃げ出してしまえばいいのに。そうすれば、僕だって君のこ
とを見なくて済むのに。

「あんなに優しい死の呪文は、はじめて聞いた」

手を取った。僕の杖がそこにあった。

彼が向ける杖先を、僕は知っている。彼の緑の輝きを、僕は知って
いる。——なぜなら。

『私』を殺したのは君だね。ドラコ・マルフォイ」

思えば、ヒントははじめからあった。ルシウス・マルフォイの趣味であつたとされる、蒐集された呪具の数々。私はそれを闇祓いの一人として何度か押収したことがあるし、直接接触して確かめました。とても白日のもとへ晒すにははばかられる品ばかりがマルフォイ邸の地下には眠っていた。

なお、これらはマルフォイに限った話ではない。大抵の純血の家には代々継がれてきた秘密が隠されているものだし——たとえばノットなら時を戻すための研究、マールヴオロなら蛇舌やペベレルの指輪といった類だ——マルフォイとは特に接する機会と秘密が多かつたというだけのこと。

マルフォイ本邸の地下には、いにしえから築かれてきた彼等のみが識り得る魔法が秘されている。——その様子はまさしく。

「禁術」

ドラコの手からイトスギの杖を受け取る。ドラコは青白い肌でゆるりと笑むと、呆気なく杖を手放した。間近から見上げるその人は処刑台へ向かう罪人のような顔をしていた。

「君は言った。クリスマス朝に——僕が僕であることに怯えたあの日、僕に向かつてこう言ったんだ。どうしても受け入れられないのなら、その時は——禁術でも使つてどうにかしてやる、て」

大袈裟だと思った。臆病者がずいぶんうそぶきつぷりだと笑つた。——彼は『本気』だった。

「あれは冗談なんかじゃなかった。その言葉の通り、君はとつくに触れていたんだ。——『禁術』に」

今さらになつて迷い、ためらいを見せる手を僕から掴む。冷たく緊張した手だ。浅ましく震え、行き場をなくしてしまった手だ。

逃がさない——僕も、もう逃げない。

「この世界を作り上げたのは君だろうか？ マルフオイ」

ぼろぼろだつて美しい僕の死神は、ようやく握り返して、観念したようにうつくしく笑った。

「アステリアに、会いたかつたんだ」

血の気を失つた唇がうたう。

「もう、ここで死んでしまうのだとしたら——どうせ死ぬのなら、もう一度だけ、生きる彼女の笑顔が見たかつた。思い付く未練はそれだけだつた。——すべてを、やり直したかつた。私はその方法を識つていた」

マルフォイが秘める禁術——並大抵でない対価を支払つて、それでも成功するかわからない命を懸けた古代魔法。

ハリー・ポッターの魂は、それに懸けるに十分足り得た。

「この世界は奇跡だ。君の骨と肉、そして僕の血と欲で作りに上げた脆い奇跡だ。君の遺体を踏みつけにして重ねた希望なんだ」

あんまりにも彼が細く握りしめるものだから、杖を持っていた片手で迎えて、両手の中へと彼の手を包んだ。

「少しでも彼女の生命を延ばしたかつた。彼女との日々を延命したかつた。そのためならば君を利用しつくしてやろうと考えた。どう

せなくなる命なら、僕が貰ってしまおうと思ったんだ。すべては彼女と僕のためだった。——そのはずだった」

告解にいつぱいいつぱいで、もう手を伸ばす勇気はないらしい彼に代わって僕から男の背へと腕を回してみる。成人したつて薄い背中だ。儂い人だ。こんな薄っぺらな身の中に、なんてものを隠し持っていたのだろうか。

「こんなはずじゃなかった。君を——君が、こんなにも近くにいるだなんて。君に触れられるだなんて。それを、君が——ハリー・ポッターがドラコ・マルフォイを許すなんて」

ぐしやりと背の服を取られる。すがられる。知っている。ドラコ・マルフォイは脆い。

彼を生かすのはいつだって虚勢だ。ハリボテの希望だけで彼はここまで堪えてきたのだ。

「計算が狂った。——手放せなくなるなんて、思わなかった」

弱虫で、意気地無しで、臆病者で、卑怯もののマルフォイ。私を殺した君。——かわいいひと。

「そして、先のない私と心中したのか、君は。——バカだなあ」

ドラコを抱いたまま崩れ落ちる。とつくに服なんて互いにボロきれ同然だというのに、のんきに頭の片隅でズボンが汚れるな、なんて呟いていた。それから、シャツには君の涙と鼻水も追加だ。

「君のことばかり考えていた。生き残った男の子——ハリー・ポッターの名を聞いた日から」

「なぜなら、目的を遂げるまで僕は君をうしなうわけにはいかないし、

君には魔法界の命運がかかっている。なにがなんでも『ハリー』を手に入れたかった。アステリアのために。僕のために」

地面に座り込んで、駄々をこねる子供みたいな君の背を撫ぜる。

「アステリアと同じくらい、君がほしくて、君が必要で、そればかりが僕を支配していて、頭をめちゃくちゃにされた」

なんて、どうしようもない。どうしようもなく欠陥だらけだ。なんて——愛しい。

「君への執着に、とうとう愛なんて名前がついてしまった」

ドラコ・マルフォイは愚かだった。なまじ、さかしらに振る舞うことを覚えてしまった彼は、感情が生き物であることに死の間際を越えても気付けなかったのだ。閉心術に長ける男は、自身の理性なんて丸呑みして膨れ上がる化け物じみた本心から目をそらし続けた。……そのうちに、手遅れになってしまった。

「君と友であることが、しあわせだった」
「うん」

ひんやりとした体温とハリー同様平均より高めの僕の体温がなじむ。死者を悼む学舎は静かで、森の中は暗くて、夜明けはまだ空の向こうにあつて——今このとき、大地で呼吸をしている人類は僕ら二人だけのようない心地になっていた。

夢のようだった——魔法のようだった。

「——いつ、思い出したんだ」

かすれた声で彼がささやく。

「わからない。今もまだ、はつきりとはしてないんだ。ほんとうはずっとずっと前から理解していたような気もするし、ついさっき、君を見てそこへ至ったようにも思う。——そんな君は、いつ、『君』であることを思い出したんだい？」

土に混じって彼のおいがした。毛先が残バラになったって頬をくすぐるそれはやわらかくて優しく綺麗だ。

落ち着くにおいだ。落ち着く温度だ。

「思い出してなどない。最初から——ドラコ・マルフォイとしてこの世界で生を繋げたその時から、僕は僕だった」

いつそうつよく身を抱かれる。隙間なんて存在しなくなるように。そうしなければ形を保てないのだと云うように、ドラコは僕を捕らえ続ける。

「ずっと僕を待っていたの？ マダム・マルキンの洋装店で出逢うまで？」

「ああ。ただ『生き残った男の子』の噂を聞くだけでは、この世界の君がどう記憶を継いでいるかわからなかったから。……けれど、君は覚えていなかった。どころか、ハリー・ポッターですらなかった。——

『君』が本当の願いを思い出した時、それがリミットだと僕はマリアを見て理解したんだ」

『僕』とも僕ともちがう真つ直ぐな髪をすいて、穏やかに笑い声をあげる。つかの間を噛み締める。世界が息を潜める中、ただそこに身を寄せ合うだけのハリー・ポッターとドラコ・マルフォイがいる。

「ああ、なるほど。あれは鎌かけだったのか。……ほら、君、僕に確認を取ったじゃないか。僕の記憶がどこまであるのか。——僕を真相

から遠ざけるために、君はなにも知らないふりをしたんだ。僕の代わりにこの世界について調べておこう、だなんて——うそつき」

頬と頬を擦り合わせて、手と手を絡めて、目と目を合わせて——笑う。

「いくのか、ハリー」

「ああ」

「とどまってはくれないのか」

「君の云う『リミット』だからね」

「僕の言葉は届かないか——愛していると今ここで泣いてわめいても、君は受け取ってはくれないのか」

「受け取らないよ。すべて、置いていく」

アンソニーの恋も、君の愛も、ジニーへの誓いも、ロンとハーマイオニーへの悔いも、スネイプとの復讐も、チョウからの怒りも、喪った人たちとの思い出も、マリアを愛してくれた人たちの懇願も。

この世界で受け取ったものすべてすべて置き去りにして、痛みだけを抱えてこの身一つで向かおう——ハリーのもとへと。

君が背負うものはいっだって大きすぎるから、僕は空っぽであるくらいがちようどいい。

だから。

「ドラコ——君が好きだ」

この感情も、君に刻んで僕は手放そう。

「マリア・ポッターとして生きたハリー・ポッターは、ドラコ・マルフォイを愛している」

「——待ってくれ」

「君が好きだよ、ドラコ。ジニーに負けなくらい。ジニーと同じくらい。君に殺されたって——笑えるくらいに」

「やめてくれ」

「愛してる。友として愛してる。たった一人の共犯者を愛してる。卑怯な君を愛してる。うそつきな君を愛してる。『僕』を見て泣いた君を愛してる」

「いやだ、ハリー。それは酷すぎる。むごすぎる」

「恨めばいい。憎めばいい。そうして君は永遠に僕のことを忘れられなくなるんだ。感情ごと僕に縛られてしまえ、ドラコ・マルフォイ。」

——『僕』を、君に背負わせてあげる。僕の愛したひと」

「——ッ」

声もなく絶叫するドラコを突き放す。立ち上がって、振り向かない。もう、振り向かない。マリアとドラコの物語は——ここで終わる。

「それが、私を殺した君へ僕から贈る愛情だ。しかえし英雄を愛してしまった悪党マルフォイ」

歩いた。歩いた。視界がゆがんだ。それでも歩いた。

つまり歩いたって構わない。光なんてないから、目だっで見えなくていい。声だっでなくていい。耳だっで——

「う——う、あ、あ、ああ、ああああ……ッ」

愛する人の声が届かなくなるまで、僕は歩いた。

「僕たちは一緒に生まれてきた。二人で人生を始めた。それなら——
最期だって、二人で終わるのが道理だとは思わない？」

始まりと終わりのスニッチへ口付けようとしていたハリーは、そしてゆっくりと瞳を開いた。きれいな緑が木々の陰をすべて払ってまっすぐに僕を射抜いた。

「マリア」

「あれ、驚かないんだ」

「君はそうだと思ったから」

歩先を進めてハリーの隣へと並ぶ。彼の持つスニッチを片手ずつ取る。ハリーの手にはマリアの手が重なる。

「ハリー」

「なあに、マリア」

「こわくはないの」

「こわいよ」

「くやしくない？」

「くやしいよ。とつても」

「さびしいだろ」

「さびしいね」

「ひとりはいや？」

「うん——いやだ」

ハリーと額を預け合って、プリベット通りの物置部屋で二人きり、毛布をかぶってナイシヨの遊びをしていた頃のように、ひっそりと笑い合う。そこに英雄のハリーはいなかったし、みんなのマリアはいな

かった。ただのちっぽけなハリーとマリアだけだった。

二人だけで始まった旅は、いつの間にか三人になっていた。五人になった。十人に増えた。大勢へと変わった。抱えきれなくなった。僕たちが繋ぐ手の先は互いではなくなった。それでも——僕らの始まりはふたりぼっちだった。

「言つてよ」

「マリア」

「僕に望んで」

「マリア」

「ハリーはマリアにどうしてほしい？」

「マリア」

「僕に、どんなふうに共にあつてほしい？」

「マリア」

「僕を望んで。ハリー」

「マリア——僕は」

ぐしゃりと。緑が歪む。二人分の指を絡めて、繋いだ手の中へとスニツチを落とす。

ハリーからその言葉を受け取れるのは、きつと世界中を探したつて僕だけだ。空っぽのマリアだけだ。——僕だけのものなんだ。

「マリア、一緒に死んでくれる？」

喜んで。——そう答える代わりに、ハリーと同時にスニツチへとキスをした。

——思い出した。

「ハリー」

私が死の際に願ったこと。ようやく思い出せた。いや、初めから知っていた。私とマルフォイは同じだった。——だから、私は、『子供』であろうとした。

目を背けて、なにも知らないように振る舞い、ついには自分すらも騙しきった。我が儘にわめいて、子供の無謀さと有り余る未来に身勝手に懸けようとした。

「よくがんばったね、ハリー」

私はあなたたちを救いたかったわけじゃない。あなたたちは間違はなく死者なのだから。それはあなたたちの勇気と生き様への冒瀆なのだから。ドラコの言う通りだ。守れなかっただなんて——力のない僕の後悔は、思い上がりとあなたたちへの侮辱でしかなかった。

「父さんは誇らしいよ」

「もちろん、母さんもよ」

「さすが私の名付け子だ」

「そして私の教え子だね」

ハリーと呼んで、微笑んでくれる人たち。家族すら知らない、ドラコだけが呼べた名前を僕を呼んでくれる人たち。

「ハリーってやっぱりすごいよ」

「だろう？　　なんたって魔法界の希望だからな。はじめて穴熊の優等生さんと意見が合ったもんだ。ジョージが嫉妬しちまうぜ」

「フン、ただの無謀な愚か者だ。そうして英雄かぶりを持ち上げるのはいつそ罪深い行為であろうよ」

「なんだって？　　私の息子に何が言いたいのかな、スネイプ？」

「ジェームズ！　　セブをにらまない！」

「シリウス、君も唸るんじゃないよ」

「ポッターの皆さんは仲良し！ ドビーはそう思います」

「ホッホ、ホーウ」

「おおい、見ろよ、あれ。ヘドウィグのあのバカを見る眼差し。人間様を完全に見下していやがるぜ、アイツ……」

ああ。ああ。ああ。耳をふさいでしまいそうになる。

知っていた。知っていると。誰よりも、私こそが。

死者を蘇らせたって幸福には程遠い。ペペレルの物語がそれを示していたのに——僕は、記憶を拒んで足掻こうとした。

私は死者に手を差し伸べるのでなく、可哀想なあの子を置き去りにしたくなかっただけなのに。

「ハリー」

言葉なく、うなづく。誰の声にも答えずに、ただ見つめる。きっとハリーが見るあなたたちと僕にとつてのあなたはちがうから。

ハリーと手を繋いで、消え入るように問う。

「一緒にいてくれる？」

「最後の最後まで」

答えたのは父さんだった。僕と——ハリーの父さんだ。

緑と見つめ合う。歩き出す。「そばにいて」ハリーが MARIA へとささやく。MARIA がハリーへとささやく。

「ねえ、ハリー。どうして君が兄さんなの」

母さんがそっくりの目をパチリとまたたかせた。

「MARIA が僕に泣いたからだよ。——死にたくないって、君、泣いたん

だよ。きつとおそろしい夢を見た後に」

「そうか」

「そうだよ」

「覚えてないや」

「そうだろうね」

父さんが僕ら二人を抱きしめようとして腕を広げた。あつさりとするり抜けてしまった。まだ、触れられやしないとわかっているくせに。困ったひとだ。

「マリア、傷はいたむ？」

シリウスが忌々しいとばかりにスナイプをにらむ。もしかすると、あんな呪文をお前が創作したばかりに！　なんて思っているのかもしれない。こちららもまったく、困ったひとだ。

「いたいよ。……なんだか、嬉しそうだね？」

「そう見える？」

「うん」

「バレたか」

「嬉しいんだ？」

「きつとね」

フレッドが気が触れてるぜ！　と下品なポーズして、セドリツクからたしなめられていた。ルーピンからもしつかりと叱られていた。ヘドウィグがベシリと羽でフレッドをビンタした。

「僕——きつと、君に僕の傷が残ってしまったこと、ほんとうは嬉しかったんだ。だからこそ、後悔した」

「むずかしい話だ」

「君がわざとケロイドを癒さなかったことと同じだよ」

「そうかな」

「そうだよ」

しだれた木々が空けて、見えた。かつてはアラゴグの住処であった洞穴前にて、ヴォルデモートと何人かの下僕たちが『生き残った男の子』を待っていた。側には恍惚と主を見上げるベラトリックスと冷たい眼差しのダフネ・グリーングラスがいた。父親であるグリーングラス氏の姿はなかった。おそらくアステリアを逃がした責任を取らされ殺されたのだ。父と妹をうしなつた女は、変わらず凜と顔を上げていた。

ハリーと繋いでいた手をほどく。中にあつた蘇りの石が地へと落ちる。死者たちが消える。生者だけの世界へと戻る。

恐怖の象徴であつた男を前にして、僕はすっかり穏やかな心地でいた。もうどこも痛くなかつた。苦しくなかつた。彼への恐怖は打ち消された。——ただ、傲慢な憐憫の感情だけが胸を締め付けていた。ハリーと隣り合つて並び、真つ直ぐに男を見る。男がニワトコの杖を振り上げる。禍々しくて美しい緑が緑をつらぬく。

「——なぜ、逃げない」

力を失つたハリーを抱き留めて、静かに横たえた。そのまま、丸腰のまま立ち上がる。ヴォルデモートの前へと立ち続ける。

「お前の弟は死んだ。お前たちの英雄は死んだのだ。俺様に慈悲を乞え。命乞いをしろ。無様に泣いて逃げ回れ。——なぜ、お前はここにいる」

同じ、死を抱く杖をあなたへと指して。

「あなたを憐れむためだよ。——かわいそうなトム・リドル」

ハリーの目の色をした光がマリアを焼いた。

ハリーは、もう行きましましたか。老人へと尋ねる。きつと永い時間を彼と共にこの世界の狭間で過ごしただろう人は、やわらかに笑んだ。

「——マリアと、呼ぶべきかのう」

「どうとでも」

ダンブルドアが腰掛けるベンチへと、同じようにして座る。椅子の下にはあわれな赤子が身を小さくして、光から逃げるように、追いやられるように咽び泣いている。

虫酸の走る姿だ。汚ならしくて、心から嫌悪を誘う泣き様だ。同情よりも見たものに怒りを覚えさせる形だ。触れただけで己すらも穢れてしまいそうだ。——それでも。

「では、『君』と。そう呼ぼう」

ダンブルドアはそこにはなにもないかのように続けた。僕の視線の先を知っていながら彼は追及をゆるさなかった。

「どうして、君までもがこの場所へ？ よもやハリーを追ったわけではあるまい」

「ええ。ハリーは帰ってきますから、僕は見送るだけでよかった」
「しかしそうはしなかった」

改めて真っ白の世界を見渡す。美しい場所だ。清らかな場所だ。満たされた場所だ。——椅子の下に縮こまるちっぽけな赤ん坊以外が。

かがんで、嫌だと拒否してしまいたくなる手を時間をかけて赤子へと伸ばす。

「どうにもできぬ。それは、君の手には負えぬ」

「そうでしょうか」

「そうじゃ。それは愛を知らぬ。人を愛する心を持たぬ。邪悪に染まりきつてなお、得ることを知らず空白のままに生きてきたのじゃ」

手汗をにじませてザラついた肌を撫でる。触れられる——あ、よかった。

ギイギイと耳障りに泣く赤子を衝動的に放り出してしまわぬよう、懸命に堪えて持ち上げる。唇を噛みしめ、諦めてしまった老人へと挑戦的に笑む。

「無いのなら与えればいい。『空っぽなら、好きなものをつめられる』」

「友の言葉です。僕は、そのために死ぬのです」

ダンブルドアが淡く唇を震わせた。声はなかった。言葉もなかった。目だけが如実に僕へ訴えた。

「僕にはどうすることもできない。その通りです。なぜなら、ハリー・ポッターとヴォルデモートは敵対する運命にあるから。どうあってもハリー・ポッターにヴォルデモートを救うことはできない。ハリーがハリーである限り、それは決して叶わない。ゆるされない。——
——だから、僕はここに^{マリア}いる」

トム・リドルを抱いて、再びベンチへと腰掛ける。鳥肌が止まらないう。全身を悪寒が包んで、隅々まで僕をさいなむ。脳がそれを手放せと警告する。美しい場所にてなお、赤子の存在ひとつで魂の底まで刻まれた地獄を思い出してしまいそうになる。

——それでも。投げ出さない。今度こそ。僕はマリアだから。

「この子は僕と一緒につれていきます」

抱きしめて、とどめて、どうにか息を吐いて、笑った。

「そうすれば、あなたも次へ向かえるでしょう?」

「君は……」

「この子のために、ずっとこの世界にふたりぼっちでいたんでしよう?」

「マリアや……いや、いや、君は」

すっかり老人らしくみすぼらしくなってしまったダンブルドアへと立ち上がって見せ付ける。あなたにもハリーにもできないことが、マリアならばできる。そのために、僕はマリアとして生まれた。

「君は、わしを軽蔑すべきじゃ」

「ええ、そうしましょう。そして許します。——あなたは許されるほうが苦しいひとだから、許すし、恨まない」

酷くあろう。優しいひとたちへ。せいっぱい、最期までマリアらしく。

一步。二歩。ダンブルドアをおいて扉へと進む。談話室の壁掛け時計が零時を指そうとしている。光が吹き抜けていく。腕の中の赤子が泣くのをやめる。

「それでは、さようなら。僕の世界。さようなら、優しい人たち。さようなら——僕だけのハリー」

さようなら。マリア・ポッターの物語。

それは困るなあ。

僕が笑った。赤子は僕に抱かれていた。僕の腕から——僕の腕へと取り上げられて、抱かれていた。

「僕自身に僕の役割を奪われちゃあ、たまらないよ。そうだろう？」
——僕」

マリアが、トム・リドルを抱いて笑っていた。

マリア・ポッターと死の秘宝【完】

少女が立っていた。深く赤い髪だ。栄養の足りていない細い身体だ。ホグワーツの男子制服を着て、佇まいが男性風な女の子だ。ハシバミの瞳を持った——そのひと。

少女が立っていた。

「少し歩こうか。ハリー」

トムを抱きながら、マリアは笑う。僕の顔——いいや、彼女の顔で。腕の中にあるトムは依然と光を厭がりながら、哀れっぽく、浅ましくうめいていた。それだけで僕は生理的嫌悪から顔をしかめてしまった。しかし彼女は何食わぬ顔でトムを抱え続けた。

「君は——マリア・ポッター？」

「そうだよ、ハリー・ポッター」

「どうして……それじゃあ、僕は——」

——ゾツと。おそろしい真実に行き着いてしまった気がした。

マリア・ポッターは存在した。僕でないマリア・ポッターが確固たる自己を持ってマリアであると答える。十七歳の少女こそがマリアなのだ突き付ける。

ならば、僕は——^{ハリー}私は。ずっと。彼女を。

「僕が、君を——殺していた？」

ゆるりとマリアは首を振った。

「いいや、それはちがうよ、ハリー。僕はずっと、君と共にいた」

談話室を出る。グリフィンホール塔を支える螺旋階段の先は、煌々としていてなにも見えなかった。真つ白だ。

「君と共にあったんだ。君と一緒に成長していた。そうだね……不本意だけど、僕たちも『ハリー』と同じように互いの分霊箱のような状態だったんだ。それをケンタウロスは呪いと呼んだ」

「ちがう！」

咄嗟に。叫ぶ。光を受けるマリアの目は優しかった。

「呪われているのは君だ！　そして君を苦しめる呪いは僕だ！　その話がほんとうなら、僕こそが君にとってのヴォルデモートだった——」

受け入れられるはずもなかった。女としての僕なんて。だって、女の子のマリアはいるのだから。——僕は、マリアに巣食った『よけいもの』でしかなかったのだから。

考えるべきだった。マリア・ポッターなどと呼ばれたその日から。僕は疑いようもなくハリーで、ならばマリアとはなんなのか——ハリーに上書きされたマリアはどうなってしまったのか、と。

「どうして、僕が『マリア』だったんだ——？」

ひとつ、ひとつと彼女が階段を下りる。光が強くなっていく。ぐずるトムは彼女の腕の中で怯えるみたいに息をつめた。

「元々、僕たちはたったひとつの身体に二つの魂を持ついびつな状態で生まれた。身体はひとつなのにどちらもが意志を持って生きるわけにはいかなかった。だから、いずれマリア・ポッターとしての主導権がどちらであるかは決められなければならなかった——」

「そして僕が君から主導権を奪った！　正統な持ち主である君から

！」

「ちがうんだ。ちがうんだよ、ハリー。ハリーであるか、マリアであるか——決めたのは、ドラコだ」

「——」

マリアは光の中に立ち止まる。トムがいつそうヒンヒンと泣く。あわれに泣く。乞うている。——そんなものは、もう、どうでもいい。たったひとり、すべてを知り、なにも知らなかったその人が。

『僕』をこう呼んだ。——ハリーと」

はじめて逢った再会の日に、姿形、性別、名前、存在、人生、そのすべてが別人であるマリア・ポッターを指して、創造の大罪人は呼んだ。定めた。——お前はハリー・ポッターであると。

マリアを得たハリー・ポッターのもうひとつの物語が、彼の言葉によつて始まった。

「そんな、ことって——」

マリアと共に立ち止まって、しかしどこまでも優しい眼差しの彼女を見ることができなくて、なんだかもっと汚いものでないと赦されない気がして、自然と目の先は醜い赤子へと落ちていた。彼女を前にしたトムと僕は、たぶん、そっくりだ。

「そんな顔しないでよ、ハリー。むしろ僕は君に謝りたいくらいなんだ。僕が不安定だったせいで、君はそこにいない僕に振り回されるかたちになってしまった」

「どういふこと？」

「言っただろう。君と共に成長していた——て。君が——いや、その肉体が十一歳であったとき、僕もまさしく十一歳だったし、十五歳の頃には僕だって十五歳だった。君はとっくに大人なのに、君の精神を

子供のようによろこび続けたのは僕だ。僕の悲しみが、僕の不満が、僕の怒りが、いつだって君を道連れにした。——僕の代わりに、君が泣いてくれた」

大人のまま比較的冷静であったドラコに比べ、マリアが不安定で感情的で年相応であり続けた理由。それは、マリアだからこそだ。ハリー・ポッターでなく、マリア・ポッターだったからだ。

「ああ、でも、これだけは弁解させてくれよ。——シリウスに泣いたのは君だ、ハリー」

慈しんで。不平等を知らない顔で。呪いとも云える子供を背負って。

なにものにも侵されずまっさらであり続けるマリアに、ぐずぐずと心が悲鳴を上げる。

「——結局」

ふと、ダンブルドアはいつてしまったと気付いた。談話室にはもうだれもいない。真っ白な世界をさ迷うのは僕とマリアとトムだけになっっていた。

「結局、僕が君の人生を奪ってきたのには変わりないじゃないか。君は怒るべきだ。憎むべきだ。君を奪った僕を——」

「おかしなことを言うね。どうして自分を憎めるっていうの？」

「え——？」

カツン。革靴が歩みを再開する。先はまだ見えない。

「僕は君だよ、ハリー。僕はマリアという名前を得た君だ。ハリー・ポッターでも英雄でもない君だ。この子を持ってゆくために君に

よって作られた君だ。ハリー・ポッターはマリアの創造主なんだ」

だから。マリアはうつくしく神^{ハリー}を責め立てた。

「ハリーでなくマリアが死を抱き締めるのは当然なんだ。——そうあれと、君が創ったのだから」

分かつ男女の子供。元はひとつの子供。少女は寄り添うだろう。闇の帝王を打ち破る力を持った者に、少女は死するときまで付き添うだろう。彼女は死を抱き締めるだろう——

「ああ……」

一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ。分かつ子供たちは、同時には生きられぬ。

「トレローニーの予言は、僕と君のことだった」

「その通り。ハリーとマリアのことだ。——君と、僕だ」

トムを大事そうに抱き直して、マリアは僕へと詰め寄る。

「僕から存在意義を奪わないでくれ。マリアを生み出した君^{ハリー}から否定されることは、マリアにとって完全なる死を意味する。ほんとうの死だ。——僕を無いものにしないで、ハリー」

「マリア」

「かわいいハリー。愛されたがりの僕。僕をマリアとして作った君なのだから、最期まで、君のためにあらせて」

「そんなの、ひどい」

「そうだよ。君ってひどい。それでも、僕は君を愛するよ。マリアはハリーをなによりも愛する」

「——そう、僕が創ったから？」

「そう、君が望んだから」

なんて自分勝手だ。残酷だ。傲慢だ。我が儘だ。なんて——
僕らしい。

「マリアはそういう存在だ。そうだな——ハーマイオニー風に言うなら、君がそうプログラミングして僕を作ったんだ。マリアはなにがあらうと君の味方だし、君を肯定するんだ」

僕が僕を嫌いなながらも『ハリー』を心から愛せたのは、たったひとりの兄弟だからではない。——マリアが、僕の感情すらも呑み込んでハリーを愛してくれたからだ。それが僕まで伝わっていたんだ。

兄弟^{マリア}がいるハリーが羨ましいだなんて、滑稽な嫉妬だった。僕にだってずっとずっと——マリアがそばにいてくれたのに。

「ずるいな、僕は」

「まったくだ。けれど、ハリー、どうか後悔はしないで。僕^{マリア}を認めて。受け止めて。その上で——僕を悔やんでくれ」

そしてマリアははじめて瞳に彼女だけの感情を乗せて告げた。

「僕のハリー。僕は、君の永遠の傷になりたかった」

「マリア……」

「僕に愛せと乞いながら君ではないものを救うために僕を創った君。この子のために死ぬ君を作り上げた君。——すべては君の祈りと偽善のためにあった僕^{マリア}の、唯一の願いがこれだ。君だけが僕を知っているし、君だけは僕を忘れられないんだ」

光の先が見えた。開かれた扉があった。命の階段は残り十一段になっっていた。

「どうしても、代われないんだね」

「君がハリーである限りね。この子は君にとって恐怖の象徴だ。君に『不可能』を突き付けた存在だ。君に敗北を教えた——これから先もハリーには救えないものだ」

残り五段。足を止めたマリアと額を預け合って、プリベット通りの物置部屋で二人きり、毛布をかぶってナイシヨの遊びをしていた頃のように、ひっそりと笑い合う。そこに英雄のハリーはいなかったし、みんなのマリアはいなかった。ただのちっぽけなハリーとマリアだけだった。

「ほんとうに——ほんとうに、それでいいのか。君は。こんな人生で——誰にもマリアと呼ばれないで」

「君が呼んでくれる」

「僕しか君を知らない！」

「君だけの傷だもの」

あいだでトムが悶える。トムごと、マリアが僕を抱き締める。

「全部あげるよ。僕の名前も。その身も。心も。マリアというしからみすべてを君へ返そう。すべてすべて——マリアが得たものはそこに置いてきたから。ここから先は空っぽの僕とこの子だけで進むから、君が受け取って」

残り一段。

「——それでも、僕はマリアをうしないたくない」
「ハリー」

マリアの腕を引き留める。

「君が絶対的にハリリーを愛してくれる存在であるように、僕だってマリアを愛してるんだ。このまま家族と別れるなんて、認められない」

トムとマリアと二人ともを抱いて、開かれた扉の前へと立つ。

「だから、帰っておいで。僕のかわいいマリア。今度こそ、ひとりの君として。そのためなら——僕は女性としての僕を受け止めよう。君から譲られたこの性を利用しきってやる」

「……ハリリー」

「君の名前はもらわない。それは預かるだけにしよう。いずれ君へ返すために——大切に抱え続けよう。君が帰ってくるその時まで、君のために君のマリアであろう」

扉を背にする。一歩だ。一歩で僕は——マリアとトムは、いなくなる。

「バカだなあ、僕の弟は」

「君の兄さんだからね」

慣れた軽口を交わして額へと祈りのキスを贈り合う。自分にキスしてるみたいだ、なんて——自然と思ってしまうくらい、僕はマリアであることをとつくに受け入れていた。

「いいよ、愛するハリリーの頼みだもの。マリアはな——んだってハリリーのお願いなら聞くのさ。君のために生きるマリアだからね。——素晴らしい手土産と一緒に、帰ってきてあげる」

「手土産？」

「——スコープウスを、探し出してきてあげるよ。なんたって僕はマリアだ。膨大な海を泳ぐ魂たちの導き手になろう。燦然と命を燃やす道標の星になろう」

マリアの手が向かい合う僕の胸を叩く。力を抜けば、次には僕は光の中へと真つ逆さまに落ちてゆくだろう。

「だから、あいつへのプロポーズなら早めに済ませるといいよ、ハリー」

ハシバミがいたずらっぽく細まった。父さんそっくりだ。——僕、そっくりだ。

それじゃあ。

「いってきます、僕^{ハリー}」
「いってらっしゃい、僕^{マリア}」

長い長い旅の果てに、君にただいまを言えるように——おかえりを言えるように。

さようなら、僕。

青白い肌の美しい人は、ふと己のガウンを引いた小さな手へと茶色の瞳を上品に開いた。

「まあ、スコープピウス。どうしました？ マリアお姉様……あなたのお母様の元へついていなくてよいのですか？」

「おとうさんがアステリアママのところへ行くようにって。ぼくはうるさいから、おかあさんがねむるのにじやまなんですって」

「あらあら……ドラコお兄様ったら、まったくもう」

息子を相手に相変わらず口下手な義理の兄へと淑女は困ったふうに笑う。尊敬する兄夫婦からいつも通りに頼られたらしいことを汲んで小さな宝物を膝へと抱き上げる。小さな男の子——父親そっくりのマルフォイ家長男・スコープピウスは、まろい真っ白の頬を満面に笑ませて叔母のアステリアへと甘えた。

「マリアの調子はいかがかしら。そろそろ生まれるのでしよう？ 今度はあなたの妹かしら、それともまたまた弟かしら。楽しみね、スコープピウス」

「おかあさんは女の子だっていったよ。マリアって呼んでるよ」

「まあ、まあ……やっぱりマリアって変なひと。自分の名前をあげてしまったの？ わたくしのお姉様って不思議よね。そうは思わない？ スコー」

「だってぼくのおかあさんだからね！」

「うふふ、そうね。あなたのお母様なものね。そしてわたくしのたった一人のお姉様」

キャラキャラ声を上げるかわいい子供を腕へ囲んで、我が子を抱く母の肖像画のようにぴったりと二人は寄り添い合う。

彼女と男の子は親子ではない。彼女らに血の繋がりは一片足りともない。それでも——二人は家族として共に長い時間を過ごした。そこには誰もくつがえせない親子の絆が確かに存在していた。

「わたし——とつても幸せだよ。あなたがいて、ドラコお兄様がいて、マリアがいて——」

「ぼくもしあわせだよ。ママがいて、おとうさんがいて、おかあさんがいて——」トムと、マリア。みんなかぞくだもの」

もしかするとどこかの世界、どこかの未来に存在したかもしれない家族の形を愛しながら、今日もマルフォイ家は光の中を生きている。

まどろんでいた。眠る僕の肩を揺さぶったのはいつまで経っても姉気分が抜けない親友の一人だ。彼女の夫の姿は見えないので、兄とまだ店の始末に追われているのかもしれない。

「こんなところでうたた寝しては風邪を引くわ。あなた、ちゃんと体を大切にしないと——そろそろ生まれるんでしょう？」

うつかり木漏れ日と陽気に負けて眠りこけていた僕の手は、膨らみきった己の腹へと置かれていた。ああ、しまった。そろりと撫でて、中の子が気分を害していないかがってみる。三人目なので勝手

知ったるといった具合だが、それでも違和感は拭えない。……まあ、この子で最後だしね。もうひと踏ん張りだ。

「スコーピウスは？ お父様がお相手かしら」

「いや、アステリアのところ。スコーはアステリアが大好きだから。ドラコはトムのほうを見てるよ」

「……あなた、それでいいの？」

「もちろん。スコーに、君には母親が二人いるんだよって教えてるのは僕だもの。アステリアだってスコーピウスの母さんだ」

「あなたたちって……変な家族ねえ」

「まあね。ついでに最高だろ？」

「ええ、マリアとドラコが納得してるなら最高に最高なんですよ」

呆れて肩をすくめる親友へとクスクス笑う。キッチンの辺りから弟夫婦——いや、兄夫婦の仲睦まじい声が聞こえた。今日の夕食は二人の手料理のようだ。自分の仕事を取られたとウインキーが拗ねなければいいけど。ああ、それならドラコにおねだりしてガーデンパーティー式にしてしまおうか。せっかく大好きな人達が揃う日なんだもの。……ポッター家にお留守番のクリーチャーには悪いけど。

なんて、まだ夢心地な頭でうつらと思考を飛ばす。ハーマイオニーは苦笑しながらも姉さんの顔で慣れたふうに僕の伸びた赤毛を梳いた。

「名前は決まってるの？」

自分だってローズとヒューゴを生んで、膨らんだ腹なんてとうに見慣れているだろうにおそろおそろと指先で触れるハーマイオニーへと、胸を張って答える。

「マリアだよ」

「……女の子だともうわかってるの？」

「いいや。けれど、この子しかいないから」

やっと、やっとだ。やっと君を取り戻した。

スコーピウスとトムを導いて、自分は一番最後だなんて——まったく、マリアらしい。

「あのう、マリア？ 確かに男の子が親の名前を継ぐというのはおかしい話ではないけれど——女の子は……」

「うん。そこなんだよね。だから実はファーストネームがまだ決まらないんだ。いっそスネイプ——セブルスおじさんに名付け親になつてもらおうかな、なんて考えてる次第だよ。母子揃って」

「まあ！」

「それから——フレッドにも、挨拶をしなくちゃ。きつと、今度こそ飛び起きてくれるよ。マリア、君つてば実は女性だったのかい!? なんてね」

「……ええ、そうね。今度こそ起きてくれるわ。そして自分より年上になつたジョージを見て拗ねるの。俺の顔が老け顔になつちまつた！ てね」

「うわあ、楽しみだ」

冗談を交わして軽やかに笑い声を上げる。腹の中のかわいい子が同調するみたいに僕を蹴った。相変わらずのお転婆だ。

マリア。君に返さなければならぬものがたくさんあるんだ。名前と、人生と——そして、杖。すべて、君のために僕が創つたものだから。

「けれど、それじゃあ呼び名に困っちゃうわね。小さいマリアはメアリーだとかではいけないのかしら」

「駄目だよ。マリアは絶対にこの子の名前でなくちゃいけない。僕はなにがあつてもマリアをマリアと呼び続けるよ。一番に呼ぶんだ。……だから、そうだな。僕のごとは——」

ああ、そうだ——きつと、僕と、彼と、この子だけがわかるイタズラを込めて、ハーマイオニーを見上げる。

「僕のごとは、これからはマリーって呼んでよ」

ハリーとマリアでマリー——なんてね。

「フラーがそう呼ぶから？」

「ふふ、そんなかんじ」

子供っぽい感情で、さて君たちはいつこのイタズラに気付いてくれるかな、なんて止まらないニンマリ笑いを腹へと向ける。

はやく出ておいで、マリア。そして、僕は一番にこの言葉を君へと贈ろう。

「——おかえり、僕のマリア」

指先から命が零れていくようだった。実際は腹からだろうし、胸からだろうし、頭からだ。それから口や鼻もそうかもしれない。どうにか杖無し魔法で痛みだけを取り除いて、呼吸を取り戻す。治療は無意味だ。わかる。あの優しい死の感覚を私は知っている。彼に撫でられる心地を識っている。白いキングス・クロス駅で私を待つ人がいる。

死ぬなあ、これ。なんて。ずいぶんと呆気なかった。英雄だとか散々持ち上げられた男の最期がこれだ。……まあ、悪くない。そんな気がする。ひとりぼっちで私は終わる。

「ハリー、君、死ぬのか」

——ひとりで終わる、はずだった。かわいそうに。君の登場だ。きっとそうだと思ったのだ。君って時々——ものすごく運がない。

元々青い肌が真っ蒼で、見えていていつそ死にかけの私よりも死にそうな顔をして、男が私の傍へと膝を着く。

「そのようだ」

答えれば、ほろりと彼から一粒の雫が降り落ちた。なんてことだ——ドラコ・マルフォイが、ハリー・ポッターの死を惜しんで泣いているのだ！

なんたる喜劇！ これにはマーリンだって杖を放り捨てて一目散に箒で逃げ出すだろう。ああ、まったく——死の際になんてものを見せてくれるのだ。笑うに笑えないじゃないか。

「いっていいよ、ドラコ。君一人ならここからだって抜け出せるだろう。呪いに詳しい君だ。それがいいことなのか悪いことなのかは

……判別できないけどね」

「ハリー」

「なんなら、護身用に私の杖も持っていくといい。死体は回収できずとも、家族への形見くらいにはなれるだろう」

「ハリー」

「私を置いて——君は生きるといい」

「ハリー」

——やつぱり、君に泣かれるのは苦手だ。いつもは冷たい色をしてるくせに。こんな時は氷が溶けるみたい。

ぼろぼろとアイスブルーから零れる涙が私の顔面を叩く。どことなくあたたかい気がする。生きた人の温度だ。

ドラコの杖が側に転がる。私の血に濡れていく。

「こんなところで死ぬのか、君」

「そうだ」

「英雄のくせに」

「英雄だって死ぬさ」

「ハリー・ポッターのくせに」

「ハリー・ポッターはいつだって死の縁にいるものだ」

「私の英雄が、私を置いて死ぬのか」

「私は君の英雄だったのか？ それは——情けないところばかり見せて申し訳ないね。これで終わりだから許してくれよ」

笑えば、ドラコはシワが刻まれたってキザったらしい顔を子供みたくにぐしゃぐしゃにして呻いた。ほんとうに子供のようだった。十一歳のマルフォイがそこにいる気がした。

「マルフォイ」

「ポッター」

「困るよ。そんな顔をしないでくれ。君は——君だけは、ハリー・ポッ

ターのライバルでいてくれないと」

「ポッター、僕は」

「マルフォイ——だめだ」

「……最低だ。ポッターのくせに」

「傲慢のポッターだからね」

どうにか感覚が死んだままの手を伸ばす。マルフォイの白い頬が私の血によって色を着ける。真っ白のマルフォイが赤くなる。

「——もしも、死者に会えるとするなら——君なら、どうする」

「この期に及んでイイ質問じゃないか」

「答えろ」

滑稽なくらい必死なマルフォイへ、悪戯混じりに彼の首を絞めてみた。血の輪が浮かび上がって、私とマルフォイを繋ぐ首輪が完成した。

「そうだね、それは——会いたいよ。会いたいけれど——私が死ぬと
いうことだ」

「その通りだ」

私の血で肌を汚して、私の血を先から滴らせるサンザシの杖を持って、マルフォイは立ち上がった。

「君の命を——私に出来ないか」

「——はは、」

杖先が私へと向く。私の血が私へと落ちる。

「こんなところで君が無為に死ぬのは堪えられない。許せない。ならば、私のために死んでくれ。その命を僕に使い果たせ、英雄」

「誰に会いたいんだ？」

「アステリアだ。君を犠牲にして、私は彼女を取り戻す」

「スコープピウスをおいてけぼりにして？」

「スコープピウスはとづくに大人だ。もう大人の——親の手を必要とする子供ではない。なにより——あの子にはアルバス・ポッターがいる」

「……………」

「私は必要ない」

「マルフォイ」

「君を——僕に殺させてくれ」

ああ——どうやらもう、頭に回せるだけの血が私には残っていないようだ。

苦々しそうな君が。悔しくてたまらなさそうな君が。

君の殺害予告が——愛の告白に聞こえるんだ。

「いいよ。もしも私への情が欠片だって絡んでいたりしたら、この場でなにがなんでも君のことを殺してやろうかと思っただけ——ただ君のために、君の欲のためだけに僕がほしいというのなら、やるよ」

「ポッター」

「ヴォルデモートだって成し得られなかった英雄殺しの大罪^{榮譽}を君へ与えよう。ドラコ・マルフォイ」

両腕でマルフォイの首へと絡み付く。私の血で染まった地面に二人で転がる。マルフォイの杖が緑の光を灯す。

「ハリー・ポッター、悔いはないか」

「勿論あるとも。家族に別れを告げられなかったし、ロンとハーマイオニーが物凄く落ち込むだろうこともわかってるし——ああそっくだ、リリーのウエディングドレス姿は見られたけど、アルバスがちつとも

結婚しそうにないところも心配だ。いつそあの子は君のスコープウスと結婚するんじゃないか」

「馬鹿を言うな。この期に及んで」

「この期に及んだからさ。けれど、ああ——いいんだ。どうせ死んでしまうなら——」

血にまみれて、一刻一刻と命を流しながら男と笑う。

「そうだなあ——ほんのちよつと、抱え続けてきた後悔がある」

「言ってみろ」

「デルフィーニのことだ。彼女を見て、彼女の存在を知って、愚かな私は思ってしまったんだ——『あの子』を救えば、なにかはもう少しだけ違ったかもしれないのに、と」

「……………」

「彼女から父親を奪ったのは、私だ」

抱き締められた。人生の半分を掛けていがみ合った男の胸は、私と同じリズムで鼓動を刻んでいた。ドラコ・マルフォイは生きていた。

——生きているのに。

「駅でトム・リドルを置き去りしない僕だって、在れたかもしれないのに」

マルフォイの祈る瞳が私の眼鏡の奥を覗く。熱っぽくて、氷が溶けきっていて、たぶんそこには理解してはならない感情がひっそりと息をしている。

どちらもがそれを得てはいけない。私がハリー・ポッターである限り。君がドラコ・マルフォイである限り。

「やり直そうか」

「一緒には？」

「一緒に。——君と出会う日から。君と握手できなかつた日から。君と僕をやり直そう。互いの願いと互いの命を礎にして、私がここに世界を創り上げる」

「それはとんでもない」

笑う。

「ダンブルドアもびっくりの大魔法だ。君はこの後も平然と生きられるだろうに、一つの願いのために私と心中するって？」

嗤う。

「いいね、馬鹿らしい最期だ。英雄にこれほど相応しい死に様はない。

——ならば、君へのさよならは必要ないかな？」

「親友たちにも言っておけ」

彼が泣いている。とても綺麗だ。だから、嘲笑ってやろう。彼の死の言葉が愛に聞こえてしまわないうちに。

優しい呪いが私を奪う。私の瞳にそっくりの緑が私を焼く。ドラコ・マルフォイにとらわれていく。

そして。

「――夏の、蠍座の話なんか、どうかな」

僕らは出会い直した。

マリア・ポッターと胡蝶の夢

1

マリアと幼い声が僕を呼ぶ。既視感。ずいぶん前にもこの声に呼ばれた気がする。ほのかに甘くて、焼きたての白パンみたいにやわらかいやつだ。——君の声だ。

「ハリー」

目を開ければ、光を目一杯取り込んだ緑が僕を見下ろしていた。

「マリア……！ ああ、よかった——どこか打ったりとかはしてない？ 頭が痛かったりはしない？」

「ウーン、そうだね——ねえ、ハリー。……君、いくつだっけ」「どうしたの、マリア。ぼくたちいま五才じゃないか。——なんて、言っただけ？」

「中身は僕の知るハリーのようだ」

「君も僕の知るマリアで安心した」

ハリーの、小さくて杖を持たせることすら不安になる幼い手に掴まる。身体を起こす。このくらいの年齢になると、寝起きには首やら腰やらがパキパキ音を立てるものだけど、僕の身体は記憶のそれよりもずっと軟らかかった。ちなみに声は——そろそろ、この展開にも慣れたと言わざるを得ないのかもしれない。

外だ。周囲には迷路のごとく暗い木々が繁っていて、その様子は僕に苦杯を思い出させた。

たとえば宿敵の君と相見えた場所だし、人喰い蜘蛛に追いかけて回された場所だし、ケンタウロスの予見に惑わされた場所だし——そして君と今生の別れを交わした場所だ。

ハリーにとつてもマリアにとつても思い出深い——禁じられた森。

「ハリー、縮んだね。ざっと新入生くらいの頃と見ていいかな」

「僕が縮んだなら君だって縮んでるんだよ、マリア。たぶん、そのくらいだ。だって君——」

座り込む僕に合わせるようにしてハリーが片膝を着く。黒いローブが地面を覆う。首もとには赤いネクタイだ。ローブの裾から指を出すので精一杯なくせにネクタイをキツチリと締めるさまは、子供の背伸びを見ているようでいじらしくて微笑みを誘う。

ローブを共にハリーの指が触れたのは、僕の赤い髪だった。——肩を越すくらいにまで伸びていた。なつかしい。

「一年生で切っちゃってから、君、髪をこのくらいまで伸ばすことはなかったもの」

「寝てるあいだに同じ長さに戻ろうとしていてビックリしたよ。だれか切っておいてくれればよかったのに」

「寝てたんじゃない。——君は、死んでたんだ」

赤毛に触れたまま、ハリーはまったく子供に似つかわしくない冷え冷えとした声で僕を詰った。

「マリア」

「わかってるよ。君に——いや、マリアを愛してくれた人たちみんなに傷を負わせたことはちゃんと理解してる。だから、ほら、君の毎朝の生命チェックだって文句一つなく受け入れてるだろ？」

「マリア」

「わかってるったら——生きてるよ」

子供の顔なのに子供が持つには相応しくない苦渋で瞳をいたませ

た彼へと、腕を広げて迎え入れる。加減なく抱き締めてくる子供に、これが本来の彼であれば男女の筋力の差を思い出せと叱咤しているところだが、子供の姿でいられるとどうにも甘やかしたい気持ちにさせられた。

僕の中には、ハリー——しいては、自分を愛するものとして作られたマリアはもういないので、この気持ちはまだ見ぬ息子のアルバスへと向けるものに近い気がする。今では甥だが。

はてさて、あの子はスコープピウスを探して一体どこまで旅に出ているのだろうか。それほどに、生命いのちを待つ魂たちの海原は広いのか。

「さ、ハリー。生命確認が終わったなら切り替えないといけないよ。僕たちは僕たちだけど本来の僕たちではないし、ここも僕たちが知るホグワーツではなさそう——」

「——ハリー?」

木漏れ日の中できつと彼女は同じように名を呼んでくれた。ふと、そう思った。僕が腹の中で眠っていた頃に、あの優しい声で、優しい眼差しで、ゆるりと腹を撫でて、歌うように呼んでくれたのだ。僕の名前を。

「ハリーなの——?」

「リリー、どうしたんだ、急に……………ハリーだつて?」

遠く小さなホグワーツ城を背に、男女が草木を分けて姿を現す。マリアそっくりの赤い髪だ。ハリーそっくりの暴れた髪だ。マリアそっくりの勝ち気なハシバミだ。ハリーそっくりの丸い緑だ。

若きジェームズ・ポッターとリリー・エヴァンズが、ホグワーツの制服を着込んで立っていた。

「……………どういふ、ハ」と

「まあ、ハリー！　ハリーでしょう？　ああ、また会えるなんて思いもしなかった——嬉しいわ！」

「ハリー！　次に会えるのは赤ん坊の君だと思ってたのに！　さあ、立って——またあの日みたいに君を抱き締めさせてくれ——
—君は？」

困惑するハリーの側へと寄った二人の目が、次に僕を捉える。ハシバミと緑が生きた輝きを放ちながら僕を見る。写真では伝わらないほんとうの色がそこにある。——僕たちの証しであつた色が生きている。

「まさか、君も——？　けど、ハリー、君……兄弟がいるとは言わなかつただろう？」

「ジエームズ、よく見て。このハリーはわたしたちが出会つたハリーよりもずっと小さいわ。……たぶん、わたしたちが少しだけ一緒にこの Hogwarts で過ごしたあのハリーではないのだと思うわ」
「けれど、リリー……それじゃあ——？」

「ジエームズと、リリー？」

ハリーが声を震わせながら二人を呼んだ。名を噛み締めて、自身の手を取る男女をおそろおそろと見上げる。ああ、わかるとも——もういないそのひとに会える奇跡がどれほど心を震わせるか——どれほど、おそろしいか。僕はよく知っている。

「そうだよ、僕はジエームズ・ポッター。君のお父さん……だと、僕は信じてるんだけど」

「そしてわたしはリリー・エヴァンズ。あなたのお母さんよ。……そう、呼んでくれるかしら？　かわいいハリー」

両親の目が僕へと笑い掛ける。ハリーが僕を呼ぶ。だから、愛する

人たちの前へと僕はマリアとして再び立った。

「はじめまして。——父さん、母さん」

ハリーと手を繋いで、なにも言えずにいるハリーに任せると瞳を細める。大丈夫、今度こそ——今度は、僕が導き手となる番だ。なんたって、君の『マリア』なのだから。

「僕はマリア・ポッター、そしてこっちはハリー・ポッター。あなたたちの——息子と娘です」

ハリーの手が離れない。

わかっていた。わかるのだ。ハリーは混乱しっぱなしだ。もちろん僕だってそうだけど、僕よりハリーのほうがずっとひどい。

「ハリー！　また会えたな！　なんだなんだ、お前、こんなにチビだったか？」

「シリウス、小さな子に向かって大声を出さないで！」

「リリー、君もだよ」

「わたしはいいのよ。だっておかあさんだもの。——おかあさん！

ああ、なんて素敵なお響きなの」

「ほんとうに素敵だ……リリーが僕の奥さん……子供は二人……男の子と女の子……広い一軒家を建てて犬も一緒に飼うんだ……ふふ、うふふ」

「二人とも、こっちにおいで。君たちのお父さんは今ちよつと子供には見せられない顔をしてるからね。……おや、ハリーのほうはもしかして人見知りかな」

場所は変わらず、禁じられた森の中、集結した初代悪戯仕掛人たちを前にハリーは硬直していた。否、ルーピン先生の若々しくも優しい微笑みと共に傷だらけの手を差し出されて、ハリーは後ずさった。当然、手を繋いでいた僕も一歩下がる形になる。ハリーは怯えていた。目の前の状況が呑み込めず、唯一彼が知るものである僕の背にすがっていた。

こんな奇跡は、たえられない。

「まあ……ハリー、小さい頃は人見知りだったのかしら。十四歳のハリーはすっかりしたものだっただけ」

「ウーン、このハリーは僕らが出会ったハリーではないようだからね

……うん、ここは自己紹介からすべきかな」

ジエームズ——自分たちと変わらない歳の父の嬉々と仲間を紹介する声は、そのままハリーの耳を素通りしていく。

ちがうのだ。そうではないのだ。ハリーにはとても、受け入れられない。突然与えられた過去の人たちの存在を受け止めきれない。

僕は、妻と息子の手を借りて、そして長い時間をかけて両親の死を乗り越えた。名付け親の、恩師の、友の死の痛みを親友たちと分かち合った。すべてすべてに時間が必要だった。マリアとしての生を得てからも、死者がそこに生きている現実を何年もせま苦しい物置部屋の中で咀嚼する猶予があった。

けれど、ハリーにはないのだ。まだかさぶたにすらなっていないかったのに、彼等の笑顔に無理やり傷口を開かれてしまった。——惨い。

「ハリー」

「マリア……」

「大丈夫、傍にいるよ」

「でも、そんなはず——そうだ、これ、夢で——？ それなら、君も……？ 君は、やっぱり——あのときに死——」

「ハリー」

父さんたちが沈黙してしまったのにもかまわずに、子供のハリーを抱き締める。

「大丈夫だから。何度だって確かめていいから」

「マリア」

小さな背中だ。ほんとうの彼は二十歳を前にするっていうのに、今はこの十一歳の背中がしっくりときた。

「マリア」

「うん。ここにいます」

「マリア」

「生きてるよ」

「マリア」

「ハリー」

力む体からおもむろに力が抜けていく。どうにか落ち着いたらしいハリーに胸をなで下ろして、それから見上げた先、父さんと母さんは息子の尋常ならない様子に気まずそうにしていた。僕らの困惑を無視してはしゃいだ自覚があるのだろう、シリウスやルーピン先生もすっかり押し黙ってしまった。——そんな中。

「ハリー」

「……ピーター」

子供の僕らの目線まで膝を曲げて、邪気なく微笑んだのは両親の仇敵とも云えるピーター・ペティグリューだった。

「突然でびつくりしたんだよね。君たちからすれば知らない大人ばかりなのに、知ってるみたいな顔をして囲まれたら怖いよね。こんな場所じゃ落ち着けもしないよ。……一緒にホグワーツまで来れるかい？」

「……………」

不思議な心地だった。あのペティグリューから好意的に笑まれて、あまつさえ庇護の手を差し伸べられるだなんて。

学生の彼には銀の腕に恍惚とする欲深さも、友を差し出す浅はかな陰も見られなかった。優しげで、シリウスやジェームズに比べれば見劣りはするものの醜男とするほど容姿が悪いわけでもなくて、特徴的な飛び出た前歯だって昔のハーマイオニーを見てるみたいで、僕からすれば愛嬌のようにすら感じられる。目をそらし続けてきたのに、こ

ここに来て目をそらすほど醜悪な人でもないと思わされてしまった。

そつと腕の中のハリーを見る。ハリーもまた、ペティグリュウの対応に唾然としていた。きつと、思っていることは同じだ。僕も君もハリーなのだから。

「僕はピーター・ペティグリュウ。……あの、やっぱりわからない、かな」

「……ううん、わかるよ。ありがとう、ピーター。行こう？ ハリー」

ハリーの手を繋ぎ直す。しっかりと握り込まれる。——今度こそ、大丈夫そうだ。

「そうね、ピーターの言うとおり、ちゃんと腰を落ち着けてから話しましょう。朝っぱらからこんな場所に連れてこられた時はどうしてやるかと思っただけど……つまりは今回のデートは宝探しだったってわけね、ジェームズ？」

「ン、そういうことにおこう。……ウソです、ごめんなさい。君が好きそうな薬草スポットがあったんだよ、これがホントウ」

「ハリー、マリア、ココアは好き？ それともミルクたっぷりの紅茶がいいかしら」

「僕の奥さんが冷たい……」

子供二人を中心に護衛でもするように男女総勢七名が移動を開始する。前方にシリウス、その隣——と、いうよりシリウスについていくようにペティグリュウ、僕らを挟む形でジェームズとリリーが隣を歩き、ルーピン先生は後方だ。

自然と彼等の空気に巻き込まれていく。僕が以前に出会った彼等から何年かが経過しているようで、大人っぽくなったジェームズとリリーのあいだにかつての殺伐とした睨み合いは見られない。ジェームズの茶々にツンと顔をそらしたりリリーだけでも、そこには見えてい思わず笑ってしまいたくなるような子供っぽい愛情が感じられた。

——そう、思わず笑ってしまった。そんな僕を、さめざめと泣き真似をするジェームズが顔をおおっていた指の隙間から見た。マリアと同じ形のハシバミ色が茶目っ気たっぷりにウイंकを飛ばした。悪ガキの顔だ。……ああ、うん——これは確かに、ジェームズだ。

「せっかくだ、どうせなら熱々のバタービールでも用意しようか。こちらの美男子が厨房と話をつけてきてくれるからさ。(ジェームズの言葉にシリウスがぎよつとした。そんな顔も実になる。美形は得だ。)あとは……ムーニー！ 君のヘソクリが活躍するときだよ！」
「なんのことかな、プロングズ」

「あら、あなたまたハニーデュークスのお菓子を溜め込んでるの？
いい加減、栄養が片寄るわよ」

「……リリーに言われると敵わないや」

空気がやわんでいく。ハリーが小さく息を吐くのを聞いた。森の抜け道が見えた。

「それにしても、さすがピーターだな。もしかしたらお前、リーマスよりも子守りが向いてるのかもしれないぜ」

「もちろん、僕よりピーターのほうが優しくて子供にだって好かれるに決まってるさ」

「まさか！ そんなわけないよ、僕が、そんな……」

「ええ、ええ！ それって素敵な才能よ、ピーター」

トンツ。肩を叩かれた。ジェームズだ。手にはよく知る透明マントがあった。

「二応、ね。マクゴナガル辺りに見付かると面倒そうだ」

同意を示して、ハリーと二人でマントをかぶる。ふと、ほんとうに一年生だった頃にもこうして二人でマントをかぶって城内を歩いた

ことを思い出した。

マントの中で言葉なくハリーと目を合わせる。思慮深そうなり、
リー譲りの瞳が僕を見る。——どうしようか。どこまで話すべきか。
……このまま、子供のフリをしていようか。

やがて、当然のように僕らは必要の部屋へと案内された。すつか
り、この場所は初代悪戯仕掛人の秘密基地のように扱われているらし
かった。血は争えない。

「さあさあ、シリウスとリーマスはおつかいに行っておいで。かわい
い客人の歓迎パーティーは豪勢でなくっちゃ！」

「簡単に言ってくれませ」

「あ、シ、シリウス、僕も手伝うよ」

「僕らの王様は我が子の前でも人使いが荒いね」

ジェームズとリリーを残して三人は退席する。わぎとだ。そして
気遣いだ。改めて、両親が真っ直ぐに僕らを見る。

「ごめんね、ハリー。また君と会えたことが嬉しくて、ついはいやいで
しまった。君の気持ちを考えてなかった。——まずは、どうして僕ら
が『ハリー』を知っているのかから話さないかね」

「マリア、あなたも聞いてくれる？ ……娘、なんだものね？」

それからジェームズとリリーは、かつて夢の先に消えた——いい
や、僕が自らの意志で手放したほんの少しの奇跡と墮落の日々を語つ
た。ハリーは見た目こそ十一歳の子供だが（それどころか栄養失調か
ら十歳に見えるかどうかすら怪しい。）脳は大人のままだ。僕と同じ
状態だ。

横目で沈黙するハリーを見る。なんとか咀嚼している顔だ。だて
に命懸けのハプニングに巻き込まれ続けてきた人生ではない。

冷静さを取り戻したハリーに、この後の判断はすべてお兄さまに任
せてしまおうと肩の力を抜く。

「——まず、会えて嬉しいです。……父さん、母さん」

「わたしもとっても嬉しいわ！　ね、ジエームズ」

「もちろんだとも！　正直に言っつて、今すぐ全寮全教室中に我が子の愛らしさを叫んで回りたいくらいだよ」

「ぜつたいにやめて」

「ハイ」

流れるように繰り広げられた両親の夫婦漫才にハリーがクスクスと肩を揺らす。——よかった、笑ってくれた。向かいに座する両親にも僕の安堵が伝わったようで、二人も目を合わせてほっと息を吐いていた。

「やっぱり、二人とも見た目どおりの年齢ではないのかな」

「それは……」

「いいんだ。言いづらいことなんだろう？　未来に直接関わってしまいう事柄だからね。僕らも無理に聞き出す気はないよ。君たちが実際はいくつであれ——僕たちのかわいい子供に変わりはないのだから」

そつと、リリーが——母が父に寄り添った。どこまでも自然で、当たり前で、美しい光景だった。ずつと求めていたものだった。焦がれていた。写真の中にしかない——僕ではない誰かの思い出の中に生きていた希望が目の前にあった。

たまらない——と、唇を噛む。苦しい。だから、ハリーと手を取る。この痛みは君としか分かち合えない。

「仲が良いのね。どちらが上なの？　それとも双子かしら。ハリーに、マリア。……ふふ、マリア、ね。そう——『マリア』、なのね。その名前をつけたのはわたしかしら」

「はい、そうです」

「そうよね。そうだと思ったわ。……わたし、ちゃんと彼を許せるの

ね」

僕の隣まで移動したりリリーがやわくマリアの身を包む。そして囁く。

「あなたが——わたしとセブルスを仲直りをさせてくれるのね」

祈るようにならずいた。——そこに、『あなた』はいないけれど。きつと、いつか、遠い未来で。

絶妙なタイミングでノック音が響いた。顔を出したのはルーピン先生だ。その腕には目に痛いカラーリングの包装袋が溢れんばかりに抱えられていた。……ほんとうに溜め込んだのか、この人。後ろにはシリウスと危ない手付きのペティグリューもそろっていた。

「親子水入らずはいかがかな？ ポッターのみなさん」

「最高だとも！ けれど、実に惜しい。ここに、今、君が抱えているお菓子とシリウスのバタービールがあればなおさら良しだった」

「はいはい、ご要望のお品だよ」

机にばらまかれたそれに、ぐう、と腹の虫が声を上げた。ハリーと同時に。

「……………」

「あらあら、まあ！ 二人とも食べ盛りだもの、しかたないわ。でも、お菓子ばかりはダメ。昼食と夕食もしっかりいただくこと。おかあさんとの約束です」

「リリー……君って最高の奥さんになるよ」

「当然でしょう。あなたの……妻だもの」

「リリー……！」

「パーティーする前から腹いっぱいにしないでくれよ、お二人さん。子供が見てるぜ。そら、ハリー、詰めた詰めた」

僕らがかけていた横長のソファにシリウスが無理やり割り込むものだから、挟まれたハリーがぐえつと哀れに鳴いた。

「マリア、替わってよ」

「どうして」

「……………」

「……………しようがないなあ、僕の弟は」

「僕が兄。君、まさか一生この不毛な問答を続ける気か？」

「そのつもりだけど？」

「……………しようがないな、僕の妹は」

「しようがないんだよ、君の姉さんは」

いつもの慣れたやり取りで張っていた気をほぐす。——わかつている。父さんと母さんの存在だけで頭はとつくにパンクしているのに、シリウスの、ルーピンの、そしてペティグリューの温度は生々しすぎる。君の壁になるくらい、お安いご用だ。

「……………」

「ジエームズ？」

ふと、シリウスが怪訝そうに声を上げた。ハリーと入れ替わることよって正面に変わった父さんは、眉根を寄せて深刻そうに考え込んでいた。

「ジエー？ どうした？」

「納得いかない」

「なにがだ」

「僕の娘は女の子のくせにどうして男子制服なんて着てるんだ？」

「……………」

あー……久々にされたな、その手の質問。ハリーに隙間からそら見ろと脇腹を小突かれる。

「マリアのこれは気にしないで。アイデンティティみたいなものだから。この子、徹底的に女の子扱いを嫌がるんだ」

「女の子じゃないんだから当然だろ」

「なんてもつたいたい！ 君はどこから見てもかわいい女の子だよ！

リリーそつくりの美人で、僕そつくりのお茶目さんだ」

「ジェームズ。そうじゃないわ。きつとこの子たちの時代には、女らしく、とか、男らしく、なんて考えは廃れているのよ。……ちよつと、残念だけど」

言葉の通り見るからに肩を落としたリリーに、ううん？ と首をかしげる。

「わたし、もしも娘ができたらくさん素敵なお洋服を贈って、一緒にオシャレを楽しもうと思ってたのに」

「ああ、それはマリアが一番苦手なやつだ」

「うるさい。ハリーだって人のこと言えないだろ」

八つ当たり気味に近くのグミを取る。半分ちぎって、ハリーの口へと詰め込む。ファッシュionsセンスに関しては僕たちは生まれついてのお揃いだ。もちろん、悪い意味で。

誰ともなしに始まった宴会にルーピン先生がバタービールの泡髭を舐めながら笑った。隣のシリウスはヒュウ、なんて小憎たらしく僕たちを冷やかしているし、ペティグリューはやれ誰かのグラスが空いたただのゴミが溜まったのだとネズミのように忙しない。リリーはバタービールを持ちながらまだ未練がましい目で僕を凝視していた。ジェームズは——ジェームズは、ただひとり遠くからすべてを見るように、会話にも参加せず優しい微笑みでいた。驚くほど親らしい顔だった。かつて『あの人』の記憶で見た——そして僕が実際にこの目

で確かめ、失望した悪童の姿はそこにはなかった。

親としてのこの人は——こんなにも静かな顔をするのか。

「さて、リリー。そろそろ時間だ。名残惜しいけど、僕とリリーは大広間へ向かわなくちゃ」

「ああ、姿現し訓練の補助だっけ？」

「そう、それ。成績優秀者の仕事だなんて言われると断れないよ。休日返上だ。気のいいジェームズ・ポッターはこうして体よく使われてやるのさ。すべては僕が優秀だったばかりに……悲劇だ」

「言ってる」

友人たちが激励を込めて代わる代わるにジェームズの肩を叩く。最後に、立ち上がったジェームズはそのままリリーの前へと回り込むと片膝を着いた。

「お手をどうぞ、僕の姫君」

「……くるしゅうないわ」

恥ずかしげに冗談めかす母と道化を気取る父の様は実に似合っていた。……胸の内をかきむしって、それから腹から笑い出してしまいたくなるほどに。

両親が退室する。ムードメーカーのジェームズがいなくなり、気まぐずなっただらしいシリウスや腰巾着（と、表現するにふさわしいベツタリぶりだ。）のペティグリューもジョッキを手に出ていく。一人、僕らと共に残されてしまったルーピン先生は、傷痕の目立つ頬を指で掻くとウーンと唸った。

「はつきり言って——僕も、ここにいないほうがいいだろう」

「そんなことは」

「いいんだ。気を遣わないで。……これ以上は、ハリーがかわいそうだ」

——聡いひとだ。本当に、心から。

「……うん。よし、こうしよう」

ひとりうなずいて、そしてルーピン先生はジェームズに負けず劣らずの含んだ顔で笑った。

「これから僕は君たちに昼食を運ぶ予定でいる。——けれど、こう見えて監督生なんてオマケの役職を持っていてね。もしかしたら誰かから運悪く雑用を頼まれて、戻ってくるまでにちよーっと時間がかかるかもしれない。そうだなあ……昼食のはずが夕食になってしまうくらい——なんてのは、時間を空けすぎかな？」

「……………」

思わずハリーと顔を見合わせていた。なんだか面白いくらいに僕らの事情はお見通しらしかった。なんてひとだ！

「……異論はなさそうだね。それじゃあ、二人ともここでゆっくり、気持ち落ち着けるといい」

「ルーピン先生……」

柔らかな微笑みが扉の向こうへと消える。閉じた戸を皮切りに城内の音が失せる。パーティーの余韻は瞬く間に拡散した。とうとう、必要の部屋にこもるのは僕とハリーだけになった。

「マリア」

「ハリー」

ハリーは震えていた。プツリと、ハリーの中の大事な一本が切れてしまったようだった。声はどことなく虚ろだった。

「僕、どうすればいいんだろう」

ハリーの身を腕の中に迎えて、背を撫でる。小さい。こんなにも小さな背中に、よくもまあ世界なんて危ういものに乗せられたものだ。

——君も、僕も。

「君の思う通りに」

——ハリーの選択を、僕は見届けよう。^{マリア}

狸だ。

ふおふおふお、なんてわざとらしい笑い声を白髭にこもらせている老人を前に思う。いつの時代も、この人だけは変わらない。煙のような人だ。

「ダン——ブル、ドア……ほんとうに……？」

「さよう。未来のお客人にも名が通つていようとは……実に光栄じゃ。長生きはするものじゃのう」

「言つてろ。あと百年は悠々と生きるぜ、このじいさん」

「シリウス！ ダンブルドア先生に失礼でしょう！」

ぎゃんぎゃんとシリウスを叱り付けている母の声を背に、ご老人を引き連れる原因となつたらしい男を見上げる。ジェームズ・ポッターは長年のクイデッチで作り上げたのだろう細身ながらにしっかりとした体躯を縮こませ、むくれていた。

「この顔で『宝物は無事に見つかったようじゃのう？』なんて言われたら、誤魔化せるわけないだろ。狸ジジイめ」

まるでちやちな悪事を暴かれた子供そのものだ。もう誰も彼もが成人済みの最高学年生だというのに、ダンブルドアの手にかかれれば子犬子猫も同然だった。はからずも父とダンブルドアへの心証が重なってしまい、血は争えないと改めて思わされた。——さて、ハリーは。

「」

……ああ、駄目だ。頼れる我が兄上は完全にフリーズしていた。し

かたない。

「ハリー・ポッター君、そしてマリア・ポッター嬢、で間違いないかね」
「はい」

ハリーに代わって答える。元々、この人の目から逃げ続けられるとは思っていなかった。もしもそんな芸当を可能とする物があるのなら——それは透明マントと名付けられているにちがいない。

ダンブルドアが物言わせぬ目配せを両親とその友人たちへと送る。暗に退室を促された大人たちは渋りながらも重々と偉大なる魔法使いに従った。

いざ、ダンブルドアへとただ二人だけで対峙する。元々は一人きりだった僕だ。これは、きつと、幸運だ。

「君たちはなぜ未来から現在へ？」

「わかりません」

「心当たりは？」

「まったく」

素直に答える。ダンブルドアは、ふむ……と依然微笑みながらうなずくと、ハリーを見た。

「君たちは、これからどうしたいかね」

ハリーの手を引く。ダンブルドアの目の先をなぞるように、ハリーを見る。

「ハリー、どうしたい？」

「マリア……」

「君が決めるんだ」

——君でなくては、だめなんだ。

「僕——もうすこし、見ていたい」

声は細く落ちた。

「父さんと、母さん。シリウス。ルーピン。……ペティグリユー。——そして、あなたのことも」

緑の眼差しと星のようなブルーが結び合う。それはほんの一秒のようにも、あるいは何十倍もの時間にも感じられた。彼らの間でのみ言葉なく語られた間だった。

「いくつか、条件がある」

「はい」

緊張のまま堅くうなずく。

「まず、君たちが過ごした日々はいずれ消える。君たちのご両親の記憶からもじゃ」

「——」

息を詰めた。それは、つまり——僕が僕であった三日間のことも——例外じゃない。

「そして、ただひとつの質問に答えてほしい。たったひとつだけじゃ」「……はい」

いつの間にか、ハリーを握っていたはずの手はハリーに握り返されていた。ダンブルドアはじつとハリーの稲妻の痕を見つめた。叡智の青はそこから未来の情報を読み取るうとするかのようにだった。

「――わしは、死ぬか」

答える。ハリーが答える。迷いは許されず、葛藤も逃避も猶予も与えられない。

「死にます」

再びの、間。――ダンブルドアはやがて、大きく息を吐いた。次の瞬間には、僕らがよく知る好々爺の顔へと戻っていた。

「よからう。では、そうじゃな――――マリア、エヴァンズを名乗ってみる気はないかのう」

それが実にあっけらかんとした提案なものだから。

「……………は？」

スコンと、寂寥の痛みは開いた口から転がり落ちていた。

「――それで、つまり、ええと」

「今この瞬間からマリア・ポッターはマリア・エヴァンズで、あなたの娘ではなく妹になるみたいです」

「……………」

好奇心やら不信感やらの視線に晒されながら、どうどうと向かったグリフィンホール談話室。ダンブルドア直々のお届けに、僕らの帰りをまだかまだかと待ちわびていたらしい両親は肖像画の扉までずつ飛ぶと、僕らを確保して風の速さで自室へ引き入れた。談話室で聞き

耳を立てていた寮生のことなどお構いなしだ。

「それって可能なの？」

「可能かななんてどうだっていいのさ！ ああ、感謝します、ダンブルドア様……さあ、こつちにおいて。息子で弟のハリー！」

ハリーがむんずとジェームズに奪われていく。既視感。——ああ、ジェームズとアルバスだ。嫌がる弟をからかい倒すときの我が家一番のやんちゃ坊主のさまにそっくりなのだ。ついでに、ジェームズの腕の中でぐったりするハリーもそのままアルバスだ。そして僕の前にはハリー。どうしようもなく心がくすぐったくなった。

「けれど、パパとママにどう説明したものかしら……いえ、パパとママだけなら『魔法』だから、で乗りきれぬ気がするわ。なにも知らないマグルなもの。そう、問題はチュニーよ」

「ああ、あの無愛想な馬面女……」

「ジェームズ！」

ハリーの怒りの形相に、ハリーを抱いたままジェームズが肩をすくめる。その後ろでシリウスは笑い、ルーピン先生は眉間を揉んでいる。実に関係図がわかりやすい。ペティグリューはもちろんシリウスの隣でうなづく係だ。

「僕の方はどうにでもなりそうだ。元々、楽観的な人たちだから」

「あなたをこんなふうに育て上げた人たちですものね」

ところどころに憎みきれない様子が見えるかわいらしい嫌味に、ジェームズがくくふと笑う。その顔は、ロンと一緒に試験前のハーマイオニーから逃げる——悪巧みのハリーにそっくりだった。きつとハリーはマリアにそっくりだ、なんて思っているのかもしれない。わかるとも。僕なのだから。そして——たったひとりの片割れだ。

「その必要はないよ」

両親へと杞憂だと首を振る。——ハリーが答えを見つけ出したそのとき、僕らは彼らの中から永遠に失われる。それが、あるべき姿だ。

「それよりも夕食に行こうよ。すこし事情があつて、僕たち、お昼を満腹に食べられてないんだ。お腹ぺこぺこだ。ね、ハリー？ いいかな

——姉さん」

「まあ……！ まあ、まあ——まああ！ ええ、もちろんよ！ あなたたち、リリー姉さんについてらっしゃい！」

わかりやすく張り切るリリーにしてやったりとハリーとほくそ笑む。ポッター家のお姫様、未っ子のリリーも、普段は一番下の子供扱いばかりされるからか、初めて年下の親戚を迎えた際には姉さんぶつてそれは甲斐甲斐しく世話を焼いたものだ。下の子に生まれるものの宿命なのかもしれない。

禁じられた森からホグワーツへと移動した朝と同じ布陣で廊下を闊歩する。ジェームズはなんとも王様然としている。シリウスは——王様というより杖を握り澄ませた騎士のようだ。礼儀正しさよりも荒々しさが目立つ。隣のハリーと顔を合わせて、同じ状況なのに透明マントの感触がないことに不思議な心地を覚える。

「おおい、ジェームズ！ なんだそのおチビさんは。お前のミニチュアか？」

「ねえ、あれ見て。うふふ、リリーが二人いるわ。かーわいい」

さすがの人望らしく、至るところから両親へと気軽に声がかかる。中には「あのカップルはいつの間に二人も子供をこしらえたんだ？」なんてゲスな野次も雑ざっているが、間違いでもないのでなんとも言えず苦笑う。

当然の流れでグリフィンホール席へと通されて、時代の違う寮生たちから珍獣を見る目付きで遠巻きにされながらの食事は、久々にやらかした日のハリー・ポッターの感覚を思い出した。あの頃は、この程度の視線の矢は当たり前だった。

興味津々にうずいている生徒たちへの説明は明日に切り上げ——
そも、ダンブルドアがどのようなにして我々をこの時代に組み込む気なのか、現時点ではさっぱりわからないのだ——次の問題は就寝するための寮室だった。

突然増えた二人を受け入れるスペースは、当然新入生たちの部屋にはない。精神の面でも、親元から離れ同年代内にすでにコミュニケーションを作り上げている子供たちに、今さら追加要素と仲良くしろと強いるのは酷だろう。かといって別の学年の部屋に押し込むというのも無理がある。そこで。

「ハリーは僕のベッドで寝て、マリアはリリーと一緒に寝ればいい。兄弟だもの、緊急措置としてはまずまずだろ？ それでいいかい、みんな？」

談話室で待ち伏せていた顔々が笑いを含んでうなずく。この陽気な赤い王様に逆らおうなんて寮生はグリフィンホールには存在しないのだ。良くも悪くもお祭り気質の気のいい輩ばかりなのだから。ジームズの後ろで、傲岸不遜な親友に仕切られることにすっかり慣れきっている監督生は好きにしろとばかりに肩をすくめていた。

交流もなあなあに慌ただしく就寝時間がせまる。話し足りない様子のジームズに捕らえられたハリーと別れて、リリーに連れられ女子寮の七年生部屋の一つをくぐる。中には三人の女性がいた。うちの一人はどことなく見覚えがあった。

「待ってたわ、リリー！ うわさのおチビさんのことも」

「ねえ、リリー、リリー。あたしたちにそのかわいらしいレディを紹介してはくれないの？ あなたの妹だって聞いたわ。ほんとうに、そつ

くり！ 妹がいること、どうしてずっと黙ってたのよ」

「なんてかわいいの！ この頃のリリーを思い出すわ。こんな美人姉妹を持って、さぞご両親も鼻が高いでしょうね。確か、上にお姉さんもいるのではなかった？ お姉さんのことは見たことないけど、きつと美人三姉妹ね！」

わつと駆け寄ってきた女性たちにもみくちやにされる。そろそろ、女として女性から近い距離で接されることは否応なしに慣れたものだけど、やはり心臓にはよくない。こう、その——当たるのだ。色んな箇所。ふくよかな二つのアレが。

「あなたたち、もつと優しくしてくれないとマリアが潰れちゃうわ！

こんなに小さいんだから。くわしい話は明日。たぶん、えつと……ダンブルドア先生からご説明があると思うわ。今日はこのまま寝るの」

「えー」

「えー、ではありません！ 監督生命令ですよ」

「ハアイ、ママ。……口うるさいお姉さんであなたも大変ね、マリア」
「メリーー！ 聞こえてるわよ！」

キャツキヤと笑い転げながら就寝準備を終えたレディたちが各自のベッドへともぐり込む。実にかしませい。まるでハーマイオニーとラベンダーとパーバティを見るようだ。いつの時代も女の子のパワフルさは変わらない。

「さ、マリア。パジャマに着替えましょう。わたしのお古だけど……洗濯はちゃんとしてあるから問題ないと思うわ。その前にシャワーね。今日はもう遅いから、特別に監督生用のバスを使わせてあげます。みんなにはナイショよ？ ほんとうはいけないことなんだから」

いたずらっぽくウィンクを飛ばしてくる母に頬を緩めて笑う。

きつと、僕の母さんも——『私』があの日、死にゆく姿を見届けたあの人も、少女時代にはこうして溢れんばかりの愛嬌で周囲を笑顔にさせられる人だったにちがいない。あのまま、あなたの元で、ただのハリーとして育っていれば——親子として、こんなやり取りもあつたのかも知れない。

「マリア?。」

けれど、僕はマリアだから。マリアの名を預かるのだから。それを乞うのは——卑怯で、筋違いだ。

「うん、今行くよ」

駆ける。若い母の背中を追いかける。あり得はしないつかの間を噛み締める。——これを、君は手放せるだろうか。ハリー。

風呂から上がって、十七歳の母の大きなネグリジエに袖を通して（リリーは「これでも一番小さなサイズを選んだのよ」と弁解していた。）鏡の前で僕は躊躇っていた。——鎖骨の辺りからハリーとの思いの傷が覗いていた。

律儀なものだ。十一歳まで容赦なく縮んだ身体のくせに、傷はしっかりと残っている。……僕が、そう望んだのかもしれない。

恥はない。女性としての意識がない僕は、高々一生の傷程度でお嫁に行けないだとか嘆く精神構造はしていない。そもそもが稲妻のキズと一蓮托生した僕だ。どんなに傷だらけだろうと『アイツ』の身も心も奪い切る自信はあるのだし………ウン、それは、まあ、置いておこう。

問題はリリーの反応だ。僕は嘆かない。けれど——あの人は我がことのように傷付くだろう。そういうひとだと、もうわかっている。

「マリア？ 着替えられた？ もういいかしら。あなたの髪を梳かしたいのだけど」

「自分でできるよ」

「わたしがやりたいのよ。これも夢のひとつ。それから——そろそろ、わたしにもわかってきたわ。あなた、乾かすとか言って結局、生乾きのまま寝てしまうタイプでしょう」

「……………」

「お見通しよ。なんたって、あなたのおかあさんですからね」

クスクスと廊下に軽やかな笑い声が響いた。扉の向こうで待機しているらしい頑固な母に、気持ちばかりの雑なブラッシングの手を止めて降参と声を上げる。ええい、どうにでもなれ。

「——それ、」

母は絶句した。栄養不足の骨じみた体軀を彩るたいそうな引き彎り痕は、彼女の目にどれほど奇異に映るだろう。誰になんと罵られようと貶されようとも欠片も気にはならないけれど——母に気味悪がられるのは、堪える。
しかし、母^{リリー}さんは。

「……いたい？」

そつと、マリアの肌にさわった。震える指先で、赤い肉の色に変色してしまった痕をなぞる。

「今は、ちつとも。けど——うん、痛かったよ」

素直にこぼれ出ていた。直接的な痛みだけじゃない。言葉に尽くせないものが、ここには刻まれている。——君が刻んだんだ、ハリー。

「すべて、代わってやれたならよかったのに。なんて不甲斐ない母親なのかしら」

「代わってくれたよ」

彼女の切々とした声に、間、髪を容れず答える。僕の代わりに——あなたが命をとってくれたんだ。

リリーは身を屈ませると、正面から僕を抱きしめた。小言の通りまだ生乾きの髪に手を差し入れて、梳くようにして撫でた。母の手だった。

「優しい子ね」

「……あなたの自慢の子供だからね」

ふふ。耳元で笑われる。なんて、やわらかな時間だろう。この泡沫

の世界に溶けてしまいそうだ。

「あなたが気にしないのなら——わたしが泣いてはいけないわね。あなたの自慢のお母さんなんだから」

「そうだよ、母さん」

やがて、腕は離れる。さあ、母親らしいことをさせて——タオルを手にドレッサーの前へと座らされる。

「そっくりね」

「ほんとうに」

鏡に映り込む二つの赤毛は、髪質こそ多少の違いはあるものの、まるで一つを二つに分け合ったみたいに同じだった。鼻の形も、唇も、顎も、輪郭や肌の色だって、映るその人と同じだ。——目だけが、そこに父を見せていた。

「あなたは知らない話だけど——元々ね、わたし、あなたのお父さんが大嫌いだったの」

「知ってるよ」

「あら、知ってるの？ 未来でわたしが話したのかしら。それとも、近くにおしゃべりさんがいた？」

「……………」

「いいの、答えないで。あなたと過ごすこの時間を大切にさせて。——それで、ね、わたし、ほんとうにアイツが嫌いだったはずなんだけど……ねえ、どうしてこんなことになったんだと思う？」

「どうして？」

母の邪魔にならない程度に小首をかしげる。ふわふわと風にあおられた毛先が首やら頬やらをくすぐる。それを指で払って、子供っぽい顔をした母さんは心底楽しそうにころころと笑った。

「うふふ、それはね——ハリーよ！ ハリーのことがあったから、わたしたち、お互いに意識しちやっただの！ びっくりでしょう？」

「——それは、」

「アイツは一目惚れだとか寝言をほざいてたけどね。そんなわけはないわ。わたし、ちゃんと覚えてるもの。ホグワーツ特急の中ではじめて会ったとき、彼ったらシリウスと一緒にとんでもなく憎たらしい顔をしたんだから。それで、セブを侮辱して——わたしのことも嗤ったわ！ どこに一目惚れする余裕なんてあつたのかって話よ。そう思うでしょ？」

「ウーン……」

そういうところだぞ、父さん。

「でも——でもね——ハリーを見ればわかるわ。あの人がお父さんで、わたしがお母さんなら、こんなにかわいくて素敵な子が生まれるんだって——それは、ええ、悪くないかもって……そう思っちゃったのよ。思っちゃったなら——どうしようもないわ」

ふと、そよ風を最後に赤い髪を乾かす母の手はなくなった。背後から、熱風の温度を残した腕で抱きすくめられる。

「やっぱり、間違いじゃなかった。ハリーだけじゃない。——マリア、あなたがこうしてわたしたちの元に生まれてきてくれたことが、わたしたちを親として選んでくれたことが、こんなにも嬉しい。誇らしい。しあわせなの。あなたを娘と呼べて、わたしを母と呼んでくれることが。——ほんとうに、幸福だわ」

「——」

咄嗟に、うつむいた。今だけは、髪を伸ばしっぱなしにしているよかったです。横顔を隠してくれるマリアの髪に感謝した。

ああ——無理だ。

僕には無理だ。僕に、子供をこんなふうを抱く腕はない。僕にこの温度は宿せない。僕は——『母親』にはなれない。

僕が男でありながらも子を産もうと決意したのは、取り戻したかったからだ。奪いたくなかったからだ。ドラコからスコープウスを。そして、僕のマリアを。

我が子がほしいのではない。それは、とつくに決まっている。僕の子供はスコープウスでもマリアでもなくて——ジエームズ、アルバス、リリー、君たちだけなのだから。私は君たちの父親であって、そして今は——無い物ねだりばかりの誰でもない『僕』だ。

僕に君たちの母親はできない——
ほんとうの『母』を知ってしまった今——それをむぎむぎと突き付けられた。

「母さん」

「なあに、マリア。わたしのかわいいマリア」

「ごめんなさい」

「……いいのよ。どうせ泣くなら——母の胸の中でお泣きなさいな。それくらいは、させてちょうだい。きつと早いうちにあなたたちに寂しい想いをさせるひどい母親だけど、それを許してほしいとは言わなけれど——今だけは、こうしてあなたたちのお母さんでいさせて」
「……っ母さん……！」

脱げ殻^{マリア}は夢うつつの母にすがって泣いた。

そして、夜更けの頃——事件は起きた。

目が覚めた。唐突に。空気に引つ張られるようにして飛び起きる。

予感はあつた。懸念もしていた。——的中した。
駆け出す。談話室へと続く階段を下りる。灯り一つない広間へ飛び込む。

「ハリー」

ちっぽけでひとりぼっちのハリーは冷たいソファの上で身を丸めていた。認められない世界を^{すべて}拒絶するように。

「ハリー」

肩へと触れる。気付いた。談話室の影はハリーのものだけではなかった。居心地の悪そうな父さんや親友たちもその先にいた。——きつと、ハリーは死者が^{愛するひと}困むベッドに堪えられなくなったのだ。

「ハリー」

「マリア」

茫然とした声がマリアを呼ぶ。

「ここにいるよ」

「うそだ」

「ちゃんと触れられる」

「ゆめだ」

「体温もある」

「信じない」

「生きてるよ」

「——ツ君は死んだ!!」

ハツと、息を呑む声が暗闇から聞こえた。誰だろう。父さんだろう

か、母さんだろうか、それともシリウスか。そんなことはどうでもいい。

「ハリー」

「君は死んだんだ！ 間違いなく、あの時に！ だって、確かめた。祈って、すがって、名前を呼んで——何度も眠る君の手を握りしめた。君は一度だって握り返さなかったし——人形みたいに冷たかった」

「ハリー」

「わからないだろう？ 眠りに就くたび、目覚めるたび、すべて嘘なんじゃないかと疑う僕の気持ちなんて。僕はあの日からとつくに狂っていて、君という夢を見ているだけなんじゃないかって。眠る間際、目を閉じる君に途方もない恐怖を覚えるんだ。毎日だ！」

「ハリー……」

「それだけ君は酷いことをしたんだ！ 僕を傷付けたんだ！ ドラコも、ジニーも、ロンもハーマイオニーも、みんなみんなを傷付けた！」

「うん——その通りだ」

ぐちゃぐちゃに喚くハリーの背を撫でる。怯えきったハリーは、僕なんていないみたいに自身だけをつよく抱いた。

僕らにとつて、死はとても近しいものだ。ありふれていて、ともすれば最期に出逢う生涯の友とすら云えるほどに。そしてハリーのそれは、僕よりもずっと生々しい痛みを持つ。

マリアはハリーを残して死んだのだから。

「マリア——僕は君に死んでほしいと望んだ。僕と共に死んでくれと」

嗚咽が聞こえた。きつと母さんだ。

「うそつき」

「ごめん」

「許さない」

「許さないで」

「一生許さない。死んだって許さない。僕が死ぬまで許さない」

「それでいい」

そろりと、弱々しい手が僕の背へと回った。やっと抱き返してくれた。

「ここは夢だ。そうだろう？　だつてシリウスがいる。ルーピンがいる。ペティグリュウもいる。——父さんと母さんが生きてる」

「そうかもね」

「それなら、君は？　目覚めた先、君はもういないのか？」

「……もしも、いないとしたら、君は目覚めを放棄するかい？」

ハリーは答えなかった。ただ、一言だけをポツリと落とした。

「おいていかないで——マリア」

いかないよ。もう二度と。（——マリアはとづくにいつてしまったから。）

信じてもらえやしないとわかっていながら、なおも繰り返す。それしか、僕にはできない。

「君をうしなったら、僕はひとりになる」

「ならない。ジニーがいる。君はジニーと新しい家族を作るんだ」

「そしてそこにマリアはいない。——そんなの、たえられない」

あえぐようにこぼして、ハリーは目を閉じた。気絶するように彼は眠っていた。事実、気絶同然だ。彼の心は限界を迎えていた。

「マリア」

顔を上げる。涙を堪える母さんの肩を抱いた父さんは、神妙に僕たちを見ていた。

「僕、一度死んだらしいんだ。それが——この子に最大のトラウマを作ってしまった」

「そんなの、当然だ。聞いていただけの僕ですら叫び出したくなった」「兄弟をここまで追いつめた僕のことを叱る？」

「もちろん。けれど、それよりも——抱きしめたい」

ハリーごと、正面から強く父さんに抱かれた。後ろの温もりは母さんだ。

「がんばったんだね」

「うん。がんばったんだ」

「そうか、それなら——叱るけど、同じくらい褒めてあげないとね」

ぐしゃつと父の顔がゆがむ。さっきのハリーにそっくりだった。

「父さん、母さん。ここでいいから、今日はハリーと一緒に寝てもいい？ ……ずっと、そうしてきたんだ」

呟く。——倫理的に間違っている。そんなことは理解している。いくら血の繋がった兄弟といえど僕たちは男と女で、成人もしている、互いに将来を誓い合った恋人もいて——それでベッドを共にするというのは、決して許される行為ではない。異常だ。

けれども、そんなものはハリーの苦悩の前には意味を為さなかった。毎朝マリアの呼吸と体温を確かめるハリーの姿は、憐れ過ぎた。ジニーもドラコもどうしようもないと首を振ってしまうほどに。

「駄目だ」

きつぱりと父さんは告げる。

「きちんとベッドを使いなさい。——僕のベッドをね」

「……………父さんは、どうするの」

「シリウスのベッドにでも潜り込むさ」

「あ!? なんだってそうなる!」

「だって君が一番、寝相が良いんだもの。意外だよなあ。寝てる姿だけはまるでお貴族さまだ!」

「嫌味が雑だぜ、プロングズ」

笑いが上がる。暗く湿っていた空気がジェームズの言葉一つで快活さを取り戻す。とんでもない人だ。きつと、この人は場の掌握に關して天性の才能を持っている。

小さなハリーを軽々と抱き上げて、寂しさを隠しきれないリリーへとおやすみのキスを交わしてジェームズは寝室への扉を開いた。誰の心にもやりきれない瑕を残した夜は、朝を迎えるためますます深まっていた。

「ものすごく恥ずかしいことをした気がする」

ハリーの朝イチの言葉はなんとも気の抜けたものだった。知らないはずなのに懐かしい匂いのするベッドの上、毛布の中、いつも通りぐしやぐしやの髪を枕にすり付けてハリーが唸る。

「したんだよ」

「誰にも合わせる顔がない」

「僕にも？」

「マリアは別。当たり前だろ」

「うん、当たり前前だ」

おそろしく跳ね散らかった黒髪を指で混ぜる。前髪を掻き上げて、額に現れる稲妻を指の腹で擦ってみる。もう痛まないはずのそれだけど——ハリーは僕の手を取ってくすぐったそうに笑った。

「……生きてる？」

「生きてるよ」

「ほんもの？」

「ほんもの。疑うなら君が何歳までおねしよしてたか答えてやろうか」

「なんで覚えてるんだ、そんなこと。……はあ、マリアだ」

僕の手を口の頬へと当てたハリーは、そしてゆっくりと脱力した。いっそう、頭は父の枕に沈んでいった。手慰みに十一歳の彼のふわふわのほっぺをつつく。かわいらしい童顔が破顔する。うんうん、我ながら僕^{ハリー}って、マリアには敵わないけどこうして見れば中々の美少年じゃないか。

「朝から仲が良くて羨ましいねえ、父さんを仲間には入れてくれないのかい?」

愉快そうな声と共に毛布を剥ぎ取られた。じゃれ合う僕らを、朝日を背にした四つの顔が覗き込んでいた。

「おはよう、父さん」

「おはよう。きちんと挨拶ができてえらいね、マリア。ほら、ハリーは?」

「……おはようございます」

「ウーム、堅い。もしかしてもう反抗期? そのところ、お姉さんとしてどう思う? マリア」

「僕たちはいつでも反抗期だったよ。歯向かう対象はもっと大きかったけど」

それこそ、世界を巻き込んだ反抗だったわけだけど。

なんてこった……なんてわざとらしく頭を抱えているジエームズに、もぞもぞと枕へ逃げていたハリーが呟く。「……僕が兄さんだよ」

「はいはい、わかったからちやんと起きてよ。兄さん」

「おや、もしかしてハリーは寝起きがよくないのかな」

「ジエームズそっくりじゃねーか。蹴った殴ったがないだけマシか」

「これには苦労したよ」

起^マこす側^{リア}としても、起^ハこされる側^{リー}としても。

「ハリー」

ぐずるハリーを上から押さえて、まるい額へとキスを落とす。寝惚けながらも同じスキンシップを返してくれる。慣れたものだ。これ

が僕たちポッター兄弟の、十数年と変わらない朝の挨拶なのだ。ジニーともすつかり恒例化している。……そのうち、ドラコも輪の仲間入りを果たしそうだ。

「パパにはしてくれないのかい？　ハリー、マリア？」

「……………」

涙混じりにとろとろした緑がぼんやりと父を見上げた。冗談のつもりだったらしい父さんが、リリーの目にうろたえたのが見えた。なので。

「わっ、おお——!？」

父さんの腕を掴んでベッドへと引きずり込む。ハリーとのあいだに挟んで、同時に頬へとキスを送る。腐っても双子、寝起きでも打ち合わせなどなくとも意思疎通は完璧だ。初代悪戯仕掛人の子供だもの、このくらいは朝飯前——てね。

「やられちまったな、ジェームズパパ？」

「シリウスパパもいかが？」

「おっ——おれは、いや、まあ」

「マリア、なんとなく予想はついてるけどシリウスよりも僕のほうがぜったいに良いパパだから。なつきすぎちゃダメ。顔に騙されないで」

至極真面目に親友をこき下ろしたジェームズにどつと笑いが起きた。ハリーも一緒に笑っていた。どうやら目は覚めたらしい。

「おはよう、マリア」

「おはよう、ハリー」

優しい目がいくつも僕たちを見守っている。父さんの腕が僕とハリーをまとめて抱き込む。

「おはよう、僕の愛する子供たち」

誰も昨夜についてなにも言わない。聡い人たちだ。未来で子供がほくたちどのような状況にあるのか——自分たちがどのような末路をたどるのか、とうに察しているだろうに決して核心には触れようとしない。——僕らの言葉を待っている。それはまさしく『大人』の気遣いだっ

た。
「さ、ともかく朝食だ。マリアは着替えのためにも一度、女子寮へと戻らないとね。……リリーが拗ねてるから、よろしくね？」

これまで鏡の中にあつた瞳がパチンツとウインクを飛ばす。それと同じ目をもって微笑み返す。

今日も、ハリー・ポッターとマリア・ポッターの生ある限り叶わないこの場所で、両親との時間をすごそう。

「ところで、ハリーはいくつまでおねしよしてたんだい？」

「その話はやめてってばー！」

ずるいわ!! ずるいわ……ずるいわ……

朝の談話室を嫉妬でいっぱいの金切り声が飽和した。リリーだ。リリー母さんは僕らが起きてすぐの一連の流れをルーピン先生から聞き出して、それからすっかり拗ねてしまったのだった。

「ジエームズばかりずるいわ！ わたしだっておはようのキスしてほしいのにー！」

「こればかりは譲れないよ、リリー。ほら、僕ってばお父さんだから」

「わたしだってお母さんよ！」

微笑ましい痴話喧嘩の様子に一同が大きくため息をついている。しかし誰も止めないあたり、これが彼らの日常なのだろうと察する。昨日は萎縮していたハリーも、両親の子供っぽい姿にたえきれず笑っていた。

「どうしたの、リリー？ あなたの痲癩が階段まで聞こえていたわ」

「ああ、聞いてちょうだい、メリー。マリアは姉であるわたしよりもジエームズがお気に入りなんだわ」

「そんなことないよ、……姉さん」

談話室へと下りてきたメリー・マクドナルドへ泣き付くリリーをハリーと共に捕らえる。今朝の再現のように母の手を引いてすべらかな頬へと唇を寄せる。……ちよつと、照れくさいけど。

「おはよう、母さん」

ささやけば、ハリーと同じ緑の瞳はみるみるうちに大きく広がった。そして次には女神もかくやな美貌が破顔した。

「おはよう、わたしのかわいい子供たち」

ぎゅうつとまとめて抱き締められる。母の腕の中でくつついたハリーとくふくふ笑う。その強さはモリー母さんを思い出させた。

「……あなたたち、そこまで進んでたのねえ」

「うん？」

「家族ぐるみ、てことでしょうか？ リリーはジエームズと、それならマ

リアはハリーと結婚するのかしら？」

冗談めかしたメリーの言葉に、ハリーと見合って吹き出した。——
兄弟と結婚だなんて！

リリーは肩を震わせ、ジエームズは名案だ！　なんてシリウスと一緒に悪ノリしていた。

「ハリー、これで僕たち、名実ともに家族になれるね」

「マリア……もう、バカ言っていないでさっさと準備してきて」

リリーと共に小さな腕に女子寮の階段前へと押し出される。母に連れられながら振り返る。ハリーは父さんやもう一人の父さん、恩師、その親友に囲まれリラックスしていた。——この様子なら、一人にしても大丈夫そうだ。

「マリア」

僕の手を引いていたリリーが寝室の扉を開いて立ち止まる。ニッコリと、迫力のある笑顔を浮かべている。たいそうな美人である。そして扉の向こうには——制服とブラシとハサミとヒラヒラした何かを手を持つ女性陣が、母同様、実にイイ笑顔で僕を待ち構えていた。

「しつかり、オシヤレしていきましょうね」

かわいいという単語を、目覚めてからたった一時間のあいだに何度聞かされただろうか。——主に兄そっくりのこの男から。

「マリアはほんとうにかわいいなあ、僕の小さなプリンセスはきつと

妖精が手ずから造り上げた秘宝だよ！ あ、もちろん屋敷しもべ妖精
じゃなくてゴブリンのほう。さあ顔をよく見せて……ああ、かわいい
！ なんてことだ、将来が楽しみなんてものじゃない！」

「……………」

「ハリーもよくよく兄弟を守ってやるんだぞ。悪い虫が付きそうに
なったらどんな手段を使っても払うんだ。パパだってママを得る
ために長い時間をかけてとある虫を——」

「ジエームズ」

「口が滑りました。ユア・マジエステイ」

「……………」

リリー ジエームズ
女王が道化を締め上げているあいだにその兄弟の元へと逃げ込
む。すっかり同情した顔付きのハリーに抱き留められて心底からた
め息をつく。

おお、今世ではまだ見ぬ息子のアルバスよ——お前も兄さんに絡ま
れてるあいだはこんな気持ちだったのかい。兄弟の微笑まじいたわ
むれだと父さんも母さんもお前を真剣に助けてやらなかったことを、
今になってこんなにも後悔するとは。——これは、とても、うっとう
しい！ そりゃあ、ジエームズも弟に毛嫌いされるわけである。リ
リーは当然のように兄の愛情を受けてたくましく育っていたが。

「マリアって母さんには弱いんだ？」

母が一年生時に着用していた制服——のスカートを見下ろしてハ
リーがささやく。ちよつと笑った声なのに気付いて、やわらかい子供
の頬をつねってやる。

「母さんと父さんに弱いんだよ」

「整えられた赤い髪を肩から払って、ハリーだけに届くよう小さく答
える。」

ほんとうなら——母が、父がマリアと呼ぶ存在は、もつと別の、真つ新で無垢な子供だったのかもしれないのだから。

否、マリアを求め生み出したのは僕だ。だから、それはイフですらない空想論でしかないのだけど。——それでも。

叶えたい。母さんが娘^{マリア}に求めたものを。マリアの代わりに。父さんと母さんに会えないあの子への贖罪に。

……だからといって、懇切丁寧に切り揃えられてしまった前髪だとか磨かれた爪だとかハーフアップに上げたツインテールを目立たせるリボンだとかが嬉しい気持ちは微塵も湧かないけど。いい歳して僕はなんて格好を……。

大所帯で大広間へと向かう。すれ違う生徒たちの珍獣を見る目付きを無心で振り払って歩く。朝から豪華なしもべ妖精力作の朝食前へと腰掛ければ、昨夜の再演のように視線が動いた。特にグリフィンドール生は面白いことがさあ起こるぞと期待に目を輝かせていた。

「さて、みなよく食べよく飲んだことじやろう。このあと一番目の授業が魔法史の諸君は……ご愁傷さまじや」

ざわりと、生徒が座る四つの長机がどよめいた。ダンブルドアが朝にその席を立つのは珍しいことだった。再び、食事をはさむことでそれていた目がポッター兄弟の元へと戻る。それを確認して、ダンブルドアは鷹揚にうなずいた。

「昨日からホグワーツに新しい仲間が二名ほど加わっていることは、みなならとうに知っておろう。わしよりも耳の早い君たちじや。そこで、君たちの好奇心が新しい噂を生み出す前に、正式に紹介しておこうかと思つての。——ハリー・ポッター君、マリア・エヴァンズ嬢」

ハリーと共に立ち上がる。不安そうな両親を見下ろしてささやかに笑む。

打ち合わせなんてものはない。ダンブルドアが何を言い出そうと

してるかなんて知らない。けれど、ハリーとして——マリアとして生きた心がダンブルドアの求めるものを理解している。それほどに——『僕』はあの人と共に人生を歩んできたのだから。

「名からわかる通り、彼らはジェームズ・ポッター君とリリー・エヴァンズ嬢のご兄弟じや。見ての通り、ホグワーツに通うための魔力しかくも持ち得ておる。じゃがしかし——彼らの入学は九月の始めには間に合わなんだ……」

静かに、老人の声は落ちた。深刻そうにひそめられたそれに、誰もが息を呑む。そして。

「それはなぜか——わしが入学許可証を送り忘れたのじゃ！」

バーンツ——と。ダンブルドアの背景にいかづちの幻覚が見えた気がした。

うそでしょ。マクゴナガル先生があんぐりと口を開いた。スプラウト先生は飲みかけのかぼちやジュースを盛大に吹き出してしまった。スラグホーンが何かを察しニンマリとして、フリットウィック先生は椅子からコロコロ転げ落ちた。

途端に空気がコミカルに崩れだしたのに、ハリーと合わせていそいそ座り直す。はずかしい。呼ばれたからといって訳知り顔で立ちやったのがはずかしい。父さんと母さんの目が懸念から同情に変わったことすらいたたまれない。ぜんぶあのおじいさんのせいだ。

なお大広間内の空気を右へ左へ蹂躪した件の魔法使いは、己の頭をニワトコの杖で叩きながら「いかなのう……やはり歳かのう……」なんてうそぶいていた。憎めない人だ。

「よいかね。すべての責はわしにある。お叱りの吠えメールならばわしが受け取ろう」

——ふと、気付いた。僕ら含め誰もがダンブルドアに注目する中、暗いよどんだ瞳は一寸足りともそれることなく僕とハリーを射抜いていた。

……ああ、そうか。あなただけは誤魔化せるはずもない。ハリーも『マリア』も知るあなたなのだから。

「どうか少しのあいだだけ——みんなの広く豊かな心で彼等をこのホグワーツに受け入れてやってほしい」

老人の威厳ある声に締めくくられて、朝食の席は解散となる。各々が一現目の授業のために駆け足で廊下をゆく。当然僕らも、自分だけの時間割りがある両親たちと別れて二人きりで過去のホグワーツを闊歩する。

「ダンブルドア、あれでよかったのかな」

「いいんじゃないか。さつき、言ってたろう。——少しのあいだだけ、て」

少しのあいだ——僕らが完全に消えてしまうまでの夢幻なのだから。いずれは元に通る。ホグワーツは未来からの異分子なんて迎え入れた記録も記憶もなく平穏な日常を取り戻す。

すべては、ハリーの選択次第だけだ。

「大体、ダンブルドアのことだ。ほんとうに管理不手際をなじるものが現れたとしてもものりくらりと逃げる準備はできてるさ。——ダンブルドア軍団の件を、忘れたわけではないだろう？」

「……ああ、そうだね」

ハリーは幼い顔に似合わず重く肯定した。良かれと立ち上げた秘密組織が結果的にかの老人を追い詰めたことは、まだ記憶に新しい。ある程度まで歩いて、校庭を前に立ち止まる。声変わりも迎えてい

ない男の子の声に呼び止められたからだ。

「きみたち——ポッター！ エヴァンズ！」

振り返る。それから周りを見渡してきよとりとしてしまう。ハリーに小声で釘を刺される。「——エヴァンズって君のことだよ」

「君たち、特別授業があつたりする？ ないなら、一現目はスプラウト先生の薬草学だよ。昼からは飛行訓練があるからそのつもりでね」

きつちりと制服を着込んだグリフィンドールの男の子だった。どことなく、張り切りすぎて空回っていた一年生の頃のハーマイオニーを思い出した。いつの時代にもこういう子が一人はいるらしい。

「報せてくれてありがとう。行こうか、ハリー」

「これ、僕ら行く必要があるのか？」

「あるとも。君も僕も一年生なんだから」

「……マリア、妙になれてない？」

いわゆる、子供のフリってやつに。

暗に問われて得意気に鼻で笑ってやった。慣れてるに決まってる。ホグワーツの一年生をするのはこれで三度目なのだから。

「二人って仲が良いんだね。なんだか兄弟みたいだ。幼馴染みってやつ？」

言いて妙な男の子の言葉に、くふくふと笑い合う。

「そうだね、ハリーは私にとって弟みたいなものだよ」

「そしてマリアは僕の妹だ」

「それって、君たちのお兄さんとお姉さんが恋人同士なのに関係して

る?」

「さーて、どうかな」

親切でいたいけな少年をからかいつつ温室へと向かう途中、数人のレイブンクロー生とすれ違った。

「——じゃあ、グリフィンドールの姫さまはこのこと……」

思わず振り返った。当然のように。当然の顔で。つまりは反射であつた。

「……マリア」

「……あ。」

「ん? 君たち——ああ、そうか。これ、君のお姉さんのあだ名なんだけど、もしかして知ってた? 妹の君は——さしずめ、リトル・プリンセスってところかな」

——顔から火が出そうだ。

あれだけ恥ずかしくていたたまれなくて堪らなかつたあだ名は、しかしいつの間にかマリアのものなのだと刷り込まれていた。

フレッドのせいだ。ジョージのせいだ。二人に教えたマクゴナガル先生のせいだ。ついでにドラコのせいだ。そしてなにより——
—父さんのせいだ!

「美人姉妹で羨ましいね。首席の姉さんみたいになれるよう励めよ、リトルプリンセス! ポッター君はくれぐれもお兄さんの真似はしないように」

カラカラ笑って大きな背の青ローブは去っていく。

「……………」

「えーと……エヴァンズ？」

誰とも目を合わせたくないのに、僕より拳ひとつ低い身長のハリーが母譲りの目をキラキラさせながら僕を覗き込んだ。手はしっかりと僕を捕らえていた。

「ほら、はやく行かないと遅刻するよ。——リトル・プリンセス？」

……今朝の仕返しってわけだね、兄弟。

「集まれ、集まれー！ 一年生と七年生の決闘だー！」

「エヴァンズの妹だ！ エヴァンズの妹が決闘するぞー！」

「介添人はポッターだ！ ポッターの弟だー！」

「そおら、見物だ！ 集まれー！！」

「……………」

ハリー。マリア。互いに心の中で片割れを呼んで、まったく同じ無表情で見合う。

なぜこんなことに。

——事は飛行訓練の時間に起きた。

上がれ、と幼い声が箒を怒鳴り付ける。正面の男の子だ。お願い、かわいい箒ちゃん、言うことをきいて。と猫なで声が懇願する。隣女の子だ。さつきと箒を手にしていた僕とハリーは、子供たちの声に囲まれながら実に老人じみた気持ちで次の指示を待っていた。

「思い出し玉を持つてる子はいないね」

「マクゴナガルが窓から見てる、なんてこともなさそうだ」

……ついでに、悪戯したくてたまらない憎たらしい顔したスリザリンの男の子も。

口先は軽いが、甲高い騒音にうんざりした様子のハリーの肩を叩く。ついでに絶妙な位置にある頭も撫でておく。ふわふわだ。父さんの髪もこんなかんじなのだろうか。きつとそうだ。後でちよつとだけ触らせてもらおうかな。

「マリア……」

「おや」

さつきまでぎやんぎやん喚いていた正面の男の子に今度は睨まれていた。スリザリンの男の子だ。なお箒はいまだ地面に転がったままだ。

「初日なんだから成功しなくたって恥ずかしいことじゃないよ。さ、はやく拾いなよ」

「ツうるさい！ 僕に指図するな、色ボケのグリフィンドールのくせに！」

「色ぼ……」

彼の幼稚な暴言が思いの外ショックでうっかりよろめいてしまった。そんな僕の腰を危なげなく抱き留めるのはもちろん我が兄上だ。

「アドバイスしてあげただけなのに嫌われた……やっぱ子供ってよくわからない」

「今は君も僕も子供だよ。そしてあれは惚れた顔だ」

「うそだあ」

「何年、君の兄さんをやってると思ってるの？ 言っておくけど、プライマリースクールの頃からああいう輩はいたからね。もちろんその後も」

「……うそだあ」

ハリーの無情なささやきを受けてさらに脱力する思いだった。何度子供に巻き戻ったって子供のことはよくわからない。

「ポッター、エヴァンズ、話してる余裕があるのならさつきと続きなさい」

僕らが知るよりも心持ち若いフーチ先生のきびきびした叱責にハッと周囲を見渡す。大半が地上でもたつく中、才能ある何人かはフラフラと空中飛行を始めていた。

「ハリー、行こう」

箒にまたがって地面を蹴りつける。僕らの時代からすれば型落ちの箒だが難なく飛べた。従順だ。ハリーも当然のように僕の隣へと並んだ。

「やっぱりマリア、実はかなり飛行術が得意だよね」

「そりゃあ、君も僕もジェームズ・ポッターの子供だもの」

「聞いたところによれば母さんは箒で飛ぶのが苦手らしいけど」

「それ、言ったのシリウスだろ」

「正解」

肩を寄せあってクスクス笑い合う。穏やか時間だ。僕が生きる限り付きまとう闇も偏見も自分勝手な称賛も今ここには無いのだ。この世界に在る僕たちは、自由だ。

「おっと」

「うーわ」

……自由すぎて、背後への警戒がおろそかになっていたらしい。

「こんなところでまでポッターとデートかい、エヴァンズ。まとめて兄妹とそっくりだな！」

例のスリザリンの男の子だ。さすが蛇。しつこい。

「あのさ、誤解させたなら悪いけど、別に君をからかうつもりじゃなかったんだよ。それにほら、こうして飛べてるじゃないか。おめでとう、スリザリン」

「うるさいうるさい！ この僕をバカにするなんて……ぜったいにゆるさないからな！ とことん邪魔してやるー！」

「……………ハリー、これのどこが？」

「僕からすれば最高にわかりやすいよ。泣けるね」

危ない手付きで僕とハリーのあいだに何度も突進してくる少年をかわしながら進む。隠れて袖の中で杖を握りしめておく。だって、このままだと――

「あ!?! わ、わ——ウワアアアアア!!」

ほらね。

「レビコーパス」

落下する少年を逆さにつり上げて地面まで下ろす。レビコーパスはこの時代に盛んな悪戯呪文だったはずだ。リリー・エヴァンズを姉に持つマリア・エヴァンズならば、たとえ一年生でも知っていてもおかしくない……だろう。たぶん。きつと。もしかしたら。

「怪我はない?」

追って地面に下りてから放心した様子の少年の顔を覗き込めば、涙でうるんだグレーアイがゆるりと僕を見た。……あ。

——似てる、とか。かわいい、とか。思い始めたらそれが末期の証なんだろうな。……この子の髪がプラチナブロンドでなくてよかった。

「これに懲りたら無茶な飛び方は止めるんだよ。次はその手首、折れるからね。そしてポンコツ詐欺教師に骨抜かれちゃったりするから」
「……………」

「返事は？」

ママに叱られて拗ねきつたりリリー・ルーナを相手にするときのような、そんな感覚で少年の頬を包む。

「へんじ」

「……………お、」

「お？」

「おぼえてろよ、バァー……カッ!!」

少年は僕の手を力いっぱい叩き落とすと、ニフラーもびっくりの速さで逃げてしまった。もしくは禁じられた森に放り込まれたマルフォイだ。

「なんだよ。人の顔を、化け物でも見るみたいに。失礼なやつ」

「…………ドラコ、苦勞するなあ」

ハリーがしみじみと呟いた。

さて、問題はここからだ。マダム・フーチの定めた飛行コースから完全にそれてしまった僕たちは途方にくれていた。遠くから終業チャイムの音まで聞こえてきて、気分はさらに憂鬱だった。だって、減点確定だ。さっそくグリフィンドールから兄弟揃って点を引いたとなったら、親の二人はどんな顔をするだろうか。……案外、父さんのほうが理詰めでこんこんと叱りそうでこわいのだ。

「観念して戻ろうか、ハリー。……ハリー？」

振り返った先、ハリーは呆然と遠くの木を見上げていた。——木

に、人が吊られていた。

「——スネイプ」

木の枝に片足が引っ付いているようで、重力に従い逆さになった髪は彼の苦悶の表情をすっかりあらわにしていた。

「どうして……大変だ、助けないと！」

「誰がこんなことを」

「——ツ必要ない、関わるな！」

駆け寄れば、スネイプは手負いの動物のように威嚇した。だがしかし、そんなものに怯むポッターではない。

「フィニート」

スネイプの足首と枝とを繋いでいた麻縄をほどく。相当酷く、そして雑に縛られたのだろう。骨じみた足首からは血がにじんでいた。よく見れば手の甲などにも火傷や創傷の痕が見られて、スネイプが誰かから長く虐げられているらしいことがうかがえた。

「これ、インカーセラスですね。あなたが創ったレビコーパスですらない——いったい誰に？」

「うるさい、余計なお世話だ、いいから行け！」

頭に溜まっていた血が急速に体内へと巡って気持ち悪いだろうに、それでも吠えるスネイプにハリーがイライラと吐き捨てる。

「これで見捨てたら、あなたは死んでたんだ。こんなところまで一体、僕ら以外に誰が通り掛かるって——」

「おおい、見ろよ。釣れたのは噂のおチビちゃんだぞ」

男の声が、複数。森から下卑た薄笑いを浮かべながら現れたその全員が緑色のローブを着ていた。——スリザリン生が、どうして同じスリザリンのスネイプを？

「さすがはグリフィンボール、こーんなにチビでも心優しくて勇敢ときた！　ところで知ってるかい？　その男は君たちのお兄さんとお姉さんの天敵なのだけど」

「……………」

ハリーと共にスネイプを背にして立ち上がる。事情は知らない。知る必要もない。他寮のいざこざに関わるべきではないし、そんな義理はない。けれど——そのひとがセブルス・スネイプであるのなら。それだけで僕らにとっては杖を持つ理由になる。

「仲間割れだとしても、いくらなんでも限度つてもものが——」

「待った待った、話すならポッター君のほうにしてくれないか。——そいつと違って、僕には穢れた血と会話する趣味はなくてね」

「——ッ」

背後で彼が動いた気配がした。咄嗟に腕を掴む。僕を見下ろして、マリアの瞳を見てスネイプはヒュツと喉を鳴らした。

「リリー、リリー、ゆるしてくれリリー！　おお、愛しのリリー！　ぼくはあなたのげぼくですう、お望みならば靴だって杖だってなーんだって跪いて舐めましょう——スリザリンの恥さらしが」
「……………」

意図してか、意図せずか——スネイプが捨て置かれているらしい寮内での現状はおおよそ把握できた。考えてみれば当然の帰結だ。スリザリン寮に配される人間の特徴は身内鼻屑に他者排斥。そして純

血に多いスリザリン生が身内と呼ぶ対象は——同じ純血の魔法使いと魔女ばかりだ。さて、半純血かつ後ろ楯のないネイプは果たして彼等の身内たりえるのか。

答えは目の前に転がっている。

「情けない」

無言呪文で軽く転ばせた男の元へと一步を進める。

「どんなぐ気分かな。穢れた血に負かされるのは」

「お前……」

「これに懲りたら金輪際、彼に関わらないでくれ——というのは、まあ、無理な話だろうけど」

箒から落ちる程度で済むような悪童の時期をとうに越えた男たちだ。今さら凝り固まった彼等の価値観を変えるなんてのは——ダズリーたちを魔法ディスクに変貌させるくらいあり得ないことだろう。それこそ、どこぞのお坊っちゃんくらい素直なひねくれ者でないと。

「——いいぞ」

「え?」

地べたに尻餅を着いていた男が、怒りに震えながら立ち上がった。

「スネイプに手出ししないでほしいんだろう? いいとも、お前がある条件を呑むならそうしてやる」

「……その条件は?」

「条件は——」

そして、冒頭へと繋がる。

情けないにも程がある。七年生の成人した大人が、一年生——それも女の子！——に決闘を挑むだなんて。

場所は中庭。続々と集まるギャラリーに、ハリーへと頭を預けてうなだれる。なお件の決闘相手は手も足も出ない子供をめぐちやくちやにいたぶってやろうと舌なめずりしている。重ねて情けない。

「——これは何事なのツ!? マリア、いったいどういうこと?」

「あ、かあ——ねえさん」

「ハリーまで……! あなたたち、今すぐここに来て説明しなさい!」

発狂寸前といった様子でこちらへ向かってくるリリーをニヤニヤ顔のスリザリン生が立ちふさいだ。

「困るなあ。いくら監督生といえど、これは魔法使いと魔女もどき……おっと失礼、小さな魔女の正式な決闘なのだから。部外者は口出ししないでいただきたい」

「部外者なものですか! わたしはあの子たちの………姉よ!」

「ええ、そうでしょうとも。ただの姉だ。親じゃあない」

「——っ」

立ち止まったリリーは悔しそうにさくらんぼ色の唇を引き結んだ。口を開けば今にも叫んでしまう——そんな顔をしていた。

「……大体、決闘そのものがあり得ないことだわ。不当に決まってる。あなたたち、あの子たちが何年生か知らないの? 一年生よ? よってたかかって、大の大人が恥ずかしいとは思わないの?」

「いいや? 承諾したのはあちらのお嬢さんだ。むしろ君たちが常日頃から吠えているフェア・プレーってやつそのものさ」

「あ——あ——あきれたっ! これがフェアですって!? あんな小さな子に杖を向けることが? あなたたちがそんなだから——!」

「リリー」

激昂するリリーを静かな声で静めたのは、なんと追ってやってきたジエームズだった。意外だ。……否、意外ではないのかもしれない。僕らの父さんは、そんなひとなんだ。

「マリア、あいつが言ってることはほんとう？ 脅されたわけじゃないよ、ちゃんと君が考えて決めたの？」

「うん」

「そうか、それなら——」

ジエームズはリリーの手を取ると親友たちを従えて下がった。誰にも有無を言わせないその姿からは天性のカリスマを感じさせた。

「ちよつと、なんのつもり？ ジエームズ」

「ここは見守ろうよ、リリー。ほんとうに危なくなったら止めるくらいでいい。君と僕だからこそ、あの子の意志を尊重しなくちゃいけない」

「そんな悠長な……！」

「過保護はよくないってことだ」

「あなたは——あなたはあの子の傷を知らないから——！」

両親に向けていた目をハリーへと移す。ハリーはとつくに僕を見ていた。

「一瞬で終わらせよう」

「当然」

男と距離を取り、杖を正面に掲げてから下ろす。相手が倣うのを待つ。それが終われば敬意を表すお辞儀だ。すっかり静まり返った野次馬のどこかから、「さすがエヴァンズの妹だな。一年生でもう決闘の作法を知ってるのか」なんて声が聞こえてきた。

互いに背を向け、五歩。振り返って、三秒。呪文はもちろん――

「エクスペリアームス！」

拍子抜けなくらい簡単に男の杖は飛んだ。わあっ！ 赤いローブの集団から喜色の声が上がった。中には黄色や青色のローブも混じっていた。

振り返って、介添人のハリーへとニンマリ笑いかける。

「どう？ 君の次ぐらいには上手いだろう？」

ブツとハリーは失笑した。

「ロンが聞いたなら、そのジョークはどうてい理解できないって言われるよ」

「ドラコには受けるのに」

カラカラ笑いながら、反動で腰を抜かしている男のところへと杖を返しに行く。片膝を着いて、改めて目一杯すごむ。

「約束通り、これであの人への悪戯は――」

反射だ。身体が、覚えている。

「セクタムセンプラ――！」

「――」

バチンツ――!! 見えない盾が刃の閃光を弾き返した。摩擦による火花が周囲の目を煌々と焼いた。

よくも——よりもよってハリーの前で——！！

「——マリア」

ハリーの虚ろな声に振り返る前に、視界をシャツとベストが埋めた。背には大きな腕と手のひらが回っていた。……知らないはずなのに、懐かしい匂いのする人。

「怪我はないね？」

父さんだ。ハリーの前には母さんが立っていた。

「……介添人なんてのはあくまでも形式上のもものだけど、その介添人ですらない外野が不意打ちをするのは話が違うんじゃないか」

ハリーは完全にリリーが保護して、僕をルーピン先生へと預けてジエームズが杖を取る。騎士がごとくシリウスがその隣に並ぶ。

「次は僕と決闘するかい、エイブリー」

「なんだったら俺でもいいぜ」

無敵で不敵な魂の双子がゾツとするほど冷たく男を見下す。ああ、怒っている——やっぱり、僕の父さんたちはこわいや。

「い、今のは……」

「なんの騒ぎです、これは！ さあ散りなさい——そして首謀者は神妙に名乗り出なさい！」

廊下の先から鬼の形相で駆けてきたのはマクゴナガル先生だ。うわあ、まずい！ 蜘蛛の子を散らすように野次馬が解散する。その中に混ざるようにしてリリーとルーピン先生、ペティグリューに連れら

れ場を離れる。

「リリー、父さ……ジエームズとシリウスがまだ」

「いいのよ。放っておきなさい。あの人たちなら適当に先生を言いくるめるわ。七年間そうしてきたんだから」

吐き捨てられる。美しいけれど苦しげな横顔——怒っているのは父さんの二人だけではないのだ。そしてきつと、母さんが怒る理由は。

「この辺りでいいんじゃないか」

ルーピン先生の声に従い一同は立ち止まった。ハリーを見る。リリーに繋がれたままのハリーはかわいそうなくらい顔を蒼くしていた。

「ハリー」

「マリア」

肩を寄せて。ちよつとぶつかけたりしてみて。

「やっぱり少しお若かったね」

「え……？」

「マクゴナガル」

「……………」

狙いどおり面食らったハリーは、それからくしゃくしゃと困ったように笑った。

「マリアって、ほんと」

「続く言葉を当ててやろうか。——最高、だろ？」

「もちろん！」

勢いをつけて抱き着く兄弟を受け止める。甘んじて抱き枕になってやろうと小さな背を叩く。そんな僕らを、瞳をうるませたりリリーが器用にも眉を吊り上げながら見ていた。

「あなたたち——あなたたちねえ……自分がなにをしたか——ほんとうに——ああ、もう！ おかあさんを困らせないで！」

ハリーそつくりの痲癩だった。それから、リリーは「いいえ、ちがうわ。うそ」と続けると僕もハリーもまとめて腕の中に抱き込んだ。

「困らせていいの。困らせていいから——自分を大切に——
母さん……」

花の香りがする。どことなく気恥ずかしくなるようなやわらかさで締め付けられる。ハリーと示し合わせて母を抱き返す。

「ごめんなさい、母さん」

「……ちやんとごめんなさいできるいい子のことは、これ以上叱りません」

リリーのかんばせに笑顔が戻った。怒れる母から解放されて、ほつと胸を撫で下ろせば次はルーピン先生に内緒話でもするように手招かれた。

「さつき、プロテゴを張ったのはマリアだね？　もしかして無言呪文かい？」

「あ……」

「サラブレッドはどこまでいってもサラブレッドか」

ルーピン先生はそれは嬉しそうに——そして、きつとほんの少しだけ複雑そうに微笑んだ。

「プロングズがうずうずしてたから、二人とも覚悟しておくことだ。あいつに愛されるって、そういうことだよ」

「……………」

ハリーを見る。ハリーが見る。同時に今朝のだらしなく緩みきつた父親の顔を思い出す。——甘んじて、受け止めようか。

マリア・ポッターにとって、待ち合わせの代名詞は『湖畔』だ。いつの間にか、その名を挙げずとも彼はマリアを——そしてマリアは彼をここで待つようになった。

しかし今回ばかりは、待ち合わせが望みどおりに成功するかわからない。自信がない。——『相手』がいなければ、待ち合わせは成立しないのだから。

「……………来て、くれたんですね」

軍配は僕に上がった。時代が変わろうとも映すものは変わらない澄んだ水面をひとりの男が眺めていた。……………いいや、彼はどこも見えない。彼の瞳は深すぎて、奈落のようで、なにも映しはしない。透明マントから顔を出して、断りなく男の隣へと腰かける。

「ミスタースネイプ」

「……………」

スネイプはうんともすんとも言わなかった。なので、意地悪く続けた。

「僕のこと、マリアともエヴァンズとも呼びたくないでしょう」

「……………君は、」

どうにか絞り出された声に続くものはなかった。僕を知る人だ。ならば、ハリーの近くにいる『マリア』が何者なのか容易に連想できたはずだ。

唯一、あなただけがマリアの名前の意味を知っているのだから。

「どうしてリリーと仲違いしたの」

スネイプは答えなかった。

「仲違いするとわかっていて——リリーが許すわけではないとあなた自身が一番理解していて、どうしてそれでも手放せなかったの。リリー以上にその才能は魅力的だった？」

「……………」

そうでないことはこの状況が示している。彼の贖罪に費やした人生すべてがそれを表している。だからこそ——わからない。

「セブルス・スネイプが闇の魔術を愛したのは、なぜ」

スネイプはやっぱり虚ろに視線を水面へ逃がすと、衰れっぽくぽつんと呟いた。

「君も、僕を軽蔑するのか」

「……………さあ。わからない。するかもしれない。その手の魔法には良い思い出がないんだ。けれど、もしもそこに理由があるのなら——たとえばそれが、あなたの信念に基づくものであったのなら……………理解はできないけれど、たぶん……………否定もしない」

それが、リリーとマリアの違いだ。綺麗なものだけを見てきたリリーには、共に彼の闇を背負うだけの柔軟性がなかった。慈悲と慈愛と正義の裏には悪と断じたものへの絶対的な糾弾があった。

リリー・エヴァンズはきつと——彼にとつての『ベラトリックス信仰』だ。神だ。狂信者がかの人ベラトリックスに盲目であったように——決して、輝かしい場所から揺らいではいけないモノ。

ゆるりと風が吹いて、水面の中の星が揺れる。

「似てないな」

「そうかな」

「お節介なところはそっくりのくせに」

「もしかして決闘の話？ どこかで見てた？」

「当たり前だろう。僕のせいで——いや、僕のせいではない。君が勝手にやったことだ」

「その通り。僕が勝手に喧嘩したんだ」

ちよつとだけ笑って——待つ。不思議と気まずい気はしなかった。……ここが、ブロンドの君と語り続けた場所だからだろうか。

「——それを君に話す必要が、あるのか」

僕は迷わなかった。

「ある。僕の名前がそれを証明している。マリアには聞く権利がある」

「……………」

僕の断言に、スネイプは縮こまるようにして子供っぽく膝を抱えた。額を立てた膝の頭に乗せて、月のない夜みたいな髪が彼の顔をおおってカーテンの役割を果たす。

「きっかけは、愛の妙薬だった」

ひとつずつ、神に見離された男は告解した。

「僕の母親は魔女だ。家には、父に内緒で何冊かの魔法の本があった。たぶん、母さんの魔女としての最後のプライドだったのだと思う。それを読んで、魔法を学んだ」

「愛の妙薬というものがあるのを知った。——魔法で、人の心は変え

られるのだと理解した。もつと強力なものがないか研究した」

「研究を進めれば進めるだけ、禁じられたものには相応の理由が——それだけの力があるのだとわかった。そして僕には——それを操るだけの資格のうりよぐがあると」

「それだけだった。それだけだったんだ。もしかすれば、魔法さえ勉強すれば、諦めてきたすべてが手に入るかもしれない——僕にとって魔法は、唯一の手段で救いだったんだ！そこに善悪は関係なかった」

魔法が唯一で、それはただの手段でしかなくて——同じだ。ダーズリーの檻から逃れようと死にも狂いで魔法にすがった僕と同じだ。それから——トム・リドルとも、きつと。

「リリーが誰かを傷つけるために存在する魔法のことを許さないなんてのはわかっていた。もしもリリーがそれを理解したなら——僕を理解したら、それはもうリリーじゃない」

「けれど、関係ないだろう？ 心は魔法で僕の好きに変えられるのだから！……そんなもの、リリーではないのに。そこに僕が愛したりリーの残酷さはないのに」

スネイプは後悔していた。けれど、リリーのように闇の魔術を憎みはしなかった。——それもまた、彼にとっては救いにちがいはないのだから。

「スリザリン寮に入って、はじめから闇の魔術にくわしい僕を仲間たちは重宝した。はじめで、リリー以外に認められた。心地良かった——僕に居場所が生まれた」

「手放せるわけないだろう。ようは保身だ。外ではリリーが僕を手厚く守ってくれる。けれど、寮に戻ればそこにリリーはいないんだ。僕のことには僕が守らなくてはならない。スリザリンにいるためには、スリザリンの仲間であるためには、スリザリンらしい努力と権力が必要

だった」

「その手段が、闇の魔術だった」

男が語り終えれば、辺りには静寂と物悲しい薄闇が戻っていた。僕はなにも答えられなかった。

セブルス・スネイプは、自分のために、生きるために——^{リリィ}信仰を捨てたのだ。

「軽蔑するか」

「わからない」

「軽蔑すればいい」

「わからない」

「卑怯ものだと——我が身かわいさに大切な人の味方もできない臆病者だと！」

「わからない……っ」

「僕は——あのひとを不幸にするしかできないんだ」

「なにもわからないよ、スネイプ」

髪が見える。母と同じ赤い髪。水面を覗けばそこには母の顔がある。

「僕には、僕の名前が『マリア』であることしかわからないんだ」

「——」

マリアと——きつと死の瞬間まで母が呼んだだろうことだけが、すべてなのだ。

「そんな、名前……っ」

結局、スネイプはうつ向いてしまった。最後まで彼がマリアを見ることはなかった。

立ち上がったって、冷えた身体をさする。体温が足りない。——君の温
度が足りないよ、ドラコ。

「——傷、」

足を止める。スネイプの声だ。

「傷、治してやろうか」

「……どうして」

「見えた。その傷はよく知っている。僕の薬でないと治らない。……
僕が、創ったから」

無意識に、胸の辺りを握っていた。大きく身を裂いた刃の疵。僕の
罪と君の怒りとあなたの嘘の証だ。

「——必要ありません」

振り返る。風にあおられた髪が月光を受けて輝く。

「一生、宝物のように抱えますから」

リリーの生まれ持った焼き付くような光はなくても、僕にはこの身
があるから。——僕は『マリア』だ。

「——」

やっと、目が合った。セブルス・スネイプはマリア・ポッターを見
た。

「マリア——その名前を付けたのは、君の母親か」
「ええ。白百合のように美しい自慢の母さんです」

今度こそ湖畔から立ち去る。黒いくしゃくしゃ頭が遠くに二つ覗いている。僕に気が付いた小さいほうの毛玉がびよこびよこ跳ねながらここだと居場所を明かす。なんだか奇妙な動物みたいで笑ってしまう。

「母さん、あなたの願掛けは叶いましたよ。これですこしは——マリアの名前に相応しくなれただろうか」

すごいわ、マリア。さすがわたしとジェームズの子供ね！ そう微笑んでくれただろうあなたは——この世界のどこにもいない。

マリア・ポッターは左右から絶賛抱き締めめの刑に処されていた。

「マリア、マリア、ほんつと——になんともないんだね？ スネイクにネチネチいじめられて泣かされたりしてないね？」

「してないよ……」

「スネイクについて売り言葉買い言葉で喧嘩を売って呪われたりしてない？」

「してないってば……ハリーじゃないんだから」

「心外だ！」

ここは透明マントの中だ。女三人——ではなく男三人で姦しく夜の Hogwartz を進む。向かうはグリフィンドール寮塔だ。

「それにしても、マリアが急にスネイクに会いたいなんて言い出したときはあのべったり頭をどうしてやろうかと思ったよ」

無意識の癖らしく、スネイクの名をばやきながら杖を撫で始めた

ジェームズをじつとりと睨む。ハリーも一緒になって父を軽蔑の眼差しで見ている。

「父さん、ほんとうに反省してる？ あの人をあそこまで追い詰めた要因の一つにあなたたちの『悪戯』が確実に関係してるんだよ」

「それは……でもあいつだってかなり卑怯な手で反撃してきたし……あいつの創作魔法で関係ない子が怪我するのだってざらだったし……」

「喧嘩両成敗」

情けない父を子供二人で挟んで責め立てる。このくらいは許してほしい。あなたのとぼちりで散々な学生生活を送ったのだから。ついでにマリアとしてはあなたから始めたバカげたあだ名の継承に關しても深く深く反省していただきたい。

「スネイプにこのさき一生、恨まれること、憎まれること——覚悟しないといけないよ」

声をひそめる。どちらから始めた因縁かは双方の悪意がこんがらがりすぎてすっかりわからなくなってしまうたけれど——どちらにも一生をかけても足りない責任がある。

僕は覚悟した。息子を喪ったエイモス・デイゴリーに恨まれ続けること——父を喪ったデルファイニーに永遠に憎まれるだろうことを。

「……マリア」

ふと、ジェームズが僕の頭を撫でた。そのままハリーのこととも撫でた。同時に見上げれば、彼は父親の顔をしていた。

「僕とリリーの子供は、なんていいこなんだろう」

「……………」

面食らって、それからカアツと頬に熱がたまつたのを自覚する。だって、親と呼ばれる人にこんなふうにされるなんて——モリー義母さんくらいだったんだもの。

ハリーを見れば、案外ハリーはけろりとしたものだった。そうだ、こちらのハリーには僕が知るよりずっと大人っぽいシリウスと——僕が幼少から親代わりをしていたのだった。ずるい。

「いい反応だ！ マリアはほんとうにかわいいなあ。今にモテるぞ」

「マリアはいつでもモテてたよ。本人はちつとも気付かないけど。まあ、でも、それもしかたないか。ドラコがいるんだから」

「……………ドラコ、だって？」

ピタリ。ハリーのぼやきを拾ってジェームズが立ち止まった。横を灰色のレデイが、誰が話してるの？ なんていぶかしがりながら通りすぎていった。

「ドラコって——ドラコ・マルフォイ？ 金髪で、父親そっくりの顔で、こう、キザったらしく髪を結んでた？」

「うん。父さんは前に会ったことがあるんだっけ。僕は知らないけど——その金髪で合ってると思うよ」

「…………それが、うちのマリアと、なんだって？」

「恋人」

「こいびと」

「ちなみに婚約済み」

「こんやく」

フクロウみたいな顔でおうむ返しするジェームズに、ううんこれとは頭を抱える。実に見覚えのある顔だ。——リリー・ルーナが結婚報告に来た時の私の顔だ！

「お、お、お——おとうさんは、お父さんは認めませんよ！ マルフオイが……あのやたらスカした貴族男が義息子になるだなんて、ゾツとする!!」

「……ハリー」

好き勝手にバラしてくれた兄弟を恨みっぽくにらむ。ハリーはやっぱり確信犯だったようで、ニヤアと小憎たらしく笑っていた。

「ドラコもここにいればよかったのにね」

「ああ、やっぱりあのとき奴のお綺麗な横っ面を張ってやればよかったんだ！ マリアとのことさえ知っていたなら……!」

「パパおとなげない」

「うっ」

娘からの一言にジェームズが撃沈する。どこまでもデジャヴな光景だった。

なおその後、グリフィンドール寮へと戻るまでのあいだに危機一髪ピーブスとエンカウントしたり、それをハリーが血まみれ男爵の声真似で追い払ったり、そんなハリーの声真似発表会を開こうとしてリリーにぶっ飛ばされたりと、怒濤の流れがあったのだがもう眠いので割愛する。